

魔法少女リリカルなのは  
はStrikerS ～  
Remember my heart ～

アルフォンス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゆりかご決戦に負けた管理局は、何とか生き残ったティアナとフィルを中心に最後の決戦に挑んだ。

クアットロを倒し、すべてが終わったかに見えたが……。

この物語は、オリキャラのフィル・グリードが女神の力を借りて逆行し、再びスカリエッティに戦いを挑んでいく物語です。

※この作品は、かつてにじファンで掲載されていた物を加筆・修正した物になります。

P・S：感想をいただけると、作品の修正にとっても参考になります。ぜひ気軽に書いていただけたら嬉しいですよ。

# 目次

設定資料（ネタバレあり）	1
Strikers編	
Prologue	11
第1話 再会	62
第2話 機動六課	85
第3話 集結	115
第4話 ファースト・アラート	
136 第5話 自分の力、大切なもの	
173 第6話 進展	217
第7話 コンタクト	250
第8話 ホテル・アグスタ	285
第9話 互いの思いとフィルの思い	
313 第10話 たいせつなひと	379
第11話 機動六課のある休日（前編）	
第12話 機動六課のある休日（後編）	425
第13話 ナンバーズ（前編）	474
513 第14話 ナンバーズ（後編）	561

第15話	命の理由	611	第25話	ファイナル・リミット	
第16話	新たな出発	681	1129		
第17話	Symbol of fa	747	第26話	こぼれ落ちるもの	1177
mily			Epilogue	永遠の絆	1217
第18話	その日、機動六課(前編)		BAD END		1264
783			After Story		
第19話	その日、機動六課(後編)		ment Eternal		1275
835			Vivid編		
第20話	翼、ふたたび	900	Memory;01	セイクリッド	
第21話	ゆりかご	967	ハート		1304
第22話	無限の欲望	1008	Memory;02	大切な人たち	
第23話	最終決戦	1039	らのメッセージ		1329
第24話	金の閃光	1087	Memory;03	あたたかさ	
			優		

歩けたら	Memory:09	少しだけ、一緒に	1505
ハート	Memory:08	プランニユー・	1468
	1446	Memory:07	はじめまして
	1417	Memory:06	本当の気持ち
トラトス	Memory:05	アインハルト・ス	1398
タクト	Memory:04	ファースト・コン	1378
	しき		1352

if ending	Memory:15	インターミドル	1662
ion	Memory:14	Conclus	1633
	Memory:13	MAXIMUM	1612
シアの決意	Memory:12	コロナとルーテ	1584
つに・・・	Memory:11	こころ・・・ひと	1552
	1529	Memory:10	望んだ強さ



C h r i s t m a s M e m o r i e	A f t e r S t o r y	2580	i f	i f	2522	i f	i f	i f	i f	2330	i f
	e n d i n g ユ ミ ナ 		e n d i n g シ ヤ ン テ	e n d i n g ジ ー ク リ ン デ		e n d i n g ヴ ィ ク ト ー リ ア	e n d i n g リ オ 	e n d i n g コ ロ ナ 	e n d i n g		e n d i n g ア ィ ン ハ ル ト
		2627				2459		2418	2374		

i f	u n e	2769	T o u c h m y h e a r t	V a l e n t i n S t o r y	R a i n y B l u e	V a l e n t i n S t o r y	}	s	C h r i s t m a s M e m o r i e	}	s
e n d i n g	B r i d e			S t o r y	}	S t o r y		f e a t u r i n g	M e m o r i e		f e a t u r i n g
A f t e r		2790	J	}		}		な の は			テ ィ ア ナ
					2739		2702			2674	



2896	e p i s o d e ; 0 4	コ ロ ナ 編	2878	e p i s o d e ; 0 3	ル ー テ シ ア 編	2855	編	e p i s o d e ; 0 2	ア イ ン ハ ル ト	2838	e ; 0 1	テ イ ア ナ 編		P r o l o g u e & e p i s o d	フ イ ル の と あ る 休 日 シ リ ー ズ	n d	S t o r y	）	P i n k	D i a m o
------	---------------------	------------------	------	---------------------	----------------------------	------	---	---------------------	----------------------------	------	---------	-----------------------	--	-------------------------------	---	-----	-----------	---	---------	-----------



## 設定資料（ネタバレあり）

名前：フィール・グリード

年齢：17歳（逆行前は19歳）

身長：172cm

出身：ミッドチルダ西部エルセア

所属：時空管理局 本局古代遺物管理部 機動六課 ライトニングスター単独分隊

（逆行前はロンググーチ所属）

階級：二等陸士

役職：ライトニングスター単独分隊センターガード

コールサイン：ライトニングスター0（ライトニングスター0）

魔法術式：ミッドチルダ式・陸戦B（逆行前はAA+）（完全解放時：S+（フェイト

の魔力を受け継いだ為）

（最終決戦時：AAA）

所持資格：災害担当部隊シユーター・大型バイク免許・普通自動車免許

## ※使用魔法

## S スターライトブレイカー

未来ではフィルとティアナが使用できる最強の集束砲撃魔法。

限界を超える大出力ゆえに術者とデバイスにかかる負担も大きいため、1発が限度である。

本来なのは直接ティアナに教えたかったのだが、ゆりかご決戦で戦死してしまい、ティアナは残された手紙とデータで習得した。

その後ティアナに教えてもらいフィル自身も使える様になった。

本家と違い若干集束技術に無駄があるので、その辺を修正出来ればもっと威力は上がる。

## S ブラストブレイザー

基本はダイバインバスターと殆ど同じで、高密度で圧縮された魔力が減衰することなく対象を打ち抜く、強力な集束型砲撃魔法。

威力は術者の魔力に比例するが、未来ではスターライトブレイカー以外で主力の魔法となっていた。

逆行後はBランクになってしまっているので、そう多様は出来ない。

S レストリクトロック

ファイルが使える最大最強の拘束魔法。

指定空間内の物体をその場に固定する機能を持ち、密着状態で発動した場合極めて強い強度を誇る。

状況によって拘束の仕方が異なる。

S プラストシュート

複数の誘導弾によって空間制圧を行う事を目標として組んだ中距離誘導射撃魔法。

空中に複数の魔力スフィアを形成し、同時に発射する。

ヴァリアブルシュートと同じでAMFを突破する効果もある。

なのはのアクセルシューターと同系統の魔法になる。

S ウインド・ブレス

第1話でスバルの速度に、ブレーキをかける時に使った風系攻撃魔法。

風系の攻撃魔法で、相手の動きを止めるだけでなく、鎌鼬を作り攻撃を行う事も可能。

S ヴァリアブルシユート

攻撃魔法の弾を、AMFを突破する外殻の膜状バリアでくるんだ多重弾殻射撃。

外部の膜状バリアが相手フィールドに反応してフィールド効果を中和、その間に中身をフィールド内に突入させる。

本来はAAランク魔導師のスキルで「射撃型最初の奥義」と言える技術。

S ストラグルバインド

通常のバインドに、対象の魔力の機能を打ち消す効果を込めた捕獲魔法。

通常のストラグルバインドは発生速度や距離・拘束力と言った面は振るわないが、フィールドの場合は自分で構成を変更して威力を上げ、ISにも効果が出るようにしている。

S 瞬間移動（ワープ）

女神に与えられた転移術式。

相手の魔力及び気配を感知し、瞬時にその場所に行く魔法。

戦闘用に特化していて相手に察知されにくい。

一人で使うには魔力は殆ど使わないが、多人数を運ぶ時は魔力を多く必要とする。

おまけに術式が複雑なので、最初の頃はプリムがないと発動が難しかった。最終決戦前には、完全に使いこなせるようになり、デバイス無しでも行える。

### S 魔力リミット

女神に力を授かったが、リミッターが掛かっっていて、完全に使いこなせている訳ではなく時間制限がある。魔力の正体は、未来のフェイトの魔力で、それがファイルに託された。

### S 飛行魔法

高々度高速飛行魔法のことを指し、陸士が使える浮遊とは違うものになる。

これは空間把握能力、各種安全装置、必要な魔力の安定維持など、様々な能力が必要となる。

ファイルは未来でティアナと一緒にこの魔法をマスターしていた。

### S ラウンドシールドリフレクター

ラウンドシールドを鏡面化し、相手の砲撃を跳ね返す。

魔力を多量に使い、術式も複雑なので使いどころは難しい。

S フォトンランサー・ファランクスシフト

フォトンランサーのバリエーションにして、1 期時点でのフェイトの最大攻撃魔法。

30 発以上のフォトンファイアより繰り出される、フォトンランサーの一点集中高速連射魔法。

クアットロに使ったときは、9 歳のフェイトと同じくらいの物になったが、完全な時ならプラズマランサーで撃つことも可能。

元々消耗が激しい魔法だが、ファイルが使った時は出血と傷が酷く、使い終わった後は殆ど動けなくなってしまうていた。

※使用デバイス

プリム (Prim)

分類：インテリジェントデバイス (ストレージデバイス)

本来はストレージデバイスだったのだが、女神の力を受け、インテリジェントに生まれ変わった。

随分と人間くさい面もあり、ファイルの精神的な支えになっている。



基本はクロスミラージユと一緒に、この小説では姉弟機という設定になっている。

デバイス時の形状は、外見は基本的にクロスミラージユとそんなに変わらないが、出力は上になっている。そしてストレージ特有の処理速度の速さもそのままなので、両方の良いところを兼ね備えたデバイスといえる。

変形機構はガンモードとダガーモードのみだったが、インテリジェントになりクロスミラージユと同様、ブレイズモードが追加になった。

### S 待機モード

待機モードは、小さな銃の形になりペンダントになって持ち歩いている。

### S ガンモード

通常の射撃時はこのモードで戦う事が多い。連射性能も優れていて小回りもききやすい。

### S セイバーモード

インテリジェントになって追加された機構の一つ。

単独戦闘用のモードで、近接戦向けになっている。

クロスミラージュと同様、両端（銃口側とグリップ側）から魔力刃が伸びる。さらにグリップの周りも魔力刃でガードされている。

ダガーモードと違い、長さもそこそこあり一つの剣となっている。超圧縮をしてフェイトのザンバーモードに匹敵する威力を持つことが出来る。

### S ブレイズモード

同じく追加された機構の一つでプリムのフルドライブモード。

長距離特化型で、ロングレンジ戦闘用の形態。

ガンモードで対処できない長距離戦での牽制・狙撃を行う、遠距離狙撃砲形態。

主に集束魔法とかを使う時に使用する物である。

※ティアナのクロスミラージュは白基調だが、プリムの場合は、基本色は黒基調だが、ブレイズモードのみ銀基調に変化する。

### S フリーダム

魔力を完全解放した時に使えるフィル自身のフルドライブモード。

位置的に言うとなのはのエクシードモードに当たる。

なのはのエクシードと同じで一部バリアジャケットも替わるが、防御能力より機動性

を重視した物になる。

フェイトの魔力を無くしてしまったが、負担はかかるが使用は可能になっている。

### S プラスタモード

プラスターステムを使用した、なのはとレイジングハートの、そしてプリムのリミットブレイクモードにして、最後の切り札。

使用者、デバイス、双方の限界を超えた強化を主体としており、その意味ではエクセリオンモードに近い（魔力消費も含め、あらゆる点で超越した）機能を持つ。

フィルとマリーが負担度をかなり減らしたが、それでも、危険性が高く、フェイトは何度も、使用を自重するように、釘を刺していた。

本来の使用方法は、前衛の味方と連携しての後方からの一撃必殺。長時間連続使用は不向き。

### S スパイラルモード

プリムの最終リミットブレイクにして、プラスターの最終形態。

体内にある生命力を、全て力に変えるシステムで、使用すれば、間違いなく術者の命を奪う、禁断のシステム。

その危険さ故、普段は封印されている。

システム封印解除には、特殊なカートリッジが必要になる。

# StrikerS編 Prologue

——3年前のゆりかご決戦

管理局は、スカリエツテイ一味に完全敗北を喫した。

ゆりかご決戦で生き残ったのは、ミッドチルダにいた局員では、陸士108部隊の一部と機動六課からはスターズのフォワードの二人とロングアーチスタッフ一人だけ。

後は別任務でミッドチルダにいなかった戦艦数隻だけであった。

クロノ・ハラOWN提督が率いる艦隊が迎撃に向かったが、ゆりかごの砲撃の前に全て消し去られてしまった。

ミッド上空で戦っていたアースラはガジェットやゆりかごからの攻撃で大破してしまつた。

何とか不時着が出来たのだが、ガジェットの大群に遭遇し、たった一人しか助からなかつた。

地上本部の方も、戦闘機人とガジェットの大軍によつて壊滅状態になつた。

事件の初期にスカリエツテイが無限書庫を危険視していた為、戦闘機人のドウエによつて無限書庫司書長ユーノ・スクライアは暗殺されていて、ゆりかごに関する情報が殆どなかつたのだ。

本局の方は、すぐには落ちなかつたが、決戦から半年後、クアット口達の総攻撃の前に滅んだ。

機動六課のメンバーは、まず八神はやて部隊長だが、決戦時ゆりかごの主砲の前に一緒にいた局員達と共に消え去り、遺体も何も残らなかつた。

ヴォルケンリッターは主の八神はやて部隊長が死んだと同時に消滅してしまった。

フェイト・T・ハラオウン隊長はスカリエッツィのアジトを発見したが、AMFの罠に落ち、戦闘機人のトーレとセツテと戦い、何とか勝つことは出来たが、クアットロが、スカリエッツィと共に基地の放棄を決め基地は壊滅。

辛うじて、フェイトさんは基地内からは助け出せたけれど、スカリエッツィと戦闘機人二人を相手にした傷は深く……………。

ライトニングのエリオは、ルーテシアと名乗る少女の召喚獣ガリユーと戦ったが、結果は相打ちになってしまった。その後、キャロもヴォルテールで白天王と戦うが、互いの砲撃が二人を貫き、やはり相打ちの結果になった。

そして、高町なのは隊長は、ゆりかご内部に突入し、ヴィヴィオを見つけ出すが、スカリエッツィの策略によって、レリックを埋め込まれたヴィヴィオと戦うことになった。

ヴィヴィオを元に戻したらしいが魔力が底をつきてしまい、クアットロの策略によってヴィヴィオもろとも殺された。

ゆりかごが軌道ポイントに到達してしまえば、連中にとってヴィヴィオは用済みだった。

そして、決戦で壊滅的に陥った管理局は、生き残ったメンバーで地下組織を作った。リーダーをスターズのセンターガードだったティアナ、そして、サブリーダーをアースラでの唯一人の生き残り、この俺『フィル・グリード』がつとめ、何とか戦ってきた。苦労のかがあつてか、何体かは倒すことが出来ていたが、それでもまだ劣勢だった。スバルとギンガさんも生き残って一緒に戦ってくれていたが、半年前、残っていた戦闘機人達との戦いで二人とも死んでしまった。

俺たちは別の所で戦っていたので、二人の応援には行けなかったのだ。

———  
だけど二人の犠牲は無駄ではなかった。

二人が最後の力を使って自爆をし、クアットロ以外の、一緒にいた戦闘機人達を吹っ飛ばしてくれたから。

これが切欠となり、俺たちは残った戦力で『アースラ』でゆりかごへ特攻をかけるこ



とにした。

実は、アースラはあのおとき完全には壊れてなかった。

外装等はボロボロだったけど、中枢機能はかろうじて生き残っていたため、どうにか使うことができたのだ。

連中も壊れたアースラには何の興味もなく、ほったらかしにされていたのが幸いした。

しかし、長年の奴らとの戦いで、残存艦隊も全滅しまった為、ロクな機材をそろえることが出来なくなってしまった。

さらにクアット口達に見つからないように行っていた為、飛ばすようにするのがやっただったのだ。

したがって武装もないアースラに残された手段は特攻しかなかった。

特攻した俺たちはガジェットと交戦に陥ったが、残った連中は俺とティアをクアット口の所に行かせる為に自分の身を盾にし突破口を開いてくれた。

仲間の屍を無駄にするわけにはいかない。

俺とティアは、ゆりかごの玉座の間に向かっていた。

「……………ねえ、ファイル。これで終わらせる。なのはさん達やエリオやキャロ、キングさん、そして、スバル…………。今日こそみんなの敵を取るわよ!!」

「もちろんだ、俺だつてロングアーチのみんなの敵を討たなきゃならないんだ。あのとき俺を逃がす為にみんなは……………」

決戦時、アースラを不時着させ、何とか離れることには成功したが、しばらくしてガジェットの大群に遭遇してしまった。

その時交戦はしたが、戦闘要員でないロングアーチのみんなは、一人、また一人と目の前で殺された。

この中で何とか戦闘が出来る俺は、グリフィスを守つてこの場を離れようとしたが、俺の油断からガジェットの砲撃を喰らいそうになり、グリフィスが身代わりになつてくれた。

俺は怒りのあまりガジェットに特攻を仕掛けそうになつたが、グリフィスが…………。

「…………ファイル、君がここで死んで…………どうなる!! 逃げろ…………生き延びて…………最後まで戦って、く…れ…」

グリフィスは最後の力で俺の腕にしがみつき、特攻を止めた。そして俺に希望を託し、死んでいったんだ。

俺はみんなの意思を無駄にしないように、今日まで訓練をし、ティア達と一緒に戦えるまでになった。

「ティア、決して死に急ぐな…………。クアットロを倒したって、生きて帰らなきゃ意味がないぞ。スバル達はそんなことは望んでない」

「…………分かってるわよ。でもね、あたしはみんなの敵を討つ為だけにここまで生き残ってきたのよ。そのためなら…………例えこの命と引き替えにしても…………」

「…………ティア」

「…………とにかく急ぎましょう。あいつの…………クアットロの反応はこの先みたいよ」

ティアがエリアサーチをし、クアットロを探していたが、AMFのせいではなかなかに見

つからなかったが、場所が近づくとつれ反応が出てきて、ようやく発見することが出来た。

「……ここみたいね」

「そのようだな……。離れてろ」

この壁、念入りに魔力防御の処理がされている。  
通常の攻撃じゃ駄目だ。

「仕方がない……。『プリム』、スターライトブレイカーだ」

《Starlight Breaker》

——スターライトブレイカー

かつてなのはさんが得意としていた集束魔法の奥義。

なのはさんがもしもの時のために、残してくれた手紙と画像データを元に、ティアは必死でこの奥義を覚えた。

『本当は直接ティアナに教えたかった』

と手紙に書かれていて、ティアは泣きながら読んでいた。  
俺もティアが覚えてから、教わりながら何とか習得することができた。

魔力の少ない俺たちが、戦闘機人と戦う為には、魔力を周りから集めて集束魔法を撃つしかなかったからだ。

集束を行う時、なのはさんは桃色、ティアはオレンジ色、俺がやると白色になる。

白色の魔力が俺に集まり、発射準備が整った。

「スターライト……ブレイカー!!」

扉は豪快な音を立て破壊された。

この魔法は身体に負担が大きいので1回が限度。

ティアの方が集束技術が上手いので、今回は俺が撃った。切り札は取っておいた方が良いからだ。

玉座の間にはへらへら笑っていたクアットロがいた。

その面を見ているだけでも反吐がでやがる。

「……………とうとう見つけたぞ、クアットロ!!」

「あくら、お久しぶりね。ティアナ・ランスター、フィル・グリード。まあくだ生きてたの〜」

「……………あんたのせいで、なのはさんが……………スバルが……………みんなが死んだのよ!! 許せない……………今日こそ、あんたを……………殺す!!」

「そんなこと言つて良いのかしら、人々を救う管理局員がいけませんわ〜」

「その管理局もあんた達のせいでもう無い。だけどね、そんなことは関係ない!! あたし達が戦う理由は一つだけよ!!」

「クアットロ、お前は俺たちから大切な人たちを奪った。その人達の怒りを貴様に叩き

つける!! それ俺たちが戦うただ一つの理由だ!!」

怒りに震えていた俺たちは、ティアはクロスミラーージュを、俺はプリムの銃口をクアットロに向け、カートリッジをロードさせ、それぞれ攻撃魔法を放つ。

設定は殺傷設定。

「クロスファイアシュート!!」

「ブラストブレイザー!!」

ブラストブレイザーは、原理はデイベインバスターと同じで単純だが高威力の攻撃魔法だ。

ただし、俺もティアも、隊長達みたいに魔力が多い訳じゃないので、そう何回も打てない。

まして俺はさつきスターライトブレイカーを撃っている。これで決めたい。

クロスファイアシュートは、数個の光弾が集まって一つの砲撃となり  
ブラストブレイザーは白色の砲撃となりクアットロに命中した。

「よし!!」

「やったわ!!」

白煙が収まると、無傷のクアットロがたっていた。

「そ、そんな。確かに命中したのに!!」

「ああ、間違いなく俺たちの攻撃は命中した。どういふことなんだ!!」

クアットロの周りが、七色の魔力光に覆われている。

あの能力は、まさか!?

「ご想像のとおりよ。これは聖王の鎧。そんな攻撃ぐらいじゃ蚊に刺されたくらいにしか感じないわ」



「その力、ヴィヴィオから奪い取ったんだな……」

聖王の鎧。

あれは、古代ベルカ王族が遺伝子レベルで所有している防衛能力。

あの女、ヴィヴィオの遺伝子からその情報を無理やり抜き出して自分のものにしたやつなんだ!!

その後、ティアがダガーモードで斬りつけたりしたが、やはり傷一つ付かなかった。

「気は済んだかしら。それじゃ、こちらからいきますわよッ!!」

「ぐわあああ」

「きやああああ」

クアットロの放った砲撃はとてつもなく、俺たちは壁際に叩き付けられた。軽く見ても、なのはさんのエクセリオンバスターくらいはある。

「くっ……。どういう事だ。あいつにはあんな能力はなかったはずだ」

「ええ、今までの戦いで使ってたISは『シルバーカーテン』だけのはずよ。こんな能力はなかったわ……………」

「教えて差し上げますわ。ここは玉座の間。かつて聖王陛下と高町なのはが戦った場所」

「ここには未だにあの二人の魔力がたっぷり残ってますの。それを私は聖王の鎧の力を使って、魔力を集めて、魔力砲を撃つたんですわ。これがオリジナルにない力ですわ」

——集束技術までありやがるとは、最悪だな。

「……………まさか、これほどとはな。おまけに俺には……………殆ど魔力が残ってない」

「これまでなのか……………」

「俺たちはみんなの敵も討てずに……………ここで死ぬのか。」

「あきらめないで!!」

「ティア……」

「まだあたしがいるのよ。こんな時の為に、あの時あたしに魔力を使わせなかったんでしよう!!」

「お前……」

ティアは、まだあきらめてはいない。

「ここで俺があきらめてどうする!!」

「おかげで何とか魔力は残っている。……やるわよ!!」

「……スターライトブレイカー……もうそれしか……ないか……」

さつき俺は扉を破壊するのに使ってしまったている。

もうティアに全てを託すしかない……。

「……分かった。俺はクアットロの動きをなんとかしてでも止める……。頼む、ティア!!」

「任せて、その代わりあいつの動きをなんとかしても止めて。チャージ時間を長くして威力を限界ギリギリまで上げる。だから……頼んだわよ!!」

「あゝら、作戦は決まったのかしら。何をしても無駄なのに」

「…………その油断が、命取りになるんだぜ!!」

俺は残っている魔力でレストリクトロックをクアットロにかける。

これが俺が使える最高のバインドだ。

「……………くつ、こんな物!! って、全然解けない!!」

「…………俺の全魔力でかけてるんだ。そう簡単に解かれてたまるか!!」

今の俺にはこれが精一杯だ。

だからこそ、このバインドは絶対に解かれるわけにはいかないんだ!!

「やれっ!! ティア、クアットロに俺たちの怒りを叩き付けてやれ!!」

「……………いくわよ。クロスミラーージュ!!」

《Ok!! Blaze Mode》

ティアがクロスミラーージュを、フルドライブモードである『ブレイズモード』に変形させ、スターライトブレイカーの発射準備にかかった。

《Starlight Breaker Stand by ready》

オレンジ色の魔力光がティアに集中し始める。

ティアは玉座の間に残された、なのはさん達の魔力の欠片を全て集めていたが、先ほどのクアットロの砲撃で周囲の魔力の欠片は、殆ど使われてしまっていた。

「……………これじゃ、まだ足りない。こうなったら……………あたしの命を……………魔力に変換して……………」

《駄目です。それじゃ貴女が死んでしまいます!!》

「お願い、クロスミラーージュ!! ここであいつを倒さなきゃ、あたしは何の為に今まで生きてきたの。全てはこのときの為なのよ……………。そのためなら、この命だつてくれてや

るわ……。だからお願い!!!」

《………わかりました。Limit Brake……Blaster Mode!!》

「………ありがとう、クロスミラージュ………リミットブレイク………ブラスターモード!!」

ティアの周りにブラスタービットが二つ展開され、そしてティアから、更なる力がわき出てきた。

ティアの奴、最後の切り札のブラスターモードを使いやがったな!!

ブラスターモード

「ブラスターシステム」を使用した、なのはさんとレイジングハートのリミットブレイクモードにして最後の切り札。

それをティアは俺に頼み、クロスミラージュに組み込んだ。

もちろん俺は反対だったが、そうでもしないと対抗できないということ、仕方が無く組み込んだのだ。だが、これを使えば、最悪の場合は死に至る物だ。

ましてやティアはなのはさんよりも魔力が少なく、同じ力を出そうとしたら、当然命を削らなくてはならない。

「やめろティア!! お前死ぬ気だな……俺もやる!! プリム、スターライトブレイカーだ!!」

《……sorry》

俺のデバイスはレストリクトロックの制御で精一杯だった。

俺のデバイスはインテリジェントデバイスではなく、ストレージデバイスなので組み込んだ魔法を発動させるだけなので、複数の処理は出来ないのだ。

ゆりかご決戦当時の俺じゃ、インテリジェントは使いこなせなく、今日まで使い慣れている相棒をつかっていたが、相棒を単体での魔法処理速度が速いのと強度が強いからという理由で、ストレージのままにしておいたのは完全な失敗だった。

「……ここで、レストリクトロックを解除したら、元もこうもない……どうすれば……」  
 「フィル、任せてっていったでしょう……。大丈夫よ……絶対決めるから……」

ティアの前に巨大な魔力が集まり、ブラスタービットにも魔力が集まり、発射準備が出来た。

「……これが、あたしの全て……あたしの命……喰らいなさい、クアットロ!!」  
「スターライト……ブレイカー!!」

三つのスターライトブレイカーはクアットロに命中したが、それでも聖王の鎧のせいで、ダメージは受けていない。

「何度やっても同じですわよく。この聖王の鎧の前ではねく」

駄目なの、あたしの命を使っても……。

『ティア、ファイル……。今度生まれ変わっても、また3人で一緒にやりたいね……』

スバル……。



『ティアナ、ファイル……私達の間もお願いね……。みんなが笑顔になれる世界を取り戻して……』

ギンガさん……。

そして……。

『本当はわたしが直接教えたかったんだけど、わたしの最大の切り札スターライトブレイカー……。これは自分の身を守るために使ってね……。ティアナ、生きてね。そして幸せになってね……』

なのはさん……。

——冗談じゃない!!

このスターライトブレイカーはたくさんの願いが込められているんだ。

あたし達を信じて、自爆してまで道を切り開いてくれた、スバルとギンガさん。

万が一のためにあたしやファイルのために、自分の全てを残してくれたなのはさん。

決戦後も、切磋琢磨しながら一緒に戦ってきたファイル……。

負けられない……絶対負けられない。

あたしは絶対に決めなきやいけないんだ!!

そのためには……どんなことだってしてやる!!

「言ったでしょう、クアットロ。これはあたしの命そのものだって!!」

これが最後の賭よ!!

だけど……これを使えば……。

『ティア、プラスターモードのファイナルリミット「プラスター3」は絶対に使うな。魔力の少ないお前が使えば間違いなく死ぬぞ!! いいな、それだけは絶対に約束してくれ!!』

ごめんね……ファイル……。

「やめろ、それ以上解放するな!! 本当に死んでしまうぞ!!」

約束……守れなくて。

「ファイナル・リミット……リリース……ブラスター3!!」

あたしは残っていたカートリッジを全てロードした。

スターライトブレイカーはさらに威力が上がったが、同時にデバイスとビットも耐えきれなくなってきた、ひび割れてきた。

お願い、クロスミラージユ……もう少しだけ耐えて。

砲撃に耐えられなくなり、クアットロの聖王の鎧を崩し始め、しだいにクワットロに焦りの表情が出てきた。

「……こ、こんな馬鹿な!!」

「あんたはあたし達をナメ過ぎたのよ。大事な物を奪われた者の悲しみと怒りを………  
思い知りなさい!!」

「……い、いやあああああ」

クアットロの聖王の鎧は完全に砕け――。

そして……。

スターライトブレイカーの閃光はクワットロを飲み込み、中心で大爆発を起こした。

クアットロの最後ね……。

\* \* \*

クアットロは倒した。

――  
だけど、その代償は大きく。

全ての力を使い果たしたティアはその場に倒れてしまった。

「ティア!!」

俺はティアを抱きかかえ、叫び続けた。

「しつかりしろ!! 遂にクアットロを倒したぞ!! みんなの敵を討つたんだぞ!!!」

「……よかつ、た。これで……なのはさんに……怒られ、なく、て……すむ、わ……」

「馬鹿なこというな!! ここで死んだら、それこそなのはさんは怒るぞ!! それになのはさんが言ってた自分の幸せをつかんで無いじゃないか……」

つらい戦いばかりで、ささやかな幸せすら犠牲にしてきたティア。

やっと、やっとそのつらい戦いが終わったんだぞ……。

「……………辛い戦いの連続だったけど、あたしは幸せだったわよ。ファイルといた5年間は……考えてみたらスバルと一緒に、第四陸士訓練校時代からだもんね。あんたとのつきあいつて……………」

「……………ああ、そうだったな。俺たちはいつとも一緒に、六課に入ってもそれは同じで……………」  
「……………アグスタの事件の後も、模擬戦であたしが無茶した時も励ましてくれたしね……………」

なのはさん、あの時意識が朦朧としていたティアに、追撃のクロスファイアを撃つた。あのときは、いくら何でもあれはないだろうって思ったけどな。

ティアの身体からどんどん生命反応弱くなってきた。

吐血して、喋るのもきつくなっている。

ブラスター3を使い、命まで使ってしまったティアは、もう時間の問題だ。

「……………あ……………あのね……………ホントは……………あたしね……………ファイルのことが好きだったんだよ。いつもあたしの側にいてくれて……………欲しい言葉をくれる……………あんたが……………」

ティアの言葉に俺は涙が止まらなかつた。  
ティアは俺のことを、ずっと好きでいてくれていた。

——そして、思い出した。

これとおんなじ言葉を、あの人にも言われたんだ。

——3年前のあの時に。

\* \* \*

「フェイトさん、しっかりしてください!!」



アースラが墜落し、森の中を彷徨っていた時、たまたま俺は、現地スタッフに助けられてたフェイトさんに会うことができた。

だけど、そこで見たフェイトさんの姿は、綺麗な金髪は埃と血にまみれ、全身ボロボロで生きているのが不思議なくらいの状態だった。

無我夢中で駆け寄り、必死に呼びかけたが、意識を保っていることが奇跡だった。

床に転がる漆黒のデバイス『パルディツシユ』は、あちこちが欠け、その戦闘の激しさを物語るように、傷だらけになっていた。

「……………フィル、なん、だね。そこに、いるの」

「そうです!! フィル・グリードです!! しっかりしてください!!」

「よ、よかった……。最後に、フィルに、あ、え、て……」

「何弱気なこと言ってるんですか!! エリオとキャラ口と一緒に幸せになるんでしょう!!」

フェイトさんは、今までいっぱいつらい思いをしてきた。

これから少しでも幸せにならなきゃいけないんだ!!

でも、その願いは……。

「ごめん、ね……。私、もう、だめみたい。わかるんだ……」

「俺は……俺は、本当に無力、だ」

こんな状態じゃ救助は、正直言つて……。

目の前で死にそうになってるのに、何もできない自分が……。

「さいご、だから……。いっちゃうね。私ね、いつも一生懸命に頑張っていたあなたのこと……す、き……だった、よ」

「!!」

\*

\*

\*

あの時とおんなじじゃないか!!

フェイトさんも、ティアもこんな俺のことを好きになってくれた。

その気持ちに気づかなかつたなんて……俺は本当に馬鹿だ。

「ティア!!」

「泣かないで……あたしは……いつもそばに……いるから……大好きだよ………ファイル……」

ティアはその言葉を最後に――。

「……テイ……ア……」

俺の腕の中で息を引き取った。

「……う、そ……だろ。冗談、なん、だろ……。目を……目を開けてくれよツツ!!」

俺はプリムを握りしめながら泣き叫んだ。

何だよ……何なんだよ……。

こんなの……こんなのありかよ。



ストレージなので意思はないのだが、埋め込んでいる宝玉が光り、ティアの死に悲しんでいるように感じた。

なのはさん、フェイトさん、八神部隊長、エリオ、キャロ、ロングアーチのみんな、スバル、ギンガさん……。

そしてティア……。

みんな俺の大切な人たちは死んでしまった。

「何でだよ。何でティアが……………死ななきやいけないんだよ……………。畜生……………。畜生……………!!!」

俺は床を力一杯叩き付けた。

そんなことをしたってティアが戻らない事は分かっている…………。

その時、一つの光弾が俺の心臓を撃ち抜いた。

「…………ク…………クアットロ……………まだ……………生きていたのか!?!」

「…………た、ただでは死にませんわ……………。一緒に逝きましょう……………」

最後の力を使い果たしたクアットロは息絶えた。

「……………ティア、そして、フェイトさん、どうやら……………すぐに会えそうだ」

俺も力がつきその場に倒れた。体温が冷たくなるのが分かる。これで、俺も……。

『死ぬのは、まだ早いですよ』

謎の声が聞こえたと同時に、俺の身体も光に包まれゆりかごから消えた。

「……………」

辺り一帯を見渡してみると、真っ暗で地面も何もなかった。俺も空間内で宙に浮いている状態であった。

『ここは生と死の狭間……いわば境界線といったところです』

突如。目の前に金髪の女性が現れ、俺に語り始めた。  
生と死の狭間。いつたいどういう事なんだ。

「あんたは何者だ……」

『私は時の女神……いわば時間が正しき道を進むように管理する者です』

「その女神が俺に何の用だ……」

目の前にいる女性が、神つて事に驚きはしたが、今最も気になるのは……。

「……一つ聞きたい。やはり俺は死んだのか？」

『……いえ、正確には死んではありません。貴方は今、精神体の状態なのです』

「精神体……どういう事だ？」

『はい、貴方は本来あのときに死ぬはずでした。ですが、貴方にお願いがあり、私がこの空間に呼び寄せました』

「……いつたい、俺に何をさせたいんだ。もう一度生き返るのはごめんだ……。みんながいない世界なんて……。正直興味がない……」

たった一人で、生き返ったって何の意味もない。

『……………実は、本来ならあのJ S事件と呼ばれた事件は、二年前に解決して犠牲者もこんなには出なかつたのです……………。正しき歴史では、機動六課のメンバーも重傷者はいましたが、死亡者はいません。それがどういう訳か歴史が狂ってしまった、実際は……………』  
「何だと!! じゃあその狂った歴史のせいでみんな死んじまったっていいのか……………。ふざけるな!!」

俺は女神の胸ぐらをつかみ叫んだ。

あいつらは、そんなことの為に犠牲になつたつて言うのか。

隊長達も、スバル達も、そしてティアも…………。

「冗談じゃない。だつたらさつきと歴史を戻しやがれ。それがあんたの仕事なんだから!!」

『……………残念ですが、過ぎ去つた時間は私は管理できないのです。ですが……………』

「ですが、何だ!!」

「私が直接でなく、間接的に言うのなら可能です。……………お願いというのは、貴方に時間



移動してもらい、正しい歴史にして欲しいのです」

「!!」

俺は驚きのあまり、胸ぐらから手をほどいた。

俺が過去に戻り、やり直せるだと……。

もし、さっきの話が本当だとすると、みんな死ななくてすむって事だ。

「……………だが、今のまま戻ったとしても俺には力がない。それじゃ結果は同じだ!!」

『確かにその通りです。ですから私が力を貸します。それで幾分かましになると思いますが』

そういうと女神は聖なる力で、珠を作り出し俺の前に出した。

『これには強大な魔力が込められています。これを受け入れられれば、貴方は大きな力を手に入れます……。しかし……』

『しかし、力を受け入れられない時は、その時は………本当の死になります』

「デッド、オア、アライブってことか。やってやるよ……。意地でも受け入れてやる!!」  
女神は俺に珠を渡すと、珠は俺の身体に入った。  
だが、次の瞬間体中に激痛が走った。

「ぐわああああああ………がああああああ………」

『頑張ってください。それは貴方の味方なんです。強引に押さえようとしないで受け入れるのです』

「……み、味方か……。そうか……」

俺は激痛に耐えながら、力の流れを感じ、体中に行き渡るようにした。

「……俺の中で暴れ回っている力よ……。心あるなら聞いてくれ……。俺は、力が欲しい  
……。だが、それは自分の為じゃない……」

大切な仲間の為……。

親友の為……。

そして……。

好きと言ってくれた人達の為に……。

俺に守る為の力を貸してくれ!!

次の瞬間、力の暴走が収まり、強いがどこか暖かな力を感じた。

『どうやら……うまくいったみたいですね……』

「はあ……はあ……何とかな……」

『その力はいつか貴方の力になるでしょう。今のところ殆ど魔力量は変わってませんが、魔力量は訓練次第で上がります。ですから、これ以降はあなた次第ですよ』

「魔力量はこれからの訓練次第ってことか。今はこれで十分だ。後はこの相棒と一緒にやるさ」

『……そのデバイスはストレージデバイスですね。……珍しいですね。このデバイス

には意思が感じます』

「どういう事だ。インテリジェントでもないのに……………」

このデバイスは、ストレージデバイスだから、そういった機能はないはずなのに？

『それには魂が宿ったみたいですね。ごくまれにあるんですが、大切に使われた物には魂が宿るんですよ……………』

『感じますね…………。どうやらさつきさんの戦いの時、複数の魔法処理が出来なくて、とても後悔しているみたいですよ』

「分かるのか、そんなことが……………」

『一応女神ですから…………。このまま持つて行っても、残念ながら今の貴方には役に立たない物になってしまいますね。よかったら私が力を授けましょうか』

「出来るんだったら頼む!! こいつはかけがない相棒なんだ。」

そういうと俺はプリムを女神に渡した。

女神はプリムを見ながら笑っていた。

『ふふつ、あなたは本当に持ち主に大切にされてるんですね。私が力を貸します。ですから、今度は後悔しないように、しっかりサポートをしてくださいね』

女神はプリムに力を注ぎ込むと、プリムが光り出し、姿が少し変わり、ストレージからインテリジェントに変化した。

《マスター……》

「プ、プリムなのか？ 本当に意思があつたんだな……」

《ごめんなさい!! あのとときバインドと攻撃魔法の両方出来ていたら、ティアナさんは……ティアナさんは!!》

「俺たちはあのととき、最善と採れる方法で戦つたんだ。誰のせいでもない……」

《でも!!》

「……そう思うなら、これからも俺に力を貸してくれ。今度はお互いに後悔しないようにな」

《はい!!》

『それと……貴方にもう一つ、力を与えます』

そうやって女神は右手から俺に力を注ぎ込んだ。  
俺自身も何かの力が身体に入ったのを感じた。

「今のは？」

『今のは高速転移の術式。いわゆるワープです。但しかなり扱いが難しいので注意してください。サポートとして貴方のデバイスを使うといいでしょう』

「ワープ？ 隊長達が使っていた物と同じか？」

『少し違います。これは戦闘用の転移魔法で、発動時に魔法陣も展開しないので、相手に気づかれることは殆どありません。しかも場所特定ではなく、相手の魔力を感知してその場所に行くことが出来る能力です。うまく戦闘で生かして下さい……』

「色々すまない……」

『あと、これを渡しておかなくてはなりません』

女神が取り出したのは、ティアのデバイス、クロスミラージュだった。

「クロスミラージュ、あんたがどうしてこれを!!」

『そのデバイスはティアナ・ランスターが死んだ時、主と共に精神体になったからです。』

先ほども言いましたが、ここは生と死との境界線です。ティアナ・ランスターは死ぬ時、私に会いました。その時あなたのことを聞かされました。もし、あなたが死んでしまつたら、ここでこれを渡して欲しいと、ティアナ・ランスターから託されたからです………』

「ちよつと待て、ティアに会つただと!! だったら何故、ティアにあの話をしなかつたんだ。彼女だつて犠牲者なんだぞ!!」

むしろ、俺なんかよりティアに生き返つてほしい。

「………私の力では、正直言つて過去に戻せるのは一人が限度なんです。そのことを話したら、自分よりも貴方にとつたのです………」

「……ティアらしいよ。自分よりも他人を優先させるなんてな………」

『そして彼女は、自分の持つていた能力の全てと自分の想いをクロスミラージュに託したのです……。受け取ってください。彼女の思いを……』

俺はクロスミラージュを受け取ると、クロスミラージュにティアからの通信がきた。

《ファイル……聞こえるかしら……ファイル》

「ティア!! 本当にティアか!!」

《突然でごめんね。ファイル、あたしは今、死後の世界から話してるんだけど……。事情はもう聞いてると思うから省略するわね。ファイル、あっちに行つて、もしあんたが全てを託せると思つた人がいたら、クロスミラージュを渡して欲しいの。きつと何かの役に立つと思うから……》

「ティア!! クロスミラージュはお前の相棒だぞ!! それを!!」

《だからこそよ……。あたしはもう一緒には戦えない。だからあんたが愛した人にその思いを託したいの。それがあたしに出来る最後のことだから……》

「……ばか……やろ……」

なんでそんなに心が強いんだよ……。

お人好しにもほどがあるぞ……。

「……わかつた……お前の思い、確かに受け取つたよ」



《……ありがとう……それと、過去のあたしが、色々あなたのことを困らせると思うけど……お願いね……》

「……どこまでやれるか解らないが、やってみるよ」

《大丈夫よ、自信を持ってやりなさい!! でも無茶しちや駄目だからね。あんたって昔からそういう所あるから……》

「うっ……」

ティアには本当に頭が上がらないんだよな。

昔から俺が暴走すると必ずティアが止めていたからな……。

でも、そんなティア達と過ごしていた日常が一番好きだったんだ……。

《……これは大切なことなんだけど、ちゃんと幸せになつてね。どんな形でも良いから……》

「幸せって……俺にはそんな資格は……」

《資格なんて要らないわよ。大切なのはお互いに愛し合う心だから、一方的な思いじゃ

なく、二人の心が一つならそれで良いと思う。それが何よりも大切なことだから……」  
《それにあたしはあんたを縛り付ける存在にはなりたくないの。あたしが何より望むのはあんたの幸せなんだから……それだけは忘れないでね》

「ティア……」

《あたしが駄目でも……フェイトさんなら、きつと……》

「……さて、なんでそこでフェイトさんの名前が出る!? ま、まさかお前!」

《ごめん……。以前、残されたバルディツシユの記録を調べていた時に全部知っちゃったの。フェイトさんが、最後にあんたに自分の気持ちを伝えて死んでいったことも……。だから、あたしは本気よ、フィル。残念だけど過去のあたしじゃ、あのままじゃあんたの悲しみを埋めるには、少し役不足だしね。フェイトさんならもしかしてって思うの》

《あの人は人の心の痛みをすごく分かる人だと思う。あの人に育てられた、エリオヤキヤロを見ればそれは分かるわ。だから、あの人ならあんたのことを任せられる!!》

本当にティアは、昔から自分のことより他人のことを優先するよな。

《最後になっちゃうけど、未来が変わることを祈ってる。そして何より、あんたが幸せに

なること……。いいわね、ファイル……」

ティアの通信が終わり、クロスミラージュが俺に語ってきた。

「ファイルさん、絶対に変えましょう。あんな未来はもうたくさんです!!」

「ああ、俺だつてあんな未来はもうたくさんだ。……いこう過去へ!!」

ティアの遺志を受け継いだ以上、ここでじつとしているわけにはいかない。

俺はクロスミラージュをポケットにしまった。

「あと、これが一番大切なことなんですけど、これからのことですけど、積極的になりすぎはならないということに注意しておきます」

「どういう意味だ？ 未来を変えるのに積極的になつてはならないというのは？」

あんな未来にしないためには、どんどん動かなくちゃいけないのに……。

「簡単に言えば、今回のことと言えば管理局が負けて、クアットロが世界を支配する事象

はすでに決まっています。つまり、世界の中でそれが認識されてしまっています。それを変えるには容易ではありません。それを変えてもらうのですが、いきなり変化をもたらそうとしても、世界の修正力でそれをまた元に戻そうとしてしまうのです》

「……………ということは、修正するのならば、少しずつ変化をもたらし、世界に認識させなければならぬのか？」

《そうなります。一気に変えてしまった場合、その後どうなるかわからなくなってしまう、最悪、より悪い方向になる可能性もあります》

ということとは、例えば、なのはさんとティアのあの確執も、下手に手を出したりしたら、拗れて最悪のケースもあり得るということか。

「……………歴史を変えるつてのは、本当に難しいな」

《申し訳ありません。それが、私ができない最大の理由なんです……………》

「なんとか、やるしかない……………」

《修正力については、できるだけこちらで頑張つて抑えて見せます。それくらいしか私にはできません……………》

「……………それで十分だよ。ありがとう。あとは、俺の頑張り次第ということか」

修正力と歴史の修正のバランスか。  
本当に厄介だよな。

『それでは、過去にとぼしますね。行き先はどこに……』

「そうだな、新暦73年4月、俺たち三人がBランク昇格試験を受ける2年前にしてくれ」

《マスター何で2年前に行くんですか。別にランク試験の時にも良いんでは?》

「いや、今のまま八神部隊長が六課を作っても、地上と確執を持ったままじゃ奴らの思うつぼだ。だから俺からレジアス中將に話をする。あの人とは知らない関係じゃないし、卒業して訓練生じゃなければ局員として動けるからな」

《予備工作というわけですね》

「まあな。それに闇の書事件は八神部隊長は被害者だからな。それがきっかけであの人が背負わなくても良いものまで背負ってしまったっているからな」

歴史を大きく変えてしまうかもしれないけど、それでもこれだけはしたいんだ……。

エゴなのはわかってるけどな。

《マスター……》

「プリム、もしレジアス中将の説得がうまくいっても、この事は部隊長には絶対に言うなよ。これはあくまで俺が勝手にやるんだからな」

《……本当に良いんですか、それで……》

「ああ……」

（マスター、今は八神部隊長に話すことは黙っておきますけど、あの人が自分で聞いてきたときは、私は話しますよ。たぶんあの人は、自分で気づくと想いますよ）

『それでは行き先はそれで良いですね』

「ああ、頼む」

『分かりました。それでは行き先をイメージしてください』

俺はあのときのことをふり返っていた。

このイメージがしっかりとってないと送れないらしい。

俺の身体が光に包まれ、この場から消えていくのを感じた。

『……最後になりますが、過去に行ったら絶対一人でやろうとは思しないでください。貴方は一人じゃないんですよ!!』

「……………そうだな。肝に銘じておくよ」

そして、俺の身体が全て消え……………過去に向かった。

## 第1話 再会

新暦75年4月

《マスター、何とかここまでできましたね》

「そうだな。六課のことは俺にはあれ以上のことはできないしな。後はあの人の努力次第だよ」

《ですね。今度はマスターの番ですよ。今のマスターは経験値はあつても力は当時のままなんですからね》

「そうなんだよな。これは仕方がないよな……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：戻る前こんな事言つてたしな」

『過去に戻つたら、魔力はBランクの状態になつてはるはずですよ。これは魔力は無くなつたわけではなく、封印されているだけです。貴方が本当に力を欲した時、リミッターは解除されるはずですよ。それと経験や知識は受け継がれますので、今まで覚えたことは使えますよ』



(とはいうが、Bランクのままじゃ、今まで気軽に使えてた物も考えて使う必要があるな)

「どうしたの、ファイル。ぼけくとして、もうすぐ始まるよ」

考え事をしていた俺に、スバルが話しかけてきた。

そうか……。

もうすぐ始まるんだな、昇格試験。

Bランク昇格試験

俺たちが三人そろって受けた大切な思い出。この試験では、様々なことがあったが、またこうして受けることになるとな。

そして、ティアとスバル……またこうして会えるなんて夢にも思わなかった。

二人の顔を見てると、涙が出そうになっていた。

スバル……懐かしいな。俺にとつては半年以上前になるんだよな。

戦闘機人との戦いで命を落としたスバル。あるときスバル達がああしてくれなかつ

たら、クアットロを倒すことは出来なかつただろう。

「そうよ、フィル。そんなんじや試験落ちるわよ。……ていうかスバル、あんたは人の心配をしてる場合じゃないでしょう。始まる前からそのオンボロローラーを酷使してたんじや途中でいかれるわよ」

「ティア、嫌なことを言わないで。ちゃんと油を差してきた」

ティア、相変わらずだな。

考えてみれば、訓練校の時から、俺たちは凸凹トリオとか言われてきたが、それでも、ティアはスバルをスバルはティアを、互いに認め合っている。

未来でもスバルの死に、一番悲しんだのはティアだった。

もうあんな想いをするのはたぐさんだ。まずはこの試験からだ。

しばらくして試験官のリイン曹長の姿が通信で現れた。

そういえば前の時もリイン曹長だったけな。

「おはようございます。さて魔導師試験受験者の三名そろってますか」

「はい」

「確認しますね。スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士、それに  
フィル・グリード二等陸士ですね」

「はい」

「所有している魔導師ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いありませんね」

「はい」

「間違いありません」

「そうです」

俺たちは試験管であるリイン曹長に確認の意味で宣言した。

「はい、本日の試験官を務めますのは、私、リインフォースⅡ（ツヴァイ）空曹長です。

よろしくですよ〜」

「「よろしくお願ひします」」

俺たちはリイン曹長に敬礼した後、試験の簡単な説明を受けた。

内容は前回と同じで、各所に設置されたポイントターゲットを破壊し、制限時間内にゴールすることだった。

その後、リイン曹長の通信も切れ、スタートのカウントダウンが始まった。

「レディ」

「ゴー!!」

俺たちはまず、最初のターゲットのあるビルを目指した。

「ティア、ファイル」

「なに」

「何だ」

「中のターゲットはあたしがつぶしてくる。ティアとファイルは援護をお願い」

「……分かったわ、でも、手早くね」

「オツケー」

「……って、ちょっと待て!!」

「どうしたの、フィル。時間がないんだよ。さっさと片付けないと!!」

「そうよ。余裕がないんだからね」

「急がば回れって言うだろ。プリム、ビルの中をサーチし、最短経路を割り出してくれ」  
《了解です。サーチ開始します》

プリムと使ってサーチしていると、ティアが疑問に思い、質問してきた。

「あれ?、確かあんたのデバイスってストレージじゃなかったっけ……」

「最近、プリムのAIに使うプログラムが完成してな。インテリジェントに改造し直したんだよ。おかげで情報処理が複数出来るようになって色々と便利になった」

「そういえばあんたのデバイスは自分で作ってたんだったわね」

「お前らの使ってるのだって、自分で作った奴じゃないか」

「フィル、あたしはそこまで器用じゃないよ。このローラーだって何とか機能してるって所だよ」

「……あんた、昔からそういう事、得意だったけど……。進む道、間違えてるんじゃない。ある意味デバイスマスター並みよ。それって……」

俺たちが雑談をしてると、サーチの結果がでた。

《結果が出ました。最初のターゲットは情報通り10階の右よりに集中しています。ですから、最短で突入するには、10階の左寄りの窓から突入するのがベストです》

以前スバルは何も確認しないで、窓ガラスをぶち破り、中に入ってしまったんだっただな。

今思うとかなり無茶やってたんだな。俺たちって……。

「よし、それじゃスバルは内部に突入し、ターゲットを叩く。俺たちは別のビルに移りお前を援護する」

「オツケー」

「わかったわ」

「それじゃ、ゴー!!」

スバルがウイングロードで突入した後、俺たちは別のビルに移り、スバルの援護をすることになった。

内部でスバルが次々、リボルバーシユートでターゲットを破壊していった。

俺たちもそれぞれシユートバレットでターゲットを破壊していき、スバルを援護した。

情報を確認してからやったせいか、前回よりも早く破壊が終わり、スバルと俺たちは合流し、次の場所に向かった。

その様子をフェイト執務官と八神捜査官がヘリの中で見ていた。

「うん、良いトリオだね。特にファイルは、いきなり飛び込もうとしたスバルを止めて内部の情報を得ていた。実戦では状況が全く分かってないことがあるから、ああやって情報を得てから行動した方が良い。その辺を分かっているみたい」

「せやね、けど、まだ難関は続くよ。特にこれが出てくると、受験者の半分以上が脱落する最終関門……大型オートスファイア」

「今の三人のスキルだと防御も回避も難しい。中距離狙撃型の狙撃スファイア」

「どうやって切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所や」

次の場所に行くと攻撃がさらに増していた。スファイアも増えているし攻撃のスピー

ドもアップしている。

「スバル、単独で動くな!!　ここはオプテイクハイドを使ってクロスシフトでスフィアを瞬殺。いいな」

「了解」

「いいわ、それでいきましょう」

スバルを一旦、後退させ、俺とティアはオプテイクハイドで三人を不可視状態にした。幻術魔法は得意ではないが、これはティアに教えてもらって出来るようになったものだ。

それにティア一人だと時間が短い、二人分の為、多少は時間が長くなるはずだ。

「……………10……………9……………8……………7……………6……………5……………4……………3……………2……………1……………」

「0」

カウントダウンが終わると同時に、オプテイクハイドが切れ俺たちはそれぞれ、魔法



を展開した。

「クロスファイアー……」

「リボルバー……」

「ブラスト……」

「「シュート!!」」

俺たちの放った砲撃は全てのスファイアを撃破した。

「イエイ!! ティア、フィル、一発で決まったね」

「まあ、あんなだけ時間があればね」

「普段はあまりマルチショットの命中率があまり高くないのに、やっぱりティアは本番に強いね」

「うっさいわよスバル。さっさと片付けて次に……。あつ!!」

「……まずい、二人とも防御を!!」

破壊し損ねてたスファイアが俺たちに攻撃をしてきた。

まずい、前の時の事で分かっていた事なのに、油断した。何とかスフィアは破壊したが、ティアは足をねんざしてしまった。

「ティア!!」

「スバル、騒がないで。何でもないから……」

「嘘をつくな。……お前ねんざしたな」

「フィル、だから何でもないって……痛っ!!」

ティアは自力では立ち上がれない状態だった。

「つたく、この意地っ張りが……」

「……ティア、ごめん。油断してた」

「……あたしの不注意よ。あんたに謝られるとかえってムカ付くわ……。走るのは無理そうね……。最終関門は抜けられない」

「ティア？」

「あたしが離れた位置からサポートするわ。そしたらあんた達二人ならゴールできる」

「ティア!!」

「何言ってるんだ!!」

「っさい、次の受験の時はあたし一人で受けるってってるのよ」

「次って半年後だよ……」

「迷惑な足手まとい達がいなくなれば、あたしはその方が気楽なのよ。分かったらさっさと……。ほら早く!!」

「……………ティア、あたし前に言ったよね。弱くて、情けなくて、誰かに助けてもらってばかりの自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入った。……………魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って人助けの仕事に就いた……………」

「……………知ってるわよ、聞きたくもないのに。そのことは何度も聞かされたんだから……………」

スバルはいたたまれなくなり、ティアに自分の気持ちを伝えた。

そして俺も、今の自分の思いをティアに伝えた。

「……………なあ、俺はずっとお前らと一緒にいたから、ティアがどんな夢を見ているのか……………。魔導師ランクのランクと昇進にどれくらい一生懸命かよく分かっている……………」

「ファイル……………」

「だから、こんな所で……………。俺の目の前で、ティアの夢をつまづかせるのはゴメンだ!!」

俺たちだけが行くななんて冗談じゃないぞ!!」

「じゃあ、どうすんのよ!! 走れないバックスを抱えて、残りちよつとの時間で、どうやってゴールすんのよ!!」

確かその通りだ。このままティアを一緒に連れていたとしても、到底時間内には間に合わない。

しかし、俺には考えがあつた。以前はスバルが考えた物だがな。

「俺に考えがある。裏技になる可能性があるが、上手くいけば三人そろって合格できる」

「フィル……。あんた……」

「スバル……。やれるな。これが俺たちに残された最後の手段になる」

「うん、あたしやるよ。三人そろって合格しよう!!」

「……ふう、あんたまでお節介焼きとはね。でも、ありがとう……。フィル」

残り、3分40秒……。

プランはこうだ。まずティアのフェイクシルエットでスフィアを攪乱させる。こう

してティアの方に目を向けさせ、その間に俺とスバルで大型オートスフィアを撃破する。

ただし、フェイクシルエツトは多量の魔力を必要とするので短時間しか使えない。よって一発で決めなければならない。

「スバル、フィル、一撃で決めなさいよ。でないと三人そろって落第よ」

「うん!!」

「任せておけて!!」

ティアのフェイクシルエツトは何か時間を稼いでくれていたが、おそらくもうすぐこっちの動きも察知するだろう。俺たちは作戦の最終確認をしていた。本当はもっと情報を仕入れてから行う行動なのだが、そんなことはいってられない。幸い、今回は試験なのでスフィアの情報とかはあるので、その上で考えたのだ。

「いいか、着いたと同時に、お前は全力でスフィアに殴りつける。お前がバリアを破壊したら、お前と俺が同時に砲撃を撃つんだ……。それしかない」

「フィル……。フィルって冷静沈着って思ってたけど、結構感情型なんだね。あの時、

ティアを見捨ててゴールしたって文句は言わなかったのに……」

「……ティアは執務官になるって夢があるんだ。だったら俺たちがいる時にランクは取った方が悪い。」

「……やっぱり、ファイルって……優しいよ。いつだって……今だって……」

「……そんなことはない。唯、俺が受かる最善の道を考えてただけだ。そんなんじゃない」  
「じゃあ、そういうことにしておいてあげるね……。やるよファイル」

「……つたく、こっちはいつでも良いぜ!!」

「いつけえ!! ウィングロード!!」

スバルの作り出したウィングロードは、巨大スフィアのいるフロアにたどり着き、俺はスバルにしがみつきローラーで全力疾走した。

壁を突き破り、スバルは大型スフィアに殴りつけた。スフィアが展開しているバリアはなかなか硬かったが、スバルはバリアを破壊した。

「……………いくぜ、プリム。カートリッジロード!!」

《了解です、マスター。カートリッジロード》

俺はプリムにカートリッジをロードすると、砲撃魔法の準備に取りかかった。同時にスバルも、リボルバーナックルにカートリッジをロードさせた。

「一撃必倒、デイバイン……………」

「ブラスト……………」

「バスター!!」

「ブレイザー!!」

俺たちの攻撃は何とかスフィアを破壊した。今回は壁を撃ち抜かないで済んだようだ。

さつきスバルには念を押したからな。意味無い力を使うんじゃないって。実際に毎回建物を破壊していたら、二次災害の危険もあるからな。

「……………はあ、はあ……………や、やったよファイル」

「喜ぶのはまだ早い。ティア。残り時間は!!」

「あと一分少々よ。スバル、ファイル」

「うん」

「ああ」

ティアはスバルにおぶさり、俺はリングバインドの応用で、二人三脚の要領でスバルの右側にいた。このままだと引きずられて足がボロボロになってしまうので、足を少し浮かした状態で、足のリングバインドをしてある。

三人分の体重でローラーは悲鳴を上げていたが、それでも全力でゴールを目指した。俺たちの中で一番早い移動手段を持っているのはスバルだからだ。

それに、ティアは走ることが出来ないのです、必然的にスバルの背中におぶさることになった。

「後、何秒」

「16秒。まだ間に合う!!」

ティアが最後のターゲットを破壊し、これでオールクリアとなった。後はゴールにはいるだけなのだが……。

「魔力全開!!」



「ちよつとスバル、止まる時のこと考えてるんでしょうね」

「大丈夫だ!! それは俺に任せておけ。全力で突っ走れ!!」

「いつけえええええ!!」

リイン曹長がヤバイって表情をしているが、今回は秘策がある。

未来で覚えた風の魔法と、なのはさんが以前、この試験で俺たちに使ったあの魔法をやる。

あとほどのくらいの成功率なのだが……。

「プリム、俺は、風の魔法でブレーキをかける。お前はゴールに飛び込む瞬間、念のために、前面にアクティブガードとホールディングネットを張ってくれ。……後、この作戦の成功率は!!」

《計算の結果、80%以上の確率でうまくいきます。っていうか、私とマスターがやるんです。大丈夫、絶対成功させます!!》

「それでこそ俺の相棒だ……。いくぞッ!!」

「うわああああ」

「きやああああ」

「いくぜ!! ウインド・ブレス!!」

《Active Guard with Holding Net》

俺はウインド・ブレスでブレーキをかけ、前回とは違い、壁のだいぶ前で止まること  
が出来た。

しかし、ウインド・ブレスの威力が強すぎて俺たちは後にこけるはめになった。  
アクティブガードとホールディングネットは保険ですんだが、これじゃなあ……。

「ついたたたたつ!!……すまん、スバル、ティア……」

「いったああああ、フィルくこういう事は先に言っておいてよ。おもいつきりこけ  
ちやつたじゃない」

「スバル、重い!! 早くどきなさい!! ったく……それと……」

俺はリングバインドを解除し、体勢を立て直した。つていうかティアの視線が、もの  
凄く怖いんだけど……

「……………フィルツツ!! あんたねえええええええ!!」

「仕方ないだろ!! あれしか手段がなかったんだ!!」

「あんたって、切れ者かと思っても、どっか抜けてるのよね……………」

「…………言わないでくれ…………本人が一番自覚している……………」

未来で少しは経験を積んで、何とかなるって思っていたけど、やっぱり俺ってどっか抜けてるんだな。

俺たちが談笑しているとリイン曹長がやってきて注意し始めた。

「三人ともあんな危険なことをして減点ですよ。全く頑張るのも良いですが、怪我をしたら元も功もないですよ!!。そんなんじや魔導師として駄目駄目ですよ!!」

二人はリイン曹長を見て、驚いている様子だった。

そういうえば俺も初めてであった時は今の二人みたいに驚いてたな。

「まあまあ、ちよつとびっくりしたけど無事でよかった…………。とりあえずは試験終了ね。お疲れ様」

試験の様子を見ていたなのはさんが、バリアジャケット姿で空から降りてきた。以前の試験ではなのはさんに助けってもらったんだよな。

なのはさん……。

本当になのはさんなんだ……。

表情には出さなかったが、涙が出そうにはなっていた。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官出来ていたよ」

「わーい、ありがとうございます。なのはさん」

バリアジャケットを解いて俺たちの前になのはさんがやってきた。

「……まあ、細かいことは後回しにして、ランスター二等陸士」

「……あつ、はい」

「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで」

「あつ、治療なら私がやるですよ〜」

リイン曹長が治療魔法をかけると、ティアの足の腫れがひいてきた。

「これでだいじょうぶですよ〜」

「す、すみません……」

「……なのは……さん……」

「うん」

「あつ、いえ、あの、高町教導官、一等空尉!!」

スバルが直立状態でいると、なのはさんが……。

「なのはさんで良いよ、みんなそう呼んでるから……四年ぶりだね、背伸びたねスバル」

「あの……その……」

「またあえて嬉しいよ」

なのはさんが、スバルの頭にそつと自分の手を置いて微笑んだ。  
それが切欠となりスバルは泣き出してしまった。

——そうだった。

スバルは四年前になのはさんに助けられたのが切欠で、魔導師を目指したんだった。

——よかったな。

ちゃんと覚えてくれていたよ、なのはさんは。

## 第2話 機動六課

試験が終わり俺たちは、フェイト執務官と八神捜査官に呼ばれていた。

そこで聞かされたのは、ミッドチルダ臨海空港火災事件のこと。それが切欠で新部隊を作ることになったこと。そして四年ほどかかって、やっと設立できると言うことだった。

その部隊つてのは機動六課のことなだけだな。

「部隊名は時空管理局本局、遺失物管理部機動六課。登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

「……………遺失物……………ロストロギアですな……………」

「そう、でも広域捜査は一課から五課までが担当するので、うちは対策専門」

八神捜査官の説明の後、ティアの質問にフェイト執務官が補足を加えた。

「んで、スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士、それにフィール・グ

リード二等陸士」

「はい!!」

「私は三人を機動六課のフォワードとして迎えたいと考えている。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろ……………」

「……………あの……………えつと……………」

俺たちが混乱していると、フエイト執務官がさらに…………。

「スバルは高町教導官に直接魔法戦を教われるし……………」

「はい……………」

「執務官志望のティアナとフィルは、私でよければアドバイスとか出来ると思うんだ」

「あ、いえ、とんでもない!!」

「そうですよ、というか恐縮です……………」

フエイトさん…………。

かつてゆりかご襲撃の時は、スカリエツティの基地に単独で向かって命を落としてし



まった。

以前の時もいろいろティアや俺がお世話になっていた。なのはさんの訓練で疲れ果てた時もいろいろ励ましてくれた。

そして俺がいろんな意味で憧れていた人。

——『あの時』の最後の言葉は忘れられない。

……。また一緒に仕事が出来るとは思わなかったけど、もう一度死なせるなんてゴメンだ……。

こっちのフェイトさんも相変わらず優しいんだな。俺たちのことを本当に考えてくれている。

以前はティアは、執務官になる夢は果たせなかったからな……。

過去の俺は執務官になりたいと思っていたけど、今は正直わからない。

そんな中なのはさんが試験結果を持ってやってきた。今回は果たしてどうなのだろうか……。

「……とりあえず、試験の結果ね。三人とも技術はほぼ問題無いんだけど……。一つだけ聞いて良いかな。フィル、試験中あれだけ慎重に行動し、スバル達の行動をまとめてきたのに、何で最後はあんな事をやったの？ もしあの時スピードを殺しきれなくて、壁に激突するって思わなかった……」

「そのことはずつと頭にありました。ですから俺のデバイス、プリムにあらかじめ計算をしてもらいました。俺の持っている魔法で、今回やったプランなら安全に止まれるって事になって実行しました」

「……そして、もし失敗するって結果が出ていたら、二人には悪いが、俺は失格を選んだ」「えっ？」

「スバル、ティア。無茶することと頑張ることは違うんだ。あの時、もし失敗するって出て、それが分かかっていて実行して取り返しのつかないことになったら、それこそ自分の夢を叶えるどころじゃない。それに、ティアは足をねんざしていたんだ。ここで無茶する必要はない。それだったら、半年後受け直した方が良い……。それに死んじまった

ら、何もかも終わりなんだ……」

「ファイル……」

「そっか……。うん……」

なのはさんは何か納得した様子だった。だけど今の言葉は俺の本心なんだ。

そう、事故とかで死んでしまったら、悲しみと後悔しか残らない。残される者には特に……。

「……じゃあ、改めて結果を言うね。今回は三人とも合格とします」

「「や、やったああああ」」

「その代わり、三人にはそれぞれ課題というか、講習を受けてもらうね。スバルとティアナは本局武装隊に行つて、来週から十日間、本局の厳しい先輩達に揉まれて安全とルールを学んでこよう。ファイルはよく分かっていたみたいで、今回はそれに助けられている部分が大いんだからね。本当は二人は不合格なんだけど、そうするとファイル、絶対辞退するでしょう……」

「そ、そんなことは……」

「ううん、分かるよ。ファイル、あの時の事……計算して失敗するって結果だったら、失

格を選ぶつもりだったんでしよう。それだけ二人のことを思っていて、自分だけ受かるって事は考えてなかったんでしよう。だからあんな作戦をとった。違うかな……」

「参りました……。その通りです……」

そこまで見抜かれていたなんてな……。

さすがというべきなのかな……。

「それで、ファイルはわたし達の知り合いのメカニックマイスター、マリエル・アテンザさんの所へ行つて、デバイスの理論をきっちり学んできて。独学であれだけのデバイスを作れるなら、ちゃんと学べばさらにスキルアップすることが出来ると思う。もし、機動六課に来てくれるなら、その力は絶対に必要になるから、フワード達だけでなく、私達も助かることになるから……」

「……ありがとうございます。高町教導官。こんなチャンスをくれて恐縮です……」

「そんなにかしこらなくて良いよ。普段はなのはさんで良いよ。それと三人とも講習頑張つてきてね」

「「はい、ありがとうございます」」

「三人とも講習が終わるまでは、それに集中したいやろ。私への返事はそれが終わって

からって事にしとこうか」

「すみません、恐れ入ります!!」

俺たち三人は八神捜査官に敬礼してその場を離れた。

「ふう、緊張したね、フィル、ティア」

「全くだ。補習付きとはいえ、合格できて本当によかったぜ」

「……」

「どうしたんだティア。何落ち込んでるんだ……」

「フィル、ゴメンね。色々迷惑をかけて……」

「ん、何だよいきなり……」

「あんたがいなかったらあたし達は落第していた。いつもあんたには助けってもらってばかりで……」

「それは違うぞ。俺がいなかったとしても、ティアとスバルはちゃんと受かっていたよ。それに俺は、お前らとだからあんなに頑張れたんだ。俺一人じゃ駄目だったよ……。それに……」

「俺はティアが頑張っているのは知っているから、だから、そんなことを言わないでくれ」

………」

俺はティアの肩にそつと手を置き励ます。

正直こういう柄じゃないんだが、ちゃんとやってやらないと駄目だからな。

「……あ、ありがとう」

「あのくお二人さん。何こんところでラブコメしてるんですか」

「ス、スバル!!」

そういえばスバルがいたことをすっかり忘れていた。

「な、な、なにいつてんのよあんたは!!」

「そ、そ、そうだぞ!!」

「二人ともそんな態度じゃ説得力無いよ」

「あつ………」

俺つて今、ティアの肩に触れてるんだよな。しかも、かなり恥ずかしいことを言っ

……。

「まあ、二人をからかうのはこれくらいにして……。どうするの二人とも、行くの新部隊に」

「……そうだな、お前は行きたいんだろ。なのはさんはお前のあこがれなんだし、同じ部隊なんて滅多にないぞ」

「まあ、そうなんだけどさ……。…」

「……あたしはどうしようかな。遺失物管理部の機動課って言ったたら、普通はエキスパートとか、特殊能力持ちが勢揃いの生え抜き部隊でしょう。そんな所に行つてさ、いまのあたしがちゃんと働けるかどうか……。って、何よ気持ち悪いわね、スバル……。」「そんなこと無いよ、『ティアもちゃんと出来る』って、言つて欲しいんでしよう。特にファイルに!!」

「なにいつてんのよ、バカいつてんじやないわよ!! そんなんじやないわ!!」

「い、いたたたたた、ギブ、ギブウウウウウウウ」

「なにやつてんだお前は……。…」

スバルにつねくり攻撃をし、少しは鬱憤がはれたのかそっぽ向くように解放した。

そんなティアにスバルが……。

「……ねえ、ティア。あたし達は知ってるよ。ティアはいつも口ではふてくされたことを言うけど、本当は違うんだって……。フェイト執務官にも、内心ではライバル心メラメラでしょう」

「ラ、ライバル心とか、そんな大それたもんじゃないけど……。知ってるでしょう。執務官は私の夢なんだから……。勉強できるならしたいって気持ちはあるわよ」

「だったらさ、やろうよティア、フィル。あたしはなのはさんに色々なことを教わって、もっともつと強くなりたい。ティアとフィルは新しい部隊で経験を積んで、自分の夢を最短距離で追いかける」

「うん」

「ああ」

「それに、当面三人でやつと一人前扱いなんだしさ。まとめて引き取ってくれるとうれしいじゃん」

「それ以上言うな!! あんたのせいで、どこへ行ってもあたし達はトリオ扱いなのよ!!」

「それにお前には言われたくはないぞ、スバル!!」

「いたいよおおおお、ティア、フィル」



今度は俺もスバルの頬と一緒につねってやった。一言多いんだよ。

「ふん、まあいいわ。うまくこなせればあたしの夢への短縮コース。スバルのお守りはゴメンだけど……まっ、我慢するわ」

「ぶっ、あはははははっっ」

「何よ、何笑ってるのよ……」

全くテイアって素直じゃないよな。こんなだからスバルにからかわれるんだろ。

あの二人は良いコンビだよ。全く……。

\* \* \*

「あの三人は、まあ入隊確定かな……」

「……だね」

「なのはちゃん、嬉しそーやね」

「三人とも育てがいがありそうだし、時間をかけてじっくり教えられるしね」

「ふふっ、それは確実や」

「新規のフォワード候補は後二人だっけ、そっちは」

「二人とも別世界。今、シグナムが迎えに行ってるよ」

「なのは、はやて。お待たせ……」

「お待たせです」

「ほんなら、次に会うんは六課の隊舎やね」

「お二人の部屋、しゅっつかり作ってあるですよ」

「うん」

「楽しみにしている」

私達はそれぞれの職場に戻っていった。新部隊設立まではそれぞれが準備をしなければならぬからだ。

やることはいっぱいあるのだ。

\* \* \*

—ミッドチルダ駅構内—

「えつと……あつ……お疲れ様です。私服で失礼します。エリオ・モンディアル三等陸士です」

「……ああ、遅れてすまない。遺失物管理部機動六課のシグナム二等空尉だ。長旅ご苦労だったな……」

「いえ」

「ん、もう一人は……」

「はい、まだ来てないみたいで……あの、地方から出てくるこのことですので迷ってるのかも知れませんが。捜しに行ってもよろしいでしょうか……」

「頼んでも良いか」

「はい!!」

僕はシグナム二等空尉に許可を得て、もう一人の新人の女の子『キャロル・ルシエ』を捜しに行った。

いったいどこにいるんだろう。そうしていると女の子の慌てた声が聞こえてきた。

「すみません、遅くなりました……」

ルシエさんがエスカレーターを走って降りてきた。大丈夫かな……。

「そんなに慌てなくて良いですよ……って危ない!!」

心配してたとおり、バランスを崩して転げ落ちそうになった。

僕はソニックムーブで何とかルシエさんを助けることが出来た。

けど、制御に失敗して上まで駆け上がってしまい、もつれるような状態になってしまい、何とか僕がクッションになることでルシエさんは怪我をしなかった。

「……つつてて、大丈夫ですか?」

「いえ、ありがとうございます。助かりました……。あつ……」

「……あつ!! す、すみません!!」

「い、いえ……」

僕はルシエさんの胸に触れるような格好になってしまった。  
ルシエさんも恥ずかしいのか、顔が真っ赤になってしまった。

当たり前だよな……。

よく引っぱたかれなかったな僕……。

「キュウウウウ」

「フリードもごめんね。大丈夫だった……」

「キュクウウウ」

「竜の……子供……」

「あの、すみませんでした。エリオ・モンディアル三等陸士ですよね……」

「あつ、はい！」

そういうとかぶっていたフードを取り、僕に自己紹介をしてきた。

「初めまして、キャロル・ルシエ三等陸士であります。……それと、この子はフリードリッヒ……わたしの竜です」

「キユクウウウ」

これが後にライトニングのコンビとなる二人の出会いであった。

\* \* \*

翌日、ティアとスバルは本局に行つて、特別講習受けることになった。本局の武装隊は厳しいので有名だから、徹底的に叩き直されるだろう。俺もそつちでよかつたのだが、どうやら試験でプリムの性能に気づいて急遽変更されてしまった。

まあ、確かに今後のことを考えると、デバイスのことを再勉強し直した方が良いんだけど……。

—— ったく、なのはさんも人が悪いな。

そして俺も、メカニックマイスターであるマリエルさんの所に向かっていた。

今回の目的はデバイスの理論の再認識と、今後、ティア達が使うデバイスの改造プログラムのヒントを得る為だ。

マリエルさんなら、もつと効率の良い方法を教えてくれるかも知れないし、俺もプログラムをさらに進化させたいしな。

「初めまして、マリエル・アテンザです。君がファイル君？」

「はい、初めまして。ファイル・グリード二等陸士です。よろしくお願いします」

「そんなに硬くならなくて良いよ。マリールって呼んでね。私もそんなに気を張ってる方じゃないしね」

「わかりました。じゃ、マリールさんって呼ばせてもらいます」

どうやらこの人はすごく話しやすい人みたいだ。

メカニックマイスターっていったから、もつと気むずかしい人なのかと思ってたけど……………。

「……早速で悪いんだけど、君のデバイスを見せてくれる？」

俺は、待機状態のプリムをマリーさんに手渡した。

「……へええ、自分でここまでデバイスを作るなんて……。ちよつと構造を見ても良いかな？」

「……はい、その代わり個人端末でもらえますか」

俺はマリーさんにプリムの構造を教えて良いものか迷ったが、ティア達のデバイスを改良するのに協力してもらう為には、ある程度知ってもらう必要があるので、条件付きでマリーさんがデバイスの構造を見ることに許可した。

マリーさんはプリムを自分の端末にかけ、構造を見てももの凄く驚いていた。

「ちよ、ちよつと、何これ!! 明らかにBランクの持つデバイスじゃない。インテリジェントだけど、普通のものじゃなく、ユニゾンデバイスに近いAIが入ってるし、それにモードチェンジもあって、多方面にわたって使える物になっている……。でも、なによりも……」



「……………リミット、ブレイクですね」

「そう、何でこんな危険なものを組み込んでいるの!？」

「……………マリーさん、これから話すことは、絶対誰にも言わないでさい。機動六課の皆さんには時期を見て俺から話しますから……………」

「……………分かったわ」

俺はマリーさんに未来で起きたことを話すことにした。機動六課の設立、ジエイル・スカリエッティのこと、ゆりかごのこと、そして管理局が負けてその後のこと……………。

そして……………。

過去を変えるために、未来から戻ってきたことも……………。

話し終わった時はマリーさんは顔面が蒼白していた。

「……………何、それ……………嘘じゃないのよね」

「荒唐無稽な話と思いますが、事実なんです……………」

「……でも、それならつじつまも合うところもある。これに使っている技術は、今ではまだ完成していないものもある。その主なのがりミットブレイクシステム。これはまだ未完成のものなのよ」

「そうですね。これはなのはさんとフェイトさん、二人のデバイスにしか組み込んでませんものね。しかも……術者の負担が相当なもので、他の人には使えない」

「……そこまで知ってるのなら、君の言ってることは本当の事みたいね。だってこれは現段階ではトップシークレット扱いのことですもの。君のランクの人間が知っている事じゃない。それこそ実際に見てきてない限りは……」

「本当は、言わないつもりだったんです。局内にもスカリエツティに繋がっているのがいるので……」

実際、戦闘機人が局内に侵入してスパイ活動をしているはずだ。

ここで奴らに情報を渡すわけにはいかない。

「だから個人端末でつて事だったのね。局のものを使うと、そこから漏れてしまうものね」

「そういうことです。でも、まだリミットブレイクも完全ではないんです。これに組み

込んでいるのはあくまで使えるようになっていただけで、しかも術者への負担はなの  
さん達のよりは大きいんです。そして……魔力の少ない俺では使いこなせないんです」  
「……なるほど、君がなぜ話をしてくれたのか分かったわ。完成させたいのね、リミッ  
トブレイクを……」

「はい、残念ながら俺ではここまでが……限界でした」

俺の知識と、レジスタンス基地の設備ではここまでが限界だった。

「だけど、メカニックマイスターのマリーさんなら、これを参考にして、完全版のシステ  
ムを作れると思ったんです」

「……確かに、ここに組み込んでいるのをヒントにすれば、なのはさん達のも完成を早め  
られるし、欠点も見つけることが出来る……。いいわ、一緒に完成させましょう!!」  
「ありがとうございます!!」

「私も君の経験してきた未来はごめんだからね。でも、みんなにはいつかちゃんと言っ  
てよ。それと、もう一つ!!」

「君の本当の力がどのくらいあるのかは分からないけど、リミットブレイクを完成させ

ても、むやみに使わないこと!! いくら負担を減らせても危険なことには変わらないんだからね!!」

「はっ」

あれから一週間がたち、マリーさんと俺は、ティア達のデバイスプランとなのはさん達のリミットブレイクの改良に昼夜問わず続けていた。

同時進行だったので、ティア達のデバイスについては、俺が六課に合流してから、シャーリーさんと一緒に本人達のデータを取りながら完成させることになった。

一方リミットブレイクについては、何とか術者の負担を軽減させる方法が見つかったが、フレームとか最初から見直すことになり、その為最初からの作成となり、完成までにはもう少し時間が掛かりそうだ。

そして俺はティア達よりも一足早く返事をしたので、今日、六課に合流をすることになった。マリーさんとも一時お別れになる。

「じゃ、頑張つてね。無茶しちや駄目よ。なのはさん達にも、君が無茶しないようによく言っておくから……」

「少しは信用してくださいよ。マリーさん。それとまだ未来でのことは言わないでくださいね」

「それは大丈夫よ。でも、君が無理をすることは別よ!! この一週間殆ど睡眠取ってないでしょう!! いくらみんなの為だからって、君が倒れたんじや駄目でしょう!!」

「すみません……………」

「ともかく、私もなのはさん達のシステムが完成次第、組み込む為に、六課に合流するから……………」

「それじゃ、マリーさん、六課で……………」

「ええ、また会いましょう……………」

俺はマリーさんと別れ、自分のバイク『ロードサンダー』で機動六課隊舎へ向かった。車も良いんだけど、俺は風を感じる事が出来るバイクの方を好んでいる。

マリーさんがロードサンダーを時々いいじっていたみたいだけど、何か仕掛けがあるんじゃないだろうな。

「よう、きてくれたな、ファイル。ようこそ機動六課へ……………」

「いらつしやい、ファイル」

「よくきてくれたね、嬉しいよ」

隊舎に着いた俺を迎えてくれたのは八神部隊隊長達だった。

隊長陣勢揃いとは正直驚いた。しかもクラッカーのおまけ付きとは……。

たがが、一介の二等陸士に、これは……。

「あ、あは、あははは……。ど、どうなってんの……。これ？」

「驚いたやろ、マリーさんから連絡を受けてたんでな。ちよつと驚かせてみたんやけど

……」

「はやて。フィル、どん引きしているよ」

「……まあ、はやてちゃんつて、いつもこんな感じだから。フィルも慣れておいた方が良

しよ」

八神部隊長の性格は分かっていたつもりだったが、ここまではつちやけていたっけな。

「まあ、それはともかく来た早々で悪いんやけど、オリエンテーション後に部隊長室にき

てくれへんか」

「はい、分かりました」

俺はなのはさん達に機動六課の隊舎の案内をされた後、自分の部屋を紹介され、一旦荷物を置いた後、八神部隊長の待つ部隊長室に向かった。

「失礼します」

「あつ、ようきたな。まあ楽にしてな」

「あつ、はやてちゃん、ファイル」

「はやて、ファイル。もう始まつちやつてる……」

「いいや、これからやで。そこに座って話をしようか」

俺たちは部隊長室にあるソファーに腰をかけ、話をする事になった。

「いったい何の話なんだろう？」

「実は、ファイルのチーム所属何やけど……」

「はい、いったいどこになるんですか。ロングアーチですか、それとも……」

前は、戦闘適正より事務能力を買われてロングアーチ所属になったんだけど、今回はスバル達と一緒に試験も受けてるからな……。

「それなんやけど、フィルの能力やと本当なら、ロングアーチが向いてると思うんやけどなあ。メカニックマイスターが認める能力は欲しいし……」

「ランク試験で見た、あの指揮能力は無視できないよ。スターズかライトニングに入ってもらった方がよいよ」

「そうだね、スターズはティアナが入る予定だから、やっぱりライトニングかな……」

「でも、ティアナとスバルの暴走を止められるのはフィルだけなんだよね……」

「「はあああ……」」

「あ、あの……」

なんか、すごく嫌な予感がするのは気のせいか……。

「せやから、フィルは訓練及び戦闘時はスターズ5として動いてもらい、デバイス関係とかで協力してもらう時はロングアーチで働いてもらう」



「ちよつと待つてください!! 二足のわらじなんて無理ですよ!!」

「無理言ってるのは分かってるよ。でも、フォワードとしての能力は高いのに、それをそのままにしておくのは正直もつたいないと思う。元々、フォワードとしてスカウトをしたんだから……」

「なのは隊長……」

「でもな、機動六課にはデバイスマイスターと言われているのがシャーリーだけなんや。フィルのその力を新人達や私達に貸してほしいんや……」

「八神部隊長……」

「フィル、フィルの訓練は私達が責任を持つ。時間も出来るだけ訓練に集中できるようにするから……だからお願い。フィルの力をロングアーチに貸して欲しいの」

「フェイト隊長……」

「わかりました。その代わり、出来るだけフォワードとしての任務を優先にしてください。シャーリーさんもいるんだし、どうしようもない時だけは俺と一緒にやるようになります」

本来、俺の出る幕なんて無いんだから、デバイス関係はシャーリーさんに頑張ってもらわなくちゃならない。

俺が出来ることは、ほんの僅かなことなんだから――。

「ありがたいな、本当にありがたいな……」

「ありがたいファイル。引き受けてくれて……そして、ごめんね。こんな無茶な配置になっちゃって」

「八神部隊長、フェイト隊長、いいですよ。それに見越してたんでしよう。こうなることは……そうですよね、なのは隊長」

でなきや、わざわざマリーさんの所まで研修に行かせたりはしない。

そのくらいのは俺でも分かる。

「にやははは。わかっちゃった……?」

「わかりますよ。そうでなかったら、わざわざマリーさんの所に行かせたりしませんよね。スキルアップも目的だったんでしようけど、本来はフォワード達のデバイスをシャーリーさん達と一緒に、考えて欲しかったというのが狙いですよね」

「……正解だよ、ファイルはあの四人を正確な目で見る事が出来る。だから一緒に訓練して長所や短所、そして何を望んでいるのかを見ることが出来ると思う」

「そういったところをデバイスを作る時に、一緒にやって欲しいんや。それにマリリーさんから届いてるで。新人四人の新デバイスプラン……これファイルが考えたもんやろ。これだけあの四人の特徴を捉えてあるものを作るんやから、いまから新しく考えるより、これを採用した方がええってことや」

八神部隊長に見せられたのは、マリリーさんのところで考えていた、ティア達のデバイスの設計図だった。

マリリーさん、部隊長達に見せるなら先に言っておいてくれよ。

「これらのプランは、これから一緒に訓練をしてさらに煮詰めて行かなくてはなりませんけどね。あの四人の力はまだ未知数な所もありますし……」

「シャーリーには私からも行っておくよ。あんまりファイルに頼るなってね。さつきも言っただけど、フォワードなんだからね。ファイルは……」

「お願いしますフェイト隊長。デバイスの設計図はシャーリーさんに渡しておいてください。細かいデータはこれから取って、一緒に考えていく事にしますよ」

俺は部隊長室を後にし、今後のことを考えていると……。

《マスター、大変なことになってしまいましたね》

「ああ、まさかスターズとはな。フォワードになってティアと一緒に戦えるのは良いけど、デバイスのことと同時進行じゃ厳しいな」

《弱気にならないでください。新デバイスとリミットブレイクシステムについては、私も協力します。ですからマスターはティアナさん達のことを守ることに集中してください!!》

「ありがとうプリム。本当にたいした相棒だよ、お前は……」

正式運用まで三日と迫っていたが、その間もほかのスタッフが集結してきていた。その中にティアとスバルの姿もあった。どうやら六課に入ったみたいだな。

そして一週間が経ち、機動六課の正式な立ち上げの日がやってきた。

## 第3話 集結

いよいよ機動六課の正式運営日の日がやってきた。

ここからが本当の始まりなんだな——。

運営初日、六課全員食堂に集められ八神部隊長の就任の挨拶を聞いていた。

「……とまあ、長い挨拶は嫌われるんで以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

就任式が終わった後、俺たち五人はなのは隊長と共に廊下を歩いていった。

エリオやキャロとは二度目になるが、自己紹介とコールサインの確認をし会った。

なのは隊長がそのことを確認し終わった後、午後の訓練の説明をし始めた。

八神部隊長とフェイト隊長は首都クラナガンにレリックのことを説明に行ったとのことだった。

\* \* \*

「なのはさくらん」

「シャーリー」

わたしが訓練場で新人たちを待っていると、シャーリーがやってきた。

今日来てもらったのは新人たちのデータを取る為だ。

しばらくしてフワード五人がこっちにやってきて、事前に預かっていたデバイスを渡した。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているから、ちよつとだけ大事にしてね。それと、メカニックのシャーリーとファイルから一言ずつ……」

「え、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなはシャーリーと呼ぶのでよかったですらそう呼んでね。みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。デバイスについての相談があったら遠慮無く言ってね」

「はい」

「今更自己紹介をするのもおかしいが、スターズ5、兼、機動六課デバイスアドバイザーのフィル・グリードです。本来はスターズのフォワードなんですけど、諸事情でデバイスのアドバイザーもやっています。いずれ事情は話すが、シャーリーさんと一緒にお前らのデータを取ったりもするので、改めてよろしくな」

「ええっ!!」

新人のみんなは、フィルのことは知らされていなかったから驚きも倍増だよな。

わたしだって、正直フィルにはかなりの負担を掛けちゃってるって思ってるし――

「フィル、あんた本当にデバイスマスターになっちゃたの……」

「フィル、すごいね。前から器用だったけど、本当にデバイス関係の仕事をやるなんて……」

「ティア、言っておくがデバイスマスターじゃない、アドバイザーだ。本業はお前らと同じフォワードだ」

「そんなことありませんよ。フィルさんは……」

「シャーリーさん、それ以上は……」

「あつと、そうでした……」

シャーリーがああの手までしゃべってしまいそうなので、この辺でこの話は終わりにしないと――。

「それでもすごいですよ、ファイルさん」

「はい、わたしはそんな器用じゃないのでうらやましいです」

「エリオ、キャロ、器用貧乏って言葉を知ってるか？ 中途半端に出来ることがあると……こういう目に遭うぞ。お前らも……気をつけろよ」

「……まあまあ、無理を言ってるのはこつちとしても申し訳ないから、基本的にはフォワードがメインになるからね。訓練も進まなくなっちゃうからね」

本来の目的は、ファイルはフォワードでその力を引き出してあげることだから、その辺は安心してねファイル。

「まあ、シャーリーさんがあまり無茶な注文をしなければ、アドバイザーの仕事はないん



ですけどね……」

「……にや、にやははは、シャーリー、極力ファイルには頼らないでね。一応フォワードなんだから……」

「すみません、ファイルに聞くと、デバイスの問題が解決するので、つい聞いてしま  
うんです……」

シャーリーがファイルにデバイスのことで色々聞いてよりよくしてくれるのは助かる  
けど、あんまりファイルに負担を掛けさせないように一言は言っておかなきゃね。

更に今回は、フォワード陣のデバイスが設計してしまったから、どうしても  
ファイルが中心とならなきゃいけないところもある。

\* \* \*

「それじゃ早速訓練に入ろうか……」

「はい……」

「でも、ここですか……」

「ふふ、シャーリー」

「は〜い」

シャーリーさんは端末を展開すると、何らかの準備をし始めた。久しく忘れていたが、ここつて六課の訓練スペースだったな。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター……。ステージセット」

俺たちの目の前に小さな街が現れた。この訓練スペースは色々な状況に対応する為に作られたんだったな。ティア達も驚いていたが、正直俺もびっくりだ。

「よしつと。みんな聞こえる……」

「「「「はい」」」」

『じゃ、早速ターゲットを出していこうか。まずは軽く8体から』

『動作レベルC、攻撃制度はDつてどこですかね』

『うん』

シャーリーさんが端末でターゲットの設定をし、8体の訓練用のターゲットを出現させた。

『わたし達の仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理、その目的の為にわたし達が戦うことになる相手は………これ!! 自立行動型の魔導機械。これは近づくと攻撃してくるタイプね』

実は、訓練前なのはさんにはばらくの間、訓練でプリムを使うのは禁止されたのだ。したがって今使ってるのは、俺が作ったカートリッジ式簡易ストレージデバイスのガンタイプだった。

なのはさんは俺がプリムに頼っていることに気づき、自力を上げないとこれ以上成長しないということに気づいていた。

確かにこれでは今後の為にならないし、自分の魔力の封印を解き、それと使いこなせるように身体を作らないといけない。

『では、第1回模擬戦訓練。ミッション目的：行動するターゲットの破壊、又は捕獲。15分以内!!』

「『「はい!!」』」

『それでは、ミツシヨン……スタート!!』

なのはさんの開始の合図と同時に、スバルとエリオは前衛として、ティアとキャロがペアとなり、後方支援として左側のビルへ、俺も後方支援として右側のビルの屋上に向かった。

「……………くっ!! 何これ動き、早っ!!」

スバルがローラーを全開にしてターゲットを追いかけ、攻撃を仕掛けるがなかなか当たらず、同様にエリオの攻撃も避けられてしまう。

「だめだ、ふわふわ避けられて当たらない……」

「前衛二人、分散しすぎ!! ちよつとは後のことを考えて!!」

「エリオ、スバル!! 闇雲に攻撃するな。お前らがターゲットを分散させてどうするんだ!! 敵を引きつけるのも前衛の役目だぞ!!」

「あっ、はい!!」

「ごめん、ティア、フィールド!!」

ティアがアンカーガンに魔力を込め、シュートバレットの準備をし、そしてキャロに魔力強化をかけてもらいターゲットに放つ。

「シュート!!」

ティアの放ったシュートバレットは確実にとらえたかと思つたが――。

「バリア!?!」

バレットはターゲットの前でかき消されてしまった。

「違います……フィールド系!!」

「……AMFか」

『そう、ガジェットドローンにはちよつとやつかない性質があるの。攻撃魔力をかき消すアンチ・マジリングフィールド。通称AMF。普通の射撃は通用しないし……。それ

に……』

「くっ、くそ!!」

スバルが焦りでウイングロードを作り出して追いかけてしようとした。

「待てスバル、冷静に行動しろ!!」

俺の制止も聞かず追いかけてしまったが、次の瞬間……。

「え、あつ、き、きやああああ!!」

ウイングロードをガジェットドローンにかき消られてしまい、バランスを崩してビルにつっこんでしまった。

『飛翔や足場作りの、移動系魔法の発動も困難になる……。スバル、大丈夫?』

「な、何とか……」

スバルは多少のダメージはあるみたいが、なのはさんの通信に返事をしていたから大したことはないだろう。

とにかくあのガジェットを何とかして破壊しなきゃならない。俺たちは今持ちうる手札でどうするか、必死で考えた。

そして……。

「チビっ子。名前なんと言ったっけ……」

「キャラであります」

「キャラ、手持ちも魔法とそのチビ竜の技で、何とか出来そうなのある？」

「試してみたいのが、いくつか……」

「……あたしもある。フィル!!」

「……ああ、あのフィールドを貫通させるには、あれしかない!!」

AMFのフィールドを貫通させるには、並の魔法弾じゃ貫けない。

ならば、それ以上の貫通力を持たせれば!!

「やつぱり、あんたも同じ事を考えてたのね。…………スバル!!」

「オツケー、エリオ。あいつら逃がさないように先行して足止めできる!!」

「あ、えつと…………」

「ティア達が何か考えてるから時間稼ぎ!!」

「やってみます!!」

\* \* \*

「…………へえ、みんなよく走りますね」

「危なかつしくてドキドキだけどね…………。シャリー、デバイスのデータは採れそう」

「いいのが採れます。四機とも良い子に仕上げますよ」

「それにしても、フィルの持ってきたデバイスの設計図…………」

「ええ、フォワード陣の新デバイスのプラン。ハッキリ言っただけの一言です。あそこまで性格に合わせたものを作ってるなんて…………。本当に彼ってデバイスマスターじゃないんですか。自信なくしますよ、本当に…………」



わたしも最初に見た時は本当に驚いた。

これほど、みんなの特性に合わせたものを考えられてるんだから……。

「ファイルが言うには、ティアナについては実用可能なレベルらしいけど、残り三人のについてはデータが足りなくて未完成のところが多いんだって……。特に一番難しいのはスバルのだって言ってたよ」

「確かにスバルの魔法、ウイングロードは先天性のものだから、術式も普通のと違うんですね。今回のデータ収集でしっかり取り戻します」

「お願いね。ファイルもフォワードとデバイスの事と両立させるのは大変だからね。シャーリーが中心となって完成させて欲しいって言ってたよ」

「本当はファイルが中心になってくれる方が助かるんですけどね。でも基礎設計がしっかりしていますからね。絶対完成させますよ!! レイジングハートさんも協力してくださいね」

《All, right》

\* \* \*

俺たちはガジェットを撃滅する為に作戦を開始した。

この作戦は前衛の二人が、ちゃんと引きつけてくれるかにかかっている。

「いくよ、ストラダー。カートリッジロード!!」

《Explosion》

エリオはストラダーのカートリッジを一発ロードさせ、今自分が立っている橋を破壊してガジェットの進路を止め、上空に上げさせた。

「潰れてろ!!」

スバルは上空に上がったガジェットに魔力を込めた拳で力一杯殴りつける。でも、魔力が消されちゃうといまいち威力が出ない。

「そんなら、うりやあああああ!!」

マウントポジションになり、リボリバーナックルの回転力を使って1体破壊した。  
こいつら、物理的破壊なら通用する。

「連続行きます。フリード、ブラストフレア……ファイア!!」

フリードから放たれたブラストフレアはガジェット達をショートさせ、動きを止める  
ことに成功した。

そしてキャラも錬鉄召喚の詠唱を唱え――。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖……錬鉄召喚、  
アルケミックチェーン!!」

アルケミックチェーンは3体のガジェット達の動きをとらえ、活動を完全に停止させ  
た。

「こつちだつて射撃型。無効化されて、はいそうですかかって下がってたんじゃ、生き残れないのよ!!」

アンカーガンに、二発カートリッジをロードさせ、ティアは発射準備をした。けれど、こいつにはシュートバレットじゃ通用しない。

「スバル、あたしとファイルが、上からしとめるからそのまま追つて!!」

「おう!!」

「攻撃用の媒体を無効化されないよう膜状バリアでくるむ。フィールドを突き抜けるまで外殻のバリアが保てば……本命の弾はターゲットに届く!!」

\* \* \*

「……くつ、やっぱつらいな。プリムがないと……」

元々デバイスを強化して戦っていた俺だ。ある程度の能力はあっても、こうして自力で戦うのは得意ではない。こうして模擬戦をしてみても、改めてプリムに頼ってたんだなって感じた。

それしてもティアの奴、よくアンカーガンでヴァリアブルシユートを成功させやがったな。

この頃のティアはまだまだ半人前なのにな——。

「やってやるさ……。このくらいであきらめてたんじゃ、これからのことなんか出来やしない!!」

\* \* \*

二人が攻撃しようとしていた頃、ビルの屋上でその様子を見ていたわたしとシャーリーは……。

「魔力弾。AMFがあるのに……」

《いいえ、通用する方法がありません》

「うん……フィールド系の防御を突き抜ける多重弾殻射撃。AAランクのスキルなんだけどね……」

「AAランク!?!」

あのスキルは、射撃系では必修になってくるスキル。

ファイルは出来るかなって思っていたけど、まさかティアナまで出来るとは思ってなかったな。

\* \* \*

「固まれ……固まれ……」

ティアアも俺も外殻を固まらせるのに全神経を使っていた。今の俺たちじゃこれが精

一杯の攻撃だ。

特に俺はプリムの補助がないので制御が難しい。それに自力だけで発射するのは、これが初めてだ。

「うおおおおおおお!!」

外殻が固まり俺たちは引き金を引いた。

「ヴァリアブルシュート!!」

オレンジと白の魔力弾はガジェット達のAMFを貫き、残っていた4体を完全破壊した。

「ティア、フィール!!」

「……はあ……はあ……」

「ティア、フィール。ナイスだよ!! やったね、さすが!!」

「……スバル……うるさい……このくらい……当然よ……」

「……………はあ……………はあ……………何とか……………なったな……………」

ティアも俺も疲れ果ててその場に仰向けで倒れ込んだ。

しかし、ティアはやっぱ才能あるよ。

俺は未来での経験があつたから何とかなつたが、ティアは自分の努力でやつたんだからな。

以前は一緒にBランクは採つたけど、俺はA A +になるまで、ティアよりも相当時間がかかったんだよな。

あんな悲惨な経験じゃなかったら、あそこまで強くなかなかつたかもな——。

その後、15分の小休憩の後、訓練が再開し夕方まで続いた。初日にここまでやるか普通……………

俺たちは宿舎に戻る体力もなく、体力が戻ったのは夜になってからだだった。

やばい、完全にスペック負けしてるよ。これじゃ元のスペックに戻すのも時間がかかりそうだ。



こうして俺たちの機動六課での初日が終わった。

## 第4話 ファースト・アラート

ティア達が機動六課に来てから二週間がたった。

訓練の方も、更に厳しいものとなってきた俺たちはそれについて行くのに精一杯だった。

「はい、整列!!」

「「「「はあ……はあ……はあ……はあ……」」」」

「じゃ、本日の早朝訓練。ラスト一本。みんなまだ頑張れる?」

「「「「はい!!」」」」

「じゃ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハート」

《All, Right……Axel Shooter》

なのはさんの周りに11個のアクセルシューターが現れる。  
相変わらずのハイスペックぶりだ。

「わたしの攻撃を5分間被弾無しで回避し続けるか、わたしにクリーンヒットを決めればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう」  
「「「はい!!」」」

そうは言うが、正直ボロボロの俺たちじや5分間も回避し続けるのは厳しい。

「みんな、今の状態から考えると、回避の策を取るのには賢明じゃない。そうなるかと残されてるのは……」

「そうね、正直5分間もしのぎきれない自信はないわ」

「あたしも無い」

「同じくです」

そうだろうな……。

だったら取れる手はただ一つ!!

「じゃ、何とか一発入れるしかないな。やれるなキャロ」

「はい」

「ようし、いくよエリオ!!」

「はい、スバルさん!!」

スバルはリボリバーナツクルを、エリオはストラダーダを構え、臨戦体勢になった。

「準備はオツケーだね。それじゃ、レディ……ゴー!!」

なのはさんの右腕が下ろされ、アクセルシューターの大群が俺たちに襲ってきた。

「全員撤退、回避!! 2分以内に決めるわよ!!」

「「「おう!!」」」

ティアの合図で俺たちは散開し、スバルはウイングロードでなのはさんの背後に回った。

「うおおおおおお」

ティアと俺はビルの中に移り、シユートバレットでなのはさんを狙った。

「……っ、アクセル!!」

《Snipe·Shot》

三つのアクセルシューターが俺たちに向かってきた。しかし、命中したのは俺たちが作ったシルエット。

「……シルエット。やるね、ティアナ、ファイル」

そして上空からスバルが、本命の攻撃を仕掛けた。

「うりやあああああああ」

なのはさんはラウンドシールドを展開し、スバルの拳を防ぐ。

スバルはなお突破を試みるが、強固な防御力を誇っていて突破できなかった。

さらに、アクセルシューターがスバルに襲いかかってきた。

スバルはローラーでバックし、何とか直撃は避けた。

「うん、良い反応……」

「う、う、うわあああああ」

しかし、バランスを崩してしまい、後退を余儀なくされてしまった。  
さらに、シューターがスバルを追ってきていた。

「スバル、バカ!! 危ないでしょ!!」

「ゴメン……」

「待ってなさい、今撃ち落とすから……」

ティアアがアンカーガンで、撃ち落とそうとしたその時……。

ガチャ……。

「えっ!?!」

引き金を引いたが、アンカーガンが作動不良を起こしてしまい魔力弾が撃てなかった。

「うわあああ、ティア〜。 援護〜」

「この肝心な時に!!」

「替われ。俺がやる!!」

ティアの代わりに、俺が援護用のシユートバレットを撃つ。  
だが……。

「くそ!! 駄目だ。俺のも、もう使い物にならない!!」

鈍い音とともに、引き金が完全にいかれてしまった。

やつぱり、突貫作業で作ったアンカーガンじゃこれが限界か!?

何とかスバルの援護は出来たが、これじゃ俺もティアも戦闘続行は無理だ。

何とか決めてくれよ。エリオ!!

\* \* \*

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に……：駆け抜ける力を」

《Boost Up ……Acceleration》

僕はキャロの補助魔法ブーストアップ・アクセラレイションで、ストラーダの機動力をアップしてもらい、なのはさんに仕掛けるチャンスを狙っていた。今の僕たちじゃ、これしか手がない。

だからこの一撃に全てをかける。

「あの、かなり加速が付いちやうから気をつけて……」

「大丈夫!!。スピードだけが取り柄だから……いくよストラーダ!!」

ストラーダのバーニアが出力が上がり、後はタイミングを見てなのはさんに仕掛けるのみ!!



なのはさんはフィルさんの誘導弾とフリードのブラストレイ避け、僕に向かってきた。

「エリオ、気付かれたぞ!! 今しかない。やれえええええ」

「いつけええええええ」

《Speer ang r i f f》

「てやああああああ」

僕のストラードとなのはさんが空中で激突し、黒煙を上げていた。僕は何とか近くのビルに着地したが……。

「エリオ!!」

「外した?」

「……どうだろうな」

黒煙が収まり、なのはさんの姿が見え始めた。

《Mission complete》

「おみごと、ミッション・コンプリート」

「本当ですか……」

「ほら、バリアを抜いてジャケットまで通ったよ」

なのはさんは自分の左胸にある、焦げた部分を指しエリオの攻撃が通ったことを言った。

俺たちの作戦がうまくいったんだ。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

「「「はい!!」」」」

なのはさんも地上に降りてきて、バリアジャケットを解いて僕たちの所にやってきた。

\* \* \*

「さて、みんなもチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

「「「ありがとうございます!!」」」」

「ティアナとフィルの指揮も筋が通ってきたよ。二人とも指揮官訓練受けてみる……」

「い、いやあ……。あの……。戦闘訓練だけで一杯いっぱいです……」

「お、俺もティアと同じです……。それに指揮官って柄じゃありませんよ……」

ティアならともかく、俺はそんな柄じゃない。

陰で、みんなの助けをする役割の方が性に合う。

「うふふふふ……二人とも謙遜しちやつてさあ〜」

俺たちが和んだ空気していると、フリードが何かに気付いたみたいな様子だった。

「キュク……キュクウウウウ？」

「ん、フリードどうしたの？」

「何か焦げ臭いような……」

「あつ、スバル。あんたのローラー」

テイアの声で俺たちはスバルのローラーを見ると、煙が吹き出していた。  
訓練で酷使しすぎたせいだ。

「あつちやああああ、しまった……無茶させちゃった」

「オーバーヒートかな……。後でメンテスタッフに見てもらおう」

「はい……」

「テイアナのアンカーガンとフィルのデバイスも結構厳しい……」

「はい……騙し騙しです……」

テイアのアンカーガンは、訓練学校時代から使っていたからな。  
むしろ良く持った方だ――。

「俺のは完全にアウトです。これじゃ新しく作った方が早いです」

「……みんな、訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな

……」

「「新……デバイス？」」

訓練が終わった俺たちは、一旦シャワーを浴びに行く為に寮に戻ることになった。

「じゃ、一旦寮でシャワーを浴びて、着替えてロビーに集まろうか」

「「「はい」」」

「ん、あの車って……」

俺たちが寮へ向かう途中、黒いスポーツカーが俺たちの前で止まった。中にはフェイトさんと八神部隊長が乗っていた。

「すごい、これフェイト隊長の車だったんですか」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

「みんな練習の方はどないよ……」

「あ……ああ……」

「頑張ってます……」

スバルが返答に困っていたが、ティアナが代わりに答えた。

「エリオ、キャラゴめんね。私は二人の隊長なのに、あまり見てあげられなくて……………」  
「あ…………。いえ、そんな…………」

「大丈夫です…………」

エリオもキャラゴも、フエイトさんに心配させないようにしているんだろうな。  
もう少し子供らしく色々と言っても良いんじゃないか…………。

「五人とも良い感じで慣れてきているよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「そうか、それは頼もしいな」

「二人はどこかにお出かけ…………」

「ちよつと6番ポートまで…………」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなと一緒に食べようか」

「…………は…………」

「ほんならなく」

\* \* \*

なのは達と別れ、はやてと私は、はやてを聖王教会本部に送る為に向かっていた。

「聖王騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官。カリム・グラシアさんか……私はお会いしたことがないんだけど……」

「そやったね……」

「はやてはいつから……」

「私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばつかのころのはずやから……。8年くらい前かな」

「そつか……」

もう、そんなに経つんだね。

ここまで来るのに色々あつたし——。

「カリムと私は信じてるものも、立場も、やるべき事も全然ちやうんやけど……。今回は二人の目的が一致したから……。そもそも六課の立ち上げ、実質的などころをやつてくれたんは、ほとんどカリムなんよ」

「そうなんだ……」

「おかげで私は人材集めの方に集中できた」

「信頼できる上司って感じ……」

「うくん。仕事や能力は凄いんやけど……。あんまり上司って感じはせえへんな。どつちかっていうと、お姉ちゃんって感じや」

「ふふ、そつか……」

「まあ、レリック事件が一段落したらちやんと紹介するよ。きつと気が合うよ。フエイトちゃんもなのはちやんも……」

「うん、楽しみにしている……」

\* \* \*



訓練がおわり、あたし達はシャワー室で汗を流している。こうしていると、身体の疲れが少しは取れるわね。

「えっと、スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃、それにフィルさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね……」

「うん、そうだよ」

「訓練校でも、前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」

「あたしは魔法がベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし……ティアとフィルもカートリッジシステムが使いたいいからって」

「で、そうなる自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね……」

目立つと言うことは、陰湿ないじめにも遭いやすいと言うことだった。

ずいぶんあたしもファイルもやられたけど、あたし達はそれに負けなかった。

でも、それはあいつが一緒にいてくれたからだと思う。

「あつ、もしかしてそれで、スバルさん達、お友達になったんですか……」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って……」

「あははは……」

「でも、デバイスは、ティアよりもファイルの方が目立ってたよね」

「あいつのデバイスは素人のレベルじゃないわ。それこそ資格持ちの人が作るものよ……」

実際ファイルは、訓練校時代でもデバイスマイスターへの進路を進められていたくらいだしね。

「それに、以前よりさらに改良していたね。プリム……」

「あたしが必死で作ったアンカーガンと同じものだって、今回の訓練に間に合わせる為に、2日で作ったしね」

「ええつ、あの銃をたつたそれだけの日にちで……」

「……正直へこんだわよ。あたしがこれを、どれだけ苦労して作ったか……。それをたつた2日で作られたんじゃ……」

あいつの技術力は認めるけど、さすがにプライドが傷つくわよ。

「しようがないよ。ファイルはその辺が得意分野なんだから……」

「まあ、ファイルにはあたしも、デバイスの事じゃ色々参考になったしね……」

「やつぱり、ファイルさんって凄いですね……」

「まあ、あんまりファイル達を待たせてもまずいし、そろそろ出ようか」

「そうね……」

「はい」

あたし達は着替えに戻り、先に上がっていたファイル達と合流しロビーに向かった。

\* \* \*

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしゃいました」

「早かったのね。私の部屋に来てもらってちようだい」

「はい」

「それから、お茶を二つ……ファーストリーの良いところをミルクと砂糖付きでね」

「畏まりました」

「よしつと……」

私は重厚な扉をノックすると――。

「どうぞ……」

扉を開けると、そこにいたのは……。

「カリム、久しぶりや」

「はやて、いらっしやい」

私とカリムは久しぶりの再会をし、その後少し雑談を交えて、部隊の話になっていった。

「ごめんな。すっかりご無沙汰してもうて……」

「気にしないで。部隊の方は順調みたいね」

「ふふ、カリムのおかげや」

「うふふ、そういうことにしておくと、色々お願いもしやすいかな」

「なんや、今日会って話すのはお願い方面か」

「……」

カリムは雰囲気が変わり、カーテンを閉めガジエットの資料をいくつか出した。

「これ……ガジエット……新型？」

「今までのI型のほかに二種類。戦闘性能はまだ不明だけど……これ、III型は割と大型ね」

「本局にはまだ正式報告はまだしていないわ。監査役のクロノ提督には、さわりだけお伝えしたんだけど……」

「ッ、これは!!」

私はカリムの出したデータの中にあつた、ある物体に気付き驚いた。

「それが今日の本題。一昨日付で、ミッドチルダに運び込まれた不審貨物……」

「……レリックやね」

「おそらく、間違いないわ。Ⅱ型とⅢ型が発見されたのも昨日からだし……」

「ガジェットがレリックを見つけ出す予想時間は……」

「調査では早ければ今日明日……」

カリムの話聞いていて、私はある疑問が浮かんだ。

「せやけどおかしいな。レリックが出てくるのが、ちよう早いような……」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか……」

「……」

「レリック事件も、その後起こる事件も対処を失敗するわけには……いかないもの」

「……」

私は画面を操作すると、情報画面を閉じ、カーテンをあけた。

「はやて?」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。カリムが力を貸してくれておかげで、部隊はいつでも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。予想外の緊急事態にも、ちゃんと出来る下地が出来ている。そやから大丈夫!!」

\* \* \*

「うわあ……。これが……」

「あたしたちの新デバイス……ですか……」

俺たちの前に4機の新デバイスがあり、まるで持ち主を待っていたかのようなだった。

「そうです。設計主任はフィルと私。協力者は、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

「ティアナのはクロスミラージュ、スバルのはマツハキャリバー。エリオとキャロのは

今まで使っていたのと同じ名前だよ……」

ティア達がデバイスを見てみると、エリオとキャロがあることに気付く。

「あれ？ ストラードとケリユケイオンは変化無しかな……」

「うん、そうなのかな？」

「違います!! 変化無しは外見だけですよ」

「リインさん……」

「はいです」

エリオとキャロの前にリイン曹長が現れ、ストラードやケリユケイオンの事を話し始めた。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから、感触に慣れてもらう為に、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで最低限……」

「……本当に」



「みんなが扱うことになる4機は、六課の前線メンバーとフィルとメカニックススタッフ  
が、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に併せて、そして、エリオ  
やキャロ、スバルにティアナ、個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体です」

そういうとリイン曹長は4機のデバイスを宙に浮かせ、さらにデバイスの存在意義の  
ことを話してくれた。

「この子達はみんなまだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められて、  
いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

そしてリイン曹長はティア達に、それぞれデバイスを渡してくれた。

「だから唯の道具や武器と思わないで、大切に。だけど性能の限界までおもいつきり、全  
開まで使ってあげて欲しいです」

「そういえばさつき、フィルが設計主任になったって言ってたけど?」

「そうだ!! さつきは聞き流してしまっただけど、いつ俺が設計主任になったんだ!!」

「だって、基礎設計はフィルがやったものでしょう。私はそれを元に完成させたんだか

ら……」

その事はティア達には言わない約束でしたよね。  
あくまでアドバイザーとして登録しているんだから!!

「「「ええつつつ!!」」」

「フィルがあたし達のデバイスを設計したって本当なんだ!!」

「じゃ、訓練を一緒にしながら、ずっとデータ取りも並行して……」

「……フィルさん」

「フィル。あんた本当に……。あたし達のデバイスまで……」

ティアが申し訳ない気持ちが一杯なのか、ずっと下にうつむいたままだった。  
俺はそんな顔が見たくてやったんじゃない。

——だから言いたくなかったんだ。

「前の部隊で一緒にやっている時、約束したろ。今使っているデバイスで対応できなく

なったら、いつか俺が新しく考えてやるって……。まあ余計なことしちゃったかもしれないがな……」

「……………そんなことないわよ。あんただって、あたし達と一緒に訓練をしていて、身体はボロボロのはずなのに……」

「俺は今、自分が出れることを精一杯やっただけだ。俺はティアのそんな顔が見たくてやったんじゃないんだ。だから……」

「あつ……」

俺はクロスミラーージュを握っているティアの手に、自分の手を添えて、出来るだけ優しく言った。

「……………だから、そんな風に思わないでくれ。俺はティア達が生きてかえってくる為なら、どんなことだってする。これもその一つなんだ……」

「だけど……………」

「だったら、俺たちが作ったそのデバイスを大切に、そして使いこなしてくれ。きつとクロスミラーージュもそれを望んでいるから……………」

「……………うん」

それこそが、俺が本当に望むこと。  
ティア達が生きて帰ってくることに。  
それだけでいいんだ……。

「あのくあたし達もいるんですけど……」

「あつ……」

「まったくファイルって時々、素でそういうことを、恥ずかしげもなく言うよね……。でも、本当にありがとう、ファイル……」

「……………礼ならシャーリーさんに言ってくれ。俺はウイングロードの解析が出来なくて、お前のデバイスは頓挫していたんだからな……」

「そういったところ、相変わらず素直じゃないよね。ファイルって……。やっぱ似たもの同士だよ。お二人さん」

「スバル!!」

「「はははははっ」「」」

スバルのおかげで、こんな調子になってしまったが、これらのデバイスは俺とシャー

リーさん達が、全能力を使って完成させたんだ。決して足手まといにはならないはずだ。

「ごめん、ごめん。おまたせ……」

「なのはさん!!」

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから機能説明をしようかと……」

「そう、すぐに使える状態なんだよね」

「はいです!!」

シャーリーさんは四機のデバイスの画像を出し、説明を始めた。

実はこのデバイス達はとても高性能な為、ある仕掛けをしてあるのだ。

「まず、その子達みんな、何段階かに分けて出力リミッターをかけてあるの。一番最初の段階だと、そんなにビククリするほどパワーが出る訳じゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、わたしやフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから……」

「ちようど、一緒にレベルアップしていく感じですね」

「あつ、出力リミッターって言うと、なのはさん達にもかかっていますよね」

「ああ……。わたし達はデバイスだけでなく、本人にもかかっているんだけどね」

「「ええっ」」

「能力限定って言つて、うちの隊長と副隊長はみんなだよ。わたしとフェイト隊長、シグ

ナム副隊長にヴィータ副隊長」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

「えくと……」

「ほら、部隊ごとに保有できる、魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない」

「あ……。え……。そうですね……」

「一つの部隊で優秀な魔導師をたくさん保有したい場合は、そこに上手く収まるように

魔力の出力リミッターをかけるんですよ」

「まあ……。裏技っちゃあ……。裏技なんだけどね」

そう、管理局では一つの部隊が保有できる魔導師の総合ランクが決まっている。

そのせいで、こういった事が起こっているのだ。

「うちの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウン、隊長達は大体2ランクダウンかな」  
「4つ!! 八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としてるんですか」

「はやてちゃんも色々苦労しているです……」

「なのはさんは……」

「わたしは元々S+だったから、2、5ランクダウンでAA。だからもうすぐ、一人でみんなの相手をするのは辛くなってくるかな」

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないとリミッター解除が出来ないですし……。許可は滅多なことでは出せないそうです」

「……そうだったんですね」

リミッター、か……。

それで本当に大丈夫なのか？

非常時にそんな手続きをやってられるのか？

「まあ、隊長達の話は心の片隅くらいでいいよ。今はみんなのデバイスの事……」

「[[「はー……」]]」

「……」

「ファイル？」

「い、いや……何でもない……」

「そう……」

シャーリーさんがみんなのデバイスのデータを表示し、説明を始めた。

「新型はみんなの訓練データを基準に調整されているから、いきなり実戦で使っても違和感はないと思うんだけど……」

「午後の訓練の時にテストでもして、微調整をしようか」

「遠隔調整も出来ますから、手間は殆どかからないと思いますよ」

「ふう、便利だよね最近は。レイジングハートは遠隔調整が出来ないから……」

「俺のプリムのそうですよ。最も普段から自分で調整してますから、遠隔機能は必要ないんですけどね……」

「あつ、そうそう。スバルのリボルバーナックルとのシンクロもうまくいったから、収納



機能と瞬間装着の機能が付いてるぞ」

「本当!! ありがとうファイル、シャーリーさん」

\* \* \*

はやてを送った私は、首都高速を全速で飛ばしながら、グリフィスと通信をしながら、公安地区の捜査部に向かっていった。

「……うん、はやては向こうに送ったから。そろそろ会談が始まっているんじゃないかな?」

「はい、お疲れ様です」

「私はこの後、公安地区の捜査部に寄つていこうと思うんだけど、そつちは何か急ぎの用事とかあるかな?」

「いえ、こちらは大丈夫です。副隊長お二人は交替部隊と一緒に出勤中ですが、なのはさんが隊舎にいらつしやいますので……」

「そう……。つ、えっ!？」

私が通信を切ろうとして時、第一級警戒態勢のアラートが鳴った。  
一体何があつたんだろう？

\* \* \*

「このアラートって……」

「一級警戒態勢!？」

「グリフィスくん!!」

「はい、教会本部から出動要請です!!」

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて!!」

聖王教会に行っていた八神部隊長から通信が入った。

同時にフェイト隊長とも通信回線が開いていた。

「こちらフェイト、状況は……」

「教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった。場所は、エイリム山岳丘陵地帯。対象は山岳リニアレールで移動中」

「移動中って!?!」

「まさか!!」

「……そのまさかや。内部に進入したガジェットで、車両の制御が奪われている……。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしれない」

やっばりリニアレールを狙ってきたか。

どうやら、歴史は繰り返されるみたいだな。

「いきなりハードな初出動や……。なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか?」

「わたしはいつでも!!」

「私も!!」

「スバル、エリオ、キャロ、ティアナ、フィル。みんなもオツケーか!!」

「『はい!!』」

「よし、良い返事や。シフトはAー3。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制」

「はー!!」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮!!」

「うん!!」

「ほんなら、機動六課フォワード部隊……出動!!」

「『はい!!』」

「……了解、みんなは先行して。私もすぐに追いかける!!」

「うん」

フェイトさん、出来るだけ早くお願いします。

それまで俺たちも全力で食い止めますから――。

\* \* \*

「シャツハ、はやてを送ってあげて。機動六課の隊舎まで最速で!!」  
「畏まりました、騎士カリム!!」

シャツハは、はやてを送る為、急いで準備をしていた。

「聖堂の裏に出て。シャツハが待ってる……」

「おおきにな、カリム。今日のお茶おいしかったよ……」

「ふふ……」

「ほんなら、行つてきます!!」

\* \* \*

「急いでください!! 出動準備は出来てます!!」

ヴァイス陸曹がすでにヘリの準備をしていて、俺達は急いで乗り込む。全員が乗り込んだのを確認し、ヘリは全速力で現場に向かって飛び立った。

「新デバイスでのぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね……」  
「はい……」

「頑張ります……」

「エリオもキャロ、それにフリードもしっかりですよ」

「はい!!」

「キュクウウウウ」

「危ない時はわたしやフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう」

「」「はい!!」「」

いよいよ戻ってきての初実戦だ。ここでしくじらないようにしないと……。。

俺たちはそれぞれの不安や思いを持ち、現場である山岳地帯に向かっていった。

## 第5話 自分の力、大切なもの

新暦71年 4月

「アルザスの竜召喚の娘。ルシエの末裔、キャロよ……」

「わずか6歳にして、白銀の飛竜を従い、黒き炎竜の加護を受けた……お前は、誠にすばらしき竜召喚師よ」

「じやが、強すぎる力は災いと争いしか生まれ……」

「……!!」

「すまぬな……。お前をこれ以上、この里に置くわけには行かぬのじや……」

(竜召喚は危険な力……人を傷つける怖い力……)

―現在―

「問題の貨物車両速度70を維持、已然進行中です」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……………」

「時間の問題か……………」

「!! アルト、ルキノ、広域スキャン。サーチャーを空へ!!」

サーチャーを空にかけてみると、大量のガジェット反応があり、その数に驚いた。

「ガジェット反応!! 空から!!」

「航空型、現地観測隊を補足!!」

\* \* \*

「こちらフェイト、グリフィス。こちらは現在パーキングに到着。車を止めて現場に向



かうから、飛行許可をお願い……」

「了解、市街地都市飛行。承認します」

パーキングに止め、車から降りた私は、バルディッシュを取り出し、セットアップの準備をする。

《Get、set》

「うん……。バルディッシュ・アサルト……セットアップ!!」

《Set up……Berrier Jacket、Impulse Form》

「ライトニング1、フェイト・テストアロツサ・ハラオウン。行きます!!」

バリアジャケットを装着した私は、飛行魔法で全速力で現場に向かった。

\* \* \*

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる!!」

「ウツス、なのはさんお願いします!!」

「じゃ、ちよつと出てくるけど、みんなも頑張つてズバツとやつつけちゃおう」

「「はい!!」」

「……ん?」

フオワード陣は気合い入っていたが、一人だけキャロが下をうつつむいていた。

「キャロ、大丈夫か……」

「は、はい!! 大丈夫です」

正直、とてもそうは見えない。

多分、未来の世界でキャロから聞いた、故郷を追い出された事を思い出しているのだろう。

俺は、そつとキャロの頭に手を置き――。

「……キャロ、自分の力が怖いか?」

「!!」

「やっぱりか……」

\* \* \*

ファイルさんに自分の心の内を読まれてしまったわたしは、驚くしかなかった。そしてファイルさんは真剣な顔をして語り始めた。

「なあ、キャロ……。俺は力って奴は、自分の心……。そのものだと思うんだ。どんなに否定したって、その力はずっと自分に付いてくる物だからな」

「自分の……。心……。そのもの……。ですか？」

「ああ、俺も自分の力が怖いって思うことはある。使い方を間違えてしまえば、例えばBランクの力だって、殺してしまうことも可能だからな」

「ファイル……。ちよつとあんた!!」

「黙って聞いてくれないか……。これはキャロにとつても大事なことなんだ」

「……」

ファイルさんの真剣な表情にティアさんは何も言えなくなってしまうた。

あんな表情は初めて見ました……。

スバルさん達もなのはさんもりイン曹長も、そしてヴァイス陸曹まで黙ってファイルさんの話を聞いてます。

「スバル、お前には言ったことがあるな。不用意に魔法を使うと、二次災害を作ってしまう。そして使う時は最大限注意して使えって」

「うん、それは昇格試験の時に聞いたよ……」

「……………そういうことだ。非殺傷という言葉に甘えるな。例え非殺傷でも使い方を間違えれば、人が死ぬんだ!!」

「……………っ!!」

\* \* \*

わたしは唇をかんで黙るしかなかった。

昔わたしが里を追い出されたのは、仕方なかったのか——。

「でもな、自分の力ならば、ほかの誰でもない自分が制御できるんだ……」

「えっ……？」

「本当に怖いのは強大な力じゃない。小さい力だつてコントロールが出来ていなかったら、そっちの方が怖いんだ。たとえば……」

突然ファイルさんは、懐からナイフを取り出し、自分の首へ刃を向け——。

「こうやって刃をむけたつて、自分でやってるんだから怖くないだろ。力はこれと同じだ……」

「だから、自分の力を受け入れろ!! そうすることで一つ成長するし、自分の為になるんだ」

「!!」

ファイルさんの言葉に何かが吹っ切れたような気がした。確かに優しくされることは

嬉しい。

でも、今のように厳しく言ってくれる人はいなかった。

そして――。

フィルさんはわたしの頬に手を添えて――。

「きついことを言ってゴメンな。なのはさんなら、もっと上手いことが言えるんだけどな……………」

「フィルさん……………」

そんなことない――。

フィルさんの優しさは、すぐく伝わってきます。

不器用だけど、それ以上に本当に私のことを思ってくれてることが――。

\* \* \*

「なのはさん」

「なに、ファイル……」

「今回俺はライトニングと行動します。スターズにはティアがいますし、それにこんな事を言った手前、キャロのことほっとくわけにはいかないでしょう」

「分かったよ。ファイルは今回はライトニングと行動して。でも、さっきの話ビックリしたよ……」

「すみません……。もう少し言い方があったんですけど……」

「ううん、本当はわたしがああいった憎まれ役をやらなくちゃいけないのに、ごめんね……」

こう言ったことをフォローするのが教導官の役なのに、それをすることが出来なかった。

もつとフォワード達やファイルのことをちゃんと分かってあげなきや——。

「いえ、これ以上は俺だと難しいですので、後のフォローはお願いしますね。なのはさ

ん」

「了解、後は任せて……。ヴァイス君ハッチを開いて!!」

「わかりやした!!」

《Main Hatch open》

気持ちを切り替え、わたしは新人達の為に、先陣を切ってヘリから飛び降り、レイジングハートを起動させた。

《Standby, Ready》

「レイジングハート・エクセリオン……セットアップ!!」

《Berrier Jacket, Aggressive mode》

「スターズー、高町なのは。行きます!!」

バリアジャケットを装着したわたしは、アクセルフィンを展開し高速飛行をしガジェット達を殲滅に向かった。

\* \* \*



なのはさんが出陣した後、ヘリ内でリイン曹長が今回のミッションの説明をしていました。

「任務は二つ。ガジェット達を逃走させず、全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること。ですから……」

「スターズのティアナとスバル、ライトニングの二人とフィルの分隊に分かれて、ガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです」

「レリックはここ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニングのどちらか先に付いた方が、レリックを確保するですよ」

「「「はいつ!!」」」」

「で……私も現場に降りて、管制を担当するです」

\* \* \*

「スターズ1、ライトニング1、エンゲージ!!」

「こっちの空域は二人で抑える。新人達の方フォローお願い……」

「了解」

「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん……」

「うん、なのは……」

こっちの動きに気付いたのか、ガジエツトの大群がこっちに向かってきていた。

《Axel Shooter》

《Haken Saber》

私達はそれぞれ迎撃し、空域静圧を行っていた。

しかし、ガジエツトはいくら倒してもなかなか減らず、完全制圧には時間がかかりそうだ。

\* \* \*

「さーて新人ども、隊長さん達が空を押さえてくれているおかげで、安全無事に降下ポイ

ントに到着だ。…………準備は良いか!!」  
「「「はい!!」」」

俺たちはまず、スターズの二人から降下をし、その後エリオとキャロ、そして俺が最後に降下することになった。

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「行きます!!」

「……………いくよ、マツハキヤリバー」

「……………お願いね、クロスミラージュ」

「セットアップ!!」

S t a n d b y , R e a d y

バリアジャケットを装着したティア達は、浮遊魔法を使ってリニアレールの最前車両に着地する。

どうやらクロスミラージュもマツハキヤリバーも、ちゃんとサポート出来てるみたい

だな。

「次、ライトニングとフィル!! ……チビども気いつけてな」

「はい!!」

二人が飛び降りようとしていたが、キャラがまだ緊張しているみたいだったので、俺はエリオの肩をぽんと叩き、キャラに聞こえない程度の声で話した。

「エリオ、キャラと手をつないで降りてやれ。最初の実戦で緊張しているみたいだからな。緊張してるのはお前も一緒だけど、男の子なんだから、しっかりキャラのこと見てやれよ」

「は、はい!!」

「キャラ、一緒に降りようか……」

「……うん!!」

エリオはキャラの手を握り、一緒に降りることにした。

キャラのことしつかり守ってやれよ。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャロル・ルシエとフリードリヒ」

「行きます!!」

「ストラダー」

「ケリュケイオン」

「セットアップ!!」

同じようにバリアジャケットを装着し、リニアレールの最後尾に着地した。

四人が着地したのを確認し、俺も降下を始めようとしたその時……。

「……ファイル」

「何ですか、ヴァイス陸曹」

「……あいつらのこと……頼むな……」

いつもの飄々としたヴァイス陸曹の表情とは違う。

本気で俺にあいつらのことを頼んでるんだ。

「……はい!!」

「スターズ5、ファイル・グリード……行きます!!」

「久しぶりの戦闘だ。頼むぜ相棒……」

《任せてください!! 思いつきり暴れてやりましょう》

「ああ、行くぜ!! プリム……セットアップ!!」

《Stand by, Ready》

俺もバリアジャケットを装着し、ライトニングの待つ最後尾に着地した。

「あ、あれ……このジャケットって……?」

「……もしかして?」

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしているですよ。ファイルのは独自に作ってますけど……」

「ちよつと癖はあるが、高性能に仕上げたつもりだ。まあ、俺のはこの方が使いやすいから、このデザインを採用しているけれどな」

俺が装着しているのは、執務官が使っているバリアジャケットをベースに、八神部長のバリアジャケットの腰の所にある、金属パーツをつけた物と考えてもらったら良いと思う。

「リイン曹長……」

「ファイルさん……」

スバル達の疑問に、スターズにはリイン曹長が、ライトニングには俺が答えた。

「へえ……」

「……はっ、スバル、感激は後!!」

スバル達の前に車両内から、ガジェットがビームを放ってきた。

間一髪それを躲すが、ガジェットはその一機だけじゃなかった。

何機か屋根を突き破って、出てきそうな状態であった。

D·r·i·v·e·I·g·n·i·t·i·o·n

それぞれのデバイスが起動し、ティアはクロスミラーージュを、出てこようとするガジェットに向けていた。

《Variable Barret》

「シュート!!」

ティアの放ったヴァリアブルバレットは、AMFを突き抜けてガジェットに命中し破壊する。

「うおおおおお」

スバルもガジェットが開けた穴から突入し、リボルバーナックルで一体のガジェットを破壊した。

その後、マツハキヤリバーで内部を進んでいったが、リボルバーシュートでガジェットを破壊した時、屋根も破壊してしまい、その勢いでスバルも外に放り出されてしまった。



「う、うわああああ!!」

《Wing Road》

マツハキヤリバーがウイングロードを発動し、スバルは何とか別の車両の屋根に着地することが出来た。

「うわあ……マツハキヤリバー、お前つて、もしかしてかなり凄い……。加速とか、グリップコントロールとか……それにウイングロードまで……」

《私はあなたをより強く、より速く、走らせる為に作り出されましたから》

「……うん!! でも、マツハキヤリバーはAIとはいえ心があるんでしよう。だったら、ちよつと言ひ換えよう。……お前はね、あたしと一緒に走る為に生まれてきたんだよ」

《同じ意味に感じます》

「違うんだよ、いろいろと……」

《考えておきます》

「うん!!」

\* \* \*

その頃、内部に突入していたティアドンは、ケーブルを破壊してレールを止めようとしたが……。

「ティアドンはどうです」

「駄目です。ケーブルの破壊、効果なし」

「了解、車両の停止は私は引き受けます。ティアドンはスバルと合流してください」

「了解!!」

《One Hand Mode》

あたしはクロスミラーージュを二丁から一丁にし、スバルと合流する為に中央部に向かった。

「しかし、さすがが最新型。色々便利だし、弾体生成までサポートしてくれるんだね」  
《はい、不要でしたか》

「あんたみたいに優秀な子に頼りすぎると、あたし的にはよくないんだけど……。でも、実戦では助かるよ」

《Thank you》

ファイル……。

本当にあたし達のことを考えて作ってくれたのね。

クロスミラージュ、大切に使うね。

\* \* \*

『スターズF、4両目で合流。ライトニングFとスターズ5、10両目で戦闘中』

「スターズ1、ライトニング1、制空権獲得」

「ガジェットII型、散開開始。追撃サポートに回ります」

「ごめんな、おまたせ」

聖王教会から八神部隊長が戻ってきて、ロングアーチスタッフが全員そろった。

「八神部隊長!!」

「おかえりなさい」

「ここまでは、比較的順調です」

「うん……」

「ライトニングF、スターズ5、8両目に突入……。エンカウント、新型です!!」

\* \* \*

「「くっ!!」」

俺たちは新型のガジェットと遭遇し戦闘状態になり、触手みたいなものがこちらに向

かってきたが、何とかかわすことができた。

「フリード、ブラストフレア!!」

「キユクウウウウ」

「ファイア!!」

ブラストフレアは触手に跳ね返されてしまい、崖に命中した。

「おりやああああ」

エリオはストラダーの切っ先に魔力を込め、ガジェットに斬りかかったが、装甲が硬くダメージを与えられなかった。

さらにAMFが発動し、ストラダーの魔力が消されてしまう。

「AMF!?!」

「こんな遠くまで……」

「ちよつと厄介だな……。エリオ、俺も中に行く。何とか持ち堪えろ」

「はい!!」

俺はエリオを援護する為、内部に突入しブラストシユートの準備をした。

本当はブラストブレイザーなら破壊できるかもしれないが、内部で使うとリアールが爆発し、レリックも何らかの影響を受けてしまうかも知れないので迂闊には使えない。

「エリオ、ブラストシユートでAMFを中和するから、何とかストラーダで攻撃してくれ」

「は、はい!!」

触手にストラーダの両端をつかまれ、取られないようにするのに精一杯だが、この状況では大技は使えないので、エリオに頑張ってもらおうしかなかった。

「あ、あの……」

「大丈夫。任せて!!」

「キャロ、こっちは大丈夫だ!!」

キヤロが上から心配そうにこちらを見ているが、AMFがある以上、フルバックのキヤロはこちらに来てもどうしようもない。

エリオが何とか触手を払いのけ、上空へ飛び上がり反撃をしようとした。

「よし、いくぞ。ブラストシユート!!」

「うおおおおお」

俺の放ったブラストシユートはAMFを中和させられたが、触手の動きが速く、なかなか反撃のチャンスがない。

さらにガジェットからビームが放たれ、上空のエリオをとらえ、触手で壁に叩き付けられた。

「うわああああ」

俺はシユートバレットでガジェットの注意をこちらに向けた。

エリオの奴はさっすきの攻撃で、気を失ってしまっている。

とにかくエリオから少しでも離さないと――。

「お前の相手はこつちだ!!」

《マスター、隣の車両にレリックがある以上、これ以上の車内での射撃・砲撃は危険です。レリックと反応して誘爆の危険があります》

「くそ!! 何とかしてこいつを列車の外に出さないと……」

「エリオくん……ファイルさん……」

\* \* \*

―新暦72年2月 時空管理局本局保護施設―

「確かにすぎましい能力を持っているんですが、制御がロクに出来ないんですよ」

「竜召喚だつて、この子を守る竜が勝手に暴れ回るだけで、とてもじゃないですけどまともな部隊でなんて働けませんよ。精々単独で殲滅戦に放り込むしか……」



「ああ、もう結構です……。ありがとうございます」

「では……」

「いえ、予定通り私が預かります……」

施設を出てみるとあたりは一面雪景色だった。

寒さに震える中わたしは、引き取られた女性にマフラーを掛けてもらった。

「……わたしは今度はどこへ行けば良いんでしょう」

「それは君がどこに行きたくて、何がしたいかによるよ……。キャロはどこに行つて、何がしたい」

「……」

——考えたこともなかった。

わたしの前にはいつも、わたしが行つちや行けない場所があつて、わたしがしちやいけないことがあるだけだったから……。

\* \* \*

―現在―

「うわあああああ」

俺とエリオは触手に捕まってしまい、身動きが取れないでいた。

さらに列車の屋根を突き破って、二人とも空に放り投げられてしまった。

――まずい。

エリオの奴、まだ目を覚ましてない。気を失っていて体勢を立て直せないんだ。

「……しかたがない!!」

俺は何とかエリオの腕をつかみ、エリオにサークルプロテクションを掛け、列車にめがけて放り投げ、車両に落とすことが出来たが、こっちが体勢を崩してしまい――

！。

「……しまった!!」

「……フィル……さん……」

「フィルさんつつつつ!!」

\* \* \*

「ライトニング4、飛び降り!!」

「ちよ、あの二人、あんな高々度でのリカバリーなんて!!」

「いや、あれでええ……」

「そ、そっか!!」

「そう、発生源から離ればAMFは弱くなる。使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が!!」

——— 守りたい。

本当の意味で、わたしに優しくしてくれた人を……。

わたしに笑いかけてくれる人たちを……。

自分の力で……。

守りたい!!

《Drive Ignition》

わたしは必死にフィルさんの手を掴み、ケリユケイオンを起動させ、魔力で浮遊し  
フィルさんの身体を必死に抱きしめた。

フィルさんは気を失っているみたいだったが、大丈夫みたいだ。

「フリード、不自由な思いをさせてごめん。わたしちゃんと制御するから………いくよ!!」

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ………」  
「竜魂召喚!!」

召喚呪文が終わると、白き巨大な竜が出現し、わたし達をその背に乗せ、羽を羽ばたかせ飛翔した。

\* \* \*

「召喚成功、フリードの意識レベル、ブルー!! 完全制御状態です」

「これが………」

「そう、キャロの竜召喚。その力の一端や……」

でも、少し変や？

ファイルだったら、どうにかしてあのくらいのは切り抜けられるはずなのに？

——もしかしたら!!

\* \* \*

「あれが……」

「チビ竜の本当の姿……」

「はいです。あれがフリードの本当の姿です。それと、もしかしたらファイルは、ワザと崖から落ちたかもしれないですね」

「えっ?」

「どういう事ですか……?」

「推測なんですけど、キャロに自分の力を受け入れさせる為に……」

「!!」

充分に考えられる。ファイルだったらやりかねない。

あいつは、自分のことよりも仲間や親友のことを優先する奴だから――。

「ファイル……何考えてるのよ、あのバカ!! 自分の命をチップ代わりにするなんて!!」

「まったく、これじゃあたし達より無鉄砲だよ……」

「誉められた方法じゃないですけど、そのおかげでキャラは、自分の力を受け入れたみたいですね。全く無茶しますね!! まあ、あの様子だと救援はいらぬみたいですね。さて、レリックを回収するですよ」

\* \* \*

「……ファイルさん」

「……うっ……うっ」

「ファイルさん、気がついたんですね!!」

「キャラ? そっか。どうやら……受け入れたようだな……」

「……それって?」

今のフィルさんの言葉、何かが引つかかる。  
まるでわたしを信じて、わざと落ちたようなの？

——まさか!!

「イチかバチかだったが……うまくいったみたいだな……」

「……ば、か」

「キャロ？」

「フィルさんのバカッ!! どうしてそんな無茶したんですか!!」

いくら何でも無茶すぎます!!

自分の命をこんな風に軽く扱うなんて!!

もしわたしが失敗したらどうするんですか!!

\* \* \*



キヤロは大粒の涙を流しながら、俺に怒っていた。

確かに危険な賭だったが、前の時と少し違う状況になってしまったので、こうするしかなかった。

キヤロが自分の力を受け入れる大切なことだったから――。

「キヤロ……ごめん。騙すような形になって……」

「そんなことは良いんです!! どうして自分の命を!!」

「俺は……自分の大切な人達の為なら、どんなことだってする……。それが自分の命を駒にすることだってな」

「でも、もしわたしが制御できなかつたら、死んでたかも知れないですよ!!」

「そうかもしれない……。でも俺は信じたい」

自分の仲間を……。

そして、大切な人達を……………。

「ファイルさん……………」

「さて、今は戦闘中だ。エリオに使ったプロテクションもそろそろ限界だ」

エリオに張っていたプロテクションは、ガジェットの影響でそろそろ限界が近かった。

エリオはまだ目を覚ましてないので、このままだとともに食らってしまう。

「エリオくん!?!」

「まずいな……………仕方がない、こうなったら……………」

少々乱暴だが、俺は直接エリオの脳内に念話を叩き込む。

（おい、エリオ起きろ!! いつまでも寝てんじゃない!!）

「えっ、ファイ、ファイルさん……………!?!」

ふう、うまくいくか分からなかったが、意識を取り戻すことは出来たようだな。

「た、確か僕は、ガジェットの手に乗まれて……」

「説明は後ですが、とりあえず攻撃態勢になれ。そろそろそのプロテクションも限界だから……」

僕はフィルさんの声でストラダーを構え、攻撃態勢をとる。

「どうやらフィルさんがこのプロテクションを作ってくれたみたいだ。」

そのおかげで気絶している時でも無事だったんだ。

「フィルさん、キャラ……。その白竜はもしかして……?」

「ああ、フリードだ。キャラが竜魂召喚に成功したんだ。キャラはもう大丈夫だ……」

「エリオくん、フィルさん、本当にごめんなさい。もう大丈夫だから……」

「キャラ……うん!!」

「じゃ、反撃開始と行きますか。キャラはフリードで攻撃を頼む。俺は射撃魔法で援護する」

「行きます。フリード、ブラストレイ……ファイア!!」

「ブラストシュート連続発射!!」

ブラストレイとブラストシュートは命中こそしたが、AMFが思ったよりも硬く、ダメージにはならなかった。

\* \* \*

「やっぱり……硬い」

「となると、俺の手持ちの魔法だと……これしかないか。プリム!!」

《マスター、さつきも言いましたが、ブラストブレイザーだと誘爆の危険があります。それよりもここは……》

「そうだな……キャラ、ストラダーにブーストを掛けてくれ。その後、エリオは最大戦速で一気にガジェットを貫け。その後はお前に任せるぞ、エリオ!!」

「はい!!」

キャラは、ケリユケイオンを発動させ、魔力増幅呪文を唱える。

「我が乞うは、清銀の劍。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

《Enchant Up Field Invade》

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

《Boost Up Strike Power》

「いくよエリオくん!!」

「了解、キャロ!!」

「ツインブースト、スラッシュ&ストライク!!」

「うおおおおお」

キャロのブーストを受けたエリオは魔力刃と作り、カートリッジを二発ロードさせ、ストライダーのバーニアを最大戦速にまで上げ、一気にAMFを貫いた。

「一閃必中!! でりやあああああ」

そして、魔力刃を上空に振り上げ、ガジェットを真つ二つし殲滅に成功した。

「やった!!」

「よし、やったなエリオ!!」

\* \* \*

「車両内及び上空のガジェット反応、全て消滅!!」

「スターズF、無事レリックを確保!!」

『車両のコントロールも取り戻したですよ。今止めます』

「ほんならちようどええ。スターズとリインの三人はヘリで回収してもらって、そのまま中央のラボまでレリックの護送をお願いしようかな」

『はいです』

「ライトニング達はどうします」

「現場待機、現地の局員に事後処理の引き継ぎ……よろしくな」

レリックを無事回収できた俺たちは、ティア達は中央のラボへ、俺とキャロ達は現場で事後処理の引き継ぎを行った。

引き継ぎが終わった後へりに戻ろうとしたが、俺はキャロに引き留められた。

\* \* \*

「あの……フィールさん……」

「なんだ、キャロ？」

「お願いですから……。もう、あんな無茶しないでくださいね……」

「……………それは」

「フィールさんは、自分が死んでも誰も悲しまないって思っていますか……。そんなことはないんですよ!!」

「少なくともわたしは嫌です。フィールさんが死んだら……わたしは……わたしは……」

わたしはあの時のことを思い出して涙が抑えられなくなっていた。

もし、あのときフィールさんが死んじゃっていたら、そう思ったら涙が止まらない――

すると、フィールさんがわたしをそつと抱きしめてくれた。

「あつ……」

「キャラ……」

「フィルさん……グス……フィルさん……ヒック……」

しばらくして、気持ちが落ち着くと、フィルさんはそつと離れ――。

「あつ……」

わたしはフィルさん抱きしめてもらっている時、安心感というか安らぎを感じていた。

フィルさんが離れてしまった時、恥ずかしさよりも、寂しさみたいなのが感じた。

なんなのかな……この気持ちって……？

\* \* \*



「……………ふむ」

「追撃戦力を送りますか……………?」

「やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ」

今の段階では、これくらいで良いだろう。

あんまり派手に動きすぎて、こちらの手の内がばれるのは得策ではない。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材がそろっている上に……………」

「この子達を……………生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……………」

「さらに……………」

「ファイル・グリード……………か。今のところ目立ってはいないが、何か隠された物が感じる……………。もしかしたら……………プロジェクトFの残滓よりも、貴重なサンプルになるかも知れないな……………」

「フ、フハハハ……………」

待っていたまえ、時空管理局、機動六課、そして……。

ファイル・グリード……。

## 第6話 進展

初出勤から数日後、俺たちは訓練がチーム戦から、個別スキル訓練に移行していた。個人訓練になると、それぞれがメニューが違ってきていて、内容も濃くなってきた。

「おら、いくぞ!! てやああああ!!」

「マツハキヤリバー!!」

《Protection》

「でやああああ!!」

「くっ!! うわあああああ」

あたしはプロテクションで、ヴィータ副隊長のハンマーを何とか防いだが、攻撃が重く徐々に押されていた。

そして、第2撃があたしをとらえると、後方の木まで押し戻されていた。

「つつつ、いたた……」

「……なるほど、やつぱりバリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「えへ……ありがとうございます」

「あたしやお前のポジション……。フロントアタッカーはな。敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりするのが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高いほど、攻撃時間を長く取れるし、サポート陣にも頼らないで済む……。つて、これはなのはにも教わったな」

「はい、ヴィータ副隊長」

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされないように、下半身の踏ん張りとおマツハキヤリバーの使いこなしを身につける」

「頑張ります!!」

《学習します》

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だから……。グラーフアイゼンにぶっ叩かれたくなかったらしっかり守れよ」

「はい!!」

\* \* \*

「エリオとキャロはスバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避が最重要。例えば……」

フェイトさんは攻撃スフィアが放った二発の弾を、左右のステップでかわし、その後も低速でわかりやすいように見本を見せてくれた。

「まずは動き回って狙わせない。攻撃が当たる位置に長居しない……ねっ……」  
「はい!!」

「これを低速で確実に出来るようになったら……スピードを上げていく……」

「あっ!!」

「こんな感じだね……」

さつきと同じ事だが、今度は攻撃のスピードも上がっていたので、難易度はかなり上

がっていた。

しかし、フェイトさんは目でとらえきれないスピードで攻撃をかわしていた。

しかも、いつの間にか僕たちの後に立っていた。

「……す、すごい」

「今のもゆつくりやれば、誰でも出来るような基礎アクションを、早回しにしているだけなんだよ」

「は、はい」

「スピードが上がれば上がるほど、感やセンスに頼って動くのは危ないの……。ガードウイングのエリオはどの位置からでも攻撃やサポートを出来るように、フルバックのキャラは素早く動いて、仲間の支援をしてあげられるように、確実に有効な回避アクションの基礎をしつかり覚えていこう」

「はい!!」

\* \* \*

「うん、良いよティアナ、フィル。その調子」

「はい!!」

「ティアナ達みたいな精密射撃型は、いちいち避けたり逃げたりしてたんじゃ、仕事が出来ないからね」

「はっ!! バレット、レフトV、ライトRF」

《All Right》

あたしが弾丸のセレクトをしていると、別のスフィアが後方から接近していた。

「ちっ!! プリム、ティアの後方のスフィアを落とす」

《了解!!》

その動きに気付き、なのはさんはフィルの方にスフィアを多くとばしてきた。

そして、あたしも何とか回避は出来たが、その場を大きく動いてしまっていた。

「ほら、そうやって動いちやうと後が続かない……。いつもフィルの助けが、ある訳じゃ

ないんだよ!!」

「くっ……」

《Barrett V and RF》

なのはさんはあかし達に、それぞれ直射型と不規則型のスフィアをとばしてきた。今度はあかしもその場に対応して、迎撃用のバレットを放つ。

ファイルはさつきから、殆どその場を動いていないでスフィアの対応をしていた。

避けきれないで喰らいそうなのは、ファイル系の防御で最低限のダメージに押さえていた。

\* \* \*

「さすがに、この数はきついな……」

《マスター、本格的なセンチターガードの訓練は受けてなかったんですよね……》

「ああ、未来ではティアの動きをまねて、何とか対応していたに過ぎないからな」



元々、そこまで強くなかった俺は、ティアと一緒にやることで乗り切ってきた。だから、俺はある意味ティアの劣化コピー状態だ。

《マスターはこのポジションでも出来ませけど、専門職にはかきませんからね……》  
「……………そうなんだよな。おまけに現状じゃ、攻撃用のバレットと防御を同時にしていたんじゃ、すぐにガス欠してしまう……」  
「フィル、防御をフィールドに頼らない。状況を広域で判断して、それに併せた攻撃で対応する!!」

プリムはクロスミラーージュと違って二丁にはならない。

ティアと同じ事をやるなら、自身の対応速度を上げるしかない。

「だったら、これならどうだ!!」

俺は前後から来るスフィアに、最初は前のスフィアを落とし、身体を反転しないで誘導弾を作り、スフィアの動きを読み、それで後のスフィアには対応した。

「そう、視野を広く、出来るだけ最小限の動きで最大の効果を出す……射撃型の神髄は!!」

「あらゆる相手に、的確な弾丸をセレクトし命中させる……」

「判断力と命中精度!!」

《Reload》

「チームの中央に立って、誰より速く中長距離を制する。それがわたしやティアナやフィルのポジション、センターガードの役目だよ」

「はい!!」

\* \* \*

訓練場の外で俺とシグナム姐さんは新人達の訓練の様子を見ていた。

「いやあ、やっていますな……」

「初出動が良い刺激になったようだな……」

「いいっすね、若い連中は……」

「若いだけあつて成長も早い。まだしばらくの間は危なっかしいだろうがな」

「……そつすね」

「シグナム姐さんは、参加しないんで……」

「私は古い騎士だからな。スバルやエリオのように、ミッド式と混じった近代ベルカ式の使い手とは勝手も違うし、剣を振るうしかない私は、バツクス型のティアアナやキャロ、それにファイルに教えられるようなことは何も無いしな……」

確かに、姐さんは人に細かく教えるタイプじゃないしな。

今の段階じゃこれでいいのかもな。

「まっ、それ以前に私は、人に物を教えるという柄ではない。戦法など、届く距離に近づいて斬れくらいしか言えん……」

「ははは……すげえ奥義ではあるんっすけど……まあ、確かに連中には、まだちいつと早いっすね……」

\* \* \*

なのはさんの笛が鳴り、午前の訓練が終了した。

「じゃあ、午前の訓練終了……」

「」「はあ……はあ……はあ……はあ……」「」

俺たちフォワードは午前の訓練で、くたくたになっていた。  
やっぱり個別スキルになると、メニューの内容もきつい。

「はい、お疲れ……個別スキルに入ると、ちよつときついでしょう……」

「……ちよつと……というか……はあ……はあ……」

「……はあ……はあ……かなり……」

「フェイト隊長は忙しいから、そうしよつちゆうつきあえないけど、あたしは当然お前らにつきあってやるからな」

「あ、ありがとうございます……」

スバルはヴィータ副隊長の申し出に、苦笑いで答えていた。確かに訓練じゃ容赦ないからな。ヴィータ副隊長は……。

「それからライトニングの二人は特になんだけど、スターズの三人もまだまだ身体が成長している最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように……特にフィル。初出勤の時みたいな行動はもうしないでね!!」

「ぐっ……は、はい……なのはさん……」

「そうですよ。フィルさん、もうあんな真似はしないでくださいね……。あのときは……フィルさんが死んじゃうって……」

キャラはあの時のことを思い出し、また泣き出しそうになっていた。

「……キ、キャラ、俺が悪かったから、頼むから泣かないでくれ!!」

「ふふつ、フィルもキャラには頭が上がらないみたいだね。でも、良い薬になったでしょう。フィルにも悲しんでくれる人はいるんだって事が分かったんだしね」

「フェイトさんまで……本当に勘弁してください。あの後ティアに、さんざん説教され  
たんですから……」

「当たり前よ!! あなたの無茶は今に始まった事じゃないけど、あれはやり過ぎよ!!」  
「ティア、分かったから……もう勘弁してくれ……」

\* \* \*

「ファイル!!」

「な、何だ二人とも、そんな血相を変えて……」

「あのね、あんたあれはどういうつもりよ!!」

「えっ……?」

「こないだの事件のことだよ……ファイル、何であんな無茶したの。あれじゃあたしのこ  
とを言えないよ!!」

ああ……。キャロのことだな。

だけど、あの時はあれしか方法がなかったんだ——。

「……あのことは済まなかったと思う。でも、キャロの力を受け入れさせるには、あれしか思いつかなかったんだ……」

「だからといって、あんたが死んだら意味がないでしょう!!」

「そうだよ!!」

「……とにかく、二度とあんな無茶はしないで!! お願いだから……もう少し自分を大切に!!」

結局ティア達が自分の部屋に戻ったのはそれから一時間後だった。

\* \* \*

「まあ、ファイルのことはここまでにしてお昼にしようか」

「「「はい!!」」」」

俺たちはお昼の為、食堂に向かってしていると、ちょうど八神部隊長が外回りに行くところだった。

「あつ、みんなおつかれさんや」

「「「「はい!!」」」」」

「はやてとリインは外回り……」

「はいです、ヴィータちゃん」

「うん、ちようナカジマ三佐と話をしてくるよ……。スバル、お父さんとお姉ちゃんに何か伝言とかあるか?」

「いえ、大丈夫です……」

まあ、ナカジマ三佐やギンガさんとは普段から連絡取ってるしな。

「じゃあ、はやてちゃん、リイン、行ってらっしゃい」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね……」

「うん」

「行ってきまゝす」



八神部隊長とリイン曹長は、隊のジープでナカジマ三佐の108部隊の所へ出かけていった。

そして俺たちも、フオワード陣全員で食事を取ることになった。

\* \* \*

「……なるほど、スバルさんのお父さんとお姉さんも陸士部隊の方なんですネ」

「うん、八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって」

「へえ……」

「しかし、うちの部隊って関係者つながりが多いわね。確か隊長達も幼なじみ同士だったわよね」

「ああ、なのはさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも子供の頃、確かその世界で暮らしてたはずだ……」

「確か……管理外世界の97番でしたっけ……？」

「そうだ」

「97番って、うちの父さんのご先祖様が住んでいた世界なんだって……」

スバルがスパゲティを食べながら話してるが、話す時は全部飲み込んでからにしろ……。

「そうなんですか……」

「そういえば、名前の響きとか何となく似ていますよね、なのはさん達と……」

「そっちの世界には、あたしも父さんも行ったことがないし、よくわかんないんだけどね

……あれ、エリオはどこ出身だっけ？」

「あつ……僕は……本局育ちなんで……」

「「あつ……」」

「本局……住宅エリアって事……」

「本局の特別保護施設設育ちなんです……。8歳までそこにいました……」

（「この……バカ!!」）

（……ゴメン）

ティアと俺はスバルに念話で注意したが、もう少し早く言うべきだった。エリオのことは以前聞いていたんだから、止めることは出来たはずなのに……。

「あ、あの……気にしないでください……。優しくしてもらってましたし……ぜんぜん普通に幸せに暮らしていましたから……」

「そういえば、その頃からフェイトさんはお前の保護責任者だったな？」

「はい、物心を付いた頃から色々お世話になっていて、魔法も僕が勉強を始めてから、時々教えてもらって……本当にいつも優しくしてくれて……僕は今もフェイトさんに育ってもらって……思ってます……」

「フェイトさん、子供の頃、家庭のことで、ちよつとだけ寂しい思いをしたことがあるって……」

\* \* \*

「今日はどうした？　古巣の様子を見にわざわざくるほど、暇な身つて訳でもねえだろうに」

「えへへ……。愛弟子から師匠へのちよつとしたお願いです」

呼び鈴のブザーが鳴ると、一人の女性がリインと一緒に入ってきた。

「失礼します……」

「ギンガ!!」

「八神二佐、お久しぶりです」

「ギンガ……。積もる話もあるだろうが、後にしてくれや」

「す、すみません、八神二佐失礼します……」

「またな、ギンガ。後でゆっくり話そうな……」

「はい」

ギンガとは一旦分かれ、私は本題をナカジマ三佐にお願いすることにした。

「お願いしたいんは、密輸物のルート捜査なんです」

「お前のところで扱っているロストログアか……」

「それが通る可能性が高いルートがいくつかあるんです。詳しくはリインがデータを持ってきていますので、後でお渡ししますが……」

「まっ、うちの捜査部を使ってもらうのはかまわないし、密輸調査はうちの本業っちゃ本業だ。頼まれねえことはないんだが……」

「お願いします……」

「八神よ……他の機動部隊や本局捜査部でなくて、わざわざうちにくるのは、何か訳があるのか」

「密輸ルートの捜査自体は彼らにも依頼しているんですが、地上のことはやっぱり、地上部隊の方がよく知っていますから」

半分は本当のことなんやけど、もう一つの理由をまだ気付かれるわけにはいかへん。

「まっ、筋は通っているな……いいだろう。引き受けた」

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスで、ギンガはその副官だ。二人とも知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろう」

「はい、六課の方は、テストロッサ・ハラオウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと……」

\* \* \*

八神部隊長と別れた私は、リイン曹長に今後のことを聞いていた。

「そうですか……。フエイトさんが……」

「そうです。六課の捜査主任ですから、一緒に捜査を当たってもらうこともあるかもですよ」

「これは凄く頑張らないといけませんね」

「はい。あつ、そうだ。捜査協力が当たって、六課からギンガにデバイスを一機プレゼントするですよ」

「デバイス……」

「スバル用に作ったのと同型機で、ちゃんとギンガ用に作り直してるんですよ」

「それは……。その……凄く嬉しいんですが……。実は……」

そう、私は以前ファイルと約束をしていた。

私のデバイスは彼が作ってくれるって……。

遠い昔の約束なんだけどね……。

「というか、このデバイスは、ファイルがギンガ用に開発した物なんです……。だから他の人には扱えないって言っていました」

「えっ……？ まさかファイルが六課にいるんですか!？」

「えっ、スバルから聞いてませんか？ ファイルはスターズのフォワードとして働いているんですよ。最も、シャーリーとデバイス作成も担当しますので、かなり大変なんですけどね……」

「スバルったら、肝心なことを言っていないじゃない……。そのことは、後でじっくり聞くとして……」

「それとファイルから伝言があるんです……『いつかの約束……守りましたよ……』です」  
「!!」

——覚えてくれたんだ。

ファイルが士官学校時代にスバル達と4人で話した、他愛のない話だったのに……。  
それを今までですつと忘れないでいてくれたんだ……。

「ギンガ……。ファイルとの約束が何なのかは分かりませんが、ファイルはデバイスを作るのに、かなりの無理をしたんです。訓練と並行でやっているから、中々時間が取れないって言うてましたけど……。それでもシャーリーと一緒に必死で完成させたんです」  
「だから……。受け取ってください……。ファイル達の思いを……。そして、大切に使うあげてください……」

「ありがとうございます……。リイン曹長……。そしてファイル……」

私はファイルの思いに涙が止まらなかつた。

ありがとう……。



大切にするね……。

だから——。

ファイルもこれ以上無茶はしないでね——。

\* \* \*

「スバルに続いて、ギンガまでお借りする形になってしもうて、ちよつと心苦しくあるんですが」

「なに、スバルは自分で選んだことだし、ギンガもハラオウンのお嬢と一緒にの仕事は嬉しいだろうよ……。しかし、まあ気がつけばお前も俺の上官なんだよな。魔導師キャリア組の出世は早いな」

「魔導師の階級なんて唯の飾りですよ。中央や本局に行ったら、一般士官からも小娘扱いです」

「……だろうな。つとすまんな、俺まで小娘扱いしてるな」

「ナカジマ三佐は、今も昔も尊敬する上官ですから……」

ナカジマ三佐は、いろんな事を私に教えてくれた数少ない尊敬出来る上司だ。

「……そうかい」

「失礼します。ラット・カルタス二等陸尉です」

私達の前に、カルタス陸尉からの通信が入り、ナカジマ三佐からカルタス陸尉へ捜査協力についての話をしてくれた。

「おう、八神二佐から外部協力任務の依頼だ。ギンガ連れて会議室でちよいと打ち合わせをしてくれや」

「はっ、了解しました」

「つつこつた」

「はい、ありがとうございます」

「打ち合わせがすんだら、メシでも食うか」

「はい、ご一緒します」

\* \* \*

「時空管理局、首都中央地上本部」

「レリック自体のデータは以上です」

「封印はちゃんとしているんだよね？」

「はい、それはもう嚴重に。それにしても良く判らないですよね。レリックの存在意義って？」

「うん……」

「エネルギー結晶体にしては良く判らない機構がたくさんあるし、動力機関にしてもなにか変だし」

確かにエネルギーとして使えるけど、それでも不可解な点がいっぱいある。

「まあ、すぐに使い方が判るものなら、ロストログア指定はされないもの。……ん、こっちはガジェットの残骸データ？」

「はい、こっちはシグナムさんやヴィータさんが捕獲してくれたものと変わりありませんね。新型も内部機構はそう大差ないし……」

「……ん、ちよつと待って。さっきのⅢ型の残骸の写真。気になるのが写っているのは、はい」

私の気のせいなら良いんだけど、内部機構の中にあつたもの。

あれは、まさか……。

「これ……宝石？ エネルギー結晶かなんかですかね」

「……ジュエルシード」

「えっ？」

「随分昔に私となのはが探し集めていて、今は局の保管庫に管理されているはずのロストログア」

「ほあ、なるほど……。つて、何でそんなものが!!」

「シャーリー、ここに、この部分を拡大して。何か書かれている」

シャーリーに拡大してもらったプレートには名前見たいのが書かれていた。

「これ、名前ですか？ ジェイ……」

「ジェイル・スカリエッティ」

「えっ？」

「……ドクター・ジェイル・スカリエッティ。ロストログア関連事件を初めとして、数え切れない位の罪状で、超広域指名手配されている一級捜索指定の次元犯罪者だよ」

「次元犯罪者……」

「ちよつと事情があつてね。この男の事は何年か前からずっと追っているんだ」

「何でそんな犯罪者が、こんな分かりやすく自分の手がかりを……」

「本人なら挑発、他人だとしたらミスリードねらい。どっちにしても、私やなのはがこの事件に関わっているって知っているんだ」

「だけど、もし本人ならロストログア技術を使って、ガジェットを制作出来るのも納得出来るし、レリックを集めているのも想像出来る。」

「シャーリー、急いでこのデータをまとめて隊舎に戻ろう。隊長達を集めて、緊急会議をしたいんだ」

「はい、今すぐに……」

\* \* \*

「ん、了解や。すぐ戻るから対策会議しよう。丁度捜査の手も借りれた所やしな」

ナカジマ三佐とギンガと夕食を食べていた所に、フェイトちゃんからの通信が入った。

フェイトちゃんからの通信は、驚くことがあった。

まさか、そんな大物が関わっているなんてな。

「何か進展ですか？」

「うん、事件の犯人の手がかりがちよつとな……」

「と言う訳で、すみませんナカジマ三佐。私はこれで失礼させていただきます」  
「おう」

私はせめてこの勘定を払おうと伝票を取ろうとしたら、先にナカジマ三佐が奪い取った。

「そんな!？」

「さつさど行ってやんな。部下が待ってるんだろ」

「はい、ギンガはまた私かフェイトちゃんから連絡するな」

「はい、お待ちしています」

\* \* \*

データをまとめた私達は車で急いで六課に向かっていた。

「ドクター・スカリエツィでしたっけ。あの広域指名手配犯」

「うん」

「その人がレリックを集めている理由って例えばどんな？」

「あの男はドクターの通り名の通り、生命操作とか生体改造に関して異常な情熱と技術を持っている。そんな男が、ガジェットみたいな道具を大量に作り出してまで探し求めるからには……………」

\* \* \*

「ゼストとルーテシア、活動を再開しました」

「ふむ。クライアントからの指示は？」

「彼らに無断での支援や協力は極力控えるようにと、メッセージが届いています」

「自立行動を開始したガジエットドローンは、私の完全制御下と言う訳じゃないんでね。」

「勝手にレリックの元に集まってしまうのは、大目に見て欲しいね」



「お伝えしておきます」

「彼らが動くならゆつくり観察させてもらうよ。彼らもまた貴重で大切なレリックウエポンの実験体なんだからね」

さて、君たちはどう動くかね。機動六課――。

\* \* \*

機動六課、訓練場

「はい、夜の訓練お終い」

「「「「ありがとうございます」」」」

「「「「お疲れ様でした」」」」

「は〜い」

「ちゃんと寝ろよ」

フワードの訓練が終わった後も、なのは今日の訓練のデータをまとめていた。こいつ本当に連中に付きつきりだな。

「しかし本当に朝から晩まで……疲れんだろ？」

「わたしは機動六課の戦技教官だもの。当然だよヴィータちゃん」

「後あれだ。なんつうか。もつと厳しくしないで良いのか。あたしらが昔受けた新任教育なんて、歩き方から挨拶まで、もう何でもかんでも厳しく言われてたんじゃなか」

あれは、地獄としかいいようがなかったぞ。

口うるさく本気で言われたからな——。

「戦技教導隊のコーチングって、どこもこんな感じだよ。細かいことで叱ったり、怒鳴りつけている暇があつたら、模擬戦できつちり打ちのめしてあげる方が、教えられる側は学ぶことが多いって、教導隊では良く言われているしね」

「おつかねえな……。おい……」

「わたし達がするのは真つ新な新人を教えて育てる教育じゃなくて、強くなりたいてって

意志を持った魔導師達に、今よりハイレベルの戦闘技術を教えて導いていく戦技教導だから……」

「ふう、何にしても大変だよ……。教官つてのも」

「でも、ヴィータちゃんもちゃんと出来ているよ。立派立派」

「撫でるな!!」

隊舎に戻る途中、なのははレイジングハートに頼んで、データを送ってもらっていた。連中はどれだけ幸せか気付くまで、結構時間が掛かるだろうな。

自分勝手に戦っている時も、何時だってなのはに護られてる幸せに――。

あたしはスターズの副隊長だからな。お前のことはあたしが護ってやる。

## 第7話 コンタクト

数日後、機動六課のメンバーは、第97番管理外世界『地球』でロストロギアがあるとの連絡があり、メンバーの殆どは地球へ向かったが、俺はミッドに残っていた。理由も事前にマリーさんに言っただけで、裏を合わせてもらったので問題なく通った。

なぜ残ったかというところ——。

あることを防ぐためにこつちへ残った。

ユーノ・スクライア司書長暗殺を防ぐために!!

未来ではスクライア司書長は、機動六課のメンバーが地球へ行っている間に、戦闘機人のドゥーエに殺された。

司書長は内密にスカリエッティのことやレリックのことを調べていたのだが、それが向こうに知れてしまい、危険視され、殺された。

実際、無限書庫跡から見つかったデータは、後にゆりかごに突撃をかける時にずいぶん役だったのだ。

もしかしたら司書長は、自分が殺されることが分かっていたのかも知れない。

それでも、なのはさん達のために――。

なのはさん達も司書長が死んだ時は、一時期は悲しみでどうしようもない状態だった。

しばらくすると立ち直ったが、なのはさんは表面上は立ち直っていたが、一人になったりすると泣いている姿が見られた。

ヴィヴィオを引き取ったのも、一人でいるのが辛かったからなのかも知れない。

スクライア司書長が死んでしまったことは、歴史上大きな事象になるが、でも、ここでこの人を見殺しにすることなんて俺にはできない!!

あんな悲しみはもう二度と繰り返したくない。

\* \* \*

無限書庫、司書長室

「司書長、本局から緊急の資料の請求がありました」

「それは、クロノからじゃないだろうね？」

「いいえ、提督からのものは昨日終わらせましたので……。当分はないはずです……」

そうは言っても、あのクロノのことだ。

突発の依頼があつたって不思議でも何でもない。

「そう、それじゃみんなはもう帰っていいよ。後は僕がやって置くから……」

「でも、それじゃ司書長が……」

「大丈夫。これくらいなら数時間で終わるよ。それよりクロノの依頼がない時に休んで

「おかないと……」

「た、確かに……」

「という訳でみんなは解散ね」

「申し訳ありません。それじゃ失礼します……」

司書のみんなは、副司書長がその旨を伝えるとみんな喜んで帰っていった。  
絶対ここの環境って劣悪だよな……。

今度、上層部に文句を言っつてやる。

「失礼します」

「あつ、どうしたんだいドゥーエ……」

「いえ、ちよつと忘れ物をしまして……」

彼女はドゥーエ。僕の秘書をやっている。

半年前から地上本部から送られたんだが、良くやってくれている。

「忘れ物ってなんだい」

「それはですね……」

\* \* \*

私はドクターの命令で、このユーノ・スクライアの監視をずっと続けてきた。

なにも無ければ放置だったのだが、最近になって私達の廻りのことを調べ始めている。

このままだと最大の障害になるかも知れない。

だから私は今日司書達を追い払ってある計画を実行することにした。

——そう。

暗殺を!!

私が背後から首をカツ切ろうとしたその時——。

『忘れ物つてのは、司書長の命か。戦闘機人……』

「えっ!？」



「だ、誰ッ!？」

「ここだよ……」

「なっ!!」

いつの間にか私の背後に一人の男が立っていた。

——馬鹿な!!

さっきまで何の気配もなかったはずなのに……。

スクライアが驚いている所を見ると、彼も知らない人物のようだ。

「何者なの……あんた。私の正体も気付いているようだし?」

「どうでもいいだろ。俺が何者かどうかなんて……」

「クッ!!」

こいつが何者かは分からないけど、任務の障害になる奴という事は分かる。少なくとも私がここに入る前まではこいつはいなかった。

だとしたら、何らかの方法で後から入ったことになる。  
私は距離を取り、ISを起動させ反撃をする。

\* \* \*

「はああああ!!」

「ちいい……ピアッシングネイルか!? プリム……モード2だ」

《了解、セイバーモード》

俺はプリムをセイバーモードに切り替え、ドゥーエのピアッシングネイルを受け止める。

「無駄だ……。お前のIS【ライアーズマスク】は変身とかは最上級だが、運動能力自体が上がる訳じゃない」

「ちいい……」

俺はドゥーエの攻撃を余裕でかわしているように見せているが、実際は均衡状態。元々ドゥーエは肉体能力は、そんなに高くないから何とかなっている。

でもちよつとしたことで均衡は崩れる……………。

短期決戦で決めるしかない。

「だったら、これならどう……………」

突如地面からチェーンが現れ、俺の体に巻き付いた。

「なんだこれは!? くっ、身動きがとれない!!」

「どう、スクライア用に作られた特製バインドは、魔力も吸い取られるでしょう……………」

俺の体にチェーンバインドに似たバインドがかけられたが、術式はもつと複雑で簡単には解除出来ない。

「ちくしょう……」

「そやっっているうちに私は、任務を実行させてもらうわ……」

しまった。司書長もさつき、同じものがかけられてしまったのか……。

——まずい!!

このままじゃスクライア司書長は殺されてしまう。

司書長は総合Aランクだが、戦闘技術は殆どない……。

このままじゃ……このままじゃ……。

——冗談じゃない!!

みんなの——。

なのはさんの――。

あの乾いた笑顔を見るのは――。

もう二度とゴメンだ!!

「……………ふざけるな」

\* \* \*

「ふざけるんじやねええええ!!」

「えっ……………なにこの魔力は? さっきとは比べものにならない!!」

「……………プリム、今こそ解除する……………。いいな……………」

《……………ええ、出し惜しみしている場合じゃありませんものね……………。でも気をつけてください。マスターと与えられた魔力が融合してないので、無理矢理力を上げてただけで

す。しかも15分が限度です……………》

「それだけあれば十分だ。いくぜ…………リミット…………リリース!!」

「うおおおおおおお!!」

バインドは木っ端みじんに砕け、俺はドゥーエを殺気を込めて睨み付けた。

リミットを解除した以上、もう勝手にはさせない。

覚悟しろよ、ドゥーエ。

「……………な、何なのこいつは…………。こんな事聞いてないわ!!」

「…………ストラグルバインド」

俺はドゥーエにストラグルバインドを掛けISの機能を停止させ、変身を解除させた。

通常のストラグルバインドじゃ効果はないが、これは俺が戦闘機人用に組み替えたものだ。

「クッ!? し、しまった!!」

「これですむと思うな……。モードチェンジ、ガンモード……。カートリッジロード!!」  
俺はプリムをガンモードに戻し、カートリッジをロードさせ、ドゥーエに銃口を向けた。

設定は……。殺傷設定だ。

「ブラスト……」

《マスター!!》

「!!」

《駄目です!! 彼女たちは操られているだけです!! クアットロのように自分の意思でやっているんじゃないんです!!》

——何をやってるんだ俺は。

俺は殺しをしに来たんじゃない……。止めるために来たんだ。

俺はソニックムーヴでドゥーエの後ろに回り込み、手刀で意識を刈り取る。

その後スクライア司書長のバインドを解除し、ドゥーエに近づくと、戦っている時から感じていた違和感を調べた。

「プリム、こいつを全身スキャンしてくれ……………」

《了解です。スキャン開始しますね……………》

《……………、これは!! マスター、この戦闘機人からあるパーツが関知されました。未来でも使われていた……………あれです……………》

「ブレイン・コントロール・チップ」、通称BCCか」

戦闘機人でも、人間でも脳に埋め込めば思うように操ることが出来る悪魔の兵器。  
未来であの女が作った最低の兵器だ!!

「どういう事……………? 未来って? それに君は……………」

「それは……………後でお話しします……………。プリム、あれは確か……………」

《はい、人の脳に直接念波を送り人を自在に操るもので、ギンガさんや戦闘機人達に組み込まれていたものです。そしてこれを作ったのは……………》

「クアットロ……………だな……………」



《……はい……》

クアットロ……。

未来でもここでもゲスなやり方は変わらないんだな……。

だが、これならドウエを殺さないで済むかも知れない……。

「プリム、これを壊す方法は……」

《はい、この波長と正反対の魔力をぶつければ機能は停止します。但し……》

「ただし……何だ？」

《今のマスターはリミットを無理矢理解放した反動で、身体にかなりのダメージがあります。この方法はチップが体内から完全に出るまで魔力を送り続けなくてはなりません。その間マスターが正反対の魔力を放ち続けられるかどうか……》

かつてなのはさんが、ヴィヴィオを元に戻した時と同じか——。

レリックを外に出さないといけないのと同じで、こいつも外に出さないとまた動き出してしまおうって訳か。

「……やるしかない。いくぜプリム、カートリッジロード!!」

俺はプリムのカートリッジをロードさせ、自分の魔力を底上げし、正反対の波長の魔力を作り上げた。

これはかなりつらい――。

「くっ……やっぱり制御するのが難しいな……いくぜ!!」

「ぎやあああああ!!」

「頑張るんだドゥーエ」

俺はドゥーエの頭に魔力球を近づけ、魔力エネルギーを送り続けた。

あまりの痛みにドゥーエの意識が戻り、発狂していたがバインドをかけていたので暴れることはなかった。

これで元に戻ってくればいいのだが――。

魔力を送り続けていると、チップが体外に出てきて、魔力に耐えきれなくなり粉々に砕けた。

チップが砕けたと同時に再び意識を失ってしまった。

そして――。

\* \* \*

「……う……んっ……私は……」

「気が付いたようだな……」

「私は、今まで……何を？」

「それをこれから説明してやる……」

俺はドゥーエに今までのことを説明した。

自分はクアットロに操られていたこと。

それによってスクライア司書長を暗殺しようとしたこと。

そして、推測だが残りのナンバーズにも、同じものが埋め込まれている可能性があること。

「そ、それじゃ……。ウーノ姉さんや妹たちも……」

「十中八九間違いないだろうな……」

「何なの……。それじゃ……。私はいいように操られてきたって事なの。そんな……」  
「ドゥーエ……」

これではつきりした。

この世界の戦闘機人は、全てが悪というわけではない。

あのクアットロが裏から操っていたんだ。

「スクライア司書長……」

「分かっているよ……。僕からはこれ以上いうつもりはないよ……」

「すみません……。感謝します……」

スクライア司書長は自分が暗殺されそうだったのに、ドゥーエを許してくれた。やっぱり伊達にその若さで、無限書庫の司書長はしていないな。

「そのかわり、君の事を全て聞かせてもらうよ。それでいいかい……？」

「はい、元々お話しするつもりでしたので、それはかまいません。後、ハラオウン提督にも出来れば……」

「クロノには僕から連絡しておくよ。それとカリムにもね……」

「カリム・グラシアさんにもですか……」

「そうだけど、何か都合が悪い？」

「そう言うわけではないんですが……」

グラシアさんには関係ないのかも知れないけど、ヴィヴィオが生み出す切欠になったのは10年前に、聖王協会から盗み出された聖骸布なんだよな。

まあ、あの人を恨んでもしょうがないんだけどね。

「分かりました、全てお話ししましょう。えつとこの部屋は外部からの傍受対策は……？」

「伊達に最機密を扱う所じゃないよ。そういつた対策は万全だよ……」

「それでは、今から三時間後ここで対談しましょう。時間はそれでいいですか？」

「時間はそれで大丈夫だよ。二人とも今日の夜に会う予定になっていたからね……」

その後ドゥーエは逮捕はせず、あえてもう一度、スクライア司書長の秘書として過ごしてもらうことにした。

これは、スカリエツテイ側を騙す意味もあるが、ドゥーエの瞳を見て、こいつは大丈夫だと判断したからこそその処置でもあった。

三時間後——。

司書長室に俺とスクライア司書長、ハラオウン提督に来てもらった。

「お忙しい所申し訳ありません。自分は機動六課所属フィル・グリード二等陸士であります」

「ああ、ユーノから話は聞いているよ。何でも戦闘機人の一人を倒したそうだね……」

「はい、その辺の話もお話し致しますので、今は……」

「そうだったな……」

少しして、カリム・グラシアさんも聖王教会からやってきて会談が始まった。

「まず、私のことからお話ししなければなりません……。信じられないと思います  
が……。私は……。この世界の人間ではありません」

「それは……どうということなんだい？」

「はい、それは……」

俺は全員に今までのことを話した。

未来でのことを……。

ジェイル・スカリエッティのこと、ゆりかごのこと、そして管理局が負けて、その後  
のこと。

そして過去を変えるために、未来から戻ってきたことも。

話し終わった後は、マリーさんのときと同じく全員が驚きを隠せなかった。

「じゃ、あなたは全てを知っているんですね？ これからのことを……」

「はい……ロシアさん。あなたのレアスキルのごとは詳しくは知りませんが、予言の大体の内容は知っています。『古い結晶と無限の欲望が交わる地、死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる』でしたね……。というよりも体験してきたんですから、当然ですけれどね……」

「そうね……」

「信じがたい話だが……これを見せられてはな……」

ハラオウン提督のいうのはプリムの記録データのことだ。

これは今までの事を残してあるだけでなく、映像データとして残っているのもあったからだ。

それをみて納得してくれたらしい……。

本当は見せたくはなかったんだがな……。



ティア達の死ぬ所なんてな……。

「じゃ……きみの世界では、なのほも……」

「……率直に申し上げます、スクライア司書長。ゆりかご決戦で、機動六課のメンバーで生き残ったのは、自分とスバル・ナカジマとティアナ・ランスターの3人だけでした」

「……そう」

「……皆さんに話したのは……もうこんな悲劇を繰り返したくないからです。……お願いです。皆さんの力を貸して下さい!!」

俺は頭を下げてお願いするしかなかった。こんな話信じてくれないのが当たり前だ。それでも一人で出来ることはたがが知れている……。

今回だって、たまたまうまくいったに過ぎない。

「頭を上げてよ……ファイル」

「スクライア司書長？」

「君が嘘やデタラメを言っていないことは目を見れば分かるよ……。それに僕を命がけで助けてくれたんだしね……」

「ああ、未来がどうこうでなく、君はユーノを命を懸けて守ってくれた。それは芝居なんかで出来る事じゃない」

「ハラオウン提督……」

「私もこれからのことを知っているとかでなく、あなたの心は信じられるわ。だから私達はあなたを全面的にバックアップします」

「グラシアさん」

「皆さん……ありがとうございます」

\* \* \*

「それで、これからどうするんだい……?」

「はい……皆さんにはそれぞれ、お願いしたいことがあります……。特にハラオウン提督には、かなり無茶なことをお願いすることになります……」

「まあ……そうなると思ってたよ……。で、何をして欲しいんだい？」  
「……………アースラを確保して欲しいんです。あれが最後の戦いでキーになると思いますので……………」

最後の決戦で、最後まで戦えたのはアースラ一隻だった。  
おそらく、今回もあの船が鍵になる。

「それはかまわないが……………別にアースラでなくても、もっと強力な戦艦だつてあるのに？」

「確かにクラウディアを始め、もっと強力な戦艦はあります。ましてやアースラは、廃艦寸前なものですしね……………」

「それだつたら、なぜ……………？」

「あんまりこちらの動きを見せないようにすることと、アースラの方がミッドで戦う場合、動きやすいんです」

XV級戦艦は火力はあるが、小回りがきかないので機動六課のメンツで使うには、あのくらいで丁度いい。それと強力な戦艦を表沙汰で用意して、あまりこつちの動きを知

られたくない。

それにアルカンシエルは積んだままなので改修すれば、まだまだ戦えるしな——

「あと、XV級をこちらに廻してもらおうより、そのほかの補給物資を充実させたいんです……。例えば……」

他にも輸送用のヘリじゃなく、戦闘用のを一機でもいいので回して欲しいし、前から考えていたアースラの大改造をすれば少しは優位に戦える。

「なるほどな……。それならXV級を回すより安くすむし、効果的だ……。しかし、良く戦えたよな。輸送用のヘリで……」

「ええ、未来でスバル達が生き残ったのも、正直奇跡ですよ……」

武装も無しで、ガジェットの群れの中に突撃するなんて自殺行為に等しい。せめて自衛が出来る程度の武装は欲しい。

「この件に関してはおまかせしてくれ……。全部で何時までに間に合わせればいいんだ？」  
「今が5月ですから……。遅くとも8月末までにはアースラの改修も終わらせないと……。改修のプランはマリーさんと俺が中心となってやります」  
「分かった、欲しいものがあつたら言ってくれ……。あと僕の話はクロノでいい……」  
「ありがとうございます、クロノ提督……」

クロノ提督の方はこれで充分だ。

後はスクライア司書長には聖王のことと、ゆりかごのことを調べてもらわないとな。

「それでスクライア司書長には……」

「分かってるよ……。ゆりかごのことと、聖王のことについてだね……」

「はい、ゆりかごの能力は一部しか知りません。もしかすると無限書庫に、弱点が書かれたものがあるかも知れませんが……。現にスカリエツティも、それを恐れていたんですから……」

未来でも、クアットロとスカリエツティが恐れていたのはゆりかごに関する情報だ。

だからこそ無限書庫を真つ先に狙ってきたんだから——。

「任せてよ……。なのは達は絶対死なせないから……。僕に出来ることは全力でサポートするよ……。それと僕もユーノでいいよ」

「はい、ユーノ司書長」

「フィルさん、一つ聞いてもいいかしら？」

「はい、グラフィアさん……。何でしょうか？」

「それだけ分かっているのなら、スカリエツティの基地に乗り込むなりすればいいのでは……」

それは真つ先に考えたのだが、調べてみたら基地の位置が前回と違うのだ。

おそらく、これは世界の修正力が働いているのだろう。

それに相手はあのスカリエツティとクアットロだ。二重三重の策は用意してあると思う。

「確かにそれは考えましたが、調べてみましたら基地の位置が以前とは違うのです……」

「それですと、かえってこちらから動くのは危険ですね……」

「はい……残念ながら……」

「ごめんなさい……。すでにやれることはやっていたんですね……」

「ですから、グラシアさんには教会騎士団の戦力アップを図って欲しいんです。正直、戦闘機人に対抗出来るのが、シスターシャツハだけというのは心持ちません……」

聖王教会にもそれなりに強い人たちはいるんだけど、一対一の戦いになれている騎士には多人数に対する戦闘経験が少なすぎる。

「わかりました……。それと私もカリムでかまいませんよ」

「えっ……？ で、ですが……」

「あら、お二人は名前で呼んで、私は駄目なんですか？」

「そうじゃないんですが……女性を名前で呼ぶのは慣れて無くて……」

元々俺は、女性に対して話をするのが下手な性格だ。

まして名前で呼べるのは、ティア達くらいだし――。

「でも、機動六課の皆さんは名前で呼んでますよね……。それとも私は仲間ではありま

せんか?」

「……分かりました……俺の負けです……カ、カリム……さん……」

「少しずつ慣れて下さればいいですよ、フィルさん……」

カリムさんは笑顔で言っているが、どうにも年上の女性には頭が上がないんだよな。

なのはさんといい、フエイトさんといい……。

「あと、申し訳ありませんが、機動六課にはまだ内密にしてもらえませんか……」

「……なるほどな」

どうやらクロノ提督は分かってくれたみたいだ。

「どういう事ですか、クロノ提督?」

「いくつか理由があるが、フォワード陣が君に頼りすぎないようにすることが主な目的かな」

「そう……ですね」



それも一つの理由だけど、何より――。

俺自身がまだみんなに話す勇気がないから――。

「分かった……。こちらからは何も言わないよ」

「すみません……」

それからしばらくして会談は終了となり、俺はマリーさんの所へ向かった。

\* \* \*

「というわけで、機動六課の後見人の方々には全てを話しました」

「これでアースラは確保出来るね……。でも、この改修プランは殆ど作り直しに近いよ

……」

アースラの改修プランは――。

まず前後左右に対空砲撃用の砲門の追加。

これは前にしかない砲門では対応が仕切れないからだ。

エンジンの強化は速度アップがねらいで、内部コンピュータの独立化は本局と地上本部が機能停止しても戦えるようにするためだ。

装甲板の総取替は劣化してしまっている部分を直す意味がある。

だが、何よりも必要なのは――。

「アルカンシエルの出力アップ……。これが一番きついな……。正直、予定の期間で間に合うかどうかよ……」

「でもやるしかないんです……。最悪アースラだけで、戦うかも知れない状況も、充分考えられるので……」

「そうね……。少しずつ変わってきているしね……。スクライア司書長が殺されなかったことが、どう変わってくるか……。よね」

これが良い方向に変わるのか。それとも――。

いや、例え悪い方向に向かうとしても、ユーノさんの命が救えたんだ。それだけでも充分だ。

「そうですね……」

「あつ、フィル君。ロードサンダーは置いてつてね。改造するから……」

「……えっ……今……何と……?」

「だから改造するって言ったのよ」

「ちよつと待つて下さい!! どうやって六課まで帰ればいいんですか」

マリーさん、あんた何軽いノリで言ってるんですか!!

ロードサンダーは、俺の大切な相棒だつてのに!!

「大丈夫、代わりのバイクは用意してあるよ。それに、この改造は必要になつてくると思うの。これを見て……」

マリーさんはスクリーンにロードサンダーの改造プランを映し出した。

そこにはAMF下での行動に対応するための、さまざまな強化プランが記されていた。

なんか物騒な大砲が付いてるのは気になる。

でもこのプランは、どこかで見たことがあるが……？

「こ、これって……もしかして!？」

「そう、プリムの中にあつた改造プランをもとに、私が作ったものよ。基本は出来ていたけど、変形機構と転送システムが未完成だったから、私が考えてみたの」

ロードサンダーの改造プランはある程度はあつたのだが、変形システムと部品転送システムが、どうしても駄目だったので諦めていた。

「変形機構のプログラムは、プリムかクロスミラージュのAIを使うことで解決したわ。作動させる時にデバイスを使えばシステムは動くわ。変形後のオプションは、六課のコンピュータかアースラのを使えば転送可能になるよ」

「この手があつたか……」

「でも、ロードサンダー本体もAIを組み込む必要があるので、約一月ぐらい掛かるの

……」

「分かりました。ロードサンダーのこと、よろしくお願いします……」

「任せてね……。君の大切な相棒は完璧に仕上げるから……」

サンダー、お前がより強くなって戻ってくるのを待ってるからな――。

「それじゃ、そろそろ六課に戻りますね……。みんな帰って来る頃ですし……」

「フィル君!!」

帰ろうとしたとき、マリーさんに呼び止められ――。

「戦いが終わったら……メカニックマイスターの資格、本気で考えてみない……」

「……そうですね。平和になったら……色々と考えてもいいかも知れませんか……」

そんな時が来るのを、心から願う。

みんなが笑顔でいられる世界を――。

「その時は、私が見つちりと仕込んであげるから!!」

「ははっ……お手柔らかにお願いします……」

本当に平和になり、そんなことを考えられるようになったらいいな……。

何としてもこの戦い勝たないとな。

## 第8話 ホテル・アグスタ

ユーノ司書長暗殺未遂事件から数日後、機動六課はホテルアグスタで行われる、オークシヨンの警備に当たることになった。

——この時なんだよな。

ティアが思い詰めてしまう切欠になるのは——。

地球から戻ってきた時も、どことなくおかしかったからな。

ホテルの警備前にスカリエツティのことを、ここではじめて俺たちに話されるが、いくらなんでも、もう少し早く言って欲しい。

実際戦っているのは俺たちなんだし、その辺は言ってくれてもいいと思う。

少し違う話になるが、訓練も基礎が大事なものは分かるけど、なにも目標がないのと、明確な目標を持つて行うのでは意味が違ってくる。

このアグスタのことだって……もうフォワード達と隊長陣がもう少しお互いに話していれば、あんな事にはならなかったはずだ。

\* \* \*

—ホテル・アグスタ裏口—

俺たちはホテルの外でそれぞれ警備をしている。

ただ俺とティアはそれぞれ別の位置に配属になっている。

センチガードが同じ所に二人いてもしょうがないのは分かっている。

だけど、今のティアのことを考えると——。

そんな中ティアから念話が入って来た。

(そっちはどう……?)

(特に今のところは変わりなしかな……。どうしたんだ? いきなり念話なんて……)



(ちよつとね……ねえ、フィル。あんたは八神部隊長のこととか、結構知っているわよね……)

(まあ……それなりかな……。でもティアが知っている程度のことだ。俺たちの階級じゃレアスキルの機密事項は、そんなに知ることは出来ないからな……)

(そう……なんだけどね……)

(ティア……もし、何か悩んでいるならいつてくれよ……一人で抱え込むなよ……)  
(そんなんじゃないから……大丈夫よ……)

そう言つてティアからの念話は切られた。

やっぱり抱え込んでいるな……。でも、今のティアには言葉は逆効果だ。  
事の成り行きは流れに任せるしかない。

ティア……無茶はするなよ……。

お前は決して凡人なんかじゃないんだからな……。

\* \* \*

あたしはフィルとの念話を切り少し考え事をしていた。

この六課の戦力は、はつきり言って無敵を通り越して異常だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったか知らないけど、隊長格全員がオーバース。副隊長でもニアSランク。

他の隊員達だつて前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。

あの歳でもうBランクを取っているエリオと、レアで強力な竜召喚師のキャロはフェイトさんの秘蔵っ子。

危なっかしくはあつても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

そして――。

同じセンターガードだけど、あたしよりもうまく立ち回り、デバイスマイスター並みの知識のあるフィル。

六課で凡人なのは……あたしだけか……。

だけどそんなのは関係ない。あたしは立ち止まる訳にはいかないんだ…………。

そんな時、山中からガジェットがホテルに向かって進行してきていた。

\* \* \*

「クラールヴィントのセンサーに反応。シャーリー!!」

「はい、来ましたよ。ガジェットドローン、陸戦Ⅰ型。機影30…………35…………」

「陸戦Ⅲ型…………2…………3…………4…………」

シグナム副隊長とザファイラといっしょに警備をしていたが、ロングアーチからの連絡を受け、僕達は副隊長の指示に従うことになった。

「エリオ、キャロお前達は上に上げられ。ティアナの指揮でホテル前に防衛ラインの設置をする」

「はい!!」

「ザファイラは私と迎撃にでるぞ」

「心得た」

「えっ、ザファイラって喋れたの……？」

「びっくり……」

「守りの要はお前達だ……。頼むぞ……」

「う、うん……」

「頑張る……」

\* \* \*

「前線各員へ、状況は広域防御戦です。ロングアーチーの総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います」

「スターズ3、了解!!」

「ライトニングF、了解!!」

「スターズ4………了解!!」

「スターズ5、了解!!　シャマル先生、状況の確認をしたいんで、前線のモニターをこつちに回してくれませんか」

「シャマル先生、こつちも前線のモニターをもらえませんか」

俺とティアはシヤマル先生に、前線のモニターを回してもらおうようにお願いした。とにかく状況を知ることが先決だ。

\* \* \*

「了解、クロスミラージュとプリムに直結するわ……クラールヴィント、お願いね」

《Yes》

(シグナム……ヴィータちゃん……)

シヤマルは建物内で待機しているあたし達に呼びかけ、前線の情報を送ってきた。これである程度の状況を把握出来る。

「おう、スターズ2とライトニング2……出るぞ、シャーリー!!」

「了解、グラーフアイゼン、レヴァンティン、レベル2起動、承認……」

「グラーファイゼン!!」

「レヴァンティン!!」

A c t i v a t i n g

あたしとシグナムは騎士甲冑を身につけ、ガジェット共の殲滅に向かった。  
新人達のところにはいかせはしねえ。あたしが全滅させてやる!!

\* \* \*

「紫電……一閃」

山岳地帯に着いた私は、とりあえずⅢ型を一機殲滅したが、ザファイラやヴィータはどうなったか……。

「……は通さん………てやああああ!!」

ザフィーラが鋼の頸を使い、I型のガジェットの粗方を殲滅する。  
これであらかたは片付いたはずだが――。

\* \* \*

「副隊長達とザフィーラ、すごい……」

「これで……能力リミッター付き……」

「ああ……」

俺たち3人は一旦合流して前線の様子をモニターで確認していた。  
分かってはいたが、相変わらずすごいな。副隊長達……。

ティアの奴、やっぱり気になっているみたいだな……。

落ち着けよ……。

焦ったら自分の力は発揮出来ないぞ……。

\* \* \*

—ホテル前、山道—

「ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア……」

「……ごきげんよう」

「何の用だ……？」

「冷たいね……。近くで状況を見ているんだろ。あのホテルにレリックはなさそうなんだけど、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少しは協力してはくれないかね……君たちなら、実に造作もないことのはずなんだが……」

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ……」

レリックが関わらない限り、俺は余計なことに関わる気は全くない。

「ルーテシアはどうだい。頼まれてくれないかな？」



「……………いいよ」

「優しいな……………今度ぜひ、お茶とお菓子でも奢らせてくれ。君のデバイス『アスクレピオス』に、私が欲しい物のデータを送ったよ」

「……………うん、じゃ……………ごきげんようドクター……………」

「ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ」

スカリエツティとの通信が終わった後、ルーテシアは召喚を行うためコートを脱ぐ。

「いいのか？」

「うん、ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのこと、そんなに嫌いじゃないから……………」

「……………そうか」

「吾は乞う……………」

\*

\*

\*

「どうしたの？ キャロ……」

「近くで誰かが、召喚を使っている……」

わたしはケリユケイオンの反応で、誰かが召喚を使っているのを感じた。  
しかも強力な召喚魔法。

「クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力反応って……」  
「お、大きい……」

ロングアーチのセンサーでも魔力反応をキャッチしていた。  
これはかなりの大きさだ。

\* \* \*

「小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が命を果たせ。召喚インゼクトツーク」

私はアスクレピオスに魔力を注ぎ、召喚呪文を行いインゼクトツークを呼び、ミツシオンを行うことにした。

「ミツシオン……オブジェクトコントロール……。いつてらっしゃい……。気を付けてね……」

召喚虫達は、ガジェットドローンに取り憑き、ホテルの方へ飛んで進行を再開していた。

\* \* \*

取り憑いたガジェットは運動能力も上がり、副隊長陣も少し苦戦をし始めた。単体で行動していたが、私はヴァイターと一旦合流することにした。

「こいつら急に動きが良くなったぞ!？」

「自動機械の動きじゃないな……」

「有人操作に切り替わった？　もしかしてさっきの召喚師の魔法。シグナム、ヴァイター

ちゃん……」

「分かってている……。ヴィータ、ラインまで下がれ。召喚師がいるなら、新人達のもとに回りこまれるかもしれない」

もし、あつちに行かれたら、フォローするのは難しくなってくる。

その前になんとかこいつらを叩かなければ!!

「わ、わかった……」

「ザファイラ……シグナムと合流して……」

「心得た」

\* \* \*

―スカリエツテイ、基地内―

「やはりすばらしい。彼女の能力は……」

「極少の召喚虫による無機物自動操作、シユテーレ・ゲネゲン……」

「それも彼女の能力の一端に過ぎないがね……」

これくらいのこと、ほんの序の口さ。

本番はこれからだよ——。

\* \* \*

—ホテル前、山道—

「ブンターヴィヒト……オブジェクト1機、転送移動」

私はガジェットをホテル前に転送し、おとりをしてもらうことにした。

その間にホテルの中にあるドクターの頼まれたものを探した。

「ドクターの捜し物も見つけた。ガリユーちよつとお願いしている。じやまな子はインゼクト達が引きつけてくれる。荷物を確保して……」

私はガリユーをホテルにとばし、捜し物を回収することにした。

\* \* \*

—ホテル前—

「遠隔召喚……来ます」

キャロの声と同時に、召喚魔法陣が四つ現れガジェットが数機出て来た。こいつらは今までのガジェット違うはずだ。訓練と同じと思っていたらやられる。

「あれって、召喚魔法陣……」

「召喚ってこんな事も出来るの……」

「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんだ。エリオ、スバル気を抜くなよ」  
「何でもいいわ。迎撃行くわよ」

「「おう!!」」

「さて、少し冷静になれ。闇雲に突っ込んでも倒せないぞ」

俺たちがバラバラに戦っても勝ち目がない。

チームワークでやらなきゃ勝てる物も勝てないぞ!!

「ファイルは黙ってて。今はあたしの指揮に従って!!」

（今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、あたしはそれでい  
つもやってきた）

ティアはバレットを撃っているが、あれじゃ闇雲に撃っているだけで意味がない。

訓練でもあんなミスはしなかったのに、完全に頭に血がのぼっちまっている。

「防衛ライン、もう少し持ちこたえていてね。ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから

……」

「シャマル先生、守ってばかりじゃ行き詰まります。ちゃんと敵機を落とします」

「ちよ、ティアナ大丈夫!? 無茶しないで……」

「大丈夫です、シャーリーさん。毎日朝晩練習してきていますから」

「エリオ、センターに下がって。あたしとスバルのツートップで行く」

「は、はい!!」

「スバル、クロスシフトA。いくわよ!!」

「おう!!」

「やめろ、今の状況でクロスシフトは危険だ。戻れ!!」

俺の制止の声も聞かず、スバルとティアは先行しクロスシフトの体勢になった。

これじゃ前の時と同じだ。スバルへの誤射が起きてしまう。

しかも今度は、ヴィータ副隊長が間に合うかは分からない。

「エリオ、済まないが、キャロといっしょにその場を守ってくれ。俺はあの二人を止める。このままじゃ取り返しが付かないことが起きる!!」

「えっ、それって何なんですか……?」



「ティアの奴、冷静さを欠いてしまっている。このままじゃ、味方のスバルを打ち落とすことも考えられる。その前に止める!!」

俺はエリオ達に防衛ラインの死守を任せ、ティア達のもとに向かった。  
間に合ってくれよ……。

(証明するんだ……。特別な魔力や才能が無くたって……。一流の隊長達や部隊だつて……。どんな危険な戦いだつて……)

「あたしは……ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだつて……」

スバルがウイングロードでガジェットを引きつけてくれている。

あたしはクロスミラーージュのカートリッジを四発ロードし13個の誘導弾を作った。  
訓練でもやったことがないけど、やってみせる。

\* \* \*

（まずいぞ、ティアの奴、限界以上の能力を使ってやがる。あの数じゃ今のティアじゃ制御はできない。シャーリーさんの注意も聞いてないみたいだし、このままじゃ……）

もう、すでに誘導弾の発射態勢になってる。

しかも、13発も一気に撃とうとしてやがる——。

今のティアの精神状態じゃ絶対にミスショットになる。

「待てティア!! 撃つなアアアア!!」

「クロスファイア………シュート!!」

ティアはクロスファイアでガジェットを破壊した後もさらにバレットを乱射していた。

このままじゃスバルに当たってしまう。

まずいぞ、ヴィータ副隊長も間に合うか分からない……。

こうなったら、スバルにあたりそうなのは、こつちが当てるしかない。

「一か八かだ!! プリム、カートリッジロード。プラストシユート、スタンバイ!!」  
《了解です。マスター、今は数よりも精密射撃を優先させましょう。誘導弾の制御は私  
がやります。マスターは発射のタイミグをお願いします》  
「わかった……頼むぞ!!」

そうしているうちに一発のバレットがスバルに向かっていた。  
いかん、あれは確実にスバルに命中する。当たり所が悪ければ、落下して死ぬ可能性  
だつてある。

「間に合つてくれ!! プラスト……シユート!!」

\* \* \*

あたしはティアのクロスファイアをよけながらおとりをしていたが、一発の銃弾が

こつちに向かってきた。

あたしも気付いたのが遅かったので、今からじゃ回避は無理だった。

あたしは喰らうのを覚悟したが、次の瞬間白色の魔力弾がティアの弾丸を撃ち落とし  
ていた。

白色の魔力色……………もしかして……………。

「どうにか間に合ったな……………」

「フィル……………どうして……………？」

エリオ達と、後方を守っていたはずのフィルがどうしてここに？

「どうしてじゃねえ……………。ティア、何であんな無茶をした!!」

「あの……………フィル……………いまのもコンビネーションの内……………」

「ふざけるなスバル!! 直撃コースだ、今のは!!」

\* \* \*

そう、今のは明らかに直撃コースだった。

俺が落とさなかつたら、間違いなくスバルは大怪我、もしくはは……。

「違うの、いまのはあたしがいけないの。ティアのせいじゃ……」

「うるせえよ馬鹿共!!」

「ヴィータ副隊長……」

「さっきから黙って聞いてりや、ファイルがいなかったら直撃だったじゃないか。それをぐだぐだ言いやがって……」

「もういい、あとはあたしがやる。二人まとめてすっこんでろ!!」

確かにヴィータ副隊長の言うとおり、いまの二人に戦わせるのは危険すぎる。

「……」

「ファイル、おめえはエリ才達と合流して、防衛ラインの指揮を取れ。あの二人だけじゃ厳しい……」

「でも、ティア達は……」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ。さっさといけ!!」

「……はい」

俺はエリ才達と合流するために、ホテル前に向かった。

前の時もそうだったが、隊長達も副隊長達も注意はしても、ティア達に何のアフターケアをしていない。

確かにこの誤射は大変な事故になりかけていたので、あの判断は正しいと思う。

でも、その後もほったらかしにされたんじゃ……。

前から思っていたが、ティアは隊長達みたいに、強い魔力を持っている訳じゃないんだ。

その辺を理解しない限り、なのはさん達は永遠にティアの気持ちは判らないかもしれない——。

\* \* \*

「うん、ガリユー……ミツシヨンクリアだよ。じゃ、そのままドクターに届けてあげて……」

「品物は何だったんだ……?」

「分かんない。オークションに出す品物でなく、密輸品みたいだけど……」  
「そうか……」

ホテルの方を見ると爆炎も収まり、戦いの終わりを告げていた。

「戦いも、もう終わりだ。前線の騎士達がなかなか良い戦いをした。さて、お前の捜し物に戻るとしよう……」

「……うん」

\*

\*

\*

ガジェットの方は増援の方ではなく、副隊長達が全機撃墜をした。

召喚師の方は追い切れなかったみたいだが、いるのが分かっていたら対策は立てられる。

「そういえばティアナは……？」

「はい、裏手の警備に……」

「スバルさんも一緒に……」

「……」

ヴィータ副隊長は何か煮え切らない表情をしていたが、今はティア達のことだ。

俺はすぐにもティアの側に行きたかったが、スバルもいるし、何より今声をかけてもきつと届かないと思う。

今回のことでティアの心には、深い傷が残ってしまった——。  
こうなるって分かっていたのに——。  
なにやってるんだよ俺は——。



\* \* \*

「ティアア……向こう終わったみたいだよ……」

「……………あたしはここを警備している。あんたはあっちに行きなさいよ……」

「あのね……ティアア……」

「いいから行って……」

「ティアア……全然悪くないよ。あたしがもつとちやんと……」

「行けっていつてんでしょ!!」

「っ!!……………ごめんね……また……後でね……ティアア」

そういつてスバルは立ち去った。

正直、今は誰とも顔を合わせたくない。

「あたしは……あたしは……」

あたしはもう、いたたまれなくなり……………ただ声を殺して泣きたかった。

兄さん……。

あたしは何も証明出来ないの……。

やっぱり凡人は何も出来ないの……。

教えてよ……。

——兄さん。

## 第9話 互いの思いとフィルの思い

「えつと……報告は以上かな。現場検証は調査班がやってくれるけど、みんなも協力してあげてね。しばらく待機して何もないうら撤退だから」

「「はい」」

「で……ティアナは……」

「……」

「ちよつと……わたしとお散歩しようか……」

「……はい」

わたしとティアナはみんなから少し離れ、森の奥に入っていた。

「ここで少し話そうかと思う。」

「失敗しちゃったみたいだね……」

「すみません……一発逸れちゃって……」

「わたしは現場にいなかったし、ヴィータ副隊長に叱られて、もうちゃんと反省している

と思うから、改めて叱ったりはしないけど……」

「ティアナは時々、少し一生懸命すぎるんだよね。それでちよつとヤンチャしちゃうんだ。でもね……」

「ティアナは一人で戦っている訳じゃないんだよ。集団戦でのわたしやティアナのポジションは、前後左右全部が味方なんだから、その意味と今回のミスの理由、ちゃんと考えて同じ事を二度と繰り返さないって、約束出来る？」

「……はい」

「なら、わたしからはそれだけ……約束したからね……」

\* \* \*

「……んっ……ティア……」

「ティア!!」

「……ファイル……スバル……」

「色々……ごめん……。特にファイルには、カバーまでしてもらったのに……」

はあ……やっぱりに気にしていたか……。

確かに無茶はまづかったが、いい加減に切り替えないと自分が参るぞ……。

「ううん、全然……なのはさんに怒られた？」

「少しね……」

「そう……」

なのはさん、絶対曖昧にしてるだろうな……。

優しいのはいいんだけど、なんでティアがああいった行動をしたのか理解しないと意味無いぞ。

「ティア、少し向こうで休んでいいよ。検証の手伝いは、あたしとフィルでやるから……」

「そう言うことだ……お前は少し休め」

「ううん、大ミスまでしてサボりまでしたくはないわよ。一緒にやろ」

「うん!!」

「そうだな」

\* \* \*

「えっと、シャーリーさん……」

「はいな」

「フェイトさんと一緒にいらつしやる方、考古学者のユーノ先生って伺ったんですけど……」

「そう、ユーノ・スクライア先生。時空管理局のデータベース、無限書庫の司書長にして、古代遺跡の発掘や研究で業績を上げている考古学者。局員待遇の民間学者さんってのが、一番しつくり来るかな。なのはさん、フェイトさんの幼なじみなんだって」

「はあ……はっ……」

\* \* \*

「そう……ジュエルシードが……」

「うん……局の保管庫から、地方の施設に貸し出されていて、そこで盗まれちゃったみたい……」

「そっか……」

あのとき、フィルにスカリエッツァのことは聞いているが、やはり高エネルギー体のジュエルシードは目に付けられたという訳か。

おそらくガジェットに組み込まれていたのはコピー品のはずだ。

あれは物が物のだけに量産型に入れる訳はないし、何より数が21しかないのに無駄に使う訳がない。

「まあ、引き続き追跡調査の方はしているし、私がこのまま六課で事件を追っていけば、きつとたどりつくはずだから……」

「……フェイトが追っている……スカリエッツァ？」

「うん……でも、ジュエルシードを見て、懐かしい気持ちも出て来たんだ。寂しいさよな

らもあつたけど、私にとっては、いろんな事の始まりの切欠でもあつたから……」  
「うん……」

—— やっぱりだめだ。

六課隊長陣全員とは言わなくても、せめて、フェイトだけには伝えよう。

—— フィル、あの時君が言っていた気持ちはわかる。

でも、全部抱えこんじやだめだ。

そんなんじや、君がつぶれてしまうから……。

そして、彼女ならきつと君の助けになつてくれるから……。

「フェイト、今から僕が話すことは、まだはやてにもなものにも言わないでね」

「えっ？」

「フィルのことなんだけど……」

\* \* \*



「そ、そんな……それじゃフィルは……」

「これ以上のことは直接フィルから聞いてね。僕も全部知っている訳じゃ無いから……」

「……うん」

ユーノから聞かされたことは驚きを隠すことは出来なかった。

荒唐無稽なことだらけだが、ユーノがこういう顔で嘘をつくことは絶対にならない。ということとは全部本当の話だ。

でも信じられない……フィルが……。

「ユーノ君、フェイトちゃん」

「なのは」

「なのは、丁度良かった。アコーズ査察官が戻られるまで、ユーノ先生の護衛を任されているんだ。交代お願い出来る？」

「うん、了解!!」

「エリオ、キャロ。現場検分を手伝ってくれるかな」

「あつ、はい」

「今、行きます……」

「じゃ、また後でね……」

「うん」

私はエリオとキャロと一緒に、現場検分をするために、なのはにユーノのことを任せ  
た。

「今日は偶然なのかな……」

「うーん、アコース査察官は今回のオークションに、機動六課が護衛に派遣されてくるこ  
とはご存じだったみたいだよ。それで、オークションの見物がらつて事で同行して下  
さったんだ」

「そうだったんだ……」

\* \* \*

—ホテル内喫茶店—

「部隊、うまくいつているみたいだね……」

「うん、アコーズ査察官のお姉さん、カリムが守ってくれているおかげや」

「うん、僕も何か手伝えたらいいんだけどね……」

本当は僕も手伝ってあげないんだけど、今は手が離せない仕事があつて、六課の方に力を貸してあげられない。

「アコーズ査察官は遅刻ときぼりは常習やけど、基本的にはいそがしいんや」

「ひどいや」

「ふふ、カリムも心配しとるんよ。かわいいロツサのこと、いろんな意味で……」

「心配はおあいこだよ。はやてだって、僕とカリムにとっては、妹みたいなものなんだから……」

「うん……あつ、そういうえばロツサ。ユーノ君とはお友達やったん？」

「僕が無限書庫に調べもので行った時に、彼が直々に案内して下さってね。つい最近のことだよ……」

「ふう〜ん」

\* \* \*

—ホテル近郊の森内—

「そういうえばなのは、さつき新人の子に、何か言っていたみたいけど……」

「ユーノ君見てたの？……うん、スターズのパワードの子がね。ちよつと……」

わたしは機密事項に引つかからない程度にユーノ君にさつきのことを話した。最初は穏やかに聞いてくれてたけど、だんだん険しい顔つきになっていった。

「なのは……」

「なに、ユ一ノ君？」

「何で彼女が、そんな無茶をしたか分かる？」

「多分……彼女の過去が、原因じゃないかな……」

「……そう……なのははそう思うんだ……」

「えっ？」

なのははキョトンとした顔で僕のことを見る。

おそろくなのはは……。

「なのは……教導官は、ただ戦闘技術を教えればいいってものじゃないよ……。それと……」

「……みんな、なのは達みたいに、力に恵まれている訳じゃないんだ。その事は忘れないで……」

「分かってるよ、大丈夫……」

——分かってないよ。

さつきあの子に何であんな事をしたのか聞いたの。

人の過去なんて根本にはなっても、今の苦しみと問題が違うよ。

——でも。

これは僕が言うことじゃない。

部外者に近い僕じゃ説得力は無いし、できれば自分で気づいてほしい。

「ユ一ノ君？」

「どうしたの、なのは？」

「なんか……難しい顔をしてたから……」

「何でもないよ……」

時間が経ち、撤収準備が整い機動六課メンバーは隊舎へ戻ってきた。

\* \* \*

「みんな、お疲れ様。じゃあ、今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂でも入ってゆっくりしてね」

「「「はい」」」」

なのはさん達が一足先に隊舎に引き上げ、俺たちもという段階になったとき……。

「……スバル、フィル……」

「あたし、これからちよつと、一人で練習してくるから……」

「自主練？　じゃあ、あたしも付き合うよ」

「あ、じゃあ僕も!!」

「わたしも!!」

「ゆっくりしてねって言われたでしょ……あんた達はゆっくりしてなさい」

「それにスバルも……悪いけど、一人でやりたいから……」

「うん……」

一人でやりたいと言うことは、昼間のことが原因だな。

正直心配だが止めてもやるのなら、こっちで注意しておけばいい。

「ティア……俺は止めないけど、やりすぎはするなよ。コンディションを整えるのも仕事だからな」

「フィール……ありがとう……」

ティアは隊舎に一回戻り、訓練の準備をしに行った。

多分裏でやるんだろうな。

ティア……無理するなよ……。

「フィール……」

「スバル……今は一人にしてやろう。ガムシヤラになるのも、いいのかも知れない」

「だけど……」

「だから、ティアが本当に無茶をしている時は、俺たちが止めればいい。ティアのことを信じてやろうぜ」



「うん、そうだね!!」

「エリオもキャロも悪いが、この件はそつと見守っててくれ。手助けして欲しい時はこつちから言うから……」

「はい!!」

「任せて下さい!!」

エリオもキャロも本当にいい奴だよな。

本当はティアのことが心配で、どうしようもないのに……。

\* \* \*

—六課隊舎内—

「……あのさ……二人とも、ちよつといいか」

ヴィータちゃんから声をかけられ、わたし達は休憩コーナーに移動し、改めてヴィータちゃんの話を聞くことにした。

「訓練中から、時々気になってたんだよ……ティアナのこと」

「うん……」

「強くなりたいたいなんてのは、若い魔導師ならみんなそうだし、ムチャも多少はするもんだけど……時々ちよつと度を越えてる。あいつ……ここに来る前、何かあったのか？」

「うん……実は……」

わたしは話すことに少しためらったが、昼間もユーノ君に聞いてもらっているので、みんなの意見も聞きたく話すことにした。

\* \* \*

―隊舎、女湯―

「ティアさんの……お兄さん？」

「うん……」

湯船につきかりキャロが聞いているが、あたしはこのことを話す時はどうしても暗くなってしまう。

エリオにはフィルが同じ内容を話しているが、フィルの方が辛いんだろうな……。

「執務官志望の、魔導師だったんだけど……ご両親を事故で亡くしてからは、お兄さんがひとりでティアを育ててくれたんだって……」

「だけど……任務中に……」

「亡くなっちゃったんですか……？」

「うん……ティアがまだ10歳の時にね……」

\* \* \*

―隊舎、男湯―

「えっと、ファイルさん。テイアさんのお兄さんのこと知っていますか……？」  
「まあな……。テイーダさんには一時期、俺もお世話になったことがあったんだ。……  
精密射撃の基本はその時にテイーダさんに教えてもらったんだ」

「ファイルさん……」

「でも、そのあとが問題だったんだ……」

「問題って……？」

「それはスバル達と一緒に話すよ。とりあえず上がろう……」

俺たちは風呂から上がって、食堂でキャ口達を待つことにした。

\* \* \*

「ティアナのお兄さん、ティード・ランスタール。当時の階級は一等空尉。所属は首都航空隊……享年21歳」

なのはが目の前にウィンドウを展開し、ティアナの兄貴のデータを表示し説明をする。

「けっこうな、エリートだな……」

「そう……エリートだったから……なんだよね」

「どういうことだ？」

あたしはフェイトの言うことに、ちよつと引つかかる物があった。いつたいたいという事なんだ？

「一等空尉が亡くなった時の任務……逃走中の違法魔導師に、手傷は負わせたんだけど、

取り逃がしちやつてて……」

「まあ、地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで、犯人はその日のうちに取り押さえられたそうなんだけど……」

「その件についてね……。心ない上司がちよつとひどいコメントをして、一時期、問題になつたの……」

「コメントつて……何て……?」

\* \* \*

—六課食堂—

「『犯人を追い詰めながら取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだった』とか……」

「もつと直球に、『任務を失敗した役立たずは』云々とか……」

「ひどい……」

「あんまりです!!」

エリオとキャロは大人達の行ったことに怒りを思えていた。

——ティアはあのとときどんなに傷ついたか。

俺もあの葬儀で、ティーダさんのことをあんな風に言われて憎しみすら覚えた。

まあ、それでもちやんと言ってくれた人もいた。

ティアはもしかして、忘れてしまっているかもしれないけどな。

「当時、ティアはまだ10歳……。 たったひとりの肉親を亡くして、しかもその最後の仕事が無意味で役に立たなかったなんて言われて……。 あいつはすごく傷ついたんだ……」  
「だから、ティアは証明するんだって……。 お兄さんが教えてくれた魔法は、役立たずなんかじゃないって……。 どんな場所でも、どんな任務でもこなせるって……」

「それで……。 残された夢を……。 ティーダさんが叶えられないで、終わってしまった執務官になるって夢を叶えるんだって……。 ティアが……。 あいつが、あんなに一生懸命で必死なのは、そのせいなんだ」

\*  
\*  
\*

―夜間、隊舎裏―

俺が様子を見に行ってみると、ティアはまだ裏庭でのトレーニングを続けていた。

周囲にターゲットとして配置し魔力スフィアが多数。その中のどれかひとつがランダムに発光する仕組みになっていて、発光したスフィアに素早く照準を合わせる。

そうすることで、ターゲットイングの速さと正確さを高めることを目的とした訓練である。

俺はティアに近づこうとしたが、ヴァイス陸曹が同じように様子を見ていたみたいで一旦様子を見ることにした。



「もう4時間も続けてるぜ。いい加減倒れるぞ……」

「ヴァイス陸曹……見てたんですか……?」

「ヘリの整備中に、スコープでチラチラとな……」

「ミスショットが悔しいのはわかるけどよ……精密射撃型のスキルはそうホイホイうまくなるもんでもねえし、ムリな詰め込みで妙なクセを付けんのもよくねえぞ」

「……つて、昔なのはさんが言ってたんだよ。俺はなのはさんやシグナム姐さん達とは、割と古い付き合いでな」

ヴァイス陸曹の言い方には、何か実体験を感じさせる物があった。

確かヴァイス陸曹は……。

「それでも……詰め込んで練習しないと、上手くならないんです。……凡人なもので

……」

「凡人か……。俺からすりや、お前は充分に優秀なんだがな……うらやましいくらいだ

……」

「まつ……邪魔する気はないけどよ。お前らは体が資本なんだ。体調には気いつかえよ  
……」

「ありがとうございます……。大丈夫ですから……」

とりあえずヴァイス陸曹が殆ど言ってくれたので、俺は隊舎の方へ戻ることにした。でも、このままじゃ前の時と同じだ。

《マスター、まさかティアアさん達の自主練、一緒にやる気じゃないですよね!》

「それは……」

《絶対にダメですよ!! 忘れたんですか!! 女神に言われた世界の修正力のことを!!》

——世界の修正力。

それは、女神から言われた歴史を修正するうえで最も大事なこと。

「だけど、このままじゃティアアもなのはさんもどっちも……」

《気持ちはよくわかります。でも、八神部隊長のこと、ユーノさんのこと、これだけ歴史を変えてしまってるんです。これ以上下手に動いてしまつたら、最悪のことになること

だつて……」

—— だけど。

ゆりかご決戦後のティアの、あの悲痛な思いは今でも忘れない。

『あの時……もう少しクロスレンジの技術があつたら、もう少し早く戦闘機人を倒せて、エリオ達を助けにいったかもしれないのにね……』

あの時のティアの涙は本当に辛かった——。

もし、例えなのはさんに言つても、ティアを上手く説得してくれなかつたら結果は前回と同じだ。

いや、下手をすれば完全にこじれてしまい取り返しが付かない事態になりかねない。アグスタの時のなのはさんの感じを見ると、駄目だろうな——。

「……結局、俺は何もできない。これじゃ、何のために戻ってきたんだ……」

\*

\*

\*

## 翌朝

「ティア、起きて……ティア……」

「あっ……ごめん……起きた……」

「練習行けそう？」

「……行く」

正直眠くて仕方がないけど、特訓をしなきゃ……。

凡人のあたしにはそれしかできないから――。

「そう……じゃ、トレーニング服」

「ありがとう……」

「さて。じゃ、あたしも……」

「つて、なんであんなまで!!」

何かごく普通に会話していたが、どうしてスバルまで……。

「一人より二人の方が、いろんな練習できるしね。あたしも付き合う」

「いいわよ、平気だから……あたしに付き合ったら、まともに休めないわよ」

「知ってるでしょ。あたし、日常行動だけなら4、5日寝なくても平気だつて」

「日常じゃないでしょう。あんたの訓練は特にキツイんだから、ちゃんと寝なさいよ」

スバルの訓練は正直ハードそのもの。

例えスバルの身体が頑丈でも身が持たなくなる。

「嫌だよ」

「あたしとティアはコンビなんだから。一緒にがんばるの!!」

「……勝手にすれば」

「うん」

\* \* \*

—六課隊舎裏庭—

「で、ティアアの考えてることって？」

「短期間で、とりあえず現状戦力をアツプさせる方法。うまくできれば、あんたとのコンビネーションの幅もグツと広がるし、エリオやキャロのフォローも、もつとできる……」

「ティアア……いったいどうするの？」

「実はね……」

幻術は切り札にはならないし、中距離から撃つてただけじゃ、それが通用しなくなつた時に必ず行き詰まる……。

だから新しい技を身につけたい……。

「何かわくわくするね」

「そうね……」

\* \* \*

―六課隊舎前―

「ふう、何とか今日の仕事も終わった……」

私はエリオ達の訓練を見た後、スカリエツィのことを調べていた。

アグスタ事件の後、ずっと私はユーノの話はずっと考えている。

フィルのことを聞かされ、正直戸惑いが隠せなかった。

そんなことを考えていると、隊舎裏から射撃音が聞こえてきた。

「今のつて射撃の音だよね。いったい誰が？」

気になって裏庭に言ってみると、ティアナ達がこんな夜遅くまで自主練をしていた。

「ティアナ、それにスバルまで……!?!」

何でこんな無茶なことをやっているの。

昼間のなのはその訓練で身体がボロボロになっているのに……。

しかも今やっている内容は普段の逆、ティアナが近接戦闘の要になっている。これじゃなのはが教えていることの全くの逆だ。

確かに間違いじゃないんだけど、今のティアナ達の技量じゃ……。

しばらくすると、自主練を終了してティアナとスバルが隊舎に戻っていった。

「そこで隠れていないで、出てきたらどうですか。フエイトさん」

「フィル!?! いつからそこにいたの!?!」

フィルがいたのに全く気配を感じなかった。



私だって、気配を察知するスキルは持つてるのに!!

\* \* \*

「自主練の最初からですよ。これで一週間繰り返し返してますよ。フェイトさんのその様子じゃ、結構前から見ていたみたいですね……」

「フィル、貴方がいてなぜこんな無茶をさせるの。こんなことをやって身体を壊したんじゃない、取り返しが付かないことになるよ!!」

「……わかってますよ。それは」

そんなことは、フェイトさんに言われるまでもない。

こんな事を繰り返してたら、完全につぶれてしまう。

だけど――。

「だったら何で!?!」

「……たとえ間違っただけでも、時には足掻くしかないときがあるんです。特に俺やティアみたいなタイプは」

そうさ、俺はなのはさんたちみたいに天才じゃない。

ティアはともかく、俺は完全な凡人だ。

「……今ここで止めても、ティアナ達、またやるよね」

「ええ、止めるのは出来ません。だけど、自分で本当に納得しない限り、また同じ事をします。お願いです!! もう少しだけ、ティア達の好きなようにやらせてください!!」

本当なら、一緒に付き合っただけでティアたちと一緒にいたい。

でも、それは今の俺には許されていないから——。

そして、今ティア達に言っても、きっと元の木阿弥になってしまうから。

「……分かった。ファイルを信じて、このことは今は、私の胸の内に納めておくね。でも、最悪のことになる前に必ず止めること!! 止められないときは私に報告してね。私が何とかするから……」

「……フェイトさん、ありがとうございます」

こんな事、フェイトさんの立場だったら見過ごせないレベルだ。だけど、フェイトさんはティア達を、そして俺を信じてくれた。

本当にすみません——。

未来でも、こっちでも……。本当に迷惑掛けっぱなしで……。

「でも、どうしても一つだけ言っておくことが……」

「……ティア達の……フォーメーションのことですね？」

「うん……」

そう、あのフォーメーションは、明らかに今のティア達には向かない物だ。

センターガードのティアが前線に出て、攻撃を仕掛けるのは……。

でも、それ以上に大切なことがある——。

「フェイトさん、センターガードってなんだと思います？」

「えっ?」

「センチターガードってチームの中央に立つて、誰より速く中長距離を制する。確かにそれが第一なんですけど、実際はいろんな所から攻撃も来ますし、その場で立つてなんてやってられないです。そんなことをしてたら蜂の巣になるのがオチです。なのはさんみたいに魔力が高い人は、プロテクションを張りながらとか出来るかもしれないけど、俺たちみたいに魔力が少ない奴らはそんなことは出来やしない」

「それに、単体で戦う時はそんな固定砲台みたいなことをやっていたら、あつという間にやられてしまう。なのはさんの考え方は、味方が必ずいるという前提の考え方だ」  
「それは……」

なのはさんの言っていることは、正しくもあるが間違いでもある。

チーム戦でなら、これ以上ないことなんだけど、単体で行動するときはこのセオリーは通用しなくなってくる。

「……なのはさんの気持ちはわかるんです。でも……」

「……そうだよね。『未来』から来たんだから、なのはの事は、私たちから聞かされていても、不思議じゃないよね」

「!？」

「どういことだ!? どうしてフェイトさんから、未来なんて言葉が……。」

「まさか!!」

「ごめん……ユーノから聞いてたの。全部じゃないけど、ある程度のこと……。」

「……そう……ですか……。」

ユーノさん、フェイトさんに言ってしまったんですね——。

いつかはバレることだけど、こんな形ではな……。

「……未来じゃどんなことがあったの。センターガードのティアナ達が前線で戦うほどのことだったの?」

「……あれは……地獄ですよ……。絶望しかないあの世界は……。」

そう、あれは地獄でしかない。

人々が生きる希望をなくし、犯罪者が好き勝手なことをやり、罪もない人が次々と殺

されていく。

「……確か、スカリエッティとの戦いでみんな死んじゃったんだよね。なのはも私も……」

「六課で生き残ったのはスターズの二人と、俺だけだったんですよ。しかも、戦っていくうちにスバル達も死んでしまい……そして、最後はティアまで……。俺が見殺しにしてしまったようなもんですけどね……」

——そうさ。

スバルやギンガさんが死ぬ時も、ティアが死ぬ時も俺は無力だった。

「結局、俺は……誰も守れなかったんですよ……。誰も……」

大事な人は、誰一人守れなかったんだからな——。

\* \* \*

「フィル……」

いつの間にか雨が降り出し、フィルはずっと辛い表情をして立っていた。全身が雨で濡れてるのに傘も差そうとしない。

雨のせいで泣いているのか解らなかつたが、心はずっと泣いていたんだね。

私は、悲痛な表情をしているフィルを抱きしめていた。

今フィルにしてあげられることは、これくらいしかない——。

今にも碎けてしまいそうな、そんな雰囲気だから……。

フィルはずっと一人で戦っていたんだね。

こつちの世界でもティアナ達のことを考えたり、世界のことを考えたり……。

色々とユーノやクロノに協力してもらって居るみたいだが、それはあくまで世界の

ことだ。

フィル自身の心は、ずっと孤独のままなんだ。

仲間を……………。

そして愛する人を亡くしてから……………。

———ずっと独りぼっちだったんだ。

「フィル……………私じゃ駄目かな」

「……………フェイト……………さん？」

「私はフィルの上司だけど、ただ教導するだけじゃないんだよ。だから少しは私を頼って欲しいし、何よりフィルの心の支えになってあげたい……………」

最初は、どことなく気になる男の子だった。

でも、一緒にいるうちに少しずつ興味を持ってきて、フィルのことを知っていくようになって、どうにか助けてあげたくなって……………。



でも、たった一人で抱え込んでしまつて、自分を傷つけてばかりでいて……。心はどんどん孤独でボロボロになつてゐるのに——。

「フィル……。一人で全てを抱え込まないで……。あなたの悲しみも苦しみも、私が一緒に持つてあげる……」

だから——。

一人だなんて思わないで。私もいるんだから……。ね……。

「俺は……。俺は……」

フィルは、ずっと必死に声を殺して泣いていた。今までの苦しみを吐き出すかのように——。

\* \* \*

## 数日後

「悪いわね、クロスミラージュ。あんたのことも、結構酷使しちゃって……」

《お気になさらず》

「明日の模擬戦が終わったら、シャーリーさんかファイルに頼んで、フルメンテしてもらおうから」

《ありがとうございます》

あたしはこんなに乱暴にしているに関わらず、黙って付いてきてくれる相棒に感謝をした。

そうだよね……。

クロスミラージュはファイルが一生懸命考えてくれたデバイスなんだよね。

大事にしてあげなくちゃ……。

「ただいまー」

「ティア。スポーツドリンク、飲む……？」

「ありがとう」

スポーツドリンクを飲みながらあたし達は、明日の模擬戦のことを考えていた。

「明日の模擬戦……いけるかな？」

「成功率は、約6割くらいかな……」

「うん、そんだけあればきつと大丈夫」

「でも……あなたは本当にいいの……？」

「何が？」

「あなたは……憧れのなのはさんに、ある意味逆らうことになる……から……」

「あたしは怒られるのも叱られるのも慣れてるし……逆らってるって言っても、強くなるための努力だもん。ちゃんと成果を出せば、きつとわかってくれるよ。……なのさんは、優しいもん」

「さあ、明日の早朝特訓は最後のおさらい!! 早く寝とこ……」

「うん」

\* \* \*

## 翌日 訓練場

「さーで、じゃあ、午前中のまとめ。2001で模擬戦やるよ!!」

「まずはスターズからやろうか。ファイルはちよつと外れていてね。バリアジャケット、準備して」

「はー」

「エリオとキャロ、ファイルはあたしと見学だ」

「はー」

俺はエリオ達と一緒に近くの廃ビルの屋上に行った。

「やるわよ、スバル!!」

「うん!!」

バリアジャケットをまとった二人はやる気十分だった。

「……あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん……」

フェイトさんが息を切らせながら、走ってこつちにやってきた。

「私も手伝おうと思ってたんだけど……」

「今はスターズの番……」

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思ってただけだね……」

「ああ、なのはも、ここんとこ訓練密度濃いからな……。少し休ませねえとな……」

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ……。訓練メニューを作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり……」

「なのはさん、訓練中もいつも僕達のことを見ててくれるんですね……？」

「ほんとに……ずっと……」

「……」

確かに訓練メニューを真剣に考えてくれていると思う。でも、それだけなんだ……。  
結局今日までスターズの隊長も副隊長も、今日まで特訓については一度も言つてこ  
なかつた。

いくらこつちが気を付けていたとはいえ、オーバーワークには違いなかつた。

ヴィータ副隊長の様子を見ると、不安とかは見られない。考えたくはなかつたが  
……………。

見ててくれるのは訓練の時だけで、それ以外の場所じゃ、ちつともティア達を見てな  
かつた……というにかよ……。

分かるさ。それが社会の常識と言うことくらいは、メンタル面はあくまで自己管理と  
言うことくらいは……………。

だけど……………。

それを認識した瞬間、俺は苛立ちが募っていた。

拳を握りしめ、少し血が出ているが、それ以上に隊長達に悲しみを感じていた。

あの時……事件の後……ティアがどんな気持ちだったと思ってるんだ。

せめて……その事だけでも、聞いて欲しかった……。

俺のそんな様子を感じたのか、フェイトさんがこつちに近づいてきた。

「フィル、気持ちは分かるけど、なのはの気持ちも、分かってあげて……」

「そう……ですね……。すみません。色々……」

「いいよ。結局なのはは、あれから……」

俺は無言で横に首を振った。

「……そう」

「その代わりフェイトさんが、あの日から毎日こつそり、見に来てくれていたみたいですね」

「き、気づいてたの!？」

「二応気配は探れますから……。フェイトさんだつて色々疲れているのに……。本当に嬉しかったです」

あの時——。

フェイトさんに話して本当に良かった。

「言ったでしょう、訓練を見るだけが上司の仕事じゃないって。それにフィルが対応出来なくなったときに、そばにいないくて、何も出来ませんでしたじゃお話にならないしね。何より、あんなフィルを見て、ほっとける訳無いよ……」

「フェイトさん……」

そんな中ティアが、牽制用のクロスファイアを撃とうとしていた。

「クロスファイア……シユート」

「……………ん？　なんか、キレがよくねえな……」

「コントロールは、いいみたいだけど……」



「それにしたって……」

（フィル……）

（ええ……）

俺とフェイトさんは、念話で会話をする。

このクロスファイアはあくまで囮、速度を落として相手に回避運動をさせやすくする。

その分コントロールを重視し、狙い通りの位置に導くのが狙いだ。

なのはさんはウイングロードで、迫ってくるスバルはフェイクだと思っている。

通常なら相手に余力があるのに真つ正面からの攻撃は自殺行為に等しい。

——— だけど。

「!!」

「フェイクじゃない……本物!!」

《Divine Shooter》

放たれた魔力弾はスバルに向かっていくが、プロテクションで対応しそのまま向かっていった。

「うおおおおお……りやあああああ!!」

スバルはダイバインシユーターをしのぐと、リボルバーナツクルとなのはさんの展開したラウンドシールドと激突するが……。

「っ……きやあああ!!」

なのはさんは激突のエネルギーを利用してスバルをはじき飛ばした。

なんとか維持されていたウインググロードの上に着地した。

だが、これは計算尽くの行動だった。

「こら、スバル、ダメだよ。そんな危ない機動!!」

「すいません……。でも、ちゃんと防ぎますから!!」

「ティアナは……?」

\* \* \*

なのはさんはティアを探していたが、さっきのクロスファイアから姿を消している。そんなときなのはさんはクロスミラーージュのレーザーポインターが、頬に当てられているのに気付いた。

「砲撃!? ティアナの奴が!!」

ヴェーータ副隊長がティアの行動に驚いているが、これもフェイクだ。実際の狙いは、なのはさんの意識をスバルから離すことだ。

(特訓の成果……クロスシフトC!!………いくわよ、スバル!!)  
「おうっ!!」

スバルはリボルバーナックルのカートリッジをロードし、咆哮と同時に突撃をかけた。

なのはさんもラウンドシールドで防ぐが、それがあいつらの狙い。

今度のはじき返すことは出来ず、砲撃体制に入っていたティアの方へ視線を向けた。  
しかし……。

「!!」

「あっちのティアさんは幻影……」

「本物は？」

ティアはその間にクロスミラージュのトリガーを引き、カートリッジをロードさせ魔力刃を作り、ウイングロードを駆け上っていく。

\* \* \*

(バリアを斬り裂いて、フィールドを突き抜ける!!)

そう、これが今回のクロスシフト。

空中では戦いにくいあたし達が、なのはさんに対抗するため、フロントアタッカーのスバルが動きを押さえ、あたしが本命の攻撃をたたき込む。

だが、これには欠点もある。現在のあたしでは、なのはさんの防壁を貫ける砲撃は持っていない。

あたしが足止めという考えもあつたが、空で機動力を持たないあたしでは攻撃の手段が限られ、足止めにはならない。したがってスバルしかない。

だけど、魔力を一点集中すれば、あたしでも攻撃出来る。それに懸けた。

対砲撃型魔導師用シフト………クロスシフトC………。

(一撃、必殺!!)

この一撃で防御壁を貫く。全力でやっても破壊出来るかどうかなので、全力でやる。

破壊した後はスバルがフリーになるので、それでとどめの一撃を打てばいい。

「つ、けええええええええ!!」

魔力刃はなのはさんに迫っていた。

が……

「……………レイジングハート、モードリリース……………」

ボソつとつぶやいた瞬間……………爆発が起き、衝撃がこつちまできた。

「なのは!!」

「ティア、スバル!!」

どうなったんだ……………決まったのか……………!?

それとも――。

「……おかしいなあ……二人とも、どうしちやったのかな……」

ティアの魔力刃も、スバルのリボルバーナックルも、なのはさんが直接受け止めていた。

頭上から一撃を加えたティアはその場に留まり、桃色の魔力光に包まれている。おそらくはなのはさんが、浮遊の効果でティアに与えているのだろう。

――だが。

ティアを守っているはずの、なのはさんからは……。

――感情の色が完全に抜けていた。

「がんばってるのはわかるけど……模擬戦はケンカじゃないんだよ……」

その言葉にスバルはハツとし、身動きが取れなくなり……。

「……練習の時だけ言うこと聞いてるフリで、本番でこんな危険なムチャするんなら……練習の意味、ないじゃない……」

次の言葉でティアが息を呑む……。

「……ちゃんとさ、練習どおりやろうよ……」

二人は完全に戦意は消失しているが、さらになのはさんは言葉が続けた。

「ねえ……」

「あ……あああ……」

まるで、二人に言霊を刻み込みかのように――。



「わたしの言ってること……」

「わたしの訓練……そんな間違ってる……」

\* \* \*

「まずいぞ!! このままじゃティアは!!」

なのはさんがやっていることは、明らかにやりすぎだ。  
これ以上は教導の意味はない。

もう、形振りなんて構ってられない。

今、ウイングロードはティアが立っている一直線分しかない。

このまま、なのはさんがティアを落とすと……。

ティアの命はない!!

《Blade erase》

魔力刃を解放し、背後のウイングロードへと飛び移り、ティアはなのはさんへとクロスマイラージユをかまえる。ティアもういい。やめろ……やめるんだ!!

\* \* \*

「あたしは……もう誰も、傷つけないから!! 失いたくないから!! だから……強くなりたんです!!!」

そんなティアの悲痛な叫びも無視し、なのはさんはスフィアを作り……。

「……………少し……………頭……………冷やそうか……………」

「クロスファイア……………」

「わああああああつ!!!……………フロントム、ブレイ」

「……………シュート……………」

ティアのフロントムブレイザーよりも早く、桜色の魔力弾の渦はティアを吹っ飛ばしていた。

「ティア!! つ!! バインド!?!」

「じつとして……………。よく見てなさい……………」

スバルもいつの間にかバインドがかけられ身動きが取れなくなっていた。

さらになのはさんは、さっきと同じクロスファイアをティアに撃つつもりだ。

意識が朦朧としているのに……………。

それでも、残された力で立ち続けるティアに向けて…………。

「っ!!　なのはさん!!」

スバルが悲鳴に誓い叫びでなのはさんに言ったが、全く意に介さず…………。

発射された砲撃は…………。

強大な桜色の閃光となって、ティアに迫るが…………。

「…………はあ…………はあ。な、なんとか間に、あった」

間一髪のところ、自分の身体を盾にして、ティアが砲撃を受けるのを防いだ。

「……………うっ」

どうやら意識はあるみたいだな…………。

ティアの状態を確認すると、俺はなのはさんの方を向いた。

「どういうつもりなの……?」

「それはこつちのセリフです。まだティアを痛めつける気ですか。これ以上は何の意味もない……」

「邪魔……しないで……」

なのはさんはまたティアにクロスファイアを放った。

まずい、完全に切れている。

「ぐっ……ああああああ!!」

俺は自分の身体を盾にしてクロスファイアを受け止めた。

強烈な砲撃を受け、全身がバラバラになるような痛みを襲われる。

ティアの方は俺が盾になっているから大丈夫だけど、そうは持たない。

「どうして邪魔するの……。フィル……」

未だになのはさんは感情が消えた目で俺とティアを見ている。

こんな状態で伝わるか分からないけど、せめて、俺の思いは伝えなきゃ――。

このことに何もしなかった俺自身が許せない。

「なのはさん、ちゃんとティア達に言ったんですか!! 自分の教導の思いを、ちゃんと自

分の言葉で伝えたんですか!!」

「えっ……?」

なのはさんが俺たちのことを思ってくれてるのは分かってるよ。

それは、かつて未来でティアに残してくれたディスクで痛いほど伝わってきたよ――

「なのはさんがやっていることは間違っていないです。だけど、それをちゃんと言葉で伝えようとせず、ただプログラムを組んで、それをやればちゃんと伝わっている。そんな風に思っているんだったら、それは間違いです!! それじゃ何も伝わらないです……」

「あつ……」

「人ってそんな器用じゃないでしょう。思っているだけじゃ、相手には伝わらない。それはよく知っていることでしょう!!」

そうさ——。

黙っていたって、自分の思いは伝わるわけが無いんだ。

なのはさんは俺の言葉を、ただ黙って聞いていた。

「それとティア、お前にもちちゃんと言わなきゃな……」

意識を取り戻したティアに言っておかなくてはならない。

これだけは、今でなければいけないんだ。

「お前が無茶をして、俺みたいに庇う奴が出てくる。身近な相手だと、俺とスバルになる

……」

「あ……ああ……」

「お前が攻撃することを否定してるんじゃない。だけど、仲間がいるんなら、パートナー

を信じろ。でないとも最悪なことが起きて、取り返しが付かないことになる。それがいやなら、もつと練習して実戦で使えるようになってからにしろ。後、強くなりたいなら、何でなのはさん達に相談しなかつたんだ……」

「それは……」

「ティア、人に聞くことは、決して恥なんかじゃないんだ。なのはさんに言いにくかつたら、俺でもよかつたんだぞ。そんなに信用ないか？」

「ごめん……なさい……」

「いや、俺もちゃんと言葉で、言えばよかつたんだ。さっき、自分で言っておいて何だけど、思っているだけじゃ、お前に伝わっていなかつたんだからな……」

「ファイル……」

結局、ティアとなのはさんがこうなったのは、俺のせいじゃないか……。

世界の修正力を恐れて、何もしないでただ見ていただけ。

一番、最低なのは俺だ——。

だけど、後悔するのは後だ。今は……。



「少しは……落ち着きましたか……?」

「うん……」

なのはさんも落ち着きを取り戻したな。

そして、なのはさんにも見せなきやいけない物がある。

「これを……見てください……」

「これは!」

ウインドウを出して見せたのは、もしティアをあのまま墜としていたらのシミュレートだった。

二度目のクロスファイアを放っていた場合、ウイングロードの上には落下せず、地面に激突していた。

しかも仮に助かったとしても、岩が多いところなので、それで失明していた可能性があつたと、プリムのシミュレートでは、はじき出していた。

「そんな……わたしの手で……ティアナを……」

「これはあくまでシミュレートです。けど、これに近い結果にはなつていたと思います……くっ!!」

「ファイル、どうしたの？ えっ……その傷は!？」

さつきの砲撃を受けて、俺の右肩から出血がしていた。

出血はそんなでもないけど、バリアジャケットの防御力を上回ってしまったのか。

リミッターはかかっているけど、オーバーSランクは伊達じゃないってことか。

「……わたしのせいで……ファイルに……」

「大丈夫ですよ……。これくらい、何ともないですから……」

俺が傷つくのはかまわない。

だけど、こんな形でティアナに、そしてなのはさんに、これ以上心の傷を作つて欲しくないから――。

「さつきティアにも言ったんですけど、もう少し自分の周りに相談してください。なの

はさんならフェイトさんや八神部隊長に話せば良いんです。親友って、楽しいときだけじゃなくて、苦しいときも分かち合える物でしょう」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「後でいいですから……ティア達と……話し合ってくださいね。なのはさんの思いとティアの思い、それぞれあると思いますしね……」

「うん……本当にごめんね……」

「じゃ、俺は戻りますね……」

俺はなのはさん達の元を離れ、近くの木陰に移動した。

そこで待っていたのはフェイトさんだった。

「もう……無茶しないの」

「……すみません」

「フィル、どうしたの？」

「もつと早く、俺が行動に移していれば……」

その言葉にフェイトさんは横に首を振って――。

「それは駄目だったと思うよ。今の所、六課で、ファイルのことを知っているのは、私だけでしよう。何も知らない人が、例え、あのことを話しても伝わらないし、結局、遅かれ早かれこうなつたと思うよ」

「……フエイトさん」

「それにね。こういうのは、あまりお節介しすぎても駄目。ちょっと乱暴だけど、意見のぶつかり合いも時には必要だよ……」

「……ありがとうございます」

結局は、俺もティアも、そしてなのはさんも同じだつて事かな——。

思っているだけじゃ、相手には伝わらない。

本当に難しいよ。自分の思いを伝えるのは……。

## 第10話 たいせつなひと

「フエイトさん……」

「どうしたの？」

「俺……みんなに全部話そうかと思えます」

あれからずっと考えていた――。

結局、俺が話していなかったから余計に拗れてしまった。

これ以上拗れさせるわけにはいかない。

「そっか……決心したんだね」

「もう隠すことは出来ないと思うし、何より……俺が思っていることも、ちゃんと言葉で伝えなくちゃいけないんです」

正直、いまでも話すのは怖い。

これを話してしまったら、みんなが今までと同じように接してくれるのか？

それとも――。

だけど、例え一人になってもしまっても良い。

みんながまた死んでしまうよりは……ずっと良い――。

「大丈夫だよ。みんなもちやんと分かってくれるよ。だから恐れなくて……」

「ありがとうございます……」

「多分、なのはも夜に、自分の思いをティアナ達に伝えると思うから、その時に話すと良いよ」

\* \* \*

なのはさんが、みんなを集めて、ティア達に自分の過去と、教導の思いを伝えていた。前の時とは違い、本人が自分の言葉で伝えている。

なのはさんはちゃんとティア達に話した。

今度は、俺がみんなに全てを話す番だ。

「部隊長すみません。少しでもお時間をもらいたいですけど……」

「なんか、話があるんか？」

「……みんなに、話しておかきやいけないんです。俺のことを……」

「せやな。話してもらえるか。あの時から正直、気になってたんや。なんであんな力を持つているか、話してくれる」

「はい……」

《マスター、話しにくいのなら、私が……》

「いや……自分で言うよ……。これは俺がしなきゃいけないことだから……」  
《分かりました……》

八神部隊長に頼んで、みんなにその場に残ってもらうようにしてもらい、俺は全てを話すことにした。

「……それでは、お話しいたします。これから話すことは、信じられないかも知れませんが、全部、本当のことです。俺は……」

いぎ話そうとすると、震えが止まらない。

しつかりしろ!! 覚悟を決めたんだろ。

「……俺は……本当は約3年後の未来から……この世界に戻ってきたんです」  
「はあ……何の冗談だ!? それ……ふぎけんのもたいがいにしろよな!!」

ヴィータ副隊長が怒るのは当然だよな。

俺だって、自分がこういう経験してなかったら、なかなか信じないだろう。

「ふぎけてなんかいませんよ……。単刀直入に言いますと……」

「管理局は……機動六課は……スカリエッテイに……負けたんです」

「「「!!」」」」

ここにいる全員が驚愕の表情になる。

特に、キャロに至っては顔が真っ青になってしまっていた。



「それはどういうことや!？」

「口で説明するより、映像を見てもらった方が早いですね……。プリム……」  
《はい……。いいんですね……》

「ああ……。やってくれ……」

スクリーンに映し出されたのは、この世の地獄だった。

地上本部の壊滅――。

聖王のゆりかごの復活――。

蹂躪されていくミッドの街――。

ゆりかご決戦での八神部隊長の最後――。

スカリエッティ基地でのフェイトさんの最後――。

ゆりかご内での戦闘……。

——そして。

なのはさんの最後——。

さらに軌道衛星上にたどりつき、更に力を増していくゆりかご。その後、本局への襲撃。

その後……生き残った俺たちの戦闘記録も……。

自爆で戦闘機人を一緒に道連れにし、最後を迎えたスバルとギンガさん——。

ゆりかご決戦から3年後……。

クアットロを倒したが……その後……。

俺の腕の中で……。

静かに息を引き取ったティア……。

「そして俺はクアットロに心臓を貫かれ、死を迎えるはずだったんですが……あるきっかけでこの時代にいたんです……」

話が終わった時全員顔面蒼白状態になり、何も言えなくなっていた。  
しばらくしてヴィータ副隊長が……。

「なんだよ……なんなんだよ、これは!!」

「ヴィータ……」

「これがこれから起こることだつて言うなら、あたし達のやって来たことは全部無駄つて事かよ!!」

ヴィータ副隊長がこうなるのも無理ない。

俺だつて何度見たつて辛いんだ。

———今でも忘れはしない。

息を引き取る時のみんなの表情は……。

「だけど……。これが未来だつて証拠は？　そして、こんな映像を持っているの……？」  
「その疑問は当たり前ですよね。なのはさん……。その映像は……スカリエツティから送りつけたれた物なんです」

クアットロ———。

あいつが、すべてがあいつがやったこと——。

俺たちに絶望を与えるために、わざと送りつけてきたもの。

ゆりかご内にある記録装置からと、それ以外にも様々な方法で撮っていた。

ティアアやスバルが最初に見た時は涙が止まらなかった。

「それと、これを見て下さい」

そうやって俺が取り出したのは——。

「これって……。まさかレイジングハート!?!」

ひび割れ、一部が欠けてしまった未来でのなのはさんの相棒——。  
レイジングハートだ。

「はい、これのおかげで色々知ることが出来たんです。生き残った俺たちにスカリエツティ達を送りつけてきたんです。エースオブエースを失ったって、心理的にダメージを与えるために……」

だが、皮肉にもそれが俺とティアに力を与えてくれた。

コアに残されていたシステムの情報で、ティアにブラスターを組み込むことが出来たんだからな。

——ただ、最後の戦いでティアは——。

ファイナルリミットまで解放してしまい……命を落としてしまった。

レイジングハートが完全なら、完璧なシステムを作れたかもしれないけど、色々情報が欠けていてあれが精一杯だった。

もつと……。もつと俺に知識があればと今でも悔やんでいる。

「ファイルが色々知っていることには納得した。けどな、あのときファイルが使った魔法は

何や？ こつちが調べた時はそんな力はなかったはずや？」

やっぱり八神部隊長の本題は、こつちがメインだよな。

だけど、こんな荒唐無稽な話しても良いのか？

まあ……。最も、未来から来たって事がすでに、現実から離れてるんだけどな。

「まず、ここから話す必要があります。俺がここにいられるのは……。俺を助けてくれた女神からもらった力のおかげなんです……」

「女神やて!? そんなおとぎ話みたいなの……？」

「事実なんです。現にその力でここに戻ってきたんです……」

あの時、女神に助けてもらわなかったら、こうして過去に来ることも出来なかったんだ。

「それで、そんな力があるんやな」

「はい……。それと……」

「模擬戦の時に、ティアナを助けた時の力だね……」

「そうです……。あれは基本は転移魔法です」

「ちよつと待て!! あたし達も転移くらいは使えるが、お前が使った時は魔法陣すら出ていなかったぞ!! しかもあんな短時間で!! ミッドにしるベルカにしる、魔法の反応があればあたしだって気づいたぞ!!」

ヴィータ副隊長の言うとおり、従来の転移魔法は魔法陣が展開され発動する。だけど、実際俺が使っているのは少し違う。

「俺が使うのは少し違って、これは相手の魔力を感知し、その場所に行く魔法……。瞬間移動、もしくはワープって考えてもらえればいいです」

「瞬間移動!? だから動きが見えなかったんだ……」

「そしてこの魔法の最大の特徴は、相手に気づかれずにアクションを起こせること。だから戦闘時にも動きを察知されにくいんです」

単純に言えば、このスキルは相手の不意を突いて攻撃することが可能だ。だから上手く使えば、格上の相手とも戦うことが出来る。



「……とんでもない魔法だね。まさに戦闘用に特化しているね。もしかして、ファイルの最大の切り札だったんじゃないの？」

「……………確かに切り札の一つなんですけどね」

あの時はそんなことを言ってられなかった——。  
あそこで動かなかつたら、俺は一生後悔していたから。

「それでリミットを解除した時のファイルは、どのくらい魔力があるんや…………？」

「多分、AA＋くらいです……。未来でもそのくらいでしたし、元々の魔力は殆ど上がっていないんです……」

「それに、女神からもらった力はまだ完全に物にしていなくて、おまけに時間制限があります。完全に使いこなすには、もっと訓練が必要なんです……」

現在の使用時間は約15分くらいが限度だ。

簡単に言えば、タンクに水はたくさんあるが、それを調節する蛇口が細すぎて、全開にしても普通の状態といえれば良いかもしれない。

女神は訓練をすれば、完全に自分の物になるって言うってたけど、もう少し時間が掛か

るな。

「やっと……分かったよ。なんでファイルが、ティアナ達のクロスレンジの練習をしていたのを、止めなかったのが……」

俺だって、今のティア達がクロスの練習するのは早いと思っていた。けど、やらなきゃ納得しないことだってある。

その繰り返しで俺たちは強くなっていったんだ——。

「見てもらって分かったと思いますが、あの世界では……生きるか死ぬかだった……」

「スバル達を失った俺とティアは、クロスレンジを覚えるしかなかった……。時にはガードウイングもやったし、フルバックの役目だってやるしかなかったんです……」

たった二人で戦うには、どんなことだってやるしかなかった——。  
一か八かの斬り合いにもなったし、それこそ何度も死にかけた。

「……………ファイルは知ってたんだね。だから訓練中に時々、悲しみが混じった表情になつてたんだね」

「はい……………」

「本当にごめんなさい……………。これじゃ、教官として失格だよね……………。ティアナ達のこともちろんと見ていなかったし……………」

「失敗は誰だつてします。俺だつてそうです。もつとも俺は、失敗ばかりですけれどね……………」

世界の修正力を恐れて、結局は何もできなかつたんだから。

本当にどうしようもないよ。

「ファイル……………」

「どうしたんですか、シグナム副隊長？」

「本当にすまなかつた。私達はお前達の事を、ちゃんと見ていなかつたんだ……………」

「もう止めましょう。この事はお互い様ですよ。俺だつてみんなに隠していたんですから……………」

そのことで余計な拗れまで生んでしまったんだから――。

「そう……だな……。しかしファイル」

「何ですか……?」

何か嫌な予感がするのは、俺の気のせいか……。

「今度、全力で一対一の模擬戦を……」

「全力で却下します!!」

「むう……なぜだ、お前の本当の力、是非確かめたいのだが……」

「冗談じゃありませんよ、俺を殺す気ですか!!」

何を考えてるんですか。

元々の力は歴然の差なんぞぞ。

近戦専門のシグナム副隊長相手にタイマンなんて冗談じゃない。

それこそ自殺志願者がすることだぞ!!

その後、ヴィータ副隊長にも謝られ、さすがに模擬戦をやれとか言われなかったので、

すごく助かった。

そんなことをやってたら、いつのまにかティアの姿がいなくなっていた。

\* \* \*

ロビーを離れたあたしは、六課施設で海が見える所に来ていた。

なのはさんの教導の思い……。

フィルの経験してきたこと……。

色々なことを聞いて、あたしは頭が整理しきれないでいた。

「……いたんだね……」

「……なのはさん」

「少し……話……してもいいかな？」

「はい……」

そういつてなのはさんは、あたしの横に座って話をし始めた。

「まずはゴメンねティアナ。わたしがすっかり自分の思いを言えてなかったばかりに、辛い思いをさせてしまって……」

「いえ……あたしの方こそすみませんでした。あんな無茶をしてしまって……」

\* \* \*

「ティアとなのはさん、何を話してるんだろう……？」

「そうですね……」

「さつきから二人とも互いに謝ってから、殆ど話をしていないみたいです……」

「3人とも、何のぞき見をしてるんだ」

「「フィル（さん）!?!」」

「趣味悪いことしてるんじゃない……。と、言いたいけど俺も気になってな。結局、俺がティアを追い詰めてしまったような物だからな……」

「フィル……」

フィルっていつもこうだ。

何でも自分で抱えてしまつて、どんなに辛くても人に話そうとしない。

今回、やっと話してくれたけど――。

こんなんじや、いつかフィルがつぶれちゃうよ。

「俺のことよりも、どうやら二人の会話が再開しそうだぞ」

\* \* \*

「じゃ、お互いに謝ったところで、私からちよつとお説教しておこうかな。あのね、ティアナは自分が凡人で射撃と幻術しか出来ないっていうけど、それは大きな間違いだからね」

「えっ……?」

「ティアナもほかのみんなも今はまだ原石の状態。でこぼこだらけだし、本当の価値も分かりづらいけど、だけど磨いていく内にどんどん輝いてくる部分が見えてくる。」

そう、ティアナもみんなもまだ原石の状態。

磨けば光り輝く可能性の秘めた原石――。

「エリオはスピード……」

「キャラは優しい支援魔法……」

「スバルは、クロスレンジの爆発力……」

「フィルは、四人をまとめられる統率力……」

「そしてティアナは、幻術を駆使して、その視野の広さと判断力で、どんな状況でも切り抜ける。最も射撃だけでなく、斬撃も使いこなしていたみたいだね。映像のティアナはそういった感じだったしね」



「なのはさん……」

「そんなチームが理想型で、ゆつくりだけどその形に近付いている……。って、言いたかったんだけど、模擬戦でもう少して、ティアナを自分と同じようにしてしまえばいい。そうになって、それをファイルに止められ……。さらにその後、フェイトちゃんにも言われて……。自分も未熟だなんて気づかされたの」

フェイトちゃんはずっとティアナ達のことを見ていてくれてたんだよね。

フェイトちゃんだって、仕事が大変だったのに――。

\* \* \*

「そして、ティアナ達の考えたことは間違っていないんだよね。現にファイルはクロスミラージユに、そのためのモードを組み込んであるんだし……」

そうやってなのはさんは、クロスミラージユを持って何かをし始めた。

「システムリミッター、テストモードリリース」

《yes》

「命令してみて、モード2つて」

「モード……2……」

《Set up Dagger Mode》

「あつ……」

クロスミラージュがあたしの声に反応してモードチェンジしていく。

変形した姿は、クロスレンジ用のモード——。

「これって……」

「ティアナは執務官志望だもんね。ここを出て執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし、実際にそんな場面が殆どだったみたいだしね。あの記録を見て、それが痛感したよ。ファイルは解っていたんだね。ティアナがこのことで苦しむって、そして少しでも力になってやりたいって……」

「ファイル……なのはさん……」

なのはさんの言葉に、あたしは涙を堪えることが出来なくなっていた。  
ファイルもなのはさんも、それぞれ考え方は違っていても、あたし達のことを常に考え  
てくれていたんだ。

「クロスもロングも、もう少ししてから教えようと思っていた。だけど、出勤は今すぐにもあるかもしれないでしょう。だからもう使いこなせている武器を、もつともつと確実な物にしてあげたかった」

「だけど、私の教導って地味だから、あんまり成果が出ていないように感じて苦しかったんだよね。本当にごめんね、ティアナ……」

「うわあああ……ごめんなさい、本当にごめんなさい……」

\* \* \*

(どうやら、なのはさんとティアは大丈夫だな……)

「ほら3人もいつまでも見ているな。後はそっとしておいてやろう」  
「そうだね……」

「はっ」

スバル達はそういつて自分たちの部屋に戻っていった。

少ししてなのはさん達も、それぞれ自分たちの部屋に戻っていった。

だけど、俺は少し頭を冷やしたい気分になっていた。

\* \* \*

時間が経ち、空気が冷えてきたからか、みんなもなのはさん達も部屋に戻っていった。  
だけど……。

今はこの冷たい空気が、俺の頭を冷やしてくれる。

「……プリム」

《何ですか、マスター?》

「……もしかしたら、過去に戻ってこなかった方が良かったのかもな」

《どういう……事ですか?》

「今回のことも含めいろいろさ……。俺がいることで余計な事まで起きている気がしてならない」

結果的にティアとなのはさんは打ち解けたけど、俺がいなかったら、もっとうまくまとまったんじゃないのか——。

《マスター……》

「本来なら俺は、ロングアーチの一局員でここまでティア達に関わることはなかった。現に歴史もズレが出てきている」

——そうさ。

俺はロングアーチの一人に過ぎなかった。

コンビネーションの練習の時は、ティア達と訓練したりしたが、基本的に裏方の仕事  
が中心だった。

こんな風に表には出てこなかった。

「やっぱり……。俺の存在は……。六課にとって……。そして、ティア達にとって邪魔で  
しかない」

《マスター!!》

「それは間違っているよ……。ファイル」

「えっ?」

後ろから声がして、振り返るとそこに立っていたのはフェイトさんだった。

確かミーティングが終わった後、自分の部屋に戻ったはずなのに――。

「フェイトさん、どうしてここに!?!」

「ファイルだけ帰ってこないから、気になって……………」

時計を見ると夜11時を過ぎていた。

いつの間にかこんな時間になっていたんだな。

俺がいつまでも戻ってこないのに気づいて、ずっと探してくれていたんだ。

「盗み聞きするような真似をしてごめんね……」

「別に……構いませんよ……」

「それはそうと……ファイル」

フエイトさんは右手で俺の頬にそつと触れて――。

「今の言葉は、聞き捨てならないよ。どうしてそんな風に思うの!？」

「……」

「私には……話せないかな……?」

これ以上誰にも迷惑を掛けたくない。

疫病神の俺に関わって何かあったら――。

でも、この人なら話しても――。

\* \* \*

ファイルは、しばらくの間俯いていたけど、振り絞るようにポツリポツリと、自分の気持ちを打ち明けてくれた。

「……怖いんです」

「怖い？」

「今は……何とかうまくいつていると思います。けど……」

「けど？」

「これが原因で俺が知っている結果よりも、最悪なことになるんじゃないかって……色々ズレも出てきている。もう俺が知っている未来じゃない……」

確かにファイルが知っている未来とはかなり違ってきている。

でもね――。



それでも、良い方向に変わってきているんだよ。

「私も……あまり人のことは言えないけど、それ以上にファイルは抱え込みすぎだよ。それと誰がファイルのことを要らないなんて言ったの。そんなこと誰も言っていないよ!!」

《フェイトさんの言うとおりですよ。マスターはマイナス思考になると、トコトンにま  
でなつてしまいます。確かに……あんな世界で生きていたら、そうなるかもしれないま  
せん。でも、ここでは皆さんは生きていますよ!!》

「プリムの言うとおりだよ。ファイルがいなかったらユーノだって助からなかった。なのは達だつて分かり合えた。それはファイルのおかげなんだよ!! だから、そんな風に思わないで!!」

ファイルがいなかったら、私だつてティアナのことを気づいてあげられなかったかもしれない。

ユーノのことだつてそう——。

ファイルが頑張ってくれたから、今こうしていられるんだよ!!

「フェイトさん……プリム……」

「いつか言ったよね。私がフィルの心の支えになれないかって……。その答えを……。聞かせて……」

\* \* \*

フェイトさんの瞳は真剣そのものだった。

その場の雰囲気ですべてるんじゃない。それは瞳を見れば分かる――。

でも、本当に言ってる良いのか？

俺が……人を好きになって良いのか？

「……俺はかつての世界で、貴女のことを……ずっと憧れていました」

ロングアーチの一局員でしかなかった俺にも、フェイトさんは優しくしてくれた。それがどんなに嬉しかったか……。

「そして、こっちに戻ってきてからも、それは同じでした。ティア達の訓練を見守ってくれただけじゃなく、なのはさんと俺がぶつかりあったときも、俺たちを信じて手を出さなideくれた……。」

本当は止めたかったはずなのに、俺たちを信じて飛び出さなideくれた。

俺となのはさん、そしてティアのことを信じて……。

そんなフェイトさんの心の強さと優しさに、俺は……。

「俺は……貴女が……フェイトさんのことが好きです。憧れの存在としてではなく、一人の女性として……。」

———とうとう、言っちゃったな。

ずっと言わないつもりだったのにな。

でも、後悔はない――。

自分の気持ちを全部伝えきったんだから――。

「…………ごめんなさい。勝手なことを言っ……。馬鹿ですよ。俺なんかじゃ…………釣り合いが取れないのが分かつ……んんっ!？」

「はい、そこまで」

そうやってフェイトさんは、俺の唇に自分の人差し指を当てた。  
まるで、それ以上言うのは許さないって言っているみたいだった。

「あんまり自分を卑下するのはだめだよ。それじゃ、ファイルを好きになった私もその程度って事なのかな？」

「違う、それは違います!!」

フェイトさんは、俺なんかが好きになっていい人じゃない。

この人にはもっと素敵の人がふさわしいから——。

「だったらもう少し自分を好きになって、自分を労れないんじゃない人や人を愛する事なんて出来ないし、それに私も悲しいよ。自分の愛している人に何かあったら……」

「……ま……まさ……か!？」

「私の返事は最初から決まっているよ。私はファイルのことが大好きだよ。もちろん私の大切な男性としてだからね。だから……」

そういつてフェイトさんは、俺を自分の方に抱き寄せて——。

「せめて私にだけは弱さを見せて。そして……それを一緒に分かち合って、共に歩んでいきたい……」

「…………だけど、一度弱くなってしまうたら俺は……」

一回でも、人の温かさを知ってしまったら、きっと弱くなってしまおう。それじゃ、大切な人たちを守れなくなってしまう——。

「フィルは、自分が甘えすぎだっと思うくらい甘えてくれて良いよ。そのかわり……私  
も思いつきり甘えるから……ね……」

「……ありがとう……ごさい……ます」

——温かい。

フェイトさんの心が本当に……温かい。

忘れていたな——。

あの時から……。

ティアが俺の目の前で失ってから……。

好きな人の……ぬくもりを……。

「……ファイル……」

フェイトさんが瞳を閉じ――。

その唇に引き寄せられるように――。

俺たちは自然とキスをしていた。

それは……すごく気持ちが悪くキスだった……。

\* \* \*

キスが終わると、二人して顔が真っ赤になっていたが、いやな気持ちはちつともしなかつた。

それどころか、もつとフェイトさんを感じたいっていう想いが増すばかりだった。

「えへへ♪」

フェイトさんもそれは同じみたいで、年相応の笑顔だった。

いつもの凛々しいって感じじゃなく、本当にどこにでもいる普通の女の子って感じだった。

これがフェイトさんの本当の姿なのかもしれない。

「なんか……身体が少し冷えちゃったね……」

「そうですね……」

フェイトさんが俺に身体を預けてきて、俺もそつとフェイトさんを抱き寄せる。

「フィル……後悔はしてない。私を選んだことに……」

「えっ？」

「だって、未来ではティアナのことが好きだったんでしょう。それなのに……」

ティアナのことは話していないのに、どうして分かったんだ？



「……………どうして……………そう思ったんですか？」

「ティアナを見ている時のフィル、スバル達を見ている時とは違う表情をしていたから……………。もしかしてって思ったの」

本当によく見ていたんだな、俺たちのこと。

でも、そこまで見ているとは思わなかった……………。

そんなことを話していると、ポケットにしまっておいたクロスミラージュが突然光り出し、その光がフエイトさんを包み込んだ。

\* \* \*

「(ト) (ト) は……………」

何だろう、この真つ白な空間は……………。

外敵反応は見られないけど……。

『ここは……クロスミラージュが作り出した異空間です』

「誰……って、ティアナ!? でも雰囲気がちよつと違う?」

ティアナにそっくりだけど、目の前にいる女性は、私よりもずっと落ち着いた雰囲気を持っていて。

『そうですね……。正確に言いますと、あたしは……あつちの世界のティアナ・ランスターなんです』

「そっか……」

だから、こんなに落ち着いた雰囲気を持っていたんだね。

色んな経験をしてきて、成長して——。

『あたしはずつとクロスミラージュの中で、ファイルのことを見守ってきました。そして……同時にファイルのことを助けてあげられない自分に対して、ものすごく腹を立ててい

ました』

「ティアナ……」

ティアナの悔しきは痛いほど伝わってきた。

そうだよね——。

自分の大切な人を助けられないんだから——。

『フェイトさん。これだけは言わせてもらいます!! 貴女は遠慮しすぎです!! あたしの願っていることはフィルの幸せなんです。この世界でフィルは貴女だけには唯一、自分の弱さを見せた。それは本当に貴女のことを愛しているからなんです!! フィルって本当に好きな人じゃないと心を開かないから……』

「でも……それは、私じゃなくも……」

そう、きつとこの世界のティアナでも心を開いてくれる。

悔しいけど、あの二人を見ていたらそれが分かる。

『……いえ、それは違います。今のあいつを、本当に支えてあげられるのは貴女だけなん

です。訓練以外でも、あたし達やフィルのことを見ていくれた貴女しか……」  
『だから、あたしの分までフィルのことをお願いします。フィルが幸せになつてくれることが、あたしの一番の願いなんです。これ以上フィルに、大切な人を失う悲しみを背負わせないでください!!』

ティアナは、もう涙を抑えることが出来なくなっていた。

本当にフィルのことが大好きなんだね。

羨ましいな——。

ティアナのその心の強さが——。

「……約束するよティアナ。絶対にフィルの事を守るよ。身体だけじゃなく心も……」  
『それを聞いて安心しました。本当はこの世界のあたしに、もう少し頑張つて欲しかったんですけど、フェイトさんなら全てを託せます……』

ティアナはすごく優しい笑みをしていた。

残念だけど、私にティアナみたいな心の強さは無いから——。

「ティアナ……」

『残念ですが、時間みたいですね……。それじゃファイルのことをお願いします……。いつかまた……』

「うん、またね……。ティアナ……」

\* \* \*

「……う……ん……ここって……?」

「気がつきましたか?」

気がつくとは私は見慣れない部屋にいた。

確か、外にいたはずなのに……?

「ここって、もしかしてファイルの部屋?」

「すみません。時間も時間だったので、やむを得ずここへ……」

「私、ずっと気を失っていたんだね。どのくらい気を失っていたの」

「時間は30分ぐらいですよ」

「そっか……」

かなり長く話していたけど、時間の流れが違つたみたいだね。

「ティアの想い……聞けたみたいですね」

「うん……確かに受け取つたよ。ティアナの想いを……」

「そうですか……」

いっぱい……いっぱい思いを受け取つたよ。

ティアナが、本当にファイルのことが好きだったこともね――。

「ファイル……」

「何ですか……?」

「決して一人で抱え込まないでね。苦しみも悲しみも、二人でなら乗り越えられるから

……。だからお願い……。私を頼ってね」

ファイルは本当に一人で抱え込んでしまう。

心は、誰よりも脆く繊細なのに――。

「フェイトさんこそ俺を頼ってくださいよ。そつちこそ、一人で抱え込むことが多いんですからね」

「ふふつ、それもそうだね。じゃ、私も遠慮しないで甘えるね♪」

今のファイルに必要なのは、自分を包み隠さず素顔の自分で接すること。そうしなきゃ絶対に弱さを見せてくれないから――。

だから、私も思いつきり甘えよう。

ファイルが私と一緒にいて安らげるように――。

「♪」

「ど、どうしたんですか……？」

「私って甘えるとこんな感じだよ。やっぱり……嫌かな……う？」

「言ったよね。普段のフェイトさんも今のフェイトさんも、全てが好きなんだ。他の奴が見れない一面を見られてすごく嬉しい……」

あれ、フィルってそんな話し方だっけ？

まるで、ティアナやスバル達と一緒にいる時みたいな話し方。

「……やっぱり変かな？ 親友とかにはこんな話し方なんだけど……。やっぱり元に戻す？」

「嫌だ!! やつと本当のフィルをみられたんだよ!! 戻しちやだめだよ!!」

やつとティアナ達と一緒にのスタートラインに立てたのに。

また、他人行儀な接し方をされるなんていやだよ!!

「そっか……。だったらそうするね」

「うん♪」



色々話していて、時刻も午前二時を過ぎようとしていた。

「なんか……戻りたくない」

「俺も一緒にいたいけど……。こんな所を、部隊長やシャーリーさん達に見つかったらと思うとゾツとする……」

「大丈夫。はやては、絶対に囃し立てたりすることはしないから……」

一見はやては、ゴシップ好きに見えるけど、自分がやられてる分、人に対しては誰よりも気を遣ってる。

だからこそ部隊長なんて役職も務められる。

「だから、今日は……いっしょにいよ……ね……。いっばい……。いっばい甘えてね」  
「……ありがとう。それじゃ今日はお言葉に甘えさせてもらうね」

「ねえ……。お休みの……。キス……。して」

少し強引だけど、私はフィルに、お休みのキスのおねだりをする。

だって、フィルの性格からこうしないとくれそうにないし——。

「なんか……照れくさいな……」

「これからずつとするんだからね。少しずつで良いから慣れていこうよ」

お休みのキスをし、電気を消して私達は一緒にベッドで眠ることにした。

こうしていると、フィルの寝顔を見てると普通の男の子なのにな。――。

フィル、これからは私も一緒なんだから……。

あなたのことを支えられるように一生懸命頑張るから――。

だから、あなたも……いっぱい私に甘えてね。

## 第11話 機動六課のある休日（前編）

「はあ……………はあ……………やっぱりきつい……………」

「そうね……………はあ……………はあ……………」

「はあ……………はあ……………何か今日は特にそうでしたね……………。はあ……………はあ……………」

「はあ……………本当に……………はあ……………」

「ああ……………」

「……………あ……………あんた……………。どうしてそんなにタフなの？」

ファイルは、あの翌日からメニューが更にきつい物になっている。

基礎訓練だけじゃなく、魔力強化に関するメニューも組まれていた。

これはなのはが、ファイルのためにメニューを考えてくれたものだった。

そのおかげで、ファイルも効率よく訓練が出来ている。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様。でね、なにげに今日の模擬戦が第2段階クリアの見極めテストだったんだけど……………どうでした。フェイト隊長、ヴェータ

副隊長?」

「「「えっ?」」」」

「合格」

「はや!!」

「まっ……。こんだけみっちりやってて、問題あるようなら大変だってことだ」

「はははっ……」

エリオもキャロも、ヴィータの言葉に苦笑いしか出なかった。

でも、みんな頑張ったよ——。

「わたしもみんな良い線いってると思うし……じゃ、これにて2段階終了!!」

「「「やったっつっ!!」」」

「……ふう、ようやく2段階目が終わったか……」

フィル、今は焦らなくても良いよ。

スカリエッティとの決戦までには、全員もつと強くするからね——。

「デバイスリミッターも一段階解除するから、後でシャーリーの所に行つて来てね」

「明日から、セカンドモードを基本形にして訓練すつからな」

「「はーい！」」

「明日から……ですか？」

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日私達も、隊舎に待機する予定だし……」

「みんな入隊日から、ずっと訓練漬けたしね……」

フオワード陣はここまで、きつい訓練で疲労がたまっている。

そろそろティアナ達も、リフレッシュユキさせてあげなきやね。

「まっ……そんな訳で……」

「今日はみんな一日お休みです。街にでも出て遊んでくると良いよ」

「「わーい！」」

みんな休暇をもらつてすごく喜んでいる。

一日しかあげられないけど、ゆっくりしてきてね。

でも、次のなのはの言葉は――。

「……………それで、申し訳ないんだけど、ファイルは…………」

「「「えっ…………？」」」

「……………ごめんなさい。わたしたちと一緒に、隊舎待機でお願い」

なのはは本当に申し訳なそうな表情をしてファイルに伝える。

「ちよ、ちよつと待つてなのは!! フォワードの中で一番休ませなきゃいけないのはファイルだよ。それなのに!？」

ファイルは朝から夜までの訓練だけでなく、シャーリー達とも一緒に仕事している。誰が見ても、明らかにオーバーワークだ。

「フェイト隊長。わたしだつてファイルを休ませてあげたいよ。でもね、これはファイルが言ってきたの。やることが多いから時間が欲しいって…………」

「なのはさん、それは!？」

「どういふことなのかな……。ファイル……」

まだ、他にも私に隠し事してるのかな——。

「ちよ……ちよつと、フェイト……さん」

「……言ったよね。一人で抱え込まないでって……」

「でも、これは俺の仕事だから……。フェイトさんやティア達のデバイスのサポートは」

でも、それでファイルが倒れたら意味がないよ——。

それとも……。

また、自分なんていなくても同じなんて、言うんじゃないんでしょうね!!

\* \* \*

ヤバイ、フェイトさんの雰囲気がいっつもと違う。  
笑顔なんだけど、目が笑ってない……。

しかも、何だこのプレッシャーは……。

あの時のなのはさんに匹敵する物を感じるぞ。

「エ、エリオくん……。フェイトさんが物凄く怖い……」

「う、うん……。僕も、あんなフェイトさん見たことがない」

「テ、ティア!？」

「言わないで……。今のフェイトさんから感じるプレッシャーは、あの時のなのはさん  
以上だから……」

お前ら、他人事だと思って言いたいこと言ってくれなな。  
フェイトさん……。マジで怒ってるし……。



\* \* \*

「……………こうなったら、誰かが一緒に付き添って、強制的に休みを取らせた方が良いね」  
「なのは？」

「フェイト隊長。八神部隊長にはわたしとヴィータ副隊長が言っておくから、ファイルを連れてどっか息抜きに行ってきたよ」

「なのは、本当にいいの？ そんなことをして……」

「心配ないよ。このまま、ファイルに無茶させて倒れられた方が、今後には支障が出てきちゃうよ。そ・れ・に」

次の瞬間、なのはから、念話でとんでもないことを言われることになる。

（せっかく恋人同士になったんだから、一緒に出かけてファイルに甘えてきたら）

（な、なのは!!? どうしてそれを!!）

（にやははは。やっぱりね。もしかしてって思ったんだけど、フェイトちゃん、最近良い

表情するようになったもん。わたしの感を見くびってもらっては困るよ♪)

——降参です。

私ってそんなに分かりやすかったのかな……。

「おい、なのは、フェイト。何さつきからコソコソ話してるんだよ？」

「ごめんねヴィータちゃん。実は……」

「わああああ!!　ちよつと待ってなのは!!」

お願いだからこれ以上、誰かにフィルとのことを広めないで!!

「……どうせフィルのことだろ。六課はあたし達に任せて、フィルとどつかに行つてこい。帰りにアイスでも買ってきてくれればいいからよ」

「……も、もしかして、私とフィルの事って、みんな……」

「今の所、はやてちゃんの所まで入ってないみたいだよ。でも知ったら、六課中お祭り騒ぎになっちゃうよ」

「はやては大丈夫だけど、シャーリーやアルトに知れたら、面白可笑しくしそうだしな」

ヴァイターの言うとおり、はやてだったら大丈夫。

でも、シャーリーとアルトまでが知ったら……。

ファイルもあの二人には知られたくないって言ってたし……。

「……否定できない……かも」

「その話はひとまず置いて、ファイル」

「は、はい!!」

「機動六課スターズ隊長として命令します。ファイル・グリッド二等陸士、現時刻をもって強制休暇を命じます。以降ここからの指示があるまで仕事復帰は許しません」

「ちよ、ちよつと待つてください!!　まだやり残したことがたくさんあるんですよ。そんな時間は……」

すると、なのはが私とファイルを手招きして、その後、ファイルの近くに來て耳元で話し始めた。

（あのね、ちよつとは休まないと身体持たないよ。そんなんじやフェイトちゃんだつて、

気が気でしようがないよ)

(な、何でフェイトさんの名前が出るんですか……!?)

(隠さなくても良いよ。付き合っているんでしょう、フィルとフェイトちゃん)

(……な、何のことでしよう!?)

フィルが必死でポーカーフェイスで隠そうとしていたが――。

(往生際が悪いよフィル。答えるまでにそれだけの間があったんじや、自分で白状しているのと同じだよ)

(……俺、ポーカーフェイス、そんなに下手ですか?)

いや、普段のポーカーフェイスはかなり上手いよ。

ずっと未来でのことを隠してきたんだから――。

(まあまあ、せっかくだからフェイトちゃんと一緒に、気分転換でもしてきてね。もし隠れて仕事していたら、シャーリー達にフェイトちゃんのことを言うからね)

(それだけは勘弁してください!! わかりました。それじゃ遠慮無く休ませてもらいま

す)

（うん、フェイトちゃんのことよろしくね。最近スカリエッティのことを調べていて全く休んでいないから）

（フェイトさんもクロノ提督と一緒に、ワーカーホリックな所ありますからね）  
（そういうこと）

ファイルにだけはワーカーホリックって言われたくないよ。

この六課で、一番オーバーワークなのに――。

「おい、なのは。そろそろ終わりにしようぜ。新人達に休みをやれなくなっちゃうだろ」  
「そうだね。今日はみんな一日お休みです。街にでも出て遊んでくると良いよ」

「「「わ〜い」」」

「じゃ、今日はこれで終了。解散です」

「「「はい、お疲れ様でした」」」

\* \* \*

「それにしても、まさかあんな形で休暇を取らされるとは……」

《マスターは少し休んだ方が良いでしょう。ずっと走りっぱなしじゃ、いつか息切れしてしまいますよ》

「それは、そうなんだが……」

《デバイスのことはシャーリーさんに任せておけばいいですよ。フェイトさんが怒りのオーラをまとってシャーリーさんに言いに行っていましたから。正直あれは怖いです……》

「あ、あはは……。シャーリーさん。ご愁傷様です」

さっきのあれは、本当にシャレにならなかつたぞ。

あれはなのはさんのプレッシャーよりきつかつたぞ。

普段穏やかな人だけあつて怒るとすつごく怖い。

今頃シャーリーさん。フェイトさんに怒られているんだろうな。

教訓：フェイトさんを本気で怒らせてはいけない……。

\* \* \*

「シャーリー……」

「どうし……たん……ですか？ フェイトさん」

「デバイスのこと……。ファイルに任せきりになっていたって本当なの？」

「え……えつと……。それは……」

やっばい。フェイトさん滅茶苦茶怒っている。

考えてみたらティアナ達のデバイスのことも、なのはさん達のフルドライブに関して  
も、ファイルに任せきりにしちゃっていた。

だって、こつちが考えたことよりファイルのプランの方が、色んなところで良い点が多  
かったんだもん。

「シャーリー、ファイルにデバイスのことでも聞くのは良いけど、任せきりにしているのは駄

目だよ。あくまでもファイルはフォワードなんだからね」  
「それは分かってます……」

今のフェイトさんは、下手なごまかしは言えない。

明らかに目が据わってるし——。

もし、ごまかしなんか言ったら、ティアナみたいに頭を冷やされてしまう。

比喩じゃなくて、今のフェイトさんなら本当にやる。

「それに六課のデバイスマイスターはシャーリーなんだからね。基礎設計は完成しているんだから、ここからはシャーリー達が中心になってやっていくことだよ」

「はい、すみませんでした……」

「私からはこれ以上言わないけど、ファイルの負担を出来るだけ減らしてあげてね」

そういつてフェイトさんは部屋から出て行ったが、あんなフェイトさんは見たことがなかった。

怒鳴りはしなかったけど、ものすごく怒っているのは雰囲気だけで分かった。

でも、最近フェイトさんも変わったかも——。



ちよつと前までは、あんなに自分を出す人じゃなかったのに。

「……確かに最近、ファイルに頼ってばかりだったかも……」

「お邪魔するですよ」

「リイン曹長」

「どうしたんですかシャーリー。何かあつたんですか」

「さつきフェイトさんに怒られてしまいました。最近ファイルに頼りすぎだつて」

実際、ファイルにはかなり甘えていた。

訓練が終わつた後に、深夜までプランを一緒に考えてもらつたりしてたし——

「……確かに、ファイルはなのはさんとの訓練とデバイスプランを、同時進行でやってましたから」

「リイン曹長。私ちよつとファイルに甘えすぎていました。だからこれ以降のことは、私たちロングアーチの総力をあげて完成させて見せます!!」

「そうですね。明日から四機の調整で慌ただしくなりますし、今の内なのはさんとレ

イジングハートの限定解除モード「エクシードモード」の最終調整もしておきたい所で  
す」

「バルデイツシュさんのザンバーもですけどね」

「あつ、リイン曹長もそろそろ完全チェックをしておきましょうか」

「そうですね。お願いするです」

そう、ちゃんとメンテナンスをしておかないと、いざというときに動けないなんて言  
うこともありません。

そんなことは、絶対にさげなくてはならない。

「最近、どなたともユニゾンされてないですね」

「ですね。はやてちゃんはもちろん、シグナムもヴィータちゃんも、私を使う程の状況に  
ならないですし……」

「それ自体は、良いことなんですけどね」

「でもいざというときに働けなくては、祝福の風リインフォースの名が泣きますから、そ  
れに……」

「これ以上ファイルの負担にはなりたくありませんから、私と蒼天の書のメンテナンス、よろ

しくですよシャーリー」

「はー!!」

\* \* \*

俺が自分の部屋でのもんぶりしていると、フェイトさんが入ってきた。

実は、あの日以来、フェイトさんは俺の部屋に来ることが多い。

これだけ頻繁に俺の部屋に来たりしていたら、バレても不思議じゃないよな——

「ねえ、ファイル。ロードサnderのテストってこれからなんだよね？」

「うん、慣らし運転もまだしてないんだ」

「そ、それでなんだけど……。あ、あのね……」

「どうしたの？ フェイトさん」

「よ、よかつたら私と一緒に、乗せてくれないかな……。だ、だめかな……」

言い終わったフェイトさんは、真っ赤になってうつむいてしまった。  
こんなことで遠慮なんか欲しくないんだけどな……。

「良いよ。せつかくだから、俺のとおっておきの場所にも行ってみる？」

「でも、本当にいいの？ 私を乗せたりして……」

「……………好きな人が出来たら、一緒にツーリングしてみたいって……………ずっと思っていた」

未来では、そんなことは絶対に出来ないって思っていたささやかな幸せ——。

「……………ファイル」

「……………ははっ、駄目だな。最近……………どうも感傷に浸りやすくなっちゃってるな」

ちよつと前までは、こんなことなかったただけだな。

やっぱり、弱くなったのかな……。

そう思っていたら、後ろからそつと抱きしめられ……。

「フィル……そんな風に気を張ってばかりじゃ、私も……つらいよ……」  
「フェイトさん……」

俺たちはどちらからともなく、顔を寄せてキスをする。

やがて深いキスとなり、互いに受け入れ、何度も求め合う――。

「やつぱり……ちよつと恥ずかしいね……」

「でも、すごくフェイトさんを感じられる……。そんな感じがする……」

こうして抱き合っていると、心までつながっている気がする。

人の温もりって、こんなにも暖かい物だったんだな。

\* \* \*

「さてと、ガレージからサンダーを持ってくるか」

「フィルのロードサンダーって、確か、AIが付いているんだよね？」

「今回のプランでどうしても必要になってね。でもマリーさん達、かなりハイテンションになっていたからな……」

サンダーを弄つてるときのマリーさん達、明らかに悪のりしてたし——。

ほ、本当に大丈夫なんだろうな!？」

「確か、ティアナ達のデバイスもマリーさんの所に行った時に、基礎設計をしていたんだよね」

「クロスミラージュは俺のプリムを参考にして設計したから、さほど時間がかからなかったけど、他のデバイス、特にスバルのマツハキヤリバーは途中で頓挫していたからな」

スバルの魔法は、感覚で作ってるから、俺だけの力じゃ作ることができなかったんだ。

「さらに未完成だった私たちのフルドライブまで……。本当にごめんね……」

「謝らないで……。そう思うなら、無茶しないようにしてくれればいいから……」

みんなの負担を少なくするために俺はやってるんだから——。

それに……。

これくらいしか俺には出来ないから——。

「うん……」

「仕事の話はこれまでにしようか。ちよつと取ってくるから……」

「それじゃ、私もエリオ達の準備を手伝ってくるね」

俺はガレージにあるロードサンダーを取りに行った。

フェイトさんも、エリオとキャロの支度を手伝ってから合流することになった。

\* \* \*

「よっファイル、どつか出掛けるのか？」

「ヴァイス陸曹、脅かさないで下さいよ」

「わりい、わりい」

「で、何のようですか。ただ世間話をしに来た訳じゃないでしょう」  
「……お見通しかよ。最近お前らの訓練を見たりするんだけどよ。ティアナの奴、いい動きをするようになったじゃないか。以前はシングルでも何でも動きが同じだったけど、最近は臨機応変に動けてきている気がするぜ……。お前が色々やったおかげかな」

あの日以降、俺のことは機動六課の全員が知ることになった。

なのはさん達に言ったのだから、別に隠すつもりはないが、あつという間に広まるとは思わなかった。

「切欠にはなってるかもしれませんが、ティア自身は吹っ切れたんじゃないですか？ 今

はチームリーダーとして色々みんなのことも見れるようになりましたし……」

「つたく、本当はお前の方が強いくせによ……。あの時のなのはさんに、正面から思いをぶつけたんだからな……」

「それは、もう言わないでくださいよ……」

今思えば、我ながら馬鹿をやったよ。



もつと、考えて行動すればよかった——。

「とにかくお前は今じゃ六課の中心的人物なんだから。しつかり休んでリフレッシュしてこい。ここんとこロクに休んでないだろ」

「な、何のことでしようか？」

俺が視線をそらすと、ヴァイス陸曹はさつきとは違い真剣な表情で——。

「誤魔化すな。大方シャーリーが無理言ってきたんだろうが、あんまり自分に抱え込むなよ。フェイトさんすごく心配してたんだからな……」

「……………本当に、フェイトさんには心配かけっぱなしなんですよね」

「そう思うなら、フェイトさんには悩みとかを隠すなよ。女性に言えないことなら、俺やグリフィスだって良いんだからな」

ヴァイス陸曹、ありがとうございます。

その時は、遠慮無く相談させてもらいます——。

「そういえば、さっきティアナの奴が、俺の所にバイクを借りに来ていたぞ。あいつもスバルと出かけるらしいな」

「そうですか。ティアもスバルも、何も言っただけでなかつたのにな……。俺って、のけ者になつてゐるのかな？」

ヴァイス陸曹が、少しあきれた表情で……。

「そうじゃねえよ。もう少し、お前は女心を学んだ方が良くもな……。」「えっ、どういうことですか？」

「それは自分で考えろよ。お前も出かけるんだろ。引き留めて悪かつたな」「いえ、それじゃ失礼します」

ヴァイス陸曹と別れ、急いで俺は隊舎玄関前に向かった。

\*

\*

\*

俺が隊舎前でフェイトさんを待っていると、なのはさんが見送りに来てくれた。

「なんか、すみません。俺のために、なのはさんやフェイトさんにまで迷惑をかける形になって……」

「その事は気にしなくて良いよ。さつきも言ったけど、ここでリフレッシュしてくれないと、六課全体の志気に関わってくるの。特にフェイトちゃんは、ファイルに万一のことがあつたらどうしようもなくなってしまうから……」

「そこまではどうかと……」

別に俺がいなくてもそこまで変化はしないだろう。

ティア達は立派なチームに成長してきてるし——。

すると、なのはさんは本気であきれた表情で——。

「はあ……。ファイル、本当に分かってない。今までなら大丈夫だったよ……。だけど、今は違う。人は大切な人がいる時はとても強くなれるんだけど、それを失ってしまうと、

とたんに脆くなってしまふ。それはファイルも経験していることでしょう」  
「あつ……」

——そうだった。

この事は誰よりも理解している事じゃないか。  
なのはさんが言うまで、何で気づかなかったんだ。

「だから、フェイトちゃんの事を本当に好きなら、ちゃんと自分のことも気遣うこと。そうしないと共倒れだからね」

「なのはさん……」

「というわけで、なのはさんからのお話はこれでおしまい。もうすぐフェイトちゃんも来るしね……」

\* \* \*

ファイルと話していると、息を切らせながらフェイトちゃんがこっちにやってきた。エリオとキヤロを見送った後、急いで支度してきたんだね。

「ファイル、ごめんね。待たせちゃって……。あれ、なのはどうしたの？」

「どうしたの？は無いんじゃない。わたしは二人の見送りに来たんだよ。つたくフェイトちゃん、最近わたしに冷たいよ。やっぱ好きな人が出来ると、女同士の友情なんてこんな物なのかな」

「な、なのは!？」

「ふふ、冗談だよ。せっかくなんだから楽しんできてね」

良い機会だから、フェイトちゃんも、しっかりとリフレッシュしてきてね。

これから、こうしてファイルといられる時間は中々出来ないと思うし――。

「うん、ありがとう。なのは」

《相棒、そろそろ私のことを紹介してくださいよ》

「えっ、バイクがしゃべった？」

ミツドのバイクとかには簡易AIは組み込んであるけど、ここまではつきりと意思があるなんて!?

「そういえば、まだなのはさんには言ってなかったですね。紹介します、もう一つの相棒  
【ロードサンダー】です」

《はじめまして、私がロードサンダーです。よろしくお願いします、高町一等空尉》

「そんなかしこまらなくても良いよ、よろしくねロードサンダー」

《そうですか。それでしたら遠慮無くさせてもらいますよ、なのはさん。いやあ、どうも  
堅苦しくていけませんね。ちなみに私のことはサンダーと呼んでください!!》

「お前な……」

「あ、あはは……」

なんか砕けた性格なんだね、ロードサンダーって……。

でも、フィルの相棒には、これ位の方が良いのかも……。

《いいじゃないですか。私は相棒が認めている人達には、本音で話したいんですよ。最

も、フェイトさんは相棒の大事な恋人でもありませんけどね〜

「なっ!?!」

《サンダー、その辺にしておいてくださいよ。この二人とつてもウブですからね。うふふ……》

あの……。プリムにサンダー。

そのくらいにしておいた方が良いと思うよ。

フェイトちゃんもファイルも、顔が真っ赤になっちゃってるし——。

「そ、それじゃ行ってきます!! なんかあつたらすぐに戻ってきますから」

「だから仕事のこととは一旦忘れなさい。フェイトちゃん、ファイルのことしつかり頼んだよ」

「まかせて、しつかりフレッシュユさせるからね」

《任せてください。相棒のことは私たちがしつかりと休ませますから》

ファイルとフェイトちゃんはサンダーに乗り、エンジンをかけてタイヤをスピンさせながら出発した。

あーあ……。プリムもサンダーもからかいすぎだよ。  
ファイル、運転大丈夫かな？

\* \* \*

「ファイル達行つたよ。ティアナ」  
「……………すみません、なのはさん」

ファイル達がくる前にあたしは、スバルを待つためにここにいたんだけど、なのはさんが……………。

『ファイルとフェイトちゃんも、ここで待ち合わせをするみたいだから……………』

そう言われて、あたしはなのはさんに頼んでここに隠れさせてもらっていた。

正直言って、今ファイルにあうのは辛いから……………。



「……なんかティアナには、辛い物を見せちゃったね」

「いえ、あたしがちゃんとファイルに告白しなかったのがいけないんです。それに……ファイル、すごく良い表情してました。ファイルのあんな表情見たことがなかった……」

「うん、それはフェイトちゃんも同じだよ。わたし達と一緒にいた時でもあんな顔は見ることがなかった」

「今のあたしじゃ、ファイルの事を支えられないですから……」

今のファイルのことを支えてあげられるのは、フェイトさんしかないと思う。

ファイルがただ一人、自分の弱さを見せた女性だから――。

「ティアナ……」

「……あつ、そろそろスバルも来るみたいですよ」

「ごめくんティア」

「まったく遅いわよ。あんたっていつもそうなんだから」

「だから、ごめんってば……」

あたし達はバイクに乗ってクラナガンに向かった。  
いつかこの辛い気持ちも、良い思い出に変わる日が来るかな……。

\* \* \*

―機動六課食堂―

『以上、芸能ニュースでした。続いて政治経済です。昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において、来年度の予算会議が行われました』

『当日は、首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中將による、管理局の防衛思想に関するの表明も行われました』

ファイル達を見送った後、わたしははやてちゃんとフェイトちゃんをのぞいたメンバーでちよつと遅い朝食を取っていた。

何気なくテレビを見ていたんだけど、そんなとき画面は、体格の良い厳つい顔をした

人の映像に切り替わっていた。

レジアス・ゲイズ中將である。

『魔法と技術の進歩と進化。素晴らしいものではある……が、しかし!! それが故に、我々を襲う危機や災害も、十年前とは比べ物にならない程に危険度を増している。進化する世界の平穩を守るため、我々も本局の魔導師たちに負けじと、錬練し続ける事で対処してはきたが……。ついに、兵器運用の強化が必要な状況になってしまった。しかしこんなところで立ち止まるわけにはいかん!! 現状では首都防衛の手すら、未だ足りておらん。地上戦力においても、我々の要請が通りさえすれば、地上の犯罪も発生率で20%の減少、検挙率においては35%以上の増加を、初年度から見込む事が出来る……』

「このおっさんは、まだこんなこと言ってるのかよ……」

「レジアス中將は古くからの武闘派だからな。だがなヴィータ、言っていることは、あながち間違つてはいないぞ」

「何でだよ?」

「良いか。レジアス中將がここまで力を入れなかつたら、首都のクラナガンでさえ、ロク

な状態ではなかったはずだ。まあ、いささかちよつと行き過ぎな面もあるがな……」

「……そうだね。わたし達なら、自分の身は自分で、ということも出来るけど……」

「そういうことだ。一般人では犯罪者に襲われたらひとたまりもない。ファイルが経験してきた未来でもそうであつたようにな」

「うん……」

あの時、ファイルから見せられた映像にはクラナガンの人々の悲惨な記録も残されてい  
た。

ガジェットから逃げまどう人々の姿。

治安が崩れた町では、数々の犯罪を繰り返していた。

中でもひどかつたのは、女子供への性的犯罪。

魔力を持たない非力な子供や女性は、犯罪者の格好の的になっていた。

地上本部が消えて、犯罪者を取り締まる組織がいなくなったことで滅茶苦茶になつて  
いた。

ファイル達だけで対応なんて、絶対無理だつた。

「まあ、我々も今までは、お前と同じような考えをしていたがな。だがな、今後スカリ

エッティに対抗するには、地上本部と本当の意味で連携を取らなくてはならないんだ」

「そうだね……」

「そのことに關しては、主はやてに任せるしかないだろう」

「そうだけ、後のことは、はやてがやってくれるって、あたし達は前線を守るのが仕事だしな」

……。　　そうなんだけどね。大丈夫かな、はやてちゃん一人で抱え込まなきゃいいんだけど

\*

\*

\*

「うくん。気持ちいいね」

「ああ、車とはまた違った物があるしな」

俺たちは今、ミッドチルダ外れの山道を走っていた。

高速を走るのも良いが、偶にはこうやってツーリングするのも良い。

たださつきから、俺の背中にあたって……その……胸が……。

ある意味、最大の試練かも……。

「私は車がメインだからね。一応、二輪の免許は持つてるんだけどね……」

「俺は逆にバイクがメインだからな。でも、偶には車も良いかなって思うんだ。フェイトさんの車、格好いいしね」

「だったら今度私の車を運転してみても良いよ。結構いじってるからちよつと癖あるけどね」

「俺もサンダーを運転させてあげたいんだけど、こいつが自分で認めないとな……」

そう、ロードサンダーはAIがあり自分の意志でドライバーを選ぶ。

今の所、俺とティアしか運転が出来ない。

《相棒、私はフェイトさんなら構いませんよ》

「サンダー？」

《フェイトさん、貴女は相棒を本当の意味で救ってくれた。プリムから聞きましたが、ア

グスタの後、貴女はティアナさん達のことを、ちゃんと見ていてくれていた……。そして……」

《何より、相棒が好きになった人です。それだったら私にとつても、大切な人です。だから遠慮しないで乗ってください》

「……………ありがとう、ロードサンダー。とつても嬉しいよ」

《ただし、私に乗る以上全開で回せる腕がないといけませんよ。相棒もティアナさんも、全開でエンジンを回しますからね……》

確かに、俺もティアもエンジン全開で飛ばすことが多いな。

「……………ふふつ、だったらその挑戦を受けて立つちゃおうかな。ちよつと変わってもらつて良いかな、フィール」

「良いよ。フェイトさん、思いっきり回して構わないから……」

「楽しみだな。バイクを運転するのって久しぶりなんだ……」

俺は近くの路肩に停車して、フェイトさんと運転を代わることにした。

フェイトさんは俺と入れ替わると、ハンドルを握り、エンジンを勢いよく回し始める。

あ、あの……本当に久しぶりなんですか？

慣らしの仕方といい、ギアの入れ方といい、明らかに熟練者のものですけど……。

「さて、しつかりつかまってるよ!!」

「目的地はサンダーにインプットしているから、それに従っていけば迷わないから……」  
「分かった。じゃ行こうか!!」

フエイトさんはサンダーのスロットルを全開にすると、ホイールスピンをさせながら発進した。

\* \* \*

あたしとスバルはヴァイス陸曹にバイクを借りて、クラナガン中央部に来ていた。



「ここに来るのもなんか久しぶりなのよね。」

「なははっ、やっぱりこのアイスは見た目から素敵だよ♪」

「本当にアイスが好きよね、あんたは」

「好き好き大好き」

あたしはダブルで押さえたのだが、スバルのは七つも乗せている。  
明らかに常識の範疇外でしょう、あれは……。

「さて、それじゃ……」

「乾杯」

アイスで乾杯ってのは何だが、まあこれもあり……かな……。

「……はあ……ひい……ふめたい……」

「スバル。そんなんじや、すぐになくなるわよ」

「平気平気。ねえ、アイス食べ終わったら、ゲーセンでも行かない」

「いいわね。久しぶりね」

まあ、今はこうやってスバルと一緒に楽しめますか。

\* \* \*

「やれやれ、ひどい目にあっただぜ。全くあんなに全開で走らなくても……」  
「ごめんね。でも良いテストになったでしょう」

俺たちはクラナガンの外れにある海岸になってきていた。

シーズンオフということもあり、ここにいるのは俺たちくらいなものだった。

《相棒、私が愚かでした。女性だから大丈夫なんて思っていました、限界ギリまでブン回されるとは思っていませんでしたよ。考えてみればティアナさんもそうでしたね……》

まさかフェイトさんが、俺やティア以上に全開走行する人とは思わなかった。あきららかに慣らしの運転じゃないぞ……。

「そういえば、フェイトさんの車ってスポーツカーだったよな。しかもミッドチルダで最高スペックの……おまけに値段も……」

《はつきり言つて、あの車は町中で乗るには、明らかにハイスペックです。さらにエンジンからサスペンションに至るまでフルチューンしてますし、彼女はあれでサーキットでも走る気なんですか!!》

もしかしたらフェイトさんって、ハンドル握ると性格が変わるタイプなんじゃないか。

サンダーを運転してる時、普段の雰囲気とは全然違ったぞ。

「ファイル、何してるの。早く行くこう〜」

「ああ、今行くから」

さて、せつかくの休みなんだ。ゆつくり羽を伸ばすのでしょうか。

\* \* \*

「はい、どうぞ。時間がなかったから、こんな物しか作れなかったけど」  
「そんなこと無いよ。本当にごめん、弁当まで作ってもらっちゃって……」

あの短時間でこれだけの弁当を作ってくるとは、やっぱりフェイトさん料理上手なんだな。

弁当の中身は、三種のサンドウィッチ（ツナ、玉子、ハムとチーズと高原野菜）  
おかずは唐揚げと卵焼き。

生野菜はレタスとトマトとアスパラガスのサラダ。  
デザートとしてりんご。それもうさぎ形にむいてあった。

「じゃ、いただきます」

「ちよ、ちよつと待って……。あ、あくん……。して……」

そう言つてフェイトさんは、唐揚げを持ったまま顔を真っ赤にしていた。

これってあれだよな。恋人同士がやる……。

めつちや恥ずかしいけど、これで一人で食べられるからなんて言つたら、絶対泣くだらうな。

それにフェイトさんが勇気を出して、こんな事してくれてるんだ。

「あ……あくん」

「……………」

「ど、どうしたの……美味しくなかった……」

「うまい!!」

「ん、もう……。脅かさないでね」

「ごめん、でもマジで美味しい!!」

「よかった。頑張つて作つたんだよ。ファイルに喜んで欲しくて……」

「やつべえ、俺涙出そうなんだけど……」。

「手料理なんて、久しく食べてなかったからな。」

いつも、自炊か食堂のご飯かレトルト食品だったし……。

しかも、最近シャーリーさんと夜遅くまでやっていたから、栄養補助食品に頼っていたし。

フエイトさんにばれたら、間違いなく怒られるレベルだ。

「ふう……ごちそうさま。本当に美味しかった」

「はい、おそまつさま。よかった、喜んでもらえて」

「今度は俺がなんか作るよ。フエイトさんにも、俺の手料理を食べて欲しいし……」

といっても料理じゃ、フエイトさんには敵わないしな……。

「楽しみだな。ティアナ達が言ってたけど、フィルって料理だけじゃなくて、洋菓子も作れるんでしょ？」

「まあ、それなりにだけどね。女の人だとケーキとかの方が良いかもね。フエイトさんって何が好きなの？」

「ケーキは何でも好きだけど、チョコ系が特に好きかな」

「分かった。とっておきの作るから、楽しみにしててね」  
「ありがとう。私、楽しみにしているね!!」

\* \* \*

フェイトさんの手料理を食べ終わった後、俺たちは砂浜に座って、海を眺めていた。  
こうしていると、気持ちが落ち着くな――。

「波の音が、気持ちいいね……」

「ああ、昔はよくここに来たものさ。任務で失敗した時とか、嫌なことがあった時ここに  
来てた……」

なんか懐かしいな。誰にも言えないことがあつたりすると、よくここに来ていたもんだ。

「じゃ、フィルの大切な思い出の場所って訊だね。ティアナ達とかは知らないの?」  
「フェイトさんが初めてだよ。元々俺は一人になることが多かったしね……」

基本的に俺は一人で行動してたからな。

訓練校で、ティア達と一緒に行動するようになってからはトリオでやっていたけど――

「嬉しいな。でも私で良かったの?」

「当たり前でしょう。フェイトさんは、俺の……大切な彼女なんだから……」

「彼女……か。初めてだね。フィルがちゃんと、私のことを彼女って言ってくれたのは……」

「そう……かもしれない……。やっぱ心のどこかで、フェイトさんのことを高嶺の花って思っていたから。彼女って言うのに勇気が無かったんだ」

未来でも、こつちでもフェイトさんはずっと憧れの人だったから――。

こうして俺の恋人になってくれたなんて、今でも夢なんじゃないかっておもうし……。



「フィル。女の子はちゃんと行って欲しい時があるんだよ。例え、心が通じ合っていない時、言葉で欲しい時があるんだから。いつまで経っても、私のことを彼女って言うてくれないから、不安になっちゃったんだ……」

「今まで不安にさせてごめん。これからはちゃんと言うよ。俺はフェイトさんの彼氏なんだしね」

「うん!!」

フェイトさんの本当の笑顔って初めて見たかもしれない。

なのはさんが言ったように、まだ俺はフェイトさんのことを分かってないんだな。

「……フィルがちゃんと彼女って言うてくれたから、私もちゃんと言うね。これからもよろしくね、私の大切な彼氏さん」

女の子の上目遣いでの仕草って、本当にグツと来るものがあるな……。

ましてフェイトさんだと、さらに破壊力があるな……。

俺、こんな事考える奴だったか？

少しずつ……変わってきてるのかも……。。

「もう少し、そばに来てくれる……」

「うん」

俺はフェイトさんをそつと抱き寄せる。

こんな事をするは自分でも大胆だと思うけど、でも今はこうしてフェイトさんのぬくもりを感じたい。

やがて――。

どちらかとも無く、顔を寄せキスをしようとした時……。

『こちらスターズー、高町なのは。フェイト隊長、フィル応答して……』

それぞれのデバイスに、なのはさんからの通信が入ってきた。

「こちらライトニング1、どうしたの!？」

『休暇中にごめんなさい。さつきキャロから緊急通信が入ったの。サードアベニューF—23の路地裏にてレリックとおぼしきケースを発見。ケースを持っていた小さな女の子が一人一緒にいるの』

「フィル、もしかして……」

「ああ、間違いない……」

小さな女の子……。

間違いなくヴィヴィオだ。

いよいよ事態が動き始めたか——。

『救急の手配はこちらでしているから、二人は急いでエリオ達と合流して!!』

「了解!!」

さて、お休みはこれまでか。頭を切り換えて現場に向かいますか……。

## 第12話 機動六課のある休日（後編）

— 聖王教会 本部 —

「それにしても、あなたの制服姿はやっぱり新鮮ですね」

「ああ、制服が似合わないって言うのは、友人どころか妻にまで言われますよ」

「ふふ、そんないつもの防護服姿と同じ位、凛々しくいらつしやいますよ。クロノ提督」

「失礼します」

クロノ提督と話をしていると、シャツハと一緒にシグナムがやってきた。

「ああ、シグナム。お帰りなさい」

「合同捜査の会議はもう……」

「ええ、滞りなく……」

「こっちは丁度、六課の運営面の話がすんだ所だよ」

「ここからは今後の任務についての話。あなたも同席して聞いておいてね」  
「はっ」

話を始めようとした時、はやてからの直接通信が入った。  
「いったい何があつたんだろうか？」

\* \* \*

サードアベニュー路地裏

「エリオ、キャロ!!」

「フィルさん、フェイトさん……」

私達が現場に到着すると、すでにフォワード陣がそろっていて、女の子を保護してい

た。

「この子か……。ずいぶんまたボロボロに……」

「地下水路を通ってきて、随分長い距離を歩いてきたんだと思います」

「こんなにちっちゃいのに……」

「ケースの封印処理は？」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思います」

「……うん」

「それから、これ……」

エリオが持っていたのは、封印処理をしたケースと同じ形のものだった。

「ケースがもう一つか……？」

「今、ロングアーチに調べてもらってます」

「……ファイル」

「ああ……間違いありませんね」

十中八九レリックだ。連中は間違いなくこれを狙ってくるはずだ。

「なのは隊長とシャマル先生、それとリイン曹長がこつちに向かっているから、俺たちはとりあえず現状を確保しつつ周辺警戒だな」

「はい」

「うん」

「サンダー、お前はここの子のバイタルとかを確認してくれ。今器具を取り付ける」

《了解です》

「えっ、そんなことも出来るの?」

「サンダーには、緊急用のメディカルウエポンが積んであるんです。シャマル先生がつくまでの、応急処置程度なら対応可能です」

これは、未来での経験で必要だと思えば準備したオプションの一つだ。

実際、医療器具がまともになくて、助けられなかった命がたくさんあった。

「そうなんだ……」

「フェイトさん、この子に心電図用のコネクターをつけてくれませんか。その後血圧の

チエックを……。俺はSPO2を調べますから  
「分かった」

フエイトさんにバイタルチェックをお願いし、俺はサンダーのシステムを使ってSPO2（経皮的動脈血酸素飽和度）を調べていた。  
酸素とか使う状態でなければ良いんだけどな。

\* \* \*

―機動六課、作戦司令室―

今回の事態に対して、レリックがらみになると判断した私は、後見人であるカリムに通信を入れていた。

ちやうど、六課のことで話をしていたクロノくんとも話をする事が出来た。



「そう、レリックが……」

「それを小さな女の子が持つてたつてのも気になる。もしかしてファイルが言っていたことと関係するのかも知れない」

「ええ……」

ファイルが経験してきた事件は、この事は以前もあつたらしい。

でも、今回もうまくいくとは限らない。

現に、ユーノくんは生きているし、少しずつ歴史は変わってきている。

「ガジェットや召喚師が出て来たら、市街地付近での戦闘になる。なるべく迅速に確実に片づけなければあかん」

「近隣の部隊にはもう……」

「うん。ちゃんと地上本部と市街地と海岸線の部隊には連絡したよ。でないと、後で情報混乱が生じるからね」

地上との連携を無視していたら、かえって混乱を招いてしまう。

私達が出来ることにも限りがあるのだから――。

「ああ」

「……もしかしたら、奥の手も出さな……あかんかもしれん」  
「そうならないことを祈るがな……」

「……シグナム、あなたも向こうに戻っておいた方が良いわ」  
「はい」

「シャツハに送ってもらえばすぐ戻るから……」  
「ありがとうございます、騎士カリム」

私も出来るだけのことは手を打つ。

だからフィル、一人で無茶はせんぞな――。

\* \* \*

―サードアベニュー―路地裏―

検査も終わり、しばらくすると隊長達を乗せたヘリがやってきて、シヤマル先生が女の子の体調を調べていた。

「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ」

「はい」

「よかった……」

「それにしても、私がすることは殆どなかったわね。ファイルが殆どやってくれていて、私は再確認ぐらいしかすることがなかったわ」

「いえ、ちゃんとしたことは調べられませんから……」

「それでも現状で出来ることは全てやれているわ。心電図なんて本当はこんな所じゃ出来ないのに……」

「まあ、現段階で緊急性がなかったからよかったですけど、大怪我とかはどうしようもありませんからね」

サンダーに積まれているのは、あくまでも応急的なものであって、その場でどうにかしようとするものは積まれていない。

だからこの子が緊急性がある状態なら、この場では難しいのだ。

「ごめんね、みんな。せつかくのお休みなのに……」

「いえ」

「平気です」

「ケースと女の子は、このままへりで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね」

「」「はい」「」

「なのはちゃん、この子をへりまで抱いてつてもらえる」

「はい」

「あつ、俺がやりますよ」

俺は女の子を抱えへりに連れていく事になった。

その間、ティア達は現場調査のための準備をしていた。

\*

\*

\*

―機動六課、作戦司令室―

スクリーンにガジェット反応が現れ、機影を写した。

「ガジェット来ました!!、地下水路に数機ずつのグループが少数。16……20」

「海上方面、12機単位の小グループ」

「……多いな」

「どうします? 八神部隊長」

「そうやな……」

『スターズ2からロングアーチへ。こちらスターズ2。海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かっている。それからもう一人……』

別回線で、もう一人がこちらに通信してきた。

その人物とは――。

『108部隊ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？』

「うん、お願いや。ほんならヴィータはリインと合流。協力して海上の南西方向を制圧」

『南西方向ですね。了解です』

「なのは隊長とフェイト隊長は北西部から」

『了解』

これでガジェットへの迎撃はええ。

残る問題は……。

「ヘリのほうは、ヴァイス君とシヤマルに任せてええか？」

「お任せあれ」

「しっかり守ります」

『ギンガは地下でスバル達と合流。道々別件の話も聞かせてな』

「はい」

\* \* \*

「さて、みんな短い休みは堪能したわね」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合い入れていこう!!」

「はい!!」

「それじゃ、みんな行くぞ!!」

《《Stand by Ready》》

「!!!セツトアップ!!!」

あたし達はバリアジャケットを装着し、地下道へ潜ることにした。

「Go!!」

\* \* \*

## ―地上・ヘリポーター

「フォワードのみんな、ちよつと頼れる感じになつてきた？」

「うふふ、もつと頼れるようになってもらわなくちゃ……」

そう、それぞれが、一人前のストライカーとなつてもらわなくちゃならない。

それが、未来からきたフィルの願いであり、わたし達の願いでもあるから……。

「早く事件を片づけて、また今度お休みを上げようね」

「うん」

「それはそうとフェイトちゃんも楽しめた。フィルとは少しは進展したの〜」

「な、なのは!？」

フェイトちゃんはわたしの言葉に、顔が真っ赤になつてしまった。

それじゃ、フィルと何か進展しましたって言っているのと同じだよ。

まったく、そんなんじゃないじゃシャーリー達に知られたら、格好の餌だよ。



「と、とにかく私達も出よう!!」

「はいはい……」

バリアジャケットを装着し、空に飛び上がり迎撃することにした。

\* \* \*

ーヘリ内部ー

ヴィータちゃんと合流するため、私はシャマルとヴァイス陸曹と別行動を取ることに  
なり、シャマルにハッチを開けてもらい、今から向かうことになった。

「気を付けてね」

「はいです」

「ヴァイス陸曹もよろしくですよ」

「うつす」

「ストームレイダーも二人を守ってあげて下さいです」

《All right my friend》

\*

\*

\*

ービル屋上ー

「へりに確保されたケースとマテリアルは妹たちが回収します。お嬢様は地下の方に……」

「うん……」

「騎士ゼストとアギト様は……？」

「……別行動」

「お一人ですか？」

「一人じゃない……。私にはガリユールがいる」

「失礼しました。協力が必要でしたらお申し付け下さい。最優先で実行します」  
「うん」

ウーノからの通信が切れ、私は行動を開始することにした。

「行こうかガリユール。探し物を見つけるために……」

\* \* \*

「ギンガさん、お久しぶりです」

『うん、ティアナ。現場リーダーはあなたでしょうか？』

「いえ、現場リーダーはファイルです。今回はファイルの方が適任だったもので……」

「えっ、ファイルがそこにいるの!?!」

「久しぶりですね、ギンガさん。時間がないので簡単に説明します。ひとまず南西のF

「94区画を目指して下さい。途中で合流しましょう」  
『……F-94、了解。ファイル後で会いましょうね』

ファイル、相変わらずだね。でも、元気そうで良かった。

『ギンガさんって、スバルさんのお姉さんですよね』

『そう、あたしのシューティングアーツの先生で、歳も階級も二つ上』  
『ほえ〜』

『ギンガさん、デバイス同士で総合位置把握と独立通信が出来ます。準備は良いでしょうか?』

「うん、ブリッツキャリバーお願いね」

《Yes sir!!》

私はブリッツキャリバーを起動させ、バリアジャケットを装着する。

ファイル、あなたの作ったブリッツキャリバー、使わせてもらおうね。

\* \* \*

―機動六課、作戦司令室―

「スターズ1、ライトニング1、エンゲージ」

なのはちゃん達がガジェットを迎撃してくれているが、いかんせん数が多い。

これで終わればいいんやけど……。

そして今、ギンガから事故現場の状況を聞いていた。

「私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と壊れた生体ポットなんです。丁度5〜6歳の子供が入る位の……。近くに何か重いものを引きずって歩いた後があつて、それを辿つていこうとした最中、連絡を受けた次第です」

「そうやったんやね」

「それからこの生体ポッド、少し前の事件でよく似たものを見た覚えがあるんです」

「私も……な……」

「……人造魔導師計画の……素体培養器……」

「これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素体として作り出された子供ではないかと……」

\* \* \*

「人造魔導師って?」

「優秀な遺伝子を使って、人工的に産み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な能力や魔力を持たせる。それが人造魔導師……」

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたって色々無理が生じる。コストも合わない。だから、よっぽどどうかしている連中でない限り、手を出したりしない技術のはずなんだがな……」

でも、スカリエツティはそれに手を出した。未来で戦闘機人が出て来ていたのがその証拠だ。

そしてあいつらのせいで、みんな殺されたんだ……。

《動体反応確認。ガジェットドローンです》

「っ!! 来ます。小型ガジェット六機!!」

\* \* \*

「スターズ1、ライトニング1、共に2グループ目を撃破。順調です!!」

「うん」

「スターズ2とリイン曹長も、1グループ目を撃破です!!」

「おしっ、いい感じだ!!」

「リインも絶好調です!!」

「ガンガン行くぞ。さっさと片づけて、他のフォローに回らないと……」

「はいです!! って、あれは!!」

リインが気付いたのは増援のガジェットだった。

だけど何かがおかしい気がする……。

「この反応……」

「……うん」

なのは達も何か気付いたようだな……。

\*

\*

\*

「ふふふ、クアットロのインヒューレントスキル、シルバーカーテン。嘘と幻のイリユージョンで回ってもらいましょう」

いくら機動六課の隊長達に力があつたって、この幻影には手こずるでしょうね。さて、どういう風に動きますか。じっくり見せてもらいますわよ。



\* \* \*

「航空反応増大!!、これ……嘘でしょう!!」

「なんだ……これは……?」

「波形チエック!! 誤認じゃないの!!」

「どのチエックも実機としか……」

「なのはさん達も目視で確認出来るって……」

「グリフィス君!!」

「はい!!」

嫌な予感的中してしまったな。

もう出し惜しみしてる場合やないな……。

\* \* \*

私となのはは、迎撃を繰り返しているが、このガジエツト達は全部が本物という訳ではないみたいだ。

「幻影と実機の構成編隊……？」

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちよつとキリがないね……」

「ここまで派手は引きつけをするって事は……」

「へりか地下道に主力が向かっている」

なのはがオーバルプロテクションを使って防戦の状態になっているが、このままじゃ状況は悪化する一方だ……。

「なのは、私がここに残ってここを抑えるから、ヴィータと一緒に……」

「フェイトちゃん!？」

「コンビでもこのまま空戦していたんじゃ、時間が掛かる。限定解除すれば広域殲滅でまとめて落とせる!!」

このままじゃ、シヤマルもファイルも危ない。

早くこいつらを片付けて応援に向かわなきゃ!!

「それはそうだけど……」

「何だか嫌な予感がするんだ……」

さつきから胸騒ぎが止まらない。

不安がずっと収まらない……。

「でも、フェイトちゃん……」

「割り込み失礼。ロングアーチからライトニング1へ。その案も限定解除申請も、部隊長権限にて却下します」

「はやて?」

「はやてちゃん、なぜ騎士甲冑?」

「嫌な予感私も同じでな。クロノ君から私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ……」

限定解除って……。

はやての申請はそう簡単にはできないのに!!

「ちゆうこことではなのはちゃん、フェイトちゃんは地上に向かってへりの護衛。ヴィータとリインはフォワード陣と合流。ケースの確保を手伝ってな」

「了解!!」

\* \* \*

―聖王教会、本部―

「君の限定解除許可を出せるのは、現状では僕と騎士カリムの一度ずつだけだ。承認許諾の取り直しは難しいぞ。使ってしまったて良いのか……」

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するのは嫌やからな。私かてあんな未来はご」

めんやし……」

「場所が場所だけに、SS（ダブルエス）ランク魔導師の投入は許可出来ない。限定解除は3ランクのみだが、それでいいか……」

「……S（シングルエス）、それだけあれば充分や」

「ふう……」

僕は魔法陣を展開し、はやての限定解除を行うことにした。

確かに現状ではこれしかないが、なるべくなら使いたくはなかったな……。

「八神はやて、能力限定解除3ランク承認。……リリースタイム120分」

「リミット……リリース!!」

能力限定解除されると同時に、ベルカ式の魔法陣が強い光を放ち、力が解放された。そしてスクリーンには、魔法陣の光が強く輝いているはやての姿があった。

「完全解除で無い分、許諾取り直しも幾らか優しくなるかも知れませんし……ね……」

「……気休め程度ですがね。地上部隊は上層部が厳しいです」



こつちのことは心配せんでええよ。  
だから、みんな、レリックのことは頼んだで!!

\*

\*

\*

ー地下道ー

ガジェットと交戦している俺達は、通信やサーチチャーで現状を知ることが出来た。  
どうやら向こうも本格的に動いてきているな。

「空はどうやら大変みたいね……」

「うん……」

「ケースの推定位置までもうすぐみたいですよ」  
「うん」

ケースの推定位置に向かおうとした時、壁が爆破し誰かが現れた。  
煙が引くとそこには……。

「ギン姉え!!」

「ギンガさん!!」

「一緒にケースを探しましょう。ここまでのガジェットは、殆ど叩いてきたと思うから……」

「うん!!」

「ファイル……」

「うわっ……。ちよつとギンガさん!?!」

再開もつかの間、いきなりギンガさんが俺に抱きついてきた。

「ファイル……本当に会いたかった。私、どうしてもあなたに、直接お礼が言いたかった」



の

「俺は約束を果たしただけですよ。ギンガさんが全力を出せるように……ね……」

約束もそうだけど、何より二度と死なせたくないから――。

「ファイル……あたし……」

「ギンガさん、今はそんなことをしている場合じゃないでしょう。今は先に進まないと

……」

「そうね、ティアナ。とにかく急ぎましょう……」

\* \* \*

―機動六課、作戦司令室―

「ロングアーチーシヤリオから、ロングアーチ0八神部隊長へ」

「はいな」

「サイティング・サポートシステム、準備完了です。シユベルトクロイツとのシンクロ誤差、調整終了」

「うん、了解。ごめんな、精密コントロールとか長距離サイティングとか、ラインと一緒にやないと、どうも苦手で……」

今はロングアーチでサポートしてくれるからええけど、これから先、苦手なんて言つてられない。

私も、時間を見て鍛錬せんとな――。

「その辺はこつちにお任せ下さい。準備完了です」

「……おおきにな」

シャーリーからの通信が切れると、ガジェットを殲滅するために夜天の書を出し、シユベルトクロイツを構えた。

「来よ、白銀の風……」

「天よりそそぐ矢羽となれ!!」

ベルカ式の魔法陣が足下に展開され、全面にはミッド式の魔法陣が展開された。

私は、なのはちゃんとフェイトちゃん及安全域まで退避したのを確認し、撃つことにした。

「第1波、行くよ!!」

魔力チャージが完了し、前面の魔法陣も強い光を放っていた。

「フレース……………」

「ヴェルグ!!」

五つの白き砲撃はガジェットに向かって、一直線に向かっていった。

\* \* \*

―機動六課、作戦司令室―

「フリースヴェルグ、第1波発射」

「発射軌道……正常!!、グループEに着弾します」

「5……4……3……」

「2……」

「1」

「0」

カウント0と同時に光弾の一つが広域爆発を起こし、ガジエットのグループを殲滅した。

続いて第2波、3波が発射され次々とガジエットのグループを消滅させていった。

「シャーリー、消滅時のデータから幻影と実機の判別パターンの割り出しを。ファイルの

くれたデータがあれば必ず見分けられる」

「うん、全力で見つける!!」

こつちにはファイルがくれた戦闘機人のデータがあるんだ。  
必ず判別。パターンを割り出してやる。

\*

\*

\*

俺たちはガジェットと交戦しながらケースの在処に向かっていた。

ギンガさんも加わったおかげでかなりの戦力アップがした為、ガジェットも全機殲滅をし、ケースの近くまで来ていた。

そして……。

「ありました!!」

キャロがケースを見つけたその時、何かを蹴って近づいている物音がする。物音の正体は球体で、ケースを持っているキャロに近づいていた。

「ぎゃあああ!!」

黒い物体はスピードを上げ、地面に落下すると衝撃でキャロが吹っ飛ばされてしまった。

どうやら今の衝撃でケースもどこかに行ってしまった。すぐにエリオが迎撃するが、手傷を負わせられたみたいね。

「エリオくん!!」

黒い物体の幻影が解けると、そこには一匹の魔物が立っていた。違う、あれは召喚獣だ。それもかなり力がある奴だ……。

「あっ!!」

召喚獣に気を捕らわれていると、紫の髪の少女がケースを奪おうとしていた。キヤロが気が付いて取り返そうとしたが……

「……邪魔」

少女の攻撃にキヤロはプロテクションで防ぐが、至近距離で受けてしまったためプロテクションが破られ吹っ飛ばされてしまった。

スバルとギンガさんが魔物に対応しているが、二人がかりで何とかの状態だ。どうする……考えろ……。

今すべき事は……。

「こらあ、その女の子。それ危険なものなんだよ!! こっちに渡して!!」

スバルの言葉にも全く介さない様子だった。

「…………ごめんね。乱暴で…………でもね、これ本当に危ないものなんだよ」  
「…………くっ!!」

そう、スバル達が引きつけてくれている間に、ティアはオプティクハイドを使って少女に近づいたのだ。

クロスミラージュの魔力刃を首元に近付け、動きを封じること成功した。

(ルールー、1、2、3で目をつぶれ。いいか…………)

(1…………2…………)

(スターレンゲホイル!!)

ティアが少女を逮捕しようとした次の瞬間、紫の炎が飛んできて強烈な爆音と閃光が発生した。

あまりの音に耳を塞ぐことになり、少女から注意をすらしてしまった。

その隙に逃げようとしていたが、なんとかクロスミラージュを向けたが、召還獣の攻撃に吹っ飛ばされてしまった。



「ちっ……」

今はこいつに構ってられない。

俺は吹っ飛ばされたティアに代わって、少女に威嚇用の魔力弾を撃った。

「えっ!!」

しかし、召還獣が自分の身で少女を庇い攻撃は通らなかつた。

さらに、少女の使い魔なのか分からないが、赤い髪の子供な少女が現れた。

「つたく、あたし達に黙って勝手に出掛けたりするからだぞ。ルールもガリニューも」

「……アギト」

「おう、本当に心配したんだからな。まあ、もう大丈夫だぞ。何しろこのあたし……」

「烈火の劍精……アギト様 came たからな!!」

「おらおら、お前らまとめてかかってこいや!!」

召喚師に召喚獣……。それに烈火の劍精と名乗るあの少女。

間違いない。あれはライン曹長と同じユニゾンデバイス。

さて、どう切り抜けるか………。

## 第13話 ナンバーズ（前編）

「ううう……。はっ!!」

「くっ!!」

「ううっ……」

俺達はアギトと名乗る、融合騎の攻撃の前に防戦一方の状態になっていた。

キャラはさっきの攻撃で、意識を奪われてしまってまだ回復していない。

おまけに召喚師の少女が召喚したあの召喚獣は、こっちの戦力じゃ現状ギンガさんしか対抗出来ない。

融合騎の攻撃もかなりの連続攻撃で、隙がないし、接近戦能力は無いが、中距離戦には秀でている感じだ。

「ティア、フィルどうする?」

「任務はあくまでケースの確保だ。撤退しながら引きつけるしかない」

「こっちに向かってきている、ヴィータ副隊長やリイン曹長にうまく合流出来れば、あの

子達も止められるかも……だよね」

「スバル……救援を期待するな。あつちもガジェットに対応していて、なかなかこれない状態みたいだ」

予想以上にガジェットの数が多くて、全部片付けるにはもう少し時間が掛かるみたいだ。

\* \* \*

「ちいい、どうなってやがるんだ!! いくら片付けてもきりがない!!」

「幻影と実機の複合パターンなのは分かっているんですけど、こう多いと……」

くそっ!! フォワード達が危ないってのに、これじゃ助けにいけない。

フィル、すぐに片付けるから、なんとかもち堪えてろよ!!

\* \* \*

「じゃ、どうするの!？」

「……一か八か、俺のワープでヴィータ副隊長達に合流する」

「ちよつと待って、あんたのワープって一人を運ぶのが限度のはずでしょう!!」

「だから、キャロの力を借りるんだ。俺にブーストをかけてもらい、魔力を一時的にあげる」

リミットを解除してもいいが、時間制限がある以上、デメリットの方が大きい。

「う……ううん……」

「キャロ、気がついたのね」

「はい、すみません……。今まで……。って、どうしたんですか?」

俺はさっきの案をキャロに説明する。

すると、キャロは少し考えていたみたいだが――。

「確かにわたしのブーストを使えば、可能かもしれませんが。でも、それじゃフィルさんに相当の負荷が……」

「大丈夫、俺を信じてくれ。キヤロ」

「フィルさん……」

俺にかかる負荷だったら、どうとでもなる。

とにかく今はここを脱出しないと――。

「……皆さん、全員を転移させるとなると、かなりブーストをかけなくちゃなりません。すみませんがその間、わたしとフィルさんに敵を近づけさせないようにしてください」

「キヤロ……。あんた……」

「分かったよキヤロ。あいつらの攻撃は、あたし達が何とか食い止めるよ!!」

「キヤロ、フィルさん、お願いします」

「フィル、あなたに賭けるわ。私はスバル達を援護するね」

「みんな……。頼むぞ……。だけど、俺とキヤロの周りから離れないでくれ」

転移の効果範囲はそう広くない。

なんとかして、相手に気づかれずにやらないと——。

「……だったら、あたし達全員でプロテクションを張るから、その間に済ませて」

「ティア、すまない」

「ファイル、今はあんたの策に賭けるしかないでしょう。あんたは余計なことを考えないで集中して!!」

「わかった……。その前にヴィータ副隊長聞こえますか。こちらスターズ5、ファイル・グリード応答願います」

\* \* \*

「なんだよファイル、どうしたんだ。こっちはガジェットの相手で手一杯なんだ」

ファイルからの緊急通信が入るが、正直こっちはこいつらを撃退するので精一杯だ。

（時間がないので簡潔に言います。現在レリックを狙う召喚師と召喚獣と地下で交戦中です。ただ、ここで戦うのはかなり不利なので、転移で場所を移動します）

なるほど、そういうことか——。

地上の方があたし達にとっても戦いやすいし、フォローにも回れる。

（わかった。だったら、あたしかりインのどつちかが降りた方がいいか？）

（そうしてもらえると助かります。副隊長達が空にいますと転移した時、投げ出される形になつちやうのでリイン曹長かヴェータ副隊長のどちらか、ビルか地上に降りてもらえませんか）

「わかりました、私が近くのビルに行きますので、私の魔力を目印にしてください」（すみませんリイン曹長）

\*

\*

\*



「これで転移が出来るぞ……。やるぞ、キャロ!!」  
「はい!!」

俺はプリムと一緒にワープの術式を発動させ、キャロもブーストの準備に取りかかった。

そしてティア達も全員で、俺たちの周囲にサークルプロテクションを張り、攻撃に備える。

「ケリユケイオン!!」

《Boost Up Magic Power》

「我が乞うは、強き魔力……」

\* \* \*

「ルールー……。あれってもしかして!？」

「……増幅魔法。ブースト……」

「へっ!! 何するか知らねえが、バリアごとぶち抜いてやる。くらえ!!」

炎の球は俺たちに一直線に向かってくる。

「「「うわああああ!!」」」

何とか持ちこたえたが、何度も喰らうとプロテクションが持たない。

「フィル、キャロ。まだなの!!」

「……気高き戦士に……さらなる力を……」

キャロの詠唱が終わると、魔法陣が強く輝き、キャロの両手に力が集められた。

「ブーストアップ、パワーインジエクト!!」

キャラの魔力増幅を受けると、全身に魔力がみなぎり、広範囲のワープが出来るようになる。

「みんなつかまれ!!」

「うん!!」

「はい!!」

「ええ!!」

「分かりました!!」

「OKよ菲尔!!」

全員が効果範囲に入ったのを確認し――。

「全員つかまったな。いくぞ!!」

次の瞬間、俺たちの姿はこの場から完全に姿を消した。

\* \* \*

「リイン、そつちはどうだ。フォワード達の反応はあつたか!?」  
「まだです。こつちには来てません!!」

ファイルに言われてビルに来ていますが、お願いします。無事でいてください……。

「ファイル……。これは!!」

「どうしたリイン!!」

「転送反応あり!! フォワードのみんなです!!」

「本当か!!」

次の瞬間、白色の魔力球に包まれたファイル達が現れた。  
転移が成功したんですね。

「ファイル、無事だったんですね!!」

「ティアナ達も無事みたいだな」

『はい!!』

\* \* \*

「……逃がさない」

合流できたのも束の間――。

紫色の転送用魔法陣が現れ、ルーテシアとアギト、そしてガリユーが出現した。

「……どうやら、戦うしかないな。だがな、さつきみたいに行くと思うなよ。みんないな!!」

『おう!!』

「フォワード陣とギンガはフィルの指示に従って動け。あたし達はあの召喚獣を何とかする。お前達は召喚師をなんとか押さえろ!!」

『はい!!』

「散れ!!」

ヴィータ副隊長の合図で、副隊長達は召還獣に、俺たちはルーテシアに攻撃を仕掛ける。

\*

\*

\*

「ふつとべええええええ!!」

あたしの一撃は完全に捕らえたかと思われたが、召還獣がベルカ式の魔法陣を展開し防がれてしまった。

「くっ!! こいつ!!」

《この程度の攻撃で、やられる俺と思うな……》

「こいつしやべれるのか!?!」

召喚獸ってやつは、自分の意志を持っていたとしても言葉を発する事は少ない。つてことは、こいつはかなりの力を持つてるのか!?

《俺は巫女を……ルーテシアを守るために存在する。そう簡単にやられるわけにはいかん》

「そうかよ……。だったらこれならどうだ!!」

《!!》

あたしは自分の周りに幾つもの鉄球を出現させた。

シユヴァルベフリーゲン——。

通常ならグラーフアイゼンで撃ち出さなくてはならない。

だけどな……。

《無駄だ……。お前は古代ベルカの騎士みたいだが、察するにその鉄球は単体では威力はないはず……。打ち出す時間など与えん!!》

「……はん!! 言つたる。ベルカの騎士を甘く見るなつて……。こいつは、こういう使

いかたもあるんだ!!」

合図と同時に、鉄球は一齐に召還獣に放たれる。

アイゼンでぶっ叩いてないから、威力は100%じゃないけど……。

《くっ……だが、この程度ではやられん》

確かにこの鉄球は足止め程度にはなっているが、倒すほどの威力はない……。

「何度も言わせんじゃねえ!! あたしをなめんなよ。こいつが本命だ!!」

アイゼンをギガントフォームにスイッチし、フルパワーで思いつきフルスイングでぶっ叩いた。

「ふつとびやがれ!!」

《しまっ……》



召喚獣も気づいたが、時すでに遅し。

ギガントフォームの一撃が、決まり近くのビルに叩きつけられていた。

\* \* \*

副隊長達が召喚獣と戦っている時、あたしたちもルーテシアとアギト、そしてルーテシアの召喚した新たな召喚虫と戦っていた。

「なんなの!! このデカブツは!!」

「気をつけろ!! こいつは重力で相手をつぶすだけでなく、放電能力もある。そいつを喰らったらバリアジャケットがあっても、しばらく動けないぞ!!」

「分かっているわよ!!」

ファイルから事前に、こいつらのことは聞いているけど、実際に遭遇するとやっぱりやっかいよね。

副隊長達があつちを押さえてくれているから、こいつだけですんでいるけど……。

「ティア、呑まれるな。召喚虫が厄介と言つても、俺たちで何とかなる奴だ。それにルーテシアを押さえれば……」

「……そうね。あいつは自立行動は出来なそうだから、召喚師を押さえればどうにかなるわ。あとはあの融合騎ね……」

召喚師さえ押さえてしまえば、あのデカブツは力を発揮することが出来なくなる。

「フィル、あの融合騎はあたしが何とかするから、あんたとスバルで召喚虫のほうを押さえて!!」

「分かった。お前のサポートはギンガさんに任せる。頼むぞティア!!」

「あんたの方こそ、ドジ踏むんじゃないわよ!!」

「確かに……。行くぞ、スバル!!」

「うん!!」

「ギンガさんは、あたしのサポートをお願いします。……散って!!」

\* \* \*

ティアの合図を切欠に俺たちはそれぞれの相手に向かっていった。  
俺とスバルは地雷王に、ティアとギンガさんはアギトに……。

「スバル、俺がシューターであいつを攪乱するから、お前はその隙を突いてデイバインバスターを叩き込め!!」

「でも、あいつかなり身体が硬いよ。普通に撃ち込んでも……。それに、電撃で迂闊には打ち込めない!!」

「それについては俺に考えがある。俺を信じてくれ」

うまくいくかどうか分からないけど、やってみる価値はある。

「……分かった。今はファイルの作戦を信じるよ」

「任せなつて……。プリム、カートリッジロード」

## 《了解です》

カートリッジを2発ロードし、俺はスフィアを展開する。

「うそ?! そのスフィアの数!!」

スバルは驚いているが、たがが16個のスフィアにすぎない。

現になのはさんなんて、この倍以上のスフィアを自在に操ってるんだぞ。

「……言ったと思うが、未来ではこのくらいのはさんは当たり前にしてたんだ。それになのはさんなら、この位あっさりやるぞ……」

「そ、そりやそうだけど……」

「とにかく、あいつの動きが止まったら全力でぶちかませ。いいか、チャンスは一回だぞ」

「分かったよ、ファイル」

「……いくぜ、プラスチックシューター!!」

一斉に放たれたスフィアは、地雷王の周りを攪乱するが、攻撃は一つも当たっていない。  
い。

だが、これがこつちの狙いなんだ——。

《ウオオオオオン……》

「よし……奴さん。俺に集中してきたな」

《ええ……地雷王はスフィアしか見ていませんね。シューターが、かなりイライラするみたいですね》

「ルーテシアも地雷王を信じて、何かをする様子は見られないな。だがな、ブラストシューターは、攻撃用に撃ったんじゃない。こいつはあくまで囷だ」

そう、スフィアはあくまで囷、こいつで攻撃したって、ダメージは与えられないのは充分分かってる。

《でも、それも限界ですね。これ以上は危険です》

「分かっている……。本命はこれからだ。やれ、キャロ!!」

「はい!! 錬鉄召喚、アルケミックチェーン!!」

地雷王の足下に魔法陣が展開され、周囲から拘束用の鎖が召喚され、全身を捕縛する。地雷王が暴れて鎖を引きちぎろうとするが、鎖はびくともしない。

おまけにこいつは鋼鉄の鎖だ。

地雷王が電撃を出してもアースの役割で、全部地面に吸い込ませられる。

《ウオ……ウオオオオオン!!》

「地雷王!! ……くっ!!」

「おっと……そうはさせないぜ。ルーテシア、お前の相手は俺がする」

「ファイル……グリード……」

牽制用のバレットはギリギリでかわされてしまったが、動きを止めることは出来た。

\* \* \*

「スバル、キヤロが動きを止めているうちにやれ!!」

「オツケー!! 行くよマツハキヤリバー!!」

《了解です。ウインググロッド展開》

「一撃……必倒……デイバイン……」

こいつを昏倒させるには、普通に撃つても効かない。

眉間に……それもゼロ距離で撃つしかない!!

「スバル!! 無茶だ!!」

「フィル、あたしを信じて!! 絶対に決めるから!!」

そう、この位出来なきや、これから先は戦っていけない。

絶対に決める!!

「バスター!!」

《グオオオオオオン!!》

デイバインバスターは、地雷王の眉間に正確にヒットし、意識を刈り取った。

「やった!! つてうわあああ!!」

「スバル!!」

デイバインバスターを命中させたはいがバランスを崩してしまった。

《sonic move》

「ぎやあああ!! ……つてファイル?」

バランスを崩して、地面に激突する寸前ファイルが高速移動で助けてくれた。

「つたく、お前つて奴は本当に後先考えないな。攻撃に全てを使っちゃったら、ああなるに決まっているだろ」

「えへへ、ごめん。だけど今のあたしにはあれしか通じそうになかったから。それにファイルがいたからフォローはしてくれておもったんだ」



実際ソニックムーブで助けてくれたしね。  
でもファイルがいなかったら、もっと安全策でいったよ。

\* \* \*

「確かに全力でぶちかませって言ったのは俺だからな。ああなるとは予測してたけどな  
……」

「本当は助けってもらってばかりじゃいけないんだけどね。だけどファイルがいるって思う  
とあたし達は全力で戦えるんだよ」

「……だったら、もう少し配分を考えて戦え。そんなんじやすぐ倒れちまうぞ」

ペース配分が出来なきや、長期戦なんて出来ないぞ。

スバルの良いところは真っ直ぐな所んだけど、こういうときは弱点にもなりかねないからな。

「うん、そうだね。戦いはこれで終わる訳じゃないんだからね」

「ああ、地雷王は押さえたが、まだ……」

そう、召喚師であるルーテシアを押しえなくちや意味がない。

スバルはさっきのデイバインバスターで殆ど余力が残ってないし、キャロもさっきのブーストとアルケミツクチェーンで、相当の負担がかかってしまった。

「地雷王……戻って……」

どうやら地雷王は、送喚したみたいだな。

あとはルーテシアを止めるだけだな。

\*

\*

\*

「地雷王!! ちつくしよう!! やりやがったな、あいつら!!」

「あんたもいい加減に観念しなさい。あたし達をなめすぎたのが、あんた達の敗因よ!!」  
「うるせえ、まだあたしは負けてねえ!! これでもくらいやがれ!!」

なに、あのでかい魔力球は……。

大きさから推測して、くらったら間違はなくノックダウンされる。

まずいわね、あつちは空、こつちは地上。

迎撃しようにも、空戦が出来ないあたしじゃ……。

「ティアナ、ここは私に任せて」

「ギンガさん?」

「あれが発射されるには、少しタイムラグがあるわ。あたしが囿になる」

「でも、ウイングロードじゃ気づかれてしまいますよ」

ウイングロードでは、空中に道を作る必要があるし、第一それを許してくれるとは思わない。

「だから、貴女の幻術が必要なのよ」

「そういうことですね……。分かりました、やってみます!!」

ギンガさんの考えてることが分かり、あたしはすぐに実行に移る。

「頼むわよティアナ。じゃ……」

「ええ……」

「GO!!」

\* \* \*

「へっ!! 何小細工しようといてるか知らねえが、こいつでまとめてぶっ飛びやがれ!!」

「これでも喰らいなさい!!」

「そんなへなちよこ弾に当たるかよ!!」

そんな攻撃に当たってたまるかよ!!  
こいつの攻撃はおとりだ。

こいつらの本命は……。

「反対側にいるてめえの方だ!! くらえ!! 轟炎!!」

こいつを倒しちまえば、あのオレンジ髪の奴なんて大したことない。

「……ふっ、甘いわね」

「う、嘘だろ!! 受け止めやがった!!」

あたしの最大攻撃魔法をうけとめやがった——。  
こっちはフルパワーでやってるのに!!

\* \* \*

「ギンガさん、もう少しだけ頑張ってください……」

あの融合騎はあたしが作った、シルエットあたしに気をとらわれている。

もつともあたしのシルエットのシューターに気づかれたら、それまでなんだけどね。未熟なシルエットは、ギンガさんのフォローで何とかカバーできる。

「ここからが本番ね、クロスミラージュ!!」

《yes》

「距離はギリギリだけど、やってみせる!!」

「これくらいやらなきゃ、フィルと一緒に戦っていけない……」

今のあたしに使える最高の砲撃……。

なのはさんが教えてくれた、クロスファイアの最終形態。

《ティアナ、集中してください。スファイアは多く展開しないでいいですから》

「それは分かっているんだけど……」

《集束系は集中力が大事なんです。少ない魔力でも一点に集めれば破壊力は増します。フィルのブラストブレイザーと同じ原理です》

とはいっても、やっぱりきついわね。

なのはさんもフィルも本当にすごいわ。これだけの魔法を実戦で使いこなしてるんだから——。

——でもね。

「ランスタアの弾丸に、貫けない物はないのよ!!」

次の瞬間スフィアは一点に集まり、一つの魔力球となった。

\* \* \*

（集束反応……ティアナね……。だったらこれで私の役目は終わりね。この魔力球も、ここで押さえておく必要はないわね）

「はああああ!!」

「まじかよ!! あれを蹴り飛ばしやがった!!」

あたしの轟炎を……。

非常識にもほどがある……。

「おい、逃げる気か!!」

おかしい？

あたしに攻撃をするわけでもなく……。

なんだこの反応は……魔力反応!?

まさか!! こいつらの狙いは!?



\* \* \*

「気づくのが、少し遅かったわね」

《集束完了、今です!!》

「いつけえ!! クロスファイアシュート!!」

引き金を引かれたクロスファイアシュートは、一直線にターゲットに向かっていった。

「し、しまった!! かわせるか!!」

クロスファイアはギリギリでかわされてしまったが、ライン曹長が隙を突いてバインドをかけ、動きを封じることになった。

「ライン曹長!!」

「二人ともよく頑張りましたね。フィル、こつちも捕まえましたですよ」

\* \* \*

「アギトまで……」

「ルーテシア……」

俺が彼女の近くに行こうとすると……。

「来ないで!!」

召還された紫色のダガーが俺の右肩を貫く。

貫かれた痛みで、俺は意識が朦朧とし始める――。

アギト達が捕らえられて、我を忘れているな。

魔法が殺傷設定状態になっている。

「フィール!!」

《マスター!!》

「……………く、来る、な。スバル」

「何言ってるのよ!! 相手はあんたを殺す気なのよ!!」

いつの間にかティアとギンガさんが合流していた。  
どうやら、そっちはうまくいったみたいだな。

「ティア、ここは俺に任せてくれないか…………。頼む…………」  
「フィール…………」

未来では、この女の子を死なせてしまった。

この子は、俺がお世話になったあの人の子だったのに――。

今度は絶対に死なせない!!

——俺の命に代えてもだ!!

「分かった……。でも、死んだら許さない!!」

「すまん……」

「ティア!! どうして止めないの。このままじゃファイルは!!」

「スバル、いくら言っても無駄よ。あんなったファイルは止められないって、昔から知ってるでしょう」

「……うん」

みんな、本当に済まない——。

俺のわがママを聞いてくれて……。

「今はファイルを信じましょう……」

\* \* \*

「ぐっ……ぐわあ!!」

《マスター、これ以上は危険です!! 攻撃してください!!》

「駄目だ……」

《何でなんですか!! このままじゃマスターが死んでしまいます!! せめてプロテクションだけでも!!》

マスターの身体は、ダガーの攻撃で全身傷だらけです。

最も酷いのは、右肩と左足に刺さったダガーだ。

——もしかしたら、動脈も切っているかも知れない。

出血が全然収まりません!!

「駄目だ!! プリム、これは最初で最後のチャンスなんだ。ルーテシアに魔法の本当の怖さを教える……」

《どういふことですか……?》

「いいか、ルーテシアは母親を取り戻すためだけに、簡単に殺傷設定にしてしまっている。それではいつか本当に殺人鬼になってしまう」

《だからといって!!》

このままじゃ、マスターは本当に死んでしまいます!!

せめて治療魔法で傷を塞がないと――。

「未来で、キャロと同士討ちになったのは覚えているな。あのとき……キャロに殺傷設定の魔法を何発も使っていた。キャロは最後までルーテシアを信じ……攻撃を受けていた」

《!!》

「そして、キャロは最後の力で、何とか白天王を止めただけ……」

《そう……でしたね……》

キャロがしたのは、ヴォルテールで白天王と相打ちにすることでした。

二つの強大な召喚獣の力が激突して、二人とも助からなかったんです……。

「だから、ここでルーテシアに、人を傷つけることの怖さと命の重さを伝える……。殆ど賭だけどな……」

マスター……全くあなたって人は……。

《分かりました……でも、せめて右肩と左足の傷は私が治しますよ。そんな傷があったら伝える前にマスターが死んでしまいますから……》

「サンキュー……相棒……」

\*

\*

\*

プリムに治療魔法を掛けてもらおうと幾分か回復した。

右肩と左足の治療に集中したせいで、他の所は殆ど代わっていなかったが、大分ましになった。

「まだ……来るの……来ないでよ!!　なんで、何で倒れないの!!」

「倒れるわけにはいかないんだよ……お前が……間違いに気づくまでな……」

「なんで……私……何、間違っているの。私はお母さんを助けたいだけなのに!!」

その思いは痛いほど分かる。

だからといって、人殺しの魔法を使って言い訳じゃない!!

「母親を助けたいからと言って、平気で人に殺傷設定の攻撃魔法を使うな!!　それと召喚獣達にむやみな殺しをさせるんじゃない!!」

「違う!!　ガリユー達にそんなことさせてない!!」

「ガリユーはともかく、自立行動のとれない他の召喚獣達は、お前の行動一つで決定するんだぞ!!」

召喚獣は、召喚師の意志で行動が決定する。

「私、殺しなんてやってない!!」

「こつちを見てみる、ルーテシア!!」



「……………あ……………あ……………」

ルーテシアは、血だらけの俺を見て驚愕している。

出血多量で、意識を保つのも辛いけど、ここで倒れるわけにはいかない。

ルーテシアに人間としての感情を取り戻させるまでは——。

「ちゃんと見るんだ……………。ルーテシア……………」

「私……………何を……………」

「いいか、お前の感情一つで簡単に人を殺せるんだぞ。お前の持っている力はそう言う物だ……………」

「あ……………あ……………」

ルーテシアの奴、どうやら理性を取り戻してきたみたいだな。

混乱はしているが、今なら話も聞いてくれる……………。

「あ……………」

俺は出来るだけ優しく彼女を抱きしめる。

これ以上責めるのは逆効果だから――。

「でもな……。お前がちゃんと気づいてくれれば、俺はそれでいい。お前はまだ、誰も殺していないんだからな」

「だけど……。だけど、あなたが……」

「心配するな、死にはしないよ。この程度ならな」

こんな程度でくたばっていたら、未来では何十回って死んでいる。

「でも!!」

「だったら俺がちゃんと教えてやるよ。お前の力の正しい使い方を、そして……」

「何より、俺は……。お前の友達になりたい」

「とも……。だち……。?」

「ああ、友達だ。今まで独りぼっちだったんだろ。母親がいなくなっただけから、ずっと……」

「……………うん」

\* \* \*

確かにアギトもガリユームも、一緒にはいてくれたけど……。

「俺は……………お前と友達になって、お前の笑顔を見たい。それじゃ駄目か……………？」

「いいの……………。私で……………？」

本当に甘えていいの。私……………。

この人は管理局の人なのに、だけどすごく暖かい物を感じる。

まるで……………。

「ふう……………お前の場合はこつちが待つよりも、多少強引にやった方がいいみたいだな。いいか、もうお前は俺の友達だ。お前が嫌わない限りな……………」

「うん!!」

「良い笑顔だ。よろしくな、ルーテシア」

こうして抱きしめてもらっていると、なんか心が温かくなる。  
何でだろ……不思議だな……。

\* \* \*

『フィル!!』

「フェ、フェイトさん!？」

いつの間にフェイトさんから通信が入ったんだ。  
いつたい、誰が？

『また、無茶やったの!! その傷だらけの身体はどういう事!？』

《聞いてくださいよ、フェイトさん。マスターったら、本当に無茶なことをして……》  
「こらプリム、余計なことを言うんじゃない!!」

こんな事フェイトさんにばれたらどうなるか!!

案の定、画面のフェイトさんは笑顔んだけど、目が笑ってない——。

『説明………してくれるんでしょうね』

「は、はい………」

俺はさっきまでのことをフェイトさんに報告する。

するとフェイトさんは……。

『……ば、か』

嗚咽をこらえながら……。

『どう、して………どうして、いつもいつも無茶ばかりする、の。本当に、心配したんだよ

……』

通信はそこで切れてしまった。

俺は何も言えなかった。

なのはさんにも言われていたのに、好きな人を泣かして……。

「フィル、あんた、帰ったらフェイトさんにちゃんと謝りなさいよ。さつきだつて、ブー  
ストかけてのワープなんてやってるんだから……」

「……ああ」

ティアの言うとおりで。

ちゃんと、フェイトさんに謝ろう。

\*

\*

\*

「おーい、お前ら無事か？」

「ヴィータ副隊長!! 無事だったんですね」

「あたしを誰だと思ってるんだ。ほれ、連れてきてやったぞ」

「ガリュー!!」

ヴィータ副隊長が連れてきたのはガリューだった。

傷だらけの戦士に、バインドを掛ける真似はしなかった。

『ルーテシア、無事か』

「うん、ガリュー……ごめんね。私が無理を言ったから」

『気にするな。それと良かったな……』

「えっ？」

『リンクでお前の気持ちが伝わってきた。良き仲間が出来たみたいだな……』

「うん……」

『仲間を……友を大切に……』

「ありがとうガリユール……ガリユールも傷だらけだよ。戻って傷を癒して……」  
『そうさせてもらう……。また、必要な時は呼んでくれ』  
「うん……」

ガリユールはルーテシアが送喚用の魔法陣を作るとそこに入ってしまった。

\* \* \*

「さてと、こっちは何とかなったけど……」

「なのはさんとフェイトさんは、さっきの通信でもう片が付いて、こっちに向かってい  
るって聞いたけど……」

「それでもかなりの距離だからな。しばらくは掛かるだろうな」

「ここから、フェイトさん達がいるところまでは結構距離がある。

戻ってくるまで時間がかかる。



「はやての方も、ガジェットが幻術と実機で多数出現したけど、そろそろカタが付きそうだしな」

「でも、ファイル。あんた本当に大丈夫なの？ その傷……」

今、俺はキャラとルーテシアに治療魔法をかけてもらっている。

ルーテシアが自分のせいでこうなってしまったんだからといって、治療魔法をかけてくれていたんだけど、

途中からキャラも一緒にかけてくれた。

キャラ曰く、この傷は二人でかけても、この場では完全には回復しないとのことだ。

「大丈夫だ。キャラとルーテシアにやってもらったからな。かなり楽になったよ」

「本当にごめんなさい……。私のせいで……」

「ルーテシア、もう気にするな。ほら、そんな泣き顔じゃなくて笑顔の方が良いぞ。俺は大丈夫だから……」

そんな泣きそうな顔だと、こっちも辛い。

女の子は笑顔の方が良いんだからな――。

「うん……」

まあ、気にするなど言っても、なかなか厳しいかな。

でも、無理した甲斐はあった。

エリオにキヤロ……そしてルーテシア……。

これで3人を、あんな形で戦わせなくてすむんだから……。

## 第14話 ナンバーズ（後編）

廃ビルの屋上に水色のボディスーツの上にケープを纏った、大きな丸メガネの少女。

そして――。

自分の身長よりも大きな長物を杖のように立て、遠くを見渡していた少女がいた。

「デイエチちゃん、ちゃんと見えてるう？」

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える」

少女は左目の瞳孔がまるで望遠レンズのように収縮し、遥か遠くを睨んでいた。

その瞳で捕捉しているのは、機動六課のヘリ、JF704……。

デイエチちゃんが砲撃の準備をしていると、通信ウィンドウが開いた。

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あくら、それはまた……………フォロー……………しますか？」

『……………良いわ。あの様子だと、もう取り戻せそうにないから、セインにも撤退してもらったわ……………』

「そうですか……………。じゃ、あれ処分しましょうか……………」

駒がもうこちらの思うようにいかないのなら、あれはもう置いておく必要ありませんものね。

『それなんだけど……………。あれはもう無いわ』

「どういう事ですの、ウーノお姉様!!」

『……………やられたわ。フィル・グリードにね』

\* \* \*

ライン曹長にBCCを解除してもらった後、みんなはルーテシアのお母さん、メガー

ヌ・アルビーノさんのことを考えていた。

「でもどうするの？ スカリエッティがルーテシアのお母さんを人質にしていると、こっちにルーテシアが来ちゃうと……」

「そうだよ、ルーテシアと友達に慣れたのは嬉しいけど、あっちにとっては裏切り行為になっちゃってるよ」

「そうだぜ!! あの変態とアバズレ。ルールーのお母さんを殺しちゃおう!!」

「……………うん」

「フィルさん、このままじゃ殺されちゃいます!!」

「フィルさん、何とかならないんですか!!」

みんなメガーヌさんのこと、心配してくれているんだな。

さつき仲間になったばかりだって言うのにな。

ホントこいつらは、俺には出来過ぎた仲間だよ。

《《マスター、もう種明かししても良いんじゃないですか？》》

「そうだな、そろそろクアット口達も、事の異変に気づいていると思うしな」

「おい、フィル。何か隠してるんだつたら言えよ。何となく予想は出来るんだけどな。ルーテシアの関係する事だろ……」

あれ？ ヴィータ副隊長、もしかして感づいています。

そんなに俺、隠し事下手ですか？

まあ、それはともかく――。

「あのな、もう隠していても意味がないから言うけど、ルーテシアのお母さん。メガ・アルピーノさんは俺が助け出しててるぞ」

「「「ええっ!!」」」

「やっぱりな……」

「だと思いました……」

フォワードのみんなとルーテシア達は驚いていたが、ライン曹長とヴィータ副隊長は、やっぱりかって顔をしている。

「副隊長とリイン曹長は驚かれないんですね……?」

「お前が、考えなしでこいつを保護するとは思わなかったからな。絶対事前策を取つてると思つてた」

「今までのフィルの行動を考えれば、この結論に達するのは簡単ですよ」

「本当に勘が良いですね。お二人の予想通り、スカリエッティの事を調べている時に、偶然発見したんですよ」

俺がスカリエッティの基地を探っている時、すでに基地は破棄していたが、人造魔導師や戦闘機人の

素体がそこにはたくさんあった。

そこで見つけたのは――。

メガーヌ・アルピーノとかかれていた生体ポッドだった。

「基地を破棄していたせいとか、生命維持装置がもう限界状態だったんだ。すぐにポッドから出して、とある所に連れて行つたんだ」

「とある所? お母さんは無事なの!! どこにいるの!?!」

「大丈夫、発見したのが早かったから無事だよ。それと11番のレリックはもう必要な

いからな。まあ、後のことは六課に戻ってから話すよ。ここじゃ誰が聞いているかわからないからな」

あのクアットロのことだ。近くにスパイ用のサーチャーかなんかがあっても不思議じゃない。

迂闊なことを言ったら、今まで秘密裏にしてきたことが全てお釈迦になってしまう。

「そうですね。詳しいことは六課に戻ってからにしましょう。レリックの確保もありま  
すしね」

「キャラ、それじゃお願いね」  
「はい」

キャラはレリックの封印作業を開始した。  
これでもう大丈夫だな。

\*

\*

\*



『こないだ、メガース・アルピーノのことで破棄した基地内を調べていたんだけど、すでにポッドから奪還されもぬけの殻だったわ』

「……忌々しいですわ。デイエチちゃん!!」

「なに……」

「作戦を変更しますわ。六課のへり、完全に撃墜しますわ!!」

予定とは違いますが、ここまで狂わされてしまったのでは、癪に障りますわ!!

「でもいいのか？ クアットロ。撃っちゃって……ケースもマテリアルも破壊しちゃうことになる」

「ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしないから、大丈夫……だそうよ。それに……」

「ここまでコケにしてくれた、あのフィル・グリードに、これ位しなければ気が済みませんわ!!」

「まあ……いいけどね……」

デイエチはイメースキャノンでヘリの狙撃準備に取りかかった。  
まあ、私もあの男にやる必要がありますわ……。

\*

\*

\*

「ふう……封印完了です」

「ご苦労さん、キャロ」

「えへへ……はい!!」

俺がキャロの頭にポンと置いてやると、すごく喜んでいた。  
訓練の時もこうしてやると、キャロはいつもご機嫌になる。

理由はよく分からんが——。

事件はこれで、終わりのはずだが……………。

まてよ!?

「しまった!! ヘリの護衛に行かないと!!」

「おい、待てよ!! お前はフォワード達と一緒に戻れ!! その怪我じゃ無理だ!!」

「ヴィータ副隊長、まだ終わっていないんです。クアットロは間違いなくヘリを狙っています。だから急いで向かわないと!!」

そうだった。ルーテシアのことでヘリのことを忘れていた。

あいつのことだ、絶対狙撃してくる!!

そんなとき……………。

『ごきげんよう、六課の皆さん……………』

「「「「「!!」」」」」

「…………クアットロ」

『お初にお目に掛かりますわ。私はクアットロ。ドクターの最高傑作の一人ですわ』

ついに出てきやがったか、クアットロ。  
相変わらず、その面を見るだけで反吐がでやがる!!

「出やがったな、アバズレ!!」

『あゝら、誰かと思つたら、欠陥融合騎のアギトさんじゃありませんか』

「なんだと!!」

「落ち着けて、何の用だ!! クアットロ!!」

『フィル・グリード……。あなたには、随分煮え湯を飲まされたので、こちらもそれ  
相応のことをと思ひましてね……。』

「何をする気だ。メガヌさんはこつちの手にあるし、ルーテシアのBCCも解除して  
あるぞ」

BCCさえなかったら、ルーテシアが暴走して白天王をよびだすことはない。

お前の野望もこれでお終いだ!!

『くっ!! 本当に忌々しいですわ。ですけど、その余裕も今の内ですわ』

\* \* \*

「見えた!! 良かった、へりは無事……」

ガジェットはなのはに任せ、私は何とかへりを目視で捕らえられる距離まで来ていた。

正直なのはだけに任せるのは心苦しかったけど、何かさつきから嫌な予感が止まらな  
いんだ。

それに、もしへりに長距離砲撃が来たら、今の私の位置からじゃ間にあわないかもしれ  
ない……。

そしてその事が、現実の物になろうとしていた。

『市街地にエネルギー反応!!』

『大きい……』

『そんな……まさか!!』

『攻撃のチャージ確認……物理破壊型、推定Sランク!!』

そんなチャージ時間が早い!!

あの威力だったら、もっと時間が掛かるはずなのに!!

このままじゃ、ヴァイスとシャマルが!!

「バルディツシユ!! ソニックムーブ全開!!」

《yes、sir sonic move》

\* \* \*

「インヒューレントスキル、ヘヴィバレル……発動」

廃ビルの上では、イメースカノンを構えたデイエチちゃん、エネルギーチャージ

を行っていた。

私は口の端を歪め、話しかけることにした。

「バカな!! もう発射態勢になっているなんて!!」

『驚きましたか。これがドクターの技術ですわ。あなた達の常識じゃ無理でしょうけどね』

精々悔しがりなさい。

目の前で絶望を見るのは、本当に快感ですわね♪

「くそっ!! 間に合うか!!」

『無駄ですわ、もう発射しますわ。 フィル・グリード、あなたは“また”何も守れませんわ……』

「!?!」

「発射……」

へヴィバレルは一直線にへりに向かっていた。

間違いなく砲撃はへりを捉えますわ!!

『ファイル、心配しないで!! あれは、私が止める!!』

「フェイトさん!!」

\* \* \*

ソニックムーブで、何とか発射線上に着いた私は、急いでシールドを展開した。

「バルドドイツユ、ラウンドシールド展開!!」

《Round Shield》

「くっ!! なんて衝撃なの!!」

《このままだと、シールドが持ちこたえられません……》

ラウンドシールドが砲撃に耐えられなくてひび割れをし始めてる。



いのまめじや——。

「頑張ってバルディツシュ!! なのはがもう少しで来るから……」

『その期待は無駄ですわ。フェイトお嬢様』

「クアットロ!!」

『高町なのはは、トーレお姉様が押さえてますわ。いくら待っても無駄ですよ』  
「くっ!!」

\* \* \*

「ここから先には、行かせるわけにはいかん」

「あなたは、誰なの？」

「私はトーレ。戦闘機人の一人だ」

せつかくガジェットを、全滅させてきたって言うのに……。

この人、とんでもない戦闘能力を持っている。  
今のままじゃ、勝てない!!

「レイジングハート、エクシードモード、ドライブ!!」

《i g n i t i o n》

杖はエクセリオンモードを改良した形になり、バリアジャケットも短期決戦用の物に切り替わる。

「そこをどいてもらうよ。わたしは、フェイトちゃんを助けに行かなきゃいけないんだから!!」

「通れる物なら通ってみるが良い!! IS、ライドインパルス!!」

「エクシードモード、A・C・S 始動!!」

ACSとインパルスブレードの激突で、空中で大爆発が起こった。

\* \* \*

『そう言うことですわ。諦めなさい、ファイル・グリード』

クアットロは嫌ったらしい笑いをして、通信を切った。

「くそつたれ!!」

俺は急いで、リミットを解除しようとしたが――。

《無茶です。今解除したら身体が持ちません!!》

「今は、そんなこと言ってる場合じゃない!!」

《駄目です!! 死ぬつもりですか!!》

「プリム、俺はもう愛する人を失うのはたくさんだ!! フェイトさんが死ぬかも知れないってのに、黙っていられるか!! ぐっ……」

今ここで、やらないでどうするんだ!!

また、あの悲劇を繰り返す気か!!

ティアを……目の前で失った時みたい……。

《その身体では立っているのがやつとです!! いくら何でも無茶です!!》

「畜生……動きやがれ!! 俺の身体!!」

なんとか立ち上がり、魔力を振り絞ろうとするが、ダメージが酷く集中力が出ない。せめて、痛みさえなかったら――。

「フィルさん!!」

「キャロ……」

キャロが俺に治療魔法を使うと、痛みが引いていく。

これは、さっきのと違う魔法か？

「ファイルさん、今使ったのは、痛みを止めただけです。傷口がふさがったわけではありませんで、無理はしないでください……。っていつでも無理ですよね」  
「すまないキャロ。リミットリリース!!」

リミットを解除すると、魔力が溢れてきた。

制限時間は15分……。絶対に止めてみせる!!

「ファイル、急げ!! ファイトはもう持たないぞ!!」  
「間に合ってくれ!!」

\* \* \*

『フェイトちゃん、今行くから待っててな!!』

私は全速力でフェイトちゃんの元へ飛んでいるが――。

私の位置からじゃ、間に合わない。

そんなことは分かってる!!

それでも、やらずにはいられないんや!!

「無理だよ……はやて、そこからじゃ間に合わないよ……。それにもう持たない……。かな……」

『諦めたらあかん!! 最後まで希望を捨てたら駄目や!!』

「ごめんね……みんなのこと……ファイルのことお願いね……」

フェイトちゃんはもう完全に諦めちゃってる。

あかん!! それだけは絶対にあかん!!

『バカなこと言わんといて!! フェイトちゃん、ファイルを一人にする気か!! 大切な人に……愛する人に、これ以上悲しみを背負わす気か!!』

フェイトちゃんは、ラインフォースみたいに全てを託して、ファイルに悲しい思いをさせる気なんか!!

私はそんなの絶対に許さへんよ!!

「はやて……まさか!？」

『知ってるに決まってるやろ!! 私をナメたらあかんよ。私はな、フェイトちゃんが本当の笑顔を見せてくれるようになって、本気で嬉しかったんや。だから……あえて黙つといたんや!!』

「はやて……」

フィルと一緒にいるときのフェイトちゃんは、本当に良い笑顔を見せていた。

その笑顔は、私やなのはちゃんも本当に嬉しい気持ちになったんや——。

『だからそんな簡単にあきらめたらあかん。そんなんじやフィルが怒るで!!』

「そうですよ。フェイトさん……」

「えっ……」

どうやら、お姫様を守る騎士の登場やな——。

あとは、まかせたで。

\* \* \*

「……ファイル、なの？」

そこに現れたのは、ボロボロのバリアジャケットをまとったファイル。

「間に合ってよかった」

「ど、どうしてここに……。立ってるのがやっと、なのに」

さっきの通信で見た感じ、戦うなんて絶対無理なのに。

傷だらけのファイルを見てるのがつらくて、思わず通信を切ってしまったくらいなのに……。

「理由なんかないさ。大切な彼女を助けに来た。ただ、それだけさ」



「ば、か……。ほんとうに、ばか、だよ。私のために、無茶をして……」

そうやって、傷だらけになって。

自分を顧みないで、人のために頑張って……。

でも、そんなあなただから私は好きになったんだよ。

\* \* \*

「ラウンドシールド、三重展開!!」

俺が作り出したラウンドシールドは砲撃を押し返すように展開する。

それでもしだいにシールドに罅が生じてきた。

《第1シールド大破、第2シールドも、そう耐えられませんか!!》

「……………くそっ!! なんて威力なんだ。このままじゃ耐え切れん!!」

『うつつふふう。これは思わぬ収穫ですわ。フェイトお嬢様だけでなく、あなたまで始末できるなんてね』

《第2シールド大破!! このままじゃ最後のシールドも時間の問題です!!》

最後のシールドも、罅割れてきて、いつ砲撃が貫いてもおかしくない。

「これまでか……。」

フェイトさんを……好きな人一人守れないのか俺は……。

(フィール……)

(なんだ……この声は……?)

頭の中に直接語りかけるこの声は——?

(今こそあなたの力になるね……。みんなを……。そして……)

(そして……『私』を助けてね……)

次の瞬間、俺の全身に溢れんばかりの魔力が宿る。

これはもしかして――。

与えられた魔力が全部一つになったのか……。

さっきの声、そしてこの魔力の暖かさ……。

女神から渡された魔力の正体は……。

まさか!!

《マスター、その力は!! 完全に一つになったんですね!!》

「ああ、フェイトさんが……俺に力を託してくれた……」

《フェイトさんが……どういう事ですか?》

「あの時渡された力は、未来のフェイトさんの魔力だったんだよ。ティアと同じように、

俺に全てを託してくれたんだ……」

《そうだったんですね……。ティアさんもフェイトさんも、本当に素敵な人です。死して尚、マスター達の力になってくれてるなんて……》

プリムの言うとおりで。二人とも本当に素敵な人たちだよ。

ティア……フェイトさん……。

本当に……ありがとう……。

二人の想い、決して無駄にはしない!!

「やるぞプリム!! フルドライブを、「フリーダム」を起動するぞ!!」

《今の状態じゃ自殺行為です!! 本当に死んでしまいますよ!!》

確かに、こんな状態でフルドライブなんか使ったらどうなるかわからない。

身体は傷だらけ、プリムの言う通り自殺行為だ。

「プリム、今はこれしかないんだ。頼む、俺を信じてくれ!!」

《………分かりました、フルドライブ「フリーダム」起動します!!》

俺はフルドライブを起動させると、バリアジャケットが変化する。

黒基調から、なのはさんのバリアジャケットと同じく、白基調の青のラインがデザインに変わる。

フリーダムは以前、なのはさんの攻撃を受けたとき、防ぎきれなかったことで考えた物だ。

防御力を高めて、さらに機動力を増すことができる。

このことをコンセプトにして改良し、ようやく完成した物だ。

これは普段なら、通常の状態でも使うことができるが、今の俺には維持するのもきつい。

《マスター、終わったら、絶対に病院に行ってもらいますよ!!》

「すまないな……。見せてやるぜ、完全解除した力を!! ラウンドシールド・リフレクター!!」

《Round Shield Reflector》

次の瞬間、ラウンドシールドが鏡面化し、光の盾となり、砲撃を上空へはじき飛ばした。

『う、嘘でしょう!! デイエチちゃんフルパワーの攻撃を弾くなんて!』

「はあ……はあ……はあ……やったぞ……。こちらスターズ5、何とかフェイトさんとヘリの防衛成功させました」

\* \* \*

「やった!! ギン姉。ファイルがやってくれたよ!!」

「まったく無茶ばかりやるんだから……」

「でも、本当に良かった。間に合って……」

「……」

「どうしたの? ティア、キャロ、ルーテシア」

「キャロ、ルーテシア、あんた達も同じ事考えてたの？」

あたしの考えが正しければ、ファイルは間違いなく自分の限界を超えて行動する。  
いや、フルドライブなんて使ってる時点でいつ限界が来てもおかしくない。

「はい……ファイルさん、これ以上無茶しなければ良いんですけど……」

「痛み止めの効果は、後どれくらい持つの？」

「10分……おそらくそれが限界……」

ファイル、その前にケリつけなさいよ。

あんたが倒れたら、そこでおしまいなんだからね。

\* \* \*

「す……す……すごい……ラウンドシールドであんな事出来るなんて……」

「未来でティアが考え出したオリジナルのシールドです。完全版なら相手にはね返せるんですよ。最も、魔力を多量に使うのと、術式が複雑なのであまり多用していなかったんです」

これだけの術式を高速展開するには、プリム並みの処理能力が必要になる。俺個人だったら、間違いなく展開さえ難しいだろう――。

『きいいいい!! どこまで私の邪魔をすれば気が済むんですの!!』  
「今度はこっちから反撃させてもらおうぞ!!」

\* \* \*

「見つけたぞ、クアットロ!!」  
「ファイル・グリード、あんたいつの間に!!」



俺とフェイトさんはワープで、クアットロを見つけ出した。

こいつの気は嫌と言うほど知っている。

この腐りきった気は、忘れろったって忘れられる物じゃない!!

「観念しなさい、市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します!!」

「今日は遠慮しておきますわ。IS起動……シルバーカーテン!!」

シルバーカーテンで姿をくらませたつもりだろうが、俺にはお前の気が丸わかりだ。

《マスター、捕らえました。方位、10時の方向、距離4km》

「八神部隊長!!」

\*

\*

\*

「待ったとつたで、こっちは詠唱完了してるんや!!」

「はやて、場所は分かっている?」

「大丈夫、データはファイルに送ってもらったから、位置はしつかり特定できとるよ。後は任せておき!!」

私は戦闘機人の姿を捕らえ、広域空間攻撃「デアボリック・エミッション」の発射準備をとる。

この魔法は本来は自身を中心として発動させる魔法だが、こういったこともできるんや!!

覚悟せえ、私の大事な仲間を……………。

家族を……………。

そして、親友を殺そうとしたこと後悔させたる!!

「追ってこない……………何で……………?」

「まさか!!」

「広域……空間攻撃!!」

「うそ〜ん」

そのふざけた態度もこれまでや。

これでもくらって頭冷やしい!!

「遠き地にて、闇に沈め……」

「デアポリック・エミツション!!」

黒き巨大な魔力球は戦闘機人にめがけて眼下へ放たれた。

\* \* \*

頭上の闇が一瞬収束したかと思うと、爆発的に膨れ上がり、二人を飲み込もうと迫っていた。

デイエチちゃんを抱えたままだと逃げ切れないわね……。しかたないわね。こうなったら多少のダメージは覚悟しますか。

私はダメージを負いながらも、何とか離脱をしたが……。

《投降の意志なし……。逃走の危険ありと認定》

《砲撃で昏倒させて捕らえます》

前方にはフェイト・T・ハラオウンが砲撃準備で待ちかまえて……。後方にはフィル・グリードがデバイスを突きつけ、同じく発射態勢になっていた。

\* \* \*

「クアットロ、デイエチ!! くそっ!!」

「おっと、逃がさないよ」

わたしは、レイジングハートを戦闘機人に突きつけ……。

「高町なのは!!」

「フェイトちゃん達の邪魔はさせない。今度はあなたが足止めされる番だよ」  
「ちいいい!!」

フェイトちゃん、フィル。こっちは押さえるから後は任せたよ。  
クアットロを必ず捉えて!!

\* \* \*

「ここまでだな、クアットロ。トーレはなのはさんが押さえてる。お前の援軍はないぞ!!」

《マスター、痛み止めの効果はあと5分です!! これで決着をつけないと……》

「分かっている、これに全てをかける!! やるぞプリム!!」  
《了解です!!》

どのみち俺に残された体力も少ない。

一気に決着を付けなければこちらが危ない。

「フェイトさん!!」

「分かっている………。フィル、ここで終わらせるよ!!」

「はい!!」

「プリム、一か八かあれでやるぞ」

《マスター?》

「フェイトさんの得意技、フォトンランサー・フアランクスシフト……それでやる」

《いけません!! さっきのフルドライブで、もうマスターの身体は限界なんです!! せめてブラストブレイザーで!!》

確かにブラストブレイザーなら、リミットを完全解除した状態なら、そんなに負荷が掛かる訳じゃない。

だけど……。

「こいつに一直線の攻撃じゃ逃げられる可能性がある。全方位で囲んで仕留めるしかない!!」

《………だったなら、フォトンランサーの誘導は私がやります。マスターはスフィアを作り出すことを考えてください!!》

「サンキュー、相棒!!」

俺は今作り出せる量のフォトンスフィアを作りだし、クアット口の全方位を囲んだ。

38基。これが俺が出来る限界だ。

「トライデント……」

フェイトさんが、バルディッシュのカートリッジをロードさせ……。

「フォトンランサー・ファランクスシフト……」

俺もプリムのカートリッジをロードし、発射準備をする。  
今の状態じゃ撃つたら間違いない、俺の攻撃能力が無くなる……。

「スマツシャー!!」

「ファイア!!」

360。全方位からのフォトンランサーとフェイトさんのトライデントスマツシャーの同時攻撃だ。

回避は絶対不能だ。

白と金の魔力はクアットロに命中して、爆炎をあげた……。

「やった……」

「……はあ……はあ……はあ……」

頼む、これで倒せていてくれ……。



だが、俺の予想どおりだったらこの攻撃は――。

「……残念でしたわね、フィル・グリード。私はまだ生きてますわよ」

「!!」

「くっ……やっぱり……駄目か……」

そこには自分の周囲に防御壁を張っていたクアットロの姿があった。

デイエチの方は気絶しているみたいだが、あいつは全くの無傷だ。

あの砲撃からは回避は不能だ。

おまけにフェイトさんと俺、二人とも手加減なしで撃ってる。

あれは……クアットロの周りに張られているシールド……。

あの防御壁の七色の光……。

外れていて欲しかったが……やはり……。

「やっぱり気づいてたんですね……。そう、私は未来でティアナ・ランスターとあなたに殺された、あのクアットロですよ。いつ気づきました?」

やはり、俺が逆行者って言うことを知っていたか。

「言葉の節に『また』って使った時だ。あんな言葉は、俺のことを知っていなければ、出てこない言葉だからな」

本来ならこの世界では、俺は表舞台には立っていないなかったんだからな。

今の段階で俺のことを知っているのは、おかしいしな。

「それはとんだミスでしたわ。さすがですわね」

「そんなことより、なぜ貴様が生きています!! あのとキティアのスターライトブレイカーでお前は死んだはずだ!!」

ティアが命と引き替えにして放ったスターライトブレイカー。

あれで間違いないのは死んだはずだ。

「さて、なぜでしょうね。いずれそれはわかることですよ。そんなことよりも、せつかく、あなたと同じく再び生を与えられたんですから、思う存分楽しませてもらいますわ」

「そしてファイル・グリード、あなたには再び恐怖と悲しみを与えてあげますわ。今度はどうやってお仲間を殺してあげましょうか」

—— 黙れ。

その下種な笑いを止めやがれ!!

「以前と同じじゃおもしろくありませんわ。今度はあなたの大事な人をなぶり殺しにでもしてみましようか。あはははっ!!」

「だまれッツ!! その減らず口を二度とたたけないようにしてやる!!」

俺は最後の力を振り絞って、銃口をクアットロに向ける。

「出来るのかしら。さっきの砲撃で殆ど力を使ってしまっただけに」

くそっ!! 腐ってもやはり参謀型って訳か。

こつちの状態を正確に把握してやがる。

おまけに、痛み止めの効果はもうすぐ切れてしまう……。

「今日のところは引き上げますわ。またお会いしましょう」

「待ちなさい!!」

フェイトさんがプラズマランサーをクアット口に放ったが、当たる直前にシルバーカーテンで姿をくらませてしまった。

「待て、クアット……ト……口……」

《マスター!!》

「フィル!!」

さっきのフォトンランサーで力を使い果たし、出血多量で俺は浮遊も保てなくなって

いた。

そんなとき……。

「ふう……間に合った……」

「なのは!?!」

「なのは……さん?」

なのはさんが間一髪の所で、俺を抱えてくれた。

\*

\*

\*

「その怪我で無理しすぎだよ、ファイル!!」

「すみ……ません……」

「完全解除が出来るようになったと言っても、その怪我で無理しすぎ!!」

ファイルの怪我はかなりの物だ。

元から重傷箇所があったのに、それを治療魔法で無理矢理治して、さらに痛み止めの魔法を使って動いてたんだから……。

リミットの解除……。

フルドライブの使用……。

多量の魔力を使う攻撃魔法……。

これだけの悪条件があれば、こうなつて当たり前前だ。

「まったく、フェイトちゃんをあまり泣かせちゃ駄目だよ。最も、心配してるのは、わたしもなんだからね……。」

「はい……。」

「ほら、ヘリまで飛ぶから一緒に行くよ……。」

「大丈夫ですよ……。自分で飛べますから……。」

「だくめ。無茶ばかりする悪い子の言うことは聞けません。」

わたしはファイルを抱えて急いでヘリへ向かう。

これだけのダメージを負って、正直よく意識を保つてると思う。

まったく、いくらフェイトちゃんのためだといつても無理しすぎだよ。

こんなに思われてるフェイトちゃんがうらやましいな……。

\* \* \*

「それにしても、散々だったな。私は高町なのには押さえられ、レリックとお嬢様達は六課に奪われる。最悪だな……」

「それでもありませんわ、トーレお姉様」

「どういう事だ、クアットロ」

「確かにルーお嬢様達とレリックは奪われましたけど、フィル・グリードは当分戦闘には参加できませんわ。これで六課に大きな痛手を負わせることが出来ましたわ」

あの男が動けなくなるのは、こつちにとって好都合。

これで、こつちの計画もゆつくり進められますわ。

「確かに……な……」

「それに、すぐに取り返せば良いんですから」

「お前な……」

「それよりも、機動六課の連中に、もつと苦しみを与えてあげましょう。そのほうがおもしろいですから」

そう、正直レリックの一つや二つどうでもう良い。

やはりフィル・グリードはこっちに来ていたみたいね……。

あなたの大切な物……かならず壊して見せますわ……。

\*

\*

\*



## 聖王医療院

ここの特別病棟の一室に、機動六課によって保護された少女が寝かされていた。意識は戻っていない、衰弱状態もまだ回復してないが……。

「フェイトちゃん、保護した女の子とフィルの状態は……？」

「保護した女の子は検査の方は一通り終了、大きな問題はなさそうだよ。フィルの方も今は麻酔が効いて病室で眠っているよ。傷口は治療魔法でふさがっていたから、そんな大事には至らないって、ただ出血がかなりしていたから、しばらくの間は任務は禁止だ……」

「フィル、本当に無茶して……。でも、ある意味良かったかも、これでやっと休暇を取らせられるよ」

「皮肉だけど……こんな事でもないよ、フィルって休まないもんね」

「フェイトちゃん、フィルのことお願いね。任務をしようとしたら……」

「大丈夫、私が無理矢理でも休ませるから、それにフォワード達やシャーリー達にも良い機会かもよ」

「フィルにどれくらい頼ってたかって事だね……」

実際、スバル達の報告書とかを見ても、ティアナ以外の物はファイルが手直ししていることが殆どだ。

エリオやキャロは、事務仕事に慣れていないのはしょうがないとしても、スバルはもう少しその辺はちゃんとして欲しい。

シャーリー達もフェイトちゃんが言ってくれたから、今は大丈夫だけど、それまではかなり頼っていた面があった。

「まあ、ファイルは何もなければ明日には退院みたいだし、それに報告書を書くために、わたし達も戻らないとね……」

「そうだね、資料とかはここに来る前にそろえてあるから、そんなに時間が掛からないよ」

「にやはは、ありがとう……。あつ、そうだ。ちよつと女の子の様子見てくるね」

「だったら私も行くよ」

「いいよ、ちよつと見てくるだけだから。フェイトちゃんは駐車場で待ってて……」

「分かったなのは、じゃ外で待ってるから」

「うん、じゃ30分後にね……」

フエイトちゃんと別れたわたしは部屋に向かうため、廊下を歩いていると売店があり、くまさんとうさぎさんのぬいぐるみがあった。

なんとなくうさぎさんのほうがかわいかったので、うさぎさんの方を買った。

わたしはそのぬいぐるみを女の子の頭の近くにそっとおいた。

目が覚めた時に、それに気づいてくれれば良いんだけどね。

「…………ママ」

意識は戻って無くても、夢は見ているのかもしれない。

何か怖い夢でも見ているのかな…………。

「大丈夫だよ、ここににいるよ。こわくない…………」

わたしは語りかけながら、少女の頬をそつとなでていた。

もしかしたら、無意識のうちに自分の小さい頃と照らし合わせたのかもしれない。

わたしはしばらくの間、少女のことを見守っていた。

## 第15話 命の理由

「ごめんねフェイトちゃん、車出してもらっちゃって……」

「気にしなくて良いよ。私もファイルの迎えがあつたしね……」

「うん……」

「……でも、何かしらの白黒が付いたとしても、どうなるんだろうね」

「当面は六課か教会で預かるしかないと思う。受け入れ先を探すにしても長期の安全確認が取れてからでないと……」

そんな話をしていると、病院から通信が入り――。

「フェイト執務官、聖王教会シャツハ・ヌエラです」

「どうされました？」

「すみません、こちらの不手際がありまして、検査の間にあの子が姿を消してしまいました」

「わかりました。すぐにそちらに向かいます」

「お願いします」

私はギアをトップに入れ、全速力で病院に向かった。

\* \* \*

現在、検査の結果と今後の過ごし方について医者に説明を受けている。

治療魔法で傷口は何とかなっていたが、出血の方は輸血をしなくてはならないほどだったので、少し身体がけだるい状態だ。

「フィールさん、一応退院の許可は出します。しかしそれは、あくまで日常生活が出来るという事です。戦闘はしばらく許可できませんよ」

「先生、どのくらいの期間になりますか？」

「最低でも10日、全快になるには2週間と見てください。補助魔法程度なら大丈夫ですけど、攻撃魔法なんて絶対に使わないでください。いいですね、六課の担当医にもそ

の事は伝えておきますから」

「分かりました」

まあ、しばらくでかい戦闘は無いはずだから、ここはゆっくりしておきますか。  
戦闘以外でもやることはいっぱいあるしな。

《マスター、良い機会です。少し休んでください!! 私があればと言っても、全く聞いてくれないし!!》

「……すまん」

\*

\*

\*

私達が到着すると、シスターシャツハが走ってこつちやってきた。

「申し訳ありません!!」

「状況はどうなっていますか？」

「はい、特別病棟とその周辺の封鎖はすんでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見られていません」

「外には出られないはずですよね」

「ええ……」

だったら、この建物のどこかにはいる。

子どもの足だったら、そう遠くには行っていないはず。

「では手分けをして探しましょう。フェイト隊長はシスターシャツハと一緒に、わたしは別の方を探してみます」

「ファイルにも一応連絡する？ 高町教導官」

「ううん、ファイルには言わないでくれるかな。まだ完治している訳じゃないから……」  
「そうだね……。それじゃ探しに行きましょう」

私とシスターシャツハは東の方、なのはは西の方を探すこととなった。



\* \* \*

「検査では一応危険反応は見られなかったのですよね」

「ええ、魔力量はそれなりに高い数値でしたが、それも普通の子供の範疇でした」

「しかし、それでは……」

「悲しいことですが、人造生命体なのは間違いないです。どんな存在的な危険を持つているか……」

確かにあの子は人造生命体だ。

だからといって、その考えは間違ってる!!

「待つてくくださいシスターシャツハ!! あの子のことは騎士カリムがファイルから聞いているはずですよ!!」

「だからこそですよ!! 聞いた話が本当なら、あの子はとてつもなく危険な存在ですよ!! それだったら今の内に……」

。シスターシャツハが次の言葉を発しようとする瞬間、辺りに濃密な殺気が支配し——  
そこには……。

「今の内に……何ですか……」

「「ファイル!」」

「……今の言葉、どういうつもりか言ってもらおうか。シスターシャツハ……」

怒りに満ちたファイルの姿だった。

\* \* \*

わたしは女の子を捜して西の外れの方にやって来ていた。

今の所フェイトちゃん達からも連絡がない所を見ると、東の方にはいないかも知れない……。

そんなとき、茂みの中からウサギのぬいぐるみを持った小さな女の子が出てきた。

「あっ……」

女の子は怯えているみたい……。

今は不安にさせちゃいけないね……。

「心配したんだよ……」

\* \* \*

「どういうつもりかって聞いてるんだよ……」

「待ってファイル!! これは!!」

「ごめんフェイトさん。今は下がってもらえるかな。答えろ、シスターシヤツハ。どう  
いうつもりなんだ!!」

普段の優しいファイルとは違い、殺気に満ちた目でシスターシヤツハを睨んでいる。

「そのままの意味です。あなたの話が本当なら、あの子が世界の破滅の鍵になっていないですか。それだったら、今の内にあの子を何とかすれ……ば……」

「……ふざけるな……」

な、何、この殺気は……？

なにも力を解放してないのに、この押しつぶされそうなプレッシャーは。

「ふざけるなよ……あんた……。人の命をなんだと思ってるんだよ!!」

「別に私は命を軽んじてなんかはいません!! ただ私は危機が分かっているのに手を打たないのがおかしいって言ってるのです」

「その考えが傲慢なんだよ!! 聖王教会はいつから人の命をそんな風に扱うようになった!! あの子はなんにもしてないだろうが!!」

「何かあつてからじゃ遅いです!! って、あれは!!」

シスターの視線の先には、なのはと女の子が庭先にいた。

「逆巻け、ヴィンデルシヤフト!!」

「しまった!!」

ファイルが急いで追いかけてしようとしたが、私は必死にファイルを止めた。

「待って、ファイル!!」

「どうして止めるんですか!! このままじゃ!!」

「ここはなのはに任せよう。史実とちよつと違つちやつたみたいだけど、これってあの二人にとっては大事な出会いじゃなかった?」

「あつ……」

そう――。

ヴィヴィオはこの時の出会いから、なのはのことを意識し始めたと聞いている。

「大丈夫、本当に危なくなったら私が止めるから、それにファイルは、今は魔法使用禁止で

しょう」

「うっ……」

「今はなのはを信じよう……」

「はい……」

\* \* \*

ヴァインデルシャフトを構えたシスターシャツハは、今にも女の子を攻撃しそうな勢いだった。

女の子も怯えてしまい、ぬいぐるみを落として尻餅をついてしまっていた。

「シスターシャツハ、とりあえず武器を下ろしてもらえませんか……」

「はあ……。でも……。わかりました……」

シスターシャツハを止めたわたしは女の子に歩み寄ることにした。

まずはお話をしなくちゃね……。

「ごめんね、ビックリしたよね……大丈夫？」

「……うん」

地面に落ちていたウサギのぬいぐるみを渡してあげると、それを受け取り少女は立ち上がった。

ついでに服に付いていた埃も払ってあげた。

（緊急の危険はないようです。大丈夫ですよ）

（はい……）

念話で、シスターシャツハに話し、一旦この場を引いてもらった。

「初めまして、高町なのはって言います。お名前言えるかな？」

「ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオ、可愛い名前だね。ヴィヴィオ、どこかに行きたかった？」

「ママ……いないの……」  
「!!」

そうだった。この子は……。

でもここで不安にさせちゃ駄目だよね……。

「……ああ、それは大変。じゃあ、一緒に探そうか？」

「……うん」

\* \* \*

「どうやら大丈夫みたいだね」

「……考えてみれば、なのはさんがいるんだから大丈夫だよな」

「そうだよ。普段は私よりも冷静なのに……。まあ、ヴィヴィオにもしもの事があつたらと思うと、ああなっちゃうかも知れないけど」



「……すみません」

《まあ、シスターシャツハのあの一言は、私もカチンと来ましたが……》

「プリムも気持ちちは分かるけど……ね……」

本当はフェイトさんも、いつバルディッシュを起動させてもおかしくなかった。それでも、あの二人のためにギリギリまで手を出すつもりはなかったんだな。

「ともかく一旦六課に戻ろうか」

「はい」

俺たちはフェイトさんの車で六課に戻ることになった。  
もちろんヴィヴィオも一緒に。

\*

\*

\*

六課に戻った私達は、部隊長室で私とファイルとはやてが、今後のことについて話し合っていた。

「臨時査察とファイルと私の出頭!?!」

「うん、こないだの戦闘でファイルが完全解除したやろ。あれが地上本部のお偉いさんに見つかって、今日二人で地上本部に出頭しろって……」

「はあ……。やっぱり突っ込まれましたか」

「まいったね。元々六課って保有制限オーバーしているのに、さらにファイルがあんな能力を持っているとなると……。そして、地上本部の査察は、海の査察と違って甘くないからね……」

でも、地上の査察が厳しいのではなく、海の査察が甘すぎるだけで、この位の査察は結構あるのだ。

私も最近知ったんだけどね。まだまだ勉強不足だ。

「うえー、うちは只でさえ、ツツコミどころ満載の部隊やしなあ……」

「今、配置やシフト変更があったら致命的だよ。特にファイルだったら……」

ここにきてこれはかなり痛手だ。

もしファイルがシフト変更となると、六課の機能が著しく低下してしまう。

「うーん、なんとか乗りきらなあ……」

「……ねえ。これ、査察対策にも関係してくるんだけど。六課設立の本当の理由……そろそろ、聞いてもいいかな？」

「そうですね。もう教えてくれても良いと思いますよ。俺に言いにくいのなら、一旦席を外しますから……」

「……いや、ファイルにも知っておいてもらいたいし。……実はな、今日これから聖王教会本部、カリムのところに報告にいくんよ。クロノ君も来るんや」

「クロノも?」

「本当はそこでまとめて話したかったんだけど、フェイトちゃんとファイルにはまた今度話すわ。今回はなのはちゃんと二人で行ってくるわ」

「わかった。なのは、戻ってるかな?」

私は手元でパネルを操作し、なのはの部屋に回線を繋いだ。

『うわああああん!! やだあああ!! いっちゃいやだあああ!!』

回線が繋がるとヴィヴィオの大きな泣き声が聞こえてきた。

\* \* \*

「あの……どんな騒ぎ?」

『あつ、フェイト隊長。実は……』

なのはの自室はヴィヴィオの泣き声でちよつとした戦場状態になっていた。  
なのはにも仕事があるから、いつまでもこのままというわけにはいかない。

しかもこの後なのはは、はやてと一緒に聖王教会行きなのだ。それはさすがに外せない。  
い。

さらに私もファイルと一緒に地上本部に出頭しなければならないので、そう時間はな

い。

「ちよつと待っていてね、そつちに行くから……」

『うん、出来るだけ早くお願い……』

\*

\*

\*

「よう、苦労してるみたいだな」

「ファイル!!」

「八神部隊長、それにフェイトさん」

俺たちがなのはさんの部屋に来てみると、ヴィヴィオが未だになのはさんの服をつかんだまま泣きじやくっていた。

スバルの奴が何とかしようとして一生懸命になっているのは分かるけど、それじゃ逆効果だぞ。

エリオとキャロが一步離れているのはティアがしたんだな。

「エースオブエースにも、勝てへん相手はおるもんやね」

（フェイトちゃん、はやてちゃん、フィル、その……助けて）

なのはさんが、念話で必死に俺たちに助けを求めるが、この手のことは、本来なら女性の方が得意なんだけどもな——。

「スバル、とりあえず落ち着け。こういう時は一旦引くんだ。子供はそういう所すごく敏感だぞ」

（フィルく それだったら、フィルがどうにかしてよく）

スバルが念話で俺に泣きついてきたが……。

（スバルお前なく もう少し子育てのスキル身につけろ。女の子なんだから、そんなじゃ将来困るぞ。ていうかティア、こういうのはお前の方が得意なんだから、どうにか出来たろうに……）

(そうなんだけどね。何かなのはさんのあの慌てようは、中々見れないから……)  
(つたく、ティア良い根性してるよ……)

念話で話してるからみんなには聞かれなけれど、聞かれたらシャレにならないな。  
まあ、俺がティアの立場だったら同じ事してるかもな。  
とはいえ、いつまでもこうしてるわけにはいかないな。

(フエイトさん、ちよつと良いですか?)

(どうしたのフィル?)

(とりあえず、ヴィヴィオに泣きやんでもらわないといけないんですけど、どうやりま  
す)

(一応落ちているぬいぐるみを使って、何とかしようと思ったんだけど……)

これくらいしか、ヴィヴィオが興味を示す物がないし——。

(だったら、ちよつと俺に手伝わせてもらえませんか)

(えっ、どうするの?)

(それは見てのお楽しみと言うことで。プリム)

《話は聞いてました。私も協力すれば良いんですよ》

(ああ、うまくやってくれよ)

さて、細工は流々。

仕掛けは御覧じろってね。

\* \* \*

「ヴィヴィオ、はい、これ……」

俺は落ちていたぬいぐるみを拾って、埃を払ってしやがみ込んで、自分の視線をヴィオオの高さにあわせた。

相手に話す時は、まず目線をあわせることが大事だ。

さつきみたいに大泣きはしてはなく、ぐずる位にはなったので、俺の持っているぬい



ぐるみに興味を持っているみたいだ。

ちよっと手を動かしてみると、それにつられてる。

これだったら、あの手で大丈夫だろう。

(プリム、準備は良いな)

《(いつでも良いですよ。マスター)》

とりあえずぬいぐるみに、魔力で創った糸を巻き付け操れるようにする。

ただこれだと丸見えなので、幻術で見えないようにする。ついでに魔力隠蔽もしておこう。

で、プリムにしてもらうことは……。

《こんにちはヴィヴィオ》

「えっ……」

『ええっ!!』

あの、エリオとキャロはともかく、スバルお前まで驚いてどうする。

これはお前とティアは見たことがあるだろ。

俺はフェイトさんと目があつてウインクをすると、それで分かってくれたみたいでこつちにやつてきた。

「ヴィヴィオ、この子はあなたのおともだち？」

「ヴィヴィオ、こちらフェイトさんとフィルくん、なのはさんの大切なお友達」

《あつ、フェイトお姉さんだ》

俺がぬいぐるみを動かして、プリムがそれ合わせて話すんだけど、これ二人の呼吸が合わない、ちぐはぐしちゃうから結構難しいんだよな。

「どうしたのかな、うさぎくん」

《あのね、フェイトお姉さん。僕ねヴィヴィオと遊びたいんだけど、ずっと泣いちゃつて……。でも、僕少しの時間しかいられないから……。》

「そっか……。じゃお姉さんも一緒に話してあげるね」

《ありがとう、フェイトお姉さん》

それにしてもフェイトさん、打ち合わせもなしでよくあわせられるな。さすがエリオとキャラの世話をしていただけはあるな。

「ヴィヴィオ、うさぎくんね、ヴィヴィオと一緒に遊びたいんだって、だけどほんの少ししかいられないから、すごく寂しがっているよ」

俺はうさぎのぬいぐるみの手を動かし泣き真似をして見せた。  
ついでにのの字を書く仕草もしてみた。

《いゝもん。いゝもん。ヴィヴィオは僕より、なのはさんの方が良いんだ》  
「あつ……」

ヴィヴィオは完全に泣きやみ、意識はもうフェイトさんとうさぎに向いていた。  
なのはさんのスカートを握りしめていた手も離れていた。

「ねえ、ヴィヴィオ、なのはさんはこれからお仕事なんだって……」  
「うん」

《だから、その間は僕と一緒に遊ぼう。もう少しだけだけど一緒にいられるからね》

「うん!!」

「良かったね。ヴィヴィオ」

「ということですが、なのはさん……。って、あの……………」

「あつ……。えつ……………」

あらら、なのはさんもすっかり驚いてしまっているよ。

まあ、初めて見るとちよつとビックリするかもな。

(ということでは頼んだティア)

(いいわ。ていうかあんた、最初からあたしに引き継がせるつもりだったでしょう?)

(お見通しか……。さすがティア)

(まあ、あんたもこれからフェイトさんと一緒に地上本部に行くんですものね。でもぬいぐるみを操っている間は、あたしは何も出来ないわよ)

(お前はもう報告書は書いてあるだろ。だったらあとは大丈夫だろ。あんまり手伝うなって、なのはさん達にも念を押させてるからな)

こないだも、俺とティアが手伝ってるのがばれて言われたしな。  
元々スバルの方が成績良いんだから、少し慣れてもらわないと——。

(確かにね。あとエリオとキャロにも手伝わせるわよ。それで良い)

(その辺は任せるよ。じゃ、後は頼んだ)

(はいはい、さっさと行ってらっしゃい)

\* \* \*

「おい、ファイル早くしろよ!!」

「すみません、あとサンダーを格納庫に入ればオツケーです」

実は本当は俺とフェイトさんは、車かサンダーで地上本部に行こうとしたんだけど、八神部隊長が行きはヘリで送るって言うってくれたので、ヴァイス陸曹に頼んでヘリで送ってもらうことになった。

でも、帰りは何の乗り物も無くなってしまいうので、サンダーを格納庫に入れていたのだ。

「搬入完了です。それじゃヴァイス陸曹お願いします」

「んじゃ、行くぜ!!」

俺たち四人を乗せたヘリはヘリポートから飛び立った。

「ごめんねフィル、フェイトちゃん。お騒がせして」

「いやあ、ええもん見せてもらったよ。ってかフィル、いったい何をしたんや?」

「そうだよ、レイジングハートにも何の反応もなかったし、いったいどうやってやったの?」

「ふふつ、フィル。そろそろなのは達に教えても良いんじゃない」

フェイトさんにはさつき種明かしをしたんだけど、なのはさん達にも言うておくか。

「まあ、種明かしをしますと、魔力で創った糸で操っていただけなんです。声はプリムに

担当してもらっていたんですよ」

「でも、糸は全く見えてなかったで。魔力反応もなかったし?」

「魔力反応は幻術で隠蔽したんですよ。糸が見えていたらバレちゃいますしね」

「私もファイルからその事を聞いて驚いたよ。まさかバルディッシュまで騙すんだから」

「これくらいのが出来なかつたら、サーチャーを使つて隠密行動をすることが出来ない。」

操つてる魔力がばれちゃつてたら、そこから逆探知されちゃうし——。

「幻術は俺とティアの得意分野ですからね。この分野に関しては隊長達にも負けませぬよ」

「といことは今頃ティアナは大変だね。わたし達が戻ってくるまで、ぬいぐるみを操つていなければいけないんだから」

「その辺は大丈夫ですよ、なのはさん。ティアのことですから適当なところで、『僕はもう帰らなくちゃ』とかいつて何とかしますよ」

「まあ、それなら……。もしかして、ティアナもファイルと同じ事出来たんじゃない?」

「そうですね、大方スバル達がパニックになつて、その対応で精一杯だったんですよ」

う」

ティア、本当のことは言わないで置いてやるから今度なんかおごれよ。

\*

\*

\*

へりで地上本部のヘリポートに下ろしてもらった後、俺たちは地上本部の入り口に来ていた。

呼ばれることは予測していたけど……。

「……ファイル、本当にレジアス中将が呼んだのかな？」

「出頭命令状には、間違いなく本人の名前が記載してあるからね」

「でも、ちよつと腑に落ちないんだよね。何で二人一緒に？」

「こればかりは行ってみないと分からないな……」



ロビーの受付嬢に俺たちが来たことを伝えると、最上階の部屋に来るようにと伝えられた。

\* \* \*

「……失礼します」

「入れ」

私たちが中にはいると、そこには強面の体格の良い中年の男性と眼鏡をかけた凛とした女性がいた。

レジアス・ゲイズ中将与オーリス・ゲイズ三佐である。

「機動六課所属執務官フェイト・テストロッサ・ハラオウン、同じく機動六課所属二等陸士ファイル・グリード。先日のご報告にて出頭いたしました」

「ご苦勞……。まあ、そこに座りたまえ」

「失礼します」

私たちはソファアに座り、中将達も腰をかけた。  
早速先日のごことで話をするのかと思えば……。

「あ、あの……」

「ん？ どうしたのかね。ハラオウン執務官」

「中将が私達を呼び出したのは、先日のごことで説明することで、六課の方に出頭命令をしたんですよ。でも……」

そう、さつきから中将もオーリス三佐も、フィルと世間話をしていだけで、全く本題に入ろうとはしない。

「申し訳ありませんが、私達も時間が限られてますので、出来れば本題の方に……」

「……ぷっ」

「「あはははは!!」」

「えっ、えっ？ 何か私、変なこと言いましたか？」

突然、3人が大笑いを始めてしまった。  
私、そんなにおかしいこと言ったかな？

「おい、ファイル。ハラオウン執務官にまだ言っていなかったのか」

「実は……。まだ……」

「駄目じゃない。彼女ポカ〜ンとしちゃってるじゃない。またあなたのいたずら癖が出たの。訓練生時代から変わってないわね」

「オーリス姉、勘弁してよ。昔のことは……」

「ええっ!？」

もう私は訳が分からなくなっていた。  
いったいどうなってるのよ!!

\*

\*

\*

《マスター、いい加減にフェイトさんに話さないと……》

「そうだな。フェイトさん色々混乱してると思うけど、レジアス中將達と俺は古くからの顔なじみなんだ。そして……地上本部で唯一、話が分かる人でもある」

確かに強引な一面を持つてるけど、それはあくまで地上のことを考えてのこと。

「ちよつと待つて!! まさかレジアス中將に!!」

「ご推察の通りです。私達はフィルから全てを聞いてます。そして……フィルが経験してきたことも……」

「そう……ですか……」

「追求されないんですね。もつと言われるかと思われましたが……」

「私はフィルがあなた方を信じて、全てを話されたのなら何も言うことはありません。それにいくら本局側だけ強化しても、地上がちゃんとしてないと意味がない。ミッドの町を守っているのは地上の人間なんですから……」

フェイトさんの言葉には嘘は感じられなかった。

本局の人間なのに、ちゃんと地上のことも見てたんだな。

「ほう……」

「どうやら、私達の目に狂いはなかったですね……」

「どういう事ですか？」

「本局の人間というのは、大半、次元世界を守るという名目で、地上の優れた人間を根こそぎ持つて行ってしまふ。実際、機動六課にはティアナ・ランスターとフィル・グリードという人材が持つて行かれてしまっている」

「本来ならどちらかという約束だったのですが、リンディ・ハラOWN統括官が三提督に根を回して二人とも持つて行かれてしまったのです」

「ちよつと待つてください!! 三提督つて六課つて、そんな大物がバックにあるんですか!!」

「フェイトさん、俺もオーリス姉に聞くまで知らなかったんだけど、機動六課つてかなりのバックボーンがあるんだよ」

確かに、六課はいろいろ他とは違っていたけど、まさかここまでの大物が控えてるとは思わなかったんだ。

「ファイル、それいつから知ってたの!？」

「こつち戻つてきてからすぐ。中将達に話した時に聞いたんだ」

すると、レジアス中将は机を叩き怒りの表情で――。

「冗談じゃないぞ!! ティアナ嬢ちゃんまで持つて行きおつて!!」

「テ、ティアナ嬢ちゃん!? ねえ、ファイル。レジアス中将つてティアナとも知り合いなの?」

「ティーダさんのことは知つてますね。その時にティアにティーダさんのことを『無能な奴』といった馬鹿を制裁したのがレジアス中将だったんだよ。俺もその時からの知り合いなんだよ」

「あのときは馬鹿な部下のせいで、ティアナ嬢ちゃんの心に深い傷を追わせてしまった……」

「でも、あのとき中将が一発ぶつ飛ばしてくれたから、最悪の事態にはならなかったんですよ。もし中将がいなかったら……」

多分ティアは最悪精神崩壊していたか、自殺していたかも知れない。

ティアは両親がいなくなったから、ティーダさんの存在はかけがいのないものだったからな。

「そうだったんだね。人の噂なんて当てにならないんだね。私が聞いたレジアス中将のことって……」

「言わんでも良い。強引すぎる政策とか、メタボ親父とかそういうったことだろう……」

「は、ははは……」

「いささかやり過ぎと言うことは認めているが、まだまだ若いモンには負けんぞ!!」

「きやつ!!」

そう言って中将は上着を脱いで、上半身裸の状態でポーキングをし始めた。

中将の肉体は歴戦の傷と鍛え抜かれた筋肉で構成されていた。

とても噂のようなメタボの身体ではない。

「中将……女性の前で醜いものを見せないでください。ハラオウン執務官、顔真つ赤になつてしまっているじゃありませんか」

「オーリス、相変わらなすぎついな。すまんハラオウン執務官、儂も少し興奮していたよ  
うだ」

「いえ……その、結構な肉体美で……あの……」

「レジアスの親父さん……あまり刺激の強いもの見せないでくれ。フエイトさん……本  
当に男性の裸とかにウブな所あるから……」

「ファイル、お前まで言うか。せつかく身軽になったことだし、久しぶりに力比べでもする  
か」

「勘弁してくれ。純粋な力比べじゃあんたには勝てないよ。それに、そろそろ本題に入  
らないと……」

「それも、そうだな……」

レジアス中将は上着を羽織り、身なりを整えると目つきが仕事のものになっていた。  
これからが本番だ……。

\*

\*

\*



「さて、今日二人を呼んだのは先日の一件でのことだ……」

「ファイル、あなた限定解除したわね」

「……はい」

この二人を欺くのは正直無理だ。

例えこの場は何とかなっても、査察が入ってしまったてはアウトだ。

「正直不味かったわね。あなたも知っているでしょう。六課の戦力はリミッターをかけてギリギリだと言うことを……」

「儂も正直ビックリしているぞ。まさか、隊長達と殆ど遜色ない力を持っていたなんてな」

「実際には使いこなせてないんですけどね。何とか完全解除が可能になったというだけです」

「ハラオウン執務官、あなたの意見も聞いておきたいのですが、あの場で直接見たファイルの力はどんなものでしたか」

「はい、現在のファイルの力は魔力に関しては、私に匹敵するくらいの物を持っています」

が、その魔力を使った戦闘技術についてはまだ未熟な所があります」

さすがフェイトさんだ。俺の弱点を即座に見抜いていた。

今まで少ない魔力を使った戦い方はしていたが、大きな魔力を使った戦闘技術に関しては苦手だ。

こないだもファンクスシフトを使っただけで、魔力の殆どを使ってしまった。せつかく魔力があっても、只全開で出しているだけじゃ意味がない。

「六課のチーム編成は見せてもらったが……。まさかメガーヌの娘も戦うつもりなのか」

「やりきれないですよ。いくら保護観察処分とはいえ、こんな少女を戦場に出さなくてはならないなんて……。本当はメガーヌさんと静かに暮らして欲しかったんだけど……」

「ルーテシアがしてしまった罪は、お前に対する殺傷魔法とアグスタの件だけだから。殺傷魔法のことも被害者のお前は何もする気はないんだろ？」

「ええ、そんなことをするんですら、最初からこんな真似はしませんよ」

もし、最初から犯罪者として捉えるなら、もっとスマートなやり方をする。

「そうだった!! ファイルお願いだから、もうこんな無駄はしないで!!」

「ハラオウン執務官の言うとおりですよ。あなたは昔からそうでしたね。自分を省みず行動するのは!!」

「フェイトさん、オーリス姉、勘弁してよ……」

「「そう思うならしつかり反省しなさい!!」」

「はい……。すみません……」

「ハラオウン執務官、オーリス、その件は後でゆつくりとするとして今は本題の方をするぞ」

後で追求されるのか……。

お願いだから、お手柔らかにして欲しい……。

「今話したように、今後ルーテシアまで加わるとなると、フォワード陣も編成を変更をすることになるし、お前と他のメンバーとの訓練内容は大きく変わってくる。それではお前は自由に訓練が出来ないし、フォワードの成長も妨げてしまう」

「そんなことは!？」

「ないと言いつれるのか。今は良いかもしれないが、このままお前を中心にやっつけては、お前にもしもの事があつた時や別行動をする時に支障が出てきてしまうぞ」

「!!」

痛いところを突いてくるな……。

確かにこのままじゃ俺も本格的な訓練が出来ないし、ティア達にも良いとは言えない。

「そこでだ、ファイル。お前フォワードを一旦抜ける……」

「待つてください!! それ!!」

今、六課を抜けることがあつたら、行動が取れなくなる。

それに、俺自身もまだまだ鍛えなきやならないし——。

「勘違いをするな。別に機動六課から異動しろと言うことではない。むしろこれからのためだ」

「これからの?」

「お前には単体で今後は動いて欲しい。そこでハラオウン執務官、君にはファイルに付きつきりで教導してもらいたい。リミッターが掛かっているのは厳しいので、君だけになるが儂の権限でリミッターを撤去する」

「ええっ!?!」

マジかよ。リミッター撤去って!! 地上本部は本局より厳しいのに!!

現に八神部隊長なんて、かなり面倒な手続きをしなきゃいけないのに!!

「本当はしたくないんですけど、リミッターが掛かっているで死んでしまいました。なんというのではお話になりませんからね。昨日の戦闘だつてあやうく……」

「あつ……」

——そうだった。

あの時、何とか間に合ったからフェイトさんは死ななかつたけど……。

「そういうことだ。今お前がすべきことはお前のレベルアップだ。それには同等以上の

パートナーが必要になる」

「ハラオウン執務官、ファイルのことお願ひしますね。この子は私達にとつても大事な子ですから……」

「……分かりました。ファイルのことは、私が責任を持つて鍛えます。覚悟してね!!」  
「望むところですよ」

「ハラオウン執務官のリミッターは今から解除してもらうんだが、その人物がまだ来てないんだ……」

「いったい誰なんですか？ 私のリミッターを解除してくれる人物は」  
「すぐに分かる。ヒントを一つだけ言つとくと、君も知っている人物だ」

リミッター解除が出来る人間は限られてる。

かなりの権限がなければ、実行することは出来ない。

『失礼します、レジアス中将。来賓の方々がお見えになりました』

「分かった。こつちに来てもらうように伝えてくれ」

『了解しました』

しばらくすると、ドアからノックが聞こえてその人物が入ってきた。

「久しぶりだね。フェイト、ファイル」

「お久しぶりね。ファイル」

現れたのは、無限書庫司書長ユーノ・スクライアと戦闘機人ドゥーエだった。

「ユーノ!! それにあなたは確か戦闘機人の……」

「ええ、私はドゥーエ。ご推察の通り戦闘機人です。今はスクライア司書長の補佐をしているの」

そっか——。

ユーノさんから、ある程度のことは聞いていたけど。

「詳しい経緯はファイルに聞いてね。それよりも……」

「フェイト、今日僕がここに来たのは、レジアス中将に頼まれて君のリミッターを解除しに来たんだ」

「そうだったんだ。ユーノだったんだね。リミッターを解除してくれるのは」

「うん、一応無限書庫司書長には提督権限もあるんで、君たちのリミッターを解除できるんだ。但しその場合は地上本部の許可が必要なんだけど、まさか大元から解除申請が出るとは思わなかったんだけどね」

「しかたなかるう。だが特例はこれつきりだからな。只でさえ六課は……」

「そう……ですよね」

機動六課は地上にあるけれど、あくまで本局所属だ。

六課の存在は、地上の上層部にとっては煙たいものになっている。

「私たちもファイルから聞くまでは、八神二佐のことは誤解していたんですけどね」

「ちよつと良いですかオーリス三佐。八神二佐のことはいつ知ったんですか？」

「ファイルが私たちに未来であったことを話したときにですよ。あれは六課ができる二年前になりますね」

「「ええっ!!」」

「ユーノ知っていたの!?!」

「いや今初めて知ったよ。そんな前からファイルは準備をしていたんだ!!」



あの……。

そのことは言わないで欲しかったんですけど、特に六課の隊長陣には……。

「……あのね、それは言わない約束だったでしょう。オーリス姉」

「ファイル、これは言っておいた方が良いことよ。いつまでも隠しきれぬものじゃないわ」「だけど!! これは俺が勝手にしたことだ。八神部隊長ならちゃんと……」

「確かに八神なら六課を作ること自体はできるだろう。だが本局で育てられた八神では、地上のことを頭では理解しても行動には移せん。例えナカジマに師事してもな……」

「それが分かっていたからこそ、あなたは事前策として、私たちにコンタクトを取ったんでしよう。少しでも六課と地上本部との確執をなくすために……」

確かにその通りだ。だからこそ俺はレジアス中将達とコンタクトを取ったんだから。

全てを見抜かれ、俺は何も言えなくなってしまった。

\* \* \*

「ともかくだ。今はリミッターの撤去をしまおう。スクライア司書長」

「そうですね。それじゃフェイト、今から撤去するからじつとしていてね」

「分かった……」

そういつてユーノは翡翠の魔法陣を展開し、リミッター解除の呪文を唱え始めた。

「我、ユーノ・スクライアの名の下に彼の者の束縛を解き放て。リミット完全撤去・リリース!!」

次の瞬間、私にかけられていたリミッターが完全に外され、魔力が体に満ちあふれてきた。

「……久しぶりかな。何にも制約がないのって」

「ハラオウン執務官、これは非公式ですので、この後代わりのリミッターはつけてもらいますよ」

「オーリス姉、それは俺がやるよ。自力で解除できるタイプなら普段から俺が使っているしね」

「そうね、それじゃそれで行きましょう」

「フェイトさん、と言うわけで一応リミッターはつけますけど……」

「ファイルが普段やっているヤツと同じ物でしょう。それだと自分で解除できるし、自力を上げる訓練にもなるしね」

「分かりました……。じゃプリム頼むわ」

《了解しました。それじゃやりますね》

プリムが疑似封印の魔法陣を展開すると、私の体を包み、再び魔力が封印された状態になった。

\*

\*

\*

「改めて言う必要はないと思うけど、このリミッターは自分で解除できるから不自由は  
しないと思います」

「ありがとう、ファイル」

「……」

「ファイル？」

—— 本当はこんな物、つけたくなかったんだけどな。

「これで用件は終わりだ。後は八神にこの意見書を渡しておいてくれ。査察の代わりだ  
とでも言っておけばいい」

「えっと、これは俺に渡されてもどうしようもないんで、フェイトさんに……」

一介の二等陸士にこんな重要案件を渡されても、扱いに困る。

「いや、これはおまえが直接渡すんだ。今回のことも含めて八神とちゃんと話し合え」

「中将……」

「そうだね……。それにはやては気づいていると思うよ。だからこそファイルを無理に六課に入れたんだと思う。自分へのリミッターを強くしてでもね」  
「フェイトさん……」

そうかもしれない――。

あの聡明な部隊長のことだ。きつと俺がしてきたことなんて気がついてる。

「ファイル、僕からも一言だけ言っておくよ。あまり自分で抱え込まないこと。はやての件といい、僕のことといい、一人でやっていたよね」

「……はい」

「でも、それは言い換えれば、仲間を信用していないってとれるんだよ。だから……」

ユーノ司書長は俺の肩に手を置き……。

「もう少し、肩の力抜いてみたら。そうした方がうまくいくこともあるから……」

「ユーノさん……」

「ふふつ、少し前の司書長もファイルと同じだったんですよ」

「ドゥーエ、それは!？」

「いいえ、良い機会なのではつきり言わせてもらいます。いつもいつも三徹四徹あたりまえのようにやっていて、自分を省みないでやって、周りがどれくらい心配していると思っているんですか!!」

「……は、はい」

ユーノさんはすっかりドゥーエにタジタジになっていた。

「それでも最近はマシになったんだよ。クロノの無茶な依頼をドゥーエが説得して、減らしてくれたおかげで大分ゆとりができたしね」

「……ごめんユーノ、義妹として謝らせて……」

「フェイトが気にしなくても良いよ。これは元々あいつが悪いんだから……」

「そうですよ。クロノ提督には、私からきつちり『お話』しておきましたから……」

ドゥーエこわいぞ。その笑み。なんか切れたときのなのはさんみたいだぞ。というか、女性って切れるとこんな感じなのか。

「ファイル、とにかく六課に戻りましょう。はやてたちも戻ってくるだろうしね」

「もうこんな時間なんだ。たしかに部隊長たちも聖王教会から戻ってくる頃ですし……」

俺たちはそれぞれ解散し、俺とフェイトさんはサンダーで六課に戻ろうとしたんだけど……。

「あのね……ファイル、一つだけ聞いて良いかな？」

「どうしたの？」

「あのとき、私にリミッターをかけたとき、何で辛い表情をしていたの？」

「!!」

気づかれてた!?

あの時、僅かに顔に出してしまっていたのを――。

「……やっぱりそうだったんだね。以前なのはから私たちのリミッターのことを話していたときも、そんな表情をしていたって聞いていたから……」

「なのはさんが？」

あの時……。なのはさんがついていたんだ。

あのとき無意識だったけど、リミッターに嫌悪感を持っていたことに。

「そこまで、気づかれていたのなら話すよ」

俺はフェイトさんに、リミッターに対しての不満を全部言った。

こんな物があつたら、事件現場に行つたとき自分より能力が高いヤツに遭遇したときはどうするのか。

知恵と判断力で乗り切れることなんて、たががしれてる。

ティエダさんの時だつてそうだ。殉職したときの犯罪者はAAAの魔力持ちだった。自分よりランクが上の相手を相手にするつてことは、それだけ命がけのことなんだ。

「……そっか、ティアナのお兄さんのことは、ファイルにも深い傷として残っていたんだ



ね。それに気づかなかつたなんて、恋人として失格だね」

「それは違う!! これはあくまで、俺個人が思っていたことで、フェイトさんが気にすることじゃ!!」

《マスター、少しはフェイトさんのことを考えてください!! 彼女は少しでも、あなたの力になってあげたいんですよ。例えばどんな些細なことであってもです》

「プリム……」

《何回も言いますが、マスターは少しフェイトさんに甘えてください。そのくらいで丁度良いです!!》

「そうだね。前も言ったけど、ファイルは甘えてくれるくらいで丁度良いから。はやてのことだって、私は全く知らなかつたし……。これ以上隠してることはないでしょうね!!」

さすがにこれ以上はない!!

俺がやっていたことは、ユーノさんやマリーさんたちに、もう全部託しているし――

「ファイル、信じてあげるけど、これ以上隠していたら酷いからね」

「大丈夫だから……。それと悪いんだけど、明日の午後、ルーテシアを外に連れ出して良  
いかな？」

「ルーテシアを……？ あつ、そういうこと」

「うん、メガーヌさんと会わせてあげたいと思ってね」

クアットロの危険も去つたし、そろそろ再会させてあげたいしね。

「良いけど、一つだけ条件があるよ。私も一緒に連れて行くこと。理由は知っていても、  
一応保護観察処だから」

「それもそうだな。でも良いの？ そつちだつて、スカリエツティの捜査で時間がとれ  
ないのに……」

スカリエツティのことはフェイトさんにだけは、俺の知り得ることは全部教えている  
けれど……。

「それに関しては大丈夫。ギンガもいるし、アコーズ査察官も調べてくれているしね」

「そつか……じゃお願いします」

「うん!!」

俺たちはサンダーに乗り、六課に帰還した。

途中でヴィヴィオにおみやげとしてアイスを買ってあげたんだけど、それをティア達に見つかってしまい、今度みんなに手作りアイスを作る羽目になってしまったのは余談である。

\*

\*

\*

六課に戻った私たちは、それぞれ情報交換を行った。

はやて達からは、騎士カリムの予言のことと六課の意義について。

私たちからは、レジアス中將から渡された文書とその内容について。

「そっか……ありがとうな。査察を覚悟してた分、このくらいですんでよかったですわ。最悪ファイルが異動って言うのも、十分考えられたからな」

「でも、フィルをスターズから外せって、これは十分きついよ!!」  
「なのはちゃん、これは近いうちに話すつもりやったんだけどな。ルーテシアが六課に入ってくれることになったやろ。これを機会に、スターズとライトニング再編成をしようと思ってるな。現にスターズにティアナとフィル、二人のセンターガードがおるやろ。それもふまえてな」

今の部隊編成は、管理バランスか崩れてきている。

実際スターズに指揮官が二人とも来てしまってるし――。

「確かにエリオとキャロに対して、スターズの方に戦力が傾いているね。フェイトちゃん、レジアス中将の文書ではどうなってるの?」

「えっと、フィルをスターズから外し、所属をフリーにすること。後フォワードには組み込まないで、単独で行動する権利を与えること。その責任者として私がすること。以上が書いてあるよ」

「つまり今後の訓練は、フォワード陣をなのはちゃんが中心で、フィルの訓練はフェイトちゃんが中心というわけやな」

「うん、基本的には私がやるけれど、なのはもフィルに直接教えたいことがあるだろうか」

ら……」

「そうだね……。ファイルにはちゃんと教えておいた方が良いね。集束魔法……スターライトブレイカーを……」

集束魔法に関しては、なのはの方が一枚上手だ。

その辺に関しては、なのはにお願いする。

「なのはさん……」

「まあ、訓練のことは、明日以降やっていくとして、三人ともお疲れ様や」

「うん」

「はい、お疲れ様です」

「情報は十分……。大丈夫だよ……」

私たち三人は部隊長室を出て、廊下を歩いているとはやてがやってきて――。

「あ……あのな……」

「どうしましたか部隊長？」

「その……」

「俺……席外しますね。どうやらなのはさん達に話があるみたいですし……」

「いや、ファイルにも聞いて欲しいんや!!」

「……本当にどうしたのはやて?」

意を決し、はやては話し始めた。

\* \* \*

「なのはちゃんとフェイトちゃんは私の命の恩人で、大切な友達や!! そしてファイルは、六課のことで必死で本局と地上の溝を埋めてくれた。そのおかげで、私は六課をつくることができた!!」

「……何のことですか。俺は何もしていませんよ?」

「隠さなくてもええよ。私は知っていたからこそ、ファイルを無理矢理でも六課に入れたんやから。地上が人材不足なのは知っていたけれど、ファイルにはどうしても直接恩を返

したかったんや!! 我が俣なのは分かっていたけどな……」  
「八神部隊長……」

やっぱり部隊長は気づいてたんだな。

だから、自分にリミッターがかかっても俺を……。

「六課のことは、出向の時にちゃんと聞いたよ」

「私もなのはも、ちゃんと納得してここにいる。大丈夫……」

「そうですね。レジアスの親父さんには悪いけれど、六課に来れたのは、すごくうれしかったんですよ」

「なのはちゃん、フェイトちゃん……。ファイル……。ありがとうな。ファイル、一つだけ聞いてもええかな」

「なんですか?」

「どうして私を助けてくれたんや。一年前から闇の書事件のことを言う人間は本当に少なくなつた。代表格だったレジアス中將が六課に対して、これだけ甘くなるなんて」

「……そうですね。理由は俺のエゴですけど、被害者が攻め続けられるのはおかしい。そう思っただけですよ」

「「えっ?」」

三人とも驚いているけれど、闇の書事件はちよつと考えれば部隊長は立派な被害者だぞ。

ランダムで選ばれ自分の命が危険にさらされて……。

守護騎士がしてしまったことは許されないことでも、それはあくまで彼女たちがしたことだ。

八神部隊長は、むしろそれを止めていたし、自分の命を犠牲にしようとしたんだぞ。

「なのはさんもフェイトさんも、この事件は当事者なのでよく知っているでしょう。闇の書のページを集めていたのは守護騎士の意志で、部隊長本人はむしろ自分の命を犠牲にしようとしていた」

「そうだね……。はやてちゃんは、あのととき自分を犠牲にしようとしていた」

「そして、そんなはやてを助けたくて、シグナム達は……」

「せやけど守護騎士のしてきてことは、主である私の責任や!!」

「それが間違っているんです。騎士達の罪はあくまで騎士達の罪です。ましてや部隊長は闇の書を消滅させた。その時点で被害者達の無念を晴らしているんですよ!! なの



になぜ誹謗中傷受けなければならぬんですか!!」

当時9歳の女の子に、一体どれくらいのが出来る？

必死に、人に迷惑を掛けないようにしているだけでも充分すぎるつてのに——

「「あつ……………」」

「八神部隊長、平和を守るために、この道を選んだことは俺は何も言いません。だけどそれを罪の償いとしてやるのはやめて欲しいんです。あの事件は、誰がなんと言おうとあなたは被害者なんですから!!」

「……………私は……………ゆるされても……………いいんか……………」

「許すものにも……………ないです……………。本来、受けなくても良いことまで言われ続けてきたんですから……………」

「ファイル……………」

「八神部隊長……………。俺は、あなたの苦しみを少しでもなくせましたか？」

\* \* \*

ファイル……私のためにここまでしてくれていたんや。

もう限界だった。

私は涙がこらえきれなくなり、その場で泣き崩れてしまい——。

そんな私をファイルは何も言わず、そっと抱きしめてくれていた。

「……ごめんな。こんなみつともない姿を見せて……」

「みつともなくないですよ。辛いことははき出した方が良いでしょう。俺もそうでしたし……」

「せやな。あれ？なのはちゃん達は？」

「そういえば……」

二人とも……ありがとう……。

\* \* \*

「はやてちゃん……よかつたね……」

「うん……」

わたしたちは、はやてちゃんが泣き崩れてしまったとき、そつとその場を離れて、近くの廊下で様子を見ていた。

「でもファイル、本当に色々手助けしてくれていたんだね。今回のはやてちゃんのことだって……」

「そうだね。あの言葉は第三者のファイルが言ったからこそ、伝わったんだと思う。当事者の私たちじゃきつと駄目だった」

私たちは、あの事件の当事者だから、どうしてもはやてのことを思ってしまう。

だけど、ファイルは闇の諸事件に関しては全く関係がない。

だから、客観的な見方ができたんだと思う。

「はやてのことはファイルに任せて、私たちは戻ろうか……」  
「そうだね……。つて、ちよつと様子が変だよ……」

\* \* \*

「……ファイル、一つお願いがあるんやけど」

「何ですか？ 俺にできることなら良いですよ」

「あ、あのな。仕事以外の時は、私のことをはやてつて呼んで欲しいんや」

「なのはちゃん達は名前で呼び合っているのに、私だけいつも八神部隊長やん。何か一人だけ距離を置かれている感じがして嫌なんや……」

立场上、こんな事が出来ないのは十分承知や。

でも、せめて仕事以外の時はもつとぎつくばらんに話して欲しいんや——。

「ですけど……」

「それとも……。私みたいな女には、魅力がないかな……」

「そんなこと無いです!! 部隊長は魅力的な人ですよ。でなければ何かしたりはしないですよ!!」

「あ……ありがとうございます……」

「なのはさんにはなのはさんの、フェイトさんにはフェイトさんの、そして……はやてさんには、はやてさんの魅力があります。ですからそんな風に言わないでください」

——あかんわ。

ファイルに名前と呼んで欲しかったただけだったのに、こうもストレートに言われると思わなかったわ。

\*

\*

\*

「うわ……。ねえ、フェイトちゃん。フィールって、あれ本気で言ってるよね……」  
「……………うん」

「……………苦勞するね、フェイトちゃん」

お願いだから、これ以上ライバルを増やさないで!!

ティアナだって、完全にあきらめた訳じゃないのに、これではやてまで自覚されたら  
……………。

それに……………。

なのはだって、最近ちよつと怪しいし……………。

\* \* \*

「そ、それじゃ、フィールお休みな」

「お休みなさい。八神部隊長」

「違うやろ。今は名前で呼んでな」

「はい……。お休みなさい、はやてさん」  
「うん♪」

はやてさんは、笑顔で自分の部屋に戻っていった。  
なんか今日はいろいろありすぎだろ。  
それと……。

「そろそろ出てきたらどうですか、フェイトさん」

「気づいてたの？」

「あのね、俺は魔力反応を読める能力があるんだから気づきますよ。少しは自分の彼氏を信用して!!」

「だ、だって……。何かはやると良い雰囲気になってたし……」

「そういうつもりじゃ……」

「分かってる。でもやっぱり不安になっちゃうんだよ。女の子ってそういう物だから……」

それは俺も同じだから。

フェイトさんが他の男性と話していると、やきもきするし……。

「ファイル……」

「フェイトさん……」

俺はフェイトさんを抱き寄せ、キスをしようとしたとき……。

「じゅるるる」

「うわっ!!」

「何してるのかな、二人とも」

「なのはさん!!」

「なのは!!」

「フェイトちゃん、いつまでたつても戻ってこないし、心配して見に来てみれば……」  
「ごめん、もしかしてヴィヴィオも……」

「フェイトちゃんとファイルを連れてくるって言つて出てこられたけど、これじゃ本当にファイルも連れてこないと寝てくれないかも。ヴィヴィオ、ファイルのことをずっとパパつて言ってるし……」



ちよつとそれってどういうこと。

ヴィヴィオが俺のことをパパって言ってるって？

「はあ……本当に自覚がないんだね。あのときフェイトちゃんと一緒にヴィヴィオの世話をして、さらにあれだけヴィヴィオのことを、気にかけてくれるんじや、懐かれて当然だよ」

「なのは、ということとは……」

「うん、今日はファイルは、わたしたちの部屋で一緒に……。つて、いない!？」

「そ、それじや、お休みなさい!!」

「ふふっ」

冗談とわかってるけど、ああいったことをいうのは勘弁してくれっての。  
心臓に悪いっての……。

\*

\*

\*

部隊長室に戻った私は、アルバムを見ていた。

懐かしいな……。

アリスちゃんやすすかちゃん達との思い出、シグナム達八神家での思い出。

そして……。

「グレアムおじさん……」

「私の命はグレアムおじさんが育ててくれて。うちの子達が守ってくれて。なのはちやん達に救ってもらって……」

「そして……。私の心の闇は、ファイルに助けてもらった……」

「だからこそ、これ以上ファイルに悲しみを背負わせたらかあかん!! そのために私の命を使う。それが私ができるファイルへの恩返しなんや!!」

ファイル、私も最悪な未来にしないように頑張るから。

だから、ファイルもこれ以上無茶せんといて——。

## 第16話 新たな出発

翌日

機動六課スターズとライトニングのフルメンバーと、新たに加入するルーテシアとアギトで、緊急ミーティングをおこなうことになった。

内容はメンバーの再編成のことである。

「えつとな、今回新たに、ルーテシア達が六課と一緒に活動してくれることに伴い、チームの再編成をすることになったんや」

「「ええっ!?!」」

「まあ……そういうことだ。それに伴い、俺がスターズから抜ける」

「そんな!!」

「考えてみる。今スターズにはセンターガードが二人いて、ライトニングには指揮できる人間がない」

指揮官がいない状態じゃ、エリオ達もフルに力を発揮することが出来ない。  
そのための再編成だから――。

「それは……そうだけど、でも、あかし達のコンビネーションには、ファイルが起点になる物もあるんだよ!!」

「スバル、それこそ甘えだ。今後の戦いは、それぞれのレベルを上げなくちゃいけないんだぞ。臨機応変に動けなくちゃ死ぬだけだ」

未来では、個々に対応できていたからあそこまで戦うことができたんだ。

それに、スバルは俺なんかよりずっとできるんだから……。

「でも!!」

「スバル、ファイルの言うとおりに。そろそろ自分たちのレベルを上げなくちゃいけないし、何より……」

「今のあかし達じゃ……ファイルの邪魔になってしまう」

「……ティア（さん）……」

ティアの考えは少し違う。

今の俺は魔力は高いけど、指揮能力じゃティアの方が高い。だからこそフォワードのリーダーを任せられるんだぞ。

「ティア、今おまえが思っていることは違うからな。なのはさん達も俺も、おまえがみんなのリーダーとして引つ張れると思つたからこそ、俺の離脱を賛成したんだ。今後の戦いは、俺自身もレベルを上げなくちゃ生き残れないしな……」

「ファイル……」

「ティア、みんなのこと頼んだからな。俺もティア達に負けないようにがんばるから……」

「任せなさい。あんたの分もあたしが頑張るから。だからあんたは自分の事に集中しなさい」

「ありがとう……。ティア……」

これで俺が抜けた後も大丈夫だ。

むしろ俺という異分子がいなくなる分、よりよいチームになってくれることを願う。

「それじゃ改めて、新チーム体制を発表するね」

新チーム体制は、隊長陣はそのままでフォワードに変更があるくらいだ。

スターズはティアとスバル、そしてルーテシアとアギト

ライトニングはエリオとキヤロ

そして俺は……。

「最後にフィルなんだけど、フォワードのみんななどの訓練の時は、ライトニングに入ってもらうんだけど、基本はフリーという形になるね」

「なのはさん、すみません。その場合、俺はコールサインとかはどうなるんですか？」

「そうだったね。ルーテシアはスターズ5を、アギトはスターズ6として登録になるね。

それでフィルはね……」

「それは私から言うね」

「フェイトちゃん、決まったんだね。昨日から考えてたみたいだけど……」

「うん、フィルにはスターズとライトニング、どっちにもつながって欲しかったという願いを込めて、単純だけど『ライトニングスター』にしたんだ」

ライトニングスターか――。

スターズにもライトニングにも、どちらにもつながって……。

「ありがとうございます。実は寂しかったです。スターズを抜けることになって……」

「よかった。気に入ってもらえて」

「最後になるけど、改めてみんなに紹介しないとな。二人とも入ってきてや」

部隊長の声で扉から入ってきたのは、ルーテシアとアギトだった。

二人とも六課の制服に身を包んでいた。

「あの……ルーテシア・アルピーノです。よろしく……」

「おう、あたしはアギトだ。まあ……よろしくな……」

「緊張しなくても良いからな。俺が言うのもおかしいけど、こいつらみんな本当にお人好しだから……」

「二二ファイル（さん）に言われたくないよ（ありません）!!」

「ぐはっ!!」

まさかティア達だけでなく、エリオとキャロまでに突っ込まれるとは……。

「あんたって、昔から世話焼きばかりやってるもんね。主にスバルのおもりだけど……」

「そうそう、あたしのおもりって……。ちよつと酷いよティア!!」

「事実でしょう。あたしとファイルは、いつもあんたのおもりをさせられてるんだから……」

「実際、この中で一番世話焼きなのはファイルさんですよ」

「キャロ……勘弁してくれよ」

俺は、そんなにお節介じゃないぞ。

精々、俺が出来ることをするだけで――。

「でも、キャロの意見は合ってますね。僕もそう思いますから……」

「エリオ、お前もかよ!!」

「ルーテシア、心配しなくても良いわよ。むしろファイルが抜けて、ストッパーがいなく



なった分、あたしはあんたを大歓迎するわ」

「ちよつとティア、さつきから酷いよ。もちろんあたしも歓迎だよ」

「ルーちゃん、チームは違うけど同じフォワードとして、そして同じフルバックとして一緒に頑張ろうね」

「そうだよ、僕も一生懸命頑張るから一緒に頑張ろう」

あのな、お前らも人のこといえないだろ。

こないだあれだけ死闘をしていた中なのに……。

お前らも十分お人好しだよ。

\* \* \*

「ふふっ……ふふふっ……」

「ルールー？」

「アギト……ここは本当に暖かいね。私はみんなにあんな酷いことをしたのに……」

こんなに温かい人たちに、私はあんなに酷いことをしてしまった。  
特にファイルさんは、もう少しで死なせてしまうところだったのに——。  
それでも、こんなに優しく向かえてくれる。

「まあ、これがあいつらの良いところだ。だからお前らも、あいつらと友達になってくれると嬉しい」

「ファイル……さん……。ありがとう……」

「別に……。礼を言われることじゃない……」

ファイルさんは照れてそっぽ向いちやったけど、この人は本当に優しい人だって事は充分分かるから——。

\*

\*

\*

「照れなくても良いじゃんかよ。あれ？ お前つてもしかしてツンデレってやつか!!」

「よく分かったね、アギト。そうなんだよ、実はティアとフィルはツンデレなんだよ」

「誰がツンデレよ（だ）!!」

「ほら、似たもの同士」

「スバル……」

「ちよつと、頭冷やそうか……」

ティアとフィルが、それぞれのデバイスをあたしの脳天に向ける。

ちよ、ちよつとそれはシヤレにならないよ!!

「え……えつと……二人とも、何でデバイスを構えてるのかな……?」

「なに……。ちよつとその脳気な頭に、活を入れるだけだ……」

「そうね……。少しはまともになるかもね……」

まともにならないから!!

スプラッタができるだけで、あたし死んじやうから!!

「まあまあ二人とも、その辺にして」

「そうですね……」

「確かに……」

「助かった……」

こ、怖かった……。

ちよつと、からかいすぎたかな。

\* \* \*

「それで今日は訓練はお休みで、ルーテシア達はその後オリエンテーションをするね。フオワードのみんなは、こないだの事件のまとめをしておいてね」

「「はい!!」」

「あつ、忘れるところだった。ルーテシアとアギト。オリエンテーションが終わったら、俺かフェイトさんに声をかけてくれ」

「何か……あるの？」

「約束したろ。お前のお母さんに会わせるって……」

「あつ……」

「ということで俺とフェイトさんは、少し抜けますね」

「了解や、でも今度ちゃんとメガーヌさんに会わせてや」

「分かってますよ。八神部隊長」

ルーテシアとアギトは、なのはさんと一緒にオリエンテーションに、ティア達は事務処理に。

俺は事務処理は終わっているので、時間までヴィヴィオの世話をすることになった。

「ねえ、フィルパパ。今日は一緒に遊んでくれないの？」

「少しの時間ならいてあげられるけど、午後から大事な用事で出かけなくちゃいけないんだ」

「ええつゝゝゝ」

「そのかわり、良い子で待っていたら、またヴィヴィオの大好きなお菓子を作ってあげるからな」

「うん!!」

《マスター、やっぱりヴィヴィオには甘いですね》

「そっか……そんなつもりはないんだがな……」

どうも俺はヴィヴィオにすごく甘いらしい。

それでもフェイトさんよりは、厳しくしているつもりなんだけどな。

「フィル、そろそろオリエンテーションが終わるよ」

「了解、じゃ行ってくるからな。アイナさんとザフィーラさんのところにいるんだぞ」

「うん!! 行ってらっしゃい。フェイトママ、フィルパパ!!」

\*

\*

\*

ヴィヴィオと別れた俺とフェイトさんは、俺の部屋に戻っていた。今回、メガーヌさんのところに行く手段は俺の転移魔法だからだ。

まだメガーヌさんの居場所を公式にするわけにはいかない。  
少しして二人がやってきて――。

「……遅くなってごめんなさい」

「お疲れさん。オリエンテーションは退屈だったろ」

「全くだよ。でもルールのためだしな。しょうがないさ」

「こんな事言ってるけど、アギトの方が真剣に聞いてたんだよ」

「ルールー!!」

「あははっ!!」

確かに、アギトって口ではこういつてるけど、やることは真剣に聞いてくれてる。

本当にルーテシアのことが大切なんだな。

「それはともかくとして、忘れ物はないな。ルーテシアもお母さんに渡す物ちゃんと持ったか？」

「うん……大丈夫」

「じゃ、始めるか。プリム、ワープスタンバイ!!」

《了解!!》

「みんな、俺につかまってくれ」

俺は魔力を集中し、ワープで目的地に向かった。

\* \* \*

「ここは……?」

「なんか戦艦の中みたいだな……?」

「ファイル……もしかしてここって?」

「フェイトさんの想像通りですよ。ここはアースラの中です」

アースラの中は、あらゆるステルス機能が搭載している。

ここだったら、メガータさんをかくまうのにうってつけだからな。

「そのとおりです」

「マリーさん!! どうしてここに!？」



「えへへ、実は私は、フィルとクロノ提督の依頼で、ずっとアースラの改造をしていたんですよ」

「ええっ!!」

フェイトさん驚いているな……。

確かにこれはまだ、はやてさんにもオフレコのことだからな。

でも、さすがマリイさん率いるメカニックだな。予定より進んでいるよ。

「あつ、その子がルーテシアちゃんね。話は聞いているわ。お母さんに会いに来たんだよね?」

「うん……お母さん、ここにいるの?」

「ええ、その部屋にね。さっきまでメデイカルポッドに入っていたから、眠っているかもしれないけど……」

「フィル、メデイカルポッドって?」

「ああ、俺とマリイさんとで開発した新型医療マシンのことさ。外傷や体力の回復とかなら、このマシンでできるんだよ。ただし病気や内臓関係とかには駄目なんだけど……」

だけど、これのおかげでメガータさんの治療も秘密裏にすることが出来たんだ。

「……本当に、いつの間になんかやってたの？」

「元々メデイカルポッドは、未来で使っていた技術の一部と応用しただけだし、アースラの改造はマリーさん達がやってくれていたんだから、俺はそんなにやることはなかったよ」

「何言ってるの!! 確かに改造は私たちがやってきたけど、結局新型エンジンの問題部分はフィルが考えたんじゃない!! っていうか、よくあんな発想できたね」

「アースラ自体が実験艦という形で地上本部から認証がおりましたからね。だったら徹底的に新開発の物を詰め込んだというわけですよ」

戦闘力に関しては、改造すれば問題はない。

だから、新造戦艦の予算を武装に回すことにしたんだ。

「クロノ提督も言ってたよ。予算は気にしないで良いから、最高の形にしてくれて。

そして……妹のことを頼むって……」

「……クロノ提督」

本当にすみません。アースラの改造は相当予算を使うのに……。

「じゃ、ごゆつくりどうぞ。何かあったらよんでね」

「ありがとうございます」

代表して俺が扉をノックすると……。

「はい……どちら様ですか？」

「あの、フィル・グリードです。お見舞いに来たんですけど……」

「どうぞ、入ってちょうだい」

「失礼します」

「どうも……」

「ん？ ほらルーテシア、お母さんに元気な姿見せてあげな」

「あつ……」

俺に押されて入ってきたルーテシアを見て、メガーヌさんは……。

「ルー……ルーテシア、ルーテシアなの……？」

「お母さん……」

「ルーテシア!!」

「お母さんツツ!!」

メガーヌさんは娘を必死で抱きしめ、ルーテシアも母親のぬくもりにふれていた。二人とも何度も互いの名前を呼び合い、再会をかみしめている。

(フエイトさん……)

(どうしたの……ああ、そういうことね)

(せつかくの親子の対面だ。俺たちは少し出ていようか)

(あたしも出るよ。ルールーとお母さんの時間がやつとできたんだもん)

(いや、アギトはここにいてくれ。きっとルーテシアもそれを望んでいると思うから……)

(すまないな……)

念話で伝えて、そつと俺たちはその場を離れた。  
今は親子の再会をゆくりしてくだい……。

\* \* \*

少し時間をつぶすために、俺たちはマリーさん呼び作戦集合室にきていた。  
マリーさんも、俺たちに話があったので丁度よかつたらしい。  
俺たちはマリーさんの話を聞くため、いすに座ることにした。

「さてと、まず報告からしておくね。現在アースラはエンジン部分を覗いて、ほぼ改造は終わっているわ。ただ、やつぱり新型アルカンシエルの問題なんだけど……」

「……やつぱり、撃つて一回ですか」

「ええ……何とかエンジン強度は増すことができたんだけど、それ以上にアルカンシエ

ルのパワーが強くて1回が限度なのよ。通常のアルカンシエルなら2〜3回は撃てるけれど……」

やっぱりそうか——。

アルカンシエルのパワーをパワーアップさせて発射するんだ。むしろ一回でも、発射できるだけ御の字かもしれない。

「ちよつとフィル!! どうしてアルカンシエルのパワーを強める必要があるの。元々アルカンシエルはとんでもない魔導砲なんだよ!!」

「……最悪のことも考えておかなくちゃいけないんだ。もしアースラだけで戦うことになつたら、あのゆりかごはアルカンシエル一発じゃ倒せない!!」

「そんな!!」

「フィルの話だけで推測になるんだけど、もし単体で戦うとなると、アルカンシエル3発以上のエネルギーが必要になるの」

「そんな化け物なの。聖王のゆりかごは……」

「ああ……」

ゆりかごの力は今でも覚えている。

軌道に乗ったゆりかごは、あらゆる次元空間を無視して攻撃できるし、アルカンシエル以上の魔導砲ももっていやがる。

「……本当はこんな物、作りたくはなかったんだけどな……」

「ファイル……」

「アルカンシエルは最後の切り札と言うことで、あと、フェイトさんのリミットブレイクが完成したよ」

「本当ですか!!」

リミットブレイクは、当初のプランからかなり変更している。

もつと時間がかかると思っていたけど——。

「まったく、出力をあげても身体への負担を最小限にしろってコンセプトだから、何度もやり直しになるし……。でも、結局最後はファイルに手伝ってもらったんだよね」

「それは当たり前ですよ。任せきりというわけにはいかないでしょう。それでなのはさんのブラスタも、何とかかなりそうですか？」

「まあね、このデータを元にブラスターステムも大幅に改良できたしね。なのはさんの方はもう少し時間ちようだいね。多分後一月つてとこかな」

「ギリギリ……ですね。できるだけ早くお願いします」

やっぱりブラスタースターの方が時間がかかっちゃうか——。

でも、あのシステムは、出来るだけ身体への負担を減らさなきゃ到底使い物にならない。

「分かったわ。出来るだけ早く完成させるね」

でも、これで二人のリミットブレイクの負担は大幅に減らせるぞ。

リミットブレイクは諸刃の剣だからな。

「それと近々六課の方に行くことになると思うから、八神部隊長にはそのときに全部説明するから、まだアースラの話は話さないでね」

「分かりました」

「そろそろいいんじゃないか。ルーテシア達も落ち着いたと思うし……」



「そうだね」

\*

\*

\*

「どうも。お邪魔します」

「お邪魔します」

「フィルさん、フエイトさん……」

「久しぶりの親子対面は……大丈夫みたいだな」

もしかしたらって心配してたけど、やっぱり血のつながった親子なんだな。

親子……か……。

家族って……やっぱり……良いよな。

「うん……本当にありがとう。お母さんを助けてくれて」

「別に……偶々発見できたただだから……」

「ふふつ、娘が言つて通り、本当にツンデレね」

「メガーヌさん……勘弁してくださいよ。それとルーテシア、俺はツンデレじゃないから、それはティアだけで十分だ」

「「あははっ!!」」

スバルのやつ。ルーテシアにいらんことを覚えおつてからに。

帰ったら、おしおきしてやる!!

「そろそろお暇した方が良い。メガーヌさんもまだ完治してないな。時間ができたら、またきますね」

「うん……。お母さん、またね……」

「またね。元気になったら、今度はそっちに行くからね」  
「待ってる……」

ルーテシア、スカリエツティのことが終わったら、絶対に一緒に暮らせるようになるからな。

「それじゃ良いか。プリム頼むわ」

《はいはい、でもマスターあなたもまだ本調子じゃないんですから、補助魔法を使ってください。これだけの人数を転移するのはきついですよ》

「それじゃ私がファイルに魔力を渡すね。それで大丈夫だと思うから……」  
《お願いします。それでは行きます!!》

俺はフェイトさんの魔力をもらったおかげで、無事ワープを発動させ六課に戻ってきた。

やっぱ完治していないのに、行きの多人数の転移はまずかったな。

——プリムのやつ、分かってたんだな。

\* \* \*

戦闘機人との最初の戦闘から、一ヶ月が過ぎた。

その間俺たちはそれぞれのレベルアップを図っていた。

ティア達フォワードは予定よりも早く、デバイスの最終リミッターを解除するために、訓練と言うよりも修行になっていた。

実際終わった後は、みんな立っ気力もなくなるほどの物だった。

そして俺も、フェイトさんの元、全魔力を使った戦い方をマスターするため模擬戦を繰り返していた。

「……………はあ……………はあ……………はあ……………」

「フィル。そんなんじや私の魔法を全部マスターなんて、できないよ!!」

「……………はあ……………とんでもない強さだ。本当に俺は、あの人の魔力を持っているのかよ。レベルの差がありすぎるぞ」

さつきから俺が攻めても、ソニックムーブで躲されるし、攻撃魔法を放つても相殺されてしまう。

《マスターは魔力は持ちましたけど、スピードとか戦闘技術は相手の方が遙かに上なんです!! ましてやフェイトさんは執務官なんですよ》

「そうだった……。普段はおっとりしてるけど、フェイトさんはなのはさんと並ぶ双壁だと言ったことを忘れてた」

「どうしたの。それで終わり……?」

「まだだ!! 俺はまだやれる!!」

今の俺がフェイトさんに通用しような魔法は、これしかない!!

「モードチェンジ、セイバーモード!!」

俺はプリムをセイバーモードにした。

《マスター、まさか!!》

「プラズマザンバーブレイカー……。こいつで真つ向勝負をする!!」

《何を考えてるんですか!! それだったら幻術を使って困惑させて、バインドを使って捕縛とかの作戦の方が……》

「プリム、この模擬戦の目的を忘れたのか。これは勝つための模擬戦じゃない。俺が全力と使いこなせるようにするための物だ。だからここで逃げの戦い方はできない」

ただ勝つ為の戦いなら、どんな手を使ってもやるが、あくまでこれは力を引き出すための戦いなんだ。

だから、逃げは許されない!!

《マスター……分かりました。私も全力でサポートします。この魔法はマスターと私が一体となってできる魔法ですから……やるからには全力でぶちかましましょう!!》

「さすが俺の相棒だ。行くぜ!!」

俺は飛行魔法で空へあがり、プリムに魔力を集中し上段の構えを取る。

フェイトさん、真っ向勝負だ。

「……ファイル……うん、いい目をしてる。いいよ……。ファイルの全力、全部受け止めてあげる。バルディッシュ!!」

《yes sir Zamber Form》

「いくよ……ファイル。雷光一閃、プラズマザンバー……」

フェイトさんが、魔力を込め上段の構えから、必殺技のブレイカーの発射態勢になる。

「こつちも行くぞ、プリム!! 雷光一閃……プラズマザンバー……」

「ブレイカー!!」

白銀と金色――。

放たれた二つのプラズマザンバーブレイカーは空中で激突し、その場で拮抗していた。

「くうう!!」

「はあああ!!」

これでも駄目なのか。

今の俺ができる最高の魔法だぞ。

「……くつ……まずい……少しずつだが押されている……」

《マスター……頑張ってください……。まだ、マスターは自分の力をおそれてます。私

のことは気にしないで全力を出してください。私はそんなに柔じやないです!!」  
「プリム……」

——そうだった。

俺はどこかで力を恐れていた……。

分不相応の力を——。

だけど、俺にはこいつが……。

心強いパートナーがいるんだ!!

「ありがとうな……行くぜ、これが正真正銘、今の俺の全力全開だ!!」

白銀のプラズマザンバーブレイカーは、さらに威力が上がり、フェイトさんのブレイカーを押し戻す。



「そんな!! さらに威力が!! きゃあああ!!」

ブレイカーがフェイトさんに命中し、大爆発を起こす。

その爆発の中からフェイトさんが落下していた。

まずいぞ!! 向こうも飛行するほどの力が残っていない。

「プリム!!」

《わかってます!!》

俺は最後の力を振り絞ってワープをし、フェイトさんを地上ギリギリでキャッチすることができたが――。

どっちも魔力がゼロになってしまったので、結局は地面に激突してしまった。

高さは、ちよつと高い木から落ちた程度の物なので、たいしたことはなかった。

「あいたたたた……失敗失敗……」

「いたたた……ごめんね、フィル」

「あはは……まさか、そっちが魔力がゼロになるとはね」

「私も驚いたよ。あそこまで、ちゃんと使えるようになるなんてね」

「プリムのおかげですよ。俺だけだったら怖くて、あそこまで出せなかった」

「やっと分かったみたいだね。いくら魔力があっても、デバイスとの信頼関係がちゃんとしていなかったら、

私もあそこまでの魔法は使えないって事に」

そうだった。いくらフェイトさんがSランクオーバーの魔導師だといっても、バルディッシュが無いと、全力は引き出せないと言うことを……。

「はい……。俺はプリムが壊れるのを恐れていたんですね。こいつはかけがないの大きい切な相棒ですから……」

《マスター、それは嬉しいんですけど、ある意味悲しかったです。私は信用されてなかったのかつて思いましたよ》

「悪かったな、これからは全力でこき使ってから覚悟しろよ!!」

《望むところです!! それこそが私の生き甲斐なんですから!!》

本当、こいつはいつも俺のことを助けてくれるよ——。

プリム、本当にありがとうな――。

\* \* \*

新暦75年9月5日

ギンガさんが108部隊から出向という形でやってきた。

そして同時に、マリーさんも出向してきた。

「さて、今日の訓練の前に連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらく出向となります」

「はい、108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします!!」

「「「「よろしくお願いします!!」」」」」

「それから、もう一人……」

「どうも……」

「十年前から隊長陣のデバイスを見てくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです。もつともファイルは初対面じゃないんだけどね」

「そうですね」

「そうそう、ファイル。これが終わったら話があるからよろしくね」

「はい、分かりました」

多分リミットブレイクのことだろう。

なのはさんのやつは完成が遅れていたからな。

「自己紹介も終わったことだし、それぞれの訓練に入るか」

「「「はい!!」」」

「スターズ集合だ。今日もティアナはあたしと一緒に訓練だ。あとルーテシア達は今日はライトニングと合流。合同訓練になる。いいな!!」

「はい!!」

「了解……」

「あいよ」

「それじゃ、すみませんがなのはさんとファイルは、少し私と一緒に来てください。話があ

りますので……」

「分かりました」

なのはさんと俺はマリーさんと一緒にメンテナンスルームへ。  
フォワード陣は訓練となった。

\*

\*

\*

「まず、これを………」

「これは!？」

「なのはさんのリミットブレイク、プラスターシステムです。先日やつと完成したんです」

「本当ですか!!」

「はい、苦労したんですよ。でもその甲斐があつて、当初よりもずっと高性能になりましたから。そして身体への負担も、最小限に抑えることに成功したんです!!」

すごい、ファイルから話は聞いていたけど、最初に考えていた物より、より洗練されている。

無駄が全くない。

「ありがとうございます。マリーさん……」

「お礼ならファイルに言ってください。彼がいなかったら当初の予定は、もっと負担のかかる物になっていたんですから」

「ファイル……本当にありがとう。フェイトちゃんのも一緒に考えてくれていたんだよね」

力を引き出すための訓練をしながら、こういったことまでやってくれてる。

本当、感謝しきれないよ——。

「俺はほんの少し手助けしただけですよ。ほとんどマリーさんがやったんですから……」

「何言ってるの!! 肝心なシステムの中核部はファイルが考えたくせに!! それがなかっ

たらフェイトさんのも出来てなかったんだから!!」

「そういえばフェイトちゃんのもって、先に完成してたんですよね?」

「ええ、ファイルがすつごく一生懸命になってやってたから……」

「ふうくん、やつぱり自分の恋人のは優先してたんだね……。いいですよ、どうせ、わたしのはついでなんだから……」

「な、なのはさん!?!」

「冗談だよ。わたしのシステムはピーキーだから、時間がかかるって言うのは聞いてたしね」

「……勘弁してくださいよ」

ブラスターは時間がかかるってのは聞いてたからね——。

でも、ちよつとだけジェラシーかな。

「でも、ちよつと妬げちやうかな……。フェイトちゃんがうらやましい」

「なのはさんなら、いい人なんてすぐに見つけられると思いますけど」

「だったら、ファイルがもらってくれる。フェイトちゃんと一緒に良いから……」

「えつ……?」

ファイルは本気で驚いた顔をしていた。

「ふふっ、冗談だよ、驚いた？」

「つたく、からかうのも程々にしてくださいね……」

「あはは!!」

でもね。あなたがち冗談じゃないんだよ——。

自分じゃ分からないかもしれないけど、あなたは充分魅力的な男の子なんだからね。

\* \* \*

「うん、みんな良い感じの子達ね」

デバイスの説明が終わった俺たちは、ティア達と合流していた。



マリーさんもシャーリーさんと話をしていた。

「どうやらない間にギンガさんを含めたメンバーで、隊長達と模擬戦をしていたみたいだな。」

「なのはさんがいなかった分、若干優位にはなったみたいだけど、それでもやつぱり駄目だったみたいだな。」

「エリオ達ですか？ それともデバイスの方？」

「両方!!」

「どうやら、マリーさんもティア達のことを気に入ってくれたみたいだな。」

「デバイスを作った身としては、やつぱり気になるしな。」

「そんなとき、ヴィヴィオがこっちにやってきた。」

「おはようございます」

「あつ、えつと、おはようございます」

「おはようヴィヴィオ」

「あつ、失礼します」

「ああ……どうも……ご丁寧に」

「転んじや駄目だよ」

「あつ、ザフィーラ久しぶり。シャーリー、あの子は確か？」

フィルから一応は聞いてるんだけど、ヴィヴィオだよね。  
なのはさんが預かっているんだよね……。

「ママ、パパ!!」

「ヴィヴィオ」

「危ないよ。転ばないでね」

「うん……ふあつ……」

『あつ……』

心配してたとおり、ヴィヴィオは転んでしまった。

「大変!!」

「大丈夫、地面柔らかいし綺麗に転んだ。怪我はしてないよ」

なのはさんがフェイトさんを止めて、助けるのを止めた。

「それは……そうだけど……」

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「ふえ……ふええ……」

「怪我してないよね、頑張って自分で立つてみようか」

「ふええ……ママ……」

「うん、なのはママはここにいるよ」

「ふええ……えええん……」

はあ……。ヴィヴィオ、本格的に泣き始めちゃったぞ。

なのはさんやっていること間違っちゃいないんだけど、あれじゃ子供との距離空きすぎだぞ。

「なのは駄目だよ。ヴィヴィオまだちっちゃいんだから!!」

「ちよつと待つて、フェイトさん」

「フィル、どうして止めるの!!」

怒る気持ちは分かるけど、ただ助けるだけじゃ駄目だからな——。

「ここは……俺に任せてくれないかな」

「う、うん……」

フェイトさんを引き止めた俺は、ヴィヴィオのそばに寄っていった。

「大丈夫かヴィヴィオ？」

「うええ……パパ……」

「そうだよ、フィルパパだよ。怪我はしてないな」

「うん……ヒック……」

「だったら自分の力で立ってみよう。パパがそばにいて力を貸してあげるから、頑張ろう」

「うん……よいしょ……よいしょ……」

俺は、ヴィヴィオが届くか届かないかの距離で見守る。  
本当に駄目なときは助けられるようにだ。

「そうだ、あと少し!! 立てたじゃないか、偉いぞヴィヴィオ」  
「うん!! えへへ……」

自分の力で立てたヴィヴィオは、すつごくうれしそうだった。  
さてと……。

「お二人に言っておきます。まず、フェイトさんは少し甘すぎです。助けるのは良いけど、ある程度は厳しくしないと自立心がつきませんよ。俺たちにはちゃんと厳しくできないのに、エリオ達やヴィヴィオのことになると甘くなってしまうね……」  
「ごめん……」

甘いのも良いんだけど、時には厳しく接しないと躰が出来ない。  
でも、それ以上に酷いのは——。

「それより酷いのはなのはさんです。あれじゃただ突っぱねているだけです!! やるならちやんと子供との距離を考えてやってください。遠くで頑張っていていわれても、全く効果ありませんから。教育するならちやんとコミュニケーションを考えてください!!」

「すみません……」

子育ての経験がないのは分かるけど、母性はしつかりあるんだから、その辺はちゃんとしてもらわなくちゃ困る。

将来、子どもが出来たとき本気で困るぞ——。

「聞いてるんですか二人とも!!」

「はい!! すみません!!」

\*

\*

\*

「うわ……。なのはさん達、本気で怒られている……」

「スバル、関わらない方が良いわよ。あんたが行くとやぶ蛇になるから……」

「そうだね。あたし達の中で、考え方がファイルに近いのって、ティアだけだしね」

「別にそういう訳じゃないけど、今回は偶々あいつの考え方に賛成なだけよ」

まあ、どれが正しいというわけじゃないんだけど、なのはさん達のは両極端というだけだし、その中間がファイルって言うだけね。

「午前の訓練も終わりだし、ファイルを止めてご飯を食べましょう」

「『はい!!』」

「ほら、ファイル。いつまでもお説教してないで、ご飯を食べましょう。ヴィヴィオも待つてるでしょう」

「ああ……悪い」

（た……助かった……）

なのはさんとフェイトさんは、こっちに目で感謝してきた。

二人とも相当堪えたみたいね——。

「じゃ、一緒に行こうか」

「うん!!」

ヴィヴィオはフィルの手をしっかりつかんでいた。  
あいつ、やっぱり世話焼きよ。

\* \* \*

「ヴィヴィオ、髪の毛かわいいね……」

「うん……似合ってる……」

「なのはママのリボン」

「アイナさんがしてくれたんだよね」

「うん!!」



訓練が終わって俺たちは少し遅い食事を取るようになった。

スバル、エリオ、ギンガさんといった大食感の連中はとんでもない量を頼んでいた。エリオとスバルに関してはもう見慣れたけど、ギンガさんも食うのをすっかり忘れていた。

キャロ、ルーテシアは今ヴィヴィオと一緒にこっちにやってきた。

こっちのグループは普通のグループだな。

俺とティア、そしてなのはさん達は一足早く来てみんなを待っていた。

全員がそろそろとそれぞれ食事を始めた。

「あ……ん……んふふ……おいしい……」

「よく噛んでね……」

「うん!!」

なのはさんとフェイトさんがヴィヴィオと一緒に食べている。

こうやってみると、ほのぼのしてるよな……。

「しっかし、まあ……。子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよね」

「スバルのちっちゃいころも、あんなだったわよね」

「えっ……？　そうだったかな……」

スバルのやつ、いきなり自分の小さい頃のことを言われるとは思わなかったんで照れてるな。

「リインちゃんも……」

「ええっ!!　リインは最初っから割と大人でした!!」

「嘘をつけ」

「身体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃないか」

申し訳ないが、お二人の意見に賛成だ。

今のリイン曹長をみても……。

\* \* \*

「あつ……。ヴィヴィオ駄目だよ。ピーマン残しちゃ……」

「うゝ。苦いの嫌い!!」

「ええつ……。おいしいよ」

「しつかり食べないと、大きくなれないんだから」

「ううつ……」

「ヴィヴィオ。ちよつとこれ食べてみない？」

「ピーマンに苦戦してるみたいなので、ちよつとお節介をすることにした。」

「ちよつと、ファイル!？」

「なのはさん、文句は後で受け付けますから……。はい、どうぞ」

「いただきます……。うん、ふるふるしておいしい!!」

「そつか……」

ヴィヴィオは本当に美味しそうにゼリーを食べている。  
さて、全部食べたみたいだし、そろそろ種明かしをしますか。

「ヴィヴィオ、そのゼリーおいしかったかい」

「うん、とつてもおいしかったよ♪」

「よかった。実はね、それはピーマンで作ってあるんだよ」

「「ええっ!!」」

「えっ……? ピーマンって嘘でしょう。どう見てもコンソメゼリーだね」  
「信じられない……」

みんな驚いてるな。

これは、俺と食堂のスタッフとで考えた渾身の一品だ。

「これ……ピーマンなの?」

「そうだよヴィヴィオ。気づかなかったでしょう」

「うん……」

「ヴィヴィオ、本当に駄目なら形を変えても食べられないよ。でも、これは食べられたよ

ね」

「うん……」

「だったら、その残したピーマンも食べてみよう……ね……」

今度は、残していたピーマンをヴィヴィオに食べさせ——。

「うん……あーん……。んんっ……。苦い……」

「よく頑張りました。少しずつ馴れていこうね」

「うん♪」

ちゃんと食べたときは、ほめてあげないとな。

「たいしたもんやな、ファイルは」

「はやてさん……」

「一部始終見せてもらったけど、あんな物用意していたとはな。恐れ入ったわ」

「実はこれで終わりじゃないですよ。そこで、にんじんをエリオに渡そうとしている

キャラ！！」

「は、はい!!」

どさくさ紛れに、嫌いなにんじんを処分しようとしていたみたいだけど、ヴィヴィオにやってお前にやらないわけ無いだろ。

二人とも、今日できっちり克服してもらいます!!

「キャロ……。前から思っていたけど、にんじんをちゃんと食べなつて」  
「ううっ……。ごめんなさい」

「キャロ、今日のパンのジャムは全部食べたろ？」

「はい、甘酸っぱくてとってもおいしかったです」

「あれ、ベースはにんじんだから……」

「ええっ!!」

本日二度目の驚き。こうも術中にはまってくれとはな。  
作ってる側としては本当に気持ちいい——。

\* \* \*

「嘘……。全然、気づかなかったです!？」

「気づかれないようにするのに、苦労したんだぞ……」

「じゃ、ヴィヴィオのゼリーも、わたしのジャムも、フィルさんの……」

「そういうこと。今日の食事は二人の分は、俺が作ったおかずを混ぜてもらったんだ」

「フィルさん……」

「そういうわけだから、このグラッセ、頑張つて食べてみよう。なんなら俺が食べさせてやろうか」

フィルさん、ちよつと意地悪です。

だからわたしも、ちよつと意地悪してみます。

「はい……お願いします……」

「「「なにい!!」」」

「フィルさん……食べさせてくれないんですか……」

わたしはティーン雑誌で覚えた、男性のツボを突く見上げる視線をやってみた。

「……わ、わかった。ちゃんと食べるな、キヤロ」

「はい♪」

フィルさんも例外じゃなく、こういったことには弱いです。

「じゃ……あーん」

「あーん」

「「「ああっ!!」」」

「ん……おいしいです。にんじん食べられました!!」

「よかった。でも、食べさすのはもう勘弁してくれよな」

「はい!!」



でも、こうやってファイルさんに食べさせてもらえるなら、またやってみようかなって思ったのは、ここだけの秘密です。

「ファイル、自業自得よ。もう少し考えて行動しなさい」

「はい……。痛いほど分かりました……」

\* \* \*

「えっと、これで全部のはず……」

「まっ、見つからなかったら勝手に探すわよ。さっさと行ってきなさい」

「そういうことだ。こっちは心配しないでいいぞ」

「うん、ありがとう。ティア、ファイル」

本当に御免ね。

いつもいつも、こういった事務作業を二人の負担にしちゃって……。

「あつ、そうだ。スバル、あんたがよく検診の時に買ってきてくれた……あれ……」

「ああつ!! チョコポット!!」

「そうそう、あたし達も出すから隊長達とちびっ子達の分、買ってきてあげてよ」  
「りよ〜かい」

\* \* \*

「機動六課の方は、今のところ順調のようです」

「そっか……。公開陳述会まで間もないから……。最高評議会の方の動きは？」  
「今のところ……。目立った動きはありません」

「引き続き注意する必要があるな……」

評議会に気づかれてしまうと、こちらの動きが取れなくなってしまう。

「中将……。それよりも今注意することは、本局の査察部と一部の部隊が、こちらの動きを調べ回っているようです」

「農らだけのことなら良い。だが……。あいつの……。ファイルのことまで余計な詮索をさせてしまうのは避けねばならん」

「ええ……」

あいつがしていることは、今後のミッドの……。

そして、地上の未来がかかっている。

「あと、アインヘリアルの方はどうだ？」

「3号機まで完成してますが……」

「分かっている。正直あれは使い物にならん。最高評議会の命令で並行してやっているが、あれにはもう予算を回すな」

「はい」

正直言つて固定砲台なんて、強力な魔導師が攻めたらひとたまりもないぞ。

「オーリス、引き続き頼むぞ」

「了解しました……」

\* \* \*

「二人ともハードワークだと思っけど、調子悪いところとか無い」

「ありませーん。もうめっきり好調で」

「私もです。むしろハードワークって言うのはフィルの方です」

「確かにそうだね。フェイトさんやなのはさんと特別メニューをこなして、それであたし達のデバイスのこともやってたんでしよう。正直あたし達より人間離れしてるよ」

「「あはは……」」

あたし達も丈夫さでは自信あるけど、フィルみたいにあんなことは絶対無理。

身体スペックとかじゃなくて、精神的に……。

「それじゃ、定期検診始めましょうか……」

「はー……」

\* \* \*

「あはーん、ウーノ姉様お素敵です」

「新しい身体……どう……？」

「良いに決まってるわ。あなたたちの動作データが生きているもの」

「妹たちもみんな順調です。ナンバー7セット、ナンバー8オットー、ナンバー12  
デイドも基本動作とIS動作までは完璧です」

「9番ノーヴェと11番ウエンデイの固有武装も無事完成……」

「2番ドウエ、5番チンクはすでに任務中……良いペースね……」

（うふふ、みんな順調に進んでいるわね。私も良いもの手に入りましたしね）

待つてなさいファイル・グリード。

あなたが何かを考えていても、そんなもの何の役に立たないってことを教えて差し上げますわ……。

\* \* \*

「はい、お待たせしました」

「ありがとうございます。あつ、それとすぐに食べる分3つください」

「はい、お待ちくださいね」

支払いも終わり、スバルが、みんなの分のチョコポッドを持って合流した。

「お待たせ」

「うん、あら今日はまたずいぶんたくさん買ったわね？」

「えん、みんなの分。ギン姉あーん」

「ん、あーん……うん、おいしい」

「えへへ……」

相変わらず、ここのチョコポットは美味しいのよね。

甘さも程よいし——。

「でも、よかった。機動六課でスバルもティアナも、そしてファイルも三人とも生き生きして、なんて、なんだか嬉しいな」

「まあ……。色々あったり大変なこともあったりするけれど、六課に呼んでもらって、本当によかったと思ってる」

「親友と一緒にやれて、さらにあこがれの人も働けるんですもの」

「あつ、ギン姉もあたしの目標なんだよ。もっと強くなっていつか追いつくんだ……」

「ふふつ、そう簡単には追いつかせないわよ。私も追いつかなきゃいけない目標があるから……」

「ファイル……だね……」

「ええ、私もファイルから、あの話を聞いて驚いた。そしてファイルは強くなった……。いろ

んな意味でね……」

「うん……」

そう、ファイルは本当に強くなった。

フロントアタッカーである私とスバルが、二人がかりでかかっても勝てないことがある。

本来ならセンターガードなのにもかかわらずだ。

一度ファイルに聞いたことがあったけど……。

『実際はギリギリなんですよ。俺はある意味ズルしてますから……』

多分、それは経験と与えられた魔力のことを言ってるんだと思う。

でもそれは、使いこなしている以上あなたの力なんだからね。

「……スバル、この先ファイルが言うとおりだとすれば戦闘機人との戦闘が間違いなくあるわ」



「うん……」

「………しっかりやろうね。私もあんな未来にしたいくないから……」

「大丈夫、あたし達には母さんが残してくれたリボルバーナックルと……」

スバルが出したのはマツハキヤリバーだった。

「ファイルが作ってくれた、キヤリバーもあるし……」

《Caliburs?》

「マツハとブリッツでキヤリバーズ。マツハキヤリバー、ブリッツのお姉さんだね」

「………そうね。私のブリッツキヤリバーもファイルが作ってくれたんだったわね」

「あの頃、ファイルは本当に徹夜続きだったみたいだよ………」

私のブリッツだけでなく、ティアナのクロスミラージュや、なのはさん達の改造プランまで考えてたんだものね。

「本当に、ファイルには頭が上がりないわね……」

「ファイルが言ってたよ。生きて帰ってきてくれればそれで良い。それが何より嬉しいか

らって……」

「ファイルらしいわね。その気持ちに報いるためにも頑張りましょう、スバル」  
「うん!!」

私達は、マリーさんが来るまでずっと話していた。

その車に乗り、六課に戻った。

\*

\*

\*

機動六課、部隊長室

訓練終了後、私となのはちゃん、フェイトちゃん、そしてファイルで今後の対策について話し合っていた。

「今日、教会の方から最新の予言解釈がきた。やっぱり……公開意見陳述会が狙われる

可能性が高いそうや。フィルの経験してきたことでもそうやったしな……」

「うん……」

「やはり……」

「もちろん、いつもより警備もうんと厳重になる。機動六課も各員で警備に当たつてもらう。ほんまは前線丸ごとで警備させてもらえたらええんやけど、建物の中に入れるのは私たち3人だけになりそうや」

「本当なら、フィルにも中に入って警備を担当してもらいたかったんだけど——」

「大丈夫……。3人そろっていれば大抵のことは何とかなるよ」

「前線メンバーも大丈夫。副隊長達も、今までにないくらい万全だし……」

「フォワードのみんなも、デバイスリミッターを明日からリミッターをサードにまであげていくしね」

「そっか……。みんな何とか使いこなせるようになったんですね」

「フォワードのみんな、本当に頑張ったんだよ。フィルの足手まといになりたくないって。ルーテシアだって一生懸命にやってたしね」

ルーテシアも本当に頑張ってくれてる。

必死に連携を取ろうと、みんなとコミュニケーションを取っているいろいろ聞いたりして努力してるし――。

「みんな……」

「ここにさえ押さえれば、この事件は一気に好転する。ここが正念場や」

「うん」

「ええ」

そう、ここがまさに正念場なんや――。

絶対、乗り切ってみせるで!!

時空管理局地上本部 公開意見陳述会まで あと7日

# 第17話 Symbol of family

「なあ、ティア。最近のフェイトさん達を見てどう思う？」

「どう思うって、あんたいきなりよね。どういう意味で言ってるの？ 仕事のこと。それとも……」

ティアは少し考えてからこちらを向いて……。

「あの3人の親子としての関係かしら……」

「……やっぱ、わかるよな」

「当たり前でしょう。エリオとキャロ、あの二人、フェイトさんに心配させたくないっていうのは分かるんだけど……」

「それが強すぎて、どこか親子としては遠慮してしまっている……んだよな」

「そういうことよ」

「これは未来からずっと思ってきたことだ。」

フエイトさん達の関係は、一見エリオ達が素直で良い子にしている、何の問題もないと思うが、そうではない。

「あのままでと、あの3人は表面上の親子関係になってしまう」

「確か、あんたは以前のあの3人を見てきたのよね？」

「……俺が知る限りでは、結局最後まであのままでったよ。あの3人が本音で言い合う前に……」

「スカリエツティ達に殺されてしまった……のよね」

「……ああ」

もう少し時間があつたなら、未来でも変わっていたのかもしれない。

だから、せめてこちらではこんな表面上の関係にはしたくない!!

「ファイル、その様子だと、何か浮かんだみたいね」

「ティア、お前にも協力してもらうことになるけどいいか？」

「今更何を言ってるのよ。元からそのつもりだったんでしよう」

「済まないな……色々迷惑をかけて……」

「あんたが迷惑をかける事なんて、そうそう無いんだから、遠慮しなくて良いわよ。それにあたしもエリオ達にはちゃんと本音で語り合って欲しいしね」

「ティア……ありがとう」

「エリオ達は、あたしが何とかするから、あんたは自分の彼女をしつかり見守りなさいよ!!」

ティアは思いつきり俺の肩を平手打ちして、活を入れる。

「あいたたた……。つたく、もう少し加減をしろつての……」

「そのくらいで丁度良いのよ。……鈍感のあんたにはね……」

「んっ……? 何か言ったか?」

「別に……何も……言っていないわよ」

最後の方は聞き取れなかったけど、ティアの励ましは嬉しかった。

フェイトさんと語るのとは違う心の安らぎがあるんだよな。ティアには。

「で、具体的にはどうするのよ。あの3人を一緒にするのは中々難しいわよ。3人が3

人とも、遠慮してるから……」

「その辺は心配するな。こないだ、ユーノさんに相談したら、こんなのをくれた」

そう言つて取り出したのは三枚のチケツト。

「これは……つて、これ、クラナガンの展望台レストランの招待券じゃないの!!」

「ああ、俺たちじゃ手も出せないとこだけ、ユーノさんが手配してくれたんだ。良かったら使つてくれて……」

「あ、あの人なら納得いくわ。司書長クラスなら料金の心配もないからね」

「ユーノさんにフェイトさん達のことを話したら、すぐに手を打ってくれたからね。それにアルフからも聞いたんだけど、やっぱりあの3人はどこか遠慮しがちなところがあるって心配していたんだ」

ユーノさんに相談していたとき、丁度アルフもいて、この事を話したら、アルフ自身も心配していて何とかならないかって思っていたらしい。

「と言うことはあたしの役目は、エリオとキヤロをうまく誘い出すことが仕事ね」



「ああ、俺が渡したんじゃ意味がないからな……」

フェイトさんって、甘えてくれるようにはなったけど、やっぱり基本は自分で抱え込むタイプだ。

本当はエリオ達のことをどうしたらいいか相談したいのに、それをリンデイさんにもちゃんとは相談していない始末だ。

エリオ達になまじ出来てしまうから、それで自分が出来ていないんじゃないか。それをずっと抱え込んでしまっている。

だけど、これは俺があんまり出しやばってしまっても駄目なんだ。

ヒントや切っ掛けは与えても、あくまで3人で解決してもらわなくちゃいけない。

「あんたも……損な性分ね」

「かもな……」

\*

\*

\*

「えっ……。ユーノが私に用があるの?」

「うん、さつきいなきに通信があつて、今夜7時にクラナガンの展望台レストランに来てくれつて。通信でも良いけど、たまには食事でもつて事らしいよ」

「ふう、ん……。でも、ファイルは良いの? 私かユーノと二人きりで食事に行つたりして……」

フエイトさんが少し拗ねた表情で、俺に話しかけてきた。

「そりや、全く焼き餅を焼かない訳じゃないよ。だけど、ユーノさんはドゥーエと付き合つてるんだしね。もし、フエイトさんとそんな関係をしていたら、まずドゥーエに折檻を喰らうと思うよ」

「ふふっ……。確かにね」

ドゥーエつて、ああ見えてかなり焼餅焼きだつてのが最近知つた。

普段、クールなイメージがかなり強いのに。

「だから、心配はしてないんだ。せつかくのオフシフトなんだから、美味しい食事を楽しんできてね」

「それじゃ……ごめんね。私だけ……」

「いいって。その食事が美味しかったら、今度は二人で行ってみようか？」

「その言葉忘れないでよ。確かに聞いたからね!!」

「ああ、忘れないって、だからしつかり俺の分も食べてきてね」

「うん♪ じゃ、今から出ないと間に合わないから、私は自分の部屋に戻って着替えるね」

そう言ってフェイトさんは俺の部屋から出て行った。

レストランに行くのに、正装しないとイケないからな。

「……どうやら、第1段階はうまくいったな」

後は、ティアがうまくエリオ達を誘い出してくれることを祈るだけだ。

部長長となのはさん達には、事前に連絡済みだ。

だから、邪魔されることはない。

頼んだぞ……ティア……。

\*

\*

\*

「えっ……？」

「お食事券……ですか？」

「ええ、今日あたし達はオフシフトじゃない。だから、スバルと二人でここに行こうとしたんだけど、スバルがクラナガンに行っていて、行けなくなっちゃったのよ」

「でしたら、日にちを変えたりしたらいかがですか？」

「そもいかないのよ。これ、懸賞で当たった奴だから、日にち指定は解除できないのよ。券をファイにするのは悔しいし、一人では駄目だから、あんた達二人で行ってきなさい」

あたしは半ば無理矢理にエリオにチケットを手渡した。

こうでもしないと、受け取りそうにないから……。

「……済みません。ティアさん」

「本当にごめんなさい……」

「だから、これは懸賞で当たっただけなんだから、あたしは損なんてしてないのよ。そんな顔してないで二人で楽しみなさいね」

「はい!!」

「それじゃ、もう時間はあまりないから、二人はさっさと着替えて、準備しなさいね」

二人はレストランに行くために、自分たちの部屋に着替えに戻った。

「……ふう、疲れた……。エリオもキャロも、本当に遠慮しているわね。あんまりにも子供らしくないわ」

ファイルが心配してるのはこの事なのね。

あのままじゃ、言いたいことも言えない子供になりかねない。

「ファイル、こっちは何とかうまくやったわ……。あとは、フェイトさん達次第ね」

ここまでやったら、後は当人同士の問題だ。

あたしやファイルが出来るのはここまでだしね。

\* \* \*

「えつと……確かユーノが指定していた席ってここだよな？」

私は指定時間の10分前に、このレストランに来ていた。

だけど、30分が過ぎてもユーノが来る気配がない。

ユーノは時間を守る人だから、こういうときも必ず連絡が来るはずなのに……？  
そんなことを思っていると……。

「ここだね。ティアさんがくれたチケットはこの席だったね？」  
「うん、間違いないよ」

向こうからやってきたのは……。  
って、嘘でしょう!?

「エリオ!? キャロ!？」

「フエイトさん!？」

一体どういう事なの!?

ユーノじゃなくて、この二人が来るなんて——。

\*

\*

\*

「今頃あの3人、驚いてるだろうな……」

「それはそうだよ。何も知らされないで、顔合わせになったらね。それにしても、ファイルも大胆なこと考えたよね」

「なのはさん、すみません。勝手なことをして……」

「ううん、怒ってるんじゃないんだよ。ただ、今日はやてちゃんから聞いたときはびっくりしたけどね……」

さすがに、部長長に何も言わないで実行するわけにはいかない。

だから、事前に部長長には話して、実行可能な日を決めてもらったのだ。

それが今日だったと言うことだ。

「でも、今日はフォワードはファイルだけなんだね。スバル達もオフシフトだし……」

「丁度良い機会でしたから、スバル達にも休んでもらったんです。あいつらもかなり疲れてますから……」

「ファイル、それ以上にあなたの方が休まなきゃいけないと思うんだけどね。わたしは……」

「あ、あはは……。俺は別の日に休みをもらいますよ。さすがに休み無しでは持ちませんから……」



「その言葉、いまいち信用できないんだよね。フィルって、隠れてやるからね」

や、やばい……。

なのはさん、完全に見破っている。

さらに追及の手が来ようとしたが……。

ヴィーヴィー……。

「第2級警戒体制!?!」

『大変です!! なのはさん、フィル』

「どうしたの、ルキノ!?!」

司令室で監視していたルキノさんから通信が入り、事の詳細を聞いていた。

今回の事件は、クラナガンの海上でガジェットの大群が現れ、それをキャッチしたことで警報が鳴ったとのことだ。

『シグナム副隊長とヴィータ副隊長には、先に出撃してもらったんですけど、それでも数

が多くて……』

「分かった。わたしとファイルも出撃するね」

『お願いします。それと今からフェイト隊長達にも連絡を……』

ルキノさんが通信を入れようとしたとき……。

「ルキノさん、ちよつと待ってもらえないか……」

『「えっ……？」』

なのはさんとルキノさんが驚いて、一旦動きを止める。

『どういふこと？』

「隊長達には話してるんだけど、今フェイトさんとエリオ達は、大切な話をしてるんだ。本当に大切な話を……」

『だけど、このままじゃガジェットの進行は防げないよ!!』

『心配しなくてええよ。ルキノ、今回のことはレジアス中將も承認済みや。だから、なのはちゃんの限定解除許可ももらってるんや』

司令室にいた八神部隊長が、ルキノさんに事の詳細を説明してくれた。

『そこまで……してたんですか……？』

『私もレジアス中將から話を聞いたときは、腰ぬかしたで。ファイル、あんたフェイトちゃん達のために、そこまでしてたんやな……』

「レジアスの親父さんのことは、保険だったんですけどね。まさか本当に役に立つとは思いませんでしたよ……」

本当は、こんな事にはなつて欲しくなかった。

でも、結果的にしておいて正解だ。

『でも、ファイル。戦局怪しくなったら、私は六課部隊長としてフェイトちゃんに連絡するからな。それはええな』

「はい!!」

これで、すぐにフェイトさんに連絡行くことはなくなつた。

後は、俺たちがガジェットの始末をするだけだ。

絶対3人の邪魔はさせない!!

\* \* \*

「これ、美味しいですね。フエイトさん!!」

「うわあ……。これ見たこと無いです」

「二人はこういったところは初めてだもんね。ごめんね……。本当はもっと二人と一緒にいる時間を作らなきゃいけないのに……」

「そんなことないです!! フエイトさんはいつもわたし達の心配をしてくれています」

「そうですよ。それだけでも申し訳ないと思ってますのに……」

「エリオ、キャロ……」

二人とも本当に私に気を遣ってくれているのが、よく分かる。

それがかえって二人に申し訳ないと思う。

私は、ファイルが前に言っていたことを思い出していた。

『フエイトさん、エリオ達は確かに良い子ですけど、良い子が故に遠慮している感じがする』

あの時は意味が分かっていなかったけど、こうやって向き合ってやっと分かった。

二人とも、私に気を遣いすぎて本音を出し切れていないんだ。

最初、エリオ達が来たときはびっくりした。

エリオ達はティアナからこのチケットを渡されたと言っていた。

そして私はユーノにここに来て欲しいと言われた。

しかも、その連絡を受けたのはファイルだった。

そのことを考えると……。

——まさか。

「そっか……」

「どうしたんですか、フエイトさん？」

「ううん、何でもないよ……」

この事を考えたのはファイルだ。

私は以前母さんには、エリオ達とのことを、何となくだけど話したことはあった。

それを知っているのは、アルフだけだ。

無限書庫で一緒に働いているユーノに相談したとしてもおかしくはない。

そして、ファイルも未来での私達のことを見ている。

ファイルはこの事をユーノ達に相談して、計画していたんだ。

そして、自分が全部しないのは、あくまで自分たちで解決しなきゃいけないと考えたから……。

「ねえ……エリオ、キャロ。二人は最近本当に色々な事をしつかりとしてくれている。それは本当に嬉しい。だけど……」

「だけど……?」

「二人があんまり良い子過ぎて、しつかりしすぎて……。私は本当に二人のために、ちゃんと出来ているのかなって思ってたんだ」

「そんな!!」

「僕たちこそ、フェイトさんにいつも心配をかけてしまつて!! フェイトさんに心配かけちゃいけないと思つて!!」

「だから、少しでもフェイトさんに負担をかけたくなって、それで!!」

「……それは、違うよ。エリオ、キャロ。二人が私に何も言つてくれない方が、逆に悲しいんだ……」

そう、何も言つてくれなきや、二人がどう思っているか知ることが出来ない。

人間は言葉でちゃんと話し合つて、それでお互いを知ることが出来るんだから……。

「フェイトさん……」

「私もちゃんとエリオ達と話していなかつたのがいけないんだよね。こうやつてフィル達に心配されてしまったんだから……」

「フィルさん……ですか?」

「うん、この事を考えたのも、ユーノやティアナにお願いして、ここに私達を来させたのも、フィルが考えたことなんだよ……」

「そうだったんですね……。だから、ティアさん、あの時わたしに半ば無理矢理、このチ

ケットを渡したんですね」

「僕たちにフェイトさんと一緒に時間を作るために、そして……」

「私達がゆつくりと話し合うために……」

ファイルの場合、全部やるのではなく、あくまで切っ掛けは作るが最後の大切なところは、当人に任せてくれる。

全部の答えを示すのではなく、最後は自分たちで答えを出す。

本当にファイルらしい……。

「エリオ、キャラロ。今日はいっぱいお話しよう。今まで話せなかったことや、して欲しいことを、私に教えて欲しい」

「はい、僕たちもフェイトさんにいっぱい聞いて欲しいです。僕たちの思いも……」

「フェイトさん、わたしもエリオ君と同じです……」

「うん、今日はファイル達の好意に甘えよう。帰ったら、私がキャラメルミルク作ってあげるね」

「はい、楽しみにしてます!!」

「キャラメルミルク、甘くて大好きです♪」



「ありがとう、今はここの料理を3人で楽しもうね」

「はい!!」

ファイル、みんな、本当にありがとう……。

\* \* \*

「くそつたれ!! ガジェットは何てことないけど、こう数が多いとな……」

「そうだね……」

「おい、どうする。一気に片付けるにしても、限定解除しないと……」

限定解除許可をもらっているのは、なのはさんだけだ。

残念ながら、ヴィータ副隊長達はそのままで。

「こうなったら、わたしとファイルが限定解除して、一気に殲滅するしかないね」

「ですね。なのはさん、せっかくですから、あれやります?」

せっかくの機会だ。

テストもかねてやってみるのも悪くない——。

「あれ……ね……。いいね。あれで一気にカタ付けよう!!」

「お、おい……おめえら、何をする気だ?」

「ヴィータちゃん、シグナムさん、これからフィルと二人で広域殲滅をかけますから、二人は射程圏外に退避してもらえませんか」

「何言ってるんだよ!! あたし達も残った方が!!」

「済みませんが、今からやる魔法は未完成なので、まだコントロールが不完全なんです。身体への負担はともかく、射程がうまくコントロールできませんので……」

この魔法は、まだ未完成でうまくいか分らない。

だから、俺たち以外の人間は出来るだけ遠くに退避して欲しいんだ。

「わ、分かった……」

「なのは、フィール、無茶だけはするなよ。危なくなったら、あたし達はすぐに戻るから……」

「そう言つて副隊長達は俺たちからある程度距離を取り、そこで待機することになった。」

「それじゃ、やりましょうか!!」

「うん!!」

俺となのはさんは、魔法陣を展開し、なのはさんはレイジングハートをエクシードモードにし、俺はプリムをブレイズモードにした。

「リミット・リリース!!」

リミットを解除すると同時に、なのはさんは桃色の魔力に身体が包まれ、俺は白銀の魔力に身体が包まれた。

「じゃ、始めようか。ファイル」

「はい!!」

なのはさんと俺は辺り一帯の魔力を、出来るだけ集め始めた。集束できるだけ集めて、それを攻撃用のエネルギーにする。

残存してるガジェットはおよそ400。

例えばスターライトブレイカーを撃っても、まだ全滅はさせられない。だったら、シューター系の魔法をぶつけて一気にカタ付ける。

「これだけ集めれば、大丈夫かな?」

「ええ、现阶段で集められるだけ集めましたしね……」

ブラスターを使えば、簡単なんだけど、まだクアットロには見せたくない。ブラスターは最後の切り札だから――。

「じゃ、いくよ!!」

「こっちはいつでもOKです!!」

次の瞬間、二人の周りに無数のスフィアが展開された。  
その数はおよそ80。

「いつけええええ!! アクセルシユーター!!」

二人から桃色と白銀のアクセルシユーターが放たれ、さらに……。

「ブレイク!!」

俺たちが指をパチンと鳴らすと、途中で分裂を繰り返し、その数は最初の三倍になる。

ドゴオオオン……ズガアアアン……。

激しい爆音と共にガジェットの数は確実に減っていった。

「まだ……残ってるね」

「ですね……。なのはさん、集めた魔力、まだ残ってますよね」

「充分なくらいね……」

「じゃ、残りのガジェットは、集束砲で一気に殲滅しましょう」

「そうだね……。フェイトちゃん達に余計な心配させたくないしね」

「そういうことです!!」

俺たちは残った魔力を、それぞれデバイス先端と銃口に集中する。

白銀と桃色の魔力は、周囲の大气をふるえさせ、二人の真下の海上は荒波をあげていた。

\*

\*

\*

「お、おい……。まさか、あの二人、ここでスターライトブレイカーをぶつ放す気じゃないだろうな……」

「そのまさか……らしい……」

「冗談じゃねえぞ!! あたし達が近くにいてるつてのによ!! さっきの魔法だつて避けるのにギリだつたつてのによ!!」

なのはとフィルが放ったアクセルシューターの嵐は、コントロールがまだ未完成で、あたし達にまで飛んできやがった。

何とか避けることは出来たけど、なのは達が来るまでガジェットの掃討をしていたから、かなり体力は消耗していた。そこにきてこれかよ!!

「ヴィータ、急いで戦域から抜けるぞ!!」

「くっそう、マジで洒落にならねえぞ!!」

\* \* \*

「どうやら……射程外に行ってくれたみたいです」

「良かった……。この魔法、まだコントロールが不安定だから……」

「それじゃ、思いつきりぶっ放しますよ!!」

「うん!!」

集束した魔力はさらに高まり、その魔力球は二回り以上もふくらんでいた。

なのはさんの方は、さらに一回り大きな魔力球を作り上げている。

「スターライト……」

俺たちの声が重なり――。

「ブレイカアアアアア!!」

放たれた二つの魔力砲は、途中で三つに分裂し、合計6つの奔流はガジェット集団を完全に飲み込み……。

――そして。



跡形もなく消し去った……。

\*

\*

\*

「マジで……悪魔が二人になりやがった……」

「ああ……スターライトブレイカーの分裂だと……考えただけでも恐ろしい……」

「シグナム、悪いことは言わねえ……。あんまりあの二人に、模擬戦を申し込まない方が  
良いぞ……」

「……そう……だな」

昔、あたしがなののことを悪魔って表現したけど、あの時とは比較にならない。

二人ともとんでもないことしやがる!!

これじゃ、本当に悪魔じゃねえか……。

あんまり、あの二人をからかうのは止めておこう……。

あたしはまだアイスを食いたりねえしな……。

\*

\*

\*

ブシユウウウ……。

レイジングハートとプリムから余剰魔力を排出し、戦闘態勢を解除した。

このスターライトブレイカーは、本来ブラスターモードのビットを使ってやる魔法だ。  
だから、ビット無しだと、コントロールが難しい。

「どうやら……うまくいきましたね」

「うん、ブラスタービットが完成していなかったから、出来るかどうか五分五分だったけどね」

「ただ、真つ直ぐに分裂させるだけなら、出来ると思いましたがね。やってみて正解でしたね」

ビットがあれば、もっとコントロールも楽なんだけどね。

この魔法は、単体で撃つ物じゃないからな。

「うーん。まだまだ改良の必要がありだね」

「それは、今後プラスタービットが出来てからにしましょう」

「そうだね、元々ビットがあつての魔法だからね」

《あの……マスター、なのはさん、出来れば無茶はしないで欲しいんですけど……》

《プリムの言うとおりです。無茶前提で物事を進めないでください。プラスターモードは出来れば使わない方が良いんですし、それに……》

《このスターライトブレイカーは、まだ、実戦では使えないですね。ビットがあつてもコントロールが出来なければ、無駄撃ちになってしまいますしね》

今の段階じゃ、ゆりかご決戦には間に合わないな。

まずは、プラスターの負担を軽くすることを最優先にしてくちな。

「確かにプリム達に言うとおりで。無茶前提はまずいな……」

「そうだね……」

俺たちは一応サーチャーで周囲を検索してみるが、ガジエットの反応は見られなかった。

「これで、任務は完了だね。おつかれさま、ファイル」

「ですね。なのはさん、ありがとうございました。無茶なお願いを聞いてくれて……」

「いいよ。フェイトちゃん達がちゃんとわかり合ってくれたら、その方がより良い未来になるからね。そうでしょう、ファイル」

「なのはさん……」

「それじゃ、六課に戻ろうか。そろそろフェイトちゃん達も六課に戻って来ちゃうしね」  
「はい!!」

こうして、海上ガジエット事件は幕を閉じた。

後日、フェイトさん達に、事件があったのを黙っていたことがバレてしまい、俺はフェイトさん達にマジで泣かれてしまった。

特にキャロとフェイトさんは大泣きをしまい、宥めるのに大変な想いをしてしまった。

そして、キャラメルミルクを3人に作ってあげて、その後4人で色々な話をして……色々なことがあったけど、キャロ達もフェイトさんも、この事で本当の親子になった気がする。

良かった……。

未来の時みたい、よそよそしい親子にならなくて……。

時間があつたら、大丈夫だったんだけど、その前に殺されてしまったからな。

\*

\*

\*

訓練が終わった夜、俺は夜風に当たりたくて、隊舎屋上に来ていた。

「プリム……本当に良かったな。フェイトさん達、うまく行って……」

《まったく……マスターは絡め手過ぎるんですよ。単刀直入に言っただけでも良かったんじゃないですか?》

「それじゃ、駄目なんだよ……。こういう事は自分たちで気づかないと。俺が出来るのは、あくまで切っ掛けだけだから……」

こういっただけは、人から言われて気づく物じゃない。

自分たちで気づいてこそ価値があるのだから――。

《本当、マスターらしいですよ。自分は影ながら支える……。損な役回りばかりですね》  
「いいんだよ。それが俺が戻ってきた本来の役目なんだから……」

俺はこの世界を、あんな未来にしないために戻ってきたんだ。

そのためなら、どんな裏方だって喜んでやるさ。

世界の修正力だって、こういっただけには許してほしい。

\* \* \*

(あんまり……無茶はしないでね。ファイル……)

私は仕事が終わわり、少し風に当たりたいと思い、屋上に来たんだけど、そこでプリムとの会話を偶然聞いてしまった。

「……いくら、私達のためだからと言って、自分がボロボロになったら、その方が辛いんだから……」

例えばファイルに言ったとしても、JS事件が終わるまでは、無理し続けるだろう。

だから、私はそんなファイルが壊れないようにしっかりと支えるんだ。

ファイルがいてこそ、私も幸せなんだからね。

それを忘れないでね……。

「おやすみ……そして、ありがとう……」

ファイル、いつもあなたには助けてもらってばかりだね。

今回のことだって、ファイルがいなかったら、エリオ達とあんなに本音で語り合えなかったかもしれない。

だから、今度は私があなたを助けるからね。

それがティアナとの約束だから……。

ファイルの心を支えるという、大切な約束……。

ティアナ、私、あなたの方もファイルのこと支えるから……。

だから、ファイルと私のことを見守っていてね……。



## 第18話 その日、機動六課（前編）

新暦75年9月11日

機動六課は公開陳述会の会場の護衛のため、隊長陣、副隊長陣とフォワード陣が当たることになった。

一気に出発するわけにはいかないので、分割して出発することになる。

「というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や。明日14時からの開会に備えて現場の警備はもう始まっている。なのは隊長とヴィータ副隊長、ライン曹長とフォワード7名はこれから出発。ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠取った？」

「「「「「はい!!」」」」」」

「あたしとフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝中央入りする。それまでの間よろしくな」

「「「「「はい!!」」」」」」

\*

\*

\*

機動六課、ヘリポート

「あれ、マリーさんも？」

「私は別件。ちよつと中央方面に用事があつてね」

「そうなんですか……」

フォワード全員とリン曹長達がヘリに乗り込み、残るは俺となのはさんだけになつたとき……。

「あれ……ヴィヴィオ、どうしたの？」

「ヴィヴィオ、ここは危ないぞ」

「ごめんなさいね。なのは隊長、フィル君。どうしてもママとパパのお見送りをするんだって……」

「もう……駄目だよ。アイナさんに我が仮言っちゃ……」

「……ごめんなさい」

「なのはもフィルも、夜勤でお出かけは初めてだから」

「あつ……。そっか……」

そう――。

今日はあの忌まわしき日――。

未来では、このときにヴィヴィオがさらわれてしまってる。

本当なら、一緒に連れて行ったほうがいいのかもしれないけど、下手に動くともっと悪い方向になるかもしれない。

だから、六課隊舎に防衛策をとることにしたけど――。

「なのはママもフィルパパも、明日にはちゃんと帰ってくるから」

「絶対……」

「絶対に絶対。良い子で待つてたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作つてあげるから」

「パパも……」

「ああ……もちろん。だったら俺は、なのはママのキャラメルミルクに合うケーキを作つてあげるから、一緒に食べような」

ここはシャマル先生とザフィーラさんを信じて、ヴィヴィオのことをお願いしよう。あの二人だつて、一騎当千の騎士だ。

「ママとパパと約束ね」

「うん……」

俺となのはさんは、それぞれヴィヴィオと指切りの約束をし、みんなが待つへりに乗り込む。

\*

\*

\*

へり内

「それにしても、本当に懐いてしまってますね」

「まったく」

「そうだね……結構厳しく接しているつもりなんだけどな……」

「分かるんですよ。なのはさんが優しいって」

キャロの言うとおりだ。

子供は純粋な分素直だ。嫌いな人だったら近づきもしないから――。

「うん……私もそう思う。なのはさんだけでなく、フィルさんもだけど……」

「ちよつと待てルーテシア!! 俺はなのはさんみたいにずっと一緒にいる訳じゃないぞ……」

「時間の問題じゃない……。フィルさんの優しさには、私とアギトも救われたから……」  
「確かにな。あんたのおかげで、ルールーも笑顔を取り戻したしな……」

「ルーテシア……アギト……」

俺がしたことなんて、ほんの一押しでしかない。

笑顔を取り戻したのは、ルーテシア自身ががんばったから——。

「あつ、そうだ!! ipp そのこと本当になのはさんの子供にしちやうとか」

「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ。良い受け入れ先が見つかって、ヴィオがそこに行くことに納得してくれば……」

「納得しない気が……」

「うん……」

「無理……」

「だな……」

「うんうん」

確かに無理だと思う。

ヴィヴィオ、なのはさんとフェイトさんに完全に懐いてしまってるからな。

「そりゃ、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど、本当に良い行き先が見つかったら、ちゃんと説得するよ。良い子だもん……。ちゃんと幸せになつて欲しいから……」

「なのはさん……」

「でも、そんな家庭が見つかるまでは、わたしが責任を持つてまもつていくよ。それは絶対!!」

「ですね」

「「はい!!」」

「だな」

\*

\*

\*

「はい、これでよしと」

なのはが不在で寝る準備のため、代わりに私が、ヴィヴィオの髪を結つていたりボンを外してあげた。

さて自分も着替えようか、と思つたところで、宙にウィンドウが開く。

「……あれ？ 母さんからだ」

『はあーい、元気だったあ？』

「こんばんは、母さん……」

『ヴィヴィオも、こんばんは』

「こんばんは」

「何か、ありました？」

『うん、明日の陳述会なんだけどね。私も顔だそうかどうかどうしようかなって……』

「ああ、大丈夫だと思いますよ。クロノも別の任務中ですし、本局の方も、あまりいらつしゃらないとか」

今回の陳述会は、地上本部の人間が多い。

だから、本局で参加するのは、六課とごく僅かの人間だけ——。

『あ、そう？ しばらくぶりに娘の顔も見たいし、ヴィヴィオとも、会いたいんだけど……』

「あの、母さん？ 私は警備任務ですし、ヴィヴィオは寮でお留守番ですから」



『あくそつか、そうよねえ。でも随分会ってないから寂しくて……。それに、娘の彼氏にも会いたいし』

「ちよ、ちよつと母さん!？」

いきなり何を言い出すの。

彼氏って事はフィルだね。まだ母さんには言っていないのに……。

『以前、あなたがエリオとキャロと親子としての接し方が分からないって、私に相談してきたじゃない』

「うん……」

そのことは、今でもフィルに感謝している。

フィルやみんなのおかげで、エリオ達とも一歩前に進めたんだから——。

『実は……ユーノ君とアルフを通じて、彼から事前に言われてたの』

「えっ……?！」

『近い将来フェイトがこの事で相談しにくると思うからって。でも、この問題に関して

は自分が介入してはいけない。それに……」

「それに？」

『このことはあの三人がちゃんと向き合わなきゃいけない、避けられないことですから……とも言つてたわ……』

「ファイル……」

『本当に良い子よ。私も彼にあなたたちの状況を、聞くまで分からなかったんですものね。これじゃ母親失格よ』

「違うよ!! 私がもつと早く相談すればよかったんだよ。私は抱え込みすぎるって、ファイルにも言われてたのに……」

あのときファイルはエリオとキャロとの問題は、自分達で解決してくれって言つてたのはそう言うことだったんだね。

それでもファイルは、一緒に食事をしてこいって3人分のディナー券を渡してくれて、時間を作ってくれた。

後から聞いたけど、あの日ガジェットが出撃してたんだけど、ファイルが私たちには通信をシャットアウトしてしまって、ガジェットをファイルとなのはが全部叩いたって聞いたときは、本当にびっくりした。

なのもフィルからの話を聞いて、私たちに通信を入れようとしなくて一緒に破壊してたし——。

ヴィータから話を聞いたら……。

『悪魔が二人になりやがった……』

シグナムも……。

『あのときの二人とは、私も戦いたくはないな……』

いったいどんな地獄絵巻だったの!?

『でも、本当にあのときはお世話になったから、いつかちゃんと会ってお礼がしたいのよ』

「そうだね……落ち着いたら、母さんにもちゃんと紹介するよ」

『フェイト、これから大変なことになると思うけど頑張りなさい。私も出来ることは協力するから……』

「うん……ありがとう……」

『あつ、そうそう。次にあつたときに子供出来ちゃいました、なんてのは勘弁してね』

「ちよ、ちよつと、母さん!？」

『じゃあね〜♪』

そう言つて母さんからの通信が切れた。  
まったく……。最後の一言は余計だよ。

\*

\*

\*

地上本部

公開意見陳述会が始まるまで12時間を切り、警備の方もさらに厳戒態勢になった。機動六課のメンバーもそれぞれ配置についていた。

「ふん……」

ヘリパイロットである俺は基本的に朝までやることはない。

朝一番に六課に残っているメンバーを迎えに行くことが仕事だ。

さて、どうやって時間をつぶそうかと思っていたら、ヘリの扉をたたく音がした。

「おつ……ファイル、ティアナ、どうした？」

「警備部隊の方から、お茶の差し入れをいただきましたんで、お届けに……」

「いいね……。ありがとうございます」

ファイルとティアナ、そして俺はヘリの外で一息を入れていた。

「失礼かと思ったんですけど、ヴァイス陸曹のこと少し調べちゃったんです。数年前までエース級の魔導師だったって」

「なんだそりや……。エースなもんかい。魔力値なんざお前の半分以下なんだぞ」

「それでも、アウトレンジショットの達人で、優秀な狙撃手だったと……」

「昔はどうあれ、今の俺は六課のヘリパイロットだぞ。お前が聞いて参考になる話はないぞ……」

「……………」

ティアアナはそれでも、俺の方を、じつと真剣なまなざしで見ている。

「だいたいお前は余計なことを考えている場合か!! ボケツとしているとまたミスショットで泣くぞ!!」

「……………すみませんでした」

「分かればよし、行け!!」

「はい……………」

ティアアナはその場を立ち去り、みんなのところに行った。

「じゃ……………。俺も行きますね……………」

「ファイル」

「……何ですか？」

「ありがとうございます……。余計な口挟まないでくれて……」

こいつは俺の過去を全て知っているが、それでも余計なことは言わないでくれた。一見冷たいように感じるが、こういうときはそつとしてくれる方がありがたい。

\*

\*

\*

「さて、じゃあそろそろわたしは中に入るよ」

東の空は白み、もうすぐ日の光が上ろうとしていた。

ナイトシフトから通常シフトに切り替わり、警戒態勢は更に強化されることになる。

「でね、内部警備のとき、デバイスは持ち込めないそうだから……。スバル、ギンガ、レイジングハートのこと、お願いしていい？」

「あ……は、は、は」

スバルが両手で、レイジングハートを受け取る。

本当なら、持ち込みしなかったんだけど、フィルやレジアス中将も、地上本部全部を説得するのは無理で、結局デバイスを持ち込むことはできなかった。

「前線のみんなで、フェイト隊長たちからも預かっておいてね……」

「は、は、は」

\* \* \*

朝になり、はやて部隊長、シグナム副隊長、そしてフェイトさんが合流した。

同様に聖王教会からも、騎士カリムとシスターシャツハが到着していた。



レジアス中將のように、すでに会場入りしている人も多く、現場は緊張感に包まれていた。

『公開意見陳述会の開始まで、あと三時間を切りました。本局や各世界の代表による、ミッドチルダ地上管理局の運営に関する意見交換が目的のこの会、波乱含みの議論となる事も珍しくなく、地上本部からの陳述内容について、注目が集まっています。今回は特に、兼ねてから議論の絶えない、地上防衛用の迎撃兵器、アインヘリアルの運用についての問題が話し合われると思われまます。陳述会の開始まで、ライブの映像と共に、実況を続けて参ります……』

\*

\*

\*

外回り ヴィータ、ライトニングF、ルーテシア、アギト

「始まりましたね」

「ああ……」

「ひとまず、何も起こらなそうな気配ですが……」

「油断すんなよ。しっかりと警備してろ」

「はい」

「ルール……どう思う？ 旦那のこと……」

「多分……。来ると思う……」

「そうだよな……」

旦那はずっと、レジアスのおっさんに会うことを考えていた。

旦那の体調も考えると、もう時間は残されてない!!

\*

\*

\*

「それにしても、どうなってやがるんだ……」

どうも気になり、あたしは建物内の警備にあたっていているのはに念話を飛ばした。

（どうしたのヴィータちゃん？）

（いまいち分からねえ。未来の通りに事が起こるとして、今回は内部のクーデターって線は薄いんだろ？）

（うん、間違いなくスカリエッティ一味が絡んでいるはずだよ）

（それにしても今回はファイルが、各方面に手を回しているから、そう簡単にはやられはしないだろうけど……）

（何か胸騒ぎがしやがるんだ。どうにもさつきから嫌な予感かしやがらねえ!!）

!!  
あれだけ、六課のみんなやファイルが対策を練ってあるつてのに、胸騒ぎが収まらねえ

（不安になるのは分かるけど、あんまり考えてもしようがないよ。信頼できる上司が命令をくれる、わたし達はその通りに動こう）

（……そうだな）

ここまでできたら、もう行動するしかないんだ。

\* \* \*

公開意見陳述会開始から四時間と少し。

太陽は大きく傾き、空は一面、夕暮れに染まっていた。

厳戒態勢の中、特に大きなトラブルもなく、事態は推移していた。

「……中の方も、そろそろ終わりね」

「最後まで気を抜かずに、しっかりやろう!!」

「はい!!」

「あれ、ギンガはどこに？」

「北エントランスに報告に行ってくださいませよ」

\*

\*

\*

時空管理局ミッドチルダ 地上本部から十数キロほど離れた上空

「連中の尻馬に乗るのは、どうも気が進まないが……それでも、貴重な機会ではある。今日ここで全てが片付くなら、それに越した事はない」

（レジアス……）

もうすぐだ。答えが分かる……。

\*

\*

\*

同時刻、スカリエツティラボ

「ナンバーズ、ナンバー3トールレから、ナンバー12デイドまで、全機配置完了」  
『ゼスト殿も、所定の位置に付かれた』

『攻撃準備も全て万全、あとはゴーサインを待つだけです』

前線指揮のトールレとクアットロから、報告が上がってくる。

これで出撃準備は、全て完了した。

「ふっふっふっふ、くくくく……あはははっ!!」

「楽しそうですね……」

「ああ……楽しいさ。この手で歴史の変える瞬間を、研究者として……技術者として、心が沸き立つじゃないか。なあ、ウーノ」

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我らの想いと、研究と開発の成果を。さあ……始めよう!!」

「はい」

私の号令と同時にウーノがパネルを操作しはじめ、各地に散らばっている私の娘達もそれぞれミツシヨンに入った。

さあ、始まりだよ。地獄へのカウントダウンがね……。

\* \* \*

### 中央管制司令室

「エネルギー反応……？？」

「おい、嘘だろ!？」

「通信管制システムに異常？ クラッキング!？」

「侵入されてます!!」

クラッキングされた地上本部は次々とシステムダウンが起こっている。

モニターも次々やられ、管制システムは次第に操作不能になっていった。

「こつちの通信機だけじゃないのか!! 通信システムそのものがおかしい!!」  
「緊急防壁を展開、クビラサーチシステム立ち上げ急げ!! ……まさか本当に、本部を狙ってくるとは……」

\* \* \*

「ふふっ……クアットロさんのI S、シルバーカーテン。電子が織りなす嘘と幻。銀幕芝居をおたのしみあれ!!」

ファイル・グリード。

あなたは色々手を打っていたみたいだけど、そんなもの何の役に立たないですわよ。  
私を甘く見ないことですわ。

\* \* \*



クラッキングのせいで司令部は大混乱と化していた。

そんな中、司令室の天井から、二本のハンドグレネードを持った、たおやかな女の手が生えてきたが……。

誰も気付く事など出来はずもなく……。

右手を開放すると、グレネードは重力に引かれて落下し、空中で弾けた。

小さな爆風に乗って室内に撒き散らされる麻痺性ガス。瞬く間にガスに巻かれた管制局員達は、なす術も無く、全員が等しくその場に倒れ伏した。

\*

\*

\*

地下動力炉

そこでは、灰色の地味なコートを纏った、長い銀髪の少女がひとり、人知れずたたず

んでいた。

身長は130センチほど、それに見合った幼い顔には、不釣合いな黒い眼帯がかけられている。

ISダイバーによる手引きを受け、侵入し潜伏していたナンバーズ5番、チンクだった。

彼女はどこからともなく、複数のスローイングナイフ・ステインガーを取り出した。彼女が両腕を振るうと、ステインガーは勢いよく空を切り裂き、そして回りの機械や配管に突き刺さる。

「IS発動、ランブルデトネイター」

かざした左手の正面に、黄色い環状テンプレートが発生し、同時にナイフの柄にも同様の環状のテンプレートが発生した。

そして、右手の指を鳴らすと……設備に刺さったナイフが爆発した。

\*

\*

\*

「防壁出力減少。デイエチちゃん、よろしく〜」

「IS、ヘヴィバレル……。バレットイメージ、エアゾルシエル」

脇に担いだイメースカノンの砲頭に、オレンジ色のエネルギーが収束し、弾頭が形成され、目標である時空管理局ミッドチルダ地上本部、中央タワーを完全にとらえていた。

「発射……」

凄まじいエネルギーの砲撃が、地上本部中央タワーに向かって飛翔し、僅か数秒でそれは着弾しタワーの壁を突き破った。

壁を貫通した事で弾殻から解放されたエネルギーは、空気と触れる事で反応を起こし、麻痺性のガスに変質され、着弾点近辺にいた局員は、ガスにやられて次々と倒れていった。

\* \* \*

陳述会が行われている大会議室にも砲撃の余波は届いていた。着弾の衝撃で部屋全体が揺れ、何事かとざわめく参加者たち。そんな中、儂の下には、部下が報告にやってきていた。

「何事だ……」

「多数の敵が攻めてきました!!」

「どんな連中だ?」

「度々出現の報告の上がついていました、ガジェットドローンです。数は無数……数え切れません」

「分かった。特殊部隊とその装備の方は?」

「万全です。いつでも出撃可能です」

上等だ。

地上本部の力、甘く見るでないぞ!!

「分かった。オーリス。俺も部隊と一緒に行く。ここは任せるぞ」

「……あまり無理はなさらないでくださいね。もう年なんですから……」

「うるさい!! まだ俺は現役だ!!」

まったく、俺はまだまだやれるわ!!

「会の中止はせんぞ。地上本部の防衛は鉄壁だ。進入など絶対させぬわ!!」

\* \* \*

「別に。中まで侵入する必要はな〜いもん。囲んで無力化しちゃうえば」

ガジェットなんて沢山あるんですし、10や20潰されたってどうってことありませんもの。

チンクちゃんがメインの魔導炉を壊してくれたから、残ったサブの魔導炉だけじゃ防ぎようありませんわ。

\* \* \*

### 大会議室

「閉じこめられたか!!」

「AMF濃度が高い。魔力が結合できなくなっています」

「通信も通らへん……やられた!!」

完全にやられた。

ファイルがこうなることは分かっていたから、事前に行っていてくれたのに……。相手の方が、一枚上手というわけやな……。

\* \* \*

「セツテ。お前は初戦闘だが……」

「心配御無用、伊達に遅く生まれていません……IS発動、スローターアームズ」

「ライドインパルス」

「アクション!!」

二人の戦闘機人は航空魔導師隊に接敵し、反撃など微塵も許さぬまま、次々と撃墜していく。

航空魔導師隊の戦力ではどうしようもなかった。

\* \* \*

持ち場の周りを片付けた俺達は、中央タワーに向かっていた。

「ガスは、致死性ではなく麻痺性……いま防御データを送る!!」

俺はプリムでガスの分析をし、副隊長達とフォワード全員のバリアジャケットに防御データを転送した。

「通信妨害が酷い。ロングアーチ!!」

『外からの攻撃は、ひとまず止まっていますが……中の状況は不明です!!』

くそっ!! 中の状況をつかむことが出来ない!!

グリフィスさん、六課の防衛と同時で大変だろうけど、何とかがんばってくれ!!

\* \* \*

「副隊長、あたしたちが中に入ります。なのはさんたちを、助けに行かないと!!」  
「待て!! スバルにティア!! それだったらこいつに乗っていけ!! サンダー!!」



俺はプリムのカーソルを押し、ロードサンダーをここに来させた。サンダーにはAIがあるので、オートコントロールは可能だった。

「これって……ロードサンダー!? あんた持ってきていたの!!」

「こういう事を想定してな……サンダー、本当の能力を解放するぞ!!」

ついにロードサンダーの本当の力を出すときがきた。

今まで温存してきたけど、今がそのときだ!!

《待ってましたよ!! このときを!!》

「ロングアーチ聞こえるか!! ロングアーチ!!」

\* \* \*

中の様子が分からない状態で手をこまねいていたとき、ファイルからのスクランブルが

入った。

『こちらロングアーチ!! ファイル、どうしたの!!』

「シャーリーさん。時間がありませんので、簡単に言います!! サンダーのオプションを転送してください!!」

『転送って……もしかして、マリーさんが話していたシステム!?!』

システム自体の説明は受けていたけど、いったいどうすればいいの!?!

「今からこつちがプロテクトを解除します。そしたら、そちらに解除レバーが出ますので、それを引いてください!!」

『分かったわ!!』

\*

\*

\*

「よし……やるぜ。ロードサンダー、ファイナルシステム。プロテクト解除。システムコード……スーパーサンダー!!」

俺はサンダーのカーソルを打ち、プロテクトを解除する。

それと同時に、ロングアーチから解除用のレバーが出たことを確認した。

「シャーリーさん、それを思いつきり引いてください!!」

『了解、ファイナルプロテクト、リリース!!』

ロングアーチからプロテクトを解除されると、サンダーのコンソールに次の文字が現れた。

『FINAL PROGRAM SUPER THUNDER』

よし、プロテクトは解除された。

後は――。

「よし、ティアア!! クロスミラーージュをセットしてくれ!!」

「えっ? どこにセットするのよ!!」

「差し込むスロットがある。一旦、デバイスをカード型にするんだ」

「わ、分かったわ」

\* \* \*

あたしはフィルに言われるままクロスミラーージュを差し込んだ。

次の瞬間、サンダーが白い光に包まれ光が収まったときには、全く違う姿をしていた。

普段の青い車体とは違い、白基調のペイント――。

後方には対空レーザー砲。

完全に戦闘用マシンじゃないの!!

「な、何これ!! 姿が全然違う!!」

「これが、俺とティアが機動力を増すために開発した戦闘用マシン。名付けてスーパーサンダーだ!!」

「……スーパーサンダー!?!?!?!」

「ティア、時間がないので、サンダーのスペックは移動しながら聞いてくれ。ちなみにクロスミラージュはもう出しても大丈夫だぞ」

ファイルに言われ、あたしはクロスミラージュをスロットから出した。

よかった。デバイスなしで戦うのかと思ったわ。

《相棒、こちらに向かってくる魔導師がいます。ランク推定は……オーバーSです!!》

「!!」

「……まさか」

「間違いないな……」

「旦那……」

\*

\*

\*

ルーテシア達も感じたんだろう。

これは間違いなくゼストさんだ。まっすぐこっちに向かってくる。

「リイン!!」

「はいです!!」

「そっちは、あたしとリインが上がる。地上はこいつらがやる!!……こいつらのことは、頼んだ」

「待ってくれ、あたしも連れてってくれ!! 旦那のこと、どうしても止めなきゃいけないんだ!!」

「ヴィータ副隊長、俺からも願います。おそらく、こっちに向かってくるのは、ゼストさんです。もしかしたらアギトなら止めることが出来るかもしれない。お願いします!!」

万が一のために、俺がレジアスの親父さんから預かったメッセージをアギトに渡す。

これが、ゼストさんが求める答えになるかもしれないから——。

「分かった。アギト、一緒に行くぞ!!」

「すまねえ。フィルの兄貴。ルーラーのことお願いするぜ!!」

「任せなつて!! 悪いが先に行くぞ!!」

俺とティアは副隊長達から、隊長達のデバイスを受け取り、中央タワーに向かった。一刻を争う以上、サンダーで走った方が早い!!

「リイン、ユニゾン行くぞ!!」

「はいです!!」

「ユニゾン・イン!!」

二人が融合すると、リミッターはかかっているが、相乗効果によって魔力が跳ね上がり、リイン曹長の影響で、深紅の騎士甲冑が白く変色した。

ヴィータ副隊長とリイン曹長、そしてアギトは接近する魔導師……。ゼストさんを止めるために飛翔した。

\* \* \*

「会議室や非常口への道は、完全に隔壁ロックされてるね。中との連絡が付かない」

「エレベーターも動かないし……外への通信も繋がらない」

「とにかく、ここでジツとしているわけにはいかない。ちよつと荒業になるけど、フエイトちゃん、つきあってくれる？」

「当然」

エレベーターの扉をこじ開けようとしている局員たち。

それを手伝うため、近付こうとしたとき、誰かに後ろから声をかけられた。

「なんだお前たち、まだこんなところにいたのか？」

「えっ？」

そこに立っていたのはシグナムだった。



どうなっているの？ 会議室の隔壁もしまっているはずなのに？

「シグナム、いったいどうやってここに!？」

「ああ、レジアス中將とその特殊部隊がこじ開けた」

「レジアス中將が？」

「ああ、たいしたもんだ。あの年とは思えないパワーだった」

シグナムが感心していると、レジアス中將が率いる特殊部隊がこつちにやってきた。メンバーを見ると、皆、屈強な男性ばかりだった。

「ん？ 何だ。お前達ここから行くつもりか？」

「は、はい……………」

「そっか……………。ここは儂がこじ開ける。お前達は下がってろ」

そう言ってレジアス中將は、エレベーターで作業していた作業員を下げ、エレベーターの扉に手をかけ……………。

「はああああ……うおおああああああっっ!!」

「無茶です!! この扉をこじ開けるなんて!!」

「そうです!! わたし達も手伝います!!」

「下がっていると云ったはずだツツ!! ここは僕の仕事だ。お前達はやることがあるだろ!!」

「レジアス中将……」

レジアス中将は、ここまで来る間に、かなりパワーを使ってしまったている。

いかに身体を鍛えているとはいえ、やはり年には勝てない。

いまの彼を支えているのは、プライドとフィルやティアナの事を思う親心。

ただそれだけ——。

でも、それが何よりも大切な思い——。

「僕を……舐めるなああああ!!」

掛け声と同時に、何か弾けたような乾いた音と共にロックが壊れ、エレベーターシャフトが姿を覗かせた。

「はあ……はあ……はあ……これで良いだろ……」

「う、嘘……」

「何をボケツとしておる。さつさといかんか!! お前達の部下は、外で必死に戦っているんだぞ!!」

「は、はい!! ありがとうございます!!」

中将の一喝に、慌てて敬礼すると、私達はエレベーターシャフトに飛び込んだ。中将は、必死で私達に道を作ってくれた。

その思い、決して無駄にするわけに行かない!!

「こんなの陸士訓練校以来だけど、いろんな事やっておくもんだね」

「だね!! 緊急時のルートは指示してある。目標合流地点は地下通路、ロータリーホール!!」

「うん」

\*

\*

\*

『こちら管理局。あなたの飛行許可と、個人識別票が確認できません!! 直ちに停止してください!!』

「ん? この声は……」

『それ以上進めば、迎撃に入ります!!』

警告を無視していると、眼下の雲海に、12の赤い光が浮かび上がり、こちらに向かって飛んできた。

空中で停止し、軸をずらして避けると、魔力を帯びた赤い光弾は上空に向かって通り抜けていった。

「くっ……」

「こちらも迎撃のため魔力弾を放ったが……。」

「実体弾か!! だがこの程度のもの!!」

「ギガントハンマー!!」

「何だと!!」

鉄球の防御しながらじゃこいつを防げないだろ!!

グラーフアイゼンが直撃し、圧縮された魔力が炸裂するが……。

（はずしたです!! 相殺と防御で防がれました!!）

「ダメージは通った、続けてブツ潰す!!」

多少の手応えはあったものの、決定打というには程遠かった。

白煙が晴れると、男は静かに佇んでいた。依然として健在だ。

（ヴィータちゃん……）

「ああ……とんでもねえな」

「二人とも気をつけろ。ゼストの旦那は身体がボロボロでも、実力は半端ねえぞ……」

「……アギトか」

「旦那……」

あんなに体がボロボロのはずなのに、今の旦那を動かしてるのは、レジアスのおつきんに会いたいという思いだけ――。

「アギト、今は下がってろ……。管理局機動六課、スターズ分隊副隊長、ヴィータだ!!」  
「……ゼスト」

\*

\*

\*

地上本部中央タワーに突入し、俺たちは合流地点の地下通路ロータリーホールを目指して移動していた。

先行していた俺とタイヤだったが、サンダーが接近する異変を察知する。

《相棒!!》

「サンダー、プロテクションだ!!」

《Protection》

脇からのエネルギー弾は対応できたが、間髪入れずに本命の攻撃……本人による蹴りがきた。

「あぶない!!」

スバルが間に合い、その蹴りを受け止めたが、強烈な回し蹴りだったため吹っ飛ばされてしまった。

「スバル!! くっ……これは!？」

た。エリオ達も合流していたが、いつの間にか俺たちの周りにはエネルギー弾に囲まれてい

「ノーヴェ、作業内容を忘れてないツスカあ？」

「うるつせえよ、忘れてねえ」

「捕獲対象三名、全部生かしたまま持つて帰るんすよ？」

「旧式とはいえ、タイプゼロがこれくらいで潰れるかよ……」

「戦闘……機人か……」

「ふふん……あれ？ ルーお嬢様もいつしよなんすね」

「……ウエンディ……」

まづいな……。

こうしている間も地上本部は破壊されている。

「……ティア、ここは俺に任せてみんなを引き連れ、なのはさん達と合流しろ」

「何言ってるのよ!! 無茶よ、あんた一人で!!」

「良いから行け!! 今俺たちがすべきことは何だ!! なのはさん達に一刻も早くデバイ



スを届けることだろ!! 心配するな、こいつらなら俺だけでもどうにか出来る!!」

なのはさん達がやられてしまったら、何もかもがお終いだ。

今は、一刻も早く合流しなければ――。

「ファイル……」

「へえ……そいつは聞き捨てならないっすね。あんただけであたし達を相手にするって  
いうんすか」

「お前らなら、俺だけで十分だって言ってるんだよ」

「なんだとコラ!! 舐めるのもいい加減にしやがれ!!」

しめた、二人の意識がこっちに向いたぞ。

これでティア達はフリーになる。

（ティア、あいつらの意識が俺に向いてる間に急げ!!）

（……分かったわ。絶対死ぬんじゃないわよ!!）

（……ああ……みんなのこと頼んだぞ）

「スバル、エリオ、キャロ、ルーテシア、ウイング開くから、サンダーに飛び乗って!!」

ティアはサンダーのウイングを展開し、エリオ達の足場を作った。

スーパースンダーは、多人数で任務をこなす用に作っているのでこういったことも可能だ。

「うん!!」

「はい!!」

「分かった……」

「行け!! ティア、みんなを頼んだぞ!!」

エリオ達が飛び乗ったのを確認すると、全速力で合流地点に向かった。

\*

\*

\*

戦指揮所のロングアーチでは、地上本部内部の状況は相変わらず掴めていない。回線が復旧するまで外部への警戒をしていたが……。

「そんな……高エネルギー反応二体、高速で飛来!!」

メインスクリーンでは、エネルギー反応を示す光点が、かなりの速度で六課に向かって移動している。

「こっちに向かってます!!」

「待機部隊、迎撃用意!! 近隣部隊に応援要請!! 総員、最大警戒態勢!!」

まずい、今六課には主力部隊はいない。

いくら、防衛設備を強化したとはいえ、ここで襲撃を受けたらひとたまりもないぞ。

『バックヤードスタッフ、避難急いでください!!』



## 第19話 その日、機動六課（後編）

「はああああ!!」

「やああああ!!」

現在、ヴィータと旦那が交戦中なんだけど、ユニゾンしているヴィータ達と互角に戦っている。

だけど、こうしている間も旦那の身体はどんどん蝕まれている。

このまま戦って、もしフルドライブなんて使ったら……。

「旦那、もうやめてくれよ!!」

あたしはいても立つてもいられず、戦っている二人を止めた。

「アギト」

「下がってろって言ったろうが!!」

『そうです、今は私たちに任せてください!!』

「二人とも悪い……。これはあたしがしなきゃいけないんだ。ファイルとレジアスのおっさんのメッセージを伝えるのは……」

「どういう事だ?」

あたしの言葉に旦那も気になり、デバイスの構えを解いた。

ヴィータ達も戦闘目的じゃないので、グラーファイゼンを下ろしている。

「これを……。見てくれないか」

「これは?」

「あたしが世話になっているやつからの手紙さ」

旦那が手紙を受け取り、その内容を見ると旦那の顔が一変し、驚きを隠せないでいた。

「アギト、この内容に嘘はないんだな……」

「……ああ、ファイルがレジアスのおっさんから、預かってきたものだって言ってたからな」

「そうか……」

「旦那……それには何が？」

「ああ……俺の求める答えが書いてあったよ。そして、レジアスの後悔もな……」

『儂とお前があのとときに交わした正義は今でも持っている。それは失ってはおらん。儂は表面上は最高評議会に従うフリをしながら、水面下で、戦闘機人計画が潰れるような工作と、それに変わる計画を、地道に、そして慎重に進行させていた。だが信用できるのは自分しかない状況で、お前まで巻き込みたくなかった。結果、お前も部下を失わせることになってしまった。本当にすまない……。直接話したいが、おそらく儂は、今後自由はきかなくなるだろう。その前にせめてこの手紙を託す。 レジアス・ゲイズ』

「アギト」

「なんだい、旦那？」

「投降しよう……。レジアスの真意が分かった以上、もう意味がない。それに……」

「もう……。身体が持ちそうもないから……」

「旦那……」

こうして旦那は機動六課に投降することになった。

\*

\*

\*

「ちいいい……こいつ、ちょこまかと!!」

「ウエンディ、こんなやつさつさと仕留めよう!! てやあ!!」

真後ろからの蹴り、あの野郎は気づいてない。

これで決まりだ……。

「ふっ……」



決まったと思った瞬間、蜃気楼のように姿が消えてしまった。

「なにい!!」

「幻影? ええっ!! 嘘っ!!」

現れたのは数十人ものフィル・グリードの姿。

しかも幾つかは質量もあり、余計に判別がつきにくい。

\* \* \*

《マスター、相手は完全にこっちの思惑にはまりましたね》

「ああ、ああいうタイプは焦らせば、絶対あっちから仕掛けてくる。そのときがチャンスだ」

《ですね……。それじゃ一丁やりますか》

仕掛けは済んだ。後は獲物が罠にかかるのを待つだけ――。

さあ、今度はこっちの番だ!!

\* \* \*

「あたしらを騙すって、こいつ戦闘機人システムのこと把握している!？」  
「幻術だろうが何だろうが、要は全部潰せば良いんだろが!!」

あたしはこの幻影どもをぶつつぶすため突撃した。  
全部潰せば関係ねえ!!

「見つけたぞ!!」

幻影は全部消した。もう逃げ場はねえ!!

「……掛かったのはお前の方だ!!」

「何!! なんだこれは!!」

あたしが突撃した瞬間、地面から無数の鎖が現れ、あたしの身体に巻き付く。しかも能力封じの処理が掛かっていて、脱出できねえ!!

「ノーヴェ!! って、あいつがいない!!」

「どこだ、どこにいるんっすか!!」

「(ハ) (ハ)だよ!!」

次の瞬間、すでにデバイスに高密度の魔力を集束したファイル・グリッドが真正面に現れる。

そんな、直前まで何の反応もなかったのに!!

「くっ!! 防御、間に合うっすか!!」

「遅い!! プラストブレイザー!!」

気が付いた時には、白銀の砲撃があたしに叩き込まれていた。

「きやああああ!!」

\* \* \*

至近距離から、ブラストブレイザーを喰らったウエンデイは動けなくなり、戦闘不能になる。

すぐにストラグルバインドで動きを封じ、向こうも観念したのか抵抗はなかった。

『ノーヴェ、ウエンデイ』

「チンク姉!!」

『お前達、やられたのか!!』

「残念だったな。こっちは押さえさせてもらった」

『くっ!!』

よし、これでこいつらがあつちの応援に行くことはなくなった。

前の時は3人がかりで、ギンガさんがやられてしまったからな。

\* \* \*

合流地点 ロータリーホール

「ここで合ってるはずなんだけど……」

「ええ……なのはさんに言われたのってここでしたよね」

「間違ってるはずだよ」

「もしかして……あちらでも何かあったんでしょうか？」

「その可能性は十分ある……」

スーパーサンダーのおかげで、あたし達はすぐにここに来ることが出来た。でも、まだなのはさん達が来ていない。

「ティアナ、スバル!!」

「エリオ、キャロ、ルーテシア!!」

「なのはさん、フェイトさん!! 無事だったんですね!!」

「わたしたちは何とか……ファイルはどうしたの?」

「まさか!!」

「ファイルは……あたし達をここに行かせるために、たった一人で戦闘機人二人の相手を

……」

「!!」

たった一人で、戦闘機人二人を相手にするなんて無茶なのはわかっている——。

でも、ファイルはそれでもあの場に残ってくれた。

あたし達を信じて——。

「なのはさん、これを!!」

「済みませんが、あたし達は急いでファイルの所に戻ります!!」

「デバイスをなのはさん達に渡した以上、急いでフィルの元に戻らなきゃ!!」

「ギン姉……ギン姉!!」

「どうしたの？スバル!!」

「ギン姉と通信が繋がらないんです!!」

「……おそらく……あたし達が交戦したあいつら以外にもいるのよ」

敵だつてかなりの戦力をつぎ込んできている。

別働隊がいたつて不思議じゃない。

「ギン姉……。まさかあいつらと!!」

「それはないわ!! 少なくともあの二人は、フィルが命懸けで押さえてくれてるんだから!!」

「もしかして……フィル。やられちゃったんじゃないか」

「何ですって……」。

「やっぱりフィル一人じゃ無理だったんだよ!! それであいつらがギン姉の方に!!」

——ふぎけないで。

あいつが今、どんな思いで戦ってると思ってるのよ!!

「スバル!!」

あたしはスバルの頬を思いっきりひっぱたいた——。

「あっ……」

「今の台詞……もう一度言ってみなさい……」

今の言葉だけは絶対許さない!!

あいつは……：フィルは、あたし達のために今も必死で戦っているのに!!  
自分が傷つき、ボロボロになりながらも戦っているのに……。

あたしはスバルの胸ぐらをつかみ、さらに怒りをぶつけた——。



「ファイルはね……あたし達を行かせるために今も必死で戦ってるのよ!! 今の言葉はあいつの気持ちを踏みにじるものよ!!」

さらに、普段はこういつたことは言わないキャロも……。

「スバルさん、お姉さんのことを心配する気持ちは分かります。でも、ファイルさんのことも考えてください!! わたし達のために、あそこに残ってくれたファイルさんのことも……」

「キャロ……」

「……ごめん……でも、ギン姉が!!」

ギンガさんのことが心配なのはわかるわよ。

だけど、仲間を信じられないのは、それはファイルに対してもあたし達に対しても冒涇だ。

「ロングアーチ、こちらライトニング」

『ライトニング1、こちらロングアーチ』

「グリフィス、どうしたの？ 通信が」

『こちらは今、ガジェットとアンノウンの襲撃を受けています、持ちこたえていますが、もう……』

外の状況を確認したくて六課に通信したが、ノイズが酷くさらにあつちも大変なことになっていた。

「ここでじっとしていてもしょうがない。スターズはフィルとギンガの安否を、ライトニングはフェイトちゃんと一緒に六課に戻る。ルーテシアは、八神部隊長にデバイスを届けほしいライトニングに合流!!」

「「「はい!!」」」

「スバル、ギンガのことが気になるかもしれないけど、今は目の前のことに集中して!!」

「……はい」

「ティアナ、スバルのことはわたしが見るから、ティアナはそのバイクで一刻も早くフィルと合流して!!」

「はい!!」

スターズはなのはさんとスバルがギンガさんの方へ、あたしがフィルの方へ向かうことになった。

\* \* \*

「はあ……はあ……さすがに戦闘機人二人はきつかったな……」

《戦略を立てるクアットロがいなかったですからね。これで綿密に動かれていたらアウトでしたよ》

「あと、戦闘経験がなかったのが幸いだった」

ウエンデイとノーヴェのBCCを取り除いた俺は、少し休憩をしていた。

固有武装は破壊してるので心配はない。

さすがに戦闘機人二人を相手にするのはきつかった。

これで戦闘経験が豊富でもっと緻密な戦い方をされてたら……。

「おい……」

「ん、何だ？」

「何で、あたし達を殺さないんだ」

「そうつすよ。あんた達にとってあたし達は敵以外の何者もないんつすよ!!」

彼女たちが言うことは分かる。

あっちの世界にいたときは、こいつらは敵以外の何者の無かった。だけど……。

「……お前らが言いたいのは、なぜ殺さないかって事だよな」

「そうだ (つすよ)」

「そうだな……。理由はクアットロ以外のお前らは、わかり合える気がする。そんな気がしたからかな……」

「どういふことつすか？」

これは、ドゥーエを元に戻したときからずっと思っていたことだ。

全員ではないが、彼女たちは優しい心を持っていたのではないかと――。

「まあ、・BCCを取ったから分かんと思うけど、お前らは今、人を傷つけたりしたいと思うか？」

「いや、思わないです。元々あたしは楽しければいいやと思ってやっていただけですわ」

「あたしも同じだ。強いやつと戦いたいと思うが、弱いやつ相手に暴力をふるう気はねえよ」

やっぱりな――。

こいつらは操られていたに過ぎない。戦っていてそれがよくわかった。

「だろ、そう言うことだ……」

「あきれたっすね……。もし違ったらどうするんすか」

「多分大丈夫だろうと思っただよ。ドゥーエもそうだったしな」

「ええっ!!」

「嘘だろ!! ドゥーエ姉といったらあたし達の中でも冷酷無比なのに……」

「今度会ってみろ。今じゃユーノさんの片腕だぞ。もつとも普段はユーノさんが尻に敷かれてるがな……」

驚くのも無理内よな。

というか、俺が一番驚いたんだからな……。

「尻つて……ぶぶつ……ドゥーエ姉らしいな!!」

「あははははっ、それまじっすか!!」

「大マジだ。つていうか、あれがドゥーエの本当の性格だと思うぞ。好きなやつには尽くしているし……気づいてないのはユーノさんだけだぞ……」

「何度聞いても信じられねえ……。あの冷酷無比な姉が……」

「俺だって最初は信じられなかったさ。あのドゥーエだぞ」

「確かに!!」

この二人に納得されるつてことは、やっぱり今のドゥーエとギャップがあるんだろうな。

「でも、あんた本当におもしろいっすね。あたしはウエンディ。あんたの名前は」  
「俺はフィル・グリードだ」

「あたしはノーヴェ。確かにおもしろいよ。お前は……」

「なんだよ、それ……」

「「あははっ!!」」

本当、あつちじゃこんな光景考えられなかったよな。

俺たちがこいつらとこんな馬鹿話をするなんてな……。

ウエンディ達と話していると、ティアが全速力でやってきた。

「フィル!!」

「ティア……心配してくれたのか?」

「当たり前でしょう!! 二人を相手にしたんから……でも、無事でよかった」

「心配かけたな……でも、もう大丈夫だ」

ティア、本当にありがとう……。……。

お前がみんなを引っ張ってくれているから、俺も安心して単独で行動できるんだ。

「ティア、スバル達は？」

「ライトニングはフェイトさんと一緒に六課へ戻ったわ。ルーテシアも部隊長にデバイスを届けたら、ライトニングに合流するわ。スバルは……」

「ギンガさんが気になって、単独先行したという訳か……」

「なのはさんが一緒についてくれていますが、多分あの子暴走するわ……」

予想通りの行動って訳か。

たった一人の姉だから心配するのはわかるけど――。

「つたく……。ティア、俺たちもスバルを追うぞ」

「ええ、でも、こいつらはどうするの？」

「ここにほっておくわけにはいかないから、一緒に来てもらう」

戦闘機人二人をここにおいていくのは危険すぎる。

もしかして仲間が回収すると言うこともある。



「いいっすよ。元々私達はもう、つかまつてるんっすから」

「ああ、それにチンク姉のことも気になるしな」

「ノーヴェはチンク姉にべったりですもんね」

「うるっせえよ!! ウエンデイ!!」

「あんた達、喧嘩なら後でにしてよね。今は急ぐから……」

「ごめんっす……」

「わりい……」

「とにかく急ぐぞ。サンダー、ギンガさんの位置は」

《ここからすぐ近くにいます。最短ルートで向かいますよ!!》

俺たちはサンダーのエンジンを全開にし、ギンガさんの元に向かう。

スバル、俺たちが着くまでなのはさんの指示を守ってろよ。

\* \* \*

## 機動六課 隊舎

「……たった二人でよく守った。だけど、もう終わり。僕のI.S、レイストームの前では、抵抗は……無意味だ」

天に向かって右手を掲げると、その手のひらの上に、足元のテンプレートと同じ緑色に輝く、球状テンプレートが発生した。それは眩いばかりの光を放射し、無慈悲に六課の隊舎へと降り注いだ。

「クラールヴィント、防いで!!」

防御結界のおかげで、隊舎への攻撃は防げてる。

ファイルが事前に、私とザフィーラのリミッターを消去してくれたおかげね。

「シヤマル、このままじゃやられる。一か八か……」

「待って、このまま攻撃させて」

「何を言ってるんだ。このままじゃお前が持たないぞ!!」

「いいのよ……。あつちはこれだけの攻撃をするのに、かなりの力を使っているわ」

これだけのエネルギーを使った攻撃。してる最中、もしくはその直後は完全に無防備になる。

昔、なのはちゃんがスターライトブレイカーを打った直後、私にリンカーコアを抜き取られて時みたいに……。

「シヤマル、お前、まさか!？」

「二度と使いたくなかったんだけどね……。でも、やるわ。みんなを守るために、そして……」

かわいい弟分を……。

フィルの大事なものを守るために……。

「シヤマル……分かった。俺はもう一人のやつを押しさえる」

この状況圧倒的に不利に見えるけど、この二人さえ抑えればどうって事無い。それにこっちはリミッターは無い。100%で戦える!!

「いくわよ、クラールヴィント」

《ja》

私はクラールヴィントの石を分離させ、ペンダルフォルムに変形させた。覚悟しなさいね……。

「旅の鏡!!」

「うわああああ!!」

その胸から出てきたのは、戦闘機人のリンカーコアとも言うべきもの。

「オットー!!」

「貴様の相手は、俺だ!!」

「くっ!!」

「鋼の軛!!」

周りに現れた鋼の軛は、致命傷は負わせられなかったが、防御障壁は完全に砕くことは出来た。

ザフィーラのねらいは最初からこれだった。

「今だ!! やれ、シヤマル!!」

「いくわよ!! コア抽出!!」

「ぐっ……があああ!!」

さすがにきついわね。両手で二人のコアを一気に抜いているんですもの。

でも、これを抜いてしまえばもう終わりよ!!

「エネルギー結晶体抽出……そのまま眠りなさい!!」

私は両手に魔力を纏わせ、両手のひらの中のエネルギー結晶体を、力の限り容赦なく握り潰した。

「……何とかなったな」

「ええ……もう二度と使いたくなかったんだけど……」

「これはあのとき封印したものだだった。」

「はやてちゃんの騎士として、生きていくと決めたときに……。」

「この二人……意識は失っているが、命に別状はないみたいだな」

「命までは奪う気はないですもの。この子達だつて操られているだけですもの」

「そうだったな……シヤマル、BCCを抜いた後、治療魔法をかけてやれ」

「そうね……」

\* \* \*

炎上する隊舎内では、ロングアーチスタッフや、逃げ遅れたバックヤードスタッフが、

救助を信じて待ち続けていた。ほんの数人、交代部隊の魔導師が残っていたが、取り巻く炎や煙からスタツフの身を守るのが手一杯で、とても反撃に移れるような状況ではない。

「オーケー、まだ撃てる!! 腕はまだ鈍っちゃいねえ!!」

戦えるやつがほとんど残っていないが、なんとかやってみせる!!  
あいつらだって、今、必死に戦ってるんだからな……。

\* \* \*

六課に向かっていている私はエリオ達と一緒に急行していた。  
だが突如、正面の空域に閃光が浮かび……。

《Sonic Move》

異変を察知した私は、射線上に躍り出て半球型のバリアを展開した。と同時に、桃色のエネルギー弾がバリアに当たって弾け飛んだ。

「……戦闘、機人」

視線の先には、二人の戦闘機人。

どうやら、攻撃してきたのは見慣れないあいつの方……。

「エリオ、キャロ。先に行つて!!」

「でも、フェイトさん……」

「すぐ追いかける。行つて!!」

エリオ達がここにいたら、間違いなくそつちをねらつてくる。そうなつたらやられるのはこつち……。

「……フリード!!」



「あっ……エリオ君!!」

「空戦で、アウトレンジで撃てる相手がいるんだ。フィルさんならともかく、僕たちがここにいたら、フェイトさんが全力で戦えない」

「……うん」

「バルディッシュ、サードフォーム!!」

《Z a m b e r F o r m》

バルディッシュがハーケンからより、近接戦闘に特化されたザンバーに姿を変えた。紫電を帯びた金色に輝く刃を構え、私は対峙した。

\* \* \*

「フィル、もつと急いで!!」

「落ち着け!! これだけ乗ってるんだ。これ以上は無理だ!!」

今サンダーに乗っているのは、スバルとティア、それにウエンディとノーヴェの計5人だ。

なのはさんは地上に戻り、ガジェットの掃討に向かった。

「じゃ、あたしが先に行くよ!! ギン姉が!!」

「少しは頭冷やせ!! 例えお前が先に行っても、ギンガさんが苦戦している相手なんだ。やられるのが関の山だ!!」

「でも!!」

「そんなカツカした状態じゃ悪いけど、フォワードのリーダーとして任務に参加させたくないわ……」

「ティア……」

スバルには悪いが、ティアの判断は正しい。

今のスバルは判断力が欠いてしまっている。

俺もサンダーを全速で飛ばし、長い廊下を駆け抜け、ホールに出ると、そこには……。

\* \* \*

「う……嘘でしょ……ギン姉!!」

「チンク姉!!」

「ギンガさん!!」

俺たちの前にあった光景は、ギンガさんと戦闘機人のチンクが、互いにずたぼろの状態であつたのだ。

正確に言うと、倒れているのはチンクの方だけで、ギンガさんはその場に立っていたのだ。

しかも……。

「ギン姉……。ちよつと雰囲気怖い……」

「ああ……。ごめんね。ちよつと……」

見ると、ギンガさんの目は金色になっていた。

「ギンガさん、その目は!!」

金色の瞳、その中には戦闘機人の証、魔法陣状のテンプレートが浮かび上がっている。

\* \* \*

「え? ああ……体術なら、機人モードの方が強いから」

私はもう戦闘機人であることに對する忌諱など無い。

だけど、今でこそそうだが、昔はスバルも私もかなり辛い思いをした。

そのことを無くしてくれた切っ掛けは、スバルの訓練生時代、パートナーに秘密にしているのが耐えられなくなって、スバルは決死の覚悟で二人に打ち明けた。

だけど、二人はだからなんだと言わんばかりの態度だった。

クローン等、人造生命体に対する偏見は決して少ないわけではない。

だけど、ファイルもティアナも、相方がクローンだろうが何だろうが、本気でどうでも良かったのだ。

それをスバルから聞いて、凄く嬉しかった。

そして、それは私に対してもだった。

ファイル曰く

『人造生命体だからとか、そんな些細な事で人の見方を変える奴の気が知れない。そんなこと言う方が腐ってるよ……』

ティアナに聞いても、ほとんど同じ答えが返ってきた。

私とスバルは、この二人に本当に救われたのだ……。

「派手にやりましたね……」

「まあね……。相手が強かったんで、私も全開にならないと対処できなかったから……」

「通信にでられなかったのは、機人モードになっていたからなんです」

「そういうこと、このモードの時って、通常の通信機器とか全部駄目になっちゃうから……」

「ブリッツキャリバーでなら可能ですけどね」

「ちよつと余裕もなかったし、でもＢＣＣも解除済みだからもう大丈夫よ」

だいぶ苦勞したけど、当面は大丈夫のはずよ。

\* \* \*

「そのおかげでスバルが大変だったんですよ。ギン姉が、ギン姉がつて」

「そうですよ。もうティアやなのはさんの命令も効かないし、大変だったんですよ」

「ちよつと、ティア、フィール!!」

「スバル……」

「は、はい!!」

あつ、ギンガさんが怒りモードになった。

しかも機人モードの状態で、スバルの頭に拳骨をした。

「いったあああ……」

「まったく、あれほど戦闘中は冷静になりなさいっていつてるのに、さらにフィルやティアナの言うことまで無視して!!」

「ごめんなさああい!!」

「謝る相手が違うでしょう!! ティアナとフィルにちゃんと謝りなさい!!」

「ティア、フィル、本当にごめんなさい……」

「……スバル、今回あんたは、してはいけないこともしてる。あんたは暴走しすぎて、フィルのことまで信用してなかった」

「うん……」

仲間を信用できないって事は、戦場では命取り。

戦いつてのは前方で戦うだけじゃない。今回のフィルのように、後方で食い止めてくれる役目があるから安心して戦えるのよ。

「何の話だ?」

「……あんたが一人でこいつらを食い止めていたときの事よ。ギンガさんのことであん

たのことを信じていなかった」

「まあ、そう思ってもしょうがないだろう。実際かなり無茶だったしな」

「だけど、あたし達を信じて、あの場に残ってくれたあんたを信じなかったのは、正直許せなかった!! それはキャラも同じ気持ちよ!!」

あのととき、キャラだつてもつと言いたかったのよ。

だけど、あたしが代表していっただけのこと——。

「ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

あたしの言葉に、スバルはただ泣きじやくつていた。

自分のパートナーを信じられなかったこと。

自分の行動で、仲間を危機にしそうになったこと。

そう言った感情で、スバルの頭は混乱状態になっているのはわかるから——。

「ごめん……あたしも言い過ぎた。でも、これだけは分かつて。パートナーを信じられなかったら、一緒に戦うのは無理だつてことはね。ファイルはあたし達を信じていたから



「こそあんな事をしたの。なのはさん達にデバイスを渡して、戻ってきてくれるって信じてね」

「……本当に、ごめんなさい」

「スバル、あまり自分を責めるな。ギンガさんが心配だったのはわかるから……な……」  
「うん……」

\* \* \*

「チンク姉、チンク姉!!」

「ノーヴェ……ウエンデイ……お前達無事だったのか。フィル・グリードと戦って……」

「その……フィルがあたし達を助けてくれたんっすよ」

「どういう事だ？ そういえばノーヴェも」

「チンク姉、わりい。完膚無きまで叩きのめされた……」

「多分、フィルが回復魔法をかけたんでしょう……」

「「「タイプゼロ!!」」」

「その呼び方はやめて欲しいんだけど、一応ギンガ・ナカジマって名前があるのよ」

その呼び方は止めてほしいな。

私はゲンヤ・ナカジマの娘なんだからね。

「そうだったな。すまん……」

「やけにあつさりしてるわね……」

「……あれだけお前に叩きのめされれば、嫌でも従う……」

「あ、あははは……」

ちよ、ちよつとやり過ぎちゃったかな……。

周りの壁や柱を見ると、所々破損の後がある。

しかもここって地上本部よね。

修理費、経費で落ちるかしら……。

「……まったく、とんでもないパワーだな。てつきり機人の力を使うことに抵抗がある  
と  
思  
っ  
て  
い  
た  
の  
に  
……」

「昔だったらすうでしようね。でも、私とスバルは、フィルとティアナのおかげで、自分らしく生きられるようになったの」

そうでなかったら、きっとスバルも私も、仮面をかぶって生きていたから――。

「フィル・グリード……か。うらやましいな。私達も、もう少し早く出会いたかったものだ」

「チンク姉……」

「別に今からでも遅くないわ。あなたたちが私達と手を取り合う気持ちがあるならね」

「えっ?」

「フィルもティアナも、人造魔導師だから何? 戦闘機人だから何? そんな感じよ。」

あの二人は

「そっか……」

あの二人は本当につらい経験をしてきたから、人の心の痛みを理解することができ  
る。

そして、フィルは沢山の死別を経験してきたから――。

「私も……お前達の仲間になれるだろうか……」

「ええ、チンク」

「ギンガ……」

チンクが差し出した右手をつかもうとしたとき……。

『あーら、そんな簡単にハッピーエンドにはさせませんわ』

声と同時に背後から、ガジェットが現れ、私は背中からザツクリ切られてしまい――

「ギンガ!!」

「「ギンガさん!!」」

「ギン姉!!」

\* \* \*

ギンガさんが謎の敵にやられたことに気づき、俺たちはギンガさんの元に駆け寄る。

「誰だ!!」

「あそこつす!! あれは……IV型つすよ!!」

「ギン姉!! ギン姉!!」

「……大丈夫よ……これ……くらい……」

「ギン姉!!」

「……これは!? くそ!! 刃に毒が仕込んであったんだ!!」

ギンガさんの傷は明らかに致命傷だ。

俺が治療魔法をかけているが、それでもギンガさんの容態は刻々を低下している。

『うふふのふふ。ファイル・グリード、いかがかしら、ホツとした一時から一気に絶望を味わうのは』

「クアットロ!! きさまあああああ!!」

『その傷では助かりませんわね。ルーお嬢様か、あのピンク髪のおチビちゃんがいたら、ちよつとは違つたんでしようけど』

確かに、補助のスペシャリストは二人とも六課に向かっている。

この状況じゃどうしようもない……。

『あつ、それとあなたたちに捕まってしまった出来損ない達はいつでも良いですわ。もういらぬいですし。まあ、せいぜいそのポンコツが死ぬまで、己の無力を嘆くと良いですわ。おっほほほほほっ!!』

「クア姉!!」

「クアットロ……」

その言葉を残しガジェットは姿を消してしまった。

クアットロ、どこまで腐ってやがるんだ。

自分の姉妹を使えなくなったら、ゴミ同然に扱うなんて。

「フィル、このままじゃギンガさん本当に死んでしまうわ!!」

「ティア、治療魔法使えるか!？」

「使えると言つても、最低限のものよ……」

ティアも一緒に治療魔法を使うが、ギンガさんの生命力がどんどん低下している。

治療魔法が追いついてない……。

どうする、このままじゃ本当に死んでしまう——。

残された手は……ただ一つ!!

「こうなったら……俺がギンガさんに魔力を与えて、ギンガさんの生命力を上げるしかない……」

「無茶よ!! あんただって、もう残り少ないのよ!!」

「心配するな。魔力を全解放すれば大丈夫だから……」

「フィル……あんた……」

俺の中にあるフェイトさんの魔力を全解放して、ギンガさんに注ぎ込む。もうこれしか、ギンガさんを助ける手段はない!!

俺は両手に魔力を集め、同時にティアが治療魔法を再開し、そして、ギンガさんの身体に集めた魔力を注ぎ込んだ。

「うっ……あっ……」

魔力を注ぎ込むと、ギンガさんの顔色が少しずつだがよくなってきた。

「くっ……うっ……はぁ……はぁ……」

「フィル!!」

「もう少しだ……もう少しで……」

《マスター、これ以上は危険です。マスターの魔力も、もう限界です!!》

さつきノーヴェ達と戦って、基本魔力をほとんど使ってしまったからな。

でも、まだ足りない。

切り札としてフェイトさんの魔力は残しておきたかったけど、そんなことは言ったら



れない。

こうなったら、全部注ぎ込んでやる!!

「くっ……あっ……」

「ファイル!!」

ギンガさんに魔力を渡して、殆ど使い果たしてしまった俺は、その場でよろけてしまった。

バリアジャケットを保つのもきついくらいだ。

\* \* \*

「大丈夫……だ……それより……ギンガさんは……」

「ぐす……大丈夫、ギン姉は助かったよ……ぐす……」

「泣くなよスバル。ギンガさんは助かったんだから……」

「そう……だね……」

血色もよくなっている。

まだ、予断は許さないけど、これなら大丈夫よ。

『それはどうかしらね』

「なに!!」

声と同時にフィルの背後に現れたガジェットは、フィルを背中から刃で貫く。

魔力を殆ど使い果たしていたフィルはバリアジャケットの強度も弱くなっていた。

「フィル!!」

「がはっ…………ぐっ…………」

『おっほほほほほほっ。引つかりましたわね。フィル・グリード』

「クアツ…………トロ…………」

『元々、そのポンコツはどうでもよかったですの。最初からあなたを始末するためでしたのよ』

なんてやつなの——。

本当に心の底から腐ってるわね!!

「クア姉!! そこまで腐ってるのかよ!!」

「そうっす!! クア姉、最低っすよ!! 人の心をもてあそんで!!」

「クアットロ、そこまで外道に落ちたか!!」

「フィル、しっかりして!! お願い、気をしっかり持って!!」

——  
駄目だ。

あたしの付け焼き刃程度の治療魔法じゃどうしようもない。

せめてルーテシアかキヤロがいてくれれば……。

「ファイ、ル……ギン、姉……」

「スバル?」

スバルの方を見るとエメラルドグリーンの瞳が、金色に書き換わっていた。

「……よくも……」

「よくも、ギン姉とファイルを!!」

「待ちなさい、スバル!!」

怒りに狂ったスバルはガジェットに殴りかかっていた。

ガジェットがシールドを張るが、スバルはひたすら殴り続ける。

拳が血まみれになりながらもやめようとしなかった。

『無駄ですわ。ゼロ・セカンド。あなたのIS、振動破砕でも、そう簡単にはこのシールドは貫けませんわ〜』

「黙れ、黙れ、黙れええええ!!」

怒りの攻撃は次第にシールドを破壊し、スバルの拳はガジェットをとらえた。

次の瞬間、ガジェットは自爆しようとした。

《Protection》

間一髪、マツハキヤリバーがプロテクションを張ったおかげで死なずに済んだが、マツハキヤリバーはシステムダウンしてしまい、スバルもバリアジャケットはボロボロになり、左腕からは機械部品が見えているほど重傷を負っていた。

「うつ……うつああああああ!!」

「スバル……」

——最悪よ。

みんな……みんなやられてしまった。

なにがフォワードのリーダーよ……。

誰一人、守れなかったじゃない……。

「ティアナとிட்டたな。落ち込んでいる場合じゃないぞ。彼らを一刻も早く運ばないと……」

「……そうね……敵だったあんた達に言われるとはね……ありがとう……」

まだ戦いは終わった訳じゃない。

クアットロ——。

あんただけは絶対許さない!!

この借りは必ず倍にしてお返ししてやるわ!!

\* \* \*

機動六課、作戦司令室

「……システム、完全にダウン。防御システムも、もう……」

「くッ」

アルトとシヤリオを脱出させ、最後まで粘っていたが、残っていたルキノから報告を受けた。

ごめんファイル、せっかく隊舎の防御を強化してくれたのに……。

\* \* \*

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

くそつたれ……いつたい何体がガジェットがいやがるんだ。

正直もう限界だぞ……。

「!!」

廊下の角から、小柄な人影が現れた。

「ラ……ラグナ……」

六年前——。

武装隊狙撃手としての最後の事件。

ビルに立てこもった強盗を狙撃するという任務。

要求を通すため、人質を盾に、窓際に姿を現した強盗を狙うと言う、任務自体はオーソドックスなもの。

普段の俺の腕なら何の問題もない任務だった。

だが、その強盗に取られていた人質と言うのが妹のラグナだった。

結果は……失敗。

魔法弾は狙いをそれ、ラグナの左目に命中。

これが原因でラグナは左目を失明してしまい、以降、俺は銃を手にする事が出来なくなつた。



震える手を無理矢理抑えつけながら、銃口を彼女に向ける……が……。

「くっ……くっ……」

「邪魔ですわ……」

少女の指先から放たれた魔力弾が腹に命中し、壁際まで吹っ飛ばした。

「これで……邪魔者は片づきましたわね。それにしても情報通りでしたわね」

少女は姿を変え、元の姿に戻ると……。

「まあ、これでマテリアルを探すだけですわ」

ナンバーズ4、クアットロの姿が現れた。

\*

\*

\*

「くっ……馬鹿な……」

「私達がこうも簡単に……」

「私を舐めすぎたのが敗因だよ。AMFが無い空ならリミットを解除していれば、あなたたちなんかに負けない」

私は、トーレとセツテと名乗る戦闘機人と交戦することになったが、フィルから聞いていたことと、リミットを自分の意志で解除できることで、この二人相手でも何とか勝つことが出来たのだ。

「……お嬢様を舐めていた、私達の負けです……」

「でも、どうして……。六課のメンバーは自分の意志じゃリミッターは解除できないはずなのに……」

「……フィル・グリードですね。我々のことを知っていて、フェイトお嬢様のリミッターは無くしていた」

「そういうこと……。そのおかげで、あなたたちに勝つことが出来ただけだね」

悪いけど、私はフィルほど甘くはない——。

私は戦闘機人二人を逮捕すると、近くの部隊にこの二人を預け再び六課に急行した。

\*

\*

\*

### 機動六課隊舎

フリードに乗ったわたし達がようやく到着した時には、既に隊舎は炎に包まれ、辺りをガジェットが闊歩しているような状況だった。

「あつ……」

「酷い……」

「……あれは!!」

「あの子……ヴィヴィオ!!」

二人が見つけたのは、クアットロに連れ去られようとしていたヴィヴィオの姿だった。

「ストラダー!! フォルムツヴァイ!!」

《D u s e n f o r m》

エリオ君が、ストラダーを起動させ、噴射口が槍の側面部にも4機表出し、後方噴射口も形状が変更する。

まさか、ここから飛ぶつもりなの!?

「キャロ、フォローお願い!!」

「エリオ君!!」

「でやああああ!!」

「あら、まだいたんですの〜」

ストラダーの槍先は虹色の防壁の阻まれてしまい、そこから進まなくなってしまう

た。

「くそっ!!」

「無駄だということがまだわかりませんの〜」

クアットロの指先からエネルギー弾が放たれ、それはエリオ君をとらえ爆発を起こした。

エリオ君は気絶してしまい、海に落下してしまう。

「エリオ君!! あっ!!」

そしてわたしも、バインドに掛かってしまい、海に落下してしまった。

「さっきのはFの遺産ね。死んでいてもいなくてもどつちでも良いんですけど〜。マテリアルも手に入りましたし、後はゆりかごを起動させるだけですわ」

\* \* \*

「はあ……はあ……」

フリードとエリオ君は何とか助けられたけど、六課は……。

『これより五分後に、上空の大型ガジェットと航空戦力による、施設への殲滅作戦を行います。我々の目的は施設破壊です。人間の逃走は妨害しません、抵抗せず、速やかに避難して下さい』

「まずいわね。六課にはまだ傷ついた仲間が残っているのに……」

「ああ、だが我らも、もう動けん……」

戦闘機人を倒し、六課の周りのガジェットを掃討していたが、やはりクアットロの罠にはまって、シャマル先生とザフィーラは致命傷こそ避けられたが行動不能に陥っていた。

「なんで……こんな……」

なんで……。

どうして壊すの……。

わたし達の大切な場所を……。

「竜騎……召還……」

足下には量感用の魔法陣が展開され、両手にはめられたケリユケイオンの水晶が、強い光を放つ。

膨れ上がる魔力は、以前のフリードの時とは比べ物にならないほど強大なもの——

「ヴォルテールつつつ!!」

海上に巨大な召喚魔法陣が描かれ、巨大な魔法陣から燃え盛る爆炎と共に、黒い巨体が雄大にせりあがった。

「……………壊さ、ないで」

わたしのつぶやきにヴォルテールの口と両肩、三ヶ所に発生した巨大な魔力球が集中し始め…………。

「わたし達の場所を……………壊さないで!!」

強烈な輝きを放ち、膨大なエネルギーを内包した熱線が照射された。  
熱戦はガジェットを全て破壊したが…………。

\*

\*

\*



「遅かった!!」

八神部隊長にデバイスを届けた私は、急いで六課へ戻ろうとしたのだが、地上本部のガジェットがあまりにも多く、しかたなく地上部隊と一緒に掃討していた。

なんとかなのはさんがきてくれて、戻れるようになったのだが……。

「あれは、ヴォルテール!! しかもあれは暴走状態!」

いまのヴォルテールは召還師のキヤロの感情が暴走していて、ちゃんと制御できていない。

このままじゃキヤロの手で六課を壊してしまう。

「キヤロ、落ち着いてキヤロ!!」

「離して!! お願ひ!!」

絶対に離さない!!

ここでキヤロを止めなかったら、正気になったとき、キヤロの心は壊れてしまう。

そんなことは絶対にさせない!!

「落ち着いて!! もうガジェットは全部消えたから!!」

「うっ……うっ……」

何とか落ち着きを取り戻したキャロは、ヴォルテールを制御することが出来た。

\* \* \*

「ごめんなさいヴォルテール。ただ闇雲に暴れさせちゃって……」

『気にするな。これから注意してくれればいい……』

「……ありがとう、ヴォルテール」

『それにしても良い友に会えたようだな……。我に臆せず、そなたを止めに来た』

「うん……」

本当にルーちゃんには感謝しきれない。

もし、あのまま感情のまま暴れていたら、もしかしたら私の手でこの場所を壊していたかもしれないんだから……。

『必要なときがあつたら、またそのときに会おう……』

ヴォルテールは魔法陣の中に消えてしまい、自分の世界に戻っていった。

\* \* \*

公開意見陳述会の行われていた大会議室の大画面に、ジェイル・スカリエッティが映し出されていた。

『ミッドチルダ地上の管理局員の諸君。気に入ってくれたかあい。ささやかながら、これが私からのプレゼントだ。治安維持だの、ロストログア規制だのと言った名目の下に圧迫される、正しい技術の進化を促進したにもかかわらず、罪に問われた稀代の技術者

達……今日のプレゼントはその恨みの一撃とでも思ってくれたまえ』

今回の戦い、クアットロ、デイエチ、セイン以外の戦闘機人は管理局に捕まったが、そんなことは関係ないと言わんばかりの態度だった。

実際クアットロもスカリエッティも、自分さえいればどうとでもなると思っているからだ。

『しかし私もまた、人間を、命を愛するものだ、無駄な血を流さぬよう努力はしたよ。可能な限り無血に人道的に、忌むべき敵を一方的に制圧出来る技術、それは十分に証明出来たと思う。今日はここまでにしておくでしょう……この素晴らしき力と技術が必要ならば、いつでも私宛に依頼をくれたまえ。格別の条件でお譲りしよう……ふふふふ……はははははは!!』

スカリエッティの勝利宣言とも言うべき発言は、ミッド中に広まっていた。

「予言は覆らなかった。それどころか……」

「最悪やな……」

私とカリムは悔しきしかなかった。  
だけど、まだ終わったわけやない。

機動六課は……私達は……まだ終わってないんや……。

## 第20話 翼、ふたたび

『……こちらは昨日、テロ事件の被害を受けた、時空管理局、ミッドチルダ地上本部の上空です。施設の被害や負傷者の数、事件の詳細については、未だ、管理局側からの発表はありません。事件直後に、犯人らしき人物から犯行声明があつた模様ですが、その内容については、慎重な検討の後に公表すると、広報部からの報告がありました……』

部屋一帯に、机を叩いた音が響き渡る。

「くそ!! 本部をみすみす落とされるとは!!」

「……中将」

「これでは。何のためにあいつが警告してくれたのか!!」

地上本部が落とされ、管理局内のシステムは、まだほんの一部しか回復していない。

「状況はあまり良いとはいえません。先程、委員会より連絡がありました。中将への緊

急査問が行われるそうです」

「……やはり、現場に出たのは拙かったか」

「はい。また、非魔導師によって構成された部隊による成果が大きかったのも、一因かと」

「それならかまわん。むしろ好都合だ」

儂らがした戦い方は、魔法が使えない奴らでも戦えるやり方だ。

己の肉体を磨き上げ、そこら辺にある道具で対応していたのだからな。

「同時に、アインヘリアルの運用も……」

「中断されたのか？」

「はい」

「……やっとか。むしろ止まってくれた方がありがたい」

あんなガラクタない方がマシである。

守るべき市民もろとも、街ごと吹っ飛ばすような大砲を向けたところで、抑止力になるわけがない。

犯罪が無くなるどころか、むしろ増える。

「オーリス、お前にはしばらく苦勞をかけるが、ファイルのこと頼んだぞ」

「はい、おそらくこれが、あの子にしてあげられる………最後のことでしようから………」

先ほど八神はやてから、後で話がしたいと連絡があつた。

さて、お前があいつのしてきたことを託せるか、それを見定めてもらうぞ。

\*

\*

\*

### 機動六課

昨夜、襲撃を受けたこの場所も、地上本部に負けず劣らず酷い有様だった。

地上本部と同じく、破壊された施設にガジェットの残骸が散乱、本局や地上本部の調査班が現場検分を行っている。



昨日の戦闘で、傷が少なかったあたしは検分に立ち会っていた。

とはいえ、ファイルが抜けてしまった事は、全員の心に深い傷となっていた。

「酷い事になってしまったな……」

あたしが検分を行っている、後ろからシグナム副隊長が近付いてきた。

「あ、シグナム副隊長。病院の方は？」

「重傷だった隊員達も、峠は越えたそうだ」

「そうですね……良かった。とりあえずはひと安心ですね」

「高町隊長は？」

「中です」

「様子はどうか」

「いつも通りです、しっかりお仕事されています。さらわれちゃったヴィヴィオの事とか

……負傷した隊員たちのことを確認だけしたら、後は少しも……」

でも、明らかに無理しているのがわかる。

なのはさん、あたし達の前だから気丈に振る舞っているけど――。

「そうか……」

「あつ……」

「こちらは私が引き継ぐ。お前も病院に顔を出してくるといい」

「ですが……」

「行つてやれ。ギンガやスバルのこともあるから……」

「……はい」

正直ありがたかった。

今はスバルのそばに一刻も早く言ってあげたかったから……。

あたしは、ファイルの残してくれたサンダーを取りに行くため、格納庫に向かっていた。あのバイクは、あいつとの思い出のバイクでもある。

あたしは今後の予定を組み立てつつ、歩きながらなのはさんに念話を飛ばした。

\* \* \*

(なのはさん、ティアナです)

(ああ……なに?)

(シグナム副隊長が、現場を変わってくださいって。ちよつと病院のほうに行ってください)

(そう。フェイト隊長も、向こうに向かつてるはずだから……)

(了解しました……行ってきます)

(うん、気をつけて……)

ティアナとの通信が終わり、しばらく歩いていると……。

「あつ……」

そこにはヴィヴィオが持っていたウサギのぬいぐるみが、ボロボロになって落ちていた。  
それを拾い上げたときは、いたたまれない気持ちでいっぱいになっていた。

なんで、わたしはあの時ヴィヴィオを助けにいなかったんだろう。何のためにフィルが傷ついて、戦闘機人と戦ったんだ。

\*

\*

\*

## 聖王医療院

「ごめんなさい……ごめんなさい……留守を預かっていたのに……六課のこと守れなくて……うわああああ……」

「シャーリーのせいなんかじゃないよ。泣かないで……」

「それにヴィヴィオのことも……なのはさんや、みんなに、なんて謝っていいか……」  
「シャーリー……アルト……」

交代部隊は六課に残っていたとは言え、彼らには悪いが、正直対ガジェットや戦闘機人戦の戦力としては、ほとんど役に立たない。

あの時六課に残っていて、敵に対抗できるだけの力を持っていたのは、シャマルとザフィーラ、そして辛うじてヴァイスだけだった。

完全に私達のミスだ!!

ファイルから聞いていて、この事は予測できていたことなのに!!

そしてファイルは、クアットロの罠に落ちてしまった……。

ファイル……本当にごめんなさい……。

私……肝心なときに助けてあげられなかった……。

そしてティアナ——。

あなたとの約束……守れなかった。

\* \* \*

「無理すんな……酷い怪我だったんだぞ……」

「平気よ。ザフィーラに比べれば、私の怪我は軽いもの……」

戦闘機人は何とか倒したが、あの二人を倒すのに、魔力の大半を使ってしまった私達には、六課を守りきる力はこのさされていなかった。

正直、生きていることが奇跡かもしれない。

「そっちは、大丈夫だったの？」

「ああ……ゼストのおっさんも投降してくれてからな。今は保護観察として、いてもらってる」

「そう……」

「ザフィーラは完治まで時間が掛かるだろうって……ヴァイス君も……峠を越えたとはいえ、当分は……」

「ああ……」

\* \* \*

サンダーをかつ飛ばして、病院に駆けつけたあたしは、スバルとギンガさんとエリオの収容されている病室の位置を確認していた。

でも、ここにファイルはいない。

あのとぎ——。

ファイルは最後の力を使って、転移でどこかに行ってしまったから……。

ファイル、今あんたはいつたいたいどこにいるのよ……。

「「あつ……」」

室に入ると、それに反応したチビツ子トリオが振り向いた。

左腕をつつてはいるが、何とが動けるエリオと、ヴォルテールの暴走で、魔力を使いすぎてしまったキャロ。

その暴走とまとめようとして、真竜の間近までいき、キャロを止めたルーテシア。

「……ティアア」

「ティアアナ……」

スバルもギンガさんも、身体の損傷の方は問題なさそうだったが、精神的に参っているようだった。

「差し入れ。色々買ってきたわよ。どうせ五人とも、ロクにご飯も食べてないんでしょ？」

両手に提げていた巨大な袋を、テーブルの上にと置いた。

エリオ達にはパンを、スバルとギンガさんには缶ジュースを渡した。



ギンガさんの方は、もう殆ど支障はない状態になっている。

毒素も完全になくなっていて、ファイルが魔力を与えたので、もうじき完全に回復する。

「もう……動かせるんだ……」

「神経ケーブルがいつちやってたから……まだ、うまく動かせないんだけど……何日かで元通りだって……」

「ちびっ子たちには、どこまで？」

「……あたしとギン姉の生まれとか、その辺は……」

「悪かったわね。あたしが止めてたの、スバルの身体のこと。しばらく秘密にしときなさいって……」

「あっ……」

「いえ……」

スバルは相変わらず落ち込んでいるのか、動きに精彩を欠いて目にも力が無い。

ギンガさんも同じような状態だった。

（エリオ君、ルーちゃん……）

(あつ……)

(うん……)

「スバルさん、ギンガさん、あつたかいスープとか、欲しくないですか？」

「食堂で売ってましたから、買ってきます!!」

「ちよつと……行つてくる……」

エリオとキャロとルーテシアは病室から出て行つた。

あの三人にも気を遣わせちゃつたわね。

\* \* \*

「ティア……ごめんね……」

「ごめんなさい……」

「ふう……何に対してのごめんよ。あたしやファイルの言うことを聴かずに先行しすぎたこと? 大怪我してみんなに迷惑かけたこと? ギンガさんは……もしかしてあのこ

と気にしてるんですか?」

「……ええ……」

「……色々……」

「後で、マツハキヤリバーにも謝つときなさいよ。酷い破損状況だったんだから……」

「うん……」

ギンガさんもスバルも、後悔でさいなまれてしまっている。

こういつた時、あいつならどういふ風に言うんだろう……。

「私は……取り返しのつかないことをしてしまった……私の油断のせいで、ファイルをあなたな目に!!」

「ギンガさん……」

「私がいなければ、ファイルはあんな目に遭わなくて済んだのよ!! ファイルだってきつと私のこと恨んでる!!」

そんなことはあいつは思っていない。

そんなことを聞いたら、あいつは本当に悲しみますよ!!

「ギン姉!!」

「ギンガさん!!」

「いったいどうしたらいいの——。」

「今のギンガさんを救えるのはあいつだけ。」

「でも、そのあいつは——。」

「そう思っていたとき——。」

「……そんなこと、これっぽっちも思っていないよ……。」

「病室の扉が開き、そこには——。」

「「「ファイル!?!」」」

フィルの姿があった。

\* \* \*

「フィル……あんた、いったい今までどこに？」

「説明は後だ。それよりギンガさん……」

俺はギンガさんの元いき、しゃがんで視線を同じにし、ギンガさんの両肩に手を置く。

肩がふるえてるのが伝わってくる。

「ギンガさん、それ以上自分を責めないで。そんなこと誰も望んでないです……」

「だけど、私のせいであなは!!」

「ふう……少しはプラスに考えましょう。前の歴史だとギンガさん、スカリエツティに連れさらわれ、スバルとガチで戦っていたんですよ。そう考えれば、俺の怪我くらいで

すんだんですから……」

前の時——。

ギンガさんとスバルは、スカリエツティの罠にはまり、死闘を繰り広げてしまった。世界の修正力を考えても、俺の怪我くらいですめば安いものだ。

「……ばか……本当に馬鹿よ……あなたは……」

「馬鹿で大いに結構。それが俺の性分ですしね」

しばらくギンガさんも落ち着き、俺もそつと離れる。

少し時間があると思う、俺とティアは部屋から出た。

部屋から出てから、ティアの様子が少し違っていた。

さつきもそうだったが、ああいったときは普段なら、怒鳴られるところだが……。

「あんた……今までどこにいたのよ。あの傷は、正直そんなすぐに治るものじゃないわ

よ」

ティアの目は嘘は許さないって訴えてる。

「そうだな……ティアには話しておくよ……実はな……」

\*

\*

\*

昨日 アースラ艦内

「ルーテシア……大丈夫かしら……」

自分の娘が管理局員となって戦っているのは、親として不安でしようがないが、自分がしてしまった罪の償いと、それを自分の意志で戦うと決めた、あの子の気持ちは止められない。

そんなことを考えてると、ファイルが転移で現れた。

「……………ぐつ……………つううう……………」

「ファイル!! 酷い傷!! 急いでメデイカルポッドに入れないと!!」

私は緊急通信でマリーさんに連絡を入れて、ファイルをメデイカルポッドに運んだ。

傷がかなり酷く、正直メデイカルポッドを使っても、助かる可能性は10%以下だ。うだ。

「どうですか……………ファイルの容態は……………」

「傷は何とかふさがったけど、魔力が足りないの。このままじゃ……………」

生命力とも言える魔力が決定的に少なすぎる。

このままじゃ間違いなくファイルは死ぬ。

\* \* \*



(ファイル!! ファイル、応えて!!)

さつきからファイルに呼びかけてるけど、生命力がほとんど無く、全く反応がない。  
さつき、ギンガに魔力を殆ど渡しちやったから……。  
こうしてる間も体温が低下してきてる。

(……もう……これしかない……)

私は、かつて女神と会ったときのことを思い出していた。

\* \* \*

異空間

「フェイトさん、あなたにお願いがあるんです……」

「お願いって何ですか？」

「私は、これからフィルの魂をここに呼び寄せます。そして、彼に過去を変えて欲しいと頼むつもりです」

「過去を……ですか？」

「先にティアナ・ランスターにお願いしたのですが、生き返るチャンスは、彼に与えて欲しいと言われ……」

ティアナ、相変わらずフィルのことが優先なんだね。

その一途な気持ちは、うらやましい。

「単刀直入に言います。あなたの魔力を彼に託してほしいのです。今のまま行っても、返り討ちになってしまいます。ですから……」

「何で私なんですか。それでしたらティアナでも……」

「………情けない話ですが、フィルと合う魔力波長が、あなたしかいなかったんです。安らかな眠りについていたあなたに、こんな事を頼むのは申し訳ないのですが、これしか手が浮かばなかったんです。私のことをいくら恨んでくれてもかまいません。お願い

です。彼の力になってあげてください!!」

「頭をあげてください……むしろ感謝しますよ」

どんな形にしろ、もう一度戦うことが出来て、みんなの力になれるんですから……。  
なにより、大好きなフィルの力になれるんだから……。

「フエイトさん……」

「だから、私はフィルのために力を貸します」

「ありがとうございます……」

こうして私はフィルに力を貸すことになった。

具体的には魔力融合すると、フィルの魔力が上がり、私が使えていた技が使えるようになる。

それによって戦闘機人達とも互角に渡り合える。

だが、万が一ということもある。

最後の切り札として女神に渡された力で、私が持つてる魔力を全て、生命力に変えることによってフィルの命を助けることが出来る。

その能力でファイルを助けるしかない。

ごめんね……ファイル……。

もう、あなたの力になれないけど、このままあなたが死ぬよりはずっと良いから……。

(私の魔力……お願い……命となってファイルを救って……)

ファイル……私達はずっと一緒だよ。

そして——。

この世界の私、ファイルのことお願いね……。

金色の光がファイルを包み込み——。

\* \* \*

「フエイトさん!!」

「気がついたのね、ファイル」

「メガーヌさん、マリーさん、ここは？」

「アースラの医務室よ。あなたは最後の力でここにきたのよ」

「そう……だった。最後のあがきで、何とかアースラにワープしたんだった」

最後の賭だったが、うまくいったんだ。

意識も朦朧としていたから、駄目かと思っただけど――。

「それにしても、よくあの傷が治ったわね。いくらメデイカルポッドを使ったといつても、直る見込みはほとんど無かったのよ」

「えっ? でも俺、完全に直ってますよね」

傷口を見ても完全にふさがっているし、体力も完全に復活してる。

あれ……おかしいぞ。魔力がいつもより少ない？

「マリーさん、治療中に何か変わったことありましたか!!」

「えっ？」

マリーさんは、治療中の様子をモニターで確認すると……。

「これは!! 魔力? フィルのとは違うわね……どちらかというとならフィイトさんに近い?」

まさか……そんな!!

俺は体内の魔力を探ると――。

――感じられない。

フェイトさんの魔力が、全く身体の中から感じられない!!

(マスター)

(どうしたんだ、プリム)

(お話ししたいことがあります。お一人できてもらえますか)  
(わかった)

俺はプリムをおいてある、自分の部屋に戻った。

\* \* \*

《マスター……》

「いったい何があったんだよ!!」

さつきから嫌な予感が止まらない――。

《……》

「プリム!!」

プリムがようやく口を開き、話し始めた。

《落ち着いて聞いてください……。彼女は……マスターの命を助けるために、魔力を命に変換したんです!!》

「なん……だと……」

《……彼女からの……最後のメッセージがあります。聞いてください……》

プリムが、最後に託されたフェイトさんからのメッセージを再生すると……。

『これを聞いてるって事は、ファイルは助かったって事だよ。勝手なことをしてごめんね。でも、あのままあなたを死なせることは私には出来なかった。もう残された手段は、私の魔力でああなたの命になること。それしか無かったの……』

「フェイト……さん……」

なんだよ……。また俺は大切な人を犠牲にしたのかよ。



本当に俺は、なにをやってるんだよ——。

『ファイル、悲しまないでね。元々私は、スカリエッティとの戦いで死んでしまってるの。だから私は、みんなの元に行くだけ……本来のあるべき所へね……』

「……はい……」

『最後まで一緒に戦えなくてごめんね。信じてるよ……ファイル達が勝つのを……』

そこで再生メッセージは終了する。

《これが彼女からの最後のメッセージです。マスター!!》

「……ああ……分かってる。プリム、絶対勝つぞ、この戦い!!」

《はい!!》

——今は泣いてはいけない。

今まで、俺の力になってくれたあの世界のフェイトさん。

そして――。

俺に希望と託したティアのためにも、俺は負けるわけにはいかないんだ!!

見ていてくれ、ティア、フェイトさん。

二人のためにも、みつともない戦いは出来ない!!

\* \* \*

「と、いうわけだ……」

フェイトさんの魔力が無くなったことはほかしているが、それ以外のことは全部話した。

「……そう」

「ティア?」

ティアが、いきなり俺に抱きついてきた。

驚いてティアの顔を見ると、ティアは涙をボロボロ流していた。

「ティア……」

「心配したんだからね!! あんたがこのままいなくなったらって……うわああああ……」

何やってるんだよ、俺は。

身近な人が傷ついて、一番傷つきやすいのはティアじゃないか。

ティーダさんの時で、それは分かっていたことだろうが!!

「ごめん……ティア……」

俺はただごめんとしか言えなかった。

\* \* \*

地上本部、最上層エリア直通エレベーター

「……それで、私に聞きたいこととは？」

「レジアス・ゲイズ中將のお仕事についてと……ファイルが私達に極秘で動いていたこと  
です」

「特秘事項が多分に含まれます。個人として解答出来ることは、ほとんどありませんが」  
「聞くだけ……聞いていただけですか……」

正直レジアス中將のことはどうでも良い。

でも、ファイルがどのくらい私達のためにしてくれていたのか……。

オーリス三佐……お願いや。

せめてそのことだけは教えて欲しいんや……。

\* \* \*

陸士108部隊、部隊長室

「まずは、どつから話したもんかな……」

『三佐が追っていらした、戦闘機人事件からでしょうか』

モニター越しに提案してきたのはクロノ・ハラオウン提督。

隣には聖王教会騎士カリム・グラシアの姿もあった。

テーブルを挟んだ反対側のソファーには、機動六課の高町なのは、フェイト・テストア・ロツサ・ハラオウン、シグナム、ヴィータの四人が座っている。

「出来れば、ギンガとスバルの事。奥様の事についても……」

「ああ……戦闘機人の大元は人型戦闘機械。これはずいぶん古くからある研究でな。旧暦のかなり古い時代から行われてきた。人間を模した機械兵器、いろんな形式で開発さ

れたが、ものになった例はあまり多くない。それがあるとき劇的な進化を遂げた……  
25年前ばかりのことだ……」

『機械と生体の融合自体は、特別な技術ではない。人工骨格や人工臓器など、それこそ古くから使われている。ただ……』

『足りない機能を補うことが目的ですから、強化とはほど遠く拒絶反応や長期使用におけるメンテナンスの問題もあります』

「だが、戦闘機人はな。素体になる人間の身体の方を弄る事で、それを解決しやがった」  
「！！！！」

「誕生の段階で戦闘機人のベースとなるよう……機械の身体を受け入れられるよう……  
遺伝子レベルで調整された子供達……それを生み出せる技術を、あの男は作り出した  
……」

それが……ジェイル・スカリエッティ。

「十一年前。まだスカリエッティなんて男が絡んでは知らなかったが……うちの女房は陸戦魔導師として、捜査官として戦闘機人事件を追ってた。違法研究施設の制圧、暴走する試作機の捕獲。スバルとギンガは、事件の追跡中に女房が助けた戦闘機人の実

験体なんだ。……うちは子供が出来なくてな。二人とも、髪の色や顔立ちも、なんだか自分に似てるしつてよ……」

「まあともかく、俺達の娘として、人間として育てる……つて言い出した。技術局でのメンテだの、検査や研究協力だのも多少はあったが、二人とも、実に普通に育ったよ」

「女房が死んだのは、あいづらに、それなりにものごころがついた頃だった。特秘任務中の事故だとかで、死亡原因も真相も未だに闇の中だ。女房はどつかで、見ちゃいけねえものを、踏み込んじやいけねえ場所に踏み込んじまっただろうと思ってる……命を捨てる覚悟で、事件を追っかけりや良かったんだが……女房との約束でな。ギンガとスバルをちゃんと育ててやるつてのは。だが、まあずつと、地道に調べてはいたんだ。そのうち、告発の機会もあるかもしれねえつてな……」

俺はすっかり冷め切った湯飲みの茶を、一気に飲み干した。

「八神は自分の所の事件に戦闘機人がからむつて予想して、俺に捜査の依頼をしてきたつて訳だ。あのちびだぬきはよ!!」

「「「ふふっ」」」

「まあ、家の女房と娘達についてはこんなどこだ……。後は合同捜査の方だが……お嬢

……  
「はい……」

次は現在進行形で行われている、捜査についての報告に移行する。

\* \* \*

地上本部

会議が終わり、私と八神二佐は廊下を一緒に歩いている。

「戦闘機人、人造魔導師。いずれも、かつてはレジアス中將が、局の戦力として採用しようとした技術です」

「随分と昔の話です……」



「安定して数を揃えられる量産可能な力。倫理的問題を問われず、量産によるコストダウンさえできれば実現可能な計画。レジアス中將はその計画をどこかで、秘密裏に進めてはいませんでしたか？」

「スカリエツティは、その依頼先として理想の存在です。違法研究者でさえなければ、間違いなく歴史に残る天才ですから」

なるほど、一応そこにはたどり着いていたんですね。

でも、まだ足りない……。

「恐らくは、スカリエツティとの司法取引が行われ、中將は、機が熟するのを待っていた。スカリエツティが、人造魔導師や戦闘機人を大量生産し、それを地上本部が発見、摘発する……という状況を作れるのを。そうなれば、摘発したそれらを試験運用、という形にもって行けるでしょうし……その途中、掴まれたくない事実に近い捜査員を事故死させるのも、優秀な人造魔導師素体を得ることも!!」

「……………というのが……2年前までなら言えたんですけど……」

「ほう……」

「最近は地上本部の動きが違ってきてます。機動六課のこともそうですけど、何よりア

インヘリアルルの計画が事実上停止している状態です。これをおかしいと思わない方が変です……」

本局育ちで、大局が見えない子かと思っただけ……。――。

「正直、そのことよりもこっちが本題なんです。ファイルが私達に内緒でしていることは何ですか!!」

「何をとは……どういう意味ですか?」

「もう……隠さないで欲しいんです。ファイルが私達に、危害が及ばないようにしてるってのはわかります。でも、私は機動六課部隊長として、そして……」

「大切な仲間として、もうファイルだけに背負わせるのは嫌なんです!! お願いです!! ファイルがしようとしていることを教えてください!!」

ファイル――。

あなたが必死で護ろうとした人達は、ちゃんとあなたの気持ちを分かってくれていますよ。

だから私も――。

「……………八神二佐」

「はい……………」

「これを……………」

私が彼女に渡したのは一枚の書類——。  
その書類の中身は…………。

「これは!!」

後は……………頼みましたよ。

未来は、貴女達にかかっているんですから——。

\*

\*

\*

ミッドチルダ 秘密ドック

私はオーリス三佐から聞いてこの場所にやってきた。

あの書類では、ファイルはもう半年前からこの事をしていたとのことだった。

クロノ君と連携を取っただけでなく、地上本部から許可を得たり、スカリエツティにばれないように隠密に行動したりしてた。

本局のことだけでなく、地上のこと、そして今後のことも考えてのことだった。

その結果、この新型実験艦アースラが完成した。

「ファイルは……たった一人でここまで進めていたんやね」

「ああ……クロノ君の協力もあつたけど、実質やっていたのは彼だったからね……」

「ロツサ、私は本当に部隊長として失格やね。ヴィヴィオもさらわれてしまったし、部隊員も怪我させてしまった」

ファイルはたった一人で、未来を変えようがんばっていたのに――。

「はやて……後悔ならいつでも出来る。今は彼が作ってくれた道を受け継ぎ、そして今度は君がそれを引き継ぐ番だよ」

「せやな。ファイルはここまで道を作ってくれた。今度は私がやる番や!!」

今度は私が頑張るから——。

それが、ここまでがんばってくれたファイルへの私の答えや。

「アースラ……この戦いは私達の未来が掛かっている。私達と一緒にもう一度羽ばたいてや……」

本当なら廃艦となっていたはずのアースラ。だけど、この戦いのために生まれ変わった。

だから——。

私も、もう一度羽ばたくんや!!

\*

\*

\*

機動六課、仮隊舎 屋上

「なのは……さん？」

「フィル……」

「どうしたんですか……。こんなところで……」

なのはさんのいつも感じさせている活発な印象は全くなく酷く落ち込んでしまっている。

珍しく濃い目の化粧をしているようだけど、そんなんじやごまかせない。恐らく昨日は一睡も出来ず、目の下に出来た隈や、やつれた顔を誤魔化すためにやっている。

「ヴィヴィオの事……考えてましたか？」

「うん……約束……破っちゃったなって……」

脳裏によぎったのは、最後の指切りの約束……。

「わたしがママの代わりだよって……守っていくよって約束したのに……。側にいてあげられなかった……。わたしは守ってあげられなかった!! あの子……きつと、泣いてる……」

「なのはさん……」

取り乱しそうな、なのはさんの身体を、俺はきゅつと抱き寄せる。

全身が悲しみに震えて――。

「ヴィヴィオがひとりで泣いてるって、悲しい思いとか、痛い思いをしてるかもって思うと、身体が震えて、どうにかなりそうなの!!」

「今すぐ助けに行きたい!! だけど……わたしは……」

「大丈夫、ヴィヴィオは絶対大丈夫ですから……」

「う……うっ……うわああああ……」

なのはさん、今はいっぱい泣いてください。

俺に出来るのは、そんなあなたに泣く場所を貸すことくらいですから――。

\*

\*

\*

「……………本当にありがとう。ずっと……………ぎゅつと、してくれてたんだね」

「……………俺に出来るのは……………これくらいでしたから……………」

そんなことないよ――。

こうやって、わたしのことを包み込んでくれていると安心する。

不安も消えていく……………。

わたし一人じゃ、ヴィヴィオのことで押し潰れてたから――。



「……………俺も、ヴィヴィオのことは後悔してました」

「えっ？」

「何で、俺がここに残らなかったのか、どうして転移で真つ先に戻らなかったんだ……………そんな後悔を……………いっばい……………いっばいしました」

そっか——。

後悔してたのは、わたしだけじゃなかったんだね……………。

ファイルも……………ずっと後悔してたんだね……………。

「だから、お互いに、これ以上後悔しないように助けましょう……………。二人できつと……………」  
「うん!!」

ごめんねフェイトちゃん。今だけはファイルに甘えさせてね。  
だから――。

「ちよ、ちよつと……なのはさん……」

「なあゝに」

わたしはファイルにぎゅつと抱きついた。

恥ずかしいけど、いっぱいわたしの思いが伝わるように……。

「あのですね……。こんな所、誰かに見られたら……」

むう。ファイル、空気読めなさすぎ。

こういうときは黙って抱きしめてくれるのが、男の子なんだよ。

「別に良いのに……。フェイトちゃんなら、今日くらいは許してくれると思うし、それに

……」

「それに？」

「実は……さつきから、見られてたんだよ。わたし達……」  
「えっ？」

\* \* \*

なのはさんの言葉で、扉を見ると、フェイトさんだけでなく、ティアとキャロ、そしてルーテシア、さらに、はやてさんまで覗いていた。

「お、お前ら……」

「ごめんフィル……。でも、あんたはきつと、なのはさんと同じように後悔してるって……そう思ったから……」

「ティア……」

「フィルさん、きつとわたし達がヴィヴィオのことを言っても、逆にこっちが励まされてしまうと思いましたから、悪いとは思いましたが……」

「申し訳ないと思ったけど、フィルさんとなのはさんのことずっと見てた。今のフィル

さんとなのはさん、同じ後悔を持っている同士だったから……」

キャラも、ルーテシアも、みんな、俺たちのこと心配してくれてたんだな……。

「そつか……濟まない。みんなに気を遣わせて……」

「ほら、そうやって自分より私達を優先しようとする。やつぱり良かったよ。あの場で気持ちをほき出させて……似たもの同士だよ、なのはもフィルも……」

「あ、あははは……」

そんなに似てるか。俺となのはさん？

少なくとも俺の方が、もう少し自己中だぞ。

「でもね……」

そう言つてフェイトさんは人差し指で、俺のおでこをツンとして……。

「二人じゃないよ。三人だからね。私だつてヴィヴィオのママなんだからね……」

「フエイトさん（ちゃん）」

「それも違うで」

「はやてさん（ちゃん）？」

はやてさんは、俺たちみんなを見渡して……。

「みんなでや。六課のみんなでヴィヴィオを助けるんや。そやろ、テイアナ、キャロ、ルーテシア!!」

「そうよ、あたし達のこと忘れんじやないわよ!!」

「みんなで力を合わせて」

「ヴィヴィオを……助ける」

「みんな……」

そうだ、俺にはこんなにも心強い仲間がいる。

大丈夫、俺たちは負けない——。

この仲間達がいる限り……。

\* \* \*

スカリエツテイ・ラボ

処置台の上に両手、両足をバインドで、動きを封じられた聖王のマテリアルの姿があった。

右側にはデイエチが、左側にはクアットロの姿があった。

「あ……ああ……ふええ……」

「はい、お姫様。怖くないですよ」

「バイタルも正常。魔力安定よし、移植準備オーケー」

「ふむ、良いタイミングだ」

私とウーノは部屋に入り、ウーノからレリックを受け取る。

「ああっ……いやあああああ!!」

「お姫様、きつと分かるのよ。自分がこれからどうなるのかってことを」

「ママツ!! パパツ!!」

「泣いても叫んでも、だくれも助けになんか来てくれませんよ」

クアットロではないが、子供の泣き叫ぶ声は、何度聞いても快感だな。

「うわあああ……うわああああ……」

私はレリックを持ち、マテリアルに近づく……。

「さて、始めようか。聖王の器に王の印を譲り渡す。ヴィヴィオ、君は私の最高傑作になるんだよ!!」

「ママアアア、パパアアア!!」

\* \* \*

翌日、機動六課 仮隊舎 ミーティングルーム

八神部隊長の命令で、負傷者以外のメンバーが全員集結させられた。負傷者もモニター越しに話を聞いていた。

いよいよアースラの出番になる――。

秘密ドックまではトランスポーターを使うので、その座標を打ち込んでいた。

といつても仮隊舎なので、ポーターが3基しかないのです、全員の移動にはかなり時間が掛かることになる。

しかも、先に俺が行っておかないと、向こうとの連携が出来ないのでそれも苦勞する。事前には連絡してあるが、それでも六課メンバーとマリーさん率いるメカニックとの連携をとる必要があるからだ。

だから、こっちの方はティアとフェイトさんに任せることにした。



\* \* \*

「これで最後ですね」

「うん、私となのはで最後だよ」

「それじゃ、出発前にデータを消しておきますね。ここからドックの居場所がばれないように……」

「お願いね、ティアナ」

「はい!!」

あたしはポーターを操作し、この転移が終わったら座標データは完全に消去するようにした。

これではれてしまったら、今までの苦労は水の泡になってしまふ。

ファイルが何のために、今まで苦労して秘密裏でやってきたと思うのよ。

操作が終わると、あたし達はドックに移動した。

\* \* \*

ドックに来ると、はやてを始め全員がそれぞれ部署に就き始めている。

ティアナもフォワードと合流し、自分たちの部署に散っていった。

フィルがマリーさんと一緒に進めていたこともあって、メカの方は最終チェックを除いて準備完了になっていた。

戦闘班もそれぞれ各部署の武器の説明を受け、シミュレートをしていた。

管制室の方もグリフィスが中心となり、発進準備を始めている。

そして私となのはは、ブリッジに向かった。

「はやて、発進準備はどのくらい出来てる」

「現在、85%といったところや。現在合流出来るメンバーは全員乗り込んだよ」

「武器と補充物資の方は」

「そっちの方は万全や。前々から準備してただけあって、とんでもないものもあるで……」

スクリーンの映し出されたのは、一機の戦闘用ヘリだった。

「戦闘用ヘリ、JF705 XX 六課で手に入れられなかったヘリや。地上本部が

これだけは押さえてたから

な」

「それがどうして……」

「フィルや。レジアス中将に話をつけてくれて、やっと一機だけ回してくれたんや」

「フィル……」

画面には、フィルが各部署に指示を出している姿があった。

今、この場での確な指示が出来るのはフィルだ。

現場を知らない私達よりも、的確に正確に指示してくれている。

だからこそ、スムーズに発進準備ができています。

そんなとき、本局のクロノから通信がきた。

『……………こちら……………クラウドディア……………アースラ……………応答してくれ……………』

通信スクリーンに出されたのは、ボロボロの艦内とノイズだらけの通信だった。

「こちらアースラ、いったい何があったんや!？」

『……………よく……………聴いてくれ……………。本局は……………次元艦隊は……………スカリエツティによって壊滅した』

「！！！！」

次元艦隊が壊滅!?

いったい何があったというんや!!

『俺たちクラウドディアも……………君たちを助けに……………向かうため、本局で準備……………備して……………た……………クアツ……………口のサイバー……………テロ……………本局に……………艦隊は全……………やら……………た……………』

「そんな!!」

通信が段々、とぎれとぎれになって、被害の酷さを物語っている。

「クロノ、被害状況はどのくらいなの」

『本のコン…………ピユ…………と艦隊のコンピ…………ユータは、ても…………アウ…………。クラ…………ウ…………イア…………の通り…………だ…………』

いよいよノイズが酷くなり、話も聞き取りづらくなってきた。

それでも、クロノは何とかして私達に通信を送ってくれた——。

『残念ながら…………もう…………アースラが…………の希望だ…………俺たちも…………ポーター…………も復…………させ…………そ…………援軍を…………ように…………』

「分かった…………こっちは何とかするよ。だからクロノ君達も頑張つてな…………」

『済まない…………何とか…………頑張つ…………』

「クロノ!!」

「クロノ君!!」

通信機器がすべてやられ――。

クラウドディアからの通信は切れてしまった。

「二人とも聞いているの通りや。援軍は正直期待できない。私達だけでやるしかないんや  
!!」

「うん!!」

フィルが、危惧していたことが本当になってしまった。

幸いアースラはコンピュータが独立していたので、サイバーテロは避けられた。

「フエイトさん!!」

フィルが報告のためブリッジにやってきた。

血相変えてきたのは、さっきの通信のことを知ったのだろう。

\* \* \*

「……本局が、やられたんですね……」

「うん……」

やっぱり、本局を攻撃してきたか。

俺があつちの立場なら、真っ先に本局をたたく。

艦隊さえ押さえてしまえば、地上の戦力じゃゆりかごは押さえられないからな。

「ファイル、報告の方は？」

「はい、各部署、全機関オールグリーンです。いつでも発進可能です」

「了解や。乗組員に次ぎます。これよりアースラは発進します。全員部署についてください」

『了解!!』

部隊長の号令で全員各部署に就き、発進を待った。

発進も間近になったとき、爆発がおき、ドック全体が崩れ始めた。

「な、何や!!」

「どうしたの!!」

「ファイル。もしかして」

「どうやら……ここがバレたみたいですね」

外の様子をスクリーンに出すと、大量のガジェットがドックを攻撃していた。

数は500機以上、どうやら本気で、ここで俺たちを生き埋めにしたらしいな。

ドックも本格的に崩壊したとき、マリーさんから通信が入った。

『ファイル、ここは私達に任せて、あなたたちは発進して!!』

「マリーさん!! でも、このドックの武装じゃ……」

お世辞にもここの設備は武装が十分とは言えない。

ばれないように作ったため、最低限の設備しかなかったのだ。

しかも、最終チェックのため、あと30分は発進できない……。



『わかってる。でも、なんとか持ちこたえて見せるから……』

「……マリーさん、アースラの最終プログラムのインストールを早められませんか？あれさえインストールしてしまえば、発進はできます」

最終プログラム、アルカンシエル・ノヴァに必要なラストプログラム。

完成までギリギリまでかかってしまつて、今になってしまつたが、それさえ入れてしまえば……。

『出来るだけやつてみる。テストなしになつちやうから、ぶつつけ本番になつちやうけど……』

「それでもかまいません。ここで沈むよりはずっとマシです!!」

『……そうね。ここまでできたんですもの。ミッドの未来……私たちの未来、あなたたちに託すわね!!』

ガジェットの攻撃で、ドックの中はめちやくちやになり、発進ゲートがかるうじて生き残っているだけだった。

そして……。

『プログラム、インストール完了!! アースラ、発進準備完了!!』

マリーさんからの通信で、ゲートが開いていき……。

「八神部隊長!!」

「了解や!! アースラ、緊急発進!!」

アースラはその巨体を大空に羽ばたいた。

\* \* \*

スカリエツティ・ラボ

「やはり、出てきましたわね。アースラ……」

「うむ……」

「本当なら、真っ先に叩いておきたかったんですけど」

今まで色々調べたけど、アースラだけではどうしても場所特定が出来なかった。

他の戦艦は全部掌握出来たのに、アースラだけは掌握できなかった。

「色々面倒になりそうですわね」

「心配することはないさ。本局の戦力は無力化したし、たがが一隻で何が出来ると言うんだね」

「それもそうですわね」

まあ、アースラ一隻くらい大目に見ましよう。

そのくらい戦力がなかったら、張り合いもありませんものね。

\*

\*

\*

アースラ ブリッジ

「ふう……何とか発進したな……」

「まったくやで。一時はどうなるかと思ったわ」

アースラを発進させた後、ドックは完全に制圧されてしまったな。

スタッフは全員無事脱出して、とりあえずナカジマ三佐の所に向かうそうや。

全く無茶やで、マリーさんもスタッフのみんなも——。

「八神部隊長……これを……」

「これは……？」

ファイルから託されたのは、銀色に光り輝く鍵——。

この鍵は……もしかして……。

「アースラの……最終兵器、アルカンシエル・ノヴァの封印を解くキーです……」  
「アルカンシエル・ノヴァ……」

「そうです。これが、俺たちの残された最後の武器です……」

アルカンシエル・ノヴァ——。

本局艦隊がない今、私たちが対抗できる手段はもうこれしかない。

「……八神部隊長、マリーさんから託された鍵、あなたに託します……」  
「フィル……」

——重い。

マリーさんとフィルはこれを完成させるために、血の滲む思いをしてきたんや。  
この鍵はみんなの……そして……ミッドの人々の思いが込められてる。

「はやてちゃん」

「はやて」

鍵を握っている私の手に、なのはちゃん達が手を添えてくれた。

「なのはちゃん……フェイトちゃん……」

二人は、うんと言つて、私を励ましてくれた。

そして、もう一人……。

「フィル……」

「はやてさん……」

私達三人の手に、さらにフィルの手が添えられる。

「みんな、ありがとうな。それにフィルも、私のこと名前で呼んでくれて……」

「あつ……済みません。任務中に……」

「ええよ。私な、いつも思つてたんや。なのはちゃん達は、今では任務中だつて名前で呼んでるのに、私は部隊長つて呼ばれて、私だけ疎外感がある感じやったし……私……」

だから、この戦いの間は名前でも呼んで欲しいんや!!

「はやて (ちゃん) ……」

「本当に……良いんですね」

「もちろんや。部隊長つて言ったら怒るで。今だけは部隊長として考えないでな。一人の仲間としてみてや。ちなみにこれは命令やで」

「分かりました。この戦いの間だけは部隊長としてでなく、一人の仲間として考えます。

……はやて……さん」

「うん!!」

スカリエツティとの戦い……。

前の時はみんな死んでしまった……。

ファイルは、そんな世界でたった一人で戦ってきたんや……。

もう、これ以上ファイルの心に悲しみはいらへん!!

スカリエツテイ、クアットロ、あんたら、まとめて借りは返したるで!!



## 第21話 ゆりかご

## 聖王医療院

入院病棟の一室のベッドに、ヴァイス・グランセニック陸曹が横になっている。私は、今、そんな彼の眠るベッドサイドに立っている。

「ヴァイス陸曹……手術お疲れ様でした。機動六課の、私たちの704式ヘリは壊れちゃいましたけど……ヴァイス陸曹のストームレイダーは無事でしたよ……」

私が持っていたのは、ヴァイス陸曹のデバイス、ストームレイダー。

六課跡から、シグナム副隊長が見つ付けてくれたんですよ。

「……後のこと、何も心配ないですからね。落ち着いてゆっくり休んでください……」

病室を出て、私はヘリポートに戻り、回復したロングアーチをアースラに連れて行く

ため、JF705 に搭乗する。

六課に残されたヘリは、これ一機だけだ。

「行こうか、みんな……」

『おう!!』

(ヴァイス先輩の後輩として……。六課のロングアーチスタッフとして……。みんなを運ぶ仕事は、私が引き継ぎます!!)

ヘリポートから、アースラと合流するために旅立った。

\* \* \*

時空管理局次元航行実験艦  
L級巡航艦アースラ

既に次元空間の長期航海に耐えられるだけの、在りし日の力は失われ、退役を待つばかりだった艦だったのだが……。

ファイルが回収し、様々な改修・改造を施し、外見は殆ど変わらないが、中身はXV級を超えるほどの戦闘力を秘めている。

全方位に対応する主砲・副砲。

戦闘によるダメージを軽減する全方位バリア。

長期間の航海を復活させた新型エンジン。

装甲板の強化により、耐久力の強化。

さらに、新型エンジンと新型魔力炉によるアルカンシエルの強化。

通常のアルカンシエルを3発連続発射を可能にすることに成功する。

さらに――。

最終手段として、アースラのアルカンシエルにはもう一つの顔がある。

「ルキノ、コントロールは大丈夫?」

『はい、フェイトさん。この子の……アースラのごとは、隅から隅まで知ってますから

……』

ルキノは元、アースラ勤務。当時は事務員として搭乗していた。基本操作は元のままなので、そんなに苦勞はしないで済んだみたい。

\*

\*

\*

「……アルトさんとルキノさんが」

「うん、アルトは療養中のヴァイス君に代わって、ヘリパイロット」

「ルキノは、アースラの操舵手」

アースラ内の会議室には、俺と、スターズからなのはさんとティア、ライトニングからフェイトさんとキャロ、輸送隊からアルトさんと、六課各部門の代表メンバーが集まっていた。

他にも、操舵室にいるルキノさんとも内線が繋がっていた。

「ああ、みんなお揃いやな」

会議室の扉が開き、グリフィスを引き連れ、はやてさんが入ってきた。

「ちようどよかった。いま、機動六課の方針が決まったところや」

地上本部の事件への対策は、残念ながら後手に回っている、と言うのが現状だ。もつとも、ただでさえ少ない戦力で、襲撃後の混乱の中、それは避けようがない。

さらに、本局艦隊はほぼ壊滅状態になってしまい、現状では復帰のめどは立っていない。スバルも当初は本局で治療する予定だったが、マリーさんの機転で、退院後はクラナガンの施設に移っていたのだ。

「そやけどな……。私達が追うのはテロ事件でも、その主犯格としてのスカリエツティでもない。ロストロギア・レリック……。その捜査線上に、スカリエツティやその一味

がおるだけ。そう言う方向や……」

「その過程において誘拐された、なのは隊長とフェイト隊長の保護児童。ヴィヴィオを捜索・救出する……そう言う線で動いていく。両隊長、意見があれば……」

「理想の状況だけど……また無茶してない？」

「大丈夫？」

本局艦隊も使えないこの現状では、最良の策だけど――。

「……正直、まだ後見人の皆さんと連絡が取れてないんで、今後の作戦は、私達の独断と言うことになってくる。でもな……」

「こんな時のための機動六課なんや!! ここで動けな、部隊を興した意味ない!!」

「了解」

「なら、方針に異存はありません」

「よし。ほんなら、捜査出動は本日中の予定や。万全の体制で、出動命令を待ってな……」

会議は締めくくられ、はやてさん達とフェイトさん達は会議室を出て行った。

俺とスターズの二人はまだ、会議室に残っていた。

「ティアナ……スバルはまだ……」

「はい……まだクラナガンの方に……。でも、午後には合流できるそうです。ギンガさんが迎えに行ってます。それにしても、あのまま本局でしてたらスバル達も……」

「マリーさんの機転のおかげだな、クラナガンの施設にしたのは正解だったな……」  
「そうだね……」

\* \* \*

クラナガン 技術研究室

「うん……神経系は完全回復してるわね。全力で動かしても痛みはないはずよ」  
「はい」

試しに左手を全速でパンチを出してみたが、痛みは全くなかった。

「うん、ありがとうございます。マリーさん」

『後は、マツハキヤリバーだね』

「……はい」

マツハキヤリバーは、あたしが無茶をしてかなりのダメージを負ってしまった。自己修復機能では追いつかず、大修理となってしまった。

「……ごめんね、マツハキヤリバー……あたしのこと、怒ってるよね……」

《「怒る」という感情が、私にはおそらく存在しません。心配は無用です》

「マツハキヤリバーは、AIだけど心があるって。一緒に走る相棒だつて言ったのに……あたしあの時、マツハキヤリバーの事、全然考えてなかった……」

「自分勝手に、道具扱いして……こんなに傷付けちゃった!!」

《いいえ、問題あったのは私の方です。あなたの全力に応えきれなかった。私の力不足です》

と、そのときシャーリーさんとマリーさんが部屋に入ってきた。



\* \* \*

「あつ……ごめん。大事なお話し中？」

「いえ……」

《反省会です》

「シャーリーさん、もう良いんですか？」

「六課が大変な時期だし、デバイス達の面倒も見ないとだし、寝てられないよ」

もうあんな思いはごめんだ。

ヴィヴィオが連れさらわれ、何も出来なかった自分を責めるのは。

今、みんなのデバイスのことを見られるのは私だけ。

ファイルが前線で戦う今、甘えてなんかいられない!!

「ねえ、スバル、マツハキヤリバーね、修理ついでにつて、強化システムのプランを自分

で考えちゃたのよ」

「えっ？」

「アウトフレームの強化とか、走行強度のアップとか……」

本当、マツハキヤリバーは驚く成長をしている。

以前、ファイルが言っていた人とデバイスの融合――。

その一端をかいま見た気がする。

「かなり重くなるし、扱いづらくもなるから、スバルに聞かないとって言ったんだけど

……」

「魔力消費1. 4倍……本体重量2. 5倍……やれます!! この程度なら確実に!!」

「じゃ、このプラン採用。良かったね、マツハキヤリバー」

《ありがとうございます》

私は、早速マツハキヤリバーの改修のためのパーツを取りに部屋を出る。

待っててね。すぐに改修するからね!!

\* \* \*

「ねえ、スバル」

「はい、何ですか？ マリーさん」

「何でファイルがマツハキヤリバーを作るときに、最初からこのスペックで作らなかったか分かる……？」

「えっ？」

「言われてみればそうだ。」

「ファイルは未来からきたんだから、この事を想定して作っていても不思議じゃなかったはずなのに？」

「ファイルね。こんな事言ってたの。最初からハイスペックで作ってあいつらに渡して、時期が来たら封印を解除してもいいかもしれない。でも、それでは本当の成長は望めない。あいつらが成長してデバイスと信頼関係が出来たとき、互いに成長していくことを」

考えられるような関係にしたいんだ。それこそが魔導師とデバイスの完成型だと思う。そして……自分たちが考えて導き出した答えは、俺が考えるものなんかよりずっとすばらしいものに違いないから……。そういつてたの」

「フィルが……そんなことを……」

「実際、フィルの考えは正しかったみたいね。こうしてマツハキャリバーは、スバルと一緒に戦うために、自分で考えたんですもの」

「マリーさん……」

「スバル、マツハキャリバーの気持ちに伝えてあげてね」

「はい!!」

そして、マリーさんも部屋を出て行った。

《もう一度私にチャンスをください!! 今度は必ず、あなたの全力を受け止めます》  
《あなたが、どこまでも走れるように》

「……うん……今度は絶対、一緒に走ろう。マツハキャリバー」

フィル、私にマツハキャリバーを作ってくれて、本当にありがとう。

あたし、絶対ファイルとマツハキヤリバーの思いに応えるよ。

\*

\*

\*

アースラ 通路

「訓練データの移行、大丈夫だった？」

《問題なく終了しました》

「うん」

拠点がアースラに移ったことで、訓練施設もアースラの訓練室へと場所を変えていた。

レイジングハートは破壊された六課のシステムからデータをサルベージし、バックアップと手持ちのデータから補填しながら、アースラへのシステム移行を完了させていた。

「あつ……なのはさん、レイジングハート」

「リイン。そっちは大丈夫なの」

「はいです。おかげさまで絶好調ですよ。もつとも私とヴィーチャーちゃんは殆ど傷ついてなかつたんですけどね……」

「そっか」

「シャーリーから、クロスミラージュ達のファイナルリミッター解除を頼まれたですよ？」

「うん……私がお願いしたの……」

手を差し出すと、リインはその上にちよこんと座った。

そしてリインを肩の上にもって行って、そこに座らせた。

\* \* \*

「本当は、もう少し慎重にいきたかつたんだけど、そうも言ってもらえない状況だからね

……」

「でもみんな、きつとちゃんと使いこなせるですよ」

「だね……」

「なのはさんとレイジングハートの方は……」

「ん？」

「ノーマル状態のエクシードはともかく、ブラスターモードは、やっぱり危険ですから……」

ブラスターモードは、本当に危険なシステムです。

威力が出る分、それだけ術者に負担がかかる諸刃の剣——。

「……使わないよ。ブラスターは、わたしとレイジングハートの、ホントに最後の切り札だからね」

《It's so》

「エクシードだけでも十分すぎる威力があるんだし、それで最後までしつかりキメてみせるよ」

《Yes》

そうは言うが、なのはさんとレイジングハートのコンビは、いざとなったら躊躇無く使う。

そして――。

フィルムも同じブラスターモードを持っている。

きつとフィルムも、ヴィヴィオを助けるために、そしてクアットロを倒すためになら絶対を使う!!

この二人はそういう人達だから――。

\*

\*

\*



会議後、俺は自分の部屋で待機していたが、エリオ達の様子を見てきたフェイトさんがやってきて、今は一緒にいた。

「エリオ達どうです?」

「さつきまでエリオはシグナムと訓練してたよ。ルーテシアとキャロがそれを見て、こんな時まで訓練して怪我したらどうするのって怒ってた」

「あちゃ……何やってるんだよ。休めるときは休んどけっての」

これから、あのクアット口達と死闘を繰り広げなければならぬんだ。  
フルパワーにしておくのも大事な仕事だつてのに――。

「そうね……ふふっ……」

「だな……ははっ……」

「……」

「……どうしたの?」

「……フェイトさん」

「なに？」

「……勝てるのか……。俺たちは……」

フェイトさんの技は辛うじて使えるけど、魔力が失われた今、そんな無茶は出来ない。そんな状態でどこまで戦えるのか……。

「……大丈夫だよ。例え私の魔力が無くなっても、フィールには私がいるから……」  
「!!」

——気づかれていた!?

ティアに説明するときも、この事はぼかしていつてる。だから、この事はプリムしか知らないはずなのに!!

「分かるよ……。いつものフィールと違っていたから……」

「フェイトさん……」

「だから……」

そう言つてフェイトさんは、自分の魔力の一部を分けようとしたが……。

魔力ははじかれて――。

フェイトさんの体内へ戻つていった。

「どうして……どうして、魔力が入らないの!？」

「俺の元々のキャパは今の状態がMAXだから。フェイトさんの魔力はイレギュラーだったから、受け入れられないんだと思う」

元々俺とティアは、六課の中でも魔力キャパは少ない方だった。

フェイトさんの魔力が入っていたおかげでキャパは広がつて、多少は魔力値は高くなっているけれど、それ以上にはならない。

だからフェイトさんが俺に魔力を渡してくれようとしても、これ以上は入らない。

「そんな……」

「大丈夫、未来ではこの状態で戦っていたんだから、心配することないって!!」

「大丈夫なわけ無いでしょう!! 未来では、その状態で戦ってティアナとフィルは命を落としてるのよ!!」

「まだ俺には……最後の手段があるから……」

「ブラスタ……モード……」

最終手段として、なのはさんと同じブラスターステムをプリムに組み込んでいる。

さらに、なのはさんのレイジングハートにはつけなかった最終兵器もある。

「出来れば、使わないようにするけど……」

「フィル、やめて!! ブラスタを使うのだけは、それでティアナは命を落としたんでしよう!!」

クアットロとの最後の戦い——。

あの時のことは今でも鮮明に思えている。

魔力が少ないティアは、自分の命を変換してブレイカーを放ったんだ。

「ファイル、今回の任務はフォワードと一緒に、地上の警護に回ってもらうから、だからこれ以上無茶はしないで!!」

「それだけは駄目だ!! 例えそうされても、ワープで俺はクアットロの所に行く!!」

悪いが、これだけは誰にも譲れない。

死んでいったみんなのためにも——。

「……わかった。もう止めない。でも、私も一緒に行動するからね!! それが駄目なら、プリムを取り上げるからね!!」

「ありがとう……フェイトさん。大丈夫……。後は俺の戦い方次第で、どうとでもなるよ」

——そうさ、あの時。

未来のフェイトさんが、命を託してくれたときに誓ったんだ。

魔力が無くなっても、最後まであきらめないうで戦うって……。

「フィル……」

そうやってフェイトさんは、俺にキスをしてきた。

しかも、深いキスを……。

息継ぎのため、唇を離すと……。

「フィル……キス……しよ……。この不安を消して……。例え離れても、心がつながっているって思えるように……いっばい……いっばい……しよ……」

フェイトさんは不安な表情でいっばいだった。

そうだよな……。

俺だって不安でいっばいなんだ。

フエイトさんはそれ以上に不安なんだ。

「いいよ……いっぱいしょ。お互いのぬくもりを……いっぱい感じたい……」  
「うん……」

そして、再び俺たちはキスを幾度と繰り返す。

お互いの気持ちの一つと思えるように――。

\* \* \*

アースラ 医務室

出撃前、私は、ヴィータちゃんの検診をしていた。

先の襲撃事件でゼストとやりあった事で、外傷はなかったが、身体にかけられた負担が馬鹿になっていない事がわかったからだ。

「シヤマル、まだか？」

「うん、もうちよつと……」

「仕事たまつてんだよ。さっさと済ませて戻らねーと」

「あと少しだから、じつとして!!」

「傷の治りが遅くなつてるのとか、蓄積ダメージが抜けづらくなつてんのなんて、もう何年も前から分かつてることじゃなかよー」

「……再生機能だけじゃないのよ。守護騎士システムそのものの異常も不安なの。私たち同士の相互リンクも弱くなつてるし、緊急時のはやてちゃんからのシステム復旧とか、魔力供給も……だんだん出来なくなつてきてる」

以前からあつたけど、さらに低下してしまっている。

このままじゃ、何かあつたら……。

「別に、そんなの日頃からしつかりやつてりゃ何の支障もねえ。もういいな……いくぞ



……」

「ヴィーたちちゃん……」

「……あたしらの身体の異常さ、多分これ、守護騎士システムの破損とか異変とか、そういうんじゃないかと思うんだ……。あたしたちが闇の書の一部だった頃から、心のどこかで望んでいたことが叶い始めてんだ。……死ぬこともできずに、ただずっと生きてきたあたしたちが、最後の主の、はやての下で、限りある命を大切に生きられるようになって……」

「初代リインがあたしたちにくれた大切な贈り物……。その続きさ。いいじゃんか、ケガしたら中々治らねえのも、やり直しがきかねえのも。なんか普通の人間みたいでさ」  
「……シグナムもザフィーラも同じこと言うのよね。最初で最後の私たちの命。大切に……。だけど精一杯使って生きればいいって……」

「私も同じよ。危険は怖くないし、永遠になんて興味ない……」

「でもね。私たちの優しい主、はやてちゃんのことと同じくらい、私はヴィーたちやシグナム、ザフィーラたちの事が心配。みんなで一緒に、誰もいなくならずにはやてちゃんよりインちゃんの事、ずっと支えていきたいから……」

モニターウィンドウを全部閉じた私は、ヴィーたちに歩み寄り、かがんで視線を

合わせながら、その小さな身体をギュツと抱きしめる。

「なら、心配ねえ。二代目祝福の風が、リインが力を貸してくれる。あたしとシグナムは絶対に墜ちねえ。ザフィーラもすぐに目を覚ます。十年の間に、守らなきゃならねえものがないぶん増えちまってな……キツチリ全部守って、ちゃんと元気で帰ってくるさ。心配性で料理の下手な湖の騎士を泣かせたりしないようにな……」

「……ばかね」

お願い——。

みんな無事に戻ってきてね。

\*

\*

\*

クラナガンから戻ってきたスバルとギンガさんは、あたし達と合流していた。

「あつ、ティア、みんな」

「ティアナ、みんな」

「スバルさん、ギンガさん、お帰りなさい」

「怪我……大丈夫……」

「あと、マツハキヤリバーの方は……」

「うん、あたしもマツハキヤリバーも無事完治」

完治したことは、スバルの手に輝くマツハキヤリバーが証明していた。

直後、艦内は警報音と警告灯の赤い光に包まれた。

\* \* \*

「くそ!! 魔法が通りづらい!!」

「対フィールド弾を撃てる奴、固まって迎撃!! 地上指令隊!! 指令隊!! 応答しろ!!」  
山岳丘陵地帯の深い森の中に建造された、アインヘリアル一号機。その巨大な魔導砲

は、周辺地域もろとも、大量のガジェットによる猛攻を受けていた。

アインヘリアルを推進しない理由の一つは、これだ。アインヘリアル自体の攻撃力は高くても、あくまで固定砲台であるが故に、後方支援的な役割しか果たせず、そのものを攻められたら弱いのだ。いざ攻められれば、逃げると言う選択肢は無く、防御に徹して守り通さなければならぬが、基本、どうしても籠城戦のような形になってしまうので、ガジェットのよう多数にものを言わせる相手に攻められれば、ご覧の有様である。

こんな時のための三機同時配備、だったはずなのだが……同時に攻撃を受けたのは、何の役にも立たなかった。

警備部隊の隊長が通信した先、一号機よりも標高の低い、ガレ場付近に建造された三号機周辺では、警備部隊が、既に全滅していた。これでは通信に応答できるはずも無い。

戦闘機人が殆どいないとはいえ、ガジェットの大量投入で充分おつりが来るのだ。

\* \* \*

スカリエツティ・ラボ

ガジエツト達がアインヘリアルを破壊している様子を見ている二人の男女。  
スカリエツティとウーノ。

「いよいよ、夢が叶うときですね」

「ああウーノ……聖王の器も見事な完成を見た」

「この聖王のゆりかごを発見し、触れることが出来て以来、この起動はあなたの夢でしたから……そのために聖王の器たる娘を捜し求め、準備も整えてきた」

「まだまだ、夢の続きはこれからなんだよ。古代ベルカの英知の結晶。ゆりかごの力を手にしてこれから始まるんだ……」

「誰にも邪魔されない。楽しい夢の始まりだ!!」

……と、その時。

「私たちの方に、侵入者？」

研究所の防衛システムが、異変を知らせてきた。

\*

\*

\*

研究所内で、猟犬の透明なシルエットが数匹、防衛システムによって攻撃され、霧散していた。

「ごんな、洞窟の奥に？」

透明な猟犬が突入した、周囲を森に囲まれた入口に、おかつぱの女性と白スーツの男性。

聖王教会シスター、シャツハ・ヌエラと、管理局査察官ヴェロツサ・アコース。

「僕の猟犬を発見して、その上、一発で潰した。並のセキュリティじゃない、ここがアジトで間違いないね」

「すごいですね、ロツサ。こんな場所、よく掴めました」

「シャツハ……いい加減、僕を子供扱いするのは止めて欲しいな。これでも一応、カリムやはやてと同じ、古代ベルカ式の、レアスキル継承者なんだよ」

「無限の猟犬、ウンエントリヒ・ヤークト。貴方の能力は存じ上げていますよ」

「……ま、今回の発見は、フェイト執務官や、ナカジマ三佐の部隊をはじめ、協力してくれた地上部隊の、地道な捜査があつてこそものだけどね……ん？」

茂みや森の中に隠して配置されていたガジェットが、二人の周囲を取り囲んだ。

「……奥からも出てくる」

「大人しく帰してくれる気はなさそうですね」

「あんまり戦闘は得意じゃないけど……まあこのくらいなら  
「お任せください」

私はヴィンデルシャフトを起動させ、戦闘態勢に入った。

私の役目はカリムとロツサを守ることだから……。

\* \* \*

アースラ ブリッジ

「アインヘリアル一号機、二号機、ガジェット撤収が始まっています」

メインオペレーター席から、シャリーリーの報告が上がった。

「前回よりも、動きが早い」

「早めに叩かんと、取り返しのつかんことになるけど……嫌な感じに拡散してる。隊長たちの投入はしづらいなあ」

ガジェットの動きを見ながら動的に作戦を練る私達。

その時、シャリーリーの手元では、パネルのボタンが点滅し、緊急入電を示していた。



「アコース査察官から、直通連絡!!」

『はやて、こちらヴェロツサ。スカリエツティのアジトを発見した。シャツハが今、迎撃に来たガジェットを叩き潰してる。教会騎士団からも戦力を呼び寄せてるけど、そつちからも制圧戦力を送れるかい?』

「ああ……もちろんやけど」

『廃棄都市から別反応、エネルギー反応増大!!』

操舵室でアースラを操縦しながら管制補助をしている、ルキノから通信が入る。

\* \* \*

『これは……巨大な竜!! 大変です!! まっすぐ地上本部に向かってます!!』

『映像が、今』

廊下を移動中だった俺とフェイトさん、なのはさん、スバル、ティア、キャロとルーテシアは、足を止めてモニターウィンドウを見ていた。

切り替わった画面に現れたのは、巨大な黒竜の姿だった。その姿に驚いたのはキャロとルーテシアだった。

「あれは……まさか!!」

「フレイム……グロウ……」

「キャロ、ルーテシア、何だ、そのフレイムグロウというのは?」

「はい、私も言い伝えでしか知らないんですが、ロストロギアに封じられた邪悪な竜。それがフレイムグロウなんです」

フレイムグロウ

かつて、古代ベルカ時代その凶暴な力で、あたり一帯火の海に変えるほど力を持った竜。

だが、あれは伝説上の生物じゃなかったのか!?

「しかも……あれはこのミッドの山奥深くに封印されているはず……いったい誰が……まさか!!」

「クアットロのヤツしかいない……。戦闘機人がいなくても良いという言葉はこういう事だったんだ……」

「フィル……」

\* \* \*

スカリエツティ・ラボ入口前

撃破したガジェットの残骸が、これでもかと言うほどに散乱していた。

にもかかわらず、さすが本拠地だけあって、増援が緩むような気配は無い。

「……まだまだ来るよ。ここにとどまるのはキツイかな」

「なんの、まだまだ」

二人とも、疲れた様子は全く無いが、これだけの膨大な量を捌くとすると、さすがに

精神的にきついものがある。

そのとき、あたりが激しく揺れ始め、大地が唸るような地響きが鳴り始めた。

「さあ……いよいよ復活の時だ」

『私のスポンサー諸氏。そして、こんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う、聖王教会の諸君。見えるかい？ これこそが君達が忌避しながら求めていた、絶対の力』

地震がいよいよ激しくなり、そこかしこに地割れが起きた。と思つたら、森の一部を切り取つたかのように、地面がせり上がる。

付着した木や岩をバラバラと振り落として姿を現したのは、魔力で浮遊する、全長数千メートルにも及ぶ、超巨大機動要塞。

その様子は、世界中に配信されていた。

『旧暦の時代。一度は世界を席卷し……そして破壊した、古代ベルカの悪夢の英知』

「聖王の……ゆりかご」

シャツハを抱きかかえて上空に逃れていたロツサが、戦慄しながら呟いた。

『見えるかい？ 待ち望んだ主を得て、古代の技術と英知の結晶は、今、その力を発揮する』

\*

\*

\*

アースラのなののはの元にも、その様子は届いていた。

聖王のゆりかご、玉座の間。

その椅子に座っているのは……ヴィヴィオ。

「ママ……パパ……あつ……いたいよ……こわいよ……ママアア……パパアア!!」

「ヴィヴィオ……」

「うっ……あああ……うわあああ……」



もの。でも、やっと手に入れましたわ〜』

——どこまで人の命を奪えば気が済むんだ!!

未来で、あれだけの人々を虐殺し、そして、この世界でもまたそれを繰り返そうってのか——。

『そんなことはどうでも良いんですの〜 いかがかしら、中々の音楽でしょう。少女の悲鳴というのは〜』

「題名はそう……【悲劇】なんてどうかしら。娘が奪われ、その思いも届かず、こうやって悲鳴を上げているんですものね。最も、私にとっては快感なんですけど〜。あははははははっ!!』

もう我慢の限界だった。

下品な笑いをするクアットロの画面に、俺は——。

「……………言いたいことは、それだけか」

『あゝら、なに怒ってるんですのお。そんなに怒っていたらお肌に悪いですわよお』

こんなやつのために――。

こんな女のために、俺はすべてを失った――。

そして、また俺から大切なものを奪い取ろうとしている。

『あははははっ!! その憎しみに彩られた表情、最高ですわ。フィル・グリード』

「……………ゆりかごで待つてろ。必ず……………殺す!!」

あの女だけは、必ず俺の手で始末する。

この俺の命に代えてもだ!!





## 第22話 無限の欲望

「巨大船、地上より浮上!!」

「まさか、これは!!」

聖王教会本部、カリム・グラシアの執務室。

シャツハが出払っているため、代わりに護衛の任に就いている二人の教会騎士が、驚きの声を漏らした。

私と二人の騎士が見ている画面の中では、土ぼこりを巻き上げながら、浮上する巨大要塞の様子が、映し出されている。

その現場の間近にいるシャツハから、通信が入ってきた。

『騎士カリム。これがファイルが言っていた……』

「踊る死者たち。死せる王の下、聖地より還った船。古代ベルカ、聖王時代の……究極の質量兵器。天地を統べる聖者の船」

「聖王の……ゆりかご」

\*  
・  
\*  
\*  
\*

アースラブリッジ

「一番なつてほしくない状況に、なつてもうたか……」

アースラブリッジの艦長席で目の前のウィンドウは、聖王教会のカリムと通信が繋がっている。

『教会の……ううん、私の不手際だわ。予言の解釈が不十分だった!! さらにファイルからの情報でゆりかごのことは分かっていたことなのに!!』

「未来なんて、本来わからへんのが当たり前や。カリムや教会の皆さんのせいとちやう……さて、どないしよか」

私が頭の中に色々な考えを巡らせていると、もう一つ、通信ウィンドウが開かれた。

『はやて……クロノだ……』

「クロノ君!! 通信機能が回復したんか!!」

『ああ……何とか本局のコンピュータと通信機能は、何とかなった。だが、次元航行艦隊の方は、目処は立たない状態だ』

「そっか……やっぱ援軍は、無理か」

『残念ながら、本局の機能を回復させるのに精一杯だ。ゆりかごに対しては、君たちが中心となり、地上部隊と連携を取って、事態にあたる。多少の無理はかまわない』

「行けるか……はやて……」

「うん」

\*

\*

\*

時空管理局 本局内某所

最高位の機密レベルに属する、闇に満ちた空間。

立ち入りの出来る人間の極めて限定されたその中で、人の話し声が響いていた。

本局内にあつてこの場所は、各機関と独立しているため、今回のサイバーテロの被害には全くの無傷だった。

螺旋を描いた配管に支えられ、ぼんやりと光る三本のシリンドラー。

時空管理局、最高意思決定機関 最高評議会

「……ジェイルは、少々やりすぎたな」

「我らが求めた聖王のゆりかごも、奴は自分の玩具にしようとしている」

「止めねばならんな」

「だが、ジェイルは貴重な個体だ。消去するにはまだ惜しい」

「しかし、かの人造魔導師計画のゼストは失敗し、成功には至らなかつたが……聖王の器は、完全な成功のようだ。そろそろ、良いのではないか？」

「我らが求める、優れた指導者によって統べられる世界。我らがその指導者を選び、その陰で、我らが世界を導かねばならん」

「そのための生命操作技術、そのためのゆりかご」

「旧暦の時代より、世界を見守るために、我が身を捨てて永らえたが……もうさほど長くは保たぬ」

「だが次元の海と管理局は、未だ我等が見守ってゆかねばならぬ」

『……失礼します』

音声オンリーの通信ウィンドウが開き、そこから女性の声が聞こえてくる。

「ゼストが五体無事であればな。ジェイルの監視役として最適だったんだが」

新しいウィンドウが開かれ、そこにはゼストの顔写真が表示されていた。

現在、ゼストや戦闘機人が捕まったことは本局には連絡は入れてない。

とある人物の知恵で連絡をあえて入れなかったのだ。

この事を知っているのは、機動六課と極一部の人間だけである。

構わず話を続ける評議会の三人のところに、制服姿の印象の酷く薄い女性が、滑るよ

うに動く浮かぶ板に乗ってやってきた。

「皆様、ポットメンテナンスのお時間ですが」

「ああ、お前か」

「会議中だ、手早く済ませてくれ」

「……はい」

「お悩み事のようなですね」

メンテナンスに来た女性局員が、ポットのパネルを操作しながら言った。

「なに、瑣末な厄介ごとよ」

「お前が、気に掛ける事でもない」

「……はい」

「レジアスや地上からは、何の連絡も無いのか？」

「ええ……未だに、どなたからも」

「そうか。しばらくは慌しくなりそうだ。お前にも苦勞をかけるな」

「いいえ。私は望んで、ここにいますから」

女性局員は、うつすらと、そしてどこか含みのある笑みを浮かべながら、答えた。

\*

\*

\*

アースラ

ブリッジと会議室は通信で繋がり、恐らくこの事件において最後の大規模な出撃になる。

現在、作戦の最終確認を行っていた。

メンバーは、部隊長のはやと、フィル、スターズ分隊、ライトニング分隊のフルメンバー、リインと、輸送部からアルトが参加している。

『今回の発端は、最高評議会がジェイル・スカリエツィを利用しようとして、逆に裏切られたことから始まった。どこからどこまでが誰の計画で、なにが誰の思惑なのか、そ



れはわからへん』

『……そやけど今、巨大船が空を飛んで、街中に大量のガジェットと巨大な竜が現れて、市民の安全を脅かしてる……これは事実。私たちは、これを止めなあかん』

「ゆりかごには私達が向かう。地上のガジェットは、各部隊が協力して対応に当たる」  
「だけど、高レベルなAMF戦をできる魔導師は多くない」

正直、地上部隊にAMF戦が出来る魔導師は少ない。

そのことを危惧してレジアス中將は、非魔導師でも戦えるように訓練や装備を考えていたのだが、結局間に合わず、戦えるのは中將の特殊部隊くらいになってしまった。

「だからわたし達は、ゆりかごと地上、2グループに分かれて、各部署に協力することになる」

ただでさえ少ない戦力を分散させるのは、賢いやり方とは言えないが、この状況ではやむをえないだろう。

アジトの方は引き続き、聖王教会が中心となって担当する。

本局の応援がない今、六課の方はこれ以上戦力は分散できない。

「フェイトさん!!」

「フィルさん!!」

「あの……」

作戦会議が終わり、会議室から出ようとしたが、キャロとルーテシアとエリオの三人に、心配そうな表情を浮かべながら、後ろから呼び止められた。

「別グループになっちゃったね。ごめんね……。私、いつも大切な時に、二人のそばに居られないね」

フェイトさんはエリオとキャロの肩を、俺はルーテシアの肩を抱き寄せた。

本当は俺もみんなと一緒に行動したかった。

ましてエリオ達は、この戦いで死んでしまったんだ。

あの時の悲劇はもう繰り返したくない。

さらに今回はあの黒竜が相手なんだ。

「そんな……」

「フェイトさん、フィルさん……たった二人で、スカリエッティのところになんて、心配で……」

「ドクターも、クアットロも、本当に危険……どんな罠を仕掛けてるか……」

作戦会議の結果、フォワードチームは地上本部へ侵攻中の黒竜に対応。

はやてさんがアースラでゆりかご周辺の制空権の確保。

シグナム副隊長は、何かあったときのため地上に待機。

なのはさんとヴィータ副隊長はゆりかごに突入して、内部から停止または破壊。

そして俺とフェイトさんは、なのはさん達とゆりかごに突入はするが、その後はスカリエッティとクアットロの討伐。

この任務で、最も危険な位置にいるのが俺とフェイトさん。

「緊急事態のために、シグナムには地上に残ってもらいたいし、フィルも一緒だよ。一人

じゃない……三人とも頑張つて。絶対無茶とかなないんだよ!!」

「エリオ、キャロとルーテシアのこと、しっかり守つてやれよ。いいな……」

「はい……」

「それは、フェイトさん達もですよ……」

「そうですよ。フィルさん……」

\* \* \*

『第1グループ降下ポイントまで、あと3分です』

ルキノさんのアナウンスが、艦内に響く。

ティア以下フォワードチーム六名と、俺となのはさんとヴィータ副隊長は、発進口前で出撃の準備を完了させていた。

アギトは秘密任務のため、地上に降りている。

「今回の出勤は、今までで一番ハードになると思う」

「それに、あたしもなのはもフィルも、お前らがピンチでも助けにいけねえ」

「みんな、目をつぶって今までのことを思い出してみて。ずっと繰り返し返してきた基礎スキル、磨きに磨いたそれぞれの得意技、痛い思いをした防御練習、全身筋肉痛になっても繰り返し返してきたフォーメーション練習、いつもボロボロになるまでわたし達とやった模擬戦……」

フォワード全員、今までのことを思い出して、本当にきつい思い出ばかりよぎっていた。

「目、あけて良いよ。まあ、わたしが言うのも何だけど、きつかったよね……」

「……あ、あははは……」

あれはきついなんてもんじゃない。

そんな言葉では片付けられない、一種の地獄だったぞ……。

「それでも、……までよくついできた」

「六人とも誰よりも強くなった……とは、まだ言えないけど……」

「……うう……」

「だけど、どんな相手がきても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた。守るべきものを守る力、救うべきものを救える力、絶望的な状況になっても立ち向かっていける力、ここまで頑張ってきたみんなはそれがすっかり身についている。夢見てあこがれて、必死で積み重ねてきた時間、どんなに辛くても止めなかつた努力の時間は、絶対自分を裏切らない!! それだけ、忘れないで……」

「キツイ状況を、ビシッとこなして見せてこそその、ストライカーだからな」

「……はい!!」

「ファイル、最後にみんなに一言お願い……」

「えっ? 俺ですか?」

「うん……フオワードのみんなとは、別行動になっちゃうでしょう。だからお願い……」

「……わかりました」

今、俺がみんなに言えることはたった一つだけ――。

「……生きて……必ず、生きて帰ってきてくれ……。死んで敵を倒そうなんて……絶対

に思わないでくれ」

——もう、誰にも死んで欲しくない。

あんな思いをするのは、俺だけでたくさんだ!!

「「「「ファイル（さん）……」」」」

そうさ、何も残りはないんだ。

残されるのは悲しみだけ……。

「だから、みんな。絶対生きて、このアースラに戻ってくるぞ!! いいな!!」

「「「「おう!!」」」」

「うん」

「だな」

「機動六課、フォワード隊出動だ!!」

「「「「うん（はい）!!」」」」

ティア達は待機している戦闘用ヘリに向かったが、スバルだけが残っていた。

「先に……行ってるね……」

なのはさんとヴィータ副隊長は、一足先に立ち去った。

「どうした？ もうみんな行ってたぞ……」

「うん……」

「ヴィヴィオのことは心配するな。必ず助けるからな……」

「違うの!! ヴィヴィオのことも心配だけど、それより、あたしは……フィルのことが心配で……」

「ありがとう……。でも大丈夫だ。一番心配だったのは、今回の戦いに参加できないことだったんだ。でも、何とか戦えるようになった。現場に出ることが出来れば、後は何とかなるからな……」

俺はスバルの頭を、多少乱暴気味になでていた。



「ちよ、ちよつとフィール!!」

「それとお前も、六課自慢のフロントアタッカーの一人なんだぞ。俺が作ったマツハキヤリバーで思う存分暴れてこい!!」

「うん!!」

俺たちは互いに握り拳を作り、それをコツンとぶつけあった。

\*

\*

\*

六課襲撃の時に破壊されてしまったJF704に代わり、この戦いのために用意された戦闘用ヘリJF705 XX。

そのカーゴルームで、クロスミラージュを確認しながら、あたしは出撃の時を待っていた。

第三形態、長距離特化型のブレイズモード。

苦しい訓練の末、なのはさんからお墨付きをもらえ、何とか実戦投入が可能になった。

そんな時、カーゴルームに、スバルが泣きながらやってきた。

「……出勤前に、何、泣いてるのよ」

「ファイルに頑張つてつて……ぐすつ……言おうと思つたのに……ぐすつ……」

「逆に、あいつに励まされて帰ってきた？」

「うん……」

「馬鹿ね……こうなるって事は、少し考えれば分かることでしょう。あいつの性格を考えればね……」

「うん……」

こんなときでも、自分のことより、みんなのことを考えるあいつなんだから、そのくらい分かりなさい。

\*

\*

\*

ミッドチルダ上空

雲上を滑るように飛ぶ艦、アースラ。

フォワードチームを乗せた赤い戦闘用ヘリが出動し、アースラから離れ、雲海に突っ込んでいた。

「ほんなら、隊長陣も出動や!!」

「うん!!」

「おう!!」

「はい!!」

「みんな……本局艦隊がない今、私とリインは全体の指揮をしなければならぬ……。そやから、一緒に戦うことができない……」

悲痛な表情で、はやてさんは俺たちに自分の思いを言う。

本当なら、自分が出て戦いたいはずなのに――。

「その代わり……アースラは……みんなの帰ってくる場所は、私が必ず守る!! だから絶対に帰ってくるんやで!!」

「「はい!!」」

そして第二降下ポイントに到達し、隊長陣は既にスタンバイを終えていた。

これが最後の戦いだ。

いや——。

最後にしなきゃいけないんだ!!

俺たちが倒れるか……。

クアットロが破滅するかだ!!

『降下ハッチ、開きます』

ハッチが開くと同時に、ピンク、金、赤、白、四色の光が、アースラ底部から大空に躍り出た。

『機動六課隊長、副隊長一同……能力限定、完全解除!! はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん、そして……ファイル。皆さん……どうか!!』

聖王教会でカリムさんが、機動六課隊長陣のリミッター解除プログラムを展開した。

いつか、クロノ提督の権限で行ったのとは違う完全解放だ。

フェイトさんの、完全解除されているので必要はない。

「迅速に解決します」

「お任せください」

『リミット、リリース!!』

解除プログラムの中心を人差し指で押したのと同時に、空を流れていた四条の光が、

爆発的な光量を放つ。

その閃光が収まると、四人はバリアジャケット姿に変身していた。

「エクシード……ドライブ!!」

「フリーダム……フルドライブ!!」

《Ignition!!》

なのはさんと俺は、それぞれフルドライブを起動させ、バリアジャケットをチェンジした。

デバイスの方も、なのはさんはエクシードモードに、俺はプリムをブレイズモードにしていた。

\* \* \*

「なのは、ファイル……」

「フェイトちゃん（さん）？」

「なのはとフィルのリミットブレイク……プラスターモード。二人とも言っても聞かないだろうから、使っちゃ駄目とは言わないけど……。お願いだから、無理だけはしないで……。」

その台詞は、そのままそっくりフェイトさんに言いたい。  
フェイトさんだって、なのはさんに負けず劣らず無茶するときがある。

「わたしは、フェイトちゃんの方が心配……。」

「ええ、フェイトさんとバルディッシュのリミットブレイクだって、高性能な分、危険も負担も大きい……。」

「私は平気……大丈夫……。」

「む……もう、フェイトちゃんは、相変わらず頑固だな……。」  
「まったくだ……。」

フェイトさんって、真面目なんだけど、少しだけ頭が固いところがある。

「な、なのはやフィルだって、いつも危ない事ばかり!!」

「だって、航空魔導師だよ。危ないのも仕事だよ。ファイルも、それは分かっているし……」  
「だからって、なのはとファイルは無茶が多すぎるの!! 私か、私たちがいつも、どれだけ心配してるか」

「知ってるさ……ずっと心配してくれてたこと、よく知ってる」

その優しさに何度も救われ――。

その笑顔に、何度も安らぎをもらったか――。

「だから、今日もちゃんと帰ってくる。ヴィヴィオを連れて、一緒に元気に帰ってくる」

「なのは、ファイル……うん!!」

「そろそろスピードアップするぞ。フェイト隊長もファイルも無茶するなよ……」

「頑張ろうね、フェイトちゃん、ファイル」

「うん、頑張ろう」

「ええ、頑張りましょう」

俺たち三人は、拳をコツンと合わせた後、ゆりかごに向けて、更なる加速に入る。



\*

\*

\*

悲しい出来事――。

理不尽な痛み……。

どうしようもない運命――。

そんなのは嫌いで、認められなくて、打ち抜く力が欲しくて、わたしはこの道を選ん  
で……。

同じ思いを持った子達に、技術と力を伝えてく仕事を選んで……。

この手の魔法は大切な物を守る力、思いを貫き通すために必要な力……。

「見えた!!」

「あれが……」

「ゆりかご……」

「ついに捕らえたぞ……」

待ってて……ヴィヴィオ。

今、助けに行くからね!!

\*

\*

\*

時空管理局 本局内某所

脳だけの姿になった最高評議会の三人がいる空間に、ガラスの割れるような音が二度響いた。

培養液が床一面にこぼれ落ち、シリンダーの中に浮かんでいた脳髄は、床に落ちた衝撃で、あたりに散乱していた。

ポットのメンテナンスをしていた女性局員の右手には、鋭い鉤爪が装着され、そこからも培養液が滴り落ちていた。

「な、何故!! 何故だああああ!!」

メンテナンズを行っていたはずの女性が、いきなり鉤爪でポットを破壊したのだ。

一つだけ残されたポット……評議会議長は、何が起きているのか理解できないかのように叫ぶ。

女性局員は、感情の乏しい声で答えた。

「……ご老体に無理をされては、良くありませんからね。そろそろ、お休みを」

「貴様は、ジェイルの!!」

やっと気付いたか、とても言いたげな薄い笑みを浮かべる女性局員。

その身体の輪郭に、別のシルエツトが重なったかと思うと……一瞬にして、その姿は

別のものに書き換わっていた。

水色を基調としたボディースーツ、首のプレートに刻み込まれたⅡの文字。

元ナンバーズ2番、ドゥーエだった。

「正確に言えば、もうドクターのではありませんけどね。私は……」

「何だど!!」

「今は、たった一人の大切な人のために動いてるわ。私は闇、そう光を支える闇ですわ……」

ユーノ司書長、独断で行動してごめんなさい。

でも、この事だけは決着を付けなくてはいけないの。

ジェイル・スカリエッティを生み出し、世界を自分たちの都合の良いようにしようとした。

こいつらだけは、私の手で始末を付けなきゃならなかった……。

「貴方が見つつけ出し、生み出し育てた、異能の天才児。失われた世界の智慧と、限りなき欲望をその身に秘めた、アルハザードの遺児。開発コードネーム、アンリミテッド・デ

ザイア……ジエイル・スカリエツティ。彼を生み出し、利用しようとした時点で、この運命は決まっていたのですよ。どんな首輪を付けようと……いかなる檻に閉じ込めようと。扱いきれるはずもない力は、必ず破滅を呼ぶものです」

そしてドウエは、清々しい笑みを浮かべた。

「ようやく、枷から解き放たれる時が、やってきました」

「馬鹿な!! 馬鹿なっ!!」

「おやすみなさい……永遠にね!!」

私は静かに、鉤爪を装着した右手を振り下ろした。

\*

\*

\*

ゆりかごの周辺では、空戦魔導師とガジェットで、激しい空戦が行われていた。

ミッドに残った空戦魔導師を総力で集めて戦っていた。

「魔導師部隊、陣形展開!! 小型機の発着点を叩いて!!」

フェイトさんの指揮で、作戦を次のフェイズに移行させていた。

「でえい!!」

ヴィータ副隊長も、ガジェットを真つ二つにしていた。

「中への突入口を探せ!! 突入部隊、位置報告!!」

桃色と白色の光が戦域を両断する。

砲撃は、その空域に集められたガジェットを爆散させた。

ストレイトバスター

密集隊形をとる敵に対して効果絶大の砲撃。

その効果は伝播し、爆発の連鎖を引き起こす、反応炸裂砲。  
これを俺となのはさんはぶっ放していた。

「第七密集点撃破、次!!」

「邪魔者は全部消しとばす!! だから、指示をお願いします!!」  
『は、はい!!』

タイムリミットが迫ってるんだ。

ゆりかごが軌道ポイントに到達したら、全てお終いだ!!

\* \* \*

なのはちゃん達が出撃した後、それを待っていたかのように、ガジェットの大群が  
アースラを攻めてきた。

その数は測定不能……。

アースラの主砲と副砲のおかげで迎撃は出来ているが、これ以上先には進めない。

「ルキノ、ゆりかごが到達するまでの時間、計算できたか」

『はい、軌道ポイントの到達まで……推定、約3時間です!!』

「3時間……」

私達に残された時間は、あまりにも少ない——。



## 第23話 最終決戦

XV級艦クラウドディア

何とか修理をし、応援に向かおうとしていたが、思ったより被害が大きく、修理が完了しても、ポイント到達時間には到底間に合わない。

事態への対策を練るため、本局のリンディ総括官、無限書庫のユーノと、通信を繋げていた。

『……ええ。艦隊運用部も通信部も、大騒ぎよ。ただ、レオーネ相談役が上層部を取りまとめられてるし、運用部はレティたちが上手く立ち回ってくれてるから、これ以上の被害は出ないと思う』

「助かります。ユーノ、そっちは？」

『聖王のゆりかごのデータ、さすがにかなり少ないけど、発掘は無事完了。今送るよ』  
「ああ。こちらから、アースラに全てに送信する」

ユーノから受け取ったデータを確認し、アースラへ転送する。

『あの船の危険度は?』

『極めて高いです。先史時代の古代ベルカですら、既にロストログア扱いだった古代兵器。失われた世界、アルハザードからの流出物とも……』

「……アルハザード」

『我が家にとつては、あまり思い出したくない名前だけど……』

『……その真偽はともかくとして、最大の危険は、軌道上に到達される事。軌道上、二つの月の魔力を受けられる位置を取る事で、極めて高い防御性能の発揮と、地表への精密狙撃や、魔力爆撃が可能となるっていうのは、教会の伝承にある通りだけど……。こつちの調査では、次元跳躍攻撃や、次元空間での戦闘すら可能とある。その性能が完全に発揮されれば、次元航行隊の艦隊とも、正面から渡り合える。これは、ファイルが経験したことでも立証されている』

『軌道上に上がる前に、止めないといけないのね』

「対抗策は?」

『鍵となる聖王がそれを命じるか、本体内部の駆動炉を止める事が出来れば……』

ゆりかごに突入予定のなのはおかヴィータが、駆動炉を破壊する。

或いは……。

「……鍵の聖王、ヴィヴィオは、スカリエツテイの戦闘機人に、操作されている可能性が高い」

『スカリエツテイの殲滅でも、止まる可能性はあるのね？』

『おかささん、クロノ。スカリエツテイの殲滅は、フェイトがやってくれるよ』

『アルフ……』

『フェイトがずっとがんばって、今まで追いかけてきたんだ。きつとつかまえてくれる!!』

\* \* \*

ゆりかご 周辺空域

戦線には地上の航空魔導師隊も加わり、戦闘は熾烈を極めていた。

そんな、空戦魔導師たちがガジェットをシラミ潰しに叩いている中、ゆりかごの砲門が開き、高エネルギーが集中し始めた。

さつきまで街を攻撃していたレーザー砲とはケタが違うエネルギー量だ。

その砲撃のターゲットは――。

「何だ、あの馬鹿でかいエネルギーは!!」

「フィル、あれは何なの!! まだポイントに行っていないのに、あれだけの出力があるなんて!!」

「あれは……まさか!!」

前の時、はやてさん達を消滅させた悪魔の兵器……。

「カイザージャッジメント……」

「何なの、それは?」

カイザージャッジメント――。

ゆりかごの主砲で、軌道ポイントに行つたゆりかごが使用すると、威力はアルカンシエルを遙かにしのぐ。

「くそ!! 奴ら、今あるエネルギーで、アースラを沈めようとしてるんだ!!」

\* \* \*

アースラ ブリツジ

ゆりかごの様子は、こちらのモニターで確認できていた。

ゆりかごに集中しているエネルギーは、命中すればアースラなんて簡単に消し飛ぶ。

「グリフィス君、アルカンシエルのチャージは?」

「今からでは間に合いません!! チャージをするのが精一杯です!!」

「エネルギーのチャージは可能なんやな」

「ですが、あっちの方が早いです!!」

計算の結果、ゆりかごの主砲が発射されるのに60秒、こっちが発射できるのには180秒かかる。

落ち着け、落ち着くんや……。

逆転の策はまだある!!

「私に考えがある!! シャーリー、チャージしたエネルギーを、全部プロテクションに回して!!」

「はっ!! そうか!! はい!!」

シャーリーは私の意図が分かり、全速でキーボードを打ち、アルカンシエルのエネルギーを、防御システムに集中させた。

\*

\*

\*

ゆりかご

「ふふっ。まず、最初は還る所を無くしてあげますわ。自分の無力さを嘆きなさい。フィル・グリード」

ゆりかごの主砲は軌道ポイントにつかないと、最大のパワーは発揮できないが、一発撃つだけでしたら、今でも出来ますのよ。

「カイザージャッジメント……」

キーボードを操作し、起動スイッチを押すと、主砲は巨大なエネルギーを生み出す。黒き閃光は、すべてを滅ぼす。

それは、すべてを破壊する裁きの光として――。

「発射ですわ!!」

主砲が発射され、アースラに一直線に向かっていく。

「終わりですわ!!」

\*

\*

\*

アースラ ブリッジ

「高エネルギー体接近!!」

「八神部隊長!!」

「エネルギーバイパス完了!! これで出力はあがります!!」

これで、アースラのエネルギーをすべて回すことが出来る。

一か八かの賭や!!

「ようやった、シャーリー!! プロテクション全開!! 総員対ショック防御!!」



「はい!!」

「プロテクション展開!!」

シャーリーの操作で、アースラ全体にプロテクションが展開された。

通常ならこんな防御くらいじゃ防ぎきれないが、今はアルカンシエルに回そうとしたエネルギーもある。

そう簡単には破られない!!

『きやあああ!!』

「うわあああ!!」

「みんな頑張つてや!!」

ゆりかごの主砲は、アースラのあらゆるところは破壊していく。

それでも何とかしのぎきったが、ゆりかごの主砲のエネルギーはすさまじく――  
|。

『エンジン出力60%まで低下!!』

『魔力炉出力150%オーバー、これ以上の負担には耐えられません!!』

『左舷主砲3番、5番大破!! 右舷後方副砲使用不能!!』

『プロテクションシステム、2番回路、3番回路、ダウン!!』

各機関からブリッジに報告が来ていた。

もうすこしなんや、頑張つてやアースラ——。

『あゝら、しのいだんですの〜』

『クアットロ!!』

アースラの通信パネルに、クアットロの姿が映し出された。

その嫌つたらしいしゃべり方、聞いているだけでも反吐がでそうや!!

「あんたらの思うとおりににはならんで!! アースラを……機動六課を舐めんや!!」

『そうやって言つてられるのは、今の内ですわ。見ましたでしょう。ゆりかごのパワーは。軌道ポイントにあげればあんな物じゃありませんわ。おほほほほ!!』

クアットロからの通信は切れた。

\* \* \*

「はやてさん!! みんな!!」

『心配しなくてもええよ……こっちは何とか生きてるよ』

「はやて、本当に大丈夫なの?」

『大丈夫……言ったやろ、アースラは必ず護るつて……』

「はやてちゃん……」

『なのはちゃん、フェイトちゃん、フィル、こっちのことは心配しないで、みんなはゆりかごを止めることに専念してや!!』

『高町一尉、奥へ進めそうな突入口が見つかりました、突入隊二十名が先行しています!!』

ヴイータ副隊長と合流して、突入口を検索していた俺となのはさん達の元に、通信が入った。

「フエイトさん!!」

『外周警戒は航空部隊の方で引き受けます。六課の皆さんは突入してください!!』

「おう」

「了解」

「お願いします」

「機動六課、スターズ1、2、ライトニング1、ライトニングスター0、内部通路突入」

壁をぶち破ってゆりかご内に突入した機動六課メンバー。

出た場所は天井の高い、通路で、まず着地するために速度を緩めたところで、なのはさんの足元に発生しているフライヤーフィンが大きく揺らぐ。

「AMF!？」

「内部空間、全部に？」

「フィル!!」

「分かってますよ!! プリム!!」

《了解です!!》

俺たちはそれぞれ魔力を集中させ、館内廊下に着地した。

この程度のAMFで、今更驚きはしないよ。

俺たちがこの程度のこと、予測してないと思っていたか!!

\*

\*

\*

### 廃棄都市区画

降下ポイントまであと一歩……というところだったが、ガジェットII型に捕捉されてしまったJF705。

最新鋭の戦闘用ヘリでも、飛行タイプであるガジェットII型に比べれば、機動力は確実に劣ってしまう。

どうにかして振り切ろうとしてはいるが、どれも上手くはいっていない。

「ゴメンねみんな、思いつきり揺れるから、しつかり捕まってる!!」

アルトさんは何の躊躇も無く、ビル街にへりを突つ込ませた。

その甲斐があり、何とがガジェットは振り切ることが出来た。

「よし、振り切った!!」

「アルト、すごい!!」

『ありがとうスバル。さあ、降下ポイントについたよ。みんな準備は良い!!』

「「「「おう（はい）!!」」」」

後部ハッチが開き、降下準備が完了する。

同時に、最終ブリーフィングをした。

「確認するわよ。あたし達はミッド中央、市街地方面、敵戦力の迎撃ラインに参加する。地上部隊と協力して、あの黒竜を叩く。それがあたし達の仕事」

「他の隊の魔導師はAMF戦の経験がほとんど無い。だからあたし達がトップでぶつかって、とにかく向こうのガジェットを叩いて戦力を削る!!」

「私達があの黒竜を止めれば、後は迎撃ラインで何とかしてくれる。そこまでが勝負ね……」

「でも、なんだか……ちよつとだけエースな気分ですね」

「そうね……任務のランクもエース級になっちゃたけどね」

伝説のロストロギア、フレイム・グロウ。

そんなの相手にしなければならぬんだから、正直厳しいとしか言えない。

本来なら、なのはさんとかエース級の魔導師が必要な任務だ。

「ガジェットも黒竜も迎撃ラインを突破されたら、市街地や地上本部まで一直線です!!」

「ガジェットは何とかなっても……あの黒竜を行かせたら、大惨事になる……」

「絶対行かせる訳にはいかないよね」

「そして、あの黒竜に対してだけど、キャロ、ルーテシア、二人とも外に出たら、それぞれフリードとガリユを召喚して黒竜に対応。召喚時間が短いヴォルテールと白天王

は最後の切り札よ。出来るだけ温存して」

本当は一気にカタつきたいんだけど、ヴォルテールと白天王は最大級の召喚魔法のため、短時間しか召喚してられない。

「ギンガさんとスバルはガジェットを叩きつつ、キャロのフォロー。エリオはルーテシアのフォロー。そしてあたしはサンダーで降下して、全体の様子見ながら、みんなの指揮をするわ。状況が変わったらその都度指揮するから……」

「了解、お願いね。ティアナ」

「じゃ、みんな行くわよ!!」

「[[[[[[Go!!]]]]]]」

ヘリの後部ハッチから、7つの光が廃棄都市に舞い降りる。

高架道路に着地するスバルとギンガさん。

顕現したフリードとガリユ、フリードの背に乗るエリオとキャロとルーテシア。

そしてあたしは、スーパーサンダーに乗って着地する。



\* \* \*

『グオオオオオン!!』

その叫び声ですべてを飲み込もうとするプレッシャー。  
膨大な魔力の余波を周囲に撒き散らす。

巨大な黒き竜。フレイム・グロウ——。

た。ガリユーを召喚した私は、さっきからプレッシャーに押しつぶされそうになってい

——怖い。

こんなこと、今まで思わなかったのに……。

なのはさん達やフィルさんのいない状況で……。

そんなときエリオが私の手をぎゅつと握って……。

「エリオ？」

「ルー達のごとは僕が絶対に護るから……。僕はフィルさんみたいに力はない。でも、ルー達のことを護りたいって気持ちは誰にも負けないから……。」

「エリオ……ありがとう……。」

「ルー……。」

「ガリユー、あの竜に突撃する!! 僕に力を貸して!!」

『了解だ。いくぞエリオ』

エリオはストラダーを、ガリユーは爪を構え、攻撃態勢になり突撃した。しかし、二人の攻撃は全く効かず、竜は傷一つ付いてない。

\* \* \*

「スバル!!」

「うん!!」

「『ダイバインバスター!!』」

二人のダイバインバスターは命中するが、やはりダメージは与えられなかった。

「フリード!! ブラストレイ!! 最大火力!!」

『ガアアアアアア!!』

「キヤアアアア!!」

最大火力のブラストレイで攻撃したが、黒竜からそれ以上の火炎がはき出され、逆に押し戻されフリードの背に乗っていた二人が、バランスを崩して落ちてしまった。

「キャロ、ルー!!」

エリオがストラーダのバーニア全開にしてるけど、このままじゃ間に合わない。

「サンダー!!」

《分かってますよ!!》

スロットルを全開にし、バーニアを全開にし空中に飛んだ。  
何とか空中で二人を助けることが出来た。

「ティアさん!!」

「ギリギリセーフって所ね……」

近くの高速道路に着地し、キャロ達はこっちにきたフリードに乗り、また空に戻っていった。

「いい、こんな化け物相手に、バラバラに攻撃しても通じないわ!! あたし達が持つていける力を一点に集中させるわ!! あたしが弱点を見つげるから、何とかそれまでのいで

!!

「「「はっ!!」」」」

サンダーの全能力を使って、あいつの弱点を調べる!!  
みんな、それまで何とか持ちこたえて!!

\*

\*

\*

「アイゼン!!」

「プリム!!」

「はあああああ!!」

ヴィータ副隊長と俺は、やってくるガジェットを片っ端から叩いていった。

なのはさんとフェイトさんには、魔力と体力の温存のため、俺たちがガジェットを叩いている。

「ヴィータちゃん、フィル、あんまり飛ばしすぎると……」

「うるせえ……。それにセンターや後衛の魔力温存も、前衛の仕事のうちだ」

「そういうことです。二人には最後の戦いのため、出来るだけ温存して欲しいんです……」

「でも、フィルは、かなり魔力を使ってしまったよ。それじゃ……」

今の魔力量は、推測だけどAAAくらい。

確かに若干上がっているけれど、それでもかなり使ってしまったている。

「フィル」

「なのはさん？」

突然なのはさんは自分の魔力を、俺に与え始める。

そしてフェイトさんも同じように自分の魔力を俺にチャージし始めた。

「待ってください!! 二人とも、魔力を少しでも温存してください!!」

二人とも、最後の戦いのために魔力は温存しておいてほしい。  
これからの戦いは、死闘になるから……。

「駄目だよ!! 一緒にスカリエツテイ達と戦おうつていったでしょう。ファイル一人に負担をかけたくないの!!」

「だったらヴィータ副隊長に渡してください!! 俺よりガジェットを叩いてるんですよ!!」

「あたしを舐めんなよ。心配しなくてもおめえより魔力はあるんだよ。それに今のおめえは、あたしよりも魔力がないんだろ……」

「気づいてたんですね……」

「フェイトちゃん気づいてるんだよ。教導官のわたし達が気づかないわけ無いでしょう。隠しているつもりでも、魔力の波長は分かるからね。以前の魔力の波長が消えていたから……」

なのはさんの言うとおり、俺の身体から魔力が無くなってしまつて、魔力パターンは元の通りになってしまった。

「だから今は素直に私達の魔力を受け取って。お願いだから……」

「フェイトさん……」

二人の魔力をもらったおかげで、フルパワー状態に回復することが出来た。

「済みません……。結局二人に負担をかけてしまいました」

「気にしないの。ヴィータちゃんとフィルが戦ってくれたおかげで体力は万全だから。魔力を渡したといってもそんなに消費しないから」

「そういうこと。私達は回復系は苦手だけど、これくらいは出来るから……」

「なのはさん、フェイトさん……」

魔力を回復させ、先に進もうとしたとき、緊急通信が入ってきた。

『なのはちゃん、ヴィータ、フィル、フェイトちゃん、応答してや。こちらアースラ、八神はやて。駆動炉と玉座へのルートが判明したんや』



ウインドウに展開された情報によると、駆動炉と玉座は真逆方向。

これも以前と違っていた。

前の時は駆動炉は、そんなに離れていなかったのに……。

「はやてさん、応援部隊はこつちに回せませんか?」

『正直厳しい状況や。アースラの方も迎撃で精一杯だし、各地から招集しても間に合わない……』

「……わかりました。スターズ1, 2とライトニング1, 2、そしてライトニングスター0、別行動を取ります」

「ここで別行動をとるのは、かなり厳しいが、現状ではこれしか手段がない。

『どういふことや?』

「駆動炉と玉座の他に、スカリエツティ達がいる場所があるんです。俺とフェイトさんはそこに向かいます」

『それしかあらへんな……みんな、絶対生きて帰るんやで!!』

はやてさんからの通信が切れ、俺たちは別行動を取ることにした。

「ファイル!! 無茶だよ!! 戦力を分散させるなんて」

「駆動炉と玉座のヴィヴィオ。片方止めただけでは駄目なんです。どっちも止めないとゆりかごは停止しない。それにスカリエツティ達を始末しないと意味がない。こうしてる間にも、外は危なくなってる」

「でも、ヴィータちゃんもファイルも……ここまでの消耗が」

「だったらあたしが駆動炉に回る。フェイトとファイルはスカリエツティ達をぶっ飛ばして、お前はさっさとヴィヴィオを助けてこい」

「でも……」

「あたしとアイゼンの一番の得意分野、知ってんだろ……破壊と粉碎……鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン、碎けねえものなんかこの世にねえ」

グラーフアイゼンを肩に担ぎながら、ヴィータ副隊長は笑っていた。

「一瞬でぶっ壊して、おまえ達の援護に行つてやる。さっさと上昇を止めて、表のはやてに合流だ」

「気をつけて……絶対、すぐに合流だよ!!」

「たりめーだ。あんま余計な心配すんな。それよりもフェイト、フィルのことちゃんと見てろよ。こいつの方が、あたしよりもあぶねえからな」

「うん……」

ヴィータ副隊長は、なのはさん達に背を向け、艦尾に向かって歩き始めた。

もう、飛ぶ魔力も厳しいのか……。

「じゃ、わたしも行くね……。フィル、フェイトちゃん、絶対死んだら駄目だからね!!」

なのはさんもヴィヴィオを助けるため、玉座の間に向かった。

「フェイトさん……俺たちも行くこう。あいつの気を感じて、直接飛びます」

「うん」

俺はワープでクアットロの元に向かうため、魔力を集中した。

——駄目だ!!

スカリエッティは分かるが、クアットロは感じ取れない。  
迷彩をかけていやがるな。

それだったら、先にスカリエッティを倒すまでだ!!

\*

\*

\*

『スターズ1、玉座の間へ。スターズ2、駆動炉へと向かいました。ライトニンググーとライトニングスター0は、転移で別の場所へ向かいました』  
「なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、ファイル……」

悔しい……。

本当ならみんなと一緒にゆりかごで戦いたい。  
でも、今の私はアースラを預かっているんや。

だから、みんな絶対生きて帰ってきてや……。

\* \* \*

「でえやああああ!!」

駆動炉へ向かったあたしは、グラーフアイゼンを振り下ろし、進路を阻んでいたガジェットIII型を一蹴した。

ペースを上げ、駆動炉のある動力室は、もう目と鼻の先まで迫っていた。

「ここまでくりや、もうちよつとだ。カートリッジもまだある、楽勝だ……」

こんな時が一番危険だと言う事を、経験から良く分かっていた。

左手に持っていた未使用のカートリッジをポケットに仕舞うと同時に、勢い良く後ろ

を振り向いて、横薙ぎにグラーフアイゼンを一閃した。

何もなかったはずのその空間から、金属同士が激しく衝突したような音が響き、一瞬遅れて、アイゼンを振りぬいた射線上にある壁で、爆発が起きた。

「やっぱりそうか……。ファイルから、聞いていたからな。あたしが死んだ原因をな。この時、後ろから攻撃を受けて、死んだんだったな……。冗談じゃねえ、死んでたまつたよ!!」

刃物の手足を持つ鋭角的なフォルムの、多脚生物のような機械兵器を、アイゼンの一撃で破壊したのだ。

「あの時、なのはを墜としたのは……。てめーらの同類か」

もう姿を隠す気はないのか、動力室の方から、ガチャガチャと大量の同型機が迫ってくる。

アイゼンを肩に担いでカツと目を見開き、その瞳の色は、鮮やかなブルーに変貌していた。

「ぎげんなよ……。一機残らずブツ潰してやらあ!!」

ゆりかご 軌道ポイント到達まで あと2時間16分

\* \* \*

ゆりかご 玉座

玉座には苦痛の表情のヴィヴィオと私とデイエチちゃんがいた。  
私はキーボードを叩いて、ゆりかご内の様子を見ていた。

「この作戦……あまり気が進まない」

「あくら、どうして?」

大方、こんな小さな子供を利用して、とでも思ってるんですね。

本当に甘いですわね。どいつもこいつも……。

「ドクターの言っている事は、嘘でまかせですわ〜」

「えっ？」

「ドクターの目標は最初から一つだけ。生命操作技術の完全なる完成。それが出来る空間作り。このゆりかごはそのための船であり、実現できる力。まっ、今回の件で何万人か死ぬけれど、百年立たずに元に戻りますわ。ドクターの研究は人々を救う力ですもの〜」

「どうしたの〜ダイエチちゃん。ドクターやお姉様の言うことが信じられなくなっちゃたの〜」

「そうじゃないよ……そうじゃないけど……」

「何を今更。姿を見る前までは平気でトリガーを引けたのに……ねっ……」

「……ごめん……気の迷いだ。忘れて……命令された任務はちゃんとやる……」

そう言つてダイエチちゃんはイメーノスカノンを持って、所定配置に向かった。

「お馬鹿なダイエチちゃん。あなたも、捕まったチンク達みたいに、つまらない子なの



ね」

キーボードを叩いて展開された画面には、突入したメンバーや外で戦っている六課メンバーの様子が映し出されていた。

「うふふふ……なんも出来ない無力な命なんて、その辺の虫と一緒にじゃない。いくら殺しても勝手に生まれてくる。それをもてあそんだり、蹂躪したり、かごに閉じこめた虫を眺めるなんて、こおんなに楽しいのに……ね……」

\*

\*

\*

### 聖王医療院

『ミッドチルダ東部山中、森林地帯より浮上した巨大船は、未だ上昇を続けています。同

時に第七廃棄都市区画方面から、首都クラナガンに向かって、自動機械や巨大な竜が移動中。周辺各区には、緊急避難勧告が出されています。市民の皆様は、案内放送と、管理局員の誘導に従い、落ち着いて避難をして下さい』

一般入院病棟の一角にある病室で目を覚ましたヴァイスは、ベッドから上体を起こしながら、ニュースが放映されていたウインドウを閉じた。

同じく、激しい傷によって入院を余儀なくされていた、ザフィーラの旦那。彼もニュースを見ていた。

「目覚めたか……」

「たった今っす……。今日は何日の何時っすか?」

「六課襲撃から丁度一週間だ。新たな事件が起こっている。動ける六課メンバーは全員出動している」

「へり無しですか!! くそ!! 俺はこんな大事なときに!!」

「へりはアルトさんが操縦するって、シグナムさんとアルトさんが教えてくれたの」

「ラグナ……」

ドアから入ってきたのは、妹のラグナだった。彼女の左目には眼帯がしてあった。

「それからフィルさんが、お兄ちゃん怪我して大変だから、お見舞いしてあげてって。お兄ちゃん、大丈夫？」

「ああ……」

「怪我は、そんなに心配しなくて大丈夫だって、静かに入院していればすぐ直るって」  
「……そうかい」

「あのね……あの時の……あの事故の後から、私達なんだかうまく話せなくなっちゃったけど、昔みたいに戻れたらって……左目もね」

そう言つて眼帯を取ると……。

「傷、もう消えたでしょう。それと……左目なんだけど、見えるようになったんだよ」  
「何だって!! どういう事だ!?!」

眼球が完全につぶれてしまつてるから、再生は不可能なはずなのに――。

「フィルさんが……私のために、必死でこの義眼を作ってくれたんだ。私達の絆を、もう一度取り戻して欲しいって……」

「あいつが……」

あいつは、ラグナのためにそんなことまで……。

実の兄が現実から目を背けていたつてのに、他人のあいつがこんなにも一生懸命にしてくれてた——。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんがこの事で、ずっと気にしていたのは知っていたよ。でも、もう大丈夫だから。私は光を取り戻したから……だからお願い、お兄ちゃんも、もう一度自分を取り戻して!!」

「ラグナ……」

俺は……何をしていたんだ。

フィルが、俺とラグナのために、ここまでしてくれていたのに……。

そして——。

ラグナも俺と正面から話してくれたのに……。

「どう生きるか……どう戦うか……選ぶのはお前だ」

「旦那……」

《今こそ立ち上がるべきですよ、相棒》

「ストームライダー……」

ラグナ、旦那、ストームライダー……。

「そうだな。ラグナが、ちゃんと俺と向き合ってくれたんだ。今度は俺が応える番だ!!」

「ここで立ち上がらなかつたら、マジで男じゃねえ!!」

「お兄ちゃん!!」

「済まなかつたな、ラグナ。もう大丈夫だ。ストームライダー、俺に力を貸してくれ!!」

《ずっと待っていましたよ。その言葉を!!》

「ヴァイス、その様子なら大丈夫だな。いくか……」

「行くかって、旦那どこに？」

「決まっている、皆の所にだ」

「ですね!!」

俺は戦闘服に着替えると、ザファイラの旦那と共に、バイクを止めてある駐車場へと向かった。

\*

\*

\*

ゆりかご スカリエッティ研究室

「待っていたよ、フェイト・テストロッサ、そしてフィル・グリード」

「スカリエッティ!!」

ワープでスカリエッティの所に突入した私達の前にいたのは、強化スーツを身にま

とっていたスカリエッティの姿だった。

『外で戦っているFの遺産と竜召喚師も、聞こえてるかい？ 我々の楽しい祭りの序章は、今やクライマックスだよ』

スカリエッティは、街で戦っているエリオ達にもここでの様子を見せていた。

「なにが、なにが楽しい祭りだ!! 今も地上を混乱させている重犯罪者が!!」

「重犯罪者？ 人造魔導師や戦闘機人計画のことかい？ それとも、私とその根幹を設計し、君の母君プレシア・テスタロッサが完成させた、プロジェクトFのことかい」

「全部だ!!」

「いつの世も、革新的な人間は虐げられるものだね」

「そんな傲慢で、人の命や運命を弄んで!!」

「貴重な材料を無差別に破壊したり、必要もなく殺したりはしていないさ。尊い実験材料に変えてあげたのだよ。価値のない無駄な命をね」

「ハ、この!!」

スカリエッツェの傲慢極まりない言葉を聞き、激昂する。

感情の昂りに任せ、ザンバーの黄金の輝きがより一層強くなった。

一撃でスカリエッツェを倒そうとし、宙に舞い上がる……が……。

スカリエッツェが指を鳴らすと、足元に赤い小さなテンプレートがいくつも現れ、そこから出てきた赤い糸が脚に絡みつく。

またその糸は、ザンバーの魔力刃にも幾重にも巻きつき、動きを完全に封じてしまった。

\* \* \*

「フェイトさん!!」

「ふっははは。普段は温厚かつ冷静でも、怒りと悲しみには、すぐに我を失う」

「今、その糸を切る。待ってて!!」

しまった!! やつはフェイトさんのウィークポイントを的確に突いてきてやがる。



プリムをセイバーモードにし、糸を切ろうとしたが……。

「そうはいかないよ」

俺の足下にも糸が現れ……。

「しまった!!」

俺の身体に巻き付き、動きが完全に封じられてしまった。

しかも魔力結合が出来ないようになっていて、バリアジャケットを維持するのに精一杯だった。

「それは特別製だね。それしか完成できなくてね。君のために作ったんだよ」

「くそつたれが!!」

「そこでじっくりと見ているが良い。フェイト・テスタロッサの最後をね」

「スカリエッティ!!」

俺が苦戦している間に、フェイトさんもザンバーを砕かれ、脚を拘束していた糸に引つ張られ、床に引き摺り下ろされた。

「君のその性格は、まさに母親譲りだよ。フェイト・テストロッサ」

\* \* \*

別れた後、わたしは艦首方向に向かって飛行していた。

いくらゆりかご内部が広いからと言っても、壁や天井に仕切られた空間を高速で飛ぶわけにもいかず、

かなり焦りがあつた。

そんな中、ヴィヴィオの聖王教会での検査結果を受け取った時の、シスターシャツハとのやり取りを思い出す。

「遺伝子データの照合で、ヴィヴィオの元となった人物の出身年代が判別しました。約

300年前、聖王時代の、古代ベルカの人物です。ヴィヴィオのママは、その当時の人物でしょうから……」

「もう、この世にはいないってことですね。ただ、ヴィヴィオはママって言葉を、自分に特別に優しくしてくれる人のことだと思ってるみたいですし」

「でも、本当によく懐かれていますね。このまま、ご自分の娘さんに？」

「受け入れ先は探しています。あの子を必要としてくれて、受け入れてくれる温かい家庭を……」

「あの子は、嫌がりませんでしように……」

「幸せにしてあげる自信がありません……」

「どうして？」

「わたしはいつも自分のことばかりで、優しい母親になれる資格も、たぶん……ありません……それに何より、わたしは空の人間ですから……」

「……縁起でもない!!」

一瞬遅れて反応するシャツハ。

彼女の言うところの意味は、いつ死ぬか知れない、空にいればその可能性が高いと言うことだ。

「可能性の話です……。一度、堕ちてますしね……」

「ですが!!」

しかし、それ以上の言葉はなかった。

彼女もまた戦う者として、それは身に染みてよく理解しているからだ。

「ママ?」

アルフとボール遊びしていたはずのヴィヴィオが、いつの間にか足元にやってきていて、心配そうな目で見上げていた。

「うん?」

わたしはかがみこんで、ヴィヴィオと視線を合わせた。

「ヴィヴィオ、どうしたの?」

「ママ、しょんぼりしてたから」

「本当?」

「うん……」

いつか自分がそちら側になるのではないかと言う不安は、払拭する事など出来ない。そんな不安が、表に出てしまっていたということか。

「ママ、いい子」

ヴィヴィオは少し背伸びをすると、その小さな手をわたしの頭に乗せて、ゆつくりと撫でた。

「……ヴィヴィオは優しいね」

目の前の少女がどうしようもなく愛おしくなってしまう。わたしはヴィヴィオを抱き上げると、ギュッと抱きしめた。

「平気だよ。ヴィヴィオが元気で、笑顔でいてくれたら、なのはママもいつだって、笑顔で元気だから」

「えへへ」

「あはは」

\* \* \*

一刻も早く、玉座の間に辿り着きたい。

出現するガジェットを、一機ずつ潰していられない。

「いちいち相手してられない……。レイジングハート!!」  
《All right, Strike Flame》

レイジングハートを槍型、エクシードモードに変形した。

先端には超高密度の魔力刃、穂先からは魔力翼が展開された。

「A. C. Sドライバー!!」

《Charge》

ガジェットの密集する中に、構わず突撃をかけた。

レイジングハートの先端に発生した魔力刃を頂点に、円錐状の攻性フィールドが発生し、触れるもの全部を破壊した。

通路を塞いでいたガジェットは、通過と共にその全てが爆散した。

\* \* \*

「駄目だ、クアットロ。手が付けられない」

デイエチちゃんからの報告で、高町なのはの様子はよく分かっていた。

「まあ、予想の範疇よ。あの人の終幕はここ。玉座の間だから……どこも思ったよりは粘っているけれど、まっ、時間の問題ね」

画面に映し出されていたのは、機動六課の戦っている様子だった。

ふっふっふ。どこも苦戦していて、とつてもいい気分ですわ。

後は、あの男が死ねば最高の気分ですわ♪

ゆりかご 軌道ポイント到達まで あと1時間44分



## 第24話 金の閃光

「あの小さな子のお母さん……だっけ……」

スクリーンを見て、こっちに向かってきている、高町なのはを見てつぶやく。  
イメーノスキャノンを構え、その光は高町なのはを捕らえていた。

「あんたに恨みはないけれど、5……4……3……2……1……」

「!! エクセリオン……」

向こうも異変に気づき、エクセリオンバスターの発射態勢に入った。

「0」

「バスター!!」

赤き閃光と桜色の閃光——。

二つの砲撃が激突し、拮抗していた。

\* \* \*

「……ブラスターシステム、リミット1……リリース!!」

《First step》

次の瞬間、全身が魔力に包まれた。

ブーストで、魔力が上がった証である。

「ブラスト……シユート!!」

エクセリオンバスターは一回り大きくなり。威力もさらに上がり、それはイメースキャンの砲撃を押し切り、その凶悪な砲撃は、グレイエチを飲み込んだ。

「はあ……はあ……」

「くっ……抜き打ちで……この威力……こいつ、本当に人間か……」

「じつとしてなさい……。突入隊があなたを安全な場所まで護送してくれる」

「デイエチとイメースカノンをバインドでロックして動けなくし、わたしは先に進むことにした。」

「後は突入隊に任せるしかない。」

「今は一刻も早く、ヴィヴィオの元に行かなくては……。」

「この船は……わたし達が停止させる!!」

\* \* \*

「それにしても、すごいね。プラスターを使っても、殆ど身体への負担がないなんて」  
《《ファイル達が必死で改良しましたので、そんなに負担はかからないと思います》》

フィルとマリーさんが改良したブラスターステム。

従来型と比べて、自己ブースト時の身体への負担が、3分の1以下にすることが出来た。

但し、ファイナル・リミットであるブラスター3は、威力は倍以上に上げられるが、身体への負担は大きい。

「にやはは……。そのことは、フェイトちゃんにも散々言われたからね……」

《でも、ファイナルは出来るだけ使わないでください。そのときの保証は出来ません》

「分かっている。わたしも出来るだけ使いたくはないからね……。ブラスター1はこのまま維持。急ぐよ、レイジングハート」

《All light》

\*

\*

\*

「あはは……少しは、改良してあるみたいですね。以前のブラスターよりはマシですけれど、結局の所自己ブーストですわ」

「ねえ陛下。あなたのママは相当お馬鹿さんですよ」

「ううっ……うっ……」

玉座の間の入口の扉が、凄まじい衝撃を受け、内側に向かってひしゃげ、次の瞬間には、そこを桜色の奔流がぶち抜いた。

「いらっしやい。お待ちしてました」

ヴィヴィオが座っている玉座の横に立っているクアットロが言った。

「こおんなどころまで無駄足ご苦労さま。さて、各地で貴女のお仲間は、たあいへんなことになってますよ」

スクリーンを複数展開して、わたしを挑発していた。

スクリーンには、各地の六課メンバーの様子が移されていた。

どこも、苦戦していて良い状況ではない。

「大規模騒乱罪の現行犯で、あなたを逮捕します。すぐに騒乱の停止と、武装の解除を」  
「仲間の危機と自分の娘のピンチにも、表情一つ変えずにお仕事ですか……いいですね  
」。その悪魔じみた正義感」

クアットロがヴィヴィオの頬に、いやらしくさわろうとしたとき……。

「その汚い手で、ヴィヴィオに触らないで!!」

一切の躊躇も容赦もなく、クアットロに向けて、砲撃を撃ち込む。  
しかし、砲撃を受けたクアットロの姿は、掻き消えてしまった。

『でも、これを見てまだ平静でいられます〜』

通信ウィンドウが開き、不敵な笑みで挑発した。

「ふあ……あああああ!!」

「ヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオの悲痛な悲鳴を聞き、ヴィヴィオの元に行こうとしたが、虹色の光で行く手を遮られてしまった。

「くっ!! うわあああ!!」

ついに耐えきれられず、中央まで押し戻されてしまった。

『良いこと教えてあげる。あの時ケースの中で眠ったまま、輸送トラックとガジェットを破壊したのは、この子なんですのよ。あの時フェイトお嬢様とフィル・グリードが、ようやく防いだ砲。でも、例えその直撃を受けたとしても、物ともせず生き残ったはずの能力。それが古代ベルカ王族の固有スキル……聖王の鎧』

「なんですって!!」

『レリックとの融合を経て、この子はその力を完全に取り戻す。古代ベルカの王族が、自らその身を作り替えて作った究極の生体兵器。レリックウエポンとしての力を……』

「ママ!! 嫌だ!! 助けてママ、パパ!!」

「ヴィヴィオ……ヴィヴィオ!!」

「うわああああ!!」

『すぐに完成しますわ。私達の王が、ゆりかごの力を得て、無限の力を……究極の戦士に』

「ママ、パパ!!」

「ヴィヴィオ!!」

その身体から放出されたのは、虹色の光。カイゼル・ファルベ——。

失われし古代ベルカ、聖王の血統に頻出されると言われている魔力光。

ヴィヴィオの魔力はあつという間に高まり、その圧力は、気を入れていないとよろけるほどだった。

その光が収まると、成人の姿をしたヴィヴィオの姿があった。

「あなたは……ヴィヴィオのママを……どこかにさらった……」

「ヴィヴィオ、違うよ!! わたしだよ!! なのはママだよ!!」



「違う!!」

「!!」

「嘘つき……あなたなんかママじゃない!! ヴィヴィオのママを……返して!!」

ヴィヴィオの足下にベルカ式の魔法陣が展開され、魔力の嵐も一段と強くなった。

「ヴィヴィオ!! くっ!!」

『その子を止めることが出来たら、このゆりかごも止まるかもしれませんね』

「レイジングハート!!」

わたしもミッド式の魔法陣を展開し、戦闘態勢に入った。

『さあ、親子で殺し合いなさい。あははは!!』

高笑いと共にクアットロのウィンドウはその場から消えた。

「ヴィヴィオのママを……返して!!」

「ブラスタ―……リミット2」

\* \* \*

第七廃棄都市区画、都市部との境界線に近い場所に展開された防衛ライン。

その一角を担っている陸士108部隊の部隊長の俺は、機動六課臨時本部となっているアースラの、グリフィス・ロウランと連絡を取っていた。

「ああ、市街地戦の防衛ラインは、何とか持ちこたえてる。ガジェット共が相手なら、なんとかならあな」

『はい』

「応援に来た航空隊の空戦魔導師たちはそこそこ対応出来てるし、陸上警備隊の陸戦魔導師たちの出力不足はどうにもなんねえが、それでも防衛に徹する事は出来る。ガラクタ共に対抗する方法は、レジアスのとつつあんが示してくれたからな。力自慢が暴れまわって、何とかやってる」

『あ、あはは……』

「だが、現状でギリギリだ。他に回せる余裕はねえし、残りの戦闘機人や、こっちに向かっているあの竜がこっちにきたら、もうアウトだ」

戦闘機人の殆どは、こないだの時に逮捕したが、まだ全部ではない。

そいつらがきたら対応は不可能になる。

『黒竜とガジェットは、六課前線メンバーと交戦中です』

「そうかい……」

\* \* \*

フレ임・グロウと交戦している六課メンバーだったが、攻撃が全く通用せず、前線メンバーも限界が近づいていた。

「はあ……はあ……」

「頑張つてスバル。ティアナが、もう少しで解析が終わるから……」

「うん、ティア……お願い。こっちは、そろそろ限界かも……」

「スバルさん、ギンガさん、こうなったら、わたしとルーちゃんをヴォルテールと白天王を召喚して、最大パワーで攻撃すれば」

「それしか……ないね……」

「いくよルーちゃん」

「うん……」

。キャロとルーテシアが召喚しようとしたとき——。

『駄目よ!! ヴォルテールと白天王を召喚しちゃダメツ!!』

「どういふことですか!!」

何とか間に合ったわ——。

もう少しで、取り返しがつかなくなるところだった。

『今か解析が終わったの。それを見てもらえば分かるわ……』

みんなに送ったデータは次の通りだ。

フレ임・グロウは、確かにヴォルテールと白天王の最大パワーで倒すことは可能だが、その瞬間フレ임・グロウの身体を形成している分子が、ミッド中に巻き散らばってしまい、それによってミッドの人間は全滅してしまう。

クアットロの本当のねらいは、これだったのよ。

『あはははは!! 良く気づきましたわね。ティアナ・ランスター』

「「「「クアットロ!!」」」」

あたし達の前に、いやつたらしい笑みをしたクアットロのウィンドウが展開された。その面を見ると、吐き気がする。

「あたし達を甘く見ないことね……」

『さすが、高町なのはの弟子ですわね。娘を目の前にして冷静にしていた、あの悪魔の弟子だけありますわ』

「黙りなさい!! それ以上なのは皆さんのこと貶すな!! あの人がどんな思いだったか!!」

ヴィヴィオがさらわれて、あの人がどんなに苦しんだか。ファイルがいなかったら、きっと潰れていた。

『そんなことはどうでも良いですわ。どうしますか? ルーお嬢様達の召喚獣で倒して、ミッドを毒で滅ぼすか、フレイム・グロウがミッドを蹂躪するか。どっちにしても、ミッドはお終いですわね。あはははは!!』

満足したのか、クアットロはこの場から通信を切った。

「みんな、一旦集まって!!」

あたしの声で、フォワード全員、現場から少し離れたビルに集合していた。

「どうするのティアナ。このままじゃ、本当に打つ手はないわよ」

「ティアさん……」

「ティア、このまま手をこまねいてるの!!」

「スバルさん……僕だって悔しいです。でも……」

「……全て解析で来たっていったでしょう。当然、あの化け物を退治する手段もね……」

かなり博打になるけど、手段がない訳じゃない。

「……ティア（さん）!!」

『そこから先は、僕が説明するよ』

「……スクライア司書長!!」

ウインドウに現れたのは、かつてのなのはさんの魔法の師匠であり、現無限書庫司書長のユーノ・スクライアだった。

スクライア司書長が説明してくれたのは以上のことだった。

まず、あたし、キャロ、ルーテシアに、無限書庫で発見した特別な魔法術式を、それぞれのデバイスに転送。

次にキャロとルーテシアが全魔力を使って、その術式を使った捕縛魔法でフレイム・

グロウを捕縛。

その間スバル・ギンガ・エリオは、あたしの方に意識をむけさせないように、注意を引く。

最後にあたしが術式を混ぜた集束魔法で、弱点であるリンカーコアさえ打ち抜ければ……。

成功すれば、肉体は消滅するので毒がまかれることはない。

但し、これは本来なのはさん級の砲撃の威力が必要なプランなので、あたしの威力で成功する確率は低いが……。

「みんな、絶対成功させるわよ。これくらいの任務を成功させなくて、なにがストライカーよ。ここで失敗したら、ファイルに合わせる顔がないからね!!」

「「「はい（おう）!!」」」

『……どうやら、心配しなくても良いみたいだね。やっぱりなのはの弟子だよ。君は……こんな無茶なプランなのに……』

「スクライア司書長。あたしはなのはさんの弟子である前に、あのファイルのパートナーなんですよ。無茶はお得意分野です」



あいつだったたら、きつと同じ選択をした。

いや、あいつだったたら、自分をもっと危険な役割をするかもね。

『確かにそうだ……ティアナ、後は頼んだよ』

「任せてください!!」

スクライア司書長は、この場はあたし達に託し、通信を切った。

「やろう、ティアア!!」

「捕縛まではうまくいくと思うけど……リンカーコアまであたしの砲撃が届くか……」

「それは私がかするわ」

「……シヤマル先生!!」

「ティアナ、捕縛してくれたら、私が旅の鏡であいつのコアを引きずり出すから、それを打ち抜いて!!」

「足止めは俺も加わろう。多少は役に立つはずだ」

「……ザファイーラ（さん）」

これで目処が立った。

成功率も上がった。これで失敗したら、大馬鹿よ。

「みんな頼んだわよ。まず、ナカジマ姉妹!! あいつの注意を引きつけて!!」

「いくよギン姉!! マツハキャリバー!!」

「オーケー、ブリッツツキャリバー!!」

「フルドライブ!!」

『Ignition』

「ギア……エクセリオン!!」

『A. C. S. Stand by』

マツハキャリバーとブリッツツキャリバーのモード3、フルドライブモード、ギア・エクセリオンが解放された。左右の足首から、大小二枚ずつの魔力翼が展開され、アクセラレート・チャージ・システム……瞬間突撃システムの発動準備が完了した。

マツハキャリバーは、自分たちでここにたどり着いたが、ブリッツツキャリバーは、予めファイルが組み込んでいたため、同じシステムをさせる。

これはギンガさんなら、最初からこのスペックが使えるだろうと考えたからだ。

二人ともウイングロードを展開し、注意を引きつけていた。

フルドライブになりスピードも上がり、フレイム・グロウも動きについて行けてない。

「行くよ、ルーちゃん」

「うん、キャロ」

「錬鉄召喚、アルケミックチエーン!!」

スバル達が注意を引きつけている間に二人は、術式を組み込んだアルケミックチエーンを召喚し、フレイム・グロウの捕縛に成功した。

だが、術式を組み込んだ特別製のため、ヴォルテールと白天王を召喚するくらい、二人の身体に負担がかかっていた。

「……………くつ、はあ……………はあ……………」

「頑張つてルーちゃん……………。わたし達がここで解いてしまったらお終い……………だよ……………」

「うん……………」

しかし、ルーテシアはもう限界が近づいていた。

ガリユーでさつきまで攻撃していたことと、エリオをサポートしていたことで、魔力をキャラより多く使ってしまったのだ。

「もう……だめ……」

「ルーちゃん!!」

「諦めるな!! 鋼の軛!!」

ザフィーラが放った鋼の軛は、動きを封じるサポートになり、二人の負担を減らせられた。

「二人とも、俺も全力でヤツの動きを止める。頑張るんだ」

「ありがとう、ザフィーラ!!」

「ありがとう……」

ザフィーラのおかげで、負担が減った二人は持ち直し、動きを完璧に封じた。

\*

\*

\*

「シャマル先生!!」

「了解……いくわよ、クラールヴィント」

《ja》

クラールヴィントの石を分離させ、ペンダルフォルムに変形させた。

絶対見つけて引きずり出してやるわ!!

旅の鏡で体内のリンカーコアを探していると、一際高い魔力の固まりがあった。

「見つけた!!」

《ガアアアアア!!》

リンカーコアを摘出されたフレーム・グロウは咆吼をあげていた。

間違いないあいつのリンカーコアだ。

\* \* \*

「ティアナ!!」

「任せてください!!」 クロスミラーージュ!!」

《Starlight Breaker》

あたしはすでにクロスミラーージュをブレイズモードに展開し、魔力を集束させ発射態勢に入っていた。

撃とうとしている魔法は、なのはさんの十八番、スターライトブレイカー。

まともに撃つても威力が足りないのです、サンダーの秘密兵器、魔力集束システムを補助に使って威力を上げていた。

これはファイルが万が一を考えて、大気にある魔力素をサンダーが集めて、それを術者に与えるという物だ。

これはプラスターと違って、術者に負担は殆どかからない。

欠点は1回しか使えないことと、外でしか使えないと言うことだ。

「落ち着け……。この一発に、全てがかかっているんだ……」

あたしは深呼吸をし、精神を落ち着かせる。

この一発で全てが決まる。

やり直しはきかない——。

《ティアナさん、一人じゃないんですよ。私もついてます。私はこの時のために、相棒からあなたのことを託されたんです。絶対成功させます!!》

《私もいますよ。サポートはサンダーだけじゃありません。ティアナ、あなたは全力で撃ってください!!》

「サンダー……クロスミラージュ……ありがとう……いくわよ!!」

オレンジ色の魔力光が、あたしの周りに集まり始めた。

自身の魔力だけでなく、サンダーが集めた魔力も合わせていた。

「発射10秒前……スバル、エリオ、ギンガさん、そこから退避して!!」  
「了解!!」

注意を引きつけていた前衛グループの3人は、一斉に退避した。

そのときこつちに気づき、フレイム・グロウは魔力弾を放った。

発射態勢に入っていたあたしは、その場から動けず、直接は命中しなかったが、髪を縛っていたリボンは魔力弾の余波で消し飛んでしまい、ロングヘアの状態になっていた。

「全力……全開……」

「スターライト……ブレイカー!!」

——放たれたオレンジの砲撃。

あたしの……。



そして、サンダーとクロスミラージュの思いがこもったスターライトブレイカーは――。

一直線にリンカーコアに向かっていった。

《ガアアアアアア!!》

砲撃が着弾し、リンカーコアが消滅すると、身体の方も維持できなくなり、消滅していった。

毒素の反応もなくサンダーが完全消滅を確認した。

「や……やった……」

『やった!!』

この場にいる全員が喜び、その場で大声をあげていた。

あたしも本当はそうしたかったが、スターライトブレイカーで全力を使い果たしてし

まい、立つ気力もなかった。

《ティアナさん!!》

「ごめん……もう、限界……ちよつと休ませて……」

《本当にお疲れ様です……今はゆっくり休んでください……ティアナ》

\* \* \*

「以前トーレが捕まる前に言ったと思うが、君と私は、親子のようなものだ」

スカリエツティは、赤い糸の檻に囚われの身となっているフェイトさんに向かって言った。

「君の母親、プレシア・テストアロッサ……実に優秀な魔導師だった。私が原案のクローニング技術を、見事に完成させてくれた。だが肝心の君は、彼女にとって失敗作だった。

甦らせたかった実の娘アリシアとは、似ても似つかない、単なる粗悪な模造品……んっふふふふっ。それ故、まともな名前すら貰えず、プロジェクトの名をそのまま与えられた。記憶転写クローン技術、プロジェクトF. A. T. Eの最初の一葉……フエイト・テストロッサ」

「フエイトさん……」

廃棄都市区画に中継されているラボの様子を見て、エリオ達は心配していた。

\* \* \*

「ライオット!!」

スカリエッティの作った糸の檻に閉じ込められていた私は、最後の手段に出る事にした。

このままでは、他の援護に回ることは出来そうにない。  
ならば目標を、目前のスカリエッティ殲滅に定めて、自分の役割を完遂する。

《R i o t B l a d e》

ライオットブレード……バルディッシュのフルドライブモード。

巨大な両手剣の形態を取っていたバルディッシュが、片刃の片手剣へとその姿を変える。

その刀身の魔力密度……つまり切れ味は、ザンバーの比ではない。

「はあっ!!」

ライオットを一閃すると、ザンバーでは手が出なかったスカリエッティの糸の檻は、  
いとも簡単に切り裂かれた。フィルが閉じこめられていた糸の檻も破壊し、解放した。

「それが君の切り札かい……。成程、このAMFの状況下では消耗が激しそうだ」

「フェイトさん!!」

\* \* \*

スカリエッティの言うとおり、この状況下ではかなり消耗してしまう。いくら負担を少なくすることが出来たといっても、ゼロではない。

「ファイル、行つて!! ここは私が相手をする。ファイルはクアットロの所に行つて!!」  
「でも、居場所が分からないと!!」

すると、フエイトさんが念話で……。

（大丈夫。さつきここに来る前にサーチャーを飛ばしておいたの。ついさつき居場所が分かったの）

（もしかして、それを待っていたんですか）

（本当は一人でなんて行かせたくない。でも、スカリエッティを止めるだけで、精一杯だから……。座標はプリムに転送するから行つて!!）

(了解……)

転移の術式を展開し、フェイトさんが調べてくれた座標に向かうことにした。

「しまった!! 逃がすものか!!」

スカリエツティが気づいたが、どうやらこっちの方が早く転移できそうだ。

フェイトさん——。

今まで……本当にありがとう。

こんな俺を好きになってくれて……ありがとう——。

きつと、俺は……もう、フェイトさんと会えないから——。

でも……。

絶対に、この世界を……。

大好きな人を……護ってみせるから……。

……さよなら。

\*

\*

\*

「えっ？ ファイル!!」

私はもう一度聞こうとしたが、すでに転移してしまい、聞くことは出来なかった。

でも、今、間違いなく言った。

本当に小さな声だったけど、確かに言った――。

別れの言葉を……………。

「バルディツシュ!!」

《Get set》

「オーバードライブ……………真・ソニックフォーム」

《Sonic Drive》

私の身体が、金色の眩い閃光を放ち、魔力も爆発的に膨れ上がった。

高速戦闘型にしては鈍重なイメージだったバリアジャケットのコートとジャケットが消滅し、それを構成する魔力までもが速度上昇に回される、私のリミットブレイク。



《Riot Zamber》

バルディッシュがカートリッジをロードし、ライオットブレードが二本に分裂した。激しく帯電した、金色に輝く、二振りの刃……。

ライオットザンバー・ステインガー。

\* \* \*

「魔力値が、増大……。はっ!!」

別室で膨大な情報処理をこなしながら、戦域管制を行っていたウーノは、膨れ上がった魔力反応に、怪訝そうな声を上げた。

緑色に光る魔力の粒子が、ウーノの周囲に発生したかと思うと、緑色のバインドが襲い掛かった。

「探しましたよ、お嬢さん……」

「お前は、ヴェロツサ・アコーズ!! なぜここに!!」

「ゆりかごが浮上したときに、忍び込んだのさ。スカリエツテイのもうひとつの頭脳、戦闘機人12体の指揮官。ナンバー1、ウーノ。君の頭の中……ちよいと査察をさせてもらうよ……」

\*

\*

\*

「ウー姉……」

唯一残っていたあたしだったが、元々クア姉の案には乗り気ではなかったの、ウー姉が捕まったことで投降しようと思っていた。

「あの子……」

「何ですか？」

「正直、クア姉がしている事って、嫌なんだよね。ウー姉も捕まったみたいだから、投降していいかな……？」

「戦闘意思がない相手に、戦う事はしませんよ。良いですよ……」

「ありがとうございます」

「その代わりに、あなたの体内にあるBCCは取り除かせてもらいますよ」

「うん……良いよ」

あたしは投降することにした。

きつと、先に捕まったチンク姉たちも望んでいると思うから——。

\*

\*

\*

既に残されているのは、スカリエッツィのみになっていた。それでも、スカリエッツィは最後のあがきで、攻撃を仕掛けていた。

「装甲が薄い。当たれば墜ちる!!」

「そうかな……」

スカリエッツィは強化スーツの能力で攻撃しようとしたが――。

「何!! 強化スーツで、トール以上の戦闘力があるはずなのに!! 今の彼女のスピードは速いなどと言うレベルではない。目で捉えることが出来ないどころか、認識すら出来ないなんて!!」

当たり前だ――。

今の私はリミッターを解除してるんだ。

自分の限界以上の力で動いてるんだ。絶対に捉えられるもんか!!

そして私は、スカリエッツィの強化スーツをじわじわと破壊していった。

今の私の攻撃は蝶のように舞い、蜂のように刺す。  
その表現がしつくりくると思う。

そしてとどめを刺すべく、二振りのライオットザンバー・ステインガーを重ね合わせ  
た。

瞬時にしてそれは、巨大な一振りの大剣に化ける。

ライオットザンバー・カラミティ。

通常のザンバーとは比べ物にならないほどの魔力密度を持つ魔力刃。  
これが私の最後の切り札――。

「覚悟しろ!! スカリエッティ!!」

私はザンバーを大きく振りかぶり、スカリエッティの頭上に打ち下ろした。  
スカリエッティはそれを、両手で受け止める。

しかし、そこまでだ——。

床が保たず、足首まで床にめり込んでしまったために、身動きが取れなくなる。

「こんな……馬鹿な!! 戦闘力なら君よりも遙かに上なのに、どうしてこんな魔力刃くらしい砕けない!!」

「このライオットザンバー・カラミティは、私の全てを込めている。そして……フィルの思いもだ!!」

「くだらん!! 感情論で強くなるわけではない!!」

「……哀れだね。愛の力を知らないって……」

「何だと!!」

人はね……。大切な人がいると、それだけで強くなれる。

その思いが、私を強くしたんだ!!

「だから……この私が引導渡してあげる……」

ライオットザンバー・カラミティがさらに力を増し、魔力刃もさらに巨大になり、密度もさらに増し、その力はつかんでいるスカリエツティの手を、消滅させるほどの物だった。

「馬鹿な!! こんな事が!!」

「スカリエツティ……光になりなさい!!」

「こんな、バカなあああああ!! ギやああああああああ!!」

ライオットザンバー・カラミティを完全に振り下ろすと――。

スカリエツティの身体は――。

断末魔と共に、完全に消滅した。

ライオットが振り下ろされた地面は、半径10mにわたってクレーターが出来ていた。

それほどの威力と言うことだ。

単純破壊力なら、スターライトブレイカーやプラスマザンバーブレイカーを上回る。これが、ファイルが新たに付けた能力。物質消滅能力。

殺傷設定で使用したときに使える能力。

私はスカリエッティを逮捕ではなく、殲滅をすることを選んだ。

元々、スカリエッティとクアットロは、広域次元犯罪者の特A級だったので、現場の判断で殺すことも許されていた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

リミットブレイクをフルで使ってしまったため、立っているのがやっとだった。こんな所でグズグズしてられないのに……。

だめだよ……。

自分の命を引き替えなんて……。



絶対にだめだからね!!

\*

\*

\*

ゆりかご最深部

「まあ、みんな使えないこと……」

髪を下ろし、眼鏡を取り去った私は、完全に戦闘モードに入った。

「それでも、私がいれば大丈夫ですけどね。あはははは!!」

『そのくだらない野望も終わりだ。クアットロ!!』

声があると、最深部の扉が轟音と白色の光と共に破壊された。

扉が破壊され、そこに現れた人物は……。

こちらに銃口を向けていた、ファイル・グリードだった。

「決着を付けようぜ、クアットロ!!」

「いいですわ……。ファイル・グリード。未来から続いたあなたとの因縁……。ここで終演にしましょう!!」

ゆりかご 軌道ポイント到達まで あと1時間35分

## 第25話 ファイナル・リミット

「はあ……はあ……大丈夫か、アイゼン」

《問題ありません》

いくら致命的なダメージを負わなかったとはいえ、あれだけのガジェットをたった一人で片付けた代償は大きかった。

グラーフアイゼンも傷だらけになり、自身もかなり魔力と体力が消耗してしまった。

「なのも玉座の間に着いてるだろうな……。フェイトもスカリエツティと戦っているし……」

《Ja》

「はやてもアースラで、あたし達がゆりかごを止めるのを信じて待っている……」

「そしてフィルの奴も、自分の因縁と……クアットロと戦っているんだ。あたしがこんなところで、休んでなんかいられないんだ!!」

あたしはアイゼンを杖代わりにして、ゆりかご動力室に踏み込んだ。

動力室に入り見たものは、巨大なエネルギー結晶体のようなものだった。

遺失技術で製造されていて、現在使用されている魔力炉とは、何もかもがまるで違っている。

「こいつをぶっ壊して、この船を止めるんだ!!」

「リミットブレイク……やれるよな」

《Jawohl》

グラーフアイゼンのシャフトがスライドし、カートリッジがロードされた。

上がる魔力と共に、グラーフアイゼンのハンマーヘッドがドリルに変形した。

巨大なハンマードリルは、振りかぶると更に巨大さを増した。

《Zerst•rungsform》

「ツェアシュテールングス……ハンマー!!」

カートリッジがロードされ、ドリルと反対側のブースターに火が入ると、ジェット噴射の加速を載せて、おもいつきりアイゼンを打ち下ろす。

しかし……。

爆発による爆風が晴れると、傷ひとつ付かず、駆動炉の姿が現れたのだ。

《危険な魔力反応を感知しました。防衛モードに入ります。これより駆動炉に接近するものは無条件で攻撃されます》

さっきの爆発的な攻性魔力に反応して、駆動炉の防衛システムが起動してしまった。動力室内にはキューブ状のファイアが幾つも発生し、駆動炉に接近するものに対して無条件に攻撃を行うとの警告が発せられ、照準が合わせられた。

「……上等だよ」

アイゼンを構え直し、もう一度駆動炉に突っ込んでいった。

\*  
・  
\*  
  
\*  
  
\*

アースラ ブリッジ

「巨大船の軌道ポイント到達まで、あと38分。このままではアースラだけでは、どうしようもなくなってしまう!!」

「主砲の照準は、ミッド首都に向けられています……このままポイントに到達すれば……」

「ミッドは消滅やろうな……」

「……私は、このままここで、手をこまねいてみているしかないんか!!」  
「八神部隊長……」

本当なら今すぐに、ファイル達の応援に行きたい。

でも、私が離れると言うことは、アースラを放棄すると言うこと。

それは、アルカンシエルを撃つことが出来る人間がいなくなってしまうということだ。

「……………ファイル、お願いや。無事に帰ってきてや……………」

手に握られているアルカンシエルの封印を解くキーを握りしめながら、己の無力を呪っていた。

\*

\*

\*

「うっ……………くっ……………」

ヴィヴィオの攻撃で壁にたたきつけられたわたしは、本気を出せないでいた。

本気を出せば何とかなるが、それでヴィヴィオを殺してしまうんじゃないかと躊躇っていた。

「ヴィヴィオ……」

「気安く呼ばないで!!」

ヴィヴィオは、虹色の魔法弾を放った。

形は違うが、クロスファイアである。

アクセルフィンによる加速で移動し、一瞬前にいた空間に複数の魔法弾が着弾し、爆発を起こした。

《Chain Bind》

ヴィヴィオの背後に回りこみ、レイジングハートの自動詠唱によるチェーンバインドで、ヴィヴィオの動きを封じようと試みるが……。

「こんなの……効かない!!」

あっさりとバインドは破られてしまった。



今のヴィヴィオは、わたしの捕縛魔法程度では動きを抑えられない。

両手に四個の魔法弾を発生させ、わたしに向かって射出した。

虹色の魔法弾は、着弾直前に弾けて無数に分裂し、それがわたしを取り囲む。

さつきと同じと思っていたわたしは、避けることが出来ず、まともに攻撃を受けてしまった。

さらに吹っ飛んでいったわたしに対し、追撃をかけるべく大きな魔法弾を発生させ、それを拳で撃ち抜いて射出した。

《Round Shield》

間一髪レイジングハートが自動防御で対応したが、そう何度も耐えられるものではない。

「ブラスター2!!」

《Blaster 2nd》

やむをえず、再度ブラスターシステムを開放した。

膨れ上がったの魔力の余波が、衝撃波となってヴィヴィオの身体を押し返した。

同時に、周辺に、レイジングハートの穂先を模したビットが現れた。

ブラスタースターモード時に使える、ブラスタースタービットだ。

「ブラスタースタービット、クリスタルケージ……ロック!!」

ビットが射出され、ヴィヴィオの周りを舞った。

ビットが引いていたバインドが、ヴィヴィオに絡みつき、更にビットはピラミッド型の結界を構築し、ヴィヴィオをその中に閉じ込めた。

「これは、もう覚えた!!」

だが、さつきと同じくチェーンバインドは破られ、クリスタルゲージも拳で打ち砕こうとしていた。

術者のわたしも、ケージを維持することがだんだん厳しくなってきた。

\* \* \*

「くそつたれが……」

最深部にいるクアットロの所に行つた俺だったが、魔力の差と『聖王の鎧』のレプリカのせいで、俺の攻撃はことごとく通用しなかった。

魔力を振り絞つて、プラズマザンバーで斬りつけたが、クアットロには届かず、クロスファイアもシューターも、そしてブラストブレイザーも全部はじかれてしまい、クアットロはノーダメージだった。

魔力の差を補うため、ブラスタースターモードをブラスタースター2まで引き上げたが、それでも、クアットロのスピードについて行くのがやっとだ。

ワープで背後に回つても、聖王の鎧がある限り攻撃は通じない。

「いいざまですわね……フィル・グリード。あなたといい、高町なのはといい、本当にお

馬鹿ですわね。ブラスターは自己ブリスト。撃てば撃つほど、守れば守るほど術者とデバイスは命を削っていく。優秀なサポートがいて、後先考えず一撃必殺を撃てる状況なら、怖いスキルですけど、一人で戦うんじや役に立たないですわ」

——確かにそうだ。

ティアがこいつを倒したときは、俺がサポートしていたからティアはスターライトブレイカーに集中できた。

でも、今はだれもサポートがない。

「そんなおバカなあなたに一ついいことを教えてあげますわ。なぜ、この時代に私がやってこれたかですけれど……。その答えは、ゆりかごのシステムの一つ、時間移動システムにあるんですわ」

「じ、時間……移動システム、だど？」

「そう、あなたたちに瀕死の傷を負わされた私は、あなたにとどめの一撃を加えた後、このシステムを起動させたのですわ。このシステムは、未完成のもので、残念ながら一回こっぴりの片道切符で、しかも精神しか飛ばすことができない。それでも、この時代の

私と融合して、ごらんのとおりですわ〜」

俺は、女神の力でこの時代にやってきたが、あの女はそんなふざけたものを使ってこの時代に来ていたのか……。

「おかげで、あの時代でできなかったことをまたやり直しすることができんですから、最高の気分ですわ!! おっほほほほほほほほほほほほほほほほッ!!」

さらに、クアットロは手をかざし、スクリーンを映し出すと……。

「どうやら、あっちも苦戦してますわね」

展開しているウインドウには、ヴィヴィオがクリスタルケージを破り、なのはさんと激突しているシーンだった。

「なのはさん!!」

「あはははは。何度見ても快感ですわ。親娘で殺し合う光景は!! そう思いません、

フィール・グリード」

「……………貴様……………どこまで腐つていやがる!!」

「いくら足掻いても無駄ですわ。私にこの聖王の鎧がある限りね。あはははは!!」  
「くっ!!」

あの聖王の鎧がある限り、どうしようもない。

なのはさんクラスの砲撃ならともかく、俺じゃ単体じゃどうしようもない……………。

「諦めなさい。何をしても無駄なんですのよ……………。ん？ これは……………駆動炉のチビ騎士  
?」

ゆりかごに揺れが感じ、クアットロが調べると駆動炉での様子が映し出された。

\*

\*

\*

「はあ……はあ……ちくしょう……なんでこわれねえ……」

これまで何発とぶつ叩きまくったが、一向に壊れる気配はない。叩くそばから修復されてしまうから、ダメージが蓄積しない。

そして駆動炉自体がエネルギーを生み出しているから、修復に必要なエネルギーのガス欠はあり得ない。

「こいつをぶつ壊さなきゃ……みんなが困るんだ……はやてのことも……なのはのことも……フェイトのことも……ファイルのことも……守れねんだ!!」

「こいつをぶち抜けなきゃ意味ねえんだ!!……だから……」

「アイゼン!!」

《J a w o h l》

あたしの残り魔力とアイゼンの状態から考えて、撃てるのは後一発。

この一発に全てを込める!!

「うおおああああ!!」

ボロボロになってヒビ割れだらけのグラーフアイゼンに、カートリッジをロードさせ、最後の一撃を放とうとしていた。

「ぶち抜け!!」

グラーフアイゼンは初撃と比べても遜色の無い一撃で、駆動炉に刺さった自らのドリルの先端を、強烈に打ち抜いた。そして、そこを中心に、小規模な爆発が起こった。

今の一撃による衝撃で、ドリルの部分を完全に失ってしまった。

次の瞬間、アイゼンの全身に入っていたヒビが更に広がり……光と共にその全てが砕け散った。

そして自身も全ての力を使い果たしてしまい、地面に落下していった。

「駄目だ……守れなかった……はやて……みんな……ごめん……」

力尽き、もはや、地面に激突するしかなかったが……。





アースラで指揮をしているはずのはやてがここにいた。  
どうして……。

「リイン……も……」

「はいです……」

「どうして……ここに……」

「家族が必死で戦ってるのに、助けに行かないわけないやろ……」

\*

\*

\*

「でも……アースラは、ファイルから託されたのに……」

「リンデイさんや……。クラウドディアのポーターが何とか動いてくれて、本局にいたりンデイさんが来てくれたんや……。だから私もここに來ることが出来た……」

あの時——。

本局のポーターが復活し、リンデイさんが助っ人に来てくれた。そして、私の思いを酌み取ってくれて——。

『はやてさん、自分の思いに素直になりなさい。ここは隠居者の私で十分ですから……』

隠居者なんてとんでもない——。

リンデイさんのおかげで、劣勢だった状況を立て直すことができたんや。

ほんまに最強の助っ人やで!!

「あとは私に任せて、ヴィータはここで休んでいてや……」

「うん……」

ヴィータは、私の声で安心したのか、その場で眠ってしまった。

回復すれば、自力で起き上がれるだろう。

本当は一緒に付いてあげたいが、そうもいかない。

「いくよリイン……。なんか嫌な予感がするんや……」

「リインもです……。なんかこう……。胸が苦しくなるんです……」

ここに来る前、ユーノ君が言っていたことが本当なら、ファイルは死ぬ気や!!

お願いやから、ファイル——。

私が着くまで早まったことはせんでや!!

\* \* \*

「駆動炉が……」

「終わりだ、クアットロ……」

「ほごぎなさい!! 防御機構フル稼働、予備エンジン駆動、自動修復開始……。まだまだゆ

りかごは堕ちませんわ」

「さっきも言ったが、お前はもう、お終いなんだよ!!」

ブラスタービットが射出され、クアットロの周りを何重にも舞った。ビットが引いていたバインドが絡みつき、完全に動きを封じた。

聖王の鎧の弱点——。

それは砲撃や斬撃に対しては無敵を誇るが、こういったバインド系は反応は示さない。

前回の戦いでも、聖王の鎧があつたにもかかわらず、バインドが出来たのを覚えていたのだ。

「くっ……相変わらず堅いバインドですわね。でも、あなたの砲撃の威力じゃ、どうしようもありませんわ!!」

「俺の砲撃だったら……な……」

「ま、まさか!!」

《なのはさん!! レイジングハート!! 今です!!》

プリムが通信していたのは、なのはさんだった。

そう――。

このときを待っていた――。

ヴィータ副隊長が駆動炉を破壊してくれるのを!!

「……待ってたよ、この時を!!」

プリムの通信と同時にヴィヴィオは、バインドに絡め取られていた。

これまでのように、容易には抜け出せない。

今度はブラスタースタービット4基によるチェーンバインドで、床に縫い付けられたのだ。

「ま、まさか……。あなたはずっとこの時を待っていたというの。あのチビ騎士が、駆動

炉を破壊するのを……」

「駆動炉を破壊してしまえば、お前の聖王の鎧はフルに発揮しない。本物じゃない、お前の聖王の鎧の動力源はあの駆動炉だからな」

\*

\*

\*

まさか……。

そのことを見破られていたなんて……。

——しまった!!

スクライアだ。あいつがこの事を調べたんだ!!

そして私は、ファイル・グリードが何をしようとしているのかが分かった。

高町なのはだ。あいつの砲撃で私を倒そうとしているんだ……。あの砲撃の恐ろしさは、私も知っていた。

だからこそ、ヴィヴィオを高町なのはにぶつけていたのに……。

そして、高町なのはは、私がある方向への確にレイジングハートを向けた。

「壁抜き!? そんな馬鹿げたことが……はっ!!」

脳裏に浮かんでいたのは、四年前に起きたの空港火災のビジョン。空港内から、行く手を全て薙ぎ払って天を衝いた、桜色の砲撃——。

「あ……あつ……ああああ……」

\* \* \*



《通路の安全確認。ファイアリングロック解除》

「ブラスター……3ツ!!」

ブラスターシステムの最終リミッターを、全く躊躇せず解放した。

レイジングハートの穂先から、眩い桜色の巨大な魔力翼が展開され、同時に魔力も膨れ上がる。

「ダイバイイン……」

詠唱に入るが、魔力ブーストはブラスター3だけに留まらず、その状態から、レイジングハートが大口径カートリッジを5連ロード。

魔力は、更にふた回り以上も増大する。

ヴィヴィオを傷つけたこと——。

未来でみんなを殺したこと……。

そして——。

ファイルを殺したこと——。

わたしは、決して許さない!!

「バスター——!!」

放たれた砲撃……。

桜色の奔流が、ゆりかごの強固な壁と床をブチ抜きながら、クアットロに迫った。

「あああ………嫌あああああああああ!!」

クアットロの頭上に桜色の砲撃が降り注ぎ、辺り一面破壊する——。

しかし――。

煙が消え、そこにいたのは――。

「なあんてね〜♪ おーほっほっほっ!! 束の間の勝利の美酒はいかがでした?」  
「そ……そんな!!」

フルパワーのデイベインバスターが、完全に防がれるなんて――。

あの聖王の鎧は、もうエネルギー源を断ったはずなのに!!

「動力炉が破壊されても、少しの間なら作動できますわ。あなたの砲撃くらいなら、ほらこの通り〜♪」

だめなの――。

もう、わたし達には打つ手はないの。

ヴィヴィオのバインドも、もうすぐ解けちゃう……。

「おっほほほほほ!! 最高の気分ですわッ!!」

その時——。

「……その耳障りな高笑いも、そこまでだ」

いつの間にかフィルが、あたりの魔力を集めて……。

「フィル・グリード!! あ、あなた……その巨大な魔力は!？」

クアットロにプリムの銃口を向けていた。

\*

\*

\*

「おまえは……俺の策にまんまと嵌ったんだ。最後の……策に……な」

「ど、どういう事ですの!?! あなたの作戦は、高町なのはに私を倒させる物のはず!!」

クアットロが信じられないといった顔で、俺のことを睨んだ。

「おまえが、なのはさんのデイバインバスターを防ぐのは分かってたさ……」

あの女のことだ。絶対に予備みたいのは考えてる。

だからこそ、俺はその上を考える必要があった。

「そんな……私はあなたに……嵌められたのです!! この私が……ドクターの最高作

品のこの私が!!」

「……終わりだ。これで……すべて終わらせる!!」

俺は、自分の魔力を込め、さらにもう一度、このあたりの残留魔力をかき集め、最後の一撃の詠唱に入る。

「咎人に、滅びの光を。星よ集え!! 全てを撃ち抜く光となれ!!」

滅びの光のキーワードは、殺傷設定で放つための解除キー。

「あ……ああああ……そ……そんな……そんなああああああああ!!」

先ほどとは違い、クアットロは本気で恐怖を感じている。

聖王の鎧を保つためのエネルギー源は、ヴィータ副隊長が壊し――。

残ったエネルギーも、さつき使い果たした。

「……貫け……閃光!!」

集められた魔力は、聖王の鎧の力、なのはさんのデイバインバスターの魔力、そして

さつきから俺が放っていた魔力が集まり、魔力球は、さつきのデイバインバスターを上回る大きさになっていた。

さらに俺は、ストラグルバインドでクアットロの四肢を完全にロックする。

このバインドは、能力封じの力を持っている。

これで完全にチエックメイトだ!!

「いや……いや……いやあああああああああああつっ!!」

クアットロは身体を震わせ、カチカチと歯を鳴らし、膝は笑い、今にも崩れ落ちそうになっていた。

だが、俺は一片たりとも許す気はない——。

「そうやって怯える人々を……貴様は何人殺してきた……」

ミッドの人々をゆりかごで蹂躪し——。

俺の仲間を――。

親友を――。

大切な女性を―― 貴様を殺した!!

「この一撃は……この一撃は……貴様に殺されたティア達の怒りだああああああ!!」

俺はプリムのトリガーに指をかけ――。

「スターライト……」

最後の一撃を――。

「ブレイカーツツツ!!」



クアットロに放った――。

「あああ……嫌あああああああああ!!」

白銀の奔流は、クアットロを完全に呑み込み……。

そして……。

クアットロの存在を――。

この世から、跡形もなく消し去った。

《《終わりましたね……》》

「ああ……終わったよ……。何もかも……な……」

これで、死んでいったみんなも救われる——。

ティア……みんな……。

みんなの敵は取ったよ……。

だけど——。

「いや……まだだ。ヴィヴィオを……俺たちの娘を助けなきやな……」  
《そうでしたね。行きますよ、マスター!!》

ヴィヴィオを救うため、ワープでなのはさんの元に向かった。  
待つてろよヴィヴィオ。今助けてやるからな!!

\*

\*

\*

第七廃棄都市区画、最終防衛ライン

バリケードを張ってラインを死守していた魔導師や戦士たち。その動きが止まった。クアットロが消滅したことで、制御が完全に失われた。

「ガジェット完全停止!! 他の地点も同様です!!」

「六課の連中が、上手い事やったか」

ひとまず肩の荷が下りたが、まだゆりかごは健在だ。

八神、スバル、フィル、みんな死ぬんじゃないぞ……。。

\*

\*

\*

「なのはさん!!」

「ファイル!? 無事だったんだね!!」

「はい、今はそれよりヴィヴィオを!!」

「ううっ……」

強引にバインドを解いたヴィヴィオが頭を抱え、俺たちの方を向き……。

「なのはママ……ファイルパパ……」

「ヴィヴィオ!!」

俺たちは、ヴィヴィオの元に駆け寄ろうとしたが……。

「駄目、逃げて!!」

近づいた俺たちに拳を振りぬいた。

「ヴィヴィオ……もう……帰れないの……」

「ヴィヴィオ!! 今助けるから!!」

「駄目なの!! 止められない!!」

ゆりかごの自動防衛モードが発動し、揺れが出始めている。

このままじゃ本当にやばい!!

なのはさんと俺は、最後の力を振り絞って何とか立ち上がった。

「もう……こないで……」

「何……だと……」

「分かったの……。私……ずっと昔の人のコピーで……。もう、ママは死んじやつて……。なのはマ……なのはさんも、フェイトさんも、フィルさんも……。本当のママやパパじゃないんだよね」

「私は……この船を飛ばすための只の鍵で……。玉座を守る只の兵器……」

違う――。

「守ってくれて……。魔法のデータ収集が出来る人を探してただけ……」

「それは違う!!」

「違わないよ!! 悲しいのも、痛いのも、全部偽物の作り物……。私は、この世界に居ちゃ行けない子なんだよ!!」

悲しそうに、色違いの瞳から涙を流し、少女の姿のヴィヴィオは告げていく……。

「それは違う……。生まれ方は違っても、今のヴィヴィオは……。そうやって泣いているヴィヴィオは、偽物でも作り物でもないんだ!!」

「そうだよ……。甘えん坊で、すぐ泣くのも、転んでも一人で起きられないのも、ピーマン嫌いなのも……。わたしが寂しいときにいい子ってしてくれるのも……。わたしの大事なヴィヴィオだよ……」

「そうだ……。俺はヴィヴィオの本当のパパじゃない……。だけど、これから本当のパパになれるように努力する。だからいちやいけないうな!! 本当の気持ち俺たちに聞かせてくれ……」

いちやいけない命なんて絶対じゃない!!

どんな生まれ方をしたって、そんなのは関係ない!!

ヴィヴィオはヴィヴィオだ!!

俺たちの大切な娘なんだ!!

「私は……私は……なのはママとフィルパパのことが……大好き。ママ達とずっと一緒にいたい……」

「ママ……パパ……。助けて……」

ヴィヴィオの悲痛な叫びに、俺もなのはさんも涙が止まらなかった。

《マスター、ここでやらなかったら男じゃないですよ!!》

「……助けるさ」

「……いつだって」

「どんなときだって!!」

足下に白色の魔法陣が展開され、俺はヴィヴィオに向かっていった。繰り出されたヴィヴィオの拳を何とか受け止め……。

《Restrict Lock》

「やりますよ、なのはさん!!」

「うん!!」

「プリム、ブラスター3を起動する!!」

——ファイナル・リミット。

これを俺が使えば、もしかしたら二度と魔法が使えなくなるかもしれない。だけど、ここで使わなくて、いつやるんだ!!

《……やりましょう、マスター。悲劇は……ここですべて終わらせましょう!!》  
「ありがとな、プリム……」

ヴィヴィオの動きを封じた後、俺はファイナル・リミットのブラスター3を起動し、さらに上空へ飛び上がり、俺たちは、共にスターライトブレイカーの発射態勢に入る。身体がバラバラになりそうな痛みが、全身に駆けめぐる……。

少しでも気を抜けば、意識を持って行かれてしまう。



だけど……。

こんなもの、ヴィヴィオの悲しみに比べたらなんてことはない!!

「ヴィヴィオ……。少しだけ痛いので、我慢できるか……」

「……うん」

「いい子だ……」

「防御を抜いて、魔力ダメージでノックダウン……。いけるね、レイジングハート」

《いけます!!》

「頼むぞプリム……。絶対、ヴィヴィオを助ける!!」

《当たり前です!! 命に代えても絶対に成功させます!!》

「いきますよ、なのはさん!!」

眩い桜色の巨大な魔力翼が展開され、ブラスタービットからも魔力が展開されていた。

そして反対方向でも、白銀の魔力が展開され、同じくブラスタービットが展開され魔

力が集まっていた。

「全力……全開 !!」

「スターライト……」

「ブレイカーー!!」

桜色と白銀の魔力が合計7方向から発射され、ヴィヴィオに放たれた。ヴィヴィオは苦痛に耐えているが、まだレリックは現れない。

「まだか……。このままじゃヴィヴィオは耐えられないぞ!!」

《もう少しです……。見てください!!》

すると、ヴィヴィオの胸元にレリックが出現した。

ようやく出てきたか……。

しかし、レイジングハートがヒビだらけになり、もう限界が近づいていた。

プリムはフレームは強化してるが、レイジングハートは複雑な機構のため、フレームの強化が難しく、プリムほど強化が出来なかった。

さらにプラスター3で強化された、なのはさんの魔力が強力なため、それに耐えきれなくなってるんだ。

「レイジングハート!!」

《マスター、私にかまわず、このまま撃ってください》

「けど!!」

《レイジングハートのいうとおりですよ。ここで止めたら、レイジングハートはきつと後悔します!! 肝心なときに力になれなかったって……。そんな思いは私だけで充分です!!》

「……プリム」

プリムは、未来でティアを助けられなかったとずっと後悔し続けてきた。

そんな思いを、なのはさん達にさせたくない!!

《なのはさん、レイジングハートを信じるなら、自分の相棒を信じて全力で撃ってください!!》

「……わかったよプリム。レイジングハートお願い、わたしに力を貸して!!」

《もちろんです!! いっしょにヴィヴィオを助けましょう!!》  
「ありがとう……。レイジングハート……」

もう、なのはさんにもう迷いはなかった。

最高の相棒達の思いに応えるためには、ヴィヴィオを救うことだ!!

「ブレイク……」

「シューート!!」

「あああああつつつつ!!」

レリックが砕けると同時に、大爆発がおこり、ヴィヴィオが居たところに巨大なクレーターが出来ていた。

煙がまだはれないので、クレーターの中の様子はまだ分からない。

なのはさんはレイジングハートを杖代わりにして何とか歩いている。

俺も何とか歩くことは出来るが、さすがにもう限界だ。

「ヴィヴィオ……」

「来ないで……二人とも……」

俺たちの目に映ったのは、ヴィヴィオが自分の力で立とうとしている姿だった。

何度も転んでいたが、それでも諦めようとせず、何度も立ち上がるうとしている。

「ひとりで……たてるよ……」

「あ……ああ……」

「強くなるって……約束したから……」

なのはさんも、俺も涙が止まらなかった。

「ヴィヴィオ!!」

なのはさんは、自分の力で立ち上がったヴィヴィオを抱きしめていた。

俺もそばに行ってやりたいが、今はそつとしておこう。

やっと……絆を取り戻したんだから……。

\*

\*

\*

対ゆりかご前線指揮所となっているアースラブリッジでは、ゆりかごの異変が観測されていた。

詳細データを計測していた、操舵室のルキノが、報告を上げてくる。

『ゆりかご船速低下、上層速度激減!!』

『周りに張られていたバリアも弱まってきています!!』

「このまま……終わってくれば良いんだけど……」

何か嫌な予感が頭から離れなかった。

そしてそれは、現実のものになろうとしていた。

\* \* \*

「なのはちゃん、フィール!!」

「二人とも無事ですか!？」

「はやてちゃん、ライン。大丈夫だよ……。みんな無事だよ……」

俺たちを心配して、はやてさんとライン曹長がここに駆けつけてくれた。

俺は、はやてさんから少し魔力をもらい、ライン曹長から回復魔法をかけてもらい、何とか動けるようになった。

ライン曹長が、なのはさんにも、回復魔法をかけようとしたその時――。

『聖王陛下、反応ロスト、システムダウン』

艦内に警告音が鳴り響いた。

俺たちは、何とかヴィヴィオを抱え、クレーターからは出ることは出来たが――。

「なのはちゃん、ファイル!!」

「はやてちゃん（さん）!!」

『艦内復旧のため、全ての魔力リンクをキャンセルします』

次の瞬間AMF濃度がさらに高くなり、なのはさんはフィンが維持できなくなり、はやてさんもリイン曹長とのユニゾンが解けてしまった。

『艦内の乗員は休眠モードに入ってください』

\* \* \*

フレイム・グロウを消滅させ、少しの休憩を取った後、全員集合した。



フレイム・グロウを何とか消滅させたが、こっちも大きなダメージを負ってしまった。ギンガさんは前線でスバルやエリオのフォローをしながら戦っていたため、ダメージもかなり負ってしまい、ルーテシアも戦えないほどじゃないけど、かなりの疲労があった。

そこにアルトさんがヴァイス陸曹と一緒にヘリでやってきた。

「ヴァイス陸曹!! 怪我は大丈夫なんですか!!」

「まあな……。今はそんなことより、どうやら船の上昇は抑えられたみてえだが、あの中じゃまだ、戦いが続いてんだ。突入した隊長たちと、連絡がつかなくなったらしい」

「[[[[ええ!!]]]]」

「インドアでの脱出支援と救助任務。陸戦屋の仕事場だぜ!!」

「[[[[はい!!]]]]」

「でも……ゆりかごって、もう、かなり浮上しちゃってるんですね。ヘリでそこまで行くの無理なんじゃ?」

「なあに心配するな、このJF705型は、ちよいとスペシャルチューンしてあつてだな。ゆりかごが軌道ポイントに到達していなくなったら何とかなる」

このJF705型はファイルがスペシャルチューンをしてある機体だ。

こんな事もあるうかと思つてではないが、かなりの悪条件でも飛べる優れたものなのだ。

あたし達を乗せたへりは、ファイル達を助けるべくゆりかごへ全速力で向かった。

## 第26話 こぼれ落ちるもの

「ダメです、魔力結合できません!! 通信も!!」

「しやあない……歩いて脱出や……」

「でも……なのはさんとファイルが……」

「はあ……はあ……大丈夫、歩けるよ……」

「俺も大丈夫です……」

ブラスタ―3を使ってしまったのはさんは、その反動で疲れ果ててしまっていた。レイジングハートを杖にして、やっと身体を支えているような状態だ。

そして、俺もかろうじて動ける状態だ――。

《乗員は所定の位置に移動してください……繰り返し返します。乗員は所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・および非常隔壁から離れてください》

「出口に急ぐんや!!」

俺たちは、なのはさんがぶつ壊した所に走っていたが、なのはさんが遅れていて、このままじゃ、全員ここに閉じこめられてしまう。

それに――。

俺にはやらなければならないことがある!!

「ウインド・ブレス!!」

「「「きやああああ!!」「」」

ウインド・ブレスで、なのはさん達を一気に出口のところまで、吹き飛ばそうとしたが――。

「くううう……」

「はやてさん!?!」

はやてさんが、俺のジャケットの端をつかみ、吹っ飛ばされないようにしていた。なのはさん、ヴィヴィオ、リイン曹長は隔壁が閉じる前に出すことが出来たが、隔壁が閉鎖されてしまい、はやてさんを脱出させることが出来なくなってしまった。

「ファイル!! はやてちゃん!!」

\*

\*

\*

地上本部中央タワー

別任務で離れていた私とアギトは、その任務が終わったため、アースラの護衛に向かうことになった。

任務は、アースラ発進後にレジアス中将が、最高評議会の手によって拘束され、連れさらわれてしまったのだ。

そのことをオーリス三佐より通信を受けた六課は、派遣者として私とアギトを選ん

だ。

地上におりた私達は、中将直属の部隊とゼストと合流した。

ゼストはこの事をオーリス三佐より知り、オーリス三佐と部隊の隊長の手により一時的に釈放された。

彼らと一緒に救出に向かった先には、数多くのガジェットが待ちかまえていた。

だが、ガジェットなど彼らの手にかかれば、そんなに手こずる相手ではなかった。

無事救い出したのだが、そのとき背後から、レジアス中将を殺そうとしたガジェットIV型が現れ、レジアスをかばい、騎士ゼストが戦死してしまった。

元々レリックウエポンの試作機とされていた彼にとつて、どのみち長くなかったのだ。

親友を救うことが出来たゼストの顔は安らかなものだった。

レジアス中将のことを彼らに任せした後、私達はアースラに合流するためここに戻ってきた。

「アギト。準備はいいな……」

「ああ……。死んでいった旦那のためにもやってやる!!」

『ユニゾン・イン!!』

二人の身体が灼熱の炎に包まれ、強い光を放ち始めた。

\* \* \*

ゆりかご周辺空域に到達したJF705。

ファイルが改造したこいつは、ヘリと呼べるようなシロモノではなかった。

ローターはあくまでも低空用と、ヘリとして登録するために付いているだけで、既  
用を成していない。

このヘリは魔導エンジンが、無理矢理搭載されているのである。

この魔導エンジンは、アースラの新型エンジンを作るときに試作したもので、いくら

大出力が得られると言っても、ヘリなどに搭載したら、自殺装置以外の何物でもない。

まさに空飛ぶ棺桶である――。

だから、アルトが操縦するときにはリミッターがかかっていたが、俺が操縦するときには、リミッターは全解除できる。

というよりこの高度になると、アルトの操縦技術じゃ追いつかない。

そして、今、カーゴルームからストームレイダーを介しての遠隔操縦を行っていた。

「いいか。船の中は、奥に進むほど強度のAMF空間だそうだ。ウイングロードが、届く距離まで寄せてやる。そいつで突っ込んで、隊長たちを拾ってこい!!」

「はい!!」

なのはさん達の救出にはフォワードの中で、比較的軽傷のスバルとティアナが行くことになった。

重傷のギンガとルーテシア、軽傷だが体力と魔力を使い切ってしまった、ライトニングコンビはここに残ることになった。



それにバイクを運転できるのが、この二人しかいなかったのだ。ちなみにスーパーサウンダーはティアナが運転することになった。

「ごめんなさい……肝心なときに……」

「すみません……」

「いくぜ……ストームレイダー!!」

そう言つて、ライフルモードのストームレイダーを構える。

魔法弾は、確実にガジェットロボデイへと吸い込まれていく。

どうやら、命中精度は落ちていないようだな——。

「前に言つたな……俺はエースでも達人でもねえ。身内が巻き込まれた事故にビビつて、取り返しの付かないミスショットもした。死にてえくらい情けない思いもした……。それでもよ……」

《Variable Barrett》

ストームレイダーがカートリッジを三発ロードし、高密度の多重弾殻弾頭弾を生成す

る。

「こんな俺でも……後輩達の道を作ってやるくらいのことは出来るんだよ!!」

発射された弾丸は寸分変わらず、砲台として配置されていたガジェットⅢ型の丸い巨体の中心を貫いた。

「よし!! 行け!!」

「はい!!」

「ウイングロード!!」

カーゴルームの床に、強い輝きを放つ、水色のベルカ式魔法陣が生成され、そこから一直線に、俺が確保した突入口に向かってウイングロードが伸びる。

と同時に、ティアナはサンダーのスロットルを全開にした。

「Go!!」

スーパーサウンダーは、勢いよくヘリから飛び出し、ゆりかご内部に突入した。

\*

\*

\*

「はやてさん、なんで!？」

「フィル……あんた、死ぬつもりやったろ……」

「な……何を言ってるんですか？ 俺一人だったらワープで出られたんですから、そんなことは……」

「嘘やね……」

ここに来る前、ユーノ君からゆりかごのことを聞かされ、その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシエルではゆりかごを破壊できないと聞かされていた。

そして――。

そのことを唯一知っているフィルは、一人で破壊しようとしていた。

「そうだったんですね……。ユーノさんが……」

「馬鹿や……。何で一人でやろうとしたんや……」

「今、この場で砲撃魔法が使えるのは俺だけです。なのはさんもブラスターを使ってしまい戦闘不能だし、フェイトさんもない……。だから……」

「私じゃ、駄目なんか……。フィルの役にはたたんか……」

「はやてさんがラグナロクを使えば、良かったんですけど……」

「正直、厳しいな……。ラグナロクは……」

ラインとユニゾン出来ていれば、もしかしたら何とかあったが、ラインも外にいる以上それは望めない。

それにさつきもユニゾンアウトしてしまったことから、おそらくユニゾンは出来ない。

「やっぱり……俺がやります……」

そう言ってファイルが取り出したのは、銀色に輝くカートリッジ——。

《駄目です!! マスター!! それだけは!! 『スパイラル』だけは使わないって約束したじゃないですか!!》

「なんや……? そのスパイラルってのは……」

《スパイラルモード……マスターの最終形態。体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは封印を解くキーなんです。そして、使えば……》

プリムが言おうとしたことは、すぐに分かった!!

スパイラルを使ったら——。

ファイルは……間違いなく死ぬ!!

「そうだな……。だけど、ここでコアを破壊しなかつたら、全てお終いなんだ!!」

そうやって、カートリッジを挿入しようとしたとき……。

「だめえええええええええ!!」

私は無我夢中で、フィルからカートリッジを奪い、そして——。  
自分の杖でカートリッジを木っ端みじんに砕いた。

「なんて事を!! カートリッジはあれしかないですよ!!」

「……あかん」

「自分が犠牲になるのは、絶対にあかん!! そんなことは、私が許さへんよ……」

そんなことをしたら、フエイトちゃんどんなに悲しむか……。

あんたは、好きな人を自分の手で悲しませる気か!!

\*

\*

\*

「はやてさん……」

「さつき、私がラグナロクを使えれば破壊できるって言ったよね。だったら、ファイルが私をサポートしてくれば……」

「だけど、はやてさんが魔力を使えなければ……。はやてさんのデバイスはAMF対策の処理をしてない」

AMFの処理は俺とティア、フェイトさん、そしてなのはさんのデバイスにしか付けられなかった。

このシステムはかなり複雑なため、大量に作れず、結局4つしか完成させる事が出来なかったからだ。

さらに、これはインテリジェントデバイスにしか搭載が出来ない。

シユベルトクロイツはアームドデバイスだった為、どのみち付けられない。

《だったら、はやてさんが私を使って、ラグナロクを撃ってください!!》

「そっか!! その手があったんや!!」

《だけど、AMFの影響で、本来のラグナロクの威力は、出ないかもしれません……》

「それだったら……これを使って、俺も撃つ……」

《これは……クロスミラージュ!!》

取り出したのは、未来でティアに託されたクロスミラージュだった。

これにもプリムと同じ、AMF対策は施してある。

もう一度……もう一度だけ、ブラスターを使って、俺もスターライトブレイカーを撃てば……。

「きつとティアも……力を貸してくれると思います……」

——そうよ。

あんたが、幸せになるためだったら、いくらでも力を貸してあげる。

だから——。

精一杯やりなさい!!



「ティア!?」

「どうしたんや、ファイル?」

「今……ティアの声が……聞こえた気がします……」

「そっか……」

死者の声が聞こえたなんて非現実的なことなのに、はやてさんは俺の言うことを馬鹿にはせず、きちんと聞いてくれた。

「わかるよ……。私も昔、大切な人を亡くしたから……」

「リインフォース……さん……ですね……」

「うん……知ってたんやな……」

「少しだけですけど……」

「だから、私はファイルの言うこと馬鹿にしたりせんよ。私も、そう思うときがあるから……。リインフォースが話しかけてくれて、力を貸してくれるって……」

「ありがとう……はやてさん……」

プリムをブレイズモードに変形させ、はやてさんに託した。  
俺もクロスミラージユを同じくブレイズモードにする。

\* \* \*

『小型航空機、地上に降下しています!! 空戦魔導師、誰かいなか!!』

「該当地点で、今動ける魔導師は……あっ!!」

「います!! 機動六課ライトニング2、シグナム二尉!!」

「この声、ルキノか」

『はい!! あ、あれ? シグナム副隊長、そのお姿は?』

艶やかなピンク色だった髪は色素が抜けたような淡い色に、マリンプルーだった瞳も、魔力光と揃いのラベンダーに。騎士甲冑も、籠手の色がシルバーからゴールドに、甲冑自体も濃いピンクを基調としていたのが、青紫色を基調としたものに変わっていた。

そして何より、あふれ出す魔力が、2対4枚の羽となって背中から生え、轟々と燃えさかっていた。

「ああ……アギトとユニゾンしているからな……。お前は初めて見るんだったな……。現在位置で迎撃する」

『はい!!』

私の、そしてアギトの見据える先には、ゆりかごから発進してきた、大量のガジエツト。

『機影48……まだ増える』

「やれるか……アギト」

『やれるさ……猛れ炎熱、烈火刃!!』

「レヴァンティン!!」

《Schlangeform》

シュランゲフォルム……。

鞭状連結刃と化したレヴァンティンに、更にアギトの炎が上乘せされ――。

「おおおおお!!」

『おおおおおっ!!』

レヴァンティンを一閃すると、向かってきたミサイルは、それを発射したガジェットもろとも斬り捨てられた。

「剣閃烈火!!」

アギトと共にかざした左手に、剣を模した炎が形作られる。

そして……。

『火龍』

「……」閃!!」

勢いよく左手を振り抜くと、二人の炎は、空を斬り裂いて両断した。

次の瞬間、クラナガンの地上本部へと向かっていたガジェットは、その全てが爆散し、消滅した。

『き、機影50……。一瞬で、全部撃破……』

唖然とするルキノの報告を受けながら、私はレヴァンティンを剣状のシユベルトフォルムに戻すと、

かみ締めるように大きく息を吐き、軽く身を震わせる。

そして、ふと空を見上げていた――。

『やつぱり……。いいものだな……。お前とのユニゾンは……。不思議と心が温かい……』

「アギト……。？」

『なんでもねえ、なんでもねえよ!!』

アギトは私の中で、ぼろぼろと涙を零していた。

記憶など、とうの昔に失くしてしまった。自分の名前はおろか、きつといたはずのロードのことさえ、何ひとつ覚えていない。

ルーテシアやゼストに救われてからも、ずっと心に、ぽっかりと大きな穴が開いたままだった。

でも、ファイル達がそれを救った——。

『距離450、第二編隊来ます!!』

ルキノからの通信が入り、遠くを見据えると、ガジェット第二波が飛翔しているのが確認された。

「ああ……行くぞアギト」

『おう、シグナム!!』

\*

\*

\*

あたしは血塗れのまま、グラーフアイゼンを振り下ろし、キューブ状のスフィアを破壊する。

「はあ……はあ……はあ……」

「無茶です、ヴィータ三尉!!」

「うるせえ!!」

あたしは乱れた息を整えながら、合流していた突入隊の魔導師二人に言った。

リンクを完全キャンセルするAMFによって、あたしもあとの二人も、魔力が使えなくなっている。

デバイスはかろうじて通常フォルムをとれているが、三人の中で、魔法なしで敵と戦えるのは、あたしだけだ。

そして、砕けたグラーフアイゼンが元に戻っているのは、夜天の書の主であるはやてが現れたために、通常行動が可能なレベルにまで回復してもらえたからだ。

何とか、奥に進もうとしていたあたしの耳に、バイクのエンジン音が聞こえてきた。

「な、なんだ!？」

「ヴィータ副隊長、ご無事で!!」

ティアアナとスバルがスーパーサンダーに乗って、向かってきているところだった。

「なのはさんと八神部隊長達の救出、行ってきます!!」

「ここまでの通路はクリアになってますから、早く脱出してください!!」

ここまでの状況を説明し、ティアアナたちはあたしたちを追い抜いていく。

「か、彼女達は?」

「うちの新人達だよ。あたしらは邪魔にならねえように離脱すんぞ」

「は、はい」

あたしたちは、ティアアナたちが侵入してきた突入口へと歩き始めた。

ティアアナ、スバル、なのは達のこと頼んだぞ!!





もしも——。

私がああの時、咄嗟にフィルのジャケットをつかんでなかったら……。

「プリム……」

《はやてさん、絶対成功してみんなで帰りましょう。そのときこそマスターは、本当の意  
味で解放されるんです!!》

「せやな……。みんなで生きて帰って、この事件を終わらせる。フィルがたどった未来  
は、ここで変わるんや!!」

\*

\*

\*

「クロスミラージュ……。俺に力を貸してくれ……」

クロスミラージュ――。

かつてティアが託してくれたデバイス。

そして、ティアの形見……。

《もちろんです。私はあの時……相棒であるティアナを救えなかった……》

「クロスミラージュ……お前……」

そっか……。

お前、ずっと後悔してたんだな。

ティアを死なせてしまったことを……。

《ファイルさん絶対成功させて生きて帰りましょう。あなたを待っている人のためにも

……》

「……そう……だな……」

「やるで、フィル!!」

「はい!!」

俺たちは玉座にあるコアに向けて銃口を向けた。

はやてさんはラグナロクを、俺はスターライトブレイカーの発射態勢に入った。  
俺もはやてさんも魔力色は白銀。

違うのはミッド式かベルカ式の違い――。

プリムは女神が古代ベルカ式の魔法術式は組み込んであると言っていた。

だからはやてさんが使うことも可能なはず。

「響け、終焉の笛……ラグナロク!!」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ!! 貫け……閃光!! スターライト……」

はやてさんは銃口にベルカの魔法陣が、俺はミッドの魔法陣が展開されていた。  
やはり2度もプラスター3を使うのは厳しい。

体がバラバラになりそうだ——。

だけど、はやてさんが慣れないデバイスで必死でやってるんだ。  
俺が泣き言を言っつてられるか!!

カートリッジをロードすると魔力はさらに増大する。

——これが最後だ。

この一発に——。

全てを……込める!!

「ブレイカー——!!」

二つの光は一つとなり、コアに一直線に放たれた。

そして……。

二つのブレイカーが命中すると――。

コアは木っ端みじんに砕け散った。

ラグナロクとスターライトブレイカーのWパワーは半端でなく、コアだけでなく壁そのものも消し去っていた。

\* \* \*

「何?! 今の揺れ……半端じゃなかったけど?」

「ええ……これは!! 魔力が結合できる!!」

「本当、ティア!!」

「間違いないわ。でも、どうして?」

今まで全然駄目だったのに、突然AMFが消滅した。  
どういふ事なの？

《分かりません……。でも、相棒達の反応はあります!!》

「ということは、ファイル達は生きてるって事ね!!」

「そうだよ!! 急ごう!!」

スーパーサnderのスロットルを全開し、ファイルの元に急いだ。

途中で出口に向かっていたのはさんとヴィヴィオ、リイン曹長に会い、玉座の間の様子を聞くことが出来た。

ファイルは最初、自分以外の人間を脱出させるつもりだったが、八神部隊長がそれに気づき、自分も残った。

本当は何とか中に入ろうとしたが、魔力が使えない状況と、ヴィヴィオのこともあつて出口に向かっていたのだ。

そして、この揺れは玉座の間にあつたコアを破壊したからだ、リイン曹長が話してくれた。

それに、AMFが消えた今、あいつが自力で脱出するのは可能だ。

ゆりかごも崩壊し始めて、このままだとあたし達も生き埋めになってしまう。

「とにかく急いでここを出ましよう!!」

「はやてちゃんとフェイトちゃんのことを気になるけど……。ここでみんな死ぬ訳にはいかないね。フィルのことを信じて、わたし達はここを脱出しましょう!!」

「「はー!!」」

あたし達はフィルが脱出することを信じ、急いでゆりかごを出ることにした。

\* \* \*

「……………もう……………だめかな……………」



リミットブレイクの影響で、この場から動くことが出来ないほど疲弊していた。ゆりかごの崩壊も酷くなってきていて、この場もかなり崩壊が始まっている。

そして――。

天井が崩れ、頭上に落下してきた。

「ごめんね……ファイル……」

天井の下敷きになる直前――。

《S o n i c m o v e》

一条の白き閃光が――。

間一髪のところ、私を助けてくれた……。

\* \* \*

「……ファイル!! はやて!!」

「はあ……はあ……。何とか……間に合ったな……」

残った魔力を、全て使つてのワープとソニックムーヴ——。  
これで、完全に魔力切れだ。

「ファイル……。本当にファイルなんだね!! もう……会えないって、思っていたんだから……」

泣きながらフェイトさんは、俺の胸を叩いていた。  
叩かれているところは、それほど痛くない。

——だけだ。

それ以上に心が痛かった……。

「……はやてさんが、止めてくれたんだ。スパイラルを、使おうとした俺を……」

フェイトさんの魔力を失った俺には、スパイラルを使うしか残されていなかった。だから、あの時フェイトさんに別れの言葉を言ったんだ。

「そうだったんだ……。ありがとう、はやて」

「礼は後や……。今は一刻も早く出ないと!!」

「そうだね……。みんなは、どうしたかな？ 通信してみるね」

フェイトさんが通信すると、ティアが応答し、状況を説明してくれた。

どうやら六課メンバーは俺たち以外、全員ヴァイス陸曹のヘリにいるようだ。

「……あとは、俺たちが……。脱出するだけ……。か。もう、ワープを使う力も残ってない」  
「私もはやても……。もう飛ぶ力は残ってないよ……」

「近くに脱出口があるみたいや。何とか、そこまで行くしかないで!!」

俺たちは最後の力を振り絞って、何とか脱出口へ向かう。

そして、脱出口が見え、後はそこから脱出するだけだ——。

「……なんとか……無事に脱出できそうだな」

どうやら俺の心配も、杞憂に終わりそうだな——。

そう思っていたその時——。

突如、ゆりかごの天井の一部が崩れ、砕けた破片が、先行するフェイトさんの頭上にめがけて落ちてきた。

——だめだ!!

はやてさんもフェイトさんも、頭上に気がついていない!!



そこには背中から、左胸部にかけてゆりかごの鋭利な破片が突き刺さり――。

破片の先から、赤い血をポタポタと流しているフィルの姿――。

「……………よかつ……………た」

そして――。

「フィルツツツ――!!」

力尽き、そのまま私の方へ倒れた。

急いで、フィルを側臥位にし、私は、フィルのそばに駆け寄り、胸に刺さっていた破片をとろうとしたが――。

「フエイトちゃん、あかん!! 今それを無理に引っこ抜いたら、内蔵と筋肉がズタズタになっちゃおう!!」

マルチタスクで冷静に考え、現状を把握する。  
私は、必死で助かる方法を考える。

だけど、頭の中がぐちゃぐちゃで何も思いつかない――。

「ねえ……。うそ……。だよね。こんなの……。悪い夢なんだよね」

夢だと思いたい――。

嘘だと思いたい――。

だけど、フィルの体から、体温がどんどん感じなくなってきた。

「…………ごめん、ね。もう…………一緒に…………いられ…………ない、ね」

こんなのうそだよ——。

「……いやだよ。ずっと一緒にいてくれるって約束したでしょう!!」

言ったじゃない——。

平和になったら、一緒になろうねって……。

ファイルは右手で、私の頬にそっと触れ——。

「……しあ、わせ……に……なって、ね……」

そして——。

頬を撫でた手が、力なく地に落ち——。



私の手から、こぼれ落ちていった――。

……どうして。

どうしてファイルばかり……。

こんなの……ない、よ。

仲間を失って――。

恋人を失って――。

せつかくやり直して、ささやかな幸せを得たと思つたら――。

「誰でもいい!! 誰かファイルを助けてよ!!」

涙が、ぼろぼろこぼれ落ちる――。

でも……。

その願いはもう届かない――。

# Epilogue 永遠の絆

「……は……？」

なんだ、この真っ白い空間は……。

あの時、俺はフェイトさんをかばって心臓を貫かれて――。

でも、この空間見覚えがある。

「まったたく……あんたは、本当にばかなんだから……」

ま、まさか……。

「でも、あんたらしいかもね。ファイル」

そこに立っていたのは――。

「……ティア」

二度と会えないって思っていた――。

あの笑顔をもう、見ることはないって思っていたのに――。

「何泣いてるのよ……。まったくあんたはそんなに泣き虫だったかしら？」

「いいだろ……。こんなときくらい……。泣いたってよ」

泣きたかった――。

もう、あえないと思っていた人に会えたんだから――。

そんな俺をティアは黙って抱きしめてくれた。

「……ごめんね。あんたをそこまで追い詰めちゃったのは……。あたしだよね」

「違うさ。お前がいてくれたから……。そして、フェイトさんが居てくれたから……。俺はここまでがんばれたんだ」

「……そっか。フェイトさんにあんたのことを託したのは……間違いじゃなかった」

「本当、おまえは……損な性分だよ。人のことばかり護ろうとしてさ……」

「それは、あんたには言われたくないわよ……」

「かもな……」

でも、後悔はない。

世界の修正力は、俺の命一つで済んだんだ。

みんなが生きてくれるのなら、それでいいさ。

「フィル、あんたにどうしても見せたい物があるの……」

「見せたいもの？」

「これを見て……」

そういつてティアが映し出したのは――。

\* \* \*

「……あのね。今日はね、エリオとキヤロがね……」

あの日からもう、一ヶ月の時間が流れた――。

ゆりかごで泣きじやくっていた私達を、ヴァイス達が迎えにきてくれて、ファイルは急いで病院に担ぎ込まれた。

病院に着いたファイルは、すぐに緊急手術が行われ、手術は18時間に及ぶ大手術だったけど、何とか命だけは助かった。

ゆりかごは、リンディ義母さんがアルカンシエル・ノヴァで、完全消滅させ、JS事件と呼ばれたこの事件は無事解決をする。

だけど、ファイルはまだ意識を取り戻さない――。

「なのはおね、ティアナに自分の技術を全部教えるんだって張り切ってるんだよ」

ねえ……。

いつまで寝ているの……。

私、そんなに強くないんだよ――。

フエイトって、呼びかけてよ――。

私を、ぎゅっと抱きしめてよ――。

\*

\*

\*

「……フェイトさん」

「ファイル……あんたはまだ、こつちにきてはだめ。あんたにはまだやることがあるでしょう」

「……ああ、だが……」

——本当に世話が焼けるわね。

「心配しなくても、あたしがあんたの命になってあげるから……」  
「だめだ!! それだけは駄目だ!! フェイトさんだけじゃなく、ティアまで犠牲にするなんて」

——ばかね。

あんたって本当に女心が分かってないのよね。



女はね、好きな人の力になれるなら、どんな形でもいいから一緒にいたいって思う物よ——。

「だから……」

あたしは残された最後の力で、フィルのリンカーコアの代わりになる——。

「あたしのぶんまで、しっかりと生きなさいね!!」

これが、あたしがしてあげられる最後のことよ。

\* \* \*

「……今日も……来ちゃった……」

いつものように、私は眠っているフィルの手を握りしめ、日常のことを話し出す。

「……いい天気だね。こんな日は、一緒に出かけたいよね」

思い出すのは、あの一日だけのお休みの日——。

私とフィルが、一緒に出かけた海岸でのこと。

「あの時、フィルは私が作ったお弁当を、本当に美味しそうに食べてくれたよね……」

今、私が食べているのはあの時と同じサンドイッチ。

でもね——。

「一人で食べたって……ね。美味しくなんか……ない……よ」

失って初めて気づくこと……。

フィルとの時間。一緒にいたときは、ずっと続くと思っていた幸せな時間——。

私は、ぎゅっとフィルの手を握っていた。  
すると信じられないことが――。

「……だったら、さ」

フィルが目を覚まし――。

「また、一緒に……食べよう」

私の手をぎゅっと握りかえしてくれた。

「フィ、ル……。夢じゃ……。ゆめじゃ……。ないよね」

夢だったら、覚めないでほしい――。

「夢じゃないよ……。ほら……」

ファイルは、座位になって、私を自分の方へ抱き寄せる。

「……うん。ぐすつ……うん……」

——夢じゃない。

私を包んでくれるこの暖かさは、夢なんかじゃない!!

「大切なこと言っただけじゃなかったね。ただいま、フェイトさん……」  
「うん……。おかえり、ファイル」

私とファイルは、どちらからともなくキスをする。

この唇のぬくもり——。

もう、二度と放さないからね——。

「あのね……。お願いがあるんだけど……」

「なに？ 俺に出来ることなら……。いいよ」

これはね、ファイルにしか出来ないんだよ——。

「私のことを……。これからは、さん付けしないで、フェイトって呼んで……」

「えっ……。？ で、でも……」

やっぱり、ファイルは困惑の表情をした。

でも、これは絶対にゆずれない!!

「むう——。ティアナはティアって愛称で呼んでいるのに、恋人の私はさん付けなの

!？」

「あ……。いや……。その……。わかった。フェイト……」

「うん♪」

ファイル、これからはずっと、あなたのことを支えるから。  
だから、あなたもいつばい私に甘えてね——。

\*

\*

\*

### 3週間後

あれから、俺は、フエイトと一緒に苛烈なりハビリを繰り返していた。

ずっと眠っていたせいで、全身の筋肉がやせ細ってしまい、歩くことも困難になって  
いたからだ。

ドクターの診断では、もう、二度と戦うことは出来ないって言われたけど——。

なのはさんは、俺と同じ状況になっても決してあきらめたりはしなかった。

だから、俺もあきらめない!!

俺に、魔力と命を与えてくれたティア達のためにも――。

「焦らないで良いんだからね……。一緒に……。直していこう」

「……。ありがとう。フェイト」

本当、俺には過ぎた女性だよ――。

月日は流れ――。

今はもう12月――。

ようやく、日常生活が不自由がなくないくらいにはなったが――。  
やっぱり、完全に復帰するには時間がかかる。

でも、今の俺にも出来ることはある。

フェイト達のサポートや、事務処理の仕事は出来る。

元々、俺はサポートがメインだったんだ。

これが本来の俺の役割なのだから――。

そして、ある日。

遅れながらJS事件の解決祝いと、俺の復帰祝いを兼ねてのパーティを開いてくれた。

俺も料理を手伝おうかと言ったのだが――。

「だーめ。今日はファイルは主役なんだから、おとなしくしてなさい」

フェイトやティア達に止められてしまい、仕方がなく俺はパーティが始まるまでのみをやり終えることにした。

あんまりにも暇だったので、結局は大量のアイスクリームを作ってしまった。



ノリで作ってしまったが――。

これ、どうしようか……。

\*

\*

\*

「えっと……今日は、フィルの復帰祝いと、先日の事件の労いもかねて、ささやかながらパーティーをすることにしました。今日は無礼講ですので、みんな楽しんでください。長い挨拶は私も嫌いなので、さっさと乾杯してしましましょう……。というわけで、乾杯!!」

『乾杯!!』

乾杯の後、それぞれグループに分かれてパーティーを楽しんでいた。

フォワード陣はエリオとスバルとギンガさんが大食い競争は始めてしまい、ティアと

キヤロが少し引いてしまっていた。

お前らな……。

大食い大会をやるなら、どっか行つて賞金でも稼いでこい!!  
なのはさんはヴィヴィオと一緒にほのぼのと楽しんでた。

うん、あそこを見ていると俺もなごむ……。

フェイトはどうしても外せない仕事があつてここにはいなかった。

はやてさんは八神家全員集合状態になつていて、大家族といった会話をしていた。

ここでも狼形態のままのザフィーラさんが、哀愁を誘っていた。

ザフィーラさん……ご愁傷様です……。

アルトさん達はロングアーチメンバーと一緒に酒盛りをやっていた。

俺の感があそこは、深く関わらない方が良いと警鐘を鳴らしていた。

ルーテシアは体調が回復したメガーヌさんと一緒に楽しんでいた。

家族が一緒になれて本当に良かったよ。

さてと、俺もみんなの所に挨拶に行くか……。  
まずは……。

\* \* \*

「あつ……。ファイルさん、お疲れ様です」  
「お疲れ、ファイル」

ここで俺を出迎えてくれたのは、ティアとキャロだった。  
スバル達は食べ物の方に夢中だった。

「お疲れさん……。ていうか、あの三人まだ食べているのか。はやてさん、かなり作ってた  
んだけどな……」

「エリオ君、料理がおいしくて夢中になってるんですよ。わたしもファイルさんみたいに、  
料理が出来たら手伝えたんですけど、簡単なのしかできないから……」

その気持ちだけで十分だよ。

今は出来なくても、その気持ちがあれば、俺レベルの料理なんて、絶対に覚えられるから――。

「あ、あの……ファイルさん、これ、良かったら食べてみてください……」

そう言って渡してくれたのはクッキーが入った袋――。  
かわいいラッピングがしてあって、いかにもキャロらしい物だった。

「これ、キャロの手作り？」

「はい……。ちよつと不格好ですけど……」

「そんなことないよ。綺麗に出来てる……食べて良いかな」

「はい!!」

「じゃ、いただきね……。うん、美味しい!!」

キャロの作ったクッキーは、バタークッキーとチョコクッキーだった。

甘さもきつくないし、食べやすいものだった。

「よかったです。喜んでもらえて……」

キャロと話していると、大食い大会をしていたエリオ達を止めに行つたティアが、二人を連れて戻ってきた。

「あつ、フィール、お疲れ!!」

「お疲れじゃねえだろ!! お前ら食い過ぎだ!!」

「良いじゃない、誰にも迷惑かけてるわけじゃないんだから!!」

「思いつきり迷惑だ!! 料理を作るはやてさん達の身にもなれ!!」

お前らの料理を用意するのに、朝早くからずっと作ってたんだぞ!!

それとギンガさん、食べるのは知ってたけど、一緒になつて食べないで、お願いだからスバルを止めてください!!

「ごめんなさい……フィールさん……」

「エリオは気にしないで良いぞ。お前はもう少し子供らしく、甘えても良いんだからな。ちよつと食べすぎではあるがな……」

「ずるい!! エリオだけ何で!!」

「お前とギンガさんを基準にしていたら、いくらあつても足りないっての!! 30人前用意して30分持たないなんて!!」

エリオだつて精々5人前だつたんだぞ。

お前らの胃袋、どうかしてるぞ——。

「そう言えばティア、お前ちゃんと食べてるか? エリオ達の面倒見ている、食べてないだろ」

「あんたほど忙しくなかったから、ちゃんと食べてるわよ」

そうは言ってるが、あんまり食べていないよな——。

まあ、この連中と一緒にいたら、食欲も無くなりそうだし。

「なんか、胃に軽い物でも作ってやろうか？」

「ううん、いい。それよりも……今度、あたしだけのために……その……ケーキ……作って欲しい……」。以前、あたしの誕生日に作ってくれた……あれ……」

「そっか……分かった。今度のティアの誕生日に作ってやるよ……」

「ありがとう……でも、ちよつと悔しいな。フェイトさんも、あのケーキを食べたことあると思うと……」

「無いぞ。あれは大切な思い出の物だからな。ティアにしか作ってないぞ」

誕生日にティアに作ったケーキは、ティアにしか作ってない。

あれはティアとの大切な思い出だからな……。

ちなみにそのときに作ったケーキはダブルチーズケーキだ。

別名ドゥーブルフロマージュ。

正直、俺のレシピの中でもっとも難しいケーキでもある。

「そっか……嬉しい……」

「楽しみにしてくれ……。おっと、他の所にも行っておかないと……」

「そうだね。さつきからアルトさん達が手招きしてるわね……」

「……出来るだけ、あのグループは避けたいのだが……。はあ……」

アルトさんとシャーリーさんの所。あそこは絶対酔っぱらいの集団だ。  
酔っぱらいの相手は疲れんだよな……。

「……………終わったら、愚痴聞いてあげるから、頑張ってください」

「ありがとう……。お前くらいだよ、そう言ってくれるのは……」

ティア達の所を離れ、次のグループの所に行くことにした。

\* \* \*

「こんばんわ、メガーヌさん、ルーテシア」

「こんばんわ、フィルさん……」



「ごきげんよう、フィール」

本当ならお母さんは六課メンバーじゃないから駄目なんだけど、八神部隊長とフィールさん達が、『無礼講だから、ある程度は身内連れてきて良いよ』という声で一緒に参加することが出来た。

「ここにいたんだ、ルーテシア」

「うん、お母さんと話してたの……。滅多に会えないから」

「そうだね、メガーヌさんもまだ、完全に回復した訳じゃないからね」

お母さんは、治療の甲斐があつて大分回復してきている。

最初の頃とは雲泥の差――。

「メガーヌさん、メディカルポッドで大分回復してますが、ちゃんと通院はしてくださいね」

「ええ、でも、本当にありがとう。こうして親娘で一緒の時間を過ごせるのも、あなたのおかげよ」

「俺も、こうして二人が穏やかな時間を、過ごせるようになって良かったです……」  
「フィルさん……本当にありがとう。フィルさんがあの時教えてくれなかったら、今でも私は……」

あの時……。

フィルさんが命をかけて止めてくれなかったら、きっと私は……。

今でもクアットロの操り人形だったと思うから――。

「だから、気にするなって言ってるだろ。あれは俺が勝手にしたことなんだから……な  
……」

「うん……。あの……フィルさん……」

「んっ？ どうした？」

「少しだけ……かがんでくれますか」

「こんなことするのは、とっても恥ずかしい。」

でも、私ができる精一杯の感謝の気持ちを込めて――。

私はフィルさんの頬にキスをする――。

「……これが……私の精一杯の……お礼です」

「……俺なんかには、もったいないよ。本当……ありがとうな」

フィルさんだから……あげたんですよ。

私の……ファーストキス。

そして、私の初恋の人だから――。

「げっ!! アルトさんとシャーリーさんが手招きしていやがる……」

さつきから、シャーリーさん達がフィルさんのことを手招きして呼んでいる。

フィルさんが、本気で嫌そうな顔をしているのって、あんまり見ないんだけどね。

「それじゃ、メガーヌさん、ルーテシア、親子の会話を楽しんでください」

そういつて、ファイルさんはシャーリーさん達のところに行ってしまった。

残念……。

もう少し、一緒にいたかった。

\* \* \*

「遅いよ!! ファイル!!」

「そっだよ!! 待ってたんだよ!!」

出迎えたのはアルトさんとシャーリーさんのお祭りコンビだった。

ヴァイス陸曹はラグナちゃんと一緒にいて、こつちには来られないみたいだ。

開始早々にグリフィスさんは潰されてしまい、止める奴がいなくなってしまった。

「ねえ、ファイル。今日こそ教えてよ。どうやって、フェイトさんとつきあうことになったのかを!!」

「アルトさんしつこいですよ!! 言いたくありませんって、何度も言ってるでしょう!!」

「いいじゃない!! 減る物じゃないし」

「シャーリーさんもいい加減にしてください!! あんまりしつこいと、お二人のことを

『クアットロ』って呼びますよ!!」

「それだけは勘弁してください!!」

六課内ではクアットロという名前は、最低最悪という意味を持っている。

この名前を出すだけで、嫌悪感がでるくらいなのだ。

「アルト、シャーリー、その辺にしておけ。お前らだって、いつか彼氏が出来て、そんな風に根掘り葉掘り聞かれたくないだろ」

見るに見かねてヴァイス陸曹が、ラグナちゃんと一旦離れてこつちに来てくれた。

「はっい」

「済まなかったな……。さつきからこつちのグループに顔出すの躊躇ってたの、こいつらが原因だろ」

「ははは……」

ヴァイス陸曹だけなら別に良いのだが、ゴシップ好きのアルトさんとシャーリーさんが一緒だと、いつも俺とフェイトのことを聞かれる。

あの時のことは、誰にも言いたくはない……。

「俺はお前とフェイトさんが、どうやってつきあうようになったかなんて、別にかまいやしねえよ。だけどな……」

ヴァイス陸曹は、俺の胸に拳をコツンと打ち……。

「フェイトさんのこと……これ以上、絶対に悲しませるな。お前が意識不明の時、あの人……本当に生きる希望を失っていたんだからな……」

「ヴァイス陸曹……」

「言いたいことはそれだけだ。まだ、行ってない所あるんだろ。こいつらの面倒は、俺が

見るから行ってこい」

ヴァイス陸曹と別れた俺は、はやてさんの所に行くことにした。

\*

\*

\*

「おっそいで!! 何しとつたんや!!」

「そうですよ!! 待ってたんですから!!」

「済みません。ちよつと色々なところに行ってましたから。そのかわり、ちゃんとおみやげありますから」

取り出したのは、さつきできあがったばかりのバケツアイスだった。

「まじかよ!! 良いのか、これあたし達で食べて!!」

「試作品なので、味はあまり期待しないでくださいよ」

「サンキュー、リイン、一緒に食べようぜ!!」

「はいです!! ヴィータちゃん!!」

ヴィータ副隊長とリイン曹長はアイスを持って、別のテーブルに行ってしまった。

「良いのか? 全部渡してしまつて」

「あれは、あの二人のために作つたやつですから」

「お前も苦労性だな。本当なら、休んでも良いのに、アイスを作つたり、こうやつてみんなの所に顔を出したりと……」

「それでもないですよ、シグナム副隊長。はやてさんの方がよっぽど大変じゃないですか」

今日だって、朝早くからみんなの料理を作つたりして。

やつぱり、手伝えばよかった……。

「そうですね。はやてちゃんもファイルも、一人で悩み事とか抱え込んでしまうところとか、本当に似てますよ」



「シャマル……」

「シャマル先生……」

確かに、俺もはやてさんも、あんまり人には話さないかも……。

「やっぱり……ええな……。こうしてみんなで、バカ騒ぎ出来るのって……」

「そうですね……」

みんなとこうして、馬鹿騒ぎできる一時……。

未来では、叶えることができなかった優しい時間。

こんな時が来るなんて思わなかった。

「ファイル……」

「はい？」

「……私な。もう二度と……みんなの笑顔はみられへんって思っていたんや。あんたが意識不明になってから六課は、本当にボロボロやった……」

後から、なのはさんから聞いたけど、ティアたちの訓練もボロボロで正直見てられなかったし、何より、フェイトがいつ壊れてもおかしくなかったって……。

「……はやてさん」

「フィル、あんたは六課だけでなく、私やフェイトちゃん達にとつても、大切な人なんや。だから、あんな無茶は二度と……やめてや」

「……はい」

そして、はやてさんと俺は持っていたグラスで――。

「それじゃ、もう一度乾杯といこうか」

「いいですね……。何にしますか？」

「せやな……。この大切なひとときに……つてのはどうや？」

「……賛成です」

「それじゃ……」

「乾杯……」

俺たちはグラスを合わせ、ワインをクイツと飲む干す。

本来なら、お酒は避けなきゃいけないけど、今日くらいは良いだろう。

こんなに美味しい酒なら、いつまでも飲んでいたいから――。

そして……。

いつの間にか俺たちは、ワイン3本をあけていて、はやてさんは完全に酔い潰れてしまった。

はやてさん、俺のペースで飲むからだよ……。

基本的に俺は酒は強い方なんだから……。

もつとも、未来では、飲んでも、酔えなかったといった方が良い。

悲しみを忘れるために、酒を飲んでいたに過ぎなかったんだから――。

「フィル、はやてちゃんのことには私に任せて、はやくヴィヴィオの所に行ってあげて。

さつきから待っているみたいよ」

「あちや……。なのはさんとヴィヴィオ、かなり待ってたんだ……。ヴィヴィオ、もう疲れて眠っちゃってるよ」

「二応、顔は出しておきなさい……。ね……」

俺はシャマル先生に、はやてさんの事をお願いして、なのはさんのところに向かった。

\* \* \*

「ファイル、ほんつとうに遅い!!」

「済みません……。こんなに時間がかかると思わなかった……。ヴィヴィオの笑顔で、最後癒されたかったから、後にしたんだけど、寝ちゃいましたね」

「うん……。ヴィヴィオ、ずっと待ってたんだよ。ファイルパはいつ来るのって、ずっと言っていて大変だったんだから……」

「ごめんな……。ヴィヴィオ」

ファイルはヴィヴィオの髪にそっと触れる。

こうしてると、ファイルって、父親の素質十分だよね。

「そういえばなのはさん、決めたんですね。ヴィヴィオの本当のママになること……」  
「うん……」

「これで俺のヴィヴィオのパパの役目は終わりですね。いつか、なのはさんに素敵な相手が出来て、その人がパパになってくれれば……」

「残念だな……。ファイルなら、ヴィヴィオのパパにピッタリなのに……」

ファイルなら、最高の父親になれると思う。

優しいだけでなく、心の痛みを知ってるから——。

「なのはさんなら、すぐに見つかりますよ。大丈夫です」

「それでもないよ。だってわたしって管理局内じや、鬼の教導官とか、ヴィーたちやんが広めてくれた白い悪魔とか言われてるんだよ……。これじゃ、いつの日やら……」

正直わたしは、結婚は半分あきらめていた。わたし自身こんな性格だからね……。すると、ファイルは、真剣な表情で……。

「悪いけど……そんな風に外面だけで見る男なら、なのはさんのためにもヴィヴィオのためにも、結婚なんかしない方が良いです。突き放すように悪いけど、ちゃんとした相手でなかったら、二人でいた方がよっぽど幸せです。ヴィヴィオだって、きつとそう思います……」

———そんなこと無い。

ファイルの優しきは、ちゃんと伝わってるよ……。

こんな風に言ってくれる男性は、今までいかなかったから———。

「やっぱり……優しいよ。そうやって、わたしやヴィヴィオのこと、真剣に考えてくれるんだもの……」

フエイトちゃん……。

ファイルのこと大切にしなきゃ駄目だからね。

でないとわたしが奪っちゃうよ。

こんな風に思ってくれる人なんていないんだから――。

\* \* \*

「何してるの?」

パーティも無事終わり、眠れなくてベッドに座っていたら、仕事から戻ってきたフエイトが、俺の部屋にやってきて隣に座った。

「フェイト……か。ちよつと眠れなくてこうしてたんだ」

「……まだ、呼び方慣れてないみたいだね」

「当分は無理かも……」

「ふふつ……だめだよ。頑張つてちゃんと呼んでね。でないと、またすねちやうよ」

そう言つてフェイトは俺の肩の上に頭を預けた。

反射的に俺もフェイトの髪を撫でていた。

フェイトはこうされるのが好きで、目を細めて甘えていた。

二人はしばらく無言で寄り添つて、何も無い時間を満喫していた。

「部屋に……戻らないの？」

「一旦戻つただけど、なのはとヴィヴィオがベッドを占拠していて、私の場所がない」

「……そっか」

あの二人、よっぽど疲れたんだな……。



でも、そのおかげでこうしてられる。  
ちよつとだけ、感謝かな……。

「……ファイル」

そう言つて、フェイトは俺を押し倒し……。

「……………ファイル、私を抱いて」

俺を押し倒すなんて、普段のフェイトだったら考えられない行動だ。  
すると、フェイトの瞳から、ぼろぼろと涙があふれ出し――。

「……………もう、あんな悲しい思いはいや!! 大好きな人のぬくもりを感じられないのは  
……………もう……………いやなの……………」

あの日から、フェイトはずつと俺のためにつくしてくれた。  
歩けなくなつて、自暴自棄になりかけたときも、ずつと支えてくれた。

こうしていられるのも、フェイトがずっと支えてくれたからだ。

俺も、フェイトのぬくもりを感じたい……。

大好きな人と一緒になりたい……。

「……いいんだな」

「……うん……ファイルじゃなきゃ……いやだ……」

瞳を閉じ、俺たちはキスをし――。

「あつ……」

「……愛してるよ……フェイト……」

「……私も……愛してるよ……ファイル……」

フェイトは、俺にギュッと抱きついて……。

「……………やさしく……………してね。その……………初めてだから……………」

「……………大切に……………するよ。俺も、そうだから……………」

俺はフェイトにキスをする、フェイトは、最初は緊張したが、段々自分からキスを求めてきて、深いキスをしばらく繰り返していた。

そして、俺たちは……………。

このとき、本当の意味で……………。

——ひとつになった。

\*

\*

\*

新暦76年4月28日 機動六課隊舎

「長いようで短かった一年間、本日をもつて機動六課は任務を終えて解散となります。みんなと一緒に働けて、戦えて、心強く嬉しかったです。次の部隊でも……頑張ってください……」

はやてさんの挨拶が終わった後、俺たちは練習場に集められて、そこで最後の模擬戦をした。

まあ、俺たちらしい終わり方だなと思ったよ。

六課解散後は、それぞれ各地に散らばっていった。

エリオとキャロ、ルーテシアは辺境自然保護隊に転属。

スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍中。

ティアはフェイトの元で、執務官補佐をすることになった。時折、ちよつとしたドタバタはあるけれど、それはそれでうまくやっている。

ヴァイス陸曹は武装局員資格を再取得し、ヘリパイロット兼狙撃手の道に戻った。

はやてさんは特別捜査官として復帰。守護騎士一同と共に任務を続けている。

ヴィヴィオは正式になのはさんの養子になり、名前も高町ヴィヴィオとなり、本人の希望で聖王教会系列の魔法学院に通っている。

なのはさんはJ S事件での昇進は辞退し、教導隊に戻り、戦技教導官としてそして空戦魔導師としての道を選んだ。

戦闘機人の連中は、ギンガさんの更正プログラムを受け、それぞれ管理局内で働くことになった。

何人かはナカジマ三佐が、養子として引き取った。

こんな事、俺がいた世界じゃ、絶対考えられなかったのにな……。

本当に、良い意味で歴史は変わったよ。

俺の進路はというと……。

マリーさんの元でデバイスマイスターの資格を取るために、しばらく本局勤めになる。

残念ながら、今の状態では、執務官の過酷な任務は難しい。

体が完治するまでは、色んな方面の資格を取って視野を増やそうと思う。

完治したら、フェイトかティアの元で執務官の研修を受けて、資格を取ろうと思っ  
ている。

ちなみにフェイトにこの話をしたら――。

「ファイルの執務官研修は、絶対に私がするからね!! ティアナの元に行っちゃ駄目だよ!!」

その気持ちは嬉しいんだけど、フェイトが担当するのは難しいと思う。おそらく俺は、ティアかクロノ提督のところで作ることになるかな……。

できれば、クロノ提督が良いんだよな。

あの人は、修羅場をくぐってきてるし、公平に育ててくれるからな。

まあ、出来たとしても今すぐじゃない。

その時になったら、お願いしてみよう——。

そして——。

数年後

『おめでとう、フェイトちゃん、フィル!!』

様々な事を乗り越え――。

今日俺とフェイトは、結婚式を迎えることになった。

旧六課メンバーもみんな来てくれて、盛大な結婚式だ。  
さらに戦闘機人のみんなも来てくれている。

みんなに祝福される結婚……。

こんな時を迎えられるなんて思わなかった。

「……私達、ずっと……一緒だよね」

「誓うよ……。俺たちは、ずっと一緒だ……」

俺たちはみんなが見守る中、誓いのキスをする。



不器用で、優しい恋人同士が、永遠の絆と愛を誓い合った。

幸せな……誰よりも幸せな二人……。

空は、そんな二人を……。

祝福するかのように、晴れ渡っていた――。

## BAD END

「ふう……。やっと、お仕事が終わった」

私は臨時のお仕事で、クラナガンに出張に行っていた。

本当は六課でパーティーに参加していたはずなのに……。

「まったく……本当なら、フィルと一緒に楽しく過ごしていたはずなのに……」  
「でも、これを買えたから良いかな？」

手に持っていたのは、クラナガンでも有名な洋菓子店のクッキー。

これを一緒に食べるんだ。

「……あれは？」

寮に戻ろうとして、ふと目に付いたのは、海岸で空を見上げていたフィルの姿だった。

\* \* \*

「んっ……。そうだ、脅かしちゃおっと♪」

私はファイルに気づかれないように、木陰から近づいて行つた。そしてすぐ近くにまで来ると、ファイルの眩きが聞こえてきた。

「終わったな……」

《そうですね……やっとなりましたね》

「パーティ……楽しかったな……」

《マスター……。は、はい……マスター……》

最初は、パーティが終わつての感想を言つてるのかと思つたけど、プリムの口調からそれは違うのは分かる。

プリムの口調は、泣いているかのような喋り方だ。

「これで……最後かと思うと……寂しいな。俺の役目も……これで終わった……。そして……」

「……後は……俺が、消えるだけか……」

『えっ?』

私は思わず、持っていた缶ジュースを落としてしまう。  
その音で、ファイルに気づかれてしまった。

「誰!? フェイト? いつから、そこに?」

ファイルの言葉に、私は震えが止まらなかつた。

——嘘だよね。

そんなのうそだよね!!

「どういう……事……なの……」

ファイルは黙ったままだったが、しばらくしてぽつりぽつりと語り始める。

「……元々、俺の命は、あの時に……ゆりかごでフェイトをかばったときに終わっていたんだ。女神にもう一度だけ我が儘を言って、少しの時間だけ、こうして肉体と命をもらったんだけど……。それも、もう……限界みたい」

「そんな!! ど、どうして……」

私の目からは、ぼろぼろと涙が零れていた。

さっきまでの楽しい気持ちや嘘のように、心の中は悲しみに満ちていた。震える手から、持っていたクッキーがこぼれ落ちてしまう。

「いれはっ」

ファイルがクッキーの入った包みを拾って、中身を見ると優しく微笑んだ。

「これ……俺たちがよく話していた、あの店のだね？ 食べてもいい？」

「……うん。……ぐすつ……いい……よ」

私は泣きながらも、何とかと頷いた。

「モグモグ……うん、おいしい。ありがとう、これ、美味しいよ」

そう言ってファイルは、私に一つ差し出した。

私はそれを食べてみたが……。

「なっ、美味しいだろ？」

「……美味しいなんか……無いよ。これだったら、ファイルが作ってくれた方が、よっぽど美味しいよ……」

だって……。

こんなになんて……しよっぱいんだよ。

「フエイト……」

「嫌だよ!! 居なくならないでよ!!」

私は、我慢しきれなくなつて、ファイルに抱きついた。

そして、そのままファイルの胸で泣き続けた。

そんな私を、ファイルは優しく抱きしめて、頭を撫でてくれた。

「フエイト……俺も、本当は一緒にいたかった。一緒にいて、色々な所に行ったり、笑ったり、怒ったり、泣いたり……してみたかった……」

「だったら、一緒にしていこう!! ファイルはまだ、全然幸せになつて無いんだよ!! 約束したじゃない……。ずっと……。そばにいるって……」

未来からずっと辛いことばかりだったファイル。

やっと、これから幸せをつかめるんだよ——。

それなのに……こんなのも……。

「幸せだったよ……。フェイトと出会って、恋人同士になって……。そして、俺にたくさんの優しさをくれた……。たった一つだけ、心残りは、そばにいられないことかな……」  
「ファイル……」

ファイルは私を抱きしめ、泣きながらそう言ってくれた。  
目を開き、顔を見上げてみると、ファイルの身体が、淡い光に包まれていた。

そして、ファイルが段々と……消えていつている……。

「どうやら……本当に……お別れだ……」

「嫌だよ!! こんなの……こんなの……嫌だよ!!」

「フェイト……」

「お願いだよ……消えないでよ!! ずっと、私のそばに居てよ!!」

抱きしめたファイルの体から、温もりが消えていつている……。



その体は、光の粒になって空へと昇っていつてる。

「フェイト……こんな俺を、好きになってくれて……本当に……ありがとう……幸せに……なってね……俺の大好きな……フェイト……」

そして――。

フィルの体は消えてしまった……。

私の腕の中から……。

――この世界から。

そして、フィルが消えた所に落ちていたのは……。

「プリ……ム……？」

私は、それを拾い、プリムに語りかけるが……。

「ねえ、プリム……」

《……》

しかし、何も反応はしない……。

ファイルを追って、魂が消えてしまったかのように……。

「おねがい………応えてよ………プリム………」

「これから………どう生きていけばいいの。愛する人がいない………この世界で………」

\*

\*

\*

「ねえ………ファイル、この2年の間………色々な事があつたんだ………」

「ティアナはね、私の元で執務官補佐をして、執務官になつたし、スバルもレスキューの

仕事をしてるんだよ。なのはもはやても、それぞれ教導官と捜査官をしてるしね。みんな、それぞれの道で頑張ってるんだ……」

私がいるのは2年前、ファイルと別れた海岸だった。  
ここに来れば、ファイルに会えるかもしれない。

もしかしたら、女神がまたファイルを生き返らせてくれるかもしれない――。

この2年間、そんな気持ちで、ここには何回も来ていた。

「でもね……」

取り出したのは、一つのカプセル……。

「もう……疲れちゃった……。あなたがない世界で生きるのは……」

私は、そのカプセルを飲み込み……。

「ファイル……」

——ねえ、ファイル。

こんな事をした私を、あなたは怒るよね。

でも、あなたの居ないこの世界で、一人で生きていくのは、もう駄目なんだよ……。

そっちに行ったら、たくさん怒って良いから……。

そのあとは、私を受け入れてね……。

そして、いっぱい……抱きしめてね……。

愛してるよ……ファイル。

After Story ~ Serment Eternel ~

「エリオ君、ルーちゃん、フェイトさんとフィルさんのこと、どう思う？」

「どう思うって？」

「もしかして、まだなの。あの二人」

「ルーちゃん……。ルーちゃんの考えてること、あっているよ。まだなんだ……」

「何？ 何なの？」

あのJS事件から、3年……。

わたしとエリオ君は、辺境自然保護隊で忙しい日々を過ごしている。

ルーちゃんも時々来てくれて手伝ってくれたりして、とても充実した日々を過ごして  
た。

だけど……。

「エリオ君……本当に分からない？」

「キャロ……さつきから何の話なの？」

「はあ……。エリオ、もう少し、女心勉強してね」

「ルーまで!! いったい何なの……。ごめん、僕にはわからない」

「あのね……。キャロが言っているのは、フエイトさんとフィルさんのこと。あの二人、未だに婚約はしているけど、結婚自体はしてないじゃない」

「二人とも、色んな人は助けているけど、自分たちのことは後回しにしている……。特にフィルさんは」

「そういうことか……」

フエイトさんとフィルさんは、本当はすぐにも結婚したいんだけど、上層部が二人に、仕事をやたらと持つてきて、中々時間が取れない状態になっている。

フエイトさんがいくら優秀な執務官だからといって、もう少し二人のことを考えて欲しいと思う。

もしかしたら、二人の結婚の妨害工作じゃないかと思うくらいのことだった。

二人とも、正直かなり参っている、こないだ無限書庫でユーノさんとドワーエさんから聞いた。

「なんとかか……あの二人に幸せになって欲しいんだけど……」

「そうなんだよね……」

「私に、考えがあるんだけど……」

「えっ……？」

ルーが出した考えはこうだ。

ユーノさんの話によると、クロノ提督とレジアス中将もこの事は危惧していて、何とか少しでも仕事を回さないようにしようとしているんだけど、その前に本局上層部が仕事をに入れてしまう。

だから……。

「元六課のみんなに連絡して、わたし達でフェイトさんとフィルさんの結婚式をしようっていうんだね!!」

「うん。リンデイさんとエイミイさんに協力してもらえれば……。こういったことも何とかしてくれるかもしれない」

「あの二人の事を考えると、こうした方が良いと思う……。これじゃ、二人ともかわいそうだよ……………」

「僕も賛成だよ。フェイトさん、最近本当に元気がないんだ。フィルさんも、長期任務が入れられちゃったから、中々会えないし……。本当に酷いよ!! 本局のやり方は!!」

「じゃ、思い立ったら吉日だね。急いでみんなに連絡しよう!!」

「うん!!」

こうして、僕たちのフェイトさんとフィルさんの結婚式へのプロジェクトが開始された。

\* \* \*

「なるほどな……。もう強行でやるしかないか……………」

「だよね……。フェイトちゃん、これじゃかわいそうだよ」



プロジェクトのため、わたしとルーちゃんは地球のエイミーさんの所に来ていた。エリオ君には、別の所に行ってもらい、他の人へ協力をお願いしてもらっている。偶々、クロノ提督も帰ってきていたので、この事をクロノ提督にも聞いてもらうことにした。

「ねえ、クロノ君、本局に打診できないの!? これじゃ、なのはちゃんの時みたいになりかねないよ……」

「俺も、何とかしたいんだけど、本局上層部が、彼らの能力が高いと言うことで、難易度が高い任務を入れてくる。だから、自分たちの結婚の事なんて考えられないほどなんだ……」

「二人とも、似たもの同士ですから……自分たちのことより、困っている人を助けたい。そう思ってしまうんです……」

「あんなに愛し合っているのに……。フェイトさんとフィルさん……」

『うーん……』

「だったら、私に任せなさい♪」

「リンディさん!!」

「お義母さん!!」

「母さん!!」

そこにいたのは、フェイトさんの義母にして、時空管理局総務統括官のリンデイさんだった。

「母さん……。いつからいたんだ？」

「さつきからよ。クロノ、話は聞かせてもらったわ。この二人のことは、私の方でも問題だったの。一部の上層部のせい、二人の未来を潰してしまうんじゃないかって……」  
「だから、私の方で三提督の方々に話してみようと思うの。これで駄目だったときは、二人ともレジアス中将の管轄に回すしかないんだけどね……」

でも、今のフェイトさん達にはその方が良くかもしれない。

ファイルさんは、JS事件の怪我で現場にこそ出てはいないけど、無茶は相変わらずしまくっている。

フェイトさんの負担を少しでも軽くするために、本当に自分の身を削ってサポートをしている。

このままじゃ、本当に潰されてしまうから……。

「二人のことは私に任せてね。あなたたちは二人の結婚のことを進めていってね。あの二人はこうでもしないと、式なんて挙げないんだから……。それに、早く孫の顔を見たいのよ。」

「「あ、あははは……」」

こうして、ハラオウン家の協力を得ることが出来たわたしとルーちゃんは、エリオ君に連絡してはやてさんにその事を伝えてもらおうことにした。

\* \* \*

キヤロ達がハラオウン家に行っている頃、僕は、はやてさんの所に行き、六課メンバーに連絡してもらえないかとお願ひしていた。

フェイトさんに内緒と言うこともあり、自分たちの人脈だけじゃ中々連絡が付けられ

ない人たちもいたからだ。

「今通信が入ったで、リンデイさんが全面協力してくれるって」

「そうですか。キヤロ達、上手くいったんですね」

「せやな。今度は私達の番やね。あっちが式場とかの関係を進めていってくれるみたいだから、私達がすることは、六課メンバーを集結させて、プランを進めていくことやね」  
「はい!!」

「とりあえず、殆どのメンバーには連絡は可能だから、その辺は任せておいてや。向こうが式場とかを決めてくれれば、後は私が何とかするわ!!」

「ありがとうございます。はやてさん!!」

「安心するのは、まだ早いで。連絡が付いて、みんなのスケジュールが何とかなくても、肝心の二人の予定が出来なきやアウトや……」

「そうなんですよね……」

そんなことを考えていると、レジアス中將から通信が入ってきた。

『八神、久しぶりだな……』

「レジアス中将!?」

『おつ、ハラオウンの所のエリオも一緒か。だったら話は早い』

『どういう事ですか?』

『さつき、ハラオウン統括官から儂に連絡が来た。あの二人のことを何とかしてくれないかってな……』

「えっ……?」

『儂も、あの二人には人並みの幸せを掴んで欲しいんだ。それを一部のバカどものせいで、失うわけにはいかん!! だから、勤務待遇を改善しなければ、有無を言わず、地上所属にする!! そう脅しておいた』

「あ、あいかわらずやな……。強引なところは……」

『儂だつてこんな強硬手段はしたくないわい。だけどな、このままじゃ高町の二の舞だ。それだつたら何と言われようが、本局から引き抜いて少しでもマシなところに行かせる……』

レジアス中将の目は真剣だった。

あの目はフェイトさんが、僕たちのことを思ってくれているときの目と同じだ……。

『八神、そう言うわけだから、あの二人のことは儂に任せろ。残念なのは、あの二人の結婚を直に祝えないことだがな……』

「レジアス中將……」

『お節介ついでに言っておくが、八神、お前達は式をどうしたいんだ？』

「えつと……。一応リンデイさんにお願いで、最高の所の式場を……」

『あのな……。それじゃ、月並みの結婚式になりかねないぞ。ちゃんと計画してやるならいざ知らず、短期間でやるんだったら、もつと趣向を変えた方が良い』

「だったら、レジアス中將ならどうするんですか!!」

すると、レジアス中將がふうつと溜息をつき、一言を発する。

『八神よ……。お前達六課のスローガンは何だったんだ……。それを思い出してみろ……』

「あつ!!」

僕たちは、すっかり忘れていた。

六課のスローガン。それは……。

『家族……だろ……。だったら、もつとアットホームなやり方でやってみたほうが良いぞ。儂が言えることはこれくらいだ……』

レジアス中將は、そう言つて通信を切つた。

「ありがとうございます……。私らのやり方……それを思い出させてくれて……」

「はやてさん……」

「エリオ、もう一度作戦会議のやり直しや!! みんなに連絡して、絶対成功させるんや

!!」

「はい!!」

\*

\*

\*

三ヶ月後

「それにしても、はやてさんもずいぶんイキなこと考えるわね。まさか、六課跡地を借りて式をするなんて……」

「ええ、レジアス中将がこの日だけですけど、敷地を使える許可をくれたんです」

六課跡地では、着々と式に向けての準備をおこなっていた。

建物自体は、未だに誰も使っていないなかったので、掃除をすればいつでも使用可能だった。

これは、いつか六課が復活することを考えて、レジアス中将とクロノ提督が、六課の建物を残していたから出来たことだ。

「キャロ、エリオ、ルーテシア、あんた達からこの事を聞いたときはびつくりしたわよ。でも、こんなイベントに一枚からませてくれたこと、礼を言うわ」

「ティアさん、そんな、こっちこそ済みません。ティアさんこそ忙しいのに……」

「執務官のお仕事は、ハードなのに……」

「本当に済みません……」



「そんなことはいいのよ。それに……」

「あいつには……幸せになって欲しいから……」

「ティアさん……」

ティアさんは、本局でもかなりもてると聞いているけど、未だにそう言った話は聞かない。

キャラロが言っていたとおり、ファイルさんのこと思っているんだな……。

「とにかく、スバルも合流するから、みんなで作戦を考えましょう。絶対成功させるわよ!!」

「「はい!!」」

「ティア!! みんな!!」

「「スバル（さん）!!」」

そんな噂をしていると、スバルさんが走ってこつちにやってきた。

「みんな、久しぶりだね!! 元気だった!!」

「スバル……あんたは相変わらずなのね。でも、なんか安心したわ」

「むうー。ティア、それって、どういう意味」

「そのまんまの意味よ」

「ティア、再会早々ひどいよー!!」

「「「あはははは!!」」」

こうして、フェイトさんとフィルさんの結婚式のため、僕たちは必死で準備をしていった。

期日まで、もう半月もない。

でも、色んな人が二人のことを祝福したいと、心から願っている。

だから、忙しい中こうやって集まってくれたり、色んな手配をしてくれる。

フェイトさん……フィルさん……。

みんな、お二人のことを心から好きなんですよ。

その事を、少しでも伝えたいから……。

\* \* \*

当日

「フエイト、ここで六課の同窓会をやるんだね」

「うん。まさか、六課隊舎でやれるなんて思っていなかったけどね」

俺たちは、はやてさんに同窓会のお知らせを受け、六課隊舎にやってきていた。

本当はこの日も仕事が入れられていたんだけど、どういう訳かそれが無くなり、俺たちは二人とも参加することが出来た。

俺も久しぶりに、フエイトとこうやって安らぐ一時を過ごせることもあって、今日を楽しみにしていた。

「行こうか。みんなもう来ているみたいだよ」

そう言つてフェイトは俺の腕に自分の腕を絡ませて、さらに胸を押しつけてきた。

「フェ、フェイト……その……なんだ……胸……」

「わざと当ててるんだよ。フィルが他の女の子に目が行かないように、しっかりとアピールしておかなきゃね♪」

「大丈夫だつて、少しは自分のパートナーを信じろよ」

「分かつてるよ。でも、私がしたいんだもん。フィルとこうやっていると、すごく落ち着くから……」

「それは……俺もだよ……。行こうか」

「うん♪」

俺はフェイトに抱きつかれたまま、六課隊舎の中に入っていった。

入つてみたけど、明かりも付いていなく、どういふ訳か人の声も聞こえなかった。

確かに、場所はここであっているんだけどな……。

すると、一つだけ、明かりが付いている部屋があり、そこに行ってみると……。

パアン、パアン、パアアアン!!

「な、何だ!?!」

「な、何なの!?!」

いきなりクラツカーの嵐にあったと思ったら、そこには……。

『おめでどう!! フェイトさん、フィール!!』

「み、みんな……これはいったい?」

「今日は同窓会じゃ……ないのか?」

「実は違うんやな♪」

「はやて (さん)!!」

俺たちの前に現れたのは、良い笑顔をしたはやてさんだった。

「ファイル、フェイトちゃん。今日はな……二人にここで結婚式をしてもらうために、みんなを集めたんや!!」

「ええつつつつ!!」

「驚いたやろ。二人を驚かしたくて、今まで秘密裏にしてたんや。それに……」

「これは、エリオ達が考えたことやで……。本局のバカなお偉いさんのせいで、結婚が出来ないんじゃないかって、心配してたんやで……」

「エリオ、キャロ……」

「ルーテシア……お前もか……」

あたりを見渡してみると、壁一面にお祝いの飾り付けをしていたり、壇上も出来ていて、みんなもお祝い用の衣装に身を包んでいた。

そして……。

「あれ……もしかして……ウエディング……ドレス!？」

「はい!!」

「僕たちのお給料じゃ、あれが精一杯だったんです……」

「でも、はやてさんが色々手直ししてくれたんです……」

「そのおかげで、綺麗なドレスが出来ました……」

確かに、ドレスには色々手直しした後が見られる。

でも、それをはやてさんが手直ししてくれたとは……。

「ほんまに、苦勞したで。でも、苦勞した甲斐があつて良いもんが出来たよ♪」

はやてさんの言うとおり、このドレスは有名人が結婚式で着ているドレスみたいに、華やかさと優雅さが備わっている。

下手なドレスなんて目じゃない。

「はやてさん……」

「フェイトちゃん……ファイル、エリオ達の気持ち……受け取ったってや……」

\* \* \*

「はやて……」

はやてからドレスを受け取った私は、その思いを直に感じていた。

このドレスを買うために、エリオ達は自分たちの欲しい物を犠牲にしてまで……。

さらに、今日の事も考えてくれて……。

「エリオ……キャロ……ルーテシア。本当に……ほんとうに……ありがとうね……」

私はエリオとキャロを抱きしめながら、涙を抑えきれなかった。

三人とも……本当にありがとう。

最高のプレゼントだよ……。



「フェイトさん……フィルさんと、幸せになってくださいね」

「僕たちは、フェイトさん達が笑顔でいてくれることが、嬉しいんですから……」

「お二人ともお幸せに……なっってくださいいね!!」

「ありがとう……ルーテシア……」

フィルムも、ルーテシアを抱きしめながら、涙を流していた。

こんな風に祝ってくれるなんて……。

みんな……本当にありがとう……。

\* \* \*

「綺麗だよ。フェイトちゃん」

「ありがとう、なのは」

私は別室に行き、エリオ達がくれたウエディングドレスを着て、お色直しをしていた。ファイルも別室でタキシードに着替えている最中だった。

「フェイトちゃん……やつと、ファイルと結婚できるね。今まで本当に忙しすぎて、こんな事考えられなかったでしょう」

「うん……正直かなり参っていたかな……。私も、ファイルも……」

あの仕事の量は、本当に辛かった。

ファイルのサポートがなかったら、本当に倒れてたと思う。

「今後は、あんな殺人的な仕事は無くなると思うから、ファイルと幸せになってね♪」

「えっ……？」

「ちよつと……リンディさん達と一緒に、本局のお偉いさんに、『お話』しにいったら、もう、こんな無茶な勤務はさせませんって、涙流しながら言ってたし♪」

「あ、あはははは……」

母さんも、レテイ提督も、なのはも、いったい何をしたの？

あの本局のお偉いさんが、涙を流してなのは達の話を受け入れたなんて……。

知らない方が……幸せだね。

うん。

そう思うようにしよう。

「じゃ、行くこうか。フエイトちゃん」

私はなのはに連れられて、フィルの元に行くことになった。

途中で、はやてに連れられたフィルに合流し、その後はエリオ達と交代し、一緒に壇上に向かった。

\*

\*

\*

俺たちは、みんなが待っている会場に到着すると、そこには六課メンバーだけでなく、元ナンバーズのみんなも来てくれていた。

ウエンデイとノーヴェが、垂れ幕で俺たちの事を祝ってくれて、チンク達は近くに来たとき、それぞれ一言ずつおめでとうと言ってくれた。

本当に、俺が知っている未来と違うんだなって、改めて思った。

そして……。

壇上に来ると……。

そこには、神父姿のクロノ提督がいて俺たちを待っていた。

「二人とも……結婚おめでとう……」

「お義兄ちゃん……」

「クロノ提督……」

「ファイル、今日からは、お前の義兄でもあるんだから……他人行儀はよせよ」

「はい……」

「フェイト、今まで本当に辛いことの連続だったけど、これからは二人で困難に向かっていき、そして、自分たちの幸せをつかんでくれ……」

「ありがとう……ぐす……クロノ……」

俺たちは、クロノ提督が誓いの言葉を読み上げ、それぞれ誓いの言葉を交わし、その後、指輪の交換なんだけど……。

なのはさんが持つてきてくれた指輪は……。

「これ……」

「もしかして……」

「うん、フィルが持つていた、あのレイジングハートだよ。それを加工して、二人の指輪の宝石にしたの」

あの時、六課で俺のことを話したときに、なのはさんにレイジングハートは返していい。砕けてしまったとはいえ、レイジングハートなのはさんの大切なパートナーだから

……。

そのレイジングハートを使ったのか……。

「どうして……レイジングハートを……」

「あのね……。このレイジングハートは、私にとって、とても大切な物だけど、壊れてしまつて、悲しい思いをさせているくらいなら、このような形でも、幸せの象徴になつて欲しいの……」

『『不屈の心』……。それを二人に託したいんだ。未来のわたしでも、きつと……。同じ事したとおもうよ……』

「なのは……」

「なのはさん……」

「受け取つてね……。未来のみんなの分の思い……。受け取つてあげて……」

なのはさんから渡された指輪を、フェイトの薬指にはめると、フェイトはなのはさんから託された思いで、涙をポロポロ流していた。

それは、悲しみの涙ではなく、嬉しさから来ていたので、フェイトも涙を抑えること

はせず、俺たちもじっと見守っていた。

そして……。

二人は……。

「……私達……ずっと……一緒だよね」

みんなが見守るなか……。

「誓うよ……。俺たちは、ずっと一緒だ……」

誓いのキスをした……。

\*

\*

\*

## 1年後

「ファイル……」

「どうしたんだ。ああ……結婚式の時のだな」

「うん……。物置から出てきて、懐かしくなってるね」

あの結婚式の後、俺たちは六課跡地で大パーティーを行った。

結婚式の時の、荘厳な雰囲気は全くなり、はやてさん達もみんな普段のストレスを晴らすかのように、バカ騒ぎをしていた。

俺たちみたいな職業は、いつ殉職をしてしまうか分からない。

でも、こうやって集まれたときくらいは、楽しく騒ぎたい……。そして、また、こうやってみんなでバカをやりたいな……。

「ファイル……」

「あの結婚式……本当に嬉しかったね」



「ああ……。あれは俺の一生の思い出だよ……」

「これからも……いっぱい……いっぱい……思い出を作っていこうね♪」

俺たちは、本当に色んな人に支えられている……。

それは、とても大切な絆……。

その証拠に……。

俺とフェイトの左薬指に輝く、レイジングハートの宝玉は……。

優しい輝きをしていた……。

俺たちの愛を表すかのように……。

## Vivid編

## Memory; 01 セイクリッド・ハート

次元の海の中心世界『ミッドチルダ』

都市型テロ『JS事件』の発生と解決からは――。――。

すでに4年が経過して――。

対処に当たった『機動六課』も既に解散――。

そして――。

未来から来た戦士ファイル・グリードも――。

現在はその傷ついた心と体をひととき休めていた――。

\* \* \*

わたし高町ヴィヴィオは、ミッドチルダ在住の魔法学院初等科の4年生。  
『公務員』のママとふたり暮らしで……。

「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー。帰りにちよつと寄り道してくるけど」

「今日はママもちよつと早めに帰ってこれるから、晩ご飯は4年生進級のお祝いモードにしよっか？」

「いいねー♪」

やったね!! わたし、ママの料理大好き!!

普段からママの料理はおいしいんだけど、こういったお祝いの時は、わたしの大好きな物がたくさん並ぶんだ!!

「さて、それじゃ」

「うん」

「「いつてきまーす!!」」

わたしとママはハイタッチをする。こんな感じで結構仲良し親子です。  
たまに……本当にたまに喧嘩もするけどね……。

\* \* \*

S t . ヒルデ魔法学院 初等科・中等科棟

「ヴィヴィオ!!」

「ごきげんよう、ヴィヴィオ」

「おはよー」

「コロナ!! リオ!!」

後ろから来たのは、ふたりの女の子。 コロナ・ティミルとリオ・ウエズリー。

髪をツインテールにまとめて、おとなしめの女の子がコロナで、髪が短く元気に話し

かける女の子がリオ。

ふたりとも私の大切な親友です。

「クラス分けももう見た？」

「見た見た!!」

「3人一緒のクラス!!」

「「「いえーい♪」」」

嬉しくてわたしたちはハイタッチで喜んでいたんだけど……。

「くすくす……」と言う声で我に返って……。

「あらはしたない」

「だね……」

「あらあら、まあまあ」

\* \* \*

『選択授業で応用魔導学を選択したみなさんは、これから授業も忙しくなってくると思います……』

仲良しの友達と――。

『しっかり学んでおけば将来きつと役に立ちますからね』

結構ハイレベルだけど、楽しい授業――。

「はあー、終わった終わった!!」

「ヴィヴィオ、寄り道してく?」

「もちろん」

コロナの誘いは願ってもない。

学校帰りの寄り道が、何よりも楽しみなんだから!!

「また図書館に寄っていきよ!! 借りたい本があるし」

リオの言うとおり、今日は図書館に行きたい気分かも……。  
だけど……。

「あ、その前に教室で記念写真を撮りたいな。お世話になってるみなさんに……」  
「送りたいんだ」

なのはママ、フェイトママ、スバルさんにティアナさん……。

ギンガさんにナンバーズのみんなに、ルールー、エリオにキャロ……。

八神家のみなさん、聖王協会のみなさん、高町家のみなさん……。

そして……。

ファイルさん……。

みなさんのおかげで――。

ヴィヴィオは今日も元気ですよ……っ……。

\* \* \*

「あ、メールが帰ってきた!!」

わたしの端末にメールが届き、メロデイが鳴る。

「そういえばヴィヴィオって、自分専用のデバイス持っていないんだよね?」

「それ、フツートの通信端末でしょ?」

「そーなんだよ!!　うち、ママとレイジングハートがけっこー厳しくって……」

そうなんです。

ママとレイジングハートは、基礎を勉強し終えるまでは、自分専用のデバイスとかいりませんということで、まだ専用のデバイスを持たせてくれないんです。



何も、フィルさんが作ってくれた最高級のデバイスじゃなくて良いから、デバイスが欲しいっていつも思ってるんだ。

「リオはいーなー。自分専用のインテリ型で」

「あははー」

《I'm sorry (すみません)》

そんなことを思っていたら、また端末にメールが届いた。  
今度はママからだ。

「なにかご用事とか?」

「あーへいきへいき」

メールを開いてみると……。

『早めに帰ってくると、ちよつと嬉しいコトがあるかもよ……』だって  
「そっか」

「じゃ、借りる本を決めちゃお!!」  
「うん!!」

\* \* \*

実はわたしは、その昔生まれ方関係でちよつといろいろあつたりした。  
なのはママとも血のつながった親子ではないし……。

今は仲良しのみんなとも……。

ほんの数年前には……。

本当にいろいろなことがあつた……。

だけど、わたしを必死で助けてくれたいろんな人たち……。

わたしがわたしのまま、高町ヴィヴィオとして生きることが許してくれた人たちのお  
かげで……。

わたしは今……。

なんだかすごく幸せだったりします……。

「たっだいまーっ」

「おかえり!! ヴィヴィオ」

「あれ? フェイトママ!? それにバルディッシュも!?!」

「うん♪」

《Hello lady》

フェイトママはなのはママの大親友。

9歳の頃からだって話だ。フェイトママもこうやって時々、家に来てくれて一緒にいたりする。

一年前、フェイトママとフィルさんは結婚して、幸せな家庭を築いている。

フィルさんは、デバイスマイスターの資格を取った後、フェイトママと一緒に執務官をしていたんだけど……。

4年前のあの時……。

わたしを助けるために、かなりの無理をしてしまった……。

そして……。

ゆりかごでフェイトママをかばって、命を失いそうになって……。

その時の傷や普段からの無茶がたたって、長期の休みが必要になってしまった。

ちゃんと休めば、また元のようにになるので、今はフェイトママが一所懸命ファイルさんのことをみている。

それでも、ファイルさんは何も出来ないのは性に合わないと言って、休職中にデバイスマイスターのさらに上のメカニックマイスターの資格を取って、さらに少しでもサポートできるようなって、司書資格まで取ってしまった。

だから、ファイルさんは無限書庫に行って、自分で調べ物をする事が出来る。

そうやってフィルさんは様々な所で、フェイトママの支えになっている。

フィルさんは、『これくらいしか凡人の俺には出来ないから……』とか言ってるけど……。

はつきり言って、どの資格もかなり難関でそんな簡単にとれる物じゃない。

どこが凡人なんだかと、いつもママ達が言っている。

「フェイトママ、船の整備で明日の午後までお休みなんだ。だからヴィヴィオのお祝いをしようかなって」

「そっか……。ありがとフェイトママ」

「お茶を入れるから着替えてくるといいよ」

「はい」

わたしは制服から普段着に着替えて、キッチンにやってきた。

フェイトママが焼いてきてくれたマフィンと一緒に食べながら、楽しく会話をする。

そういえばちっちゃい頃、わたしがなのはママと親子になるときに、フィルさんと一緒に後見人なってくれて……。

そのときなんだかわたしは、フェイトママのこともママって思っちゃったらしくて――

以来ずっと、わたしにはふたりのママがいる状態。

まあ、ちよつと変わっているけど、ふたりともわたしの大切なママです。

実は……フィルさんのこともパパって呼んでいたんだけど……。

大きくなってフィルさんのことを意識し始めてからは、パパって呼ぶのは出来なくなっちゃった。

フェイトママと結婚しちやっただから、フィルさんのことをこんな風に好きになっちゃ駄目なんだけど、でも……。

今のわたしにとって、フィルさん以上の男の人っていないんだよね。

だから、わたしがもつと大きくなって、フィルさん以上の人が見つかるまでは無理かな。

\* \* \*

「ごちそうさまー」

「さて、今夜も魔法の練習しとこーっと」

立ち上がって、いつものように魔法の練習に行こうとしたとき……。

「あ、ヴィヴィオちよつと待って!!」

「？」

なのはママに呼び止められた。

いったいなんだろう？

「ヴィヴィオも、もう4年生だよね」

「そーですが」

なのはママが今更のように聞いてきた。

わたしが4年生になったのは、もう分かっていることなのに？

「魔法の基礎も大分出来てきた。だからそろそろ、自分の愛機（デバイス）を持つても良いんじゃないかって」

「ほ…ほんとっつ!？」

今までどんなにお願いしても、決していいよって言わなかったなのはママが……。やっとな…と…と…と認めてくれたんだ!!

「実は今日、私がファイルから受け取ってきました。本当は自分で渡してあげたかったって言っただけ……」

「調べ物がまだ終わらないから、パーティーには間に合わないから、これだけでも渡してあげてって言われてね……」

ファイルさんがわたしのデバイスを……。

デバイスを持てるだけでも嬉しいのに、ファイルさんがわたしのために作ってくれたなんて……。

「ヴィヴィオ、開けてみて」

「うん!!」



一体どんなデバイスなんだろう？

期待に胸をふくらませて、箱を開けてみると……。

「うさぎ……？」

そこに入っていたのはウサギのぬいぐるみ……。

「あ、そのうさぎは外装っていうかアクセサリーね」  
「中の本体は、クリスタルタイプだよ」

そう言われて、もう一度見ようとしていたら……。

フヨフヨ

「とっ……!？」

うさぎが飛んで、右手を挙げて『ども』ってした。  
というか……。

「ととと飛んだよっ!? 動いたよっっ!」

「それはおまけ機能だつて、ファイルが……」

「ファイルさんが……?」

「うん、普通に作るより、こういうた可愛い機能があつた方が、ヴィヴィオに馴染みやすいんじゃないか……」

ファイルさんらしい配慮だ。

ただ作るんじゃないで、使う人のことをすごく考えてくれる。

ティアナさんのクロスミラーージュも、ファイルさんのプリムも本当に使う人に合わせて作られているから。

「ファイルやわたし達がいろいろリサーチして、ヴィヴィオのデータに合わせた最新式ではあるんだけど……」

「中身はまだ、殆どまっさらな状態なんだ」

「名前もまだないからつけてあげてって」

暖かい……。

このデバイスは、ママ達の、そして……フィルさんの思いがいっぱい詰まっているんだ。

フィルさんはサポートに回っても、仕事量が半端じゃないから、とつても忙しいのに……。

それでもわたしのために、作ってくれたんだ……。

ありがとう……。

このデバイス、大切にします!!

「あのね……。実は名前も愛称も、もう決まっていたりして」

「そうだママ!! リサーチしてくれたってことは、アレ出来る!? アレ!!」

「もちろんできるよ!! フィルが作るデバイスだよ。その辺は抜かりはないよ。セットアップしてみた」

「……?」

\* \* \*

「マスター認証……高町ヴィヴィオ」

わたしの足下にベルカ式の魔法陣が展開される。

「術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド……」

「わたしの愛機（デバイス）に個体名称を登録。愛称（マスコットネーム）は『クリス』」

そして……

「正式名称は『セイクリッド・ハート』!!」

これはずっと前から決めていたことだ。

自分の愛機を持ったら、ママのレイジングハートから名前の一部をもらおつて。

「いくよクリス」

わたしの呼びかけにクリスが、ピシッと右手を可愛くあげて反応する。

思い描くはあのイメージ!!

「セイクリッド・ハート!!」

「セ——ット・ア——ップ!!」

セットアップが終わると、わたしが思い描いたとおり、あの姿になることが出来た。大人になった自分の姿に……。

「ん……!!」

「やったあ——!! ママ、ありがとうー!!」

「あ、上手くいったね!!」

《Excellent!! (お見事です)》

ママもレイジングハートも、うまくいったことに笑顔で褒めてくれた。だけど、フェイトママの様子が……。

「フェイトママ?」

フェイトママは膝から崩れ落ちてしまった。  
そしてなのはママが思い出したように……。

「……あ」

そして……。

「なのは……ヴィヴィオがヴィヴィオがああ——!! なんで聖王モードに!？」  
「いや、あの、落ち着いてフェイトちゃん。これはね……」

えっと……これ、明らかにフェイトママ何にも知らないって感じだよね。  
まさかママ……。

「ちよ……!! なのはママ!! なんでフェイトママに説明してないの!!」

「いや、その……つい、うっかり……」

「うっかりってー!!」

うっかりじゃないよ!!

なのはママ、フェイトママに肝心なこと言つて無いじゃない!!

「ごめん、てつきりフィルがフォローしてくれたと思つていたから……」

「もーーーーーうーーーーー!!」

いつもフィルさんに任せっぱなしだから、こうなっちゃうんだよ!! フィルさんだつて、全てのことが出来るんじゃないんだからね!!

なのはママが言わなきゃいけないことは、ちゃんと自分でしてよ!!

\* \* \*

陸士108隊隊舎 20:38

「……連続傷害事件?」

『ああ……まだ「事件」じゃないんだけど……』

「どいっしょにや〜」

あたしとチンク姉達はナカジマ家で、ギンガからの通信を聞いていた。でも、まだ事件じゃないってどういうことだ……？

『被害者は主に各党系の実力者。そう言う人に街頭試合を申し込んで……』

「フルボッコってわけ？」

『そう』

おいおい、中々物騒なことをしてくれるじゃないか。

街中で喧嘩とは良い度胸してるぜ!!

「あたし、そーゆーの知ってるっス!! 喧嘩師!! ストリートファイター!!」  
「ウエンデイうるさい」

デイエチがウエンデイに一言注意してるが、ウエンデイの興奮は収まりそうにない。つたく……。もう少しおちつけての。



『ウエンディ正解。そう言う人たちの間で話題になってるんだって。被害届が出ていないから、事件扱いじゃないんだけど、みんなも襲われたりしないように気をつけてね』

「そう……」

「気をつける」

「つか、見つけ次第、あたしが逆ボッコだ。」

「ふむ……。これが容疑者の写真か」

『ええ。自称「霸王」イングヴァルト』

「それって……」

『そう……』

『古代ベルカ——聖王戦争時代の王様の名前』

「この事件、どうやらやつかいなニオイがいつぱいしやがる。」

「ファイル——」。

出来るだけ、お前を巻き込みたくない。

この事件はあたし達できっちりカタつけるからな。

# Memory ; 02 大切な人たちからのメッセージ

むかしむかし

「どこに行ってたの…？ 心配したんだよ」

「ママ、いないの……」

「そっか。じゃあ一緒に探そうか」

花咲く庭でふたりは出会って——。

だけど訪れたのは——。

残酷な現実——。

「そうとも彼女こそが!!」

「旧キベルカの最強の人間兵器にして、最凶の戦船の起動キー」  
「ゆりかごの聖王だよ」

なのはとヴィヴィオは、ぶつかって戦って――。

「パパとママと一緒にいたい。ママ……パパ……」

「助けて……」

「助けるさ……」

「いつだって……」

「どんなときだって!!」

思いを伝えあつて――。

そして――。

抱きしめ合つて、『親子』になつて――。

なのはとヴィヴィオの時間は静かに優しく――。

「流れていつてるんだって思ってたんだけど……」

それがどうしてこんな事になったのよ!!

ヴィヴィオが聖王モードになっちゃてるし、もう何が何だか分からないよ!!

\* \* \*

「いや、あのねフェイトママ?」

「大人変化自体は別に聖王化とかじゃないんだよ」

「魔法や武術の練習はこっちの姿の方が便利だから、きちんと変身できるように練習もしてたの」

実は最初は、一人でやっていたんだけど、あるときファイルさんに見られて、魔法のコントロールをきちんと出来るように、基礎プログラムとか作ってくれたんだ。

「なのはママやフィールさんにも見ってもらって、もう大丈夫だねって。ねっ、なのはママ!!」

「そうなの!」

「でも……」

フェイトママは、まだ不安な顔をしてる。

心配してくれるのは嬉しいんだけどね……。

「ん……。クリス、モードリリース!!」

クリスに頼んで変身を解除してもらい、わたしはフェイトママの方へ行き、しっかりと瞳を見て自分の思いを伝える。

「なにより、変身したってヴィヴィオはヴィヴィオのまんま!!」

「ゆりかごもレリックも、もうないんだし……」

わたしの辛い思い出の象徴。

レリックとゆりかごはもう無い……。

フィルさんが自分の命をかけて、壊してくれたんだ。

そして、そのおかげでわたしはこうしていられる。

「だから、大丈夫。クリスマスもちゃんとサポートしてくれるって」

「うん……」

わたしにはフィルさんが、作ってくれたセイクリッド・ハートがある。

だから、大丈夫だよ。フエイトママ。

「心配してくれてありがとう。フエイトママ」

「でも、ヴィヴィオは大丈夫です!!」

「それにそもそもですね?」

「ママ達だって、今のヴィヴィオくらいの頃には、かなりやんちゃしてたって、フィルさんから聞いてるよ?」

昔、六課にいたときに資料とかも見ていたけど、フィルさんや色んな人からママ達の

ことを聞いたら、出るわ出るわの武勇伝。

はつきり言って、わたしの変身魔法なんて、可愛い物だと思います。

「そ、それはその……」

「あははー」

特になのはママ、笑ってごまかしているけど、昔フェイトママにスターライトブレイカーを撃ったのは、どう考えてもやりすぎだと思う。

「そんなわけで、ヴィヴィオは早速魔法の練習に行ってきたと思います」

「あ、わたしも!!」

一人じゃさすがに危ないけど、なのはママと一緒になら大丈夫。

なのはママやフェイトママが駄目なときは、フィルさんが一緒に来てくれるんだけど、今日はまだお仕事が終わらないみたいで、まだ帰ってきていない。

ちよつとだけ、フィルさんが一緒のほうがいいなっておもったのは、ママ達には内緒です。



「いいですか。フェイトママ？」

「はい、気をつけてね」

「じゃ、フェイトちゃん。ちよつと行ってくるね」

「いつてきまーす!!」

\* \* \*

「……つてことになってね。本当にびっくりしたんだけど、キャロとエリオは聞いてたりした？」

なのは達が出かけて、私は辺境自然保護隊で活動しているエリオとキャロに、定時連絡をしていた。

もしかしたら、ファイルがエリオ達には言ってるかもしれないと思ったから……。

『大人モードつて単語だけはたまに』

『わたしもファイルさんから、少しだけ聞いていたんですけど、まさか変身制御の事とは

思ってませんでした』

「やっぱりー?」

もしかしたらって思ってたんだけど、時々フィルっていたらずらつ子な所がある。

私に内緒にして、何かを進めたりして脅かすのが好きだし……。

例えば、結婚記念日のことを忘れているふりをして、実は裏で綿密に計画を練って、プレゼントをくれたり、エリオとキャロの誕生日のときも、素っ気ないふりをして、当日にサプライズをしたりする。

そんな感じで、ごくたまにだけど内緒でやることがあるから、その辺はちよつと困ったさんかな。

『でも、フィルさんは、ヴィヴィオがしていることが危ないと思つたら、真つ先にフェイトさんに相談すると思いますよ』

『フィルさんが誰よりも信じているのは、フェイトさんなんですし……』

「エリオ、キャロ……。うん、そうだね!!」

今回私に言わなかったのは、まだなのは達でちゃんとしていたからだと思う。

実際、なのははヴィヴィオのことを知っていたんだしね……。

ただ、私に言い忘れるっつのは、ちよつと勘弁してよ。

『それに、ヴィヴィオ、魔法も戦技も勉強するのが好きですから、出来ることは何でも試してみたいんですよ』

『ヴィヴィオはあれでもしっかりしてます。心配ないと思いますよ』

「……うん」

そうだね。ヴィヴィオはなのはの娘だもん。

ちゃんとその辺は分かっている。

「そんなに心配なら、ちよつとこつそり見に行くか？」

『「えっ？」』

後ろから声がして振り返ると、そこには黒のGジャンとGパンを履いた黒髪の青年。  
私の旦那様、ファイルがいた。

『『ファイル（さん）!!』』

「ただいまフェイト。その様子じゃ、なのはさんから聞いていなかったんだな……」

ファイルがふうつとため息をついて言う。

この様子だと、なのはにはちゃんとやって、ちゃんと話してあったんだ。

私に内緒にしておくつもりじゃなかったんだ。

「こんなことなら、悪戯心を出さないで、俺からフェイトに言っておけば良かったな。心配をかけてごめんな」

ファイルが真剣な表情で、頭を下げた謝ってくれた。

「ううん、良いよ。ファイルがヴィヴィオのことをちゃんと言うつもりだったんなら。でも、今度はちゃんと私に言っただけ」

私はファイルのおでこをツンとつついて、頬をふくらませながら、ちよつと怒ったふりをする。

もう怒ってないけど、言ってくれなかったのは寂しかったんだからね。

「でも、なのはさんも忘れることがあるんだな。伝言を頼んだのは、ヴィヴィオのデバイスを作るときだったのに……」

「そんな前だったの!?! じゃ、もう半月はたってるじゃない!!」

ヴィヴィオのセイクリッド・ハートは、既製品じゃなくワンオフだ。

だから、ファイルが作るときに、半月の時間がかかるって言ったのに……。

それじゃ、そのときからなのはは忘れてたんだ。

「もう、なのはったら、ケーキの一つでも奢って貰わなくちゃ」

「その辺はふたりでお任せするとして、エリオ、キャロ。2週間ぶりだな。元気でやってるか?」

『はい、今日も本当に平和でしたよ』

『今やっている希少種観測も、もうすぐ一段落ですから。来月にはファイルさん達の所へ帰れそうです』

『そっか。エリオ、お前は どうするんだ? 休暇はルーテシアの所に行くのか?』

エリオ達の親友であるルーテシア・アルピーノは現在休職していた。

母親のメガーヌ・アルピーノさんと一緒に、無人世界カルナージで一緒に暮らしている。

これは、フィルがレジアスさんに頼んで、離ればなれになつてた親子の時間を取り戻して欲しいという配慮で、一時、職務を離れるようにしたのだ。

だけど、ルーテシアの罪状は、ほんの少しだけ刑期が残つていたので、普通には休めさせられないので、それだったらメガーヌさんの休養もかねて、無人世界だけど、自然があふれていて、空気も良いところであるこの世界で、表向きは島流しという形でやることにした。

交通の便はちよつと不便だけど、エリオ達はポーターや、フィルのワープでよく逢つたりしているのです、特に問題はないみたいだ。

『えつと、今回はフェイトさん達の所に一緒に帰ります。ルーとはこないで逢いましたから』

『というわけで、わたしも一緒にフェイトさん達所に行きますね』

「そっか……。でも、キャラもルーテシアも良い年頃なんだから、そろそろ彼氏でも作れ

よ……」

こうして私たちに甘えてくれるのは嬉しいんだけど、エリオはまだ彼女を作れそうだけど、キャラとルーテシアはちよつと心配になる。

『むう……。フィルさんはエリオ君だけ特別視してます？』

「そうじゃないけどな。キャラ達の歳くらいになると、彼氏くらい作るんだけどな……」

『……じゃ、フィルさん、わたしと付き合ってくださいますか？』

「おいおい……。あんまり心臓に悪い事は言わないでくれよな。冗談なのはわかるけどよ」

『あながち冗談じゃないんですけど……』

キャラが六課時代からフィルのことが好きだったのは分かっている。

だから、こうしてよくフィルに言ったりすることがある。

小さい頃は、お父さんやお兄ちゃんに懐いているって感じていたけど、14歳になってキャラも成長してきて、行動も大人じみたこともしてきている。

フィルのことは信じてるけど、ちよつとヤキモチも焼いちゃうかな。

「……まあ、キャロならすぐに良い奴見つかるし、その相手が見つかるまでは、俺が付き合うよ」

『わーい!! ありがとうございます!! フィルさん、今度会うの楽しみにしてますね』  
「もう……フィル、キャロに甘すぎだよ」

「かもな。でも、たまには良いだろ?」

「……ちゃんと、奥さんである私もかまってるね。じゃないと拗ねちゃうからね」

「了解。じゃ、俺もフェイトに愛想尽かされないようにしないとな」

私がフィルのことを愛想尽かすことは無いよ。

だって、こんなに私のことを思ってくれて、エリオ達のこともちゃんと見てくれる人なんていないから……。

『それじゃ、僕たちはそろそろ失礼します』

『フェイトさん、フィルさん、次の休暇楽しみにしてますね♪』

エリオとキャロの通信が終わると、フィルは立ち上がって、吊してあった自分のコー



トから、一つの鍵を取り出し……。

「ほら」

それを私に放り投げた。

「えっ……？ これって、ロードサンダーの鍵だよね？」

私の手に渡されたのは、前に、私がプレゼントしたキーホルダーに付けた銀色に輝く鍵。

「ヴィヴィオのこと、心配なんだろう。だったら、ちよつと様子を見に行くか？」  
「ファイル……」

いつもファイルはそうだ。

素っ気ないそぶりしてるけど、ちゃんと相手のことを見てくれる。

今だって、ヴィヴィオのことを心配してくれてる。

「うん♪」

「じゃ、行くとしますか」

私達はガレージに停めてあるロードサンダーの所に向かった。早速私はキーを差し込みエンジンに火を入れる。

ブオオオンと心地良いエンジン音は、今日も絶好調の証。

「じゃ、サンダー。ちょっとお願いね」

《珍しいですね？ 今日、フェイトさんが運転するんですか？》

「うん、たまには風を感じたいしね。フィルじゃなくてごめんね」

《かまいませんよ。相棒も良いですけど、フェイトさんに使って貰うのも嬉しいですから》

「ふふつ、ありがとう。じゃ、早速飛ばすよ!!」

フィルが後ろに乗り込んだのを確認すると、私はスロットルを全開にして、ヴィヴィオとなのはがいる公園へ向かった。

\* \* \*

「やっぱいいなー。大人モード♪ ねっ、クリスマス」

クリスマスがピツと腕を上げて、答えてくれた。

「だよね〜♪」

「ね、ヴィヴィオ?」

「はい?」

わたしがクリスマスとコミュニケーションを取っていたら、なのはママが話かけてきた。

この話し方は、まじめなお話のときの口調だ。

「大人モードはヴィヴィオの魔法で、自分の魔法をどう使うかは自分で決めることなんだけど……いくつか約束して欲しいんだ」

「——うん」

「大人モードは魔法や武術の練習や実践のためにだけ使うこと。いたずらや遊びで変身したりは絶対にしないこと。ママと約束……」

「うん。遊びで使ったりは絶対にしません」

なのはママの右手の小指に、わたしの小指も絡ませ、誓いをする。

これは言われなくても、わたし自身の誓い……。

「天に誓って？」

「天と星と時に誓って」

例え神様に誓えなくても、なのはママとフィルさんには誓える。

ここまでわたしを思ってくれた人たちだから……。

「それに、魔法でママよりおつきくなったって……」

「心まで大人になるわけじゃないもん」

今のわたしじゃ、まだまだ子供……。

だから……。

「ちゃんと順番を追って大人になってくよ。普通に成長して、この姿になったときに恥ずかしくないように……。」

そして……。

「自分の生まれとなのはママの娘だつて事に、えへんと胸を張れるように……。」

いつかフィルさんと、ちゃんと向き合えるような素敵な大人になるように……。それが、お世話になった大切な人たちへの恩返し——。

「ちよつと生意気!!」

「にやつ!!」

なのはママがわたしの首をぎゅつとして、自分の方へ抱き寄せる。

ちよつと、そんなにしたら苦しいってば!!

「にゃー!! せっかくイイ事言ったのに!!」

「あはは♪」

\* \* \*

「なっ、ヴィヴィオなら大丈夫だろ?」

「そうだね……。私が心配するまでもなかったね」

俺とフェイトは、少し前からふたりに見えない位置で、隠れて様子をうかがっていた。もし、ヴィヴィオが浮ついた心で魔法を使っていたのなら、あの場でデバイスを取り上げるつもりだったんだけど、それは俺の杞憂だったな。

ヴィヴィオは俺なんかより、ちゃんと分かっている。

魔法を使う本当の心構えをな……。

「これ以上は、ふたりに野暮ってもんだぞ。フェイト」

「うん、じゃ、そろそろ行こうか?」

「だな。せつかくだから、少しツーリングでもするか？」

「じゃ、今度はファイルが運転してね。こうしてファイルのぬくもりをいっぱい感じたいから……」

サンダーに乗り込んで、フェイトは俺の身体にぎゅつと密着してくる。

あんな……。

そうされると、俺、本当にきついんだけどな……。いろいろな意味で……。

「じゃ、行くとしますか。しっかりつかまってるよ」

「うん♪」

ヴィヴィオ、俺が作ったデバイスを……大切に育ててな。

そして、セイクリッド・ハート、ヴィヴィオの助けになってくれ。

\* \* \*

「じゃ基本の身体強化系からね。それから放出制御」

「クリスの慣らしもあるんだから、いきなり全開にはしないんだよ」

「だーいじょーぶ!!」

大切な愛機（デバイス）だもん。

無茶して壊したりなんかできない。そんなことしたら、フィルさんやママ達に謝りきれない。

今日は本当に色々な事があった……。

帰ったら、リオとコロナにメールを送って、ノーヴェエにも、明日からいっぱい練習しようねって伝えて……。

ああ……

それからまたあの子に会いに行こう。

わたしの故郷に咲いてた花と――。



綺麗な世界の写真を持って――。

## Memory; 03 あたたかさと優しさ

聖王教会本部 13:45

「いよーつス。オットー、デイド♪」

「久しぶり」

「ウエンデイ姉様、デイエチ姉様」

「ふたりともごぶさた」

久しぶりに対面したあたし達は、デイド達が用意してくれたクッキーと紅茶でお茶を楽しむ。

「他のみなさんは？」

「チンク姉は、騎士カリムとシスターシャツハんどこ。なんかお話だつて？」

「ヴィヴィオとノーヴェはイクスのお見舞い」

「イクス元気っすか？」

「健康状態には異常なし。静かにお休みだよ」

「陛下やスバルさんも、よくお見舞いに来てくださいますし……。きつと、楽しい夢を見ておいでなのかと……」

イクスはマリアージュ事件以来、ずっと眠り続けてしまっているっす。ただ、きつといつか目を覚ましてくれるっすよね!!

\* \* \*

同時刻 協会内 カリム・グラシア執務室

「お話っていうのは……例の傷害事件の事よね？」

「ええ、我ながら、要らぬ心配かとは思ったのですが……」

「件（くだん）の格闘戦技の実力者を狙う襲撃犯。彼女を自称している『霸王』イングヴァルトと言えば……」

「ベルカ戦乱期……諸王時代の王の名ですね」

「はい」

時代は異なるけど、聖王教会で保護しているイクスヴェリア陛下や、ヴィヴィオの母体（オリジナル）である『最後のゆりかごの聖王』オリヴィエ聖王女殿下とも無縁ではない。

「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

「無くはないかと」

聖王家のオリヴィエ聖王女、シウトウラの霸王イングヴァルト、ガレアの冥王イクスヴェリア——。

いずれも優れた『王』だったから——。

「ああ、もちろんかつての王達と今のふたりは別人ではあるのですが」

「ええ、それを理解しない者もいるという事ですすよね」

「とはいえ、『霸王イングヴァルト』は物語にも現れる英傑です。単なる喧嘩好きが気分で名乗っているだけという可能性も大きいですよ」

「——ですすね」

それならばいいのだが、今のところは楽観視は出来ない。

「でも、犯人が捕まるまで、イクスの警戒は強化するわ。セインについてももらいましょう」

「ヴィヴィオについては……」

「それはこちらで、私と妹達がそれとなく……」

本来なら、ファイルにもして貰いたいのだが、彼に頼んでしまうと、本当に自分を蔑ろにするから下手にはお願いできない。

現役復帰まであと少しなのだから、今は少しでも休んで貰いたい……。

\* \* \*

「みんなさきげんよう〜♪」

「ああ、これは陛下」

四人でお茶会をしていたウエンデイ達が立ち上がって、こっちにやってきた。さつきからこっちに來るときに、甘いにおいがしていたのは、そこにあるクッキーだったんだ。

「陛下、イクス様のお見舞いはもう?」

「うんデイード。いっぱい話したよ」

「あたしらはもう戻るけど、お前らは?」

「あー、あたしも」

「私はもう少し」

ウエンデイはわたしとノーヴェと一緒に帰るけど、デイエチはもうちよつとここに残るみたい。

「陛下よろしければこれを。自信作のビスケットとクッキーです」

「わ♪ ありがとオットー♪」

オットーが渡してくれたのはかわいい動物型のビスケットとクッキー。

オットーって、見た目はちよつと男の子みたいだけど、でも本当はこういうたお菓子作りとか大好きなんだよね。こういうところはやっぱり女の子なんだって思うよ。

「んじゃ、あたしは3人を送ってくるな」

わたしとノーヴェ、ウエンディはオットー達と別れて、門先にでる。

セインも買い物に行くということで、途中まで一緒に行くことになった。

「しかし良いのか？ ヴィヴィオ。双子からの陛下呼ばわりは」

「えっ？」

「前は『もー陛下呼ぶのは禁止——！』とか言ってたろ」

「あー」

ノーヴェの言うとおり、前は陛下呼ばれるのは嫌だったんだけど、もう慣れちゃったのと、あれはふたりなりの敬意と好意の表現だつてことが、最近分かってきたから……。ちよつとずれているところもあるかなつて思うけど……。

「この後はいつものアレか。ん、ウエンデイもやるんだっけ？」  
「ま、ふたりにお付き合いつス」

\* \* \*

ミッドチルダ 中央市街地

「あ!!」

「リオ!! コロナ!! おまたせー!! って、えええっ!？」

「よっ、ヴィヴィオ」

待ち合わせ場所に行ってみると、リオとコロナだけじゃなくて、なぜかフィールさんまで一緒にいた。

「一体どうなってるの!？」

「フィール。一体どうしたんっすか?」

「ん、ウエンデイ。お前も一緒だったのか? 何? ちよつと暇になつてな。息抜きに



外で散歩していたら、コロナに声をかけられてな。ちよつと話をしていたんだ」

実はフィルさんはコロナとは、あることがきっかけで知り合いになっている。フィルさんが忙しいから、普段はあんまり話とかはしないんだけど、何か悩みとかあったときは親身になって相談に乗ってくれる。

フィルさんは、今はお休みしてるけど、それでもハードワークには変わらない。

それでも、フィルさんはどんなに忙しくても、その人が本当に困っていると思ったら、どんなことをしても助けてくれる。

だから、コロナもすつごくフィルさんのことを好きなの。

「そうだったんですか。もう、コロナも念話で教えてよ!!」

「ごめんね。ヴィヴィオを驚かそうってフィルさんが……」

「悪いな。俺がコロナに言ったんだ。だから、あんまり言わないでやってくれ」

フィルさんは、そう言ってわたしの頭を撫でてくれる。

小さい頃からそうだけど、こうされると安心する。

でも、ちよつと子供扱いされてるって感じるのも事実だけだね。

「もう、フィルさんったら、もう良いですよ。そうそう、リオは3人とは初対面だよね」  
「うん」

そしてリオはノーヴェとウエンデイの方へ向いて……。

「はじめまして!! 去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりましたリオ・ウエズリーです!!」

元氣よくはつきりとした声で自己紹介をする。

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」

「その妹のウエンデイっス♪」

「フィルさんはヴィヴィオが来る前に紹介したから、ウエンデイさんは、ヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生!!」

「よっ、お師匠様!!」

「コロナ!! 先生じゃないっつーの!! むしろお前達の先生はフィルだろうが!!」

「おいおい、俺は普段は何もしていないただの怠け者だぞ。ふたりを一生懸命みてるのはお前だろ。ノーヴェ」

「おいっ!! 誰が怠け者だ!! 誰が!! 嘘付くなっ!!」

ノーヴェにはいろいろ教えて貰っているのは本当だけど、だけど、ファイルさんにも色々な所でお世話になってるんだよ。

ファイルさんが怠け者だって言うなら、うちのママ達も怠け者になっちゃうから!!

「先生だよねー?」

「教えてもらってるもん」

「先生って伺ってます!!」

「ホラ」

「なっ」

「うっせ」

ウエンディとファイルさんにも言われてしまい、ノーヴェは照れてそっぽ向いてしまった。

ノーヴェってこういうところ可愛いって思うんだ。

\* \* \*

ストライクアーツ練習場（トレーニングベース）

「でも、やっぱり意外〜!! ヴィヴィオもコロナも文系のイメージだったんだけどなあ。初めてあったのも無限書庫だし」

「文系だけど、こっちゃんも好きなの」

確かに本を読んだりするのも大好きだけど、こうやって身体を動かしたりするのも大好きなんだ。

「わたしは全然、初心者（エクササイズ）レベルだしね」

「ほんとー?」

コロナはああ言ってるけど、ノーヴェやフィルさんに見て貰っているから、結構なレ

ベルになっている。

「ヤ、くぞー」

「「は——いつ!!」」

着替えも終わったし、フィルさんやウエンディも外で待ってるもんね。  
急いで行かなきゃ!!

\* \* \*

「へ——!! なかなかいつちよまえつスねえ」

「だろ?」

「ああ」

ストライクアーツはミッドチルダで、最も競技人口の多い格闘技であり、広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称でもある。

「でもヴィヴィオ、勉強も運動もなんでも出来てすごいよねえー」  
「ぜ——んぜん!! まだなんにもできないよ」

わたしは今、リオと組み手をしながら、会話をしている。

リオはわたしのことをすごいって言ってくれるけど、そんなことは全くない。

「自分が何をしたいのか。何が出来るともよくわからないし、だから今はいろいろやってみてるの」  
「そっか」

だから——。

「リオとコロナといろんな事、一緒にできたら嬉しいな」  
「いいね」

「一緒にやっついていこう」

こんな風にいつまでもリオ達とできたら本当に嬉しい。

そのためにはもつと頑張らなきゃね。

「さてヴィヴィオ、ぼちぼちやってみつか？」

ノーヴェが右腕を回しながら、こっちにやってきて

「うん!!」

わたしとスパーをしょって言った。

わたしもやりたいって思っていたんだ!!

「さー出番だクリスマス!! 服はトレーニングモードでね」

早速わたしはクリスマスにお願いして、セットアップをする。

クリスマスもピッツって右手を挙げて応えてくれた。

「セイクリッド・ハート!! セット・アップ!!」

セットアップすると、トレーニングモードであるタンクトップTシャツ、両手にプロテクターを付けた状態になる。

「すみません。ここ使わせてもらいまーす」

「失礼しまーす」

わたしとノーヴェが中央のスペースに行くと、周りが段々ざわめき始めてきていた。

\* \* \*

「な、なんかふたりとも注目されてない？」

「ふたりの組み手凄いいからねー。リオもきつとちよつとびっくりするよ」

「そうだな。あのふたりはなかなかのレベルだからな」

「フィルさんもかなりの物だと思えますけど……」

フィルさんもストライクアーツではないけど、格闘技はすることが出来る。



一回ノーヴェさんとスパーしているのを見たけど、ふたりとも本気でやっていて、本当に凄いの一言だった。

「いや、俺のは我流だからね。本格的にやっている人とやったらかなわないよ」

「そんなこと無いと思いますけど……」

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ」

「えへへ♪」

フィルさんは、わたしの頭をポンとして、そのまま優しく撫でてくれた。

ヴィヴィオじゃないけど、フィルさんにこうされると、とても嬉しくなる。

でも、フィルさんはもう少し自分のことをちゃんと見た方が良くと思う。

過小評価しすぎは駄目ですよ。フィルさん!!

\* \* \*

「いくよノーヴェ」

「おうよ」

わたしとノーヴェはお互いに戦闘の構えに入る。  
やっぱりこの瞬間は緊張する。

先に動いたのはノーヴェ。

左のハイキック!!

そして、息もつかせず、すぐに右のアップパー。

「くっ!!」

何とか上半身を反らし、それをかわすが、躲しきれず、僅かにアゴをかすめてしまう。

「はっ!!」

つかさず、わたしも右のストレートで応戦!!

「ふたりともやるもんっスなあ!!」

「はい」

「ああ、良い動きしてる」

その後、30分ほどスパーした後、クールダウンをし、今日の練習は終了となった。

\* \* \*

「今日も楽しかったね。でも、今はちよつとだけ不満です」

「てゆうか、びつくりの連続だよ!! でも、ジャンケンに勝ったら、もつと良かったの  
!!」

「あ、あはは……。ごめんねヴィヴィオ、リオ」

練習が終わり、わたしとリオ、コロナは、フィルさん達と一緒に帰ることになった。

実は、フィルさんがバイクで来ていたので、一人だけだけど、家まで送ってくれるつて事になって、3人でジャンケンしたんだけど、勝ったのはコロナだったのだ。

「それじゃ、俺はコロナをサンダーで送るから、ノーヴェ達はヴィヴィオとリオを頼むな」

「まかせるつすよ!!」

「あつ、ウエンデイ、悪い。リオ達を頼めないか?」

「あ、了解つす!! なんか用事?」

「いや、救助隊。装備調整だつて」

「そつか。それじゃコロナ、後ろに乗りな」

「はい!! 失礼します」

コロナはフィルさんから予備のメットを渡されると、それをかぶり、後ろに乗り込む。そして、フィルさんがバイクのエンジンをかけると、勢いよく吹き上がる。

あーあ、じゃんけんで勝つてたら、わたしが一緒に帰れたのに……。

「それじゃ、みんな気をつけてな」

「じゃ、またな」

「「おつかれさまでした!!」」

フィルさんとコロナはコロナの家へ、ノーヴェはお仕事へ、そしてわたしとリオはウエンデイにそれぞれのお家へ送ってもらうことになった。

\* \* \*

「すみません、わざわざ送っていただいて……」

「気にするなって、元々送るつもりだったんだから、それよりも俺で良かったのか？  
ウエンディ達と一緒にの方が楽しかったらうに？」

「良いんです。フィルさんに送ってもらうのとつても嬉しいんです!!」

「そっか……。悪いな。もう少し会話上手なら良かったんだけどな……」

会話なんて、そんなに上手くなくても良いんです。

こうしてフィルさんの背中に抱きついてしていると、とっても暖かいんです。

それだけで、充分なんですよ……。

「本当なら、ヴィヴィオとか可愛い子の方が良かったと思いますが……。わたしでごめんなさい」

「……それ、本気で言ってる？」

「えっ？」

さつきまでとは違い、フィルさんの口調が少し怒っている感じがする。

「コロナの美点は、自分を過大評価しないことだけど、あんまり自分を下に見るのは良くない」

「でも……」

「コロナも十分に可愛いと思うよ。そうやって人のことを思いやれる心を持っているんだ。自信を持ちな」

「フィルさん……ありがとう……ごさいます……。でも……」

「ん？」

「過小評価しすぎは、フィルさんには言われたくないですよ。フィルさんの方が酷いと思います!!」

わたしも自分を下に見ることが多いけど、フィルさんはそれに輪をかけている。

いろんな資格を持っていて、あれだけ気配りが出来て、すつごく優しいのに、怠け者とか、凡人とか、本当に過小評価しすぎています!!

「そ、そっか？ 俺の評価は当たっていると思うが……」

「絶対に違います!! それだけははっきりと言えます!! フィルさんは、凄く素敵な人です!!」

「……コロナ」

フィルさんは、奥さんのフェイトさんだけじゃなく、いつも周りの人のことを考えてくれている。

それは、ノーヴェさん達だけじゃなく、ヴィヴィオ達もいつも言っている。

フィルさんという人は、自分よりも周りの人の幸せを考えている人だって……。

そんな優しい人が、素敵じゃないなんて絶対にならないから!!

「コロナ……ありがとうな……」

「えっ?」

「そうやって言ってくれるのは、やっぱり凄く嬉しいよ。フェイトはよく言ってくれるんだけどな……」

メット越しだけど、フィルさんが照れていることは声の感じで分かる。

「ふふつ、奥さんはフィルさんの良いところがちゃんと分かっているんです。でも、わたしも分かりますから……」

確かにわたしの思いは、憧れもあるかもしれない。

でも、フィルさんが本当に素敵なお人だから、一緒にいる人ならわかるから……。

「フィルさん、少しだけお時間ありますか？」

「ん？ ああ、今夜はもう帰るだけだから、暇だけど？」

「だったら、少しだけ遠回りして帰りたいです……」

わがまま言っているのは分かっている。

でも、もうちよつとだけ、こうしてフィルさんの背中の暖かさを感じたいなあ……。

「じゃ、ちよつとそこで止まって、暖かいコーヒーでも飲むか。バイクに乗って身体が冷えてるしな」

「はーん」



ファイルさんは、近くのコンビニでバイクを止めて、暖かい缶コーヒーを二つ買ってきてくれて、一つわたしに渡してくれた。

缶コーヒーを飲み終わった後、またバイクに乗り、ファイルさんは少しだけ遠回りのコースを走ってくれた。

この辺からなら、バイクなら10分もあれば着いちやうんだけど、30分かけてわたしの家に向かってくれた。

ファイルさんは、普段はとても真面目な人なんだけど、こうやって融通も利いてくれる。だから、ヴィヴィオも、わたしもファイルさんのことが好きになったんだと思うな。

ファイルさん、今日は本当にありがとう——。

\* \* \*

「やっと仕事が終わったぜ……」

あたしはヴィヴィオ達を別れた後、救助隊で一仕事をしてたんだけど、おもったより時間がかかってしまって、今の時間になってしまった。

「つたく……、人使いが荒いつての」

あたしは少し急ぎ足で帰ろうとしたが……。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

声が出した上を見上げると、そこには――。

「貴女にいくつか伺いたいことと……」

碧銀の長い髪の女が――。

「確かめさせて頂きたいことが」

街灯の上に立っていた――。

## Memory; 04 ファースト・コンタクト

救助隊の仕事も終わり、後は家でのんびりするだけだと思っていた。

だが――。

そこに現れたのは……。

「貴女にいくつか伺いたいことと、確かめさせていたいただきたいことが」

このところ賑わせている通り魔事件の犯人らしき人物が、あたしの前に現れた。

「質問するならばバイザー外して名を名乗れ」

「失礼しました」

そう言って、碧銀の女がバイザーを外すと……

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。『霸王』を名乗らせていた

だいています」

やっぱり、予想通りの噂の通り魔か……。

こいつはやつかいなことになりそうだ。

「噂の通り魔か？」

「否定はしません」

女は街灯の上から、地面に降りてきてさらに……。

「伺いたいのは貴女の知己である『王』達についてです」

「なんだと——」。

「こいつ、一体何が目的なんだ？」

「聖王オリヴィエの複製体（クローン）と冥府の炎王イクスヴェリア」

「貴女はその両方の所在を知っていると……」

その言葉に、あたしはカチンと来た。

クローンだと、あいつはそんなじやねえ。

「知らねえな」

「聖王のクローンだの、冥王陛下だのなんて連中と、知り合いになった覚えはねえ!!」

そうさ——。

「あたしが知ってるのは……」

ヴィヴィオも——。

「一生懸命生きているだけの……」

イクスも——。

「普通の子供達だ!!」

一生懸命生きようとしている普通の女の子だ!!

「——理解できませんでした。その件については、他を当たるとします。では……もう一つ確かめたいことは……」

「あなたの拳とわたしの拳……。一体どちらが強いのかです」

\* \* \*

「防護服と武装をお願いします」

「いらねえよ」

「こんな茶番に、まともに付き合ってられるか。」

「そうですか」

「よく見りやまだガキじゃねーか。何でこんな事してる?」

「強さを知りたいたいです」

「ハッ!! 馬鹿馬鹿しい」

こういう馬鹿は、きつついのをお見舞いして、さっさと終わらせてやる。  
あたしは、不意打ちの飛び膝蹴りで胸を狙う。

「くっ!!」

女はあたしの不意打ちの膝蹴りは、腕を使ってガードをする。

だけど、その一撃はあくまでフェイク。

本命は――。

右腕から繰り出す、スタンショット。

こいつが本命だ。

それに反応して、今度は胸部だけでなく、頭部もガードに入った。

スタンショットは、そのガードごと女を吹っ飛ばすが、威力を殺されてしまった。

ガードの上からとはいえ、不意打ちとスタンショットをマトモに受けきった。



ち、言うだけのことはあるってか!!  
仕方がねえ。

使いたくはなかったけど……。

「ジェットエッジ」

《Start Up》

あたしは相棒であるジェットエッジを起動して、バリアジャケットと武装を身にまとう。

ファイルが修理・改良してくれた新型ジェットエッジ。

こんな私闘には使いたくなかったんだけどな……。

でも、そんなことは言ってられねえ。

「ありがとうございます」

「強さを知りたいって正気かよ?」

「正気です。そして今よりも強くなりたい」

「なら、こんな事してねーで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ!!」

「単なる喧嘩馬鹿ならここでやめとけ。ジムなり道場なり、良いところ紹介してやっから」

こんな事したって、何も得る物なんかありはしねえんだ。

「御厚意痛み入ります。ですが、わたしの確かめたい強さは————生きる意味は……」

「表舞台にはないんです」

構えを取った——。

この距離で？ 空戦（エリアル）？ 射砲撃（ミドルレンジ）？

「——つて!!」

突撃だと!!

あたしは何とか、右のストレートを辛うじてかわすが……。

「がはっ!!」

ステップを切り替えて、あたしの懐に飛び込んできて、腹に思いつきりアツパーをぶちかまされた。

やべえ……。

今のはかなり効いたぜ……。

「はあ……はあ……」

「列強の王達を全て斃し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です」

「寝ぼけたこと抜かしてるんじゃないぞ!!」

「昔の王様なんぞ、みんな死んでる!! 生き残りや未裔達だって、みんな普通に生きてるんだ!!」

ヴィヴィオオだって、イクスだって、みんな必死で生きようとしてるんだ。

そんな昔の因縁なんか、今のあいつらには関係ない話だ!!

「弱い王なら……」

「この手で……只屠るまで……」

何だと――。

「このバカつたれが!!」

もう我慢の限界だ!!

ヴィヴィオやイクスのことを、何もしらねえくせに、勝手なことばかりいいやがつて  
!!

今を必死に生きてる奴を、自分の身勝手な理由で、それを壊して良いわけねえだろう  
が!!

「ベルカの戦乱も聖王戦争も!!」

「ベルカつて国そのものも!!」

「もう、とつくに終わってるんだよ!!」

あたしは得意のエアライナーを発動し、あたしは女の頭上を取った。

ローラーを駆使しての動きに、あいつは目で追ってはいるが、完全には追い切れてい

ない。

「っ!!」

そして――。

バインドで、両手両足を完全にロックする。

このバインドは、素人には簡単には解除できない。

「喰らいな!!」

ローラーの機動力をフル活用した、あたしの必殺の蹴り!!

「リボルバー・スパイク!!」

あたしの蹴りは、左首にまともに命中し手応えも充分!!

これで終わりだ!!

だが……。

「!？」

女は左手で、あたしの足をつかむと……。

「終わってないんです」

バインドでこちらの動きを封じてしまった。

油断していたあたしは、完全に動きをロックされてしまう。

どうかしてやがる!!

防御を捨てて、反撃準備をするなんて……。

普通の神経じゃねえ!! いかれてるとしか思えねえ!!

「私にとってはまだ何も……」

女は、あたしが仕掛けたバインドを無理矢理壊し……。

右腕を振り上げ……

「霸王……」

その拳は……。

「断空拳」

練り上げられた力と共に振り下ろされた……。

「がはっ!!」

背部にまともに喰らって、息ができねえ……。

すまねえ……ヴィヴィオ……。

「弱さは罪です。弱い拳では……」

「誰のことも……」

「守れないから……」

\* \* \*

「やば、かなり遅くなってしまったな」

コロナを無事家に送り届けた俺は、サンダーのスロットルを全開にして家に向かって  
いた。

コロナのお願いで、少しだけ遠回りして送り届けたんだけど、調子に乗って俺も予定  
より多く一緒にいたもんだから、こんな時間になってしまった。

《でも、相棒、家に戻ってもフェイトさんは……》

「そうなんだよな……」

実は、フェイトは今朝から出張が入ってしまい、しばらく家には帰ってこない。

ここしばらくは出張はなかったから、ずっと一緒だったけど、やっぱり誰もいない家



に帰るのはちよつと寂しいな……。

「しょうがないさ。とりあえず、近くのコンビニで弁当でも買って帰るか」

《相棒、今日は自分で作らないんですか？ いつもなら、ちゃんと自炊するのに？》

「さすがにこの時間じゃ自炊は勘弁かな？」

《ですね……》

もう少し早い時間だったら、買い物をして何か作るんだけど、こんな遅いとさすがに自炊する気はなれない。

フェイトが一緒だったら、頑張つて作るんだけど、一人だったら、多少手を抜いても良いかな？

「というわけでサンダー、近くのコンビニを探してくれないか？」

《了解です。サーチを開始しますね》

\* \* \*

「はあ……はあ……」

あの時の彼女の一撃――。

凄い打撃だった――。

正直言つてかなり危なかった。

この身体は……。

間違いなく強いはずなのに……。

私の心が弱いから……。

「武装形態……解除……」

武装形態である姿を解除して、私は元の姿に戻る。

そして、コインロッカーから、私物を取り出し、家に帰るため歩き出す。

帰って、少しだけ休もう。目が覚めたらまた……。

「!?」

突然激しい頭痛が私を襲う。

これは、さっきの一撃が……。

疲労とダメージでもう意識を保てない……。

駄目……。

こんな所で倒れたら……。

\* \* \*

「さて、弁当も買ったし、帰るとするか」

《そうですね。でも、また唐揚げですか？ 外で食するときや買って食するときはそれ

が多いですね》

「仕方がないだろ。安くてポリウムがあるのって、それしかないんだからな」

お腹いっぱいになって、安く上げられるのって、唐揚げ弁当かファーストフードくら

いしかない。

無駄にお金は使えないからな。

「じゃ、帰るとしますか」

俺がサンダーのエンジンに火を入れようとしたとき……。

「ん？」

視界に誰かが倒れてるのを見つけた。

よく見ると、小さな女の子か？

「サンダー」

《ええ、行ってみましょう。それに、あの子からノーヴェさんが使っている発信器の反応があるんです》

「どういふことだ？」

《分かりません。ですが、倒れている人を無視するのは駄目でしょう。相棒》

「だな」

いろいろ分からないことだらけだが、とにかく今はあの子の保護が最優先だ。俺は、急いで女の子の元に向かった。

\* \* \*

「ジェット無事か？」

《I, m OK》

あいつの最後のカウンター——。

あれは半端じゃない攻撃だった。

今もダメージで立つことができねえ——。

だけど、只じやころばねえ。スパイクをぶち込む瞬間、発信器を付けてやった。これであいつを捕縛できるはずだ。

後は、なんとかスバルに連絡を……。

そう思っていたら――。

「こちらファイル・グリッド。ノーヴェ、聞こえるか」

「ファイル!? どうしておめえが!？」

ファイルから、通信が入り、あたしの目の前にスクリーンが現れた。やっぱいな……。この状況で、よりによって、ファイルからかよ。

正直、あいつを巻き込みたくなかったんだけどな……。

「実は、お前が使っている発信器の反応が、今保護した女の子からあってな。ちよつと聞きたかったんだけど……。つて、おい、どうしたんだ!？」

「すまねえ……。ちよつと、喧嘩で負けて動けねー」

「喧嘩つて……。つてことは、この子としたのかよ……。？」

「……まあな」

もう隠しておくことはできねえ。

こうなったら、ファイルに協力してもらおう方が良い。

でも、ティアナとフェイトさん、絶対に怒るだろうな……。

「理由は、後で聞くとして、とりあえずお前も助けに行くよ。悪いけど、今俺ん家はフェイトがいないから、この子の保護もお願いできるか？」

「ああ、最初からスバルに頼むつもりだったからな。願ったり叶ったりだ……」  
「じゃ、全速でそっちにいくからな」

そう言って、ファイルからの通信が切れた。

10分後、ロードサンダーに乗ったファイルがやってきて、前に保護した少女と、後ろにあたしを乗つけて、ナカジマ家に向かった。

ファイルは執務官のため、非常時はバイクの変則乗りは認められている。

事前にファイルがスバルに連絡を入れてくれたため、すぐに少女はスバルに抱えられて、あたしもファイルとギンガに肩を貸してもらって、何とか自分の部屋に付くことが出来た。

その後、ファイルはすぐに帰ってしまったけど、保護した少女のことがあるから、明日の朝、またナカジマ家に来るとのことだった。

何にしても、今後のことは、明日になってからだな。

## Memory ; 05 アインハルト・ストラトス

「……う……ん……」

「!？」

確か、私はあの時道端で倒れてしまったはず……。

しかも、着ている物まで変わってる……。

ここは一体どこなんだろう？

「よう、やっと起きたか」

「……あの、ここは……？」

私は今の現状が把握できなくて、頭の中が混乱していた。

そう思っていたらさらに……。

コンコン



ドアのノックする音がして……。

「はい」

「入って良いかしら」

「ああ、いいぜ」

「お邪魔するわね」

ドアを開けて入ってきたのは、オレンジ色の長い髪をした女性。  
どこか凜とした雰囲気を持った感じだ。

「おはようノーヴェ。それから……」

「自称、霸王イングヴァルト。本名はアインハルト・ストラトス。St（ザンクト）ヒル  
デ魔法学院中等科1年生」

「ごめんね。持っていた荷物出させてもらったの。安心して、ちゃんと全部持ってきて  
るから」

そう言われて指差された方を見ると、私の荷物が全部置いてあった。

そっか、そこから私の学生証をみて分かったんだ。

「制服と学生証を持つてつてとは、ずいぶんとほけた喧嘩屋だな」

「学校帰りだったんです。それにあんな所で倒れるなんて……」

私だって、まさかロッカーから荷物を取って、すぐに倒れるなんて思っていなかったんです。

「あー、みんなおはよー」

「スバル」

今度は青い髪の女性が部屋の中に入ってきた。

どこかノーヴェさんに近い雰囲気を持っている感じだった。

「みんなそろつてるみたいだね。下でファイルが朝ご飯を作ってくれたから」

「ファイルがか？」

「あいつ、もう来てたんだ。まったく、相変わらずこういうことは律儀にするのね」

「えへへ、でも、久しぶりにファイルの料理が食べられるよ♪ それと……初めましてだね  
アインハルト。スバル・ナカジマです」

「事情とか色々あるかと思うけど、まずは朝ご飯でも食べながら、お話聞かせて聞かせて  
嬉しいな」

\* \* \*

「おつ、みんなやってきたな」

「ファイル、おはよう。ごめんね、来てもらって早々朝ご飯を作らせて……」

「スバル、お前な。来た早々『ファイル、久しぶりにファイルが作った御飯が食べたい!!』つ  
て、人をキツチンに立たせやがって……」

まあ、只でナカジマ家に来るつもりはなかったから、一応俺が作ったマフィンを持って  
きていたんだけど、その斜め上のことをさせられるとはな……。

「まったく……。スバル、あんたね。ファイルは家政婦さんじゃないんだからね……」

「あたしも妹として恥ずかしいぜ。すまねえなファイル、お前も夜遅くに、あたしとこいつ

を抱えてバイクを走らせてくれたのに……」

「気にするなつて。困つてるときは助けるのは当たり前だろ。とりあえず、冷める前に食べてくれ」

今回用意したのは、家で作ってきたマフィンと、食パン。こつちで作ったベーコンエッグと野菜スープ。

「あ、相変わらず手が込んでいるわね……」

「それでもないぞティア。この前お前が家に来たときの方が、よっぽど作ったぞ」

「そ、それはそうだけど……」

ティアとは仕事のこと、よく家でフェイトと3人で食べたりすることが多い。

基本的に俺やフェイトが作るが、時々ティアも作ってくれたりするので、3人で食べたりするときはとても賑やかな食事になる。

当初は、ティアは料理はそんなに出来る方じゃなかったけど、俺やフェイトと一緒に作ったりしていくうちに、かなりのレパトリーが出来るようになっていた。

「話は後だ。さあ、みんな席に着いたついた!!」

\* \* \*

「んじや、一応説明しとくぞ」

「ここはこいつ……あたしの姉貴、スバルの家」

「うん」

「で、その姉貴の親友で、本局執務官兼メカニックマイスターの……」

「フィル・グリードです。よろしくな」

そう言って、ふたりが私に自己紹介をしてくれた。

「特にフィルは、あたしとお前をここまで連れてきてくれたんだからな。感謝しろよ」

「別にたいしたことはしてない。たまたま通りかかっただけで、運が良かっただけだ」

「あんたって、いつもそう言ってるわね。たまには素直に好意を受け取りなさいよ」

「ティア、別に俺は……」

別に俺は、助けようとしてやった訳じゃない。

たまたまコンビニで買い物をしていたときに見つけて、当たり前のことをしたに過ぎないんだけどな——。

「はいはい、ファイルに素直になれって言ったあたしがバカでした。あつ、あたしはティアナ・ランスター。よろしくね」

「あつ、それはそうとノーヴェ。ダメだよ。いくら同意の上での喧嘩だからって、こんなちっちゃい子に酷いことしちゃ」

「確かにな。ちよつとやり過ぎだぞノーヴェ」

「あのな……。こつちだつて思いつきりやられて、まだ全身痛エんだぞ」

確かにノーヴェのダメージは、かなりの物だった。

ストライクアーツ有段者であるノーヴェをあそこまでやるなんて、この子はかなり強いんだと分かる。

「格闘家相手の連続襲撃犯があなただっていうのは……本当？」

ティアの問いかけに、アインハルトはしばらく考えて――。

「――はい」

「理由、聞いてもいいかな」

アインハルトが答えるのをためらっていると、代わりにノーヴェエが――。

「大昔のベルカの戦争が、こいつの中ではまだ終わっていないんだと。んで、自分の強さを知りたくて」

「後はなんだ。聖王と冥王をブツ飛ばしたいんだっけ？」

すると、今までノーヴェエの言葉に、ずっと俯いたままだったアインハルトが――。

「最後のは……少し違います」

「古きベルカのどの王よりも、霸王のこの身が強くなること。それを証明できれば良いだけ……」

ぐつと左拳を握りしめて答える。

「とういことは、聖王家や冥王家に恨みがある訳じゃない？」

「はい」

「そっか……」

それを聞いて安心した。

もし、恨み言で聖王家や冥王家を狙うのであれば、かなりやっかいだったけど、でも、この子は純粹に強くなりたいという心で動いていただけなんだ。

「よかった。実はな、俺たちは、そのふたりと仲良しだからな」

「そうなの」

「そういうこと」

「……あつ」

アインハルトがどこか複雑な表情をしてる。

でも、この件は何とかなりそうだな。



「さて、御飯を食べたら、後で一緒に近くの署に行くとするか。聞くところによると、被害届は出ていないそうだし、もう路上で喧嘩しないって約束してくれるなら、すぐに帰れるはずだから……」

「そうね」

「あのさ、フィル、ティアナ。今回のことについては、先に手エ出したのはあたしなんだ」「あら？」

「だから、あたしも一緒に行く。喧嘩両成敗ってやつにしてもらおう」

——なるほどな。

もし、このまま行ったら、いくら被害届が出ていないとはいえ、怪我人も出ている事件だ。そう簡単にはすまない。

だけど、喧嘩両成敗って形なら、お互いの同意の上でやったことで、そこそこの注意ですむ。ノーヴェらしい優しさだよ。

「お前もそれでいいな？」

「はい……ありがとうございます」

\* \* \*

「ごめんねティア、フィル、せつかくの非番なのに」

「それはあんたも一緒でしょう」

「それに俺は今休職中だしな。暇をもてあましてるよ」

「それにしてもスバル、あんたってばベルカの王様とよく知り合うわね」  
「ねー」

確かにヴィヴィオといい、イクスといい、本当に俺たちはベルカ関係に遭遇することが多いな。しかも王族関係。

「でも、あの子。アインハルトも色々抱え込んでるみたいだし。このまま放つてはおけないかも」

「そうね……。でも、その前にあんたの可愛い妹とお節介が、一肌脱いでくれそうじゃない」

「おい、こちらティア。誰のことだ!! お節介って言うのは!？」

「あんたに決まってるでしょう。自分の身体を省みないで人のために動いているんだから!!」

「ティアの意見に賛成。だから身体壊して休職してるんでしよう!! 少しは自分を大事にしてよ!!」

悔しいが反論できない。

確かに、無茶しすぎて執務官を休職しなければならなくなってしまった。

ゆりかごの時に全く動けなくなって、それで分かったはずだったのにな……。

「そうだな……。今回は、サポートに徹するよ。あんまり無茶もしない」

「あんたの無茶しないと言う言葉は、いまいち信用できないけど……。いいわ、あたしが出張中のフェイトさんの代わりに、しっかりと見張ってるから!!」

「ははっ……。お手柔らかになティア」

俺はティアの迫力に、思わず引きつり笑いをしてしまった。

こういうとき本気で怒らせると、ティアもフェイトも怖いからな……。

そう思っていたら……。

「ねえ、ファイル……」

「ん？　なんだ？」

「……もう、無茶はしないでね。あんな思いは二度とごめんよ。フェイトさんもあたしも……」

「ティア……」

ティアにとって、俺の怪我は心の傷になってしまった。

あの頃の俺は、フェイトやティアを守りたいという一心で、本当に無茶の繰り返しをしていた。

ゆりかごで死の淵をさまよっていたときも、フェイトとティアはずっと俺のことを支えてくれていた。

「大丈夫さ。今度はあんな過ちはしない。自分の大切な人たちを悲しませることはしないから……」

「——うん」

「あの……。お二人さん。なに二人だけの世界を作ってるのかな？　特にファイルは妻帯

者でしょう。ティアを口説いてどうするの!？」

「あのな……。俺はそんなつもりはないし、口説いてもいない!!」

「そ、そうよ!! あたし達はそんなつもりじゃないわよ!!」

スバルのやつ、なんかおもしろいオモチャを見つけた目をしやがって……。

後で一緒にお仕置きしてやる!!

「つと、バカな話はこのくらいにしておく。ちよつとアインハルトの所に行ってくる」

さつきから、ソファアーに座って、ずっと俯いたままだからな。

ノーヴェエが来るまで、ちよいと元気づけてやるとしますか。

\* \* \*

私はなにをやっているのだろう。

やらなきやいけないこと沢山あるのに——。

「ほら」

「ひゃっ!!」

「ははっ、霸王を名乗る子も、こうしていると普通の女の子だな」

いきなり冷たい缶ジュースを、私の左頬にぴたっとなつけてきた。

突然のことで、私は思わずおたおたしてしまった。

「……………ひどいですよ」

「悪い。ちよつとやりすぎたかな。まあ、これでも飲んで機嫌直してくれ」

「……………いただきます」

ちよつど喉が渴いていたから、冷たい飲み物はとてもありがたい。

私はファイルさんから、飲み物を受け取りそれを口に含んだ。

「あれ? この飲み物って…………?」

私が好きな飲み物の一つ、オレンジジュース。

どうしてこれが好きだつて分かったんだろう？

「ん、ああ、今日の朝ご飯で、果物がいくつか出ていたのに、オレンジをよく食べていたからな。もしかしてつて思ったのさ……」

「そうですか……」

驚いた——。

朝ご飯のあんな短い時間だったのに、本当に広範囲にわたつて物事を見ている人なんだ。

「さてと、もうすぐ解放だと思うけど、学校はどうする？」

「行けるのなら、行きます」

「そっか……」

ファイルさんは、ふと笑みを浮かべてそう言った。

無理に私を学校に行かせようとはしないみたいだ。

「まつ、学校のことはそれくらいにして、少し話は変わるが、ノーヴェもスバルもティアも、局員の中ではかなり優秀な連中だ。古代ベルカ系に詳しい専門家も沢山知っている……」

「アインハルトが言う「戦争」というのが何なのかは分からない。けど……」

「俺たちで出来ることなら、いくらでも協力する」

「だから……聖王達には手を出さなつてことですか……?」

そう思っていたら、フィールさんが――。

「ちよつと違うかな。そう言う意味で言つたんじゃない。俺は君の瞳を見ていろんな事を思つたんだ。ノーヴェとも言つていたんだけど……。アインハルト、君は」

「格闘技（ストライクアーツ）が……好きだろ?」

「えっ……?」

「これでも、まがりなりにも執務官してるからな。人を見る目はあるつもりだ。こうして話してみて分かつた。君の目は澄んだ心を持っている。そのオッドアイと一緒に綺麗な心をね……」

「フィールさん……」



そんなこと言われたこと無かった。

自分の瞳は、人とは違って片目ずつ色が違っている。

この子とで小さいときは、周りから虐められることもあった。

それを綺麗だなんて言ってくれる人なんて、今までいかなかったのに……。

「……すまない。違っていたら謝る」

「いえ、好きとか、嫌いとか、そう言う気持ちで今まで考えたことがありません」

「霸王流（カイザーアーツ）は……」

「私の存在理由の……全てですから……」

そう……。

この記憶と共に、霸王流は私の全て……。

「——そっか。良かったら、聞かせてくれないか。誰かに話したら、少しは胸の苦しみが軽くなるよ……」

こんなことを言ってくれる人は今までいなかった。  
もしかしたら、この人たちになら、私のことを少しは話しても……。

言ったところでどうなる物じゃないのは分かっている。  
だけど、今はこの人に聞いて欲しいという気持ちが強いから――。

「――私は」

話してみよう。

私の霸王の悲しい記憶を……。

# Memory ; 06 本当の気持ち

古代ベルカ諸王時代

それは天地統一を目指した諸国の王による戦いの歴史

『聖王女』オリヴィエや『霸王』イングヴァルトも――。

そんな時代を生きた王族の間人である。

いづれ優れた王とされる両者の関係は、現代の歴史研究においても、明確になつていない――。

\* \* \*

「3人も、せっかくの休暇だろ？ 何もこっちに付き合わなくてもいいのに」

「あははー」

ティアナとスバルがそれぞれの飲み物を飲みながら、笑いで返してくれた。

「特にファイルは、執務官休職中だろ。それなのに……」

そう、ティアナ達と違って、ファイルは今はデバイス関係で活動しているけど、執務官としてはまだ復帰はしていない。

「気にするなって。俺もアインハルトのことは気になったからな。あのまま放っておくわけにはいかないだろ」

「……すまねえな」

こういう時のファイルは頑固だから、何を言っても無駄だ。

はあ……。

こうなると分かっていたから、出来るだけファイルには知らせたくなかったんだよ。

「まあ、ファイルが協力してくれるのは、本当に助かるんだけど、問題はさ……」  
「なんでお前らが揃っているかってことだ!!」

あたしが呼んだのは、ティアナとスバルとファイル、それにチンク姉だけだぞ!!  
どうしてデイエチやデイードにオットー、さらにウエンデイまでいるんだよ!!

「えー別にいいじゃないツスカ!!」

「時代を超えた聖王と霸王の出会いなんて、ロマンチックだよ」

「陛下の身に危険が及ぶことがあったら困りますし」

「護衛としては当然」

こいつら、好き勝手なことばかりいいやがって!!

本当に頭が痛くなるよ。あたしは……。

「すまんナノーヴェ。姉も一応止めたのだが」

「うう」

「まつ、見学自体はかまわねーけど、余計な茶々は入れんなよ?」

「そうだな。ヴィヴィオもアインハルトも、色々繊細だからな。その辺は気をつけてくれよな」

「「は——い!!」」

とりあえず、ファイルが言ってくれたから、変な茶々は入れないと思う。

というか、これで変なことをしたら、ファイルの奴本気でウエンディ達を叩き出すだろうしな。

ファイルの奴は普段は優しいけど、曲がったことをすると、例え自分の奥さんのフェイトさんや親友のティアナでさえ、本気のお説教をするからな。

そんなことを考えていたら、こつちにヴィヴィオ達がやってきた。

\* \* \*

「ノーヴェ、みんな!!」

「あれれ? スバルさんとティアナさん、それにファイルさんまで!!」

「こんにはー!!」

ナンバーズのみんながいるのは聞いていたけど、スバルさん達も一緒だったなんて思わなかったな。

リオはスバルさん達の所へ、コロナはフィルさんの所に行って一緒にお話を始めた。

「あー、やかましくて悪いな」

「ううん、全然!!」

実はさつきノーヴェから連絡があつて、紹介したい女の子がいるつて聞いてやってきたんだけど――。

「ノーヴェ、紹介してくれる子つて?」

「ああ、さつき連絡あつたからもうすぐ来るよ」

「何歳くらいの子? 流派は?」

わたしは興奮して、ノーヴェの肩に手をかけ、さらに質問をしていた。

「お前の学校の中等科の1年生、流派はまあ……。旧ベルカ式の古流武術だな」

「へー」

「あとアレだ。お前と同じ虹彩（こうさい）異色」

「ほんとー!?!」

旧ベルカ式の古流武術というのも驚いたけど、わたしと同じ虹彩異色だなんて!!

「まあ、ヴィヴィオ、座ったら?」

「そうそう」

「だな。飲み物でも飲んでちよつと落ち着け」

「あつ、そうですね」

フィルさんから、ジュースをもらうとそれを一口頂く。

あれ、ちよつと待って!?

これって、さつきまでフィルさんが飲んでいたジュースだよね――。

うわあ……。意識しちやったら、顔が真っ赤になっちゃうよ!!

「失礼します」



ふと、後ろから声をかけられて振り返ると……。

「ノーヴェさん、フィルさん、皆さん」

「アインハルト・ストラトス参りました」

ツインテールの碧銀の髪の子がそこに立っていた。

\* \* \*

「すみません、遅くなりました」

「いやいや遅かねーよ」

本当はもう少し早くこれれば良かったのだが、授業が終わらなくて、この時間になってしまった。

「それで、アインハルト。こっちにいる女の子が……」

「え、えと、はじめまして!! ミッド式のストライクアーツをやってます、高町ヴィヴィオです」

この子が――。

「ベルカ式古流武術アインハルト・ストラトスです」

小さな手――。

脆そうな身体――。

だけど、この紅（ロート）と翠（グリユーン）の鮮やかな瞳は――。

霸王（わたし）の記憶に焼き付いた――。

間違はずもない――。

聖王女の証――。

「あの、アインハルト………さん？」

私は彼女の呼びかけでハツとする。

「——ああ、失礼しました」

「あ、いえ!!」

「まあ、二人とも格闘技者同士、ごちやごちや話すより、手合わせでもした方がはやいだろう？」

「場所は、俺の方で取っておいたから、行くとするか」

ノーヴェさんとフィルさんに言われ、私達は区民センター内のスポーツコートに行くことになった。

私と彼女はそれぞれウェアに着替え、ウォーミングアップをし、身体をほぐす。

「じゃ、あの、アインハルトさん!! よろしくお願いします!!」

「——はい」

本当にこれで分かるのだろうか……？

ファイルさん達が言っていたように、彼女は霸王（わたし）の拳を受け止めてくれるのだろうか……？

\* \* \*

数時間前

諸王戦乱の時代。

武技において最強を誇った一人の王女がいた。

名をオリヴィエ・セーゲブレヒト――。

後の『最後のゆりかごの聖王』

かつて、『霸王イングヴァルト』は彼女に勝利することが出来なかった。

「……なるほどな。それで、時代を超えて再戦……か？」

「霸王の血は歴史の中で薄れていますが、時折その血が色濃く蘇ることがあります」  
「碧銀の髪や、この色彩の虹彩異色。霸王の身体資質と霸王流（カイザーアーツ）。それらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいます」

そっか……。

この世界では、霸王の記憶を持った女の子は少し事態が違うんだな。

かつて俺がいた未来の世界——。

最終決戦前、俺とティアは、ゆりかごの制御を止めるために、ゆりかごの駆動炉に向かっていた。

その時見た光景は——。

そこでは、ヴィヴィオの代わりにゆりかごの起動鍵として、駆動炉埋め込まれていた少女がいた。

何とか、駆動炉を止めることは出来たけど、クアットロの手で完全に洗脳されてしま  
い、元に戻すのは不可能だった。

だから――。

せめて、魂だけでも救われることを願って――。

俺たちが彼女を眠らせたんだ――。

だけど、そんなのは俺のエゴだけだな――。

そしてアインハルトの言葉はまだ続く――。

「私の記憶にいる『彼』の悲願なんです。天地に覇を持って和を成せるそんな『王』であること」

「弱かったせいで……強くなかったせいで」

「彼は彼女を救えなかった……守れなかったから!!」

「!!」

「そんな数百年分の後悔が……私の中にあるんです」

救えなかった……か……。

俺もあの時、なのはさん達やティアを救うことは出来なかった――。

女神の力で過去に戻り、やり直せたけど、それでもあの時のことは決して忘れなれない。

あの時のことは、今でも俺の中で後悔しているのだから――。

「だけど、この世界にはぶつける相手ももういない。救うべき相手も……守るべき国も……世界も!!」

悲しみのあまり、アインハルトは声を殺しながら泣いていた。

数百年分の後悔か……。

そんな悲しい記憶は、本来こんな小さな少女が背負う物じゃない。

だけど、彼女はそれでも受け止めて、自分の一部としている。

強いけど、それはあまりにも悲しい。

「――るよ」

「えっ……?」

「俺で良ければ受け止めてやる。君の拳も、そして、その悲しい思いも……。」

「……同情で言わないでください!! 大切な人を失ったことがないあなたに、何が分か

るんです!!」

同情か……。

たしかに、そう取られても仕方がないよな……。

「はい、そこまで」

声がし、振り向くとそこにはいたのは――。

「ファイルは決して、同情なんかで言っていないわよ」

ティアアだった。

「だけど、さつきまでスバルと向こうで話していたはずだが……？」

「ティアア……お前、聞いていたのか？」

「……ごめん。あんまりにも遅かったから、少しだけ聞いちゃったの」

「そっか……」



時計を見ると、あれから結構時間がたってしまっていた。  
ティアは少しだけと言っていたけど、おそらくは全部聞いていたと思う。  
それでも、俺のことを信じて黙ってくれてくれたんだ。  
こういうところは、フェイトとそっくりなんだよな。

\* \* \*

(同情なんかじゃない……？ でも、この人に何が分かるの)

霸王の記憶は、確かに私自身が経験している物じゃない。  
だけど、その悲しみは痛いほど伝わってきて、その思いは本物なんだ。

「アインハルト」

「はい……」

「確かにあんたの悲しみは、痛いほど伝わってきたわ。だけどね……」

するとティアナさんは、私の目を真っ直ぐ見つめて……。

「こいつはね……こいつはね……」

何度も話すのを躊躇っている。

だけど、意を決したのか……。

「大切な人たちを何人も失ってきたの……。だから、フィルがあんたに言った言葉は、決して同情なんかじゃない」

「ティア……お前……」

「だから、フィルの言葉を、ちゃんと聞いて欲しいの。あたし達じゃ、あんたの思いは受け止められないけど、だけど、こいつならちゃんと受け止めてくれるから……」

「ティアナさん……」

ティアナさんの言葉は、決して冗談やその場で繕った言葉なんかじゃないってことは、ティアナさんの目を見れば分かる。

「一つだけ……聞いても良いですか？」

「ああ……」

これだけはどうしても聞きたい。

ティアナさんが言っていた大切な人を失ったって言葉……。

あの言葉を言ったとき、フィルさんは一瞬だけど、本当に泣きそうな表情をしていた。

「あなたは……本当に……大切な人たちを……？」

「……………」

フィルさんは、俯いたまま答えようとはしない。

だけど、言わなくても、あの言葉が本当だったことは分かった。

フィルさんのあの辛そうな眼を見れば……。

「ごめんなさい……。さつきは無神経なことを言ってしまったて……」

「いや、こつちこそ、アインハルトの気持ちを考えないで言ってしまったんだ。謝るのは

こつちだよ……」

結局どつちも謝っていたため、ノーヴェエさんがやってきて、どつちどつちだと言うことでこの話は終わりになった。

\* \* \*

あの後、学校に戻るために、私はフィルさんのバイクで送ってもらうことになった。最初は申し訳ないので断ったのだけど、一応警察のお世話になったので、ちゃんと事情を説明する必要があるとのこと、一緒に行ってもらうことになった。

正直、私はバイクに乗ったことがなかったの、乗るときにオロオロしてしまった。だけど、フィルさんが乗り方を教えてくれたので、何とか乗ることが出来た。

学校までの短い距離だけど、本当に風が気持ちよくて、もやもやが消えていくようだ。

「不思議ですね……。こうしていると、いろんな事がリセットされていくみたいですよ」  
「それが分かるなら、16歳になったら免許取ってみな。自分で運転するのはもつときもちいいからな」

「ふふっ……はこ」

こんな風に気持ちの余裕を持ったのは、いつ以来だろう。

霸王の記憶が強くて出てきてからは、いろんな事に余裕なんて無かったから……。

だけど、それでも……。

「本当に……」

「ん？」

「本当に……私の拳を受け止めてくれる人が……いるんですか？」

思わずぼつりと言ってしまった言葉だった。

だけど、フィルさんはそれを聞いてくれていて……。

「——大丈夫、ちゃんという。この世界には聖王である女の子もいるんだ。俺が駄目でも、その子なら、ちゃんと受け止めてくれるさ……」

「あっ……」

本当にこの人は、人の悲しみをちゃんと受け止めてくれる人なんだ。

警察署での言葉も、ティアナさんが言っていたように同情なんかじゃなかったんだ。

「ありがとうございます……ごさいます。今なら、その言葉を……信じられる気がします」

「そっか……じゃ、今度会って、自分の思いをぶつけると良い。私念じゃなくそのためなら、俺はいくらでも手助けするからな……」

「はい……」

そして――。

\* \* \*

今私の目の前にフィルさんが言っていた子がいる。

この子が本当に霸王の拳を――。

霸王の悲願を叶えてくれる——？

「んじゃ、スパーリング4分1ラウンド。射砲撃と拘束（バインド）はナシの格闘オンリーな」

そして……。

「レディ」

ノーヴェさんの合図と共に——。

「ゴー!!」

開始となる。

開始早々、いきなり懐に飛び込まれ、下からアッパーを喰らいそうになる。

それでも何とか両腕のガードで防ぐことができた。

その後も速攻で攻撃の手を休めない——。

「ヴィ……ヴィヴィオって、変身前でも結構強い？」

「練習頑張っているからねー」

「確かに強いと思う。けど——」

「けど、何よ？」

「それは見ていればわかるさ……」

上段の蹴り——。

確かに早いし威力もある。

けど……。

真っ直ぐな技——。

きつと、真っ直ぐな心——。

だからこの子は——。



私が戦うべき『王』ではない――。

私は掌底の応用で、彼女の胸に打撃を与え場外に吹き飛ばす。

勢いが強すぎて、壁に激突するかと思ったけど、フィルさんが彼女を受け止めて事なきを得た。

「す……す……い!!」

あのまぶしいくらいの笑顔――。

――私とは違う。

\* \* \*

「お手合わせ……ありがとうございます」

「えっ……」

突然アインハルトさんが振り向いて、試合場から出て行こうとしていた。何かわたしが悪いことをしてしまったのだろうか!?

「あの……あのっ!!」

「すみません。わたし何か失礼を……」

「いいえ……」

「じゃ、じゃあ……あの、わたし……弱すぎました?」

「いえ」

それじゃ、一体何がアインハルトさんの事を不愉快にさせてしまったのだろうか?

「趣味と遊びの範囲内でしたら、充分すぎるほどに」

「申し訳ありません……。私の身勝手です」

そう言って、アインハルトさんは去ろうとする。

駄目だ!! 今この人をこのまま帰してしまつたら……。

「あのっ!! すみません……。今のスパークが不真面目に感じたなら謝ります!!」  
「今度はもつと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか!!」

今日じゃなくても良い——。

明日でも来週でも良い!!

アインハルトさんがフィルさんと目あわせをしている。

お願いフィルさん、私にもう一度だけチャンスをください!!

「……ヴィヴィオ」

「は、はい!!」

「その気持ち、嘘偽りはないな」

フィルさんの少し低めの声に、思わず声が裏返ってしまった。

この声の時は、いつもの優しいフィルさんじゃない。

本気の答えを求めているときの声だ。

「はい!!」

わたしがはつきりと自分の意志を伝えると、ファイルさんは優しい笑みをして――

「……良い返事だ。よし!!」

ファイルさんはパンパンと手を叩き……。

「それじゃ来週、もう一回するでしょう。今度はスパ―ではなくて、正式な練習試合としてな」

「ああ、そりゃいいっすね!!」

「二人の試合楽しみだ」

「はい」

ファイルさん達の方を見ると、ノーヴェがウエンデイに絡まれて、困っている感じだった。

「——分かりました。時間と場所はお任せいたします」  
「ありがとうございます!!」

フィルさんのお陰で、もう一度だけチャンスをもらえることが出来たんだ。  
このチャンス絶対に無駄にはしない!!

結局わたし達は、あの後すぐに解散となり、アインハルトさんはフィルさん達が送っていくことになった。

\* \* \*

18:48 高町家

——あの人からしたら、わたしはレベル低いのに不真面目で……。

がっかりさせちゃったんだ……。わたしが弱すぎて……。

わたしだってストライクアーツは『趣味と遊び』だけじゃないけど——。

いろんな事を考えていたら、ママから通信が入り……。

「晩ご飯だよ。ヴィヴィオ」

今はママの美味しい御飯を食べて、少しでも元気にならなきゃ!!

「ヴィヴィオ、今日はなんか元気ないね？」

「えっ?」

「そそ、そんなことないよ!! 元気元気!! ねークリスマス!!」

クリスマスと一緒にガッツポーズを取って、何とか元気だとアピールするけど……。

「そお?」

ママの目はごまかせない。

あの目は今のわたしのことが分かっている目だ。

そうだよ——。

「えつと……。実はね？」

落ち込んでちゃ駄目——。

「新しく知り合った人と、来週練習試合をするんだ。そのことを考えててちよつとね……」

「そっか。じゃ、しっかり食べて練習して、うんと頑張らなきゃね」  
「うん!!」

あの人の——。

アインハルトさんが求めている物は分からないけど——。

精一杯伝えてみよう——。

高町ヴィヴィオの本当の気持ちを!!

## Memory ; 07 はじめまして

区民公園 AM6:08

わたしとノーヴェエは、いつもの日課である朝練をしていた。  
軽いウォーミングアップの後、公園の周りをジョキング。

これがいつもの日課になっていた。

「アインハルトのこと、ちゃんと説明していなくて悪かった」  
「ううん」

「ノーヴェエやフィルさんにも、何か考えがあつたんでしょう」

ノーヴェエとフィルさんはきつと何かあるからこそ、わたしにアインハルトさんを紹介したんだと思うから――。

そしてわたし達は、ジョキングを止め、池の柵に寄りかかって、ノーヴェエの話を聞くことになった。



「あいつさ、お前と同じなんだ。旧ベルカ王家の王族——。『霸王』イングヴァルトの純血統」

「——そうなんだ」

そっか——。

ノーヴェから旧ベルカの古流武術を使うとは聞いていたけど、わたしと同じ王家の血を引いていたんだ。

「あいつも色々迷っているんだ。自分の血統とか王としての記憶とか……。でもな、救ってやってくれとかそーゆるんでもねーんだよ。まして聖王や霸王がどうこうとかじゃなくて……」

「わかるよ。大丈夫」

わたしも自分の生まれとか、過去のこととか、いろんな事を思ってきたから——。

「だけど、伝えあうのって難しいから、思い切りぶつかってみるだけ」

今のわたしに出来るのは、思いっきりぶつかって伝える。  
それが一番わたしらしいから――。

「それに、仲良くなれたら教会の庭にも案内したいし」

「ああ、あそこか……。いいかもな」

あの庭に咲く花とか、あの人と一緒にみられたらとつても嬉しい。  
それにイクスのことも紹介したいしね。

「悪いな。お前には迷惑掛けてばっかりで。本当なら、ファイルの方がこういったことはあっているんだけどな。だけど……」

「……………うん」

ノーヴェから、ファイルさんとアインハルトさんの警察署での会話のことは聞いてい  
る。

ファイルさんはアインハルトさんのために、自分の過去を知られるのを覚悟で、彼女の

力になろうとしていた。

そして、その一部始終を見ていたティアナさんも一緒に――。

「これ以上あいつにばかり負担をかけさせたくないんだ。ヴィヴィオも知っていると思うが、あいつは本当に自分のことを顧みないでやりやがる」

「そうなんだよね――」

フィルさんは、自分の大切な人達のためなら、自分のことを顧みない。

それは昔から変わらないから。

「だから、あたし達で出来ることは、自分たちでやりたいと思うんだ。その分今回、お前に負担をかけてしまうけど……」

「迷惑なんかじゃないよ!! 友達として信頼してくれるのも」

「指導者（コーチ）として教え子（わたし）に期待してくれるのも、どっちも嬉しいんだもん」

「だから頑張る!!」

ファイルさんの負担を減らすこともだけど、何よりわたし自身、あの人に思いを伝えた  
いから――。

\* \* \*

アラル港湾埠頭 13:20

廃棄倉庫区画 試合時間開始 10分前

「お待たせしました」

「アインハルト・ストラトス、参りました」

「来ていただいてありがとうございます。アインハルトさん」

彼女ヴィヴィオさんが、頭を下げて挨拶をしてくれた。

「本来ならファイルが立会人をする予定だったが、都合がどうしても付かず、あたしがする  
ことになった。ふたりとも異存はないな？」

「はい!!」

「ありません」

「ここはな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし許可も取つてあるから、安心して全力出して良いぞ」

「うん、最初から全力で行きます」

彼女はデバイスを取り出して――。

「セイクリッド・ハート セット・アップ!!」

魔法で変身し、戦う構えを取っていた。

この魔法は、私の使う変身魔法と殆ど一緒。身体強化系の魔法だ。  
彼女は本気だ。

「――武装形態」

本気の相手には、本気でぶつからなくては失礼以外の何者でもない。

私も身体強化の魔法で、肉体を大人の状態にし、戦闘態勢に入る。

「アインハルトさんも大人モード!?!」

「今回も魔法はナシの、格闘オンリー5分間一本勝負」

そして――。

「それじゃ試合――」

ノーヴェさんの右腕が上げられ――。

「開始!!」

開始の合図がされた。

私は構えを取り、戦闘態勢に入る。

彼女の構えをみて、私は以前と違うと言うことに気づく。

綺麗な構え——。  
油断も甘さもない。

良い師匠や仲間に関まれて——。

この子はきつと格闘技を楽しんでいる。

フィルさんはあの時、彼女なら受け止めてくれると言っていたけど——。  
でも、私とは何もかもが違うし、霸王（わたし）の拳を向けて良い相手じゃない。

\* \* \*

すごい威圧感——。

一体どれくらい、どんな風に鍛えてきたんだろう。

彼女の構えやプレッシャーで、それが嫌と言うほど伝わってくる。

勝てるなんて思わない。

だけど——。

だからこそ、一撃ずつで伝えなきや……。

『この間はごめんなさい』と――。

彼女の右ストレートが鋭い早さで、私の身体を捉えようとする。何とか腕でガードするが、重い一撃のため腕がしびれてしまった。

さらに連撃はつづく。

強い――。

今のわたしじゃ、相手にならないかもしれない。

だけど、それでも伝えなくちや行けないんだ。

わたしの全力――。

「うわああああああ!!」

私の格闘戦技（ストライクアーツ）!!



わたしはありつたけの力で、彼女のお腹に右ストレートを撃ちはなった。思いを、ありつたけ乗せて――。

\* \* \*

彼女の一撃を食らってしまった私は、後方へ飛ばされてしまう。

何とか足で踏ん張ったが、それでもかなりのダメージを負ってしまった。

さらに――。

今度は彼女の速攻が、私を追い詰めていく。

連撃の僅かな隙を突いて、なんとか反撃するが、それでも彼女は自分の身を顧みないで、私の顔面にクリーンヒットをさせてきた。

「っ!!」

「やった!?!」

「はああああっ!!」

彼女にもダメージをかなり与えているのに、それでも何度も何度も向かってくる。

この子は どうして……？

こんなに一生懸命に……？

師匠や尊敬する人が組んだ試合だから？

友達が見ているから？

分からない……？

\* \* \*

大好きで大切に――。

守りたい人がいる――。

小さなわたしに強さと勇気を教えてくれた――。

なのはママは、世界中の誰より私のことを幸せにしてくれた。

フィルさんとフェイトママは、そんなわたしを陰から見守ってくれた。

だから――。

そんな優しい人たちを守るために、強くなるって約束した――。

あの時――。

ゆりかごでわたしを命がけで助けてくれたときに――。

「ああああっ!!」

強くなるんだ!!

どこまでだって!!

渾身の力と思いを乗せて、わたしは一撃を放った。  
だけども——。

わたしの一撃は、彼女の左腕のプロテクターを破壊しただけで、ダメージにはなっていないかった。

そして——。

「霸王」

彼女の渾身の一撃が——。

「断空拳」

わたしの身体を捉え、瓦礫置き場まで吹っ飛ばされてしまった。

「——一本!!」

「それまで!!」

\* \* \*

「ヴィヴィオ、大丈夫か？」

「怪我はないようです……。大丈夫」

試合が終わり、彼女は先ほどの一撃で意識を失って、変身が解けてしまい、付き添いの女性の膝元で眠ってしまっていた。

「アインハルトが気をつけてくれたんだよね。防護（フィールド）を抜かないように」

「ありがとっス、アインハルト」

「ありがとうございます」

「ああ、いえ……」

正直紙一重だったから、うまくいくかどうか分からなかったけど、怪我をさせなくて良かった。

と思っていたら……

「……!!?」

「おっと……。大丈夫?」

先ほどまでいなかった、金色の長い髪的女性に支えられていた。

『フェイトさん!?!』

「フェイトさん、どうしてここに!?!」

「実はね……。心配になって出張から戻ってきて、すぐにこっちにやってきたんだ。ファイルも来ているよ」

『ええっ!!』

そう言われ、女性の向いている方を見ると――。

「よっ、どうやら決着が着いたみたいだな」

『ファイル (さん) !?!』

そこには黒髪の男性、フィルさんの姿があった。

さつき、ノーヴェさんの話じゃ、ここには来られないと言ってたのに……？

「思ったより早く仕事が終わってな。ちようどフェイトも帰ってきていたから、心配になつて様子を見に来たんだ。ノーヴェに任せきりじゃ悪いからな」

「こんな事言ってるけど、フィルは朝からフル活動で働いていたんだよ。それで無理言つて早退してきたんだから……」

「……そういうことは言わなくて良い」

「ふふっ♪」

この二人、本当に相手のことを信頼しあっているのがよく分かる。

ちよつとした言葉で、フィルさんの口調がいつもと違うのが感じられる。

どこか優しさを感じる口調——。

そんな感じだ。

「すみません……。もう大丈夫です」

何とか立ち上がろうとしたが――。

「おっと……。無理するな」

今度はファイルさんに抱きかかえられてしまった。

さっきの何倍も恥ずかしいです。

「ラストにカウンターが掠っていて、それが時間差で効いてるんだ。じっとしてろ」

「ファイルの言うとおりだよ。今はじっとしていてね」

「……はい」

これ以上無理しても、二人に申し訳ない。

私はお二人の御厚意に甘えることにした。

\* \* \*

「断空拳は、さっきのが本式なのか？」



「足先から練り上げた力を、拳足から打ち出す技法そのものが『断空』です」

私は、まだ極めていないため、拳での直打と打ち下ろしでしか撃てない。

「なるほどな……。で、ヴィヴィオはどうだった？」

フィルさんは、彼女のことを聞いてきた。

彼女と戦って、私を感じたこと——。

それは……。

「彼女には謝らなくてはいけません。先週は失礼なことを言ってしまった。——

——訂正しますと」

「そっか……」

その答えにフィルさんの表情も綻んでいる感じがする。

この人は、こんな感じで笑うこともあるんだ。

「そうしてやってくれ。きつと喜ぶ」

ノーヴェさんも同様に笑顔で答えてくれた。

確かに彼女は霸王（わたし）が会いたかった聖王女じゃない。

だけど、わたしは、この子とまた戦えたらと思っている――。

だから――。

「はじめまして……。ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

私は彼女の手を取って、自分の名前を伝えた。

「アインハルト、それ起きているときに言ってやれ」

「……恥ずかしいので、嫌です」

ファイルさんは、ああ言っているけど、まだ私には面と向かって言うのは恥ずかしいんです。

今はこれで許してください。

「さてと、ヴィヴィオもアインハルトも、どこかゆつくりと休めるところへ連れて行く」

「そうだね。ヴィヴィオは私が運ぶから、ファイルはアインハルトをお願い」

「了解。ヴィヴィオのことはそっちに任せるよ、フェイト」

そう言つて金髪の女性、フェイトさんはヴィヴィオさんをそつと抱き上げ、自分の乗ってきた車の方へ運んでいった。

そして――。

「ほら、アインハルト」

「えっ？ わわっ!?!」

フィールさんは、私にメットを放って、それを何とか受け取る。

「乗りごごち悪いバイクで悪いが、家まで送ってくよ」

「すみません……」

「気にするなって、可愛い女の子を放っておくわけにはいかないだろう」

フィールさんはウインクをして、おどけた口調で言ってきた。

言った後、顔を真っ赤にしているのがちよつとびつくりです。

「か、可愛いって……。わ、私が……。ですか？」

「充分可愛いと思うよ。まあ、こんなふざけた言い方をしたら、信じられないと思うけど。でも、ヴィヴィオもアインハルトも女の子なんだから、無理しないこと!!」

今度はさつきと違って、真剣な表情と口調で言ってきた。

この人は、やっぱりこつちの性格が本来の性格なんだ。

真面目で、人のために自分のことを顧みない。

でも、ちょっと悪戯好きなどころもある。

さつき私に言ってきた言葉が、それを感じさせる。

「ふふつ、はい。それじゃ、あんまり無理はしないようにします」

「そっか……」

きつと、この人は私なんかより、いろんな経験もしてきたんだ。

こないだは感情的になっていて、考えもしなかつたけど、ちよつと考えれば分かることだ。

いつか、この人と戦つてみたい。

霸王とか関係無しに、私自身――。

アインハルト・ストラトスとして――。

## Memory ; 08 ブランニュー・ハート

p i p i p i

「ん……朝か」

目覚ましの音で、目が覚めカーテンを開けると、空も晴れ渡っていて、最高の天気だった。

「というか、この目覚ましはちよつと勘弁して欲しいよな……」

というのも、目覚ましは普通の目覚ましじゃない。

フェイトがマリーさんに頼んで、特別に作ってもらった2頭身のフェイト型目覚ましだ。

最初の目覚ましで起きなかった場合、今度はフェイトの声が入ったメッセージでおこされるんだけど、そのメッセージが、かなり照れてしまう物が入っているから質が悪い。

だから俺はメッセージが再生する前に、目覚ましを止めるのが日課になってしまったのだ。

「さてと、あんまりダラダラしていたら、フェイトが直接起こしに来てしまうからな」

俺は普段着に着替え、フェイトが待つキッチンに降りていった。

「おはようファイル。朝ご飯出来ているよ」

「ああ……。いつもありがとうな」

「ふふっ、どういたしまして♪」

テーブルを見ると、サラダとパンとスクランブルエッグ、後はコーンスープが並んでいた。

どんなに忙しいときでも、朝ご飯は欠かしたことはない。

基本的に食事はフェイトが作るが多い。最初の頃は俺がやっていたんだけど、フェイトが『ファイルにばかりやらせてたら、奥さんとしての立場無くなっちゃうから!!』というので、今ではフェイトが作ってくれることが多くなってる。

「いただきます」

俺たちは席について、朝ご飯を一緒に食べる。

相変わらずフェイトの作る御飯は美味しいよな。味とかもそうなんだけど、何より優しい感じがするんだよね。

身内最良と言えどもそれまでなんだけど、でも俺はフェイトと一緒にいるこの時間が好きだ。

「そう言えばファイル。今度の週末、お休みとれそう？」

「ああ、それは大丈夫。今日の仕事が終わったら、休暇はもらえるように交渉済みだ。前々から言っていたし、元々メカニックは副業だしね」

「でも、執務官をやっていた頃と同じくらい忙しいよね。ファイルの場合」  
「た、確かに……。命の危険が少ないだけで、労働時間はそう変わらないかも……」

執務官を休職中、俺はいろんな資格を取り、様々な仕事を手伝っていた。

無限書庫の司書やマリーさんの助手。さらにシャーリーさんとデバイス作成。



こういつたことをやっていたら、いつの間にかバイトではなく、本業以上にやるようになってしまった。

でも、さすがにそろそろ執務官として復帰も考えなきゃいけないから、副業も控えな  
いとな——。

「でも、私はフィルが無茶をしなくなった分、今のままでも良いかなっておもうんだ。私もティアナも本当に心配していたんだからね」

「……ぐっ、反論出来ない」

「フィル、もうゆりかごの時のような無茶はしないでね。あの時のことは、ティアナも私も本当に悔やんでいるんだよ。フィルに無茶させてしまったことに……」

「……ああ」

あの時——。

死の狭間の世界で、下界の様子を見ていた俺は二人の様子もはっきりと覚えている。

病室で泣きじゃくっていたフェイト——。

いつも、俺の様子を見に来てくれて、人知れず涙を流していたティア。

俺が二人をどんなに傷つけてしまったのかを痛感した――。

「あれ以来、フィルが私やティアナの補佐的なことをしてくれただけで、私達は安心して任務をすることが出来てるしね」

「今の俺には、二人のサポートをすることしかできないからな。だから、二人がちゃんと帰ってこられるようにするのは、当たり前のことだ」

「……そのおかげで、最近ティアナに、奥さんとしての立場を取られそうになってるけどね」

フェイトが思わず苦笑いでそう答えた。

確かに最近、ティアはフェイトが出張でいないときは、フェイトの代わりに、色々お手助けしてくれる。

ある意味、奥さんであるフェイトよりも俺の近くにいたことが多くなっている気がする。

「あのね……」

「だから、私もっと頑張つて、フィルの奥さんは私なんだって事を、ちゃんと分かってもらわなくちゃね!!」

フェイトが可愛く握り拳を作つて、ガッツポーズをして意思表示をする。

「だったら、俺も、もっと頑張らないとな。奥さんが頑張つてるのに、旦那がちゃらんぽらんじゃかつこ悪いからな……」

「……フィル」

俺たちはお互いを見つめ合う――。

言葉は要らない――。

今はお互いが一つになりたい。ただそれだけ――。

「ん……んあ……」

俺たちは口づけをかわし、さらに深く求め、互いの口を蹂躪する。

その度に、お互いの心が解け合う感覚にとらわれ、その快楽に身を任せていた。数分間味わった後、俺たちは唇を離し、名残惜しむ。

「ねえ……」

フェイトが瞳を潤ませ、こちらに熱い視線を送ってくる。

夜なら、このまま寝室に行ってお互いを求め合うが、さすがに朝からそんなことはしてはまずい。

「今は、これくらいにしておこう。後は夜……でな……」

「……うん」

正直、俺もしたい気持ちでいっぱいだけど、それはいろんな意味でよろしくないからな。

「じゃ、仕事場に行ってくるよ」

「待って、途中まで一緒に行こう。たまには……良いでしょう？」

「そうだな……。フェイトは今週からお休みだし、たまには良いか」  
「うん♪」

食事も食べ終わり、後片付けをした後、俺たちは外に出て、愛車のエンジンをかけに行く。

今日は車で行きたい気分なので、ロードサンダーではなく、俺の愛車のスポーツカーで行くことにした。

「さて、久しぶりにこいつを動かすとしますか」

ガレージの中にある車は三台。

フェイトの仕事用の黒のスポーツカー。

なのはさん達と一緒に行動するときを使う高級ワゴン車

そして――。

「やっぱ、地球の古い車は、デザインが良いよな……」

ボンネットの前方中心にある『XX』のエンブレム。

フォルムは無駄が無く、リトラクタブルヘッドライトでライトでスタイルを阻害する物が全くない。

例えるなら、地球の日本刀のような鋭いスタイル。

その美しい白の車の名は——。

『TOYOTA CELICA XX』

「あいかかわらず、この車はすごいね……」

「ああ、これはわざわざ地球まで行って買ってきた車だからな。俺のお気に入りだよ」

実は、フェイトが持っていた車雑誌に載っていたのを、たまたま見つけて、どうしても欲しくなって、わざわざ地球まで行って買ってきたのだ。

だけど、ミッドチルダの燃料じゃ、そのままじゃ動かすことは出来ないの、マリールさんと俺が半年をかけて、レストアをして、こっちでも使えるようにしたのだ。

外見以外、中身は殆ど入れ替えなので、性能的にはフェイトが持っている車と大差がないマシンになってしまった。

「じゃ、早速出発するか」

「そうだね」

俺たちは車に乗り込み、エンジンかけると、「ブロロン」とマフラーから爆音を奏でる。

その音は、ターボではなく、NAエンジンならではの重低音。  
車乗りにとっては、最高のサウンドだった。

「じゃ、いくぞ!!」

俺はギアをローギアに入れ、ホイールスピンをさせながら発進した。

\* \* \*

「そういえばヴィヴィオ。新しいお友達。アインハルトちゃんだった？ ママにも紹介してよ」

「んー、お友達っていうか先輩だからねー。もっとお話したいんだけど、なかなか難しく  
て」

「そっか」

そう――。

出会ったのは少し年上の女の子。

中等科の一年生、アインハルト・ストラトスさん。

アインハルトさんは、すごく強い格闘技者で、真正古流ベルカの格闘武術、霸王流（カイザーアーツ）の後継者。

それからベルカ諸王時代の王様。霸王イングヴァルト陛下の正統な子孫。

「あっ!! アインハルトさん」

「はい」

「ごきげんよう、アインハルトさん」

「ごきげんよう、ヴィヴィオさん」



わたしもこないだ試合させてもらったけど、まだまだ全然敵わなくて……。  
できれば今よりももっと仲良くなって、一緒に練習したり、お話ししたりしたいんだ  
けど――。

「――ヴィヴィオさん、あなたの校舎はあちらでは？」

「あ!! そ、そうでしたっ!!」

しまった……。

!!  
アインハルトさんと一緒に登校しているうちに、初等科の校舎を通り過ぎちゃったよ

まわりの先輩にくすぐすと笑われてるし、恥ずかしい!!

「それでは」

「あ」

アインハルトさんは、くるっと向いて校舎の中に入ってしまいました。

「ありがとうございます。アインハルトさん」

中々上手くいかなかったりしてますが――。

「――遅刻をしないように」

「気をつけてくださいね」

それでも――。

「はいっ！ 気をつけます!!」

何気ない一言が嬉しかったりと、そんな一喜一憂の日々だけけど今はもう無くなってしまった旧ベルカの出身同士――。

『強くなりたい』格闘技者同士。

触れあえるときはきつとあるから……。

「……ていうかー」

「今日も試験だよー!! 大変だよー!!」

「そうなんだよね〜!!」

実は、初等科も中等科も、ただいま一学期前期試験の真っ最中です。

コロナはこういったことが得意だから、そんなに慌てていないけど、わたしとリオは、試験が大の苦手です。

「でも、試験が終われば土日と合わせて、4日間の試験休み」

「うん!! 楽しい旅行が待ってるよ!!」

「宿泊先も遊び場も、もう準備万端だつて!!」

「おぉー!!」

今回のお休みは、ママ達の引率でみんな一緒に異世界旅行!!

しかも、今回はフィルさんが企画しているところもあるから、とっても楽しみです!!

「よし、じゃあ楽しい試験休みを笑顔で迎えるために!!」

「目指せ100点満点!!」

「お——つ!!」

せつかくの楽しい旅行が待っているんだ。

今は頑張って良い結果を出さなくちゃね!!

\* \* \*

同時刻 高町家

「エリオ、キャラ、そつちはどう?」

『はい、さつき無事に引き継ぎが終わりました』

『予定通り、週末からお休みです!!』

高町家で私は、なのはと一緒にエリオ達に、週末の休みが取れたかを確認するために通信を入っていた。

どうやら無事休みが取れそう。

「そう、よかった!!」

「じゃ、予定通りみんなで行けるね。春の大自然旅行ツアー&」

「ルーテシアも一緒にみんなでオフトレーニング!!」

こうやってみんなで揃うのは久しぶりだもんね。

ファイルはルーテシアやエリオ達とは頻繁にあっているけど――。

\* \* \*

同時刻 ナカジマ家

「みんなで旅行。あたしもいきたかったツススス!! ノーヴェとスバルだけってズル  
イツスス!!」

「あーうるせーな。あたしらだって別に遊びに行く訳じゃねー。スバルはオフトレだし、あたしはチビ達の引率だ」

「とかいって、通販で水着とか川遊びセットを買ってるのを、おねーちゃんがしらないとでもっ？」

「!!!」

「なんだ。そうなのか」

ちよつとまたんかい!!

デイエチ、なんでお前がその箱を持っているんだ!!

そして、なんで中身を知っているんだよ!!

「おまえ、人の物勝手にツ!!」

「いや、配送データに中身書いてあるし……」

そう言われてみると、確かに思いつきり書いてあった。

くそっ!! 中身を書かないでくれとするべきだった!!

「まあ、いいじゃない。ノーヴェはバイトと救助隊の研修も頑張ってるんだし」

「まったくだ」

「だから遊びじゃねーって」

普段はチンク姉はこういったことは言っておかないのに、たまにフィルみたいなからかってくることもある。

ある意味チンク姉とフィルって、似たもの同士かもしれない——。

「そういえばあの子……。アインハルトも一緒か？」

「そのつもり、これから誘うんだけどね」

早速あたしはアインハルトに通信を入れることにした。

それとウエンディ、いい加減にあたしから離れる!!

さつきからうつつとうしいぞ!!

「合宿……ですか？」

「すみません……。私は練習がありますので……」

アインハルトの答えは、あたしの予想通りの物だった。

だけど、これであたしが退くと思っただら大間違いだ。

「だからその練習のために行くんだって!! あたしや姉貴もいるし、ヴィヴィオも来る。それに何よりフィルの奴も来る!! 練習相手には事欠かねー。しかも!!」

「魔導師ランクAAからオーバーSのトレーニングも見られる」

「はい……」

おっ、フィルの名前と、トレーニングのことを言ったら少し食いついてきたな。

よし、もう少しだ!!

「ついでに歴史に詳しくて、お前の祖国のレアな伝記本とかも持っているお嬢もいる。まあたった4日だ。だまされたと思って来てみるって。つまんなかったら、走り込むなり、一人で練習するなりしててもいいんだし」

「あ、あの……」

「良いから来い!! 絶対に良い経験になる!!」

今回のことは絶対アインハルトの奴に良い経験になる。



せつかくのチャンスを生かさない手はない!!

「詳しいことは後でメールすつから、とりあえず今日の試験頑張れな」  
「……はっ」

ちよつと強引だったけど、これであいつも来るだろう。

それにヴィヴィオやフィルと一緒にいれば、あいつの視野ももつと広がるしな。

「ノーヴェのああ言う強引さって、つくづくスバルと姉妹だよねえ」

「ああ……そうだな」

「うう あたしも行きたかったツス」

\* \* \*

そして――。

そんなこんなで試験期間も無事終了。

「試験終了おつかれさま」

「みんなどうだった？」

「花丸評価を頂きました!!」

「3人揃って」

「優等生です!!」

わたし達、3人ともテストは9割以上キープ。

成績は上位を取って、無事試験を突破しました!!

「わーみんなすごいすごいっ」

「これならもう堂々とお出かけできるね」

「よくやったな3人とも」

だって、この旅行のために一生懸命頑張ったもん。

これで赤点を取りましたなんて言ったら、なのはママ達とファイルさんに大目玉だもん。

「じゃ、リオちゃんとコロナちゃんは、一旦おうちに戻って準備しないとね」

「はっ」

《Good job》

「ありがとうレイジングハート」

「おうちの方にもご挨拶したいから、車出すね」

「あ、じゃあ準備をすませてわたしも行く!!」

わたしが着替えに行こうとしたとき――。

「あーヴィヴィオは待ってて。お客様が来るから」

「おきやくさま?」

一体誰が来るんだろう?

わたしにおきやくさまって……??

そう思っていたら――。

## ピンポーン

《It seems to have come. (いらっしやったようです)》

チャイムが鳴り、玄関に行ってみると――。

「こんにちは」

「よう」

「アインハルトさん!? とノーヴェ!!」

そこにはアインハルトさんとノーヴェと一緒に来ていた。

「異世界での訓練合宿のことで、ノーヴェさんにお誘いを頂きました」

「同行させていただいても、宜しいでしょうか?」

「はいッ!! もー全力で大歓迎です!!」

まさか、アインハルトさんと一緒に行けるなんて夢にも思わなかった!!

フィルさんの方を見ると、クスクスと何かうまくいったという笑みを浮かべている。もしかして、フィルさんとノーヴェエが、アインハルトさんに!? やられた!!

こんなサプライズを用意してあったなんて!!

「ほら、ヴィヴィオ。上がってもらって」

「あ、うん!!」

いけない——。

ここが玄関だって事をすっかり忘れていた。

「アインハルトさんどーぞ!!」

「お邪魔します」

うわあ……。

まだ胸がドキドキしているよ。

「あの子が同行するって、教えなかったの正解だねノーヴェ」  
「はい。予想以上に」

わたしはアインハルトさんをリビングに案内し、ソファアの埃も払い、周りも綺麗にする。

「こんにちは」

リオとコロナが挨拶した後――。

「はじめましてアインハルトちゃん」

なのはママがアインハルトさんに自己紹介をしていた。  
考えてみれば、これが初対面なんだよね。

フェイトママとフィルさんは会ったことがあるけど――。

「ヴィヴィオの母です。娘がいつもお世話になってます」

「いえ……。あのこちらこそ……」

「格闘技が強いんだよね？ 凄いねえ」

「は、はい……」

ママがいつもの押しで、アインハルトさんの手を握って話していた。

「ちよ、ママ!! アインハルトさん物静かな方だから!!」

「えー?」

うちのママ、積極的なのは良いのですが、時々強引なところもありますから、とつても困ってしまいます。

アインハルトさんが、ビックリしてしまっていないかればいいのですが――。

「さて、ここから出発するメンバーは揃ったな」

「そうだね。それじゃ、途中でふたりの家に寄って、そのまま出かけちゃおうか」

「はあ――い!!」

「あ、ヴィヴィオ、着替えを着替え!!」

しまった。

そのことをすっかり忘れていた!!

「クリス、手伝って!!」

わたしは急いで部屋に戻って、服を着替えに行った。

「賑やかになりそうですねー」

「ああ」

「ノーヴェさん、そういえばスバルさんたちは別行動なんですか?」

「スバルは次元港で待ち合わせ。ちようど仕事終えてるころじゃねーかな」

\* \* \*

同 特別救助隊オフィス



「それでは司令!!」

「スバル・ナカジマ防災士長。本日只今より、4日間の訓練休暇に入ります!!」

「おう、頑張つてこいや。今回の訓練は例の執務官殿二人と一緒にだったか?」

「はい。ランスター執務官とグリード執務官と一緒に、色々鍛え直してきます!!」

久しぶりのファイルとの訓練。

ファイルはこの訓練次第で、また執務官に復帰するかを考えるらしい。

あたし個人としたら、これ以上無茶はして欲しくはないんだけどね。

\* \* \*

本局 次元航行部第3オフィス

「オフトレとはいえ、本格的な戦闘訓練はちよつと久しぶりよね」

「気合い入れなきや!! ヴィヴィオやアインハルト達にダメなところは見せられないし

!!」

《Yes master》

それに、ファイルも今回の訓練は参加する。

本当なら、もう少し休んでいて欲しかったけど、でも、今までよく休んでくれたという方が正しいわね。

だから、あたしもファイルに負けないように、仕事でフェイトさん以上のパートナーになれるように頑張らなきゃね。

「でも、その前にこのデータ整理を終わらせなきゃ!!」

《Let's work hard (がんばりましょう)》

\* \* \*

無人世界カルナージ アルピーノ家

「じゃ、それで人数確定ね」

『はい。すみません、メガーヌさん。4日間お世話になります』

事前にファイルから聞いていたので、準備の方は万全にしてある。

一人二人増えたところで、どうってことはない。

「いいえ♪ じゃ待つてるわね」

さてと、これから大忙しになるわね。

ルーテシアも、このためにロッジの改装や温泉設備の増築、訓練場の新築を張り切ってしていたものね。

訓練場の新築は、時々ファイルに聞いていたりしていたけど、その他はあの子が全部やったんですものね。

元六課の皆さん、そしてファイル。

アルピーノ家のおもてなし、存分に楽しんでくださいね!!

\* \* \*

「さて、サンダー出発するぞ」  
《了解です》

ワゴン車は7人乗りなのだが、一人分のスペースは荷物置き場になるため、俺は自分のバイク『ロードサンダー』で空港に行くことになった。

そしてエンジンをかけようとしたが――。

キュルルルルル

「あれ？ かからないぞ?」

もう一度キーを回して試してみたが、結果は同じだった。

一体どういう事だ?

昨日もちゃんと整備して、準備万端にしたはずなのに?

《どうやら、電気系統の故障のようですね。数十分あれば直りますが、今からですと時間がありませんね》

サンダーに自己診断プログラムでチェック入れてもらったら、ヒューズが切れていて、交換するにはちよつと時間が足りない。

「しかたがない。俺はみんながカルナージに着いてから、ワープで合流するか？」

さすがに荷物置き場の所をどかすわけにはいかないし、もう一台車を出すのは効率が悪いしな。

そう思っていたら――。

「あの……。どうしたんですか？」

コロナが車から降りてきて、こっちにやってきた。

「ああ、コロナ。ちよつとサンダーの調子が悪くてな……」

「そうですか……」

\* \* \*

ファイルさんがバイクを弄っていて、中々エンジンがかからないのに気づいて来てみたら、そんなことになっていたんだ。

「こうなったら……俺は後で出発するしかないな」

「えっ……?」

そんな――。

せつかくの旅行なのに、ファイルさんだけ後で一人で来るなんて――。  
何か良い方法は……?」

「あ、あの……。ファイルさんが良かったら、わたしの席に座りませんか?」  
「だけど、それじゃコロナは……?」

「ですから……その……」

「?」

恥ずかしいよ……。

でも、これしかフィルさんと一緒に出かけられないから、ファイトだよ、わたし!!

「フィルさんの……ひ、ひぎに……座らせて……もらえ……ませんか……」

きつと今顔は真っ赤になっているよ。

フィルさんも、いきなり何を言ってるんだと思うよね。

「……良いよ。っていうか、俺の膝で良いのか？ 何なら効率が悪いけど、車は出すから」

「良いんです!! みんなで一緒に行った方が楽しいですし、それに……」

「フィルさんだけ、一人だなんて……嫌ですから」

「コロナ……」

一人でも大丈夫だなんて、そんなこと絶対がない!!

フィルさんは、一人でも行ける手段はいくらでもあると思う。

だけど、フィルさんだけ一人にするなんて、わたしは嫌だから――。

「……それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうよ。コロナ」  
「はっ♪」

結局、ワゴン車についたわたしとフィルさんは、途中までフィルさんの膝に座ってフィルさんと一緒に楽しい会話をしていたんだけど、リオとヴィヴィオの『いいないな』の視線に負けてしまい、交代で座ることになりました。

フィルさんは、誰の時でも笑顔で対応してくれて、一緒にいるときは本当に楽しかった。

リオもヴィヴィオも、本当に心から笑っていて、ワゴン車内は笑い声で溢れていた。

やっぱり旅は、こうやってみんなで楽しまなきや!!

\* \* \*

同時刻 グリッド家



《どうやら、相棒は行ったようですね……》

本当は故障なんてしてはいない。

相棒が念入りにチェックを入れて、私も自己解析でやっているんですから——。

《たまには相棒はみんなと一緒に行って、輪の中で楽しんだ方が良いんです。いつも裏方ばかりしてるんですから……》

コロナさんが来るのは予想外でしたけど、ああやって相棒のことを見てくれたのほとても嬉しかったです。

少女ながら、本当に優しい心の持ち主なんだと思います。

《いつかあの子達が、免許を取ったら、私を運転させてあげたいですね……》

普通のバイクに乗せるより、私がバイクのすばらしさを。たつぷりと教え込みますよ。

そして、みんなでツーリングとかもしてみたいです。

相棒、みなさん、良い休暇を!!

# Memory ; 09 少しだけ、一緒に歩けたら

無人世界カルナージは、首都クラナガンから臨行次元船で約4時間。  
標準時差は7時間。

一年を通して温暖な大自然の恵み、豊かな世界。

その世界に住むアルピーノ親子の所に、今回お世話になることになった。

「みんな、いらつしや〜い♪」

「こんにちはー」

「お世話になりまーすっ」

「すみません、こんな大勢で……」

本当なら、女性ばかりのメンバーだから、俺は抜けても良かったんだけど、それをヴィ  
ヴィ才達に言ったら、えらい剣幕で怒られたからな……。

「みんなできてくれて嬉しいわー。食事もいっぱい用意したから、ゆっくりしていいね。特にファイル」

「あつ、はい？」

「この4日間は、仕事のことは忘れなさい。せつかくのお休みなんですからね」  
「そう……ですね」

「……最近、こんな風に休めるときがなかったからな。」

「……ここはメガーヌさんのお言葉に甘えましょう。」

\* \* \*

「ルーちゃん!!」

「ルールー!! 久しぶり〜!!」

「うん、コロナ、ヴィヴィオ。そういえば、リオは直接会うのは初めてだね」

「今までモニターだったもんね」

リオとは通信では何度もやりとりをしていたけど、こうして合うのは初なんだよね。

「うん、モニターで見るより可愛い」

「ほんとー?」

私はリオの頭を撫でてあげると、照れながらも可愛い笑顔で応えてくれた。

コロナもそうだけど、本当に素直で可愛いんだよね♪

「あ、ルールー!! こちらがメールでも話した……」

「アインハルト・ストラトスです」

ヴィヴィオが紹介してくれたのは、碧銀の女の子。

この子が、ヴィヴィオが話していた女の子ね。

確かに物静かな女の子って感じかな——。

「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィオの友達で14歳」

「ルーちゃん、歴史とか詳しいんですよ」

「えっへん」

といつても、無限書庫で司書のバイトをやっているフィルさんには敵わないんだけどね。

でも、普通の人よりはいつぱい知っているんだよ。

「あれ、エリオとキャラはまだ来ていないんだ？」

「ああ、ふたりは今ねえ」

スバルさんが二人のことを探していると――。

「こんにちは!!」

「おつかれさまでーすっ!!」

『エリオ、キャラ♪』

実は、みんなより数時間前に着いていて、少しだけお手伝いをしてもらっていた。

最初は断っていたんだけど、エリオが「ルーにだけ、負担をかけたくないから」と言うてくれて、そのお言葉に甘えて薪割りをお願いをした。

キャロもエリオだけにさせるのは悪いと言って、エリオの手伝いをしてくれていた。本当なら、お客さんなんだから、そんなに気を遣わないで欲しいな。

「わーお!! エリオまた背伸びてる!!」

「そ、そうですか?」

「わたしもちよつと伸びましたよ!」

この数年、エリオは本当に大きくなっている。

六課時代なんて、今のキャロくらいだったのにね。今は、私と殆ど同じくらいだけど、あと2〜3年もすれば、背丈はフィルさんくらいになっていくんだろうな。

親友が格好良くなるのは嬉しいしね♪

そして、そんなエリオ達を、フェイトさんがアインハルトに紹介していた。

「アインハルト、紹介するね」

「あ、はい」

「ふたりとも私の家族で……」

「エリオ・モンディアルです」

「キャラ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

こうして二人が一緒にいると、本当に仲の良い兄妹って感じなんだよね。

「二人ちびっこがいるけど、3人で同じ年」

「なんですと!?! 1. 5 cmも伸びたのに!!」

「あ、あはは……」

エリオが私の言葉に苦笑いしてる。

しょうがないでしょう。キャラって、本当におもしろい反応を見せてくれるんだから、これだからかうなつてのは無理でしょう。

フィルさんは、こういった人の事を馬鹿にする言葉は大嫌いなんだけど、私が本気で言っていないって事は分かってるから、それを止めたりはしない。

キャラもこの数年、私とのやりとりで大分揉まれたので、このくらいのことですぐ凹んだりはしなくなつた。

「ど、どうも、アインハルト・ストラトスです」



「うん」

「よろしくね、アインハルト」

現にキヤロはもう立ち直って、アインハルトと自己紹介をしあっていた。

そろそろ、魚を捕りに行ったガリユーが戻ってきてても良いんだけど――。

そう思っていたら、草をかき分ける音がして、そつちを見ると、ガリユーが魚を捕ってかえってきたみたい。

「!？」

ガリユーを見て、アインハルトが、ファイティングポーズを取って、身構えてしまっている。

「あー!! アインハルトさんごめんなさい!! 大丈夫です!!」

「あの子は……」

あつ、しまった!!

コロナ達は知っていたけど、アインハルトはガリユーのことは知らなかったんだ。だから、さつきガリユーを見て構えてしまったんだ。

「ごめんね。ちゃんと紹介しておくね。私の召喚獣で大切な家族。ガリユーって言うの」

私の声でガリユーは頭を下げて、挨拶をする。

「し、失礼しました」

「わたしも最初はびっくりしました」

コロナも最初ガリユーを見たときは、ビックリしていたからね。

ああなつちやうのはしようがないかな。

でも、セイクリッド・ハートがファイティングポーズを取っても、全然こわくも何ともないから、可愛いとしかいえないんだよね。

\* \* \*

「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ。子供達はどこに遊びに行く？」  
「やっぱり、まずは川遊びかなと、お嬢も来るだろ？」

「うん!!」

「アインハルトもこっちに来いな」

「えつと……」

アインハルトがこっちを見て、どうしようか迷っている。

正直言つて、なのはさん達と一緒にのトレーニングは、まだアインハルトには向いていないと思う。

「今回はノーヴェ達と一緒にいってきな。ヴィヴィオ達も喜ぶしな」

「はい……」

「あれ？ フィル。あんたはこっちのトレーニングに参加しないの？」

ティアは、俺がトレーニングに参加する物だと思っていたから、驚いて、こっちに訊

いてきた。

「ああ、とりあえず午前中はメガーヌさんと一緒にお昼の支度をして、午後の訓練から参加させてもらうよ」

「本当に大丈夫？　午後の訓練かなりハードになるから、身体ならしておいた方が良いでしょう」

フェイトが心配して言うてくれるのはありがたいのだが、なにせこれだけの人数の食事を用意するのに、メガーヌさん一人にさせるのは大変だからな。

「大丈夫、それまでにはちゃんと慣らしをしておくよ」

「そっか……」

正直、あのメンバーを相手に、いきなりやるのはきついかもしれないけど、俺だってこの半年間何もしなかった訳じゃない。

フェイトやティアに隠れて、自己鍛錬はしてきているんだ。

後は実践感覚を取り戻すだけだ――。

「じゃ、お昼はフィルとメガーヌさんに任せて、わたし達は着替えてアスレチック前に集合しよう!!」

「「「「はいっ!!」」」」

「こつちも水着に着替えて、ロッジ裏に集合!!」

「「「「は————いっ!!」」」」

こうして、なのはさん達はトレーニングに、ノーヴェ達は川に遊びに行くことになり、残った俺とメガーヌさんは、ロッジでお昼の支度をする事になった。

\* \* \*

「でも、本当によかったの? みんなと一緒に行かなくて?」

今俺たちは、昼ご飯のバーベキューとカレーを用意している。

野菜を切る作業はそんなでもないけど、さすがにこれだけの人数のカレーを用意するとなると、結構力作業になるからな。

「これで俺までどつちかに行ったら、メガーヌさんの負担がきついですよ」

俺が今、みんなのために出来ることといったら、これくらいしかない。

元々俺はサポートを特化する人間だ。

だから、こうしてみんなが楽しんでくれれば、それが何より嬉しいから――。

「やっぱり……優しいわねファイル。こうやって、心配してくれるのは嬉しいけど、あなたも楽しんでもらわなくちゃ、何の意味もないのよ。だから……」

メガーヌさんは、俺の肩に手を置き、そして――。

「後のことは心配しないで、ファイルもヴィヴィオ達の所に行つてあげて。トレーニングは、後でも出来るけど、あの子達と一緒にいてあげられる時間は、とつても少ないんだからね」

「メガーヌさん……」

「ささ、分かったら、さっさと合流してあげなさい!!」

そうだな——。

せつかく、こうやってみんなと一緒に来ているんだもんな。

たまには、羽を伸ばすのもいいかな——。

「……………分かりました。それではお言葉に甘えさせてもらいます」

「よろしい♪」

「じゃ、ガリユー。カレーの仕込みは任せるぞ。後は時間まで焦がさないようにして  
てくれればいいから……………」

ガリユーは俺と交代して、大鍋をかき回して、焦がさないように丁寧作業をする。

これは普段からガリユーも炊事をしているな。手つきを見ていればそれは分かる。

「さてと、水着を持って行かないとな……………」

俺は自分の部屋に戻り、水着を持ってヴィヴィオ達がいる川沿いに向かうことに  
した。

\* \* \*

「おや、水切りをしてるのか？」

「フィルさん!?! どうしてここに!?!」

「……あ、あはは、メガーヌさんに、アシスタント失格と言われてな」

フィルさんが、おちやらけてこんなことを言ってるけど、絶対にあり得ない!!

フィルさんが失格なんて言われるなら、大抵の人が失格と言われるよ。

以前、フィルさんが私達の所に来てくれて、いろんな事を手伝ってくれたけど、殆どフィルさんがしてくれて、私やママはほんの少し手伝ったくらいだもん。

「ルーテシアは、もう泳がないのか？」

「ちよつとだけ、休憩してます。あとでまた泳ぎますよ」

「そっか……」

でも、フィルさんがこっちに来てくれたのは嬉しいかな。



キャラ達がなのはさん達と一緒に、トレーニングに行っちゃったから、ちよつと寂しかったんだよね。

「そっか。それじゃ私達と一緒に遊びましょう♪ フィルさんも、これだけの美少女達に囲まれて嬉しいでしょう♪」

「……ノーコメント」

「ふふつ、言わなくても顔を見れば十分ですよ♪」

フィルさんって、本当に女の子には弱いと思う。

正確に言えば、心を許している人たちに弱いと言った方が良いかな。

別に普通に女性を見ていても、何の反応もないけど、ティアナさんや私達みたいに、フィルさんのカテゴリーにいる人たちには、本当に弱い。

ちよつとからかうだけで照れて、初心な反応をしてしまう。

それは、年齢とか関係ない。私はフィルさんを5つ以上離れているけど、それでも女性として反応してくれる。

もし、フェイトさんと結婚してなかったら、フィルさんに積極的にアタックしたんだろうな——。

「じゃ、せっかくだから、一緒に泳ぐか？」

「いいですよ。たまには大人の男性と一緒にいるのも楽しいですから♪」

フェイトさんには悪いけど、今のこの時間だけは、フィルさんと一緒に楽しもう。

ヴィヴィオやコロナ達は、水切りの練習で夢中になってるし、私もちよつとだけいいかな。

私の初恋の人と一緒に楽しむ時間をね♪

\* \* \*

「アインハルトちゃん、楽しんでくれてるかな？」

「ヴィヴィオ達も一緒ですし、きつと大丈夫です」

多分、ノーヴェがその辺は上手くやってくれると思う。

あの子は、ああ見えても、その辺の気配りはとつても上手いから。

「それにしても、ティアナ。本当に体力が付いたよね。わたしやスバルについてきて、息切れしていないんだから」

「大分、鍛えましたから……。あの時から……。ずっと……」

「……そう……。だったね」

ティアナは、ゆりかご以来、本当にレベルアップしてきていた。あの時の後悔は、今でもティアナの胸の中でずっと残っている。ファイルをあんな風にさせてしまったことを――。

「ところで、みんな大丈夫？」

わたしは頂上から、残ったメンバーに声をかけると――。

「大丈夫だよ」

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……」

フェイトちゃんは、息を整えて余裕があるけど、エリオとキャロがちよつといっぱい  
いっぱいかな。

これはもうちよつと鍛え直す必要があるかも。

\* \* \*

「エリオ、キャロ、ほら、もう少しだよ。頑張ろう」

「は、はい……はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……フェイトさん、どうしてそんなに余裕なんですか……」

「……私も、それなりに鍛え直したからね……」

あの日――。

ファイルが倒れ、病院に搬送され、変わり果てたファイルの姿を見て、自分の無力さと絶  
望を痛感した。

私やはやてが一緒だから、絶対に大丈夫だと思っていた。

だけど、その考えは甘すぎた。

自分の大切な人のためなら、自分の身は二の次にしてしまうファイル。

だからこそ、私の危機にその身を擲って助けようとした。  
あの時、もっと私に体力があればあんな事にはならなかったかもしれない——。  
だから、二度と後悔しないように、私自身もう一度鍛錬をし直した。  
体力がないなんて言い訳をしないために——。

そして——。

フィルの背中を私の手で守るために——。

\* \* \*

「さ、お昼ですよー!! みんな集合——♪」

「「はーいつ!!」」

「おかえりー。みんな遊んできた?」

「もーバツチリ!!」

どうやら、みんなちゃんと楽しんできたみたいだな。

こっちはルーテシアと一緒にだったから、ヴィヴィオ達のことをそこまで見ていなかったけど、ノーヴェエがしつかりと見ていてくれたから心配はしていない。

「体冷やさないように、暖かいものも用意したからな。沢山食べてくれよ」

「ありがとうございます!!」

「あらあら、ヴィヴィオちゃん、アインハルトちゃん、大丈夫?」

「いえ……あの」

「だ、だいじょうぶ……です」

体をふるふるさせながらも、説得力が全くないぞ。

一体何をしていたんだ?

「こいつら、二人で水切り練習をずーっとやってたんですよ」

「あらー」

「やれやれ……」

数時間も全身の筋肉を使う水切りをしていたんじゃない、こうなるのも当たり前だよな。

負けず嫌いの二人のことだ。出来るまでずっとやっていたんだな――。

「はい、おまたせー!!」

「わ――!!」

スバルがコロナ達の所に、焼きたてのバーベキューをいっぱい置くと、二人とも目を輝かせていた。

やっぱり、これだけの物が来たら、誰でもこうなるな。

「じゃあ、今日の良き日に感謝を込めて」

『いただきます!!』

みんなでいただきますの声を言い、楽しい昼ご飯のはじまりだ。

「おお――いし――いっ!!」

「ほんと……!! いいですね。これ!!」

「えっへん。自慢のソースです♪」

「確かに美味しいよな。これ」

俺も料理を作る身として、美味しい料理は出来るだけ覚えたい。  
アルピーノ家の味付けは、かなりの物だ。

「えへへ、フィルさんにそう言ってもらえて良かったです。結構苦労したんですよ」  
「本当にこれは良い味付けだ。ルーテシア、これなら彼氏が出来たら、ハートも、胃袋も  
しっかり捉えておけるな」  
「えっへん♪」

ルーテシアはこの数年、本当に頑張っている。  
こいつの彼氏になる人は幸せになると思う。

\* \* \*

『ちそうさまでしたー!!』



昼ご飯も終わり、わたし達は後片付けをしていた。

みんな、それぞれ別れて、わたしとアインハルトさんは皿洗いをしている。

「ヴィヴィオさん達は、いつもあんな風に、ノーヴェさんからご教授を？」

「あ、そんなに『いつも』でもないんですが……。わたしは最初スバルさんに、格闘の基礎だけを教わったんです。それから、独学で頑張っていたら、ノーヴェが声をかけてくれて……」

あの時、ノーヴェに『そんなんじや体壊すぞ』と指摘を受けて、その時から、ノーヴェが時間を作っては、色々教えてくれた。

そして、フィルさんにも練習しているところを見られてしまい、ノーヴェとフィルさんが交互に教えてくれるようになった。

「なんだかんだで、ノーヴェもフィルさんも、コロナとリオのことを見てくれるようになって、本当に優しいんです。二人とも……」

「——わかります。少し羨ましいです。私は……」

「私は……ずっと、独学でしたから」

「あつ……」

そうだった。

この人は、今までずっと一人で霸王流を学んできたんだ。

悲しい過去と一緒に――。

「でも、これからはもう、ひとりじゃないですよね？」

「あ……その、流派とかはあくまで別にしてですよ!？」

「いえ、あの、大丈夫です、わかります」

古流武術（カイザーアーツ）と近代格闘術（ストライクアーツ）

同じ道はたどれないかもしれない――。

だけど、時々こんな風に――。

少しだけ一緒に、歩いていけたらと思うから――。

## Memory ; 10 望んだ強さ

「ベルカの歴史に名を残した、武勇の人にして初代の霸王。クラウス・G・S・イングヴァルト。彼の回顧録。もちろん、現物じゃなくて、後世の写本だけだね」

わたしとリオは、ルーちゃんに古代ベルカの写本、霸王のことが書かれている本を見せてもらっていた。

この本には、アインハルトさんの前世である、イングヴァルトのことが書かれている。

「ルーちゃん。アインハルトさんの事は……？」

「ノーヴェとフィルさんから、大体聞いているよ。霸王家直系の子孫で、初代霸王の記憶を伝承してるって……」

\* \* \*

「記憶といっても、霸王の一生分全てというわけではないんですが、途切れ途切れの記憶をつなぎ合わせれば、彼の生涯を自分の記憶として思い出せます」

「彼にとつての思いでは、そのまま私の思い出なんです。乱世のベルカは、悲しい時代でしたから……」

雲に覆われた薄暗い空と枯れ果てた大地――。

人々の血が河のように流れても、終わらない戦乱の時代――。

誰もが苦しんで乱世を終わらせたいと願いながら――。

だけど、そのためには力を持って戦うしかなかった時代――。

「そんな時代に生きた覇王としての、短い生涯の記憶とそして……」

たくさん心の残りを――。

「すみません。せつかくの旅行中に暗い話で」

「いえ、そんな!!」

「その、もちろん、悲しいことばかりでもなかったんですよ」

楽しい記憶、幸せな記憶も、ちゃんと私の中に受け付けているから——。

「たとえば、オリヴィエ聖王女殿下との日々とか……」

「オリヴィエって、クラウス陛下と仲良しだったんですか？」

「仲良しというのは、少し違うような気がしますね……」

どちらかといえば、同じ武を歩む同士といった方が正しいかもしれません。

私の中にある記憶も、そういった感じですから——。

\* \* \*

「オリヴィエ・セーゲブレヒト——。聖王家の王女にして、後の『最後のゆりかごの聖王』」

「クラウスとオリヴィエの関係は、歴史研究でも諸説あるんだよね」

「そもそも生きた時代が違うって説が主だよ」

「うん……。でも、この本ではふたりは姉弟みたいに育ったってなってる」

こればかりは、その時代に生きてた訳じゃないから、本当に正しいかは分からないんだけどね。

「オリヴィエって確か、ヴィヴィオの……複製母体（オリジナル）だね」

「まあ肖像画とか見る限りあんまり似てないし、普通に『ヴィヴィオのご先祖様』で良いと思うけど」

「だよね!!」

それにクローンとか、そんなのは今必死で生きているあの子には関係ない。

あくまでオリヴィエはオリヴィエなんだし、ヴィヴィオはヴィヴィオだから――

「でも、なんで聖王家の王女様と、シウトウラの王子様が仲良しだったんだろうね？」  
「あ、そういうば」

コロナの疑問はもつともだ。

そのことも、一部分だけど、この本に記されているみたいね。

「オリヴィエがシュトウラに留学って体裁だったみたい。シュトウラと聖王家は国交があつたしね。ただ、オリヴィエはゆりかご生まれの正統王女とはいえ、継承権は低かつたみたいだから……」

「要は人質交換だったんじゃないかな」

「戦国時代の人質って、アレだよな？ 歴史小説にも良く出てくる……」

「裏切ったら人質を処刑しちゃいますって……」

でも、この本を見る限りだと、そんなことは関係なかったみたいね。

この本の途中は、オリヴィエ殿下とのことばかり書かれているし——。

\* \* \*

「オリヴィエってどんな人だったんでしょうか……？」

「私が知る記憶では、太陽のように明るくて、花のように可憐で、何より……魔導と武術が強い方でした」

「ただ、そんな彼女も乱世の最中に命を落とされました」

「ゆりかごの運命通りに……ですよね」

そう――。

霸王は……。クラウドはその運命を止めることが出来なかった。

「皮肉な話ですが、彼女を失って、彼は強くなりました。全てを擲って、武の道に打ち込み、一騎当千の力を手に入れて……」

「それでも、望んだ物は手に入らないまま、彼も短い生涯を終えました」

「望んだもの……?」

「本当の強さです」

守るべきものを守れない悲しみを、もう繰り返さない強さ。

大切な人を守れなかった悲しさ――。



「彼が作り上げ、磨き続けた霸王流は、弱くなんかないと証明すること」

それが、私が受け継いだ悲願だから――。

\* \* \*

「……似ているんですね。クラウドも……フィルさんも……」

「えっ……?」

「フィルさんも……昔は全然強くなかったって聞いています。だけど……」

未来で、なのはママやフェイトママ、スバルさん達を失って、敵討ちをするために強さを身につけた。

わたしがストライクアーツを学ぶときに、フィルさんが昔話を混ぜて、強さの本当の意味を教えてくださいました。

その時、初めて本当の意味で、フィルさんのことを知ることが出来た。

フィルさんは、色んな人の悲しみを背負っていることも――。

\* \* \*

「それでも、目的のために、それこそ血のにじむ思いで強くなったって聞いています……」

「あの人が……ですか？」

「……はい」

正直、私はまだフィルさんのことはあまり知らない。

だけど、ティアナさんもノーヴェさんも、そしてヴィヴィオさん達も、あの人のことを悪く言う人がいない。

「良かったら、フィルさんの訓練の様子……見に行きませんか？ 言葉より、実際見てもらった方が……分かると思いますから……」

「——はい」

そして、私達はトレーニング場に向かうことになった。

そこで私は、信じられない物を見ることになるとは、このときは全く考えもしなかった。途中で、ノーヴェさんと合流した私達は、一緒にトレーニング場に向かっていった。

「えっ？ ヴィヴィオさんのお母様も模擬戦に……？」

「はい!! ガンガンやってますよー!!」

「お二人とも家庭的で、ほのぼのとしたお母様で、素敵だと思ったんですが……。魔法戦にも参加されてるなんて少し驚きました」

「えっと、参加というかですね。うちのママ、航空武装隊の戦技教導官なんですよ」

\* \* \*

《Sacred cluster》

「拡散攻撃（クラスター）来るよティア、フィル!!」

「オーライ!! コンビネーションカウンター行くわよ!!」

「了解!!」

あたしはなのはさんの拡散攻撃に合わせ、シユートバレットで対応する。  
このくらいの数だったら、ガンモードで十分対処できる。

「おおおおおおおっ!!」

すかさずスバルが、ウイングロードでなのはさんの正面に出て、そのまま迎撃をする。  
なのはさんにそれを読まれ、レイジングハートで止められたけど、それがあたし達の  
狙い!!

「っ!!」

ファイルが高速移動で背後に回り、スバルがなのはさんの相手をしている内に仕留める  
!! これが本命よ!!

「くっ!!」

ファイルがプリムのセイバーモードで上段から振り下ろし、なのはさんの背中を切りつ

ける。

だけど、なのはさんも自動防御でフィルの攻撃を間一髪で防ぐ。

「ちいい……。やっぱりダメか……」

現役のフィルだったら、間違えなく捉えていたタイミング。

やっぱり、ずっと戦っていかなかったせいで、ソニックムーヴにほんの少しだけタイムロスがあつて、それをなのはさんに読まれてしまったんだ。

「ふう……。あぶなかった……」

「どこがですか。完全にこっちの動きを読んでいたくせに……」

「にやはは〜」

でも、ちよつとおかしいのよね……。

確かに現役を離れていたというのものもあるけど、なんか今のあいつの動きは、制限をかけているって感じなのよね……。

まるで、自分でリミットをかけているみたいなの——。

「スバル、とりあえず一旦退くぞ。態勢の立て直しだ!!」  
「うん!!」

ファイルとスバルが、なのはさんから距離を取って、陣形を整える。

スバルは、なのはさんの空域ギリギリで待機して、ファイルは一旦あたしの所に戻ってきた。

「すまん。やっぱりダメだった」

「仕方がないわよ。今日が久し振りの実戦ですもの。でも……」

「な、何だよ!？」

あたしはファイルの瞳をじつと見て、問いただす。

「ファイル、あんた……。なんか制限をかけてるでしょう」

「な、何のことだ……」

「とぼけないで。あたしには分かったわよ。あの動き、いくら久し振りだからといって、

あんなに制限がかかった動きになるはず無いでしょう!!」

普通にブランクがあるだけなら、ある程度動けば勘を取り戻し、普段通りになる。ましてファイルは、執務官を休職していたとはいえ、トレーニングは欠かさなかった。だから、実戦感が戻れば、昔のファイルに戻るはずだ。

だけど、今の動きは、明らかにおかしい。

体術も魔力も、何かに押さえつけられているって感じだった。

ソニックムーヴで何とか背後に回れたけど、それでもタイムロスが大きすぎる。

「……正解。今の俺は、リミッターを付けてる。魔力と体力を鍛えるためにな……」

そう言って見せてくれたのは、魔力鍛錬用のリストバンドと上着。

これは特殊な素材で出来ていて、重みも平均男性の約半分くらいある上着を着ている。

だから、動きも抑制されて、キレがなかったんだ。

「つたく……。その状態でよくなのはさんと戦っていたわよね」

リミッターを付けて、全力じゃないとはいえ、制限がないのはさんと戦おうなんて無茶にもほどがある。

模擬戦とはいえ、オーバースクラスの魔導師相手に何考えてるのよ!!

「とはいえ、さすがに明日はこのままじゃまずいよな……」

「……当たり前でしょう。明日はちゃんとリミッターを外しなさいよね……」

「分かっている。でも、出来るだけギリギリまで鍛えたいんだ。模擬戦とはいえ、戦闘はトレーニングの何倍の効果があるからな」

「……フェイトさんには内緒にしてあげるから……無理だけはするんじゃないわよ……」

ファイルも、現役復帰のためにこの半年間必死で特訓をしてきた。

その甲斐があつて、実はさつきまでリミッターを付けていることに気づかないほどだった。

でも、それは、それだけ過酷なりハビリと訓練をしてきたという証拠でもあるんだ。

あいつが今、どれだけの力を身につけたかは予想は出来ないけど、あたしだって力を



付けたんだ。

あのお人好しの背中を、守ってあげるためにね——。

\* \* \*

「すごい……」

私はさつきから、フィールさん達の模擬戦を見て驚きを隠せなかった。

魔力戦の迫力もそうだけど、何よりフィールさんのあの動き——。

冷静に局面を見て、すぐさまヴィヴィオさんのお母様に攻撃を仕掛けている。

これが本当に、昔は弱かった人なんだろうか——。

そして、横を見ると、今度はアルザスの飛竜が、エリオさんとキャロさんを乗せて飛んでいた。

「えへへ、キャロさんは竜召喚師なんです」

「エリオさんは竜騎士!!」

「で、フェイトママは空戦魔導師で、フィルさんと同じく執務官をやってるんです」

そして、フィルさんの奥さんのフェイトさん。

あの人も普段は優しい雰囲気を持っているのに、戦闘になると顔つきも変わって戦う人の顔になっていた。

もつと、見てみたい——。

だけど、無情にも終了のアラームが鳴らされる。

「はい、一旦終了〜」

「「ありがとうございます!!」」

「3人はこの後、ウォールアクトやるんだっけ?」

「はいっ」

「フェイトさんとエリオも一緒です」

そう言つてティアアナさんとスバルさんは、フェイトさんとエリオさんを誘つて、また別の訓練を始めた。

そしてフィルさんは——。

「それじゃ、なのはさん、キャロ一緒にしましょうか？」

「うん」

「お願いしまーすっ!!」

なのはさんとキャロさんと一緒にシュートコントロールの訓練を始めた。

しかし、只のシュートコントロールじゃない。

制御する魔力弾の数が半端じゃない。

「こうしてみますと、みなさんずっと、動きっぱなしですね」

「そうだな」

魔法訓練も凄いけど、あんなフィジカルトレーニングまでやっている。

それに――。

ファイルさんはさつきから、魔力弾の数を徐々に増やしだして、今ではなのはさんと同じくらいの数を制御している。

「局の魔導師の方たちは……皆さんここまで、鍛えていらっしやるんでしょうか」

「ま……まあな。スバルは救助隊だし、ティアナは凶悪犯罪担当の執務官。フィルだつて、今でこそ現役を離れてるけど、ティアナと同じ執務官だ」

「他のみんなも頻度の差はあつても、みんな命の現場で働いてるわけだしな。力が足りなきや救えねーし、自分の命だつて守らなきやならねえ」

「ノーヴェさんも、救助訓練はガツツリやつてますもんねー」

「ま、まあ……な……」

体がうずく――。

これだけの見ちやうと、今すぐ体を動かしたい――。

そう思っていたら、ヴィヴィオさんから肩をつんつんとされる。

「アインハルトさん、見学抜けますか？」

「あ、ええと……」

ヴィヴィオさんのお誘いは、とてもありがたい。

だけど、私の我が儘だけで、ヴィヴィオさんに気を遣わせるのは申し訳ない。

「こういうのを見ちゃうと、体動かしたくなくなりますよね。ですから、良ければ向こうで軽く一本!!」

「はい……是非」

私とヴィヴィオさんは、ノーヴェさん達に一言言つて、森の中で体を動かすことにした。

\* \* \*

「ヴィヴィオとアインハルトさんもやる気モードになっちゃったねえ」

「あたしたちも頑張らないとだー!!」

なんかみんな燃えてるよね。

これはわたしも、リオやヴィヴィオに負けてられないよ!!

新たに決意をしていると、ルーちゃんから声をかけられて――。

「そうそう、実はねコロナ。内緒にしてたけど、例のアレもう完成してるんだ」  
「ほんと!?!」

アレが完成してたんだ。

ルーちゃんが作ってくれたアレが――。

「ほんと、あとはコロナが起動調整するだけ」

「アレってもしかして……!?!」

「ルーちゃんお手製のわたしのインテリジェントデバイス!!」

「えっへん!! コロナ専用のカツコカワイイやつだよ!!」と言っても、今回はデザイン以外は、ファイルさんが基礎設計から見直して、かなり高性能になってるよ!!」

「えっ……?」

そんな話は、全く聞いていない。

ファイルさんはそんなこと一言も言っていなかったのに――。  
すると、ルーちゃんは、ふうと溜息を吐きながら……。

「やっぱり、フィルさんコロナに言っていないなかったんだね。全く……あの人は相変わらず悪戯好きなどころがあるね」

「フィルさんが……?」

「フィルさんが、わたしにデバイスを考えてくれるきっかけになったとしたら——」

もしかして、あの時——。

むかし、フィルさんに魔法のことで相談に乗ってもらったとき、いつかデバイスが欲しいなってポツリと漏らしたのを覚えていてくれたんだ……。

「フィルさん、このデバイスを考えるとき、本当にコロナのことを思っただけで考えてくれたんだ。最初わたしが考えたのとは、別物に仕上がってるよ」

「おいおい、それって完全にオーバースペックじゃないか!」

「確かにノーヴェの言うとおりかもしれないね。でも、フィルさんは、コロナなら、間違った使い方はしないからって、本気で設計してくれたの」

「……フィルさん」

メカニックマイスターのフィルさんが、本気で考えたと言うことは、大人が使うデバイスと全く同じ物に作っているということだ。

以前、フェイトさんから聞いたことだけど、フィルさんは認めた相手じゃなくちゃ、どんな人にもデバイスは考えないって言っていた。

そのフィルさんがわたしのために考えてくれたって事は――。

「わたしも勉強のために、デバイス作成をフィルさんから教わってるけど、今回のアレは本当に凄いなと思うよ」

「……………うん」

フィルさん……………本当にありがとうございます。

フィルさんとルーちゃんが作ってくれたデバイス、絶対に大切にします!!

「これは、あたしにも負けてられないね、ソル!!」

《Aye Rio.》

「よし、あたしも明日の練習では、新魔法とか披露しちゃうもんね!!」

「おお——っっ」



リオも刺激されて、すっごく燃えている。

明日はわたしも、リオやヴィヴィオに負けないように頑張らなきゃね。

何より――。

わたしのために、本気でデバイスを考えてくれたファイルさんとルーちゃんのために――

## Memory; 11 こころ・・・ひとつに・・・

「じゃあ、午後のトレーニングはこれまで!!」

「「お疲れ様でしたー!!」」

「あつ、片付けは俺がやっておくから、お前らは先上がって良いぞ」

夕食まで、まだ時間もあるし、もう少し体を動かしたいしな。

それにティアたちは、ノーヴェたちと一緒に時間を楽しんで欲しいしな。

「じゃあ、私達と一緒に練習する？ 私もなのはも、もう少しやってから上がるつもりだったし」

「……そうだな。それじゃお言葉に甘えさせてもらおうかな」

一人でやっているより、なのはさん達と一緒にの方が良い練習になるしな。

俺はフェイトの言葉に遠慮無く甘えることにした。

\* \* \*

「それにしても、やっぱりずっとやってたんだ」

「あはは、ちよつと気合いが入っちゃって」

「少しだけミット打ちをやるつもりだったんだけど、思いの外気合いが入っちゃって、こんな時間までやっちゃった。」

「アインハルト、近代格闘技のミット打ちも中々面白いだろ？」

「はい……。良い練習になりました」

「キャロさん、ママ達とフィールさんはまだ？」

「少し残って練習の仕上げだって」

「3人で飛んでるんじゃないかな」

ママ達は予想していたけど、フィールさんまで居残ってやっているんだ。

フィールさん、まだ本調子じゃないのに、無理しなきゃいいけど——。

「さて、お楽しみはまだまだこれから!! ホテルアルピーノ名物、天然温泉大浴場にみんなで集合ね!!」

「じゃ、僕はみんなが上がってくるまでに、夕食の支度を手伝っているよ」

ということで、みんな揃って温泉にはいることになりました!!

エリオさんは、ルールーにからかわれて、一緒に入ろっかっていわれていたけど、顔を真っ赤にして全力全開でお断りしていた。

ルールーもエリオさんの性格が分かっているから、あんなことを言ってるのは分かっているんだけど、さすがに一緒にいるのは恥ずかしいよ——。

\* \* \*

「あ〜。すつごい、いい湯加減〜」

「ほんとです〜」

ティアナさんとキャロさんは、早速温泉につかって、のんびりとしている。

ルールーの案内でわたし達は、他の所も案内してもらっていた。

「あつちの岩造りのところが熱くいいお湯ね」

「わーい、熱いの好き〜♪」・

リオは、あつちののが好きなんだけど、わたしとコロナはもうちよつとぬるいのが好きなんだよね。

「で、向こうの滝湯はぬるめだから、のんびり出来るよ」

「滝湯!?!」

ルールーが指差したのは、本格的に作られた滝のオブジェから流れ出てくる大量のお湯。

「新しく作ってみたんだけど、けっこうオシャレじゃない?」

「すごいすごいっ!!」

「あつ、ちよつとぬるめで気持ちいい〜!!」

早速滝湯の湯に手を入れて、湯加減をみると、本当にちょうど良い湯加減でとっても気持ちいい!!

\* \* \*

「ゆっくり楽しんでね。みんなも湯加減どう?」

「もお、サイコ〜」

「まったたく。しかしアレだな……。前来たときよりもパワーアップしてんな」

ノーヴェの言うとおり、あたしが前に来たときよりも、色々と設備が変わっていた。以前は、ここまでお風呂も大きくなかったのに――。

「休職中で、今はママと一緒にだから、いろんな勉強をする時間があつて、その中で一番凝ってるのが建築デザインとか設備設計なんだけど、やってみると本当に楽しんだよね」

「ま、この温泉も、ロッジの改築もお遊びレベルだけど、ちなみにこれ設計図♪」

そうやって、ルーテシアがスクリーンに出したのは、ロッジと温泉の設計図。ちよつと待って。これ明らかに素人が作る物じゃないでしょう!!

「「いやいやいや!!」

このロッジと温泉は、フィルムも絡んでいるから、明らかにお遊びレベルじゃないのは一目で分かる。

全く、ルーテシアもフィルムも本当に凝り性だから――。

「まあ、みんなに評判良いのは嬉しいかな。みんなが泊まりに来てくれて、笑顔になってくれたら凄く嬉しい」

「んなもんめっちゃめっちゃ笑顔だつーの!!」

「ほんとほんと♪」

あたし達が温泉で暖まっていると、突然キャロが立ち上がった――。

「ふえつ!?!」

「キャロ、どうしたの？」

「何かこう、柔らかいものがもにゅつと……」

キャロが辺りをきよろきよろ見わたすが、特に変わったことは見あたらない。そう思っていたら、今度は……。

「ひゃっ!!」

今度は、ティアもビツクリして立ち上がって、キャロと一緒に慌てて温泉から出てきた。

「いる!! 何かいるツツ!!」

「なんだかぬるつと!! ルーちゃん!? 湯船の中で何か飼ってたりしないツツ!」  
「えー? 飼ってないよ」

ルーテシアが、指を顎に当ててそう答える。



「第一、温泉に住むような珍しいペット飼ってるなら、真っ先に紹介してるし」  
（確かにそうだ!!）

でも、ルーテシアも知らないとしたら、一体何が温泉の中にいるの!?

\* \* \*

「なんか、騒がしいね？」

「動物でも出たのかな？」

私がコロナさんと一緒に、騒ぎのあった方に行こうとしたとき――。

「はわわっ!!」

「きやあつ!!」

。 ヴィヴィオさんとコロナさんは、二人とも何かに、おしりを撫でられ、そして――

「~~~~!!」

私も胸とおしりを触られる。

一体誰の仕業か知らないですけど、痴漢行為は絶対許しません!!

私は力の限り、思いっきり拳を振り抜き、目標がけて放った。

すると、水面が割れ、さつきまでいくらやつても出来なかった水切りが出来ていたのだ。

「……あつ」

そっか……。

さつきまでは、拳のスピードを早くしなくてはとおもってやっていた。

だけど、今は力を全身に回して、無駄のない打ち方が出来ていた。

だから、水面が真つ二つに割れたんだ。

\* \* \*

(あービックリした。アレが噂の霸王っ子か)

(しかしセインさんの敵じゃーなかったね)

あたしのIS『ディープダイバー』

この能力は、地面や岩石の中を自由に移動できるだけでなく、無機物ならその内部に潜って進むことが出来る。

それは水中も例外じゃない。

(ふふふ、みんな驚いてるな)

霸王っ子もそうだけど、みんなちゃんと成長してるみたいで、なかなかのさわり心地でしたよ。

って、これじゃあたしは親父かっての!?

「あっ!?!」

「ふえっ？」

「うわっ!!」

よっしやよっしや!!

わはははは!! 残るはあとひと——り!!

(ヴィヴィオの友達の元気っ子!!)

あたしはそつと背後から気づかれないように近づき——。

「がお——つつ!!」

後ろから可愛い胸を鷲掴みにした。

《Emergency. Power—System Set up.》  
「ええっ!?!」

突如、温泉のお湯が紫電と共に、ドオンと大きな音を立てて、あたし達の周りから水柱となっている。

しかも……。

がしっ!!

「いいいっ!?!」

リオが変身していて、あたしの腕をがっちりとつかんでいる。

しかも、放電現象だけでなく、その周りには炎も一緒に纏っていた。

「や——ツ!!」

「ちよ、ちよつと!?!」

「絶招（ぜっしょう） 炎雷砲（えんらいほう）！」

あたしは腹に思いつき蹴りをもらってしまい、そのまま上空高く飛ばされ——

そして――。

ドボ――ン!!

思いつきり温泉に叩きつけられてしまった。

「リオ!!」

「リオ、大丈夫!？」

悪戯したのは悪かったけど、だれか、あたしの心配もちよつとはしてくれても良いんじゃない――。

\* \* \*

「もーダメだよセイン。こういうイタズラは!! みんなが転んでケガでもしたら、笑い事じゃすまなかつたんだし」

「セクハラも犯罪なんだからね」

うっ……。

「私が営業妨害で訴えたら捕まるしね」

うぐっ!!

「まったくこんなのが、あたしより年上かと思うと、涙が出てくるわ」

うぐぐ……っ

「う……う……う……」

「なんだよ〜。ちよつとみんなを楽しませようと思っただけじゃんかよ〜!!」

ケガしないように、ちゃんと気をつけてたっつーの!!

これでも聖王教会のシスターだぞ!!

「あ、あの……」

「おいおい……」

「おまえら楽しそうなのに、あたしだけ差し入れ渡しただけ帰るとか、切なすぎるじゃんかよー!!」

「自慢じゃねーが、あたしはお前らほど精神的に大人じゃーないんだからな!!」

ここうなったら開き直ってやる!!

どうせあたしはみんなみたいに、大人じゃないですよ!!

「えーと、とりあえずセインは、リオちゃんに謝った方が良いと思うよ」

「あ、そうだった」

キャロの言うとおりで、あんなに泣かせてしまつては悪戯が過ぎた。

ちゃんと謝らないと――。

「その、ごめんな。ちよつと調子に乗りすぎた」



「あたしこそごめんさい。思い切りやっちゃって……」

あんな酷いことをしたのに、蹴ったことを謝ってくれる。

やっぱりヴィヴィオの友達は、みんな良い子ばかりだね。

結局、その後、ルーお嬢様からの交換条件として、今夜と明日の朝ご飯を作ることで許してもらえることになった。

「それにしても、リオも『大人モード』が出来るんだ？」

「ヴィヴィオやアインハルトさんのとは、ちよつと方式が違うんですが、一応同系の身体強化魔法です。格闘魔法戦用に自己流で組んでみました」

「「へ———！！」」

「さっきの凄い蹴りだったけど、あれはストライクアーツ？」

確かにあれだけあたしを吹っ飛ばせるって、かなりの強さじゃなくちゃ出来ないよね。

でも、ストライクアーツにしては、ちよつと変則的だったみたいだけど？

「うちの実家の方の格闘技なんです。子供の頃から習ってて」

「へ——」

「変換資質があるの？ 炎と電気が両方出てたけど……」

キャロの言うとおり、あの時、見間違いでなければ、確かに両方出ていた。  
ということとは……。

「一応両方……」

リオがもじもじと、照れながらそう答えてくれた。

『え——!?!』

「それ凄い!!」

こうしてみると、本当にヴィヴィオもコロナもリオも、凄い子ばかりなんだな。

\* \* \*

「リオさんも凄いんですね」

こうしてみると、ヴィヴィオさんも、皆さんも凄い人ばかりです。

「はい、変換資質は知ってましたが、大人モードは初めて見ました」

「リオね、ヴィヴィオとアインハルトさんに触発されて、頑張つて完成させたんだって。本当は、明日の練習会で見せて、びつくりさせる予定だったみたいだけど」

「いや、十分びつくりしたした!!」

「練習会……?」

コロナさんの言葉で、ふと車の中でのことを思い出した。

そうだった。たしか日程表に――。

「そうです。練習会!! オフトレツアー二日目恒例行事!! 大人も子供もみんな交ざつての陸戦試合（エキシビジョン）」

「なに明日の話ー？」

「そー!!」

「あたしは初体験だから、すっごい楽しみ!!」

「前は、本当に凄かったんだよ。八神司令達も一緒だったし、それにフィルさんもまだ執務官現役の頃だったから……」

コロナさんの話によると、前はフィルさんも試合をしていて、奥さんのフェイトさんと一緒に大活躍だったらしい。

「今回はちよつと人数が少ないから、lon1の機会が増えそうだね」

「チーム分けはどうなるのかな？」

「うーん、燃えてきたー!!」

実は、フェイトさんとフィルさん。

この二人のコンビは、一騎当千の戦力になるため、今回はおそらく敵同士になる。

前は開始早々、たった二人で殆ど倒してしまい、試合にならなかつたとのことだ。

「試合で戦うんですか——？ 皆さんやヴィヴィオさんのお母様達と」

「はい!! 二組に分かれてのチームバトルで、相手チームを全滅させるまでの勝負です」

「大人チームは最大出力に制限が付きませんが、それ以外は全力です」

「純粋に戦技と戦術の勝負ですね」

戦える——。

あの凄い人たちと戦える——。

あの人たちに霸王（わたし）の拳は届くのかな——？

いや、違う!!

届かせるんだ——。

どんな相手にだって、私と彼の霸王流（カイザーアーツ）を!!

「組み合わせはまだ分かりませんが、敵チームになっても負けませんよ」

「わたしもです」

「あたしだって!!」

「望むところです」

明日は、絶対に負けたくない。

あの人達に、絶対私の拳を届かせるんだ!!

\* \* \*

「これが、明日の組み合わせ？」

「うん、ノーヴェが作ってくれたの」

「出来たんだな。明日の組み合わせが」

俺たち3人は、クールダウンの後、なのはさんが持っている、明日のチーム戦の割り振りを見ていた。

「綺麗に割り振ってあるねえ。同ポジション同士が接戦になりそう」

「ほんと」

「ああ、でも、エリオにはすまないことをした。人数を合わせるのに、俺の代わりに交代してもらおうことになって……」

実はノーヴェが最後まで、バランスを考えてくれたんだけど、どうやっても、俺が入ることでパワーバランスが崩れてしまい、うまくいかなくなってしまった。

当初は俺が抜ける予定だったんだけど、エリオが、「ファイルさんの復帰戦を見たいので、今回は見学に回りますね」と言ってくれて、エリオのポジションに俺が入ることになった。

本当なら、エリオも戦いたかったはずなのに、本当にすまないことをした。そして最終的にできあがったのは――。

## STEAM RED

CG : ティアナ・ランスタール

GW : フェイト・T・グリード

FA : ノーヴェ・ナカジマ

FA : アインハルト・ストラトス

FB : キャロル・ルシエ

WB : コロナ・ティミル

## STEAM BLUE

CG : 高町なのは

CG : フィル・グリード

FA : スバル・ナカジマ

FA : 高町ヴィヴィオ

FB : ルーテシア・アルピーノ

GW : リオ・ヴェズリー

「フィル、エリオの分もしっかりとしなくちゃね」

「ああ……。フェイト、今回は敵同士だな。だけど、エリオの分もある。全力全開で勝ちにいくからな!!」

「負けないよ、なのは、フィル」

「わたしだって!!」

エリオが、自分から辞退してくれてまで俺を出させてくれたんだ。

みっともない戦いは絶対に出来ない!!



「じゃ、そろそろロッジに戻ろうか。みんな待っていると思うし」

「そうだね。エリオとメガーヌさんが美味しい御飯を作って待ってるし……」

「いや、もう一人いるみたいだぞ」

「？」

「さつき、ティアから念話があつて、セインがイタズラをして、罰として俺たちの食事係になつたらしい……」

さつき、温泉の方から、人影が吹っ飛ばされたのが見えたけど、あれがセインだったというわけだな。

「あ、あはは……」

「ということで、行きましようか。さすがにみんなお腹をすかしてますからね。俺たちが戻らないと、ご飯も始まらないですしね」

「うん!!」

ロッジに戻った俺たちを待っていたのは、エプロンをしたセインが一生懸命タご飯の

支度をしていた姿だった。

ちなみに夕食はセインが相当気合いを入れて作ったため、かなりの量もあり、みんな大満足だったことはいうまでもない。

\* \* \*

「ふう……。やつと、お風呂でゆっくり出来るよ」

男性は俺とエリオしかいないため、入浴時間が必然的に後の方になってしまうのだ。エリオは先に入ったので、後は俺だけなのだ。

「さてと、そろそろ出ようかな……」

そう思っていたら、入り口の方からガラガラと扉が開く音がした。

「ちよ、ちよつと待て!? 確か、扉には札を下げたよな!？」

女性陣が入ってこないように、扉には『男子入浴中』の札をかけておいたはず。こんな所で鉢合わせになったら、間違いない俺は女性陣にしばかれるぞ!!

「な、何とか外に出ないと!! どっか緊急用の出入り口はないのか!!」

俺は必死で非常口をさがすが、無情にも扉は開かれてしまう——。

すると、そこに立っていた女性は——。

「フエイト……」

「えへへ♪ フィル、一緒にはいろっか」

俺の奥さんのフエイトだった。

「まったく……。心臓が止まるかと思ったぞ。」

「まったく……。びつくりさせるなよ。マジで誰かが入ってきたのかと思ったぞ……」

「ごめんね。でも、こんな機会じゃないと、一緒に入ってくれないじゃない」

「……それは……。そうだけだな」

はつきり言って、恥ずかしいんだよ。

フェイトみたいな綺麗な女性が、一緒に浴室に入ってきて、俺の理性が持つ自信がないんだ。

いくら自分の奥さんと言っても、親しき仲にも礼儀ありというしな。

「でも……。本当にゆっくりできるね。ここは……」

「そうだな……」

フェイトが俺のそばに来て、そっと俺の肩に自分の頭をコトンと預ける。

俺も、フェイトの綺麗な金髪をそっと撫でていた。

「フィル……。明日は敵同士になっちゃたね」

「ああ……。さすがに前回のことが響いているのかな」

前回、俺とフェイトは同じチームで戦ったんだけど、開始早々、俺のワープとフェイトの速攻で、殆ど壊滅状態に追い込んでしまったのだ。

そのため、今回は俺のワープは回数制限がかかってしまい、俺とフェイトも敵同士になってしまったのだ。

「……ワープの使用回数があるのは仕方がないとして、ファイル、リミッターはちゃんと外してね」

「……気づいていたんだな」

もしかしたらと思っていたけど、やっぱりフェイトには気づかれていたんだな。ティアと話しているとき、そんな視線でみていたからな。

「当たり前でしょう。ティアナが気づいているのに、奥さんの私が気づかない訳ないでしょう」

そう言って、フェイトは俺のおでこをツンとしてきた。

「でも、ティアナには言って、私には言うてくれなかったのは……ひどいよ」

フェイトはぷくつと頬をふくらませて、「私、怒ってるんです」とアピールをしている。でも、本気で怒っている訳じゃなくて、どちらかといえば、ティアにばかりかまってるってヤキモチみたいな物だ。

「ごめんな……。といつても、向こうも俺の動きで気づいたみたい」

「……本当、ティアナ、ファイルのことを見ているよね」

確かにティアは、本当に俺のことを見てくれている。

仕事の時も、普段の時も――。

だけど――。

「でも……。いつもこうやって、俺の心の支えになってくれるのは……フェイトだから

……」

「……うん」

アグスタ事件の後、俺がどうしようかと迷っていたときだって――。

最終決戦前、フェイトの力を失って、弱気になっていたときだって――。

そして――。

ゆりかごで、動けなくなってしまって、必死で俺の看病をして、俺のことをずっと信じてくれたあの時も――。

「俺は……フェイトがいてくれるからこそ……俺が、俺でいられるんだ。だから……」  
その続きを言おうとしたとき、フェイトが俺を自分の方へ抱き寄せ……。

「……私も……私も同じだよ。フィルがいてくれたからこそ……私は今まで幸せだったんだからね……」

「フェイト……」

「だから、明日は、フィルの全力を受け止めてあげるからね」

そうだ――。

フェイトは、こうしていつも俺のことを受け止めてくれた。

だからこそ、俺はこの人を愛し、守りたいと思うんだ。

「……ああ、受け止めてくれ。俺の全てを……な……」

「うん……。でも、今は……」

「……ああ」

今はフェイトのぬくもりを、感じていたい――。

だから――。

月明かりが照らす中――。

俺たちは、互いを感じるために口づけをかわす――。

互いが満足するまで……何度も……何度も……。

「……ファイル、今日は……いいよね」

「だけど……。いいのか？ 明日……きつくなるぞ」

「いいの……。ファイルと一つに……なりたいの……」

結局、俺たちは寝室に戻った後も、互いを何度も求め合ってしまった、就寝したのは、丑



三つ時を過ぎた頃になってしまった。

そして――。

運命の二日目の朝が……やってきた。

## Memory ; 12 コロナとルーテシアの決意

試合当日の朝、わたしは少し早く目が覚めてしまったので、デバイスになれるために練習をしていた。

せっかく、デバイスが良くても、使う人が活かしきれないんじゃないじゃ宝の持ち腐れだもんね。

練習も一段落して、ロッジに戻ろうとしたとき、ルーちゃんがパジャマ姿のまま背伸びをしていた。

「ルーちゃん、おはよ!!」

「おはよー、コロナ。ブランゼル、調子はどう?」

「うん、さつきも一緒に練習してただけど、すごくいい子!! 賢いし、わたしに合わせしてくれるし」

フィルさんが考えてくれたわたしのデバイス『ブランゼル』

本当に、わたしの為に合わせて作ってくれたのがよく分かる。

「そっか。綺麗な名前ももらったんだから、ご主人様のために頑張るんだよ？」

《Yes. Maister》

わたしとルーちゃんは、朝ご飯を食べるために一緒にロッジに戻ることにした。すると、ちよつと離れたところで――。

「はっ!! はああああ……」

フィルさんが、タンクトップとGパン姿で、朝から汗をいっぱいかいてトレーニングをしていた。

プリムを使つての、射撃練習、斬撃練習。

その後は、腕立て伏せを100回以上……。

「相変わらず……ストイックだね」

「うん……。朝ご飯を食べたら試合開始になるのにね」

しばらくの間、わたしとルーちゃん、フィルさんのトレーニングに見惚れていた。すると、向こうがわたし達に気がついて――。

「ん？ よつ、こんな朝早くどうしたんだ二人とも？」

フィルさんがトレーニングを中断して、こつちにやってきた。

「おはようございます、フィルさん」

「おはようフィルさん」

「おはよう、コロナ、ルーテシア。朝ご飯にはちよつと早い時間だぞ？」

フィルさんが持っていた腕時計で、時間を教えてくれた。

確かに朝ご飯には、まだ1時間くらい早かった。

「ちよつと早く目が覚めちゃったんで、ブランゼルと一緒に練習してたんです」

「……そっか。ルーテシアが一生懸命作ってくれたデバイスだもんな」

やっぱりフィルさんは、自分が関わったことは、一言も言ってくれない。

昔からそうだったけど、自分が頑張ってたことを自慢したりする人じゃない。

「……フィルさん」

「ん？ 何だ？」

だから、わたしからフィルさんにちゃんとお礼を言うんだ。

「ほんととは……フィルさんも、一緒に考えてくれたんですね……。ルーちゃんと一緒に……」

すると、フィルさんが頭をポリポリとかきながら、照れくさそうにして――。

「……ルーテシア、お前だな。コロナに言ったのは……」

「あつたり〜♪」

「つたく……。基礎設計はお前が考えたんだから、俺の事なんて言わなくてもいいだろうに……」

ファイルさんは、ふうつとため息をつきながらそう答える。

「ファイルさん、本当にありがとうございます。わたしのために、こんな素敵なデバイス……」

「……まあ、ばれてしまったんじや、もう隠しておいても仕方がないな。コロナ、一つだけ……言っておくことがある」

ファイルさんは、しゃがんで、視線をわたしに合わせて、さつきまでとは違い、真剣な表情と目でわたしを見つめて――。

「デバイスも魔法も……使い方次第では、人を活かす相棒にもなれば、殺しの道具にもなる」

「……はい」

ファイルさんの言うとおりだ――。

魔法もデバイスも、使い方次第で人を傷つける道具になってしまう。

「だから……ブランゼルを正しい使い方をするのも……コロナの心次第なんだ。それだけ……覚えていてくれ」

「——はい!!」

それでも、フィルさんはわたしを信じて、わたしのために、ルーちゃんと一緒にデバイスを考えてくれた。

そして、わたしを一人前としてみてくれたんだ——。

「……コロナなら、間違った使い方をしないと信じてるから……な」

フィルさんは、わたしの肩に手を添えて、そう言ってくれた。

今のフィルさんの瞳は、本当に優しい目をしている。

「さてと、朝ご飯も支度しないとな……」

フィルさんは、スクツと立ち上がって、歩き出そうとしていた。

「……あ、あの……」

「ん？ どうしたんだ？」

きつと今のわたしは、顔が火照って真っ赤になつてる。

でも、ファイルさんに、ちゃんとわたしの感謝の気持ちを伝えたいから――。

「ちよ、ちよつとだけ、かがんでくれませんか……」

「あ、ああ……良いけど？」

ファイルさんは、わたしの背の高さに合わせて屈んでくれた。

そして――。

ちゅっ♪

「あらっ♪」

「なっ!？」



わたしは、ありつたけの思いを込めて、フィルさんの左頬にキスをした。

「……これは、わたしのありつたけの気持ちです」

「コロナ……」

勢いでやってしまったとはいえ、もう、わたしはフィルさんの顔をまともには見られないよ!!

「そ、それじゃ、失礼します!!」

わたしは恥ずかしくなってしまう、その場から走って離れた。

\* \* \*

「フィルさん……」

「……何だ」

「顔……真っ赤ですよ」

「あたりまえだろうが……。コロナにいきなりあんな事されたんだから……」

いきなり、コロナから頬にキスをされてしまい、フィルさんの頭の中はパニック状態になっているみたい。

でも、コロナも普段からは考えられないくらい大胆なことをするよね。

「フィルさんって、自分の領域（テリトリー）にいない人には、全く反応示さないんだけど、なのはさん達や私達みたいに、大切な人たちって認識している女性に、本当に弱いですよね……」

「……ノーコメントだ」

「ふふっ、その反応で十分ですよ。でも、フィルさん、お礼を伝えたいのは、コロナだけじゃないんですよ」

「えっ……？」

ブランゼルと一緒に考えてくれたとき——。

フィルさんは、本当に一生懸命一緒に考えてくれた。私が基礎設計をして、それを何

度もチェックを入れてくれて、足りない部品とかも、フィールさんが自費で作ってくれて、そう言ったことを全く自慢もしない……。

昔からそうだった——。

私をクアットロの洗脳から解き放ってくれたときも——。

六課で話しづらそうにしていたときも、フィールさんが間に入ってくれて仲間とのコミュニケーションを取りやすくしてくれたときも——。

そして今も——。

ママの養生のために、私がママと一緒にいられるように、ワザとカルナージに飛ばして、休職扱いにしてくれたことも——。

だから——。

ちゅっ♪

「な、ななな……」

私もありったけの感謝の気持ちを込めて、フィールさんの右頬にキスをする。

「えへへ♪ これは私からの感謝の気持ちだよ。本当はこれくらいじゃ、全然足りないんだけどね」

「……充分すぎるお礼だったの」

フィルさんは、顔をさらに真っ赤にしていまい、プイツと反対の方に向いてしまった。でも、本当にフィルさんがフェイトさんの旦那さんじゃなかったら、間違いなくアタックしたんだけどな——。

それくらい、素敵な男性だって事なんだけど、本人は全く自覚無しだし。

「フィルさん、それじゃ私も先に行ってますねー!!」

試合じゃ、私はフィルさんと一緒のチームだ。

向こうは、キャロが必死でフェイトさんとコロナ達のサポートをしてくる。

だけど、サポート合戦だったら、絶対にキャロに負けるわけにはいかない!!

まして、今回はフィルさんの復帰戦なんだから——。

フィルさん——。

フィルさんのサポートは、私が全力でしますから、一緒に頑張りましょうね!!

\* \* \*

試合開始 10分前

一旦全員集合し、まずは、準備運動と試合のルール説明をすることになった。

「はい、全員揃ったね」

「じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさんから!!」

「あ、あたしですか?」

ノーヴェはちょっと照れくさそうな顔をしながら、試合の説明を始めた。

「えー……。ルールは昨日伝えたとおり、赤組と青組六人ずつのチームに分かれたフィールドマッチです。ライフポイントは、今回もD S A A公式試合用タグで管理します」

そう言つてノーヴェは、カウンターの付いたタグを取り出す。

「あとは皆さん、怪我のないよう正々堂々頑張りましょう」  
『はーいっ』

そして、赤組、青組に別れて全員セットアップをし、最後の作戦会議を行う。  
ちなみにそれぞれのライフポイントは――。

STEAM RED

CG：ティアナ・ランスター：2500

GW：フェイト・T・グリード：2800

FA：ノーヴェ・ナカジマ：3000

FA：アインハルト・ストラトス：3000

FB：キャロル・ルシエ：2200

WB：コロナ・ティミル：2500

STEAM BLUE

CG : 高町なのは : 2500

CG : フィル・グリード : 2500

FA : スバル・ナカジマ : 3000

FA : 高町ヴィヴィオ : 3000

FB : ルーテシア・アルピーノ : 2200

GW : リオ・ウエズリー : 2800

「序盤は多分同ポジション同士の1on1」

「均衡が崩れるまでは、自分のマツチアアップ相手に集中ね。でも、フィルだけはこういう動きするか分からないから、要マークだよ」

『おー!!』

向こうは、フェイトさんとティアナが、中心となって作戦会議をしてる見たいね。

フィルの動きをマークして、動きを呼んでいく作戦みたいね。

「向こうは前衛と中盤に突破力の高い子が揃ってる」

「序盤が守備を固めて、向こうの足を止めていくぞ」

『はいっ!!』

「ちよつと待ってくれ。外す物があるんだ……」

そう言つて、ファイルが上着とリストバンドを外すと、上着がガシヤツと金属音をして、地面にめり込みコンクリートがひび割れてしまった。

「ちよ、ちよつとこの上着、持ってみて良いかな?」

「え、ええ……。どうぞ」

なのはさんが上着を持ってみると――。

「よっ……。つて、も、持ち上がらない!？」

その後、なんとか持ち上げたが、重さに耐えきれず、なのはさんはすぐに地面に下ろしてしまった。

「ファイル……。今までこんな重い上着とリストバンドを着けて訓練していたの……?」



「ええ……。半年間のブランクを少しでも埋めるために、ちよつときつめの訓練してたんです」

「……にしたつて、合計30kg以上のおもりを付けて、平然としてられるなんて……超人だよ」

『ええええええええええ!!』

なのはさんの言葉に、青組のメンバーが全員驚きを隠せなかった。

確かに人間一人を背負つて、普段の生活をしてるなんてありえないものね。

そして、どうやら、お互いに作戦が決まったみたいね。

それでは、私も試合開始の銅鑼を鳴らしましょう。

「それではみんな元気に……」

「試合開始〜!!」

\* \* \*

「ウイングロードツ!!」

「エアライナーツ!!」

赤と水色の魔力で作られた道が、バトルフィールド全域に縦横無尽に展開され、そこを陸戦魔導師達は駆けあがる。

「行くよりオ!!」

「オツケーヴィヴィオ!!」

「コロナさん、リオさんの相手をお願いしても?」

「はい、お任せください!!」

アインハルトの相手は、ヴィヴィオ、コロナの相手はリオと、相手が決まると、散開し、それぞれのバトルフィールドに別れていった。

\* \* \*

「フェイトか……」

「どうやら、私の相手はフィルムみたいだね……」

「そのようだな……」

フィルとの一対一なんて、久し振りだけど、復帰したてだと油断してたら、速攻でやられる!!

青組の中でマークが外せないのは、なのはとフィル。  
だったら、私がフィルを止めるまで!!

「久し振りだよな……」

《ええ……。久し振りだからと言って、すぐに落ちないでくださいよ》

「分かっているって、今日は全力で行くぞ!!」

《了解です!!》

\* \* \*

「さて、FB（フルバック）として、どっちがチームをしつかり支えられるか？」

「負けないんだから!!」

ルーちゃんが、フィルさんの一緒のチームというのが、ちよつと悔しいけど、わたしも赤組のFBとして、チームを全力でサポートしてみせる。

絶対にルーちゃんには負けないんだから!!

\* \* \*

(なのはさんに大きいのを撃たれたら、一撃で全滅の危険がある)

それに今回はなのはさんだけじゃない。

フィルにだってやられたら、やっぱり戦局大きく傾いてしまう。

それだけは避けなきゃならない!!

(ティアナの徹甲狙撃弾は、わたしのよりも速いし固い。撃たせたら味方もわたしも危ない)

(必勝の一撃は——)

(数の均衡が崩れた瞬間!!)

\* \* \*

「おおおおおっつ!!」

あたしのリボルバーナックルと、ノーヴェのジェットエッジが互いに、シリンドーをフル回転させて激突し、赤と水色の魔力が火花を散らして、放電現象を起こす。

「さすがにやるねノーヴェ!!」

「ツたりめーよ!!」

あたしは一旦ノーヴェから離れ、後方のウインググロードに飛ぶ。

「仕事じゃともかく、格闘戦技（ストライクアーツ）じゃ……!!」

《Revolver spike》

「とはいえ、あたしもおねーちゃんだから……!!」

## 《Caliber Shot.》

あたしは、ウイングロードを使い、加速を付けてノーヴェに向かつていく。

「負けないッツ!!」

「負けねーッツ!!」

今度は蹴り同士の激突。

意地と意地のぶつかり合い。あたしも一步も引くわけにはいかない。

やっとフィルが現役復帰することになる最初の試合。

絶対に勝つて一緒に喜びたいんだ!!

\* \* \*

(立ち合うのはこれで3度目)

(格闘技では、まだまだアインハルトさんにはかなわないけど……。魔法もありなら!!)

(来る!!)

私はヴィヴィオさんの攻撃に備え、構えを取る。

正面から突っ込んでくるかと思いきや、フェイントで上空高く飛び上がり――

「閃必中!!」

左手に魔力球を作り出し、それを右の鋭い拳の振りで打ち出す!!

「ダイバインバスター」

虹色の砲撃は、恐ろしい早さで向かってくるが、それを何とかかわすことが出来た。ただ、完全にはかわしきれず、かすってしまう。

アインハルト    DAMAGE    300    ↓LIFE    2700

(高速砲――!!)

(カスっただけでも上出来——!! まだまだここから!!)  
「!?」

態勢が完全に整っていない隙を狙って、ヴィヴィオさんがバインドで動きを封じようとしてくる。

それでも、なんとか飛び上がって発動を回避する。

「は——っ!!」

ヴィヴィオさんの右足の蹴りが私を襲う。

ガードで受け止めるが、蹴りの威力が大きく僅かながらダメージ換算されてしまう。

アインハルト    DAMAGE    100    ↓LIFE    2600

「あらっ!?」

私は足払いで、ヴィヴィオさんの体勢を崩し——。



「がはっ!!」

一撃をヴィヴィオさんの胸に叩き込んだ。

勢いで、地面に叩きつけることが出来、距離も取ることが出来た。

ヴィヴィオ    D A M A G E    4 0 0    ↓ L I F E    2 6 0 0

なるほど……。

ヴィヴィオさんは魔法もまつすぐだ。

だけど、霸王流に生半可な射砲撃は通じない!!

(構えた——)。アインハルトさんにも中距離(ミドルレンジ)が!?)

(でも、魔法の撃ち合いなら——!!)

「ソニックシューター!!」

ヴィヴィオさんの周りに、虹色のスファイアがいくつも展開される。

良いでしょう——。

「霸王流『旋衝破（せんしょうは）』」

あなたの攻撃、受けて立ちます——。

\* \* \*

「くっ!？」

リオの魔力弾の嵐が、わたしを捉えようと、速いスピードで放たれる。何とかかわすが、このままじゃいつか捉えられてしまう。

こうなったら——。

「おっ、追いかけてこはもう終わり?」

「跳んだりねたりはちよつと苦手……。だから、ここで戦うよ」

「オツケー!!」

「ここで、リオと正面から戦う!!」

（コロナの魔法は個性的だし、後手に回ったらあたしがヤバイ。止まってくれたんなら先手必勝ツ!!）」

リオがベルカ式の魔法陣を足下に展開し、炎と雷の魔力を出し構えを取る。

あっちもいよいよ本気になってきた。

でも、わたしだって——。

わたしはポケットから、水晶を取り出す。

このクリスタルは、わたしの魔法のためのコア。

（わたしは格闘技も魔法戦も、そんなに上手くないけど、ひとつだけ誇れる物があるんだ!!）」

「行くよコロナツ!! 双龍円舞ツ!!」

炎と雷の龍がリオの手で作りに出され、まるで龍が舞っているかのような美しさと激し

さがある。

でもね――。

（昔、ヴィヴィオとフィルさんに褒めてもらって、嬉しくて、それからずっと練習してたこと）

「創成起動（クリエイション）――」

わたしはフィルさんが作ってくれたブランゼルに口づけをし――。

（端末（クリスタル）を核に魔力を込めて練った物質を……）

端末に反応し、地面が盛り上がり、やがてそれは――。

（望む形に変えて自在に操る）

巨大なゴーレムを作り出す。

(それがわたしのゴーレム創成(クリエイト)!!)

ブランゼルのお陰で、只のゴーレムじゃなく、鎧も纏った戦士として作り出すことが出来る。

今までは作ることは出来るが、こんなに早く作るのは、この子無しでは無理だった。

「行くよリオ!! 正々堂々!!」

「試合開始ッ!!」

リオ、今までのわたしと思っただら痛い目に遭うからね。

全力全開、本気の勝負だよ!!

## Memory ; 13      MAXIMUM

「いやあ、みんな元気にやっとなるねえ」

「ほんとうにねえ」

「ですね。CG（センターガード）同士も足止めてますし、陣形も崩れてませんね」

「うん、綺麗な戦闘だわ。でも、エリオ君本当にごめんなさい。本当なら参加できていたのに……」

「いいえ、これは僕が自分で決めたことですから……」

こうしてみんなの戦いを見ているのも、十分に勉強になる。

欲を言えば、フィルさんと戦ってみたいという気持ちがあるけど、今はそれよりも復帰したフィルさんの力がどのくらいなのか、その方が興味あるから。

現在のライフポイントは――。

STEAM      RED

CG : ティアナ・ランスター : 2500  
 GW : フェイト・T・グリード : 2800  
 FA : ノーヴェ・ナカジマ : 2900 ( | 100 )  
 FA : アインハルト・ストラトス : 2600 ( | 400 )  
 FB : キャロ・ル・ルシエ : 2200  
 WB : コロナ・ティミル : 2500

### STEAM BLUE

CG : 高町なのは : 2500  
 CG : フィル・グリード : 2500  
 FA : スバル・ナカジマ : 2900 ( | 100 )  
 FA : 高町ヴィヴィオ : 2600 ( | 400 )  
 FB : ルーテシア・アルピーノ : 2200  
 GW : リオ・ウエズリー : 2800

「FB(フルバック)の二人も支援のセッティングがそろそろ済む頃だし、アタッカー達のバランスも崩れ始めるここからが見物よ」

\* \* \*

「ソニックシューター、ファイアツ!!」

虹色の魔力弾が、アインハルトさんに向かって放たれる。  
数も威力も充分。当たれば間違いなくライフを削ることが出来る。

(よし!! アインハルトさんが受けには入る!!)

足を止めてくれれば、着弾の隙に回り込んで攻撃することが出来る。  
あたしは全速でダッシュし、攻撃態勢に入る。  
だけど――。

「いっ!?!」



アインハルトさんに。全部のバレットを受け止められてしまう。

しかも、弾殻（バレットシェル）を壊さないで、しかもそれだけで終わらず——

「霸王流……」

わたしのバレットを受け止めたまま、そのまま野球ボールを投げるように、わたしのバレットを使い——。

（これってまさか!? まずい!!）

つかさず防御態勢にはいるが——。

「旋衝破」

わたしのバレットは、全てアインハルトさんに投げ返されてしまった。

(反射技(リフレクト)——!?)

ヴィヴィオ DAMAGE 1100 ↓LIFE 700

何とかとつさに受け身を取って、最悪のダメージは逃れたけど、それでもかなりのラ  
イフを持って行かれてしまった。

\* \* \*

「すっげー!! 何今の!?! 弾丸反射!?!」

「いえ、違います。おそらくあれは……」

「エリオ君の想像通りよ。あれは反射(リフレクト)でも弾丸反射でもないわね。あれ  
は、受け止めて投げ返したの」

「そんな事できんの?」

「真正古代（エンシエント）ベルカの術者なら、理論上はね」

それにしても、あの年齢であの技術——。

一体どれだけ苛烈な修練を積んだというの——？

「あれ？ 霸王つ子、なんか様子が……」

スクリーンに映し出されたアインハルトを見ると、右肩の所から魔力爆発が起こり、アインハルトにもダメージ計算がされる。

アインハルト    DAMAGE    300    ↓LIFE    2300

「うおお!! なになに?」

「ヴィヴィオの反撃ですよ。あの一瞬、カウンターで右肩に当ててたんですよ」  
「ちよつとズレてたら、結果は逆だったかもね」

これでフロントアタッカーが崩れ、おそらく赤組は攻撃を仕掛けるわね。

さてさて、フィルになのはちちゃん。  
この状況、どう切り抜けるかしら——。

\* \* \*

「アインハルト、ストップ!!」

あたしは、ヴィヴィオに追撃をかけようとしたアインハルトをストップさせる。

「今のダメージなら、ヴィヴィオは一旦下げられる。この隙に戦陣突破で斬り込んで!!  
目標は……」

「青組のCG（センターガード）なのはさんのところ!!」

「——はいっ!!」

フィルは、フェイトさんが足止めしてくれてるから、そっちはフェイトさんに任せれ

ばい。

向こうは、フィルとなのはさん、指揮が出来る人間が二人いる。どつちかを早めに叩いておかないと、間違いなくこつちが危ない!!

\* \* \*

「凄い、凄い——!! あんな技があるんだ!! でも、わたしだつて!!」  
「うん、ヴィヴィオに火がつき始めた。とはいえ……」

さつきのアインハルトからの反撃は、無視できるものじゃない。  
ライフ3桁で、これ以上追撃させるのは得策じゃない。

「ヴィヴィオ、治療するから一旦戻つて」  
「ええ——ツ?」

スクリーンに映し出されたヴィヴィオは、明らかに不満な顔をしている。

確かにアインハルトと早く戦いたいのには分かるけど――。

「ヴィヴィオ、そんな状態で戦っても、フィルさんの足手まといになるだけで落ちる方がまずいのよ」

「……うん」

「私ね……。今回は絶対に勝ちたい。フィルさんに勝利をプレゼントするためなら、どんな手だつて考える。例え手段が汚いって言われても!!」

「ルールー……」

フィルさんつて、普段は勝負事でも、あまり率先して勝ちたいという気持ちは出さない。  
い。

そんなフィルさんが今回の紅白戦、勝ちたいつてはつきりと言った。  
だからこそ勝ちたい。勝つてフィルさんと一緒に喜びたい!!

「だから、お願い。ここは一旦戻ってライフを万全にして!!」

「うん!!」

ファイルさん、サポートは私に任せて、ファイルさんは全力で戦ってください。  
全力全開、おもいつきりやっちゃってください!!

\* \* \*

「はああああああ!!」

プリムとバルディツシユの激突。

プリムの白銀の魔力刃をバルディツシユの柄で受け止め、その激突で火花がほとばしる。

激突の衝撃を利用し、私とファイルは、互いに距離を取り構えを取り直す。

(ファイル、本当に強くなった。さつきから全力で撃ち込んでるのに、クリーンヒットが取れない)

今までのフィルだったら、これだけの打撃を放つたら、もっとダメージを受けている。だけど、今のフィルは本当に強い——。

それだけ、この半年間苛烈な修練をしてきたって事だ。

フィル L I F E 2300 (—200)

フェイト L I F E 2500 (—300)

《フィルさん、こちらルーテシア。ヴィヴィオの復帰まであと少し。それまでフェイトさんの足止めをお願いします》

「了解だ。こっちは任せろ」

まずいな——。

正直言つて、今のフィルを相手にするのはかなり厳しい。

しかも、フィルはまだ切り札を出していない。

「……そろそろ頃合いだな。プリム、いよいよ『アレ』を使うぞ」

《アレですね……。良いですよ、いつでもオツケーです!!》



そう言った直後、ファイルが六つのビットを展開させる。

そのビットは、今までのプラスタービットとは違い、青く細長い銃口のような形をしている。

「……な、何、あれ？ プラスタービットとは違う？」

「驚くのはまだ早いよ。この新モード『マキシマムモード』の力、存分に見せてあげるよ」  
「マキシマムモード……？ これがファイルの新しい力……」

「散開しろ!! 『マキシマムビット』!!」

《maximum bit Spread out!!》

私とそのビットの動きを注意してるが、その瞬間——。

全てのビットが消え——。

「……き、消えた!? ま、まさか!? きゃああああっっっ!!」

気づいたときは、すでに目の前に六つの白銀の砲撃が迫っていた。

何とかシールドで防いだけど、勢いを殺しきれないで吹っ飛ばされ、ダメージもかな

り負ってしまった。

フェイト    D A M A G E    1 5 0 0    ↓ L I F E    1 0 0 0

何とか迎撃しようと、プラズマランサーでビットを撃ち落とそうと狙いを定める。

しかし――。

「……なっ!？」

ファイルのビットがさらに動きを増した。

その動きは、まるで神速の領域。

目で捉えることはできず――それ故、狙いなんて定められることなど無理だ。

かろうじて、ビットが放つ白銀の光や、残像が残って見えるほどだ。

ビットに向けてプラズマランサーを放つが、ランサーは残像を貫くのみで、ビット本体を捉えることは出来ない。

そして、再びビットから白銀の砲撃が放たれる――。

「……くっ!!」

間一髪、オーバル・プロテクションで攻撃を防ぎ、はじき飛ばす。

「……なるほどね。やっと……わかった。まさかビットに、ソニックムーヴをかけて飛ばすなんて……」

今までの動きを見て、やっとビットの特性をつかむことが出来た。

あのビットから放たれていた白銀の光——。

あの光は、私やファイルが加速魔法のソニックムーヴを使うときに僅かに発する物。

あの光のおかげで、やっとマキシマムビットの高速移動の秘密が分かった。

それにしても、ビットにソニックムーヴをかけるなんて、本当にファイルは戦いの天才だよ。

「……なんとか、打開策を見つけないと……あれ?」

息を整えながら考えてた私の目に映ったのは、その場から殆ど動かないフィルの姿。さつきから、いくらだつて私に決定打を与えるチャンスがあつたはず。

だけど、さつきからビットを使つての攻撃以外、殆ど動いていない――。

「……そつか!!」

私の予想が当たっているなら、あのビットの弱点は――!!

「それじゃ、そろそろとどめを刺させてもらう。マキシナムビット・フルバースト!!」

フィルはビットの動きを、さらに速くし、ビットの残像もさらに増す。

残像と本体からの砲撃――。

その数は20を超える。

「一か八か!! バルドイツシュ、ライオット!!」

《R i o t   Z a m b e r》

バルディッシュのカートリッジをロードし、ライオットブレードが二本に分裂させる。

激しく帯電した、金色に輝く、二振りの刃——ライオットザンバー・ステインガー。

「ライオット……か。でも、それでどうするんだ!？」

「フィル、あなたのマキシマムビットの弱点、それは……」

《Protection release sonic move.》

砲撃を防いでいたシールドを解除し、直後に一瞬にして急加速する。

それに認識が遅れたビットの放った砲撃が、先程まで私がいた空間を貫いていく。

「はあああああつっ!!」

それと同時にソニックムーヴで、フィルの懐に一直線で突撃する。

それに気づいたフィルが、ビットで迎撃をするが、ビットの高速移動のスピードよりも速く動き、その攻撃を全てかわす。

「マジかよ……。真ソニックを使つてないのに、あの動き……」

「……そうだよ。防御力が犠牲になつてしまう真ソニック。それを解消するために、私も鍛え直したんだからね!!」

真ソニックの弱点。

それは、防御力の低下——。

ジャケットを極限までなくすことで、高速移動に魔力を回せるが、反面、一撃を食らつてしまうと、大ダメージになつてしまう。

最初は新しいフォームを考えていたんだけど、根本的な問題、私の体力の無さを克服しない限り、どんなフォームを考えたらって使いこなすことは出来ない。

だから、私はこの半年、ひたすら身体強化をし、インパルスフォームでも真ソニック並のスピードで動けるようになった。

その結果、防御力を落とすことなく、パワーアップすることが出来た。

「切り裂け!! ライオットブレード!!」

「ちいっいいい!!」

上段から振り下ろされたライオットブレードは、フィルのバリアジャケットを切り裂き、胸元の一部があらわになる。

フィル    DAMAGE    1500    ↓LIFE    800

「……よくわかったな。マキシマムの弱点……」

「……高速移動で仕留めるのがフィルのスタイルなのに、全然動かなかったからね」

マキシマムビットの弱点——。

おそらく、ビットを操ることにはかなりの演算領域を使用しているため、自身の行動にまで、それを振り分ける余地がない。

ソニック・ムーヴまで取り入れる荒業を使っているんだ。有り得ないことではない。

「だけど、勝負はまだこれからだ。マキシマムの能力は、これだけじゃない!!」

「うん、フィルの全力全開。私が全部受け止めてあげる!!」

互いにライフを削られたが、勝負はこれからが本番。  
フィル、この勝負絶対に負けないからね!!

\* \* \*

「まずいわね……。フィルさんが予想以上にダメージを受けてしまってる」

本来なら、フィルさんがあのマキシマムビット・フルバーストで圧倒する予定だったのに……。

だけど、フェイトさんが弱点に気づき、一気に互角に持ち込んできた。  
本当ならフィルさんを戻して、回復させたい。

だけど、ここでフィルさんを戻したら、間違いなくフェイトさんがなのはさんの所に行ってしまう。

ここはフィルさんを信じるしかない。



「青組一同、ヴィヴィオが復帰したら例の作戦に移ります。いつでも動けるようにお願いします!!」

『了解ッ!!』

この作戦がうまくいけば、フィルさんの負担も軽くすることが出来る。  
フィルさん、もう少しだけ持ちこたえてください。

\* \* \*

『ティアさん、ルーちゃんが何か企んでいます!!』

「あの子の悪巧みは洒落にならないのよね」

ルーテシアの悪巧みは、本当に洒落にならない。

あの子が考えることは、どちらかというとフィルに近い。

あつちにフィルがいるだけで頭が痛いのに、ルーテシアまでいるから本当に質が悪い。

「アインハルト!! 向こうの作戦の要は、まず間違いなくファイルかなのはさんよ。今のところフェイトさんがファイルを押さえてるから、全力でなのはさんを止めて!!」  
「承りました!!」

ファイル、あなたには悪いけど、この勝負負けられない!!

あんたも自分の強さを証明したいのと同じで、あたしも証明したいの——。

あなたのパートナーとして、一緒にいるためにもね!!

## Memory ; 14 Conclusion

「プラズマランサー……ファイア!!」

「くっ!!」

金色の魔力で作られた槍型のスファイアが、幾つもの槍の大群となって俺を襲ってくる。躲せない量ではないが、こうもひっきりなしで攻撃が飛んで来るんじゃないや。たまった物じゃない。

「……厄介極まりないな。プラズマランサーでこうも攻撃されたんじゃないや、マキシマムビットを使えない」

《フエイトさん、的確に弱点を突いて来てますね。マキシマムは现阶段では高速移動と一緒に使えませんからね……》

そう、マキシマムはビットの高速攻撃で汎用性も高いが、その動きをさせるためのマルチタスクをかかなり使用してしまう。

しかも、マキシマムはまだ試作段階。  
そんなに無理もかけられない……。

「くっ……。ランサーの連続攻撃のせいで、なのはさんとどんどん距離を離されている!!」

ランサーをかわすのが精一杯で、なのはさんとの距離をどんどん引き離されてしまっている。このまま孤立無援になってしまったら、完全にアウトだ。

「フィル、私は全力で倒しに行くよ。貴方がいなくなれば、青組の戦力は5分の1は落ちるからね」

「偉く過大評価してくれるじゃないか。たがが一人のCG相手に……」

「まったく、冗談じゃないぜ。俺はそんな役割はしてないっての——。  
だけど、こうやって俺がフェイトの相手をしてれば、主戦力の二人は動きやすくなる。」

\* \* \*

「まずい……。フィールさん、フェイトさんの術中に完全にはまっちゃっている」

私は現状把握のため、メンバー全員の様子を映し出して見ていたが、マキシマムビツトを破られてからフィールさんは、フェイトさんからの攻撃で防戦一方になっていた。これでチームの要が完全に分断されてしまった。

なのはさんがアインハルトを戦闘不能にしてくれたから、しばらくは持ちこたえられるけど――。

「……フィールさん、頑張つて。私も戦略をフル動員して頑張るから」

今はフィールさんを信じるしかない。

だから、私は私の出来ることを精一杯やるだけ――。

青組の勝利のために――。

\* \* \*

「…………どうやら完全に罠にはまったらしいな」

《…………そのようですね》

辺りを見渡すと、俺の周囲360°がプラズマランサーで囲まれてしまっていた。

一見出鱈目に放っていたように見せていて、本当の狙いはプラズマランサーで俺の周囲を囲み完全に動きを止め、確実に俺を捉えるのが狙いだっただ。

「気づくのが少し遅かった。やるなフェイト……」

躲すにも数が多すぎると、ラウンドシールドで伏せ切れる数じゃない。

このままじゃ確実に墮とされる——。

「チェックメイトだね、フィール」

次の瞬間――。

俺の周囲に展開されているスフィアが一斉に発射態勢に入った。おそらくフェイトが使う技は、只のプラズマランサーじゃない。俺の予想が正しければ――。

プラズマランサー・フアランクスシフト――。

ブレイカー系以外だったら、フェイトが使える必殺技では最大級の技。ソニックムーヴでは躲しきれない――。使うしかないか――。

アレを!!

\*

\*

\*

「撃ち……砕けッッ!!」

ファイルの周囲に張り巡らしたプラズマランサーを、全てファイルにめがけてはなつた。命中した空間は爆炎に包まれ、流れ弾が被弾したレイヤー建造物は跡形もなく消し飛ぶ。

そして――。

「はああああ!!」

魔力を集中させ、大きな雷の槍を作り出し、それを――。

「スパーク……」

思いつきりファイルにめがけて解き放つた。

「……エンド」



解き放った魔力は一度集束し、凝縮した魔力は一気に爆発を起こし周囲のレイヤー建造物共々大爆発をした。

これなら仕留められるはず。あとは……。

ファイルがワープを使っていなければただけどね——。

「……でも、使ってるんだろな」

案の定、攻撃が命中した所にはファイルの姿はない。

ということは……。

私は、ファイルがワープをするときに僅かに発する気を探る。

「……見つけた!!」

私はバルディッシュをライオットブレードに切り替え、後ろを一閃する。

「ちい……」

ファイルも私の攻撃に対応し、プリムの魔力刃で防ぐ。  
昔だったら、これでアウトだったけど、私も成長してるんだからね……。

\* \* \*

「くっ!! これでもだめか……!」

俺の切り札の一つ、ワープでフアランクスシフトを交わした後、フェイトの背後を取ったんだけど、ワープアウト時に発する、ほんの僅かな気の乱れから俺の位置を感じ取り、正確に攻撃をしてきた。

——成長している。

フェイトは、あのゆりかごの時から比べものにならないくらい成長している。  
体力もFAのスバルやノーヴェと遜色ないし、何より……。

「どうしたの……。それで終わり？」

——あのプレッシャー。

今のフェイトは、とてつもなく強い。

このままじゃ……。確実に負ける。

そう思っていたとき……。

「フィル!!」

「なのはさん!?!」

アインハルトを撃破したのはさんが、こっちのサポートに来てくれた。

なのはさんも向こうで、ティアのフルバーストを喰らって、だいぶダメージを喰らってはいいる。

「……助かりました。正直ダメだと思ってましたから……」

「うん。フィル、今のフェイトちゃんに一对一で戦うのはだめ。フィルが万全だったら

ともかく、さっきのマキシマムで限界近いんでしょ……」

「はい……」

「だったら、作戦変更だね。ルーテシア」

\* \* \*

「うん、アインハルトも治療中だし、コロナのゴライアスもダウンしてる。ここしかない……」

ファイルさんには、なのはさんがサポートしてくれれば、フェイトさんに対抗できる。  
後は。私が勝利の作戦を考え実行するだけ!!

「青組の皆さん!! 予定よりちょっと早いですが、作戦発動します!!」

「「「了解ッ!!」」」」

発動の号令と同時に、ノーヴェにはヴィヴィオとスバルさんを。

フェイトさんには、フィルさんとなのはさん。

そして、キャラには私とリオが。

「2 o n l ——— !!」

「ルー。あたしとコロナを無視するとは、良い度胸じゃないのッ？」

「うっふふー？ 度胸じゃなくて、知性の勝負♪」

前中衛は息のあったコンビ同士!!

フェイトさんには、師弟コンビで速攻でつぶす。

「そして、私とリオは、支援役のキャラを中距離から封殺!!」

これが青組の必勝の策—————。

私が知識をフル動員した策よ。

汚いって言われたって良い—————。

この一戦だけは、絶対に勝ちたい!!

\* \* \*

開始12分

戦闘空域の魔力散布は充分されてる。

数の均衡も崩れて、向こうが固まってくれてる今が、逆転の一撃を撃つチャンス!!

「赤組各員へ。防戦しながら戦闘箇所をなるべく中央に集めて。集束砲で……」

「一網打尽にするから!!」

おそらくあっちも同じ考えのはず。

ましてやあっちには、ブレイカーを撃てるのが二人もいる。

タイミングをしくじったらやられるのはこっち……。

なのはさん、フィル、勝負よ!!

\* \* \*

「くっ……。あの二人を相手にするのはきつい」

フェイト LIFE 1000

正直、ファイルだけでもやっかいなのに、それ以上になのはが嫌な攻撃をしてくる。

ファイルとなのはのコンビネーションは、味方にすれば心強いけど、敵に回ればこれ以上嫌なことこの上なしだ。

「……………使うしかない……………か」

封印していた真ソニック。

ソニックを使えばスピードは今以上に跳ね上がるけど、防御力は半分以下になってしまふ。

だけど、ファイルのスピードは私とほぼ互角。このままじゃいつか捉えられてしまふ。

この二人をかわすには使うしかない!!

「ソニック——!!」

《Sonic Form》

私はソニックフォームを使い、なのはとファイルの攻撃を全てかわしていく。  
でも、おかしい……。

あのふたりだったら、こんな単調な攻撃はしないはず。  
確かに数は多いけど、かわせない速さじゃない。  
まるで、わざとかわさせてるみたいな……。

「!!」

しまった!!

二人の本当のねらいは——!!

「気づくのが、少し遅かったな。フェイト」

次の瞬間……。

ワープで私の懐に入ってきたファイルが……。



プリムのブレードで、私の胸元を一閃する。

「きゃああああ!!」

フェイト    DAMAGE    660    ↓LIFE    340

「これでワープの使用回数は使い切ったけど、ダメージは与えませ」

確かに大ダメージを受けちゃったけど、でも、これでフィルもワープは使えなくなつた。

今回の模擬戦でのフィルのワープ使用制限は2回。

さっきのと併せてこれで使い切った。

でもね——。

いくら相手が自分の奥さんだからって、女性の胸元をさらけ出す攻撃は酷いよ!!  
もしかして、相手がティアナでも同じ事をしたの!?

——むう。

なんかムカムカする。

ファイル。後で、じっくりお・は・な・しするからね。

\* \* \*

2on1じゃ確かに分が悪い。

現にノーヴェさんも、フェイトさんも、もう、残りライフが少ない。

どちらかを回復させても、その隙を突かれたらアウト。

だけど……。

「アルケミック・チェーン!!」

地面に召喚の魔法陣を展開し、魔力の鎖を召喚する。  
わたしはルーちゃんとりオにチェーンで攻撃するが……。

「うっふっふー♪ 当たらない当たらない!!」

鎖は難なく躲かれてしまう。

「……」

アルケミック・チェーンは当てるためじゃない。

撃墜のための布石だから!!

「コロナ、今だよ!!」

「ナイスです、キャロさん!!」

「コロナはゴライアスの腕を高速回転させ……。」

「ゴライアス、パージプラストツツ!!」

その巨大な腕を、ルーちゃん達にめがけて思いつき放つ。

「ロケット・パ——ンチ!!」

「へっ?」

「し、しまった!!」

ルーちゃんが何かの魔法を発動させようとしてるがもう手遅れ。

ゴライアスの腕は、周囲のレイヤー建造物もろとも二人を吹っ飛ばした。

「うそ——っ!?!」

ルーテシア	Team	Blue	FB	DAMAGE	2200	↓	LIFE	0
リオ	Team	Blue	GW	DAMAGE	1700	↓	LIFE	0

\*

\*

\*

しまった!!

完全に油断してた——。

キヤロがあんな単調な攻め方をするわけ無いのに!!

でも、簡単にはやられない。

死なば諸共よ!!

「!!」

私はやられる直前に発動していた捕縛魔法で、コロナの自由を奪う。

ライフは0になったけど、この模擬戦では、前に発動していた魔法は有効。

そのためトラップ的な役割を果たせた。

「う、動けません!?!」

「それはそうよ。私が仕掛けた最後の魔法よ。そう簡単に解けちゃ困るわよ」

—— フィルさんごめんなさい。

私が出るのはここまでです。

「コロナ!!」

キャラがコロナを助けに行こうとした瞬間……。

「へう——っ!？」

後頭部に桜色のスフィアが、思いつきり命中した。  
その威力にキャラは涙目になっている。

キャラ DAMAGE 1700↓LIFE 0

「はい、キャラ撃墜だよ」

「え——!! なのはさんいつのまに!？」

「勝ったと思ったときが危ないとき!! 現場での鉄則だよ」

その通りだ——。

油断したせいで、私は撃墜されちゃったんだから……。

なのはさん、すみません。

後はお願いします!!

\* \* \*

魔力散布も充分。

タイミング的にも今だ!!

「ブラスターツツ!!」

わたしの残り魔力も少ないけど……。

マルチレイドで一網打尽させる!!

わたしは、集束魔法スターライトブレイカーの発射態勢に入る。

ブラスターツツ6基使った必殺の魔法。

これで決着をつける!!

\* \* \*

なのはさんが集束に入った――。

「赤組生存者一同!! なのはさんを中心に広域砲を撃ち込みます!! コロナはそのまま!! 動ける人は離脱を!!」

あたしも周囲から魔力をかき集め、ブレイカーの発射態勢に入る。  
あたしなりに修練を積んで、発展させたスターライトブレイカー。  
今、見せてあげるわよ!!

\* \* \*



「まずい!! ティアとなのはさんが集束砲の発射態勢に入った!!」

今の俺じやブレイカーを撃つ魔力は残っていない。

しかも、離脱しようにもフェイトがマークしていて、この場からの離脱は不可能。ワープも使い切ってしまった以上、残された手はたった一つ——。

「ビット展開!! ラウンドシールド・リフレクター・オーバー!!」

俺はビットを使って、自分の周囲にラウンドシールドで作った球体のシールドを展開する。

本来は、前面に展開して鏡面状のシールドで相手の攻撃を跳ね返す物だけど、広範囲のブレイカーじやそれは厳しい。

これでどれだけ二人の砲撃を防げるかだ——。

そして俺は、フェイトもシールドの中に引き入れる。

「ファイル!？」

「今は一時休戦だ。ソニックのままじゃあつという間に落ちるぞ!!」  
「あ、ありがと……」

「礼なんか良い。俺の障壁で持ちこたえられるかな……」

正直言つて、あの二人のブレイカーを防ぎきる自信はない。

もう少し魔力が残っていたら話は別だけど……。

その時、俺の手にフェイトの手が、そつと置かれ……。

「だったら、私も手を貸すね。少しはマシになるよ」

フェイトの魔力が、俺の体内に入っていくのが分かる。

温かくて、優しいフェイトの魔力が……。

「……サンキュ、フェイト」

さて、あとは天に運を任せるとしますか!!

「スターライトツ——!!」

二人のかけ声に反応して、オレンジと桜色の魔力がそれぞれに集まっていく。

ティアは『ファントムストライク』

なのはさんは『マルチレイド』

どっちも広域型の集束砲——。

「ブレイカ——ツツ!!」

着弾した中心から爆風となって、辺り一帯のレイヤー建造物を木っ端微塵にしている。

そして……。

「……………う……………うぐつ……………」

「気がついた、フィル」

眼を覚ますと、いつの間にか俺はフェイトに膝枕をされていた。

まだ、勝負はついてないはずだけど……？

「フェイト……。俺はいつたい？」

「フィル、リフレクターで、スターライトブレイカーを防いだんだけど、私もフィルも……ね……」

フェイトに言われて、自分のライフを確認すると……。

フィル・グリード    L I F E    70    行動不能

フェイト・T・グリード    L I F E    30    行動不能

「……どうやら、互いにゲームオーバーのようだな」

「だね……」

まあ、あの最終戦争状態のブレイカーの中心地において、ライフが0にならなかつただけでもマシだろう。

\* \* \*

「でも、ファイル酷いよ!! 女性の胸元をさらけ出すなんて……」

「自業自得。ソニックを使ったら、防御は紙になるって事は分かってたんでしよう」

「……まあね。だからこそ、最後まで使いたくはなかったんだけどね」

「なのはとファイルの連携は、切り札のソニックを使わざるを得ない状況に追い込まれた。」

インパルスそのままだったら、躲しきれないし、結局はソニックを使わされた私の負けって事かな……。

「でも、ファイルは役得だったかな。私の胸をみれたんだしね♪」

「……うっさい」

「ふっふっ」

普段から、私の胸なんて見慣れてるのに、こっやってからかうのには弱いんだね。

でも、そんなファイルも大好きだよ。  
しばらく、こうしてファイルに膝枕をしてたら……。

「……どうやら、模擬戦の終了のようだな」

終了の合図がならされた……。

「だね……。最後まで残っていたヴィヴィオとアインハルトも相打ちになったみたいだし……」

「さて、戻るとしますか……。膝枕がちよつと名残惜しいけどね」  
「もう……ばか」

こんな時じゃなくたって、二人きりの時だったらいつでもしてあげるよ。  
私も、こうしてファイルと一緒にいるのが大好きなんだからね……。

青組 行動不能2名 撃墜4名

赤組 行動不能2名 撃墜4名

試合時間 19分35秒

全員戦闘不能につき

引き分け

## Memory; 15 インターミドル

21:37 ファイルの寝室にて

「あいたた……。やっぱり頭が痛い」

「あたりまえだよ。マキシマムの情報処理を全部一人でやってたんだから……」

模擬戦が終わった後、俺はプリムのメンテナンスのためみんなより早く抜けさせてもらった。

あと、先に抜けさせてもらったもう一つの理由は、俺の身体の不調だ。

久しぶりの実戦と言うこともあったけど、マキシマムの情報処理で頭がオーバーロード状態になってしまったのだ。

「本来はプリムと役割を分けてやるんだけど、今回はテストだったからな」

マキシマムは本来プリムと役割を分担して行うシステムだ。



例えば、プリムがビットの機動を担当して、俺が射撃担当をしたり、その逆をしたり、もしくは片方が全てを担当して行ったりする。

そうした汎用性の高さが、このシステムの狙いなんだけど……。

「ファイル、無茶しすぎ。本来はプリムでもギリギリの情報処理なのに、それを人がしようとしたんだから……」

「無限書庫でユーノさんにマルチタスクを習って、何とか出来るようにはなったけど、システムを最大限に生かすにはプリムと協力するのが一番だな」

《マスター、今回はテストと言うことで全部一人でしたましたが、元々は私と一緒に動かすシステムなんですから、一人でやる必要はありません!!》

「そうだね。これは執務官として言わせてもらおうけど、無理して一人でやっても実践では使い物にはならない。あんなふうには止まっていたら格好の的になるだけ」

「……そうなんだよな」

—— マキシマムの最大の弱点。

機動性の著しい低下。

いくらビットが高速機動していても、術者本人が動けなくなってしまうのはデメリッ

トの方が高い。

「問題はこれから何度もテストを繰り返し返して改善していくよ。マルチタスクの方も無限書庫でもう一度鍛え直してくるし……」

あそこで資料を調べたりするのは、マルチタスクの良い練習になる。

しかも、ユーノさんが暇なときはコーチしてもらえるから独学でやるよりもずっと良いし……。

「そうだね。でも、ファイルも変わったよね。前だったら絶対に相談なんかしなかったのにね」

《ですね。出来ることは全部一人でやって、周りに相談なんて滅多にしなかったのに》  
「……勘弁してくれよ。さすがにゆりかごのことで懲りてるよ。一人でやれることは限度もあるし」

「ふふっ、だね。それが分かっているなら大丈夫だね」

「……だな」

「あつ、そういえば、ヴィヴィオ達がインターミドルに出ることを決めたみたいだよ」

「インターミドルか……」

インターミドル。

毎年一回開催され、優勝者は管理世界女子最強の称号も得る。

「うん、ルーテシアが熱心にアインハルトのことを勧誘してたからね」

「良いことだと思う。今日の戦いで分かったよ。アインハルトの探してる強さは競技者としての物だ。俺みたいなの……強さじゃない」

俺の力は、あの地獄の世界で身につけた物。

生きるため……そして、あのクアットロを殺すために身につけた。

そんな強さは、ヴィヴィオやアインハルトは決して必要ない物。

この力を得る代償は大きすぎる。

一生後悔に苛まれないといけないのだから……。

「……そうならないように私達がしつかりしなきゃね」

「だな。さてと、そろそろアップルパイも焼き上がるし、ヴィヴィオ達の所に行くか」

\* \* \*

「みんな、おやつを持ってきたぞ」

『やったー!!』

焼き上がったアップルパイを持ってリビングに行くと、なのはさん達と一緒にインターミドルの話題で盛り上がっていた。

「そっか、アインハルトも出ることにしたんだな……」

「はい。迷いましたが、何より……」

アインハルトは、決意を込めた目で……。

「……強い人たちと……戦ってみたいから」

「……だったら、精一杯のサポートをしてやるさ。そうなると、デバイスが必要になるんだよな……」

インターミドルは、安全のためCLASS3以上のデバイスが必要になる。もちろん、コロナとヴィヴィオのデバイスはその基準は余裕でクリアしている。俺が作るデバイスは、実戦でも使えるのが最低ラインだから。

「デバイス持っていないんです。真正古代（エンシエント）ベルカのデバイスは、作るのが難しいから……」

「そう言うと思ってた。ルーテシア、はやてさんと連絡は取ってあるか？」

「ばっちりだよ!! 明日の午前中、話を出来るようにアポ取ったよ」

「サンキュー。じゃ、アインハルト、明日一緒に話をしていこうか」

「……ありがとうございます」

翌日、はやてさんと連絡を取り、アインハルトのデバイスについてプランを固めていった。

アインハルトの事を考えると、ヴィヴィオのセイクリッドハートと同じく、補助・制御型の方が向いているので、その方向で進めていくことになった。

基本ベースは、セイクリッドハートを使い、古代ベルカのシステムで組めば、さほど

時間もかからず作ることが出来る。

\* \* \*

## 二週間後

「ちよつと、早く来すぎてしまいました」

午前8時、今日は私のデバイスが出来上がる日。

どうにも気持ちを抑えきれなくて、待ち合わせの時間より早く来てしまいました。

ファイルさんが来る予定の時間は8時30分。

少し、どこかで時間をつぶそうとしたとき……。

「おはよう。待たせたみたいだな」

「お、おはようございます!! い、いえ、私が早く来ちゃっただけですから……」

「そっか。でも、ちゃんとご飯は食べたのか？」

「い、いえ……」

実は、舞い上がってしまつて朝ご飯を食べるのも忘れちゃつたんです。

普段はこんなことないのに……。

「だったら、ほら、こんな事もあるかと思つて、サンドイッチを作つておいたから、車の中で食べな」

「……すみません」

顔から火が出るような思いつて、こういうことを言うんですね。

本当に恥ずかしいです。

フィルさんの案内で、駐車場まで行くと、そこには白くて流線型のスポーツカーがありました。

「今日はロードサンダーじゃないんですね？」

「ああ、サンダーはオーバーホール中で動かせないから、今日は車で来たんだ」

「良い車ですね。無駄がないって言うか……綺麗なラインで」

「ああ、こいつは俺のお気に入りのお車なんだ。バイクとはまた違った感触が味わえるしな。さてと、先に乗りな」

フィルさんは、さりげなく助手席の扉を開けてくれて、エスコートをしてくれた。こういつたことをさりげなくできる人って、なんか……良いです。

乗ってみますと、運転席の方はいろいろな機械がりましたが、助手席の方は乗りやすいシートでこれなら長時間座っていても疲れません。

「じゃ、出発するぞ」

フィルさんがエンジンをかけ、ギアを入れると静かに発進する。スポーツカーだから、もっとグンとくるかと思つてましたが……。

「ずいぶん、静かなんですね。この車」

「まあな。スピードを出そうとしたら、300kmは余裕で出せるけど、普段は負担をかけないように、出来るだけ静かに使ってる」



「そうなんですネ」

「あとは、隣に可愛い子が座ってるのに、無茶な運転はする気はないさ」  
「……もう、知りません」

ヴィヴィオさんやフェイトさんに聞いてましたけど、フィルさんって身内にはこういういたずらっ子な面を出すことがあります。

私の緊張を和ませるために言ってるんでしょうけど……。

「ちよつとだけ、音楽を流すけど良いか？」

「大丈夫です。私も家ではよく聞いたりしてますから」

フィルさんは、カーコンポにCDをセットして、ある曲を流す。

その曲は……。

「これ……知ってます。確か『BRIGHT STREAM』ですよネ」

「正解、最近よく聴くんのだ」

この曲は私も好きな曲です。

聴いてますと元気が出てきますし、でも、家で聴いてもここまで良い音でないです。

「ファイルさん、この車何か……換えてますか？」

「んっ、まあな。スピーカーとかを換えてる。長時間移動するとき、音楽を聴いたりするから、音が良くないとストレスたまるし……」

その後もしばらく、色んな曲を聴きながら八神指令の所へ向かっていたのですが……。

「……はあ、こういう馬鹿がいると迷惑だな」

「ですな……」

前方には、二台の車が幅を寄せ合って通行の邪魔をしています。

しかも、ここは高速道路。

こんなスピードでこんな事をしていたら……。

そう思っていた次の瞬間……。

互いの車が接触し、一台の車がスピンしながらこちらに突っ込んできます!!  
もうダメ!!

「……」

ファイルさんは全く慌てる様子を見せず、ハンドルとギアを使つてぶつかるとはすれすれで  
躲していきます。

それはまるで神の領域——。

「……あーあ。後玉突きだな。こりや、事故処理大変だな」

「え、えつと、後の人たち大丈夫なんですか?」

「あの様子だったら、たいした人が人は出ていないと思う。それにここで引き返す方が  
かえつて危ない。管理局には連絡入れておいたから、後はそっちにまかせるさ」

確かに高速道路でUターンする方が危ないです。

でも、あの動きは本当にびっくりしました。

「すごいです。ファイルさん、人間業じゃありません」

デバイスや制御コンピューターの補助なしで、あんな事が出来るなんて……。

「大したことないよ。あのくらいなら何度も運転すれば、出来るようになる」

い、いや、それは絶対にありませんから……。

本当にこの人は、自分のことを分かってないです。

\* \* \*

「……やつと落ち着きました」

さっきの事故で、気分が少し悪くなってしまう、近くのスペースに車を止めてもらいました。

私は、何とか我慢しようとしたが……。

『無理するな。あれだけ手荒な運転したんだ。まだ時間もあるから休憩してから行く』

フィルさんに気付かれてしまって、こうして休憩中です。  
ふと海岸の方を見ると……。

「んっ、どうした。何かおもしろい物でも見つけたのか？」

「あ、いえ……」

「ああ、ストライクアーツの練習中か。ん？ あれはミウラか」

「お知り合いですか？」

「まあな。八神家道場の通い子だよ。時々俺も見ることがある。あいつも今年初参加するそうだし」

「そうなんですか……」

少し変わった型だけど、動きや練度が分かる。

しばらく見てると、今度は目標から距離を置き……。

一瞬の動きと鋭い蹴りで、目標物を破壊した。

「あ、ああ……。またやつちやつた……。!!。せつかく師匠とヴィータさんが立ててくれたの〜!!」

霸王流の歩法ともストライクアーツの踏み込みとも違う。

だけど速い!!

それに、蹴打のあの威力——。

こんな所にもあんなすごい子が……。

「挨拶でもしていくか?」

「いえ、練習の邪魔をしては……」

初参加の子でもあのレベル——。

ノーヴェさんやフィルさんの言うとおりだ。

——インターミドル。

今の私達じゃ全く通用しない——。

i f e n d i n g

i f e n d i n g キヤロ

あたし達は、ゆりかごに残されたファイル達を助けに行くため、JF705に乗ってゆりかご制空権まで来たが、突入出来るメンバーはあたしと、後一人が限界だった。救出して連れてくるスペースの関係上、これでもきついくらいだった。

「ティアさん、わたしを一緒につれてってくださいませんか……」

「なにいつてんの!! キヤロだつてかなりのダメージなんだよ!! だつたらあたしが行く!!」

「スバルさん、ここでスバルさんが抜けてしまったら、誰がルーちゃん達の守りをするんですか。ヴァイス陸曹だつて、いつまでも遠隔操作でやるわけにはいかないんですよ」

キヤロの言うとおり、ここでスバルまで抜けたらヘリの守りが薄くなってしまう。ギンガさんの怪我也大きいし、ルーテシアだつて魔力が殆ど残っていない。



「だけど……」

「それに、エリオ君達のおかげで、戦えないほどダメージは受けてません。だからお願いです!! 一緒に連れてってください!!」

キャロの目は真剣そのものだった。

今のキャロは、誰にも止められない――。

「……分かったわ。行きましょう。キャロ」

「ティアさん!!」

「スバル、ギンガさん達のこと、頼んだわよ」

「任せてよ、ティア!!」

「……キャロ、ファイルのことお願いね……」

「ギンガさん……はい!!」

「みんな……。キャロに自分の残った魔力を渡して。少しでも力にして……」

へりに残るメンバーは、キャロに残った魔力を託した。

自分たちが行けない分まで、彼女に託した。

そのおかげで、キャロはフルパワー状態になる。

「みなさん、ありがとうございます。絶対ファイルさん達を連れて戻ってきます!!」

「キャロ、行くわよ!!」

「はい!!」

あたしは、ヴァイス陸曹の合図でスーパーサンダーのバーニアを全開にし、ゆりかご内に突入した。

\* \* \*

「くそつたれ……」

クアットロを倒し、ヴィヴィオを救出に成功したが、聖王が失われたことにより、防衛システムが起動してしまい、AMFの濃度がさらに高くなってしまった。

何とか残っていたメンバーは、隔壁が閉じる前に、外に出すことが出来た。

俺が一人残ってやろうとしてるのは、玉座の間にあるゆりかごのコアの破壊。

このコアを破壊しないと、バリアが完全に解けず、アルカンシエルが通らない……。

なのはさんはブラスタアのせいで戦闘不能。

はやてさん達も、ユニゾンが解けてしまい、戦うことは出来ない。

「砲撃も、斬撃も今のままじゃ通じない……。ブラスタアもファイナル・リミットまで解放しているってのに……。」

ブラスタアも3までを解放して、もてる技を全てぶつけてみたが、コアには傷一つ付かない。

《《マスター……》》

「もう……これしかないか……。」

ポケットから取り出したのは、銀色のカートリッジ。

《まさか……スパイラルを!! 駄目です!! 死ぬ気ですか!!》

「……元々、ゆりかごを止めるのが、俺の役目だったんだ。それに……」

ティアもスバルも、そしてキャロもみんな助けることが出来た。

俺の役割は、あと一つだけ――。

「俺がしてやれることは……これくらいだから……」

そして、俺は――。

スパイラルを起動させるためのカートリッジを挿入する。

「プラスターシステム・コードファイナル……スパイラル。起動!!」

起動と同時に、俺の魔力は爆発的に跳ね上がる。

だが、それは生命力を変換しての一回限りの魔法――。

「……………うつ、くつ……………。生命力がどんどん……………吸い取られるのが分かる」  
《もう、止めてください!! このままじゃ本当に死んでしまいます!!》  
「……………死んだっていいさ」

俺の役割はこれで終わる――。

そうすれば、みんなのいる所へいける。

俺は、最後の魔法を撃つためトリガーに指をかけ――。

「スターライト……………」

トリガーを引こうとしたとき――。

「だめですツツ――!!」

突然誰かが、俺にしがみつき、プリムに手をかけ――。

その人物は……。

\* \* \*

「はあ……はあ……。間に合いました……」

何とかここに突入したとき、わたしが目にしたのは――。

あのシステムを使おうとしているフィルさんの姿。

わたしは、フィルさんに必死にしがみつき何とか止めることが出来た。

「キ、キャロ!? どうしてここに!?!」

《転送魔法ですね。それだったら壁とかは関係ありませんから!!》

「はい……。ティアさんと一緒に壁の外まで来て、そこから転送魔法の応用でここに来たんです」

「そうだったのか……。なのはさん達は無事なのか?」

「ティアさんが、みんなを連れて脱出してるはずですよ。フェイトさんも一緒ですよ……」

「そっか……。よかった……」

こつちをみて、フィールさんがフツとした笑顔で――。  
でも、その笑顔はとても悲しい笑み。

「お前も早く脱出しろ。転送魔法でみんなの所に帰るんだ……」  
「いやです!! 一人にしたら、またあのシステムを……スパイラルを使おうとします!!  
そんなのぜったいにいやです!!」

「なんでスパイラルのことを……。まさかプリム……。お前!!」  
《……話しました……。彼女だけに全てを……》

この決戦前、プリムから聞いていたスパイラルのこと。  
それを聞いて、わたしはプリムだけには話した。

わたしの気持ちを――。

「何でキャロに話したんだ!! 答えろ!!」

《マスター……分からないんですか!! 彼女の気持ちか!!》

「キャロの……気持ち？」

《そうですね!! 彼女はマスターのことを……》

「待って、プリム!!」

《キャロ……》

プリム、ありがとう。

でも、これだけは、ちゃんと自分の口から言うよ。

たとえ、どんな結果になっても——。

「……………本当は、こんな形で伝えたくはありませんでした。だけど、今伝えなくちゃ、永遠に言えないから……」

後悔だけはしたくないから——。

「フィルさん……わたし……フィルさんのことが大好きです……。誰よりも……誰よりも大好きなんです!!」



だから……。

死んでも良いなんて……。

いなくなっても良いなんて、言わないでください——。

「……………ありがとうな、キャロ」

フィルさんはわたしを、ぎゅつと抱きしめてくれ——。

「……………俺は、今まで自分のことを愛してくれる人なんて、死んでしまったティア以外ないと思っていた」

それは違います——。

フィルさんが、どれだけみんなに思われてるか……。

「だから、俺は仲間のためなら、命を捨てるつもりでいた。でも、俺にもこうして思ってくれる人が……いたんだ……」

「フィルさん……」

「キャロ……」

わたしはフィルさんの瞳を見つめる――。

そして……。

わたし達はどちらからともなくキスをする。

「これが……俺の気持ちだから……いい加減な気持ちで、こんなことはしないから……」

もう、わたしは涙を抑えることが出来なかつた。

こんな……こんな嬉しいことはないから……。

「……泣かないで。キャロが泣いてると……俺も悲しいから」  
「だって……フィルさんと両思いになれるなんて……思ってませんでしたから……。わたしとフィルさんは年も離れてますし……。それにわたし……フェイトさん達に勝てる物なんて無いですから……」

わたしは、フェイトさんやティアさんみたいに綺麗じゃないし、料理だって出来ない。何も取り柄がないわたしじゃ、フィルさんとは釣り合いがとれないから——。

「キャロ、恋愛に年齢は関係ないよ。大人だって、相手のことを思いやれなければ、すぐに裏切るし、キャロの年齢くらいの人だって、本当に相手のことを思えば、俺は良いと思う」

「それと、フェイトさん達に勝てると思わないこと。キャロには、キャロにしか無い魅力があるんだから……」

「はい♪」

フィルさんにそう言ってもらえて本当に嬉しい。

わたし、フィルさんを好きになって本当に良かったです!!

《あの……ラブコメ全開の所、申し訳ないんですけど、今どういう状況か分かっていますか》

「あつ……」

「あうう……」

《まったく……。いちやつくのは、これが終わってからにしてくださいね》

\* \* \*

「フェイトさん!!」

「ティアナ!! どうしてここに?」

「何とかあの黒竜を片付けて、フェイトさん達の救援に来たんですよ。なのはさん達は先に脱出していますよ」

「そう、よかつた……。ファイルは、ファイルはどうしたの!?!」

「ファイルの方は、キャロが行ってます。後は、キャロを信じましょう……」

「キャロ……」

キャロ……ファイルのことをお願いね。

二人とも、絶対一緒に帰ってくるんだよ。

\* \* \*

「ファイルさん、わたしに考えがあるんですけど」

「考えて？」

「ヴォルテールの力を……使えます」

「ヴォルテールの？ だけど、ここに召喚は無理だろう」

確かに、ヴォルテールの力ならコアの破壊は可能だろう。

「だけど、ここにあの巨体は召喚は無理だ。」

「ヴォルテールそのものを召喚するんじゃないんです。ヴォルテールの力を借りるんです」

《キャラ、もしかして……》

「はい……わたしがヴォルテールの力をここに召喚します。だけど、わたしには砲撃のスキルはありません……。そこで……」

「俺が、プリムを使ってその力を解放する……か」

「その通りです。だけど、この方法ですと、ファイルさんにかんりの負担が……」

キャラが目には涙をためて、俺に言う。

「何を今更、ブラスター3だって使ってるんだ。それに……」

——約束したしな。

ずっと一緒にいるって……。

コアを破壊するため、俺はブラスター3を解放し、キャラは自己ブーストをかけ、両手にはめられたケリユケイオンの水晶が、強い光を放つ。

そして、その膨れ上がる魔力は、以前とは比べ物にならないほど強大なものだった。

「天地貫く業火の咆哮、遙けき大地の永遠の護り手。我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者……竜騎招来、天地轟鳴!!」

ケリユケイオンの放つ光がよりいつそう強くなり、キャロの頭上数メートルに、巨大な魔法陣が描かれ――。

そして……。

「その偉大なる力を我に!! ヴォルテール!!」

ヴォルテールの力が召喚され、俺は、その力を集束する。だが、あまりの力に俺は立っていられなくなる。

「なんて魔力だ……制御するのが精一杯だ……」

ちよつとでも気を抜いたら、暴発させてしまう。

俺は、歯を食いしばって制御に集中するが――。

《頑張ってください!! キャロだって苦しいですよ。これだけの力を召喚して、負担だって大きいんですからね!!》

「……キャロ」

キャロの方を見ると、苦悶の表情を浮かべている。

あの小さな身体でこれだけの力を召喚したんだ。

その負担度は、俺がプラスターを使っているのと、そう大差ない。

「ここで俺がやらなかったら……大バカ野郎だ!! やるぞ、プリム!!」

プリムをブレイズモードし、プラスタービットを展開させて、再びヴォルテールの魔



力を集束する。

ブラスタービットもひび割れを起こし、限界寸前だが何とか制御に成功する。

《やりますよ、マスター!!》

「いくぜ……」

集められた魔力は、銃口とビットに集まり、砲撃の発射準備は完了した。

人と竜の魔力の融合——。

そして——。

俺とキャロの二人の願い……。

この一発に全てをかける!!

「スターライト!!」

「ギオ・エルガ!!」

俺が集束した魔力と、ヴォルテールの魔力。

二つの魔力は融合し、炎熱効果を伴う大威力砲撃となり、コアに放たれた。

そして……。

コアを守っていたバリアは、砲撃の炎熱で完全に溶かされ、コアは跡形もなく消え去り、ゆりかごも完全に機能をストップした。

「はあ……はあ……やった……」

「やり……ました……ね……」

《《キヤロ!!》》

キヤロは全ての力を使い果たし、その場に倒れてしまう。

「大丈夫か!! キャロ!!」

「大丈夫です……ちよつと……疲れただけですから……」

「そっか……」

見たところ、魔力は空っぽだけど、その他は大丈夫だった。

これなら休めば大丈夫だ。

「心配したんだぞ……」

「えへへ……。普段、無茶しているファイルさんに言われてしまいましたね」

「つたく……」

俺はキャロのおでこを、人差し指でツンとつつく。

まったく、心配かけさせやがって……。

でも、ありがとう——。

お前のおかげで、俺はスパイラルを使わないですんだんだからな。

「もうここには用はない……脱出だ!!」

俺は最後の力を使い、みんなのいるアースラにワープをする。

\* \* \*

「キャロ、ファイル!!」

ワープアウトしたところは、アースラのブリッジだった。

そこには、アルカンシエル・ノヴァの発射準備をしていたはやてさんがいた。

「二人とも無事か!! もうゆりかごには誰もいないんやな!」

「俺たちが最後です。遠慮無く発射してください!!」

「よっしゃ!! アルカンシエル・ノヴァ……発射や!!」

アースラから放たれたアルカンシエル・ノヴァは、命中するとゆりかごを中心に、ブラックホールが発生し、爆発するのではなく、そこを中心に飲み込まれていった。

そしてブラックホールが消えると、ゆりかごも完全に消滅する。

こうして、機動六課は誰も死者を出すこともなく、無事JS事件を終結させることが出来た。

だけど、ファイルはブラスターの反動で、入院することになった。

\* \* \*

聖王医療院

「ファイルさん、あーん」

「あ、あーん」

最初の頃は、ファイルさんは恥ずかしがって、自分で食べるからと言ってたのですが、わ

たしはあきらめずに、何度もあーんをして、やっと口を開けてくれるようになりました。

「どうですか？」

「うん、おいしいよ。キャロ」

「よかった!!」

わたしは、料理がそんなに得意ではありません。

だから、事件が終わった後、フェイトさんに何度も教えてもらって、やっとフィルさんに出せるくらいのお弁当が作れるようになりました。

「えへへ♪」

「どうしたんだ？ そんな、ふにやとした顔になって……」

「幸せなんですよ。こうして大好きな人と一緒にいられるんですから……」

こうして、フィルさんと一緒にいられるこの一時は、本当に大切な時間なんですよ。

「お、お前、よくそんなこつぱずかしいこと、平気で言えるな……」

「言えますよ。だって、わたしファイルさんのこと、愛してますから……」

一度言ったら何度だっていえます。

ファイルさんのことを、世界の誰よりも愛してますって——。

「俺も……一人の女の子として、愛してるのは……キャロだけだから……」  
「ファイルさん……」

その言葉にわたしは嬉しくなり、わたしの方からファイルさんにキスをしていた。最初は、ただ唇が触れあうだけのキス。

でも、それだけじゃいやなんです——。

わたしはもっと深く愛したくて、ファイルさんと大人のキスをする。

このキスの仕方は、アルトさんが持っていたティーン誌で覚えた物。

このキスを覚えてからは、わたしは何度もしてもらってる。

このキスの方が、二人の心がつながっているっていっぱい感じられますから――

\* \* \*

「ティア……どうしよう。これじゃ、中に入れないよ」

「つたく、あの二人は……」

ファイルのお見舞いに来たあたし達は、中に入ろうとしたが、キャロとファイルのキスシーンに遭遇してしまい、中にはいることが出来なかった。

「あーあ、キャロに先を越されるなんて……」

「ティア……」

「結局、ファイルに告白出来なかったあたしの負けよ。キャロは勇気を出してあいつに告



白した。だから二人は、つきあってるんだしね」

もし、あたしがほんの少し勇気を出していれば、結果は変わっていたかもしれない。  
でも、それはi fの物語だから――。

「ねえ、ティア」

「何よ」

「今日は飲まない。朝まで……」

「そうね……酒は無理でも、やけ食いは出来るわね」

「うん!!」

フィル、キャロのこと大切にしなさいよ。

キャロ、フィルのこと支えてあげてね……。

\*

\*

\*

「フィルさん、起きてください……………」

「う……………」

「起きませんね……………。こうなったら……………」

わたしはフィルさんの頬にそつと近づき、キスをする。

「……………おはよう……………キャロ……………」

「おはようございます……………フィルさん」

わたしとフィルさんは六課解散後、フェイトさんに正式に交際を話して、一緒に住んでいます。

フィルさんは、フェイトさんの元で執務官補佐をして、2年前に執務官になって、忙しい毎日を過ごしています。

そしてわたしは休職という形で、今は専業主婦をしています。

もう少し落ち着いたら、わたしも復帰をして、一緒にパートナーとしてやっていけたらと思っています。

あと、結婚は、わたしの年齢が結婚出来る年齢になっていないので、同棲という形になっていますが、わたしが16歳になったら籍を入れる予定です。

「今日はせっつかくの休みだな。キャロ、どっかに行くか?」

「それでしたら、ここに行きたいです」

「なるほど、クラナガンのケーキシヨップか。そうだな、俺も興味あるし、サンダーで行くか」

「はい!!」

わたしはフィルさんの後ろに乗り、しっかりとしがみつく。

その時に、自分の胸をしっかりと密着させて、フィルさんにわたしを意識してもらう。

「……わたしの胸で、ちゃんと……感じますか?」

「バ、バカツ!! 何言ってるんだよ!?!」

「だって……わたし、フェイトさんみたいに、おっぱい大きくないから……」

「。こうでもしないと、フィルさん、わたしのこと女の子って思ってくれないから——  
せめてルーちゃんみたいに、胸が成長してほしいな……。」

「そんなことしなくとも、充分ドキドキしてるっての……。」  
「えへへ〜♪」

もっと、求めてくれて良いんですからね♪  
女の子って、フィルさんが考えてるより、ずっと大人なんですよ。

「とにかく今は勘弁してくれ。ケーキ食べに行きたいだろう」  
「はい!!」

それでもわたしは、さらにギュツと抱きつく。  
だって、こうしているとフィルさんの思いがいっぱい伝わってくるから——。

「フィルさん……」

「ん？ 何だ？」

「わたし……すつごく幸せです!!」

フィルさん、わたしはあなたが一緒にいてくれるだけで幸せなんです。

わたしはまだ、フィルさんにふさわしい女の子になれてませんが……。

いっぱい頑張つて、可愛い恋人になりますから——。

そして——。

女の子は愛する人いっぱい求めてもらえれば、もっと求めてもらえるように、頑張つて綺麗になります——。

だからフィルさんも、わたしのことをいっぱい可愛がってくださいね♪

## if ending なのは

パーティーが終わり、みんなそれぞれの部屋に戻っていたが、何となく眠れなかった  
ので、俺は外に出て風に当たっていた。

「うーん……良い風だな」

今までクアツトロ口のこと、ずっと戦っていたからな……。

こんな気持ちでいられるなんて思わなかった。

「こんな所で、何してるの？」

「なのはさん……」

俺が夜風に当たっていると、なのはさんがやってきた。

「ちよつと……眠れなくて、夜風に当たってたんですよ。なのはさんは？」

「わたしも一緒。何か興奮して、眠れなくてね」

「ヴィヴィオは？」

「部屋で眠ってるよ。フェイトちゃんと一緒にね。だけど、合い鍵も持ってないから、部屋に入れないんだ」

「あらら……」

フェイトさんらしくないミスだな。

仕事で、よっぽど疲れちゃったのかな。

\* \* \*

「最近……どうしたんですか？」

「さつきも……普段なら、あんな事言わないのに、何か……あつたんですか？」

いつもと、同じ様にしていたつもりだったのにな……。

隠しきれない……な。

「ねえ、ファイル……。パーティーで、わたしに言ってくれたこと……。覚えてる？」

「ええ……」

「あの時……。自分の結婚のことで、ファイルに相談したよね。だけど、ファイルは相手が、外見だけで見るような人なら、結婚なんかしない方が良いつて言ったよね」

「忘れてください……。あれは……。俺の勝手な思いですから……」

忘れられないよ……。

だって、あの言葉は本当に嬉しかったんだよ。

ティアナ——。

わたし、あなたにずっと遠慮していたけど……。

ごめんね……。



これ以上、自分に嘘をつきたくないから……。

嫌われたっていい……。伝えよう。

自分の本当の思いを——。

「………すき………ファイルが好き!! 大好き!!」

「好きなの!!」

——とうとう言っちゃった。

「でも………だめだよね」

ファイルは亡くなったティアナのことを好きだから、この気持ちは抑え込んでしまおうって思ってた。

——でも、無理だった。

ゆりかごで、ファイルが死ぬかもしれないと思ったときから、ずっと自分の思いを抑えきれなくなっていた。

自分の大好きな人がいなくなってしまう。

そう思ったら、胸が張り裂けそうになる。

気持ちを隠せば隠すほど、胸がどんどん苦しくなって……。

ティアナのことが好きだって、知っているのに……。

ごめんね……。

わたしの思いなんて、あなたにとって邪魔なだけだよね……。

\* \* \*

「……なのはさん」

ずっと考えていた——。

なのはさんと出会い、今まで一緒に戦ってきた色々な事があった。辛いこともあったけど、それ以上に楽しい思い出があった。

ティアとの模擬戦で、お互いの意見をぶつけ合ったこと。

ヴィヴィオが来て、一緒に料理をしたり、ご飯を食べたりしたこと。

ヴィヴィオがクアットロに誘拐されて、俺となのはさんが一緒に助けたこと。

そして——。

ゆりかごで死にかけて、意識が戻ってから、なのはさんは本当に俺のためにいろいろしてくれた。

身の回りの世話だけでなく、精神的に不安定になっていたときも、ずっとそばにいてくれた。

そんな思い出の中心に、いつもなのはさんがいた。

何よりも、なのはさんと一緒にいるとあたたかい気持ちになれた。

そんななのはさんだから――。

「俺も……なのはさんのことが……好きです」

「で、でも、それじゃティアナは……」

「ティアのことは、俺にとって大切なパートナーでした。大切だし、好きだったけど、それは恋人としてでははないです」

今なら分かる……。

あのときティアが俺に幸せになってほしいって、言った意味が……。

「いつも笑顔でいてほしいと思うのも、そばにいてほしいって思うのも……なのはさん……あなただけです……」

「ファイル……」

\* \* \*

ファイルの言葉に、わたしは今度は、嬉し涙を押さえられなかった。こんなにも強く、誰かに何かを、望んだ事なんてなかった。

これが好きということ……。

これが……恋なんだ……。

「ファイル……」

「今日は……離れたく……ない……」

「なのはさん……」

やっと、フィルに自分の気持ち伝わったんだ。  
今日は、ずっと一緒にいたいから――。

\* \* \*

「そういえば……何で、俺のことが好きになったんですか？」

「ん……」

「表裏がないところかな」

「そうですか？　かなりありますよ。みんなのこと、かなり騙してましたし……」

「騙してたといっても、それはスカリエツティに、ばれないようにするためだよ。普段のフィルは、正直だよ。ヴィヴィオもすごく懐いているし……」

「わたしには無いものだから……すごく憧れる……」

「聞いてくれるかな……わたしの話……」

なのはさんは自分の幼少期のことを語り始めた。

かつて父親が事故にあつて、それで家族が大変なことになり、自分も何か手伝えることはないかつて頑張ったのだが、みんな大丈夫だからと、自分は力になれなかつたこと。せめて自分が出ることは、良い子でいること。

それで、それから良い子でいることにしていた。

そして、いつの間にか、本音でぶつかることが、言葉で話すことが怖くなつてしまつていた。

だから、あの時、自分の中で思つていても、ティア達に伝え切れていなかった。フエイトさんややてさんにも、相談出来ずに……。

「だけどね。もう、良い子でいるのはおしまい……」

「フィルのことが、本気で好きだから……」

「なのはさん……」

俺はなのはさんをぎゅつと抱きしめ、まっすぐに瞳を覗き込むと……。

なのはさんは瞳を閉じて……。

そして、俺は……。

なのはさんの唇に、キスをする。

最初は唇が触れるだけのキス。次第に互いを求め合うキスになり、息継ぎを繰り返しながら、何度も互いを求め合う。

キスが終わったときには、互いの間に銀色の糸が出来上がっていた。

「抱いて……ファイル……あなたのぬくもりを……もつと感じたい……」

「なのはさん……」

「なのは、って呼んで、ファイル……」

「なのは……」

「ファイル……」

俺は、なのはの上着を脱がし、ブラの上からそつと、形の良い胸に触れる。

「あっ……んっ……」



なのはの甘い声に、俺の理性が段々と崩れていくのが分かる。

「えへへ……。わたし、胸には自信あるんだよ」

「うん……。大きいし……。それに、やわらかい」

「いっぱい……。いっぱい触って良いんだからね。わたしの胸も身体も……。全部、ファイルのなんだからね」

その言葉に胸がいっぱいになる。

ここで遠慮するのは、却って失礼だ。

俺は、そのままブラを取り、なのはの身体を隅々まで愛し——。

「……はあ……。はあ……。もう……。いいよ。きて……。ファイル」

そして、俺たちは……。

一晩中、お互いの気持ちを確認め合った。

\* \* \*

「あ、目が覚めたんだ。おはよう、ファイル」

あれから、わたしとファイルは何度もお互いの気持ちを確かめ合った。初めてで痛かったけど、ファイルに抱かれてとつても嬉しかった。気持ちが通じ合うって、こんなにあたたかいんだね——。

「あ、ああ、おはようございます。なのはさん……」

「むう——」

「えっ？ どうしたんですか？」

どうしたんですか？ じゃないよ!!

昨日は、ベッドの上じゃ、ちゃんとなのはって呼んでくれたのに!!

「なのはさんじゃなく、なのはだよ!! それと敬語は禁止!! もう一度!!」

「……おはよう、なのは」

「うん♪ おはよう、フィル」

やっぱり、大好きな人に名前でもらうっていいよね。  
お願いついでに、もう一つ甘えちやおうかな♪

「じゃあ、おはようのキス〜♪」

「えっ?」

「………して………くれないの………」

フィルは、戸惑ってなかなかキスをしてくれない。  
もう……。照れ屋なのは分かるけど……。

こうなったら――。

「んっ!?! んんんっつ!!」

わたしのほうから、ファイルにキスをしちやった。だつて、ファイルからしてくれないのが悪いんだからね——。

「あ……あの……なのは。そんなことされると、俺も理性が持たなくなるから……」

「……いいよ。そのときは、またいっぱい……しよ……」

「なのは……」

「ファイル……」

今度は、ファイルの方からキスをしてくれた。

でも、キスだけじゃ満足しきれなくなり、わたしとファイルは、またベッドで一つになる。

ファイル、いっぱい……いっぱい抱きしめてね♪

\* \* \*

「おはよう、なのは」

「おはよう、フェイトちゃん」

「なのは、昨日はごめんね。部屋の鍵、私がつけていたから、入れなかったでしょう」

「大丈夫だよ。昨日はフィルの部屋に泊まったから……」

「ぶはっ!!」

しまった!! 話の流れで思わず言っちゃった。

フェイトちゃんも、飲んでいたコーヒーを吐いちゃったし……。

「なのは……どういうことか、話してくれるよね」

「にや、にやははは……」

フェイトちゃんのアマリの迫力に、わたしはもう隠せないと悟った。

そして、わたしは昨日のことを、フェイトちゃんに話した。

「……なるほどね。やっと、言ったんだね……」

「えっ? もしかして、フェイトちゃん……」

「知ってたよ。でも、これはなのはが自分で、気づかなきゃいけないことだからね……」  
「フェイトちゃん……」

「でも、良かったね。両思いになれて……」

「うん……」

駄目だと思っていた恋——。

フィルと両思いになれて、本当に嬉しかった。

だって、こんなに優しい気持ちになれるんだから——。

フェイトちゃんと話していたら、ヴィヴィオが起きてきて、こっちにやってきて……。

「なのはママ……」

「ヴィヴィオ!! ただいま」

「おかえり……ねえ、フィルパパは？」

「あつ……その……えつと……」

わたしがなんて言ったらいいか困っていたら、フェイトちゃんが……。

「ヴィヴィオ。フィルなら、今日なのはママの部屋に来てくれるって」  
「本当!!」

「ちよ、ちよつと、フェイトちゃん!!」

「本当だよ。だから、今日一日良い子でいようね」

「うん!!」

「なのは、今日私は、泊まりの出張に行くから、好きにして良いよ。じゃあね!!」  
「フェイトちゃん!! もう……」

絶対嘘だ。こんな急にそんな仕事が入るわけ無いじゃない。  
でも……ありがとう……。

\* \* \*

「こんばんは、ヴィヴィオ」

「あつ、ファイルパパだ!!」

「パーティーの時、一緒にいてあげられなかったからね。今日は一緒にいよう」  
「わーい!!」

実は、ここに来る途中、フェイトさんに会って……。

『今日は戻らないから、なのは達と一緒に過ごしてね』

そう言ってたけど、明らかにおかしい。

もしかして、フェイトさん。俺たちのこと——。

「いらつしやい、ファイル」

「お邪魔します……」

「違うよ」

「えっ？」

「ただいまだよ。これから、わたし達は『家族』になるんだから……」



家族か……。

そうだよな……俺もヴィヴィオのパパになるんだからな。

「……そうですね」

「それと、前も言ったけど、普段は敬語は禁止!! 家族の間で、そんな他人行儀はしないの!!」

「きんし——!!」

なのはとヴィヴィオの二人に、そう言われてしまったら、敬語は止めるとするか。

「それじゃ、食べてね」

「わーい!!」

なのはが用意していたのは、ヴィヴィオの大好きなハンバーグを始め、クリームシチューと野菜サラダといったメニューだった。

俺も、ヴィヴィオの大好きなケーキを作ってきた。

「「いただきます!!」」

「はい、ヴィヴィオ。あーん」

「あーん」

「美味しい?」

「うん!! おいしい!!」

なのはがヴィヴィオに、ハンバーグを食べさせてあげている。  
うん、こういった光景は良いよな……。

「ヴィヴィオ、俺のも食べるか?」

「うん!! 食べる!!」

「じゃ、あーん」

「あーん」

「美味しいか?」

「おいしいっ!!」

ヴィヴィオは、俺が食べていたピーマンを食べた。

実は、苦手だったピーマンも大分克服してきている。

そうやって、娘が成長しているのを見ると、すごく嬉しかった。

「さて、そろそろ、ケーキも出そうかな」

「「ケーキ？」」

「ああ、さつき持ってきた箱はパウンドケーキさ。なのは達と食べようと思ってね」

俺たち三人はパウンドケーキを食べ、その後は三人で一緒にゲームしたり、テレビを見たりして過ごした。

夜も遅くなり、俺はそろそろ戻ることにしたのだが……。

「フィルパパ……帰っちゃうの？」

「もう、遅いしな。なのはママにも悪いしね」

「そんなこと無いよ!! お願い、今日はヴィヴィオと一緒に、寝てほしいなあ……」

「パパ……」

二人のお願いに、俺はNOとは言えなかった。

「それじゃ、今日は三人で一緒に寝ようか」

「わーい」

\* \* \*

「ヴィヴィオ……寝ちゃったね」

「そう……だな」

あの後、わたしとフィルとヴィヴィオの三人で寝ることになり、ヴィヴィオが眠るまで、フィルが絵本を読んであげていたのだけど、それでも、眠る気配がなかったので、わたしが子守歌を歌ってあげて、ようやく眠ってくれた。

「こうしてみると、本当かわいいよな。ヴィヴィオ」

「うん……。ねえ……。ファイル……」

「ん、何？」

「ファイルは、これからどうするの？ 六課が解散してから……」

「二つ考えてるんだ。一つは、このまま管理局に残って、身体が治り次第、執務官か捜査官を目指していく……」

それは止めてほしかった——。

もう、ファイルにあんな目にあつてほしくない。

愛する人が死にかけるのを見るのは、もういや!!

「もう一つは……管理局を辞めて、もう一つの夢だった喫茶店を開く」

管理局を辞めても、ファイルだったら大丈夫だよ。

もし、本当にやめてくれるのなら——。

「……それだったら、わたしと一緒にやらない。喫茶店……」  
「なのは？」

「正直ね。わたしも、今までの無理がたたって、そう長くはやれないと思うの。わたしの  
思いは、ティアナやスバル達にちゃんと伝わったし、ティアナ達なら、いつかわたしを  
超える魔導師になれるから……」

「……本当に、それでいいのか？ 空を飛ぶのは、なのはの生き甲斐だったじゃないか  
!!」

確かに、空を飛ぶのはわたしの生き甲斐だったよ。

でも、それ以上に大切なことだってあるんだよ——。

「なのは……俺は……」

「勘違いしないでね。これは前から考えてたことなの……」

多分……やれても、後、4〜5年くらいだと思う。

だったら、完全に駄目になる前に、辞めようと思ったんだ。

ヴィヴィオのためにもね……。

「分かった……そこまで思っているなら、もう止めないよ」  
「ありがとう……」

これはちょうど良い機会なのかもしれない。

ファイルも、わたしも限界以上のことをしてきたのだから――。

「じゃ、そのために一生懸命頑張らなくちゃな……」

「そうだよ、がんばってね。ファイル……」

「ああ……俺には、こんなにかわいい彼女がいるんだから……」  
「……ばか」

ファイルのばか……。

そんなこと言ったって、なにも出ないんだからね。

\* \* \*

## 4年後

カランコロン……。

「いらつしやいませ!!」

「おじやまするつすよ!!」

「おそいよ、ウエンデイ!!」

「いやあ、すまないっす。道が混んでいて……」

「もう、みんな来てるわよ」

店の中にいたのは、スバル、ティアナ、そして、N2Rのメンバーと、聖王教会に世話になってるオットーとデイードだった。

「まったく、相変わらずだな。お前の、そのいい加減さは……」

「ノーヴェにいわれたくないっす」

「何だと!!」



「お二人さん……店の中で喧嘩は止めてくれるかな……」

「ごめん……」

「ごめんっす……」

ノーヴェとウエンデイの喧嘩を止めたのは、この店のマスターである俺だった。

六課解散後、俺となのはは管理局を退職し、その時に、二人は籍を入れ、なのはの両親に挨拶にいったのだ。

最初は、翠屋で長期の修行をするつもりだったが、未来やこっちで学んできた基礎があり、修行は短期間で終わらすことが出来た。

その後、師匠でもある高町桃子さんのお墨付きをもらい、二人でミッドチルダに喫茶店を出したのだ。

店の方も、なのはのネームバリューが効いていたおかげで、お客さんがなのはを見たさにやってきた。

段々となのはの力でなく、味で評価されてきて、最近ではよく雑誌の取材を受けるよ

うになつていた。

そして、この店はティア達のたまり場にもなつていた。

「あいかわらず、大繁盛ね。今日だって、事前に予約してなかったら、大変だったんだから……」

「すまん、ティア。夜だと、比較的大丈夫なだけだな……」

「あんたが謝ることはないわよ。いいじゃない、繁盛してるのは……」

「モグモグ……そうだよ……モグモグ……」

「スバル……食べるか、しゃべるか、どっちかにしろ」

「だって、あたし普段は滅多に、これないんだから!!」

このメンバーが集まれるのは、あまりない。

大体スバルが、緊急出動でないことが多いからな……。

「まあまあ……いいじゃない。誰かに迷惑をかけてる訳じゃないしね」

「なのはさん!!」

「みんな、今日は楽しんでいってね。わたしもフィルムも、腕によりをかけて作るからね」  
「「「「「はい!!」」」」」」

\* \* \*

「ねえ……フィルム」

「何だ? なのは」

「この店やって……本当に良かったね……」

「ああ……」

喫茶店 『Amour éternel』

地球のフランスの言葉で、永遠の愛——。

その想いを込め、俺たちはこの店の名前にした。

この場所は、俺たちの夢の場所でもある。

みんなが楽しく、俺の作ったケーキや料理をおいしく食べてくれる。

そして、笑顔になってくれるのが、何より嬉しい。

ここでは、戦闘機人だからとか、そんなのは関係ない。

それは、スバル達を見れば、よく分かる。

そして……。

「いらっしやいませ〜」

「あつ、ヴィヴィオ!! 今日も手伝いな?」

「はい、パパとママのお手伝いです」

ヴィヴィオはこの喫茶店の制服に着替えて、ウエイトレスをしていた。  
学校が終わると、こうして手伝ってくれるのだ。

\* \* \*

「そういえば、この雑誌に載ってたぜ。かわいい母娘と素敵なマスターがいるって……」  
「何だそりゃ？　かわいい母娘は分かるが……」

「フィル、少しは自覚するつす。視線に気づかないんつすか？」

ここに來ている女性客の半数は、フィルの方を見ていた。  
相変わらず、この方面には疎いままである。

「……ノーヴェ」

「は、はい!!」

「その雑誌……見せて……」

わたしはノーヴェから雑誌を取り上げると、その記事の所を確認していた。

「な、なんか……なのはさん、こわいぞ……」

「ノーヴェ、なんでそんな余計な物を持ってきたのよ!!　なのはさんにそんな話したら、  
こうなるって分かってたでしょう!!」

「ごめん、本当に悪かった……」

「ティア!! そんなこと言ってる場合じゃないよ!! 見てよ、なのはさんを……」  
「あつちやあああ……」

「……そう……それで、女性客が増えたのね……」

わたしが、不機嫌オーラ全開でいたとき……。

「なのは」

「なに、ん……んんん!!」

「「「「「「ああつ!!」」」」」」

ファイルがいきなり、みんなの見ている前で、わたしにキスをする。

「……もう、いきなり、なにするの!!」

「そんなの気にするなって……俺が、愛してるのは、なのはだけだから……」

「……もう……ばか」

でも、わたしもだよ——。

愛してるよ……ファイル……。

\* \* \*

「ふう……やつと仕事が終わったな」

「そうだね……」

「まったく、パパ、ママ、あんな事もうしないですよ!! 店中でキスをするなんて、リオとコロナに見られたら、わたし、また学校でからかわれるんだからね!!」

「ごめん、ごめん。だけど、あんな雑誌を見たら……」

雑誌にはファイルのことが紹介されていた。

美味しいケーキを作る、イケメンマスター。

そんな風書かれていて、店に来ていた女性客は、大半ファイルのことを見ていた。

「もう、ママがパパのことを、大好きなのは分かるけど……ヤキモチはみつともないよ

♪

「ヴィヴィオ!!」

\* \* \*

「ごちそうさま。パパ、ママ、ちよつと外で魔法の練習してくるね」

「ちよつと待って、ヴィヴィオ」

「どうしたの、ママ？」

「ヴィヴィオも、もう4年生だよね」

「そうだけど……」

「実はな、なのはと話し合って、そろそろ、デバイスを渡していいんじゃないかって？」

「ほ……ほんとっつ!？」

そう言って、パパが持ってきてくれた箱を開けてみると……。

「これ……」

「ああ……」



箱の中に入っていたのは、銀色に輝く銃型のデバイス。  
パパの相棒のプリムだった。

「どうして!?! プリムは、パパの大切なデバイスなのに!!」

プリムは、パパにとって命と同じくらい大切なデバイス。  
そんな大切な物をどうして——。

「だからだよ。だからこそ、大切な娘のお前に託したいんだ。俺は4年前の傷が元で、魔法が殆ど使えなくなっちゃった……だから、お前に全てを託したいんだ……」

「それに、ヴィヴィオの聖王の力は、並かな物じゃ耐えきれないの。だけど、プリムなら、大人になっても使ってあげられるから……」

「パパ……ママ……」

「だから、受け取ってくれ……。俺となのはの思いを……」

パパは箱からプリムを取り出し、わたしに渡してくれた。

「……ありがとう……。パパ……。ママ……。大切にするね」

「そうしてくれ。プリム、今日からヴィヴィオがお前のマスターだ。よろしくな!!」

《分かってます、ヴィヴィオ、これからよろしくお願いしますね》

「うん!! よろしくね、プリム!!」

「ちなみに、あれも使えるように、データは組んでおいたから、後は自分が使いやすい形にするだけだ」

「実は、ずっと前から決めてるんだ。デバイスを持ったら、これにしようって、ずっと思ってたんだ!!」

\* \* \*

「マスター認証……。ヴィヴィオ・高町・グリッド」

「術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド……」

「いくよ、プリム」

《いつでも良いですよ、ヴィヴィオ!!》

「プリム、セーリーツト・アーリーツプ!!」

セツトアップがすむと、そこにいたのは聖王モードの姿をしたヴィヴィオだった。しかも、何故か俺と同じ銃型のデバイスも持っていた。

「な、な、な、な?!」

「やった!! 大成功!!」

セツトアップの成功に、なのはとヴィヴィオは、ハイタッチをしていた。

「なのは、お前、このことを知ってたのか?」

「うん、聖王モードのことは話したよね」

「それは知ってる。何度も見ているしな。だけど、何でわざわざ、おれと同じ銃を……」  
「実はね、ストライクアーツやってたんだけど、ある時、ファイルのことを……未来でのことを、ティアナから聞いて、それからティアナに、銃の使い方を見せてもらったの。ファイルのようになりたいからって……」

「そうだったのか……。なんか、複雑な気持ちだ」

ヴィヴィオはストライクアーツをしていたから、てつきりスバルのような機能を選ぶかと思っただけ、まさか俺と同じ射撃タイプになるとは……。

「パパ、勝手にティアナさんから教わっていたこと、ごめんなさい。でも、どうしてもパパのようになりたかった。だから、ティアナさんに教えてもらってたの……」

「別に構わないよ。なのはには話してたんだろ？」

「うん、ママも協力してくれたの」

「ったく、なのはも人が悪いぜ。俺に黙っているなんてよ……」

「これでおあいこだよ。フィルがヴィヴィオにプリムを渡すなんて、聞いてなかったんだからね!! さつき聞いて、びっくりしたんだから……」

「確かに。俺もなのはとヴィヴィオを驚かしたかったしな……」

「「あはははは!!」」

「頑張れよ、プリムを使いこなすようになるまで、大変だと思うけど、困ったら俺やなのは、もしくは師事しているティアに相談しろよ」

「うん!! ありがとう。パパ、大好き!!」

そう言ってヴィヴィオは、俺の胸に抱きついてきた。

不謹慎なんだけど、その姿だと、ヴィヴィオって、結構胸あるんだよな……。以前も似たようなことがあって、なのはがすつごくヤキモチ焼いたんだよな。相手はヴィヴィオなのにな。

「ああ——!! ヴィヴィオ、ずるい!!」

「だったら、ママもパパに抱きつけばいいじゃない。いつもしてるんだから♪」

ヴィヴィオの言葉に、なのははボンと手を叩いて、名案と言わんとばかりに……。

「それもそうだね。えい♪」

今度は、なのはまで俺の背中に抱きついてくる。

しかも、自分の胸をしつかりと当ててきてるし——。

「な、なのはまで……。つたく、この甘えんぼさん……」

「そうだよ、わたしもヴィヴィオも甘えん坊だもん♪」

「だよ♪」

ヤキモチ焼きで、甘えん坊の年上のかわいい奥さん。

母親に似て、やっぱり甘えん坊のかわいい娘。

そんな二人に囲まれて、俺は幸せをかみしめていた。

願わくは、俺たちの三人の愛が、永遠に続くように――。

## i f e n d i n g はやて

「ばかや……。何で一人で、やろうとしたんや……」

私はここに来る前、ユーノ君からゆりかごのことを聞かされた。

その内容の中に、この玉座の間にあるコアを破壊しないと、バリアが完全に消えず、アルカンシエルではゆりかごを破壊できない――。

そのことを唯一知っているファイルは……。

一人で破壊しようとしていた。

だから、私はファイルがウインド・プレスで、私達だけを脱出させようとしたとき、ファイルのジャケットをつかんで何とかこの場に残ることが出来たんや。

「今、魔力が使えるのは俺だけです。なのはさんも、ブラスターを使って戦闘不能だし、フェイトさんもない……………」

「……………だめなんか……………私じゃ……………フィルの役にはたたんか……………」

悔しいけど、なのはちゃんやフィルみたいに、デバイスにAMF対策を施していない私じゃ、役に立つことは出来へん。

魔力だけは、誰よりもあるのに、これじゃ無いのと一緒や……………。

「そんなこと無いですよ……………。はやてさんがいたからこそ、俺は……………」  
「えっ?…」

フィルは、ふと寂しい笑みを浮かべ……………。

あの笑み……………どこかで見たことがある……………。

「きつと……………これが最後だから……………」

私の脳裏に浮かんだのは、あのクリスマスのリインフォースの最後の笑顔……………。



「……俺……はやてさんのこと……大好きでした。はやてさんがいたから、機動六課に、また入ったんです……」

フィルの告白に、私は驚きを隠せなかった。

——嬉しかった。

フィルが私のことを好きでいてくれてたなんて……。

でも、それと同時にフィルが何をしようとしてるのかも分かってしまった。

あの時のリインフォースと同じ笑み——。

「フィル、あんた死ぬ気やな!!」

「……」

フィルは私の質問には答えず、懐から、銀色のカートリッジを取り出した。

《止めてください!! 『スパイラル』だけは使わないって、約束したじゃないですか!!》  
「なんや……そのスパイラルってのは？」

《スパイラルモード……ブラスタアの最終形態。体内にある生命力を、全て力に変えるシステム。そのカートリッジは封印を解くキーなんです。そして、使えば……》

プリムが言おうとしたことは、もう分かった。

スパイラルを使ったら、ファイルは!!

「……………はやてさん……幸せになつてくださいね……」

ファイルがカートリッジを挿入しようとしたとき……。

「だめええええ!!」

私は、ファイルの手を力一杯掴んでカートリッジを奪おうとするが、ファイルは、それでも強引にカートリッジを挿入しようとする。

「放してください!! これしか手段がないんです!!」

「放さへん!! ファイルがこれを捨てるまで絶対に放さへん!!」

こんなもん絶対に使わせへん!!

命を失うシステムなんて、私は絶対に許さへん!!

「はやてさん、あなたは六課の部隊長です。現状で何が有効なのか冷静に判断してください!! 今は……これしかないんです。それに……」

「……俺の命一つで……解決するんです。あの最悪な未来に比べたら……安い物です」  
「っ!!」

———今の言葉だけは許せへん。

自分の命を軽んじる言葉だけは!!

気づいたら私は、ファイルの左頬を……。

「はやて……さん？」

おもいつきり平手打ちをしていた。

「ばかや……。ほんまに……。ばかや。ファイルが犠牲になって……。それで、私が喜ぶとでもおもったんか……」

これ以上誰かが犠牲なるのは、もうたくさんや!!  
まして、自分の愛する人が、死ぬのは絶対嫌や!!

「お願いやから……。お願いやから……。死ぬなんて……。ぐす……。言わない……。で……」

最後の方はもう、涙声になっている。

「……ごめんなさい。俺があんなこと言わなかったら……」

それは違うで——。

ファイルが好きって言うてくれて……嬉しかったんやからね。

だから、私はファイルに自分の気持ちを伝える。

ありったけの思いを込めて——。

「さっきの告白の返事……しとらんかったな。私も……私も……大好きやで……」

すると、ファイルの瞳から一筋の涙が……。

「……こんな、俺を……好きになってくれ、て……あり、がとう」

こんななんて言わないで……。

あなただから、私は好きになったんやから——。

「お願い……。私のことを好きなら……。はやて、つて呼んでや……」

「はやて……」

「うん……」

私とファイルは、お互いに瞳を閉じ……。

そして……。

気持ちを確かめ合うように、キスをする。

\* \* \*

「えへへ〜♪ これでファイルと私は、恋人同士や」

「……まさか、はやてさんと、こうなれるとは、思ってたんですけど……」

「……その話し方……他人行儀でいやや。それと、さつきも言っただけど、さん付けも止め

てや……」

フィルの普段の話し方は丁寧なんやけど、それは他人と話すのと変わりない。  
恋人同士になってまで、そんな話し方は寂しい——。

「……分かったよ。はやて」

「うん♪」

私は、さつき引っぱたいてしまった左頬にそつと触れる。

「ごめんな……。痛かったやろ」

「……俺の方こそ……。ごめん。俺が言った言葉で、はやてを傷つけて……」  
「ええよ……。こうしてフィルが生きていてくれるんやから……」

フィルは、私をそつと自分の胸に抱き寄せる。

——温かい。

こうして大好きな人に抱きしめてもらっていると、ほんまに心が温かくなる。

《あの……お二人さん……盛り上がっているところ、大変申し訳ないんですが……》

「あっ!!」

「ご、ごめん!!」

私達は、プリムの声でハツとし慌てて離れる。

《まったく……でも、その様子でしたら、二度とスパイラルを使うなんて、言わないですしね……》

「ああ……」

フィルの瞳は、さつきとは違って光がある。

それは、生きようとする希望の光——。

「あのな、フィル、プリム……」



「何か……策があるの?」

「一つだけある……。だけど、これはファイルにもプリムにも、かなりの負担がかかってしまうんや。それでも……。やるか?」

正直、成功確率はかなり低い。

でも、これしか手段はないんや——。

すると、ファイルが……。

「なにを今更、スパイラルを使う覚悟があつたんだ。生きて帰るためなら、どんなことだつてやるさ!!」

《その通りですよ。例え、スターライトブレイカーとラグナロクを、同時に展開しろつて言われても、やって見せますよ!!》

「気づいてたんか!?!」

《スパイラルを使わない以上、それしか、私達に残された手段はありませんから……》

100%のラグナロクなら、破壊は可能だが、このAMFの状況下では威力は半減し

てしまう。

さらに、シユベルトクロイツはアームドデバイス。AMFの対策は何もしていない。そして、フィルはヴィヴィオを助ける時に、ブラスター3の、スターライトブレイカーを使ってしまったている。

今のフィルでは、ラグナロク以上の威力は出せない。

「二つの魔法の融合……ということか……」

「そういうことや……。それしか、あのコアを破壊する手段は……ない」

「……プリム、覚悟は出来てるか？」

《当たり前ですよ。私はマスターの相棒ですよ。このくらいのこと、やって見せます。それに私は、マスター達のこれからを……未来を……見ていきたいんですから……》

「プリム……」

ほんま、妬けてしまうほどのコンビやな。

互いのことを本当に信じ合っている——。

きつと、未来のティアナともこんな感じやったんやろうな——。

私もティアナやプリムに負けないように、ファイルのこと支えんとな。

\* \* \*

俺は、プリムをブレイズモードにし、銃口をコアに向ける。

今回の方法は、二つの魔法の融合。

だから、プリムは俺とはやての魔法の術式を、同時に処理しなければならない。

《大丈夫ですよ……。絶対成功させて、みんなでアースラに帰りましょう……。》

「……………そう……………だな……………」

——正直不安だった。

こんな事、今までやったことがないんだ。

失敗して、はやてを死なせることになったら……。

「ファイル……」

はやては、プリムを握っている俺の手に、そつと自分の手を添え——。

「大丈夫や……。一人やないんや。私も、そしてプリムもいるんや……」  
「はやて……」

——ファイル。

あたしもついてるから……頑張つて。

そして——。

はやてさんのこと幸せにしなさいよ……。

気のせいじゃない——。

確かにティアの声が聞こえた。

「……………ありがとうな、ティア」

俺には大切な人達がそばにいてくれる……。

これ以上のサポートはない。

「やるぞ!! はやて、プリム」

「うん!!」

《はい!!》

「いくぞ!! ブラスター3ツツ!!」

俺は、最後の気力を振り絞って、ブラスター3を起動させる。

度重なる使用で、身体はもう限界に来ていたが、スパイラルを使うよりは遙かにマシだ!!

そして、すぐさま俺たちは魔法詠唱に入る——。

「響け、終焉の笛……ラグナロク!!」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ!! 貫け……閃光!! スターライト!!」

銃口にミッドとベルカの二つの魔法陣が展開され、その魔法陣は一つに融合する。二つの白銀の魔力が融合し、その力は計り知れない物になっていた。

だが、その力に耐えきれなくなり、プリムのフレームはひび割れを起こしていた。

「プリム!!」

《心配しないで……ください。私は、このくらいのことでは壊れたり……しません!! だから、全力で撃ってください!!》

ここで、中止するのはプリムを侮辱することになる。

プリムは俺たちを信じて、こんな危険な賭に乗ってくれたんだ。

「ファイル……」

「はやて？」

「一緒に撃とう……。トリガーを一緒に引こう……」

そういつてははやては、プリムのトリガーに自分の指を入れた。

「……ありがとう……。はやて」

「何言ってるんや。好きな人の苦しみは、一緒に分かち合うもんやで……」

もう、俺に迷いはない。

俺とはやては最後の魔法詠唱に入る

「スターライト・ラグナロク……」

「ブレイカーツツ——！！」

放たれた砲撃……。

白銀の奔流が、コアの強固なシールドをブチ抜き……。

そして――。

コアは跡形もなく消し去り、その後ろは融合魔力の力で、外にまで穴が通じていた。

「フィル、脱出するで!!」

コアが無くなったことによって、魔力結合が復活し、はやてが俺を抱え、外に飛び出した。

「脱出できたはいいが、あのゆりかごを完全に消さなきゃ……すべてが終わらない」  
「そうやったな。フィル、最後の魔力で私をアースラのブリッジにワープをお願い!!」

俺は、ルキノさんの魔力反応を頼りに、アースラへワープをした。



\* \* \*

「はやてさん!!」

「八神部隊長!! フィル!!」

フィルが、最後の魔力を使って、私たちをここに運んでくれた。

後は、私が六課部隊長として最後の責任を果たす!!

「話はあとや!! リンディさん、アルカンシエル・ノヴァのキーを!!」

「……わかったわ。はやてさん、現時点をもってあなたに指揮権をお返しします」

私は、リンディさんから、アルカンシエル・ノヴァのキーを手渡され、艦長席に着き、最後の指令を下す……。

「アルカンシエル・ノヴァ……発射準備ツ!!」

キーを差し込むと、私の前に、ターゲットスコープと、アルカンシエル・ノヴァを発売するためのトリガーが現れる。

その銃を握り、私は発射体制に入り……。

「発射10秒前、対ショック、対閃光防御!!」

———  
身体が震える。

この一発に、ミッドが、私たちの未来がかかっている。

私が、外してしまったら……。

もし、これが通用しなかったら……。

そう、思っていたら……。

「……ファイ、ル」

銃を握る私の手に、ファイルがそつと手を添えて……。

「さつきは、はやてに勇気をもらった。今度は、俺がはやてを支える番だ。一緒に、トリガーを引こう」

「……ありがとう、な」

——大丈夫。

愛する人が、私のことを支えてくれてるんだから……。

そして、私とファイルはカウントダウンを一緒にする……。

「3……2、1」

「アルカンシエル・ノヴァ……」

「発射ッツ!!」

トリガーを引くと、アースラの艦首から、黒き稲妻を纏った白銀の膨大なエネルギーが砲撃として放たれ……。

ゆりかごに命中すると、命中したところが中心となり、ブラックホールを作り出し、ゆりかごを飲み込んでいく……。

その巨大な船体は、みるみる崩壊していき……。

ゆりかごは、完全にこの世から消滅した。

そして、すべて飲み込んだブラックホールも、役目が終わったと同時に、消滅する。

アルカンシエル・ノヴァ……。

アルカンシエルの砲撃を利用し、さらに、消滅エネルギーを加えることにより、小規模なブラックホールを作り出し、対象物を完全に消滅させる。

あまりの威力に、船体へのダメージが激しく、打てば、もう二度と戦艦として活動できなくなってしまうが、まさに最終兵器の名にふさわしい威力を持った魔導砲。

こうして、後に史上最大の凶悪事件と言われるJS事件は、幕を閉じた。

重傷者は数人出たが、機動六課は誰も死者を出すことがなかった。

しかし、ファイルは、度重なるプラスター使用の影響で、入院することになってしまった。

\* \* \*

「はい、ファイル。あーん」

「あ、あーん……」

「どう……おいしい?」

「うん、はやては、やっぱり料理が上手だ……とってもおいしい」  
「よかった……口に合わないかと思っただわ」

はやてが俺に食べさせてくれたのは、手作りのお弁当だった。  
しかも、病人が食べやすいように、薄い味付けの物になっている。  
こういう気配りが、はやての優しさなんだな。

「そんなことないよ……。本当においしい」

「嬉しいわ……。大好きな人に、そう言ってもらえるのは……」

「は、はやて……」

「えへへ♪」

俺もはやても、二人とも顔が真っ赤になってしまった。

\* \* \*

お弁当を食べさせた後、私達はしばらく一緒に過ごしていた。

すると――。

「はやて」

「な、なんや？」

「もう一つだけ……食べたいもの……あるんだけど……」

「何が食べたいんや。遠慮無く言つてや」

なんでもええよ。

ハンバーグでも、肉じゃがでも、ファイルが食べたいと思う物は何でも作るで。

だが、ファイルから言われた言葉は、予想を遙かに上回る物だった――。

「……はやての……くち、びる……」

「え、えええええっ!?!」

ま、まさか……。そんな切り返しをしてくるとは思わなかった。

でも、ファイルの顔が真っ赤になっているところを見ると、本気なんやな。

「……………ええよ」

はずかしいけど、私もファイルとキスがしたい。

私達はどちらからともなく、キスをしていた。

最初は唇が触れているだけだったが――。

次第に気持ちを確認かめ合う様に、深い物になり……。

しばらくの間、ずっとキスをしていた。

\* \* \*

退院後、俺は、八神家のみんなに、俺とはやてのことをちゃんと伝えた。



最初は驚いていたが、はやての幸せを心から祈って、俺たちのことを認めてくれた。

ただし、たった一つだけシグナム副隊長から、条件が出された。

それは……。

『命を粗末にすることはするな。お前は、もう一人じゃないんだから……』

その言葉には、すごく重みを感じた。

今までの俺は、完全に自己犠牲の所があった。

だけど、今は大切な人がいる——。

その人を悲しませることはしたくない。

\* \* \*

新曆75年 10月

重傷者の隊員が無事復帰し、本日事件解決記念のパーティーを開くことになった。料理は、はやてと俺で用意することになった。

最初はなのはさんやフェイトさんが、手伝ってくれるって言ってくれたのだが、はやてが、『フィルと2人でやるから、他の所頼むわ』と言って、結局2人でやることになってしまった。

「えつと……。今日は来週より六課が再出発することと、先日の事件の労いもかねて、さやかながらパーティーをすることにしました。今日は無礼講ですので、みんな楽しんでください。長い挨拶は私も嫌いなので、さっさと乾杯してしましましょう……。というわけで、乾杯!!」

『乾杯!!』

乾杯の後、それぞれグループに分かれてパーティーを楽しんでいた。

しかし、開始早々、はやてが酔っぱらって倒れてしまい、俺ははやてを介抱すること

になり、そのままパーティー会場を出ることになった。

はやての部屋だと、かなり遠いので、やむなく俺の部屋に一時的に行くことにした。

「着いたよ、ほら」

「うゝ。気持ち悪いゝ」

「大丈夫？ 今、水を持ってくるから」

はやてをベッドに座らせ、俺は水を取りに行こうとしたが――。

「……………待って。行かないで……………」

はやてが、俺の服の裾をつかんで離さなかった。

「そのままじゃ辛いだろ。今、水を……………」

「大丈夫……………。酔っぱらってもいないし……………気持ち悪くもないよ……………」

「まさか……」

「ごめんな……。どうしても、ファイルと二人きりになりたかったんや……」  
「そっか……」

俺ははやての隣に行き、はやての肩を抱き、自分の方へ引き寄せた。  
はやても俺の肩の上に、自分の頭をコトンと預ける。

そして俺は、はやての髪を撫でていた。  
はやてもこうされるのが嫌いではないようで、目を細めて甘えてくる。

俺たちは、しばらく無言で寄り添っていた。

「実はな……。俺も……はやてとこうやって、二人きりになりたかった。みんなには悪いけど……」

「よかった……。私だけじゃなかったんやね……」

「……はやて」

「……なに……ファイル」

「俺……はやてが……欲しい……」

「ええよ……。そのつもりで、二人きりになったんやから……。私も……ファイルが欲しい。そのぬくもり感じさせて……」

俺は、はやてをそっと、ベッドに横にし……。

「あつ……」

「はやて……」

「優しく……してな……」

はやては瞳を閉じ、俺は、はやての顔に近づき……俺ははやてにキスをする。

最初は唇が触れているだけだったが、次第に気持ち確かめ合う様に、深い物になり、しばらくの間ずっとキスをしていた。

\* \* \*

「あ、あのな……」

「何？」

「……………私……………なのはちゃん達みたいにスタイルがよくないやろ……………だから……………がっかりせんといてな……………」

私の胸って、なのはちゃんやフェイトちゃんに比べて小さい。

もっとスタイルが良かったらと何度思ったか……………。

「……………ばか」

「ば、ばかって……………」

「俺ははやてが好きなんだ。スタイルがどうこう言う気は全くない。それに……………」

「きや……………あつ……………」

ファイルは私の洋服の隙間から、自分の手を入れて、私の胸を直接鷲つかみにし、そのまま何度も揉んでいた。

「はやての胸、すごく柔らかい……………。いつまでも、触っていたいよ」

「ば、ばかあ……」

さらにファイルは私の服を全部脱がし、そのあと私の胸を再び触り始めた。

「ん……ふ……な、なんか……恥ずかしいわ」

「綺麗だよ、はやて……どこがスタイル悪いんだ。ボディラインなんて滅茶苦茶良いじゃないか。バランスもとれてるし……」

「ほ、ほんとう……?」

「嘘は言わない……その証拠に」

「あん!!」

その言葉通り、ファイルは私の身体の隅々まで愛してくれた。

そして……。

「……きて……ファイル。ひとつに……なろう」

この夜――。

ベッドがきしむ音は、一晩中部屋に響き渡り――。

そのたび、私はフィルと身も心も溶け合った。

\* \* \*

「おはよう……フィル……」

「おはよう、はやて……」

「昨日は……ありがとう……。優しく……してくれて……」

フィルは、本当に優しくしてくれた。

私のコンプレックスを、フィルは一晩かけて取り除いてくれた。

「俺の方こそ……ありがとう。はやて……綺麗だったよ……」



「……あほ……そんなこと……言わんといて。恥ずかしいわ……」

でも、ファイルに綺麗って言われると嬉しい。

大好きな人にそう言ってもらえるだけで、女の子はもつと綺麗になろうと頑張れるんや。

「はやて……」

「ん、何や？」

「……また……はやてを抱きたい……」

「……ファイルが望むなら、いつでもええよ。私も、ファイルに抱きしめて欲しいから……」

私達は、深いキスをしながらまた一つになる。

結局、朝食を食べたのは、それから2時間後のことだった。

\* \* \*

## 数年後

私とファイルは、地球にやってきていた。

この場所は、リインフォースとお別れをした場所——。

ここに来ると、あの時のことを思い出してしまふけど、今はファイルがいる。

「リインフォース、久しぶりやな……今日はな、報告があつてここにきたんや」

「私な、来月、結婚するんや。相手は、機動六課時代から付き合っていたファイルや。今日、一緒に来てるんや」

「リインフォースさん、初めまして、ファイル・グリードといいます。はやてと六課の時から付き合っています。はやてには色々助けてもらいました。仕事だけでなく、心も……。俺は、そんなはやてが好きなんです……」

六課解散後、ファイルは私の捜査官補佐をして、その後特別捜査官の資格を取って、私と一緒に働いていた。

同棲もしていたんやけど、どうしても結婚だけは出来なかつた。

その理由は、どうしても、リインフォースに、一言だけでも伝えたかったから……。

私は、今、幸せなんやと、伝えたかったから……。

だけど、あの時のことを思うと、どうしてもあの場所だけは、行くのが辛かった……。

だけど、やっと決心し、ようやくここに来た。

「リインフォース、私とフィルのこと、そっちの世界から見守っていてや……」

——我が主。

「えっ？」

お幸せに……私はいつでも見守ってますよ……。

「リイン……フォース……」

「どうした？ はやて」

「今、リインフォースの声が聞こえたんや……幸せに、つて……」

「そっか……。俺も以前、ティアの声が聞こえたんだ。はやてのこと、幸せにしろつて……」

ティアナ、リインフォース。

ほんまにありがとうな——。

「幸せに……なろうな……。フィル……二人で一緒に……」

「ああ……二人でなら大丈夫だ。幸せになろう……はやて……」

そんな二人を祝福するかのように、優しい風が吹き抜けた。

——祝福の風。

その優しい風は……。

二人の未来を……。

そつと見守っていた——。

## i f e n d i n g ティアナ

「あははは!! もう観念しなさい」

「……………くっ」

フェイトさんのおかげで、クアットロの居場所を見つけた俺は、一人乗り込んだが、クアットロの聖王の鎧の前に、手も足も出ないでいた。

砲撃を撃つても、全てはじかれてしまうし、最後の手段で、ブラスターを使って、ザンバーで斬りつけたが、通用せずはじかれてしまい、床に倒れてしまった。

ヴィータ副隊長が駆動炉を破壊して、パワーが落ちるはずなのに全く落ちる気配がない。

ヴィヴィオもなのはさんが元に戻したから、ゆりかごは停止しても良いはずなのに……………。

「なぜ、ゆりかごが停止しないのか、分からないみたいですわね」

「……………ああ、ゆりかごのキーは二つとも失ったはずだ。だが……………」

「簡単なことですよ。それは、コアが失っていないからですよ」

「コア……だと……」

「そうですね。聖王も駆動炉も、ゆりかごのほんの一部に過ぎませんの」

「だからか……お前の力が失っていないのは……」

「その通りですよ。さらに、教えておいてあげる。私はそのコアと融合してますのよ」

「!!」

これで納得した。ユーノさんが教えてくれたゆりかごの情報で、二つのキーを止めても、もしかしたら駄目かもしれない、その言葉の意味がやっと分かった。

ゆりかごのエネルギー源は、コアと融合したクアットロそのものだったんだ。

「これで分かったでしょう。あなたがしてきたことは全て無駄だったのよ……。そして……」

クアットロは魔力を刃にし、倒れている俺に突きつけ……。

「これで……お終いですわ!!」

——これまでか。

ごめん……ティア……。

『待ちなさい!!』

突如、入口の扉が、凄まじい衝撃を受け、内側に向かってひしゃげ、次の瞬間には、オレンジの奔流がぶち抜く。

そこにいたのは……。

\* \* \*

「ティアナ・ランスター!? あなた、いつの間に!!」

「機動六課フォワードを舐めんじやないわよ!! あんな竜くらい、あたし達で仕留めた



わよ!!」

「ティ…………ア…………」

扉をぶち抜き、あたしが目にしたのはクアットロにボロボロにされたフィルの姿。

「フィル!! しつかりして!!」

「…………ティア、無事だったんだな。みんなは…………」

「キャロ達も全員無事よ。なのはさん達はスバルが助けに行つたわ。もう、全員脱出してゐるわ…………」

「そっか…………。それを聞いて、安心したぜ…………」

フィルは、最後の力を振り絞って、何とか立ち上がる。

その傷じゃ、立つのだったつらいはずなのに…………。

「…………ティア。お前、どのくらい魔力残ってる?」

「正直言つて、殆ど残つて無いわ…………。幻術1回が限度よ…………」

ここに来る間に、フレイム・グロウを倒すのに、スターライトブレイカーを撃つてしまいい、切り札のスーパーサンダーの増幅装置も、もう使えない。

——強力な攻撃魔法は、もう撃てない。

「……俺に考えがある。俺に、命を預けてくれるか？」

「……いいわ。あんたに、全てを賭ける……」

「ありがとう……。ティア……」

フィルが考えた作戦は、まずあたしが幻術でクアットロの視界を狂わせ、その間に、フィルがブラスタースタービットを使ってバインドをする。

そして、動きを封じたら、フィルが攻撃をする……。

「簡単にいつてくれるじゃない……。あんただって、ブラスター使って、それが出来なかったんでしょう……」

「俺一人だったから駄目だったんだ。だけど、ティアが来てくれたことで、何とかなる

!!

「分かったわ。あたしは、あの馬鹿の動きを何とか止めるから。フィール……任せたわよ!!」

「任せとけ!!」

「じゃ、いくわよ……」

「Go!!」

\* \* \*

「クアットロ!! あんたの相手はあたしよ!!」

「ティアナ・ランスター……いいですわ。まず、あなたから片付けてあげますわ!!」

「そう、上手くいくかしら!!」

「何ツツ!」

次の瞬間、あたしの姿が何十人にも増え、クアットロを混乱させる。残った魔力、全部使つての幻術よ。

「くっ!! 幻術!? めんどくさいですわね。こうなったら、全部排除して差し上げますわ!!」

クアットロから放たれた魔力弾は、次々と偽物に命中し……。  
ついに最後の一人になってしまう。

「もう……幻術をする魔力も、ありませんのね……。終わりですわ、ティアナ・ランスター!!」

クアットロはあたしにとトドメを刺そうと、巨大な魔力弾を作るため、一瞬だけが動きが止まった。

この一瞬を待っていたのよ!!

「今よ!! ファイル!!」

「待ってたぜ!! この時を!!」

次の瞬間、ブラスタースタービットが射出され、クアットロの周りを何重にも舞った。

ビットが引いていたバインドが絡みつき、完全に動きを封じる。

「はあ……はあ……。やつ、たわ……」

「くっ!! ティアナ・ランスターはおとりでしたのね!! 私の動きを封じるための!!」

「気づくのが、少しだけ遅かったな……」

「喜ぶのはまだ早いですわ。あなたの砲撃の威力では、私の聖王の鎧は貫けませんわ。それは、証明済みですわ!!」

悔しいけど、あいつの言うとおり、フィルやあたしの攻撃魔法の威力じゃ、聖王の鎧を壊すことは出来ない。

\* \* \*

「……クアットロ」

「何ですの。負け惜しみですか。あはははは!!」

その耳障りな高笑いもそこまでだ——。  
俺の残された最後の手段……。

「……………一緒に、地獄に……………付き合ってもらおうぞ」

《マスター!! まさか!!》

——スパイラルモード。

俺の命を魔力に変換する、ブラスターのラストリミット。

もう、それしか……………この女を倒す手は無い!!

「プリム……………約束破って……………すまない。でも、これしかないんだ!!」

《……………覚悟してましたよ。この戦いが始まったときから……………いいんですね……………》  
「……………ああ」

俺の命で、ティアが助かるならそれでいい……………。

大好きな人が生きてくれれば、それが俺の幸せだから——。

《マスター……》

「……いくぜ!!」

俺はポケットから、機動キーであるスパイラルカートリッジを取り出し、プリムに装填する。

「………プラスターシステム、コード・ファイナル………スパイラル………起動!!」

《Blaster system code final spiral mode  
ignition!!》

カートリッジが装填され、スパイラルを起動した瞬間——。

魔力は爆発的に上がり、俺の周りで魔力が放電現象を起こす。

\* \* \*

「な、何ですの!! この魔力は!!」

「……………フィル、あんた、まさか!! やめてええええ!! 今すぐスパイラルを止めて!!」

ブラスターのラストリミット、スパイラルモード。

この光は、俺の命そのもの——。

「知ってたんだな……………。スパイラルのこと。ごめんな……………。これしか……………あいつを倒す手段がないんだ……………」

スパイラルを使ったら、待っているのは確実な死。

でも、後悔はない——。

次の瞬間ブラスタービットが、ティアの周りを取り囲み、三角錐型のシールドを作り出す。



「この中にいれば……クアットロの攻撃から、護つてくれる。ティア……」

これは俺のわがまま——。

これから言う言葉は、すぐに忘れてくれて良いから——。

「俺は……」

いつも俺のそばにいてくれて、心の支えになってくれたティア。

「おまえのことが……」

そして、その優しい笑顔が……。

「……大好きだった」

「!!」

だから、その笑顔は絶対に護つてみせる。

「……………幸せになれよ……………俺の分も……………」

それが俺が願う最後のこと。

——— たった一つの俺の願い。

\* \* \*

「いやっ!! こんないや!! お願い、ここから出して!!」

クリスタルゲージは、完全にあたしの動きを封じてしまっている。

お願いだから、出してよ!!

「……………ファイル・グリッド、あんた、まさか……………自分の命を!?!」

「そうさ……。俺の命で、魔力に変換しているんだ。これなら、お前の聖王の鎧もつらぬける!!」

「あ……。ああ……。ああああ!!」

クアットロは、ファイルにプリムを突きつけられ、身体を震わせ、カチカチと歯を鳴らし、膝は笑い、今にも崩れ落ちそうになっていた。

さらに、ファイルはバインドでクアットロの動きを完全にロックする。

「咎人に、滅びの光を。星よ集え!! 全てを撃ち抜く光となれ!!」

プリムの銃口に、辺り一帯の魔力が集まりだし、巨大な魔力球が展開され――。

「貫け……。閃光……」

カートリッジがロードされ、魔力は、更にふた回り以上も増大する。命の全てを魔力に変換している。

——お願い。

誰でも良いから……。

だれかあのバカを止めてよ!!

\* \* \*

「……はあ……はあ……全身の力が……抜け、て……いく」

身体から生命力が抜けていくのが分かる——。  
この一発を撃ったら、俺は助からないだろうな。

ティア——。

この世界に戻ってきて、お前を助けられて本当に良かった――。

そして、これで俺の後悔も消える――。

あの時、ティアアを助けられなかったことを――。

「スターライト……」

この一発で全てが終わる――。

「ブレイカーツツ――!!」

放たれた砲撃……。

白銀のスターライトブレイカーが、クアットロに迫る。

「あああ………嫌あああああああああああ!!」

クアットロは必死に聖王の鎧で防ぐが――。

ブレイカーの威力で鎧は木っ端微塵に碎かれ、クアットロに命中する。

そして……。

クアットロの存在を跡形もなく、消し去った。

「………」

\*

\*

\*

全ての力を使い果たしてしまったファイルは、その場に倒れてしまう。  
その瞬間クリスタルゲージは消え、あたしはファイルの元に駆けつけるが……。

「……う、うそ……よ、ね」

心臓が動いていない――。

魔力反応も全くない……。

「……ねえ……いつもの、冗談……なん、でしょう……」

こんなのって……こんなのって……ないわよ。

いくらみんなが助かったって、あんたが死んだら……。

起きてよ――。

いつものように、あたしのことをティアって呼んでよ!!

「……ファイ、ル」

涙が止まらない……。

本当に悲しいときは、涙を流さないなんて言うけど——。

——そんなのはうそ。

いくら抑えようとしたって、涙は収まらないじゃない……。

「うそ、つき……。みんな生きて帰ろうって、言ったじゃない……」

ふと、ファイルのポケットから一つのカードが落ちた。

それは、クロスミラージュ。

未来のあたしが、ファイルに託したデバイス——。



あたしはそれを拾おうとしたその時……。

「……な、何、この光は!？」

クロスミラージュから、オレンジ色の強烈な光が発し――。

光が収まると……。

「……うっ」

「……あっ……ああっ……」

フィルの瞳がゆっくりと開きだし……。

そして……。

「フィル!!」

あたしは、フィルのことを力一杯抱きしめる。

失いかけた大切な人。

もう、二度とあたしから離れないように……。

「……ごめんな。本当、俺はいつも……ティアアのこと泣かせてばかりだよな」

「そう思うなら、二度とこんなことしないで……。お願いだから……あたしのそばから、いなくならないで……」

「……そう、だな。だけど、どうして俺は助かったんだ？」

そう、フィルの言うとおり、スパイラルを使ったら待つてるのは確実な死。  
なのに、どうして……？

『それは、あたしが説明するわ』

再び、クロスミラーージュから光が発し、空中に女性の姿を映し出す。

「ティアア!!」

「えっ？ あたし？ どういうこと？」

あれ、どうみてもあたしよね？

いったい、何がどうなってるの!？」

『混乱してるみたいね。簡単に言うと、あたしは未来でフィルと戦っていたティアナよ』  
「つまり、未来のあたしということ？」

『そういうことね』

そっか……。

このクロスミラージュは、未来のあたしから託された物。

その思いが、これに宿っていたという訳ね。

「それより、なんで俺は生きてるんだ？」

『……………そこにある、クロスミラージュを見て』

未来のあたしに言われて、クロスミラージュをみると、フレームはヒビだらけで、今

にも砕けそうだった。

「これは!？」

『クロスミラージュに託した、あたしの魔力を、あんたの命に変換したの……。最後の力でね……』

「そういうことだったのね……」

本当に、ファイルのことが好きだったのね。

自分の命を託せるほどに――。

「だけど、それじゃお前は!!」

『心配しないで……。あんた達がクアットロを倒してくれたおかげで、未来は変わったわ。だから、あたしも、いなかったことになる。というより、無かった未来になるんだから、最初からいないのと同じね』

「そんな……」

『ファイル、悲しまないで……。あたしは、むしろ感謝してるんだから。あんな未来にならないことにね。それと……』

『こっちのあたし、しつかりしなさい!! ファイルはちゃんと告白したのよ。返事をするのが礼儀でしょう!!』

「ま、待て!! あれは俺が一方的に言ったことで……。あくまで、俺の片思いなんだし……」

まったく……。

この鈍感、こんなにあんたのことを思ってるのに、全く気づかないの——。

「……片思いなんか……じゃないわよ……」

「ティアア?」

「あたしも……あんたのことが、大好きなんだから……誰よりも大好きなんだから!!」

「だから、お願い……。さっきも言ったけど、あんな真似、二度としないで!!」

アグスタの時も……。

地上本部襲撃の時、ファイルはたった一人で、ノーヴェ達を止めて戻ってきたときも……。

クアットロの策略で、瀕死の重傷を負ったときも――。

そして――。

スパイラルを使って……。

ファイルがいなくなってしまった。

「もう……あんたがいなくなるのはいや。こんな悲しい思いをするのは……もう……いやなの」

さつきのことを思い出したら、また涙がポロポロと出てくる。

そんなあたしをファイルがそつと抱きしめてくれて……。

「さつきから……本当に泣かせてばかりだな、俺は……」

「いいの……。こうして、フィルがそばにいてくれれば……。それだけで良いの……」

こうして、あたしを抱きしめてくれるだけで安心する。

あんたがあたしのそばにいてくれるって、そう思えるから――。

「ティア……」

「フィル……」

あたしとフィルは、お互いに瞳を閉じ……。

そして……。

静かに……。やさしいキスを交わした。

「何か……。照れるわね……」

「そうだな……」

あたしもファイルも、少し落ち着きを取り戻し、今度はお互いに照れくさくなっていた。でも、決して嫌な気持ちじゃない——。

ファイルもそれは同じで、表情を見れば分かる。

元から何となく表情で分かることがあったが、こうしてお互いの気持ちが両想いになり、さらに分かるようになっていく。

『あの……あんだ達、何、自分たちの世界に入ってるのよ!!』

《そうですよ!! まったく!!》

「あつ……」

『……つたく、こっちのあたし、ファイルのこと頼んだからね!! 浮気しないように、ちゃんとあんだの魅力で繋ぎ止めておきなさい!!』

「分かっているわよ!! あたしだって、ファイルをなのはさん達に渡す気は、更々無いわ!!」

あたしが知る限りで、ファイルのことを好きなのは、なのはさんにフェイトさん、フオ



ワードだってスバルにキャロ、そしてルーテシア。

八神部隊長は、一歩引いてる感じはするが、それでも好意は持っている。

「えっ？　なんでなのはさん達が、そこで出てくるんだ？」

『《はあ……》』

この鈍感、朴念仁は——。

他人の心の痛みには敏感なのに、自分に向けられる好意には全く気づかない。

『あ、相変わらずなのね……あいつは』

《はい……だからティアさんも苦労したんです》

「そうね……。よく、両思いになれたって思うわ……」

きつと、こんな事がなかったら、このまま良い親友で終わっていたわね。

あたしが好きだったって事に、全く気づかなかったくらいだし——。

『そのおかげで、誰にも取られなかったんだから、結果オーライということにしましょ

う』

「……そうね」

《そうですね……》

\*

\*

\*

『そろそろ……時間ね……』

そう言うと、未来のあたしの身体が段々透けて、今にも消えかけていた。

「ティア……」

「未来のあたし……湿っぽいのは無しよ」

『ふつつ、そうね。あんたがちゃんと、女に磨きをかければ、あたしなんてすぐに抜けるわよ』

悔しいけど、今のあたしはまだまだ未来のあたしには追いついていない。

「そう出来るように頑張るわよ。あたしには、大好きな人が……ファイルがいるんだからね!!」

「ティア……」

『じゃあね……。ファイル、あたし……』

そして――。

未来のあたしは、完全に消えてしまった。

\* \* \*

「それにしても……いろいろあったな……」

「どうしたの? 何考えてるの?」

「事件が終わってからのこと……思い出してたのさ……」

二人でベッドに座っていた俺たちは、事件が終わってからのことを思い出していた。

J S事件が終結し、俺はプラスターとスパイラルの影響で入院をしていたが、退院したその日、ティアがとんでもない爆弾発言を、みんなの前でしてくれた。

『あたしとファイルは恋人同士ですので、誰も取らないでくださいね!!』

普段のティアじゃ、絶対あり得ない行動だ。

言い終わった後、相当恥ずかしかったみたいだけどな。

最初はかなり驚いていたけど、みんな祝福してくれて、六課を上げて盛大なパーティーまでしてくれた。

おまけに、はやてさんが変に気を利かせて、次の日から俺とティアを同じ部屋に変更していた。

荷物も俺とティアが訓練中に、ロングアーチのみんなで引っ越しをしていたし。

あの時は、さすがに驚いたぞ。

そのおかげで、俺たちは一緒の部屋で過ごしている。

「あれは、さすがに驚いたわよ。部屋に戻ったら、あたしの荷物が全くないし……」  
「確かに……。俺の場合は、なんでティアの荷物が、ここにあるんだって思ったからな……おまけに、下着まで落ちていたし……」  
「……フィルのえっち。でも、どうだった？ あたしも、ああいうのも、ちゃんと付けるんだよ……」

あの時落ちていた下着は、かなり過激な物もあつた。  
通常の下着だけじゃなく、黒のブラやパンツまであつたし——。

「うーん、下着も良いんだけど、やっぱり……」  
「あつ……」

俺は、ティアを押し倒し……。

「ティア自身のほうがいいな……。こうして、ぬくもりを感じられるしな……」  
「うん……。あたしも……。そうだよ……」

そうやって、ティアはギュツとしがみついてきた。

「ティア……いいか……」

「……………いいよ。いっぱい、フィルを感じさせてね……」

俺はティアに、そつと唇を重ねる。

「んっ……。フィルとのキス、やっぱり落ち着くね」

「だったら……もつとしないとな」

「もう……。ばか……」

ティアは少し怒ったように言ったが、拒むことはしなかった。  
再び唇を重ね、今度は貪るようにキスをする。

息継ぎを繰り返して、互いが満足するまでキスを繰り返していた。

同時に、俺は、シャツの中に手を入れブラを外し、ティアの胸をまさぐる。

「あっ……んっ……」

ティアの喘ぎ声が、女性特有の甘い匂いが、俺の理性を溶かしていく。  
俺は、ティアの身体全てを愛し——。

そして——。

「きて……フィル……」

——月明かりの下。

二人の身体は重なり、気持ちも一つになった。

その後も、互いを幾度も求め合い——。

その夜は……。

ベッドのスプリングが軋む音が、止むことはなかった――。

\* \* \*

翌日、俺とティアは、なのはさんから休暇をもらうことが出来た。

ロードサンダーも修理が終わり、試運転も兼ねてツーリングする事にした。目的地はとりあえず、クラナガンで良いかな。

「それにしても、気持ちいいわね」

「そうだな……。あのな、ティア」

「んっ、何？」

「その……なんだ。そんなに密着するとだな……」

「胸が当たってるって、言いたいんでしょう……」

「……………ああ」



「別に良いじゃない。あたしの胸なんて、何度も触れてるんだから……」  
「そ、そう言う問題じゃなくてだな……」

ティアの胸が俺の背中に当たる度、理性がガリガリ削られているんだ。  
正直蛇の生殺しだぞ……。

「……よかった」

「えっ？」

「ちゃんと、あたしのこと、女の子として意識してくれてるんだ」

「当たり前だろ……。ティアは俺の大切な……。彼女なんだから……」

「ありがとう……。フィル……。すごく嬉しい……」

《相棒、ティアナさん、ラブコメってる所悪いんですけど、ちゃんと運転してください!!》  
「す、すまん!! サンダー」

「ご、ごめん!!」

そんなこんなで色々あったが、何とかクラナガンに着くことが出来た。  
サンダーは道中、散々俺たちのことをからかっていたがな……。

クラナガンに着いた俺たちは、ウインドショッピングをしたり、アイスを食べたり、出店でたこ焼きが売っていたので、それを買って食べた。ティアが俺に、たこ焼きを食べさせてくれるとき、顔を真っ赤にしていた。

普段、部屋でやるのは大分慣れたけど、やっぱり外だと照れてしまう。

そして、時間も経ち、夜になると、俺たちはクラナガンの近くにある海岸に来ていた。

\* \* \*

「相変わらず……。ここは、海が綺麗ね……………」  
「ああ……………」

この場所は、あたし達しか知らない秘密の場所。

海が見たくなったとき、よくファイルと一緒にここに来ていたわね。

「……ティア」

「何？」

「俺たちは六課が解散すれば、それぞれの道に進んでいく」

「うん……」

「俺もティアも、執務官志望だけど、ティアはフェイトさんの所で、俺はクロノ提督の所でやっていくことになる」

「そう……なのよね……」

執務官補佐は、二人までなので、フェイトさんはシャーリーさんとあたしで精一杯。

そこで、ハラオウン提督が、フィルの事を世話してくれることになり、六課解散後はクラウディア所属になる。

あたしもフィルも所属が違うので、執務官試験に合格し、コンビを組めるようになるまでは、一緒にいる時間はとれない。

「だから……」

ファイルが取り出したのは、一つの小さな箱。  
フタを開けると、そこにあつたのは……。

銀色に輝く指輪——。

「これ……もしかして……」

「執務官になり、コンビ組めるようになったら……俺と……」

そして、あたしの左薬指に——。

「結婚して欲しい……」

銀色に輝く指輪を嵌めてくれた——。

「あっ……」

あたしは嬉しきで、涙をこらえることが出来なかつた。  
初恋はかなわないうて言うけど、それは違つた。

「これ……。もう……。返さないからね……」

あたし、絶対執務官試験一発で合格するから、一緒に頑張つて合格しよう——。

そして……。

——ずっと、一緒にいようね。

\* \* \*

二年後

「どうしたんだ？ 昔の写真なんか見て」

「……ちよつとね。結婚式の時のやつが出てきたから……」

ティアが見ていたのは、俺たちの結婚式の写真だった。

一年前、俺とティアは猛勉強の末、執務官試験に一発で合格した。

正直、あの難関試験を一回で受かるとは思っていなかった。

クロノ提督もフェイトさんも喜んでくれたのだが、優秀な補佐がいなくなるって言うて、引き止められそうになった。

俺たちはすぐにコンビを組み、地上の事件を解決していった。

白と黒の銃使いコンビなんて言われるようになって、仕事も増えてしまったけど……。

そして半年前、ようやく旧六課メンバーと、元ナンバーズメンバーと、レジアスの親父さん達のスケジュールの合う日が出来て、結婚式をすることになった。

結婚式は、かなり内容の濃い物になった。

レジアスの親父さんがスピーチをしてくれたんだけど、緊張していて、普段の威厳が全くなかったり……。

はやてさんが俺たちの結婚式のために、料理とウエディングケーキを作ってくれたり  
……。

ウエンデイとノーヴェが、相変わらぬのどつき漫才を始めてしまったり……。

スバルが俺たちに泣きついてしまって、それをギンガさんとチンクに止められたり  
……。

エリオとルーテシアとキャロが、三人で一生懸命、歌を歌ってくれたり……。

なのはさんとフェイトさんが、一言ずつお祝いの言葉をくれて、ティアと俺が泣きそ  
うになってしまったり……。

そして――。

俺とティアはみんなが見守る中で、誓いの言葉を交わし、キスをしたんだ。

この一枚の集合写真……。

これには、みんなの笑顔が写っていた。

素直じゃないが、似たもの同士の二人……。

そんな、二人が結ばれ……。

幸せを手に入れた——。

「これからもよろしくね……。あたしの素敵な旦那さん……」



## i f e n d i n g スバル

「ファイル、今助けに行くからね……」

あたし達フォワードは、何とかフレイム・グロウを倒すことが出来、ヴァイス陸曹のヘリでゆりかごに進入することが出来た。

しかし、フレイム・グロウを倒す代償も大きく、あたしとティア以外は戦闘不能になってしまふ。

戦闘不能になったメンバーは、あたし達に残った魔力を渡してくれ、ギン姉はあたしにブリッツキヤリバーとリボルバーナックルを託してくれた。

突入したあたし達は、それぞれ役割を分けて行動することにした。

ティアはスーパースンダーでなのはさん達の救出活動を、あたしは、クアットロを倒しに行ったファイルの援護に向かうことになった。

そしてついに――。

クアットロのいる部屋に取り着くことが出来た。

「マツハキヤリバー、ここにいるんだね」

《はい、フィルとクアットロの反応があります……これは!!》

「どうしたの、マツハキヤリバー!？」

《相棒!! 急いでください!! フィルの生命反応が殆どありません!!》

「嘘!! キヤリバーズ、ここをぶち破るよ!!」

《了解!!》

「いつけえええ!!」

あたしはリボルバーナックルで目の前の壁を破壊し、中に突入することが出来た。そして、あたしが目にしたのは……。

クアットロの攻撃で、ボロボロになって倒れていたフィルの姿だった。

「ファイ……ファイ、ル……?」

「あら……誰かと思ったら、ゼロ・セカンドですの。せつかくここまで来たんですから、このゴミ持って帰ってまらえますう〜」

そう言って、床に倒れているファイルを、あたしの方へ蹴飛ばし……。

「…………う、そ…………だよね。返事してよ…………」

「あ…………あああ…………。うわあああああああ!!」

戦闘機人としての力を解放すると、エメラルドグリーンの瞳が、金色に書き換わって  
いた。

「な、なんですの。この力は!? ゼロ・セカンドに、ここまでの力があるなんて!!」  
「…………許さない」

ファイルを…………。

大好きなファイルを返せえええええ!!

あたしは、怒りを込め、クアットロに振動破砕を放ち、聖王の鎧を完全に砕く。

間髪入れず、さらに振動破砕を使用して、クアットロをひたすら殴り続ける。

クアットロは幾度の振動破砕を受け続けて、全身は皮膚が破れ、体内の機械部品が見えるくらいポロポロになり、もはや戦闘能力は全く残っていないかった。

「はあ……はあ……はあ……」

「……あ、あははは……まさか……あなたなんか……やられ……るとは……ね……」

「……うるさい。しゃべるな……」

もうこいつの声を聞いているのも、耳障りだ……。

あたしはトドメを刺そうと、拳を振り下ろそうとしたとき……。

「……やめ……ろ、スバ……ル」

ファイルの手によって、あたしの右腕が止められていた。

「ファイ……ファイル……」

「こんなやつを殺して……。お前の手を汚す……な……」  
「だけど!!」

こいつはギン姉を……。

ファイルを……。

そして、未来ではみんなを……。

「スバル……」

ファイルが、あたしの手をとり――。

「お前のその手は……。こんな奴を殴るための物か……。そうじゃないだろ……」  
「あつ……」

「お前のその手は、困っている人を助けるための物だろ。その優しい心を、こんな奴のために捨てないでくれ……」

そうだ——。

フィルの言うとおりだ。

「フィル……あたし……あたし……」

\* \* \*

(まったく、甘いですわね。でも、そのおかげで隙だらけですわ)

フィル・グリードの甘さのおかげで、私は何とか一撃を入れるだけの力が回復し、おまけに二人とも隙だらけになってますわ……。

この毒針を打ち込めば……。

\* \* \*

「フィルの手……暖かいね……」

「お前の手も……暖かいさ……。お前の優しい心みたいなの……そんな暖かさが……」  
「フィル……」

俺とスバルが、気を抜いていたその時……。

（終わりですわ!!）

背後からクアットロが、毒針を打ち込もうとしたが……。

「が……あ……あ……」

突如、上空から砲撃がクアットロの胸部を貫いていた。

「クアットロ!？」

完全に油断していた。

クアットロが、背後から攻撃を仕掛けていたなんて……。  
だけど、だれがクアットロを？

「二人とも、大丈夫か？」

「はやてさん!？」

「八神部隊長!？」

俺たちを助けてくれたのは、八神部隊長だった。  
しかも、リイン曹長とユニゾンまでしている。

\* \* \*



「……どうやら、無事なようやな」

「はやてさん、どうしてここに？」

「フィル達のが気になってな。なのはちゃん達をへりに戻した後、私だけ戻ってきたんよ」

『ちなみに、ゆりかごのコアも破壊してますから、魔法も使えるんです』

「それで、ユニゾンが可能になったんですね」

「そういうことや。後は私が引き受けるよ」

スバル、フィル。こんな奴の為に、あんた達の手を穢す必要はあらへん。

こういうのは私の仕事や——。

「……はやてさん？」

「フィル、何とかワープは使える？ 二人は先にワープで行っててくれるか？」

「八神部隊長はどうするんですか？ もうすぐゆりかごは機能停止して、崩壊が始まりますよ」

「んー、大丈夫や。ちよつとだけお仕事したら、すぐ脱出するわ。ラインもいるから、転移魔法で脱出するよ」

「……わかりました。アースラで待ってます」

ファイルとスバルは、ワープでアースラに戻っていった。  
これで、後は……。

\* \* \*

「や……がみ……はや、て……」

「クアットロ……。あんたは私達の大事な物を、たくさん踏みにじった」

私はシュベルトクロイツを構え、クアットロに向け私の最大の魔法、ラグナロクの詠唱をする。

「……その罪……自分の命で償いや!!」

「ひ……ひ……ひ……ひ……ひ……」

クアットロは、歯をガタガタ震わせ、腰を抜かしてその場を動けなくなったが、そん

なのは関係ない。

この女はここで片づける……。

これ以上、ファイルに手を汚させる必要はない。

これは、部隊のトップに立つ私の役目や。

「響け……終焉の笛……ラグナロク!!」

ラグナロクの詠唱が終わると、魔力球がクアットロの目前で、その凶悪なエネルギーを放たれるのを待っていた。

「……………終わりや」

「あ……………あああ……………」

「ラグナロク・ゼロ距離砲撃!!」

「い、いやああああああああああああ!!」

放たれたラグナロクは、クアットロを完全に消滅させ、クアットロのいたところは、巨大なクレーターになっていた。

\* \* \*

「……………これで、本当に終わったな……………。ライン……………」

『はいです……………。ファイルもスバルも、こんな奴のために、手を汚しちゃいけないんです。でも、本当は、はやてちゃんにも、して欲しくなかったです』

「ライン……………これは誰かがやらなきゃいけないんや。そして、これは部隊のトップである私の役目なんよ……………」

これが人の上に立つ人間の責任。

時には人を殺す覚悟も持たなければならぬ—————。

部下を死地へ送りだすんや。

自分も同じ覚悟がなければ指揮官として資格はないから……。

『はやてちゃん……』

「……戻ろうか……みんなの所へ……」

『はいです!!』

私とリインは転移魔法を使って、アースラに戻る。

私が戻った後、アースラのアルカンシエル・ノヴァで、ゆりかごは完全消滅した。

こうして、JS事件は幕を閉じることになった。

だが、ファイルはブラスタアの使いすぎで、身体のおちこちにダメージが出来てしまい、そのまま病院になってしまった。

\*

\*

\*

10日後

「ファイル、お見舞いに来たよ」

あたしはフォワードの中で比較的軽傷だったので、メンバーの中で一番早く復帰することが出来た。

今日も、ファイルのお見舞いに来ていた。

「ありや……寝ちゃってるね」

こうしてみると、ファイルの寝顔ってかわいいんだよね。

本人に言ったら、怒るけどね。

「布団はいじやつて……風邪……引いちゃうよ」

あたしはファイルの布団を直してあげると、持ってきたリングを剥き始めた。リングをむいていると、ふとテーブルにあった一冊のノートに気づいた。

「これ……。なんだろう？」

あたしがノートを手に取りろうとしたとき、外からの風でページがめくれてしまう。

「いけない、元に戻しておかないと……」

ノートを戻そうとしたとき、そのページに書かれていた内容が目についてしまい、あたしは申し訳ないと思いつつ、ノートを見てしまった。

「えっ……」

そこには――。

『スバルへ……このノートを見ていると言うことは、俺はゆりかごで、何らかの形でいなくなってしまったと言うことだな。本当は直接伝えたかったけどな。俺の思いをここに書いておきます』

『スバル、俺はお前のことが大好きだった。お前の明るい笑顔が、どれだけ俺を助けてくれたか。未来でも、そして、こっちでも……』

「……………ファイル」

あたしは、震えを何とか押さえ、次のページをめくってみた。

『こんなことを言われても、きつとお前にとって迷惑なだけだよな。だから、このノートは見たら即刻捨ててくれ。最後に、いつもそばにいてくれてありがとう……………』

『さよなら……………そして、幸せに。ファイル・グリード』

読み終わったとき、あたしは涙を抑えられなかった。

ファイルが、あたしのことを大好きでいてくれたのは嬉しかった。

でも、ファイルはゆりかごで死ぬ気だったんだ。

どうして……………。



ファイルは自分の幸せを考えないの……。

「いやだよ……。こんな告白の仕方なんて……。いやだよ。あたしも大好きなんだよ……。だから……。」

あたしは、ファイルの唇に近づき……。

そして……。

気がつくと、ファイルとキスをしていた……。

\* \* \*

「う……うーん」

「ファイル……」

「スバル？ 今日もお見舞いに来てくれたのか」

「……う、うん」

「泣いてるのか？ お前、そのノート……」

俺はスバルが泣いていたことに疑問を持っていたが――。

「ごめん、勝手に見たのは……。でも……。いやだよ……。こんな告白の仕方なんて……。いやだよ……」

「そっか……。見られちゃったか……」

「……ファイル……。どうして、いつも自分のことは考えないの」

「考えてるよ。俺の幸せは、お前が笑顔でいてくれることだから……」

そのために俺の命があるんだから……。

「だったら……。だったら、自分が生きる事を考えてよ!! あたしが助かって、そのためにファイルが……。大好きな人がいなくなっちゃったら……」

「スバル……」

スバルは、涙を抑えることをせず、その場で泣き崩れてしまった。  
俺はスバルを自分の方へ抱き寄せて……。

「ごめんな……。こんなつもりじゃなかったんだ……」

こんなノートがあったせいで、スバルを傷つけてしまった。  
こんなかたちじゃなく、自分の言葉で伝えよう……。

「……スバル、俺はお前のことが……。大好きだ……。誰よりも、お前のことが大好きだ  
……」

スバルは、俺にギュツと抱きつき、そのまま俺の胸に顔を埋めていた。

「……あたしも……。あたしも……。ファイルのことが大好きだよ……」

「ファイル、お願い……。キス……。して……。くれるかな……」

「……………えっ？」

「……………ちよつと恥ずかしいけど、ファイルと……………ちゃんと結ばれたいから……………」

「……………分かった」

そう言つて赤面してしまつたスバルに、俺はそつとスバルの肩を抱き、そのままスバルの唇に、自分の唇を重ねた。

「……………なんか……………照れちゃうね……………」

「……………だな」

「でも、すごく嬉しいんだ。だって、ファイルと……………その……………こ、恋人……………に……………なつたんだよね」

「そう……………だな。改めて言われると、俺も……………照れるぞ……………」

「えへへ♪」

スバルは屈託のない笑顔で俺を見つめていた。

この笑顔に、俺は惹かれたんだよな……………。

「これから、よろしくね。あたし……ティアみたいにかわいくないかもしれないけど、でも、フィルのために頑張るから……」

「スバル……ありがとうな。だけど、俺はそのままのお前が大好きなんだからな。無理だけはするなよ」

「ありがとう。フィル……大好きだよ……」

\* \* \*

一週間後、俺は身体の方も回復し、退院することが出来た。

六課に戻ってからは、完全に回復するまで、スバル達の事務手伝いということになった。

「ほら、スバル。何やってるんだ。ここは、こうやるんだろうが……」

「うう……。だって、あたし事務処理が本当に苦手なんだもん」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。いつも俺がいる訳じゃないんだから……」

「それは、分かってるよ。だから、こうやってフィルに聞いて、一生懸命頑張ってるでしょう」

「つたく……」

相変わらずだよ。スバルの奴の事務処理の苦手なのは。

だけど、訓練校ではトップで卒業してるんだから、このくらい軽いはずなんだよな……。

\* \* \*

「……あの、ティアアさん」

「どうしたの？ キャロ」

「フィルさんとスバルさん、なんかいつもと雰囲気、違う気がするんですけど……なんか、フィルさん、スバルさんを見ているときの目が、すごく優しい感じがするんです」  
「そうかもね……」

あたしは、あの二人が付き合うとは、正直思わなかった。

あたし達はそのくらい身近にすぎたから……。

あたしは、フィルのことが大好きだけど……。

だけど、それと同じようにスバルのことも好きなのよね。

だから、あたしは二人のことを祝福することにした。

「ほら、あなた達はスバル達のこと、気にしてる場合じゃないわよ。自分の仕事を片付けてしまいましょー」

「「はい!!」」

スバル、フィルと幸せになりなさいよ。

あなたのことを全て知っていて、それでも好きになってくれる人なんて、そうはいないんだからね。

\* \* \*

「なんか……緊張しちゃうね……」

「……………ああ……………」

俺とスバルは、仕事が終わった後、俺の部屋で過ごしていた。最初はスバルは自分の部屋に戻ろうとしたが……。

『あんた達、恋人同士なんだから、一緒にいられるときは、いっぱい二人で過ごささい。』  
というわけで、今夜はあんた、ファイルの部屋に泊まりなさいね』

そうティアに言われて、スバルは閉め出されてしまった。

「ティアの奴……………」

「気を遣ってくれるのは……………分かってるんだけど……………」

露骨すぎだつての。

これじゃ、今夜二人きりでどうやって過ごさせていうんだよ。

「あ、あのね……………」



「な、なんだ……」

「その……ね……あたしのこと……女の子として魅力……あるかな……」  
「あたりまえだろ。今だってドキドキしてるんだから……」

正直、さつきから心臓がバクバク言っしょうがない。

好きな女の子と一緒にいて、平然といられるかつての……。

「お願いが……あるんだ……」

「ファイル……あたしを……抱いて。あたしが……ファイルの彼女だって思えるように……」

「スバル……本当に良いんだな……」

「うん……でも、ちよつと怖いから……優しく……してね……」

俺とスバルはベッドに行き、そして、スバルをそつと押し倒した。

「あつ……」

俺はスバルの胸に触れ……。

「どう……かな……」

「やわらかい……。それに……。女の子の甘い匂いがする……」

「……はずかしいよ……。ファイル……」

「いいんだな……」

「うん……。あたしを……。抱いてください……」

そして……。

俺とスバルは……。

身も心も一つになり……。

お互いのぬくもりを感じ合いながら、一夜を過ごした。

\* \* \*

数年後

機動六課解散後、スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍している。

俺は、ゆりかごでブラスターを多用しすぎたため、身体のダメージが蓄積されてしまい、魔導師として働くことは不可能になってしまった。

そこで俺は、戦闘機人であるスバルのメンテナンスを出来るように、マリーさんの所でメカニックマイスターの資格を取った。

今の俺は、スバルのサポートを全力ですることだ。

スバルの夢……。

その手助けをしていくことが、俺の夢だから……。

「ファイル、いつもありがとうね……」

「あんまり無理するなよ……。お前一人の身体じゃないんだからな……」

「大丈夫……。ちゃんと帰ってくるよ。だってあたしはファイルの奥さんだから!!」

そう、俺とスバルは、俺がマイスターの資格を取ると同時に結婚したのだ。

結婚の挨拶の時、ゲンヤさんに会いに行ったときは緊張したけど……。

『スバルのこと……。おめえなら、本当の意味でスバルのこと分かってやれる。頼んだぜ……』

この言葉で……。俺は、スバルを本当の意味で護ろうと、改めて決意をした。

「じゃ、行ってくるね、フィール!!」

「気をつけろよ!! ドジ踏むなよ」

「分かってるよ〜♪」

今日も、スバルは困っている人を助けるために、出勤する。

そんなスバルを、俺は全力で助けていきたい。

それが、俺が出来るスバルへの愛の形だから……。

## if ending ギンガ

「ふう……やつとクラナガンに帰ってきたな」

《今回も長期任務でしたからね。でも、これでしばらくの間は休みがもらえますね》  
「まあな……」

あのJS事件から、4年の月日が経った。

機動六課が解散して、俺はフェイトさんの元で執務官補佐を2年ほどした。

JS事件の傷で、あまり無理が出来なかったのがあって、フェイトさんがゆつくりと研修してくれた。

フェイトさんの丁寧な研修のおかげで、あの難関試験も一発で受かることが出来ただからな。

執務官になった後、俺は、最初はクラナガンを拠点にしていたんだけど、ティアとコンビを組んだり、フェイトさんの臨時パートナーをやったりしていて、ここ一年くらいは次元航行艦に乗って、長期任務をすることが増えてしまった。

そして今日、久しぶりにクラナガンに帰ってきた。

「そう言えば、ギンガさん元気でやっているかな」  
《ですね。ここ一年くらい会ってませんから……》

スバルやティアとは、時々クラナガンであつたりしたりするんだけど、ギンガさんだけは中々会うことが出来なくていたのだ。

《マスター……最近、気になることを聞いてるんです》

「気になること？」

《ええ……あんまりいい話ではありません。ギンガさんのことです》

プリムが耳にしたことは、ギンガさんの所属している108部隊で、最近親の七光りで成金の佐官入ってきて、その佐官がギンガさんにアプローチをかけたんだけど、結局振られてしまって、その逆恨みで、ギンガさんのことを調べて、部隊内で不穏な空気が

流れているとのことだ。

《ギンガさんが……戦闘機人だって知っているのは、部隊内でもごく僅かですからね》  
「ゲンヤさんがいるから、外部に漏れている可能性は低いと信じたいけど……」

《人の口は、戸を付けられませんからね……》

「……今度、スバルかノーヴェに、それとなく聞いてみるか……」

あの二人なら、ギンガさんのことをよく見ているし、ノーヴェも何だかんだ言って、世話をしてくれたギンガさんのこと心配しているはずだからな。

「あれ？ フィルじゃない」

「えっ？」

突然後ろから声をかけられて、振り向いてみると……。

「スバル!? 久しぶりだな!!」



「うん、半年ぶりだよね!!」

半年ぶりに再会したスバルは、雰囲気も大人っぽくなっていた。たった半年で、こうも雰囲気が変わるんだ。

久しぶりに俺たちは、クラナガンの街で色々遊びまくった。

ゲーセンに行ったり、アイスクリームショップでスバルが、アイス七段重ねを食べたり、その他にもスバルに引っ張られて色んな場所に行ったりした。

でも、いつものスバルとどこかが違っていた。

なんか、悩みがあるのか？

それとも……。

俺は、それとなくスバルに聞いてみることにした。

「スバル……お前、何か悩んでないか？」

「えっ……?」

「なんか普段のお前じゃないんだよ。たしかに楽しんでいたみたいだけど、どこか上の空な所があった」

「やっぱ……分かつちやうよね」

当たり前だ。

何年、お前らと付き合っていると思っているんだ……。

「……ギンガさんのことだな」

「……うん」

やっぱりそうか……。

スバルがこんな表情しているんだ。ただ事じゃないと思つていたけど……。

「よかつたら話してくれないか……。なんか、力になれるかもしれないから……」  
「うん……」

スバルから聞いたことは、プリムが聞いていた話の通りのことだった。

しかも、タチが悪いことに、親が管理局の幹部ということだ。

その力で、108部隊に入ったこの男も一佐にまでなったという訳か。

「最悪だな……」

「しかも、父さんのによると、ギン姉に振られたのを逆恨みして、ギン姉のことを調べて、108部隊の中でもかなり居づらい状態なんだって、カルタスさんや父さんが何とか頑張ってくれているけど……」

「そっか……」

「お願いフィル、ギン姉を助けて!! このままじゃ本当にギン姉は!!」

「わかった。俺も出来る限り協力する。だから、そんな顔するな」

「ありがとう、フィル!!」

「とにかく、俺はその野郎の情報を片っ端から集めるから、お前も何か動きがあったら連絡してくれ」

「うん!!」

\* \* \*

「しっかし、こうして調べてみると、本当に親の七光りのやつなんだな」  
《まったくです……胸くそ悪くなりますね》

俺はあの日から、一週間かけて、あの男のことを調べ上げていた。

名前は、デイルギア・フォーカス。108部隊に所属の一等陸佐だ。

しかも、調べ上げていく内に、とんでもないことが分かった。

親が管理局の上層部にいることを盾に、気に入った女の子を片っ端から犯してはもみ消す、それを繰り返していた。

しかも、自分の意のままにならないときは、親族に圧力をかけたり、あることないことを周りに流して、社会的に潰す。

本当に人間の風上にも置けない野郎だ。

《どうするんですか……。マスターがいくら執務官といっても、そう簡単には逮捕できませんよ》

「……権力には権力をつてね。本当は使いたくなかったんだけど……」

《そういうことですね……。大丈夫ですよ。レジアス中將も、おそらくこのことは知っ

ているはずですよ。だから、協力してくれますよ」

「そうだな。このことはもう少し調べて、オーリス姉に報告しよう」

《そうですね。オーリスさんに監査として入ってもらい、そこで……》

「ああ……」

ギンガさん、もう少しの辛抱です。

何とか、あの野郎の悪事は俺が暴きますから……。

そんなことを考えていると、スバルから通信が入ってきた。

『フィル、大変だよ!!』

『どうしたんだ、そんなに慌てて?』

『ギン姉が……ギン姉が……』

『夕方、部隊隊舎から出てから、連絡が取れなくなっちゃったんだよ!!』

『何だと!!』

——嫌な予感がしやがる。

早まった事をしてなければいいが……。

「スバル、ギンガさんと連絡が取れなくなってから、どのくらいだ」

『……3時間くらい』

「分かった。俺も探しに出る。何かあったら連絡するから」

『お願い……』

スバルからの通信を切った後、俺は外に探しに出た。

こんな雨の中、傘も持たずに外にしているとしたら……。

\* \* \*

「くそ……どこにいやがるんだ」

俺は思い当たる場所を片っ端から探しまくった。

クラナガンの繁華街

海が見える公園

ギンガさんとスバルがメンテナンスのために来る施設

これだけ探してもいないとなると……。

「もしかして……」

\* \* \*

「あつ……ファイ……ル？」

「やつぱり……ここにいたんですね……」

ここは、ギンガさんと俺が初めてあつた場所。

何てことない公園だけど、ここは俺にとつても大切な場所だ。

「どう………したの？ こんなところで……」

「ギンガさん……」

「あははは……私ね、もう疲れちゃった。いくら頑張っても、戦闘機人ということはどう

しようもない事実だものね。カルタスさんや父さんが庇ってくれても、他の人は奇異の目で私のことを見る……」

ギンガさんは、雨が降っている空を見上げながら話している。

今のギンガさんは、心が壊れる寸前——。

「こんな私なんて……もういないほうがいいのかもね」

「そんなこといわないでください!!」

「だって、私がいることで、父さんにもみんなにも迷惑がかかっている。それだったら……私がいなくなれば……すむから……。それに私の事なんて、誰も悲しまないしね……」

「……ふざけるな」

「えっ?」

「ギンガさんがいなくなつて誰も悲しまないだと……。スバルやゲンヤさん達のことまで否定する気か!!」

もう、こんなギンガさんを見ているのは辛すぎる。



ギンガさんは、完全に生きていることを否定してしまっている。今のギンガさんに必要なことは、優しくするだけことじゃない。

今のギンガさんを否定し、ちゃんと必要としている人がいるって事を分かってもらうことなんだ。

「フイ…………ル…………？」

「そんなのは間違っている!! ギンガさんのことがいららないなんて、スバルも、ゲンヤさん達もそんなことはこれっぽっちも思っていない!!」

俺はギンガさんを強引に抱き寄せ…………。

「…………自分の好きな人が、そんな風に思っているのを見て、何とも思わない奴なんかいないから…………」

「それって…………もしかして」

「ギンガさん…………俺はあなたのことが好きです…………」

\* \* \*

「嘘じゃないよね……。本当のことだよね……」

「嘘なんかじゃないよ……。俺はずっとギンガさんのことが好きだった」  
「あつ……」

嘘じゃないんだ……。

フィルが、私のことを好きでいてくれた。

私の片思いじゃなかったんだ……。

「フィル……私……私……」

もう、涙が抑えられなかった。

さつきまでの辛い涙じゃない。今度のは嬉しさからだ。  
そんな私をフィルはギュツと抱きしめてくれて……。

そして……。

ファイルが私の頬にそつと触れ……。

私もその意味を理解し……。

雨が降りしきる中……。

ファイルと気持ちを確かめ合うようにキスをした……。

\* \* \*

「というこで、ギンガさんは俺の所にいるから……。」

俺は、スバルにギンガさんが見つかったことを報告していた。

スバル達も、必死でギンガさんのこと探していたしな。

『……ファイル、本当にありがとう。それでギン姉は？』

「とりあえず、雨で身体冷え切ってしまったので、風呂で身体を暖まってもらっている……」

『そうなんだ……ギン姉、相当参っていたんだね』

「ああ……俺が見つけたときは、ギンガさんはかなり参っていたよ。本当はそっちに戻った方が良いんだけどな……」

あと少し遅かったら、ギンガさんの心は完全に壊れていた。

そのくらい危ない状態だった。

『ううん、ファイルの話を聞く限りじゃ、そっちにいた方が良いよ。それに……』

『ギン姉は、ファイルのことが好きなんだから……』

「……スバル、お前もしかして……？」

『分かるよ……。ファイルのことも、ギン姉のこともね……父さんにはあたしから言っておくから、だから、ギン姉のことお願いね……』

「ああ……」

スバルは、そう言って通信を切った。

通信が終わった後、ギンガさんが風呂から出てきた。

ギンガさんは、バスタオルを身体に巻いただけの姿だった。

「ファイル……」

小さな音を立てて、バスタオルが床に落ち、ギンガさんの身体が露わになった。向き合った二人は、じつと見つめ合い、それから、ごく自然に唇を合わせる。

「ファイル……大好きよ……」

「俺も……ギンガさんのこと大好きです……誰よりも……」

俺たちはベッドに移動し、ギンガさんの方からキスをされた。

最初は驚いたけど、俺もギンガさんの気持ちに応えるように、何度もギンガさんの唇

をむさぼる。

そして、バスタオルをはぎ取り、ギンガさんの胸に優しく触れる。

「んっ……あんっ……。もっとな……強くて良いよ。ファイルに触ってもらうと、幸せって……感じられるから……」

「……ギンガさん、分かりました」

そして、ギンガさんの身体をゆっくりと愛し——。

「……ごめんね。本当は私がリードしてあげなきゃいけないんだけど……。その……初めてだから……」

「良いですよ。俺だって初めてなんです……。だから、一緒に知っていきましょう」  
「……そうだね」

そして、俺はギンガさんと一つになり——。

その快樂に身をゆだね――。

二人の愛を確かめ合う行為は、幾度となく繰り返された。

\* \* \*

### 一週間後

デイルギア・フォーカスのことを調べ上げた俺は、オーリス姉に連絡を取り、108部隊を緊急査察を行うことになった。そこで、俺も同行することになった。

「デイルギア・フォーカス!! あなたのことはすでに調べてあります。観念して縛に付きなさい!!」

オーリス姉が、逮捕状をデイルギアに突きつけ……。

「な、なんのことかね。証拠も無しにそんなこと……」

「証拠ならあるさ……これをみな!!」

俺はスクリーンに、今までこいつがしてきたことを全て映し出した。

そこに映し出されたのは、今まで被害にあつた女性達のことと、汚い手段で一佐には  
い上がった事。

「こ、こんなもの……こいつが作り上げたでっち上げだ!! お前達、こいつらをつまみ出  
せ!!」

デイルギアの部下達が、俺たちをたたき出そうとしたが、こいつら程度に後れを取る  
ほど弱くはない。

逆に全員バインドで縛り上げ、プラズマランサーで眠らせた。

「くっ!!」

「観念しろ……デイルギア」



「うるさい!! 執務官風情が僕に命令するな!! 僕は一佐なんだ。お前より地位は上なんだぞ!!」

「だからって、何しても良い訳じゃない……。お前は女性を……。ギンガさんの心をボロボロにしたんだぞ!!」

「うるさい!! うるさい!! うるさい!! 戦闘機人の女一人が壊れたからといって何だって言うんだ!! かわりならいくらでもいるんだ!!」

「……今、なんて言った?」

「何度でも言つてやる……。たがが女一人が壊れたくらいでギヤアギヤア騒ぐな。そう言つたんだ!!」

何言つてやがる——。

貴様の身勝手に、ギンガさんがどんな思いをしたか——。

完全に切れた俺は、デイルギアを魔力を込めた拳で、最初の一発で表に叩きだした後、襟首をつかんで、顔面を何度も繰り返し殴る。

こんなやつに、なのはさん達から教わった大切な魔法なんか使う必要はない!!

「……………も、も……………う、や……………くれ」

「何言ってやがる!! 貴様に……………大切な純潔を踏みにじられた人達の心の痛みは、こんなもんじゃないんだぞ!!」

この事件を調べているとき、被害者の中には婚約者がいた人もいた。

男性は、被害者の女性を支えていこうとしたけど、デイルギアに身も心もぼろぼろにされた彼女は……………。

——そのまま、自分で命を絶ってしまった。

被害者の家族、そして、婚約者がどんな悲しみを負ったか……………。

せめて、こいつにその万分の一でも刻み込んでやらなければ気が収まらない!!

《マスター、もう止めてください!! このままじゃデイルギアを殺してしまいます!!》  
「……お前は黙ってる。こんなやつ生かしておく必要なんか……ない」

プリムの制止も振り切り、俺は、懐から護身用に持っているナイフを取り出し……。

「……………死ね」

デイルギアの頭に思いっきり振り下ろそうとしたそのとき……。

『そこまでよ、ファイル』

誰かにナイフを振り下ろそうとした腕を押さえられる。

振り返ってみるとそこにいたのは……。

「テイ、ア!?!」

なんで、ティアがここに来ているんだ!?

いま、あいつは別世界任務中のはずなのに……。

『……あたしは“あの世界”のティアナ・ランスターよ。あんたに託したクロスミラー  
ジユを見てみなさい』

そう言われて、あのとときから肌身離さず持っていた形見のクロスミラージユを見てみ  
ると……。

「クロスミラージユが……光って、る」

クロスミラージユが、ティアの魔法色と同じオレンジ色の光を放っていた。

『そう、アルテミスに無理を言っつて、ほんのわずかな時間だけど、実体化してもらったの  
よ……。あんたがバカやって、ギンガさんを泣かさないためにね』

「!？」

そうだ、俺は何をやってるんだ。

ここで、デイルギアを始末したって、それは俺の自己満足でしかない。

『……どうやら、少しは頭が冷えてみたいね。まったく、本当に世話が焼けるんだから……。あたしがしてあげられるのは、これが最後なんだから、しつかりしなさいよね!!』  
「最後、つて……。それはどういう……」

『そのまんまの意味よ。死者が生きている人の枷になつちやダメだからね。これから、ギンガさんと一緒に、幸せに……なりなさいよ』

ティアの身体は、段々消滅していき、そして……。

光とともに完全に消滅してしまった。

「……ひ、ひい、い……」

いつの間にかデイルギアのやつが、この場から逃げ出していたが……。

「……あんたみたいな女性の敵、逃がすわけないでしょう。観念しなさい、デイルギア」  
オーリス姉が率いる特殊部隊に捕らえられ、デイルギアは完全に逮捕された。  
そして、この場をオーリス姉に任せた後、俺は、108部隊舎の中に戻っていった。

「フィル……」

ギンガさんは、未だに切れている俺に声をかけづらみたいだ。

俺が切れているのは、デイルギアだけじゃない。

デイルギアと一緒に、ギンガさんを追い詰めた108部隊の連中にも怒っているんだ。

俺は近くにあった机を、力の限り、思いつきりけつ飛ばす。

机は、真つ二つになり、さらに机の残骸を踏みつけた。

『なっ!!』

ゲンヤさんもカルタスさんも、みんな俺の行動に驚いているけど、正直こんなはまだやり足りない。

これだけの怒りは、クアットロの時以来だから――。

「おい……お前ら、なに自分は関係ありませんなんて態度を取っていやがるんだ。今回のことはお前らだつて責任はあるんだろうが!!」

「確かに首謀者はデイルギアだ。けどな、一緒にギンガさんを追い詰めたお前らも、充分加害者だ!!」

『……』

俺の言葉に、連中はただ黙り込んでしまった。

いまさら、そんな態度取るな――。

人一人、あれだけ追い込んでおいてよ……。

胸糞悪いつたらありやしない――。

「ファイル、本当にすまねえ……」

「ゲンヤさんが謝る必要はないですよ。むしろデイルギアに脅されていたんですから……」

「知っていたのか……?」

「ええ……この事を調べているときに。ゲンヤさん、ノーヴェ達のことデイルギアの親に圧力をかけられていましたね」

「ああ……なさけねえ話だな……」

「ゲンヤさん。もう少し早く誰かに相談して欲しかったです。部隊を預かる身として、ゲンヤさんだけを見るわけにはいかないのは分かります。けど、一歩間違えれば、ギンガさんは……」

「本当にすまねえ……。これじゃ親として失格だな……」

「父さん……」

ゲンヤさんのことは、しかたがない。

ノーヴェ達のことを人質として取られている状態だったんだからな。

ゲンヤさんも、いろいろ苦悩し続けたんだから……。



3日後、正式に処分が下された。

ディルギアの親は、この事件でゲンヤさん達に圧力をかけてきたことと、今までディルギアがしてきた悪事をもみ消してきたことで、管理局をクビになった。

108部隊は、結果的におとがめ無しと言うことになったが、ギンガさんが、もうこの部隊に入られないだろうというオーリス姉の判断で、異動辞令を出すことになったんだけど……。

その行き先が……。

「フィル、これからよろしくね♪」

まさか、俺の執務官補佐として配属させるとは……。

ゲンヤさんも、オーリス姉もニヤニヤしているし……。

「もしかして……はめられたか、俺？」

《いいんじゃないでしょうか。これで公認で二人でいられるんですから。それに……》

《このほうが、彼女にとって良かったんですよ。あの場所にいるのは、少し辛いと思いま  
すから……》

「そう……かもな……」

いまのギンガさんは、心から笑ってくれている。

そんなギンガさんを、俺は全力で支えていきたい……。

\* \* \*

「はい、フィル。あーん♪」

「え、えつと……やっぱしなきや駄目？」

「だーめ♪」

そう言つてギンガさんは、肉じゃがを箸でもつて、俺に食べさせてくれるんだけど、  
やっぱり気恥ずかしい。

でも、俺が食べるとギンガさんが、すごくニコニコしてくれるのを見て、恥ずかしい  
なんて言えないよな。

「あ、あーん」

「どう……かな」

「やっぱり美味しいよ。さすがクイントさん譲りの腕だね」

「よかった♪」

「あれ、ギンガさん、あんまり食べていないね?」

ギンガさんの方を見ると、いつもならもつと食べるのに、今日は俺と同じくらいしか食べていない。

「だって……あんまりがつついて食べてると、良いイメージしないから。それに……」

「大好きな人の前だから……。もう、がつついて食べるのは止めたの。それでちゃんと足りているんだしね。元々、ストレスで食べていたところがあるから……」

「ギンガさん……」

「あつ、それと私のことはギンガって呼んでほしいな」

「ギ、ギンガ……」

「うん♪」

俺たちはずっと、こんな感じで夕食を食べていた。

ギンガさんが食べさせてくれるので、美味しさもさらに感じた気がする。  
最初は……気恥ずかしかったけどね。

\* \* \*

「やっぱり……まだ、恥ずかしいね」

「それは……俺もかな」

俺たちは、夕食が終わった後、ベッドでお互いのぬくもりを感じ合っていた。

さつきまで激しく求め合っていたから、二人ともかなり疲れていた。

「あのね……ファイル」

「なに？」

「………これからも……私のこと、いっぱいギュッと抱きしめてね。ファイルがギュッとしてくれると、私も頑張れるから……」

「俺で良かったら……いっぱいしてあげる。それに、ギンガを抱きしめっていると、俺も頑張れるから……」

「ありがとう……ファイル。幸せになろうね……」

俺はギンガをギュツと抱きしめて、またギンガを求める。

ギンガも、同じ気持ちで俺にキスしてきた後、最初はただ唇が触れているだけだったけど、段々と深い物になってきて、終わった後は銀色の糸がお互いの間に出来ていた。

「ふふつ、私の胸……好き？」

「……なんか、こうしていると気持ちが悪くなる？」

俺は胸フェチではないが、ギンガの大きな胸の中に行くと、気持ちが安らぐ。

「……そっか。私の胸だったら、いくらでもこうしてあげるからね。ティアナに浮気しちゃだめだよ……」

「あのね……。どうしてそこでティアナの名前が出るの？」

「……だって、ティアナとはずっと一緒だったし……。未来でも……。その……。ね……」

ギンガはもじもじして、顔を真っ赤にしながら言う。  
まったく、少しは自分の彼氏を信じてくれよ。

「どうしたら……信じてくれる？」

「……ファイルが、ずっと、私のことを愛してくれるなら……かな」

そんなの言われるまでもない。

愛する人と一緒になれるのは、最高の幸せなんだから——。

\* \* \*

3年後

「ねえ、何見ているの？」

「ん、ちよつと昔の写真を見ていたんだ……」

あの事件から三年が経ち、俺たちは結婚して今は二人で執務官をしている。

ギンガは俺の元で二年ほど執務官補佐をした後、昨年、執務官試験に受かり、捜査官から執務官に転向した。

といつても、基本的にギンガは俺とコンビで動くので、今でも俺の補佐として動いていることが多いけどな。

仕事面でも、プライベートでも俺たちはお互いの支えになっていた。

「ファイル……あのね……」

「どうしたんだ？ さつきから落ち着きがないけど……」

さつきから、そわそわしている感じで落ち着きがないけど……。

「ファイル、男の子と女の子、どっちが好きかな？」

「えっ？」

「赤ちゃん……出来たかもしれないの……」

「そっか……やったな!!」

俺は本当に嬉しかった。

ギンガはずっとこの事を気にしていたのだ。

自分は戦闘機人だから、もしかしたら子供は作れないんじゃないかって……。

だけど、そんな心配はもうしなくて良いんだ——。

「フィル……私……本当に幸せよ……。ありがとう……。私にいっぱい大切な物をくれて……」

「俺の方こそありがとうだよ。ギンガ……これからもいっぱい幸せになろうな。今後は生まれてくる子供と一緒にね……」

「うん♪」

戦闘機人として、人知れず苦しんだギンガ……。

だけど、そんな彼女も、今は心から笑ってくれている……。



そして――。

近い将来、俺とギンガの子供も生まれてくる……。

これからも、こんな暖かい日常を作っていきたい。

俺たち三人で……。

希望あふれる未来を……。

## i f e n d i n g ルーテシア

J S 事件終了後、私達フオワードは、六課解散までの間、なのはさん達に色々なことを教わっていた。

戦い方だけでなく、人とのふれあいも、私は六課で学ぶことが出来た。

それは、ゼストやアギト達と一緒にいたときには、得られなかった大切な物……。そして……。

「よっ……。お疲れさま、ルーテシア」

「お疲れ様です。ファイルさん……」

私は、事件が終わってから、ずっとファイルさんのことを考えている。

訓練の時も、食事の時も、そして寝る前まで……。

ファイルさんのことを考えると、胸が苦しくなる。

でも、決して嫌な気持ちじゃない……。

ちよつと、キャロに相談に乗ってもらおう。

一人じゃ、ちよつと苦しいから……。

\* \* \*

「ルーちゃん……それ、恋だよ。ルーちゃんは、フィルさんのこと好きなの？」

「……うん」

「そつか……ルーちゃん、でも、フィルさん……競争率が高いよ」

「そう……だよね」

実際、フィルさんのことが好きだと思う人は、知っているだけでも数人いる。ティアさんにスバルさん、なのはさんやフェイトさんだつてそうだ。

「ルーちゃん、思い切つてフィルさんに告白したら？」

「でも……フィルさん、私みたいなのは……多分……駄目なんじゃないかな」

実際、私はキャロやティアナさんみたいに話がうまくない。  
こんなんじゃない、きつとだめだよね……。

「それ……間違つてるよ。ルーちゃん」

「キャロ？」

「ルーちゃん、自分の気持ちを伝える前から、そんなんじゃないや駄目だよ。フィールさんは歳とか、そんなんで人を見たりしないよ。あの人は、本質で見えてくれるから……。だから、まず自分の気持ちを伝えなきゃ……」

「キャロ……ありがとう。私、フィールさんに自分の気持ちを……言うよ……」

キャロの言うとおりに、ちゃんと言葉にしなきゃ伝わらない。

私の精一杯の思いを伝えよう——。

「うん……それじゃ……これ、あげる」

「これは？」

キャロから渡された物は、一枚のチラシ。

内容は、こないだクラナガンに新しくできたケーキショップのチラシだった。割引券が付いていて、二人まで半額という物だった。

「これで、フィルさんを誘ってみてね。ルーちゃん、頑張つてね」  
「ありがとう……キャロ」

\* \* \*

翌日、私は、フィルさんを誘うために何とか声をかけようとしたが……。  
いざ、その場になると緊張してしまう。

でも、頑張らなきゃ……。

私の背中を押してくれたキャロのためにも——。

「あ、あの……フィルさん」

「ん？ どうしたんだ、ルーテシア」

「その……今度の休暇日……何か予定がありますか？」

「いや、特にないけど？」

フィールさんは、普段から忙しくて暇な日なんて滅多にない。  
こんなチャンスはもう無いかもしれない——。

「それだったら……その……私と……」

意を決し、私が誘おうとしたとき——。

「おーい、フィール!!」

スバルさんがフィールさんに声をかけてきた。

「どうしたんだ、スバル?」

「フィール、今度の休暇、暇?」

「あつ……その……わいい、予定がある」

——えっ?」

さつき私が聞いたときは、予定はないって言っていたのに？

「そっか……。それじゃ、また今度ね」

「じゃあな!!」

そう言つて、スバルさんは去っていった。

そして……。

「ルーテシア、良かったら、俺と一緒にケーキ食べに行かないか？」

「えっ?」

「いやあ、クラナガンに新しくケーキショップが出来ただけど、一人じゃちよつと行きづらいから、一緒に食べるにいかないか」

「いいんですか……。私で……。?」

スバルさんやティアナさんじゃなくて、私で本当に良いんですか——。

「ルーテシアが良ければだけどね……。いきなりだったから、予定があるかもしれない

けど」

「い、いえ!! 私もフィルさんと一緒に行きたいです!!」

「それじゃ、明日が丁度休暇日だし、明日行くか?」

「はい!!」

まさか、フィルさんの方から言ってくれるとは思ってなかった。

明日が楽しみ……。

眠れるかな……私……。

\* \* \*

「ルーテシア、しっかり捕まってるよ」

「はい……」

翌日、私はフィルさんのサンダーで、クラナガンに行くことになった。サンダーに乗るのは、今回が初めてだ。



男の人に抱きつくなんて初めてだから、なんか照れちゃうな……。

でも、フィルさんに、少しでも私を意識して欲しい……。

恥ずかしいけど、私はフィルさんの背中に、自分の胸を押しつけてみた。

\* \* \*

(勘弁してくれよ……。俺だって……一応、男なんだぞ)

ルーテシアの奴、俺にしっかりしがみついているのは良いんだけど、その度にルーテシアの胸が当たるんだよ……。

ルーテシアだって、成長期に入ってきている。

だから、胸の方だって、年齢相応にはなってきている。

頼むから、もう少しだけ力を抜いてくれ!!

基本的には俺は、女性には弱いんだからな——。

《ルーテシア、頑張ってください!! マスターの鈍感な直球で攻めないと、攻略できません。キャラと同じで私も応援しますよ》

\* \* \*

「それじゃ、ルーテシア、何を食べる?」

「そうですね……」

私がメニューを見ていると、色んなケーキがあつて迷つてしまひそうだけど、そんなとき一つのメニューに目がいった。

「あ、あの……フィルさん……これに……しませんか」

そのメニューは、恋人限定のケーキセット。

普段だったら、絶対に頼まないのに――。

「どれどれ……。えっ……。こ、これか？」

「……はい……。だめ……。ですか……」

言い終わった私は、もう恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまった。  
今日の私、本当に大胆なことしすぎだ……。

\* \* \*

ルーテシアが、恋人限定メニューのことを言った後、自分も恥ずかしくなってしまうたのか、顔を真っ赤にしている。

こういつちや悪いが、ルーテシアも女の子なんだな。

せつかくルーテシアが、一生懸命言ったんだ。

この後は、俺がやってやらなくちやな。

「それじゃ……。一緒に食べようか」

「えっ……。？」

「すみません!! この恋人限定のメニューを一つください」

俺は店員さん呼び、注文を取ってもらうと、しばらくするとハート型のケーキも持ってきた。

それだけでも、インパクトがあるけど、それ以上に……。

「フォーク……。一つしかないんですね」

「どうする……。もう一つ持ってきてもらおう？」

「多分、これが正式ですね……。フィルさん……。その……」

「あ、あーん……。してください……」

ルーテシアが、顔を真っ赤にしながら、フォークにさしたケーキを差し出してきた。これは……。恋人同士がやる、あれか。

「あ、あーん……」

《マスター……。いつまで惚けてるんですか。食べてあげてください!!》

「あ、ああ……。あーん」

俺は、ルーテシアにケーキを食べさせてもらった。

でも、正直言つて味なんか感じない!!

なんか甘酸っぱい気分だ……。

「今度は……ファイルさんが……食べさせてくれませんか……」

「あ、ああ……」

「ルーテシア、あーん」

「あーん」

俺は、ルーテシアの可愛く開けている口に、ケーキを食べさせた。

食べた後、ルーテシアは恥ずかしさで下を向いてしまった。

俺も、さつき同じような状態になったけど、でも嫌な気持ちはない。  
なんか可愛い妹にしてあげてるって感じかな。

\* \* \*

「(ハハ)……良い眺めですね」

「だな……」

夕方になり、私たちは海が見える公園に来ていた。

ここは、この時間になると、人は殆どいなくなる。

今日、私達は色んな所に行った。

ケーキショップで食べた後、ウインドウショッピングをしたり、私が行ったことがなかったゲームセンターにも行って遊んだりした。

色んな所に行って遊んで、本当に楽しかった。

それは、フィルさんと一緒だったから……。

だから、余計楽しかったんだと思う。

フィルさんと一緒にいるだけで、私の心は安らぐし、それに……。

私もフィルさんのことを、色々支えてあげたいと思う……。

私じゃ、フィルさんの支えになれるか分からない……。

でも——。

後悔しないように、自分の気持ちは伝えよう……。

「フィルさん……」

「どうしたんだ？」

「聞いて欲しいことが……あるんです……」

緊張で逃げ出したい……。

伝えるのが怖い……。

だけど、何もしないのはもつと嫌だ!!

「フィルさん……。私は……。あなたに助けてもらったときから、ずっとあなたのことを

思っていました」

最初は……優しいお兄さんと思っていた。

でも……。

一緒に戦って……。

フィルさんと一緒に過ごしていくうちに……。

私の心は、どんどんあなたへの思いで一杯になんです……。

「私は……ルーテシア・アルピーノは……。フィル・グリードさんのことを心から……。好きです……。」

\*

\*

\*



「ルーテシア……」

俺のことを、そんな風に思っていてくれたなんて……。

俺も、今日ルーテシアと一緒にいて、本当に楽しかった。

最初は、妹と一緒にいる感じだったけど、でも一緒にいるうちに、別の気持ちになつていった。

その違和感が分からなかったけど……。

今、それが分かった……。

俺も……ルーテシアのことが……好きなんだ……。

だから、ルーテシアに告白されて、驚いた以上に、それ以上に嬉しかった……。

「本当に……俺で良いのか？ ルーテシアだったら、もっと良い奴が出来るだろうに

……」

こんな俺なんかより、絶対に良い奴は見つかる。  
たとえば、エリオなんて本当に良い奴だ。

「フィルさんじゃなきゃ……いやです。私は、フィルさんと歳が離れています……。でも、フィルさんのことが好きな気持ちは、誰にも負けないです!! 例えティアさんやなのはさんよりも……」

「歳とかで、俺は人を好きになつたりはしない」

どんなに歳をとつたつて、精神的に成長していないやつもいる。  
そんな奴らに比べたら、ルーテシアは本当に良い女の子だよ。

「ありがとう、ルーテシア……。俺のこと……。好きになつてくれて……」  
「それは……。私の台詞です。私の方こそ……。ありがとうです……」

俺はルーテシアを自分の方へ抱き寄せ……。  
ルーテシアも瞳を閉じ……。

俺たちはお互いに引き寄せられるように……。

夕日の中……。

キスをしていた……。

\*

\*

\*

4年後

「ふう……。良い湯だ……」

毎年恒例の紅白戦が終わり、俺は、ホテルアルピーノの露天温泉でゆっくりしている。さすがに、3連戦はきつかったぞ——。

「それにしても、最近のルーテシアは、本当に積極的なんだよな……」

六課解散前、俺たちは正式につきあい始めて、俺はデバイスマイスターへの道を、ルーテシアはメガーヌさんとの日々を過ごすために、一時的に休職をしている。

その間も、ホテルアルピーノの建設手伝いやメガーヌさんの治療もやってきた。

ルーテシアも、メガーヌさんと一緒にいることで、本来の性格を取り戻してきた。メガーヌさん曰く、ルーテシアは、本来明るい性格だと言う。

そこまでは良かったんだけど……。

そんなことを思い出していたら——。

「おっじゃましま——す♪」

バスタオル姿のルーテシアが温泉に入ってきた。  
ちよつとまで!! 扉の前に男性入浴中の札はかけたはずだ!!

「いいじゃない。恋人同士なんだし。私、フィルさん以外には見せる気全くないよ♪」  
「あのな……。マジでやばいんだからな……」

ここ最近、こんな感じで積極的にアピールをしてくる。  
俺だって、普通の男性だ。

いつ、ルーテシアを襲ってしまわないかと戦々恐々の日々を過ごしている。  
でも、今日のルーテシアは、いつもみたいに身体を密着したりする小悪魔的なことは  
してこない。

表情は、どこか思い詰めた表情って感じた。  
すると、水面に一滴の雫が落ちる。

「……だったら……だったら、なんで抱きしめてくれないの!! 私、そんなに魅力ない!?!」

その雫はルーテシアの涙——。  
今も、涙が止まらないでいる。

「……ルーテシア」

「あっ……」

俺は、ルーテシアを自分の方へ抱き寄せ——。

「……ごめん。俺のいいかげんな態度のせいだな……」

俺は、本当にばかだ。

積極的なピールは、裏を返せば不安の表れじゃないか。

そんなことにも気づかないなんて、本当にばかだ——。

「そう思ってくれるなら、私を抱いて……」

「……本当に良いんだな？ 今なら、まだ……」

すると、ルーテシアは俺の口に指を当てて……。

「それ、今更。ここで抱いてくれなかったら、もっと泣いちゃうよ……」

「分かった……。じゃ、部屋に行くか？」

「うん……」

さすがに温泉でするわけにはいかない。

俺たちは、ルーテシアの部屋に行くことにした。

\* \* \*

「んっ……ふぁ……」

ベッドに行くと、俺たちは舌を絡め合うキスをする。

まるで、今までの思いをぶつけるかのように何度も繰り返す。

キスが終わると、互いの間には銀色の糸が出来上がっている。

「……………もつと……………もつと、私を求めて。遠慮なんか……………しないで!!」

俺は、ルーテシアの胸に触れ、その感触を何度も堪能する。

「あつ……………んっ……………。私の胸……………やわらかいかな?」

「ああ……………こうしてずつと触れていたい」

「えへへく♪ だったら、これからいっぱいしてね。私はフィルさんの彼女なんだから……………」

ルーテシアの甘い香りと喘ぎ声が、次第に俺の心を支配する。

人間としての本能——。



好きな人を求める行為——。

そして、ルーテシアの全身をすべて愛し——。

「……うれしい。いっぱい私を愛してくれて……。お願い……。きて……」

この日——。

俺たちは本当の意味で、恋人同士になった。

そして——。

俺もルーテシアも、肉体と精神が織りなす快楽に溺れていき……。

今までの分を取り戻すかのように、何度も求め合う——。

\* \* \*

3ヶ月後

「…………ふう」

あの日以来、ルーテシアのことを思ってしまった。

身も心も結ばれると、離れてしまうと、寂しい気持ちになる。

「こんな気持ちを……俺は、あいつに4年もさせてたんだな」

ちよつと通信でもしてみようかと思ひ、通信スイッチを入れようとしたとき、突然玄関のチャイムが鳴る。

「はい、どちらさま、ま……………」

ドアを開けると、そこには大きな段ボール数箱と一緒にルーテシアの姿があった。

「もう、これ以上離れているのはイヤだから来ちゃった♪」

「き、来ちゃったって……。メガーヌさんはどうするんだよ!？」

「はい、これ。ママから手紙預かってるの」

俺はメガーヌさんからの手紙を受け取り、内容を読むと――。

『ファイルへ。ルーテシアのこと受け入れてくれてありがとう。ルーテシアとあなたは歳が離れてるから、あの子ずっとそれを悩み続けていたの。でも……』

『あの子のこと受け入れてくれたなら、ずっと一緒にいてあげてね。というわけで、そっちにプレゼントするから好きにしてね♪　メガーヌ・アルピーノ』

「あ、あの人は……」

「ママったら……」

手紙を読み終えた俺は、もう頭を抱えるしかなかった。

お願いですから、可愛い一人娘を、こんな形で贈らないでください。

「でも、これでママ公認で一緒にいられるね。フィルさん、いっぱい可愛がつてね♪」

スカリエツティのせいで、親子共々辛い思いをしたルーテシア。

そんな彼女も、今は心から笑顔を見せてくれる……。

時には、小悪魔な面で俺を困らせることがあるけれど――。

そんな日常が俺は大好きだ。

愛する人と一緒にいられる一時が――。

かけがえのない宝物なのだから――。

## i f e n d i n g シヤマル

「ファイル!! しつかりなさい!! 今、シヤマル先生の所に連れて行くから!!」  
「ねえ、しつかりしてよ!! お願いだから、目を開けてよ!!」

フレイム・グロウを倒し、なのはさん達の救出に向かったあたし達。

だが、そこで見たのは――。

スパイラルを使つてしまい、力尽きて倒れていたファイルの姿。

なのはさんの話だと、ファイルは玉座の間にあるコアを破壊するために、たった一人玉座の間に残り、そこでスパイラルを使つてしまった。

もちろん、なのはさん達も、その場でただ手をこまねいていた訳じゃなく、何とか中に突入しようとしたが、AMFの影響で部隊長とリン曹長は、魔法が使えなくなつていたのと、なのはさんもブラスター3を使つてしまい、戦闘不能状態になつていた。

スカリエッティを倒したフェイトさんと合流したあたし達は、何とかサンダーの力

で、隔壁を破壊して中に突入し、倒れているファイルを、急いでアースラに運ぶ。そこで、あたし達を待っていたのは、シャマル先生だった。

「シャマル!! ファイルが……ファイルが!!」

「フェイトちゃん、落ち着いて!! スバル、ティアナ、とにかく、アースラの医務室に急いで運んで!!」

「はい!!」

あたし達はシャマル先生の指示で、ファイルを医務室に運んだ。こうしている間にも、ファイルの心臓は停止寸前になっている……。

\* \* \*

「……ファイル」

連れてくるのが早かったのと、処置のおかげで何とか一命は取り留めているが……。モニタを見るかぎり、このままではファイルの命はない。

スパイラルを使って、その場で死ななかつたのが不思議なくらいだ。  
スパイラルはブラスター以上に危険なシステム——。

「なんで……何でスパイラルを使ってしまったの……。あのとき、私と約束したのに……」

\* \* \*

### 決戦前

私は、先日、大怪我をしたファイルの身体の状態を確かめるため、最後の検査をしてい  
た。

メデイカルポッドで回復しているのは、表面上だけだ。

あの怪我を全て治すのは、こんな短時間では無理な話だから——。

「ファイル、分かっていると思うけど、あなたはまだ、完全に回復してるわけじゃないのよ」

「はい、分かっています……」

「本当は戦いには出たくないの。だけど、ここで止めても、あなたは行くんでしよう？」

「……はい、クアットロとは、最後の決着を付けなきゃいけないんです。それに、ヴィオのことも助けないと……」

「フィル、まさか、あなた……」

「……大丈夫ですよ。ヴィヴィオは絶対助けますから……」

そう言つてフィルが医務室から出ようとしたとき――。

「待ちなさい!!」

「シャマル先生？」

「あなた……まさか、スパイラルを使う気じゃ……」  
「!？」

ほんの僅かだけど、驚きの表情をした。

やっぱり、そのつもりだったのね……。



「ごめんなさい……。プリムから、全て聞いたの……」

「プリム……お前」

《マスター……ごめんなさい。でも……》

「あれほど、言うなつて言つたらうが……特にシャマル先生には……」

「フィル、そんなに、私が信用できないの!!」

—— どうして、そんなに私のことを信じてくれないの。

勝手にスパイラルの事を聞いたから……。

でもね……私は……。

「そうじゃ……ないんです……」

「それじゃ、どういう事なの？」

「……知られなくなつたんです。シャマル先生だけには……自分が……好きになつた人だけには」

「えっ？」

「シャマル先生……俺……あなたのことが……好きです……」  
「う、うそ……冗談よね」

だって、ファイルが好きなのは、向こうの世界のティアナ。  
私が好きなんてそんなこと……。

「……冗談じゃないですよ。かつて、向こうの世界で、俺はあなたの優しさに救われま  
した。六課襲撃のとき、俺はあなたに庇ってもらい……生き残ることが出来たんです  
……」

ファイルがなのはちゃん達に見せてくれた映像は、今でも覚えてるわ。

六課襲撃をくらい、ガジェットに対してヴァイス陸曹と一緒に奮戦したが、数の暴力  
と戦闘機人がいたため、ヴァイス君は戦死。

そして、ザフィーラと私も、死んでしまった。

『ファイル……あなたは……生きなきや駄目よ……。私達に分まで……みんなを……お願  
いね……』

あの時、私はフィルをかばって死んでしまった。

それが今でもフィルの心の傷になっていることも――。

「だから……私には……言えなかったのね……」

「片思いなのはかまわないんです!! だけど、あんな事になるのは、もう嫌なんです……。自分の好きな人が、俺の……俺のせいで……死ん……で……」

フィルは私が死んだときのことを思い出して、いつの間にか涙を流している。

そんな彼をもう見ていられない。

私はそんな彼をそっと抱きしめ――。

「……ばかよ。そんなになるまで、自分を責めて……」

みんなが死んでしまったのは、フィルのせいじゃない。

でも、フィルはずっとたった一人で心に抱え込んできた。

普通の人だったら、押し潰れてしまうほどの悲しみを――。

「それにね……片思いなんかじゃないわ……」

ずっといえなかったけど、私はね――。

「私もね……大好きよ……フィール……」

私達は、瞳を閉じて――。

どちらからともなく口づけを交わす。

初めてのキス……。

それは、少しだけ涙の味がした。

「ふふっ……」

「あはは……」

「……なんか、ちよつと恥ずかしいわね……」

守護騎士として、長い時を生きてきたけど、こんな気持ちは初めてだから――。

「同感です……。正直、こうなれるなんて、思わなかったですから……」

「私も同じよ。ただ、フィルとはちよつと理由が違うのよ」

「と、いいますと?」

「だって……六課にはいっぱい、かわいい女の子がいるでしょう。はやてちゃんもそうだし、フェイトちゃんだって……」

そして、一番フィルの近くにいるティアナ。

こんなにも、フィルのことを思っている女の子達がいたから――。

「だから、こんな年上の女なんて……そう思っていたから……」

きつと今の私の顔は、恥ずかしきで真つ赤よね。

そう思っていたら、フィルが自分の方へ抱き寄せて――。

「あつ……」

「……そんなこと言わないでください。俺にとつて一番好きな女性は、シヤマル先生なんですから……」

「……ありがとう……フィル……」

私はフィルの言葉が嬉しかった。

年上つて事もあるけど、私はこんな風に恋愛をすることは、無いと思っていたから……。

「フィル……あのね……」

「はい？」

「私のこと……シヤマル、つて呼んで欲しいの。恋人同士だったら、お互いに名前で呼び

合う物でしょう……………」

私はスバルやティアナが羨ましかった。

ああやって、フィルと壁が無く会話が出るんですもの——。

「確かに、そうですね……………」

「あと、その敬語も禁止ね。仕事の時はともかく、二人きりの時はやめましょう……………」

「……………わかった。シヤマル」

「……………嬉しいわね。好きな人に、そうやっていってもらえるなんてね……………」

私たちは、再びキスをしようとしたとき——。

アースラ艦内に警報が鳴り響く。

「時間……………みたいだ……………」

この警報は第一級戦闘配備。

降下ポイントまで、あと30分を知らせる物だった。

「ファイル……」

「どうしたの？」

「絶対……生きて帰ってきて!! 私を一人にしないでね!!」

「大丈夫……。ちゃんと生きて帰ってくるから……」

\* \* \*

現在

「ちゃんと帰ってくるって……言ったのに……」



大切な人が、今にも死んでしまおうつてのに、私は何も出来ないの……。

《一つだけ……方法があります……》

「クラールヴィント？ 違う？ どこから？」

《ファイルのポケットを見てください》

謎の声に従って、ファイルのポケットを探してみると、クラールヴィントがあった。

「どういう事なの？ クラールヴィントが二つあるなんて？」

《私はあっちの世界のクラールヴィントです。かつて、マスターからファイルに託された……》

「それでもおかしいわ。だって守護騎士システムで成り立っている私達は、死んでしまおうとデバイスも一緒に消えてしまうの？」

私達と持っているデバイスは、一心同体。

だから、どちらかが残っているって事はあり得ないはず……。

《最後の力で、私をシステムから切り離したんです。それで存在しているんです……》

「そういうことだったのね。それなら納得いくわ。それで、何か方法があるの？」

《はい……》

「お願い、クラールヴィント!! ファイルを助ける方法を教えて!! ファイルを助けるためなら、どんなことだってするから!!」

ファイルが助かるなら、どんなことだってしてみせる!!

例え、私の命と引き替えだとしても……。

《方法というのは……私のコアを……ファイルに飲ませてください》

「なん……ですって」

《知つての通り、私のコアは魔導師一人分に匹敵する魔力を持っています。それを生命力に変換し、彼を助けるしかありません》

「だけど、そんなことをしたら、あなたが!!」

クラールヴィントがやろうとしていることは、スパイラルシステムの応用。

もし、実行すればクラールヴィントは……。

《私のことは良いんです。かつて私は、マスターを守れなかった……。こつちに来てからも、そんな後悔でずっといました。だから、今度は後悔したくないんです!! マスターが好きになった人を助けられるなら、それで私は本望なんです!!》  
「クラールヴィント……」

クラールヴィントの思いに、私は涙を抑えられなかった。

「……ごめんなさい。あなたの命……使わせてもらうわ……」

《喜んで……マスター》

「ありがとう……クラールヴィント……」

《幸せになって……くださいね……。あんな未来は……なくなつたんですから……》

私は涙をこらえながら、クラールヴィントのコアを取り出す。

ここで、中途半端なことをしたら、クラールヴィントに申し訳がない。

「ファイル……お願い、これで……蘇って!!」

そして、そのコアを口移して何とか飲ませ——。

\* \* \*

### 医務室前

医務室前には、スバルとあたしが外で待機していた。

さつきまで、六課主要メンバー全員いたのだが、今は二人だけになっている。

「ティア……」

「何よ……」

「フィル……大丈夫だよね……」

「大丈夫に決まってるでしょう!! あんたは余計な心配なんかしない!!」

スバルにはああいったけど、正直言ってフィルの容態はかなり酷い。あの時のシャマル先生、打つ手がないうって顔をしていた。そんなことを考えてると……。

「「シャマル先生!!」」

「もう、大丈夫よ。フィルは……峠を越したから……」

「本当ですか!!」

「ええ……」

「あたし、みんなに知らせてきます!!」

「ちよつと待ちなさい!! あたしも行くわよ!!」

\* \* \*

スバルとティアナは、フィルの無事を知らせるために、みんなの所に走っていった。

「……あなたのおかげで、フィルが助かったわ……本当にありがとう……クラールヴィ

ント……」

私の手に握られた、コアのないクラールヴィント。

「あなたがしてくれた事、決して忘れないから……」

\* \* \*

二週間後

ファイルも意識を取り戻し、今は一般病棟に移っている。

一時は面会謝絶だったが、ここまですると、面会も許可が出て、食べ物も普通の物を食べられるようになっていた。

「はい、ファイル。あーん♪」

「あ、あーん……」

「どう……かな……」

私の手料理って、今までうまくいっていなかった。

器具を壊しちやったり、味付けが極端になってしまったりと……。

今回は、本当に頑張ったけど……。

フィル、美味しいって言うってくれるかしら……。

「うん、美味しいよ」

「よかった!!」

「よかったな、シヤマル。私の所でいっぱい勉強したもんな」

「は、はやてちゃん!! それは……」

そう、私は、はやてちゃんにお料理を教えてもらっていたのだ。

どうしてもフィルに、美味しいご飯を食べさせてあげたかったから……。

「しかし、驚いたわ。海鳴にいた頃は、あれだけ教えても駄目だったのに、たった10日

でこれだけ出来るようになったんやから……。きつと、愛の力やね」  
「シヤマル……」

「あはは……なんか……恥ずかしい物、見せちゃったわね……」

料理が出来るようになるまで、何度も包丁で指を切っちゃったから——。  
そんな指を見られるのが恥ずかしくて、私は自分の手を、後ろに隠してしまった。

「そんな訳ないだろ。その傷は、俺のために一生懸命してくれた証だろ。はやてさんから聞いたけど、本当に料理が苦手だったのに、これだけの物を作ってくれたんだから……」

そして、私の手をそつと握って……。

「本当に……ありがとう……。シヤマル……」

「ファイル……」

「あの……お二人さん、良い雰囲気になるのはかまわないんやけど、私がないときにしてくれるかな……」



「あっ……」

はやてちゃんの言葉に、二人とも顔が真っ赤になってしまった。そんな私たちを見て、はやてちゃんはさらにからかつてくる。でも、本当に喜んでくれて良かった——。

\* \* \*

「そっか……クラールヴィントが……」

「ええ……自分のコアをあなたに託したの……」

退院して半月が経った頃、シャマルから、初めて俺が助かった理由を聞かされた。

クラールヴィント……ありがとう。

お前がくれた命、大切にするから……。

「シャマル……俺……」

「ファイル、クラールヴィントのことを、少しでも思ってくれるなら、二度とスパイラルは使わないで……もう、あんな思いは……嫌よ……」

シヤマルの瞳から、大粒の涙があふれていた。

俺の軽率な行動で、この人を悲しませちゃったんだから――。

「約束する……。二度とスパイラルは使わないよ……」

「ありがとう……」

あんな危険なシステム、もう二度と使いたくない。

大切な人を二度と悲しませたくはないから――。

\* \* \*

「あ……あの……シヤマル」

「なんで、俺はこんな事になってるのかな？」

俺とシャマルは、部屋に戻り、しばらくの間、ベッドに座つてのんびりしてたのだが、突然シャマルが俺をベッドに押し倒し……。

「あ、あのね……私だつて……女なんですよ。フィルだったら、いつまでたつても、私のこと求めてくれないし……。私……魅力ありませんか……」

「違うよ!! そうじゃない!!」

「じゃ、なんでなんですか!!」

「……だつて、そんなにがつついたら、嫌われると思つたから……」

——俺だつて男なんだ。

好きな人と一緒にいて、ぬくもりを感じ合いたいと思うのは当たり前前の感情だ。だけど、自分勝手に求めるのは、そんなのは嫌だから……。

「ばかね……そんなわけ無いでしょう。私は退院してから、ずっとフィルに抱きしめてもらいたいって思つてたのよ」

「シャマル……」

「あつ……」

「ごめんな……不安にさせて……本当に馬鹿だ……俺……」

俺は上体を起こし、シャマルを力一杯ギュッと抱きしめる。

「……ファイル、私の不安を消して……いっぱい……いっぱい……抱いて……」

瞳を覗き込むと、シャマルはそつと目を閉じ……。

俺は、そんな彼女の唇にキスをした。

最初はふれあう物だったけど、お互いに気持ちを抑えきれなくなり、だんだんと深い物になっていった。

キスが終わった後に、出来上がった銀色の糸がその証。

「お願い……いっぱい抱きしめて……」

「ああ……いいんだね……」

「遠慮したら……怒りますからね……」

俺は、シャマルの服を脱がし、下着の上から形の良い胸に触れ——。

「……んっ、もっとなつよくしても……大丈夫よ」

「……シャマル」

——女性特有の甘い匂い。

それが俺の心を支配していく。

俺たちは、全ての衣類を脱ぎ去り、互いの体温を感じ合う。

そして——。

「……お願い。私を……あなたの……ものにして」

俺たちは、心から結ばれ……。

そのぬくもりをずっと感じたくて……。

その夜は幾度となく互いを求め合った。

\* \* \*

4年後

六課解散後、俺とシヤマルは管理局を辞め、俺は医学の道を歩むことになった。

俺はスパイラルの影響で、現場で戦うことが出来ない身体になってしまった。

そんな俺にシヤマルは、医学の勉強しなやかと云ってくれ、必死で勉強し、何とか医師の免許を手に入れた。そして、俺はシヤマルと結婚し、クラナガンで開業医として、一緒に働いているのだ。

ちなみに、俺が管理局を辞めることは、そんなに苦労は無かったのだが、シヤマルの

方が、闇の書事件のことがあって、かなり苦勞した。

だけど、レジアスの親父さんが取りはからってくれて、条件付きでシャマルの退職を認めてくれた。

条件は、期間限定で、はやてさんが地上所属になり、地上の状況を勉強し直すこと。

実はこれは、レジアスの親父さんの親心でもあった。

はやてさんはいつか管理局のトップになれる素材だ。

だから、今の内に沢山勉強して欲しい。

そのことが分かっていたから、はやてさんも条件を呑んだのだ。

そして、はやてさんは俺たちに……。

『ファイル、シャマル、二人とも幸せになつてや……。私のことは気にせんといて……。レジアス中将の真意は分かつてゐるから……』

レジアスの親父さん、そしてはやてさん。

俺たちは、そんな優しい人たちのおかげで、今こうしている。

これから、俺たちは色んな困難に遭うだろう——。

だけど、愛する人がいれば、それを乗り越えられる……。

例え苦しいときでも、シヤマルの笑顔が、俺に力を与えてくれる。

そして、今日も——。

「フィル!! 今日も、一日頑張りましたよっね!!」

穏やかな一時……。

そんな日常を……。



これからも一緒に歩んでいきたい……。

大切な人と……シャマルと一緒に……。

## i f e n d i n g    リイン

「ファイル……待っててください!!    今、行きます!!」

ゆりかごの非常システムが発動し、私とはやてちゃん、なのはさんとヴィヴィオは、玉座の間に閉じこめられようしていたが、ファイルがウインド・ブレスで隔壁が閉じる前に、みんなを吹っ飛ばして外に脱出させた。

それだけなら良いんだけど、ファイルは最初から玉座の間に残るつもりだった。

ゆりかごのコアを破壊するために……。

自分の命を……。

「みんな、頑張ってください!!」

「わかつとる!!    このままファイルを死なせるわけにはいかんのや!!」

「私が通る穴が空けば……そこから中に突入できます!!」

「みんな、どいて!! エクセリオン……バスター!!」

なのはさんが残った力で隔壁に砲撃を放ち、なんとか私が入れるほどの穴を空けることに成功した。

「リイン!!」

「はいです!!」

フィール……。

早まらないでくださいね……。

\* \* \*

「はあ……はあ……」

《《マスター……》》

ブラストブレイザーもプラズマザンバーも全く通用しない。  
あのコアの前に、俺の攻撃程度じゃ全部はじき返されてしまう。  
せめて、ブレイカーが撃てる魔力が残ってれば……。  
今の俺の残された手は……たった一つだけ。

《マスター……。まさか!?!》

俺はプリムの制止を振り切り、銀色のカートリッジをセットし……。

《それだけは止めてください!! 本当に死んでしまいます!!》

「悪い……プリム。もう、これしかないんだ……」

ブレイカーを撃つ魔力が残っていない以上、もうこれしかない。  
コアに銃口を向け、スパイラルを起動させようとしたとき……。

『やめてえええええええ!!』

銃口の前に、リン曹長が立ちふさがっていた。

\* \* \*

「はあ……はあ……。本当に間一髪です」

「リン曹長……どうして？」

本当に間一髪です。

ファイルは最後の手段を使おうとしてた。

——ラストリミットを。

「ファイル、止めてください……。スパイラルを使わないでください……」

「どうして……その事を……」

「ごめんなさい……。プリムから聞いていたんです。スパイラルのこと……」

ゆりかご決戦前、私はプリムからスパイラルのことを聞かされた。  
そのシステムを使えばファイルがどうなるかも——。

「プリム……お前……」

《すみません……でも、どうしても彼女だけには、話しておきたかったです。マスター  
……彼女は……》

「プリム……その先は、私が自分の言葉で言います」

《リインさん……》

はずかしいですね……。

でも、今ファイルに私の気持ちを言わないと、絶対後悔するです……。  
私は、何度も躊躇ったけど、覚悟を決めて言うことにした。

「ファイル……」

「は、はい……」

「私は……リンは……フィルの事が……大好きです……。LikeじゃなくLoveの方です……」

「えっ……？」

——とうとう言っちゃったです。

人間とデバイスの恋なんて、成立するわけなのに……。

私、バカですよね——。

「い、今言ったこと……忘れてください……。ばかですよね。デバイスが人間と結ばれるわけなのに……でも……でも……」

わかっていたのに——。

こうなるって分かっていたのに……。

でも、涙がどんどんあふれてくるんです。

私が声を殺して泣いていると、フィルが——。

「あつ……」

両手でそつと、私のことを包み込んでくれ――。

「……本当に……俺で良いんですか？」

「それは……私の台詞ですよ。私で良いんですか？」

ファイルだったら、好きになってくれる女の子はいっぱいいるんですよ。

それでも、私で良いんですか――。

「こんなこと……嘘は言わないです。もう一度聞きますけど、本当に良いんですね」  
「ファイルじゃなきや……いやです……」

。 戦闘機人とか、デバイスとか関係なく、その人の心を見てくれるあなただから――  
。 だから、私はファイルに自分の思いを伝えるように……。



「フィル……目をつぶってくださいますか」

「こう……ですか？」

私も瞳を閉じて……。

フィルの唇に……。

自分の唇を重ねた——。

「も、もしかして!？」

「えへへ♪ リンのファーストキスですよ♪」

私のファーストキス。

大好きなフィルだから、あげたんですからね——。

「リイン曹長……」

「フィル、リインって呼んでください……。それと、二人きりの時は、敬語は無しですよ。その方が嬉しいです……」

「……リイン」

「はいです♪」

好きな人には遠慮なんかしてほしくありません。

だから、私も思いつきり甘えますからね♪

\* \* \*

「……フィル、私に一つ案があります」

リインの策は、スパイラルの代わりに、俺とリインがユニゾンをし、限界まで出力をあげるといふ手段だ。

だけど……これには、かなりの危険が伴う。

元々、リインは、はやてさんのユニゾンデバイスだ。  
それを俺がユニゾンした場合、なにが起こるか分からない。

「いいんですよ……。ファイルがスパイラルを使うよりは、ずっと良いです……。大好きな人と一緒に苦しみを分かち合えるんですから……」

「……ありがとう」

「行きますよ……」

「ああ……」

「ユニゾン・イン!!」

「きゃあああああ!!」

「うわああああ!!」

ユニゾン自体は何とか成功したけれど、俺もリインもかなりの負担がかかっている。  
おそらくもって、数分……。

「リイン……大丈夫か……」

「大丈夫ですよ……。私のことは心配しないでください……。行きますよ、ファイル、プリム

!!

「《おう（はい）!!》」

俺たちは、残された魔力を全部、この一撃にかけることにした。  
ブレイカーを撃つ魔力は、もう残されていない。

——プラズマザンバー。

こいつの一撃に全てをかける。

ソニックムーヴで加速して、一気に突撃をかける。

刃がバリアで防がれるが、融合魔力の威力がバリアを貫き——。

「二刀両断……。プラズマザンバーツツ——!!」

上段からの一撃がコアを真つ二つに破壊した。

\* \* \*

「はあ……はあ……やったぞ」

「やりましたね、ファイル!!」

ファイルは全魔力を使い果たして、膝をついて今にも倒れそうです。

このままユニゾンしていると、本当に命の危険があります。

急いでユニゾンアウトをしようとしたが……。

「きやああああ」

「あいたたたた……」

通常のユニゾンアウトと違い、弾かれるように外に飛び出してしまいました。

「……い、痛いです」

お尻を打って立ち上がることが出来なかった私を見て、ファイルが言った一言は——

「……もしかして、リイン？」

何、言ってるんですか？

私以外に、誰がいるんですか……。

「リイン……。今の姿を、何かで見てみて」

ファイルに言われて私は、近くの鏡面状の壁で、自分の姿を見てみると……。

「う、うそですよね……。これが私ですか!？」

そこには、背丈が、はやてちゃんくらいになっている自分の姿が映し出されています

た。

「信じられないかもしれないけど……」

「や、やったです!! これでフィルと一緒にいても、違和感がなくつきあえます!!」

最大の悩みだった、サイズの差がこれではなくなりました。

これで普通の女の子と一緒にです!!

「い、いや……もう少し事の重大さを考えよう。これ、多分融合事故だから……」

「そうでしたね……。えへへ♪」

\* \* \*

事件解決後、リンのことを詳しくメンテナンスしてみると、大変なことが判明した。あの時の融合で、リンは俺以外と融合できなくなってしまう、はやてさんと一緒に

戦うことが出来なくなってしまったのだ。

姿の方は、今までの省エネモードと大人モード（これはゆりかごでリインが名付けた）を自在になれるんだけど、今までははやてさんから魔力供給していたんだけど、今度は俺がリインの魔力供給をすることになってしまった。

「まあ、なってしまったことはしょうがないわ。だけど、フィール……」

「リインのこと泣かせたら承知せえへんで……。ええな」

「はい……リインのことは俺が守ります……。俺の一生をかけて……」

「フィール……ありがとうです……」

「なんか……見せつけられた感じやな。でも、安心したわ。八神家の末っ子のことよろしくな」

「はい!!」

結果的に俺はリインの所有者になることが出来、リインもそれをすごく喜んでくれた。

リインが変わるデバイスを、はやてさんに作らなきゃいけないけど、それはリインがいてくれれば、なんとか作れる。



なにより……。

「えへへ♪ これで、ずっと一緒ですからね♪」

リンと一緒にいられるなら、こんなの苦勞でも何でもないから……。

\* \* \*

「はい、フィル。あーんです♪」

「こ、ここですか!？」

「そうですよ……。それとも、私がこうするのはいや、ですか……」

「そ、そんなことないよ……。ただ、みんなが見ているからな……」

しかも、今のリンは大人モードだ。

かなりドキドキしてしまう。

「むう……。フィル、ちゃんとかつちを見てください」

「ちやんと見ているって、ただ……」

「ただ……なんですか!!」

「その姿のリイン……。その……可愛いんだ。ドキドキするくらいに……」

普段のリインはマスコットの感じだけど、こうしていると胸の高鳴りが収まらない。

一緒にいるだけで、顔が真っ赤になるのが分かるし——。

「フィル……えへへ♪ ありがとうございます♪」

『あああっ!!』

そう言つてリインは俺の頬にキスをしてきた。

食堂にいたフォワードのみんなや隊長陣はかなりびっくりしていた。

「フィル……大好きです♪」

「リイン……」

\* \* \*

「あの……ファイル。その……私……こういったこと初めてですから……」  
「俺も……そうだよ……」

私とファイルは今、ベッドの中にいます。

今までは、一緒に添い寝とかはしてましたけど、こういった行為をするのは今日が初めてです。

「やさしく……して、くださいね……」

「ああ……」

ファイルが私の服の中に手を入れて、胸を何度も触れ——。

「あ……ん……だめ……ですよ……」

「やわらかいね……リンの胸……」

「えへへ♪ 私にこんなことしていいのは、ファイルだけなんですからね♪」

なのはさんやシグナムみたいに大きくないですけど、はやてちゃんくらいはあるんですからね。

「大切にするよ……愛してる……リイン……」

「私も……愛してますよ……ファイル……」

私たちは最初はただ、ふれあうだけのキスだったけど、段々とお互いを求め合うようになり、キスをし終わった後は、お互いの間に銀色の糸が出来ていた。

今の私は大人モードです。

だから、こういった行為も人並みに興味があります。

「きて、ください……ファイル……」

「リイン……」

私たちは月夜の中……。

お互いを何度も求め合い……。

その行為を、朝まで繰り返す。

その度に、ファイルと溶け合っているって感じられます。

\* \* \*

「気持ちいいですね♪」

「リイン、しっかり捕まっていないと落ちるぞ!!」

「大丈夫ですよ。しっかりつかんでいますから」

私達は、はやてちゃんにお休みをもらい、クラナガンに遊びに行くことになりました。ファイルがサンダーを出してくれて、私は後ろに乗ってしっかりと抱きついていきます。こうしていると、恥ずかしいんですけど、ファイルのぬくもりを感じられますから――

|。

「……いろいろ……きついな。こりや……」

「我慢しなくて良いです……。私も……いっぱい抱きしめてほしいです」

楽しいことだけじゃなく、ファイルの辛いこと、悲しいことを全部受け止めてあげたいから……。

\* \* \*

「うわあ……。綺麗ですね」

「確かにな……」

私たちはクラナガンで食事をした後、とあるジュエリーショップに寄り一つの指輪を見ていた。

デザインは決して派手ではないが、中心にダイヤが輝いてとても惹かれます。

二人でそれを見ていたら、店員さんがやってきて――。

「よろしかったら、嵌めてみますか？」

「良いんですか？」

「はい、そちらのお嬢さんにお似合いかと思えますよ」

私は早速、指輪を嵌めてみる。

するとサイズもぴったりで、とても気に入っちゃいました。ただ、お値段も……。

「……残念ですけど、またの機会にします」

そう言って、私は店員さんに指輪を返しました。

お金を貯めていつか買えたらと思います。

\*

\*

\*

「……ここは景色が良いですね」

「ここは、俺の場所だからな」

夜になり、私達は六課から少し離れた海岸に来ています。

ここは、ファイルが昔からのお気に入り場所。

「ここに誰かを連れてくるのは……初めてかな」

「ファイル……」

きつとこの場所は、つらいことや悲しいことがあつたときに来ていたんですね。

「……何を……思い出してるんですか？」

「……いろいろ……かな」

ファイルの悲しい笑顔を見れば、何を思いだしてるのかは分かります。

未来でみんなと一緒にいた頃の思い出。



それを思い出していたんですね――。

「ごめんね。こんなみつともない所を見せて……」

「良いんです!! フィルは、普段私に、こういった所を見せてくれないですから……」  
「もうすこし、見栄張りたかったんだけどな。やっぱり、俺は三枚目だな」

見栄なんか張らないでいいです。

フィルはずっと、張り詰めてきたんです……。

私と一緒に時は、素顔のフィルでいてほしいです。

「私は……今のフィルの方がずっと好きです。不器用でも、本音で言ってくれる方が

……うれしいです」

「……ライン」

いつの間にかフィルの瞳から、一筋の涙が流れていました。

私はそっとフィルの涙を拭う。

「こんな形でしか……リインに気持ちを伝えられないけど」

ファイルがポケットから取り出したのは、クラナガンのジュエリーショップで見つけたあの指輪。

そして――。

「……こんな俺を……好きになってくれて……ありがとう」

私の左手の薬指に指輪を嵌めてくれた。

「これ……もしかして……」

「そういう意味で……取ってもらって良いよ」

「嬉しいです……。私を選んでくれて……。本当に……。ありがとうございます」

星空が照らす海岸で、私とファイルはキスをする。

私、ファイルを好きになって本当に良かったです。

\* \* \*

二年後

「ファイル、今日は何しますか？」

「そうだな。久しぶりの休みだからな……」

「たまには……家でのおんびりしましょうか。身体を休めるのも必要ですしね」

「そうだな……。そうしようか」

六課解散後、正式にはやてさんからラインのことを託され、それに変わるデバイスを作り、はやてさんは今でも現役で特別捜査官をしている。

そして俺は、一年間フェイトさんの元で執務官補佐をし、執務官試験に合格しラインと一緒に仕事をしている。

公私ともに俺たちは支え合っている、最高の関係だ。

ラインがいることで俺も無茶をしなくなつた。

スパイラルは正式に封印し、プラスターも使わなくなり、力が欲しいときはユニゾンをして対応している。

それに、そうしないとリインが本気で怒るからだ。

「フィル……今日は何が食べたいですか……」

「そうだな……。今日は胃にやさしいものが良いかな……。そのあとは……」

俺は背後からリインを抱きしめ……。

「リインを……かな……」

「もう……。いいですよ……。いっぱい、して……。くださいね」

ユニゾンデバイスと人との恋……。

本来なら、成立はしない悲恋……。

……。……。

本当に愛し合うことが出来るなら、そんな物は関係ない……。

だって……。

「フィル……ずっと、一緒ですからね♪」

左手の薬指に輝く指輪と——。

リインの笑顔が、なによりの証だから……。

## i f e n d i n g ヴィータ

「うし、何とかここまできたな」

「ですね」

ゆりかごに突入した俺たちは、ゆりかごの機能を停止するため、それぞれ分担をすることにした。

なのはさんは玉座の間へ、フェイトさんはスカリエッティを倒すため最深部へ、そして俺とヴィータ副隊長は駆動炉へ向かっていた。

「ここまでくりや、もうちよつとだ。カートリッジもまだある、楽勝だ……」

ヴィータ副隊長がカートリッジの残数を確認していると、ヴィータ副隊長の背後が僅かだけど、地場の揺れが確認できた。

まさか、あれは……?」

次の瞬間、鎌のようなものがヴィータ副隊長を襲った。

\* \* \*

あたしは、カートリッジの残存数を確認すると、疲れからかすこしめまいがした。やっぱ、ここまでガジェットを叩いてきたのは結構きつかったみたいだな。

「おい、ファイル。おめえも大丈夫か？」

ふと、さつきまで横にいたファイルがない？

「あれ、どうしたんだ。あいつ？」

ファイルを探そうとして、他の方を向こうとしたとき、頭に液体が落ちてきた。

「何だ？ つて血!!？」

「こんなところで……血だと……。はっ!!」

あたしはファイルに言われたことを思い出していた。

あたしは前の時、ここでガジェットに背中を貫かれて……殺されたんだ。

たしか、あたしがカートリッジの確認をしていたときに……。

ま、まさか!!

あたしが後ろを振り向いてみると……。

「よ……よかった……。間に合った……」

「ファイル!!」

そこには、あたしの身代わりになって、ガジェットの鎌で身体を貫かれたファイルがいた。

「あ……ああ……。うわあああああ!!」



あたしはグラーファイゼンを横風呂にし、ファイルを貫いていたガジェットを破壊した。

鎌から解放されたファイルは、その場に倒れてしまい――。

「おい……しつかりしろ……。目を開けろよ!!」

「ヴィータ……副、隊長……」

「しつかりしろ!! 死ぬんじゃねえ……死ぬんじゃねえぞ!!」

こうしている間も、ファイルの身体からはどんどん血が流れている。

あたしの付け焼き刃の回復魔法じゃ、追いつかない!!

「ヴィータ……副隊長……行っ……さ……い」

「馬鹿いつてんじゃねえ!! おめえをここにおいていけるわけねえだろ!!」

「俺……な……大丈夫……夫……す……ら……」

こうしている間も、体温がどんどん低下している。

これじゃ、なのはの時と同じじゃないか!!

《ヴィータさん……。行つてください》

「プリム!! 何言つてやがるんだ!! このままじゃ、こいつは!!」

《あなたがいたところで、マスターは変わりませんよ。回復魔法なら、私が全力でかけます。それに……》

《いま、あなたがするべき事はマスターのそばでオタオタする事じゃない。一刻も早く駆動炉を破壊する。それが今のあなたの役目でしよう!!》

「!!」

《きつい言い方して済みません……。でも、マスターのことを思ってくれるなら、お願いします。マスターのしたことを無駄にしないでください!!》

あたしは、何をしているんだ。

ファイルが自分の身を犠牲にしてまで、あたしを助けてくれたのは何のためだ。

あたしにすべてを託してくれたからじゃねえか——。

それなのに……。

ここであたしがウジウジしてどうするんだ。

「プリム……ファイルのこと、おめえに任せたからな……。絶対……死なさないでくれよ……これ以上大切な奴を失うのは……いやだからな」

《絶対マスターは、死なせません!! 私の全てをかけて!!》

「頼んだ……ぜ……」

断腸の思いで、ファイルのことをプリムに任せたあたしは、駆動炉に向かおうとしたが、目の前にさっきのガジェットと同型の機体が数え切れないほど現れた。

こいつらは、なのはただでなく、フィルムまで……。

あたしの大切な奴まで……。

——許せねえ。

アイゼンを肩に担いでカッと目を見開き……。

「てめえら……。一機残らずブツ潰してやらあ!!」

その先のことは、あんまり覚えてねえ。

無我夢中で、ガジェットを全機叩いて、そのあと駆動炉に行き、残った魔力を全て使って駆動炉を破壊したんだ。

そして、はやてが駆けつけてくれて、あたしは何とか死なないで済んだけど……。

——ファイルは。

\* \* \*

「くっ……」

「ほら、無茶するんじゃない。ゆっくりで良いんだからな」

「はい……」

ファイルは、あの時はやてに助けられ、なんとか一命は取り留めたんだけど、出血多量と傷が原因で、下半身不随になってしまった。

ただ、医者のリハビリをすれば、完全に回復できると言うこということだ。

「ヴィータ副隊長、毎日済みません……。俺のリハビリに……」

「そんなこと気にするんじゃないよ。それに……」

「あたしを庇って……こうなったんだ。これくらいのことさせてくれよ……」

もう、なのはの時みたいに、何も出来ないのはいやだ。

あたしは、フィルのために自分が出れることをしてやりたい。

そのためにあたしは、介護を勉強した。

介護は、テレビで言っているみたいに、決まてきれいな事じゃ出来ねえ。

食事介助とかだけじゃなく、排泄の世話とかもある。

今のフィルは、下半身に力を入れることが出来ない。

だから、トイレまではあたしが連れて行くことが必要だ。

そこまで連れて行けば、フィルが何とか自力でズボンを下ろしたりは出来るようになっっている。

フィル、絶対良くなってくれよ。

そして、もう一度……。

もう一度、あたしにチャンスを与えてくれ……。

お前に、あたしの気持ちを言うチャンスを……。

\* \* \*

三ヶ月後

「何とか……復帰できたな」

《ええ、ヴィータさんが、ほぼ毎日来てくれて、マスターのリハビリを手伝ってくれたおかげですよ。本来ならミッドの医療技術でも半年はかかると言っていたんですから》

ヴィータ副隊長のおかげで、俺は奇跡的に半分の三ヶ月で、完全に回復することが出

来た。

リハビリを毎日欠かさずしたこともあったけど、ヴィータ副隊長が献身的に俺のサポートをしてくれたからこんなにも早く社会復帰することが出来たんだ。

本当にヴィータ副隊長がいなかったら、俺は自暴自棄になったと思う。

《>とにかく、六課に帰りましょう。みんな待っていますよ》

「だな……」

六課に戻った俺は、そこでみんなに盛大に迎えてもらった。

ドアをくぐったとたん、クラツカーの嵐に遭い、スバルとティアに泣きながら抱きつかれたり、なのはさん達からも泣かれてしまう状態だった。

その後、食堂でパーティを開いてくれて、みんなで盛り上がった。

こんな光景を、もう一度見られるなんて……。

\* \* \*

「ふう……ちよつと食べ過ぎたかな」

パーティが終わった後、外の空気を吸うために、俺は六課の野外訓練場に來ていた。すこし歩いていると、そこにいたのは……。

「ヴィータ……副隊長？」

「あつ……」

「どうしたんですか。こんなところに」

「べ、別に、お前を……待っていたわけ……ねえんだ……。そ、その……あたしは……」

なんか、いつものヴィータ副隊長と違う。

いったいどうしたというんだ。

「あ、あのな……その……よかつたな。完全に治って」

「ヴィータ副隊長のおかげですよ。ヴィータ副隊長がいなかったら、俺はもしかしたら……」



「そんなことねえよ。おめえなら自分で立ち直ったよ。あたしはほんの少し……しただけだよ」

「その少しが、俺にはかけがないものだったんです。介護つてきれいな事じゃないです。それでも、ヴィータ副隊長は毎日のようにしてくれた……」

「……あたりまえだよ……。あたしは……。あたしは……」

「おめえのことが……。好きなんだから……」

\* \* \*

「えっ……？」

とうとういつちまった。

本当は怖い……。

ここから逃げ出したい……。

だけど、どうしても言っておきたかった。

振られても良い……。

それでも、自分の気持ちに嘘をつきたくなかったから……。

「それ……嘘じゃないですよね」

「こんな時に嘘言える性格してねえよ……。あたしのいつわりのない気持ちだ」

正直、ファイルにはあたしなんかよりふさわしい女はいっぱいいる。

だから、これはあたしのケジメだ。

これで、ファイルのことを忘れよう……。

「俺も……ヴィータ副隊長のことが……好きです」

「えっ……嘘だろ」

「俺も、副隊長と同じですよ。こんなときに冗談や嘘は言いませんから……」

ファイルはそう言って、あたしを自分の方へ抱き寄せた。

「だから……ヴィータ副隊長……俺と……」

「……ヴィータ」

「えっ？」

「副隊長なんて付けるな。おめえは自分の彼女に副隊長なんて付けるのか」

確かにあたしはこいつの上司だ。

だけど、こんな時まで副隊長なんて付けられるのはいやだ。

「ヴィータ……」

「ああ……」

あたしは、瞳を閉じ……。

ファイルも意味を理解してくれて、あたしの頬に手を添え……。

そして……。

あたし達は……。

月の光が照らす、訓練場でキスをした……。

\* \* \*

半月後

「ほら、ここ間違っているぞ」

「えっ、本当だ……」

「つたく、フィル、休みで勤が鈍っているじゃねえか。どれ、あたしが見てやるよ」

そう言つて、ヴィータは俺の背中に抱きつく形になって、パソコンの画面を見ていた。

「あ、あの……ヴィータ副隊長……その……」

「何度も言わせるなつての、あたしのことはヴィータって呼べて言ってるだろう!!」  
「ですけど、今は勤務中ですから……」

「なにを今更、あんたとヴィータ副隊長が付き合っているのなんて、みんな知っているわよ」

「えっ……?」

「ま、マジか!?!」

「知らぬは当人達ばかりなり……つてことです。というか、それだけいちゃついでいて、気づかないなんて思ってたんですか」

テイアの言葉に、俺もヴィータも顔が真っ赤になってしまった。  
そんなに周囲から見て、俺たちはいちゃついていたのか。

\* \* \*

「あーあ、とんだ恥かいましたな……」

「ですね。六課にみんなに知れ渡っていたんですね。俺たちのこと」

「まあ、でも、プラスに考えればあたし達のこと、これで気兼ねなく出来るからな」  
「あ、あれで遠慮してたんですか。勤務中に俺に抱きついていたりしてたのに……」

基本的に、訓練以外の時は抱きつかれたりしていたからな。

「いいじゃねえかよ……。あたしは、おめえの……その……彼女なんだからよ……」

そう言って、ヴィータはぷいっと反対の方にむいてしまった。

こんなヴィータもかわいいんだけど、だけど……。

「あつ……」

俺はヴィータを自分の方に向けて……。

「ごめんなさい。あんな態度取って……本当は俺も嬉しいんですよ」

「本当か……」

「嘘じゃないですよ」

「だったら……今日はいっぱいギュツとしてくれよな……。部屋に戻るとおめえがいな  
いから……寂しいんだ……」

「じゃ、遠慮しませんからね」

「遠慮なんかするなよ。でも、ごめんな。あたしこんな身体じゃねえか。もつとスタイルが良かったら……」

「あのですね。俺はスタイルで人を好きになつたりはしないですから……」  
「そりゃ……分かってはいるけどよ」

俺たちはもう、何度か一つになっているけど、それでもヴィータのコンプレックスは中々ぬぐい去れない。

だから……。

「こら……やめろつて……。服の中に手を突っ込んで胸触るな……あん……」

「俺が、ヴィータを抱きたいって思ってもらえないから……。今日は部屋に帰さないですよ」

「……だったら……いっぱいしてくれよな……」

俺はヴィータの服を全て脱がし……。

そして……。

今日も俺たちは、お互いの気持ちを確かめ合うように、何度も求め合う。

\* \* \*

「はい、ヴィータ。あーん」

「あーん♪」

「どう、美味しい？」

「……うまいに決まってるだろ。おめえのアイスなんだからよ」

「そ、そう……ですか」

「もつと……食べさせてくれよな」

「ああ……」



こうやって、ヴィータが俺の作った物を喜んで食べてくれる。  
ヴィータの屈託のない笑顔は、俺も穏やかな気分にしてくれる。

「ほら、もつと……食べさせてくれよな……。何度も……言わずなよ……恥ずかしいんだから……」

「そうでした……。はい、あーん」

こんな風に、俺たちの休日は流れていった。

\* \* \*

二年後

「ファイル、何見てるんだ？」

「何、昔の写真をね……」

六課が解散して、俺ははやてさんに正式にヴィータとの交際を報告することになった。

六課時代は、一応非公式だったから、いままで報告は控えてただけど、はやてさんが……。

「いまさら、何言ってるんや。あんたらが六課でいちゃついているの見て、私らは毎日、口から砂糖吐いてたんやで」

はやてさんの言葉に、俺もヴィータも、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になってしまった。

でも、後悔はしてない——。

今、俺はヴィータと一緒に教導官をしている。

公私ともに一緒にいたいというヴィータの希望で、俺は必死で教導官の資格を取った。

最初は、人に教えるのなんて柄じゃないと思っていただけ、やってみるとかなりおもしろいと思った。

自分の教えたことが、生徒に伝わったときは特にだった。

なのはさんも、ヴィータもこれがあるから、教導官という辛い職業をやっていきけるんだろうな。

そして、今日は久しぶりの休日だった。

「おい、今日はどこに行くんだ？」

「サンダーに乗って、クラナガンに買い物でも行こうか」

「そうだな。たまには、あの有名な所のアイスも食べたいしな」

「ヴィータは、いつも食べているでしょう。俺のだけだね」

「うっせーよ……いいだろ。アイスは好きなんだから……。おめえのも好きだけど、あっちも好きなんだよ」

素直じゃないけど、こういうところがかわいいんだよな。

まあ、手前味噌もあるかもしれないけど……。

でも、やっぱかわいいと思う。

「ファイル……」

「ん？」

「これからも……その……一緒だからな」

素直じゃないけど、心の優しいヴァイター。

俺はそんな彼女に、何度も助けられた。

これからもお互いに、助け合えたらいいと思う。

それが、お互いを思いやると言うことだから……。

# if ending カリム

「ふう……ようやく抜け出せました」

連日の仕事で休む暇も無し、これでは息が詰まってしまいます。

シャツハも真面目なのは良いのですが、もう少し肩の力を抜いて欲しいです。

いつもいつも、教会で仕事ばかりしていたら息が詰まってしまいます。

それに……。

申し訳ないと思いましたが、幸いシャツハは、今日はセインとお出かけをしていますが、  
ません。

このチャンスを逃す手はありません!!

「でも、教会から抜け出したのは良いのですが……。一体どうしたらいいのでしょうか？」

正直な話、教会の外に一人ではあまり出たことがない。

一体どうしたらいいのだろう……。

そんなことを考えていると、一台のバイクがこちらにやってきた。

「……あれ？　もしかして……騎士カリム……ですか？」

「ファイル……？」

それはJS事件以来、会っていなかったファイルとの再会だった。

「一体どうしたんですか？　こんなところで、お付きの人もいないみたいですけど？」

「えっと……それは……？」

ま、まずいです。

もしファイルに私が教会を抜け出したと知られたら、きっと教会へ連れ戻すに決まっています。

せつかく苦勞して抜け出したのに。

しかも、シャツハがないチャンスなんて、滅多にないのに……。

「……なるほどね」

ファイルがため息をつきながら、言葉を吐く。

これは……完全に感づかれました。

これで……また教会に戻されてしまいますね……。

「……あの、もしよかったら、俺と一緒に行動しますか？」

「えっ……？」

今、何と言ったのですか……。

一緒に行動しよう……確かにそう言いました。

「……仕事が辛いのは何となく分かりますからね。たまには息抜きも必要です。それに

……」

ファイルは、少しおどけてウインクをしながら……。

「世間のことをあまりご存じでないお姫様に、少し社会勉強して貰うのも悪くはないですからね♪」

\* \* \*

「あの……それでどこに連れてつてくれるんですか？」

結局私はフィルのバイクに乗せられ、一緒に行動することになった。

正直フィルがこんな行動をするとは思わなかった。

私はてつきりすぐに教会に強制送還すると思っていたから……。

「うーん……。一日しかありませんから、そんなに遠くには行けませんけど、クラナガンの繁華街でしたら大丈夫でしょう」

「繁華街ですか……。いいですね。私も行ってみたいと思っていました!!」

「それでしたら、少し飛ばしますののでしっかり捕まってくださいね」

「はい!!」



私はフィルの身体にしつかりしがみついて……。

「あ、あの……騎士カリム。そんなにくつつかなくても……大丈夫ですよ。それに……」

「それに……何ですか？」

「その……言いづらいのですが……。その……胸が……」

「あつ……」

た、確かにこれですと、フィルの背中に私の胸を押し当ててるようなものです。  
ですけど……。

「え、えつと……騎士カリム……？」

「カリム……」

「えつ……？」

「今日くらい私のことは呼び捨てで呼んでください。今の私は聖王教会の騎士ではないんですから……」

今、この時だけでも良い。

普通の女性として謳歌してみたい。

「……前も言いましたけど、俺、女性を呼び捨てにするの慣れてないんですよ」  
「それでしたら、ファイルも私で慣れていきましよう。今日はその練習だと思ってください」

ファイルは一瞬きよんとしていたが……。

「……分かりました。それでは今日はそう呼ばせて貰いますね。カリム」

「はい!! あと、敬語も禁止ですよ♪」

「……えっ、そ、それは……ちよつと……」

「良いんです!! 思いつきり楽しみたいです!! だからお願いします!!」

「……分かった。カリム。今日だけだから……」

「はい♪」

ファイルはバイクのスロットルをさらに上げて、クラナガンへ全速で走らせた。

\* \* \*

「うわあ……色んなものがありますね……」

「ここは、クラナガンでも有数のショッピンングモールだからな。洋服だけでなく、アミューズメントも充実しているんだ」

「アミューズメント……ですか？」

「ああ……ゲーセンとかもあるし、レストランとかも入っているから、色々楽しめると思うよ」

ファイルの説明に私は心がワクワクするのを止められなかった。

今まで私は、教会領のお店とかなら行ったことがあるけど、こんなに遠くまで一人では来たことがなかった。

というより、私の場合立場上自由が利かず、どこに行くにしても制約が多かったのだ。

「それじゃ、カリムはどこに行ってみたい？」

「出来れば……全部回ってみたいです」

「了解だ。それじゃ大分気合い入れないといけないが、覚悟は良いな」  
「はい!! 体力ならありますから任せてくださいね」

\* \* \*

「ここは……?」

「ここはゲームセンターだな。色んなゲームがあるだろ」

「ええ……でも、ちょっと騒がしいですね」

「まあ……ここは若者が多く集まるしね。でも、大人の人も来たりしているよ」  
「そうなんですか……。あつ……あれは何ですか?」

私が気になったのは、大きな箱形の機械だった。

そこにはカップルや若い女の子達がいっぱい集まって何かをしている。

「ああ……プリクラだな」

「プリクラ……? それは何ですか?」

「簡単に言うと、写真を撮ってそれをシールにして遊んだりするんだ。ほら、こんな感じかな」

ファイルを見せてくれたのは、手帳に貼っていた数多くの小さな写真だった。

「これが……そうなんです。でも……ずいぶん女性と撮っている写真が多いんですね」

「えっ……。まあ……殆どがティアやスバル達と写っている物ばかりだけどね」

そうは言うが、その他にもなのはさんやフェイトさん、さらには、はやてさん達と写っている物まであった。

「ずいぶんおモテになるんですね。ファイルは」

「モテてないって……現にフリーなんだぞ俺は」

「そう……なんですか？」

「そう言うこと。今日だつて一人寂しくバイクを走らせていたんだからな。まさかあそこでカリムと会うとは思わなかったけどね」

「ふふっ……確かにそうですね」

でも、もしあそこでファイルに会わなかったら、もつと早く教会の方に連れ戻されていただろう。

聖王教会だつて私が黙っていなくなったらすぐに探し出す。

「よかつたら……一緒に写真撮ってみる？」

「良いんですか。私で？」

「せっかく一緒に遊びに来たんだ。何か思い出を残さなきゃね」

まさか、ファイルの方から言ってくれるとは思わなかった。

私は年上と言うことと恥ずかしさで、自分からは切り出すことが出来なかった。だから、ファイルの言葉は本当に嬉しかった……。

「そうですね。それじゃ、お願いします!!」

ファイルと私はプリクラの機械に行き、一緒にプリクラを撮ることになった。

私は初めてなので、操作はファイルにお任せすることになった。

「えっと……これはね、3種類撮ることが出来て、その後色々自分で書くことが出来るタイプなんだ」

「書くって……？ 画像にですか？」

「うん、簡単に言うると合成が出来ると考えてもらえればいいかな。まずは写真を一緒に撮ってからだね」

その後私達は3回色々な表情の写真を撮った。

普通にピースしているのや、ふくれっ面の物や、後は少しだけ寄り添った物も撮ったりした。

「うん……上出来かな」

「うわあ……すごいんですね」

ファイルが渡してくれたのは、さっき撮った私達の写真だった。

写真には色々落書きをしてあって、とてもカラフルな物になったと思う。

一枚だけ私が全部やってみたのがある。  
それには……。

「その……なんだ……。これは結構恥ずかしいかも……」

「良いじゃないですか。これは私の素直な気持ちですから♪」

『大切な人』

それがファイルに対する私の気持ちだった。

「まあ……なんだ。俺もカリムのことは……大切な友人だと思っているしね」

「……そう……ですか」

「カリム？」

「何でもありませんよ。さあ、次の所に急ぎましょう。時間は限られているんですから  
!!」

「お、おい!! カリム!?!」



—— そうだ。

彼にとって私は友人の一人にしか過ぎないんだ。

だから、この気持ちは私の胸の内に仕舞うことにしよう。

だけど……。

今日だけは……。

今日だけは、貴方を好きで良いですか？

\* \* \*

「うーん……。今日は色々回りまくったな」

「そうですね。こんなにはしゃいだのは生まれて初めてです」

「そっか……。それは良かった」

あれから私達はウインドウショッピングをしたり、喫茶店で甘いものを食べたりした。

喫茶店では、おもいつきつてカップル限定のメニューを頼んで、それを食べさせあたりした。

ファイルは終始顔を真っ赤にしていたけど、それでも最後まで付き合ってくれた。

色んな所を回って夜になり、今はクラナガンの海が見える公園に来て夜空の星を眺めている。

「本当に……本当に楽しかったです。今日は……ありがとう。ファイル」

「俺も楽しかったよ。でも、カリムがあんなにはしゃぐ姿は見たこと無かったよ」

「そう……です。今までは……ずっと自由はなかったですから」

「カリム……」

そう……。

私のレアスキル、プロフェーティン・シュリフテンを持っているため、私には自由が殆ど無かった。

確かに教会領の中では、ある程度動けたけれど、それでも外に出るにはかなり制約があった。

この能力があるため、色んな犯罪者から狙われてしまっている。だから、一人では外に自由に行くことも許されない……。

「ファイル……今日は……本当に楽しかった。そして……普通の女としているのも……今日でお終い、かな」

「えっ……？」

「……何で、私が教会を抜け出したか、分かりますか？」

「いや……正直分らない」

これだけは言っておきたいの。

これから言うことは、ファイルにとって重荷になってしまいかもしれない。

「実は……私……」

だけど、これ以上自分に嘘をつくのは嫌だから……。

「……………結婚、させられるんです」

\* \* \*

「えっ…………？」

カリムの言葉に俺は驚きを隠せなかった。

カリムの処遇は、今までのつきあいと今日の話で分かっているつもりだった。

だけど、まさか…………。

「それ……………自分の意志なの…………？」

「……………いえ、教会側が決めた政略結婚という奴ですね……………。能力者同士結婚すれば、その能力を子々孫々にまで残せるって……………そんな理由です」

「馬鹿げてる!!」

俺は思いっきりフェンスをけっ飛ばす。

「ファイル……?」

ふざけるなよ。

聖王教会、どこまで思い上がった考えしてやがるんだ。

聖骸布を盗まれたことを隠蔽しただけでは飽きたらず、今度は一人の女性の人生も奪う気か……。

「俺は……俺は、カリムにこんな不幸な未来を歩ませるために、JS事件を戦ったわけじゃない!!」

未来でも、この人は生き残った俺たちを必死でサポートしてくれ、そして、人々にもその優しい笑顔で生きる希望を与え続けてきた。

だけど……。

それもクアットロが聖王教会に総攻撃をかけたときに……。

カリムも……一緒に死んでしまった……。

「今度こそ……今度こそ……自分の好きな人には……幸せになって欲しかったのに……」

「えっ……?」

「ごめん……こんなこと……言うつもりは無かったんだ……」

そんな泣きそうなカリムの目を見ていたら……俺まで……辛い。

「ファイル……」

カリムは必死で、これはどうしようもないんだ、仕方がないんだと思いこもうとしている。

そんなのあまりにも悲しすぎる……。

「私だって……私だって……大好きな人と……ファイルと一緒にになりたい……」

「カリム……?」

「私は……貴方を……ファイル・グリードのことを愛して……います……」

「!!」

「分かっていきます……。こんなことを言っても、貴方には迷惑なのは……。でも、どうしても伝えなかったんです」

カリムはその場にしゃがみ込み、とうとう泣き崩れてしまった。

まさか……カリムが俺のことを思ってくれたなんて……。

\* \* \*

とうとう言ってしまった……。

こんなことを言ったってファイルにとって迷惑なだけなのに……。

これで後悔はない。自分の気持ちを全部伝えられたから……。

でも……でも……。

本当は……本当は……自分の好きな人と添い遂げたかった。

愛する人の温もりを感じたかった……。

だけど、それは叶わない望み……。

せめて今日の思い出を胸に、生きていこう……。

「迷惑なわけ……ないよ。俺も……同じ気持ちだから……」

「フィ……ル……」

「だから……」

そうやってフィルは私を自分の方へ力強く抱き寄せる。



「せめて、俺の前だけで良いから、悲しみを抱え込まないで……。自分の愛する人が悲しんでるのなんて……。辛いから……」

「ファイ……ル……私は……私は……」

「今は……思いつきり……泣いて……ね」

「う……あああ……あああ……ああ……」

もう、私には涙をこらえるのは無理だった。

ファイル……。

貴方の優しさ、心の芯まで伝わります……。

だから、その優しさに甘えさせて貰います。

しばらくの間、私はファイルの胸の中で思いつきり泣いた……。

そして……。

「ファイル……」

私とフィルは、互いの瞳を見つめ合い……。

「お願い……キス……して……」

やがて、どちらからともなく……。

お互いの唇と唇は……。

それぞれの存在を確かめ合うように触れあつた……。

\* \* \*

「なんか……恥ずかしいですね」

「そう……だな」

「……でも、それ以上に温かいんです。好きな人と……こうして温もりを感じられるんですから……」

カリムは俺の肩に自分の身体を預けてきた。  
こうしていると、カリムの気持ちは伝わってくる。

「あ、あのですね……その……」

カリムは顔を真っ赤にしながら、何かを言おうとしている。

「どうしたの……?」

「……今日は」

そして、カリムは意を決し……。

「今日は……帰りたくない……です」

\* \* \*

「本当に……いいんだな」

「はい……攻略結婚なんかで、私の……大切な物を奪われたくないです。初めては……大好きな人と……結ばれたいですから」

「カリム……」

あの後、俺たちはクラナガンのホテルに泊まり、お互いにシャワーを浴びた後、今はこうしてベッドに座って寄り添っている。

カリムの髪をそつと撫でると、カリムも眼を細めて俺に甘えてくる。

普段は年上の綺麗なお姉さんなんだけど、こうしていると可愛いという感じがする。

「フィル……」

カリムは潤んだ瞳で俺のことをじつと見つめる。

そんなカリムの瞳に、俺も吸い込まれるようにキスをする……。

「んっ……んんんっ……」

最初は舌を絡ませると、びっくりしてしまっていたけど、段々こちらの舌に合わせる

ようになり、何度も繰り返している内にカリムの方から求めてくるようになった。

キスが終わった後は、お互いの間に愛の証として、銀色の糸がつかっている。

「キスって……こんなに気持ちいいんですね……」

「そうだな……でも、それは、気持ちがあがつているからじゃないかな……。そうでないと不快なだけだし……」

「ふふつ、そうですね……。ねえ、これだけ……なんですか？」

「まさか……」

俺はカリムの期待に応えるように、カリムを押し倒し、上着を脱がし、下着も取り、その綺麗な胸に触れる……。

「あつ……んんん……ふあああ……」

「……怖がらないで……その感覚に……」

「でも……こんな感覚、初めてなんです……。なんだか、自分じゃなくなる気がして……」

「大丈夫、俺がしっかりと抱きしめてるから……ね……」

俺の言葉に安心したのか、カリムはギョツと抱きついてきた。

「お願いです……。これ以上は……もう……」

「ああ……カリム、カリムの初めて……もうね」

「はい……私の初めてを……貰ってください……」

そして俺たちは月明かりが照らす部屋で……。

お互いが結ばれ……。

その後も、またお互いを求めて、何度も温もりを感じ合い……。

それは数時間繰り返し……。

身も心も完全にとけあう……。

\* \* \*

半月後

俺はフェイトさんとティア、そしてレジアスの親父さんの力を最大限に使い、聖王教会の膿を全部調べ上げた。特に親父さんはものすごい乗り気で、聖王教会の弱点を徹底的に調べ上げてやると、部下を総動員して徹底的に調べてくれた。

オーリス姉もカリムのことを聞き、同じ女性として道具扱いは絶対に許さないと、張り切って調べてくれた。

その結果、カリムを政略結婚に追い込もうとしていた一派の事を完全に調べ上げ、さらに隠蔽して

いた聖骸布のこともフェイトさんとティアが見つけてきてくれた。

この一件は知ってはいたけど、証拠不十分でどうしようもなかったもので、証拠を見つけてきてくれた二人には本当に感謝だ。

これが決定的な一打となり、一派は完全に崩壊し、結婚のことも破談となった。

「よかつたな、これで俺は用済みかな……」

「何言ってるんですか……。私の大切な物を奪ってにおいて、それは無いんじゃないですか……」

「冗談だよ。それだったら、あの時抱いたりはしないから……」

「もう……その冗談はタチが悪いですよ……」

カリムは頬をふくらせ、私、怒ってるんですよとアピールしている。  
でも、そんなカリムもなんか可愛く見えてしまう。

「なんで笑ってるんですか……。私、怒ってるんですからね」

そう言っても本気で怒っているわけではない。

「だったら……どうしたら、許してくれる？」

答えは分かっている。



だけど、あえてカリムに聞いてみる……。

「……それは、分かっているでしょう。ファイル……」

「じゃ……」

そして、俺はカリムの唇にキスをする……。

「……これだけじゃ……いや……」

「後は、夜になってからね……というか俺の理性が持たん……」

「求めてくれても……いいのに……」

「一応仕事でここには来たから……。教会内でしたら、さすがにまずいだろう……」

「……だったら、もう一度キス……して。そしたら、夜まで頑張るから……」

実は、あの夜から俺とカリムはずっと俺の部屋で住んでいる。

今でこそ教会に戻っているけど、事件が収まるまでは、ずっと俺の部屋で過ごしていたのだ。

半月後、無事事件は解決したのだが、その後もカリムは教会領には戻りたくないと言

い、仕方がなく俺の部屋で同棲という形を取っている。ただ、クラナガンとここではかなりの距離がある。

だから、これは特別に許可を取って、クラナガンの俺の部屋とここをポーターで繋いだのだ。

そうしないと教会には戻りませんと言いついてしま、シスターシャツハも俺も困り果ててしまったのだ。

今もシスターシャツハはカリムに振り回されている。

「……夜、覚悟しろよ……。火を付けたのは、そっちなんだから……。」「望むところです。今日はいっぱい抱きしめてくださいね♪」

\* \* \*

「はい、ファイル。あーんしてください」

「……やっぱ……しなきや駄目か」

「はい♪」

カリムが定時で仕事を終わって、すぐに夕御飯の支度をしてくれた。

しかも、その料理の内容は、うな重に肝すい、レバニラ炒めとどう考えても精力増強料理でしょう!!

「……あの……一人で食べられるから……ね」

「だあーめ。こうして食べて貰うことが嬉しいんですから♪」

カリムは俺の隣に座って箸におかずを取って、俺にあーんと言ってさつきから食べさせてくれていた。

何度か良いよと言ったけど、その度に泣きそうな顔をしてしまい、つつい俺も食べさせて貰ってしまっていた。

「美味しい……ですか。ファイル」

「美味しいよ。カリムって、この半月で本当に料理がうまくなったよね」

実はカリムは事件が落ち着くまでの間、オーリス姉はやてさんから料理を教わっていたりしていた。

特にはやてさんは、お姉さんのように慕っているカリムに料理を教えられると言うことで、張り切って教えてくれた。

「まだまだ、はやてやファイルには及びませんけどね」

「そんなこと無いよ。こうして好きな人に作ってもらうとより美味しいよ」  
「ありがとう……ファイル」

こうして、カリムの手料理を食べた後、その後は……その……カリムも一緒に食べてしまった。

やっぱり、あの精力料理を食べ過ぎてしまったせいかな……。

\* \* \*

3年後

「ファイル……何見てるんですか？」

「ああ……ちよつと、結婚式の写真をね……」

あの事件から2年、俺とカリムは同棲を続けたんだけど、聖王教会とレジアスの親父さんがいい加減に一緒になれと何度も言われてしまい、俺たちも丁度良い機会だと思いい結婚に踏み切ることにしたのだ。

結婚式は親父さんが陣頭指揮を取り、とんでもない規模の式になってしまった。

聖王教会のメンバーだけでなく、元六課メンバーが全員集まり、忘れられない式になった。

「カリム……今、幸せかい」

「当たり前ですよ。だって……こうして、愛する人と一緒にいるんですから……」

未来でたった一人で、俺たちを支えてくれた気丈な女性……。

だけど、本当は誰よりも脆く、弱い女性だった……。

その女性は、一度は自らを殺そうとしたけど、幸せを手にした……。

そんなカリムを俺は一生支え続けたい……。

二人の愛は永遠なのだから……。

i f e n d i n g シャツハ

「むう……」

最近、恋人であるフィルがかまってくれません。

確かに仕事ですから、騎士カリムと一緒にいるのはしょうがありませんよ。だけど……。

「フィル、今日は何の飲み物を作ってくれたんですか？」

「今日は、アールグレイの良いのが入りましたから、紅茶と一緒にゼリーも作ってみましたよ」

こんな感じで、仕事の時だけでなく、騎士カリムと一緒に過ごしていることが多くなっている。

しかも、騎士カリムも良い感じの雰囲気を出しているし……。

「私って……こんなにヤキモチ焼きだったかしら……」

こんなんじや、ファイルに嫌われてしまう……。

ファイルならそんなの気にしないかもしれないけど、でも……。

そんなことを考えて廊下を歩いていたら、なのはさんとフェイトさんが、そしてはやてが、こちらに向かって歩いてきていた。

「あれ？ シャツハやないか」

「はやて……？」

「お久しぶりですね。シスター・シャツハ」

「なのはさん、それにフェイトさんまで……。今日は一体どうしたんですか？」

この3人がそろうなんて、相当珍しい。

いったい何の用があつて来たのだろうか？

「えっと、実はファイルにちょっと聞きたいことがあります……」



ピク

「えつと……。どのような用件ですか……」

こらえろ……。なのはさん達は仕事でここに来たんだ。  
別にファイルに、こなかけに来たんじゃないんだ……。

「実は私が担当している案件で、どうしても分からないことがありまして、それをファイルに調べて貰っていたんです。今日はそれを取りに来たんです」

「それで時間があつたら、ファイルとお茶でもしようかと思ひ……ま……し……」

\* \* \*

「ほほう……。それはそれは……」

な、なんや……。シャツハの様子がめっちゃおかしい。

特にファイルの名前が出たところから、様子がものすごくおかしかった。そう言えば最近シャツハ、ファイルと会う機会がないってばやいていたかも……。

「お、おちついてな……シャツハ。私たちは、シャツハからファイルを取ったりせえへんから!!」

「そ、そうですよ!! シスターとファイルのことは私達も知ってるんですから!!」  
「ですから、落ち着いてください。シスター・シャツハ!!」

結局、シャツハが落ち着いたのは、それから10分後のことだった。

もう、生きた心地せえへんかったわ……。

「でも、本当にどうしたんですか。以前でしたら、こんな事くらいで動揺なんかしなかったのに……」

「そうやで……。ファイルとシャツハが付き合ってるのなんて、もうみんな分かってるんやからな……」

「シスター……。もしかして……。ファイルとうまくいつてないんですか……」

フエイトちゃんが言った次の瞬間、シャツハは……。

「ふえ……ふええええええええん!!」

その場で大声で泣き始めてしまったのだ……。

\* \* \*

「なるほどな……。最近、ファイルは騎士カリムと付きつきりというわけなんやな……」

シャツハから事情を聞いてみると、最近ファイルは仕事がすごく忙しくて、中々会う時間が取れない。

しかも、騎士カリムと一緒にいることが多く、その時間がここんと多くなってきた……か……。

「あのな……。そんなに心配やったら、コスプレでもしてファイルの部屋にでも押しかけてみいや!!」

「コスプレ……つて、ええええええええええ!!　そ、そんなの恥ずかしくて出来ませんよ!!」

「あの……。シャツハ、こんな事言いたくないけど、このままじゃ、ファイル誰かに取られちゃうよ……」

ナイスやフェイトちゃん。

今は、シャツハの心を押す手助けが少しでも欲しいんや。

「シスター……。はやてちゃんの言ってることは、ちよつと過激かもしれないけど、それでも、たまには……。良いと思いますよ」

「なのはさんまで……」

「シャツハ、ファイルの好みなら六課にいたときからのデータで熟知済みや。それでも、やらへんか……」

シャツハの目つきが変わり……。

「はやて……」

「な、なんや……!?!」

「その話、嘘ではないんですね……」

シャツハの私の手を握る力がものすごく強い。

痛い、いたい!! リンゴを片手で潰す力で本気を出されたら、私の手なんて簡単に粉砕骨折してしまう!!

「ほ、ほんまや……。だから、その手を離してや!! 手が潰れる!!」

「あつ……。す、すみません!! つい……」

ようやく離してくれたけれど、物凄く痛い……。

「まったく……でも、本当にファイルのこと好きなんやね……。なんか羨ましいわ」

「はやて……」

「シャツハ、私らが責任を持ってプロデュースするから、しつかりファイルのハート掴むんやで!!」

「はい!!」

こうして、シャツハのドレスアップ作戦が始まった。

最初は修道院服で行くと言っていたシャツハだったけど、そんなんじやあかん。私が責任持ってやるんやから、もつと強烈なアピールをせんと!!

そんなこんなで3時間、アン〇ミ〇ーズ風から、P i aキヤ〇風、さらには巫女さんから、フリフリのドレスまで試してみた。

そして、決まったのが……。

「うわあ……よく似合ってますよ。シスター・シャツハ」

「うん、本当にお似合いですよ」

「そうやろそうやろ♪」

メイド服と、おまけに猫耳を装着したメイドシャツハ（猫耳ver）だった。

「は、はやて……さすがにこれは恥ずかしいですよ!!」

「シャツハ、ファイルの好みはこれがど真ん中や!! メイド服にはマジで萌えを感じてい

たんやで!!」

「そ、そうなんですか……? でも……」

「ああ!! もう!! シャツハ、恥ずかしがってないで、さっさとフィルの部屋に行く!!」

ウジウジしているシャツハを私達3人で背中を押しながら、フィルの部屋に強制連行することにした。

実は、シャツハと付き合うようになってから、フィルはこの聖王教会の領内に家を構えている。

だから、フィルの家に行くのにそんなに苦労はなかったのだ。

幸い、フィルは未だに仕事中だ。

その間にフィルの部屋に行って待機してればいい。

\* \* \*

「ふええ……。はやての言葉に乗せられて、こんな格好してしまったけど……」

鏡を見ていないけど、正直恥ずかしきで顔が真っ赤になっているだろう。でも……。

「これで……ファイルが少しでも興味を持つてくれれば……」

そんなことを考えていたら……。

ガチャ

玄関の扉が開く音がする。

「い、いよいよ……ね……」

ドクンドクン……。

心臓がさつきから鼓動が早い。

「ふう……今日も疲れたな」



来た!!

ファイルが部屋にやってくる!!

そして……。

扉が開かれ……。

ガチャ

「お、お帰りなさいませ……ご主人様……」

\* \* \*

正直俺の頭の中は真っ白だ。

部屋に戻って見たら、いきなりシャツハがいて、しかも、とんでもない格好をしているではないか。

フリフリの青いメイド服を着て、さらになぜかネコ耳まで付けている始末だ。

シャツハもこの格好が恥ずかしいのか、顔だけでなく耳まで真っ赤になっていた。

「あ、あの……シャツハ。何でそんな格好してるの？」

「……って……」

「？」

「最近……あまりプライベートで一緒に会うことが出来ないし、しかも騎士カリムとずっと一緒にいるし……それがすごく不安になって……」

「シャツハ……」

馬鹿だ俺は……。

シャツハがこんなに寂しい思いをしていたのに、まったく気づかなかつたなんて……。

これじゃ恋人として失格だ……。

「ごめんな……全く気づかなくて……」

「いいんです。これは私の我が侷ですから……」

「シャツハ……」

シャツハの瞳が潤み、その瞳を見て、今何を求めているのか分かる。

「あっ……」

俺はシャツハの頬に触れ……。

「ファイル……私……」

そのまま俺たちはお互いの唇が近づき……。

10センチ……

5センチ……

2センチ……

そして……

ガチャ

「!!」

「フィル、こんな夜分にごめんなさい。この書類のことなんですけ……ど……ど……?」

突然のカリムの乱入で、さつきまでの雰囲気は一気に吹っ飛んでしまう。  
そして……。

「も——っ!!」

シャツハは、邪魔されたこともあって、涙目で大声で叫んでいた。

「……なんで……なんで……こうなるんですかああああ!!」

\* \* \*

「シャツハ……もう落ち着きなつて……」

「だつて……だつて……なんであんなタイミングで乱入してくるんですか。あり得ませんよ!!」

騎士カリムの乱入があり、30分くらい仕事の話をしていったが、帰った後シャツハの怒りは収まることなく、1時間必死で宥めて、ようやく大分落ち着いてくれたのだ。

正直、あのタイミングはあり得ないでしょう。

まるで狙っていないとあんなにバットタイミングにはならない。

「もう、忘れろつて……今はこうして一緒にいるんだから……」

俺はシャツハを自分の方へ抱き寄せる。

シャツハの髪はショートヘアだけど、髪質がすごく柔らかくて撫でているだけで気持ちが良い。

本人はもつと長い髪にしたいらしいが、俺はこれでも充分に可愛いと思う。

「ファイル……その……今日は、いっぱい……いっぱい抱いて欲しいんです」

「俺もシャツハをいっぱい抱きしめたい……」

俺たちはどちらからともなくキスをし、久しぶりにお互いを求めるのでキスも情熱的になっている。

普段ならシャツハからしてくることはないが、今日はシャツハの方から舌を絡めてくる。

キスが終わると、銀の糸がひくほど思いつきり求め合っていた。

「シャツハ……いいか……」

「はい……」

俺は、シャツハの上着を脱がし、ブラを少し乱暴にはぎ取り、その胸を両手で揉みし抱く。

「あつ……ん……はあ……はあ……」

「大丈夫か……シャツハ」

「大丈夫……です……むしろ、いつもよりふわふわしています……」

シャツハもどうやら気持ちよくなってくれている。  
よかった……

こういう事は独りよがりは嫌だから……。  
そして、胸以外の全身も求め……。

「お願い……これ以上は……切ない……です」

「ああ……いくよ……」

「きて……ファイル」

こうして俺とシャツハは……。

お互いの存在を何度も求め合い……。

その度にベッドは激しくきしみ……。

その行為は数時間にわたって繰り返された。

\* \* \*

一週間後

俺とシャツハは、今クラナガンのショッピングモールに来ている。

実は、先日のカリムのことを根に持っていて、それをカリムと会う度に黒いオーラを発していたのだ。

別に何かを言うわけではないが、カリムも会う度にシャツハのオーラを当てられたのではたまった物ではなかったらしく、気分転換に二人でどこかに遊びにでも行ってきなさいと言ってくれた。

「シャツハ、それじゃどこに行こうか？」

「別に、どこでも良いですよ。こうして……」

ぎゅっ



シャツハは、俺の左腕にしがみつぎ……

「二人でいられるのなら……良いですから……」

「そっか……それじゃ適当なところに行ってみようか」

「はい♪」

\* \* \*

「あ、あの……シャツハ、マジでこれを食べるのか？」

「……たまには……してみたかったです……」

目の前に置かれたのは、カップル限定のジャンボクリームソーダだ。

量的には1リットルくらいで、可愛い熊の頭の形をしたグラスにソーダが注がれていた。

「ここまででは良いのだが……」

「ストローが……つながっているとかな……」

ストローがハートの形をしていて、それは一つのストローとして形取られていた。

「これは、さすがにびっくりしました……」

シャツハも正直これは予想していなかったようだ。

「どうする……ストローをもう一本持つてくるか？」

俺はストローを頼もうとしたとき……。

「いいです……ここ、これで……一緒に飲みましょう……」

「い、いいのか……？」

「な、何度も言わせないでください!!」

結局、シャツハも俺も顔を真っ赤にしながら、ソーダと一緒に飲むことになった。

終始恥ずかしかったけど、これはこれで良い思い出かな？

\* \* \*

夕方になり、私達は海が見える公園に来ている。  
ここで、私達は夕日を眺めながらベンチに座っていた。

「良い風ですね……」

「そうだな……」

さつきから心地良い風が、私達のほてった身体にとっても気持ちよかった。  
そして、ここから見える夕日が、心を穏やかな気持ちにさせてくれる。

「フィル……」

「んっ……?」

「こんな風に、のんびり出来る時間を、大切にしたいですね……」

「そうだな……それは俺も同じだ」

私達は平和を守る仕事故、いつ命を落としかねない……。

だけど、こんな風な一時があるからこそ、戦っていられる。

そして……。

大切な人がいれば、私はいつでも帰ってくる事が出来る……。

大好きなフィルの元に……。

それが私の幸せなのだから……。

## i f e n d i n g メガーヌ

「はい、これで今日の治療はお終いです」

「ありがとう、ごめんね。いつもこんな辺境なところまで来てくれて……」

「いえいえ、基本的にはワープできてますから、大丈夫ですよ」

J S事件が終わって1年、機動六課も解散し、私は養生のためこの無人世界カルナージに來ている。

ここは人は誰もいないけど、自然がとても溢れていて、空気も澄んでいるので養生目的には最適な場所とも言える。

医療の問題は、ファイルがいつも定期的に見に来てくれて、問題はない。

メデイカルポッドがあれば、大概のことは大丈夫なので本当に助かる。

このメデイカルポッドは、アースラに付いていたのを、そのまま取り付けて使っている。

但し、使い方が複雑なので、基本的にはファイルにお任せになってしまおうけど……。

「それにしても、もう殆ど良くなってきていますね。これでしたら、あと半年くらいで現役復帰も出来ますよ」

「それもフィルのおかげよ。あの時……私を助けてくれなかったら……。今頃は……」

もしかしたら、あのまま廃棄処分という形で死んでしまったかもしれない。

実際、私のポッドは停止寸前だったのだから……。

「ママ、そんな悲しいこと言わないで!!」

「ルーテシア、あなたいつから?」

「ママがポッドの中から出てきてから、ここにいたの。ママ、今はこうしてフィルさんのおかげで良くなってきてるんだよ。だからそんなこと言わないで!!」

「ごめんなさいルーテシア。つい……ね……」

娘に悲しい思いをさせていたんじゃない、母親として駄目よね。

「そうですよ、メガーヌさん。今はこうして親子二人で幸せに暮らせてるんですから……ね……」

「そうね……」

ルーテシアは六課解散と同時に、私の養生のため休業という形を取っている。

本当は止めさせたかったんだけど、ファイルに対する殺傷設定の魔法砲撃の罪は、決して消せる物ではなく、六課で働いていた分だけでは、あと少しだけ足りなかったのだ。

その事はルーテシアも納得していて、私が良くなったら、復帰する予定だ。

本人曰く、どこに復帰するのかは決めているらしい……。

「今はしっかりと治すことが大事なんですからね。そのためでしたら、俺に出来ることでしたら何でもしますよ。と言っても、あまり出来ることはありませんけど……」

そんなことはない。

こうして週一で私の治療に来てくれることがどんなに助かってるか……。

それだけじゃない……。

ルーテシアだって、本来の明るさも取り戻してきている。

六課にいたときから、段々と性格は戻ってきていたけど、この一年で見違えるように変わってくれた。

「さてと、二人ともお腹がすいたでしょう。何か作るから少し待っていてね」

「やったあ!! 私ファイルさんのお料理大好き♪」

「ははっ、それだったらよりをかけてつくるからな」

そう言っつてファイルは台所に向かい、手際よく料理をし始めた。

ファイルの料理の腕前は、プロ顔負けな所がある。

こうしてファイルが来てくれたときいつも作ってくれるのだけど、私の方が自信をなくすほどののだ……。

「さて、出来たよ。二人ともいっぱい作ったから、沢山食べてね」

ファイルが作ってくれたのは、ルーテシアの大好物のハンバーグを始め、私の好物の野菜の煮物まである。

しかも、煮物の方は私のために、味を薄く作ってくれているという気配りも忘れていない。



「美味しいっ!! やっぱりフィルさんのお料理は最高!!」

「本当に美味しいわ。いつも思うけど、同じように作ってもこの味は出せないのよね……」

「ははっ、俺からしたらメガーヌさんの料理の方が美味しいと思うな。俺、メガーヌさんの料理大好きだし」

「ふ、フィル……その……ありがとう……」

フィルはとても良い笑顔でそんなことを言ってくれた。

この子はこうやって天然で女性をドキッとさせる言葉を言うことがある。

「むう……」

ルーテシアは頬をふくれさせ、むくれてしまっている。

ふふっ……ヤキモチを焼いてるのかしらね。

「フィルさん、今度は私が手料理を作りますから、是非食べてくださいね♪」

「ありがとう、楽しみにしてるね」

そう言つてファイルは娘の頭を撫でている。

「えへへ♪」

ルーテシアもまんざらでもなく、ニコニコしている。  
元々ファイルのことが好きだもんね。ルーテシアは。

\* \* \*

「さてと、今日の所はこの辺で失礼しようかな」

「「ええっ!!」」

「ファイルさん、今日は泊まつてつてよ!!」

「そうね。もうこんな時間だし……」

時計を見ると、午後9時を指していた。

「でも、女性二人の所に男性の俺がいるのも……」

「そんなの気にしないわよ。フィルだったら、むしろ……」

「えっ……?」

「……泊まつていって……欲しいかな……」

なぜか、今日はずっと一緒にいたい気持ちだった。

普段ならフィルを困らせることなんて言わないのに……。

「ふう……それじゃ今日はお言葉に甘えさせてもらいますね」

「やったあ!! それじゃ、フィルさん、こっちで私と一緒にゲームして遊びましょう!!」

「お、おい……そんなに引つ張らなくても、時間は沢山あるし……」

ルーテシアはフィルの手を取って、自分の部屋へと連れて行ってしまった。

「本当……フィルって……優しいのよね……」

いつもルーテシアや私のために色々としてくれる。

治療だけでなく、心のケアもしてくれていた。

こうして、娘と一緒に暮らしているけど、やっぱり女手だけじゃ出来ないことも多い。それをファイルは本当に手助けしてくれてた……。

この家を建てるときだって、ガリユールと一緒に慣れない大工仕事もしてくれたし、ルーテシアが休職するときも、立場が悪くならないように、色々と働きかけてくれた。

「ファイル……グリード……か……」

そして、私自身もそんな彼に段々惹かれていった。

いつも一生懸命で、真っ直ぐで……そして……。

自分よりも、大切な人を優先してしまうその心に……。

でも……。

あなたの幸せはどこにあるの……。

\* \* \*

「う、うん……やつと眠ってくれたよ……」

さつきまでルーテシアと色んなゲームをやつて、中々決着が付かず、さきほどようやく眠ってくれたのだ。

そして、少し外の風に当たりたくて、俺は家の庭に出て、外の空気を吸っていた。

「……でも、本当に良かったよな。ルーテシアも、メガーヌさんも心から笑ってくれるようになった……」

《これも、マスターが必死でメガーヌさんを助けたからですよ。そうでなかったら、ルーテシアは心が壊れていましたから……》

「俺は大したことをしていないよ。ここまで回復したのはあの二人の努力さ。俺がしたこととはほんの些細なことさ……」

実際、俺がしたことなんて大したことはいない。

この親娘が幸せなのは、二人の努力のたまものだ。

「後はガリユー達が手助けしてくれたからだよ。ルーテシアにとって、ガリユー達は大切な友達だしね」

《マスター……》

「そろそろ……俺がすることも終わりだな。メガーヌさんも回復してきたし……それに……」

「これ以上……初恋の人の傍にいるのは……辛くなるから……」

\* \* \*

「う、嘘……でしょう……」

私はふと目がさめてしまい、少し外の空気を吸おうと庭に出ようとしたが、フィルと

プリムが話しているのを見てしまい、出るに知られなくなってしまったのだ。本当は盗み聞きするつもりなんか無かったのに……。

「ファイルの初恋の相手が……私……？」

実はファイルの事は大分昔から知っていた。

孤児院でファイルのことを知り、そこでレジアスさんに引き取られてからも、よく遊んだりしていた。

昔のファイルは、私のことをお姉さんとよく慕っていてくれた。

まさか、その時のことを覚えていてくれたとは……。

「ファイル……」

私がもう少しファイルの近くに行こうとしたとき……。

ペキッ

「!!」

足下にあつた枝を踏んでしまい、物音を立ててしまう。

「誰!?!」

フィルはその音に気づき、私の方へ振り返ると、ハッとし……。

「メガーンヌ……さん……」

\* \* \*

「どうして……ここに……?」

さつきまで誰もいなくて、ここには俺とプリムしかいなかったのに……。  
メガーンヌさんの気配に全く気づかなかつた。



「ちよつと……眠れなくて、外の空気を吸いに……ね……」

「そう……ですか……」

「……」

それから、メガーヌさんは一言言ってから、言葉を発さなくなってしまった。

「あ、あの……」

「ファイル……一つだけ……聞きたいことがあるの……」

さつきまでメガーヌさんはずっと黙ってしまっていたが、意を決し……。

「あ、あのね……私のこと……どう思ってくれてるのかな……」

「どう……と言いますと……？」

「私のこと……その……異性として……見てくれるのかな……」

「!!」

ま、まさか……。

「ごめんなさい……。プリムとの会話……聞いてしまったの……」

「そう……ですか……」

やっぱり聞かれていたんだな……。

そうでなかったら、普通のメガーヌさんがこんな事言うわけがないから……。

「あの時のこと……覚えていてくれたんだね……」

「……はい」

メガーヌさんが言うあの時とは……。

俺は、クラナガンの郊外で捨てられていた孤児だった。

それを偶々任務中のメガーヌさん達に拾われて、ある孤児院に預けられていた。そこでしばらくの間は、幸せに過ごしていたんだけど――。

次元犯罪者がやってきてきて全ての物を蹂躪してしまい、孤児院は無くなってしまった……。

その後レジアスの親父さんに助けられ、そこでメガーヌさん達に再会し、色々お世話になったんだ。

その時から俺は、メガーヌさんのことを優しいお姉さんと慕っていて、子供心ながら好きになってしまったんだよな……。

これが俺にとって初恋になったんだよな……。

「まさか、ファイルがそんな風に思っていてくれたなんて……」

「ばかですよね……。メガーヌさんには旦那さんがいたのに……。あの時の俺は本当にガキでしたから」

その旦那さんも病気で亡くなってしまい、残されたのは幼いルーテシアだけだった。それでもメガーヌさんは必死にルーテシアのために頑張ってきた。

「そんなこと……。無いわよ。私は、嬉しいわ。ファイルの……。気持ち……。」

「良いですよ。気を遣わなくて……。俺みたいながきが、メガーヌさんには釣り合わないですから……」

実際俺みたいながきじゃ、大人の女性のメガーヌさんには釣り合わない。だからこそ、この気持ちは言わないでいた。

\* \* \*

フィルの言葉は私にとって驚きを隠せないでいた。

私のことを、そんな風に思っていたくれたなんて……。

その事はとっても嬉しい……。

だけど……。

「ねえ……フィル。釣り合うって誰が決めるの。それは、貴方じゃないわ。この場合は私でしょう」

「メガーヌさん……」

「ファイル……貴方は本当に素敵な男性よ。私だけでなく、娘のルーテシアや召喚獣達にまで色々してくれた。そんなに私達のことを思ってくれる人は、貴方以外に誰もいない!!」

「だから……」

私はファイルを自分の方へ抱き寄せ……。

「……そんな風に自分を卑下しないで……それじゃあんまりにも……辛いわ」

そんな風にいつもいつも自分を殺していたら、誰が貴方のことを見てくれるの……。  
誰が貴方を愛してくれるの……。

そんなのあまりにも悲しいから……。

「メガーヌ……さん……俺……」

「私は……私はね。ファイルのことが大好きよ。こうやって、いつも私やルーテシアのことを思ってくれる貴方のことが……大好きよ」

いつもファイルは私達のことを本当に思ってくれた。  
そんな貴方だからこそ、私は惹かれたのよ……。

「ファイル……貴方のその性格は美点だけど、同時に駄目なところでもあるわ。もう少しあなたは自分に自信を持って……ね……」

「……でも」

「それじゃ……」

私は……。

「んっ……」

ファイルの唇にキスをしていた……。

「メガーヌさん……」

「これが……私の素直な気持ちよ。ファイル、あなたの本当の気持ちを……聞かせて欲しいかな」

\* \* \*

突然メガーヌさんにキスをされ、俺は頭の中が真っ白になってしまった。  
そして、メガーヌさんは俺に自分の気持ちを伝えてくれた。  
だけど……。

「……俺で……俺で本当に良いんですか。メガーヌさんだったら、もっと素敵な男性が  
……」

すると、メガーヌさんはふうっ、とため息を吐きながら……。

「だから、それがいけないの。もっと自信を持ちなさい。あなたは私が好きになった人  
なんだからね」

メガーヌさんはまた俺をギュッと優しく包み込むように……。

「私と一緒に……いて欲しいな……」

「はい……」

「ファイル……」

メガーヌさんは一旦俺を離し、その後瞳を閉じる。  
その意味が分からないほど、馬鹿じゃない……。

俺はメガーヌさんの頬に手を添え……。

星空が照らす中……。

俺たちはそのまま……。

唇を合わせ、気持ちを確認合った……。

\*

\*

\*



「メガーヌさん……俺、こういうの経験無いんです……」

「そっか……それじゃ私が初めてになるんだね……」

今まで俺は女性とそう言った経験が全くない。

恋愛経験のなさが災いしているな……。

「いいわよ……。私がいっばい……いっばい教えてあげるから」

メガーヌさんは俺にキスをする、最初はただ唇が触れているキスだったけど、段々と舌を絡めてきて、深いキスをしてきている。

こうしてキスをしているだけで、メガーヌさんの気持ちたちが伝わってくる。

息継ぎの度に、銀色の糸ができてあがるほどキスは情熱的な物になっていく。

「メガーヌさん……」

「フィル、メガーヌって呼んで。恋人に「さん」付けは無いんじゃない……」

「それも……そうですね」

「ふふっ……ファイルはここが弱いのかな……」

そうやってメガーヌさんは、俺のありとあらゆる所を攻めてくる。

その度に俺の身体は、今までにない感覚に襲われた。

「ねえ……ファイル。ファイルからも……お願い……」

「はい……」

今度は俺がメガーヌの上着を脱がし、さらにブラのホックをとり、その大きな胸が露わになると、手が吸い込まれていた。

「あっ……ん……」

胸に触れると、メガーヌは敏感に感じてくれ、その度に俺の支配感がどんどん生まれてきた。

「ねえ……ファイル、一つになりました。お互いが決して離れないように……ね……」

そして……。

俺はメガーヌに包まれるように一つになり……。

その感覚は今までに感じたことがない安心感に包まれていた……。

その後も、何度も俺はメガーヌを求め、彼女もその度に応えてくれた……。

\* \* \*

「……ふふつ、本当によく眠ってるわね」

あの後、私達は何度もお互いのことを求め合った。

この身体についたキスマークはその証——。

私は、フィルの黒髪にそつと触れ……。

「……こんなに……ボロボロになるまで……」

未来での傷やゆりかごでの傷の跡は、殆ど目立たなくなってる。

だけど心の傷は、今でも深く残っている……。

「フィル……。今まで誰にも甘えられなかった分、これからは私に甘えてね……」

フィルの場合、絶対に自分から甘えようとはしない。

だから、私が積極的に包み込んであげないと……。

私はフィルを自分の方へ抱き寄せ……。

「(こんな)とくらいいしか……できないけど」

これ以上ファイルに、悲しみを背負わせちゃだめ……。

大切な人たちを失う悲しみは、人を強くするけど、それ以上に心を傷つけてしまう。

ファイルはもう充分悲しみを背負ってきた。

これからは自分の幸せを考えてほしい……。

\* \* \*

「それじゃ、お邪魔しました」

「えーっ!! ファイルさんもう行っちゃうの!?!」

「また遊びに来るから……。それじゃお二人ともお元気で」

休暇が終わり、またファイルは忙しい日常へと戻っていく。

いつもだったらこのまま見送るんだけど……。

「待って……。ほら、ネクタイが曲がってる」  
「す、すみません……」

本当はネクタイは曲がってないんだけどね……。

「むう……。ファイル、昨日もいったけど、ちゃんと私に甘えなさい!!」  
「そうなんですけど……。どうにも慣れなくて」

気持ちには分かるけど、私には甘えてほしい。

そうでないと、いつか本当に潰れてしまうわよ……。

「それと、お邪魔しました、じゃなくて、『行ってくる』でしょう。ここはあなたが帰る場所なんだから……」

「……ありがとう。じゃ、『行ってきます』」

「うん、行ってらっしゃい」

そして、ファイルは転移でクラナガンに帰って行った。

\* \* \*

「……もしかして、ママ、フィルさんと……」  
「ええ……」

ルーテシアは勘の良い子だ。  
今の私とフィルのやりとりで、何となく分かったのだろう。

「そっか……。あーあ、まさかママに取られるなんて」

「ルーテシア……ごめんなさい」

「謝らないで!! フィルさんを支えられるのは、未来のティアナさんかママくらいだと、  
思うか……ら……」

ルーテシアは、涙をこらえながら私に言ってくれた。

「ママ、お願い……。絶対にファイルさんを幸せにして。もしファイルさんを悲しませたら……。絶対に許さないから!!」

「約束するわ……。たとえどんなことがあっても……」

私は絶対にファイルを幸せにしてみせる。

それが、初恋の人を奪ってしまったルーテシアのためでもあるから……。

\* \* \*

数年後

「……ふふっ、よく眠ってるわね」

結婚当初は恥ずかしかがって、膝枕をしても緊張してたけど、今ではこうして甘えてくれている。

「本当に、あなたはいつも、私やルーテシアのことばかり優先してるのよね」



仕事か休みの時は、ルーテシアと一緒にコテージの増築をしたり、もしくは私のことを手伝ったりしてくれてる。

そのことは嬉しいんだけど、休みの日くらいはゆっくりして欲しいのよね……。

「今は羽を休めてね。これくらいしかしてあげられないけど……」

私はフィルの黒髪をそつとなでながら、一緒に日向ぼっこをする。

私とルーテシアにとって、フィルという人は大切な人。

フィルがいなかったら、私もルーテシアもこうして一緒にはいられなかったのだから

でも、フィルは決して恩を売るようなことはしなかった。それどころか、ずっと私達のことを見守ってくれて……。

ファイルが一番嫌なのは、自分の大切な人たちが傷つくことだから……。

自分よりも周りの人を優先するのは、今でも変わらないけど……。

ちよつとだけで良いから自分もいたわってね。

これから生まれてくる新しい命のためにもね……。

i f e n d i n g フェイト

「嫌だよ!! 居なくならないですよ!!」

私は、我慢しきれなくなつて、ファイルに抱きついた。

そして、そのままファイルの胸で泣き続けた。

そんな私を、ファイルは優しく抱きしめて、頭を撫でてくれた。

「……俺も、本当は一緒にいたかった。一緒にいて、色んな所に行ったり、笑ったり、怒ったり、泣いたり……して、みたかった……」

「だったら、一緒にしていこう!! ファイルはまだ、全然幸せになつて無いんだよ!!」

約束したじゃない……。

ずっと、そばにいるって……。

未来からずっと辛いことばかりだったファイル。  
やっと、これから幸せをつかめるんだよ——。  
それなのに……こんなのって……。

「幸せだったよ……。フェイトと出会って、恋人同士になつて……。そして、俺にたくさんの優しさをくれた……。たった一つだけ、心残りは、そばにいられないことかな……」  
「ファイル……」

ファイルは私を抱きしめ、泣きながらそう言ってくれた。

目を開き、顔を見上げてみると、ファイルの身体が、淡い光に包まれていた。

そして、ファイルが段々と……消えていつている……。

「どうやら……本当に……お別れだ……」

「嫌だよ!! こんなの……こんなの……嫌だよ!!」

「フェイト……」

「お願いだよ……消えないでよ!! ずっと、私のそばに居てよ!!」

抱きしめたフィルの体から、温もりが消えていつている……。その体は、光の粒になって空へと昇っていつてる。

「……………こんな俺を、好きになってくれて……………本当に……………ありがとう。幸せに……………なつてね……………」

『ばかいつてんじゃないわよ!! あんたが消えてどうするのよ!!』

\* \* \*

「えっ……………?」

謎の声がしたと同時に……………。

俺の身体は復元されていき……………。

最後には……。

完全に元の身体になっていた。

「ファイル……ファイルつつつ!!」

「フェイト……?」

「ファイル……ぐす……ファイル……ヒック……ファイル!!」

俺の胸でフェイトは、大声で俺の名前を呼びながら、ずっと泣き続けていた。

「フェイト……ごめん……本当にごめんな……」

「ファイル……もう二度と消えないよね……。ずっと、私のそばに……いてくれるよね……」

「……ああ……ずっと一緒だ」

「ファイル……」

俺たちは、お互いの存在を確かめ合うように、キスをした。

二度と別れたくない……………。

そんな思いを込めて……………。

『幸せになりなさいよ……………。ファイル……………』

「ティア？」

「どうしたの、ファイル？」

「いま……………ティアの声が、聞こえた気がしたんだ……………」

ポケットを探ってみると、あの時、ティアから託されたクロスミラージュが無くなっていた。

まさか……………。

あの声はティアだったんだ。

ティアが、俺のことを救ってくれたのか……。

ティア……お前からもらった命、大切にするよ。

「……ファイル」

「どうしたの？」

「……今日は……はなれたくない……」

「俺もだよ……」

フエイトも俺も、今日は離れたくない……。

俺たちは、俺の部屋に行くことにした。

最初は、ベッドに座って話していたけど……。

でも、今は、お互いのぬくもりをすぐにも感じたい。

俺たちにあるのは、その気持ちだけだった。



俺は、フェイトをベッドに押し倒し……。

「あつ……」

「……フェイト」

「ファイル、今日はいっぱい……いっぱい抱きしめてね。はなれちゃ……いやだからね」

「そのつもりだよ。今日は……寝かさないから……」

「うん……」

\* \* \*

「あ……んっ……」

ファイルが私のブラをはぎ取り、優しく胸を触る。

こうしてファイルに触れてもらうと、ファイルが感じられる。

でも、今日は優しいのはいや……。

もっと、激しく私を求めて欲しい……。

「フィル……。もつと……。もつと強く求めて……。あなたがここにいて……。私に感じさせて……」

「……。良いんだね」

「うん……。遠慮なんかしないでね」

私もフィルの身体を、積極的に愛する。

キスも優しい口付けじゃなく、本能で求める乱暴なキス。

でも、それでもまだ足りない――。

「……。もう、良いよ。一つになって、感じ合おう……。ね……」

そして、私達は身も心も一つになる。

それこそ互いの足りない所を補完し合うように……。

結局、私達は朝日が昇るまで互いを激しく求め合っていた。

\* \* \*

「はい、フィル。あーんして♪」

「あーん」

「おいしい?」

「美味しいよ。フェイトが食べさせてくれてるんだもんな……」

「そうだよ。このプリンには、私の思いをいっぱい込めてるんだよ。いっぱい食べてね

♪

「フェイト……」

「えへへ♪」

俺とフェイトは今、クラナガンの喫茶店にいた。

この場所は、以前からフェイトと話していて、来てみたかったところの一つだった。

あの夜、フェイトが持っていたクッキーはこの店の物だった。

なぜここにきているかというと……。

実は、はやてさんが、フェイトから、こないだの俺のことを聞いて、臨時でお休みをくれたのだ。

『フィル……もう、二度と離れたらあかんよ。フェイトちゃんと一緒の時間、大切にしたい……』

はやてさんの言葉には、本当に色んな思いが込められていた。だから、一緒にいられる一時を大切にしたい……。

そんなことを思っていると……。

「ん？　なんか表が騒がしいね」

「行ってみるか」

俺とフェイトは、外の騒ぎが気になって、喫茶店を出て、その場所に来てみると……。

「あつ、ハラオウン執務官!!　丁度良いところに!!」

「どうしたんですか？」

「実は……」

現場にいた管理局員によると、現在銀行強盗が立て籠もってしまい、人質こそいないが数十人が籠城している状態で、さらにその家の数人はA Aランク以上の魔導師がいるとのことだった。

「というわけなんです。我々だけでは、どうしようかと思っていたのです……」

「ファイル……」

「仕方ないな……」

「ここは私達が何とかします。皆さんは、現場の周囲の安全確保をしてください」  
『了解しました!!』

フェイトの指示で、現場にいた局員達は、周囲の安全確保を行うことになった。そして、俺たちは犯人達の説得をするために、建物の中に入った。

「おい!! 管理局が撤退していくぞ!!」

「どうせ、俺たちの事をビビッたんだろ!!」

『ははははははは!!』

建物の中にいた強盗団は、管理局が撤退したと思い、高笑いをしていた。

だが、彼らは知らない……。

これから始まる地獄絵巻を……。

後に、この事件は一部の人間で、ある意味JS事件よりも恐ろしいと言われる事になった。

\* \* \*

「動くな!!」

「管理局です!! 無駄な抵抗しないで、手を挙げてください!!」

「へっ!! なめんじゃねえよ!! たった二人でなにができるって言うんだよ!!」

「それにしても、偉くべっぴんが来たじゃねえか!! そっちの男は冴えないみたいだけどな……」

「……………いま、何て……………言ったの……………」

「聞こえなかったのかよ、姉ちゃん!! そんな何の取り柄もなさそうな男と一緒にいて、かわいそうだなっていったんだよ!! あははははは……………えっ……………?」

男達が俺のことをバカにして笑っていたが、その内の一人が壁に叩きつけられるのを見て、顔色が一変した。

「な、何が起こったんだ!!」

「……………あなたたち……………今の言葉……………取り消しなさい……………」

フェイトがバルディッシュを起動させ、いつの間にか、ライオットザンバーを手にしていた。

しかも、カラミテイの方だった。

その一撃でさっすきの男は、壁に叩きつけられたのだ。

まるでホームランを打つように……。

「おい!! その優男!!」

「なんだ……」

「あいつは誰なんだ!! A A ランクのあいつを、ああもあつさり倒すなんて!!」

「知らないのか? フェイト・T・ハラオウンを……」

『な、なにいいいいいい!!』

犯人達は、フェイトのことを知ると、一斉に驚き始めた。

やっぱり、フェイトの名前は有名なんだな。

「フェイト・T・ハラオウンだ!! あの金色の夜叉かよ!!」

「もしくは死神と言われている、あのフェイト・T・ハラオウンかよ!!」

「……おい、今なんて言った?」

「だから!! 金色のや……しゃ……」



犯人が言葉をいい終わる前に、一筋の白銀の魔力弾を、犯人の頬をかすめる。

「……俺のことは、かまわねえ。だけど……」

「フェイトのことを、そんな風に言うのは許さねえ!! お前ら、まとめて地獄を見せてやる!!」

俺は、プリムをブレイズモードにして、犯人達に全員バインドをかける。

そして、フェイトもライオットザンバーの刃を、犯人達に向けていた。

「さて、あなたたち……」

「覚悟は……」

「出来ているでしょうね（だろうな）!!」

『ひいひいひいひいひい………』

\* \* \*

「うーん、今日も良い天気やな」

いまごろ、フェイトちゃん達はクラナガンで楽しんでるやろうな。

あの二人は、今まで本当に辛いことばかりやった。

せめて忙しくないときは、一緒に遊びに行ったりして楽しんでな……。そんなことを思っていたら、レジアス中将から緊急通信が入ってきた。

『八神!! 聞こえるか、八神!!』

「聞こえてますって……。どうかしたんですか? そんなに慌てて?」

『これが慌てずにいられるか!! これを見ろ!!』

「なんや……。ぶはっ!!」

レジアス中將から送られた映像を見て、私は思わず口に含んでいたコーヒーを吹き出してしまった。

「な、なななな!!」

なにをどうやったら、こんなことになるんや!?

二人の目が単色になってるし……。

どうみても、フェイトちゃんもファイルも完全にブチ切れてるやないか!!

『……………こういうことだ。八神、あの二人をどうにか止めてくれ…………』

「……………レジアス中將……………私に死ねっていうんですか……………。いつたい、現場の局員は何しとったんや……………」

『実はな、建物にいる犯人達は、A Aランクの魔導師が数人いて、現場の局員では対処できなかつたんだ。丁度、あの二人が現場の近くに来た物だから…………』

現場の局員がフェイトちゃん達に、助っ人を頼んだ……というわけか……。  
はあ……。お願いやから、もう少ししっかりしてほしかった。

『何とも情けない話だ。休暇中のあの二人の力を借りなければならぬとは……。』  
「フェイトちゃん達には、後日ちゃんと休暇をあげるわ。それよりも……」

画面上の二人は、犯人達にバインドをかけて、身動きをとれない状態になっている。  
普段の二人なら、これで終わるのに、さらに二人は攻撃魔法を使おうとしていた。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよつと!! あれはまさか!? プラズマランサー・ファランクスシ  
フト!!」

二人の周りには、数十発のプラズマランサーが展開されていた。  
しかも、二人分……。

『……八神』

「なんですか……」

『……………こんなことは言いたくないが……………儂は、犯人に同情するよ……………』

「……………不謹慎やけど、私もです」

正直言つて、あれを喰らつたら、ある意味スターライトブレイカーを喰らうより地獄や。

38の光球から秒間7発、4秒間で計1064発の雷の槍が撃ち出される。

しかも、プラズマランサーで……………。

『「あつ……………」』

『みぎやああああああああああああああああああ!!』

そんなことを思っていたら、犯人達が、フランクスシフトの嵐で、この世の地獄を見せられていた。

後に、この事件を見た人間は、こう語る。

この二人を、本気で怒らせてはならない。

あれは、高町なのは以上だ……。

この事件以降、犯罪者の間では、高町なのはよりも、ファイルとフェイトのコンビの方が恐れられるようになった。

\* \* \*

4年後

「ファイル、何見てるの？」

「なに、昔のことをちよつと思ひ出したのさ」

俺が、昔の写真を見ていたら、後ろからギュツと抱きついてきた。

こうしていると、フェイトの胸が背中に直に感じる。

一応、俺も健全な男なので、色々と、その、まあ……。

「あれから……いろいろあったな……」

「そうだね……」

六課が解散した後、俺達はそれぞれ新しい道を歩むことになった。

エリオとキャロ、ルーテシアは辺境自然保護隊に転属。

スバルは特別救助隊からスカウトされ、フォワードトップとして活躍中。

ティアはクロノ提督の口利きで、執務官補佐をすることになった。

自分が執務官だったこともあり、教えられるだろうとのこと、クロノ提督の補佐として、クラウディアに配属になった。

ヴァイス陸曹は武装局員資格を再取得し、ヘリパイロット兼狙撃手の道に戻った。

はやてさんは特別捜査官として復帰。守護騎士一同と共に任務を続けている。

ヴィヴィオは正式になのはさんの養子になり、名前も高町ヴィヴィオとなり、本人の希望で聖王教会系列の魔法学院に通っている。

なのはさんはJS事件での昇進は辞退し、教導隊に戻り、戦技教導官としてそして空

戦魔導師としての道を選んだ。

戦闘機人の連中は、ギンガさんの更正プログラムを受け、それぞれ管理局内で働くことになった。

何人かはナカジマ三佐が、養子として引き取った。

今でも、ノーヴェやウエンデイ達とはよくつるんだりしてるけどな……。

そして俺は、一年間フェイトの元で執務官補佐をして、執務官試験を合格し、そのあとすぐ地球にいるリンデイさんの元に、正式に結婚の挨拶に行った。

リンデイさんとエイミイさんは、すぐに祝福してくれたのだが、クロノ提督だけが……。

『大切な妹を、お前なんかにはやれん!!』

その言葉に、フェイトが本気で切れてしまい、義兄であるクロノ提督に、バインドをした後、プラズマランサー・ファランクスシフトと、さらにリミットブレイクしてライ



オットザンバーで、ホームランしてしまったのだ。

しかも、女性陣は止めるどころか、ボロボロになって戻ってきたクロノ提督を、さらにボコっていた。

正直……お気の毒になるくらいだった……。

そんなこんなで、ハラオウン家の女性陣の手で、俺とフェイトは無事一緒になることが出来た。

「あの時、クロノったら、フィルのこと認めようとしないうし……」

「まあ……クロノ提督からしたら、俺はかわいい義妹を奪い取る害虫みたいなものだからな……。でも、クロノ提督、あの後本当に悲惨だったよな」

実は、これだけで終わらなかった。

この話を聞いたのはさんが、クロノ提督を呼び出して、フェイトと一緒に二人でブ

ラストカラミティを放ったのだ。

あの技は、俺も昔、模擬戦で喰らったことがあったけど、洒落にならない威力だ。

俺の時は手加減されてたけど、クロノ提督が喰らったのはフルパワーのカラミティ。

よく再起不能にならなかったよな……。

\* \* \*

「……あの時は、かなり怖かったぞ」

「そんな不安にならないで……ファイルには、あんな事は絶対しないから!!」

「本当に？」

「お願い……信じてよ。私は、ファイルを誰よりも愛してるんだから……」

「でもな……」

ファイルは、こつちをちらちら見ながら、不安な顔の演技をしていた。  
んっ、もう……あれをしなきゃだめなの……。

「……これが、私の気持ちだよ」

そう言って、私はファイルに抱きつき、キスをする。

もちろん普通のキスじゃ満足なんかしない。

そのまま、何度も求め合うキスをし、終わった後はその証が出来上がっていた。

「すっごく伝わった……。理性が飛びそうになるくらいに……」

「えへへ♪ いっぱい、愛して欲しいんだもん♪」

「だったら、俺はフェイトに嫌われないように、いっぱい愛さなきゃな……」

「そうだよ。いっぱい、かわいがってくれなきゃ、すねちゃうからね♪」

ファイル、あなたはずっと辛い思いをしてきた。

でもね、そんな辛い思いはもうしなくて良いんだからね。

あなたはもう一人じゃない。

私がずっと一緒だから……。

だから、いっぱい楽しい思い出を作っていこうね♪

## if ending プリム

《マスター、頑張ってください!! もう少してヴィヴィオのレリックは砕けます!!》  
「ああ……分かってるさ……。何としても、ヴィヴィオは助けてみせる!!」

俺は、ヴィヴィオを助けるためにブラスター3を使って、最後の力でスターライトブレイカーを放ち続けていた。

だけど、俺の魔力だけでは、レリックはそう簡単には砕けてくれない。

なのはさんは、さっきのデイバインバスターで全て使い果たしてしまっている。

もう、俺がやるしかないんだ!!

「くっ……。だめ、か」

クアットロとの戦いで、殆ど魔力を使っしまい、さらにブラスター3まで使っている。

それに、プリムのフレームもひび割れし、いつ砕けてもおかしくない状態だ……。

《……マスター》

「なんだ……」

《……ごめんなさい。マスターとの約束……生きるって約束……破りますね》

次の瞬間、プリムのコアの部分の宝玉が輝きだし、フィルの魔力がふくれあがっていった。

その魔力は、なのはさんに匹敵するほどだった。

「な、なんだ!? いったいどう事なんだ!?!」

《黙っていてごめんなさい……。これが、女神が私に、最後の切り札として組み込んだ最後のシステム……ブラスターエクセリオン》

「ブラスター……エクセリオンだと……」

《マスターが最後の手段として作ったのは、スパイラルシステム。スパイラルは、術者の生命力を魔力に変換しますが、これは、私のエネルギーを全て使って、術者に力を与えるんです……》

「プリム、今すぐブラスターエクセリオンを解除しろ!! このままじゃお前が!!」

プリムのひび割れはさらに進行してきている。  
ブラスターエクセリオンのパワーで、フレームが耐えきれないんだ。

\* \* \*

《マスター……私は、あの時から……ずっと……後悔してきたんですよ。ティアナさんを助けられなかったときから……ずっと……》

——あの時。

私にもっと力があれば、ティアナさんを助けられた……。

もう、あんな思いはたくさんです!!

《だから……今度は……後悔したくないんです!!》

「!!」

私は残されたエネルギーを使い、スターライトブレイカーのエネルギーをさらに増幅させる。

その魔力球はさつきよりふた回り以上大きくなっていた。

「やめろ……それ以上……それ以上、エネルギーを使うな!! やめるんだあああああ  
あああ!!」

マスターは引き金を離そうとしたが……。

《マスター……私は、もうどのみち助かりません……ですから……お願いです》

私に……最後の仕事を……させてください……。

マスターの大切な物を守るための……。

「……………わかった。プリム……………」

《ありがとう……………マスター……………》



——マスター。

私、マスターのデバイスで本当に良かったです。

いつも、大切に使ってくれて……。

どんなときも私のことを信じてくれて……。

私は……。

「《ブレイク……》」

そんなあなたが……。

「《シューーーート!!》」

大好きでした……。

\* \* \*

「あああああつつつ!!」

レリックが砕けると同時に、大爆発がおこり、ヴィヴィオが居たところに巨大なクレーターが出来ていた。

煙がまだはれないので、クレーターの中の様子はまだ分からないが……。

「ヴィヴィオ……」

「来ないで……」

俺の目に映ったのは、ヴィヴィオが自分の力で立とうとしている姿だった。

何度も転んでいたが、それでも諦めようとせず、何度も立ち上がろうとしていた。

「ひとりで……たてるよ……」

「あ……ああ……」

「強くなるって……約束したから……」

なのはさんも俺も涙が止まらなかった。

「ヴィヴィオ!!」

なのはさんは、自分の力で立ち上がったヴィヴィオを抱きしめていた。

「……」

「その代償は……」

《マ……マスター……よ……よかった……ですね……ヴィヴィオが……元に戻って……》

「プリム……プリム……」

プラスターエクセリオンを使ってしまい、フレームが修復不能な状態になり、今こうやって起動していることが奇跡だった。

「プリム……大丈夫だからな。すぐに元通りにしてやるからな……」

《無理ですよ……ここまで……壊れてしまったんですから……マスター》

「馬鹿言ってるんじゃない!! 必ず俺が元通りにしてやる!! 部品がないのなら、どこからでも調達する!! 魔力がいるのなら俺の魔力を全部やる!! だから、俺のそばにいてくれ!!」

《ありがとう……ごこぎいます……。その言葉だけで……充分ですよ……》

プリムのひび割れはさらに進行し、今にも完全に碎けそうだった。

《マスター……私は本当に幸せなデバイスでした……。マスターと苦楽を共にでき……時には喧嘩したり、時にはマスターの本音を聞けたりしたんですから……。本当に……私はしあわせでしたよ……》

「……何言ってるんだよ……。まだこれからだろ……。俺にはまだまだお前が必要なんだ……」

お前は、俺の心の支えなんだ……。

俺を、一人にしないでくれ……。

《大丈夫ですよ……。マスターなら、もつと高性能なデバイス作れますよ。これからはそのデバイスが……。マスターを……。助けてくれますから……》

「……関係……。ねえよ。俺にとつて、相棒は……。心の一部は……。お前だけなんだ。プリム、俺も……。お前のこと……。好きだったよ」

《……マスター……。私のマスター……。幸せに……。幸せになって……。くださ……。いね。いつ……。心はマスターと……。一緒……。です……。か……。ら》

そして……。

プリムはひび割れたコアを残し、完全に砕け散ってしまった……。

「……………プリ……………ム……………」

そのコアを拾うが……。

「プリム……………プリム……………この……………ばか……………やろうが。お前がいなくなって……………何が幸せにだよ。お前がいなきや……………俺は……………俺は……………」

いつも、俺のそばで支えてくれたプリム……。

母のように……。

姉のように……。

友人のように……。

そして……。

恋人のように……。

俺にとって、あいつは……プリムは、ただのデバイスじゃない。  
かけがえのない、大切な……存在だったんだ……。

「……プリム……返事してくれよ……。いつものように、俺を励ましてくれよ……。俺は、お前がいなきや……一人では……何も出来ないんだよ……」

\* \* \*

プリムが碎けてしまったあと、ファイルは上を向いて必死で涙をこらえていた。声をかけようとしたけど、今のファイルの悲しみの表情をみたら、何も出来なかった。

わたしでは、プリムを失った悲しみは埋められないから……。

「ファイル……」

「……何でだよ……こんなの……こんなの……ありがよ……」

その後、はやてちゃんが救出にきてくれて、ラグナロクでゆりかご内にあつたコアを破壊し、わたし達は脱出し、アースラのアルカンシエル・ノヴァでゆりかごを完全消滅させた。

こうして、JS事件は幕を閉じることになった。



一つの……。

——大きな犠牲を払って。

\* \* \*

あれから、ファイルは新しいデバイスを作り直し、今までと変わらないように振舞っていた。

でも、あくまでそう見せているだけ……。

それは、誰が見ても無理してるのがわかりきっていた。

「今のファイル、見ていて痛々しいよ。あたしにだってわかるくらいだよ……」

「フィルさん……。プリムを無くしてから、自分を……痛めつけてる感じがします」  
「うん……。今まではプリムがフィルさんのことを見ていてくれたから……」

「そうですね……。フィルさん、いつも通りに見せようとして、それが逆に辛いです  
……」

みんなの言うとおり、プリムの存在はデバイスとしてだけじゃない。  
未来からずっと一緒に苦楽を共にした、いわば自分の心の一部……。

それを失って平然としていられるほど、あいつは強くない……。

「……あいつね。訓練が終わった後、いつも、海を眺めてるの。壊れてしまったプリムの  
コアと一緒にね……」

この間、偶然その姿を見てしまった。

—— 声を殺しながら泣いていたあいつの姿を。

「ティア……。あたしたちには、何もできないのかな……」

どんな方法でも良い……。

プリムを復活させる方法はないの!!

それしかあいつの心を救ってあげられない……。

「一つだけ……あるかもしれないわ」

「[[[[えっ?]]]]」

「正直、これは賭よ。もし、プリムが何らかの端末に自分のデータを残していたら……」

可能性はかなり低いが、マリーさんならもしかしたら……。

「とにかく、マリーさんの所に聞いてみましょう」

あたし達は、翌日、八神部隊長にお願いをして、マリーさんにコンタクトを取ってもらった。

\* \* \*

「……そっか。分かったよ。最初にあつたときに、プリムの構造とデータを取らせてもらってるから、それをもう一度みてみるね」

「お願いします!!」

これが最後の希望……。

これでダメだったら、もう打つ手はないわ……。

「あつたわ!! プリムのデータ」

マリーさんが端末から見せてくれたのは、数字の羅列。

はつきり言って何が何だか分からない……。

でも、一緒にいた八神部隊長が……。

「これ……。どっかで見たことあるで」

「「「えっ!?!」」」

「はやてさんは、見覚えがあるわよね。リインを作ったときにね……」

「そうや!! これはユニゾンデバイスの!!」

この数字の羅列は、プリムの心って事なの!?

ものすごいデータの量だけど……。

「ここにあるのはプリムの一部に過ぎない。本当に復活できるかは、フィル君が持っているコアにかかっているかも……。」

「でも、これとコアがあれば、復活の可能性が!!」

「うん、インテリジェントとしては無理だけど、ユニゾンデバイスとしてなら、もしかしたら……。」

「ティアさん!!」

「ええ!!」

ファイル、あたし達が出来るのはここまでよ。  
あとはあんたが頑張る番だからね……。

\* \* \*

「うん、それでええはずや」  
「はい」

二ヶ月前——。

フォワードのみんなが、マリーさんの所にあつたプリムのデータのデータの一部を持ってきて

くれた。

それを見たとき、俺は涙が止まらなかつた。

プリムのコアに残されたデータだけじゃ、蘇らせることは出来なかつたからだ。持つてきてくれたデータは、俺がもつとも欲しかったデータ。

プリムの核になる部分のデータだった。

ティア達は、俺のためにここまでのことをしてくれた。

ここで、俺がよくよくよしていたら、ティアたちにも、プリムにも合わせる顔がない。

俺は、はやてさんにユニゾンデバイス作り方を聞き、それとティア達が持つてきてくれたデータとプリムのコアを元に、俺のリンカーコアを使ってユニゾンデバイスを作成していた。

「はやてさん……本当にありがとうございます。ユニゾンデバイスはシークレットなのに、俺のために……」

「気にせんといてや。ファイルには本当に返しきれない恩があるんや。私で出来ることなら何でもするよ。だから、プリムを復活させてあげてや」

「はやてさん……」

「どうやら……目を覚ますようやで……」

カプセルの中にいた、新しい身体を得たプリムは、フェイトさんが水色の髪になった感じの女性だった。

大人の女性と言うよりは、どちらかというところ10代の半ばくらいの感じだ。

「……(こ)は？」

「ここは、機動六課、メンテナンスルームだ。プリム、どうだ。その身体は？」

「あなたは……誰ですか？」

「!!」

俺のことを覚えていない!?

まさか……コアの方に欠落があつたのか。



「こんなん……こんなん……酷すぎるで。世界は、ファイルをどれだけ悲しませれば気が済むんや!!」

「……初めまして……俺はファイル・グリード。君のマスターだよ」

「マスター……ですか。あなたが……?」

「ああ……君を作ったのは、俺だよ。よろしくね、プリム」

「マスター認証確認、ファイル・グリード……登録完了しました」

「分かっていても……辛いな……ファイル」

「……はい」

俺たちはプリムのことを、悲しんでいたが、次の瞬間、六課全体に警報が鳴り響いていた。

通信ウィンドウが開き、グリフィスさんが今回の事件のことを話し始めた。

内容は、クラナガンのデパートと空港で大火災が同時に起こってしまい、地上の局員だけでは対応しきれないとのことだった。

「どうやら……いきなり実戦みたいですね」

「無茶や!! テストも無しで!! そんなのは認められへん!! この件はティアナ達に行ってもらおう!!」

「はやてさん、隊長達がいらない今、ティア達に一カ所は行ってもらおうとしても、もう一カ所は俺が行くしかないです」

隊長達は、別件で今は本局に行ってしまったている。

だから、俺たちフォワードで何とかするしかない。

「それは……」

「俺は行きますよ……」

「……分かった。出来るだけ早く、なのはちゃん達にそっちに向かわせる。絶対無茶はあかんよ!!」

「はい!! いくぞプリム!!」

「はい……。マスター……」

やっぱり、いつものプリムじゃない。

会話も機械的でまだ、赤ん坊の状態だ。

それだったら、これから築いていけばいいんだ。

プリムが俺のそばにいてくれれば、何でも出来るから……。

\* \* \*

クラナガン 第三空港

「マスター……。これからどうしますか？」

空港に着いた俺たちは、燃えさかる炎に行く手を遮られていた。

情報によると、まだ取りのこさえられた人がいて、それぞれ別々にいるため二手に分かれなければならない。

しかも、他の局員は消火活動と、もう一つの火災の対応で精一杯だったのだ。

「プリム、お前は反対側に行き、もう一人を救出してくれ。頼んだぞ……」  
「はい……わかりました……」

俺とプリムは二手に別れ、それぞれの救助を行うことにした。

\* \* \*

「うわあああああん!! ママアアアア!!」  
「大丈夫ですよ……今安全なところに連れて行きますからね……」  
「ヒック……ヒック……お姉ちゃん……ありがとう……」

私はマスターの命令通り、取り残された子供を救出することに成功した。

でも、何か引つかかる……。

マスターと一緒に行動しなかったこと……。

それが、さつきからずっと引つかかっている……。

前にもこんな事があつた……。

確か……。

\* \* \*

「……これ以上は、持たない、か」

プリムと別れた俺は、もう一人の救助者を見つけ出し、何とか保護は成功したんだけ

ど、転移をするときに床が崩れてしまい、途中で転移をキャンセルしたため、一人しか転移させられなかった。

そのせいで俺はここに取り残されてしまい、さらにデバイスもないから、転移をもう一回することも出来ない。

ラウンドシールドで炎から身を守るのに精一杯だった。

「……状況は違うけど、一つの魔法しか使えないってのは、ティアを失ったときと同じだな……」

あの時はバインドで精一杯で、スターライトブレイカーを、同時進行できないという状況だったけど……。

「ある意味……これが、俺の最後にふさわしいのかもな……」

——プリム。

これで死んだら……。

お前はきつと怒るだろうな……。

だけど……。

「愛する人がいない……。この世界で……。いるのは……。もう辛いんだよ……。プリム  
……」

今の俺には、ラウンドシールドを張る魔力も、もう残されていなかった。  
おまけに、柱に足が挟まれて動くことも出来ない……。

柱が崩れてきて、俺の方に倒れてきた。

「……もう……。だめか……」

死を覚悟したが、衝撃は何も来ない。

そう思い、目を開けてみると……。

「マスター……ご無事ですか……」

\* \* \*

間一髪の所で、私はラウンドシールドでマスターを助けることが出来た。これは当たり前のことなんだけど、なぜか懐かしい感じがする。

「今……助けます」

私は、まだ防御魔法と補助魔法しかインストールさせていないので、攻撃魔法で柱を破壊することは出来ない。

だから、近くの鉄棒を使って柱をどかすしかなかった。



「プリム……すまない……」

なぜだろう……。

この人を見てみると、何か暖かい物を感じる。

この感情は……。

いったい何なんだろう？

「でも、本当に……良かった。プリム、無事だったんだな……」

なぜ、この人は自分のことより私の心配をするんだろう。

自分のことより、人のことを優先する。

「あつ……」

今のビジョンは何だ？

「私は生まれてから……間もないのに……今のはいったい？」

まだだ……。

浮かんだのは、マスターとオレンジ色の髪的女性。

そして、マスターの慟哭……。

「うっ……ああああ……」

頭が痛い……。

でも、さつきからこの人を見ていると、色んな事が浮かんでくる。

この人は、私にとってどんな人なんだ？

またフラッシュバックされたのは、今度は……。

「砲撃……マスターが？」

それは、銃型のデバイスで、少女に砲撃魔法を放っているシーンだった。

その後は、そのデバイスが砕けてしまい、マスターが悲しみに打ち震えているところだった。

そのデバイスの名前も、プリム……。

「なんで……こんな記憶が……」

私がフラッシュバックの整理をしようとしていたが、状況はそれを許さず反対側から、また柱が崩れてはじめた。

「プリム!! 俺のことは良い!! お前だけでも逃げろ!!」

「何言ってるんですか……。デバイスがマスターを見捨てていけるわけありません!!」

「お前だけでも逃げろ!! この状況じゃ二人とも共倒れになってしまう!!」

「出来ません!! 命令は不当と見なし拒否します!!」

「……許せ……よ……」

「えっ……?」

次の瞬間、マスターは私の身体を突き飛ばしていた。  
その直後、柱が崩れ、マスターの方に落下していた。

「マスターアアアア!!」

「……さよなら……プリム……」

「あっ……」

今の言葉、聞いたことがある……。

そうだ……。

思い出した!!

私は……。

マスターの相棒のプリム……。

未来でも、こつちでも唯一無二の愛する人……。

—— フィル・グリード。

\* \* \*

「プリム……さよなら……だな……」

今度こそ、俺は死を覚悟し、今までのことを思い出していた。

未来で一緒に戦ってきたこと。

こつちに戻ってきて、プリムと一緒にクアットロの対策を考えたこと。

ティアとなのはさんとのことで、悩んでいたときに一緒に考えてくれたこと。

そして……。

ゆりかごでのこと……。

「マスター!! 今助けます!!」

「えっ……?」

声と同時にプリムが使っていたのは、俺の得意魔法、ブラストブレイザー。今のプリムにはまだインストールしていないの？

——まさか!!

「ブラストブレイザー!!」

プリムの放った白銀の砲撃は、落ちてくる柱を破壊し、炎もかき消していた。

その後、プリムは俺の足に挟まっている柱も破壊し、俺は自由になることが出来た。

「マスター、ワープは出来ますか？」

「いや……魔力が足りない。これじゃ無理だ……」

「それじゃ、ユニゾンして出力をあげますよ」

「えっ……？」

「ユニゾン・イン!!」

ユニゾンをした瞬間、俺は魔力がふくれあがりワープに必要な魔力を得ることが出来、そして、その魔力でワープをし、俺たちは無事脱出することが出来た。

\* \* \*

事件が終わり、俺とプリムは、海が見える公園に来ていた。

「まさか……お前……」

「はい……記憶……全部思い出しましたよ。マスター」

プリムの記憶が戻った……。

そのことで、俺は涙が抑えられなくなり……。

気がついたら、俺はプリムを力の限り抱きしめていた。



一度は、失ってしまった俺の半身……。

でも、俺の元に帰ってきてくれた。

\* \* \*

「マスター……あの……もう一度……私の気持ち……聞いてもらって良いですか」  
「ああ……もちろん」

あの時は、最後だから話せたけど……。

いざ、こうして気持ちを伝えようとすると、緊張で逃げ出したい。

だけど、ウジウジしているのは私の性分じゃありません!!

もう一度、マスターに私の気持ちを伝えるんです!!

「マスター……。いえ、フィール・グリードさん。私は……。あなたのことを……。心から……。愛しています……」

デバイスが人にこんな感情を持つのは、変だと分かっています。でも、もう一度だけ……。私の思いを伝えたくったんです!!

\* \* \*

「プリム……」

プリムの告白は、俺にとって何より嬉しかった。

俺もプリムと同じ気持ちだからだ。

俺のことを誰よりも分かってくれていて、誰よりも愛してくれている。

そんなプリムのことを、俺は愛しているんだ。

俺はプリムのことが愛おしくて、自分の方へ抱き寄せていた。

「マスター……」

「名前で……呼んでくれないかな。自分の恋人にマスターは無いだろ」  
「えっ……？ それじゃ……それじゃ!!」

「ゆりかごで言ったけど、もう一度言うね。愛しているよ……プリム」  
「フィル……」

俺はプリムの頬に手を添え……。

彼女も意味を理解し、瞳を閉じ……。

「プリム……」

夕日が照らす中……。

俺とプリムは……。

お互いの気持ちを……。

確かめ合うキスをした……。

\*

\*

\*

半月後

「はい、フィル。あーんしてください♪」

「ここですか……?」

「はい♪」

「ここは、六課の食堂だぞ」

そうですね。ここは六課の食堂ですね。

さらに、お昼時ということもあって、満員御礼です。

「みんな……見ているんだけどな……」

「いいじゃないですか。それとも私にされるのは……いやですか……」

「そんなこと無いから、好きな人にされるのに、いやなはず無いだろ!!」

よかった……。

やりすぎて嫌われてたって思ったから……。

「ああ!! もう、いい加減にして!!」

「ティア (さん) !?」

「プリムが記憶が戻ってから、そうやって毎日毎日いちやついて!! 一緒にいるあたし達の身にもなってよ!!」

「あつ……」

た、確かにここ半月、私達って、こうやっていたかも……。

「あんた達が両思いで、一度は永遠の別れをしたんだから、気持ちちは分かるけど……」

「もう、あれから半月は経っているんだから、そろそろ勘弁して。でないともんな口から、砂糖をはき出すわよ……」

「そ、それは……大げさじゃないですか」

「はあ……大げさじゃないから……。止めろとは言わないから、もう少しだけみんなの前では押さえて!!」

「す、すみません……」

\* \* \*

「やっちゃったな……」

「ですね……私もつい嬉しくて」

「それは、俺も……だから……」

「フィル……」

訓練が終わり、俺たちは部屋に戻り、ベッドに座ってお互いに身体を寄せていた。

プリムの長い髪を、撫でていると、プリムも気持ちいいらしく、目を細めて俺の方に、頭をコットンと乗せてきた。

「プリム……」

「はい……」

「あのな……俺……お前のこと……欲しいんだ……」

「あの……もしかして……それ」

「プリムを……抱きたい……」

プリムは、一瞬驚いていたがすぐに……。

「やつと……言ってくれたんですね。ずっと……待っていたんですねよ……」

「ごめんな……俺、お前に嫌われるのが怖くて……言えなかつた……」

「ばか……。そんなわけ無いじゃないですか。私はあの時、恋人同士になったときから、ずっと……ファイルに抱かれたいって思っていたんですから……」

俺は、もう押さえきれなくなり、プリムをベッドに押し倒していた。

「もう……遠慮しないからな……」

「遠慮なんか……しないでください。むしろ、ファイルこそ覚悟してくださいね。今までの思いを、いっぱい抱きしめてもらうまで、止めませんからね♪」

俺たちは最初から、お互いを求め合うキスになり、息が続く限りそれを繰り返し、唇が離れる度にお互いの間に銀色の糸が出来るほどだった。

「いっぱい……いっぱい……してくださいね……ファイル」

「プリム……」



俺たちは、月光を照らす部屋で……。

何度もお互いを求め合い……。

それは、朝まで……。

途絶えることがなかった……。

\*

\*

\*

3  
年後

「ファイル、朝ですよ。起きてください!!」

「ん……もう少し寝かせてくれよ……」

「だめですよ。今日は久しぶりのデートなんですから、早く起きてください!!」

六課が解散してから、俺はフェイトさんの元で執務官補佐を一年ほどして、試験を以て合格してフリーの執務官として動いている。

もちろんプリムは、俺の大切な相棒として一緒にいる。

ユニゾンデバイスになったことで、スパイラルとブラスターエクセリオンは正式に排除した。

封印だとまた使ってしまうため、二人で話し合い排除という形を取った。

それにユニゾンの方が遙かに魔力も上がるし、身体への負担も少ない。

現にユニゾンしてなら、ブラスター使用のなのはさんとも短時間だが互角に戦えるほどだった。

そのせいで、時々なのはさんと模擬戦をすることになってしまったけどね。

そして俺たちは、今一緒に暮らしている。

籍は入れられないけど、気持ちは夫婦なのだから……。

「つたく……昨日あれだけ激しかったんだから……。もう少し寝かせてくれよ……」  
「ば、ばか!! 何言ってるんですか!! ファイルの……ばか……」

こうやって、照れているプリムはやっぱり可愛いな。

だから、ついプリムをからかいたくなってしまう。

「でも……今日もいっぱい……してくださいね。ファイルにしてもらうと、本当に愛されてるんだなって思うから……」

「ああ……俺もプリムとしていて、気持ちは安らぐんだ。だから……いっぱいしてもいいか」

「さつきも言ったでしょう。いっぱいしてくれなきゃ……拗ねちゃいますからね♪」

プリムと俺……。

俺たちは、未来からずっと一緒に、互いに、かけがいのない存在だった。

一度は悲しみでどうしようもなくなっただけ……。

今はこうして一緒にいて、お互いの支えになっている……。

プリムも俺も、どちらが欠けても駄目なんだ……。

だから、俺たちはずっと一緒にいる……。

命が続くかぎり……。

願わくは……。

この幸せな時間が永遠に続くことを……。

## if ending アリサ

J S 事件も無事解決し、六課メンバーは特に変わったこともなく穏やかな日々を過ごしていた。

しかし、その平穩も一つの通信で崩されることになる……。

『……というわけで、本当に申し訳ないんだけど、誰か一人こっちに来て、護衛をお願いしたいの!!』

「せやかてアリサちゃん。知つとるやろ、管理外世界には事情がない限り手出しは出来ないことは……」

『その事は充分に分かってるわ。だけど、正直言つてあたしの所のSPだけじゃ心持たないのよ』

実は、アリサちゃんからの通信は、とんでもない内容だった。

近々、アリサちゃんの会社で大々的なパーティーがあるんだけど、その護衛をするSP

のリーダーの鮫島さんが大怪我を負ってしまい、その穴を埋めるために、六課メンバーから一人貸して欲しいとのことだった。

「力を貸して上げたいのは山々なんやけど……六課メンバーは管理局の職員や。下手に個人に手を貸したりしたら……」

『……そうよね』

その後も、私とアリサちゃんは、良いアイデアが浮かばず途方に暮れていた。そう思っていた矢先……。

「それでしたら、休暇中と言うことにして、その間にそちらの世界に行けば……」  
「ファイル、あんたいつの間に!？」

アリサちゃんと話していた為、ファイルが部長室に入ってきたことに気づかなかつた。

どうやらリインが部屋に通したようだ。

「済みません。話の腰を折ってしまつて……。ですが、それでしたら、俺で良かったら力を貸しましょうか？」

『あれ、あんたは見ない顔ね。こないだの時も来ていなかったみたいだけど?』

アリスちゃんが、ファイルを見て不思議そうな顔をしている。

そう言えば、ファイルはこないだの海鳴任務には参加していなかったんや。

「あつ、そうでした。初めまして、自分は機動六課ライトニングスター所属、ファイル・グリードです」

『あたしはアリス・バニングス。はやて達とは10年来のつきあいをしてるわ。あんた以外のメンバーはこないだの時にあつてるのよね』

「ああ……海鳴での任務の時ですね。そっか……。あの時は……」

「あの時はユーノ君のことで、大変やったもんね、ファイルは……」

ファイルがあの時海鳴への任務に参加しなかったのは、ユーノ君を助けるためやった。後からそれを聞いたときは、ほんまにびっくりしたんやで……。



「ちよ、ちよつと!! そのことは……」

「大丈夫や。アリサちゃんはこの事を知ってるよ。大体のことは話してあるんや……」  
『はやてからは大体のことは聞いてるわ。そっか……あんたがフィル・グリードか……へえ、良い面構えしてるわね』

「ど、どうも……」

フィルはアリサちゃんの言葉にとまどいを隠せなかつたみたいだ。

アリサちゃんつて、はつきりと物言いするしな。

テイアナとはまた違うタイプやし。

『照れるなんて、可愛いところあるのね』

「ちよ、ちよつと……からかわないでください。バニングスさん」

『アリサで良いわ。あたしもあんたのことはフィルつて呼ぶから』

「俺はかまいませんが、でも、見ず知らずの女性に……」

フィルは、アリサちゃんのペースにすつかりはまっつているみたいだ。

元々フィルは、年上の女性に弱い傾向あるし……。

『見ず知らずじゃないわ。はやてからあんたのことは聞いていたし、それに、こうやって知り合いになったんだから、遠慮する必要は無いわ』

「は、はい……」

『うん……。で、さっきの話に戻るけど、あんた何か策がありそうね……』

アリサちゃんはさつきとは違って、真剣な表情に戻っている。

「これは、裏技になってしまっただけ……」

「裏技って、何を考えてるんや？」

「はい、休み中の行動は基本的にフリーなわけですので、それを利用しようと思います……」

「せやけど……。ポーターを使うには許可がいるんやで。いくら何でも……」  
「ポーターは使いませんよ……」

「『えっ……？』」

ポーター無しでどうやって地球へ行くつもりなんや。

そんなこと、どうやっても不可能なはず……。

「簡単な話です……。俺のワープで……地球に行くんです」

「そっか!! フィルのワープなら距離は関係ない。相手の魔力、もしくは気配を知っていればその場に行くのは可能や!!」

「さすがに超長距離になりますから、かなり魔力を使いますが、それでも行くことは可能です。アリサさんの生体パターンは、プリムにインプットしましたから」

「あ、あんた……本当に何でもありやな」

もう、呆れるしかなかった。

次元跳躍まで可能って……。

とんでもないで、ほんまに……。

『話は分かったわ。だけど、そいつで大丈夫なの?』

「その心配はないで。フィルは誰よりも強いで、なのはちゃんともガチで戦えるほどや」

「はやてさん、それは誇張しすぎです!!」

『ふうん……はやてがそこまで推薦するのなら大丈夫そうね。じゃ、悪いけどパーティ

の前日に来て貰って良いかしら。一応テストしたいから』

アリサちゃんも、納得してくれたようで、ファイルと話を始めている。

「……わかりました。よろしくお願ひします」

「休暇の申請は心配いらへんで。その日を含めて一週間あたえたる。と言うより、やつとファイルの有給休暇を消化できるわ。散々オーリス三佐から言われていて、頭を抱えていたんや……」

これで、これで……査察部からも、オーリス三佐からも叩かれないで済むわ!!

『「あ、あははは……」』

そんなこんなで、アリサちゃんの護衛をファイルが担当することになった。

\* \* \*

「それじゃ、行つてきますね」

パーティ前日、俺はいよいよ地球へ向けて旅立つことになった。

本当は夜に来て欲しいとのことだったが、長距離のワープはかなり魔力と体力を使ってしまう。

だから、早めに出て向こうで休息を取りたかったので、朝早く出ることにしたのだ。

「フィル、気をつけてね。アリサとすずかによろしくね」

「もし、向こうでお母さん達にあつたら、よろしく言っておいてね」

「フィル、アリサちゃんには昨日のうちに伝えてあるから、ワープしても、どつきりするタイミングにはならへんで」

「助かります。ワープアウトしたら、お風呂中だったなんて洒落にもなりませんから……」

このワープの欠点は、場所ではなく相手の気配をたどって行くため、どんな状況か把握できない。

だから、昨日のうちに、はやてさんに出発する時刻を伝えて、そう言ったトラブルを避けて貰ったのだ。

「確かにそんなことになったら、アリサちゃん、ファイルのことをボコボコにしそうやな……」

「確実にありますよ。こないだ少し話しただけですけど、気の強い方だと言うことは分かりましたから……」

「ふふっ、それアリサが聞いたら、どうなるかなあ〜」

「フェイトさん、勘弁してくださいよ……」

間違いなく俺は、その場でフルボッコ状態になるな。

想像しただけでも恐ろしい……。

「「あははは!!」」

「それじゃ……本当に行ってきますね。ティア達のことお願いしますね」

「大丈夫だよ。あたしからティアナ達には言っておいてあげるから」

実は、今日のことはティア達には話していない。

話したら、絶対ティアはついてくるって言うと思う。

心配してくれるのは嬉しいけど、ティアまで離れるわけにはいかないからな。

「じゃ、サポート頼むな、プリム」

《大丈夫ですよ。マスターは術のことだけを考えてください。細かいことは私がしますから》

「すまないな……」

こうして、俺は地球に向けて旅立った。

\* \* \*

「さてと……そろそろのはずよね」

朝8時、昨日はやてから連絡があり、この時刻にあいつがやってくるからよろしくと言っていたけど……。

確かに、いきなり現れて、身支度中でしたなんて言うことになったら、どっちも気まぐずくなってしまう。

しかも、はやての話で聞く限りでは、かなり生真面目だから冗談はあまり通じないみたいだしね。

そんなことを考えていたら、あたしの目の前で木の葉が揺れ、人影が現れた。

「すみません。遅れまして……」

「大丈夫よ。きつちり10分前だから」

本当にこの青年は真面目なんだ。

この辺はうちのスタッフも見習って欲しい所ね。

「それでは、アリサさん、早速で済みませんが、先日言っていたテストを……」

「そんなに慌てないの。テストは昼に行うから、今は身体をゆっくり休めて。あんた魔力をかなり使って万全じゃないでしょう」



「それは……」

「だから、今はきっちり休んで、あんたの本当の実力をを見せて貰うからね!!」  
「……確かにおっしゃる通りですね。分かりました。それではその時に」

——ふうん。

はやてが言っていたように、フィルって本当に真面目なんだ。  
はやてだけじゃない。なのはもフェイトも本当に高い評価をしている。  
なんか、お昼のテストが本当に楽しみなね。

\* \* \*

「はああああ!!」

「うああああ!!」

あたしは信じられない光景を見ている。

テストで、フィルの格闘能力を見ているのだけど、鮫島以外のSPが次々と投げ飛ばされているではないか。

テストに用意したのは最初は5人だったんだけど、それでも全然相手にならず、結局選りすぐりのメンバー30人を集め、模擬戦をしているんだけど……。

「な、なんなの……フィルって魔導師よね。確か格闘に関しては、そんなに得意ではないはず……」

なのは達のことを知っているから、魔導師のことも多少は知っている。

魔導師は魔法に頼りがちだから、格闘能力はあまり高くない。

だけど、今あたしの目の前で繰り広げられている光景は、そんな常識を覆していた。

「ラスト!!」

「ぐああああ!!」

最後の一人も、フィルに投げ飛ばされてしまい、模擬戦は終了となった。

「ふう……………」

《マスター……………良いのですか。この技術は……………》

「わかっているさ……………。だけど、ここでは魔法は使えないんだ。昔の……………人を確実に倒すための格闘技術だけど、これしか戦う手段はないから……………」

《そう……………ですな》

\* \* \*

「アリサお嬢様、どうやら彼がいれば、私の分は充分果たしてくれますよ」  
 「ええ……………はやてもとんだペテン師ね。この事を隠していたんですものね」  
 「はい、彼は戦い慣れていきますね。動きに無駄が全くありません。まるで……………」  
 「えっ……………？」

鮫島が腕を組み、何か考えているが……………。

「いや、余計な検索はしないでおきましょう……」

鮫島はそう言つて、部屋を出て行つてしまった。

いったいどういう意味なんだろう……？

気にはなるけど、今はファイルを出迎えて上げないとね。

「お疲れ様、ファイル、あんた、どこがそこそこなのよ!! うちのSP全滅させて!!」  
「本当だぜ。これじゃ俺たちの立場はないぞ……」

SPの副隊長がファイルに向かつて、愚痴をつぶやいている。

確かにあれだけ完膚無きまで叩きのめされたらね……。

「あれは、偶々うまくいったただけですよ。俺のやり方を知っていたら、ああうまくはまりませんよ」

「そう何度も投げられたら、こつちのおまんまが食いつばぐれてしまうよ。でも、鮫島さんが怪我をしまして、一時はどうなるかと思つたけど、これで対策は万全だな」

「みなさん、俺は明日一日限りですが、みなさんの足手まといにならないように頑張りますので、よろしく願いします!!」

そう言つてファイルは深々と頭を下げる。

「(ﾟ)ち(ﾟ)ら(ﾟ)そよろしくな。ファイル」

副隊長も右手を差し出して、ファイルもその手を取りがちりと握手をする。

「さてと、明日は忙しくなるぞ。ファイル、早速で悪いが作戦会議に参加してくれ」

「了解です。よろしく願います」

「さあ、みんなも隊舎に戻って作戦会議始めるぞ!!」

『はい!!』

ファイル達は明日の対策を考えるために、部屋を出て行ってしまった。

「さてと、あたしもしっかりしないとね」

明日一日限りのファイルがあそこまで頑張ってくれるんだ。  
当事者のあたしがしつかりしないでどうするのよ!!

\* \* \*

「さてと……これで見回りは終わりだな」

しんと静まった夜、俺は明日の警備に当たって、屋敷の周りをチェックしている。  
地形をきちんと把握しておかないと、何かあったときに対応が出来ない。

「ファイル殿」

「あつ、鮫島さん、こんばんは。怪我のほうは大丈夫なのですか？」

「ええ、戦闘はできませんが、執事の仕事は何とか出来ますので……」

いつの間にここに来たんだろう？

さつきまで全く気配は感じなかったのに……。

「少し、お話したいのですが、よろしいですか？」

「え、ええ……かまいませんよ」

「それでは、こちらの方へ」

そう言つて鮫島さんに案内されたのは、一つの客間だった。

普段はこの客間は使わないそうで、バニングス家の人も殆どここには来ないそうだ。

俺は鮫島さんに座るように言われ、ソファアに座る。

やっぱりお金持ちはすごいな。

このソファアも全然質が違うし……。

「どうぞ、温かい飲み物でも……」

「あつ、すみません」

鮫島さんが出してくれたのは、コーヒーだった。

しかも、インスタントではなく、ちゃんと豆から出している。

香りが全く違う。

さすがバニングス家の筆頭執事でもあるな。

「さて、お聞きしたいことがあるのですが……」

鮫島さんは、表情を引き締めると……。

「あなたは……何者なんですか？」

「!!」

「何者と……おっしやいますと？」

「今日のあなたの戦い方を拝見して思ったのです。あれは、明らかに戦い慣れているやり方です。とてもではありませんが、あなたの年齢で身につけられる戦い方ではありません……」

まさか、戦い方だけでそこまで見破られるなんて……。



「……六課内での訓練で身についたと言っても……駄目でしようね」

「ええ、あの動きはそんな訓練で身につけられるような物ではありません。実戦の中で自然と身についたとしか考えられませんから……」

「……」

「これ以上隠し通しておくのは無理か……」

「……それでは……お話しいたします。ですけど、これから話すことは、鮫島さんの胸の中に仕舞っておいてください」

「分かりました。それはお約束いたします」

「実は……」

\*

\*

\*

「うーん……どうにも眠れないわね」

明日のことが気になって、ベッドに入っても中々眠れない。

少し散歩でもして、気を紛らわせようとしていたとき、いつも使っていない応接室から明かりが見えている。

なんか、それが気になり、あたしは応接室へ行くことにした。

「あれ、少し扉が開いているわね？」

応接室の扉が開いていて、そこから中の様子を見てみると、そこには鮫島とファイルが何か話している。

気になり、そつと話の内容を聞いていると……。

『俺は……かつて全てを失いました。友人、仲間、大切な人……。それこそ全てを……』

『全て……ですか？』

『はい……本当に全部です。生きていることが嫌になるくらいの地獄でしたよ……』

えっ……？

そんなの、はやてもフェイトも、なのはも一言も言っていないかった。

『でも、おかしな事がありますね。それだけの地獄でしたら、今のあなたが住んでいる世界は完全に崩壊していると言うことですよ』

———そうよ。

フィルの話が正しいのなら、ミッドチルダは完全に崩壊している。

『……荒唐無稽なことを言いますが、俺は今から3年後の未来から来た人間なんです。本来は、ミッドも……その他の次元世界も、ある次元犯罪者に滅ぼされているんです……』

『そういうことは……。その3年間であなたは……』

『はい、それこそ生き抜くために足掻きまくりました。その甲斐があり、何とか次元犯罪者は倒せましたんですけど……』

『貴方の身にも何らかの事があり、この世界に来たと言うことですか？』

『……正解です。詳しくは言えませんが、奇跡が起き、俺はもう一度やり直せました。そして……今に至ります』

『……』

ファイルは話が終わると、本当に悲痛な表情をしていた。

その顔は嘘を言っているとは思えない。

それに、ファイルのあの悲しい瞳……。

あれは、本当に色んな悲しみを乗り越えてきた人の目だ。

あたしも色んな人と接しているから、なんとかそれが分かる。

ファイルの瞳は、そんな悲しい色をしている……。

『……なんか、つまらない話をしてしまいましたね。それでは、失礼します……』

「!!」

まづい!!

扉が開いて、ファイルがこっちにやってくるわ。

偶然を装わなくちゃ……。

ガチャ

「あれ？ アリサさん、どうしたんですか？」

「な、何でもない!! 少し眠れなかっただけよ!!」

気付かれてはいけない。

さっきのファイルの話聞いていたことは……。

「そうですか……」

ファイルはどこか納得いかない表情をしているけど、気付かれてはいないわよね。

「す、少し散歩をしたら、眠くなってきたわね!! おやすみ!!」

「お休みなさい。アリサさん」

あたしは逃げるように、ファイルと別れ、そのまま自分の部屋に飛び込んだ。

「……あいつが……ファイルが……あんなつらい過去を……」

あの時、鮫島との話の内容は驚きを隠せなかった。

言っていることは知らない人が聞いたら、なんて滅茶苦茶なことを言ってるんだろうと思う。

だけど、あいつやなのは達がいる世界は非現実なことが多い。

でも、まさか……。

未来から来たなんて……。

だけど、それだったら色んな事に説明が付く。

何より……。

——あいつのあんなに悲しい眼。

あれは、本当にどん底を経験しなければならぬ眼よ。  
それも、独りよがりの悲しみじゃない。

本当に大切な物を失わなければ、あれだけの強さも手に入らない。

「……そういえば、はやてが言っていたっけ。ファイルは……」

ファイルは、人のために本当に全力を尽くす……。

そして……。

最悪の場合、自分の命すら蔑ろにしかねないとも……。

「……そんなの……そんなの悲しすぎるわよ……」

あたしは、そんなファイルに何かして上げられるのだろうか……？

短いときあいだけど、あいつはそんなじよそこらの男なんかより、ずっと魅力がある。悔しいけど、あたしも少しずつ興味を持ち始めている。

「でも……」

今は、明日のパーティを無事に終わらせる事よね。

あいつのことを考えるのは、それからでも遅くはないわね……。

\* \* \*

「ファイル!! しっかり、しっかりしてよ!!」

今、あたしは救急車の中で、凶弾に倒れてしまったファイルと一緒にいる。

パーティ終盤、今まで何もなく無事に進行していたのだが、突然、窓ガラスが割れ数



人のテロリストが現れ、まっしぐらにあたしの所にやってきて……。

その時……。

テロリストの放った一発の凶弾があたしに放たれたが……。

ファイルが咄嗟にあたしを庇って、その胸に銃弾を受けてしまった……。

ファイルの赤い血であたしの服は真っ赤に染まる……。

あたしは何があったのか理解するのに、ずいぶん時間がかかった。

目の前でファイルが胸から血を吹き出しながら倒れ……。

その身体から体温がどんどん失われ、精気もなくなっていく……。

死。

今、あたしの目の前で、ファイルが死のうとしている……。

「ファイル、お願いだから、生きてよ……。あたしを庇って、死んだりしたら……。みんなに何て言ったらいいのよ……。」

\* \* \*

深夜 海鳴総合病院

「先生、ファイルの容態はどうなんですか!!」  
「最善は尽くしました……。ただ……。」

医師の言葉に、あたしは胸騒ぎが止まらない……。

「…………ただ、何なの!？」

「弾が心臓のすぐ近くにあつたことと、出血量が多く…………助かる確立は…………正直むずかしいかもしれません…………」

「そ、そんな…………」

そんなの…………そんなのつて無いわよ!!

どうして、あいつがこんな目に遭わなければならぬのよ…………。

\* \* \*

「ファイル…………」

今ファイルは集中治療室で、一刻の予断も許さない状態だ。

医師によると、今夜が山だと言う…………。

あたしはどうしてもファイルの傍にいたくて、無理を言つて部屋に入れてもらつてい

る。

「どうしたら……どうしたら、あいつを助けられるのよ……」

《アリサさん……》

「誰!? あたしを呼ぶのは」

どういう事なの？

今、ここにはあたしとファイルしかないのに……。

《聞こえるんですか。私の声が!!》

「ええ、はつきりと聞こえるわ。あんたの声がね」

あたしは、ファイルのそばに置いてあった、光を放っていたペンダントに手を伸ばす。

それは、ファイルがいつも大切に持っていたデバイスのプリム。

その声ははつきりと聞こえている。

《信じられない。通常私達デバイスの声は、リンカーコアを持っていなければ、聞こえな

いのに……でも、これでマスターを助けられるかもしれないです」  
「どういうこと……話さない!!」

ファイルはあたしの為にこんな目に遭ってしまつたんだ。

あたしはどんなことをしてでも、ファイルを助けなければならぬ!!

《今、マスターは生命力が殆ど失われています。今はリンカーコアの魔力が何とか命を繋いでいますが、それも長くは持ちません。マスターを助けるには、コアを活性化しなければなりません》

「活性化って? どうやってするのよ。あたしはなのは達みたいな魔導師じゃないのよ!!」

《今アリサさんは私の声が聞こえていますよね。それはアリサさんの中にリンカーコアがある証拠なんです》

「あたしの中に……リンカーコアが?」

——信じられない。

あたしが、なのは達みたいになんかリンカーコアがあつたなんて……。

《アリサさん自身のコアは魔法を使うほど覚醒はしてませんが、ですが……リンクするには十分な魔力はあります》

「いったい……何をしようっていうのよ?」

《アリサさん……。マスターと……。ファイル・グリードと命を共にする覚悟は……。ありますか?》

「……どういうことよ?」

次の瞬間、プリムから告げられた言葉は、衝撃的な物だった。

《助ける方法はただ一つ……貴女とマスターのコアを……直接リンクして魔力供給して生命力を上げるんです》

コアのリンク、つまり命を共有するっていうことなのよね。

「……それで本当にファイルは助かるのね」

《少なくとも、このまま何もしないよりはマシです……》

「……そっか」

あの時……。

ファイルがあたしを庇って倒れたとき、どうしようもない悲しみで一杯になった。

ファイルが死んでしまう——。

そう思ったら、今も涙がポロポロと抑えきれない。

「プリム………お願い。あたしのコアとファイルのコアと………リンクして」

《《本当に………良いんですね。それをしたら普通の生活は出来なくなるかもしれないよ  
………》》

プリムは心配をして、最後通告をしてくれる。

その気持ちは本当に嬉しい——。

「それこそ今更よ。あの時……ファイルが庇ってくれなかったら死んでいたのよ。ファイルが……自分の大切な人が死んでしまうってのに……何もしないのは嫌なのよ!!」  
《アリサさん……あなた、まさか……》

いまやつと分かった……。

昨日から思っていたもやもや感……。

ファイルのことを考えると、胸が苦しくなる感覚……。

その答えがやつと分かった……。

あたしは……。

ファイルのことが大好きなんだ……。



\* \* \*

3日後

「……………は？ 痛っ!!」

突然左胸から激しい痛みが襲う……。

——あの時。

俺はアリサさんを庇って、テロリストの銃弾を胸に受けてしまつて……。  
何とか上半身を起き上がらせると、ベッドサイドには……。

「……………すう……………すう……………」

「……………アリサ……………さん」

そこには疲れ切って眠っていたアリサさんの姿があった。

「……もしかして、ずっと俺の傍に……？」

よく見ると、化粧で隠しているけど、目下のクマが少し見えている。

アリサさんは俺が意識を失っている間、ずっと傍にいてくれたんだ……。

「だけど……正直もう助からないと思ってただけだな……」

心臓付近に弾を受け、さらにコアにまで損傷していたから、よほどのことがない限り助からない。

まして地球の医療技術では、魔法医学は精通していないから、コアの修復なんて……。

「ま、まさか……!？」

考えたくはなかった……。

だけど、この現状じゃ、それ以外に考えられない……。

「アリサさん……あなた……まさか……」

俺とリンカーコアをリンクしたのか。

それ以外に俺が助かった理由が浮かばない……。

「プリム、起きろ!! プリム!!」

俺はプリムを起動させると、プリムはすぐに反応して……。

《マスター、良かった……。目を覚ましたんですね》

「俺のことは良い。プリム、俺の質問に答えてくれ。お前……まさか、アリサさんと俺を……」

《……はい、コアをリンクさせました》

やっぱり、そうだったのか……。

出来れば外れていて欲しかった。

魔導師でないアリサさんとコアのリンクをするなんて、あつてはならないことだ。

「プリム、分かっているのか。一般人とコアのリンクなんてしたら!!」

魔導師みたいに、コアが大きくない一般人のコアなんて使ったりしたら……。

《分かっています……。最悪の場合、二人とも死に至ります……》

「それが分かっているなら、何でしたんだ!!」

——冗談じゃないぞ。

これ以上俺に関わった人が死んでいくのなんて後免だ!!

《マスター……。マスターは何も分かってないですよ》

「何だと……」

《マスター!! 貴方はアリサさんが助かれば、自分はどうなっても良い、そう思っ  
て自分の身体を盾にしました……》

「……………ああ」

アリサさんは、なのはさん達のかげがえのない親友だ。  
その親友を、絶対死なせるわけにはいかなかった。

《……………これは言いたくはなかったんですが、マスター……………あなた、まさかティアさんの元に逝きながってませんか……………》

「!!」

《やっぱり……………そうなんですな……………》

\* \* \*

(そんな……………)

あたしは少し前から目を覚ましていたんだけど、プリムとファイルが話をしているのを

聞いて、動くに動けなくなってしまった。

でも、そのおかげで、フィルの本心が聞けるかも知れない……。

フィルが、何であんなに自分を大切にしないかを……。

「プリム……俺が未来で……ティア達を失ったことは覚えてるな」

《ええ……あれは忘れたくても、忘れられませんから……》

「俺は……今でも聞こえるんだよ。ティア達の……最後の言葉がな……」

フィルが今にも泣きそうな表情をしながら、淡々と話している。

未来のことは、あの時鯨島との話で聞いていたけど……。

「正直言つて……JS事件が終わったとき、俺の役目は終わったと思ってるんだ。みんなも助かったし……な……」

《マスター……》

なによ、それ……。

「……だから、俺はいつ、あいつらの元に逝っても良いかなって思っている。だけど、ただ死ぬよりは、せめて、誰かを護って死ねたらなって……そう思うんだ」

ふざけないでよ……。

「こんな俺でも……誰かを護れば、少しは生きた証にはなるからさ……」

《ふ……ふざ……》

「ふざけるんじゃないわよ!! このバカ!!」

もう、あたしは我慢の限界だった。

これ以上、ファイルから自分をおとしめる言葉を聞きたくはなかった!!

「あ、アリサさん……?」

「あんたねえ……。さつきから黙って聞いていれば、自分を貶めることを言うのもいいかげんにしなさいよ!! あんたが言っている言葉はね、死んでしまった仲間を貶めるこ

とを言ってるのと同義なのよ!!」

あたしはファイルの胸元をぐいっと掴み、自分の方へ引きつける。  
そして思いつき怒鳴ってやった。

「死んでしまったって……？ まさか、アリサさん、昨日の話を!!」  
「聞いてたわよ。全部ね……」

もうこれ以上隠しておく意味はない。

それよりも、ファイルには言わなくちゃいけないことがある。

「どうして……どうして、そんなに自分を大切にしないのよ。どうしてそんなに死にたがってるのよ!!」

「……」

「答え……なさいよ、ファイル!!」

もう、涙をこらえるのは無理だった。



自分の好きな人が、死にたがってるなんて、あたしには耐えきれない……。

「……好きな……人の元に……逝きたいからかな」

「えっ……？」

「俺は……未来の世界で、一人の女性が好きでした。だけど……戦いの中で、命をおとし  
てしまった……」

「ファイル……」

その好きな人って言うのは、おそらく六課の誰かだと思う。

勘が当たってれば……。

——ティアナ・ランスター。

彼女のことだと思う……。

「鮫島さんとの話を聞いていたのでしたら、分かると思いますが、最後の戦いの時、俺は  
大切な人を守れなかった。それどころか……彼女に助けられてしまった……」

「彼女は最後に……幸せになってくれって言ってくれたけど……」

ファイルは、フツと悲しい笑みをして……。

「俺を好きになってくれる人なんて……きつと……いないと思いますから……」

やつと……。

やつと分かった……。

ファイルが何でそこまで自分を大切にしないかが……。

ファイルは、大切な人を作るのに怯えてるんだ。

未来で、みんなを失って、また自分のせいで失うんじゃないかって思ってしまったている。

だから、こつちの世界でなのは達と一緒にいても、どこか壁を作っていたんだ。

前の時に、なのは達と一緒に来なかったのが何よりの証拠……。

ファイルは一人で、全部抱え込もうとしてたんだ……。

「……ばか」

「アリサさん？」

「ばかよ……本当に……こんなになるまで、自分の心を傷つけるなんて……」

ファイルは元々戦うのには向いていない性格だと思う。

本当は、誰よりも優しいのに、未来でみんなを失って……。

大切な女性を失って……。

それで、ファイルは強くならざるを得なかったんだ……。

「……いなくならない」

「えっ……？」

「あたしは……あんたの傍に……ずっといる。だから……」

あたしはフィルの頬にそつと触れ……。

そして……。

「……………分かる。あたしの温もりが……」

フィルの頭を自分の左胸に、押し当てた。

「どうして……どうしてそこまで……思ってくれるんですか？」

「……………そんなのも分からないの」

フィルの鈍感さ加減に、あたしはふうつとため息をつき……。

そして……。

「……………好きだからに……決まってるでしょ。ばか……」

あたしは顔を真っ赤になりながら、一世一代の告白をした……。

\* \* \*

「……アリサさん」

正直、驚きを隠せなかった……。

アリサさんの行動もそうだが、何より……。

俺のことを好きになってくれたなんて……。

今の今まで夢にも思わなかった。

「その言葉……すごく嬉しいです。アリサさんみたいな綺麗な人に、そこまで言ってもらうなんて、思いませんでした……。ですが……」

もし、アリサさんを守れなかったら……。

また目の前で失うことがあったら……。

俺は……。

「あのね……あたしはね。あんたに守られるだけになるつもりはないわ。あんた達の世界の事も知ってるし、それに……」

「今は、あんたとあたしはリンクしてるのよ。プリムから聞いたけど、コアをリンクしてるって事は、お互いにその魔力を……命を共有してるって事でしょう」

「……それは」

俺が反論をしようとする、さらにアリサさんは……。

「ファイル、あたしはね、好きでもない人と命の共有なんてする気は更々無いわよ!! あんたを愛してるからこそしたんだからね!!」

「アリサさん……」

「それでも信じないってのなら……」

すると、アリサさんは俺の頭をぐいっと抱き寄せ……。

「んっ……んんん……」

俺の唇にキスをしてきた……。

長いような、短いようなキスが終わると、アリサさんは……。

「……これで分かるでしょう」

「……充分なくらいに」

これで分からないほどバカじゃない。

アリサさんは本気なんだ……。

「ずっと……ずっと一緒だからね。ファイル」  
「……はい」

「お願い……あたしのことが好きだって言うなら、ちゃんとアリサって言って……」  
「あ、アリサ……」  
「うん♪」

そして……。

俺とアリサさんは、またキスをする。

今度はお互いの気持ちを確認合おうように……。

\* \* \*



## 10日後

「さてと、なのは達の所に行きましようか!!」

何とか怪我が回復し、動ける状態になったので、俺はアリサと一緒に機動六課に戻る  
ことになった。

怪我は何かなかったのだが、コアの傷は相当深く、リンクした状態でないと命の危険  
があるのだ。

だから、一旦アリサにはミッドに来てもらう必要があった。

「……本当にいいのか？ ミッドに行ったら、そう簡単には戻っては……」

この10日間、本当に色々なことがあった。

まず、アリサへの話し方の矯正から始まり、退院した次の日には両親の挨拶に行く羽  
目になってしまった。

鮫島さんから、ある程度のことばは聞いていたため、そんなに拗れはしなかったけど

……。

むしろ……。

『いやあ、これでこのお転婆娘もお淑やかになるだろう!!　ファイル君、孫を期待してるよ』

おかしいでしょう!!

こんな訳も分からない馬の骨に、大切な娘を任せるんですよ。

もう少し反論してください!!

『ファイル君、君は自分を下に見すぎだ。君は充分にアリサを任せられる男性だよ……』

ご両親の真剣な言葉に、俺はこれ以上言うことが出来なかった。

ならば、その期待に少しでも応えられるように頑張るだけだ。

さらに、アリサが通っていた大学の問題は……。

「ああ、大丈夫よ。どうせ、飛び級で今年の春卒業だったし、論文ももう出してきたし……」

アリサのIQは200オーバーということはなのはさんから聞いていたけど、まさか本当に飛び級で大学を卒業するとは……。

こんな感じで、アリサは俺の知らない間に、どんどん地盤固めをしていて、俺が断れないように外堀から埋めていっていたのだ。

「あのね、今更何言ってるのよ。あたしとあんたは今や一心同体でしょう。リンクを解除したら、あんたは死ぬかも知れないんだし……」

「それは……そうだが……」

「ウジウジいわないの。あたしが良いっていつてるんだから!!」

「……そうだな。アリサ」

「そういうことよ。じゃ、出発するわよ!!」

そうやって、アリサは俺の左腕に自分の腕を絡ませ、自分の胸を押しつけて……。

「あ、あの……アリサ!？」

「……このくらいで顔を赤くしてるんじゃないわよ」

アリサはフンといった感じで照れている様子もなく……。

「そ・れ・に……」

さらにアリサは……。

「これから……いっぱい……いっぱいあんたに甘えるんだからね♪」

俺の頬にキスをした……。

「……い、行くぞ」

「照れちゃって、可愛いんだ♪」

つたく……アリサの奴からかいやがって……。  
本当になわなないよ……。

\* \* \*

六課に戻ってきて、いきなりアリサがなのはさん達を集めて、みんなの前で爆弾発言をした。

それは……。

「みんな、あたしはファイルと正式に付き合ってるから、誰も手を出すんじゃないわよ!!」  
その発言を受け、最初はぼかんとしていた六課メンバーだったが……。

『ええええええええええ!!』

部屋一帯に響き渡る大声で、全員が驚き、その後、俺は尋問状態になってしまう。色んな事を聞かれたけど、でも、みんな俺たちのことを心から祝福してくれた。

「あの時は参ったぞ……。みんなの前で、あんな爆弾発言するんだからな……」

「ふふつ、良いじゃない。あれでファイルは、あたしの彼氏だつて紹介できたんだし」

「それは……そうだが……」

「なのはさん達は普通に祝福してくれたんだけど、アルトさんとシャーリーさんがゴシップ好きだから、本当に聞いて欲しくないことまで聞いてきたんだぞ……」。

「アルトとシャーリーは、あたしからもきつく言ったから、あれ以上はないわよ。そんなに心配しないの!!」

「ありがとう……アリサ」

「何度も言わさないの。今はそんなことよりも……」

そう言ってアリサは、俺の肩に自分の頭をコトンと預けてくる……。

「だな……」

そして俺は、アリサの綺麗な金髪をそつと指で梳く。

アリサは、自分が嫌いな人に髪を触れられるのはとても嫌う。

俺とアリサはまだ短いつきあいだけど、その事はよく分かるようになった。

だけど、俺がこうするとアリサは眼を細めて、とても甘えてくる。

普段のアリサからは見られない仕草だ。

「ねえ……あんたも、もう身体回復したでしょう?」

「おかげさまでな……」

「だったら……その……」

アリサは顔を真っ赤にしながら、指をツンツンしている。

「えっ……?」

「……察しなさいよ……ばか」

そう言つてアリサはぷいっと反対に向いてしまった。

「……ごめんな。俺、本当にそう言つたことに疎いから……」

俺が必死で謝ると、アリサはこつちを向いてくれて……。

「そんなの分かつてるわよ。あんたの鈍感はね……。だから……」

いきなりアリサは俺の唇を奪う。

最初は唇が触れあう程度だったけど、しだいにそれだけでは物足りなくなり、舌と舌を絡め合い、何度も息継ぎを繰り返し、満足したときには互いの間に銀の糸が出来るほどだった。

「いっぱい……いっぱい分かせてあげる。あたしがどれだけ、ファイルのことを愛してるかをね」



「アリサ……」

アリサは頬を赤く染めながら、必死で俺をリードしてくれる。

そんなアリサがとても愛おしく、俺はアリサの上着を脱がし、ブラもとり、その形の  
良い胸を何度も蹂躪する。

「あつ……んんんん……ファイル……ファイルううう……」

アリサの喘ぎ声は俺の理性をどんどん崩していく。

好きな人が、自分の手で気持ちよくなってくれている。

それは最高の喜びだ。

そして、互いに理性は崩れ、お互いの身体を求め合っていき……。

「ファイル……あたし……初めてだから……その……優しくしなさいね」

「ああ……大切にする」

「ありがとう……ファイル」

アリサは安心し、ニコツと微笑む。

それは普段のアリサとまた違った魅力ある笑顔だった。

「じゃ……………いくよ」

「うん……………来て……………ファイル」

俺はアリサの身体に溺れ……………。

アリサもまたその快樂に身を委ねていた……………。

そして……………。

そのみだらな行為は何度も繰り返され……………。

それは朝まで途絶えることはなかった……………。

\* \* \*

3年後

「ふう……。ようやく一段落ついたよ」

「はい、お疲れ様。コーヒーで良いわよね」

「ありがとう」

3年前のあのとき、辛うじて命を取り留めたけど、今までの無茶もたたり、ファイルは、もう二度と戦うことができなくなってしまった。

だけど、あたしはなのは達には悪いけど、これでよかったと思う。  
もともと、ファイルは戦い続けるには優しすぎる。

未来で、大切な人たちを失い、それでも自分の心と身体を傷つけながら必死に戦い続けてきた。

こつちに戻ってきてからも、何度も命を失うような怪我をし続けていた。

——あたしをかばった……あのときのように。

「……それにしても、まさか俺が起業家になるとはな」

「あたしは最初から向いてると思ったわよ。戦いよりもずっと……ね」

そう、あたし達は、機動六課解散後、ミッドで医療機器を専門とする会社を興し、難病に苦しむ人たちの助けをしていた。

ファイルが未来で作ったメディカルポッドを怪我だけでなく、肺炎や結核、そして癌といった病気にも対応するように改良しなおし、一般社会に普及させたのだ。

そのおかげで、医療費が高くて払うことができなかつた人たちも助けることができるようになり、ミッドの医療分野は飛躍的に進歩したのよ。

「……かもな、だけど、それは、こうして俺のことを支えてくれるアリサがいてくれたか

らさ。一人じゃ……何も出来なかったよ」

「なに当たり前のこと言ってるのよ。あたし達は命もつながってるパートナーなのよ。これからも……ずっと、ね」

あたしは後ろから、ぎゅつとファイルのことを抱きしめる。

「あ、あの、その……なんだ。アリサ、胸が、だな……」

「なあに〜♪」

ファイルが言いたいことはわかってる。

背中にあたしの胸が当たってるって言いたいんでしょう。

フェイトみたいに、大きくないけど、あたしだってそれなりにあるし、胸の形は負けてないわよ!!

「……お前、分かかってやってるだろ」

「さあ、ね〜」

「……勘弁してくれよな、ったく。」

こんなこと言ってるけど、本当に嫌な訳じゃなく、ただ照れてるだけだったのは顔を見れば分かる。

だって、思いつきり赤くなってるし。

「まったく、素直じゃないわね。でも、そんなあんたもあたしは大好きだからね♪」

今までずっと一人で戦い続けてきたファイル。

—— あいつは、ずっと、自分は、不幸を呼ぶ存在と思いつけてきた。

でも、そんなことないんだからね!!

幸せになっちゃいけない人なんていないんだから……。

それでも、まだそんなバカなこと考えるのなら……。

あたしがずっとそばにいて、いっぱい幸せにしてやるんだから!!  
だから、二人で幸せになろうね。

## if ending すすか

この日……。

私はお休みで、久しぶりにアリサちゃんとお買い物に行く約束をしていた。

今、私は海鳴駅でアリサちゃんを待っている途中です。

しばらく待っていたら……。

「ねえ、君。俺たちと一緒に楽しいことをしようぜえ」

いつも思うことなんだけど、何故こういう人たちはみんな同じことしか言わないんだろう。

そう言う私もいつも言うことは決まっている。

「結構です。今、友達と待ち合わせをしていますので……」

って言うんだけど、これで帰ってくれた人は殆どいない。



「いいじゃんよお。君みたいな娘を待たせる子なんかほつといて行こうぜ!!」

そう言うや、否や話しかけてきた男の人は、私の手を掴み無理矢理引つ張って行こうとする。

「いや!! やめてください!!」

いつもならアリサちゃんと一緒に行動してるから、鮫島さんがこういう輩を追い払ってくれるんだけど……。

男の人たちが無理矢理私を車の中に引つ張り込もうとしたとき……。

「あいたたたた!!」

「おい、いやがる女の人に何をしてる……」

男の人の手を引きはがし、その後こちらをみて心配そうな顔をして……。

「大丈夫ですか？ 怪我とかしてませんか？」

「は、はい、大丈夫です。ちよつと怖かったですけど……」

「そうですか……」

私が怖かったという単語を言ったとたん、彼の表情が険しい物になる。

「貴様ら……この人に何しようとしたんだ」

彼は淡々とした口調で話しながら彼らに歩いていく。

「うるせえなあ!! お前には関係ねえだろうが!! この子が一人で寂しそうにしていたから、俺たちがたつぷりと遊んでやろうとしたんじゃねえか」

そう言うと、男の人の周りに居た他の二人の男の人が、ニヤニヤしながら笑う。

「そうそう、遊んであげようとしたんだよ。」

「たつぷりとなあ」

イヤらしい言い方で一人の男の人が彼に話している。  
残りの二人がこつちをみて、舌を舐めずりしている。

「そっか……」

「そう言うわけでとつと消えな!! お前は邪魔なんだよ!!」

そう言って彼の顔面に殴りかかった。

しかしその瞬間……。

「いててててて!!」

彼がその腕をとり、逆にその腕を捻りながら、その男の人を地面に叩きつけていた。

(えっ? 一体何が起きたの?)

あまりの早業に呆然としてしまったが、いつの間にか二人目の男の人も地面にくの字

になって倒れていた。

「て、てめえ……ぎげんじゃねえぞ!!」

残った男の人がポケットからナイフを取り出し、後ろから彼に斬りかかる。

「危ない!!」

もうだめ!!

そう思っていたが、次の瞬間信じられない物を見ることになる。

「う、うそだろ……」

後ろを振り向いた次の瞬間、彼はナイフを右手の人差し指と中指で挟み込んでしま  
う。

「この……この!! 全くうげきやがらねえ!!」

いくらナイフを引き抜こうとしても、山のごとく動かすことが出来ず、男がただ独り相撲の状態になっていた。

「どうした……それで終わりか。だったら……」

バキン!!

次の瞬間、刃の部分を根本から叩き折ってしまった。

その勢いでナイフを持っていた男が、地面にペタンと尻餅をついていた。

「ひいひいひいひい……」

「まだやるか……」

彼が地面に倒れている三人組にひと睨みすると……。

「じよ、冗談じゃねえ!!」

「ま、待ってくれよ!!」

「おいてかないでくれ!!」

恐れをなしたのか、あわてながらその場を去り、自分たちの車に駆け込み、さつさと走り去っていった。

\* \* \*

「ふう……」

「あの……本当にありがとうございました」

「いえ、別にたいしたことはしてませんから……」

俺は、とある理由で無理矢理休暇を取らされ、しかもミッドにいたらまた仕事をするんじゃないかという理由で、なのはさん達の故郷海鳴市に強制的にとばされてしまっていた。

幸いはやてさん達から地球の通貨は貰っているの、野宿という心配はないんだけど、その代わりになのはさんの実家である翠屋でケーキをおみやげに買ってくることを

言われてしまった。

その店を探している途中で、あんな連中と遭遇するとは思わなかったけどな……。

「それでは、俺はこの辺で……」

「ま、待つてください!! せめて何かお礼を……」

「俺はそんなつもりでしたわけじゃないですから。あんな馬鹿を見るのが不愉快なだけですから……」

俺は別にお礼をされたいから助けた訳じゃない。

泣きそうな人がいたから助けただけだから……。

「でも……。だったらせめてお茶くらい奢らせてください」

「ですが……」

《マスター。別に急ぐわけではないんですから、そのくらいの御厚意は受けても良いと思いますよ。あまり無下にするのも失礼ですよ……》

プリムが念話で俺にそう言うってくる。

確かにあまりお断りするのもし訳ないな。

「それでしたら……お言葉に甘えさせてもらいますね」

「はい♪」

その後、もう一人金髪の女性がやってきて、先ほどのことを説明すると……。

「へえ……あんたなかなかやるじゃない!! 普通は見ても見ぬふりするのにも、男気があるじゃない!!」

「べ、べつにそう言うわけでは……」

「謙遜しないの!! あたしからも礼を言わせて貰うわ。そう言えば自己紹介がまだだったわね。あたしはアリサ・バニングス。よろしくね!!」

金髪の女性はとてもズバズバ言ってくるけど、人を傷つける物ではない。むしろ人一倍気を遣っている感じだ。

「あの、月村すずかです。先ほどは本当にありがとうございました!!」



先ほど助けた長い紫の髪の女性はとてもおしとやかな印象を受けた。

「いえいえ、怪我が無くて良かったです。俺はフィル・グリードと言います」  
「えっ？」

二人の女性は俺の名前を聞いたとたん、驚きの表情に変わり……。

「もしかして……なのはちゃんの関係者の……？」

「えっ!？」

今度は俺が驚く番だった。

まさかここでなのはさんの名前が出てくるとは……。

「まさか、お二人はなのはさんのお友達……ですか？」

「そうよ!! あたしとすずかは小学生時代からなのは達とは達とは親友同士よ」

「こないだみんなで来たときはフィル君は来ていなかったけど？」

思い出した!!

アリサ・バニングス、月村すずか。

この二人はなのはさん達の地球での協力者だ。

まさか、ここでこの二人と会うことになるとは……。

「そういえばあんた、こないだみんなで来たときはいなかったけど、何か理由があったんでしよう?」

「詳しいことは分からないけど、フィール君がすごく頑張ってくれたから、今、私たちが生きていてるって、はやてちゃん達が言っていたの」

「えつと……その……」

「いったいはやてさん達は、この二人にどんなことを言っているんだ?」  
「ずいぶんと買いかぶっているみたいだけど……」。

「そつか……あんたがフィール・グリードか。でも、なんで地球にいるの?」

「そうだよね……何か事件でもあったの?」

二人が不安そうな表情で俺に尋ねてくる。

そう言う訳じゃないんだよな。なのはさん達の関係者だし、今回は俺の休暇で来ているだけだから、話しても良いかな。

「実は……」

俺が六課であった出来事を簡単に説明すると、最初はうんうんと頷きながら聞いていたんだけど、最後の方になると……。

「はあ……。確かにそれじゃ、はやてが強制休暇を出すのも当たり前よ。五日間不眠不休って……」

「そうだよ。もう少し自分の体を大切にしなきゃだめだよ!!」

「は、はい……」

二人のあまりの迫力に、俺はたじろぐしかなかった。

というよりも、俺が昔から年上の女性には頭が上がらないのが原因かな。

結局俺は二人に連れられて、なのはさんの実家である翠屋に一緒に行く羽目になってしまった。

しかも、翠屋にいたら、なのはさんのお兄さんである恭也さんも戻ってきていて、先ほどの話を月村さん達が話していると……。

「義妹を助けてくれてありがとう。ああいった輩は俺と父さんが、あらかた片付けたつもりだったんだけどな……」

恭也さんがこちらにやってきて、俺に頭を下げてお礼を言ってきた。

「というか、月村さんと恭也さんが義兄妹だとは……」。

「仕方がないですよ。どこにでもいますから、ああいうアホは……」

「顔とか分かれば、二度と馬鹿なことをさせないんだけどな……」

「とにかく今後は俺たちも気をつけるよ。今日はお礼と言ってはなんだが、ここでのケーキ代はうちで持つよ」

「い、いえ!! それは申し訳ないです!! ちゃんと払いますから!!」

さすがにそこまでして貰うわけにはいかない。

ただでさえ、おみやげの買うお金だって、割り引いてくれたのに……。

「気にしないでくれ。もし、気にするんだったら、また店をひいきにしていればいいさ」

「そうだよ。ここは恭也義兄さんの厚意を素直に受け取ってね」

「あんたは遠慮しすぎなのよ。人の厚意は素直に受けなさい!!」

さすがに三人から言われてしまつては、断る方が失礼だ。

俺は御厚意に甘え、ごちそうになることにした。

\* \* \*

「さてと、おみやげも買ったし、ミッドに戻るとしますか」

「えっ……うー」

「ちよつといくら何でも早すぎない!! 今日地球に来たばかりなんでしよう!?!」

「ですが、仕事の方も残っていますから……」

アリスさんの言うとおりに、今日の朝、海鳴に來ただけで、正直六課をあけるのは心苦しい。

頼まれたおみやげも買ったんだから、もう戻った方が良い。

「ねえ、フィル君。せっかく地球に來ただから、一日くらい観光しても怒られないと思  
うよ……」

「ですが……」

「あのね。はやてちゃんがフィル君にお休みをくれたのは、体を休めてほしいからだと思  
うよ。それを無視する方が良くないと思うな」

「……そう……ですね」

確かに月村さんの言うとおりに思う。

今回の休みだって、徹夜を繰り返していることで、はやてさんに休まされたんだから。

「もし、一人で休むのが出来ないって言うなら、明日私と一緒に遊んでくれないかな。今  
日はあんな事があって予定が全部狂っちゃったから……」

「そうね。こいつは一人だとしても仕事をしそうだしね。それが良いかもね。残念な

「あらあたしは明日は用事があって無理だけど、すずか、こいつのことはお願いね」  
「うん。はやてちゃん達にも私から言っておくから心配しないでね!!」

もう、退路はふさがれてしまった。

これで無理矢理六課に戻っても、また強制的に休暇を取らされてしまう。

しかも、今度はデバイスまで取り上げられてしまうだろう。

「ふう……分かりました。それでは今回はお言葉に甘えて、海鳴の街を案内して貰います。よろしくお願いします。月村さん」

「うん。任せてね。それと、私のことはすずかでいいからね」

「は、はい……」

どうにも、月村さん、いや、すずかさんの言葉にはどうにも聞かなきゃと言う気にさせられてしまう。

別に命令されてるわけではないんだけど、なぜかあの人が悲しそうな顔をしていると、胸が苦しくなってくるんだ。

結局俺は次の日、すずかさんに海鳴の街を案内されて、帰るのが一日遅れることになった。

でも、そのおかげでリフレッシュできたから良いかな。

\* \* \*

二ヶ月後

「ここが、はやてちゃん達が働いている機動六課……」

私は冬休みを利用して、今回ははやてちゃん達がいる六課に見学に来ることにした。

さすがに何も断りもなく来たら駄目なので、事前に連絡をして都合がつく日に合わせて来ることになった。

「いらつしやい、すずか。待っていたよ」

「フェイトちゃん。お久しぶりだね!! 元気にしてた!?!」

「うん。色々あったけど、なのはもみんなも元気だよ」



こうやって会うのは、海鳴であったとき以来だけど、みんな元気そうでよかった。

「そういえば、ファイル君はどうしてる？ 元気にしてるかな？」

こないだ会ったときは、だいぶ無理していたからね。

私とアリサちゃんがあれば言っただし、もう無茶はしてないと思うけど……。

「う、うん……。元気と言ったら元気なんだけど」

なんか、フェイトちゃんの様子がおかしい。

どこか困惑して様子でなにか話すのをためらっている感じだ。

「ファイルね。海鳴から戻ってきた一週間くらいはちゃんと休んだりして、無理しなかったんだけど、それからしばらくして今度は……」

そうやってフェイトちゃんは、六課内のオフィスを指さして……。

「フィル、あたしのほうは大丈夫だから。少しは自分をいたわって!!」

「スバルの言う通りよ!! あんた、ここんところ全然休んでいないじゃない!!」

「心配するなつて。休憩はちゃんと取ってるつて。それに、これくらいしかおまえらのサポートはしてやれないからな」

スバルちゃんとティアナちゃんが、必死になつて言ってるのに、フィル君はそれでも無理をして仕事をしてしまう。

\* \* \*

「フィル君つて、いつもあんな感じなの。フェイトちゃん……」

「うん……今日はまだ良い方。いつもだったら、夜中まで残つてシャーリーと一緒にデバイスのことを話し合ったりして、そのまま朝までして、そのまま訓練なんて事もざらなの。それを注意はするんだけど……」

「それでもフィル君は、無茶ばかりし続けているんだね……」

「なのはや私たちには無茶はするなつて言うんだけど、フィルの方がよっぽど無茶して

いるよ。このままじゃ本当にいつか……」

ファイルはいつもそう……。

自分のことより、自分の周りの人のことを優先してしまう。

自分はどうなっても良い。だけど、仲間はどうなことをしても護りたい。

J S 事件の時もずっとそうだったから……。

そんなことを考えながらオフィスを見学していたとき……。

ボタン

突然オフィスに大きな物音が響き渡る。

その音ですぐにその方向を見ると……。

「ファイル!!」

「ファイル君!!」

目の前でファイルが突然ボタンと倒れている。

心配していたことがついに起こってしまった。

目の前でファイルが倒れてパニックになっているキャラが、ファイルを揺すっているが……。

「キャラちゃん、あんまり揺すらないで。原因が分からないのに、動かすのはかえって危険だよ」

「えっ？ は、はい!!」

いつの間にかさすががファイルの前に駆けつけて、ファイルの状態を確認していた。確認が終わると、すぐに……。

「スバルちゃん、ティアナちゃん、急いでシャルさんに連絡して!!」

「は、はい!!」

すずかの言葉でティアナ達がハツとして、すぐにシャルを呼びに行った。駆けつけたシャルがファイルのことを見ると……。

「完全に過労ね。疲れがたまつてそれが蓄積されて、それがどつと出たのよ。とりあえ

「ず医務室に運ぶわね」

シャマルが連れてきた救護班と一緒にファイルを連れて行く。

この場はティアナ達に任せ、私とすずかはその後について行くことにした。

そして、この後シャマルから、信じられないことを聞かされることになる……。

\* \* \*

医務室についた私とフェイトちゃんは、しばらくの間部屋の外で待機していた。

しばらくしてシャマルさんが、フェイトちゃんだけを部屋に入れて……

「話したいことがあるの……。機密事項に関わるから、すずかちゃんは後でフェイトちゃんに聞いて……」

「は、はい……」

正直ファイル君のことが気になって仕方なかったが、機密事項という言葉にこれ以上言うことは出来ない。

なんだろう……。

嫌な予感が頭から離れてくれない。

\* \* \*

「ファイル……よく眠ってますね」

「ええ……本当によく眠ってるわ……」

シヤマルは、さつきから話すことをためらっている感じだった。

話さなければいけない。だけど、どう話したらいいか……。

そんな感じがさつきからずっと感じられる。

そしてシヤマルは意を決したのか……。

「フェイトちゃん。あの場では……過労って言ったけど、本当はそれだけじゃないの

……」

「えっ……?」

「フェイトちゃん、ファイルがJS事件でプラスターを使ったのは覚えてるわね……」

「うん……」

あの事件でファイルは、ヴィヴィオとなのはを助けるために、自分の限界以上の力、ブラスターを使っている。

あの力は自己ブーストのため、自分の限界以上の力を使えるけど、その反面……。

「そのせいでなのはちゃんもファイルも、体はかなり負担をかけてしまっているの。しかも……」

「これを見てほしいの……」

そうやって、シャルマルがスクリーンに映し出したのは、ファイルの検査結果。

「これは!!」

「見ての通り、もうファイルは限界に近い。そこに来て、これだけの無茶の繰り返し……。正直言ってこのままだったら……」

シャルマルは、悲痛な表情をし……。

「……ファイルは……いつ死んだっておかしくないのよ」

「う、嘘だよね……」

——信じられなかった。

嘘だつて言つてほしかった……。

だけど、シャマルの表情がそれを物語っている。

今言つたことは紛れもなく真実……。

「シャマル!! フィルを助ける事は出来ないの!!」

「今のようは無茶しなければ、大丈夫なんだけど……。だけど、今のフィルが、それを聞き入れると思う?」

絶対に無理だと思う。

フィルは、自分のことよりも大切な仲間の方を優先してしまう。

それこそ、大切な人が出来ない限りは……。

「知つての通り、フィルは未来でティアナを失っているわ。だからこれ以上の悲しみを



生まないために、自分の体のことは二の次にしてる……」  
「でも、このままじゃファイルは……ファイルは……」

\* \* \*

「そんな……そんなのって……そんなのって……」

信じられなかった……。

ファイル君がこのままじゃ死んでしまう……。

詳しいことは聞こえなかったけど、それでも肝心なことは聞こえてきた。

フェイトちゃんの必死な声がかつちまではつきりと聞こえてくる。

ファイル君の容態は、本当に良くないんだ……。

「いやだよ……ファイル君が死んじゃうなんて……嫌だよ……」

二ヶ月前、あの時は優しい男の子だと思っていた。

だけど、あの日フィル君と一緒にお話をして、その後も海鳴の街で一緒に遊んだりして、フィル君のことを知れば知るほど、フィル君のことが気になり始めていた。

今日だって、なのはちゃん達には悪いと思っただけど、本当はフィル君に会えたらなっ  
て思っていたんだ。

だけど……。

知ったのは、悲しい現実……。

「苦しいよ……フィル君のことを思うと、こんなに胸が苦しいよ」

この二ヶ月、フィル君に初めて会ってから、ずっともやもやしていた気持ち……。  
その気持ちは今はっきり分かった。

私、フィル君のことが好きだったんだ。

\* \* \*

「よく……眠ってるね」

あれから数時間、ファイル君の容態も落ち着き面会も出来るようになった。さつきまでなのはちゃん達が代わる代わる来て、みんなに怒られたりしていたけど、それはみんながファイル君のこと本当に大切に思っているからだよ。

「ファイル君……」

私はファイル君の黒髪にそつと触れ、何度もそれを繰り返していた。ふとファイル君の顔を見ると、どこか安らいだ表情をしている。

「ふふつ、こうしていると普通の男の子なんだけどね」

本当、無茶ばかりしているんだね。

地球で話を聞いていたのだからかなり無茶だと思っていたのに、ここでみんなから話を聞いたら、あの時、聞いたのはほんの一部だったんだね。

「ファイル君……」

本当はちゃんと言いたい。

だけど、私の思いはきつと今のファイル君には届かないから……。それでも、後悔だけはしたくないから……。

「実はね……。私も、なのはちゃん達にしか言っていない秘密があるんだよ。私もね……。普通の人とはちよつとだけ違うんだ」

「夜の一族っていつて、私の家系は元来、吸血鬼の血を継ぐ一族の末裔……。なんだ……」

これのせいで小さい頃、私は、うまく人とお話が出来なかつた。

だけど、アリサちゃんやなのはちゃん達と会つて、たくさんのお友達が出来た。そのおかげで引つ込み思案の性格も、だいぶ直すことが出来たんだ。

「だからね……。本当は普通の人を好きになつちやいけないんだけど、だけどね……」

言つちやいけない……。

「それでも、私は……私は、あなたのことが……」

「だけど……それでも……」。

「好きになっちゃったから……」

自分の気持ちには嘘をつきたくなかったから……。

だから私は、ほんの僅かの望みを託し……。

そつと頬にキスをした……。

「おやすみなさい……。身体……大切にね」

私はそつと、扉を開けて医務室から退室した。

\* \* \*

「……すずか……さん」

あの時……。

俺は半分起きていたのだが、すずかさんが思い詰めた表情で話し始めたとき、起きてはいけない、そう思っただけで眠ったふりをして話を聞いていた。

話を聞いたとき、驚きを隠せなかったのもそうだけど、なにより……。

「俺のことを……好きになってくれたなんて……な……」

はつきり言っただけでも嬉しかった。

すずかさんみたいに、とても心の優しい女性に好きだと言ってくれたのは……。

だけど、その反面……。

「……でも、俺が人を好きになっても……良いのか？」

ティアア……。

かつて俺が未来で愛したたった一人の女性。

もし、お前がこの場にいたら、どう思うんだろうな……。

《マスター、今ティアアさんのことを思い出してますね……》

「分かるか……プリム」

《分かりますよ。マスターの今の顔、ティアアさんのことを思っているときの顔でしたから……》

「そっか……」

やっぱ、プリムには分かってしまっただな。

顔には出さないようにしていたんだけどな……。

《マスター、きつとティアアさんなら、『あんたが幸せになつてくれる方が、あたしは嬉しいんだからね』こんな感じで言ってくれろと思えますよ》

「そう……だな」

きつとティアならそう言う……。

過去に送り出してくれたときだって、そのことをずっと言ってくれたんだから……。

もう一度すずかさんと、ちゃんと話をしよう。

答えを出すのはそれからだ……。

\* \* \*

「結局……：ファイル君とはあれから会っていないな」

ファイル君が倒れて、次の日にはファイル君は仕事に復帰していた。

さすがに訓練はしていなかったけど、それでも事務仕事をしているときは、周りのフオローをしていて相変わらず自分を省みていない。

そんな感じで夜になっても全く会うことが出来なかった。

こうやって外を散歩していたら、もしかしたら会えるかもしれない。

そんな僅かな期待をしていたら……。



「……………あれは？」

ふと海岸の方を見ると、フィイル君が砂浜で一人で座っているのを見つけた。

「フィイル君……………うん!!」

昨日は眠っているフィイル君に一方的に言ったただけだけど、今度はちゃんと伝えよう。  
たとえどんな結果になっても……………。

「フィイル君!!」

「えっ……………？ す、すずか……………さん」

\* \* \*

「どうして……………ここに？」

「こうやって外を歩いていたら、フィイル君に会えるかなって思って……………ね」

「そう……ですか」

まさか、こんなところでずかさんに会うとはな……。

正直、まだ自分の心に完全に向き合えたとは言えないのに……。

「これ……良かったら飲まない？」

そう言って渡してくれたのは暖かい缶コーヒーだった。

俺はそれを受け取り、ずかさんは俺の隣にすつと座り始めた。

そして俺たちは、それぞれの飲み物を飲んでいく。

しばらく俺とずかさんは無言でいた。

夜の、人気のない海岸。

否応なしにも緊張はする。

そして……。

「フィール君……」

話を切り出したのはすずかさんだった。

「何ですか？」

「ねえ……昨日の話、もしかして聞いていた？」

「……どうして、そう思うんですか？」

「昨日も言ったけど、私は人とは少し違うから。だから、ファイル君の息づかいが、寝ている物かどうかが何となくだけ……分かるんだ」

「そう……ですか」

あの時、すずかさんには分かっていたんだ。

「ファイル君……あの時も言ったけど、私は……」

「私はね……あなたのことが……好き……大好きなんだ」

「すずかさん……」

その言葉を聞いたとき、俺は表情をゆるめるが、すぐに引き締め……。

「正直……嬉しいです。すずかさんのような女性に好意を向けられることは……でも……」

「でも？」

「俺には、女性を幸せにする資格は……やっぱり無いんですよ」

あの日、あれからずっと考えたけど、やっぱり俺は不幸を呼ぶ死神なんだ。

あの時だって、俺がもつとしっかりしてたら、ティアは死ななくてすんだんだ……。

「……どう……して？」

「俺は……」

そして、すずかさんにすべてを話した。

俺は本来この世界の人間ではないこと……。

未来で、大切な人を自分のせいで失ったこと……。

過去を取り戻すためにこの世界に戻ってきたこと……。

そして……今に至る自分の存在価値を。

本来なら、こんな話は一般人のすずかさんにはしてはならないことだ。

だけど、すずかさんが必死な思いで、自分の出生を話してくれたんだ。だから、本気の思いには本気の思いで答えなければいけないと思つたから……。

「俺のせいで……仲間が……大切な人が……死んでいったから……。だからまた、俺のせいで大切な人が死んでしまうから……。だから……」

その言葉を言い終わる前に……すずかさんが立ち上がって、俺の頭を自分の胸の方へ抱き寄せて……

「……すず、か……さん？」

「……大丈夫。私はフィル君のことを待つてあげるよ。そして、フィル君の帰る場所になつてあげる」

「っ!？」

\* \* \*

もうこれ以上フィル君の口から、自分をおとしめる言葉は聞きたくなかつた。

私も自分には自信がない方だけど、それでもファイル君はそれ以上に自分を傷つけすぎている。

きつとファイル君は、ティアナちゃんを失ったことで、恋人を作るのをおそれている。

だから、必要以上のつきあいはしなくなった。

それはなのはちゃん達も例外ではなく……。

だけど、そんなのはとても悲しいよ……。

それじゃいつか孤独で押しつぶれちゃうよ……。

自分の大好きな人が、これ以上心を傷つけていくのは、もう耐えられないよ……。

「……俺と一緒にいたら、ずずかさんにだって、いつか危険な目に遭うかもしれない!!」

「……ファイル君が守ってくれる」

「守りきれないかもしれないんですよ!!」

「信じてる」

「……簡単に信じないでくれよ……裏切られたらどうするんですか……」

ファイル君がうめくように言う。

私は一度、ファイル君を抱きしめる腕を解き、ファイル君に笑顔を見せる。

自分が出来る最高の笑みを――。

「ねえ……ファイル君。人を信じるっていうのはね、その結果を見返りとして求めるからじゃないんだよ？」

「……えっ？」

「だから……信じた結果は問題じゃないの」

「……」

「私はファイル君を信じる。ファイル君がその信頼に応えようとする。その、ファイル君の信頼に応えようとする意思が大切なんだよ。だから……」

再びファイル君の頭を抱き寄せて……。

「私は、ファイル君が守ってくれて、言ってくれれば、信じられるんだよ」

「俺は……もう一度、人を……愛して良いんですか……？」

「うん……。ファイル君が不安だって言うなら、何度でもこうしてあげる。ファイル君が安心するまでね」

「すずかさん……」

そして、私はフィール君を解放し、お互い立ち上がり、もう一度向き合う。

「……すずかさん、俺は、あなたが……好きです」

「私も、大好きだよ。フィール君」

「俺は……あなたを……守りたい。すべての物から……」

「うん……」

そして、私とフィール君は静かに……。

星空の空の元……。

誓いのキスを交わした……。

\* \* \*

翌日



「失礼します。ファイル・グリードです」

「ええよ。入りや」

「どうしたんや。突然お願い事なんて？」

突然のファイルの訪問に正直私はびっくりしていた。

ファイルはこんな形で突然来ることはあまりない。

大体が事前にコンタクトをとってから来ることが多い。

だからこそ、ファイルのこの行動にびっくりしていた。

「あの……本当に突然ですみませんが、一日で良いので休暇を頂けませんか」

「えっ……？」

う、嘘やろ!?

今まで散々、こちらから休暇通告をしてきても、断り続けてずっと働き続けてきた  
ファイルが!!

「そ、それはかまわへんけど、一体どうしたんや？ 突然こんなことを言い出して？」  
「あの……それは……」

ファイルが答えるのにどこかとまどいを出している。

普段ならこんなことはないファイルが……。

もしかしたら……？

「ファイル……答えにくかったらええんやけど、もしかして、休暇はすずかちゃんのために？」

「っ!？」

一瞬ファイルの表情が、はっとした。

私はそれを見てこれで確信した。

すずかちゃんは、ファイルにすべて告白したんや……。

そしてファイルも、すずかちゃんのすべてを受け入れた……。

「休暇の件はOKや。だけど、一日でええんか？」

「はい、さすがにそれ以上は厳しいと思いますから……」

こ、このワーカーホリック!!

せつかくすずかちゃんと恋人同士になったと言うのに、こんな時に一緒にいなくてどうするんや!!

すずかちゃんとファイルは世界が違うから、そう簡単にはあえへんと言うのに!!

ふふふふ……。

そんなに仕事が好きというなら……。

「そんじゃ、明日からの仕事を渡しておくわ。これに関しては拒否権は認めへんから……」

「はい、わかりました」

私はパソコンを取り出し、急いで命令書を作成する。

そして、ハンコを押し、正式な文書とし、伝令をする。

「命令、ファイル・グリード二等陸士。貴殿はこの命令書が発行された日時より、一週間月

村すずか氏と一緒に行動することを命じます」  
「えっ!？」

ふふふ。ファイル、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしとるわ。

「ま、まさか!? はやてさん……知っていたんですか!？」

「あんな……普段、休みを取らないファイルが、突然休みをくれなんて言い出すなんて、おかしいと思わないほうが変やで。それに……」

「すずかちゃんから、それとなく聞いていたし……。地球でのことは」  
「えっ?？」

元々、すずかちゃんがこつちに来たいというわけは、私たちに会うためというのもあるけど、出来たらファイルにも会ってお礼を言いたいということも聞いていた。

だから、もしかしてファイルのことを少なからず興味を持っているとは思っていた。

それに昨日、ファイルが倒れてからのすずかちゃんの悲痛な表情を見ていたら、それはよく分かる。

「そうだったんですね……」

「せやで、だから、せめてすずかちゃんがこっちにいる時だけでも、一緒にいたらんかい!!」

「はやてさん……」

「そ・れ・に」

私はわざとにやつとして、ファイルの方に詰め寄る。

「ワーカーホリックのファイルは、こんな風に仕事というカテゴリにせんと、長期で休んでくれへんからな」

「……か、勘弁してくださいよ」

「ふふつ、冗談や。ファイル、すずかちゃんとの時間、大切に使ってや」

「……はい、ありがとうございます!!」

すずかちゃん、ファイル。

私が二人にしてあげられるのは、ここまでや。

後は二人がしっかりと芽生え始めた愛を育んでや。

\* \* \*

「というわけで、今日からずかさんが帰る日まで、一緒にいることになりました」

「……はやてちゃん、完全に気づいてたんだね」

「ですね……。でなければこんな命令はしませんから」

「だね。でも、はやてちゃんには感謝かな。私が地球に帰る日まで、ずっとファイル君と一緒にいられるんだから♪」

「ですね……」

本当にはやてさんには感謝してもしきれない。

こうしてずかさんと一緒にいられる時間を作ってくれたんだから……。

「ファイル君、こうしていても時間がもつたいないよ。あと、一週間しかないんだからね」

「ですね。それじゃ、クラナガンに出て、町を案内しますね」

「うん!! 初めてのデートだね。楽しみ♪」

そうだよな……。

時間は限られてるんだ。色々考えるのは、移動しながらでも出来るしな。

こうして俺とすぐかさんは、サンダーに乗ってクラナガンに向かうことになった。サイドカーがないので、すぐかさんには後ろに乗って貰ったんだけど……。

「あの……、そんなに密着しなくても……。その……」

さつきからすぐかさんの豊かな胸の感触が、俺の背中にずつと伝わってくる。

俺も一応まがりなりに、健全な一般男子なわけで……。

「分かってるよ。ワザとしてるんだもん。いっぱい感じてほしいからね♪」

わざとだったんかい!!

全く、すぐかさんはこんな風に、俺をちよつとだけ困らせるのが好きみたいだ。

本気で困らせるわけではないけど、普段見られない一面を見ることが出来るからという……ことらしい。

「勘弁してくださいよ……」

「じゃ、その他人行儀な言葉使いを直してくれたら、やめてあげる」

「えっ？」

「だって……。恋人同士になったのに、そんな風に壁を作った話し方なんて」

「あつ……」

……。そう言えば、元々年上の人にはこんな感じで話していたから違和感がなかったけど……。

「だから、私にはティアナちゃん達と話しているように、壁……作らないでほしいな」

「すずかさん……」

「わかった……。これでいい？ すずかさん」

「ダメだよ。あと、さん付けも無しだからね」

「そ、それは……」

俺が返事にためらっていると、すずかさんがにつこりと……。



「い・い・よ・ね」

「あ、ああ……」

いまのすずかさん、いやすずに逆らうことはしてはいけないと、俺の第六感がずっと言っている。

「……す、すずか。これでいいか？」

「うん♪」

そう言つて、すずかはさらに密着してきて……。

「ちよ、ちよつと待て!? さらに密着してきてるぞ!!」

「そうだよ。これは恋人同士のスキンシップだもん。当たり前のことだよ」

「待て!! 言葉遣いを直したらやめるって言っただろうが!!」

「なんのことかな〜♪」

謀られた!!

最初から、ずずかはやめる気なんて無かったんだ。

「つたく……。でも、まっ、いいか」

自分の大切な人がこんなに笑顔でいてくれるんだ。  
それに、俺自身も温かい気持ちになるからな……。

\* \* \*

「わあ……。この指輪きれいだね」

「だな……」

私とフィル君は、クラナガンについて、真っ先に向かったのはジュエリーショップだった。

実は、恋人が出来たらペアリングをつけたいとずっと思っていた。

そこで、せっかくクラナガンに行く機会が出来たから、ジュエリーショップに行こうとお願ひしたのだ。

「これ、小さいけど、真ん中に紫の宝石が付いてるんだな。すずかの髪の色と同じだ……」

「うん。これサファイアだね。でも、無理しなくて良いよ。こんな高いやつでなくても……」

正直これは魅力的だけど、天然サファイアだけにお値段も相当高い。

「大丈夫。色んな任務をやってるから、危険手当は結構あるんだ」

「でも……」

「少しは見栄はらせて。毎回買う物じゃないんだから、ちゃんとした記念品を渡してあげたいんだ」

「フィル君……。ありがとう!!」

結局フィル君は、そのペアリングを購入してくれて、私に手渡そうとしてくれたんだ

けど……。

「兄さん、せっかく恋人と一緒にいるんだから、指輪……つけてあげたらどうだい」  
「えっ……？」

店員のお兄さんが、指輪を交換したらどうだと勧めてくれ……。

「兄さん、女の子は、こういったことがすごく喜ぶんだから、やってあげな」  
「……そう……なのか？」

「うん……。そうしてくれたら、すごく嬉しいな」

ファイル君は最初恥ずかしがっていたけど、して欲しいという……。。

「じ、じゃ……」

ファイル君は女性用の指輪を、店員さんから受け取り、私の右手をとり、その指輪を葉指にそっとはめてくれた。

「……ありがとう。大切にするね」

そして私も、同じように男性用の指輪を店員さんから受け取り、同じくフィル君の右薬指にはめた。

「な、なんか……照れるな」

「私もだよ……。でも、それ以上に嬉しいよ」

周りが私たちの事を見ていて、『熱いね』とか『お幸せにね』とか様々な声が飛んできた。

ハッと気づいたときは既に遅く、いつの間にか相当の人が私たちの周りにいた。

二人とも顔が真っ赤になっていたけど、それでもとっても良い思い出になったかな。

\* \* \*

「やれやれ……。色んな事があったな」

「そうだね。でも、私は楽しかったよ♪」

夜になり、俺たちはクラナガンのホテルの一角に来ていた。

昼間、ずっと街で遊びまくっていたから、早めに帰ろうって言ったんだけど……。さすがが、『フィル君、今日は六課に戻りたくないな』と俺に言ってきた。

その言葉の意味が分からないほど、俺も馬鹿ではないから……。

「本当に……楽しかったよ。今日は……」

「ああ……。俺もだ」

さつき俺たちはベッドサイドに座って、すずかも俺の肩に、自分の頭をコトんと乗せ、俺に甘えてきていた。

俺もすずかの長い紫の髪の毛に触れ、その感触を楽しんでいた。髪の毛に触れると、すずかも目を細めて、さらに甘えてくる。

「こんな風にいられるのは……あとわずかなんだよね」

「ああ……」

そう……。

すずかは地球の人、俺はミッドの人間。

だから、こうしていられるのはあと僅かしかない。

「フィル君……」

すると、すずかが……。

「お願い……離れていても、心が一つだって思えるように……いっぱい……いっぱい、抱いて」

「もう……止まれないからな」

「そんなことしないよ。だって、フィル君のこと……愛してるから……」

「すずか……」

「うん……」

気がつけば俺たちは、キスをしていて、最初はただ唇が触れる程度の物だった。ただ、すぐに物足りなくなり、舌を絡め合うキスになり、息継ぎを何度も繰り返して、満足したときはお互いの間に銀色の証ができあがっていた。

「フィル……くん……私……その……」

「すずか……」

すずかが頬を赤らめ、恥じらっている。

そんなすずかがとてもいとおしくなり、そして同時にもっとすずかを味わいたい。そう思った俺は、すずかの上着、そしてブラをはぎ取っていた。

「……………恥ずかしいよ」

「綺麗だよ……すずか」

「あり……がとう。フィル君にそう言って貰うと……嬉しい……」

「すずか……」



「あつ……んんんっ……そこ……いい……」

すずかの喘ぎ声は、俺の理性を溶かすのに十分すぎるぐらいの起爆剤だった。こうして自分の好きな人が、俺の手で気持ちよくなってくれる。

それだけで俺は嬉しかったから……。

「ねえ……。もう、いいよ。一つに……なろう」

「本当に良いのか？ 今ならまだ……」

「ファイル君、それは覚悟を決めた女の子に失礼だよ。だから……」

すると、すずかが俺にキスをしてくる。

「いっぱい……いっぱい、ファイル君を感じさせてね」

「そう……だな。今のは失礼だったな。じゃ……いくよ」

「うん……」

そして俺とすずかは、一つなり……。

それは、身体だけでなく、心も気持ちよくなり……。

その行為は、幾度となく繰り返され……。

俺とすずかは、離れても心がつながっていると感じられるように……。

深く……深く……。

お互いの存在を求め合った……。

\*

\*

\*

「ここで……いいのかわ？」

「うん、地球まで送ってもらったら、その後が辛くなっちゃうから……」  
「そっか……」

すずかが帰る今日、俺は六課隊舎前ですずかを送り出すこととなった。

最初は俺がワープで地球まで送ろうかと思っただけど、すずかが、それだとかえって辛くなるからと言うことで、ここで別れることになった。

「フィル……君。かならず……必ず、私そっちに行くから!! それまで、無茶しちや駄目だからね!!」

「ああ、待つてる。俺も必ず、すずかを迎えに行くから……」

六課解散後、俺はフェイトさんの元で執務官になるべく補佐官をすることになった。  
る。

執務官資格をとりさえすれば、レジアスの親父さんのコネになってしまうが、すずか

の通行許可書も発行してくれることになっている。

執務官がその責任者になることが条件なので、俺自身がとらなければならない。

フェイトさんが、代わりになってくれると言ってくれたけど、これは俺たちの問題なので、そこまでお世話になるわけにはいかない。

「ファイル君、私もこっちで一生懸命頑張ってる、ファイル君を支えられるようになるからね」「すずか……」

本当は、泣きたいはずなのに、彼女は涙をこらえて笑って別れようとしてくれてる。

俺も本当は泣きたいけど、だけど、それをしたら彼女の気持ちを無にってしまうから……。

「じゃあな……。すずか」

「うん……。また、会おうね。ファイル君」

「これは永遠の別れじゃない……」。

これは、俺たちが成長するための必要な別れ……。

だから、前を向いて進んでいこう……。

二人の未来が一つになると信じて……。

## if ending ヴィヴィオ

機動六課が解散してから10年。

六課のみんなは、それぞれの所で活躍しています。

スバルさんはレスキュー、ティアナさんは執務官になって、時々無限書庫に、資料を請求しに来ています。

ノーヴェ達、戦闘機人のみんなも、それぞれの所で働いていて、わたしも時々会ったりしています。

特にノーヴェには、ストライクアーツのことでよくお世話になっています。

わたし自身は、今は、なのはママと一緒に暮らしています。

実は、なのはママ、六課が解散して一年後にユーノさんと結婚しました。

でも、あの二人をくつつけるのに苦労したんだ。

その裏には、フィルさんが一生懸命、ユーノさんとなのはママに言ってくれたから、二人が結婚することになったんだ。

でも、あの二人は未だに、それぞれの部署で現役なもんだから、一緒になるのは一ヶ月に数回なんだけど……。

そしてわたしは、S t. ヒルデ魔法学院の初等科に入って、その後、パパの影響で、司書の資格を取って、今は、時々無限書庫で仕事をしたりしてるんだ。

なんで、司書になったかという……。

わたしは、フィルさんの事が大好きで、執務官のフィルさんを手助けが出来たらいいなって思ってたんだ。フィルさんに意識してもらいたくて、髪型もなのはママと同じ、サイドポニーにしたりしてるんだけどね。

もうすぐ高等科に入るんだから、もう少し意識してくれてもいいかなって思うんだけど……。

わたしが六課にいたころは、パパの代わりだと思っていて、初等科時代は、かつこい  
いお兄さんだな……。

そのくらいに思っていたんだけど……。

ある時、ティアナさんから、フィルさんのことを聞いて、すごいなって思ったと同時に、悲しいなって思ったんだ……。

だつて……。

自分のせいで、みんなが死んだ。

今もフィルさんは、そう思っている。

その証拠に……。

「フィルさん、このくらいの資料でしたら、私達が持ってきます!!」

「そうですよ!!」

「いいんですよ。俺も司書の資格はありますし、それに、皆さんは他の方のことで大変で



しよう。だから、自分で出来ることはやりますから……」

ファイルさんも司書の資格を持っているので、この無限書庫で調べることが出来る。だから、みんな最初は負担が減って良かったと思っていたんだけど……。

「ファイル、お願いだから、君の場合はもう少し誰かに頼ってよ……」

「あつ、どうも、こんにちは。ユーノさん」

「どうもじゃないよ。ファイル、君の場合は、任務の難易度がどつかのクロノと同じくらいの物が多いんだから、少しは人を頼りなよ……」

「結構、皆さんにお願いしまくって、申し訳ないくらいなんですけど……」

「……その台詞、クロノに聞かせてやりたいよ。あいつの請求量は半端じゃないのに、いつもキツキツのスケジュールで請求してくるからね」

「あ、あははは……」

「その点、君は、請求量は少ないし、殆ど、自分で調べてしまうからね。だから、もう少しはみんなに言つて良いから……。でないと倒れるよ……」

実際、ファイルさんは殆ど自分でしてしまふ。

こうやって、パパかわたしが直接言わないと、人に頼ることはしない。

このままじゃ、本当に倒れちゃう……。

\* \* \*

「ただいま〜」

「おかえり、ヴィヴィオ」

「えへへ♪ ママ、ただいま」

わたしが家に戻ると、ママが家に戻っていた。

今日は、ママが出張から戻ってきていて、久しぶりに家族三人がそろうのだ。

「そういえば、ユーノ君は？」

「パパなら、もうすぐ帰ってくると思うよ。フィルさんの手伝いをしてから戻るって」

「そうなんだ」

「本当は、フィルさん、家族三人がそろう日は、少ないんだから帰ってください、って言ってたんだけど、パパがフィルさんの無茶ぶりに手伝うことにしたんだ」

「……ねえ、ヴィヴィオ。フィルって……まだ……」

「……うん」

フィルさんが、あんなに無茶するのには訳がある。

それは……。

「……ママ。なんで、フィルさんはあんなに、自分を大切にしないの？ いくら何でも無

茶すぎるよ!!」

「……わたしだって、止めたいよ……。だけど、フィルの時間は、あの時から止まったままなんだよ……」

フィルさんは、未来でティアナさんの事が好きだった。

そのティアナさんを、自分のために死なせてしまった。

その事をずっと……後悔している。

「結局、わたし達じゃ、フィルのことを救ってあげられなかった……。それどころか、未だにフィルに助けってもらってばかり……。ユーノ君とのことだって……」

なのはママとユーノパパは、最初はお互いに異性としては全く意識していなかった。正確に言えば、なのはママの方だけだったんだけどね。

だけど、フィルさんが、未来でのことを話し……。

『自分の気持ちに後悔することだけは……しないてください』

その事を言われてから、なのはママは改めてユーノさんのことを考えて……。

そして、お互いに気持ちを伝えあったんだ。

フィルさんがいなかったら、二人とも良い友達で終わっていたって、よく言っている。そんなことを話していたら、パパから通信が入ってきた。

『なのは……ヴィヴィオ……』

「どうしたの？ そんな顔をして……」

今のパパの表情は、いつもと違い悲壮感が漂っていた。

なに……？

何か……嫌な予感がする……。

『……よく、聞いてくれ……。ファイルが……。ファイルが……』

パパから言われた一言は……。

『……車にはねられて……。意識不明の重体だ……』

「えっ……」

そ、そんなのうそ……だよ、ね。

さつきまで、わたしはファイルさんと楽しく会話をしていたのに……。

「ユーノ君!! ファイルの容態はどうなの!？」

『正直、芳しくない……。詳しいことはこっちで話すよ。それで、二人にはファイルの家に  
行って、着替えとかを取りに行つて欲しいんだ……。』

「……わかった。ヴィヴィオ、非常時のために、ファイルの家の鍵を預かっていたから、そ  
れでファイルの家の中に入って取りに行つてきて!!」

「うん!!」

わたしは、急いでファイルさんの家に荷物を取りに行く。

だけど、そこで信じられない物を見ることになった――。

\* \* \*

「なに……。これ……。う？」

そこで目にしたのは、何もない部屋。

正確に言えば、寝るためのベッドと、机しかなかったのだ。服とかは、備え付けのクローゼットに入っていた。

ここは、生活をする空間じゃない……。

——ただ、寝るための仮眠室。

「……こんな……こんなところで……たった一人で……」

わたしは、あふれてくる涙を抑えられなかった。

わたしは、なのはママやユーノパパと一緒に暮らしていて、三人がそろうのは少ないけど、それでも家族としての温かみにあふれていた。

だけど、フィルさんはたった一人で、この部屋で暮らしていたんだ……。

というよりも、ここはただ、寝にきている。

それだけの部屋――。

でも、今は、ここでグズグズしているわけにはいかない。  
わたしは着替えをまとめて、フィルさんの所に急いだ。

\* \* \*

「ヴィヴィオ……」

「あつ……」

聖王医療院に着いたわたしを待っていたのは、ティアナさんだった。  
ティアナさんも、パパからこの事を聞いて急いで駆けつけてくれた。



「ヴィヴィオ……あんた、ファイルの部屋に行ったわよね。あれを見て……どう思った？」  
「……」

正直、ティアナさんの質問に答えられなかった。  
それくらい、衝撃的なことだったから……。

「その反応が当たり前だと思うわ。あたしも最初見たときは、同じ事を思ったから……」  
「えっ?」

「あいつ……この10年……ずっと、一人で生きてきた。あんな部屋で10年も……」  
あたしだったら、たぶん……無理ね……」

ティアナさんが言うのはもつともだ。  
わたしだって、さつきそう思っていたんだから……。

「あたしの場合、スバルと押しかけて、あいつと一緒に、お酒を飲もうとしようとした  
時に入ったの。でも、あの部屋を見て、あたし達は愕然としたわ……」

「ファイルは……ずっと未来でのことを、後悔し続けている……。それは今でも続いてい

る……」

「あたしとスバルは、この数年、何とかファイルを助けてあげたかった。でも、逆にファイルに助けられていた……。でもね……」

そう言って、ティアナさんはわたしのことを見つめて……。

「ヴィヴィオ、フィルはね、あんたのことをすごく大切に思っていた。六課にいるときからずっとね……」

「ティアナさん……」

「もしかしたら……ヴィヴィオなら、あいつの事、救ってあげられるかもね……」

そう言って、ティアナさんは病院を出て行った。

仕事の忙しい合間を縫って、やっと来てくれたので、これがギリギリだったのだ。

本当はここにいたかったのだけど、明日から、ティアナさんは別世界に出張があるとのことだった。

ティアナさんが帰った後、わたしはフィルさんのいる病室に入っていった。

\* \* \*

フィルさんの病室にはいると、ママ達が座ってフィルさんのそばにいた。パパの話によると、フィルさんは家に戻ろうとしたとき、女の子が風船を取ろうとして、道路に飛び出してしまい、そこに車がやってきて女の子が轢かれそうになったところを、フィルさんが身代わりになって女の子を助けたのだ。

「……………どっしりまで……………どっしりまで自分を大切にしないのよ」

いつも……………いつだってそうだ。

フィルさんは、自分のことを顧みない。

身も心もボロボロになっても……………。

「なのは……………」

「ママ……………パパ……………」

「どうしたの？」

「わたし……今日……ここに泊まる……」

「ヴィヴィオ!! 駄目だよ、ヴィヴィオだって明日学校が……」

「そんなの行つてられないよ!! 大好きな人が死ぬかもしれないのに!!」

わたしはフィルさんのそばから離れたくなかった。

本当に、死んでしまうかもしれないのに、勉強なんて集中できるわけ無いよ!!

「……分かった。フィルのことはヴィヴィオにお願いするね……」

「ありがとう……パパ……」

「ヴィヴィオ……」

「ママ……」

「フィルのこと……お願いね……。本当は、わたしがしてあげなきゃいけないのに……」

「二人とも、明日も忙しいんだから、フィルさんのことは私に任せて……」

なにがあつても……後悔だけはしたくない。

例え、フィルさんが死んでしまったとしても、何もしないのは嫌だ!!

いま、わたしが出来ることをするんだ!!

二人が帰った後、わたしはフィルさんの手を取り、フィルさんの手を握りしめながら、祈り続けていた。

「……フィルさん……お願い……戻ってきてよ。フィルさんのこと好きなのは、死んでしまったティアアナさんだけじゃないんだよ……」

わたしも……フィルさんのことが大好きなんだよ……。

誰よりも……。

「フィルさんが助かるなら、わたしの命をあげても良い……だから……お願い。ティアアナさん、フィルさんを連れて行かないで……」

『——大丈夫よ』

「えっ？」

謎の声が聞こえたと思った次の瞬間……。

「う……………」

「フィルさん!!」

さつきまで意識不明だったフィルさんが、意識を取り戻す。  
わたしは急いで、看護師さんとママ達に知らせに行く。

『ヴィヴィオ。あのばかのこと……………お願いね……………』

またさつきの声が聞こえた。

やっと分かった——。

あの声は未来でのティアナさん——。

もしかして、ティアナさんがフィルさんのことを……。

——ありがとう。

\* \* \*

「はい、フィルさん。あーん♪」

「あ、あの……ヴィヴィオ……」

「なんですか♪」

「一人で……食べれる、から……」

「だめです!! 一週間前まで生死の境をさまよっていたんですから!!」

「……それとも……わたしがやるのは……嫌ですか」

俺はヴィヴィオの悲しそうな目を見てしまい、もう断ることは出来なかった。

「……じゃ、お願いできるかな……」

「はっ」

ヴィヴィオは、一生懸命おかゆをフーフーしてくれて、それを俺に食べさせてくれた。なんか……心が温かくなる……。

——いつぶりだろうな。

こんな気持ちになるのは……。

\* \* \*

「……今日は本当にありがとうな」

「えっ？ どうしたんですか」

「……俺が、未来から来たことは……知ってるよな」



「はい……ティアナさんから、全部聞いてます……」

ティアナさんから未来のことは全て聞いている。

フィルさんの後悔のことも……。

「……俺は、かつて……大切な人を失った。いや……俺の力不足のせいで、死なせてしまったといった方が良いな」

それは違うよ……。

「だから……もう二度と、そんな思いはしたくなかったし、相手にもさせたくなかった。だから、俺は、一人で生きていこうと思った……」

そんなの駄目だよ……。

一人で生きてくなんて、どうして悲しいことを言うの——。

「でもさ、今日ヴィヴィオが一生懸命……俺の世話をしてくれたとき、やっぱり……寂し

くなってしまうんだ。一人でいる辛さが思い出して来ちやったんだ……。駄目だよな……。そんなこと言ったら……」

その乾いた悲しい笑みは、もう見てられない——。  
たまらずわたしは、フィルさんに抱きつく。

「ヴィ、ヴィヴィオ？」

「……………どうして……………どうして、そんなこと言うんですか!! どうして、自分の幸せを願わないんですか!!」

「ちゃんと願っているよ……。みんなが……ヴィヴィオ達が幸せになってくれれば、それで良いんだ」

「そんなの嫌です!! わたしの幸せはフィルさんが笑顔になってくれることなんです!!  
フィルさんがそんなボロボロになって、それで、わたしが幸せなんて思えるわけ無いよ!!」

わたしが小さかったときは、ゆりかごの中からプラスターを使ってまで、わたしを助けてくれた。

そして、今も、自分を蔑ろにしている……。

こんな優しい人が、ボロボロになるの見るのなんて、もう嫌だよ。

わたしは……わたしは……。

「わたしは……フィル・グリードさんのことが大好きです……。心から……愛して、いるんです」

\* \* \*

「ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオの告白に、俺はとまどいを隠せなかった。

あの小さかったヴィヴィオが、こんな風に俺のことを思ってくれていたなんて……。

「フィルさん……ごめんなさい。こんなことを言って……」

ヴィヴィオは、告白をし終わった後、下を向いてしまい、涙をポロポロ流していた。この告白は、勇気を振り絞って言ってくれたんだよな。

いつも、無限書庫で俺の手伝いをしてくれたり……。

時間があるときは、俺の話し相手になってくれたり……。

そして……。

今回だって、重傷の俺の世話を必死でしてくれたり……。

「本当に良いのか……。俺で……。」

「フィルさんじゃなきゃ……。いやだよ……。」

「ヴィヴィオ……。」

俺は、ヴィヴィオの頬にそつと触れ……。

ヴィヴィオも、意味を理解し、瞳を閉じ……。

二人は……。

——病室の窓から夕日が差し込む中。

優しい……キスをした。

そして、それは俺の孤独が、ぬぐい去った瞬間でもあった。

\* \* \*

二週間後

「それにしても、この部屋も大分変わったよな……」

「えへへ♪」

なんで、こんな事になっているかというところ、一週間前退院した後、俺はなのはさん達にヴィヴィオと付き合うことを正式に話しに行つたのだ。

その時に、二人が……。

「よくやったね、ヴィヴィオ!! ファイルも、これで無茶しなくなるね」  
「これで僕も安心だよ。ファイルには返しきれない恩があるしね」

ヴィヴィオと付き合うことに、二人は諸手を挙げて喜んでくれた。

しかも、ヴィヴィオを俺の部屋に引っ越させることを提案したのも、この二人だったのだ。

ヴィヴィオが俺のそばにいて、体調管理もしやすくなるし、なによりヴィヴィオがそれを望んだから……。

しかも、なのはさん達に……。

『今度から、わたし達のごことはお義父さん、お義母さんって呼んでね♪』

などと、言われてしまうほどだった。

これは、結婚を前提で認められたということなのか……。。

「正直、俺は、反対されるかと思ってたんだ……」

「そんなこと無いよ。二人ともわたし達が付き合うことに、大賛成してくれたよ♪ それとも、フィルさんはやっぱり……こういうのはいや？」

「そんなことないよ……俺も、嬉しいよ。こうして、ヴィヴィオと一緒にいられるんだから……」

「えへへ♪ よかった。これから、ずっと……一緒なんだからね♪ 待っててね。今、夕食作っちゃうから」

ヴィヴィオの作るご飯は、かなりの物だ。

母親のなのはさんに、かなりたたき込まれたらしい……。

「はい、どうぞ。めしあがれ♪」

テーブルに出てきたのは、所謂お総菜料理だった。

レストランみたいな料理ではないが、俺はこういうお袋の味的な物の方が大好きだ。俺はヴィヴィオの料理を、腹一杯になるまで堪能した。

\* \* \*

「なんか……恥ずかしいね……」

「じゃ……やめるかい？」

「いやだ……。だって、フィルさんと初めて結ばれるんだよ……。やめたくなんかないよ……」

「ヴィヴィオ……」

「フィルさん……」

俺たちは、最初は唇が触れあうキスを繰り返していたけど、次第に気持ちの方も高まり、互いを求め合うような深いキスになり、終わった後は互いの間で、銀色の糸が出来るほど、求め合っていた。

「あっ……」



俺は、服の中に手を入れ、ヴィヴィオの形の良い胸に、そつと触れ……。

「やわらかいな……」

「えへへ……。他の男の人に触れられるのは嫌だけど、フィルさんなら……。いっぱい……いっぱい……。触って欲しいな……」

「そんなこと言われたら……。理性押さえられないぞ……」

「押さえないでほしいな……。だから、わたしのことを思いつきり愛してください……」

「もう……。止まれないからな……」

「はい……。きて……。ください……」

その夜……。

俺とヴィヴィオは……。

何度もお互いを求め合い……。

そして、身も心も解け合う……。

\* \* \*

「おはよう……ヴィヴィオ……」

「おはようございます……フィルさん……」

結局俺たちは、朝までお互いを求め合っていて、寝たのは二時間くらいだった。

「……夢じゃ……ないんだよな」

「そうですね……フィルさん、昨日は、その……激しかったです。わたし……初めてだったのに……」

「す……すまん……」

「いいんです……。それだけ、わたしのことを愛してくれたんですから……」

「大切にするよ……ヴィヴィオ。だから、俺のそばに……いて欲しい」

「はい……もちろんですよ」

ヴィヴィオの笑顔は、本当に俺に安らぎをくれる。  
こんな事、今まで考えなかったのにな……。

\* \* \*

「気持ちいい♪」

「こら、そんなにはしゃぐと落ちるぞ」

「大丈夫、こうやってギョツと抱きついているから♪」

俺たちは、サンダーでクラナガンに買い物に向かっていた。

これからの生活用品を買いそろえるのもあるけど、恋人同士になって初めてのデートをしたかったというのが本音かな。

それにしても――。

「ヴィヴィオ……お前、絶対わざとだろ……」

「何のことですか♪」

そんな笑顔で誤魔化しても、わかるっての!!

自分の胸を、俺の背中に押しつけて、俺の理性をガリガリ削っているし……。

「まったく……勘弁しろよな」

「そんなこと言って、本当は気持ちいいんでしょう♪」

「ば、ばか……」

「えへへ♪」

《あ、あの……相棒、どうでも良いんですけど、事故だけはしないでくださいね。ラブコメ中に事故りましたなんて、あんまりにも間抜けですので……》

《マスター、サンダーの言うとおりですよ。少なくとも、安全運転だけはしてくださいね》

「うっ」

確かにサンダーとプリムの言うとおりだ。

こんな事で事故ったら、あんまりにも間抜けだ……。

\* \* \*

クラナガンに着いた俺たちは、デパートで買い物をしたり、クラナガンで有名なケーキショップに入って、ヴィヴィオが自分のケーキを、俺に食べさせてくれたりした。

それだけなら良かったのだけど、その後ポツキーゲームをやらせられたときは、さすがに勘弁して欲しかった。

そんなこんなで町中で楽しんだ後、海が見える公園に来ていた。

「うーん、楽しかった♪」

「俺は、恥ずかしかったぞ……」

「さすがに、ポツキーゲームはやり過ぎちゃったかな♪」

「……まあ、俺も……楽しかったしな……」

「フィルさん……ありがとう……」

俺とヴィヴィオは、互いに顔が真っ赤になってしまった。  
そんなとき、ふと目に付いた露店があった。

「あれ、何だろうね？」

「行ってみるか？」

俺たちがそこに行ってみると、露店では指輪が売っていた。

ヴィヴィオは、その指輪が何なのかを知っているみたいだった。

そしてヴィヴィオは、迷わずにその指輪を買っていた。

「すみませくん。フォーチュンリングをください♪」

その瞬間、露店の主人は口笛を吹き、周囲の人たちからはちよつとしたどよめきが起こった。

(……なんだ？ 何かおかしいことでもあったのか？)

こういう事に疎い俺には、ヴィヴィオが言った『フォーチュンリング』の意味すらも分からないでいた。

ヴィヴィオは嬉しそうに露店の主人と話していた。

「お嬢ちゃん、そつちの兄ちゃんにかい？」

「えへへ♪」

ヴィヴィオは照れ笑いをしていたりして、俺はまったくついていけなかった。

しばらくして、ヴィヴィオが主人から一つの白い指輪を受け取り、そしてすぐに俺の方を向いた。

「あ、あのね……。このフォーチュンリングは……お互いの愛の証を表す物なんだ……」

「フィルさん……。本当にわたしのこと……愛してくれますか」

そう言って、ヴィヴィオは買ったばかりの『フォーチュンリング』を俺に差し出した。

「……ああ……誰よりも……愛してる。俺に、人を愛することを、もう一度思い出させて

くれたヴィヴィオを……心から……愛しているよ」

周囲に見物人がいるのが気にはなったが、それでも俺は返事をして、ヴィヴィオから指輪を受け取った。

その瞬間、周囲の見物人達が、大いに盛り上がり、祝福の言葉を掛けられた。

(……ん？ この指輪?)

受け取った指輪を見て、俺は首を傾げた。

ヴィヴィオからのプレゼントと思われたその指輪は、明らかに女性用のものだった。

(これを……俺はどうすれば?)

そんなことを考えていると、露店の主人が声を掛けてきた。

「なにしてんだ、あんた。その子の告白を……受けたんだらう?」

「え……あ、はい」



「だったら、こっちにリングを渡しな」

「えっ？」

俺が訳分からなくなっていると、ヴィヴィオが助け船を出してくれた。

「フィルさん、その指輪を露店の人に渡してください」

「あ、ああ……わかった」

とりあえず、俺はヴィヴィオの言うとおり、指輪を店の人に渡した。

「もしかして……あんた知らないのか？」

「はい……実は……」

「この指輪はな。女性からその指輪と一緒に愛の告白をされて、それを受け取ったとき、告白を受けたということになるんだ」

「それでヴィヴィオは……」

「そういうことだ。そして、告白を受けた男性は、今度はこの指輪に互いの名前を彫り、愛の証にするんだ……」

「彼女のこと大事にしてやれよ……兄ちゃん」  
「……はっ」

そして俺は、店の人から、フォーチュンリングを受け取り、それをヴィヴィオの左薬指にはめた。

それを受け取ったヴィヴィオは、ふにやつとした笑顔になった。

「フィルさん……幸せにしてくださいね……」

俺たちは、人前だったが、ここで誓いのキスをする。

孤独だった俺に、もう一度愛することを教えてくれたヴィヴィオ……。

そんな彼女を、俺は一生かけて護りたい……。

それが、今の俺の幸せなのだから……。

## i f e n d i n g   アインハルト

「……………んっ」

模擬戦が終わって、身体もくたくたになって、さつきまで思いっきり眠っていたのに、今はヴィヴィオさん達の話を聞いて、まだ見ぬ強い相手がいると知って、心が沸き立つのを止められない。

そして……………。

「……………ファイルさん」

あの模擬戦——。

最後の乱戦で生き残った私とヴィヴィオさん、そして、ティアナさんとファイルさん。それぞれ、最後の気力を振り絞って戦った。

結果は両軍引き分けになって、決着付かずにってしまった。

その後も2連戦をしたんだけど、フィルさんは最初の一試合だけで、あとはサポーターに回ってしまつて戦うことは出来なかつた。

「……できれば……戦つてみたかつたな」

皆さんが言うフィルさんの本当の強さ。

それが何なのか——。

ふと、窓の外を見ると、そこには……。

「あれは……?」

ロッジの庭で、一人月夜を見ていたフィルさんの姿だつた。

私は、なぜかその姿が凄く気になり、そつと外へ抜け出した。

\* \* \*

「やれやれ……久し振りの模擬戦だつたからな。完全にしてやられたよ」

《確かに現役の頃のマスターでしたら、もう少しやれてましたからね》

—— ゆりかご事件。

あの時の傷は、まだ完全には癒えていない。

自分の限界を超えて、無茶しまくった代償は、安くはない。

「そうだな……。でも、今回の合宿は、ヴィヴィオ達にとっても良い経験になったと思う」

《ですな……。ヴィヴィオ達もそうですけど、特に》

「ああ……。今回、アインハルトを連れてくることが出来て、本当に良かった。ヴィヴィオ達に触れることによつて、今じゃ……。最初にあつたときとは違う良い眼をしてる」

最初にあつたときは、ノーヴェと一緒の時。

あの時は、只ひたすら、霸王流の強さを証明するだけに、ストリートファイトを繰り返していた。

だけど、その出会いがきっかけになつて、ヴィヴィオ達とも友達になり、あいつらの

純真な心がアインハルトの気持ちの変化につながった。

《でも、相変わらずマスターは、損な役割ばかりしてますね。そう言った思いを自分の口で言つてあげれば……》

「……そういうのは、ノーヴェやヴィヴィオの役割だ。俺は、ほんの少し背中を押すくらいで良い。それに……」

あいつらの真つ直ぐな思いは、アインハルトの頑なな心を、少しずつだけ溶かして行っている。

「俺は……アインハルトに……何も教えてあげるとは……ないから……」

ガサ……ガサ

「!? 誰だ!!」

俺は、物音がする方向へ行つてみると、そこには――。

「……ファイルさん」

エメラルドグリーンの長い髪、そして虹彩異色の瞳の少女。  
アインハルトの姿だった。

\* \* \*

「どうしたんだ？ 眠れなかったのか？」

「……はい、目が覚めてしまって……。その……」

外に出た私は、フィールさんの姿を見て声をかけようとしたんだけど、あの時のフィールさんの憂いに満ちた表情——。

その表情を見てしまった私は、どうしても声をかけることが出来なくなってしまい、その場で立ちつくしてしまっていた。

さらにさつきプリムと話していた会話——。

あの話を聞いてしまい、私はうれしさと、そして申し訳なさでいっぱいになってしまった。



「そっか……」

きっとフィルさんは、私が盗み聞きをしてしまったことに気がついている。  
私の気配に気がつかないほど、この人は鈍感じやない。

「聞かないんですか……。私が……。その……。さっきの……」

「んっ？ ああ……。気にするな。ここで俺が勝手に言っていたことだ。まあ、聞かれた  
ついでに言っておくけど……」

そう言つてフィルさんは、さっきとは違つて優しい眼をして――。

「本当、お前は良い眼をするようになった……。純粹で……。真つ直ぐな瞳にな……」

「フィルさん……」

「アインハルト、以前俺はお前に聞いたことがあったよな。『お前にとつて、強さつて何  
だ？』つて……」

「はい……」

前にフィールさんに聞かれたこと。

あの時はその意味が全く分かっていなくて、答えることが出来なかった。

「改めて聞くけど……。アインハルトにとって強さって……。何だ」

だけど、今なら――。

「私にとって……。強さは……」

――きつと、答えられる。

霸王の記憶にとらわれた私じゃなく、アインハルト・ストラトス本人の答えが!!

「この力は、誇示する物じゃなく、優しい人を……。自分の大切な人を護るための物……」

フィールさんやノーヴェさん、そしてヴィヴィオさん達と触れ合い、そのことがやっと分かった。

きっと、記憶の中のクラウドも、国民を、そしてオリヴィエ聖王陛下を護るために、その力を使っていたんだ。

「ああ……お前の力は、決して人を傷つける物なんかじゃない。だけど、もう一つだけ言っておくよ」

「えっ？」

一体、他に何があるって言うんだらう？

そう思っていた。だけど、次のファイルさんの言葉は、私の中にあつた疑問を氷解することになる。

「……アインハルトが求めたいのは、きつと何かをする強さじゃない。己自身を高めていく強さ、どちらかと言ったらそっちだと思う。現に……」

「インターミドルの話聞いて、高揚感が止まらないだろ」

「!!」

そうだ——。

インターミドルの話を聞いたとき、心が沸き立つのが抑えられなくなっていた。それは、ストリートファイトでは得られなかった満足感。

「やっぱりな……。その顔を見ればわかるさ……。よかつたな……」

「……はい!!」

「インターミドルに出場するには、デバイスが必要になってくる。真性古代（エンシエン）ベルカのデバイスは、かなり難しいけど……絶対に俺が作ってみせる。デバイスマスターの名にかけてもな」

「……ありがとうございます」

私は嬉しくて涙が止まらなくなっていた。

出会ったとき、あんな酷いことをしたのに……。

それでも、この人は何度も私に話しかけてくれて、ヴィヴィオさん達と友達になれるきっかけを作ってくれた。

今回だって、こうして合宿に誘ってくれて、いろんな事を学ぶチャンスをくれた。

「一つだけ……聞いても……良いですか？」

「んっ？ 何だ？」

「どうして……フィルさんは、私に……こんなに優しくしてくれるんですか？」

普通だったら、見ず知らずの私にあんなにすることは無い。

フィルさんにとって、何もメリツトなんか無いんだから。

フィルさんは顎に手をつけて、少しの間考えて――。

「そうだな……。あえていうなら……」

さつき見せてくれたとても優しい笑みで――。

「どこか……昔の俺に似ていたんだよ。あの時のおまえは……」

答えてくれた。

「似て……いたんですか？ あの時の私は……フィルさんに？」

「まあな……。無茶をしまくって、目的が見えて無くてさ……。なによりあの寂しい眼

……。あのままにしたら駄目だ。そう思ってたな……」

確かにそうだ——。

もし、あのままストリートファイトを続けていたとしても、今のような答えは見つからなかった。

何より、きっと私は今でもひとりぼっちだった。

「さっきも言ったけど、むかし、俺は無茶しまくって、色んな物を失っていった。それこそ……取り返しの付かない物もな……」

フィルさんの顔を見ると、本当に悲しい眼をしている。

以前、ティアナさんが語ってくれたフィルさんの過去——。

きっとそのことなんだ——。

「だからこそ……アインハルトには、俺の二の舞になつて欲しくなかった。無茶したつて得られる物なんか……何も無いんだから……」

「フィルさん……」

ファイルさんがこうして優しくしてくれるのは、本当に嬉しいです。だけど、それは同情だけなんですか？

「あつ、それと、誤解してるかもしれないけど、決して同情なんかじゃない。俺はそれほど甘くはない。自分でちゃんと考えられる女の子だつて思ったからやっただけだから……。まあ、あえて打算を言えば……」

ファイルさんは、今度はちよつとおちやらけた表情になつて——。

「とつても可愛い女の子だなんて、おもつたからかな」

「な、な、な、何言ってるんですか!! わ、私なんて……」

いきなり何を言い出すんですか!!

そんな風に言ってくれる人なんて、今までいなかっただのに!!

「充分可愛いと思うけどな。将来性も十分だしな……」

「あ、ありがとうございます……ごさいます……。その……ファイルさんも……充分……か、格好いい……です……よ」

「お、俺か!? 俺は……人並みだぞ。取り柄もそんなに無いし……」

こ、この人は……。

ヴィヴィオさんやなのはさん達が言つてた通りの人なんですな。

他人の悲しみとかには敏感なんですけど、自分の事は大したことがないって蔑ろにしたりする。

おまけに自己評価が恐ろしく低いとも――。

あの……。

それだけの強さを持っていて、心の強さもあり、デバイスマイスターや執務官資格まで持つていて、どこが人並みなんですか!!

「ファイルさん、過大評価は駄目ですけど、過小評価はもつと駄目だと思います!!」

今はつきりと分かった。

私はファイルさんに惹かれ始めている。



フィルさんは、きっと私のことは妹くらいにしか思っていないと思う。

だけど、私のことをちゃんと女の子としてみてくれたのは、フィルさんだけ。

霸王としてでなく、一人の女の子として。

フィルさん、今はあなたに追いつけていませんが、いつかきつと貴方に、ちゃんとの思いを伝えたいです。

あなたが好きだつて言う気持ちを……。

\* \* \*

「はい、ルールー、フィル、お久しぶりやな」

「八神司令、お久しぶりです」

「どうも、お久しぶりです」

翌日、俺とルーテシアは、アインハルトのデバイスを作るために、真性古代ベルカのことと協力してもらうために、はやてさんに連絡をとることにした。

「話は昨日のメールで分かってるけど、どんなのがええか決まってる？」

「あ、はい……」

「装着型とか、武器型とか、何でも相談に乗るよ!!」

「えと……その、格闘戦技だけで戦いたいので、武器型ではない方が……」

確かに、アインハルトの格闘スタイルだったら、変に武器とかは付けられない方が良くもな——。

「そーかー。格闘家さんやもんねー。ほんなら、身体の動きを阻害するような装着型も良くないかな？」

「ですから、その、この子のような補助・制御型がいいなと」

「なるほどなー。ほんならクリスの性能をベースに、真正古代（エンシエント）ベルカのシステムで組むのがええかな」

「そうですね。それでしたら、俺も協力することが出来ますからね。基礎設計は俺が担当します」

後は、はやてさん達に、ベルカ式のプログラムと調整の方をしてもらえれば何とかな

る。

「そやね。ほんならアインハルト。霸王の愛機、まずは軽く取りかかってみるな。八神はやてとファイル・グリードがノリノリで組んであげるよ」

「ありがとうございます!!」

「まあ、詳しい話も聞きたいから、合宿が終わったら、ファイルと一緒に、一度、家か本局に遊びにおいで!!」

「はい」

これで、アインハルトのデバイスの問題は何とかかなりそうだな。

合宿が終わったら、基礎ベースを作って、はやてさんに渡しに行かないとな——

——。

「そやけど合宿ええなー!! うちらもまた行きたいなー!!」

「またいつでもいらしてくださいー」

「そうそうファイル。こっちに來るとき、ファイルの手作りケーキよろしくな♪」

「了解です。後でリクエストをメールで送ってください」

さてと、これから忙しくなるぞ——。

作るからには、セイクリッドハートを上回るデバイスを考えてみせる。  
後は、使う本人の技量次第だ。

\* \* \*

「……ちよつと早く着きすぎてしまいました」

今日は、八神司令からデバイスを頂ける日。

ファイルさんと一緒に来てくれと言うことだったので、近くの駅で待ち合わせをするこ  
とになったんだけど——。

やっぱり30分前は早すぎたかもしれませぬ。

私は近くの広場で時間をつぶそうとしたとき……。

「おっ、早かったな」

すでにフィルさんは、近くのロータリーで待っていてくれていた。

「い、いつから来てたんですか!？」

「えっ? 今来たばかりだけど?」

絶対にあり得ない!!

ロータリーから、車やバイクの出入りは来たときからずっと見ていたけど、フィルさんが入ってきた気配は全くなかった。

《はあ……相棒はこういつてますが、アインハルトさんのことを待たせたくないって言つて、実は1時間前から来ていたんですよ》

「ったく……。言わなくて良いことを……」

「すみません……。フィルさん、私よりも早く来ていてくれてたんですね……」

「そんなの気にするなつての。この近くに用があつたんだから、少しでも早く来ていただけだから……。それよりも、ほら!!」

「わ、わわっ!?!」

そう言つてフィールさんは、私にヘルメットを投げ渡す。

「行こうか……。お前の相棒に会いに……。な」

「はい!!」

フィールさんは、自分の愛車『ロードサンダー』のエンジンをかけ、何度も空ぶかしをしていた。

私もフィールさんの後ろに座つて、しっかりとフィールさんに抱きつく。

前に乗せてもらったときは、何も意識していないときだったから、普通に乘れていたけど、今はその……。

男の人つて意識し始めていますから、緊張してしまふんです!!

「安全運転はするつもりだけど、落ちないようにしっかりと捕まってるよ」  
「は、はい!!」

やっぱりフィールさんの背中つて、大きいです。

大きさとかもそうなんですけど、こうしてると安心します。

しばらくバイクに乗っていると、海岸沿いに一つの大きな家が見えてきました。

\* \* \*

「さて、そんなわけでー。約束の霸王の愛機が完成したんで、お披露目&お渡し会とゆーことで」

「わー!!」

「は、はいっ!!」

「いやーなかなか楽しいデバイス作りだったですよー」

「お任せしてもらおう範囲も広がったしな!! 気に入ってもらえつと良いんだけど」

基本ベースは俺が作ったんだけど、後のことに関してはすべて八神家のみなさんにお任せした。ベルカ式に関しては、はやてさん達の方が知り尽くしているからな。

はやてさんとリンさんがA Iシステムの仕上げと調整を、外装をアギトがしてくれている。

「ファイル、ほんまにお疲れ様や。この短時間でベースをつくってくれたんやから……」  
「いや、これは本当は俺がやらなくちゃいけなかったことですから。はやてさんの方が忙しいのに……」

「ファイルには六課時代からお世話になってたからな。こんくらいはさせてもらうで。何しろ普段は人を頼ってくれへんし……」

「あ、あはは……」

そんなに俺って、一人で全部やってしまう方かな？

六課の時だって、皆さんにはお世話になりっぱなしだったのに——。

「外見は、あたしなりにモチーフやベースを考えてさ。ヴィヴィオやルールーに連絡して、シュトウラの歴史を調べてみて作って見たんだ」

「そう、クラウス陛下って、豹を飼ってたって話を聞いてな」

「あ……はい。雪原豹はシュトウラ地方では、優秀な兵士でしたから……。クラウス達も大切にしてみました」

それは初耳だ。こっちはデバイス本体を作るのに精一杯で、その辺のことは全く考え



る時間がなかった。

「そんなわけで、シウトウラの雪原豹をモチーフに作ってみたんだ!!」

「ちよつとまで。豹だと大きくないか？」

「そのへんはノープロブレム。リインツ!!」

「はいです!!」

「アインハルト、開けてみてー」

はやてさんに促されて、アインハルトが箱を開けてみると、そこには……。

(ね、猫?)

豹とはほど遠い、かわいらしい豹柄の子猫が入っていた。

\* \* \*

「えええつ? なんだ今の二人の心の声!?!」

「もしかしてイメージと違ってましたか？」

「いえ、そんな……」

「はやてさん……これ……」

「いや、ぬいぐるみ外装は、ちよつとしたおちやめやつたんやけど、性能はちゃんと折り紙付きつきやで」

私が困惑していると、箱の中の子猫が、もぞもぞと動き出して――。

《にゃあ♪》

「あっ……」

「触れてあげて、アインハルト」

私はその子猫を抱き上げると――。

ああ……。

温かいんだ……。

ホントに生きてるみたいだ。

「こんなかわいらしい子を、私が頂いてよろしいんでしょうか？」  
「もちろん！」

「アインハルトのために生み出した子ですから!!」  
「そういうことだ。受け取ってくれ、みんなの気持ちをな……」

八神家のみなさん、フィルさん、本当にありがとうございます。  
このデバイス大切にします——。

「マスター認証がまだやから……。よかったら名前つけたげてな」

「はい」

「認証は庭でやるですよ」

私は認証をするために、子猫型デバイスを抱いて外へ出ることになった。  
ふと私はあることを思い出す。

オリヴィエ聖王女陛下が、特に気に入ってらしたつがいがいたつけ。気の早いオリヴィエ陛下は、いつも子が生まれる前から名前を考えてくれていて……。

クラウスとオリヴィエ陛下の最後の年——。

生まれてくることが出来なかった子がいて、あの豹の子にはなんて名を送ろうとしていたんだっけ。

——思い出した。

二人が好きだった物語の主人公。

勇気を胸に、諦めず進む小さな英雄の名前。

「個体名称登録——」

「あなたの名前は『アステイオン』。愛称（マスコットネーム）は『ティオ』」

《にゃあー♪》

「アステイオン——セットアップ」

私はアステイオンを起動させて、バリアジャケットを展開させ、戦闘モードに切り替ええた。

うん。以前と全く変わらない変身が出来ている。

「んっ？　アインハルト、お前、髪型変わっていないか？」

「あ、そう言えば」

ふと髪に触れてみると、このモードの時は髪飾りで止めていただけだったんですが、変身前と同じ髪型になっている。

「うん、そっちの方が似合ってる」

「そ、そうですか……」

あんまり意識していなかったのですが、フィルさんに褒められると、やっぱり嬉しいです。

「さて、ほんなら、ちょこちょこつと調整をしてみようか。フィル、お願いするで」「了解です」

フィルさんは、空中にディスプレイをいくつも展開して、高速でプログラムを最適化していた。

あれだけの情報を即座に理解して、すぐに最適な状態に仕上げられるなんて――

「。やっぱりこの人は凄いです。」

「さて、終了だけど、これは……すごいな。この相性は、10年来使ったデバイスでもそうはでないぞ」

「確かに凄いですねー。シンクロ率もバッチリです!!」

「せやな。これは大したもんやで!!」

フィルさんにディスプレイを見せてもらって、説明を受けると、かなりのシンクロ率を叩き出していた。

確かにセットアップしたとき、凄く馴染んでいるって感じたけど――。

「アインハルト、俺たちがやってやれるのはここまでだ。後は、アステイオンを成長させるのは、お前達しただい」

「はい!! 本来にありがとうございました!!」

こうして私はデバイスを頂き、ヴィヴィオさん達と一緒にインターミドルに向けて猛

特訓を繰り返した。

ヴィヴィオさん達は、それぞれコーチが付いて基礎訓練の見直しから、私はフィルさんがコーチに付いてくれて、基礎訓練の他に出場経験者とのスパ―を中心に行っていた。

二ヶ月後――。

私達は、以前とは比べものにならないくらいレベルアップすることが出来、予選会は全員突破することが出来た。

だけど、やっぱり世界の壁は厚く、次々と敗退していったチームナカジマ。

そして最後の一人だった私も、世界王者のジークリンデ・エレミアさんの前に――

＊ ＊ ＊

試合後 夜

「……負け……ちやいました」

「相手は世界王者だ。今のお前達では……まだ無理だ」

「……はい」

——それは分かってました。

パワーもスピードも、レベルが違いすぎた。

今の私では、絶対に勝つことが出来なかったことも——。

「でも……でも……勝ちたかったです!! フィルさんが……私のために……あんなに

……して……くれたのに」

「……私……わたし……」

——もう、涙が抑えきれません。

悔しくて……悲しくて……。

一人でいたとき、あの時は負けたとしても、こんな気持ちになることはなかった。

だけど、自分の大好きな人が、あんなに一生懸命に応援してくれたのに、私は何も出



来なかった。

きつと今の私の顔は涙でボロボロです——。  
大好きな人にこんな顔は見られたくなかったです。

そう思っていたら——。

ファイルさんが黙ってギュッと抱きしめてくれていた。

決して何かを言う訳じゃない。

だけど、今は黙ってファイルさんの胸を貸してくれることが、何より嬉しかった。  
気がついたら、私は……。

ファイルさんの胸の中で、思いつきり泣いてました。

\* \* \*

「さて、そろそろ戻ろうか……」

フィルさんが時計を見て、そうつぶやく。

確かにもう21時を過ぎてしまっている。もう戻らなければ行けない時間。

「……」

「……」

私は、フィルさんの服の裾をつかんで引き留めていた。

本当なら帰らなきゃいけないことは分かっている。

「えっ、あつ……」

私は慌ててフィルさんの服の裾を離れた。

「……」

「……」

「……俺じゃ頼りにならないかもしれないけど、聞くことなら……できるから」

この人は、私の思いに気がついてくれていたんだ。

人の思いに敏感なフィールさん——。

いつもそうだった。

私が辛くなったり、悲しくなったとき、して欲しいことをいつもしてくれた。

嫌われたって良い——。

伝えよう——。

このぶつきらぼうだけど、本当に優しい人に——。

「……わ、私……わたし……あなたのことが……好き、です」

でも、きつとこの思いは届かない——。

だって、私とフィールさんは年も離れすぎているし、何より——。

「フィルさんはティアナさんのことが——好きだから。」

「ありがとうな……」

「えっ……？」

「俺も……お前のことが……好きだよ」

——う、嘘ですよね。

「フィルさんが私のことを好きだなんて——」。

「で、でも、フィルさんはティアナさんのことが……」

「ティアは……確かに大切なパートナーだよ。けどな……」

「俺は……好きでもない女の子と……こうして一緒にいることはしないぞ」

「フィル……さん……」

——叶わないと思っていた。

私の思いは、フィールさんには絶対届かないと思っていた。

でも、フィールさんは私のことを見ていてくれてたんだ——。

「……あの……お願いが……あるんです」

「なんだ？ 俺で出来ることなら……」

だから、私も一歩踏み出そう。

フィールさんと本当の恋人になるために……。

「……キス……してくれませんか」

「良いのか……。俺じゃなくても……お前なら、これからもっと良い奴が……」

「それ……今更です。それとも、好きって言ってくれたのは、うそ……なんですか」

私の頬にフィールさんの手が触れる。

その温かさは、私の心を優しく包んでくれ……。

そして——。

私とフィルさんは……。

——誓いのキスを交わす。

\* \* \*

4年後

「それにしてもアインハルト、料理がうまくなったよな」

恋人になった当初、私はお料理があまり得意ではなく、はつきり言つてヴィヴィオさんよりも出来なかった。

でも、やつぱり好きな人には美味しいものを食べてもらいたい。

私は、必死でなのはさんやフェイトさん、あとはコロナさんにもお料理を教えてもらい、やつとフィルさんに喜んでもらえるようになった。

フィルさんは、最初から美味しいよつて食べてくれましたけど、でも、私の料理を

食べて笑顔になってくれるのを見ると、私も嬉しくなるんですよ。

「やっぱり、大好きな人には、美味しいものを食べて欲しいですから……。そう言っても  
らえるのは嬉しいです」

私がフィルさんにしてあげられるのは、これくらいです。

いつも、フィルさんは、私のためにトレーニングメニューやテイオのメンテナンスを  
してもらったり、その他にも学校の勉強もお世話になっています。

本当は、もっと私がフィルさんのことを支えてあげなきゃいけないのに——。

「本当、アインハルトは俺にはもったいない女の子だよ……」

「そんな……。私は、何も……。出来てないです」

「それは違うよ。この4年、俺だって苦しいことや辛いことは沢山あったよ。でも、お前  
が一緒にいてくれて、一緒に考えてくれたりしてくれたから、俺はここまで頑張れたん  
だ……」

———  
苦しみや悲しみは、二人で半分には。

そして、楽しみも一緒に——。

それは当たり前のことだと思えます。

私は、あなたにそのことを教わったんですよ——。

「……私は、もつと……あなたのことを……愛したいです」

「アインハルト……」

「だから……」

「……私を……抱きしめて……ください」

フィルさんは、驚いていたけど、私が本気だとわかり——。

「……そういう台詞は……本当は俺が言わなきゃいけないんだよな。女の子に言わせるなんて……本当、だめだな……」

「でしたら、いっぱい……いっぱい愛してください」

私達は、どちらからともなくキスをする。

それは、今までとは違い触れあうキスではなく、互いの存在を求め合うキス。



息が続く限り、それは幾度となく繰り返され……。

唇が離れる度に、銀色の糸が出来ている。

「んんっ……はぁ……んんっ……」

私はベッドに押し倒され、そのままフィルさんに身を任せる。

ブラウスとスカートが脱がされると、フィルさんは私の胸を幾度となく触れ——

「あ……ん……ふぁ……」

——そのまま、快樂へと溺れていく。

愛する人に触れられるだけで、こんなにも心が満たされるんですね。

そして私もフィルさんも、何も纏わない姿になり……。

「……お願いです。私を……あなたのものに……してください」

「ああ……だけど、アインハルトは物なんかじゃない。俺の……愛する大切な女の子だ

よ」

「フィールさん……」

その言葉に、私は嬉し涙を流していた。

「私も……私も……愛しています。あなたのことを誰よりも……愛しています」

——この日。

私達は身も心もひとつになり——。

私は本当の意味で、フィールさんと愛し合いました。

\* \* \*

「んっ……んんっ……」

もう朝なんですね……。

あれから、結局幾度となく、私を求めてくれて、そのたびに私もフィルさんを求めた。

その証として――。

「付いちゃって……ますね」

――首筋に付いたキスマーク。

他の部分はまだ消えかけてるんだけど、この首筋に付いたキスマークだけはくつきりと残っている。

「……もう……ばか」

――なんか、私だけってのは悔しいです。

だから……。

「んっ……」

私と同じ位置に、くつきりとキスマークを付けちゃいました。きつとこれを、ティアナさんやスバルさんが見て驚きますね。でも、フィルさんは私の彼氏さんなんです。

これはその証です。

フィルさん、私、もつと頑張りますから、ずっと一緒にいてくださいね。

\* \* \*

「ほら、到着したぞ!!」

学校に到着して、私達はヘルメットを取り、私はフィルさんにお借りしていたヘルメットを渡した。

「ありがとうございます。わざわざ学校まで……」

その後、フィルさんが、ロードサンダーで学校まで送ってくれるって言うてくれて、最

初は申し訳ないのでお断りしたんですけど、遠慮なんかしないでくれって言ってくれて、お言葉に甘えて送ってもらいました。

「気にするなって、当たり前だろ。恋人なんだし……」

「それじゃ……行つてきますね」

「ああ……行つてこい」

私は急いで門に行こうとしましたが、肝心なことを思い出し、ファイルさんの元へ戻り

。

「どうした？ 忘れ物か？」

「はい。大切なことを忘れていました」

そして――。

「んっ……」

私はフィルさんの頬にキスをする。

本当は唇にしたかったんですけど、さすがに恥ずかしくて、人前ではこれが精一杯です。

でも、恥ずかしがりの私が頑張ったんですから――。

「ああああっ!!」

い、今の声って……。

明らかにヴィヴィオさん達ですよね――。

ど、どうしましょう!! 私、かなり大胆な行動しちゃいました!!

絶対に放課後、私達二人とも、皆さんに突っ込まれます。

――結局、その後。

私とフィルさんは、ヴィヴィオさん達に放課後に呼び出されて、校門前のキスのことや、さらに首筋のキスマークまで見つかってしまい、ティアナさんやスバルさんまで巻き込んだの大騒動になり、しばらくの間、皆さんに突っ込まれまくったのは言うまでも

ありません。

教訓：大胆なことをするときには、周りを確認しましょう。  
そのことを痛感した出来事でした。

## i f e n d i n g コロナ

「つたく……よりによってこんな時に」

《愚痴りたい気持ちは分かりますよ……》

コロナとアインハルトの直接対決の当日、俺は本来ならなのはさん達と一緒に二人の試合を見に行く予定だった。

だが……。

急遽シャーリーさんから緊急通信があり、どうしてもやって欲しい仕事を頼まれてしまい、そちらに行かなくてはならなくなった。

《マスター、サンダー、コロナ達の試合の様子は、私が責任を持ってそちらにライブ中継します。何かあったらその時は……》

「ああ……仕事の途中でも、絶対に抜け出してくるさ。だから頼むぞプリム!!」

コロナとアインハルト。二人とも実力はあるし、ノーヴェがセコンドに付いているか



ら危険なことは無いと思う。

———  
 だけど———。

もし、コロナがあの技を使うことになったら———。

《マスター……》

「……今は、ノーヴェを信じるしかないな」

コロナ、早まるんじゃないぞ。

あんな危険な技なんか使わなくなつて、お前は充分に強いんだ。

\* \* \*

『ア……アインハルト選手、ゴーレムを粉碎ツ!! 一方、コロナ選手は墜落ダメージも追加!! ライフも危険域———!!』

『倒れた後輩を静かに見守るアインハルト選手———!! その旨に去来するのは、先輩としての誇りか、勝利への確信か!?!』

序盤戦、コロナはゴーレムをうまく使い、アインハルトと互角に戦っていたけど、アインハルトはゴーレムの動きを見切り、空破断と破城槌の連携攻撃でコロナをリングアウトさせた。

コロナ・ティミル    L I F E    1 1 0 0

「ノーヴェ!! コロナお嬢様は——」

「騒ぐな!! まだ終わりじゃねえ!!」

《ええ……コロナはまだ、心は折れていません。まだ大丈夫です!!》

筋力、体力、魔力量——。

確かにその辺に付いちや、あいつは4人の中じゃ一番目立たねえ——。  
だけど——。

「コロナには、ピンチの時にも崩れない冷静さがある。勝つための戦術を組み立てる知性もある」

ましてやファイルがずっと付きつきりで戦術の指南をしたんだ。

あいつの知性と発想力は、4人の中でもナンバーワンだ。

「でも、あんな状態じゃもう——」

「確かにな。……だが、まだ武器は……残っている」

《!! ノーヴェ、まさか!?!》

「プリム……いつでも連絡できるようにしてくれ」

\* \* \*

『リングイン ファイト!!』

ずっと————思ってた。

St. ヒルデの一年生になって、ヴィヴィオと出会って友達になって——。格闘技をやってるって聞いて、ずいぶんびっくりしたつけ——。

一緒にいたいから一緒に練習するようになって、格闘技が好きとか嫌いとかは正直よく分からなかったけど——。

わたしが格闘技や魔法戦競技をやめちゃったら、ヴィヴィオと友達でいられなくなる

気がして――。

本当はね――。

ヴィヴィオみたいには上手くできなくて――。

楽しくなくて――。

もうやめようかなって思ったこと何度もあったけど――。

そんな時は――。

ノーヴェ師匠が……そして……

フィルさんがいつも励ましてくれたし、導いてくれた。

格闘技が大好きで、いつかママを守るくらい強くなりたかって話すヴィヴィオはいつも素敵で――。

春光拳と炎雷魔法をもつとマスターしたいって頑張ってるリオは、格好良くて頼もしくて――。

ご先祖様の意志を継いで、本当の強さを手に入れたって一生懸命なアインハルトさんは凄く立派で――。

わたしはそんなチームの一員として、恥ずかしくない選手でいたくって、後もう少し

みんなと同じ目線で――。

同じ速度で歩いていきたくて――。

だから――。

『コロナ選手棒立ち!! これは棄権か――!?!』

痛くても使うんだ――。

この拳にわたしの思いをのせて!!

「ネフィリムフィスト!!」

わたしのカウンターアッパーは、アインハルトさんの顎を捉え身体を宙に浮かせる。

さらに!!

「はあああああああ!!」

追撃の蹴り――。

これで決める!!

私の放った蹴りは、アインハルトさんの身体を確実に捉えた。

『コロナ選手、カウンターアッパーからの回し蹴り!! アインハルト選手ダウンですつ!!』

『アインハルト選手動きません!! 1ラウンド残り15秒、ここで決着となるか?!』

ネフィリムフィストが上手く作動してくれた。

これで決まってくれれば——。

『ああっつと!? アインハルト選手立ち上がるか!?!』

『立ち上がった!! カウント8!! しかしダメージは甚大!!』

アインハルト・ストラトス

DAMAGE 4230 LIFE 970

クラッシュエミュレート：中度脳震盪、視界混濁

(立ち上がってきた!! でも、ダメージはかなり与えられた)

このまま一気に押せば、アインハルトさんに勝てる!!

(残り10秒、創成している時間はない。ネフィリムフィストで押し切ろう!!)

\* \* \*

「あの……ばか。ネフィリムフィストを使ったのか!!」

《はい。1라운드의最後に追い込まれて……》

ネフィリムフィストは身体自動操作。一見使い勝手は良いように感じるが、はつきり言つてあの技は危険行為だ。

かつて、俺も格闘戦のスキルを得るために、こいつを使ったことがある。

———  
だけど

「プリム、急いでそっちに向かう!! ワープのサポートを頼む!!」

《駄目です!! ゆりかこの傷が元でワープは使えなくなつてしまつてるんですよ!!》

4年前のゆりかご決戦。

あの時の無茶のせいで今も俺の身体をむしばんでいる。

「だけど。このままじゃ本当に取り返しが付かないことになってしまう。いくらクラツシユエミュレートとはいえ、心まで壊れてしまったら、コロナは二度と立ち直れなくなってしまう!!」

サンダーでかつ飛ばしても、ここから会場までは2時間以上かかってしまう。それでは間に合わない。

途方に暮れてたその時——。

『フィール君!!』

俺に向かって銀色の鍵が投げられた。

「マリーさん!?!」

「話は全部聞かせてもらったよ。シャーリーには私から言っておくから、急いで会場に



行っただけだ!!」

「マリーさん……。だけど、幾らサンダーでも今からじゃ……」

「大丈夫。『アレ』を使えば何とかなるはずだよ。その代わり……ロードサンダーは

……」

「……っ!!」

確かに『アレ』を使えば何とかなるかもしれない。

でも、『アレ』は戦闘モードを基準として設計された物。

もし、ゆりかご決戦で変形機構を失ったサンダーが使えば――。

《相棒、何迷っているんですか!! 私ならとっくに覚悟は出来ています!!》

「サンダー……お前」

《コロナさんは、相棒にとっても大切な女の子ですけど、私にとっても大切な少女なんですよ。ティアナさん以外で私のことを一生懸命思ってくれた……》

そう、コロナはいつもサンダーのことを気にかけてくれた。

あいつは、サンダーのことをメカとしてでなく、一人の人間のように接してくれていた。

そんなひと時を、サンダーは本当に大切にしていた……。

《だから、私は彼女のために役に立てるなら……それで本望なんです!! 戦いの中なかじやなく相棒達の日常を守るためなら!!》

サンダーの気持ちは一片の迷いもなかった。

こいつは本気でコロナ達のことを思っているんだ。ある意味俺たちの誰よりも深く

「……分かった。お前の命、この俺が預かった!! 行くぞサンダー!!」

《了解です、相棒!!》

俺はサンダーのキーを捻り、エンジンをかけスロットルを回し、マフラーから心地よい爆音をガレージ一帯に響き渡らせる。

「いくぜ!! スロットル全開!!」

《思いつきり行きますよ!!》

俺はスロットルを回し、ホイールスピンをさせながら全速で発進した。  
コロナ、これ以上ネフィリムフィストを使うな。  
そして、アインハルト。最悪のことになる前にコロナのことを止めてくれ!!

\* \* \*

「コロナお嬢様の攻撃が……さつきから全然当たらない」

「それだけじゃねえ。反撃のラッシュも効かなくなってきた」

「そんな……どうして？」

「もともと身体操作はタイムロスが出やすいんだ」

判断から初動までの微妙な遅延——。

そのコンマ1秒以下の遅れが、格闘戦じゃ命取りになる。

「でも!! 単発の大威力技ならそんな弱点も——」

「確かにそうだ。だがアインハルトには通じねえ!!」

現にさつきからコロナの攻撃は全部アインハルトにいなさせてしまってる。  
しかもコロナのダメージはかなりの物になってる。  
クラッシュユエミユレートだけど、右腕捻転挫傷に左拳骨折、さらに今の右回り蹴りを  
防がれたときの右臑の打撲。

「まずい!!」

しかもアインハルトの防御は、相手の攻撃威力を利用した攻性防御。  
コロナが攻撃に使った左腕にそのまま威力を返してやがる。

『そしてアインハルト選手、追撃!!』

(拳が来る!! 大丈夫、自動<sup>オートカウンタ</sup>反撃が動作する)

アインハルトの攻撃に、コロナの拳が自動反応で反撃する。  
だけど、それがアインハルトの本当の狙い!!

(しまっ……)

アインハルトの右拳の打ち下ろしは確実にコロナを捉えた。

『カ……カウンター!! コロナ選手のアッパーをアインハルト選手が迎撃!! コロナ選手  
手ダウ——ンツ!!』

自動反撃発動の間合いを読み切って、空振りさせての反撃。  
しかも伸び上がったアッパーを上から叩き潰す打ち下ろし!!  
完璧な筋書きだ——。

「お嬢様!! コロナお嬢様!!」

オットーの必死の呼びかけにも反応しやがらねえ。

さっきの功性防御で拳も足もクラッシュしてる。心が折れてもおかしくない!!

「コロナア——!!」

\* \* \*

(お願いです。もうこれ以上立ち上がらないでください)

私はこれ以上コロナさんを傷つけたくはないんです。

それにあの技は身体をこわしてしまう危険な技――。

競技選手である貴女が使って良い技じゃないんです。

「大……丈夫……」

「……!?!」

『ああと!?! コロナ選手立ち上がる!!』

拳と足がクラッシュしている状態で立ち上がるなんて、もうコロナさんは限界のはず

!?!

まさか!?!

「マイストアーツ創成戦技とネフィリムフィストは……」

「ここからが神髄ですから……」

「終わりになんてしません!!」

五体の完全操作——。

コロナさんも……そこに辿り着いたんですね。

「ですが、その技は危険を伴います!!」

危険なことになる前に、私が終わらせます!!

それがフィルさんとの約束でもあるんですから——。

\* \* \*

(頼むぞアインハルト。最悪な事態になる前にコロナを……止めてくれ)

《相棒、こんなペースじゃ間に合いませんよ!!》

さつきからサンダーでエンジン全開でかつ飛ばしてるが、会場があるクラナガンにはまだかなりの距離がある。

しかも、サンダーのあちこちの箇所が故障し始めてきている。

本来なら、ハイペースで飛ばしても2時間以上かかる距離を30分できたんだからな。

「もう少しだ……。もう少しだけ頑張ってくれ、サンダー!!」

《言われるまでもありません!! 必ず相棒をコロナさんの元に送り届けます。私の……意地にかけても!!》

突然、警告音が鳴り響く。

この警告音は、まさか——!!。

「お前、まさか、スパイラルブーストを!?!」

——サンダーのラストリミット『スパイラルブースト』

サンダーのエンジンを起爆剤のニトロで点火させ、強引に出力を上げる最後の手段。



《このままじゃ手遅れになります。それに……元から覚悟はしてたんです。迷ってる時間はないですよ!!》

「だけど!!」

《相棒、いや、フィル・グリード!! あなたが今守るべき人は誰ですか!! 私じゃない!! 貴方を誰よりも待ってるのは、あの子なんですよ!!》

そうだ。

今、俺が守らなきゃいけないのは――。

コロナ・ティミル。

純粹で、傷つきやすく、誰よりも優しい女の子だ。

「……分かった。もう……迷わない。プログラム起動。『スパイラルブースト!!』」

スロットル脇にあるブースト用のボタンを押し、最終兵器のブーストを点火させる。点火と同時に俺の身体にももの凄いGが襲う。

「ぐっ……何で加速のGだ。吹っ飛ばされないようにするのがやっとだ」  
《しつかり操縦してくださいよ。正直、私は制御だけで精一杯ですから……》

サンダーの計器にあるブーストメーター——。

これが0になる前に会場に着かなければエンジンはブローしてしまい、下手をすれば本体そのものが大爆発してしまう。

現在のカウン트는180……あと3分。

頼む!! 何とか間に合ってください!!

ブーストと今までの無理で、タイヤがブリストアが発生している。

いつ、ブーストしてもおかしくない。

まだか……。会場はまだなのか!!

《……相棒、会場見えてきましたよ》

前方を見るとそこは、コロナ達が戦っている会場。

何とかサンダーのエンジンは持ちそうだ。

そう思っていた矢先——。

『ボウン』とエンジンが爆発し、ブーストの出力も弱まりコントロールも効かなくなってしまう。

ちくしょう……あと少しだったのに……。

《……この命に代えても、絶対……に、相棒を、コロナ……さん、のもとに……たどり、着かせるツツ!!》

サンダーは最後の力を振り絞り、車体の姿勢制御をし地上に着地した後、エンジンをブローさせながら走り続けた。

まさに命を燃やし尽くすかのように――。

会場の入り口に何とか到着することが出来たが――。

「サンダー!!」

サンダーのエンジンは完全に焼き付いてしまい――。

車体もボロボロになってしまっていた。

《私に、かまわず早く!! コロナさんのもとに!!》

「だが!! そんな状態じゃ!!」

《……言った……でしょう。私の役目は……皆さんの日常を……護る、ことだって……だから早く!! 最悪なことになる前に……行つてくださいッ!!》

「……分かった。すぐに迎えに来るからな!!」

ここでサンダーの気持ちを無駄にするわけにはいかない。

俺は急いで会場の入り口に向かった。

\* \* \*

(……行つた……よ……うで、すね)

良かった——。

これで私の役割も果たすことが出来ました。

相棒、いつも、私を大切に使ってくれてありがとう。

そんな相棒の大切な人たちのために、この身が役に立てたのなら本望です。

出来ることなら、あの子に……。

コロナさんにバイクのすばらしさを……教えたかったです。

ティアナさん以外に、私のことを一つの生命体として見てくれた彼女に……。

コロナさん……あなたはあんな力を使わなくても、ちゃんと強くなります。  
だから……。

あなたが目指している本当の強さを……思い出してください。

それが……。

私の……。

最後の……願い……です。

\* \* \*

(駄目だ……何度やっても当たらない)

手も足も体中が痛いよ——。

最後の切り札、ネフィリムフィストフルコントロールを使っても決定打にはならない。  
い。

(やっぱり……無理なのかな。どんなに頑張ってもアインハルトさんには……)

ごめんなさいファイルさん——。

わたしはやっぱり……。

「コロナッ!!」

「!？」

今の声——。

スタンドの方を振り向くとそこには——。

「まだだ!! まだお前は練習したことを全部出し切つてない!!」

フィールさん——。

どうしてここに……?」

お仕事でここには来られないって言ったのに……。

「そうですよお嬢様!! フィールさんの言うとおり、まだお嬢様は出し切つてません!!」

「そうだ!! オットーと一緒に練習した強さ!! ゴーレムマイスターとしての戦い!!」

ネフィリムフィストなんか使わなくなつて……。そんな無茶なことしなくなつて……。」

「お前は強いんだ!! 俺とルーテシアが作ったブランゼルは、必ずお前に応えてくれる

!! だから……」

「最後まで……諦めるなアアアアア!!」

フィルさん……オットー……。

本当に……本当に……ありがとう……。

「そうだよね——。わたしは格闘技選手でもあるけど、それ以上に——」

わたしはゴーレムマイスターなんだ。

フィルさんとルーちゃんが作ってくれたブランゼルはその象徴。

二人の思い……オットーの思い……。

そして——。

何より自分自身の思いを込めて!!

「創主コロナと魔導器ブランゼルの名の下に——」

「蘇れ巨神!! ゴライアス!!」



再構築な分、創成時間は殆ど無い。

この一撃に全てを賭ける!!

「アーム……バージブラスト……」

わたしはゴライアスの腕をバージし、その腕を高速回転させる。  
そして——。

「ドリルクラッシューパーパンチ!!」

高速回転させた腕を、アインハルトさんにめがけて放った!!

「甘いですよ!!」

アインハルトさんはゴライアスの腕を、逆にその力を利用して——。

「霸王流——旋衝破ア——!!」

間一髪上空へ逃れることは出来たけど、跳ね返られた腕でゴライアスは破壊されてしまった。

「ただ、それは計算済み——。」  
「本当の狙いは——。」

「!? あ、あの技は!? 俺の……」  
「ブラスト……」

「もう残り魔力は少ない——。」  
「一か八かこの技に全てを賭ける——。」  
「フィルさんが得意とする誘導弾。これがわたしの最後の攻撃!!」

「シュート!!」

「わたしが作り出した8つの魔法弾は——。」

「くっ!!」

全てアインハルトさんに命中したが――。

「……………私の……………勝ちです。コロナさん」

「霸王……………断空拳!!」

アインハルトさんの必殺の一撃をカウンターでくらってしまった。

コロナ・ティミル LIFE 0

\* \* \*

試合が終わり、目を覚ましたわたしは、ロードサンダーの事を聞き、居ても立っても  
いられず会場を飛びだしていた。

そこにあつたのは……………。

ボディもエンジンもボロボロになったロードサンダー。

それを見て涙が止まらなかった。

「わたしのために、こんなになるまでボロボロになって……」

「サンダーは、最後まで……コロナのことを、思っていたよ。自分の身を犠牲にして、な……」

本当に……本当にごめんね、ロードサンダー。

\* \* \*

20:18 海岸

「負けちゃい……ました。やっぱりアインハルトさんは強いです」

「アインハルト相手によくやったよ。前半のネフィリムフィストは感心できなかったけど」

「フィルさん……ごめんなさい」

「でも、分かっただろ。あんな技使わなくても充分強んだって……」

「はい!!」

この試合でわたしが学んだことは本当に沢山あった。

戦い方とかもそうだけど、何よりわたし自身の心の持ち方——。

一人でやってるんじゃない。オットーやノーヴェ師匠、フィルさん、そして、ロード  
サンダー。

色んな人に支えられているんだって事を——。

「あの……フィルさん。一つだけ……聞いても良いですか?」

「ん? 何だ?」

「……ネフィリムフィストのこと……です」

今ならネフィリムフィストの危険性は充分に分かる。

だけど、フィルさんが反対してたのは、それ以外にも何か理由があるような気がして  
ならなかった。

「……そのことか。コロナ、今ならネフィリムフィストの危険性は充分に分かるな」

「はい……。実際に経験しましたから」

「……それを踏まえて一つ昔話をするよ。とある男の……愚かな話をね」

「昔……その男は力が欲しくて……色んな無茶をしまくった。魔力や筋力を上げるために過剰なトレーニングもした。それでも求める力が得られず、その男の取った選択は——」。魔力を使つての自動身体操作。つまりはネフィリムフィストだ。だけど……それで得た物は……」

フィルさんは、本当に悲痛な表情をし——。

「……得た物なんか何もなかった。残ったのは……ボロボロの身体……それだけさ」  
「!!」

今……やっと分かった。

この話に出てくる人は、フィルさん自身なんだ。

だから……だからわたしに、ネフィリムフィストを使うなつてずっと言ってくれてた

んだ!!

「……だからコロナ、二度とネフィリムフィストは使わないでくれ。大切な奴を失う悲しみは……もう……たくさんだ」

「フィルさん……」

フィルさんの悲痛な悲しみ——。

それはフィルさんの言葉と、今の表情を見れば痛いほど伝わった。

そしてフィルさんはいつも一人で抱えてしまっている。

ティアナさんやノーヴェ師匠が言っていた。

この人は他人の悲しみとかには敏感なんだけど、自分のことは二の次にしてしまっている。

そして、ロードサンダーもフィルさんと同じ。

だから、そんな優しい人達がこれ以上傷ついていくのはもういや!!

「フィルさん……」

「コロナ?」

この思いはフィルさんにとって邪魔なのは分かっている。ただ、今ちゃんと伝えなくちゃ一生後悔するから――。

「フィルさん……今のわたしはまだまだ子どもです……。だけど……だけど……」  
「わたしは……フィルさんのことが誰よりも大好きなんです!! この思いは本気なんです!!」

\* \* \*

「……コロナ」

コロナの思いが、憧れや安っぽい思いなんかじゃないことは、鈍感朴念仁の俺でも分かる。

コロナがどんな思いをして俺に告白をしてくれたか――。  
本気の思いに対して、本気で応えなきや最低だ。



「……馬鹿だよ。コロナならもつと良い奴が見つかるだろうに」

「ファイルさんじゃなきゃ……だめなんです。いつもわたしを本当に支えてくれたファイルさんだから……わたし……一生懸命頑張つてスタイルも良くなります!! ファイルさんのことを支えられるような女の子になりますから……」

俺は人差し指でコロナの口に触れ——。

「ファイルさん?」

「十分魅力的な女の子だよ、お前は。だからそんなに焦つて大人になろうとするな」

「それは……わかりますけど」

「それじゃ……お前が魅力的だつてことを行動で示すよ」

俺はそつとコロナに——。

誓いの口づけをかわす。

それは唇にそつと触れただけのキス——。

だけど、今の俺たちには充分すぎる誓い――。

「……ファイル……さん」

「今は……これで勘弁な」

「はい……でも、いつかは……」

「ああ……そのときは……な」

\* \* \*

数年後

「いつけない!! 急いで家に帰らなきゃ!!」

今日はファイルさんの誕生日、この日に合わせて色々準備してきたのにこういう日に限って先生から雑用を言い渡されてしまうなんて!!

「ロードサンダーお願い!! 全速力でね!!」

《了解しましたコロナさん。かつ飛ばしますからね!!》

フィルさんの愛車だったロードサンダー。

あれだけボロボロになった機体をよみがえらせるのには、かなりの年月がかかった。

正直、AIもかなりのダメージを負ってしまい、車体もほぼ作り直しになってしまった。

それでも、もう二度と任務には使われないと決心したフィルさんは、わたしがバイクの免許を取ると同時に、わたしにロードサンダーをプレゼントしてくれた。

『お前がロードサンダーを使ってくれるなら……きつとこいつも喜ぶから』

今ではブランゼルと同じく、わたしの欠かせない大切なパートナーになっている。

「ロードサンダー、いつもありがとう。下手くそなわたしをサポートしてくれて」

《いえいえ、コロナさんはいつも私を大切に使うてくれますからね。『元』相棒と違って無茶な運転はしませんしね》

「あ、あはは……」

た、確かにフィルさん……ロードサンダーに無茶しまくっていたかも。いつも全速全開だし……。

《さて、もうすぐ到着しますよ。で、コロナさん今日相棒と……》

「うん……」

《……はあ、あのスットコドツコイ。本当に女性の気持ちには疎いんですね》  
「そうなんだよね……」

フィルさんはあの日以来、年相応のつきあいをしてくれて、その……キスとかもしてるんだけど……。

それ以上は……どうしてもしてくれない。

「でも、今日頑張るよ!! フィルさんと本当の恋人になりたいから!!」

《頑張ってください!! もしコロナさんの気持ちを無下にしたら、私が装備されてる、ありとあらゆる武器をぶちかましますから!!》

「それだけはやめてね……ロードサンダー」

心配してくれるのは嬉しいけど、そんなことされたら、いくらフィルさんでも死んじゃうから――。

\* \* \*

「ごちそうさま、本当に美味しかったよ。コロナ」

「良かったです、喜んでくれて……」

夕食が終わり、わたしとフィルさんは一緒に片付けをし、そのままりビングのソファで、一緒にテレビを見ながらまったりとしていた。

「……今日は本当にありがとうな。こうして祝ってくれる人がいるのは……やっぱうれしいよ」

わたしとフィルさんが恋人になってからの約束。

それは互いの誕生日を祝うこと……。  
年に一度の互いの大切な日……。  
フィルさんは管理局の仕事が忙しくて休みを取るの難しい。  
だけど、この日だけは必ず休みを取って一緒にいてくれる。

「……もうこんな時間か」

時計を見るともう23時を過ぎていた。  
だけど――。

「……コロナ」

わたしはフィルさんの背中に抱きつき――。

「……今日は……いっしょに……いてください」

「……だけど……親御さんもそろそろ」

「今日は……両親は帰ってこないです。二人とも旅行に出かけてます」

本当は嘘——。

わたしが両親に旅行をプレゼントして、この日を空けてもらったから——。

「……ファイルさん……お願い……わたしを……本当の恋人に……して……ください」

「その意味……わかってる……よな。今のコロナにそんなこと言われたら……俺は……」

「わかっていつてるんです……。ファイルさん、わたしは貴方と……本当の意味で？がりたいんです……。身も……心も……」

「……分かった。コロナの気持ち……もらうからな」  
「……はい」

そして——。

わたしとファイルさんは、そのまま瞳を閉じてキスをする。

最初は唇が触れるだけのキス——。

次第に互いの存在を求め合う深いキスになった。

キスが終わると、互いの唇の間に銀色の糸ができあがっていて、それは互いの気持ち

が？がりあっている証だった。

「あっ……」

フィルさんはわたしの服の隙間から胸に触れる。

小さめなわたしの胸だけど、フィルさんは一杯わたしの胸に触れてくれた。

それだけでフィルさんが、わたしのことを一杯愛してくれてるって伝わってくる。

「コロナ……」

そしてフィルさんはわたしの服を脱がし、ブラを外し、さらに全身を蹂躪するかのよう  
に求めてきた。

「……ふぁ……あぁ……あんっ……」

わたしも声をこらえきれず、思わず喘ぎ声を発してしまふ。

だけど、それがフィルさんの理性を壊して、わたしを一杯求めてくれる。



そして――。

「……フィルさん……やさしく……して……くださいね」

「……ああ……やさしくするよ。俺も……その……初めてだしな……」

「ふふつ……」

フィルさんはわざとかつこ悪いことを言ったけど、それはちつともかつこ悪くないですからね。

なんか……フィルさんの一面を見れて嬉しいな。

「……じゃ……いくよ」

「はい……きて……ください」

そしてわたしとフィルさんは――。

互いに肉体の快樂と精神のつながりに溺れ――。

「その後も何度も繰り返され――。」

「その行為は夜遅くまで続いた――。」

\* \* \*

「こうしてフィルさんの腕に抱かれてると……凄く安心します」  
「そっか……」

フィルさんに抱かれた後、しばらくの間眠っていたんだけど、目が覚めたらわたしはフィルさんの腕を枕にして眠っていた。

フィルさん、わたしが眠っている間、こうしててくれたんだ。

「今までもフィルさんに好きだよって言うってもらってましたけど、やっぱり……不安だったです。だって……フィルさんわたしのこと求めてくれなかつたし……」

「あのな……。コロナが成長して、色気が出てきて……。自分の欲望を抑えるのに必死

だったんだぞ。こういったことって……その……な……」

「フィルさんが、わたしのことを大切にしてくれてたのはすっごくわかります。でも、わたしはフィルさんの恋人なんですよ!! 恋人には遠慮しないで欲しいです」

確かにフィルさんのそう言ったところは美点でもありますが、こういうときはもう少し積極的になって欲しいです!!

「すまなかつたな……。コロナに辛い思いをさせて……」

「これからは今まで待たされた分、いっぱい……いっぱい愛してくださいね♪」

フィルさんとわたし——。

年齢が離れている分、これからも一杯困難があると思う——。

だけど、わたしはフィルさんのことを本当に愛してる——。

その気持ちに嘘偽りは無い——。

これからもそれは変わることはない——。

だからフィルさん、わたしのことを一杯愛してくださいね♪

## i f e n d i n g リオ

「うーん、やっぱ外の空気は気持ちいい〜」

さつきまで寝ていたんだけど、のどが渴いて目が覚めちゃったら、なんだか眠れなくなっちゃって、みんなに内緒でちよつとだけ外に出ちゃった。

まあ、コテージの庭だから、大丈夫だよな。

「でも、本当にすごかったな、模擬戦……」

なのはさん達も、もちろんすごかったんだけど、特にファイルさん。

あたしは初めてファイルさんの戦い方を見たんだけど、本当にあの人は病み上がりの人なの？

ヴィヴィオが言うには、ファイルさんは本当に大怪我をしまして、正直、もう二度と戦うことが出来ないと言われていた。

でも、それを必死になってあそこまで回復して今では執務官として活躍してる。

「あたしも、もつと頑張らなきゃだね」

ガサガサ

「あれ？」

物音がして、あたしはコテージの反対側へと行ってみた。

ここは無入世界だから、あたし達以外の人はいないはず。

となると、動物か何かかな？

そう思っただけに見に行ってみると、そこにいたのは……。

「……ファイルさん」

模擬ターゲットで射撃訓練をしていたファイルさんの姿だった。

「んっ？ リオか。どうしたんだ、眠れないのか？」

「はい、さつきまで寝てたんですけど、起きちゃったら眠れなくて、外の空気吸ってたんです。そう言うファイルさんは？」

「まあ、似たようなもんだな。模擬戦じゃーラウンドしか戦わなかったし、すこし身体を動かしてたんだ」

あたしも、ヴィヴィオ達から理由聞くまでは、どうしてもつとやらないんだろうって思ってたんだけどね。

でも、ヴィヴィオ達がとめるのは当たり前。

病み上がりの人に、無理なんかして欲しくないからね。

「ファイルさん、のど乾いてませんか？ これ、よかつたら一緒に飲みませんか？」

あたしは、持ってきていたスポーツドリンクをファイルさんに渡す。

「ありがとう、助かったよ」

フィールさんは、飲み口に口を付けないように飲んでいた。

「フィールさん、飲み口に、口付けても大丈夫ですよ」

「さすがにそれは悪いだろ。一本しかないし、俺が口付けたの渡すのは、な」

「それ、今更です。こないだヴィヴィオに思いつきやってみましたし……」

この前、自分が口付けたジュースをヴィヴィオに渡して、それをヴィヴィオが飲んじやってたんだよ。

ヴィヴィオ、思いつきり顔真っ赤になってたけどね。

「よく覚えてたな。そういうえば、あの時は何も考えずしてたからな」

「ですから、あたしも気にしませんから、ね」

「じゃ、今度はそうさせてもらうよ。もう、結構飲んじやったからあとはリオが飲んでくれ」

そうやって、フィルさんはあたしにドリンクを返し、結局残りのスポーツドリンクはあたしが飲み干してしまった。

「あつ、そういえばフィルさんに聞きたいことがあつたんです」

「んっ？ 何を聞きたいんだ」

「ヴィヴィオとコロナのデバイスです。いつ、二人に作ってあげるって約束したんですか？」

ヴィヴィオとコロナが、すっごく良い笑顔してたから、ちよつとだけ気になってたんだ。

何か特別なことがあるのかなって？

「まあ、詳しいことはここでは省くけど、二人ともすっごく頑張っていたから、それを手助けできればと思つてやつただけだよ」

「二人ともすっごく喜んでましたよ。あたしもソルフエージュが無かつたら、お願いしてたかも……」



「リオのソルフエージュは良いデバイスだよ。結構使っていただけあって、互いの信頼関係も作られてるしな」

「えへへ」

最初は、あたしも苦労したんだけど、今ではソルはあたしの大切な相棒。もっと、使いこなせるように頑張らなきゃね。

「インターミドルに出るときは、リオ達のデバイスのメンテナンスは引き受ける予定だから、して欲しいことがあったら遠慮無く言ってくれ」

「はいっ!!」

「さて、少し冷えてきたし戻るとするか」

フィルさんに言われて、あたしも戻ろうとしたとき……。

「うわっ!!」

足下の石につまづいてしまったが……。

「おっと」

ファイルさんが、あたしを片手で抱きとめてくれた。

でも、無理な体勢で抱きとめてくれたから、ファイルさんがそのまま背中から倒れてしまった。

「大丈夫か、リオ」

「は、はいっ!! でも、ファイルさんの方が……」

あたしよりも、ファイルさんの方が心配だよ。

背中から落ちたんだし……。

「大丈夫、ちゃんと受け身取ってるしな。それより、ごめんな……」

「えっ?」

なんで、ファイルさんが謝るんだろ。

むしろ、謝るのはあたしの方なのに……。

「受け止めるとき、その……胸の近く掴んじゃただろ。もつと、うまくすれば良かったんだけどな」

「そ、そんなことないです!! ファイルさんが咄嗟にしてくれなかったら、あたしは怪我してたかもしれないんですから……」

ファイルさん、気にしすぎです。

助けてもらって、そんな事言う人なんかよっぽどの人じゃなきや言わないですから……。

「そう言ってもらえると助かるよ。ルーテシアから聞いたけど、昨日、温泉でセインの奴がふざけてお前の胸掴んだだろ。だから、そういうのに敏感になってるかなって思ったから……」

「あつ……」

——実は、ちょっとだけ気にしてたんだ。

相手がいくら女の子とはいえ、やっぱり、いきなり胸を掴まれるのは怖かったから。

「だから、このオフトレでこれ以上嫌な思い出……作って欲しくなかったからな」  
「フィルさん……」

——いま、分かった。

コロナとヴィヴィオが、フィルさんを想ってるのが。

こんな風に大切に思われてるなんて、今まで無かったから……。

「大丈夫です。むしろ、あたしには良い思い出、出来たかな」

こんなふうに、フィルさんと一緒にいられたんだから……。

ヴィヴィオ、コロナ、ゴメンね。

あたしも、フィルさんのこと好きになっちゃったかな。

\*

\*

\*

「これ、すっごく重いです」

「魔力負荷とはいえ、筋力を鍛えることも出来るからな。慣れるまでは思うように動けないだろうな」

マリーさんが考えてくれた魔力負荷バンド。

それを付けながら、あたしたちは特訓をしている。

ヴィヴィオはノーヴェコーチと、コロナはオットーと、そしてあたしはデイドと  
フィルさんが担当してくれることになった。

二人とも、フィルさんがあたしに付くのはブーイングだったけど、一応順番で回るんだし、それに二人ともデバイス作ってもらってるんだから、これくらいのハンデはありだよな。

「リオお嬢様、焦らずいきましよう。時間はまだあるんですから」

「うん、そうだね」

春光拳と炎雷を組み合わせた戦い方は無限にある。

それを使いこなしていくのが、あたしの戦い方だから……。

「ソルフエージュの方はこっちに任せてくれ。完璧に仕上げてみせるからな」

実際、フィルさんの手によって、ソルはあたしが使っていたときよりハイスペックになっっている。

デイドの話だと、おっそろしくカスタマイズしたって言ってたし……。

それって、相当のお金懸かってるよね。

あたしのソルって結構ピーキーだし、ワンオフで作ったから部品高いし……。

「あたし、使いこなせるかな？ 今のソルのこと……」

「それはリオ次第だ。でも、俺は信じてる。お前ならソルフエージュと一緒に成長していけるって……」

—— フィルさんのあたたかい瞳。

ヴィヴィオ達も、みんなフィルさんに見守られてきたんだよね。

「あたし、いっぱい頑張って絶対に勝ち抜きます!!」

それが、あたしの精一杯の気持ちだから……。

\*

\*

\*

「さて、みんな送ってくから、それぞれの車に乗ってくれ」  
「「はい」」

アインハルトは、はやてさんの車に、コロナとヴィヴィオはなのはさん達の車で送ることになった。

リオはというと……。

「えへへ、ありがとうございます!!」

俺が、サンダーで送ることになった。

というより、俺がリオだけわざと別にしたのだ。

その理由は……。

「わーい!! フィルさんのバイクだ!!」

あまりにも笑顔過ぎる今のリオを、ヴィヴィオ達と一緒にするのは良くないと思った



からだ。

——今のリオは、無理して笑顔を作ってる。

この状態を放っておくことはできない。

「それじゃ、しっかりつかまってるよ」

「はい!!」

俺は少しだけ速度を速めて、ヴィヴィオ達のそばから離れた。

\* \* \*

「うーん、潮風が気持ちいいですね」

「そうだな……」

「フィルさんが、突然『リオが疲れてなかったら、少し気分転換に行こうか』と行ってくれて、あたしはせっかくだから海がみたいと言って、サンダーでここまで連れてきてくれた。」

「あはは、チームナカジマ初等科、全滅です。あたしも頑張ったんですけど……」  
「みんな立派だったよ。初出場であそこまでいければすごいさ……」

フィルさんの笑顔が今はとても苦しい。  
いつも、あたし達を見守ってくれた笑顔。

あたし、もう、笑っているのは無理だよ……。

「……そう、なんですけど、ね」

——分かってる。

あたしだって、あそこまで戦えるとは思っていなかったから……。

コーチやディード、そしてファイルさん。

みんながあたし達を必死でサポートしてくれたから……。

だからこそ……。

「……勝ちたかった。応援してくれたみんなに、喜んで欲しかった……」

その笑顔にもっと応えなかったのに……。

もう、涙を抑えるのは無理だった。

すると……。

「……ファイル、さ、ん？」

ファイルさんがあたしを包み込んでくれて……。

「……今は、思いつきり泣きな。もう、無理して笑う必要はないから……」

「うわああああああん!!」

あたしはファイルさんの胸の中で、思いつきり泣いていた。

\* \* \*

「……えへへ、もう大丈夫です。いつものあたしです」  
「ああ、さつきとは違う本当の笑顔だ。わかるよ……」

きつと、ファイルさんは気がついてたんだ。

あたしが無理して笑っていたのを……。

「一つだけ聞いても良いですか？」

「ん？ なんだ」

「どうして、あたしだけ別行動にしたんですか？」

ヴィヴィオもコロナも、きつと同じ様に無理してたのに。  
それが分からないフィルさんじゃないはず。

「……ヴィヴィオも、コロナも無理はしてたけど、あの時はリオがいちばん危なかったんだ。明らかに無理してるのが分かってたし、それに……」  
「それに？」

「リオの心が、泣いてるのが伝わってきたから……」

——ずっとそうだった。

この人は、いつも本当にいてほしいときに、そつと支えてくれた。

デイドと一緒に特訓に付き合ってくれたときも……。

ハリー選手と戦ったときに、応援してくれたときも……。

そして、今も……。

「本当に……やさしいです。フィールさん」

「優しくなんかないさ。そういうのはノーヴェやなのはさん達の役目だよ……」

—— そんなことない。

「そんなことないです。今だって、こうしてあたしのことを包んでくれる。そんなフィールさんのことが、あたしは……」

あたしにとって、あなたは……。

「大好きになったんですから」

誰よりも大好きな人なんですから。

\* \* \*

本来、このくらいの歳の女の子は、恋に恋することが多い。  
でも、リオはしっかりと考えた考えを持っている。

だから、今の言葉も、リオの本当の想いなんだろう。

でも……。

「……分かってます。いまのあたしじや、ファイルさんにふさわしくないことは……。でも、年が離れてるって理由だけであきらめたくないんです。あたし、いっぱい努力して、もっと可愛い女の子になります。だから……」

リオは、意を決し、強い意志を持った瞳で……。

「あたしに時間をください。せめて、ファイルさんに彼女が出来るまでの間で良いですか  
ら……」

自分の想いを必死に伝えてきた。

「……リオ」

——完全に俺の負けだな。

俺は、さっきまで年が離れてるから、もっと良い奴が見つかると思うつもりだった。  
だけど、リオがこうして必死に伝えてきたんだ。

それを理由にするのは卑怯だよな。

「……分かった。俺に彼女が出来るとは思わないが、リオが中等科を卒業するまで、今の  
想いを持ってきてくれるなら、その時に改めて答えるよ」

「ありがとうございます!!」



この子なら、本当に頑張る気がする。

あれだけ一生懸命にする女の子なんだから……。

だから、今の俺が出来る精一杯のことは……。

「これを、約束の証としてリオに預かって欲しい」

「これは……？」

《マスター……。まさか、これ!!》

リオに、必ず約束を守るという、しっかりとした証を渡してあげることだけだ。

\* \* \*

「……綺麗なカートリッジ、これは？」

これは、プリムに使ってるカートリッジと言うことはわかる。

以前にファイルさんに見せてもらったことがあるから……。

でも、これは普通のカートリッジとは違って、銀色に輝いている。

《……本気なんですね。『スパイラルカートリッジ』を渡すなんて……。もう、これ作れないんですよ》

「分かってるよ。ゆりかご事件の後、設計図から何まで消去してしまったからな。残ってるのはこれ一個だけ……。だからこそ、かな」

「どういうことなの、プリム？」

すると、プリムから語られた内容は衝撃的な物だった。

ファイルさんがあたしに預けてくれたカートリッジは、『スパイラルカートリッジ』と  
いってプリムのラストリミットを解放する唯一の鍵。

そして、スパイラルシステムのことも教えてくれた。

スパイラルシステムは、自分の命を魔力に変換する最強であり最悪のシステム。

《というわけです。あれだけなのはさん達や私が処分してくださいと言ったのに、それだけは持つてました。それを預けたと言うことは……。マスターは、本気でリオのこ  
と待つてるつもりです》

「フィルさん……」

「これくらいしか、リオの想いに応えてあげられないからな。待つてるよ、でも、他に良  
い奴が出来たら、俺のことは気にしないでくれよな……」

まったく……。

あたしがどれだけの想いで伝えたと思ってるんですか!!

フィルさん、女の子のこと舐めすぎです。

だから……。

「あたし、絶対にフィルさんのハートをゲットしますから!!」

覚悟してくださいね、フィルさん♪

\* \* \*

6年後

あたしは、フィールさんをあの時と同じ海岸で待ち合わせをしていた。

夕方なら時間がとれると言うことで、あの時と同じ夕暮れ時になってしまったけど……。

これも何かの運命を感じるな……。

すると、フィールさんがサンダーに乗ってこつちにやってきた。

「待たせて済まなかったな、リオ」

「いえ、あたしがお呼びだてしたんですから、気にしないでください」

正直、あたしの心臓はバクバク言ってる、ドキドキが止まらない。

「まさか、本当に16まで彼氏作らなかつたとはな……」

「それ、フィルさんも同じです。彼女作らなかつたなんて……」

「約束だからな。リオが彼氏を作らない限り、今日まで待つてるってのは……」

本当に実直な人です。

でも、あたしはその約束のおかげで、今日まで頑張ってきたんです。

苦手だったお料理も、色んな人に教えてもらったし。

強さだって、フィルさんと一緒にいられるようにいっぱい強くなった。

お勉強だって、学校の勉強だけでなく、ヴィヴィオと同じ司書資格を取ったりして頑張った。

フィルさんが好きだって想いは、あのとときよりずっと大きくなってるんですからね!!

「あらためて伝えます。あたし、リオ・ウエズリーはフィル・グリードさんのことが大好

きです!!」

すると、フィルさんは……。

「あつ……」

あたしを自分の方へ抱き寄せて……。

「こんな俺を、ずっと想ってくれて……ありがとう、な。そんな真っ直ぐな心を持つて  
るりオだから……。俺も好きなんだ」

「……嘘じゃないですよ。もう、撤回はききませんからね」

「撤回なんかしないよ。6年前に預けた『スパイラルカートリッジ』にかけてな……」  
「だったら、もう一つ……証、ください」

あたしは瞳を閉じると、その意味を分かってくれて……。

夕焼けの空の下——。

あたしとフィールさんは、キスを交わした。

それは6年間……。

ずっと思い続けてきたあたしの思いがかなった瞬間だった。

\*

\*

\*

「んっ……ちゅ……はぁ……」

「ずいぶん、積極的にキスしてくるな……」

それは当たり前だよ。

6年分の想いが、あたしをうごかしてるんだもん。

この6年の間、何もなかった訳じゃない。

ファイルさんが、ヴィクターさんやティアナさんとつきあい始めたという噂話が、何度も入ってきたりしてやきもきした回数は数知れない。

「あたりまえだよ。やつとあたしの想いが叶ったんだから……。だから、今日はいっぱい抱きしめてください」

「遠慮はしなくていいんだな……」

「そんなことしないでください。あたし、今日という日を忘れたくないんです。想いが叶った大切な日を……」

「……わかった」

そういつて、ファイルさんはあたしの胸を両手で何度も触れてきて……。

「あ、ん……ふあ……」

そんなに大きくないあたしの胸に舌を這わせる。



「……敏感だな、リオは」

「ヴィクターさんやアインハルトさんみたいに大きくないけど、コロナよりは大きいんですからね」

コロナもあたしと同じで、胸のサイズはそんなに大きくないけど、頑張つてなんとかコロナには勝つてる。

ヴィヴィオやアインハルトさんには勝てないけど……。

「ああ、すごく触りごちがいいよ。ずっと触れていたいくらいにな……」

「だったら、これから何度も触ってください。あたしも、こうしてフィルさんに愛されると嬉しいですから……」

そして、ついに……。

「本当に……良いんだな？」

「あたし、ずっと待ってたんです。フィルさんと一緒になるの……。だから、きて、ください……」

あたし達は本当の意味で一つになる。

——理性なんか必要ない。

今必要なのは、本能に身を任せることだけ……。

破瓜の傷みも、フィルさんと一つになれたという想いが快樂に変えてくれるから……。

\* \* \*

「えへへ♪」

「本当に女の子ってタフだよな……」

「そうですよ。女の子は好きな人の前だと、いっぱい甘えたくなるんですよ♪」

あたしも、まさか何度もするとは思わなかったけど、でも、今日という日を素敵な思い出したかったから……。

「そっか……。だったら、たくさん甘えてくれ。俺も出来る限り受け止めてやるから……」

「……もう、あたし遠慮なんかしないですから、覚悟してくださいね!!」

「……それじゃ、俺も遠慮しないで、リオのこと求めようかな」

「ちよ、ちよつとファイルさん!? あ、ん……」

そう言って、ファイルさんはあたしの胸をまた揉みはじめて……。

「なんだろうな……。好きな女の子の身体にずっと触れていたって思ってしまう。すまん、これじゃ……。節操なしだよな」

「……そんなこと無いですよ。あたしだって、好きな人にはさわってほしいって思うんですから……」

「リオ……」

「だから……」

あたしは、フィルさんの首に、八重歯で甘噛みをして思いっきり甘える。そして、フィルさんもあたしの胸を揉みながら、そのままベッドで求め合う。

互いの身と心が、溶け合うまで……。

\* \* \*

「それじゃ、今日はあたしが運転しますね」  
「なんかいつもと逆なのは新鮮だよな……」

せつかくバイクの免許を取れたんだし、こうしてフィルさんのバイクに乗ってみたかったんだ。

「じゃ、安全運転で頼むな」

そう言つて、フィルさんはあたしの腰をしつかりと掴むが……。

「そこじゃないですよ。手はここですよ〜♪」

あたしはフィルさんの手を、自分の胸の所に持つてつた。

恥ずかしいけど、これくらいしないとあたしの気持ち伝わらないから……。

「ちよ、ちよつと待て?! ここはリオの胸だろうが、女の子の胸を、な……」

「それ、今更です。さつき、ベッドであたしの胸を何度も揉んだんですから」

「だけどな……」

「それに、フィルさんには、あたしをいつも感じて欲しいんです。ほら、心臓がドキドキしてるの伝わりますよね」

フィルさんに触れられて、あたしの心臓はさつきからドキドキしっぱなしだよ。

「……すつごく伝わってくるよ。リオの鼓動がな」  
「うん……」

《あの……。リオさん、相棒、発進するなら発進しましょう。ラブコメはもう、お腹いっぱいですから……》

「うぐつ……」

「あうう……」

結局、発進するのに10分以上経ってからになってしまった。

それでも、手の位置はそのまま胸にしてみらったけどね。

\* \* \*

「それじゃ、さつそくお夕飯作りますね〜」

近くのスーパーで一通りの買い物をした後、あたしは夕飯を作り始めた。  
今日は、あたしが覚えた得意料理を食べてもらうんだ。

「なんか悪いな。全部やっってもらって……」

「良いんです。今日は、あたしの手料理をいっぱい食べてもらいたいですから♪」

「そっか……」

そう言つて、ファイルさんはリビングに戻つて、プリムとソルフエージュの整備をし始めてた。

こういうときは、のんびり待つていて欲しかったな。

それじゃ、あたしは出来るだけ早くお夕飯を作るとしますか!!

「おまたせしました!!」

「オムライスか。これ、結構難しいのに、よく卵を包めたな」

「えへへ♪ あたしたくさん練習したんですよ」

これが出るようになるまで、ずいぶん苦勞したな。

卵を買つて、作つてはコロナ達に食べてもらつてを繰り返して、やっと出来るようになったんだからね。

「ただ……。これは恥ずかしいぞ」

そう言つて、フィルさんが指さしたのは、ケチャップで、ハートマークを思いつきり書いたオムライス。

「良いじゃないですか。あたし達しかいないんですから……」

「確かに。それじゃ頂くよ……」

フィルさんがスプーンでオムライスを食べようとしたとき……。

「だめですよ、自分で食べたら」

「えっ？」

「はい、あーんしてください♪」

フィルさんは、びっくりしてスプーンを落とすしちやっただけど、その方が好都合。



「え、えっと……」

「あーん♪」

結局フィルさんが根負けして、オムライスを食べてくれました。  
恥ずかしいのは分かりますけど、あたしだって恥ずかしいんですからね。  
でも、こうやって甘えられるのは恋人同士の特権なんですから……。

\*

\*

\*

「もう、着いちゃいました」

「結構、遠回りしたんだけどな……」

あたしとフィルさんの家はそんなに離れていない。

だから、バイクだと15分もかからないで着いちゃう。

「……本当は、もつと一緒にいたかったです」

「さすがに二日連続はダメだろう。親御さんだつて心配するからな……」

ファイルさんだったら、家の親も大歓迎してくれる。

前々から、ファイルさんのこと気に入ってたし、彼氏にするならファイルさんみたいな人見つけろっていわれたし……。

それに泊まってくるって言つたときも……。

『2〜3日帰らなくても良いからね♪』

などと、親公認でお泊まりオーケーだったし……。

「……それじゃ、寂しくないように、キス……してくれませんか」

「……本当、甘えん坊さんだな。リオは」

「ファイルさんにだけ、です。あたしが甘えるのは……」

——街灯が照らす中。

あたしたちはどちらからともなく……。

お休みのキスを交わす。

「……お休みなさい、フィールさん」

「ああ、お休み。リオ」

これからも、たくさん甘えますけど、それ以上に頑張ってもっと可愛い女の子になりますから……。

だから、ずっとあたしのそばにいてくださいね。

P・S：あの夜のキスしてた現場を、ヴィヴィオ達に思いつきり見られてしまつて、しかも、写メまで撮られてしまつていた。

そのことで、色んな人に追求されることになり、付き合うことも言つただけ……。

これが原因で、ヴィヴィオやコロナが……。

『略奪愛つて、ありだよね』

などと、とんでもないことを言い出す……。

冗談つて言つてるけど、あの眼は絶対本気の眼だ!!

はあ……。

あたしの恋は、本当に波瀾万丈になりそうです。

if ending ヴィクトーリア

「あり？」

「迷彩幻術で姿隠しての死角攻撃。この程度の手品見破れないと思いませんか？」

この程度の幻術でしたら、『あの時』、あの人がよっぽど上手でしたわよ。

——そう。

あの時、私に大切なことを教えてくれた人。

ファイル・グリードさんの方がね。

\*

\*

\*

## 数年前

「どうして……どうして、うまくいかないんですの!!」

何度やっても制御がうまくいかない。

『神雷』に必要な魔力は十分あるのに、威力を上げようとすると、周りのもので壊してしまおう。

「もう一度ですわ!! 百式……」

私はもう一度、魔法陣を展開し、百式の魔法を発動させる。  
だけど……。

「っ!! いけない!!」

——しまった!!

神雷の雷が、通行人の方に向かっていってしまってる!!  
急いで、魔法をキャンセルをするが、間に合わない!!

だが、次の瞬間――。

「そ、そんな!?!」

その人は、神雷の雷を、右手だけで受け止めて、そのまま威力をいなしてしまったのだ。

驚いてる場合じゃない。

私は急いで、男性の元に駆け寄り……。

「も、申し訳ありません!! 謝って済むことはありませんが……」

封時結界を張ることも忘れて、もう少しで大けがを負わせるところでした。何を言われても、仕方がありません。

だけど、その男性は……。

「……ふう、さすがに驚いたな」

《まさか、トレーニング中に魔法が飛んでくるとは思いませんでしたよ》

「まあ、でも、感覚は鈍っていなかったと言ったことかな？」

《ちようど良いんじゃないですか。これも訓練だと思えば》

「違ういな……」

えつと……。

魔法を撃ってしまった私が言うのも何ですが……。

「えつと……。私のことを……怒らないんですか？」

すると、その男性は……。



「んっ? ああ、まあ、封時結界を張らず、魔法を使っていたのは危ないけど、今後、きちんとすれば良いよ」

《そうですね。マスターでしたから良いですが、次からは、周りに気をつけてください  
ね》

「……本当に申し訳ありませんでした」

本当に良かったです。

これで、この人に怪我をさせてしまっていたら、私はもう魔法を使う資格はありませんから……。

「それは、そうと……。さっきの魔法、威力はあったけど、制御にムラがあったみたいだね」

「!?!」

まさか、あの一撃だけで、そこまで分かると言うんですの!?

この人はいつたい……？

「よかつたら、少し魔法を見せてもらって良いかな？」

「それは……」

正直、一般の方に見てもらったとしても、何も変わりはない。  
興味本心だけで、見られるのは……。

「えっと、一応、一般人じゃないんだ」

そうやって男性がスクリーンに映し出したのは、身分証明書。  
そこに書かれていたのは……。

「時空管理局 局員……、ファイル・グリッド……。か、管理局の方だったんですか!？」

「まあね……。ということ、見せてもらって良いかな？」

「は、はい!!」

「おっと、その前に……」

すると、フィール・グリードさんは、このあたりに封時結界を作り出す。しかも高密度の封時結界を……。

これほどの結界をあつさり作り出すなんて……。

「これで、大丈夫。えつと……そういえば、名前、聞いていなかったね？」

「し、失礼しました!! 私は、ヴィクトーリア・ダールグリユンです!!」

「ダールグリユン……。ということは、『雷帝』の血筋か」

「……よくご存じで」

旧ベルカに関わってる人ならともかく、ミッド式の魔導師の方が知ってるのは珍しいですわ。

「それなりにはね。では、良いかな？」

「はい」

私は、精神を統一し、神雷の魔法式を展開し始める。  
すると……。

「はい、ストップ」

「えっ？」

「失敗する原因、なんとなく……分かった。その斧、アームドデバイスだよね」

「はい、私の愛用の斧槍型デバイス『ブロイエ・トロンベ』ですわ」

「少しだけ貸してもらって良いかな……」

フィル・グリードさんは、私のデバイスを見て、スクリーンを出し、高速でデバイスプログラムを書き換えていた。

そのスピードは、常人ではあり得ない速さで――。

「これで、多分大丈夫だと思うよ。もう一度、やってみてくれるかな」

私は『ブロイエ・トロンベ』を受け取り、もう一度神雷を展開する。

「い、これは?」

さっきまでとはまるで別物。

デバイスが、私の意志をしつかりと受け止め、展開式もロス無く伝わっている。

これならいける!!

「百式……神雷ツツ!!」

展開した魔法は、私のイメージ通り、辺り一帯を雷撃で吹き飛ばすが、爆発箇所をちやんと制御できていた。

「……やっぱりな」

「どうして……こんなことが?」

いままで、どうやってもうまくいかなかったのに……。

ほんの少しデバイスプログラムを変更しただけで――。

「簡単なことさ。君は、恵まれた魔力がある故に、自分だけで魔法を使おうとしていた。それが原因だよ……」

「どういう……ことですか?」

「あれだけ強力な魔法を、自分だけで制御するなんて不可能に近い。威力に集中するあまり、制御が無意識のうちにおろそかになってしまっていた。本来、それを補うのがデバイスなんだけど……」

《貴女はデバイスをあまり信用しないでいましたね。だから、制御が出来なかったんですよ》

「そう、だったんですのね……」

正直、デバイスは補助と考えていたから、あまり重要視していなかった。

だから、自分の魔力や身体能力を上げれば大丈夫と、いつの間にか思ってしまった。た。

「あと、君のもう一つの弱点も分かったよ。何となくだけど、搦め手に弱いでしょう」

「……はい」

正直、搦め手を使う相手には相性が悪い。

正々堂々と戦わない人は、卑怯と思ってしまうから……。

「ある程度のレベルまでは通用するけど、さらに上を目指すなら、搦め手にも慣れた方が  
良いよ」

「そうなんですけど、周りにそういう人がいなくて……」

ミカヤさんといい、あの不良娘といい、どちらかというところ、私の周りは正面から攻撃  
系が多いから……。

「だったら、俺と少しやってみようか？ どちらかと言ったら、俺はそう言う戦い方をす  
るタイプだから……」

「お、お願いします!!」

その後、何度も模擬戦をしましたが、幻術や様々なトラップ等を使った戦い方は相性  
最悪でした。

幻術も唯の分身じゃなくて、全ての分身体から攻撃がくるから、多彩で、しかも、一撃一撃が重たい。

しかも、バインドを織り交ぜたトラップに、何度も引っかかってしまう始末だし……。

これが実戦での戦い方と言うことですよ。――。

「はあ……はあ……」

「まつ、こんな感じかな。少しはお役に立てたかな？」

――少しどころじゃない。

本当に貴重な経験でした。私の苦手な所が鍛えられただけじゃなくて、魔法式の問題も解決してしまうなんて……。

「さて、そろそろ俺は行くね。頑張つてね、『雷帝』さん」

「その呼び方いやですわ。ちゃんと名前で呼んでくださいませ」

「……そうだな。ダールグリユンさん」



「ヴィクトーリアでかまいませんわ。いつか、またお会いいたしましょう。フィール・グリードさん」

「フィールで良いよ。それじゃな……」

フィールさんは、封時結界を解除し、そのまま自分のトレーニングに戻っていきました。

また、いつかお会いしたいですわ……。

\* \* \*

『ヴィクトーリア選手、ダメージは軽微!!』

「いやあ、さすががかつたいね〜」

あたりまえですわ。幻術の構成が単調すぎる。

あの人のように、徹底的にえげつない手を使うならまだしも、この程度の搦め手なら、

あの時に散々やられましたから――。

「そんな騙し技で落ちるほど、ダールグリユンの鎧は甘くありませんのよ」

ファイルさん以外の幻術使いに簡単に負けるわけにはいきません。

見せてあげますわ、雷帝の一撃を!!

「しゃーないツ!! そんじゃー最後の隠し球ツ!!」

シャンテさんは、今までにない数の分身体をつくりだし、私の周りを囲みだした。だけど、数を増やすことに集中しすぎて、分身の構成が甘い!!

「その手品は、もう見飽きましたわっ!! 九十一式『破軍斬滅』!!」

私はブロイエ・トロンベで竜巻をつくりだし、分身体を全て吹き飛ばす。

「奥義!! 「ホントはもうひとり」!!」

!!  
シャンテさん本人が、上空に飛び上がって逃れましたが、それもこれでお終いですわ

見てください。

これが私の――。

「百式ッ!!」

あの時教えてもらった――。

「『神雷』!!」

答えですわ!!

「う……あ、あ……」

だけど、まだ終わりじゃない。

相手に戦う意志があるなら、最後まで全力で相手するのが礼儀。

私はシャンテさんの頭を捉え、地面に思いっきりたたきつける。

六十八式『兜砕（かぶとわり）』

これで、とどめです!!

『ヴィク……選手……KO……で……っ!!』

「お嬢様、実況席の機材に被害を出してはいけません」

「ちゃんと……コントロールしたんですけどね」

思ったより、神雷のエネルギー余波が大きかったってことですわね。

まだまだ修練不足ね。

それに、シャンテさんは手加減をして勝てる相手では決してなかった。

……。  
ファイルさんに指導してもらっていたから、うまく立ち回れたにすぎないのだから

\* \* \*

「すみません、お時間を取らせてしまつて……」

「かまわないさ。俺も、明日は君たちと同行するんだから……」

ヴィヴィや皆さんとの顔合わせが終わつた後、私はファイルさんに、どうしてもお話がしたかつたので、お願いしてホテルの庭に来てもらった。

「でも、まさかファイルさんが、あの『伝説の部隊』の中心人物だったなんて、思いませんでしたわ」

「機動六課はミッドじや有名だけど、俺がしたのはサポートだけだよ」

——それはうそ。

この人は、自分が手柄を立てたととしても決してひけらかさない人。  
それは、あの時によく分かっている。

「それで、話したい事って何かな？」

「……は、はい」

こんな事聞くのは、本当に失礼なのは分かっています。  
でも、どうしても聞きたい……。

「あなたは……あなたは、どうしてあの時、私のことを……助けてくれたんですか？」  
「……別にそんなつもりじゃなかったよ。ただ……」

すると、ファイルさんがふと寂しい眼をし……。

「あの時の君は、どこか俺と似ていた……。そう、思ったからね」

「どういう、ことですか？」

「……昔、俺も、あんなふうに行き詰まったことがあってね。魔力もなく、デバイスを見る技術力も未熟、力もない……。だから、無茶もしまくった……」

「無茶……ですか？」

今のこの人を見る限りじゃ、誰よりも慎重な感じがします。

事細かな配慮もあり、私に教えてくれたときも、身体を壊さないようにいろいろ考えてくれた。

「そう、無茶をね。コロナの試合を見ていたのなら分かると思うけど、かつて俺は、ネフィリムフィストも多用していたんだ。身体能力を補うためにね」

「そんな!? だって、あれは……」

あれは、身体能力を上げる魔法なんかじゃない。

身体動作をオートメーション化して、更にリミッターを解除し、限界以上の力を無理

矢理使う危険な魔法。

「……まあ、若気の至りつて事かな。だからこそ、俺で出来ることなら、してあげたかった。それだけでよ」

「……そのおかげで、私は大切なことを沢山教えてもらいました」

力だけじゃない。

デバイスとの信頼関係、身体の鍛え方。

何よりも、私には周りで心配してくれる人たちがいたつて事を教えてくれた。

「俺がしたのは、ほんのきつかけだけ。役に立てたのなら何よりだよ……」

「むう……。もう少し、貴方は自分のしたことを誇ってもよろしいんではありませんか」  
「そうかな？ そんな大それた事なんかしてないんだけどな」



全く、今日ではつきりとしました。

八神司令も話してましたが、この人は本当に自分のことは二の次で、自分の周りの人のことばかりを大切にしよう。

そして、自分のやった事なんて大したことないって思ってしまう。

「フィルさん、はつきりと申し上げます。自慢とかしないのは美点ですけど、あんまり謙遜してるのは、してもらった人に対して失礼なときもあります!!」

「……それ、昔、ある人にも言われた。分かっているんだけど、どうしてもな」

「少なくとも、私は貴方に救われたんです。それは誇ってください……」

「……ありがとう。ヴィクトーリア」

「……ヴィクターで良いです。親しい人は、みんなそう呼んでますから……」

—— 本当に寂しい眼です。

微笑んでくれてますが、どこか悲しみに満ちた笑み。

どうしたら、この人が心から笑ってくれるんでしょうか。  
私じゃ……ダメなんでしょうか？

\* \* \*

今回、無限書庫で『エレミアの手記』を探すことになりましたが、チームをいくつかに分けて探索することになりました。

ヴィヴィン達の方が、このことは知り尽くしてますので、今回は彼女らを中心にチームを編成することになりました。

そして、私と一緒に行動するのは……。

「……本当に良いのか？ 他の誰かと一緒になくて？」

「ええ、あんまり固まっても、効率が悪いでしょうし、それに……」

少しでも、貴方の役に立ちたかったから……。

「でも、本当に助かるよ。古代ベルカの言語はそこまで知ってるわけじゃないからな……」

「日常では、そんなに役に立つ技能じゃありませんけど、先祖が残してくれた知識と遺産は、子孫が守り受け継いでいなくては……」

「そうだな……」

私とフィルさんは、書物を調べながら、書庫の最深部に進入していく。

エレミアの手記は、未開拓地域にあることは分かっている。

ある程度の所は、みんなに任せても良いけど、ここからはしっかりとした人が必要になる。

「フィルさんだって、執務官資格の他に、ヴィヴィと同じ司書資格あるじゃないですか。

それで充分だと思えますが……」

「充分とは言えないけど、結構苦勞して取ったからね……」

「ふふっ、昨日よりは自己否定はしないんですね」

「勘弁してくれよ……。やけにつっこみが厳しいよな」

このくらいいしないと、フィルさんの場合、自己否定をしまくりです。

だから、こうして誰かが肯定するか、つっこみを入れてでもフィルさんのことを認めてあげる方が、多少強引でも良いと思いましたわ。

そんな会話をしていたとき……。

「……どうやら、おしゃべりの時間はここまでのようだな」

「そのようですわね……」

辺り一帯が封時結界に覆われ、書庫の棚から、古代ベルカ式の魔法陣が現れ、巨大な魔物が召喚された。

身長は5メートル以上。

左右の腕にそれぞれ、機銃と大砲。

胴体は、対魔法用につくられた金属で出来ている。

「これは!？」

「……ユーノさんが言っていた、大昔からこの書庫を守っていた魔物だな」  
「上等ですわ。これくらい覚悟してきたのですから」

私は、自分の相棒を取り出し、バリアジャケットを装着する。

「そうだな……。さっさと片付けるとしますか」

《ですぬ。マスター、久しぶりに暴れましょう!!》

「だな。プリム、ブレイズモード!!」

《了解!! Blaze Mode》

フィルさんもデバイス『プリム』を取り出し、セットアップをする。

黒いバリアジャケットに、白銀の銃——。

あの時と同じ、フィルさんの姿。

「フィルさん、まさか、一人であの化け物を相手にする訳じゃありませんよね？」

「なのはさんやはやてさんならともかく、俺はそこまで驕る気はないよ。それに……」

「頼りになるパートナーもいるんだしね」

「私のこと……認めてくださるんですの？」

フィルさんは、ふと優しい笑みをし……。

「こんな危険な区域、認めてない子と一緒に来る気はないよ。ヴィクターなら、大丈夫だ  
と思っただから……」

認めてくれてたんだ。

私のこと、見ていてくれていたんですね……。

「……というこで、ヴィクター、サポート頼むな」

「はー!!」

フィルさんは、幻術魔法で魔物の視覚を攪乱し、その間に私が砲撃魔法の術式を展開する。

——百式『神雷』

この魔法で、魔物の動きを完全にストップさせる。機械式の魔物なら電撃系の魔法は最も有効なはず。

それにしても、相変わらずフィルさんの幻術魔法はすごい。

ただ、混乱させてるだけでなく、相手の死角をとらえ、無駄のない動きをしている。シャンテさんの魔法も、あの年齢では充分すごかったんですけど、これを見てしまうと、どうしても比較をしてしまう。

というか、シャンテさんの幻術魔法を指導してたのって、やっぱりフィルさんだったんですね。

——　　なんか、ジェラシーを感じます。

『ヴィクター、俺が幻術を解除したら、思いつきり神雷を撃て。タイミングは任せる』  
念話でファイルさんからの指示が来た。  
すると、幻影のファイルさんの姿が全て消える。

「今ですわ!!」

私は渾身の力を込めて、神雷を解き放つ。

魔物を中心に、爆発と雷撃が飛び交い、魔物を覆っていたコーティングが全て剥ぎ落とされた。

予想通り、あの金属は鉄に、対魔力用のコーティングをされているだけだった。

神雷の一撃じゃ、さすがに粉々には出来なかつたけど、私の役割は充分に果たした。

後は……。



「……頼みましたわよ、ファイルさん」

「後は任せてくれ……」

上空に飛び上がっていたファイルさんは、すでにビットを展開し、集束魔法の発射態勢に入っていた。

蒼く輝く銃身型ビット3つから、白銀の魔力が集まり、その一つ一つがファイルさんの半身くらいの大きさになっている。

そして、白銀の銃『プリム』には身体を覆い尽くすほどの魔力が集まっている。  
さらに……。

「……いつの間にか？」

私の周りに、3つのビットが三角形の形を形成し、強力なシールドをつくりだしていた。  
た。

ファイルさんの方を見ると、ウインクで答えた。

——まったく。

あなたはそうやって、いつも人のことばかりなんですネ。  
私でしたら、ダールグリュンの鎧で防御できましたのに……。

でも……。

貴方の気持ち、本当に嬉しいです。

\* \* \*

「とりあえず、あれで大丈夫かな？」

《全く、マスターもギリギリの魔力なのに、クリスタルケージに回すなんて……》  
「念には念を入れないとな……」



\* \* \*

「……………は？」

「気がつきましたのね……………」

スターライトブレイカーを放ち、魔物を倒した直後、フィールさんは全ての魔力を使い果たしてしまい、そのまま気絶してしまった。

ここが無重力の空間だったから良いけど、外だったら、大惨事でしたのよ!!

「……………まったく、どこが無茶しなくなったですか!! 無茶しまくりではありませんか!!」  
「……………返す言葉がない」

あなたは……………あなたは、本当にばかです。

ヴィヴィン達や私達のことは気にしてるのに、自分のことは蔑ろにしている。

「こんなの……こんなの誰も望んでいないんですよ!!」

「……ごめんな。結局、俺は……周りの人を泣かせてばかりだな」

「そう思うなら、もっと、自分のことをいたわってください……。好きな人が傷つくのは……本当につらいんですよ」

「……えっ?」

私の想いは、邪魔になってしまいかもしれない。

でも、これ以上自分なんかいなくても大丈夫なんて、悲しい思いをして欲しくないから……。

「私は……私は、あの時から、ずっと……」

だから、伝えますね……。

「あなたのことが……好き、だったんですから……」



でも……。

そんな俺の考えを見透かしたのか、ヴィクターが……。

「……一緒にいたら、危険だという理由でしたら、却下いたします。私だって、『雷帝』の末裔なのですから……」

「……そうだな。これ以上はぐらかすのは、卑怯だな」

真摯な想いには、真摯で応えなきや男じゃない。

「……俺も、きつと……あの時から、きみのこと……思っていたんだと思う」

必死に、自分と向かい合っていたヴィクターの姿に……。

でなければ、いくら気にしていたって、あそこまで気にしないと思う。

その後も、彼女が出ていた試合とかも見ていたし、今回だって再会してとても嬉しかった。

「でも、俺は……」

人を好きになるのが……怖くなってる。

ティアを失ったあの時から、ずっと……。

\* \* \*

ファイルさんが、私のことを思っていてくれたのは嬉しかった。そして、同時になぜあんなに悲しい眼をしているのかも分かった気がします。

あの人は、理由は分かりませんが、大切な人を失ったんですわ……。



しかも、それが、自分のせいだとずっと思い続けている。

——悲しすぎます。

その人だつて、フィールさんが、こんな風に自分を蔑ろにして欲しいなんて思つてはいません。

きつと、誰よりもフィールさんの幸せを願つてるはずですわ。

だから……。

「理由は、今は聞きません。でも……きつと、フィールさんを好きになつてくれた人は、こんな風に自分を痛めつけて欲しいなんて……絶対に思つてませんわ」

「!?」

「だから、これ以上……貴方の心を、傷つけさせません……」

私は、フィールさんの唇にそつとキスをする。

自分の想いも込めて……。

「……ありがとうな。ヴィクター」

「礼には及びませんわ。当たり前のことですから……」

\* \* \*

私は、書庫での事件が片付いた後、フィルさんと二人きりでバイクでツーリングをしていた。

こうして、男性の背中につかまってバイクに乗るなんて、思ってもいませんでしたわ。メットに関しては、簡易バリアジャケットを展開するので、必要はなかったし……。

「……そういえば、フィルさんの周りの人って、フィルさんとか、フィルって言ってますわね？」

「そう言えばそうだな……」

なんか、それっておもしろくありませんわね。

せっかく、こうして両思いになれたのですから、なにか特別なものが欲しいですわね……。

そう、ですわね……。

「決めましたわ!! 今日から、二人きりの時は、フィルさんのことは『フィー』って、呼びますわ!!」

「な、なんだそりゃ!? かなり恥ずかしいぞ!!」

フィルさんは、驚いてバイクのコントロールを失いかけてましたけど、それでも……。

「異論は認めませんわよ!! 八神司令から聞きましたが、ティアナさんのことをティアアって呼んでますよね。それと同じです!!」

コンビのティアナさんとそんな愛称で呼び合ってるのに、私とは認めないなんて、それは無いですわよね——。

「ぐっ……」

フィールさんはしばらくの間、苦虫を噛み潰したような顔をしていたが……。

「ああ、もう!! 好きにしろ……」

観念して、フィーと呼ばれることに承諾した。

「そうさせてもらいますわね、フィー♪」

《なかなか良い愛称ですよ、相棒♪》

「……勘弁してくれよ、サンダー」

強引にしてごめんなさい。

でも、このくらいの我が儘は許してくださいね——。

「つたく……。惚れた弱みというやつだな。で、これからどうする?」

時計を見ると、まだ、夕方を少し過ぎたくらい。

まだまだ、時間はたくさんある。

「……差し支えなかったらで良いんだけど、フィーの家……行きたいですわ」

「おもしろいものなんか、何も無いぞ。それだったら、クラナガンの繁華街の方が……」

「もう、フィーの家が良いんです!!」

少しは、女心を察して欲しいですわ。

私だって、必死でアプローチしてるんですから……。

「……分かった。じゃ、俺の家に行くか?」

「ええ!!」

\*  
\*  
\*

「ちよつと待つて。今、簡単なものつくるから……」  
「私も手伝いますわよ」

私はフィーの恋人であつて、お客さんじゃない。  
だから、一緒に料理をしたいの。

それが恋人同士つてもものでしょう……。

「……なんか、すまないな」

やっぱり、そう……。

さつきから感じていた違和感、今、はつきりとわかりましたわ。

「……これ、言いたくはありませんでしたが、私が、気付かないと思つてました？ 言葉遣いはそうでもないけど、フィー、私に壁つくつてるでしょう……」

「!?」  
フィーの顔が一瞬だけ動揺する。  
「やっぱりそう——。」

ずっと話していて分かつたんだけど、フィーは人に対して壁をつくつてしまつてる、しかも、本人が気づかないうちに……。

「やっぱり……分かつちやうか？」

「当たり前でしょう。でも、そんな壁、私が木っ端微塵に砕いて見せる。だから……」

私は強引にフィーの唇を奪う。

そして、そのままファイと深く繋がりあい……。

息継ぎの時に唇を離れたときは、互いの間に銀色の糸が出来ていた。

「ファイも、私のこと……いっぱい感じて欲しい」

「ヴィクター……」

もう、互いの間に言葉はいらなかった。

私達は、カクテルだけを持ち、そのままファイの寝室に入ってしまった。

「ただ、カクテルを飲むのは味気ありませんわね……」

私は、カクテルを口に含み、それをファイの口に流し込む。

こくんこくんとファイが呑み込むのを聞くと、それが快感に感じる。

間接キスなんて目じゃないですわ……。



「……今後、これ以外で、酔えなくなるぞ」

「でしたら、酔いたいときは、いつでも、私がこうしてさしあげますわ……」

「ヴィクターは、多少だったらアルコール平気か？」

「未成年に勧める言葉じゃないですけど、多少でしたら飲めますわよ……」

「だったら……」

今度はフィーがカクテルを口に含み、口付けされ、そのまま、カクテルが私に流し込まれる。

アルコールは、度数は大したことないのに、ものすごく酔ってしまう。

——それは、フィーと私が作り出す甘露の味。

この世のどんな美味しい酒でも、出すことの出来ない美味。

「……もう、アルコールはいりませんわ」

「ああ……」

私は、フィーに服を一枚一枚脱がされていく。

その仕草は、慣れている感じが無く、確認しながらしている。

そして、ブラのホックも外され、フィーの前に胸をさらけ出す。

「……うまく言えないけど……本当に……綺麗だ」

「その言葉だけで、充分ですわ……」

女はそんな取って付けた言葉なんかいらぬ。

本心からの言葉があれば、それが何より嬉しいですよ。

「あつ……」

フィーは、私の胸を何度も触れ、全身をくまなく愛し……。

そのたびに、私が痛がっていないか不安な表情でこちらを見つめる。

「大丈夫ですわよ。むしろ……たくさん、愛してくれるのが、嬉しいんですから……」  
「ヴィクター……」

「だから、きて……。あなたを……たくさん、感じさせて……」

フィーは、覚悟を決めて、私の中に入ってきて……。

(……い、痛い)

ここで、痛みを声に出したら駄目。

声にしたら、フィーは絶対に止めてしまうから……。

やっど……。

やっど、好きな人と一つになれるのに、そんなのはいやだから……。

すると、フィーが私の身体をぎゅっと抱きしめて……。

「ヴィクターの気持ち、痛いほど、伝わったから……。だから……。最後まで……。するからな」

「……ありがとう、フィー」

人の痛みや悲しみには、本当に敏感なフィー。  
だからこそ、私の想いも分かってくれたんだ。

私たちは、織りなす快樂に、身も心もそのまま委ねていく。

今の私達には理性は必要ない。

必要なのは、互いが求め合う心。

今は、肉体が織りなす快樂に身を任せよう。

\* \* \*

「……ごめんな。結局、何度も……」

「そこは謝る所ではありませんわ。謝るのは……無粋ですわよ」

結局、私達は、あれから何度も求め合い、最初にあつた痛みは、もう無くなつていた。それ以上に、フィーが求めてくることの方が嬉しかったから……。

フィーの方を見ると、ふと寂しい笑みをしていた。

時折見せていた、あの悲しい笑みを……。

「……少しだけ、話……しても、良いかな？」

「もしかして……」

「……信じられない話になるけど、それでも……良いか？」

——  
ばかね。

あなたが、そんなつらそうな表情をして話そうとしてるのに、嘘だなんて思うわけ無いでしょう。

「少しは私を信じなさい。自分の彼女を、ね」

「……ありがとう」

そして、フィーから語られた話はとともつらく、悲しい話だった。

本来、フィーはこの世界とは違う時間の流れの人間。

J S 事件でミッドチルダが減んでしまい、生き残った数人の仲間と一緒に戦ってきたこと。

長い戦いを繰り返し、一人、またひとりと仲間を失っていったフィー。

やっと反撃のチャンスが来て、ゆりかごに乗り込んで、最後の決戦を、生き残ったも

う一人の女性と一緒に戦ったけど……。

そこで待っていたのは、最愛の女性の死——。

目の前で愛する人を失ったファイアの悲しみは計り知れない。

でも、運命の女神の悪戯か、この時代に戻ってこれて、やり直すことが出来、事件を解決に導いた。

「……というわけさ」

「……どうして、話してくれたの？ これ、明らかに最重要機密よね」

「そうだな……。でも、ヴィクターにだけは……隠しておきたくなかったんだ。こんな俺でも……好きになってくれた人だから……」

ファイアが、向こうの世界のことを思い出して、上を向いて必死に泣かないようにして

大切な人を目の前で失って、完全に吹っ切れる人なんて、誰もいやしない。

それが、深く愛していた人なら尚更……。

私は、涙を抑えることが出来なかった。

フィーは、こんな悲しみを背負っても、まだ自分の身体を、心を傷つけている。

「こんな俺、なんて言わないの。私が愛してる人なんだから……」

せめて、私が出来るとは、こうしてフィーを抱きしめて包んであげることだけ……。

「……そう、だな。少し……眠って、いい、か……」

「遠慮無くどうぞ。それだけ安心してくれてるって事でしよう」

フィーは、そのままスツと眠ってしまった。

目の縁にクマがあった所を見ると、相当眠っていなかったのね。



魔法とかで誤魔化しても、そういうのは分かるものよ。

フィー……。

貴方が私の背中を支えてくれるように、私も貴方のことを支えるから……。

だから、私にだけは甘えなさいね。

\* \* \*

「運転してみたいのか？」

「ええ、いつもエドガーが運転してくれてるんだけど、自分では……」

「まあ、そうだろうな。お嬢なんだしな……」

「フィーまでそう言うこと言わないで!! だから、こういうときでもないと出来ないの

よ!!」

こないだやつと自動車免許を取ったのに、エドガーったら、お嬢様には運転させられませんかかって、今までさせてもらったことがないの。

運転技術は酷くはないのに……。

「良いよ、でも、結構いじってるから、気をつけるよ」

「ありがとう、フィー!!」

早速、私はフィーの車に乗り込んでみる。

家の車は、よく見るセダンタイプだけど、フィーの車は見たこともない形の白のスポーツカー。

ミッドでは絶対に見かけない形。

流線型で、まるで剣のような美しさ——。

聞いてみると、わざわざ管理外世界へ行って手に入れてきて、それをこっちで使える

ようにしたなんて……。

しかも、家の車とは違って、いろいろなものが付いていた。

見たことがないメーター類。

家の車とは違った低いエンジン音。

どれも違っていて、新鮮味があふれてる。

「一応、説明しておくよ、これが……」

正直、どれが何のものを現してるか分からないけど、運転に必要な最低のことは覚え  
ましたわ。

「それじゃ、行くか。そんなに気を張らなくても良いからな」

「わ、分かってるわよ!!」

「とりあえず、クラナガンまで行ってみるか?」

「そ、そうね……」

ギア車も一応運転出来るんですけど、この車いろいろ変わっていて、私に出来るのかしら!?

私は恐る恐る車を発進させた。

「そうそう、その感じ。後は、ゆっくりとギアを変えていけばいい」

「え、ええ……」

一時間後——。

最初は怖くておっかなびっくりでやってましたが、慣れてくると楽しくなり、思わずスピードを出しすぎる所でしたわ。

「……つたく、今日は少しくらいのスピード違反は見逃すから、安全に運転してくれよ。でないと、エドガー君から今度こそ運転禁止って言われるぞ」

「それだけはいやですわ!! 運転の楽しさを知ったのに……」

フィーも、どちらかというと、エドガーに近い所があります。事故でも起こしたら、絶対にエドガーに言うに決まってるわね……。

この先は、安全運転で行くことにいたしますわ……。

その後は、スピードを上げすぎることもなく、私たちはクラナガンの繁華街に到着いたしました。

\* \* \*

「で、やりたいことはこれか？」

「……そうよ。フィーの手帳、見せてもらったけど、ヴィヴィ達や八神司令達と、あんなに楽しそうにプリクラをして……。私との写真が一枚もないのよ!!」

どの写真も、みんな笑顔に満ちあふれていて、見ていて本当に羨ましかったですわ。

「それは仕方ないだろ……。ヴィクターとは、昨日、一緒になったばかりなんだから……」

「だからよ!! 私もフィーとの写真が欲しいのよ」

昨日、恋人同士になったばかりなんだから、こういうのがないのは分かってるわ。だからこそ、これからたくさん楽しい思い出をつくっていききたいのよ!!

「そうだな……。だったら、これからたくさん……つくっていこう。思い出を、な……」  
「あつ……」

昨日までとはちがって、心からの笑顔。  
まだぎこちないけど、心から笑ってくれてる。

「ええ♪」

フィー、これからいっばい笑顔になってくださいね。

私も、精一杯支えますから……。

早速、私達はプリクラマシーンの中に入り、沢山写真を撮りまくった。

中には、腕を組んだり、頬にキスをしたりと大胆な物も作ってしまったけど、それも  
ありですわよね。

さらに、その写真に文字を書き込み、恋人ならではのプリクラに作り出す。

「……これ、絶対にヴィヴィオやみんなに見せられないよな」

「私は別に見せてもかまいませんわよ♪」

「お、おい!？」

その方が、自慢も出来まずし、牽制にもなる。

この人は、分かっているけど、ヴィヴィオやアインハルト、そして八神司令達にも好  
かれてるのよ。

少しは自覚して欲しいものですわ!!

\* \* \*

「もうすぐ着いちゃうな……」

「……ええ」

楽しい時間はあっという間。

明日からは、フィーはまた執務官としての仕事に戻ってしまう。

長期任務ではないけど、それでも離ればなれになるのはやっぱり切ない……。

フィーがゆつくりと運転してくれてるが、それでも到着してしまうのには変わらないから。

「……着いちゃい、ましたわね」

私は車のドアを開け、門の前まで来るが、やっぱり寂しいですわよ……。



そう思ってたとき……。

「……フィー？」

フィーが、後から包み込むように私を抱きしめてくれた。

——あたたかい。

こうして、抱きしめられてると、あなたのことが感じられる。

フィーの優しさが、たくさん伝わってきますわ。

「……帰ってくるよ。おまえが、俺のことを想っていてくれる限り、な……」  
「だったら……。その証を頂戴……」

私たちは、どちらからともなく……。

星空の元、口付けを交わす。

それは、永遠を誓うキス。

ねえ、あなたは想っていてくれる限りって言っていましたけど……。

それだったら、あなたのことを、ずっと想い続けますわ!!

だって。

私の幸せは、あなたといることなんですからね。

後日談になります。が、例のプリクラは、聖王教会でみんなが集まったときに、私が自分で見せてみんなを驚かせて、フィーと付き合ってることも、そこで発表したんだけど……。

ヴィヴィやアインハルトは予想してましたわよ。

!!  
だけど、まさかジークまでが、本気で勝負を挑んでくるなんて思いませんでしたわよ

でも、そのおかげで良い牽制になりましたわ。

私、絶対に譲りませんから!!

## i f e n d i n g ジークリンデ

「……また、してもうた」

もう、何度目やろうな。

部屋を、物を跡形もなく壊してしまうのは……。

大好きだったぬいぐるみも人形も、全部壊れてしもうた。

「ほんま……いやに、なるわ」

力を暴走させて、周りの人たちを傷つけて……。

ウチは、こんな記憶なんかいらぬ。

こんな人を傷つけるだけの力なんかいらぬ!!

どうしたら、この力に振り回されずにすむんや……。  
だれでもええ……。

——だれか、ウチを助けて。

そんなとき……。

「……なに、そんな悲しい眼をしてるんだ？」

黒髪の男性がウチに話しかけてきた。

それが、後にウチの運命の人となる最初の出会いだった。

\*

\*

\*

(話は聞いていたけど、これは酷いな……)

タイムワープをするとき、アルテミスから、ある少女の話を聞かされた。それは、ベルカの血筋『エレミア』の記憶を持つ少女の話。

未来の世界では会うことがなかった女の子だが、それには理由があった。

この子は、幼いとき、両親にも先立たれ、残された遺産で暮らしていたけど、エレミアの記憶と力が彼女を大きく苦しめていた。

9歳の彼女では、その力をコントロールすることなんか出来ず、触れる物全てを壊してしまっていた。

それを周りの人間が恐れ、一人、また一人と彼女の前から消えていった。

そのせいで、彼女は自分の心の殻に閉じこもってしまい、死んでいるも同然の状態になっちゃった。

それだけではない。

後から知った話だったが、クアットロの奴が、彼女の力を利用してしようとしていたことも分かった。

あいつが彼女のことを知ったときは、すでにこの世にはいなかったから利用されなかっただけで、もし、このままだったら、あいつのことだ、必ず利用するに違いない!!

———そんなことだけは絶対にさせない。

一人の少女の人生を、あの女に狂わせてたまるか!!

「……壊れるんよ」

「壊れる?..」

少女は、人生の全てに倦んだ老人のような瞳をしていた。  
生きる希望つてものが全く感じられない……。

「ウチが触ると、みんな……壊れてしまうから」

その言葉が物語るように、部屋は破壊の限りを尽くされていた。柱にある抉られたような傷跡。

辺り一帯に散らばってしまったボロボロのぬいぐるみ達。

「だから、あんたも……はよ離れた方がええよ」

「……」

——泣いている。

この少女は、心が引き裂かれそうな悲しみを抱えて、ずっと泣いている。俺は、少女に歩み寄ろうとするが……。

「……くっ」

少女の魔力をこめられた拳を、腹部にめり込まされた。



「……聞こえへんかったのかな。離れてって……言ってるんや!!」  
「はあ……はあ……」

——まずいな。

完全に今の一撃で、肋が数本持っていかれたぞ。

呼吸するのも苦しい。

気を抜いたら、今にも気絶してしまう。

だけど……。

「……どうした。エレミアの拳は、そんなもんか？」

「……そんなに、壊れたいんやったら、壊してあげるで……」

少女の拳は、俺の急所を的確に捉え、確実に俺の身体を壊していく。

右足

左足

腹部

左手

残されたのは右手のみ。

だが、潰されるのも時間の問題だ。

《マスター!! どうして転移魔法使わないんですか!! あれだったら、対応できますのに!!》

「……確かにワープ使えば、意識刈り取るだけなら可能だ。だけど……それじゃ駄目なんだ」

ただ、勝つだけだったら、この子の心の闇は一生晴れることはない。

今、この子に必要なのは、どんなことをしても壊れないと思わせること。

そして、この子の悲しみを受け止めること。

——それが出来なかつたら、意味はない。

《……まったく、古代ベルカの『エレミア』に挑むのに自殺行為ですよ。でも……》

プリムは一呼吸置いて……。

《そんなマスターだからこそ、私も全力でサポートするんですけどね。マスター、やるか  
らには全部受け止めてあげてくださいね!! 中途半端はなしですよ!!》

「……サンキュー、プリム」

俺は、最後の気力を振り絞り、もう一度立ち上がる。

この子に言葉で伝えるために——。

「なんで、なんで、あんたは立ち上がれるんや……。そんなボロボロになって……。どうしてや!？」

「そうだな……。うまくは言えないけど……」

最初は、クアットロに利用されないようにと見に来ただけだった。だけど、こうして会って、こんな悲しい眼を見て……。

こんなに心が泣いてる女の子を、放っておけるわけ無いだろ!!

\* \* \*

何度も、何度も立ち上がってくる。

ウチがいくら壊しても、その度に傷だらけになりながらも立ち上がってくる。

そして、この人の目はウチを憎むどころか、むしろ心配してくれてる瞳をしている。

なんでや……。

なんで、見ず知らずのウチにそんな優しい笑顔をしてくれるんや？

そして、唯一残された右手でウチの頬にそっと触れ……。

「……泣いてる子を、放っておけない。それだけだよ……」

「あつ……」

ばかや……。

この人は、ほんまの大ばかや。

たったそれだけの理由で、こんなに傷だらけになって……。

「ごめんなさい……。ほんまに……。ごめん、なさい……」

こんなに優しい人を、ウチはこんなに傷つけてしまった。

エレミアの力に身を任せて、ウチのことを本当に心配してくれる人を傷つけてしまった。

「……謝る必要なんてないよ。その歳で、エレミアの記憶と経験を刻まれて、それをずっと耐えていたんだからね……」

「でも……。でも……」

そんなのは理由になんかならない。

この人を傷つけてしまったのは、事実なんだから……。

だけど、この人はとても優しい笑みをし……。

「……笑ってくれないかな」

「えっ？」

「もし、俺のことを少しでも思ってくれるなら、笑顔でいてくれ。やっぱり、女の子は笑顔が一番だから……」

「……ほんまに、あほですね。自分をボロボロにした相手に、そんなこと言うなんて」

「かもな……」

こんな事言ってくれる人なんか今までいなかった。

お父さんとお母さんがいなくなってから、ずっと、ウチはひとりぼっちだったから……。

「そういえば、まだ名前、言ってませんでした。ウチはジークリンデ・エレミアです」  
「俺はフィル・グリード。一応、管理局員の卵って所か、な……」

フィルさんは、さっきまでのダメージのせいで、そのまま体勢を崩してしまった……。

《マスターツツ!! まったく……。無茶すぎです》

「すまないな……。プリム」

フィルさんは、デバイスに回復魔法をかけてもらって、どうにか立ち上がれるようになって……。

「ふう……。さすがに体中痛いな」

《当たり前です!! 本来なら今すぐ入院コースです!!》

「……ううつ、ほんまにすみません」

全身があんなになるまで、ウチの打撃を受け続けてきたんや。

死んでしまってもおかしくなかった攻撃をずっと……。

《気にしないで良いですよ。ウチのマスター、これくらいでちょうど良い薬ですから

……》

「……厳しいな、プリム。ははっ……」

「ふふっ……。確かに」

「《ははははははっ!!》」

久しぶりかもしれないな。

こんな風に笑おうなんておもったのは……。



\* \* \*

「少し、なにか食べようか？ エレミアはしばらく食べてなかったみたいだし、俺で良かったら、何か作るから……」

「……良いんですか？」

「ああ、ひとりぼっちで食べるご飯より、誰かと食べた方が美味しいからね。少し待ってね……」

そう言って、フィルさんは台所に行き、手際よく料理をしていく。ウチ、料理スキル全くないから、ジャンクフードだよりだし……。

「さあて、出来たぞ」

作られた物は、卵焼きにお味噌汁、そして……。

「おにぎり……」

「そう、おにぎり。人の温もりの味を感じるにはこれが一番だからね。さあ、どうぞ」  
「いただき、ます……」

ウチはおにぎりを一口食べ……。

「……おい、おいしい」

——懐かしい味。

お父さんとお母さんがいたあの時の懐かしい味。

よくお母さんが、こうしてあったかいご飯を作ってくれたんや。

「……美味しい、ほんまに……おいしい……」

両親との思い出を思い出してたら、涙がポロポロとあふれてくる。すると、フィルさんが抱きしめてくれて……。

「……泣きたいときは、思いつきり泣いた方が良い」

「……う、うわあああああああつっ!!」

しばらくの間、ウチはフィルさんの胸の中で……。

本当に久しぶりに思いつきり泣き叫んだ。

\* \* \*

「ほんまに……いろいろご迷惑かけました」

「いや、少しでも助けになれたのなら、それで良いさ……」

さつきまでと違って、エレミアの瞳には光が戻っている。  
生きようとする力が……。

「これから、どうするんだ？」

「……この屋敷を売って、どこか一人で暮らそうかと思つてます」

確かに、両親の思い出が詰まった家にいるのはつらいだろうな。

だけど、悪いがこれだけ破壊され尽くした屋敷だと高くは売れない。

「残酷なこと言つて悪いが、今のこの屋敷には資産としての価値は殆どないぞ」

「そう、なんですすよね……」

エレミアもそれは分かつてるらしく、それを当てにするわけではなさそうだが……。

「……それと、君を放つておくと、ジャンクフードばかり食べそうで心配だな」

「あうう……」

やっぱりそうか。

冷蔵庫を調べたとき、ジャンクフードが殆どで、米と卵と簡単な調味料しかないって

……。

絶対に栄養偏るぞ……。

「……………」までお節介ついでだ。『エレミアの神髄』に関しても、鍛えればコントロールは出来るから、栄養管理も兼ねてしばらく俺の所にくるか？」

「……………」でも、ご迷惑では」

「あのね……。今の君をそのまま野放しにする方が危ないよ。修練は良いとしても、栄養面、絶対に駄目になるだろうし……。」

「……………」だって、ジャンクフードの方が美味しいんだもん」

拗ねた表情が出るようになったのは、人間らしさを取り戻したって事で良いんだけど……。

もう少しだけ、自分を大切にしような。

「そう言ったことも含めて、よかつたらだけど、一緒に暮らしてみないか？俺も近いうち大きな仕事入るから、それまでの期間限定だけどね……」

「……分かりました。それでは、お世話になります!!」

「あ、そうそう。そんな無理矢理に敬語使わなくて良いから。もつとぎつくばらんにな……」

「それじゃ、ファイルにい、つて……言つてもええかな？」

ファイルにい、か……。

今の彼女には、兄貴が欲しいんだろうな。

「……俺で良かつたら、良いよ。これから、よろしくな。エレミア」

「むう、ファイルにも、ウチのことはジークつてよんでや!!」

「分かつた……。改めてよろしくな、ジーク」

「うん♪」

この笑顔を守るためにも、俺はクアット口を絶対に……倒さないとな。

こうして、JS事件が始まるまで、俺たちは一緒に暮らすことになった。

最初は、レジアスの親父さんをお願いするつもりだったけど、ジークの強い希望でそのまま二人で暮らすことになってしまった。

てつきり、オーリス姉あたりが、若い二人がつていうと思つていただけ……。

『あなたの場合、誰かが一緒の方が無茶しなくて良いわ。だから、ジークちゃん、ファイルのこと頼んだわね』

俺、そんなに無茶するように見られていたのか……。

レジアスの親父さんとの顔合わせが終わった後、しばらくの間、色んな人と出会うことになった。

ジークと同じ、古代ベルカの血筋『雷帝』の流れを汲むヴィクトリアとも顔合わせが出来て、いつの間にか二人とも仲良くなっていた。

なんか、うれしいよな……。

これで、俺が何かあったとしても、周りの人たちがいてくれる。  
今のジークは一人じゃないんだから……。

そして、新暦75年2月……。

\* \* \*

「ファイルに……。行ってしまうやね」

「ああ、大切な仕事が残ってるから……」

ファイルに聞こかされていた約束の刻。

とうとう来てしまったんやね……。

「ウチもファイルにいない間、自分をもっと磨きたいから、旅、行くことにしたわ」



「そっか……」

ファイルには、この家を使ってくれて良いと言ってくれたが、エレミアの神髄はまだ完全にコントロールできる訳じゃない。

もつと鍛えて、きちんと使いこなせるようになるんや。

「だったら、めざすなら世界一を目指してみろ。ジークにはその資質は十分あるから……」

「うん!! ウチもファイルにいと再会したときに誇れるように頑張るわ!!」

強さだけでなく、ファイルにいとずっと一緒にいられる素敵な女の子になれるように……。

ファイルにも、心に悲しみを秘めてるのは一緒に暮らしていて分かった。だから、その悲しみをウチも一緒に背負わせてや。

「そのためにいっぱい頑張るから……」。

\* \* \*

「……………うっ……………ううう……………」

「全力のエレミアを相手にして、五体満足で帰れると思ってもらったら困るよ」

ウチはファイルにいない間、死にもものぐるいで修練を積んだんや。  
心も身体も鍛えて、世界一にもなった。

だから、そう簡単に勝てると思わないでや!!

「例え、五体が砕けようと、どれだけ血を流そうと……………」

彼女は必死になって立ち上がってくるけど……………。

「守るべきものを守りきる!! それが覇王の意志です!!」

「それ、自分の意志ある？」

「私は私です。私は自分のためにここにいて——。自分の意志で戦うだけです!!」  
「そうは見えへんからゆるーてるお節介や」

きつと、ファイルにいやつても、同じ事を思うやろうな。

いまのあの子は、自分の過去に縛られてしまつてる。

かつてのウチのように、記憶に縛られてしまつてゐる。

——それはとても悲しいことやから。

ウチは腕十字で動きを完全にロックする。

「無くなった国やいなくなった人のために、君が人生を犠牲にするんは間違つてる」

そう……。

ウチも、ファイルにいからそれを教えてもらった。

自分の身体があんなにポロポロになるまで、ウチを助けてくれた。

そのおかげで、ウチは『エレミア』の転生体としてではなく、ジークリンデ・エレミアという一人の女の子としていられるようになったんや——。

——それを、今度はウチが伝える番なんや!!

ウチと同じ、過去の記憶で苦しんでいる女の子を助けるために!!

「……あ、ああ」

腕十字は強引に外されたけど、今度は腕と胴体を完全にロックした。

ウチのフロントチョークは、そう簡単には外れへんよ。

500年分の戦闘経験は、伊達やないんやで。

「過去に縛られて、体と心を痛めつけて、自分の人生を犠牲にして、そんなんで誰が喜ぶんや……」

そんなん誰も喜ばへん。残るのは悲しみだけ……。

「君は、ファイルにいが必死で伝えようとしていたことを分かってない。ずっと一緒にいて、それがわからへんかった？」

ファイルにがからの手紙とかで、今、彼女たちと一緒にいることは知っていた。きつと、ウチの時と同じで必死に助けようとしていたんやろうな……。

だから、ウチがファイルにがに代わって伝えたる。

あの人がどんな思いで、君に伝えようとしたかを……。

\*

\*

\*

「なかなかええ眺めやろ？」

「確かにそうですけど、ずいぶん奮発しましたね。はやてさん」

「何いっとるんや。あんたも大半払ってるくせに……」

「さすがに、全部おごりは申し訳ないでしょう……」

いくら司令クラスとはいえ、この人数のおごりは厳しいだろう。

少しは俺も出さなきゃ申し訳ない……。

「まったく……。それがフィルのええところでもあり、欠点でもあるんやけどね。さて、あっちでお姫さんがずつとまっとなるで!!」

「おつとと……」

はやてさんに背中を押され、俺はみんながいるテーブルに行った。

そこで俺に話しかけてきた女の子は……。

「久しぶり……やね。フィルにい」

あの時よりも、ずっと成長していたジークリンド・エレミアだった。

「……髪、長くなっただんな？」

「うん……。あの時から、ずっと伸ばしてたんや。ファイルにいと再会できますようにって」

「そっか……。その髪型もよく似合ってる。まあ、ジャージってのはちよつとなんだけどな……」

「あうう……」

むかしから、ジークは服に関しては無頓着だったからな。

動きやすければそれで良いって言ってたし……。

「それはファイルさんの意見に賛成しますわ」

「ヴィクターまで……酷いわ」

俺たちのことを見つけて、ヴィクトリアが向こうからやってきて……。

「お久しぶりですね、ファイルさん。あの時は……本当に、ありがとうございました」

「俺は大したことはしてないよ。切欠くらいにはなったかもしれないけどね……」

あの時、成長することが出来たのは、彼女自身の努力だ。

俺は、背中をそつと押して切欠を作ったに過ぎない。

「本当、相変わらずですわね。それをとにかくとしまして、ジーク!!」

「な、何や!？」

「私、以前にも言いましたわよね。そんなずぼらな格好じゃ、フィルさんに嫌われますわよって……」

「お、俺は別に……そこまでは」

「フィルさんは、少し黙っていてください」

ヴィクトーリアの有無を言わさない迫力に、俺は黙るしかなかった。

\* \* \*

(とりあえず、フィルさんには聞かれたくありませんので、念話に切り替えさせてもらい



ますわよ)

(いったいどうしたんや、ヴィクター?)

ヴィクターが通常会話から、念話に切り替えてファイルに聞こえないようにして話を始めた。

(この際、単刀直入に聞きますわ。あなた……。ファイルさんのこと、どう思ってますの?)

(ど、どうって……ウチは……)

どうって言われても、ファイルにはウチにとっても優しく、時には厳しいけど、それでもウチのことをいつも温かく見守ってくれた。

(じゃ、例え話をさせてもらいますわ。ファイルさんと私が付き合うようになったら、あなたはどんな気持ちになります?)

(……えっ?)

ヴィクターとファイルにいが付き合う？

二人なら、とても似合うカップルだと思う。

性格こそ正反対だけど、ファイルにいのことはウチと同じくらい分かっている。  
でも……。

なんや、このもやもやとした気持ちとは？

二人のことを思うだけで、とてもつらく悲しい気持ちになってく。

ファイルにいの、ヴィクターも大切な人なのに……。

—— いやや。

ファイルにいが誰かと付き合うなんて、そんなん……いやや。

すると、ヴィクターがすごく優しい笑みをして……。

(答え、出ているじゃないですか。今のあなたの気持ち、それがフィルさんへの想いですわよ)

(あつ……)

そっか……。

ウチがずっと思い続けてきた想い。

—— 答えは、最初からあつたんやな。

「フィルにいい」

「ん？ どうした」

「……食事が終わったら、少しだけ……二人きりで話したいんや」

だったら、ウチがすることはたった一つ。

自分の気持ちをファイルに伝えることだけや。

\*

\*

\*

「…………ごめんなさい。明日、ウチらのことで忙しいのに…………」

「別に良いって。可愛い妹分の頼みなんだしな…………」

「…………妹、か」

—— やっぱりそうなんやね。

ファイルにいいとってウチは妹でしかない。

でも、ウチは決めたんや!!

ファイルに自分の気持ちを伝えようって…………。

「……ねえ、ファイルにい」

「ん？」

「……ファイルにいとつて、今でもウチは……妹としてしか見れない？」

「えっ？」

しっかりせえ!!

ヴィクターにあんなに背中を押してもらったのに、ここで怖じ気づいてどうするんや

!!

「ウチは……うちは……」

あの日、ファイルにいに救ってもらった日から、ずっと……。

「ファイルにいのことが……大好き、なんや」

一人の大切な人として、好きだったんや……。

\*

\*

\*

——ジークの身体が震えている。

今の言葉を伝えるのに、どれだけの勇気がいるかは俺でも分かる。

今までの関係が崩れるかもしれない。

そんな想いがずっとあつただろうに……。

だけど、ジークは勇気を持って俺に気持ちを伝えてくれた。

その気持ちに真剣に答えなきや、人として失格だ。

だけど伝えても良いのだろうか？

——女神『アルテミス』から言われたあの事も。

俺がその事で悩んでいたとき……。

《……マスター、ジークに話しましょう。全てを……》

「プリム、お前……」

《今の彼女は知る権利があります。マスターに、必死で思いを伝えた彼女には……》

そうだな……。

荒唐無稽な話になってしまっただろうが、ジークに伝えよう。

それが今の俺に出来る精一杯のことだから……。

\* \* \*

「ジーク、これから話すこと……。御伽話の様な話だけど、聞いて、くれるか？」

ファイルには、本当につらそうな表情をしている。

きっと、ファイルにいいとって、とてもつらいことをウチに言おうとしてるんや。

「……………うん、ウチはファイルにいいのこと、信じてるから……………」

「……………ありがとう」

ファイルにいいから語られた話は、本当に悲しい話だった。

本来はこの世界の人ではなく、時間軸が違う世界の人であること。

ミッドチルダは、あのゆりかごが殲滅して、ファイルにいいの世界は古代ベルカの戦乱時代のような状態だと言うこと。

その戦いの中で、ファイルにいいの大切な人たちが次々亡くなっていき、そして……………。

最後の戦いでは、ファイルにいいが唯一愛した女性まで失ってしまったこと。



——それだけではなかった。

ファイルには、女神によって、この時代に返ることが出来たが、その時にウチのことも聞かされていて、それで助けてくれたことも……。

「……最初は、クアットロの野望に利用されないように助けるだけだった。でも、あの日……」

ファイルには一呼吸を置いて……。

「ジークの悲しい瞳を見て、使命感とかそんなのは全部吹っ飛んだ。絶対に俺が助けるって……我ながら無茶をしたさ」

「そうや、ファイルには死ぬかもしれないウチの力を真正面から受け止め続けてくれた。その思いが、ウチの閉ざされた心を溶かしてくれたんやで……。」

「そして、JS事件が始まるまでの間、一緒に暮らして、俺の心もすごく安らいでいた。そのおかげで、俺は必ず生きて帰ろうって思うようになったんだ……」

《ですね……。こつち戻る前までは、クアットロと差し違える覚悟でいましたからね。マスターの心を救ってくれたのは、間違いなくジークですよ》

そんなことない……。

ウチは、いつもファイルにいに迷惑ばかりかけていた。

『エレミアの神髄』のコントロールが出来るまで、何度もファイルにいを傷つけていた。日常だって、いつもファイルにいに甘えてばかりだったし……。

「だから、こんな俺でもよかつたら……」

ファイルにいがウチをぎゅっと抱きしめて……。

「あっ……」

「……ずっと、そばにいて欲しい。妹としてではなく……。一人の大切な女性として……」

「うん……。ずっと、ずっと……。いつしよにしよう。フィルにい」

——ウチとフィルには、星空が見守る中。

永久を誓うキスを交わした。

それは兄と妹から、ひとりの男女に代わった瞬間でもあった。

\* \* \*

「んっ……。ふあ……。あ、ん……」

ファイルにいとウチは、ファイルにいの部屋に着くなり、どちらからともなくキスをする。着ているものが煩わしく、二人とも今は生まれたままの姿でベッドで愛の営みを繰り返している。

「…………ごめん、な。ウチ、胸…………おつきくなくて…………」

ヴィクターみたいに大きかったら、ファイルにいても、もっと喜んでくれたと思うのに…………。

「そんなことないって…………。ジークの胸、俺は好きだけどな」

「…………こんな、ちっちゃな胸でも？」

「…………どうやら、言葉よりも態度で示した方が良いようだな」

そう言つて、ファイルにはウチの胸を何度も揉みし抱き、さらに胸を舌が何度も這わせて…………。

「あ、ん…………。むね、舐め、ないで…………。んあつ!!」

ファイルにいが何度も舌を這わせるので、身体中電気が走るような快感が襲いかかる。今まで感じたことがなかった快感に、ウチはパニックを起こしかけている。さらに、胸だけでなく、お尻や足に至るまで、全身をくまなく愛されて……。

「ばかあ……。ファイルに、いじわるや……」

ウチは、襲いかかる快感の海で気絶しかけていた。

こんなん、はじめてや……。

「でも、分かっただろ。俺がどれだけ、お前のことを求めたいかが……」

「……うん、いっぱい伝わった。でも……」

こうして、ファイルにに愛されるのも良いけど……。

「……きて、ファイルに。ウチと……ひとつに、なる……」

「……痛かったら言えよ」

「大丈夫、女の子を甘く見ないでや……。好きな人を受け入れられるのが、何よりの幸せなんやからね……」

そして、ファイルにはウチの中に入ってくる。

最初は痛かったけど、愛する人がいるって感じられると、それすら愛おしく思える。

「……ええよ。もつと……もつと、ファイルにいを感じさせて」

「もう、加減……出来ないからな」

「……そんなんしないで。いっぱい……いっぱい……ウチのこと、愛して」

——月明かりが照らす部屋で。

ウチらの営みは幾度となく繰り返される。

それは、今までの時間を取り戻すかのごとく。

——激しく二人は愛し合う。

\* \* \*

「それにしても、ジーク、ずっと『フィルにい』のままなんだな？」

「んー。最初はフィルさんとかにしようって思ってたよ。でも、どうにもしつくりせえへんし……」

フィルさんって呼ぼうとすると、なんか他人行儀やし。

しかも、フィルにいつて、人に対して心の壁作るから、そんなことしたらさらに距離広がっちゃうし……。

でも、フィルって呼び捨てにするのは、まだ恥ずかしいんや……。

「最大の理由は、フィルにいつて呼び方は、ウチだけのものだから、なんか特別な気がして……」

「確かに……元『妹』なんて関係は、ジークだけだしな」

「あとは、ティアナさんが羨ましかったんや。ファイルにいに『ティア』って呼ばれてるし……」

確かにジークって呼んでくれてるけど、それはヴィクターや番長達も一緒や。

ファイルにいと特別なものは、この呼び方しかないんや……。

「だから、これはウチだけの宝物なんや〜♪」

「そっか……。そういうことなら、好きに呼んでくれ」

「うん!!」

そうやって、ファイルにいはウチの髪をそつと撫でてくれる。

「いつものツインテールは可愛いって感じだけど、髪おろした今のジークはきれいって感じだな……」

「ありがとう、ファイルにい〜♪」

ウチはファイルにいにすり寄って、思いつきり甘えていた。



ファイルにあって、普段はこんなこと恥ずかしくてなかなか言ってくれないけど、今はお互いに素直な気持ちになっている。

ファイルに、絶対にあとで顔真っ赤にするんやろうな。

「ファイルには、どつちの髪型が好き？　ウチはファイルにの好きな方にするで」

ウチはロングでもツインテールでも、どつちでもええよ。

もし、シヨートのの方が良いっていても、髪を切るし……。

「そうだな……。どちらもあるから、一概には言えないかな。欲を言えば、どちらも見せてくれると……嬉しいかな」

「じゃ、これからいっぱい見せたるよ。いろんなウチの姿を、ね……」

「……楽しみにしてる。でも、今は」

「うん……」

今は、もつとファイルにひとつに繋がりたい。

それは、ファイルにもウチと同じ気持ちだから……。

\* \* \*

「それじゃ、後ろに乗りな」

「うん」

エレミアの手記が見つかって、それぞれ解散になり、ウチはファイルにいと一緒に帰る  
ことになった。

本当は、何人かがファイルに送って欲しいってアピールしてただけど、ヴィク  
ターが気を利かせてくれて、ウチらを二人きりにしてくれた。

ほんま、ヴィクターには頭があがらへんで……。

ウチはファイルにいのバイク『ロードサンダー』の後ろに乗り、ファイルにいの身体にしつ  
かりと抱きつき、思いっきりエンジンを吹かして、バイクを発進させた。

「それにしても、ファイルにいのバイクに乗るのも久しぶりやね」

「そうだな。俺が六課に入る直前が最後だったからな」

「せやね。あの時はファイルにいの……恋人になれるなんて、思ってもなかった。ウチみたいになちんちくりんじゃ、きつとダメだと思ってたし……」

ファイルにいの周りには、本当に綺麗な人がたくさんおった。

機動六課の人たちはもちろん、ミカさんもヴィクターもみんな綺麗な女性ばかりだったし。

それだけやのうて、ハルにゃん達だって、充分しつかりとした考え方を持っていて、可愛い女の子達や。

そう考えたら、ウチなんて……。

「ジークはもう少し可愛いって自覚した方が良いかな。少なくとも、俺には誰よりも可愛い女の子なんだし……」

「……ファイルにいが、そう言ってくれば、それだけでええんや」

他の誰よりも、ファイルにいが可愛いって言うてくれれば、それが一番嬉しいんやから……。

「……そつか。それと可愛い服も持っていたんじゃないか。普段からそういうの着れば良いのに……」

今着ている服は、以前ヴィクターがウチにプレゼントしてくれた洋服。  
紫のキャミソールに黒のショートパンツの組み合わせ。

動きやすくて、ウチの数少ないお気に入りの私服なんや。

「だって……。ウチにはおしやれなんて縁がないものやったし」

「だったら、今度の休みにクラナガンに見に行くか？ 2と3着だったら買ってやれるし」

「え、ええよ!? そんなん悪いし……」

ファイルにいの事や、絶対に安売りの服なんか選ばない。  
良いものだったら、ブランドとかお構いなしで買いかねない。  
女の子の服って、ブランド物だとめっちゃ高いんやで!!

「気にするな。自分の彼女に少しくらいはプレゼントしてやらないとな。だから、少しは見栄を張らせてくれ」

——いつもそうやったね。

自分の大切な人達には、めっちゃ甘いファイルにい。

そのせいで、ヴィクターみたいにライバルも多いんやけどね。

「……ありがとう、ファイルにい」

ウチは、フィルにいの背中に、さらにぎゅっと抱きつき、自分の胸を押しつけた。フィルに、何も言わないけど意識してくれてるのはわかってるで。

心臓の音がバクバクしてるし、思いつきり照れてるのバレバレや。

でも、ウチを女の子と見てくれてるのは、やっぱり嬉しい。

結局、ウチはフィルにいの家に着くまで、ずっとこうしていた。

「着いたね、久しぶりやね」

「お前もずっと、旅していたからな。あれから、ずっと家に帰ってこなかったしな」

「……うん、今やから言うけど、ちよつとだけ帰り辛かったんや。フィルにいが誰かと付き合つて、それを見るのがつらかったんや……」

妹として、一緒にいようと思ったときもあつた。

でも、やっぱり心のどこかでそれを受け付けられなかった。

今考えれば、それがよく分かる。

「……あつ」

《マスター、少しは察してあげてください。私も人間の女性だったら、同じ事思いましたよ》

「でも、そんな心配は今日でお終いや!! これからはウチがファイルにいの彼女なんやからね!!」

——だから、ファイルに、覚悟してね。

恋を自覚した女の子は無敵なんやからね。

\* \* \*

「待っててな。今日は、ウチがファイルにいの飯作るから!!」

ジークにそう言われて、俺は台所を追い出されてしまった。せつかく自分の彼女に手料理を振る舞おうと思ってたんだが……。

《マスターは、今回はおとなしく待つててください!! 手料理は明日でも出来るんですから……》

まあ、確かにそうなんだけどな……。

しかも、プリムの奴、意味ありげな態度取ってたし……。

しばらく待つていると……。

「お待ちせ!! やつと出来たで」

ジークが作ってくれた料理は、卵焼きに大根と油揚げの味噌汁。そして……。

「……おにぎり。これって……もしかして?」



「せや、フィールにいが、ウチに一番最初に作ってくれた思い出の料理。フィールに言つてたやん。おにぎりは人の心の温もりを感じるのに一番良い料理だつて……」

——あの時の言葉を覚えてたんだな。

「だから、今日だけはウチが作りたかつたんや。ウチの愛を食べて欲しかったから……」  
「……ありがたく頂くよ」

俺はジークが作ってくれたおにぎりを一口食べる。

「……やさしい、本当に……やさしい味だ」

食べやすい味付けで、それでいてやわらかくて口の中でホロツとほどける。

——思い出すな。

向こうの世界で、食料が手に入りにくい中、よくティアが作ってくれたおにぎり。

スバルと一緒によく食べたあの時の味。

「よかつた。ウチの精一杯の愛情を込めて握ったんや。ファイルにい、あの時ファイルにいが作ってくれたおにぎりの味、ちゃんと出せたかな？」

「……いや、これはもつと美味しいよ。ジークのやさしい温もりが込められてるんだから……」

このおにぎりから、ジークの気持ちがいっぱい伝わってくる。  
やさしくてあたたかいジークの心が……。

「あの時、ファイルにいが作ってくれたおにぎりもそうやったんやで。ウチにやさしい思い出を、思い出させてくれたんだから……」

「そっか……」

「ウチね。あのときから、おにぎりが大好きになつたんやけど、やつぱり、一人で食べるおにぎりより、こうして、大好きな人と食べるおにぎりの方が、ずっと……ずっと美味しく美味

「しいね♪」

「そうだな……」

——プリムが言おうとしたことが、やっと分かった。

そして……。

ジークが俺との思い出を、どれだけ大切にしてくれてたかもな。

「……これからも、こうして一緒に美味しいごはん、食べていけたらいいな」  
「良いな、やないで。していくんや、二人でずっと……や」

そんな温かい家庭をいつか作っていけたら良いな。

ジークの言葉じゃないけど、良いな、じゃなくてするんだよな。

\* \* \*

「で、なんでお前は俺のベッドに寝ているんだ？」

「えっ、そんな当たり前やん。恋人同士はこうして一緒に寝るって決まってるんやで」  
♪

何を今更言つとるねん。

昨日だって、あんなに激しく求め合っただのに……。

「お前の部屋は、そのまま残してあるんだから、そこで寝ればいいだろうが!!」

「ふっ、甘いぞ。ウチはもう、ファイルにいと一緒じゃなきや安心して眠れないんや〜♪」

ウチは、ファイルにいのベッドの半分を強引に侵略する。

「……男のベッドに入るって事は、分かってるんだろな？」

「……分かってるよ。もう、妹じゃないんやから。だから……」

——妹じゃ出来ないことを、いっぱい、してや。

これからも、いっぱい頑張つて、ファイルにいの為に可愛い女の子になるから。  
あと少しだけ、大人になったらその時は……。

ウチを、ファイルにいの花嫁さんにしてね。

——それがウチの一番の夢なんやからね♪

## i f e n d i n g シヤンテ

「……お金、もうこれしかない」

何をやってもダメなあたしは、いつも周りから比較されまくっていた。

親戚の子といつも比較されて、お前はダメな子だと罵られ……。

両親からも冷たい眼で見られる毎日だった。

そんな生活が嫌になり、両親の財布からありつたけのお金を持ち出し、無我夢中で家を飛び出してもう3ヶ月以上……。

考えてみれば、盗み以外は全部やった気がする。

飢えをしのぐために、公園の水を飲んだり、食べ物も草や木の実、時には魚を釣って何とかしていた。

「もう……限界かな」

服とかもヨレヨレだし、ここ数日ろくなものを食べてない。

もうプライドとか言ってる場合じゃない。何より……。

——こんなあたしが今更プライドとかおかしいよね。

そう思ったら、もう怖いものはなかった。

あたしは近所のパン屋に入り、もてるだけのパンを持って力の限り逃げ出した。

「……、待てッ!! 泥棒が!!」

パン屋の親父が、怒りの形相で追いかけてくる。

捕まれば間違はなくボコボコにされる。

あたしは逃げた。

必死になって逃げまくった。

——自分が生きるために。

\*  
\*  
\*

「……はあ、はあ、ここまでくれば……」

ここは、人が来ない廃墟ビル。

住処のないあたしが雨露をしのげる唯一の場所。

「……とうとう、やっちゃったな」

生きるためとはいえ、盗みだけはしなかったのに。

これであたしも立派なクズだね。

……いや、もともとあたしはクズだったか。

そう思ったら、なんかどうでもよくなってきた。

早速かつぱらったパンを食べようとしたとき……。

「へえ、いいもんもってるじゃん」

いかにもって言う雰囲気男2人が、嫌らしい笑いをしながらこっちにやってきた。



「兄貴、こいつよく見たらなかなか可愛いっすよ」

禿でチビの男が舌を舐めずりしながらそう言い……。

「身なりはボロボロでも、ガキのくせに結構胸もあるし〜」

ロンゲで茶髪の男が、あたしを押し倒し、胸を鷲掴みにする。

「い、嫌だツ!!」

「そういうなって、こんなところ誰も来やしないって」

「そうそう、おとなしくしなよ!!」

男達は、いやらしい目つきをして、あたしの両腕を押さえつけ、上着を無理張りはぎ取ろうとしたとき……。

「あいたたたたたた!!」

「……そこまでにしとくんだな。クズどもが」

黒髪の男が、強姦魔の男達の頭を鷲掴みにして、あたしから引きはがしてくれた。

「なにしやがるんだ、てめえ!!」

「これが見えないのかよ!!」

男達は、ナイフを取り出してあたし達を脅していたが……。

「……やってみろ。だがな……」

「この子を少しでも傷つけてみる……。そのときは……殺す、ぞ」

「!!」

さつきまで威勢がよかった男達は、この人がひと睨みしただけで、男達はその場から動けなくなっていた。

まるで、蛇に睨まれた蛙みたい……。。



そのナイフを、指二本でつかみ取ってしまった。

しかも、男がいくらナイフを引き抜こうとしても、ビクともしない……。逆にナイフを奪い取り、男を蹴り飛ばして……。

「ひ、ひいいい………」

そのナイフを男の喉元に突きつけていた。

「……俺は、お前らみたいなやつが一番嫌いなんだよ。か弱い女の子を、無理矢理犯すよ  
うなクズ野郎がな………」

「た、助けてくれ!! 命だけは!!」

あまりの恐怖で男は、失禁し、その場に気絶してしまった。

「……つたく、こういう奴らってどいつもこいつも同じだな」

男の人は、そう言って、あつという間に禿と茶髪の男を魔法で拘束してしまった。

「…………大丈夫」

さっきの凍るような眼とは違って、すごくやさしい眼であたしのことを心配してくれた。

「…………う、うん」

この人が来なかったら、あたしはこいつらに犯されまくってたから……。

「…………そっか。まずは無事でよかった。だけど…………」

そう言つて、男の人はあたしの額に…………。

「いったああああああい!!」

思いつきりデコピンをしてきた。

「な、なにすんのよ!!」

「つたく……。悪いが、途中から見ていたんだ。事情があつたみたいだが、さすがに盗みは見過ごせないぞ……」

「!？」

み、見られてたんだ……。

この人に、あたしがあの店からパンをとるところを……。

「……なにか、事情がありそうだな」

えっ、この人は何言ってるんだろう？

犯罪者のあたしにこんなことを言うなんて……。

「管理局に……突き出すんじゃない、の？」

「それは、君の話を聞いてからだ。それに……」

男の人は、さつきと同じやさしい眼をして……。

「君の目は……まだ、曇ってないから。だから、話を……聞かせて、くれないかな」  
「あ、うあ……」

いままで、あたしにこんな風に言ってくれる人なんていなかった。  
大人はみんな、あたしのことなんて出来損ないとしか見ていなかったから……。  
気がついたら、あたしは大声で泣き叫んでいた。

\* \* \*

「……そういえば、名前を言っていなかったな。俺は、フィール・グリード」  
「……シャンテ・アピニオン、です」

慣れない敬語なんて使うと、うまくしゃべれない。

こんな風に大人の人と話すなんて思わなかったし……。

「無理に話そうとしなくて良いよ。気軽に話してくれればいい……」  
「うん……。ありがとう」

やっぱり、この人フィールさんはなんか違う。  
なんか、何でも包んでくれそうな感じ、かな。

「じゃ、アピニオンで、良いのかな。話してくれるかな？」  
「シャンテで良いよ。それじゃ、話すね……」

あたしは、今までであったことをすべてフィールさんに話した。  
周りからは出来損ない扱いされてきたこと。

実の両親からも見捨てられてしまったこと。

すべてが嫌になって、家を飛び出し、今の生活をしていること。

そして、とうとうお金もなくなつて、食うことも出来なくなつて、あのパン屋で盗みをしてしまったことを……。



「……そういうことだったのか」

「うん……。あんなこととしてごめんさい。あたし……管理局にいくよ」

どんな理由があつても、あんなことは許されない。

それに何より、あたし自身が許せないから……。

「反省はしてるんだな……」

「うん……。パン屋の親父にも、ほんとに悪いこと……しちやつた」

「そっか……。だったら、俺と一緒に謝りに行こうか」

「で、でも……。それじゃフィルさんに迷惑が……」

あたしがやつちやつたことに、これ以上この人に迷惑をかけられない。

だって、この人はあたしのことを信じてくれようとしてるのに……。

「あのな……。もう一つ、シャンテに言つてなかったことがあつたんだ。それは、な  
……」

ファイルさんが、そう言つてスクリーンに出したものは……。

「う、うそ……」

「そ、一応、管理局の人間だ。ということ、事情は俺から親父さんに言つてやるから、一緒に行くぞ」

「う、うん!!」

結局、あたしは、ファイルさんのおかげで一週間の店での労働を条件で許してくれることになった。

しかも、最終日にはパン屋の親父がパンとお金まで一緒に渡してくれたのだ。

あたしは、これは受け取れないと言つたけど……。

『嬢ちゃん、理由は聞いたよ。確かに嬢ちゃんがやったことは悪いことだけど、それをちゃんと罪を償おうとしたんだ。だったら、ワシからは何も言わないよ。それにワシが作ったパンをおいしく食べてた笑顔は嘘じゃないだろ。それで十分さ』

「ありがとう……。本当に、ありがとう……」

\*

\*

\*

さらに、フィルさんは、あたしを無理に両親の元には戻さず、あたしのために住む場所まで作ってくれた。

場所は聖王教会。

最初は、シスターなんてって思っていたんだけど、教会のみんなは、あたしのことを本当に思ってくれた。

シスター・シヤツハは、すごく厳しいけど、それ以上に優しい女性だった。

セインやオットーやデイドも、あたしのことを見下したりはしないし、ちゃんとあたしのことを見てくれた。

そう言った仲間やフィルさんの周りの人たちのおかげで、あたしは立ち直ることが出来た。

そして、フィールさんはあたしに魔法の使い方を作ってくれた。

魔法は、フィールさん得意の幻術魔法。

この魔法は、あたしみたいなテクニク型は、どうしてもパワーや爆発力に欠けてしまふ。

そう言った欠点を補うために、考えてくれた戦法だ。

幻術魔法は、あたしの性格にもピッタリはまったし、何より、あたしのためにフィールさんが一生懸命考えてくれた魔法だから……。

だから、フィールさん、シスター・シャツハ、あたし今度のインターミドルでいっぱい頑張つて、シスター希望者を増やすんだ。

そしたら、きっと喜んでくれるよ、ね……。

\*

\*

\*

「……………はあ」

試合の後、セインやわざわざ来てくれた騎士カリムが、いっぱいあたしのことを励ましてくれたけど、やっぱり心は晴れない。

いくら頑張ったって、勝たなきゃ何の意味もないし。

—— 負けたら何も残らないから。

何より、自分の時間を割いてまで、あたしにつきあってくれたフィルさんに合わせる顔がないよ。

正直、今は聖王教会に戻る気持ちじゃない。

というより、どんな顔をしてあつたら良いの……。

ジメジメした気持ちで、クラナガン中を歩き回った後、いつの間にかあたしは町外れの海岸まで来ていた。

「……こんな所まで来ちゃったんだね」

普段なら夕日がとてもきれいなところだけど、今はそんな気持ちじゃない。

そう思いながら、海岸を歩いていると、誰かがトレーニングをしている。

あたしは、そつと近づいてそこにいたのは……。

「……ファイ、ルさ……ん」

そこにいたのは、今は一番会いたくなかったファイル・グリードさんの姿だった。

\* \* \*

「……こんなところで、何をしてるの？」

確か、この時期は長期出張でクラナガンにはいられないって言ってたのに……。

「ん？ ああ……。少し早く戻ってこれたからな。いつもの日課って所かな。こうしてやっておかないと、身体がなまっちゃうからな……。」

「そう、なんだ……。」

さつきから、何となく見ていたけど、はつきり言ってオーバーワークに近い量をやっている。

それでも、本人曰く、一応考えてるらしいけど……。

「そういえば、シャンテ。いったいどうしたんだ、こんな所で何やってたんだ？」  
「ん……。ちよつとね」

フィルさんには、あたしの試合のことは誰もいつてないはず。  
だから、あたしのことなんて知らない……。

「……ヴィクターとの……試合、か」  
「!？」

ど、どうして試合のこと知ってるの!?  
前に、試合にはこれないから、後で結果を聞くって言ったのに。

「さっき言ったけど、少し早く戻ってこれたから、会場に見に行ってたんだ……」  
「そう、だったん……だね」

——最悪だ。

一番、見られなくなかった人に見られてた。

あんなみつともない結果になっちゃった試合を……。

もう、情けなくて、みつともなくて……。

気がついたらあたしは声を殺して泣いていた。

すると、あたしを包み込むように……。

「……今は、思いつきり泣きな。誰にも見えないように……こうしてるから」

「う……ああああ……」

もう、我慢の限界だった。

あたしは、フィルさんの胸の中で、思いつきり自分の気持ちをはき出すように泣きま



くった。

\* \* \*

「……なんか、みつともないとこ見せちやった」

「みつともなくなんかないよ。それだけ、真剣だったってことだろ」

「うん……」

それも、もちろんあるけど、一番は、ここまであたしにつきあってくれたフィルさんに合わせる顔がなかったから……。

「……敗北はそこから、学ぶことは沢山ある。失敗からもな……」

「……えっ？ それって、どういうこと？」

「……すこし、昔話するな。とある愚かな男の話を……」

話の内容はこうだった。

昔、その人は、大切な人たちを失ってしまい、自分に力がなくて、ありとあらゆる無茶をしまくった。

オーバーワークもしたし、自分の身を顧みない魔法を使ったりもした。

その代表格に、試合でコロナも使っていたネファイリムフィスト。

あれは、自分の身体能力以上に能力を上げられるけど、それは無理やりしてるだけで、使いすぎれば身を滅ぼす諸刃の魔法。

そして、その人は、結果的に力は得られたけど、残されたのはボロボロの身体とむなしさだけだと……。

「……そいつの場合は、一人ですべてのことをしていたからこうなった。だけど、シャンテ、お前にはたくさんの友達や仲間がいるだろ。そう言う人たちがいれば、この敗北もきつと自分の糧に出来るさ……」

「……ファイルさん」

——悲しい瞳。

フィルさんの瞳は、ほんとに悲しい色をしている。

最初にあつたときから、ずっと笑顔なんだけど、どこか悲しい笑み。

『あの人はね、自分のことより、周りの人を優先しちゃうの。それが自分の大切な人なら尚更ね……』

以前、セインや騎士カリムが言ってたことが、今はつきり分かった。

さっきの話の人は、フィルさん自身のこと。

——そして、フィルさんは大切な人達を亡くして、無茶しまくったんだ。

「……ねえ、フィルさん、さっきの話の人って……。救われたの？」

「……さあな」

夜空を見上げながら、答えるフィルさん。

この人は、今も後悔しながら生きてる。

いくらあたしでも、それくらいのこととはわかるよ……。

——そんな今にも泣きそうな瞳をして、崩れそうなのに。

気づいたらあたしは……。

「……シャンテ？」

後ろから、フィルさんのことをぎゅつと抱きしめていた。

「……もう、もう……いいよ。あたしを励ましてくれるために……。つらいこと、思い出さなくて……。良いよ」

「……何言ってるんだ？ 俺は何も……」

「分かつちやったから……。あの話の人、フィルさんのこと……。なんでしよう」

あたしの言葉に、フィルさんが寂しい笑みをふと浮かべる。

「……昔は、ティア達もだませてただけだな。ポーカーフェイス、出来なくなってるのかな？」

「……そうじゃ……ないよ」

きつと、大抵の人なら騙すことは出来る。

あたしの場合、ずっとフィルさんのことを見てきたから分かったんだから……。

「……好きな人のことだから、分かったんだよ。あたしの……大好きな人だから」

「……シャンテ」

もう、自分の気持ちに嘘つくのは止めよう。

元々、ウジウジしてるのは柄じゃないし、綺麗さっぱり伝えて、そして、思いつきり振られよう。

「あたしね……。あの日、フィルさんに助けてもらって……。ずっと、ずっと……。好きだったんだよ。こんなあたしに真正面から見てくれたフィルさんのこと、ずっと

……」

もう、色んなことが混じっちゃって、うまく言葉に出来ない。  
でも、あたしの気持ちは全部込めた。

——後悔はしないよ。

「お前って、いつもそうだよな……。悪戯好きなくせに、すごく不器用で、でも……。真っ直ぐに気持ちを言ってくれる。今も、こうして、俺のことを思ってくれて……」

「……………えっ?」

「年下のお前が、俺に気持ちを伝えてくれたんだもんな。俺も、ごまかさずに伝えるよ。好きだよ……。真っ直ぐな心を持った、シャンテ・アピニオンのことが大好きだ……」  
「あつ……」

——伝わったんだ。

あたしの想い、ファイルさんに伝わったんだ!!

「嘘じゃないよね……。あたしのこと、好きって……。うそじゃ……。ない、よね」

こういうときに嘘をつくような人じゃないってことはわかってる。  
でも、これが夢なんじゃないかって思っちゃうから……。

「……………だったら、証明、しようか?」

「……………うん、して、欲しい……………な」

あたしも、フィルさんもその言葉の意味は理解していた。

——星が輝く夜空の元

あたし達は、誓いのキスを交わした。

触れるだけの優しいキス。

それが、今まで大切にとっておいたあたしのファーストキス。

\* \* \*

「えへへ〜♪」

あのあと、あたし達はフィルさんの家までゆつくりと歩いていった。

フィルさんも家までは少し距離があるから、バスを使おうかと言ってくれたんだけど、今は、こうやって一緒にいたかったから、時間はかかるけど、徒歩で行くことにした。

「あ、あのな……。もう少しだけ、離れてくれないか」

「いやだよ。だって、やっと両思いになったんだから、今はこうしたいな……」

絶対かなわないと思っていたあたしの想い。

それが、こうしてかなったんだよ。



——だから、今日くらいはこうして甘えさせてね。

「……つたく、しょうがないな」

口ではそう言っているけど、あたしのことを引きはがそうとはしなかった。フィールさんも、あたしと似ているところがあるんだよね。素直になれない所と、好きな人にはとことん甘いつて所。

「……でも、その前に教会には連絡入れておけよ。お前、黙ったまま出て行っただろ？」  
「……な、なんで分かるの!？」

「さっきのことを考えればすぐに分かるっての……。ああいうときは一人になりたかった気持ちもな。俺の家に行くにしても、帰るにしても、一度連絡はしておけ」

ううっ……。こういう時のフィールさんって、すっごく厳しいんだよね。

筋だけは通さないと、絶対にダメだって所は。

セインや騎士カリム、絶対に怒ってるだろうな……。

あたしは、恐る恐る教会に通信を開いた。  
すると……。

「くおらああああああああああ!! シャンテツツツ!!」  
「ひひひひひひ……」

通信に出たのは、むちやくちや怒っていたセインだった。  
やっぱい……。ものすごく怒ってる。

「お前、試合が終わってから、誰にも言わずに会場を出て行って!! みんな心配して探し回ってるんだぞ!!」

「……………ごめん。本当に……………ゴメン」

「オットーやディードもそうだけど、シスターシヤツハと騎士カリムも、心配してるんだからな!! まあ、その……………あたしもな。とりあえず、みんなにはあたしから連絡入れておくから……………。戻ってくるんだろ?」

「い、いや……………。その……………」

みんながあたしのことを心配してくれて、本当にうれしかった。本当なら、すぐに教会に戻らなきゃいけないんだけど……。

「教会に戻るの、ちよつと待ってもらって良いかな……」

「えっ？ フィルさん、シャンテと一緒にいるんですか!？」

「まあな。ちよつとした事情でな。セイン、責任は俺がとるから、シャンテを教会に戻すのは、明日でも良いか？」

フィルさんの言葉はとつてもうれしい。

でも、そんなこと騎士カリム達が許してくれるわけ……。

すると、セインがフィルさんのことをじつと見つめて……。

「……一つだけ、聞いても良いですか？ フィルさん、シャンテのこと……どう、思ってますか」

「ちよ、ちよつとセイン、あんた、何を聞いて!？」

「シャンテは黙ってて!! これは、興味本位なんかじゃない。あたしはシャンテの親友として聞いてます。答え次第では……」

セインの表情がいつもと違い、本気なのは見て分かった。すると、フィルさんは迷いもなく……。

「……こいつは、俺にとつて大切な『女性』だよ。ずっと、そばにいて欲しい大切な人……。この答えじゃ駄目か？」

「あつ……」

——ありがとう。

あたしのこと、ちゃんと一人の女性として見てくれてるんだね。

その答えを聞いたセインは……。

「そこまではつきりと言われるとは思わなかった。シャンテ、お前、やっと自分の気持ち伝えたんだな……」

「……う、うん」

あ、あれ？ も、もしかして、セイン、あたしの気持ち気づいていたの!?

「あたしが気づいてないと思ってたの。というか、聖王教会で、あんたの気持ち気付いてない奴いないよ。知らなかったのは、当人だけじゃない……」

「ま、マジで……」

「大マジ。お前、フィルさんと一緒に魔法訓練をしてるとき、あんなに笑顔を見せてたんだよ。あれで気付かない方がおかしいから」

うわあ……。それって、すっごく恥ずかしいんだけど。

しかも、それをフィルさんに思いっきり聞かれちゃってるし……。

「そういうことだから、一泊と言わず、2〜3日泊まってきて良いから。シャンテ、教会に帰ったらいじられるのは覚悟しておきなよ。最も……それで、済めば良いけどね」

「ちよ、ちよつと!?! セイン、それ、どういう意味!!」

すると、セインがあたしにしか聞こえないように、回線を変えて……。

「お前な……。フィルさんの普段の様子、見れば分かるだろ。何人かから好かれてるのは、お前も知ってるの通りなんだし……」

「そ、そうだった……」

両思いになって、すっかり忘れてたけど、フィルさんって実はかなりもてるんだよね。フィルさん自身が、一歩引いていたから恋愛には発展しなかっただけで……。すると、セインはオープン回線に戻して……。

「そういうことだから、フィルさん、シャンテのこと……。あたしのダチのこと頼みますね」

そう言って、セインは通信を切ってしまった。

「それじゃ、教会にも連絡入れたし、あらためてフィルさんの家に行こう!!」

「……そうだな」

あたしは、さつきよりもフィルさんに密着して、胸をさらに押し当てて、フィルさん

にあたしの女の部分を意識してもらった。

フィルさんは、そっぽ向いて意識してないふりしてるけど、伝わってくる心臓音や、顔に思いつきり出ているから。

\*

\*

\*

「……ちよつと、待っていてくれ。部屋、片付けてくるから」

そう言つて、フィルさんがあたしの腕を解こうとし……。

「……良いよ。寝室は……大丈夫なんでしょう」

「お前……。自分が何言ってるのか、分かってるのか？」

——分かってるよ。

恥ずかしくて、心臓が止まりそうなんだから。

でも、こんなチャンスはそうはない。

ましてやあたしって、フィルさんの周りにいる人たちより魅力がない。

「……………分かってるよ。だから、言ってるんだから。あたしを……………本当の意味で、フィルさんの……………彼女にして」

「……………シヤンテ、焦らなくなつて……………」

「うん……………。焦つてると思う。でも、今日じやなきや、フィルさん、きつとしばらくの間、あたしのこと思つて、抱いてくれないよね……………」

まだ、こういう事をするのは早いつてことは分かつてる。

でも、それを理由に大事にされるだけつてのは嫌だから……………。



「……………良いのか？ 今ならまだ……………」

「それ、覚悟を決めた女の子に失礼だよ。この想いは……………本当だから」

もう、あたし達に言葉はいらなかった。

ファイルさんも覚悟を決めて、あたしのことを求めてくれた。

寝室に行き、舌を絡め合うキス。

何度も互いに求め合い、離れたときは空中に銀色の糸ができあがっていた。

ブラウスとスカートを脱がされ、下着姿になったとき……………。

「……………下着、もつと可愛いのにすればよかった」

こんな事になるなんて思わないから、いつもの純白の上下。  
色気も何もあつたものじゃない。

「……いや、普段のシャランテを見て、俺は……うれしいかな」

「そういう、もの？」

「ああ……」

そう言つて、フィルさんはブラを外し、あたしの胸をそつと触れ……。

「あ、ん……」

「結構、胸、大きいよな……」

「ば、ばかぁ……」

好きな人に、そう言つてもらえるのはうれしいけど、やっぱりはずかしいな……。

「でも、大丈夫か？ その……。あの件で……」

「あつ……」

フィルさんが言つてるあの件というのは、あたしがあの二人組に犯されかけたときの  
こと。

確かに、嫌な思い出だけど、決して男の人が嫌いになった訳じゃないし……。

「大丈夫、あたし、フィルさんのおかげで、最悪なことにはならなかったんだし、それに……」

あたしは、胸に触れているフィルさんの手を取り……。

「こうして、大好きな人に触られてるのは……。すっごく、うれしいんだよ。だから、あたしのこと、好きだって思ってくれるなら……。いっぱい……さわってほしい、な」

「……じゃ、もう、遠慮しないからな」

胸だけでなく、脚やすべてをくまなく愛してくれ……。

そして、いよいよ……。

「……い、痛あ」

初めての痛みは、全身が引き裂かれそうなくらい痛かったけど、それ以上に好きな人

を受け入れられた喜びがあった。

そして、あたしとフィルさんは、身も心もとけあつて……。

快樂の海にその身をゆだねた。

\* \* \*

「……もつと、してくれても良かったんだよ」

男の人が、何度もしたいってのは、そう言った本に書いてあつたし……。  
フィルさんがしたいって言うなら、あたしは受け止めてあげたい。

「あのな……。初めてなのに、無茶させられないだろうが。それに……」

ファイルさんは、あたしを自分の方へ抱き寄せ……。

「自分が快楽を求めたいだけなら、こういう事には意味がないから……」

あたし、本当にファイルさんを好きになって良かった。

男の人って、こういつてくれる人はそうはいない。

こういう行為の時って、自分本位になってしまるのが当たり前だから……。

「……本当、やさしいんだ。だから、大好きなんだよ〜♪」

あたしはファイルさんの頬に、キスをする。

少しは、あたしの気持ち伝わったかな？

あたしは、ファイルさんに思いつき抱きついて、自分の胸や脚を押しつけて……。

「……おまえ、絶対、俺の理性とばしたいだろ」

「あつたり〜♪」

「勘弁してくれよ……」

それでも、フィルさんは、何とか理性と本能の戦いに勝利して、朝までこうして過ぎました。

もう……。あたしは別にしても……。良かったんだけどな。

\* \* \*

次の日、あたし達は、クラナガンの繁華街にいた。

せつかく恋人同士になったから、なにか記念が欲しくなつて、そこで思いついたのが、プリクラだった。

フィルさんの手帳を見せてもらったけど、はつきり言つて、あたしの関係者殆どとプリクラを撮っていた。

陛下だけでなく、セイン達もそうだし……。

何より、あのヴィクトーリアとも一緒にあつたのがびつくりだ。

理由を聞いてみると……。

『昔、ヴィクター達にちよつと訓練をしたことがあつてな。その縁で、時々会つたりもしている……』

どうりで、あたしの幻術が効かないと思つた!!  
フィルさんが教えてたんなら、通じないのは当たり前だつての!!

——— なんか、超むかつくんだけど。

ということだ、あたしはちよつとだけごねて、ここまでやつてきたのだ。

「……でも、本当にありがとう。あたしのわがままなのに」

「気にするなつて。これくらいなら、可愛いものだから……。さて、プリクラを撮つて、他にも色んな所に行くぞ」

「うん♪」

あたしは普通にとるだけでなく、抱きついたり、キスをしながら撮つたりもした。

さらに、バリアジャケット姿にもなって……。

「……改めてみると、かなり大胆だよな。そのジャケット」  
「まあ……。確かにね」

胸の部分は、布地が短くて下乳が出ちゃってるし……。  
確かにちよつと恥ずかしいかも……。

「せつかくだから、あたしの胸、触ってみる？」

「……やめとく。昨日言ったことを撤回したくない」

「ちえっ……。残念」

ちよつと残念だけど、フィルさんがちゃんと女の子と意識してくれるのが分かっただけでも良いかな。

プリクラを終わった後、二人とも恥ずかしくなっていたけど、これも恋人同士でしかない特権ということで許してね。

その後、洋服を見たり、カラオケをしたりして一日を楽しみ、あつという間に夜になっ



てしまった。

「……終わっちゃったね」

「そうだな……。さすがに、もう帰らないとな」

ファイルさんが、聖王教会領まで送ってくれたけど、別れがつかなくて中に入れなかった。

「また……。会えるよね」

「ああ……。俺も、少し仕事量を控えて、時間を作るようにするよ……」

「うん……。あたし、すつごく寂しがり屋だから、ずっと放っておかれたら、寂しくて泣いちゃうからね」

セインや教会の仲間はいってくれるけど、やっぱり恋人と離れてるのは寂しい。  
最後に、あたし達はキスをする……。

「……なんか、余計、さみしくなっちゃうね」

「俺もな……。一人でいたときは、こんな事……考えなかったんだけどな……」

「良いことだよ。人は、一人じゃ生きていくなんで……。無理なんだから……」

昔、ぐれてた頃、あたしは一人でも平気だつて思つてたけど、こうして大切な人が出来ちゃつたら、絶対に無理。

人の心の温かさは、かけがえのないものだから……。

なんか、柄じゃないこと言ってるね、あたし……。

フィルさん、あたし、まだまだ女の子としても未熟だけど、それでも大好きつて気持ちだけは誰にも負けないから……。

これからも、いっぱい頑張つて、可愛い女の子になるから……。

だから、あたしのことずっと離さないでね。

P・S；実は、別れ際のキスをセインや騎士カリム達に見られていて、あつという間にファイルさんの関係者全員に、あたし達のことを知れ渡ってしまった。

陛下達からも……。

『隙あれば、奪うのって……ありだよね』

とか言われる始末。

んなわけないでしょう!!

あたし、マジで大変な人を恋人にしちゃったんだなと思ったよ。  
あのとき、セインが言っていた台詞、冗談でも何でもなかった。

でも、  
ファイルさんの恋人は、あ  
・  
た  
・  
し、  
なんだからね!!

i f e n d i n g ユミナ

(……お願い。誰か……たす、け……て)

習い事の帰り、乗るのに急いでいて、いつもの女性用車両じゃなく、通常の車両に乗り込んでしまった。

しかも、この時間帯は痴漢が多いので有名で、その常習犯は未だに捕まっていない。さつきから、わたしの胸やお尻を何度も触られて、勇気を出して声を出してるにもかかわらず、誰にも聞こえていない。

(……どう、して)

(……ふふふ、君の声が聞こえてないのが不思議なようだね)

(……えっ、この声って)

ボソボソと、私の耳元で話しかけてきたのは、おそらく痴漢をしている小太りの中年男性。

しかもワザと嫌らしくねちっこい話し方をしてきた。

「……君の疑問に答えてあげよう。それは、私がこのあたりに封時結界を張っているからだよ。だから、君の声は、誰にも聞こえないし、どうなってるかも分からない」

「そ、そんな!!? あっ……」

そういつて、男性が私の服の中に手を入れて、さらに胸をまさぐり……。

「い、いや!!」

「いくら騒ごうと、誰も気づきはしないよ。さあ、ゆっくりと楽しませてもらう……」  
(……もう、だめツ!!)

絶望の中、さらにわたしの下半身に手を伸ばそうとした、そのとき……。

「いたたたたたたたた!!」

「淫行もそこまでだ。いい大人が、女の子にこんなことしてるんじゃない……」

結界の中に黒髪の男性が現れて、痴漢の男性からわたしを助けてくれた。

「な、なんだね君は!! 私は何をしたというのかね!!」

「とぼけてるんじゃない。電車内での無断魔法使用。女の子への痴漢行為。これだけ物的証拠があれば言い逃れは出来ないぞ」

「ちい、い……」

痴漢の中年男性は、魔法を解いて、扉が開くと同時にダッシュで逃げ出したが……。

「……ストラグルバインド」

白銀の光が、男性の全身を縛り上げ、身動きが出来ないようにしてしまった。

しかも、本当にあつという間に。

「ち、畜生ツツ!! なんだこりゃ!!」

「……観念しろ。もうすぐ管理局と鉄道警察がくる。そこで精々罪を償うんだな」

中年の男が、じたばたしながら……。

「わ、私を誰だと思ってるんだ!! ここで私がいなくなったら、会社の大損失なんだぞ」  
すると、黒髪の男性は、あきれた表情で……。

「だったら、こんなことしてないで真面目にしていればいいだろ。どんなお偉いさんか知らないけど、こんな事やってる時点で最低だぞ」

「ふん!! 私は、会社を、そして地位を守るために日々頑張ってるんだ。これくらいことしたって罰当たらないだろうが!!」

——何、それ。

わたしはあなたのストレス解消のために、胸やお尻をさわられて嫌な思いをしたの。

あんなに、あんなに……。気持ち悪かったのに。



「……………ふざけてるんじゃないぞ、この野郎!!」

黒髪の男性は、さつきとは違い、誰が見ても分かる怒りの形相で、痴漢の襟元をつかみ、思いっきり壁にたたきつけて……。

「……………自分のストレス解消のために、罪もない、か弱い女の子に悪戯して、そうやって何人もの女の子を傷つけてきたんだ!!」

「は、はな……………ぐ、ぐる、じ、……………い……………」

「管理局の人間には、貴様がしたことは全部報告するからな。言い逃れできると思うなよ……………」

しばらくして、管理局の人が来て、痴漢は強制連行されていきました。

そして、助けてくれた男性とわたしは、簡単な事情徴収されましたが、黒髪の男性が、すべて答えてくれましたので、わたしは殆どいるだけの感じでした。

「本当に、ありがとうございました。わたし……………。なんていったら……………」

「いや、もう少し早く助けられたら、あんないやな思いをさせなかったのに……………。すまな

かった」

そんなことない!!

あのとき、この人が助けてくれなかったら、もしかしたら最悪なことになっていたかもしれないなかったんだから……。

「そういえば、まだ名前も言っていなかったな。俺は、ファイル・グリードっていうんだ。まあ、一応身元もはっきりしてる社会人だ」

「わ、わたしは、ユミナ・アंकレイヴと言います。サント・ヒルデ魔法学院 中等科の一年生です!!」

「アंकレイヴさんか。あと、そんなに緊張しなくても良いよ。俺のことは、グリードでもファイルでも好きに呼んでくれて良いし……」

なんか、この人って、話してみると、とても優しい雰囲気の人なんだな。

痴漢を抑えるとき、すっごく怖い目をしていたから……。

「そ、それじゃ……。ファイルさんって言っても良いですか？」

「ああ、全然かまわないよ。もしかして……。俺のこと、ちょっと怖い人って、思ってる？」

「……すみません」

「まあ、あの様子見てたら、誰でもそう思うよな……」

ファイルさんは、苦笑いをしながら言ってるが、決してわたしのことを怒ってる感じはしなかった。

「ごめん……なさい。わたしのことを助けてくれた恩人に……」

わたし、最低だ。

助けてくれた人に対して、こんな事思っちゃうなんて……。

すると、ファイルさんが……。

「あんなことあって、怖くないって方がおかしいよ。俺たち管理局の人間が、もつとしつかりしていれば、未然に防げたんだから……」

「えっ……？」

管理局の人間？ 俺たち？

まさか、フィルさんは!?

《あーあ、言っちゃってますよ、マスター》

「迂闊だった。怖がらせないように、身分隠してたのに、こんなポカやらかしちゃうなんてな……」

そうやって、フィルさんがスクリーンを出して、映し出されたのは……。

「時空管理局・執務官、フィル・グリード……。管理局の執務官だったんですか!!」

《そして、私がマスターの相棒のプリムです。本当は、自己紹介はしない予定だったんですよ》

「プリム、そういうなって……。アンケートイヴさん、そういうことだから、あの男は、責任を持って処罰するから、安心してくれ……」

「ゆ、ユミナで良いですよ。でも、まさか執務官の人だったなんて、思いませんでした」

「……あはは、こんな『ポカ』ばかりやってる執務官だけだな」

ううん、なんか安心した。

執務官っていうから、もっと怖いイメージをしてただけど、わたしが感じたとおり優しい人なんだな。ファイルさんって……。

「でも、ファイルさんの『ポカ』のおかげで、少し緊張がとれました。ありがとうございます。ありがとうございました!!」

「まあ、こんなことで笑ってくれるなら、喜んでピエロにでも何でもなるよ。でも、さすがにこんな事があって、一人で家には戻せないから、家までは送るよ」

「で、でも、それじゃファイルさんに申し訳が……」

すると、ファイルさんは少しおどけた表情で……。

「これも市民を守る執務官の任務の一つですよ。ましてや、こんなに可愛い女の子なら尚更、ね」

《そうですね。これでちゃんと送ってあげなかつたら、男としてもダメダメですよ。と  
いうことで、ユミナさん、こんなマスターで良かったら、どうぞどうぞ》

「あ、あはは……」

なんか、フィールさんもプリムも本当に良いコンビって感じ。  
似たもの同士っていうのかな……。

「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらいます!!」

お言葉に甘えて、わたしはフィールさんに家まで送ってもらうことになった。  
道中わたし達は色々な話をしながら歩いていった。

わたしが取ろうとしている資格のこと。

フィールさんの普段の生活のこと。

わたしの学校での生活など。

ちなみにプリムに、今度取る資格の問題を出してもらい、その出来を見てもらったと  
ころ……。

《うん、これなら、緊張して失敗しなければ確実に合格できますよ。この資格、結構難し

いんですけどね……」

わたしが取ろうとしてるのは整体施術の2級。

この一年、頑張つて勉強してただけど、こうして言われるとやっぱりうれしい。

《何でしたら、実技が不安でしたら、このマスターで実験してもらつても良いですよ。最近、言うこと聞いてくれなくて、かなりオーバーワークしてますから……》

「プリム、頼むから、ユミナにまでそんなこと言わないでくれ……。余計な心配かけたくないんだからよ」

「ううん、プリム、気持ちはうれしいけど、今はやめておくね……」

フィルさんの身体が、オーバーワークで体中が限界ぎりぎりなのは、見てすぐに分かった。

でも、今は資格を持っていない。

この人の身体は、長い時間をかけて、やっと作り上げてきた大切な身体。

それに触れるなら、わたしもちやんと資格を取つてからでないと、触れる資格はないと思うから……。

《ユミナさん、本当に真面目なんですネ……。それでは資格を取ったら、是非お願いしま  
すね》

「はっ♪」

なんか、プリムとはとっても良いお友達になれそうな気がする。

ちなみに、もちろん、フィルさんとアドレス交換はしたんだけど、プリムとも守秘回  
線で交換しちやっただ。

今日は、最悪な日だったけど、終わりはとっても良い日だったな。

\* \* \*

「本当だ!! すごい!! 下半身が軽くなってます!!」

「えへへ、おまじないが効いて良かったです♪」

アインハルトさんのお誘いで、インターミドルの出場選手達と一緒にお昼を食べるこ



とになって、そこでミウラさんのマッサージをさせてもらうことになったんだけど……。

「すごいな、なんか手際がプロぽかったね」

「えへへ、こないだ整体施術の2級を取ったばかりですが!!」

実は、あの後、フィールさんとプリムにコーチングしてもらって、間違いやすいところとか、引っかけ問題の傾向をいっぱい教えてもらったんだ。

だから、試験はかなり余裕で受かることが出来た。

次は、1級を目指そうかな。

「そういえば、クラスでも友達によく、マッサージをしていましたよね」

「えへへー♪」

「本当はね、アインハルトさんにもしてあげたかったんだよ。でも、アスリートの身体って、その人が時間と意思をかけて一生懸命作り上げた作品だから……」

そう、フィールさんにも言ったことだけど、アスリートや人を助ける人の身体って、本

当に時間をかけて作ってきた大切な身体。

友達の簡単な肩こりとかならともかく、下手にいじつたら、取り返しのつかないことになりかねないから……。

だから、友達にやっていたときも、最低限のことで身体に支障が出ないようにしてやっていたし……。

「そうなんです。ユミナさん、まるでフィルさんみたいな事言ってますね……」  
「えっ?」

ちよつとまつて!?

アインハルトさんが言っているフィルさんって、まさか!?

「アインハルトさん、ちよつと聞いて良いかな!!」

「は、はい!!」

「いま、アインハルトさんが言ったフィルさんって……。もしかして、執務官のフィル・グリードさん!」

「えっ？ ユミナさん、フィルさんのことご存じなんですか!？」

「……うん、前にあることでお世話になったんだ」

どうりで、わたしが学院祭のチケットを渡そうとしたときに、知り合いから何枚ももらったから大丈夫だよって言われたけど、あれはそう言う意味だったのか!!

「ユミナさんもなんですね……。わたしも、ヴィヴィオさんのことでお世話になったんです……」

「本当に、フィルさんって、色んな人を助けてるんだね……」

改めて聞くと、本当に色んな人に関わっていた。

ここにいる人たちだけでなく、各方面にも色々しているらしい……。

本当、優しいんだよね……。

でも、それ以上に自分を大切にしていない。

それも、何となく分かっちゃった。

「それでなんですけど、今度、みなさんでリオさんの故郷のルーフェンにお邪魔するんですけど、良かったらユミナさんも一緒にどうですか？」

「行く!! 練習とかも見てみたい!!」

「あと、フィルさんも参加する予定ですので、色んなこと聞けると思います!!」

ヴィヴィオちゃんとコロナちゃんが、すつごく良い笑顔でフィルさんが来ることを教えてくれた。

「あー、フィルの奴は、あたしが責任を持って連れてくるから安心しろ。あのワーカーホリックは、無理にでも休ませなきゃ休まないからな……」

「そんなに、酷いんですか……。フィルさんって……」

「正直、身体はボロボロだよ。ユミナも見たことあるんだろ……」

「……はい」

以前、少しだけ見たことがあるけど、あれはさっきのミウラさんと比較にならないほど酷使されていた。

いったいどれだけやったら、あんな状態になるの……。

ノーヴェさんもそれを心配していた。

「まあ、せっかく資格取ったんだから、今度はファイルの奴を見てやってくれよ。きつと喜ぶと思うし」

「はい!!」

数日後、わたし達はルーフェンに行くことになり、そこで、いろんなことを経験しました。

なんですけど……。

\*

\*

\*

「ふうんだ!!」

「だから、悪かったって……。お前にはせめて言っておくべきだった……」

《だから、私が言ったじゃないですか。ユミナさんには説明した方が良いでしょうよって

…  
》

ノーヴェコーチやフィルさんが計画した、アインハルトさん達の強化計画。

それにわたしは巻き込まれる形になり、フィルさんと一緒にアインハルトさんとリオちゃんの特訓をすることになったんだけど、いきなり、バインドなんかされたらびつくりするんですからね!!

せめて、事前に言っておいて欲しかったです……。

「本当にすまなかった……。あれじゃ怖がらせたただけだよな」

「……もう、良いですよ。わたしも、本気で怒ってるわけじゃないですから」

ヴィヴィオちゃん達のことを思ってたのは、分かってますから……。

「まあ、これはお詫びもかねてですけど、良かったら食べてくれないか。さつき作った手作りのアイスクリームなんだけど……」

な、なんですと……。

しかも、それは、わたしの大好きなイチゴのアイスクリーム。

「いただきまーす♪」

「これ、一つしかないから、みんなには内緒な」

アインハルトさん達から聞いていたフィルさんの手作りデザート。

しかも、わたしの為に作ってくれたなんて……。

「おいしーい!! 売ってるやつよりもおいしいかも……」

「そう言ってもらえるとうれしいよ……」

「んもう、フィルさん、わたし、本気でそう思ってるんですから、もっとニコツとしてください!!」

「充分、笑ってるんだけどな……」

——  
やっぱりだ。

さつきから、ずっとフィルさんのこと見ていたけど、すごく悲しい笑顔。わたしと通信で話しているときも、アインハルトさんやヴィヴィオちゃん達と話しているときも、笑顔なんだけど、やっぱり悲しい瞳をしていた。

最初は、分からなかったけど、フィルさんのことを見ているうちに、それが分かるようになって来ちゃったから……。

「……フィルさん、一つだけ……お願いがあるんですけど」

「ん？ 俺に出来ることだったら……構わないよ」

以前は資格を持っていなかったから、フィルさんのことを癒してあげられなかったけど、今なら……。

「……フィルさんの身体に、おまじない……しても、良いですか？」

すると、フィルさんは、少しだけふつと笑い……。



「……………良いよ。それじゃ、お願いしようかな」

わたしは、フィルさんの身体に触れる。

やっぱり予想通り、フィルさんの身体は、もうボロボロ。

はつきり言つて、私の整体施術程度なんかじゃ、どうしようもないのは分かつてる。

—————それでも、この人の身体を癒してあげたい。

わたしは、何度も何度も、フィルさんの身体に施術をするが、雀の涙程度しか回復しない。

「……………どうして……………どうして……………。わたしじゃ……………やっぱりだめ、な……………の」

こんなことしたつて、フィルさんに迷惑をかけてるのは分かつてる。

でも、どうしてもこの人を癒してあげたい。

「ありがとう……………。すごく楽に……………なつたよ」

「そんなはずない……です。見れば、分かります……。ちつとも……良くなって、な……い……よ」

もう、わたしは涙を抑えられなかった。

悔しさと悲しさ……。

色んなものが混ざり合って、今のわたしにはもう、泣くことしかできない……。

そんなわたしを、フィルさんは何も言わず、そつと抱きしめてくれた。

「……ごめん、なさい……。ごめんなさい……。ごめ、ん……。き、い……。」

あのととき、私のことを助けてもらってから、ずつと思っていた私の想い。

最初は、かっこいいなという程度にしか思っていなかった。

でも、何度も、通信でやりとりしたり、直接会って、わたしの悩みとかを聞いてもらったり……。

それだけじゃない……。

ルーフェンに来てからも、みんなと話せるようにしてくれたし、フィールさん自身がバ力なふりをしたりして、場を和ませたりしてくれました。

そんなフィールさんに、わたしはみるみる惹かれていった。

「わたし……フィールさんに何も恩返しできてない。あるとき……助けてもらってから、ずっと、助けてもらってばかり……」

「……そんなことないよ。ユミナと一緒にいるとき、本当に楽しかったよ」

———  
なんで、そんなに悲しい瞳なの。

普段は、みんなが身体を壊さないように、あんなに気を遣ってやっているのに。

でも、自分のことは、全然大切にしない。

「……だったら、わたし……フィルさんと一緒にいても……良いですか。ずっと……」  
「……ずっと、って……。それって……」

——きつと、この想いは、フィルさんにとって邪魔でしかない。

フィルさんの周りにいる人たちは、綺麗な人ばかりだし、わたしなんかじゃ何も出来ない。  
ない。

「ダメ元で告白します!! わたし……フィルさんのことが……大好き、です」

\* \* \*

「……ユミナ」

この子が、俺のことを好きになってくれるとは思わなかった。

自分で言うのものなだけで、正直、俺は、人とうまく話せる性格じゃないし、女の子に対して愛想を振りまけるような性格でもない。

何より、『あるとき』から俺は……。

——大切な女性を、作ることが出来なくなってしまったから。

「悪いけど、俺は……」

ユミナに断りの言葉を伝えようとしたとき……。

《マスター、いい加減に自分の気持ちに、嘘つくの止めましょう……》

「プリム、お前何を!？」

《正直、マスターがユミナさんに、ちゃんと自分の気持ちを伝えるのなら、私は黙ってるつもりでした。でも、今のマスターは、ユミナさんから逃げてるようにしか見えないです!!》

「逃げてる……だと」

《ええ、マスター、普段ユミナさんに対して、あれだけ自分の心を開いているのに、いざとなったら、身を引いてしまう。端から見たら、その人の幸せを考えてって思うんでしょうね。でも、今のマスターは、ティアさんのことを忘れられないでいるだけです!!》

——ティアのこと。

プリムの言うとおり、俺はいまでもティアのことを忘れられないでいる。

ティアの最後の言葉 『幸せになつてね』

それがティアの最後の願いなのは分かつてる。

でも、どうしたらいいか、分からないんだ……。

《マスター、思い切つて、ユミナさんにすべて……話しましょう。未来でのことを……》  
「そんなこと出来るわけ無いだろ!! あのこととは……。機密事項だろうが!!」

——未来でのこと。

それは、JS事件の中でもトップシークレットの一つ。

そのことを気軽に話す事なんて……許される事じゃない。

《確かにその通りです。ですが、ユミナさんが、すべてを伝えてくれたように……。いつも、マスターが私にユミナさんのことを話してくれるように、今度は、マスターがユミナさんに、心を伝えましょう》

「だけど……」

《大丈夫です。ここにいたら、ティアさんも、きつと……同じ事を言うと思いますよ。マスターの……フィル・グリードの幸せを、誰よりも想っていた彼女なら……》

「……ありがとう、な」

ユミナが俺に伝えてくれたように、俺もちゃんと伝えよう。  
それがこの子に対する、唯一のことだから……。

\*

\*

\*

「ユミナ、これから言うこと、荒唐無稽なことだけど……。最後まで……。聞いて、くれるか」

そんなつらそうな表情をして、うそだなんて思わないから……。

「はい、わたし、どんなことがあっても……。フィルさんのこと、信じてますから……」

だから、信じてください、わたしのことを……。

「……ありがとう」

フィルさんの話は、正直驚きを隠せなかった。

フィルさんは、本来この時間とは違う時系列の人で、ミッドチルダも、クラナガンも、あのJS事件で完全に滅んでしまったこと。

そのときに、フィルさんの大切な人たちは、みんな亡くなってしまったこと。

最後の戦いで、フィルさんが愛した女性も失ってしまったこと。

そして、女神の力を借りて、この世界に戻ってきて、再びやり直して、現在に至るこ



と。

「はつきり言って、御伽話でしかないよな。無理に信じてくれなくて……良いから」

ファイルさんが嘘を言っていないことは、瞳を見れば分かる。

この話って、機密事項だし、本来なら絶対に話したらいけないこと。

それでも、ファイルさんは、私の想いに真剣に答えてくれたんだ。

そして、これで、ファイルさんがあんなに無茶をしまくっていたのがはつきりと分かった。

ファイルさんは、これ以上、みんなを失いたくないから、だから、自分が全部抱え込んでしまうようになり……。

——そして、恋愛にも臆病になってしまった。

だから……。

「……ユミ、ナ？」

わたしは、後ろから、フィルさんのことをしつかりと抱きしめて、言葉を伝える。

「……さつきも言いましたが、信じます。世界中の誰もが、信じなくても……。わたしだけは、あなたのことを……。信じてますから……。だって、自分の大好きになった人なんです。信じるのは……。あたりまえです」

フィルさんの心を開くには、フィルさんのことを受け止めてあげなきゃダメなんだ。たった一人、フィルさんのことを愛した女性以上に……。

「……無茶ばかりして、心配かけてばかりの俺でも……。良いのか？」

「無茶は、わたしが止めますし、不安とか心配も、二人でなら……。半分に出来ます。そして、幸せを……。いっぱい作っていきましよう、ね」

「……ありがとう、な」

フィルさんの不安を取り除くように……。

わたしは、フィルさんの唇にそつと……。

自分の唇をあわせた。

\*

\*

\*

「まさか、年下の女の子とこうなるとはな……」

「えへへー♪ 女の子は、こうと決めたら強いんですよ!!」

ルーフェンから戻ってから、一週間後、わたしはフィルさんの家にお泊まりに来ていた。

最初は、お泊まりじゃなく、日帰りにする予定だったんだけど、家に帰っても、両親が仕事で家を空けてることを話したら……。

『ユミナさえ良かったら、家、泊まるか?』

まさか、フィルさんから、そんな言葉を言ってくれるとは思わなかった。

絶対に、泊まるなんて許してくれないと思ってたから……。

さつそく、わたしは両親にこの旨を伝えようと、二つ返事でオーケーをもらえた。

実は、ルーフェンから戻った次の日、フィルさんが、家の両親に付き合うことを正式に挨拶しに来たのだ。

しかも……。

「君なら、ユミナのことを任せても、大丈夫だろう。まあ、まだまだ未熟者の娘だけど、よろしく頼むよ……」

「ユミナ、良かったね!! あんたのあこがれの人が、ゲットできたわね!! 知り合いから、競争率が高いって聞いてたから、本当にびっくりしたわよ……」

「えっと、二人とも、もしかして……。フィルさんと顔見知り?」

次の言葉に、わたしはさらに驚かされることになった。

「ん、ああ……。お前が、以前、痴漢にあったときに、しばらくしてから、家まで来てくれて、きちんと説明してくれたんだよ」

「しかも、何度も顔を出してくれて、あんたのこと思ってくれてたんだよ……。まあ、このことはあんたには内緒にしておいてくれて言われてただけだね」

「……あ、はは」

もう、笑うしかなかった。

本当にフィルさんって、わたしのことを影で支えてくれていたんだね。

というか、フィルさんがわたしの両親と顔見知りだったって事の方がびっくり。

そんなことがあり、両親公認でわたし達は交際している。

そして、今、わたしはベッドサイドに座って、フィルさんに寄りかかっていた。

「フィルさんの胸って……。大きいんですね。広くて……。安心する」

「そっか？ こんな胸で良かったら、いつでも貸してやるよ」

「うん……。ありがとう。でも、今日は、ね」

わたしは、フィールさんをベッドに押し倒し……。

「きょうは、わたしが……フィールさんのことを包みます。フィールさんの傷ついた心も……。全部……」

「ユミナ……。おまえ……」

正直、フィールさんは、女の子としては見てくれるかもしれない。そして、こんな事をするのは、まだ早いつて事も分かっている。

でも、わたしが本当に思っていることは……。

「フィールさん……。わたしを……女の子に……。ううん、『女性』にして……。くだ、さい」

一人の女性として、生涯のパートナーとして見て欲しいから……。

「その場のノリで言ってるわけじゃないのは……。瞳を見れば分かるよ。俺で、良いのか……」

「それ以上言ったら、本気で怒ります。わたし、覚悟してきたんですからね……」

これ以上、わたし達に言葉はいらなかった。

どちらからともなく、キスを何度も求め合って、息継ぎの度に、銀色の証ができあがっていた。

わたしは、自分でブラウスとスカートを脱ぎ、ブラとパンティはフィルさんに任せることにした。

ブラは、勝負下着の純白のセット。

下手に黒とかで色気づけるよりも、純粹に自分を見せたかったから……。  
フィルさんがブラを外し、そっと私の胸に触れる。

「……ん、あ……ん……」

あのときと違い、好きな人に触れられるのは、全然違う。

もつと触って欲しい気持ちになるし、自分も気持ちよくなれるから……。

胸だけでなく、手や足、その……わたしの大切なところも、優しく愛してくれた。そして、いよいよ……。

「……きて、ください。わたし……いっばい、フィルさんのこと……包み込んであげます」

わたし達は、身も心も一つになり……。

何度も押し寄せる快樂が、破瓜の傷みを打ち消してくれて……。

わたしは、フィルさんのことをたくさん包み込んだ。

\* \* \*

「……むう、もつと、いっばい……してくれても良いんですよ」

「……ユミナ、さすがに、初体験で何度もする節操なしじゃないぞ、俺は……」



そんなことは分かってますよ。

でも、大好きな人だから、いっぱいして欲しいっていうだけなんですから……。

「わたし、ちゃんと……。フィルさんのこと……。包み込んであげられたかな？」

はつきり言つて、わたし、そんなにスタイル良くないし、その胸だつて……。すると、フィルさんが自分の方へ抱き寄せて……。

「……いっぱい包んでもらったよ。ユミナのあたたかい心にな」

「えへへ♪ でしたら、これからもいっぱい包んであげます。フィルさんが幸せだつて思ってくれるまで……。ずっと、ね」

それが、わたしにとって何よりも幸せなことなんだから……。

\*

\*

\*

翌朝、わたし達は、フィルさんのバイクでツーリングに出かけることにした。考えてみれば、フィルさんのバイクに乗るのって初めてなんだよね。

「じゃ、そのヘルメットをかぶってくれ」

「はい!! そのバイクって、以前プリムが言っていた『ロードサンダー』ですよね?」

プリムが前に話してくれた、フィルさんのもう一つの相棒。

青と白でカラーリングされたバイク。それがこのロードサンダー。

わたしは、バイクのことはよく分からないけど、このバイクがとても綺麗だって事は分かる。

「わたし、運動神経がそんなに無いから、大丈夫かな?」

そう思っていたら、バイクから音声が聞こえてきて……。

《大丈夫ですよ。私が責任を持って守りますから、何しろ『難攻不落』『不沈戦艦』とまで言われていた『あの』相棒を落とした女性ですから》

「サンダー、お前な……。いったい、お前はこういう風に思っていたんだよ」

《……そのまんまの意味ですよ。私は、正直言って、相棒は二度と大切な人は作らないと思っていました。それだけ、ティアさんのことを想い続けてきたんですから……。》

プリムやサンダーが言っているティアさんって、以前話してくれたティアナ・ランスターさんのことだよね。

本当に、ティアナさんのこと好きだったんだ……。

「……そっか。お前にも、心配かけてたんだな」

《ええ、でも、私は嬉しいです。こうして、新しい一步を進み始めてるんですから。えっと、確か、ユミナさんでしたね。初めまして、私はロードサンダー。この鈍感朴念仁の相棒をしています》

「は、初めまして、ユミナ・アングレイヴです。よろしく願います!!」

《ははは!! そんなにかしこまらなくても良いですよ。プリムと同じく気軽に接してください。話はプリムから聞いてますし、それに、可愛い女性ですね》

「あ、ありがとう……。ロードサンダー」

プリムもそうだけど、ロードサンダーも本当に人間みtainな性格をしている。プリムとロードサンダーは正反対な性格だけど、芯はしっかりしてるし、何より、マスターであるフィルさんのことを本当に心配してるんだ。

「後ろに乗ったな。しっかりつかまってるよ」

「はい!!」

わたしは、フィルさんの背中に思いつき抱きついて……。

「あ、あのな……。そんなに密着するほどじゃなくても……。大丈夫だぞ」  
「きこえませーん。わたしは、なにもきこえませーん♪」

だって、こうしないと私の胸を感じてくれないから……。

昨日もいったけど、わたしがフィルさんのこといっぱい包み込んであげるから……。

《……》

「サンダー、どうしたんだ？　いつものお前なら、『はいはいラブコメはそのくらいにして』とか言いそうだけど……」

《……相棒、私だって時と場合は考えますよ。今の相棒には、人のぬくもりが必要です。ユミナさんは、一生懸命してくれてるんですよ……。ですから、ユミナさんのことを泣かせたら、私とプリムは許しませんよ!!》

——ロードサンダー、ありがとう。

わたしのことを、ファイルさんのパートナーとして認めてくれたんだね。

「……その言葉、しっかりと刻み込んでおくよ」

《そうしてください。しみつたれた話はここまでにして、今日はしっかりとナビゲートいたしますよ!!》

「うん、それじゃよろしくね。ロードサンダー!!」

《お任せください!!　ほら、相棒、さっさと発進させてください》

ファイルさんは、スロットルを回し、サンダーをゆつくりと発進させると、そのまま海

岸通りの方へと走り出しました。

\* \* \*

「星が、綺麗ですね……」

「ああ、本当にな……」

あれから、海岸通りから、クラナガンの繁華街へと行き、ゲーセンでプリクラしたり、お洋服を見に行ったり、カラオケをしたりして遊んだ後、ここ海岸公園にやってきた。

しばらくして、フィルさんは、ぽつりぽつりと語り出す……。

「……前も、言ったけど、な。俺は……大切な人を巻き込む、死神みたいな存在だ。だから、大切な人を作れなかったし、作ろうとも思わなかった……」

「……ファイルさん」

——それは、ちがうよ。

人は、絶対にひとりでなんか生きていけない。

そんな悲しい考えは、しちやだめです!!

「俺は、この仕事を辞めるのは無理だろうし、家族なんて……きつと持てないと思っ  
た。でも……」

ファイルさんは、優しい眼をしてわたしの方を見て……。

「もし、家族を持てるとしたら……ひとりだけで、いい。こんな俺のことを、好きになっ  
てくれた大切な……女性だけで……」

それって……。

——プロポーズ、なんだよ、ね。

「証になるか分からないけど……」

そう言って、ファイルさんがわたしに渡してくれたのは、銀色に輝く魔法用カートリッジ。

「これ、は？」

「プリムのラストリミット。『スパイラルシステム』の発動キー……。いわば、最後の手段」

「!？」

確か、これって、未来での話にあった、自分の命と引き替えに力を得る禁断のシステム。

そのカートリッジの製造方法も、システムの設計図も完全消去したって言ったのに……。



「今まで、俺は自分の命はどうなっても良いって思っていた。一人でいた俺には、失うものなんて無いって思っていたから……」

——それは絶対に違う!!

フィルさんの周りの人が、そんなことを望んでいるはずないです!!

「でも、それは間違いだったんだよな。仲間だっているし、なにより……」

フィルさんは、わたしをぎゅっと抱きしめて……。

「お前が、俺のそばにいてくれる、から……。だから、このシステムを、捨てようって……思っただ」

「……そうだよ、わたし……ずっと、そばにいるから。だから、フィルさんも……わたしのこと、離さない、で……」

わたし達は、星空の元でのキスをする。

それは、永遠を誓う口吻。

プリム、ロードサンダー。

わたし、絶対にフィルさんのこと幸せにするから……。

だから、こんなわたしですが、これからも見守ってね。

そして、向こうの世界のティアナさん。

わたし、まだまだ貴女みたいに素敵な女性とは言えませんが……。

でも、フィルさんのことを、世界の誰よりも愛してるって事だけは、大きな声で言えます。

だから、ファイルさんが幸せになれるように、祈っていてください。

ファイルさんが心から笑ってくれることが、わたしの幸せなのだから……。

A f t e r S t o r y s  
C h r i s t m a s M e m o r i e s  
u r i n g    ティアナ    〈    f e a t

J S事件が無事解決し、機動六課も穏やかな日が続いていた。

あの事件以来、大きな犯罪は起こっていない……。

俺とティアも、なのはさんからの地獄の訓練に明け暮れていた。

そんなある日、俺とティアははやてさんに呼び出されていた。

「クリスマス……パーティー……ですか？」

「せや、フィル達には馴染み無い風習やろうけど、地球では12月の24日と25日はクリスマスとって、ちよつとしたお祭りがあるんや」

確かに、ミッドチルダにはそんな風習は存在していない。

地球の文化は、ある程度聞いたことがあったが、詳しくはないからな……。

「そこで、24日の夕方に、ささやかながら六課の食堂でパーティをやると思うんや」  
「それは面白そうですね。地球の文化に触れる良い機会ですからね」

こんな機会は、地球の文化を知っている人がいるときでなければ出来ないことだ。  
たまにはこういったイベントも良いと思う。

「そこでや!! これだけの大人数の料理を食堂のスタッフだけじゃ、用意するのは難しいんや。普段の業務をしながら、さらに別にパーティ用の料理となると、負担も大きくなる」

「確かにそうですね」

六課の食堂は基本的に24時間営業だ。

これは夜勤者が利用するため、どうしても夜も営業する必要がある。

「だから、パーティの料理を、私とフィル、そしてティアナの3人でしようと思うんや」  
「えええっ!!」

「む、無茶ですよ!! いくら何でも3人じゃ無理があります!!」

夜勤者が参加できないと考慮しても、参加予定人数は50人は超える。その料理を、3人でこなすのはとても厳しいぞ。

「大丈夫や、ティアナは知ってると思うけど、私もそこそこの料理は出来るし、ファイルに至っては六課で1・2を争うほどの腕前や。ティアナもファイルの癖とかは熟知してるから、補佐としては最適やしな」

「そ、それは……そうかもしれないませんが……」

確かにティアナなら、俺の補佐として最高のパートナーになると思うが……。

「もし、引き受けてくれるなら、前日の23日から25日までを二人に休暇をあげるよ」  
「えっ……?」

「準備期間もかかると思うし、それに……」

はやてさんは、ポンと俺とティアアの肩に自分の手を乗せ……。

「私からのせめてのクリスマスプレゼントや。パーティが終わった後は、二人で恋人の時間を過ごしてや……」

「はやてさん……」

はやてさんはとても優しい笑みでそう言ってくれた。

それは、まるで、母親が自分の子供に見せる慈しみの笑みだった。

「ありがとうございます……ごさいます。その仕事喜んで引き受けますね」

「あたしも、出来る限りお二人のサポートをします!!」

「ありがたいな。フィル、ティアナ。それじゃ前日の朝から料理の仕込みが大変になると思うけど、一緒に頑張ろうな」

「はい!!」

こうして、俺たち3人はクリスマスパーティーに向けて、前日から徹夜で料理を作ることになった。

仕事に関しては、エリオ達が代わりにしてくれたので、支障は来さなかった。

ヴァイター副隊長に至っては……。

『おめえとはやてが作る料理、期待してるからな。ギガうめえのを作ってくれよ!!』

完全にパーティの料理で頭がいっぱいで、仕事のことを言ったら……。

『今のお前の仕事はうめえメシを作ることだ。こつちのことは、あたしやなのはがしつかりするから、心配するんじゃねえよ!!』

そう言われ、隊員オフィスから追い出されてしまうほどだった。

「ファイル、これは気合いを入れて作らなきゃね!!」

「ああ、みんなが俺たちの分まで頑張ってくれてるんだ。とびつきり美味しいのを作ってるさ!!」

「期待しとるで、私もファイルの料理を楽しみにしてるんやで」

「はい、最高の料理を作りますよ!!」



みんながこれだけ期待してくれてるんだ。  
俺もその期待にしっかりと応えなくちやな!!

\* \* \*

「こんな所にいたんだな……ファイル」

「ヴァイス陸曹……」

今俺は、外に出て夜風に当たっている。

外の風が火照った身体をクールダウンしてくれて、とても気持ちいい。

実はパーティ中盤、俺はこっそり外に抜けだしていた。

あんまり騒がしいところが得意ではないのもあるんだけど……。

「まあ、シャーリー達がいたらゆっくりも出来ないだろうな……」

ヴァイス陸曹はポケットからたばこを取り出し、火をつけて吸い始めた。

「おめえも吸うか？」

「止めておきます……。昔なら吸ったでしょうけど」

未来の世界で、俺はかなりたばこを吸っていた。

気を紛らわせるのに、たばこか酒くらいしかなかったから――。

「そっか……。まあ、今はティアナがいるんだしな」

「ええ……」

しばらく俺とヴァイス陸曹は、たわいもない話をしながら過ごしていた。考えてみれば、こうして男同士で話すのってあまりなかったな。

「……おっと、ちよいと長く話すぎたな。これ以上時間をとらせたら……」

ヴァイス陸曹が指をクイツとやって、後ろを指すと――。

「その木陰で隠れてるティアナにどやされそうだからな」

「えっ……ティア!?」

「あ、あはは……なんか出るに出られなくなってしまつて……」

「ということで、お邪魔虫は消えるとするぜ。後は二人で楽しみな!!」

「ちよ、ちよつと!!」

ヴァイス陸曹は、そう言つてさっさと隊舎の中に入つてしまった。

「もう……ヴァイス陸曹つたら……」

「あ、あはは……何かあからさまにされると、反応に困るぞ……」

「本当よね……」

確かにティアと二人きりになるのは嬉しいけど、この事が後日、からかわれることになるのは嫌かな……。

でも、ヴァイス陸曹はそんなことはしないか……。

飄々としてるようで、男気がある人だし——。

「でも、やっと……二人きりの時間が出来たわね」

「そうだな……」

するとティアは、俺のそばに来て俺の肩により掛かってきた。

こうして、好きな人の温もりを感じているときはとても幸せを感じる。

「ねえ……まだ25日にはなっていないわよね」

「ああ、まだ1時間は残っているな……」

時計を見ると午後11時を指していて、まだイブの時間は残されていた。

「だったら、あたし達の部屋にもどって……一緒に過ごさない？」

「だな……」

残った時間は、二人きりの……。

恋人同士の時間だから――。

\* \* \*

「さて、ケーキでも食べるとするか」

「ええ」

部屋に戻ったあたしたちは、さっそく明かりを消して、テーブルにケーキを用意し  
キャンドルに火を付ける。

用意したケーキは、事前にファイルが手作りでつくっておいたものだった。

「うん、美味しい♪ やっぱりファイルのケーキって何度食べても美味しいわね!!」  
「そう言ってもらえると作った甲斐があるな」

本当、何度食べてもファイルが作るケーキは美味しいわね。  
甘さもしつこくないし、何よりあたし好みの味なのよね。  
それに……。

「ねえ……このケーキ……もしかして？」

「覚えていたか？」

「……当たり前でしょう」

そう、このケーキはあたしがファイルと出会って、一番最初に作ってくれたチーズケーキだった。

別名ドワーブルフロマージュ——。

これを最初に食べたとき、あたしもスバルも本当にびつくりして、1ホールあったのに全部食べてしまったのだ。

「これを超えるケーキをどうしても作りたかったのに、最後まで超えられなかったのよね……」

「あはは、ティアは負けず嫌いだからな」

「ふふつ、確かにあの頃のあたしは躍起になって、これを超えたいと思っていたわよね」

あの頃、ファイルに何度もレクチャーして貰って、何度も挑戦したんだけど、どうしてもこの味を作ることができなかった。

今もチャレンジしてるけど、未だにそれは出来ていない。

「でも、今はファイルがこうしてあたしのために作ってくれる。その方がずっと嬉しい」  
「ティア……」

やっぱり大好きな人に作ってもらう方が何倍も美味しい。

例えば自分で出来たとしても、こんな満足感を得られないと思うから……。

「さてと、食べ終わったし、後片付けくらいはするわね」

「いいよ。俺がするって……」

ケーキを食べ終わって、後片付けをしようとしたとき、ファイルが自分でしようとしていた。

せめて、これくらいしなきゃ悪いわよ……。

「それだったら、俺が洗うからティアはそれを拭いてくれるかな」

「オーケー。任せておきなさい」

結局あたし達はこんな感じで、後かたづけを終えた二人はフロアに戻り、揃ってソファに座り寄り添いながらまったりとしていた。

特に何かをするでもない。二人はただ寄り添いあい、お互いの暖かさを感じるだけ……

あたし達は普段は訓練漬けのため、どこかのアミューズメントパークに行くとかいうようなデートはほとんどなく、天気の良い日は芝生に二人で寝転がったり……などということがほとんどだ。

しかし二人とも言いたいことは一つだけ……。

(二人でいる時間が大切だから……)

——二人の時間。

それは暖かくも甘い……二人だけの宝物。

しかし……楽しい時間ほど短く感じるモノで……。



ファイルはふと、部屋にある置き時計に目をやる。

時間は午前0時

「イブ……終わっちゃったね」

「でも、クリスマスは終わっていないだろ。だから……」

そう言つて、ファイルは棚から小さな箱を取り出し……。

「えっと……メリークリスマス。ティア」

ファイルはどこか照れくさそうな表情で、あたしにその箱を渡してくれた。

「……ありがとう……ファイル」

ぶつきらぼうだけど、本当はどれだけあたしのことを思ってくれてるかは分かってい

る。

このプレゼントだって、必死で探してくれたに違いないから……  
だからね……。

「ファイル……あたしもね……プレゼントがあるんだよ」

あたしもソファアの下に隠しておいた包みを取り出し、それをファイルに渡した。

「メリークリスマス……ファイル」

「……ありがとうな。ティア」

ファイルもまた笑顔で受け取ってくれた。

よかった……。

喜んでくれたみたいね。

「開けても……いいか？」

「うん……その代わり、あたしも開けるから？」

「ああ……」

あたしとファイルは二人して、互いのプレゼントの包装を解く。  
お互いのプレゼントは二つずつ。

あたし達は、まず大きい包みの包装を解いていった。

あたしが受け取ったファイルからのプレゼントは……。

「これ……ライダー用のジャケットね」

「ああ、ツーリングが好きなティアにはもってこいだと思つてな……」

茶基調で、落ち着いたデザインのジャケットは着てみると、とてもしっくり来る物  
だった。

「ありがとう……とつても嬉しい」

そして、ファイルも包みを開いていく。

ファイルは何かに気がついた様子だった。

「……………これ？」

あたしがファイルにプレゼントしたのは、黒いセーターとマフラー。

「……………もしかして、手編みか？」

「うん。前からずっと編んでいたんだけど、こんな機会があつて良かった。ずっと渡せないでいたから……………」

ファイルがセーターを自分の身体に合わせている。

袖の長さとかも問題ないみたいね。

「……………大切にするよ。ティア」

「……………うん、大切にしてくね。頑張つて編んだんだからね……………」

そして、残るプレゼントはお互いに一つ……………。

偶然なのか、二人のプレゼントの大きさは殆ど同じ……………。

その包装を解いていく間、あたし達にはある種の予感があった。

(もしかして……)

そして、包装紙はなくなり、品物が見えてきた。

「あつ……」

あたし達の漏れた声が重なっていた。

お互いの手元には……一本の腕時計。

銀色の落ち着いた意匠の時計だった。

両方とも、もちろん、男性用、女性用の違いはあるけど、それは明らかに同じデザイン。  
ン。

それをみて、あたし達はすぐに顔を見合わせ……。

「ファイル……もしかして……？」

「……どうやら、そう、みたいだな……」

あたしとファイルはお互いのポケットからある物を取り出した。

それは……。

お互いにプレゼントしたのと全く同じ腕時計……。

この時計はもともとペアウオッチで売られていた物だ。

どうやら、あたしとファイルは同じペアウオッチを、お互いにプレゼントしてしまった  
みたいだ。

まさか、こんなところで気が合うとはね……。

あたし達は呆然と顔を見合わせ……。

そして……。

最後は同時に吹き出し……。

「あっははははは!!」

「何やってるんだろうな……俺たち」

「全くよね……」

二人は同じように、元々ポケットにしまっていた時計を再び戻し、互いにプレゼントした時計を腕に嵌める。

そして、お互いに微笑んでいた。

「ありがとう……ファイル。大事にするね」

「ありがとうな、ティア。大事にするよ」

お互いに腕に嵌めた時計を見せてから、あかし達は苦笑していた。

\* \* \*

「あのね……ファイル」

「んっ?」

今日は、もう遅いからそろそろ寝ようとしたとき、ティアが……。

「もつと……ファイルのこと感じたいな」

「……いいの?」

恋人同士がこうしていて、そんな言葉を言われる。

それが意味することは、限定される。

俺もいくら鈍感朴念仁とか言われていても、そのくらいは分かるつもりだ。

ティアも自分から誘ったが、顔は真っ赤になってモジモジしている。

「……うん、もうひとつだけプレゼントがあるんだ……」

「えっ……?」

そう言って、ティアはロングヘアだった髪を、リボンで結んでポニーテールにして……。



「あたし自身も……プレゼントしたいから……」

ポニーテールにしたティアは、いつもの雰囲気とまた違った魅力に溢れていた。それに可愛い恋人にここまで言われて何もしいなんて、アホがすることだ。

俺はティアを抱き上げる。

所謂、お姫様抱っこだった。

「きゃっ!？」

「プレゼント……ありがとうもらうからな」

「うん……」

俺はティアを抱いたまま、寝室に足を踏み入れ……。

「あっ……」

そのまま、ティアをベッドに下ろし、俺もティアの上に乗って……。

「今日は……寝かさないからな」

「うん……いっぱい、いっぱい抱きしめてね」

俺はティアの唇を少し強引に奪う。

ティアもびっくりしていたけど、すぐに受け入れてくれ、互いの舌は何度も求め合い……。

数分後……。

キスが終わった後は、唾液で出来た銀の糸ができあがっていた。

「もつと……もつと感じたいよ」

「ああ、俺もだ……」

俺たちは互いに衣類を脱ぎ去り、その後は何度も互いの存在を確かめ合った。

唇 胸  
身体  
体温

それこそお互いの身体の全てを確かめ合うように求め合った。

そして――。

「お願い……もう、きて……ファイル」

――聖なる夜。

俺たちは、何度も求め合い……。

お互いの体温を感じる度に、お互いの存在が一つだと感じられ……。

俺もティアも、その快感の海に溺れていった。

\* \* \*

「ねえ……起きなさいよ。ファイル」

なんか俺の身体が揺すられているようだが……

「んっ……」

「起きないわね……んもう……しょうがないわね」

すると、俺の頬になにか温かい感触が触れた。

ちゅっ

(えっ……)

この温かい感触、もしかして……  
俺は慌てて起き出す。

「……やつと、起きたわね。お寝坊さん♪」

「……おはよう、ティア」

「おはよう、フィル」

やっぱり、あの感触はティアの……。

そう思ったら顔が真っ赤になるのを感じた。

「……あたしだって恥ずかしかったんだからね。ばか……」

ティアも同じ事を思ったのか、やっぱり顔が真っ赤になっていた。

「でも、嬉しかった。こうして、好きな人に起こされるんだからな」

「……ばか。でも、フィルが望むなら、いくらでもしてあげる……からね。だから……」

ティアは俺にぎゅつと抱きつき……。

「これからもずっと一緒だからね。フィール♪」

俺の頬にキスをしてきた。

そして、俺も……。

「ああ、ずっと、ずっと一緒だからな。ティア」  
「うん♪」

聖なる夜……。

俺たちは、お互いの絆をより深められた……。

恋人同士の大切な一時……。

クリスマスはそんな時間を与えてくれた——。

これからもティアアのことを大切にしていきたい。

二人のクリスマスは、これからもずっと続いていくのだから……。

Christmas Memories & feat  
uringなのは &

六課が解散して4年、わたしとファイルは管理局を引退して喫茶店を開いていた。

最初のころは、お客さんもまばらだったけど、今では連日大盛況の状態が続いている。ファイルのケーキは地球の翠屋の味を受け継いでいて、その味はミッドでもとても受けていた。

ヴィヴィオも休みの日は手伝ってくれて、その可愛い姿は一部のお客さんでファンが出来ているくらいです。

こうして、わたし達親子3人、本当に幸せな日々を過ごしています。

そして、今日も喫茶店『Amour eterne』は満員御礼です。

そんなある日、はやてちゃんから一つの話を持ちかけられました。

『なのはちゃん、ファイル、久しぶりやな。元気にしとった?』

「はやてちゃん、本当に久しぶりだね。そつちも相変わらずだね」

「そうですね。八神家のみなさんもお変わりないようで何よりですよ」



実際通信の向こう側では、リインとアギトが食べ物の取り合いをしていて、その声がこちらにも聞こえてきていた。

『あのな……。実は、お店の予約をお願いしたいんやけど……。』

「別に構わないけど、いつなの？」

『えつとな……。2ヶ月後の12月24日なんやけど……。』

「ちよつと待つててね。今調べてみるから……。ファイルお願い」

早速ファイルは、店のパソコンを見て、予約状況を調べていた。

この一年、お店の方も軌道が乗り、いろんなパーティ客の予約が沢山入っている。

ピーク時だと、一月先まで埋まっていることもあるくらいだ。

「えつと……。大丈夫ですよ。夕方でしたら空いてますよ」

『ほんまか!! よかった……。』

「でも、八神家の人数くらいでしたら、そんなに慌てなくても……」

確かに満員御礼だけど、時間帯によっては空いていることがある。その時間に合わせれば、こんなに前から言わなくても……。

『実はな……。この日に久しぶりに旧六課メンバーを集めて、クリスマスパーティーをやりたいと思っっているんや』

「ええっ!? それ本当なの、はやてちゃん!!」

『本当や。幸いミッドにはクリスマスという風習はないから、この日に合わせるのは苦勞しなかったんや。みんなに声をかけてみたら、7割くらいは来てくれることになったよ』

「そうですか……。みんなが……」

考えてみたら、わたしとファイルが管理局を引退してから、六課のみんなには久しく会っていない。

ティアアナとか、フェイトちゃん達はよくお店に来てくれているけどね。

『というわけで、ファイル、なのはちゃん。お店の貸し切りお願いできるかな?』  
「任せてください。最高のおもてなしをさせて貰いますよ!!」

ファイルが右腕の袖をまくって、自分の腕をパンと叩いてアピールしていた。わたしもファイルに負けないように頑張らなきゃね。

『みんなを集めるのは任せておいてや。ほなら、またな……』

はやてちゃんから通信が切れると、わたしとファイルは早速スタッフを集めて、はやてちゃんからの話を話した。

このスタッフは、六課食堂のスタッフからスカウトしてきた人たちなので、管理局関係の話してもさほど問題はなかった。

たった一つだけ問題なのは、男性スタッフが殆どいないことくらいかな。

そんなことを考えていたら、ファイルが話を始めていた。

「みんな、さつき、はやてさんから店の予約が入った。みんなに話しておきたいことは、その日、旧六課メンバーを集めてパーティをすることになったからだ」

『おおっ!!』

スタッフから、「本当なの!？」とか様々な声が飛び交っていたが、ファイルが一喝すると、静かになり、またファイルの方を注目する。

「何でも、地球の風習で12月24日はクリスマスという物があつて、それで今回の企画になつたらしい。クリスマスの詳しいことは、なのはに聞いてくれ。そこで、この日は早めに店をお終いにして、パーティーの準備にはいるから、みんなもそのつもりでいてくれ」

『はい!!』

「パーティーの準備はわたしとファイルでするから、みんなは午前出勤で……」

これは、わたしとファイルが個人的に受けた物だから、スタッフのみんなに負担をかけるわけにはいかない。

わたしが当日の旨を言おうとしたとき……。

「ちよつとまつた!!」

「えっ?」

突然、スタッフの一人から待ったをかけられてしまった。

「ファイル店長、なのはチーフ、水くさいことはいいつこなしですよ。お二人だけで50人近くの用意は厳しいですよ」

「だけど、せつかくのパーティーなんだから、みんなもそれなりの準備があるだろうし……」

「それは、お二人も同じでしょう。むしろ、お二人の方が色々やらなければならぬと思いますよ」

「それに、お二人だけでこんな面白いことをするなんてずるいですよ。私達も参加させてください」

スタッフのみんなが、うんうんと頷いて今の言葉に同意していた。

「みんな……」

「……それじゃ、みんなお願いするね」

『おおっ!!』

こうして、当日は午前中でお店を閉めて、午後はみんなの協力で店全体の飾り付けと、50人前の料理を用意することになった。

特に料理の方は、ファイルが気合いを入れている物だから、スタッフもその熱気に当てられて、みんないつも以上の気合いが出ていた。

デザートはわたしと女性スタッフが中心となって、何とか50人前を作ることができた。

最初はこれを二人でやろうと思っていたんだから、無茶にもほどがあつたよね。

あとはみんながやってくるのは待つだけになった。

まず、お店にやってきたのは……。

「おう、なのは、ファイル。元気にやってたか」

「久しぶりだな。なのは、ファイル」

「お久しぶりです、なのはちゃん、ファイル」

はやてちゃんを筆頭に八神家のみんなだった。

「ひさしぶりやな。なのはちゃん、ファイル。こうして直接会ったのは、1年ぶりくらいや

な」

「そうですね。はやてさんは仕事柄中々時間が取れませんからね……」

「そうなんよ。フェイトちゃんやティアナからの通信で、なのはちゃん達のお店で美味しいケーキを食べたよって話を聞く度羨ましくてな。やつと、久しぶりにフィル達の料理を食べられるで」

「ふふつ、それじゃ今日はいっぱい食べていつてね。はやてちゃん」

「今日は腕によりをかけて作りましたからね。例えばスバルが3人いても大丈夫なくらいに……」

実際、今日の料理はいっぱい食べる人が多いから、かなりの量を作つてある。

予算も事前に参加者から受け取っているから、赤字になることもないし……。

「それなら安心やな。ヴィータなんか昨日から楽しみにしていて、大好きなアイスも食べないできてるし」

「は、はやて!! それは言わなくて良いだろ」

「あはは!!」

ヴィータちゃんはふくれっ面になって、そっぽ向いてしまった。でも、本当にみんな変わっていないな。

「つたく……でもよ、ファイル。久しぶりにうめえ料理食わしてくれるんだろうな」

「それは任せてください。腕によりをかけて作りましたから」

「おう!! そんじゃ、あたし達はそんまでみんなを待つとするか」

「そうやね。それじゃファイル、なのはちゃん。私は入り口で受付をしてるから、なんかあつたら声をかけてや」

そう言つて、はやてちゃん達は受付に行つて、みんなを出迎える準備を始めた。

\* \* \*

「なのは、これから忙しくなるぞ。フェイトさんやティア達ももうすぐ来るからな」  
「そうだね。ファイル、これからが本番だね」

はやてさん達が来ただけで、この賑わいだ。



フォワードのみんなやフェイトさん達が来たら、もつと忙しくなる。そんなことを考えていたら、また来客がやってきた。

「やつほー、フィル!!」

「あんたね……。もう少し静かに入りなさいよ」

「お久しぶりです。なのはさん、フィルさん」

「お元気でしたか」

「ご無沙汰しています」

今度の来客はスターズとライトニングのフォワードのみんなだった。エリオは、相変わらずキャロとルーテシアに主導権をとられてるな。

「おう、みんな久しぶりだな。といっても、スバルとティアは、よくうちの店を使ってくれているから、そんなでもないか」

「確かにね。つい一月前にもコーヒーを飲みに来たしね」

「ええっ、ティア。ずるい自分だけ!!」

「ずるいって……。あんたね。あたしだってたまの休暇で来ただけなんだから……」

「だけど、あたし本当に来る機会がないんだよ。いつも夜勤ばかりだから、終わった後はいつもバタンキューだし……」

スバルの仕事、レスキューは夜間だろうと出勤はかかる物だ。

しかもスバルは防災士長だから、部下も引き連れる責任もあるからなおさらだ。

「まあまあ、スバル。それだったら今日は、わたしとフィルの料理をいっぱい食べていてね」

「はい!! ありがとうございます。なのはさん」

「あんまり食べ過ぎて腹壊すなよ。スバル」

「ふう……。フィル、酷いよ」

「酷くないと思うわ。フィルの言っていることは的確だし」

「ティアまで……。もう、いいもん!! みんなの分まで全部食べてやる!!」

まったくスバルも相変わらずだよ。

でも、こうしてみんなが笑いあえるんだ。

本当に平和になったって、改めて思うよ。

俺がしてきたことは、決して無駄ではなかった。

\* \* \*

パーティーが始まり、色んな所で盛り上がっていた。

ヴィータさんとスバルがデザートのアイスを取り合ったり……。

ティアとフェイトさんが執務官の仕事のことで話し合ったり……。

はやてさんはなのはと昔のことで懐かしんだり……。

エリオはキャロとルーテシアに迫られて、タジタジになっているし……。

というか、ルーテシアの場合はからかいが混じってるな。

本当、みんな変わっていないな。

少しだけ寂しい気持ちもあるけどな……。

——もう、みんなと一緒に戦えないから。

でも、その代わり今の俺は、こうしてみんなの安らぎの場所を作ることが大切な仕事

なんだ。

みんなが笑って、楽しんでくれればそれが何よりの幸せだから……。

そして……。

パーティーも終盤になり……。

はやてさんが壇上に上がって……。

「さてと、みなさんパーティーも終盤となりましたので、ここでプレゼント交換をしてみましたと思います。事前に各自に伝えてありましたので、プレゼントの方は用意していただいたと思います……。」

事前にははやてさんから話を聞いていたので、みんなそれぞれプレゼントを持ち寄っている。

「それでは入り口で渡しました交換用のカード番号を見て、各自プレゼントを受け取っ

てください」

そして、俺が受け取ったプレゼントは……。

「クツキーだな……」

「そうだね。誰のだろうか？ 手作りっぽいよね」

なのはの言うとおりに、買ってきたという感じはない。  
包み紙も可愛い物を使っているし、リボンもピンク色だ。

「あつ、それわたしが作ったやつですね」

「キャラ、これ、キャラが作った物だったんだ」

「はい、まさかフィルさんに当たるとは思ってませんでした。本職の方にはかないませ  
んけど、一生懸命作ったんですよ」

キャラの言うとおりに、このクツキーを見れば分かる。

早速一ついただいてみる。

「うん、甘さもほどよくて、とつても旨い」

「よかった。フィルさんに喜んでもらえて」

「キャラ、ありがとうな。んっ？ キャロが持っているその包み。もしかして？」  
「はい!! フィルさんのプレゼントですよ」

キャラが持っていたのは、俺が選んだケーキ用のヘラだった。

これは俺が普段から使っている物と同じで、とても使いやすい物だ。  
クリームを塗るのに最適な長さをしていて、初心者でも扱いやすい。

「そっか……。キャラ、それで美味しいケーキを作ってくれよ」

「はい!! その時は是非フィルさん達に食べて貰いたいです!!」

「その時を楽しみにしてるよ。キャラ」

「それでは、エリオ君達が待っているので、この辺で失礼します」

キャラはエリオ達が待つテーブルに戻っていった。

ふと時計を見ると、午後9時を回っている。

そんなとき、フェイトさんが……。

「なのは、フィル。そろそろヴィヴィオの所に行つてあげて……」

「フェイトちゃん……でも……」

フェイトさんの言うとおりに、確かにこのパーティが終わつたら、ヴィヴィオと3人でする約束をしている。

だけど、店をほつたらかしていくわけには……。

「大丈夫ですよ。お店の戸締まりとかは、私達スタッフがしておきますから、お二人はヴィヴィオちゃんの所に行つてあげてください!!」

「そうですよ。後のことは任せて、お二人はさっさと行つてください!!」

「さあ、さあ!!」

「ちよ、ちよつと!?!」

俺たちが抵抗しようとする、マネージャーとフェイトさんが二人がかりで、俺となのはを外に追いやってしまった。

中に入ろうとしたら、フェイトさんがつこりとゴーホームのサインをして、家に戻れと何度も合図をしている。

「ふう……これじゃ、今日は店には戻れないな」

「そうだね。マネージャーも最初からこのつもりだったから、きつと頑として中に入れてくれそうにないよ」

「……まったく、うちのスタッフは揃いもそろってお人好しばかりだよ」

普通なら、店長とチーフが抜けたらとつてもまずいのだがな。

「フィル、せっかくのみんなの好意だし、家に戻って3人でクリスマスパーティーの続きしよう」

「そうだな、なのは」

「うん♪」

すると、なのはが俺の右腕をとり、自分の腕を絡めてきて……。



「なのは……」

「せっかくのイブだから……ね」

「だな……」

俺となのはは、家に帰り着くまでずっとこのまま歩き続けた。

\* \* \*

「おかえりー……!!」

「ただいまヴィヴィオ。ごめんね遅くなって……」

「本当ならもっと早く帰りたかったんだけど……」

さすがにお店の責任者が、二人とも抜けてしまうのはかなりまずいんだけどね……。

「大丈夫だよ。ちゃんとはやてさんから連絡は貰っているし、今日のことは前から知っていたんだもん。それに……」

「ママ達が遅く帰ってきてくれたから、お料理の方も間に合ったし」

そう言ってヴィヴィオの後ろを見てみると、テーブルには色んな料理が並んでいた。コーンスープに、鶏のもも肉の照り焼き、あとはサラダまである。

「えへへ♪ パパ達にはかなわないけど、わたしもちゃんとお料理はできるんだよ。今日は二人に食べて欲しくて頑張ったんだからね」

ヴィヴィオの指を見ると、絆創膏が何枚も貼られていて、それがヴィヴィオの頑張りをすごく表していた。

「それじゃ、せっかくの料理が冷めないうちに一緒に食べようか」

「うん!!」

「そうだね」

「あとはこいつも……」

そう言ってファイルは、自分が持っていた箱から何かを取り出す。

ファイルが持っていた箱から出したのは、イチゴのクリスマスケーキだった。

「うわあ……すごいね」

「美味しそう!!」

そのケーキは、色とりどりのフルーツが飾られていて、上には飴細工で作られた糸で作られた木とマジパンで作られた家と、後は……。

「これ……もしかしてわたしとヴィヴィオとフィル？」

そう……。

ケーキの上に乗っていた人形は、わたし達3人を表していた。

「ああ、俺たち3人を表してみたんだ。これがなのはとヴィヴィオに贈るクリスマスプレゼントになるかな……」

「パパ……ありがとう。素敵なクリスマスプレゼントだよ!!」

「じゃ、わたしからもフィルとヴィヴィオにだね」

わたしも持っていたバックから、二人に贈るクリスマスプレゼントを取り出した。  
わたしから贈るクリスマスプレゼントは――。

「うわあ、おそろいの手袋だ!!」

「なのは、これ……」

「うん、前からこっさり編んでいたんだ。二人にばれないように作るのに苦労したんだからね」

色は水色で統一してあるけど、それぞれの手袋には、手の甲に当たるところにミッド文字で名前を刺繍してある。

「ママ、本当にありがとう!! これ大切にするね!!」

「うん、ヴィヴィオ。それで手を冷やさないようにしてね」

「なのは、本当にありがとう……。最高のクリスマスプレゼントだよ」

「わたしこそありがとう。このケーキ、あの忙しい中でよくこれだけの物を……」

正直言って、パーティー用の料理だけでも大変だったのに、その合間を縫って作ってくれたんだ。

「俺は……これくらいしか二人にしてあげられないからね」

——そんなことないよ。

フィルのその優しさに、ヴィヴィオもわたしもどれだけ救われたか。本当にありがとう、フィル。

「いたたきまゝす!!」

わたし達は、ヴィヴィオが作ってくれた料理とフィルが作ってくれたケーキを食べながら、親子3人のクリスマスをいっぱい楽しんだ。

ヴィヴィオもフィルのケーキを食べるとき、口に入りきららない程にケーキを頬張り、口の周りにクリームをつけながら嬉しそうに笑っている。

「ほらヴィヴィオ、クリームが口の周りについてるよ」

そう言つてフィルがハンカチで口の周りを拭いてあげていた。

「えへへ、パパのケーキが美味しくてつい……」

「つたく……。そんな慌てなくても大丈夫だよ」

「はい」

こうして、親子3人が一緒にいて笑いあえる一時が一番好きだ。  
わたしにとって、ヴィヴィオもフィルも大切な宝物なのだから――。

\* \* \*

「すう……すう……」

「ふふつ、ヴィヴィオ眠っちゃったね」

さつきまであんなにはしゃいでいたのに、今はこうして無垢な寝顔で眠っている。

「そういえば、さつきファイルから手紙を受け取っていたんだった」

夕食の時ファイルから手紙を貰っていたんだけど、読む暇が無くてずっとポケットにしまったままだった。

今ファイルは、ベランダで外の空気を吸っているから丁度良いかも……。早速わたしはファイルからの手紙を読んでみることにした。

『なのはへ……。いつも上手く言えないけど、なのはの笑顔に俺は本当に救われた。今だから言うけど、俺は誰も好きにならないようにしていたんだ……。』

えっ………？

どういう………ことなの？

『正直に言うと、誰かを好きになってしまうと、また俺のせいで失うんじゃないかってそ

ればかりを考えていたんだ。実際ティアは俺のせいで死んでしまったんだから……』

——それは違うよ。

プリムから聞いたけど、ティアナはそんなことは絶対思っていないよ。

『そして、こつちに戻ってきてみんなと一緒に戦って、なのはと一緒にヴィヴィオを助けて、全てが終わったとき、同時に俺の役目も終わったと思ってた。だからあの時、死んでも良かったと思ってた。でも……』

『あの日……なのはが俺に告白をしてくれたとき、そんな俺の殻を全部壊してくれた。【全部一人で抱え込まないで、わたしと一緒に幸せを見つけていこう】なのはと初めて結ばれたときに言ってくれた言葉は今でも俺の心の支えになってる』

そうだよ……。

ファイルは一人で全部抱え込んだじゃうから、だから少しでも良いから分けて欲しかった。大好きな人が、いつも心から笑っていて欲しかったから……。



『俺は……そんななのはに何かしてあげられましたか?』

充分すぎるほどしてもらったよ。

ファイルがいなかったら、わたしもヴィヴィオもこんなに幸せな日々は過ごせなかったんだから……。

『なのはがいなかったら、俺はきつと……今でも一人だったから。だから……』  
『ありがとう。そして、これからも俺の心の支えになってくれると嬉しいです。俺の大切ななのはへ　　ファイル・グリード』

わたしはもう涙を抑えられなかった。

この手紙はファイルの本当の気持ちが書かれている。

わたしも同じだよ。

ファイルがいたからこそ、こんな風に温かい気持ちでいられるんだからね。

気付いたらわたしはベランダに向かって走っていた。

\* \* \*

「ふう……少し冷えるけど風が気持ちいいな」

少しお酒を飲み過ぎてしまったから、火照った身体をさますのには丁度良い。  
今日は大分飲んでしまったからな。

そんなことを思っていたら、階段をパタパタと上がる音が聞こえてきた。

「はあ……はあ……」

「なのは？ どうしたんだい、そんなに息を切らせて……」

「フィル!!」

突然なのはが、俺の背中からぎゅつと抱きしめてきて……。

「……フィル、わたしも……わたしも同じだよ。フィルがいたからこそ、こんなに温かい気持ちになれたんだからね」

「なのは……そっか。手紙読んでくれたんだね」

「うん……。フィルの気持ちがいっぱい伝わってきたよ。本当にたくさんね……」

「俺は、普段口下手だからあんな形にしかできなくて……ごめんね」

本当なら、ちゃんと言葉で伝えなきゃいけないんだけど、どうにも俺はこの手のことを伝えるのに緊張してしまう。

だから、少しでもなのはに伝えたくて手紙にしてみたんだ。

「いいよ。不器用でも、本音で言ってくれる方がずっと嬉しいから……」

なのはは、俺の肩にコトンと自分の身体を預けてくる。

俺もなのはの温もりをもっと感じたくて、そつと自分の方へ抱き寄せた。

『ふふっ、どうやら二人とも幸せなようだね』

『心配して見に来ただけで、大丈夫なようだね。ファイル』

「「えっ……っ？」」

ま、まさか、この声は……。

そんなはずはない。二人はあの時に……。

—— だけど、聞き間違えるわけがない。

この声は……。

俺となのはが後ろを振り向いてみると……。

「お久しぶりだねフィル、そして……なのは」

「元気にしてたって、その様子だと大丈夫そうね」

「フェイトちゃん……」

「ティア……」

俺が、かつて愛したティアとフェイトさんがそこに立っていた。

「ティア……本当にティアなんだな」

「当たり前でしょう。まっ、確かにあたしやフェイトさんがここにすることは奇跡に近いんだけどね」

「クリスマススの奇跡とでも言うのかな。ほんの一時だけだけど、私達は二人に会いに来ることができたんだよ」

「そっか……」

理由なんかどうでも良い。

今ここに二人がいて、もう一度だけでも話をすることが出来る。

それだけで充分なんだ。

「なのは、ファイル。私達はずっと向こうの世界で二人のことを見守っていたよ。特にファイルは未来から戻ってきて、ずっと一人きりだったから……」

「正直言つて、一緒にいられなかったことがどれだけ苦しかったか。本当なら一緒にいて支えてあげたかったんだけど……」

「ティアナ、あなた……」

「私もティアナと同じだよ。ファイルに魔力は託したけど、最後まで一緒にはいてあげられなかったからね」

「フェイトさん……」

そんなことはない。

二人が色々支えてくれたからこそ、俺はこっちの世界で頑張つて来られたんだ。

確かに、今はなのはがいてくれる。

でも、二人が命までかけて託してくれた物があつたからこそ、俺となのははこうして  
いられるんだ。

「なのは、フィルのこと絶対に離しちや駄目だからね。なのはのことをそこまで分か  
てくれるのつて、フィルくらいなんだからね」

「にやはは、大丈夫だよ。フィルが離れたいと言つたつて、絶対に離れてあげないんだか  
ら!!」

「ふふつ、それを聞いて安心した。なのは、フィルといつまでも幸せにね」

「うん、ありがとうフェイトちゃん」

なのはとフェイトさんがあつちで二人だけの話をしている。

俺もティアと二人きりで話したかつたから……。

「ティア。こうしてもう一度会えるなんて夢にも思わなかつた……」

「あたしもそうよ、フィル。でも、本当によかった。あんたちちゃんと自分の幸せを掴んだのね」

「本当は……もう二度と好きな人を作らないつもりだったんだけどな……」

「フィル……」

「でも……俺は、なのはの優しさと心の強さに救われたんだ……」

きつとなのはに言われなかったら、今でも俺はティアのことを思い続けて、生涯独り身だったと思う。

「もし、あたしのことで自分の幸せを犠牲にしてたら、引っぱたいてやるつもりだったけど、その心配はないみたいね」

「あはは……相変わらずだな、ティア」

「フィル、ちゃんと幸せになりなさいね。あたしやフェイトさんのことは気にしないで、あんたはなのはさんのことを愛しなさいよ」

「……ありがとうな。ティア」

俺は、涙が出そうなのを必死でこらえる。

今は泣くときではない。

笑顔で二人に応えなきやいけないんだ。

俺となのはは幸せに暮らしてますよって、伝えるためにも……。

「フエイトちゃん……ティアナ!! 足が!!」

二人の全身が光り出し、両足が消えていき、それは上半身の方へ回っていた。

「……そろそろ、時間みたいね」

「そう……ですネ」

二人は分かっていたみたいで、慌てる様子は全くなかった。  
むしろ安心しきった表情で、俺たちのことを見ていた。

「ティア、フエイトさん……」



「フィル、なのは……いつか二人の子どもができれば、また見に来るからね」

「そんなきはあたしも一緒に来るからね」

「ああ……楽しみにしてる」

もう、二人に会うことはきつと無いと思う。

だけど、また奇跡が起こったら会えるかも知れないから……

「それじゃ、二人とも……」

「あっ……」

そして……。

「またね……」

ティアとフェイトさんは、光と共に消えていった。

「……行っちゃったね」

「ああ……でも、また会えるさ。そんな気がする」  
「そうだね……」

そうさ——。

俺たちが心で願えば二人は俺たちの傍にいる。

「あつ……」

なのはがふと空を見上げると……。

「雪だ……」

空から雪が降ってきて……。

「ホワイトクリスマスだね。きつと……二人からの贈り物かな」  
「だな。フェイトさんとティアからの……な……」

地球では、クリスマスに雪が降るとホワイトクリスマスと言う。

そして、そこで一緒に過ごせた男女は、永遠に幸せになれるということを、なのはから聞いたことがあった。

「ファイル……」

「んっ？」

なのはは、そつと俺の方に身体を預けて……。

「ずつと……ずつと一緒だからね」

「ああ……なのはが嫌だと言っても離れないからな」

「そんなこと言わないよ。だって、ファイルのことを世界で誰よりも愛してるんだもん♪」

純真無垢なのは——。

そんななのはに、俺は何度も救われた——。

そして、最愛の愛娘ヴィヴィオも――。

これからも俺たち3人には色んな困難が待っていると思う。

だけど、一人じゃない――。

3人でなら、きっと幸せになれるから――。

Valentin Story ~ Rainy Blue

雨が降りしきる夜――。

俺は、ミッドにある酒場にいた。

本当なら、今頃は彼女と一緒にいたはずだったが……。

「……美味しくもないな。今日の酒は」

そう、俺は昼間に振られたばかりだ。

正確に言えば、二股をかけられていて、その現場を見てしまい、相手に逆ギレされたというのが正しいだろう。

「結局は、俺に魅力がなかったということだよ……な」

自分に魅力があれば、相手だって二股をすることなんて無いしな。もう、何杯目だろう。

俺はストレートのウイスキーを一気に飲み干す。

そんなとき……。

「あれ？ フィルやないか？」

店の扉が開き、そこにいた女性は……。

「はやて……さん？」

六課でお世話になった八神はやてさん、その人だった。

\*

\*

\*

私は、今日つきあっている人に、手作りのチョコをあげようと、彼の家に行ったんだけど……。

そこで見たのは、別の女性と抱き合っていた彼の姿。  
私が問い詰めても、逆ギレして——。

『お前みたいなたん舎娘は、重つくるしいんだよ!! 処女つてめんどくさいし……』

そこから後のことは、はっきりと覚えてはいない。

気がついたら、この酒場に足を踏み入れていたんだから……。

でも、まさかファイルがここにいたなんて……。

「……久しぶり……やね」

「ええ……」

いつものファイルとは違う。

瞳も輝きが無くなってしまってるし……。

何より、ファイルの所に並べられているグラスの数。

明らかに飲む量が多すぎる。

「…………隣…………ええかな」

「…………どうぞ」

私はファイルの隣に座り、一杯カクテルを注文する。

「…………どうしたんや？　こんなところで一人でお酒とは寂しいなく」

「…………そう…………ですね」

やっぱり変や。



普段のファイルだったら、冗談には冗談で返してくれる。

いくら生真面目さんといっても、そういう所は柔軟性があるのに……。

最近のファイルのことは知っている。

一緒にいた同僚の女の子とつきあっていることも……。

でも、その女の子の噂は、はつきり言って良くないことばかりや。

金遣いが荒かったり、他の男の子とつかえひつかえしとるとか……。

そして、その女の子は、ファイルみたいな真面目な男の子をターゲットにして、金を吸い尽くすとかも聞いたことがある。

正直言って、ファイルみたいな優しい男の子とは似合わない。

でも、以前あったときに、嬉しそうなファイルの笑顔を見て、そのことは言わないようにしたんや。

「……ファイル、もし間違ってたらごめんな。あんた……彼女となにかあったん？」

「ツ!!」

ファイルが表情を変えたのは、ほんの一瞬だけどそれを見過ごさすほどバカじゃない。

「……そう……なんやね」

「……はやてさんの言うとおりですよ……。今日、振られた……ばつかりですよ」

ファイルの乾いた笑みは、全てを物語っていた。

あの噂は本当のことやったというわけやな……。

「……そっか」

その後、少しだけ話した後、私達は互いに黙ってお酒を飲み続けていた。  
そして、閉店になろうと言うとき……。

「なあ……。これから、ファイルの家で飲みなおさへん?」

「……それは良いですけど、でも、はやてさん……彼氏さんは?」

「……ええんや。今日は飲み明かしたいんや……」

こんな気分で家に戻っても、ヴィータ達に心配されるだけ……。せめて心の整理をつけたいんや……。

\* \* \*

「おじゃまするで」

「ちよつと待っていてください。何かつまみ作りますから……」

そういって、ファイルは台所でおつまみを作りに行った。

言ってくれれば私も手伝うのに……。

初めてあがるファイルの家。

そこそこ整理はされてるけど、何かが違うと感じた。

それに気づいたのは、机に無造作に置かれ、伏せられていた一枚の写真。

ファイルには悪いと思っただけど、その写真を取って見てしまった。

その写真には、水滴の跡が何カ所があった。

その跡の正体は、すぐに分かった。

——ファイルの涙。

こんなに自分を馬鹿にされても、ファイルは自分が悪いと思ってしまう。

そんなことはないんやで……。

バーで聞いたファイルの話。

誰がどう見たって、相手が悪いやないか!!

ファイルをずっとほったらかしにして、お金が困ったときに限ってファイルの所に来て甘える。

あんまりや……。

ファイルがどれだけ傷ついたと思ってるんや……。

気がついたら、私は涙を流していた。

「お待たせしま……あつ……」

ファイルが私を持っていた写真に気づき、ふと寂しい笑顔になる。

「……ごめんな。勝手に見たのは謝るで……」

「良いんですよ……。こんな写真を残してる俺が……女々しいんですから……」

それは違うで。

今日の昼間に振られて、気持ちの整理をつけられる人なんていない。

私だってそうや……。

あの時ファイルに会えなかったら、きっとボロボロだったから……。

「……バカです……よね。噂とかで何となく分かっていたのに……」

ファイルが女の子とつきあうようになったきっかけは、ティアナの結婚。

その時にファイルは、自分も新しい道を進まなきゃと決意し、その後につきあい始めたのがファイルを二股にかけていたあの子。

口だけはうまいから、傷心状態だったファイルがだまされてしまったのも無理はない。普段だったなら、そんなことには引つかからないのに……。

「……そんなことあらへん……。私だって同じや」

「えっ?」

私は今日あったことをファイルに話した。

つきあっていて彼氏に二股かけられていたこと。

彼氏の家に行ったら、別の女の子と抱き合っていたこと。

そして――。

自分が重たくておもしろくない女だって言われたこと。

「……確かにそうなんや。私って……好きな人には尽くしてあげたいってタイプだから。あの人には……それが重かったんやて……」

思い出してきたら、また涙があふれてきた。

振られたことが悲しいんやない。

あんな人に今まで尽くしてきた自分がばかなんや……。

そんな私をファイルは……。

「あつ……」

「……そんな男は……こつちから振ってやればいいです。はやてさんの魅力に気がつかないバカは……」

「……せやな……ありがとうな……」

あつたかい……。

あの人と違って、フィルの胸はほんまにあつたかい。

こうして抱きしめてもらっていると、嫌なことも消えていく。

「……俺は、羨ましいですよ。はやてさんにいっぱい愛してもらってたんですから……」

「フィル……。私みたいな重たい女でも……良いと思ってくれる？」

「当たり前ですよ。むしろ……俺はこんな風に愛してもらっていませんでしたから……」

なんか胸がムカムカする。



ファイルにこんなに思ってもらっていたのに、全然気がつかないで、あの子は気持ちをお踏みにした。

あの子がどんな男とつきあってるのかは知らないけど、こんな優しい人を傷つけて良いわげがないやろ!!

「私じゃ……だめ？ ファイルのその傷ついた心を……癒すのは……」

「はやてさん……」

「私をあの子の代わりにしてくれても良い。だから……」

私がさらに言おうとしたとき……。

「……そんな悲しいこと……言わないでください」

「……うん」

もう、言葉はいらなかった。

互いに裏切られた者同士……。

その傷のなめ合いといわれても良い。

キスまで、後数センチというところで……。

私がつっていたハンドバックが落ちて、その中身が飛び出してしまった。

そこには、今日彼にあげようとした手作りのチョコレート。

「……………これ?」

「ばかやろ……。ミッドじゃバレンティンなんて風習はないのに、彼に感謝の気持ちを伝えようと思って、こんな物を作って……」

こんなんだから、重い女って言われるんやろうな。

「じゃ、これ。俺がもらっても良いですよね」

「ちよ、ちよつと!!」

そのチョコは、彼にあげようとしていた物。

他人への気持ちがこもってる物なんて!!

「うん、美味しいです。はやてさんが一生懸命作ったんですものね」

「フィル……」

やつと分かった……。

フィルはわざとやったんや。

このチョコがどんな意味を持っているかくらい、フィルなら私が言わなくても分かっている。

だから私が、彼のことを忘れられるようにこんな事を……。

「だったら、来年はフィルのためだけに作ったる!! こんなチョコじゃなくて、もっと私の愛情たっぷりチョコをな!!」

「……はやてさん」

だから、フィルそんな乾いた笑顔じゃなくて、いつも私達に見せてくれてた本当の笑顔を見せてや。

「楽しみにしてますね。来年を……」

「チョコは来年やけど、今日は……」

私は強引にフィルの唇を奪い……。

「……私を……食べてや」

「……喜んで」

フィルはそのまま、私をベッドに押し倒し……。

「あっ……」

私のブラウスのボタンを取り、ブラの上から胸を触る。

「んっ……あんっ!!」

今、私がしてるのは水色の飾り気のないブラ。

こんな事なら、勝負ブラの黒をしてくるんやった。

「……ごめんな。飾り気も何もなくて」

「良いですよ。むしろ、はやてさんの素顔をみれてるんですから」

「むう——」。その話し方がいいや。はやて、って呼んで」

「……でも」

もう、この鈍感!!

女の子が、好きな人に他人行儀の話し方をされて良い気分な訳ないやろ!!

「ファイル、恋愛に臆病になってるのは分かるよ。でも、こうして私と一緒にいるときは、ティアナ達と同じ様に壁……作らないでほしいんや」

「……わかったよ。はやて」

「うん」

「だったら……もう遠慮はしないよ」

「ええよ……。ファイルの気持ち、全部受け止めたるよ」

そして、ブラをはぎ取り、私の胸を愛してくれ……。

「……はやての胸、本当に柔らかい。そして……あたたかい」

ファイルは、私の胸に顔を埋め、優しい笑顔になっている。  
さつきまでとは違う、ファイルの本当の笑顔。

「せやで……。女の子の胸は、好きな人を笑顔にするためにあるんやで。私の胸は、ファイルだけのものやからね……」

「……ありがとう、はやて」

ファイルは、私の衣類を全部脱がし、そのまま私の全身を愛撫する。  
こうしてファイルにされると、私も満たされていく。

結局あの男は、私には全く手を出さなかったし……。

でも、今はそのことに感謝してる。

あんな男に私の初めてを奪われなかったんやから……。

「はやて……」

「ええよ……。フィルのこと全部受け止めてあげる」

そして、フィルは私の中に入ってきて……。

「い……痛……」

フィルが私の表情を見て、離れようとしたが……。

「大丈夫……やから。このまま……最後まで……」

「はやて……」

ほんまにあの男とはえらい違いや。

フィルは本当に相手のことを思ってくれる。

こういうときは男が気持ちええのは分かってるし、覚悟もしてた。でも、ファイルはそれを良しとはせず、私のことを最優先してくれてる。

そんな優しさがいっぱい伝わってくる。

だから、私もファイルを全部受け止めてあげたい。

そして、私達は身も心も一つになる——。

全てが一つになるまで——。

\* \* \*

「ん……。もう、朝か」

「おはよう、目が覚めたんやね」



「はやて……。そのYシャツ……」

そう、今私が着てるのは、ファイルが昨日着てたYシャツ。

よっぽど強い香水が使っていたせいかな、これにはまだ、あの女の匂いが少しだけ残っていた。

でも、そんな物は私が全部上書きしたる。

だから、こうして私の匂いをマーキングをしてるんや。

「せやで、これで前の彼女の匂いは全部消えたで。あるのは私の匂いだけやで♪」

「つたく……。でも、はやての香りは好きだから、嬉しい……。かな」

「……。ばか」

ありがとうな……。

ふつうなら、こんな事したらやり過ぎって言われると思ってたのに……。

「つていうか、俺もはやての言う所の『重い』男らしいからな。覚悟……。しておけよな」

「うん♪」

むしろ、望む所や。

自分だけを愛してくれるなんて、最高の幸せやないか。

フィル、これからもよろしくな。

\* \* \*

数日後

「いったいどうしたんだらうね？」

「うん」

私となのはは、はやてに呼び出されて今、はやての家に来ていた。

『二人にはどうしても伝えたいことがあるんや』と言ってたけど……」  
「なんか……嫌な予感がするんだよね」

はやてには悪いけど、今ははやてがつきあつてる男の人は良い噂を聞かない。

同様にファイルとつきあつてる女の人も、同じ様な物だ。

「大丈夫だ。主はやてから話されることは、お前達にとつてもいい話になるはずだ」

リビングで待っていた私達の前に、シグナムが入ってきた。

「シグナム!! はやてが言おうとしてること知ってるの!？」

「ああ、我らは事前に聞いてるからな」

「まあ、おめえたちがはやてのことを心配してくれてたのは分かっている。その事も含めての話だしな」

「ヴィータちゃん……」

私達が話していると、はやてが入ってきて……。

「ごめんなく。待たせて〜♪」

「な、なんかテンションが高いね。はやてちゃん」

「そ、そうだね……」

普段から笑顔が多いはやてだけど、今日のテンションはいつになく高い。

「どうしたの。やけにご機嫌だけど」

「ふっふっふっ。これがご機嫌でいられずいられへんで!!」

「本当にどうしたの、はやて?」

気になってシグナム達の方を見ても、若干の呆れはあるけど、みんな笑顔でいる。

「えつとな……。改めて言うのは照れるんやけど……。不肖、八神はやて、この度……。結婚することになりました!!」

「ええつつつ!!」

う、嘘だよね……。

はやてがあんな男と結婚するなんて……。

「あー。二人が知ってる人ではないで。あの男とは、きっぱり別れたし」

「そ、そうだったんだ……」

「だったら、誰と？」

今度はその疑問が浮かぶ。

「……ふふつ、高町、テストタロツサ。私達もあの男なら大丈夫と認めてる」

「だな。あいつなら、ぜってえ、はやてを泣かせたりはしないしな」

「むしろ、はやてちゃんより、あの子の方が無茶しそうだけどね」

「確かにな……」

「ですわ」

「まったくだぜ」

本当に誰のことだろうか？

シグナム達があそこまで認めてる相手って……。

いや、心当たりは一人だけいる。

でも……。

「じゃ、入ってきてや〜♪」

扉が開き、そこにいたのは……。

「ど、どうも……」

「フ、フィルツツ!？」

まさかと思っていた人物、フィル・グリードだった。

「ま、まさか、はやてちゃんの結婚相手って……」

「はい、俺です」

待つて、ファイルも彼女はいるのに……。

そして、やっぱりはやてとつきあっていた男性と同じで、良い噂を聞かない女性。

「フェイトさん、多分、俺のことも知ってるかと思いますが……。俺も別れたんです……」

「そっか……」

正直、本当に良かった。

もし、あの女性だったら、悪いけどみんなで反対した。

「よかった……。わたしもフェイトちゃんも心配してたんだよ。でも、はやてちゃんの相手がファイルだったら、これ以上の相手はいないね」

「うん、はやてのこともそうだけど、ファイルのことも心配してたんだからね……」

「すみません……」

「ほんまにごめんな……」

でも、これで二人は大丈夫だね。

二人がどうやってつきあうようになったかは分からないけど、きつとそこには二人にしか分からない絆があるから――。

「ともあれ、おめでどう。はやてちゃん」

「おめでどう、はやて」

「ありがとうな〜♪」

その後も、二人は八神家のみんなと一緒に団欒を楽しんでいた。やっと戻った、はやてとフィルの本当の笑顔。

はやて、フィル、本当に良かったね。

二人とも幸せになってね――。



\* \* \*

「でも、今更だけど、こんなにあっさりとは決まるとは思わなかったよな」

「ふふっ、私はこうなるって思ってたよ。フィルだったらみんな反対はせんし」

「そういう物か？」

「そういうもんや〜♪」

フィルは自分の価値が分かってないけど、はつきり言っただけで結婚するのに条件がピッタリの人ってそうはいないんやで。

優しくて、思いやりがあり、社会的地位もしっかりとっていて……。

なにより——。

私のことを精一杯愛してくれる。

「フィル、明日、早速婚姻届を出しに行こうな〜♪」

「は、早いな……。おい……」

思い立ったら吉日って言うやないか。

婚姻届の証人も、なのはちゃんとフェイトちゃんに書いてもらったしな。

「しあわせに……。してや」

「それは……。約束するよ。はやて」

星空の下……。

私とファイルは誓いのキスをする。

それは永遠の愛を誓うキス。

幸せになろうな、ファイル♪

Valentin Story ~ Touch my heart ~

「うーん……。なんか違うんだよね」

今日は2月14日、地球で言う所のバレンタインデー。

わたしはママに教えてもらいながら、手作りチョコを作っている。

フィルさんと本当の意味で恋人同士になってからの初めてのバレンタインデー。

今までも、頑張つてチョコを渡してはいたんだけど、今までは妹的な存在だったから……。

だから、今回のバレンタインデーは今までとは違って特別な意味があるんです。

「ヴィヴィオ、いったい何が違うの？ どのチョコも美味しくできてるよ」

「うん、ママが丁寧に教えてくれたから、どれも美味しいのが出来ただけ……」

確かにどれも美味しくは出来ている。

生チョコに動物の形をしたチョコ、定番のハート型に、トリユフチョコ。だけど……。

「どのチョコも、わたしの想いが……上手く伝えられない」

「どういう、こと？」

わたしがフィルさんに食べて欲しいのは、チョコだけじゃない。

わたし自身の想いを伝えたい……。

フィルさんのことが大好きって想いと、感謝の気持ちを。

「ただ手作りのチョコを渡してたんじゃ、今までと何も変わらない。フィルさんなら美味いよって食べてはくれるけど……」

「……何となく分かるかな、今のヴィヴィオの気持ち。うん、こうなったらヴィヴィオが

納得するまでママと一緒に頑張ろ」

「うん!!」

その後も、いっぱい作ったんだけど、やっぱり納得いくのが出来ない。

たくさんのチョコを作っていたら、いつの間にか夕方になっていました。

バレンタインデーが終わるまでもう時間はないのに……。

その後ユーノパパが帰ってきて、パパにも相談してみたら……。

「なるほどね……。だったら、こんな方法があるよ」

そう言って。パパは、自分の部屋から一冊の本を取ってきました。

「これはね、僕の故郷スクライア一族に古くから伝わっている魔法。自分の気持ちを相手に伝える簡単なおまじないみたいな物かな」

「おまじない?」

「うん、おまじない。口下手な男の子が、好きな子に伝えようとして必死になって伝えた

のが始まり。今のヴィヴィオみたいに、どうにかして伝えようとしてね」  
「パパ……」

わたしはパパからその本を受け取り、何度もその本を読み返した。  
そこには、今のわたしが求めていたヒントがあった。

「ありがとう!! わたし、頑張ってみる!!」

これなら、きっとわたしの気持ちを上手く伝えることが出来るから……。  
もう、いてもたってもいられない。

早速わたしは、その本を参考にもう一度チョコ作りをし直すことにした。  
思った形にするのに、何度も作り直し、そして……。

「出来たああ!!」

やっと自分が思い描いていたチョコレートを作ることが出来ました。

でも、時間はもう22時を過ぎてしまっている。

ここから、自宅に戻るまで、どんなに急いでも30分はかかる。

だけど、絶対に間に合わせてみせる!!

わたしは、後片付けをなのはママにお願いして、急いでロードサンダーにまたがりエンジンをつける。

「ロードサンダーお願い!! 全速力で飛ばして!!」

《言われなくても全開でかつとびますよ!! しっかり運転してくださいね》  
「うん!!」

スロットルを全開にし、わたしはフィルさんが待っている『家』に戻る。  
大切な二人の『家』に……。

\*

\*

\*

「ええっ!? もう、23時なの!? こんな時間になっちゃうなんてツツ!!」

あれから、急いで戻ろうとしたんだけど、交通事故があつて家までの道のりが混雑で動けなくなつてしまい、しかも、回り道しようにも迂回路がない所で嵌つちやつたため、この時間まで立ち往生してしまつた。

わたしは急いでドアを開け、慌てて靴を脱ぎすてる。  
靴を下駄箱にしまうのは後でも出来る!!

「ただいまツ!! こんなに遅くなつて本当にごめんなさいツツ!!」

「おかえり。さつき、なのはさんから電話あつたから大丈夫だよ。それより……」

ファイルさんはそつとわたしの頬に触れ……。

「外は寒かつただろ。いま、温かいスープ用意するからな」

「……うん」



フィルさんは、そう言って台所に行ってスープを温め始めた。

テーブルを見ると、そこにはフィルさんが作ってくれたたくさんの手料理が。

「こんなにつばい作って、くれたんだ……」

フィルさんだって、執務官の仕事で本当に忙しいのに、それなのに……。

『恋人同士になって初めてのバレンタインだから、できたら一緒に過ごしたいな……』

わたしが言った我が儘なのに、それを叶えてくれるために、フィルさんがこんなにもしてくれたのに……。

——ばかだ、わたし。

結局、いつもフィルさんに甘えてるだけじゃない。

二人でいられる時間は貴重な物なのに……。

「おまたせ、さあ、冷めないうちに召し上がれ」

わたしは、温めてくれたスープを一口食べると……。

「おいしい、い……。あつたかくて、やさしい……」

一口食べるだけで、心も身体も温めてくれるような優しい味。  
このスープはフィルさんの真心そのもの。

「いま、料理も温め直すからな。少しだけ待っててくれ」

「ううん、このままで良い」

「そっか……。じゃ、一緒に食べようか」

こうやって二人で食べる食事は、とつてもあたたかくて美味しい。

例え冷めてしまった料理でも、作ってくれた人の心は伝わるから……。

料理が食べ終わった頃には、バレンタインデーはあと15分になってしまった。

「……今日は、本当にごめんなさい。わたしからお願いした我が儘だったのに」「我が儘なんて思つてないよ。こうして一緒にいたいのは俺も一緒だから……」「ありがとう、フィルさん……」

いつも、自分よりも周りの人のことを優先してしまうフィルさん。そんな優しい人あなただから、わたしは大好きなんです!!

だから……。

「バレンタインデー……。もうすぐ終わっちゃうけど、これ……」

自分の想いの全てを込めて、このチョコを貴方に送ります。

「ありがとな、ヴィヴィオ。あけても良いかな?」

「もちろんです!! フィルさんのために一生懸命作ったんですから!!」

ファイルさんがラッピングの包装紙をとり、箱を開けると……。

「トリュフチョコか。すごく綺麗に出来てるな」

箱の中には3つのトリュフチョコプレート。

でも、これはただのチョコプレートじゃない。

ユーノパパから教えてもらったおまじないが込められたチョコプレートなんだよ!!

「それじゃ、いただくね」

「あつ、待ってください!!」

ファイルさんがチョコプレートをとろうとするのをわたしは止め、代わりにわたしがチョコを取り……。

「はい、あーんしてください〜♪」

「え、えつと……」

あいかわらず、フィールさんはこの手のことをすると恥ずかしがるけど、恋人同士なんですからそろそろ慣れてください!!

それに、このチョコは、おまじないの効果を伝えるために、こうして食べてもらわなきゃダメなんです。

だから、絶対にこれだけは譲れません。

\*

\*

\*

普段から積極的なヴィヴィオだけど、今日はいつもと違う。

いつもはスキンシップでしてくることだけど、瞳がそうでないことを言っている。

俺は口を開けて、ヴィヴィオにチョコレートを食べさせてもらおうと……。

「!!」

ふと頭に浮かんだ光景は、いままでのヴィヴィオとの記憶。

—— ゆりかごでヴィヴィオと戦ったこと。

その時のヴィヴィオの悲痛な悲しみ。

—— 初等部でのヴィヴィオやアインハルト達との思い出。

中等部に入ってから、俺を一生懸命励ましてくれたこと。

そして……。

この、心を内側から温めてくれる優しい感じ。

「……………伝わりましたか？ わたしの……………想い」

「ああ……………。いっぱい伝わってきた」

このあたたかいは、ヴィヴィオの優しい心。

その想いが、俺の荒んだ心を癒してくれるようだ…………。

\*

\*

\*

「これ、実はちよつとだけ魔法をかけて作ったんです。わたしの想いが伝わるおまじないをこめて」

「おまじない？」

「はい、ユーノパパから聞いたスクライア一族に伝わるおまじないだそうです。こうやって自分の想いを伝えるときに使ったりするんだそうですよ」

「……………それで、すごく優しい気持ちになれたんだな」

よかった。少しでもフィルさんの心を癒すことができて……。

「わたしは、小さいときからずっと、なのはママやフィルさんにいっぱい愛情をもらいました。ママからは家族としての愛を、そして……」

わたしは、フィルさんの後ろからそっと抱きしめ……。

「……フィルさんからは、人を好きになるってことを教えてもらいました」

色んな男の子から告白とかもされたけど、付き合いたいって思うことはなかった。

だって、わたしはゆりかごでフィルさんとなのはママに助けってもらってから、ずっとフィルさんのことが大好きだったんだから……。

「今でも思うんだけどさ。本当に俺にはもつたない女の子だよ、ヴィヴィオは」

「そんなことないです。フィルさんがいたから、わたしはこうしていられるんですから……」



ファイルさんがいなかったら、今頃はゆりかごのキーにされて、大好きな人たちを傷つける道具として使われていたから……。

「それを言ったら俺だってそうだよ。ヴィヴィオの優しい心が、俺の心を溶かしてくれただから……。本当に、ありがとう」

「ファイルさん……。もう一つ、チョコ食べませんか？」

今度は、わたしがチョコを啜えて、そのままキスをして口移しで食べさせる。

「……んっ、んんっ」

もちろん、ただ食べさせるだけじゃ足りない。

いつのまにか、わたしとファイルさんと何度も求め合うキスを繰り返す。

息継ぎで離れたときに、銀色の糸が出来上がったのがその証。

そして、もう一度キスをし直そうとしたとき……。

時計が午前0時を指し

バレンタインデーの終わりを告げた。

「バレンタイン……終わっちゃいましたね」

「そう、だな……」

バレンタインデーは、終わっちゃいましたが、恋人同士の時間は終わった訳じゃありません。

「チョコは無くなっちゃいましたけど、もう一つ、デザート……食べませんか？」  
「デザート？」

「あ、あの……。そ、その、ですね。ヴィヴィオという……デザート、なんですけど……」

普段なら、こんなこと言うのはずかしいけど、このまま終わりにはしたくなかったか

ら。

フィルさんは、一瞬きよんとしたけど、すぐに……。

「じゃ、その甘いデザート、遠慮無く食べるからな」

フィルさんは、わたしを自分の方へ抱き寄せて……。

「いっぱい……いっぱい食べてください、ね」

そのまま、わたしの上着の下から手を入れ、胸に触れて……。

「んっ……。ふあ、フィル、さん、もっと……わたしのこと……食べて、ください」

「今日は、遠慮しないからな」

「遠慮なんか、しないで……くだ、さい」

遠慮なんかされる方がイヤ。

もっと、いっぱいわたしのことを求めて欲しいから……。

その言葉が切欠となり、フィルさんも遠慮無くわたしのことを求め始める。

互いの衣類を全て脱ぎ去り、わたしの身体をフィルさんの舌で隈無く愛されていく。その度に、身体に電気が走ったような快感の海が奔る。

その快感にわたしは身も心も溺れていく。

そして、わたしもフィルさんの身体を求め、同じ様に全身を隈無く愛する。

フィルさんもわたしも、一つになる準備ができ……。

「……きて、ください。いっぱい……いっぱい、愛して」

——こうして、わたし達は互いを何度も求め合い。

わたし達は快樂の海へと身も心も委ねていった。

\* \* \*

「いつばい……食べられちゃいました、ね」

「すまない……」

「もう……。何度も言いますが、そこは謝る所ではないです!!」

わたしの身体には、フィルさんが付けてくれたキスマークがたくさん付いている。胸や首筋だけでなく、太ももやその……わたしのはずかしいところまで。

でも、これはフィルさんがわたしのことを愛してくれた証だから。

「それは、わかってるんだけどな。しかし、俺、こんなに節操なしだったかな?」

「フィルさん、節操なしとは違うと思います。愛し合う者同士なら、当たり前なんじゃ……ないですか」

愛し合う二人が、互いを求め合うのは、自然の摂理。

時には、快樂に身を任せても良いんじゃないですか？

フィルさんの場合、普段から、自分に厳しすぎるんですから……。

「……そっか」

「そういうことですよ。ですから、これからも、いっぱいわたしのこと……愛してください」

わたしはフィルさんに抱きついて、自分の胸をしつかりと押しつけて甘え……。

「……ああ、その言葉に甘えさせてもらおうよ。大好きだよ、ヴィヴィオ」

そして、フィルさんはわたしの髪をそつと撫でながら、耳元でささやいてくれた。

普段なら絶対に言ってくれないような愛の言葉。

フィルさんに分からないように、顔を見ると、言った言葉で照れてるのがよく分かる。もしかして、チョコにかかっていた魔法が、フィルさんの心を少しだけ大胆にしてく

れたのかな？

「わたしも……。わたしも、ファイルさんのこと、世界で一番大好きです!!」

何度でも言えるよ。

ファイルさんのこと、世界の誰よりも愛してるって!!

それだけ、ファイルさんのこと大好きなんだから。

これからも、いっぱい頑張って女の子としての魅力をつけますから。

ですから、ずっとわたしのそばにいてくださいね。

恋する女の子は、好きな人がそばにいてくれることが一番なんですからね♪

Wedding Story  
June Bride

「これで、ようやく執務官としてやっていけるな」

「そうね。本当に辛かったわよ。この一年……あんたに会えなかったこと……」

「……ティア」

「ファイル……」

あたしは、この一年、執務官試験を突破するために、ファイルはクロノ提督の元で、あたしはフェイトさんの元で執務官補佐をして、執務官に必要なことを勉強した。

その苦勞のかがあつて、あたしたちは何とか一発で合格することが出来たのよ。

「ファイル、六課解散の日に約束したこと……覚えてる？」

「ああ……俺たちが執務官になったら、一緒にコンビを組むことだろ」

「それじゃない!! もっと……大切なことあつたでしょう……」



ねえ、本当に忘れちゃったの……。

あたしはあの約束だけが、心の支えだったのよ——。

「忘れてないよ……。大切な約束だもんな」

「ばか……。本当に忘れちゃったと思ったわよ」

からかうのは止めてよね。本当、こいつって人をからかうのが好きなんだから……。

「ごめんな。ちよつとふざけすぎたな……。今度はちゃんというよ。ティア……」

ファイルは、さつきとは違って真剣な瞳で……。

「……結婚……しよう」

「……うん」

六課解散の日……。

あの時二人で、約束したことは二つ……。

一つは、一緒にコンビでやっていくこと。

そして、もう一つは……。

——結婚して、ずっと一緒になる。

それが、フィルとの大切な約束だった。

\* \* \*

「それにしても、結婚式をするのも大変なのね」

「ああ、こんなに準備が大変だと思わなかったよ。特に招待客の選別……」

「そうね……」

俺たちは、半年後の六月の結婚式のための準備に、四苦八苦していた。式場とかは、良いところが取れたので、そう問題じゃないのだけど……。

「こうして、リストを作ってみると、あたし達って、とんでもない知り合いばつかよね」  
「そうだよな……。しかも、みんな絶対招待してねって、言われているからな……」

単純にあげられる人だけでも、なのはさん、フェイトさん、はやてさん、そしてフォワードのみんな。

さらに、親代わりとして色々してくれた、レジアスの親父さんとオーリス姉……。

「でも、どうしよう。このメンバーじゃ、絶対全員はそろわないわよね」  
「だよな。どうしようか……」

そんなことを考えていたら、通信が入ってきた。

『ご機嫌はいかがかな。ファイル、ティアナ』

「親父さん!？」

「おじさん!？」

「親父さん、いったいどうしたんだよ。いきなり通信してきて?」

親父さんの忙しさは半端じゃない。

それこそ秒単位でスケジュールが決まってるのに……。

『いきなりはなからう。僕はお前達が執務官試験が受かったと聞いて、お祝いの言葉をかけようとしただけなんだがな……』

「あ、ありがとう。親父さん……わざわざ」

「本当にすみません。わざわざ……」

『なあに、二人とも僕にとつて、子供みたいなものだ。子供のことを心配しない親なんて……いないだろ』

親父さんの言葉は、本当に嬉しかった。

俺たちの事を、本当に思ってくれたんだ——。

『そういえば、お前達。半年後、結婚するんだったな。どうするんだ、メンバー集めは?』

「その事なんだけど……どうしようかと思つて」

『と、言うと?』

「俺の知り合いつて、かなり有名人が多いから、みんなの都合を合わせるのが上手くないかないんだ」

実際、今回の日取りを決めるのだから、かなり難航した。

六課解散前から、執務官試験に合格したら、その年の六月に結婚することは、みんなに言つてあつたから、六課メンバーは何とかなるんだだけ……。

『フィル、ティアナ、その心配はないわよ』

「オーリス姉!?!」

「姉さん!?!」

『あなたたちが、執務官試験を一発で受かることは信じていたから、スケジュールを調整するときに、六月のこの日は空けられるようにしてあるわよ』

そんなこと言っているけど、レジアスの親父さんは今では、地上の統括をしている重要人物だ。

その人のスケジュールに、穴を空けるのはかなり困難なはずなのに……。

『そういうことだ。だから、儂らも是非、お前達の結婚式に出させてもらおうぞ』

『フィル、ティアナ、結婚式の前に、一回こちらに顔見せに来てね。色々語り合いたいしね』

「はい、フィルと二人で必ず伺います!!」

『楽しみにしてるわ。その時は事前に連絡してね。どんなことしても暇をつくるから……』

そう言って、二人からの通信は切れた。

親父さん……オーリス姉……。

本当に……ありがとう。

\* \* \*

三月某日

「フィル、式の参加者リストは何とかまとまったけど、式での料理とかはどうするの？」  
「そうだな……」

六月の式まであと三ヶ月。

俺たちは、殆どのことは決まっていたけど、最後の問題として、式場で出す料理とウエディングケーキのことで悩んでいた。

式場はかなり雰囲気の良い所なんだけど、料理の方が普通で、これをどうにかしたかったのだ。

「一応、式の前日に俺が、料理関係を用意しようと思ってるんだけど……」

「確かにあんたの料理なら、みんなに喜んでもらえると思うけど、正直あんたの負担が、かなりかかって来ちゃうわよ……」

「でも、一生に一度だから……。これで手抜きをしたくはないんだよな……」  
「そうよね……あれ？ 通信が入ったわね」

通信を開いてみると、それははやてさんからだった。

『ファイル、ティアナ、久しぶりやな』

「はやてさん!!」

「お久しぶりです。お元気でしたか」

『ファイル、相変わらず堅いな。でも、そつちも変わっていないようで何よりや。遅れてしまったけど、二人とも執務官合格おめでとう』

「ありがとうございます!!」

『それとなのはちゃん達から聞いたで。ファイル、結婚式の料理で頭悩ませているらしいな……』

実は、結婚式のこと、なのはさんに相談にして、その時に式場で良いところがあると、なのはさんが見つつけてきてくれたのだ。

『あそこは、確かにロケーションは最高なんやけど、料理に関しては普通レベルやしな……』

「そうなんですよね……。それでファイルが作るって言ってるんですよ。でも、そうなる、かなり負担になってしまうんです……」

『そんなことだと思ってたわ。そこでや!!』



はやてさんがポンと手を叩き——。

『今回の結婚式の料理、私に任せてもらえないやろうか……』

「えっ……？」

『一生に一度の大切な事や。特にファイルにはかなり助けてもらったし、ここで少しでも恩返しをさせてほしいんや』

「だけど、はやてさんもかなり忙しいのに……申し訳ないです」

捜査官の任務は執務官以上に忙しい。

ましてや、はやてさんは司令官を務めることもある。

忙しさは半端じゃない——。

『そんなこと心配しなくても平気や。私らの有給はかなり余っているんやで。こんな時に使わなくて、いつ使うというんや。二人は余計な心配はせず、思い出に残る式を挙げてや』

「はやてさん……」

『ほなら、今度会うのは式前日やな。料理の方は任せておいてや!!』

はやてさんは、笑顔で手を振りながら通信を切った。

「ファイル……あたし達つて本当に、色んな人に支えられていたんだね……」

「ああ……はやてさんなのはさん、そしてオーリス姉……。みんな俺たちの結婚式のために……」

「絶対……良い式にしようね」

「そうだな……」

\* \* \*

五月 某日

俺たちはレジアスの親父さん達に、自宅に招待された。結婚前に、どうしても俺たちと話をしたかったらしい。

「いらつしやい、フィル、ティアナ」

「お邪魔します。姉さん」

「遠慮しなくて良いわ。さあ、上がって」

俺たちを出迎えてくれたのは、オーリス姉だった。

ティアも、オーリス姉のことは姉さんといって慕っている。

オーリス姉に案内されて、入った部屋には親父さんが待っていた。

「よく来たな。フィル坊、ティアナ嬢ちゃん」

「その呼び方……久しぶりですね。親父さん」

「まあな。もうお前達は立派な社会人だからな」

「お久しぶりです。レジアスおじさん」

「ティアナ……本当に大きくなったな……」

「はい……おじさんや姉さんが、あたしのことを陰から支えてくれたから、あたしはここまでやってくれたんです」

「そう言ってくれると嬉しい……。そうそう、オーリスがお前と話がしたいから、部屋に来てくれと言っていたぞ。俺もフィルと少し語り合いたいからな」

「分かりました。じゃ、ファイル後でね」

そう言つてティアはオーリス姉の部屋に行くことにした。

俺も、親父さんと語り合いたかったからな。

\* \* \*

「それにしても……お前も結婚か。しかも、ティアナ嬢ちゃんと」  
「ええ……俺が結婚なんてするとは、思つてなかったですけどね」

俺と親父さんは、親父さん秘蔵のブランデーを飲みながら、小さかったときのことや六課に入つてからのこと。

そして――。

未来で経験してきたことなどを話していた。

「フィルよ……お前は未来で、ティアナ嬢ちゃんを失ってから、自分は人を好きになつてはいけない。そう思っていたな」

「はい……でも、ティアがそれを取つ払つてくれたんです。ティアの一途な思いが……」  
「あの子は一度思つたら、それに全力を出すからな。スバル嬢ちゃんとまた違つた一途さがある……」

「ええ……本当に……」

「フィル……あの子を幸せにしてやるのが、お前の役目だ。そして……」

親父さんが俺の肩に手を置き――。

「儂は、お前にも、幸せになつて欲しい。それが儂とオーリスの心からの願いだ。お前達は儂の自慢の息子と娘なんだからな……」

「親父さん……」

俺は親父さんの前で、涙を流していた。

小さいころの俺たちにとって、レジアスの親父さんはたった一人の理解者だった。

その親父さんに、少しでも恩返しをしたかった。

親父さん……。

本当にありがとう……。

\* \* \*

「今頃、あの二人かなり飲んでるわね」

「そうですね……。フィルも久しぶりにおじさんに会ったんですものね」

「ティアナ、あなた、そんなに飲む口だったかしら？」

「普段はそんなに飲みませんよ。でも、あたしも久しぶりに姉さんに会ったんだもの」

「そうね……」

あたしは別室で姉さんとお酒を酌み交わしている。

ここではフィルの話せないことや、オーリス姉さんの昔話をしていた。

昔姉さんは、兄さんと付き合っていた。

本当なら、兄さんと結婚するはずだったんだけど、結婚直前あの事件が起こってしま

いい、姉さんは今でも独身を貫いている。

本当に兄さんのことが好きだったんだな……。

「ティアナ……」

「はい」

「私は……残念ながらティードと結ばれることがなかった……」

姉さんの悲しみに満ちた目を見れば、兄さんのことをどれだけ思っていてくれたかよく分かる。

「そんな思いはわたし達だけで良いわ。だから、必ずフィルと幸せになってね。私とティードの分まで……」

「はい……ありがとう……姉さん……」

兄さん……姉さん……。

あたし、絶対フィルと幸せになるからね……。

\* \* \*

## 六月 結婚式前日

「ほら、そこ!! 材料が違っているよ!! 明日の式まで時間がないんやから、急いでな!!」

結婚式前日、はやてさんが先に会場入りをしていて、そこで会場のスタッフとパーティー用の料理の下準備と特大のウエディングケーキを作っていた。

「ファイル、来てたんか!？」

「ええ、どうしても気になりましたね」

「相変わらず心配性やね。でも、それがファイルやもんね……」

「そういうことです」

「ティアナはどうしてる? 宿泊先でしつかり休んでいるか?」

「大丈夫です。体調も万全ですよ」



「そっか……それならええんや。ファイルも明日のために、ホテルに戻って休んでや。こは私の仕事やからな。当日楽しみにしててや♪」

はやてさんの言葉を受け、俺はホテルに戻っていった。

はやてさんは、俺たちのために今一生懸命料理を作ってくれている。

俺たちは、明日の式を良いものにするのが、はやてさんに恩返しをすることになるんだ。

\* \* \*

「いよいよ……明日ね」

「ああ……なんか緊張するな」

ホテルに戻って俺は、ティアとベッドに座って外の景色を見ていた。

明日のことを考えると、何か眠れなかった。

「そうね……。でも、戦う訳じゃないんだから、もっと肩の力を抜きましょう……。ね

……」

「そうだな……。ありがとう、ティア」

「だから……」

そう言つて、ティアは俺をベッドに押し倒し……。

「今日は、独身最後の夜……。なんだから……。いっぱい抱いて欲しいな……」

「ティア、今日は明日のために止めようと思つていたけど、お前から誘つたんだからな。いまさら止めは無しだからな」

「そんなこと……。言わないわよ。いっぱい……。してね」

俺たちは、キスをしながらお互いの服を脱がし合い……。

俺は、ティアの身体のありとあらゆる所を愛し尽くす。

女性特有の甘い匂いと喘ぎ声が、俺の心を獣に変える。

俺たちは結局、当日の朝まで何度も身体を重ねた。

\* \* \*

### 結婚式 当日

俺とティアは、式場の入り口で受付をしていた。

朝早くから、色んなメンバーが来てくれた。

まず最初に来てくれたのは、スバルとゲンヤさんに引き取られたナンバーズの面子だった。

スバルは俺たちを見るなり――。

「おめでとう!! ティア、フィール!!」

と大声で泣きながら、俺たちに抱きつこうとしたけど、ギンガさんとチンクがそれを止めてくれたおかげで、衣装を守ることが出来た。

次に来てくれたのは、なのはさんとフェイトさん、そしてヴィヴィオの三人だった。

相変わらず、仲の良いことで手をつないでやってきた。俺たちも、こんな家族を作っていけたらと思う。

その後も、エリオ達やヴァイス陸曹達も来てくれて、最後にレジアスの親父さんとオーリス姉が来てくれた。

「ええ……ただいまより、フィル・グリードとティアナ・ランスター、両名の結婚式を始めたと思います。まず最初に、レジアス・ゲイズ様よりご挨拶をお願いいたします」

実は今回の結婚式の司会は、ヴァイス陸曹がしてくれることになった。

本当は式場の人に頼むつもりだったけど、ヴァイス陸曹が俺がやると言ってくれたので、遠慮なくお願いすることにしたのだ。

司会の声で親父さんが、壇上に上がり俺たちのためのスピーチをしてくれた。

でも、いつもと違ってすごく緊張していて、マスコミに会見するときと全く違っていた。

「えつと……フィル・グリード君、ティアナ・ランスターさん、ご結婚おめでとうござい

ます。二人には色々話したいことがいっぱいあるのですが、どうにも上手く言えなく……申し訳ない」

「だから、俺からは一言だけ言わせてもらいます。二人とも、お互いのことを信じ、幸せな家庭を作ってください……俺からは以上とさせていただきます」

親父さんのスピーチが終わり、会場のみんなから拍手がおこり、俺たちも嬉しさと涙が出そうになっていた。

言葉は短いものだったが、本当に親父さんが自分の言葉で話してくれたのはよく分かった。

「レジアス・ゲイズ様、ありがとうございます。続きまして……」

親父さんのスピーチの後、ウエンディとノーヴエが壇上に立った。

「二人とも、今日は本当におめでとつす!! ティアナ、本当に綺麗つすよ!! フィル、この幸せ者♪」

「おい!! もうちょつと真面目に話せ!! ったく……フィル、ティアナ、今日は本当にお

めでとう」

「ノーヴェ堅いこと言いつこなしつすよ。こういうときは明るくするのが良いんすから」  
♪

「あほか!! だからといってこんな挨拶の仕方があるか!!」

「ははくん、ノーヴェ、あたしに言いたいこと言われて、妬いてるんすね」

「んなわけあるか!!」

「あはははは!!」

この二人がそろって、堅い雰囲気になるとは思っていなかったけど、本当に予想通りとはな。

でも、こういう方が俺たちの結婚式らしいな……。

その後、收拾が付かなくなりそうだったので、ギンガさんとチンクに止められて、スピーチという名のどつき漫才は終了した。

これ、ビデオに撮っているから、後で見たら、俺たち絶対腹抱えてそうだな……。

「……あ、相変わらずだな……。えっと、仕切り直しまして……」

ヴァイス陸曹が、仕切り直して次のプログラムに進めたのは、エリオとキャロ、そしてルーテシアのお祝いの歌だった。

「フィルさん、ティアさん、ご結婚おめでとうございます。僕たちは皆さんみたいに、上手く言葉に出来ないと思います、キャロとルーと三人で歌を送ることにしました」

「わたし達も、そんなに上手い訳じゃありませんが……」

「一所懸命練習したので、聞いてね♪」

「曲は……『まぶしくてみえない』です」

曲が流れ始めると、三人は一生懸命歌ってくれた。

それは、三人がこの日のためにいっぱい練習して、覚えて、俺たちのためにしてくれてたというのがすごく伝わった。

曲も友情をテーマにしているもので、エリオ達らしい選曲だと思った。

歌が終わった後は、今日来られなかった人たちの祝電をヴァイス陸曹が読んでくれた。  
た。

その中に、ユーノさんとクロノさんのがあつたときはびつくりしたけどな……。

「残すところ、誓いの言葉と口づけをするのみとなりましたが、その前に……」

「二人の師匠でもある、高町なのはさんとフェイト・T・ハラオウンさんから、それぞれ一言ずつお願いします」

「ええっ!!」

これは、ヴァイス陸曹のサブライズだった。

なのはさんもフェイトさんも急だったので、焦っているけど、でも、二人とも壇上に来てくれた。

「つたく……ヴァイス君、こういう事は先に言っておいてね」

「そうだよ……いきなりでびっくりしたんだからね」

「へへ、すみません。でも、こいつらにお祝いの言葉をかけてやってください。きつと二人とも喜びますから……」

「そうだね……。えっと、ファイル、ティアナ、結婚おめでとう。いきなりだったから、ちゃんとしたコメントは用意してないから、わたしとフェイトちゃんがそれぞれに一言ずつ贈るね」



「まず、わたしからね。わたしはティアナに贈らせてもらうね。ティアナ、六課の時からみんなのまとめ役として、そしてフィルの支えとして頑張ってきたね。これから二人は色んな困難にぶつかると思います。でも、一人でなく、二人でなら必ず乗り越えられると信じてます」

「二人で駄目なときは、わたしやみんなに頼ってください。決して抱え込まないでください。そしてティアナ、あなたはわたしの大事な一番弟子なんだから、これからも頑張ってくださいね。」

「なのはさん……はい……」

なのはさんの言葉に、ティアは涙をポロポロ流していた。嬉しさから来ていたので、押さえることはしなかった。

「じゃ、私からはフィルに贈らせてもらうね。フィル、今日は本当におめでとう。ここにいるメンバーはフィルのことを知っているから、未来のこと言わせてもらうね。フィルは未来であんな辛いことがあって、自分の幸せは二の次にしていたね……」

「でも、ティアナのおかげで、やっと自分の幸せを考えてくれた。フィル、自分が幸せになつてはいけないなんて、二度と考えないでね。フィルにはティアナという、大切な

パートナーがいるんだからね。なのはも言ったけど、二人には私達が付いているんだから、困ったときは遠慮なく相談してね」

「フィル……幸せにね……」

「フェイトさん……」

俺もティアと同様、フェイトさんの言葉で嬉しくなってしまう、声を殺しながらだけど、涙があふれてきた。

俺たちは、本当にいい人達に恵まれているんだな……。

「なのはさん、フェイトさん、ありがとうございました。そして、今日のメインイベント、二人の誓いの儀式です」

俺とティアは、神父の前に来て、誓いの言葉をたて……。

「汝、フィル・グリード、汝はいかなる時もティアナ・ランスターの事を愛し続けることを誓いますか？」

「もちろん、誓います」

「汝、ティアアナ・ランスター、汝はいかなる時もフィル・グリードの事を愛し続けることを誓いますか？」

「はい………誓います」

「では、誓いの口づけを………」

俺とティアアは、みんなの見守る中……。

誓いの口づけを交わした……。

その後、みんなで記念撮影をしたんだけど、カメラのタイマーをセットしに行ったウエンデイが、お約束のボケをできてしまい、結局二回取り直してしまった。

そして……。

「それっ!!」

ブーケトスをするティアは、幸せにあふれた表情をしていた。そんな、ティアを見て、みんな笑顔で祝福してくれていた。

これから俺たちは、様々な困難にあうと思う。

でも、なのはさん達の言葉にあつたように、一人で駄目でも、二人でなら乗り越えられる……。

それが、夫婦というものだから……。

ティア——。

一緒に、幸せになろうな。

P i n k  
D i a m o n d  
(  
A f t e r  
S t o r y  
)

「……すう……すう……」

「ふふっ」

朝日の光で目が覚めたわたしは、フィルさんの寝顔を見ながら昨日のことを思い出していた。

昨日の夜——。

わたしとフィルさんはこのベッドで愛し合って、一つになった。

あの時、フィルさんに抱きしめてもらったぬくもりは、まだこの身体に刻み込まれている。

そして——。

「……これ、しばらくは……消えないよ……ね」

首筋に付けられたキスマークがその証——。

これ、絶対学校でヴィヴィオやリオに突っ込まれる!!

その……嫌じゃないんだけど、やっぱりはずかしいよう。

「……なんか、わたしだけってのは不公平です」

フィルさんはまだ目を覚ましていない。

昨日は、フィルさんにいっばい主導権取られちゃったし——。

ちよつとだけおかせしです♪

「……んっ」

わたしはフィルさんの首筋に、口づけし、音を立てて思いつきり吸い上げる。  
キスをしたところは、赤くなっていて所謂キスマークの完成だ。  
それを何力所か繰り返し、首筋だけじゃなく——。

胸

腹部

さらに――。

上半身のあらゆる所に、わたしのキスマークを刻みつけていった。

フィルさんと、いくら身も心もつながったといっても、やっぱり不安なんです。

フィルさんって、鈍感朴念仁ですから、周りの人の気持ちに気がついてないし――

。なのはさん達はともかく、ティアナさん達やヴィヴィオやリオ、アインハルトさんだって、フィルさんのことが好きなんですよ。

さらにキスマークを付けようとしたとき――。

「……………あのな、いくらなんでも……………やりすぎじゃ……………ないか」

フィルさんが目を覚まして、わたしの髪に触れてきた。

「……………あの……………もしかして……………起きて……………ました?」

「あれだけされれば、嫌でも起きるっての……………」

「……………、……………めんなさい」

「いや……怒ってるんじゃない。そういうったことはな……その……」

フィルさんは、赤面しながらももってしまった。  
もしかしてフィルさん……照れてます♪

「じゃ、今度からフィルさんが起きてるときにしますね♪」  
「……いや……そうじゃなくて……その……な」

フィルさんは、両手を挙げて降参の意思表示をする。

「フィルさん……こうして一緒にいるときは、フィルさんもわたしに甘えてください……。愛してもらっただけじゃ……『愛』にはなりませんから」

これはわたしの持論だけど、恋は一人でも出来るけど、愛を育むのは一人では無理だ  
と思う。

お互いを支え合っつてこそ、愛だと思っうから——。



「……昨日、いっぱい甘えさせてもらったんだけどな。お前の身体で……」

「……もつと……もつとですよ。わたしもフィルさんに甘えて欲しいし、こっちも……もつと甘えたいですから……」

「じゃ、お言葉に甘えて……早速甘えさせてもらおうかな……」

「……はい」

こうして、わたしとフィルさんは、またベッドでお互いの体温を感じ合い、快樂の海に溺れ、そして心も溶けあう――。

朝とかそういうのは関係ない――。

互いの体温を感じ合っているときは、身も心も一つになっているって感じられるから――。

\* \* \*

「結局、昼近くになっちゃったな」

「ですね。でも、今日は一日オフですよね」

「まあな。明日にはまた任務だけだな……」

明日にはまた過酷な任務が待っている。

こうしてフィルさんと過ごせる時間は少ないけど、オフの時はめいっぱい楽しまな  
きゃね。

「だったら、これからクラナガンに出かけませんか？」

「コロナが疲れてなければ、俺は良いけど——」

するとフィルさんはいたずらっ子の表情をして——。

「さっきの運動で疲れちゃってるんじゃないか？」

「……いじわる」

今の発言はちよつとデリカシーが無さ過ぎです。

さすがにフィルさんも悪いと思つて、本気で謝つてくれた。

ティアナさんから聞いていたけど、フィルさんって大好きな人にはちよつと意地悪す  
る傾向があるって——。

弄られるのは嫌じゃないんですけど、ちよつとだけ控えて欲しいかなっておもうのはわたしのわがままかな？

\* \* \*

「うわあ……色んなメニューがありますね」

「以前、来たときより増えてるな」

わたし達はクラナガンにある喫茶店に来ていた。

この喫茶店は、普段のデートコースでも時々使っている。

ケーキやコーヒーが手頃な値段で美味しいのもあるんだけど――。

「でも、やっぱりあるんだな……これは」

「月替わりでいろんな事が楽しめて良いじゃないですか♪」

ファイルさんが若干ため息をついてみたのは、メニューの表紙にある特別なメニュー。

それは――。

『月替わり恋人限定スイーツ』

「……もしかして……今回も？」

「はい♪ すみません!! 恋人限定メニューを一つお願いします!!」

わたしがこの店を気に入ってるのは、この恋人限定メニューがあるからだ。

ここに来る度に、わたしはフィルさんと一緒にこのメニューを食べている。

ある時はパフェだったり、ある時はハート型のストローと一緒に飲んだりと――

――

「お待たせしました。今月の恋人限定メニューでございます」

出されたのは二つのジュースと――。

「これ？ ポツキーだよな？」

「ですね。あつ、説明書きの紙が一緒にありますね」

「何々……？　つて、マジか……」

「ですね……」

そこに書かれてたのは、お互いにポッキーの端と端を啜え、それをちよつとずつ食べていく。

それを折れないで、どこまで食べられるかっていうことなんだけど――。

「これ……絶対最後は……」

「キス……しちゃいます……ね♪」

人前だから、ちよつと恥ずかしいけど、そうなたらそうなたで良いかな♪

「……少し恥ずかしいが、コロナさえ良ければ……やってみるか？」

「はい!!　もちろん♪」

断る理由なんかこれっぽっちもない。

早速わたし達は、端を啜えてゆつくりと食べ始めた。

ファイルさんは恥ずかしさから、顔が真っ赤になっているけど、きつとわたしも同じな  
んだらうな。

ポツキーが短くなるにつれて、互いの鼓動が……吐息が感じる。  
ポツキーが半分くらいになったところで――。

「あっ……」

ポツキーはちょうど半分の所で折れてしまった。

「……折れちゃいましたね」

「だな……」

ちよつと残念です。

せつかく半分まで来ていたのに――。

わたしががっかりしていると、ファイルさんが啜っていたポツキーを全部食べ、そして

「……半分は、まだ残ってるよな。だったら、続き………するか?」

「……はい」

わたしは目を閉じて、啜えていたポツキーをフィルさんの方へ差し出す。

フィルさんも、そのポツキーを啜えて、さつきと同じく端から食べ進めていく。

次第に距離が縮まり――。

そして――。

「んっ………あ………」

ポツキーは全て食べ尽くし、互いの唇を重ね合った。

深くつながるキスも良いけど、こういうキスも良いかな♪

結局フィルさんが恥ずかしさですぐに離れてしまい、その後は普通にポツキーを食べただけど、フィルさんの耳元でこうささやくと――。

(今度は、フィルさんの部屋でこれ………しましょうね)

フィルさんは耳まで真っ赤になっちゃったけど、その後すぐ――。

(そのときは……おまえも……一緒にもらおうからな)

それを言われて、わたしまで真っ赤になっちゃった。

フィルさんをからかうつもりだったんだけど、逆にこつちがやられちゃった。

でも、フィルさん、言ったことには責任を取ってもらいますからね。

これをやったとき、絶対わたしも一緒に食べてもらいますよ♪

\* \* \*

喫茶店を出て、しばらくクラナガンの街を探索していたら、あるジュエリーショップが目にとまった。

そこに展示してあった一つのイヤリング。

ピンクダイヤモンドで作られたイヤリング。

ブランゼルと同じ色で、とっても惹かれる綺麗な淡いピンク。



「それ……気になるか？」

「はい、プランゼルの色にとても似てるので……」

「そっか……ふむ……」

フィルさんが、顎に手をつけて少し考えて、次の瞬間――。

「すみません、このイヤリングをください」

「ええっ!!」

フィルさんは、なんかあっさりイヤリングを買おうとしてるけど、お値段かなりするんですよ!!

少なくとも、わたしの1年分のお小遣いじゃ全然足りないんですよ!!

「まあ、ポンポン買う訳じゃないし、たまには恋人らしいことも……してやらないとな」

「フィルさん……」

「だから遠慮しないで受け取ってくれよな」

そう言つてフィルさんは、渡されたイヤリングをわたしの両耳に付けてくれた。

「ちよつとだけ……キザっぽいです」

「自分でもらしくないことをしてゐるつて思う。でも、やる時にはやらないとな——」

フィルさんがわたしにイヤリングを付けてくれた後、『兄ちゃん、やるね!!』とか『彼女とお幸せにね!!』とか周りの人にお祝いの言葉やら冷やかしの言葉をかけられた。

このイヤリングを付けて、学校に行つて、今朝のキスマークを見られたら、絶対にヴィオオやリオ達が追求してきて、絶対にほしがらうな。

でも、このイヤリングはフィルさんが、わたしにプレゼントしてくれた大切な証——

絶対に誰にもあげないんだからね!!

\* \* \*

「あの……フィルさん、せっかくですから、ここでプリクラ……取りませんか？」  
「プリクラか……」

ジュエリーショップを出た後、わたし達は、ゲームセンターに来て遊んでいた。

エアホッケーや、レースゲーム、シューティング、様々なゲームを楽しんで、最後に来たのはこのプリクラコーナー——。

「女の子って、本当にプリクラとか好きだよな。ヴィヴィオ達もそうだったし……」

「……むう……フィルさん、ヴィヴィオやインハルトさんと来たこと……あるんですか」

「ま、まあ……な。前に学校帰りに出くわして、そのままプリクラコーナーで半ば強引に……」

「その時の写真……見てないですよ。フィルさん……み・せ・て・く・だ・さ・い・ね♪」  
「あ、ああ……」

見せられたプリクラは、ヴィヴィオやインハルトさん達だけでなく、八神家のみなさんやなのはさんやフェイトさん、さらにはティアナさんやスバルさん。

それだけじゃない。ジークさん達とも……。  
わたしが知っている女性全員と撮ってるなんて。

「……フィルさん……恋人のわたしより他の人とのプリクラが多いって……ちよつと  
ジエラシーです」

「そう言うつもりはなかったんだけど……。嫌な思いをさせて……ごめん」

「良いですよ。フィルさんが皆さんから慕われてるのは……分かってますから、だから  
……」

わたしはフィルさんの腕にギュッと抱きつき、自分の胸をくつつけて――。

「これからいっぱい、わたしとプリクラも撮ってくださいね!! 拒否権はないです。  
よ♪」

「そんな気はないよ……。いっぱい思い出を作ろう。コロナ」  
「はい!!」

プリクラマシーンに入ったわたし達は、様々なポーズの写真を撮りまくった。

普通のツーショット写真や、腕を組んでの写真、さらに普段じゃ絶対にしないフレンドキスをしてるところまで——。

大胆すぎたかなっておもったけど、でもこれも大切な思い出——。

フィルさん、わたしって結構やきもち焼きですから、ちゃんと可愛がつてくれないと拗ねちゃいますからね♪

\* \* \*

「……見送り、ありがとうな」

「いえいえ、恋人として当たり前ですから」

休暇が終わった翌日、フィルさんはまた新しい任務のため、別世界に出張に出かけることになっていた。

本当は今日は学校があるんだけど、どうしてもお見送りがしたくて、学校を午前中だけさぼっちゃいました。

「じゃ、行ってくるからな」

「はい、行つてらっしゃい。必ず帰つてきてくださいね。フィルさんの帰つてくる場所は……ちゃんとあるんですからね」

「ああ……必ず帰つてくるよ。こんな可愛い彼女を泣かせたくはないから……」

こうしてフィルさんはまた任務のため、新しい世界に旅立つてつた。

フィルさんが管理局で働いている以上は危険な任務も避けられない。

ましてやフィルさんは、古傷もあつて、いっどうなるかなんて分からない。

だから、わたしはフィルさんが帰つてきたときに、心の安らぎになれるような女の子になるんだ――。

わたしも早く、フィルさんの……そのお嫁さんになつて、本当の意味で支えてあげたいから……。

「さて、急いで学校に帰らなくちゃ!! さすがに、午後までさぼるのはまずい……よね」

余談になるが、学校に戻つて、ヴィヴィオやリオ、アインハルトさんに昨日の写真とイヤリング、そして――。

情事の証のキスマークを見られて、一悶着があつたのは言うまでもない——。

これも青春の1ページのひとつ——かな!?

## ファイルのとある休日シリーズ

## Prologue &amp; episode ; 01 ティア

## ナ編

「……はあ、どうしようかな」

とある日曜日、今日もいつものように仕事に向かったのだが、そこで直属の上司に言い渡された言葉は――。

『おまえ、全然休んでないから、上司権限で今日から3日間休め』

いきなり休暇を言い渡されてしまい、俺は反論したのだが――。

『あのな……。半年間で休みが10日って、はつきり言って労働基準法違反なんだよ。それ以前に、このまま身体を酷使したら、お前のかつての上司だった高町教導官のようになっちまうぞ……。』



確かにこの半年、殆ど休みを取っていなかったかもしれない——。

そんなわけで、今日から3日間強制的に休暇を取らされてしまった。

しかも、この機会にプリムもフルメンテナンスをすることになり、手元にはデバイスもない——。

「どうしようかな……。3日も休みがあるから、旅行でも出かけても良いし、確か、この時期って学生は長期休暇の時期だよな？」

一人でのんびりしていても良いけど、家で仕事しているのがばれたら絶対に止めるだろうな——。

普段から、かなり言われていたし、せつかくの休みだ。

いつも時間が無くて、一緒にいられない分、あいつと一緒に過ごそう。

俺の大切な……人と……。

さて、あいつは通信に出てくれるかな——。

\*

\*

\*

episode ; 01 ティアナ編

「さて、出てくれるかな？　今あいつがいるところは確か夜だよな？」

今、彼女がいるところは、ミッドとは幾分か時差があるところだ。

こんな夜中に通信するのは、ちよつと悪いけど、遠くに離れているから、通信しかできな

「……いくら暇をもらっても、遠くにいるあいつには……会えないよな」

プリムがあれば、長距離ワープも出来るけど、今はメンテナンス中でそれも無理だ。だから、せめて会話だけでもと思った。

「……通信に出なくても、メッセージでも残しておけばいいかな」

早速俺は、彼女にメッセージをするため、通信画面を開き通信しようとした。

その時――。

ピンポン

扉からチャイムを鳴らす音が聞こえてきた。

俺が扉を開けると、そこには――。

「……う、嘘だろ」

「帰ってきたわよ……。ファイル」

長期任務でミッドを離れていた俺の彼女のティアナ・ランスターの姿だった。

\* \* \*

「お前……どうして……?」

「驚いたみたいね。実はね、予定より任務が早く終わったから、昨日ミッドに帰ってきたのよ」

任務が終わったのは本当だけど、本当の理由は別にある。

それは――。

「……そっか。でも、こうしてティアの顔を見るとホツとする」

「それは、あたしもよ……。で、ファイル、あんたあたしに隠してることあるわよね」

「はあ? 何のことだよ?」

やっぱりとぼけている。

あたしが任務を頑張つて早く終わらせたのは、ファイルの上司から緊急通信があつて、最近のファイルの様子を教えてくれたからだ。

あたしは、2ヶ月前から長期任務が入ってしまったって、なかなか合うことが出来なくなっていました。

出発前に、絶対に無理しないでねって口酸っぱく言ってたんだけど――。

「あたしが知らないでも思ったの……。あんた、あたしがあれほど言ったのに、全然休暇取らなかったでしょう……」

「な、なんで……お前が知ってるんだよ……?」

「……あたしの所に、あんたの上司から通信が来たのよ。あんたの無茶ぶりを説教してくれてね……」

「そうだったのか……。余計な心配をかけちゃったな……」

あのねファイル、あんたは肝心なこと忘れてる――。

自分の大切な人が無茶してるのに、それを見過ごせるわけ無いでしょう。

あたしはそんなに薄情じゃない!!

仕事とあんたをどちらかを選べと言ったら間違えなくあんたを選ぶわ。

「と言うわけで、あたしもあんたも休みなわけだし、せつかくだからどっかに旅行にでも

行きましょう」

「そうだな……。それも良いな」

早速あたし達は、パソコンで検索をし、良い物件を探す。

フィルの休みは、最低3日と言われているけど、場合によっては、もう少し休ませてくれとフィルの上司から事前に言われていた。

だから、あたしは遠慮無くこのばかを休ませる――。

フィルが無茶して、あの時のようにならないように――。  
ゆりかごの時のように――。

「フィル、これなんか良くない？」

「んっ？ ああ……。温泉か」

パソコンで見つけたのは、ミッドから少し離れた温泉街。

普段なら行くのはちよつと厳しいけど、連休があれば十分に行って帰ってこれる。

「そうだな……。たまにはゆつくりするのも……。悪くないな」

「んじゃ、決まりね。早速予約するわね」

早速あたしは旅館の予約を取り、限界ギリギリの3日間で取ることが出来た。

「ちよ、ちよつと待て!! 俺の休みは3日間しかないんだぞ。3日で予約を取るな!! 帰る日のことも考えろ!!」

「大丈夫よ。事前にあんたの上司から、少しくらいなら休みをオーバーしてもかまわな  
いって言われてるから。大体、これでも休み足りてないからね。あたしだって長期任  
務は1週間は休みももらえるわよ」

「……確かに、そうだが……」

「ということで、これ決定だから。文句は言わせないからね」

ファイルの場合、これくらい強引にしなきゃ休んでくれないからね——。  
まったく……。

人に無茶するなど言っておきながら、肝心のあんたが休んでないじゃばい。  
ということ、半ば強引にあたしは旅行の準備をし、早速出発することにした。

\* \* \*

「そういえば、あたしあんたと旅行いけるのが嬉しくて、失念していたんだけど……」  
「んっ？ 何がだ」

「身体の傷よ……。温泉だと……。あんたのその……。左胸の……」

「ああ……」

——左胸の傷。

かつて、ファイルが未来の世界でクアットロに心臓を貫かれたときの傷——。  
今では大分傷跡も消えかけているけど、それでも、結構な跡になってしまっている。  
クラナガンでは、管理局の証明書を見せれば、どこでも公共の施設を使えるけど、さすがに山奥離れたところで、一般の人と一緒に、一応大丈夫だけど、それでも、ファイルのことを考えると、良い気分はしない。

ちやんと考えれば良かった——。

せっかくの休みを、嫌な気分させちゃう。



「……どうやら、その心配はないようだぞ」

「えっ?」

ファイルに言われて、これから行く旅館のパンフレットを見ると――。

「ちよつと見せて……。へえ、あたし達が取った部屋って、内風呂あるんだね。しかも露天なんだ……」

「ということだから、ティア。あんまり気にするな。今回の旅行……俺のことを取ってくれたんだろ。その思いはちゃんと伝わってるから……」

「……ありがとうね、ファイル」

本当、ファイルは普段はぶつきらぼうでも、あたしが落ち込んでるときや泣いているときには、本当に欲しい言葉や態度を示してくれる。

そんなあんただから、あたしは好きになっただよ。

だから――。

「……ティア?」

「……しばらく……こうさせて。あんたのこと……感じてたいから」

電車の中だったけど、あたしはフィルの肩に自分の頭を預けた。

フィルは何も言わずに、あたしのことをそつと自分の方へ抱き寄せてくれた。

しばらくすると、目的地の駅が近づいてきているアナウンスが流れ、あたし達は電車を降り、旅館へ向かうことになった。

旅館は緑が多い、地球で言うところの和風式で、一目であたし達は気に入った。

でも、旅館に入って、仲居さんに――。

「あらあら、お二人はご夫婦ですか？　とてもお似合いですよ」

そんなことを言われてしまい、あたしもフィルも顔が真っ赤になってしまった。

でも、そう言われるのは照れくさいけど、嬉しいかな♪

その後、あたし達は、夕食の名物料理を楽しみ、少しのんびりした後――。

「せつかくだから……一緒に入りましょう」

「……本気か」

「たまには……良いじゃない。あんたあたしが一緒に入ろうって言っても、中々入って

くれないし……」

「……察しろ。色々と……やばいんだよ」

「分かってるけどね♪ でも、今日くらいは良いでしょう。……ねっ」

あたしは躊躇しているファイルは半ば強引に引っ張って、露天風呂に向かうことにした。

「へえ……結構凄いわね」

「だな……」

内風呂なので、決してそこまで大きいとは言えないが、二人で使うには十分な広さだった。

外から覗かれないために、岩を積んだような壁の向こう側に見える山の景色。さらに上を見上げれば、満天の星空が広がっている。

これは、露天風呂の醍醐味よね。

「それじゃ、身体を洗って、ゆっくりと温泉を楽しもうか」

「そうね。せっかくのお風呂だものね」

あたし達は、とりあえず掛け湯をし、その後身体を洗ってからゆつくりと温泉につかった。温泉は、少し熱いくらいだったけど、浸かるうちに段々暑さにも慣れ、身体の芯から温まった。

ファイルも最初は混浴に緊張していたけど、あたしが一緒と言うこともあって、次第に緊張もほぐれ、表情もリラックスしている。

「気持ちいいわね……」

「そうだな……。温泉はルーテシアの所で入ったことはあるけど、こうして入るのは初めてだな」

ふと、ファイルの方を見ると、どこか遠くを見ている表情になっていた。

その笑みは、少し寂しそうな笑み――。

普段とそんな大差ない感じだから、わかりにくかったけど、いつもと違う笑み。それをあたしは見過ごごさなかつた。

「なに……思い出していたの」

「何でもない……といっても無理だろうな」

「……さっきのあんたの笑みは、どこか寂しそうだった。なにか悲しいことを思い出しているときの笑み。そんな感じだった……」

「そっか……」

そうつぶやいた後、ファイルは夜空の星空を見ていた――。

「聞いても……いい？」

「……ああ」

何となく分かっている。多分ファイルが思い出していたのは――。

「未来での……ことね」

ファイルは予想を当てられて、苦笑しながらも話してくれた。

「こういう星空を見ていると……昔あつたことを思い出すんだ。みんなで笑いあつていた……あの頃を」

きつとファイルは、昔あつた思い出を沢山思い出している。

それは、なのはさん達と一緒に訓練した日々。

それは、あたしとスバルと3人で一緒にいた思い出。

それは、時には六課メンバーと馬鹿騒ぎした一時。

そう言ったことを思い出しているのだろう——。

「確かに過去に戻ってきて、全て元通りにはなった。だけど、俺が経験してきたことは、決して……決して消えることはない」

「……」

「今更……こんなことを言ってるなんて、本当、俺……女々しいよな」

——それは違う。

あんたの歩んできた辛い未来。それは一人が背負っちゃいけない悲しみ。

それを今まで、あんたはたった一人で抱え込んできて、それをひたすら隠し通してきた。

それをあたし達に知られてしまったら、自分が甘えてしまうから、ファイルはそうやって自分に戒めをしてきた。

ファイルがこんな風になってしまったのは、未来でのあたし達との別れ——。

愛する人達を失う悲しみは、身を引き裂かれるほど辛い。あたしもたった一人の肉親である兄さんを失ったときに、それを嫌と言うほど味わったから——。

あたしは、思わずファイルを抱き寄せ……。

その悲しくも切ない思いを、少しでも分けて欲しかったから——。

「ティア……う？」

「……ファイル、あたしは未来での悲しみは……全部は分かかってあげられないかもしれない。でも、あたしは……あんたの彼女よ。あんたのそんな悲しい顔を見るのは……辛いわよ」

「だから、あたしはこうしていつでも、あんたの悲しみを精一杯包み込んであげる。あんたがまたちゃんと立ち上がれるようにね……」

ファイルは何も言うことなく、されるがままになっていた。あたしはいつもファイルがしてくれたように、ファイルの髪を優しく撫でた。

そして――。

あたしの胸にひとしずくの涙が伝わってくる。

今はゆっくり休んでね――。

その傷ついた心と身体は、あたしが癒してあげるから――。



## episode ; 02 アインハルト編

「そういえば……今日って確か縁日があつたよな？」

自分の休みじゃなかったから、あんまり気にしてなかったけど、臨時で休みをもらったことだし、せっかくなので彼女を誘ってみるのも悪くないよな。

「通信しても良いけど、せっかくだから迎えに行ってみるか。そうと決まったら……」

俺は、早速ロードサnderのエンジンをかけ、スロットルを全開にして彼女を迎えに行くことにした。

\* \* \*

「はあ……」

今日は、フィルさんの家の近くの公園で縁日がある日です。

ヴィヴィオさん達と一緒に行きませんかかって誘われたのですが、申し訳ないと思いましたが、お断りしてしまいました。

本当なら、こういったときはその……恋人同士で行きたかったです。

フィルさんが仕事で忙しいのは分かるのですが、ほんの少しで良いですから一緒にいたいと思うのは私の我が儘でしょうか。

「……なんか……さみしいです」

私が落ち込んでいると、誰かからトントンと肩を叩かれました。  
振り返ってみると……。

「よっ、アインハルト」

「フ、フィルさん!?!」

黒髪短髪の男性、私の大切な人——。

フィル・グリードさんがそこにいました。

「ど、どうしたんですか!?! 確か、今日もお仕事のはずでは?」

フィルさんの最近のスケジュールは、教えてもらったから全部知っている。覚えてる限りじゃ、1月先まで休みはなかったはず――。

「その予定だったんだけど……。上司に大目玉を食らってな。3日間強制休暇だ」  
「あ、あはは……」

それ、当たり前です。

正直言って、フィルさんの労働時間は異常です。

それでも、フィルさんは定期的に通信でだけ会話をしてきていた。

そのことは嬉しかったけど、それ以上にフィルさんの身体のことの方が心配です。

「……………ごめんな」

「えっ?」

突然ファイルさんが謝ってきた。

一体どうしたんだろう？

「ごこん所ずつと直接は会えてなかったし……。仕事ばかりで……。ごめんな」

「い、いえ!! ファイルさんが忙しいのは分かってますから……」

「それでもさ……。好きな女の子に『さみしい』なんて言わせてるんだから……」  
「あつ……」

ファイルさんは、さっきのひとりごとを聞いていたんだ。

本当にポソつとといった言葉だったのに――。

「本当……。人々を守るなんて言っても、肝心の女の子の心……。守ってなかった。傷つきやすい……。優しい女の子のな……」

「ファイルさん……。そんなこと無いです。あなたがいるからこそ、私は私でいられるんです……」

フィルさんがいてくれるから、私はアインハルト・ストラトスとしていられる。  
覇王の生まれ変わりじゃなく、一人の女の子として——。

「それは、俺も同じだから。こうして素直に話せるのは、お前くらいだから……」  
「それは、ティアナさんよりもですか？」

私は、あえて少しだけ意地悪な質問をする。

ティアナさんとフィルさんの関係は特別なのは分かっているけど、それでも、やっぱり恋人としては気にしちゃうんです。

「だったら……証明してやろうか」

「……はい」

私は瞳を閉じて、フィルさんとキスをする体勢になる。

フィルさんの吐息を近くで感じる。

後数センチ——。

と思っっていたら――。

「オホン!!」

「!!」

突然、大きな咳払いをされ、私達はびっくりして振り向いてみると――。

「ヴィヴィオ（さん）!?!」

中等部の制服を着たヴィヴィオさんが仁王立ちをしていました。

「フィルさん、アインハルトさん、仲がよろしいのは良いんですけど、ここ校門前です!!」

「あっ……」

「そういえば……向かえに来てたんだ。学校前だつてのすっかり忘れてた……」

すっかり忘れていましたが、まだ校門前にいて、そこでフィルさんに声をかけられたんだった。

周りを見ると、ヴィヴィオさんだけでなく、コロナさんやリオさんまで一緒にこっちを見ていました。

「……はあ、昔のアインハルトさんは、こんな事、絶対に出来る人じゃなかったのに」  
「ヴィヴィオ、それは野暮だよ。恋は人を変えるって言うじゃない」  
「いいなあ。あたしもフィルさんみたいな人が恋人だったらなあ……」

ヴィヴィオさん達からいろんな事言われてしまってますが、例えヴィヴィオさん達でも、フィルさんは……私の大好きな人は渡しませんから!!

「まったく……そのくらいで勘弁してくれよ。じゃ、アインハルト、家まで送るから」  
「は、はい!!」

フィルさんも、これ以上ヴィヴィオさん達にからかわれたくないみたいですね。  
その意見には賛成です。

私達は、急いでロードサンダーでその場を離れました。

家まで送ってもらい、ファイルさんが帰る前に――。

『今日の縁日、良かったら一緒に行かないか？』

ファイルさんが私を縁日に誘ってくれました。

私はすぐに了承しました。

だって、夢にまで見たことが現実になったんですから――。

\* \* \*

「さて、ここで待ち合わせだったよな？」

夕方、俺は約束した待ち合わせ場所にやってきていた。

最初、家まで迎えに行こうかと言ったんだけど――。

『ちよつと……見せたい物がありますから。公園で待ち合わせにしませんか』



「アインハルトから、そう言われてしまい、今回は公園で待ち合わせをする事になった。」

「……縁日か。なんか、浴衣で来る人が多いな」

周りを見渡してみると、結構浴衣を着ているカップルが多かった。俺も浴衣でも着てくれば良かったかな。

しばらく周りを見てると、アインハルトの声が出て――。

「す、すみません!! 遅れました!!」

アインハルトの方を見ると――。

「いや、今来たばかりだから、ら……」

いつもの高等部の服装とは違い、青地で桜柄の浴衣を着ていた。

「ファイルさん……その……似合ってます……か？」

「あ、ああ……よく似合ってる。いつもとはまた違う……その上手くは言えないが、綺麗だ」

「あ、ありがとうございます」

アインハルトは、照れてしまい顔が真っ赤になってしまった。

こうしてみると、いつも可愛いんだけど、浴衣を着たアインハルトは、また違った色気がある。

「……あんまり見つめられると……恥ずかしいです」

「ご、ごめん……」

「でも……」

アインハルトは、俺の左腕に、顔を真っ赤にしながら、そつと自分の腕を絡ませてきて――。

「私だけを……見てくれるなら……いっぱい……いっぱい見てください」

「……ありがとな」

恥ずかしがり屋のアインハルトが、ここまで言ってくれるのに、ここで野暮なことは言ったら馬鹿だ。

ここはしっかりと彼女だけを見ていなくちやな。

\* \* \*

「……当たりませんでした」

「残念だったな、嬢ちゃん。もう一回やるかい」

縁日の出店を回ってた私達は、射撃屋のところである景品を見つけました。

それは、ティオそっくりのストラップ。

何とか手に入れたかったので、早速100円を払ってやってみたのですが――

「……ちゃんと狙ったんですけど、当たりません」

すると、フィルさんが私が使っていた銃を見て――。

「うーん。重心も合ってるから、インチキじゃないな。と言うことは……ちよつと貸してみな。あのテイオにそっくりなストラップが欲しいんだろ？」

「は、はい。でも、後一発しかないんです」

「一発あれば十分だ。さつきから見ていて、銃の癖は分かっているから」

私は、フィルさんに銃を渡し、フィルさんは受け取った銃を構えて――。  
『パァン』と勢いよく放たれたコルク玉は――。

「ま、マジかよ……」

「す、凄いです……」

たった一発でストラップに当てて、景品を取ってしまいました。

「一応、俺は射撃型だからね。このくらいは出来るよ」

「フィルさん、本当に凄いです……」

「フィルさんは何でもないように言うけど、慣れない銃で一発で当てるなんてすごいです。」

「はい、アインハルト。これで良かったか?」

「ありがとうございます!! 本当に嬉しいです」

フィルさんからストラップを渡され、それを早速自分の携帯端末に付けました。自分で取るより、こうしてフィルさんからプレゼントされる方が嬉しいです。

「良かったら、他の景品も根こそぎ取ってやろうか?」

「勘弁してくれ!! こっちの商売が上がったりになっちまう!!」

確かにフィルさんが本気になったら、この景品は全部取っちゃうとおもう。

さすがに涙目で訴えるおじさんを見て、フィルさんもそれは止めることにしました。

\* \* \*

「んっ？ 綿アメか……。縁日の定番と言ったら定番だな」

「ですね。実は私、綿アメが大好きなんです。あのふわふわした食感が美味しいんです」  
「そっか。ちよつと待ってる。今買ってきてやるからな」

そう言つてフィルさんは、綿アメを2つ買つてきてくれました。

それを受け取り、綿アメを一口食べると――。

「美味しいです。やっぱりこのふわふわ感いつ食べても美味しいです♪」

「確かに美味しいな。あんまり一人じゃ食べないけどな」

「こうして、フィルさんと二人で食べると、いつもより美味しく感じます」

大好きな人と大好きなものを一緒に食べる。

これだけのことですけど、すごく幸せです――。

その後、色んな出店を回つて、たこ焼きやリング飴も一緒に食べたりして、私は久し振りの縁日をいっぱい楽しみました。

そうこうしてるうちに、空も暗くなり――。

「さて、そろそろ花火が上がる時間だな」

「あつ、そうでしたね」

実は、縁日の最後は花火が上がる事になってます。

この事が分かってましたので、私達は縁日会場から少し離れた高台に来ていました。ここですと、花火も綺麗に見える所なんです。

「おつ、上がったぞ」

「……きれい」

夜空に上げられた花火は、空一面に大輪の花を咲かせていました。

赤、黄色、青、それぞれ彩られた花火は本当に綺麗です――。

「ファイルさん……。また一緒に縁日に来ましょうね」

「ああ、また来年も一緒に来ような」

「絶対ですよ。約束……しましたからね」

私とファイルさんは、指切りをして約束を交わす。

来年も——。

これから先もずっと——。

こうして、縁日に一緒に来ましようね。

\* \* \*

「すみません、お邪魔します」

「遠慮するなつて。こんな時間まで付き合わせちゃつて済まなかつたな」

花火が終わるまでいた私達は、帰りの電車に間に合わなくなつてしまい、公園の近くにあるファイルさんの家で一泊することになってしまいました。



なんかドキドキします——。

フィルさんの家に泊まるって事は……その……。  
やっぱりしちゃんですよね……。

「どうした？」

「い、いえ、何でもありません!!」

フィルさんはこっちの気持ちなんて気がついてないですよね。

さつきからドキドキしっぱなし何ですからね!!

\* \* \*

少しリビングでゆっくりした後、私達は寝室に行き、ベッドサイドに座って話をしています。

「今日は、本当に楽しかったです。縁日なんて久しぶりでしたから……」  
「そうだな……。こうしてのんびりするの久しぶりだったからな……」

フィルさんは、明後日にはまたお仕事で忙しくなってしまう。

こうしていられるのは、あと2日だけ――。

だから――。

「フィルさん……。我がままなのは分かっています。でも、フィルさんのことをいっぱい感じられるように……。その……。抱きしめて……。ください」

「今日くらいは……。紳士的に接したかったんだけどな。いつも、アインハルトのことを求めちゃってるし……」

「……。いいですよ。こうして……。私のことを見てくれるなら、いっぱいしてください」  
「アインハルト……」

瞳を閉じ――。

私達はどちらからともなくキスをする。

さつきまで、縁日で綿アメを食べていましたから、互いの唾液はとても甘く感じます。

「なんか……。甘いな」

「ですね。でも、こういうったキスは……。嫌いですか？」

「いや……好きだよ。もつとしたくなる」

「でしたら……もつとしまししょうか」

さらに互いを貪るようにキスをしながら、フィールさんは私の浴衣を左肩だけずらし、そのまま私の胸を何度も触れてくる。

「あ……ん……んあつ……」

「今日のアインハルト……可愛いつて言うより……綺麗だ。すごく色気もある」  
「良かった……。頑張つて……浴衣をきたかい……ありました」

私は、こんなのを着ても似合わないと思つてましたけど、こうしてフィールさんに綺麗つて言われるとそれだけで嬉しいです。

「今日は……浴衣姿を……堪能したいな」

それつて、浴衣を着たまま、その……するつて事ですよね——。

「それ……ちよつと、えつちです」

「こんな彼氏は……嫌いか？」

ファイルさんは、本当に意地悪です。

本当にいやだったら、こんな格好なんてしませんよ——。

「……えつちな人は……きらいです。でも……ちゃんと私のことを見てくれるファイルさんは……大好きです」

「……ありがとうな。俺も……大好きだよ」

そして——。

私はファイルさんに全てをゆだね——。

肉体と精神の快楽に二人で溺れる。

\* \* \*

「……………結局、裸になっちゃいましたね」

「まあ……………その……………すまん」

最初は、その……………浴衣のままだったんですけど、幾度と求め合ううちに、二人とも生まれのままの姿になってしまい、普段よりもたくさんしてしまいました。

「ふふつ、良いですよ。こうしてフィルさんが、私のことを求めてくれるって事は、私に魅力を感じてくれてるって事ですから」

「……………充分すぎるほどにな。マジで……………やばいつての」

こういう時のフィルさんは、絶対に冗談は言わない。

そんなフィルさんだから、私は大好きなんです。

「フィルさん。私、もつと頑張つて綺麗な女の子になりますから、浮気……………しないでくださいね」

「それじゃ、俺も、もつとがんばらなきゃな。そんな素敵な女の子と一緒にいられるよう

にな」

「……それ、困ります。これ以上フィルさんに頑張られたら、絶対に倒れちゃいます。だから、フィルさんは頑張らないでください」

「そういう……ものなのか？」

「そういうものなんです!!」

まったく——。

この人は、今でも無茶すぎなのに、これ以上されたら絶対に倒れます。

頑張るのも良いですけど、自分の彼女を心配させないでくださいね。

後日談になります。が、実は、縁日の日、ヴィヴィオさん達が私達のことを見ていて、そのことをいろいろ聞かれてしまい、あやうくフィルさんの家に泊まったことまで話してしまいそうになりました。

お泊まりがばれそうになったのは、フィルさんが私の首に付けたキスマーク。

もう!!

初めての時も、これで皆さんに色々言われたのに!!

ファイルさんの……ばか。

でも——。

そんなあなたが大好きです♪

## episode ; 03 ルーテシア編

「さて、あいつはどうしてるだろうな。ここと時差7時間だから……」

早速俺は、スクリーンを開き、通信を開く。

すると――。

『こんにちは、フィルさん♪ 愛しの彼女のルーちゃんです』

「相変わらずだな。ルーテシア」

紫髪の女の子――。

俺の彼女のルーテシア・アルピーノが出た。

『まあ、元気と言ったら元気なんですけど……。やっぱり、なかなか会えないのは寂しい

な……』

「………すまない」



ルーテシアの寂しい笑みを見ると、俺がどれくらい彼女に甘えてきたか痛感する。

『良いんです。こうやっていつも定期的に通信してくれますし、忙しいのにワープで来てくれたりしてるんですから』

「それくらい当たり前だろ。自分の大切な彼女なんだし……」

『ふふつ、それ、エリオに聞かせてあげたいかも。キャロがいつもエリオ君が仕事ばかりしてるって言ってるし』

「あ、あいつな……。俺みたいになってどうするんだよ」

どうりで、最近キャロから通信で愚痴が多いと思った。

俺の悪いところだけを抽出してどうするんだよ——。

『そういえば、今日はどうしたんですか？ 確かお仕事だったはず？』

「ああ……。実はな、上司に大目玉食らったんだよ」

『それ、仕事面じゃないですよ。ということは……。フィルさん、全く休んでなかったでしょう!!』

「……当たり前だ。今日から3日間強制休暇だ」

まさか、いきなりこんな休暇を言い渡されるとは思っても見なかった。でも、上司の言ってることは正論だから何も言えないしな——。

『それじゃ、家に来ませんか!! カルナージだったら、次元航空船でも、そんなに時間をかけなくても来られるでしょう!!』

「……そうだな。でも、良いのか? いきなりお邪魔して」

『ファイルさんだったらいつでもオツケーですよ♪』

「それじゃ、お言葉に甘えてお邪魔することにするよ。準備が出来たら、ワープで行くからよろしくな」

カルナージくらいなら、プリムが無くてもワープは可能だ。さてと、準備をしてルーテシアの所に行くとしましようか。

\* \* \*

「♪」

「あら、ルーテシア、ずいぶんご機嫌ね」

「だって、フィルさんが今から来るんだもん♪」

だって、最近は通信でしかお話しできなかったんだもん。  
やっぱり、彼氏が来てくれるのは嬉しいな。

「あらあら、ずいぶん急なのね。一体どうしたのかしら？」

「……フィルさん、向こうの上司から強制休暇取らせられたんだって」

「……いつかこうなると思ってたけど……フィル、本当に休まないものね」

そう、フィルさんは、本当に休みという休みを取らない。

私とデートしたりするときは、休みを取ってくれるんだけど、基本的に自分の休みを取ったりはしない。

「だからママ、今日から3日間は、私達で一杯おもてなしをして、フィルさんにリフレッシュしてもらおうの!!」

「ええ、私も協力するわよ。なんせ、ルーテシアの未来の旦那さんになる人だものね」

「ま、ママったら……」

でも、本当にフィルさんにはここでしつかりと休んで欲しい。

私は、未来のティアナさんみたいに特別な関係じゃないけど、でも、フィルさんが好きという気持ちは、未来のティアナさんにだって決して負けないもん。

私は、私が出ることによってフィルさんの支えになるだけ!!

\* \* \*

「着いたな……。久し振りだよな」

前にここに来たのは、約2月前だったな。

考えてみれば、それだけ、ルーテシアと会っていないかったんだな。

俺がペンション前で、周りの景色を見ると――。

「フィルさ――ん!!」

「元氣よく響き渡る声——」。

「よっ、お言葉に甘えさせてもらいに来たよ」

「いらつしやい!! 待ってたよ!!」

「すまないな。いきなりお邪魔しちゃって……」

「それは言いつこなし。お部屋も用意してますので、まずはゆつくりと休んでください」

俺は、ルーテシアの案内で、用意された部屋に行くことになった。

少し大きめのベッドと、テレビなど一通りの物が用意されている。

元々、ここはなのはさん達がよく合宿に使ったりするので、勝手知ったる場所とも言える。

「さてと、少し休んだらメガーヌさん達の所に行って手伝わないとな……」

さすがに踏ん反り返ってるわけにはいかないしな。

俺は、簡単に着替えて食堂にいるメガーヌさんの所に向かったが……。

\* \* \*

「……いきなり追い出されてしまった」

「当たり前!! フィルさんに休んでもらいたいののに、ここに来てまで働いてどうするんの!!」

「だがな……。何もしないってのは……」

もう、フィルさん気使いすぎ!!

ママだつて、せつかくの休日なんだからゆっくりして欲しいって思ってるんだよ!!

「……フィルさんの言うことも分かるよ。でも、ここにいるときくらいは私のことを考えて欲しい。一緒にいられる……大切な時間だから」

「……あつ」

こういう言い方は卑怯なのは分かってる。

でも、大切な人と少しでも一緒にいたいのは本当だから……。

「……そうだな。お前の言うとおりだな」

「そうだよ!! こうしていられる時間は限られてるんだから、いっぱい一緒にいよ!!」

\* \* \*

俺たちは、ルーテシアの提案で川に行って一緒に泳ぐことにした。

左胸の傷も、今では殆ど目立たなくなっていて、ミッドにあるプールとかにも行けるようになってる。

最初はこの傷はずっと残しておこうと思っていたんだけど、これがあると行動に制限がかかってしまい、ルーテシアに嫌な思いをさせてしまうので、手術で傷を消すことにした。

それでも、わずかに傷跡が残ってしまったが、日常生活には全く支障がないのでほっとしている。

でも、この傷痕を見る度にあの女のことを思い出す。

——戦闘機人、クアットロ。

俺の大切な物を全て奪ったあの女。

未来においても、この世界においても憎んでも憎みきれない。  
そんなことを考えていたら……。

「えい♪」

「うわっぷ!!」

ルーテシアに背中を押されて川に落とされてしまった。

「おまえ、何考えてるんだよ!!」

「少しは頭が冷えた」

「えっ?」



「さっきのフィルさん、すっごく怖い顔してた。何を考えたの？」  
「そっか……。ごめんな。そんな怖い顔してたか？」

どうやら無意識に顔に出ってしまったんだな。

もう、過去のことなのにな……。

「でも、いきなり突き落とすことはないんじゃないか!？」

「ふーんだ。せつかくフィルさんのために可愛い水着を着てきたのに、全然見てくれないんだもん!!」

そう言われてルーテシアの方を見ると、合宿の時とは違い、ルーテシアの髪にあわせて紫のビキニとパレオを着ていた。

「……ごめんな。でも、その水着すごく似合ってる。だから……その……なんだ」  
「なーにかな♪」

ルーテシアの奴、絶対わざとやってるだろ。

俺が照れてるのを分かっている、自分の胸を強調して見せてやがる。

「頼むから……俺を挑発するのは止めてくれ。俺は……そんなに理性は……強くない」  
「へえ〜。そうなんだ〜♪」

ルーテシアは小悪魔的な笑顔で、俺に抱きつき胸を思いつき押しつけてきやがる。  
この間初めて結ばれたときに分かったけど、ルーテシアは年齢相応に女としての色香もある。

出る所もでていし……。

「……だったら、フィルさん。いっぱい私を感じて……。忌まわしい記憶が消えるくらいに……」

「!? お前……」

さつきまでとは違い、ルーテシアはつらそうな表情をして、涙を流している……。

「……分かるよ。あんなにつらい表情は、未来のことを……考えていたんだよね。私は

……こうしてフィルさんを包んであげることしかできない。それが……とても悲しいよ」

「……ルーテシア」

「フィルさん……」

いつのまにか俺たちは口付けを交わしていた。

どちらからともなく、それが当たり前のように……。

そして、俺はルーテシアに抱き寄せられて……。

「なんか……いつもと、逆だよな」

「良いの。今日は、私がフィルさんのことを包み込んであげるって決めたんだから……」

「……ありがとな」

俺は、母親に抱きしめられた記憶はないが、こうしてルーテシアに抱きしめられてると、荒んだ心も安らいでいく感じだ。

「ごめんなさい……。ママみたいに、もっと……胸があつたら良かったのに……」

「そんなことないさ……。充分堪能させてもらってるよ」  
「その言い方……。ちよつと、えつちです」

しかたがないだろ……。

好きな女の子に、こうされて何も反応がないって方がおかしいだろうが……。

「……よかった」

「えっ?」

ルーテシアが、ほつとした表情でふと言葉を漏らす。

「私でも……。フィルさんに安らぎをあげられてるんだね……。私にはこれくらいしかできなけれど……」

「……充分だよ。こうして……。そばにいてくれるだけで……。いい」

「……うん」

——愛する人と一緒にいられる時間。

それは、かけがえのない大切な物だから……。

\* \* \*

「……はい、動かないでね」

「さすがにこれは……恥ずかしいのだが」

私だって恥ずかしいんだよ。

ひざまくらなんて、ノリで言うことはあるけど、実際にするのはやっぱり照れちゃうんだからね……。

でも、今のファイルさんに必要なのは安らぎ。

少しでも、こうして人の温もりに触れて、心を癒して欲しいから……。

「……不思議だよな。こうしてると……なんか、ほっとする」

「本当？」

「ああ……。なんか、安心するんだよな。こうしてお前に包まれてると……」  
「そっか……」

それは、私も一緒だよ。

フィルさんと……。

大好きな人と一緒にいると、本当に安心するんだよ。

「だったら、いつでもこうしてあげる。私は、フィルさんの彼女……なんだからね」  
「……ありがとう、ルーテシア」

そして、フィルさんはすうつと眠りに入ってしまった。

「……眠っちゃったね」

私は、そっとフィルさんの髪を撫でて、そのまま包み込むように抱きしめる。

さっきの時もそうだった。

未来でのことは、フィルさんにとって永遠に忘れられないこと。

クアットロを倒し、この世界を平和にしても、この人の心は、傷だらけのまま――

傷だらけの心は、決して元に戻ることはない。

でも、二人でたくさん優しい思い出をつくっていこう。

二人でなら、つらいことだって乗り越えられるんだからね――。

\* \* \*

「……休み、終わっちゃったね」

「そうだな……」

今日でフィルさんのお休みはお終い。

明日からは、また、大変なお仕事が続いている。

「絶対無理はしないでね……。お願いだから……」

「ああ……」

——  
だめ。

この人は、一人にしてたら絶対にまた無理をしまくる。

時期尚早と思って我慢してたけど……。

——  
決めた!!

もう、待ってるのは止めた。

こつちからフィルさんの所に行つて、ずっと一緒にいるんだ。

元々待ってるのは性に合わない。

そばにいて、一緒に支えていく。

それが、私の愛の形——。



——  
未来のティアナさん。

私、絶対にまけないからね!!

## episode ; 04 コロナ編

「それじゃ、これでも使ってみるか……」

ポケットから取り出したのは、二枚のチケツト。

先日出来たテーマパークのチケツト。

休暇を言い渡されたとき、むりやり上司から渡されたんだよな、これ。確か、プールも隣接してるんだよな、ここは。

「ちよつと通信してみるか。急な話だから、大丈夫かな？」

俺は、スクリーンを開き、彼女に通信をする。

すると……。

「おはようございます。一体どうしたんですか、フィルさん？」

俺の彼女のコロナ・ティミルが、パジャマ姿のまま通信に出てきた。  
しかも、若干はだけてるし……。

「おはよう、急に通信してすまないな。でも、その姿だったら、サウンドオンリーにしてもかまわなかったんだけど……」  
「えっ？ きゃ、きゃあああつ!!」

コロナの奴、今の自分がどんな姿か分かっていないで通信に出たな。  
しばらく、通信はサウンドオンリーになっていたが、部屋で慌てている様子は思いつきり伝わってきていた。

「はう……。恥ずかしい姿見られちゃったよ」

今のコロナは、ラフだけどちゃんと洋服に着替えている。  
よっぽど恥ずかしかったんだな。

「まあ、俺としては、その……良い物を見させてもらった、と言っておこうかな」

自分の彼女のパジャマ姿なんて、普段じゃ見られないんだし。

「……本当ですか？ わたし、ちゃんと色気あります？」

「十分、魅力的だったの……」

「フィルさんにそう言ってもらえると……やっぱり嬉しい、です」

コロナは、同世代のヴィヴィオやリオに比べて、身体的に成長してないと、いつも自分で言ってるが……。

そんなこと決してないから……。

「そういえば、今日は何にかご用ですか？ 確か、今日もお仕事だったはずでは……」  
「その事なんだけど、強制的に休み取らされた。おかげで3日間完全フリーだ」

俺は、コロナに休暇に至る経緯を話すと、みるみる呆れた表情になっていき……。

「……………それ、あたりまえです。フィルさん、もう少しちゃんと休んでください!! フィルさんが倒れたりしたら、わたし……………わたし……………」

「……………ごめん。これからは休暇取るようにする」

自分の彼女を心配させてまで仕事しても意味がない。

それに、最近コロナと一緒にいられる時間とれてなかったしな……………。

「お詫びというわけじゃないけど、よかつたら今からここに行ってみないか?」

ポケットから取り出し、テーマパークのチケットをコロナに見せると……………。

「それ、新しくできた所ですよね!! わたし行ってみたかったです!!」

「そっか。今から迎えに行くから待っていてくれ」

俺は、ガレージに行き、愛車のエンジンをかけると今日もいい音を響かせていた。ギアを一速に入れ、ホイールスピンをさせながらコロナの下へと急いだ。

\* \* \*

「ふふふつ。久しぶりのデートだ」

こないだフィルさんとデートしたのは、2ヶ月前。

仕事で忙しかったから、通信もなかなか出来なかったけど、こうしてデートできるのはやっぱり嬉しいな。

「ちよつと……冒険しすぎたかな？」

今着てるのは、黄色のビキニとパレオの水着。

普段ならワンピースタイプ選んじやうんだけど、今日は頑張つてビキニを着てみた。

フィルさんに可愛いよつて言つて欲しいから……。

「いつけない!! フィルさん、もうプールサイドで待つてるよね」

わたしは急いでフィルさんが待つてるプールサイドへと向かった。  
しかし……。

「あれ？ あれは、フィルさんと……なのはさんとフェイトさん!」

フィルさんの隣にはなのはさんとフェイトさんがいて、なにか話をしている。  
一体何の話なんだろう？

ちよつと気になって、わたしは近くの柱に隠れて聞くことにしました。

\* \* \*

「でも、まさかこんなところで会うとは思わなかったよ」

「そうですね。さすがにプールで会うとは思いませんでした」

なのはさんとフェイトさんは、共にビキニタイプの水着。  
しかも、あの二人にすつごく似合ってます。

わたしの胸じゃ、あそこまでは……。

「でも、臨時の休暇、ちゃんと使ってるみたいだね。コロナちゃんと来てるんでしょ？」

「ええ、もうすぐ来るとは思うんですが……。あれ？　なんで俺の臨時休暇のこと知ってるんですか？」

すると、お二人はなにか悪戯が成功したような表情で……。

「だって、あれ、わたしとフェイトちゃんが申請したんだもん」

「ええっ!!」

ファイルさんから、上司から臨時休暇を言い渡されたことは知ってましたが……。



ファイルさんも思いつきりびっくりしています。

「……一体、どういう事ですか？」

すると、フェイトさんは、少し怒ったような表情でファイルさんのことを見て……。

「……あのね、ファイル。最近、コロナとちゃんと会ったりした？」

「正直、会えてませんでした……」

ファイルさんは、ここ最近、執務官の仕事がすぐく入ってきて会う時間もとれないでいた。

寂しかったけど、それは我慢しなきゃ……。

「やっぱりね……。こないだコロナちゃんにあつたとき……泣いてたんだよ。寂しいって」

「!？」

——見られてたんだ。

この間、なのはさんと会ったときに、少しだけお話ししたんだけど、その時にファイルの話が出て、すごく寂しくなっちゃって……。

でも、すぐに思考を切り替えたから見られなかったとおもってたのに……。

「それでね、私となのはが直接出向いて、休暇申請を強引に出したの。本当はダメなんだけど、向こうの上司もなんとか休暇を取らせたかったから、すぐに申請が通ったんだ」  
「そうだったんですね……。すみません、完全に俺のせいです。コロナに……。そんな思いをさせてた俺の……。」

違います!!

ファイルさんが忙しいのは、仕方がないことです。

人々のため、そして、わたし達のために一生懸命にしてくれてるんですから……。

「そう思うなら、これからはちゃんと、コロナちゃんとの時間を作ってあげること。でな

いと、今度は本当に怒るからね」

「……ええ、自分の彼女を泣かせてたんじゃ、本末転倒ですからね。仕事量、減らします」  
「うん、なのはと二人でお膳立てした甲斐があつたよ。これで大丈夫だね」

「お膳立てって……。まさか!？」

「そう、ここのチケツトもわたし達が用意した物だよ。ファイルをここに呼んで話すためにね……」

ファイルさんは、上司の方から「これでも使つて気分転換しやがれ」って言われて強引に渡されたって言つてたけど……。

「こんな偶然そうはないだろうって思つてましたが……。そう言うことだったんですね」

「そういうこと。私たちの話はおしまいだから、あとは二人で楽しんでね。それと、コロナ、もう隠れてないで良いよ」

「えっ?」

——見つかつていた!?

じゃ、なのはさん達は、わたしがここにいるって分かって話をしていたんだ。わたしは、柱の陰から出てきてファイルさん達のそばに行きました。

「ファイルさん……」

「……本当に、ごめんな。コロナ」

「良いんです。こうして、わたしのことを思ってくれるだけで……」

ファイルさんが、わたしのことを好きって思ってくれる。

それで、十分幸せなんですから……。

「それじゃ、わたし達は馬に蹴られないうちに退散するね。フェイトちゃん」

「そうだね、お邪魔虫はこの辺で消えないとね、じゃあね、ファイル、コロナ」

そう言って、お二人は更衣室の方へ行ってしまった。

本当、わたしは素敵な人たちに見守られてる。

いつか、わたしもなのはさん達みたいに素敵女性になりたいです。  
ああいう風に、さりげなく気遣いが出来る素敵な女性に……。

\* \* \*

「行っちゃいましたね」

「ああ、でも、おかげで大切な物失わないで済んだよ……」

そう言って、フィルさんはわたしを自分の方へ抱き寄せて……。

「お前という大切な女の子を、な……」

「フィルさん……」

「それと、その水着、よく似合ってる。なんか新鮮な感じだ」

「……よかった。頑張って、ビキニ着た甲斐ありました」

ビキニなんて止めれば良かったって思っていました。着てきて良かったです。

わたしは、嬉しくなってフィルさんの腕にぎゅっと抱きつき……。

「あ、あのな……。そうされると、その胸が……」

分かってますよ。

ワザと胸を押しつけてるんですから……。

だって、こうでもしないと、胸が小さいわたしじゃアピールできないし。

「フィルさんはいやなんですか？ わたしに抱きつかれるのが……」

わたしは、上目遣いでフィルさんのことを見つめる。

「そうじゃなくて、その、な……」

分かりますよ。フィルさんがドキドキしてるのは……。

でも、これはわたしが寂しい思いをした分の罰です。

だから、今日はずっとこうして離れませんから〜♪

\*

\*

\*

「……やっぱり、こ、こ、怖いです」

「本当に大丈夫か？ 何だったらリタイアしても良いんだし……」

「い、いえ、自分で言ったんですから、が、がんばります!!」

本当は、お化け屋敷なんて苦手なんだけど、今日はフィルさんにいっぱい甘えたかったから、頑張って入ってみただけど……。

ここのお化け屋敷って、ミッド最恐と言われるほど怖い場所ですつかり忘れてた。

わたしは怖くて、フィルさんにぎゅっと抱きついてしまって、結局迷惑かけちゃっただけじゃない。

すると、ファイルさんが……。

「……怖かったら、しっかりとつかまってな。言っただろ、今日はたくさん甘えてくれて……。今までしてあげられなかった分もな」

「……ファイル、さん」

「それに、俺も可愛い女の子に抱きつかれて役得だしな」

ファイルさん、わたしが甘えられるように、ワザと慣れない気障な言葉を言ってくれたんだ……。

「じゃ、最後までエスコートお願いします♪」

そして、わたしとファイルさんは、なんとかゴールまでたどり着いて、ゴールの証の記念カードをゲットすることが出来ました。

これ、成功率がかなり低いからレアカードとも言われてるんだよね。



\* \* \*

「♪」

「それ、よつぽど気に入ったんだな」

「はい!! だって、フィールさんの思い出がまた増えたんですから」

フィールさんと、今まで色んな事をしてきたけど、今日の遊園地デートはとつても楽しかった。

プールでも、お化け屋敷でもすつごく甘えられたし、それに戻ってきてからも、こうしていっぱいフィールさんの温もりを感じられたから……。

「そうやって、コロナの笑顔を見られるのが、なにより嬉しいのに、ここん所仕事優先してたからな……。本当、なのはさん達に感謝だよな」

「そうですね。わたしも、こうしていっぱいフィールさんに甘えられたし、たくさん……。愛してもらいましたから……。」

いくら、普段から甘えてくれて良いって言われてても、やっぱり甘えるだけじゃなくて、フィルさんのこと支えられるように頑張らなくちゃって思ってしまうから……。

なかなか、甘えられなかったけど、今日はせっかくの機会を目一杯、利用しちゃいました。

「……それは、どちらかという俺が言うことかな。コロナの身体に甘えさせてもらっ  
たし、な」

「ふふつ、フィルさん、わたしの胸にいっぱいキスマーク付けてくれましたし〜♪」

こうしてキスマークが付いてると、フィルさんがわたしを愛してくれてるって感じられるから……。

「でも、今日はもつと付けてもらおうかな。時間はいっぱいありますし〜♪」

「つたく、さつき聞いたときはびっくりしたぞ。まさか、デートに行く前にお泊まりしてくるって言ってたなんてな……」

「えへへ〜。だって、久しぶりのデートだったんだもん。それに、うちの両親、フィルさ

んのこと信頼してるから逆に応援してくれまし……」

だって、普段から無断外泊とかは許さないファイルさんだから、しっかりと送ってくれ  
るし……。

泊まるときとかも、しっかりと両親に連絡してくれる。

そのせいで両親が、とくにママが『チャンスがあつたら泊まってきて良いから!!』つ  
て言ってくれてる。

普段のファイルさんの誠実さが、こういったときに出るんだよね。

みんなが付き合ってる男の子だと、なかなか大変らしく、両親からはお泊まりなんて  
ふざけるなって言われるんだって……。

同世代の男の子には悪いけど、ファイルさんみたいな人ってそうそういないと思うから  
……。

「まったく……」

そう言つて、フィルさんはわたしの上に覆い被さつて……。

「男の家に泊まるつて事は、覚悟はできてるんだろうな……」

フィルさん、それは野暮ですよ……。

女の子が、男の人の家に泊まるつて事は、それなりの覚悟が必要なんですから。

女の子のこと、あんまり舐めないでくださいね!!

「フィルさんこそ、覚悟してくださいね。いっぱい甘えちやいますから、全部受け止めてくださいね〜♪」

こうして、わたし達は互いの匂いが混じり合うほど、何度も愛し合い……。

その後は、二人でシャワーを浴びて、そのまま裸のまま眠りにつきました。

こうして、フィルさんの腕枕で眠るととってもあつたかい。

わたしのことを包んでくれるつて感じられるから……。

でも……。

「これ、しばらく……消えないよね」

やっぱりキスマークはちよつとやり過ぎちゃった……。

また、ヴィヴィオオヤリオ達に追求されちゃうよ!!

でも、今回はわたしが自分でしてほしいってお願いしたから、しかたがないかな。

「もう……いくらなんでも、付けすぎです」

ちよつとだけ悔しいので、わたしもお返しに、フィルさんの首下に思いつきり吸い付き、キスマークを付けて……。

「これは、女の人が寄ってこないよう、わたしからのおまじないです」

フィルさん、自覚が全くないけど、この人はかなりもてています。

ヴィクターさん達やヴィヴィオ達もそうなんだけど、フィルさんの妹分のジークさんなんか、わたしに対して敵対心出してる時があるんです……。

わたし、絶対に負けませんから!!

だから、フィルさんもいっばいわたしのこと愛して、不安をとりのぞいてください。

でないと、また泣いちゃいますからね。